

熊本県文化財調査報告 第30集

熊本県の中世城跡

1978

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告 第30集

熊本県の中世城跡

1978

熊本県教育委員会

〈例 言〉

1. 本稿は熊本県が国庫補助金をうけて、昭和50年度から52年度に亘る3カ年で実施した中世城跡緊急調査の結果をまとめた報告書である。
2. 調査は熊本県教育委員会が主体となり、委嘱した5名の調査員と、46名の調査協力員の他、各市町村教育委員会等の協力を得て行った。
3. 城（館）の名称は、原則として文献で呼称されているものを使用した。なお、今回の調査で新たにその所在地が確認されたものは、大字名・字名・小名のいずれかを用いた。
4. 縄張り図は、略測図と見取り図の二つに分けた。略測図にはスケールを記入しているが、縮尺率は一定ではない。
5. 地形図は、国土地理院発行の2万5千分の1の大縮尺図である。
6. 本稿の執筆は、提出された調査カードをもとに大田幸博が、隈昭志の指導を受けながら行い、各地区の概説は、森山恒雄、森下功、阿蘇品保夫、中村一紀の五氏の他、一部を隈と村上豊喜があたった。
7. トレースは津川朱美があたった。
8. 本稿の編集には、隈、緒方勉、大田、西町圭子、津川があたった。

序 文

最近の開発事業のめざましい進展に伴ってわが国の地理的景観や、歴史的風土は急激に変貌しつつあります。開発の波は、平野部から丘陵地・山地へと押しよせ、中世の城跡（館跡）にまで及びはじめました。

このように、学術上はもちろん、わが国古来の姿をしのぶよすがとなる文化財が相次いで失なわれる事は、まことに遺憾なことであります。幸い本県下では、破壊の例は少いとはいうものの、いつ破壊の危機にさらされるかわからず、憂慮すべき事態にいたっております。これらの城跡の保存対策をはかるためには、まず県下に存在する城跡の基本台帳の作成が急務となったわけです。

そこで、本県では昭和50年から3か年計画で、国庫補助を受けて中世城跡緊急調査を実施いたしました。

その結果、従来文献上ではまったく知る事の出来なかった新たな城跡も発見されるとともに、当初の目的であった遺跡保存の上で必要な城跡範囲の把握も出来ました。

調査に際しましては調査員及び調査協力員の方々、並びに地元市町村教育委員会から多大な御協力を賜りました。ここに深甚の意を表するものであります。

本報告書が広く県民の方々に利用され、文化財保護のため御活用いただければ幸いです。

昭和53年3月31日

熊本県教育委員会

教育長 林田 正恒

調査の組織

調査責任者	田 辺 哲 夫 (熊本県教育庁前文化課長)
	境 信三郎 (")
	合 志 太 助 (" 文化課長)
調査総括	隈 昭 志 (" 文化課文化財調査係長)
調査担当者 (昭和50年度主査)	桑 原 憲 彰 (" 技師)
(昭和51年～52年度主査)	大 田 幸 博 (" 技師)
	緒 方 勉 (" 参事)
	高 木 瑞 穂 (" 参事)
	杉 村 彰 一 (" 技師)
	松 本 健 郎 (" 技師)
	村 上 豊 喜 (" 技師)
調査員	工 藤 敬 一 (熊本大学法文学部教授)
	森 山 恒 雄 (熊本大学教育学部教授)
	森 下 功 (熊本高校講師)
	阿 蘇 品保夫 (熊本市立高校教諭)
	中 村 一 紀 (熊本高校教諭)
調査協力員	福島作蔵・久富栄次郎・田添夏喜・高木誠治 ・今村俊男・中村耕作・後藤広・園田啓一・ 中田修吉・坂田義広・高村辰男・高野茂・渡 辺文吉・西口実・高山敏郎・木庭春生・三城 祥象・谷良太郎・鈴木喬・徳本明・志賀定光 ・林駿一・藤島今朝年・平山修一・井上正・ 江上敏勝・藤坂正人・馬場継治・徳尾貫徹・ 千々岩英昭・溝部健一・徳永孝志・窪田実・ 種元勝弘・北村龍雄・富永正人・上川香・深 水一雄・谷川強・宮元尚・渋谷良知・橋本康 夫・赤瀬恵・橋本正俊・鶴田八洲成・池田裕 之
調査事務局	浜田 勝・前田利郎・河野宗忠 (前文化課長補佐)
	田中 繁 (文化課長補佐)
	松本 巽 (前文化課管理係長)
	望野正雄 (文化課管理係長)
	岩永繁宏 (前文化課主事)、石原昭宏 (文化課主事)

本文目次

序章

I、調査にいたる経緯	8
II、調査の経緯	10
III、調査の方法	10

第一章

玉名地区概説	27
--------	----

玉名地区

玉名郡	年神の城・前城・岡原城・神尾城・坂本城・翠置古城・田中城・石坂城・今古閑城・浦部の城の平・小畑城・今村の豊後浦城・田原の豊後浦城・小原城・鯉鮓城・坂下城(カブラヤ)・坂下城(トビノヲノ)・色木山城・葦嶽城・大津山関城・南関新城・障子嶽城・中塚城・城の尾城・焼米城・萩原城・用木城・江田城・乙城・立石城・牧野城・鶯原城・大屋の城の尾・内田の今城・内田宮山の城・和仁石山の城山・江栗の城尾・下村城・日平城・高道城・上村城・日嶽城・築地次郎国秀館・築地館・扇崎の館・中土館・小天城・横島城・赤崎城・稻佐城・小森田城
荒尾市	万田城・六反城・尾形山城・平山城・井手城・蔵満城・筒嶽城・梅尾城・田次郎丸館・大園山館
玉名市	高瀬城・溝上城・城ヶ崎城・伊倉の中城・寺田の城ヶ辻・高岡城・玉名の平城・岩崎城

阿蘇地区概説	76
--------	----

阿蘇地区	鳥子城・門出城・内牧城・小倉城・二辺塚城・野中城・牛の頸城・高城古城・一の宮の城山・北坂梨の高城・北坂梨城・入江城・鐘カ城・西原城・下城・蔦ノ尾城・木戸城・小鶴城・守護神城・松山城・松木城・石櫃城・山の城・桜尾城・籠り石城・湯の岳古城・亀ヶ城・湯河内の城の平・平城・動馬木城・満願寺城ヶ鼻・南郷城・鼠土城・滋水城・駒返城・今村城・高島城・柏城・高森城・村山城・社倉城・芹口城・中原城・川上城・下田城・長野城・市下城・峯城・吉田城・岩神城
------	--

菊池地区概説	103
--------	-----

菊池地区

菊池市	菊池古城・古池城・戸崎城・城林城・菊池城・茂藤里城・市成城・黄金塚城・葛原城・鷹取城・五社尾城・虎口城・掛幕城・穴の城
菊池郡	神尾城・台城・増永城・亀尾城・馬渡城・正光寺城・打越城・坂井の古城・竹迫城・原口城・千東城・和田城・牧村城・須屋城・飛城・池上城・久米城・中林城・東嶽城・西嶽城・玉岡城・池上城・葉山城・九万石城・陰嶽城・萩野尾城・古城村城・真木城・山の城(野の城)・龍頭城・続野尾城・青葉山城・亀ヶ城・久保田城・今石城・石坂城

鹿本地区概説	136
--------	-----

鹿本地区

- 鹿本郡 内村城・荒平城・尾平城・岩野嶽道祖城・滴水の館・轟の館・埋原の城・鞍懸山城・田原の城・木留城・賀茂城・大橋城・津袋城・上村の城跡・御宇田城・芋生城・岩野城・多久の城・隈部館・猿返城・米山城・阿佐古城・日渡城・下永野・山ノ井城・若宮城・鷹取城・山内城・鶴の巢城・木山城・岩原城・岩原の城が鼻・岩原の「若竹の尾」・塚崎城・広城・霜野城・米野山城
- 山鹿市 湯町城・下吉田城・熊入城・津留山城・長坂城・方保田城・小原城・坂田城・久原城・平山城・城村城・東付城・西付城・小坂城

熊飽地区概説..... 170

- 熊飽地区 千葉城・古城・本山城・高江城・川尻城・島崎城・亀井城・津浦古城・池田城・柿原城・北島城・中尾丸城・井芹城・上代城・上松尾城・下松尾城・檜崎城・健軍陣内城・立田城・小山城・長嶺城・楠原城・城が辻城・妙見城・赤水城・井上城・小糸山の館・荒平城

益城地区概説..... 187

益城地区

- 上益城郡 道上城・木山城・赤井城・砥川城・小高氏の陣跡・津森城・飯田城・早川城・南早川城・陣内の館・豊内城・安平城・津志田城・乙女山城・吹上の城塚・甘木城・御船城・平瀬城・上野の高城・戸上城・津ヶ峯の高城・南田代城・有水城・尾坪城・山内城・浜の館・岩尾城・愛藤寺城・猿渡城・白尾野城・入佐城・笹原城・梅木城・小野城・池の城・猿が城・鬼が城・囲城・市の原城・勝山城・つづら原城・寺尾城・鶴底城・飯蓋城・佛原城・川の口の城
- 下益城郡 榎津古城・木原城・阿高城・隈庄城・陳内城・大塚城・曲野城・豊田城・丸山の古城・竹崎城・豊福城・小野館・北部田城・小野城・小川城・紫尾城・赤峰尾城・萱野城・白石野の城・松の原城・巢林城・花山城・山崎城・岩尾野城・山下の高城・傍島馬入城・桑木野城・権正城・早楠城

宇土地区概説..... 233

宇土地区

- 宇土市 西岡台(宇土古城)・南山内の高城・田平城・大嶽城・雄岳城
- 宇土郡 矢崎城

八代地区概説..... 241

八代地区

- 八代郡 古城原・小浦の城山・陣内城・小浦城・黒淵城・高塚城・東新城・西新城・高城・笹尾城・大野城・宮原城・草場城・上土城・吉王丸
- 八代市 岡城・関城・竜峰城・平家ヶ城・古麓城・麦鳴城・平山城・田川内城・千代永城・比丘尼が城・二見城・二見南城・船倉城・久多良木城

芦北地区概説..... 264

芦北地区

- 芦北郡 高尾城・才木城・兼丸城・佐敷東の城・佐敷城・大尼田城・吉尾城・野角古城・(湯浦)小野嶽城・市野瀬城・伏木氏城・田浦城・猪山城・口黒城・口黒西の城・津奈木城・赤崎城
- 水俣市 水俣城・中尾城・久木野城・宝河内城

球磨地区概説	284
--------	-----

球磨地区

- 人吉市 大村平家城・矢黒城・赤池城・大畑城
- 球磨郡 渡利城・原田城・高山城・深田城・万江の城・山田城・山田の城・今村城・須恵の城ケ尾・須恵の古城・四浦平家城・川辺の城・相瀬の平家城原・相瀬の蔵城・柳瀬の城ケ峯・上村城・永里城・岡本城・左近城・宮原城・岩城・蔵城・土屋城・永池城・鍋城・里の城・内城・久米城・奥野城・相良頼景館・小多田城・湯山城・湯前城

天草地区概説	309
--------	-----

天草地区

- 本渡市 本渡古城・本渡の城山・広瀬の上の山・風呂ノ迫の高城・才津古城・志柿城・楠浦の城ケ坂・林内の陣ノ山
- 牛深市 魚貫の城・久玉城
- 天草郡 大矢野の亀ノ迫城・大矢野の柳城・大矢野の中村城・大矢野の上村城・合浦の合の丸城・内野河内の城・教良木の城・上津浦城・赤崎の城・大鳴子の城・小鳴子の城・須子の城・勢溜の城・楠甫の城・栖本の馬場城・湯舟原城・栖本・古江の城・河内城・二間戸の城・浦の城・宮田の城・棚底城・御所浦の元浦城・大道城・大島の城・宮津の城・上野原の城・城木場の城・下内野の城・御領の城・志岐城・大江の城・高浜の城の岳・福連木の城・小宮地の城・大多尾の城・下田の城・路木の城・宮野河内の城

第二章

熊本県中世城跡の文献解題	336
付 論	
久玉城跡調査	357

挿 図 目 次

第1図 熊本県地図	12
第2図 玉名地区城跡配置図	30
第3図 阿蘇地区城跡配置図	78
菊池地区城跡配置図	105
鹿本地区城跡配置図	138
熊飽地区城跡配置図	174
益城地区城跡配置図	189
宇土地区城跡配置図	236
八代地区城跡配置図	246
芦北地区城跡配置図	270
球磨地区城跡配置図	287
天草地区城跡配置図	312

表 目 次

表 1. 中世城跡調査関係略年表	7
表 2. 城跡一覧表	13
表 3. 縄張り図から見た城跡の分類	23
表 4. 各地区中世文献所載城各一覧	24
表 5. 「慶安四年差出」に見る中世城跡	26

図 版 目 次

図 1. 豊福城航空写真	347
郡村図 (熊本県立図書館蔵)	
図 2. 亀ヶ城・図 3. 飛隈城	348
図 3. 竹迫城・図 4. 千束城	349
図 5. 大橋城・図 6. 轟の館	350
図 7. 賀茂城・図 8. 鞍懸山城	351
図 9. 岩野嶽道租城・図 10. 隈庄城	352
図 11. 内村城・図 12. 霜野城	353
図 13. 木原城	354
改訂合志川芥	
図 14. 竹迫城	354
球磨古城図	
図 15. 久米城・図 16. 宮原城	355
図 17. 土屋城・図 18. 岡本城	355
図 19. 大畑城・図 20. 永池城	355
図 21. 上村城・図 22. 西村城	356
図 23. 赤池城・図 24. 西村城	356

中世城跡調査関係略年表

(隈 昭志)

年度	熊本県の動向	中世城跡調査	備考 (指定、「報告書」その他)
37	遺跡分布調査		
40	熊本県新産業都市指定地区 遺跡分布調査	43. 城塚 (上島の城跡) 調査 (熊本大)	
46		植木岩野嶽道祖城跡縄張図 (植木地域総合調査研究会)	
47	文化課設置 遺跡分布調査 (47~48)	9 久玉城 10 8 大津山城	48. 3久玉城跡 (県指定)
48	装飾古墳総合調査 (48~49)	7 竹崎城 10 浜館 2	49. 3隈部館跡 (県指定)
49		5 小野館 8 8 4 竹崎城 8 4 宇土城 3 11 蓮花寺・相良頼景館	50. 3「竹崎城」(熊本県教委)
50	中世城跡調査 (50~52) 条里制調査 (50~51) 西湯浦郷豪族屋敷調査 (50)	↑ 中世城跡調査 9 浜館 2 3	50. 7「熊本の城」(熊本日日新聞社)
51	トンカラリン緊急調査 (51~52) 塚原古墳群確認調査 (51)		宇土城跡 (国指定申請中)
52	益城郡衙推定地調査 (52)		52. 2「宇土城跡」(宇土教委) 52. 3「浜の館」(熊本県教委) 52. 3「蓮花寺跡・相良頼景館跡」(同)
53			

序 章 調査にいたる経緯

熊本県教育委員会に文化課が設置されたのは、昭和47年4月である。この年度に文化財保護で問題を提起したのは、九州縦貫高速自動車道建設に伴う下益城郡城南町塚原の塚原古墳群（昭和51年12月27日、国指定史跡）と牛深市久玉町吉辺川の久玉城跡（昭和48年3月2日、県指定史跡）であった。

久玉城跡は天草島の主要道路である国道266号の改良工事によって一部が消滅する予定になっていた。その当時、文化課と開発関係課との事前協議は皆無に近い状態であった。47年8月23日付西日本新聞に『久玉城跡は消滅か』の見出しで報道され、はじめて工事計画がわかり、すでに用地買収も完了し、工事着工寸前であった。早急に対策を講じる必要があり、県土木部と協議し、47年8月29・30日の両日、文化課桑原憲彰技師と中央女子高校大田幸博教諭が現地踏査を行い、9月6日熊本県文化財専門委員会に報告した。その結果、本格的調査を実施して保存すべきであるという方針が打出され、第一次調査（9月8日～13日）・第二次調査（10月1日～12日）を実施することになった。

その結果下記のような結論^(注1)に達した。

久玉城の重要性

1. 久玉城は中世・戦国時代前期の城郭であるが、各施設が整っており、かつよく遺存している。
2. 海上貿易を保護するため、海に臨んで築城している海城であって、例が少ない。
3. 城郭にはかなりの部分に石垣を施しているが、戦国時代前期のものとしては発達している例である。
4. 居館が城郭内の谷の部分に営まれている。その最も低いところに設けられた居館は、石垣を内側にめぐらし、外側を土塁としていて、居館群を城郭内に全て取り込んでおり、注目すべき例である。
5. 居館をはじめ建物の遺構がよく残っていて、未発掘部分でも良好な遺存が推定されるすぐれた遺跡である。
6. 県教育委員会は県指定史跡として指定するよう準備中である。

かくして、県教育庁文化課、県土木部道路建設課、牛深市の三者で協議を重ね、工事を中止して保存をはかることになり、国道266号は久玉城の周辺で大幅な設計変更を行い、昭和52年に完成した。

昭和48・49年度には日本道路公団の九州縦貫高速自動車道建設事業と県立高等学校改築に伴って、中世城及び館跡の調査を実施した。前者は、下益城郡松橋町竹崎の竹崎城跡でその一部が削られることになったので調査を行ったものと、工事前の発掘によって発見された小野館跡の調査である。路線計画の段階で県教育委員会（社会教育課）は、遺跡分布調査を昭和45年度に実施している。

その概要によると

一財団法人清香園の北約100m、急傾斜の雑木山が竹崎季長の城跡と伝えられ、頂上には大正4年2月秋岡仁態が建てた記念碑があり、『肥後国誌』には「竹崎城跡、竹崎村の東北山地也今大松一株アリ」と記載されている。城跡の位置、範囲については疑問もあるが町の史跡指定となっている。一

また、工事に対する措置については

一このような城跡は地形に重要性があるので、地貌が変化する工事は避けるべきであろう。一
と報告及び所見が記載されている。

竹崎城は蒙古襲来の際に奮戦した肥後の武将竹崎季長の居城として顕彰されて来たもので、この伝承が事実であるとするれば、鎌倉時代の山城としてきわめて重要な遺跡となる。そこで、昭和49・50年度日本道路公団（福岡建設局）の受託事業として、第一次調査（昭和49年7月2日～5日）、第二次調査（昭和50年3月1日～8月31日）の発掘調査と平行して文献調査を実施した。

その結果、発掘調査部分（最頂部のすぐ下の曲輪）と全体の縄張り図との検討から15世紀～16世紀初頭の山城ということ、また竹崎城が竹崎季長の居城と考えられるようになった時期は、文献的には元禄時代までしか遡ることができないことがわかった。しかし、中世における遺存のよい代表的城郭であり、その曲輪が道路のノリ面によって削られる計画になっていたのも、工事の設計変更によって棄損を少部分にとどめる必要が生じた。

小野館跡は、下益城郡小川町北小野にある。調査は昭和49年5月～8月に行い、当初後期古墳と歴史時代の貝塚の調査であったが、発掘が進むにつれ新たに古墳時代の貝塚のほか、鎌倉時代の住居址が検出された。住居址は柱穴の配置から少くとも三棟からなる館跡の可能性が強くなった。また、地名調査から館跡の部分^(注4)を陳と呼ぶほか、周辺に袋丸、矢城丸、

城丸など名田に関係ある地名があることも分った。さらに、旧薩摩街道がすぐ近くを通り、薩摩街道から豊野方面への最短路である娑婆神峠への分岐点が、館跡直下にあり、交通の要所であることも判明した。また、館跡の南500m長谷寺に鎌倉時代作の十一面観音像（県指定文化財）があり、正安四年、徳治三年、天授五年の刻銘のある五輪塔があり、これらの調査から13～14世紀に小野荘があったことがわかった。しかしながら、ときすでに遅く、自動車道の工事はすでに近くまでせまっております、路線内の遺跡は消滅してしまいました。

後者は、県立矢部高等学校改築事業に伴う浜の館跡の調査である。調査は予備調査（昭和48年10月）、第一次調査（昭和48年11月～49年2月）、第二次調査（昭和50年9月～51年2月）を実施した。学校敷地の主要部は東西200m、南北90mの長方形を呈しており、東・南・西の三方には轟川から引いた水濠をめぐらし、北は丘に連なる部分に堀切がある。

その結果、第一次調査では館内の西半の南寄りに三棟の建物が重複して発見され、その中期に当たるB棟では巨大な柱穴が三間四方に残り、C¹⁴の測定値は520±80年と出た。また、中央の第1棟は七間に四間の礎石群が残り、内部に炉の用材として並べた石群が発見され、妻の部分には方形のたたきも検出された。この第1棟の西側に接して、泉水が作られ、庭石や汀線のしっくい線などがあり、この池の裏に掘られた二箇所の土壇から交趾三彩等の完形品など21点がみつかった。

その他、第二次調査では神殿と考えられる直径1.20mもある巨大な掘立柱穴が検出されている。

一方、宇土市において市立鶴城中学校新築移転問題がおり、昭和49年1月移転用地を宇土半島基部の宇土市西岡台に決定された。しかし、この地は「宇土城跡（西岡）」として市指定史跡となっており、事前の発掘調査が必要となり、昭和49年4月～50年3月宇土市教育委員会が調査した（担当・平山修一、高木恭二氏）。西岡台は東西二つの小丘陵からなっており、東（標高37.5m）を「千畳敷」、西（標高39.3m）を「三城」と呼んでいる^(注6)。調査の結果、東では古墳時代前期のV字溝と中世の溝が台地をかこむ状態で検出され、西では6棟の建物跡が確認され、名和氏の居城である可能性を強くした。そこで、宇土市では遺跡保存のため急遽計画を変更し、史跡公園として保存する方向で、現在国指定史跡の申請中である。

これと前後して、球磨川改修事業に伴って問題が生じて来た。建設省から地元多良木町教育委員会を通じて、昭和48年7月、球磨郡多良木町黒肥地にある県指定史跡蓮花寺古塔碑群（昭和44年3月20日指定）を、昭和49年度に工事にかかるので、調査移転するよう連絡があった。きわめて一方的なやり方であり、建設省と協議を続けるうちに、すでに昭和41年に改修計画が立てられ、蓮花寺跡のすぐ上流まで工事が進んでいることがわかった。人命尊重か、文化財保護かという問題に直面し、仕方なく記録保存という方法をとらざるをえなくなった。

球磨のこの地には相良頼景が建久四年（1193年）、平家没官領人吉莊地頭職として補任され、上相良第二代頼氏が嘉禎元年（1235年）蓮花寺を創建したといわれ、蓮花寺に東接して相良頼景館跡がある。そこで昭和49・50年度に建設省の委託事業で両遺跡の発掘調査を実施した（担当・文化課杉村彰一、松本健郎、松村道博、安達武敏）。

その結果、蓮花寺跡では消滅する部分が一部あったため、遺構及び寺域を把握することはできなかったが、頼景館跡では、球磨川に面する南側を切り落とし、東・西・北の三方に土塁を巡らし、土塁の内側で東西約54m、南西約60mの館の規模をもつことがわかった。調査はその南寄りの四分の一程度（改修部分のみ）を実施し、その部分で二期にわたる柱穴群を検出したが建築物の配列については不明であった。

昭和37年度、全国的規模で遺跡分布調査が実施されたが、その時点で熊本県の遺跡数は2218箇所、その後、昭和40年度の熊本県新産業都市指定地区遺跡分布調査で99箇所追加し、さらに昭和47・48年度の遺跡分布調査の追加も合せて約2700箇所であった。しかし、この数には城郭はほとんど含んでおらず、所在地・箇所数など全く不明であった。

このような情勢の中で、昭和48年頃からゴルフ場建設計画（約60箇所申請）が進められ、他方では建設事業の進展に伴って川砂利の不足から、山砂利採取事業の増大、宅地造成事業の急増などで、中世城跡の危機がせまっていた。何としても中世城跡の分布調査が急務となってきたわけである。

そこで文化課で検討を開始し、文化庁記念物課の指導を受けて、昭和50年度から2カ年計画で実施することになった。当初、竹崎城跡調査の段階では県内に約270箇所が存在すると予想していたが、調査していくうちに2カ年では調査できようにもない450余箇所の可能性が生じてきたため、さらに調査期間を延長して、3カ年の事業とした。

この調査結果にもとづいて、史跡指定の資料とし、整備すべき城跡については地元市町村の協力をえて整備しなくてはならない。また、今後の開発計画等には、充分対処しうよう資料を整備したい。

ふりかえってみると、国道266号改良事業に伴う久玉城の問題は、熊本県内における中世城跡では最初の県指定史跡であり、中世城跡調査の出発点であった。今後、久玉城跡の整備計画が必要である。

また、中世城跡として、第二番目に県指定された隈部館跡（鹿本郡菊鹿町上永野）については、昭和50年度から年次計画を立てて整備中である。
(隈 昭志)

(注1) 中世久玉城跡関係資料 熊本県教育委員会 昭和47年10月

(注2) 九州縦貫自動車道鹿児島線宮崎線(松橋～八代)文化財分布調査報告書 熊本県教育委員会 昭和46年3月

(注3) 竹崎城 熊本県文化財調査報告第17集 熊本県教育委員会 昭和50年3月

(注4) 小野荘中世館の調査 松本健郎 ふるさとの自然と歴史43号

(注5) 伝承のなかに生きていた幻の浜の館 桑原憲彰 ふるさとの自然と歴史32号 1974・1 浜の館 熊本県文化財調査報告第21集 熊本県教育委員会 昭和52年3月

(注6) 宇土城跡(西岡台) 宇土市埋蔵文化財調査報告第1集 宇土市教育委員会 昭和52年2月

(注7) 蓮花寺跡 相良頼景館跡 熊本県文化財調査報告第22集 熊本県教育委員会 昭和52年3月

調査の経緯

昭和49年度、文化庁に国庫補助事業の中世城跡緊急調査計画を提出する際は、その調査対象となるべき城跡数を、一応275とした。これは、この時点まで、民間・学者を問わず誰一人として、諸々の文献に記載された城跡名を総合的に数えた者もなかった。したがって、県内の城跡数は、江戸時代の『古城考』に記載された275箇所そのまま、城跡数を表わす指標となっていたからであった。またこの時点で、県文化課が総合的に城跡数を調査するのは到底無理なことで、この275箇所の城跡調査を2カ年計画で実施するという一応の計画であった。ところでおりしも調査開始時の昭和50年7月10日、「熊本の城」(熊本の風土とところシリーズ10、熊本日日新聞社)が出版された。この巻末に谷川憲介氏(当時県立図書館資料課長)作成による「熊本県内城郭一覧」によれば、文献からひろい得る城跡数は419であった。9月22日付け、文化庁から委保71号で、中世城跡緊急調査の実施決定通知があった。そこで10月2日、桑原憲彰技師を調査主任として、婦人会館で第1回の中世城跡調査員会議を開いた。調査員として、工藤敬一(熊本大学法文学部教授)・森下功(当時熊本県立高校教諭)・阿蘇品保夫(熊本市立高校教諭)・大田幸博(当時熊本県立大津産業高校教諭)各氏のほか、文化課から田辺課長、隈文化財調査係長が出席した。調査案に関する説明、意見、提案、調査カード作成等、問題点討議が行われ、400を越える城跡調査は、地域の研究者に調査の協力を得なければ、このメンバーでは到底無理で、調査年数も、少なくとも3年間が必要だという要望があった。会議終了後、早急に調査カードが作成され、11月21日から調査を開始した。新たに調査員に森山恒雄(当時熊本大学教育学部助教授)・中村一紀(当時熊本県立松橋高校教諭)両氏を加え、地域の調査協力員として26名に依頼した。一方、調査協力員には12月7日、城南会場(豊福城)・14日、城北会場(岩野道租城)・21日、天草会場(久玉城)の三会場で、調査の主旨、調査方法等の説明及び現地踏査を実施した。

昭和51年度、4月の教職異動により大田が文化課勤務となり、桑原の後を継いで調査担当となった。6月17日、新たに11名の調査協力員を追加し、7月23日、むつみ荘で第2回目の調査員会議を行った後、8月6日、新規の調査協力員に対し芦北郡芦北町(佐敷城)で、現地での説明会を実施した。昭和52年3月17日、県住宅供給公社で、第3回目の調査員会議を行い、これまでの調査の反省と調査カードの点検、最終年度の調査計画について討議を重ねた。5月17日、残る城跡の調査を急ぐために、3次分の調査協力員として9人を選んだ。この結果、最終的には46人の調査協力員を数える事になった。

調査の方法

まず、城跡の所在確認が第一の目的であるため、文献上に記載された城跡について、個々に現地踏査を行い実在の有無の確認を主眼とした。次に所在の明確になった城跡は25,000分の1の地形図にその地点を記入したうえで、いわゆる縄張り図の作成を行った。調査方法と調査カードについては以下の通りである。

①城跡の所在地把握に際しては字名・小名・伝承等に留意する。

②縄張りの作図は、メジャー使用による略測が最も好ましいが、この方法は最低2人の人員を要することや地形的に、また植生の状況により略測不可能な場合も考えられるので、その際は目測や歩測による見取り図程度でも可とする。なお略測図面の縮尺は、基本的に1,000分の1とするが、城跡の規模によって500分の1、もしくは2,000分の1の使い分けも可とする。

③作図の範囲

外観的に城跡の範囲を把握することは極めて困難である。したがって、やや狭義的に、遺構の残存状況と伝承等から、確実に城跡の遺構として推定し得る範囲に止める。とくに堀切の確認に注意を払うこととする。

④城跡に付随する集落がある場合は、城跡関係地名の採集・金石文関係の調査に注意を払う。

⑤古老の語りつぐ伝承を記録する。

⑥城跡並びに集落周辺を通る古道を重要視する。

なお、踏査の段階で、字名・小名や伝承等から文献未記載の城跡が発見された場合は、参考地として調査カードに記載することとし、またすでに消滅した城跡並びに遺構も、聞き込み等によって可能な限り縄張り図の復元を試みることとした。とくに今回の調査にあたっては①を根底に置くこととしたので調査報告においては、極力、調査者の推論は避けられていると言える。

中世城・館調査表Ⅰ（表）

名称および 種別		所在地	市 郡	町 大字	小字	番地
		交通の便				
指定の有無	国・県・市町村	関連小字および呼称				
土地 状況	（立地・形態・面積・地目）		（利用状況）			
	所有者		管理団体 管理者			
遺構の状況						
関連遺構・遺物（石造物等）						
過去の調査	有・無	調査者氏名 （年度）	調査報告書	実測図		有・無 （%）
出土品・伝世品						

中世城跡調査補充カード

城館名	種別	調査員
補充項目名	事項	

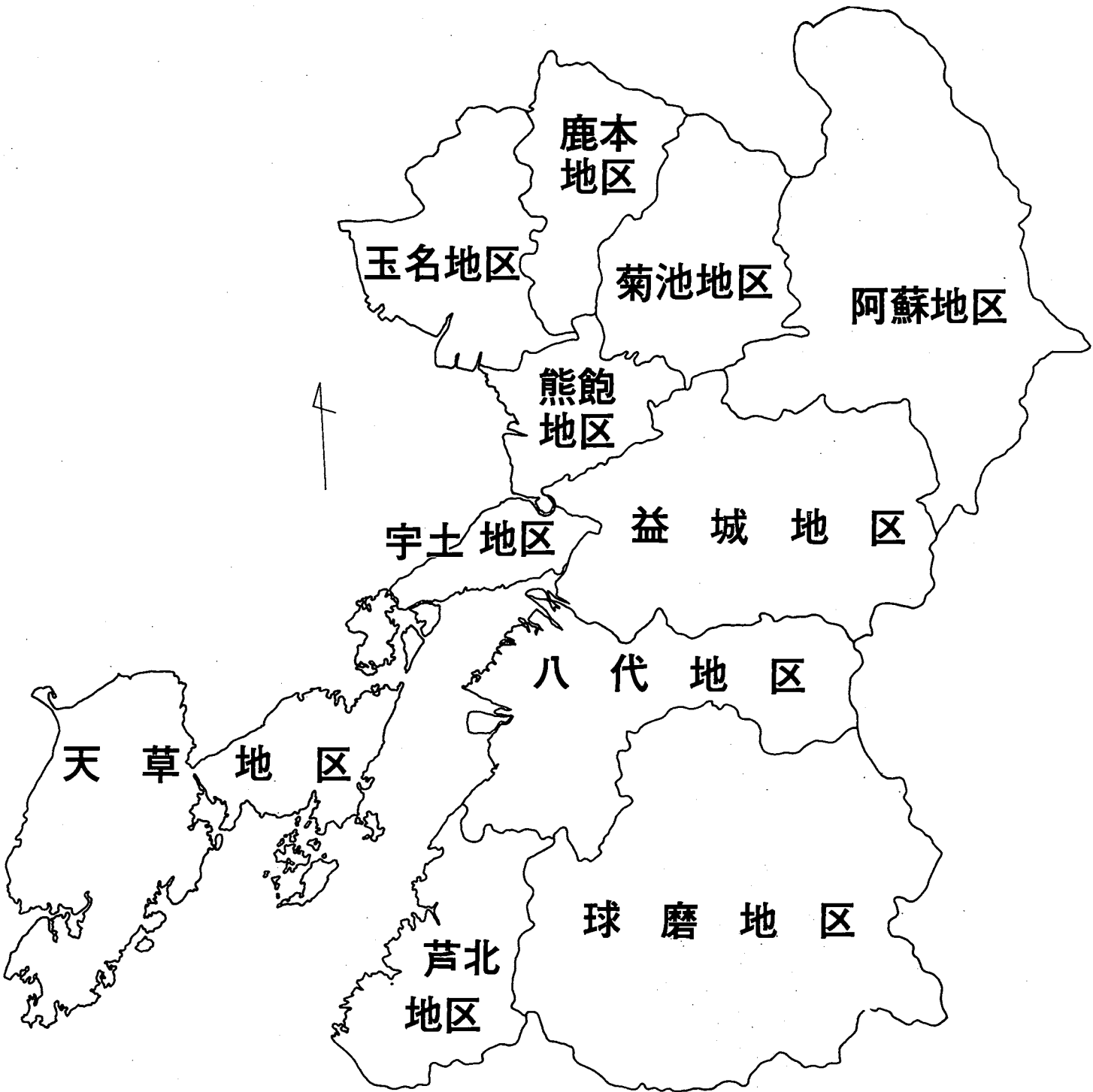
中世城・館調査表Ⅰ（裏）

関連文献	関連文献添付欄（調査用）	
築城年代		
築城者		
城主・居住者		
廃棄時期 （理由）		
伝承・記録		
保存状況	保存度	A B C

調査期日・昭和 年 月 日・調査者（ ） 補充カード 無・有 枚

位置図	遺跡略図
写真	

熊本県地図



0 5 10 km

城跡調査一覧表

- ① 呼称は地元におけるものを記した。 ② 所在地は原則として字までにしたが、中に若干の例外がある。
 ③ 文献は下記のごとく略記している。
 肥後国誌→肥国・古城考→古城・肥後地志略→肥地志・国郡一統志→国郡・陣跡略志→陣略・肥州古城主考→肥古城・菊池国土記→菊風記・合芥→改訂合志川芥

玉名地区

城跡名	地図番号	別称	呼称	所在地	土地利用	文献	(伝)城主	備考
年神の城	1		城ノ原	玉名郡三加和町大字平野字年神	畑地 雑木林地	(小名)(伝承)		
前城	2	下岩城(推定)	前城	大字岩字立山	雑木林地	(小名)(伝承)(国郡一)		
岡原城	3	板橋城(推定)		大字上板橋字岡の原	畑地	(肥国)(古城)(肥地志) (国郡一)(玉名郡誌)(玉郡村誌)	坂楠景貞・景次	
神尾城	4	大神ノ尾城	城平城	大字大田黒字東川	畑地 雑木林地	(国郡一)(肥国)(古城考) (肥地志)(玉名郡誌)(玉郡村誌)		陣内門出 小屋敷 高畑
坂本城	5	迎春城 拾町城	城山城	大字十町字坂本	ミカン畑	(国郡一)(肥国)(古城考) (玉名郡誌)(玉郡村誌)	迎春親貞・親行	
翠置城	6	(翠置置古城)		(所在地不明)		(肥国)(古城)(玉名郡誌)		
田中城	7	和仁城		玉名郡三加和町大字和仁字古城	畑地	(肥国)(古城)(肥地志) (玉名郡誌)(玉郡村誌)	和仁近續	
石坂城	8			大字西吉地字竹本	畑地	(肥国)(古城)(玉名郡誌)		
今古閑城	9			大字西吉地字竹本	植林地	(玉名郡誌)		
浦部の「城の平」	10		城の平	大字上板橋字浦部	ミカン畑			
小畑城	11			玉名郡南関町大字宮尾字尾ノ久保	住宅 番舎の建設	(玉名郡誌)	小代氏家臣	
今村の豊後浦城	12			大字米富字豊後浦	畑地・竹林	(古城)(玉名郡誌) (玉郡村誌)	今村豊後守 (小代氏家臣)	
田原の豊後浦城	13			大字米富字田原	雑木林地	(玉名郡誌)	今村豊後守 (小代氏家臣)	城の前 城の宇土
小原城	14	古城		大字関東字小山	植林地 雑木林地	(肥国)(古城)(肥地志) (玉名郡誌)(玉郡村誌)		陣内、南屋敷 内屋敷、城下
鯉鉢城	15	五位の巢城	二城山	南関町	植林地 雑木林地	(肥国)(肥地志) (古城)(玉名郡誌)(玉郡村誌)	(白間野宗郷) (小森鑑元)	
坂下城(カブラヤ)	16	カブラヤノ城	城平	大字坂下字城平	雑木林地	(肥国)(国郡一)(古城考) (肥地志)(玉名郡誌)	白間野宗郷	陣内、馬場 馬場園、出口
トビノヲノ	17	トビノヲノ城		大字坂下字米田	畑地	(肥国)(古城)(国郡一) (肥地志)(玉名郡誌)	白間野邦郷	トビノの屋敷
色木山城	18			大字南関字上城・下城	東側部分を九貫道で削除	(玉郡誌)	大津山資冬	堀池園、馬場
葛嶽城	19	大津山城・葛嶽城 南関城・葛嶽城		大字関東字城平	雑木林地 植林地	(国郡一)(肥国)(古城) (肥地志)(玉郡村誌)	大津山氏一族 (資基の築城)	
大津山関城				(所在地不明)			赤星有隆	
南関新城	20	廣原城 南関城	城ノ原	玉名郡南関町大字南関字城ノ原	官軍墓地	(国郡一)(肥国)(陣略) (玉名郡誌)(玉郡村誌)	加藤正次	
障子嶽城	21			(所在地不明)	雑木林地	(古城)(肥国)(玉名郡誌)	一説に赤星有隆	
中塚城	22		城原	玉名郡南関町大字賢本字塔下	植林地	(玉名郡誌)	夫婦木新蔵 (大津山氏家臣)	
城の尾城	23	七尾城	城尾	南関町	畑地	(古城)(肥国)(玉名郡誌) (玉郡村誌)	猿嶽直貞(小代氏一族)	
焼米城	24		城山	玉名郡菊水町大字	植林地	(小名)	焼米五郎	
萩原城	25			大字萩原字城内	植林地 雑木林地	(肥国)(肥地志)(古城)(国郡一) (玉名郡誌)(玉郡村誌)	長野氏・内田重貞	
用木城	26		城の尾	大字用木字河原毛	畑地	(国郡一)	用木氏	
乙城	27		乙城	大字江田字乙城	雑木林地	(伝承)(字名)	城讃岐守	
江田城	28		城山	大字江田字江光寺	雑木林地	(伝承)(小名)	江田秀家	
立石城	29			大字原口字立石		(伝承)		
牧野城	30			大字江田字牧野	畑地	(肥国)(古城)(玉名郡誌) (玉郡村誌)	内空闲鎮房	
鷺原城	31			(所在地不明)		(古城考)(肥国)(玉名郡誌)		
大屋の城の尾	32		城尾	玉名郡菊水町大字大屋字城尾	雑林地	(字名)		
内田の今城	33		今城	大字内田字今城	畑地	(字名)(伝承)	内田氏(推定)	
内田宮山の城床	34		城床	大字内田	大幅削除 (九貫道)	(字名)(地名)		
和仁石山の城山	35		城山	(玉名市)	石切場	(小名)		
江栗の城尾	36		城尾	城尾	植林地 雑木林地	(古城) (字名)		
日平城	37	花牟礼・華牟礼 花群・花森		大字日平字花群	植林地 雑木林地	(肥国)(新撰考)(肥地志) (古城)(玉名郡誌)(玉郡村誌)	小森田氏一族 (隈部家臣)	
万田城	38	袴嶽城		荒尾市(大字原万田)字袴岳他	石 炭採掘 石工	(肥国)(肥地志)(古城) (玉名郡誌)(玉郡村誌)	小代市	
六反城	39	六町城		(大字宮内出目)字大門他	畑地 雑木林地	(肥国)(古城)(玉名郡誌) (玉郡村誌)		
尾形山城	40		城床	荒尾町(大字荒尾)字南尾形山	畑地	(古城)(肥国)(玉名郡誌) (玉郡村誌)	小代八郎	

平山城	41		〃 平山町(大字平山)字城	畑地	(肥国)(古城)(玉名郡誌)(玉郡村誌)	堀切種藤(小代家臣)
井手城	42		荒尾市本井手・打越	神社地	(肥国)(古城)(玉名郡誌)	
蔵満城	43		〃 蔵満町(大字蔵満)字美名尻	畑地	(肥国)(古城)(玉名郡誌)	蔵満氏
小岱城	44	筒ヶ嶽城	〃 府本町	植林地	(国郡一)(肥国)(新撰考)(古城)(肥地誌)(陣畧)(玉名郡誌)	
梅尾城	45		〃 府本町山田	雑木林地	(肥国)(古城)(玉名郡誌)	小代行平
田次郎丸館	46		〃 原万田浦田	雑木林地		
大園山館	47		〃 大字一部字大園・杉谷	畑地(学校敷地)	(肥国)(古城)(玉名郡誌)(玉郡村誌)	高瀬氏一族
高瀬城	48	保田木城	玉名市高瀬町保田木	神社	(国郡一統誌)	
溝上城	49		〃 溝の上字城の原	畑地	(玉名郡誌)	田尻道種(阿蘇家臣)
城ヶ崎城	50		〃 北方五社	みかん畑	(肥国)(新撰事蹟通考)(玉名郡誌)(玉郡村誌)	龍造寺隆信 斎院次親宮能
下村城	51		〃 下町字高城			
高岡城	52		〃 山田字高頭			
中ン城	53		〃 寺田字城が辻			
城ヶ辻城	54		〃 片諏訪字中城	みかん畑		
玉名の平城	55		〃 玉名字平城			
岩崎城	56		〃 岩崎字池田			岩崎氏
下村城(内野城)	57		〃 下町字高城		(肥国)(古城)(新撰事蹟通考)(肥地誌)	龍造寺隆信 能
上村城	58		玉名郡岱明町大字城字馬場原		(古城)(玉名郡誌)(玉郡村誌)	地国秀隆 築大野光秀 大築前築大地野光
築地次郎国秀館	59		〃 下前原字宅地		(玉郡村誌)	秀親秀隆
高道城	60	城内城 高満城	〃 大字高道字城内		(陣畧)(肥国)(肥古城)(肥地誌)(古城)(玉名郡誌)(玉郡村誌)	的場 まつばる まきまる
日嶽城	61	開田城・鶴城 亀城(小城)	〃 大字開田		(陣畧)(肥国)(肥古城)(肥地誌)(古城)(玉名郡誌)(玉郡村誌)	大野氏
築地館	62		〃 築地字陣内			
中上館	63		〃 中土字寺前			池松貞胤 (大野氏一族)
扇崎北垣右京居館	64		〃 大字扇崎字明神尾			大野氏
小天城	65		玉名郡天水町大字下有所字実山		(肥国)(玉名郡誌)	田尻氏
横島城	66		玉名郡横島町大字京塚字辻		(肥国)(玉名郡誌)	加藤求馬之助
赤崎城	67		〃 天水町大字部田見字城		(玉名郡誌)(玉郡村誌)	
小森田城	68	宇都宮城 小葉城	玉名郡玉東町大字木葉字陣内	畑地	(肥国)(古城)(肥地誌)(国郡一統誌)	宇都宮隆房 伊津野十郎・小森田村監
稻佐城	69		〃 大字稻佐	畑地	(肥国)(古城)(玉名郡誌)	

阿蘇地区

城跡名	地図番号	別称	呼称	所在地	土地利用	文献	(伝)城主	備考
鳥子城	1	鳥子若狭守城	城入山	阿蘇郡西原村大字鳥子字陣上	河原小学校	(肥国)(阿蘇郡誌)	鳥子若狭守	(中国)(馬場)城入山・神宮屋敷・飛佛城の尾根(白山神社)
門出城	2		城入尾根	〃 大字河原字門出		(山西村誌)(上益郡誌)	津留大炊介	
内牧城	3			阿蘇郡阿蘇町大字内牧字中町	町宮グラウンド・役場 畑・民家	(肥地誌)(古城)(陣畧)(国郡一)(阿蘇郡誌)(肥古城)	辺春丹波守 (阿蘇家臣)	本丸・二の丸 三の丸・古川
小倉城	4	坪内城		〃 大字小倉字坪内		(阿蘇郡誌)	笹原美濃守	
二辺塚城	5	二辺津嘉城		〃 大字黒川字本塚		(肥地誌)(古城)(阿蘇郡誌)	蔵原志摩守	大牟田・中牟田 千田牟田
野中城	6	湯浦城	城山	〃 大字湯浦字城 (所在地不明)		(肥国)(古城)	小島三郎・次郎 (阿蘇氏家臣)	城山・城戸・陣内 中門・戰場ヶ橋
牛の頭城	7	坂梨城	高城	阿蘇郡一の宮町大字坂梨字馬場		(古城)(阿蘇郡誌)	坂梨惟右 (阿蘇氏家臣)	
一の宮の城山	8		城山	〃 字城山	城山展望所	(古城)(阿蘇郡誌)		
北坂梨の高城	9		高城	〃 大字北坂梨		(古城考)(肥地誌)(阿蘇郡誌)(陣畧)	源為朝	
北坂梨城	10		古城	〃 大字下城字下城		(陣畧)(肥国)(肥地誌)(古城)(阿蘇郡誌)	北坂隠岐 (阿蘇家臣)	「城」・「古城」 外圍・土井・平圍・中國
入江城	11		城が迫	阿蘇郡小国町大字宮原字満玉	畑林地	(古城)(小国郷史)(国郡一)	宮原氏一族	「城ヶ迫」
鐘カ城	12		城山平	〃 大字宮原字城山		(古城)(小国郷史)(国郡一)	北里大和守	城山・つりん下 城平・的場・馬場
西原城	13			〃 大字上田字萩鶴		(古城)(国郡一)(阿蘇郡誌)	葉室氏	城園
下城	14			〃 大字下城字下城		(古城)(陣畧)(国郡一)(肥古城)		
鳶ノ尾城	15	飛尾城	鳶ノ尾	〃 大字下城字鳶ノ尾		(古城)(小国郷誌)(阿蘇郡誌)	下城氏	(本村)
木戸城	16		城戸	〃 大字宮原字城戸		(国郡一)(古城)	下井城阿波守	馬洗瀬・城戸

小鶴城	17					(古城)(国郡一)	北里内記	下鶴
守護神城	18					(古城)	戸波主	守護神・岐ノ湯
松山城	19		城野			(阿蘇郡誌)	松岡丹後守	岳湯・堀田
松木城	20				阿蘇郡南小国町大字中原字神田	(古城)	室原知頼	城野
石櫃城	21				(所在地不明)	(国郡一)(古城)(肥地志)	北里永義	(城の迫)
山の城	22	山野城			(所在地不明)	(古城)	北里安芸守・宗義	
桜尾城					(所在地不明)	(古城)	綿貫氏	(陣内)(倉所)
籠り石城					(所在地不明)	(古城)	大友珠士	一の木戸 二の木戸
湯の岳古城					(所在地不明)	(古城)		
亀ヶ城	23				阿蘇郡南小国町大字瀧願寺陣内他	(阿蘇郡誌)	北里義清	(陣内)(倉所)
湯河内の城の平	24					(小国郷史)(古城)	河津宮内少輔	一の木戸 二の木戸
平城	25	竹の熊城 比良城	城ヶ平			(古城)	北里玄蕃	
動馬木城	26	動馬喜城	城山			(古城)	北里氏一族	
瀧願寺城ヶ鼻	27					(古城)	北里越前守	
南郷城	28	久木野城 桜山城	白禿山城 城山		阿蘇郡久木野村大字久石字上駄原	(肥国)(新撰考)	紀伊	(恵良)(御碑)(中国) (塔頭の下)(染谷)
鼠土城	29	下久木野城				(古城)	北里式部少輔 瀧願寺僧	(東屋)(西東屋)
滋水城	30		高城山			(国郡一統志)	久木野準人 (阿蘇家臣)	一摺尾一
駒返城	31	駒帰ノ城	白城			(肥国)(南郷事蹟考)	久木野備前守 (阿蘇家臣)	
今村城	32				阿蘇郡蘇陽町大字米迫字後山	(阿蘇郡誌)	今村氏一族	(お花畑)(中国) (小塚)
高畠城	33					(国郡一)	玉目秀左衛門	
柏城	34	二瀬本城				(阿蘇文書)(島津家古 録)(阿蘇郡誌)	柏大輔 (阿蘇家臣)	
高森城	35	囲城	城山		阿蘇郡高森町大字高森字城山	(肥国)(肥古城)(古城) (肥地志)(陣墓)(阿蘇郡誌)	高森惟直 (阿蘇家臣)	(小勢)(大勢)
村山城	36	平比良城	城平			(古城)	村山惟広とその子久	
社倉城	37		城山			(古城)	甲斐親宣	
芹口城	38					(古城)(阿蘇郡誌)(草部村小史)	芹口是久	(馬場)(射場の元) (仲間)(高ばやし)
中原城	39					(阿蘇郡誌) (草部村史)	工藤宗英 甲斐堅物	
川上城	40	岡野山城	城山			(国郡一)(古城) (野尻惟則翁事蹟)	足利又太郎忠綱 野尻氏	
下田城	41	陣内城	陣内		阿蘇郡長陽村大字河陽字東所原	(肥国)(阿蘇郡誌) (南郷事蹟考)(下田家系譜)	下田左エ門尉能統 (阿蘇家臣)	(城戸)(岡屋敷) (陣内馬場)(塔頭塚)
長野城	42					畑地・山林 ・宅地	長野氏一族	
市下城	43	城が岳城	城山		阿蘇郡白水村大字両併字城山	畑地 竹林	市下大和守 (阿蘇家臣)	(古陣)(陣内)(宮園) (陣内)(御所園)(蓬来園)
峯城	44	鶴翼城				雑木林	中村惟冬 (阿蘇家臣)	
吉田城	45		城後			(肥国)(阿蘇郡誌)	吉田主水頭 (阿蘇家臣)	(外園)馬場・城前 (修復野)
岩神城	46				宮崎県西臼杵郡高千穂町大字田原字染田	畑地・原野・山林	甲斐親宣 (阿蘇家臣)	

菊池地区

城跡名	地図 番号	別称	呼称	所在地	土地利用	文献	(伝)城主	備考
菊池古城	1	深川城・菊の池城 雲上の城		菊池市北宮城の堀	水田	(肥国)(古城)(肥地志) (菊池郡誌)(菊風記)	菊池則隆一族	
古池城	2	出田城		出田	雑木林地	(肥国)(古城) (菊池郡誌)(菊風記)	出田氏一族	(西屋敷) (東屋敷)
戸崎城	3			今南山ノ上	雑木林地	(菊池郡誌)(菊風記)	鹿島氏一族	
城林城	4	城山古城 止林城		木庭古城	荒地 一部公園	(肥国)(古城)(菊風記) (菊池郡誌)	城武顯一族 虎齒宗運	(陣内)(外園)
菊池城	5	隈府城		隈府城山	菊池神社	(肥地志)(国郡一)(肥国)(肥古城) (菊池郡誌)(菊風記)(古陣)(陣墓)	菊池氏一族	院馬場・堀木 屋敷他
茂藤里城	6	元居城		大字重味	雑木林地	(肥国)(古城) (菊池郡誌)(菊風記)	細永蔵人	
市成城	7	奥山城		(国有地)	杉の植林地	(菊池郡誌)(菊風記)	総谷 平山岡氏一族	内城
黄金塚城	8			四町分黄金塚	公園	(菊池郡誌)(菊風記)	市野瀬氏一族	
葛原城	9		城山	市野瀬城山	全面開墾	(菊池郡誌)(菊風記)	菊池則隆・隈部親永 後征西将軍・原田氏	
鷹取城	10	染土城		龍門鷹取染土	畑地	(肥国)(古城) (菊池郡誌)(菊風記)	大和守大蔵久家	
五社尾城	11			雪野城平	クヌギ林	(肥国) (菊池郡誌)(菊風記)	隈部氏	
虎口城	12	八方嶽城	高城	虎口	植林地	(肥国)(古城)(肥地志)		
掛幕城	13		城床	大字原字柏	原野	(菊池郡誌)(菊風記)	柏氏一族	

穴の城	14	あなんじょう		" 大字班蛇口	原野・畑地	(肥国) (菊池郡誌)	源 為 朝	城野
神尾城	15			菊池郡七城町大字水次	阿蘇神社	(肥国) (菊池郡誌)(菊風記)	水次氏一族	
台城	16	水島城		" 水島		(肥国) (菊池郡誌)(菊風記)		
増永城	17			" 砂田	神社	(菊池郡誌)(菊風記)	西郷氏一族	
亀尾城	18		城の平	" 大字亀尾字城の平	神社	(菊池郡誌)(菊風記)(合芥)	関部氏一族	豊前堀
馬渡城	19			" 字下梶迫鶴		(菊池郡誌)(菊風記)(合芥)	蛇塚九郎一族	
正光寺城	20			" 大字加恵		(菊池郡誌)(菊風記)	加恵氏一族	
打越城	21			" 大字蘇崎字打越	雑木林地	(合芥)	林原氏一族	
坂井の古城				(所在地不明)		(肥国)		
竹迫城	22	上荘城		菊池郡合志町大字上庄字城山		(肥国)(国郡一)(肥国)(肥古城)(肥地志) (合芥)(新撰考)(古城)(菊池郡誌)	竹迫氏・合志氏	
原口城	23	新城		" 大字豊岡字宮の本	神社・竹林	(合芥)	中原師員	(屋敷)
千束城	24		城山	" 大字栄字城山	雑木林地 植林地	(肥国)(古城) (菊池郡誌)(合芥)	芦刈帯刀	
和田城				(所在地不明)		(国郡一)	合志氏	
牧村城				(所在地不明)		(国郡一)	合志氏	
須屋城	25			" 大字須屋字下屋敷	集落	(肥国)(古城) (菊池郡誌)(合芥)	須屋市藏(菊池の庶流)	(中園屋敷) (的場)
飛熊城	26	飛隈城	城山	菊池郡泗水町大字住吉字城山	畑地	(肥国)(古城) (菊池郡誌)(合芥)	合志氏	
池上城	27			" 大字住吉字古閑	集落	(合芥)	合志四郎左衛門重隆	
久米城	28	高請城	城床	" 大字久米字高請	圃場整備	(肥国)(古城) (菊池郡誌)(合芥)	里前治部	
中林城	29			" 大字福本字南宅地	畑地	(国郡一)		(明ちん屋敷) (古屋敷)
東嶽城	30			菊池郡大津町大字大津字町屋敷	日吉神社	(肥国)(古城) (菊池郡誌)(合芥)	大津欠連	
西嶽城	31			" 大字大津字西嶽	住宅地	(合芥)	大津養種(合志氏家臣)	
玉岡城	32	若宮城		" 大字陣内字順田	畑地	(合芥)	稻葉安芸守一族 (合志家臣)	
池上城	33		城の本	" 大字吹田字池鶴	雑木林地	(合芥)	青木勘大夫(合志家臣)	
葉山城	34	荒戸城		" 大字外牧字霞鶴	神社			
九万石城	35		城山	" 大字矢護川字中在目	植林地	(国郡一)(古城) (菊池郡誌)(合芥)	合志氏(源姓々々木)一族	
陰嶽城	36			菊池郡大津町	畑地	(合芥)	平川行親(合志隆祐 の四男)合志氏一族	
萩野尾城	37		傾城平	" 大字平川字傾城平	植林地	(合芥)	斎藤尾張守	
古城村城	38	亀迫城	上の城	" 大字古城字四番東原	雑木林地	(肥国)(古城) (菊池郡誌)(合芥)	斎藤寛家	(六城野)(立見) ねこ羽根 槍返し (上屋敷)(下屋敷)
真木城	39	今城		" 大字真木字東津留	雑木林地 植林地	(肥国)(古城) (菊池郡誌)(合芥)	佐々木合志氏	
山の城(野の城)	40	野の城		" 大字真木字花見ヶ峯	原野	(合芥)	坂本三郎右衛門	
龍頭城				(所在地不明)		(合芥)	真鍋宗矩	
続野尾城				(所在地不明)		(合芥)	合志矢部之亮	
青葉山城				(所在地不明)		(合芥)	大林外記	
亀ヶ城	41		城山	菊池郡旭志村大字麓字湯舟	雑木林地 (みかん畑)	(国郡一)(古城) (菊池郡誌)(合芥)	源 為 朝	(城下)
久保田城	42		山の城	(所在地不明)	墓 (参考地)	(古城) (合芥)	久保田大和守為安	
今石城	43			菊池郡菊陽町大字津久礼字今石	宅地	(肥国)(古城)(菊池郡誌) (合芥)	石原狩野介吉利	
石坂城	44			"	宅地	(合芥)	石坂盛隆	

鹿本地区

城跡名	地図番号	別称	呼称	所在地	土地利用	文 献	(伝)城主	備 考
内村城	1		城床	鹿本郡植木町大字内字	荒地	(山本村誌)	内空閑氏	
荒平城	2			" 大字山本字南楠原・字塚塚		(古城)(鹿本郡誌)	内空閑家臣の小田部 (式部少輔)親伊	
尾平城	3	平原城	城の尾 城の腰	" 大字平原字城の尾・ 字大谷・字馬瀬	採石のために 削り取られた 町道拡張の為 に取り壊される	(肥国)(鹿本郡誌)(山本村誌)	内空閑(摂津守)鎮照	(小屋敷)(保丸) (西屋敷)(寺屋敷) (城の内)(中屋敷) (下道丸)
滴水城	4			" 大字滴水字東屋敷・ 字原口・字内山				
轟の館	5			" 大字轟字城の内・字下道丸	畑地			
埋原の城	6			" 大字轟字埋原畑・字 大松山・字埋原屋敷	畑地			(殿の屋敷) (どじん堀)
鞍懸山城	7			" 大字鞍掛字萩尾	民家の敷地 竹林	(肥国)(古城)(鹿本郡誌) (山本村誌)	田原親賢	
道祖城				大字岩野字城山	雑木林地	(肥国)	小野良旨・宗氏	
田原の城	8		城山	" 豊岡上ノ原	果樹園	(伝承)(小名)		(西の門)(高見) (殿の屋敷)

木留城	9			〃	大字木留字北中原	竹林地	(古城)(鹿本郡誌)(山本村誌)				
賀茂城	10	加茂城	城山	〃	大字豊田字上の原	団地	(肥国)(山本村誌)	菊池家臣の角田	(門の内)(中屋敷)		
大橋城	11		五郎丸城外	〃	大字田底字本村・字荒牧	集落	(肥国)(古城)(鹿本郡誌)(山本村誌)	(掃部亮藤原)益吉	(馬場の下)		
津袋城	12		城山	鹿本郡鹿本町	大字津袋字広江	畑地	(肥国)(古城)(鹿本郡誌)	田中祐寛		(屋敷内)(城下)	
御宇田城	13		平城	〃	大字御宇田字八万田	水田	(肥国)(古城)(鹿本郡誌)	菊池家臣の内田時貞			
上村の城	14			〃	大字御宇田字上村	軍人墓地		菊池家臣の御宇田氏一族			
芋生城	15		城床尾	鹿本郡鹿本町	大字芋生字追浦・松ヶ浦	畑地	(肥国)(古城)(肥地志)(鹿本郡誌)	芋生親延			
岩野城	16	西丁の城	城床	〃	大字四丁字東前	雑木林地	(肥地志)				
多久の城	17		城尾	〃	大字多久字藤木・城尾	畑地	(伝承)(字名)				
隈部館	18			鹿本郡菊鹿町	大字上永野	(県指定史跡)公園	(肥国)	隈部氏			
猿返城	19	猿帰城	城床	〃	〃	植林地	(国郡一)(肥国)(肥古城)(古城)(肥地志)(鹿本郡誌)	隈部氏			
米山城	20			〃	〃	雑木林地	(国郡一)(肥国)(肥古城)(陣畧)(鹿本郡誌)	宇野親徳	(隈部氏の祖)		
阿佐古城	21			〃	大字阿佐古	杉の植林		阿佐古氏			
日渡城	22			〃	大字下内田字日渡	荒地	(国郡一)(肥国)(古城)(鹿本郡誌)				
下城跡	23		城の畑	〃	大字下永野	畑地		長野氏(隈部家臣の宇野氏一族という)一族			
山ノ井城	24		隈光誓願寺山	〃	大字下内田	雑木林地		内田相良氏(山ノ井氏)11代			
若宮城	25			〃	大字下内田	杉の植林地	(肥国)(古城)(鹿本郡誌)	内田相良氏一族			
鷹取城	26			〃	大字太田字鷹取		(鹿本郡誌)	東氏一族			
山内城	27		城山	〃	大字山内字郷ノ原	墓地	(肥国)	隈部親永			
鶴の巢城	28		「クウスサン」	〃	大字上内田	畑地	(国郡一)(肥国)(肥古城)(古城)(鹿本郡誌)(肥国)	隈部親永			
木山城	29	木野城		〃	大字木野		(肥国)(鹿本郡誌)	木野氏一族			
岩原城	30		古城	鹿本郡鹿本町	大字岩原			有働式部少輔			
岩原の城が鼻	31		城が鼻	鹿本郡鹿本町	大字岩原字春間	稲荷神社の敷地	(肥国)	犬塚孫左衛門			
岩原の「若竹の尾」	32		若竹の尾	〃	大字岩原字下岩原	畑地	(肥国)				
塚崎城					(所在地不明)						
広城	33	廣ノ城		〃	大字広字城尾屋敷	畑地	(古城)	千田英朝			
霜野城	34	下野古城		〃	大字霜野	雑木林地	(肥国)(鹿本郡誌)	菊池家臣の長田武秀・千田英朝			
米野山城	35			〃	大字合里字米野山		(肥国)(肥古城)(古城)(肥地志)(鹿本郡誌)(山本村誌)	内古閑氏一族			
湯町城	36	湯浦古城・上市城	山鹿古城・濱海城	山鹿市	大字山鹿字温泉	山鹿市中心部	(国郡一)(肥国)(肥古城)(古城)(肥地志)(陣畧)(鹿本郡誌)	佐伯氏			
熊入城	37	隈入城		〃	大字熊入(町)字三ツ名・竹ノ下	五盛山観音寺墓	(肥国)(古城)(鹿本郡誌)	山鹿重安			
下吉田城	38		城内	〃	大字下吉田字城内		(古城)(鹿本郡誌)	多久宗貞(隈部家臣)八幡宗安			
津留山城	39	寺島城	古城	〃	大字寺島字古城他		(肥国)(古城)(鹿本郡誌)	吉田高房(御宇田光親の次男)			
長坂城	40	星子城	土居の上他	〃	大字長坂字土居ノ上		(国郡一)(肥国)(古城)(肥地志)(鹿本郡誌)	宇野親治			
方保田城	41		城	〃	大字方保田字六田他	大道小学校	(肥国)(古城)(鹿本郡誌)	星子中務(赤星道半家臣)			
小原城	42	昨日が城		〃	大字小原字浦田		(肥国)(古城)(鹿本郡誌)	方保田氏一族			
坂田城	43		城山	〃	大字坂田	金時神社	(肥国)(古城)(鹿本郡誌)				
久原城	44		首石	〃	大字久原字首石		(肥国)(古城)(鹿本郡誌)				
平山城	45		陣ノ内	〃	大字平山字陣ノ内		(古城)(鹿本郡誌)	平山秀世(隈部家臣)第九郎定氏の三男			
城村城	46			〃	大字城字城		(国郡一)(肥国)(肥古城)(古城)(肥地志)(陣畧)(鹿本郡誌)	佐々成政			
東付城・西付城	47		附城山	〃	大字城字附城	圃場整備	(肥国)				
小坂城	48			〃	大字小坂字胡麻野	S52 削除					

熊 飽 地 区

城跡名	地図番号	別称	呼称	所在地	土地利用	文 献	(伝) 城主	備 考
千葉城	1			熊本市千葉城町	NHK九州本部の敷地	(古城)	出田秀寂	信心心氏
古城	2	隈本城		〃 古城町	学校・公園	(新撰考)(肥地志)(陣畧)(国郡一)(肥国)(肥古城)	鹿子木寂	
本山城	3	本山村古城	城の本	〃 本山町	宅地	(国郡一)(肥国)(肥古城)(肥地志)(陣畧)(肥郡村誌)	託摩宗直	陣屋敷
高江城	4			〃 南高江町612	光顕寺	(肥国)(古城)(飽田村誌)	石浦経成	せんだんぼ
川尻城	5	河尻城	外城	〃 川尻町外城	市公会堂・古城神社・川尻小学校	(肥国)(肥古城)(古城)(肥地志)(陣畧)(飽田村誌)	河尻氏	蓮堀
島崎城	6			〃			宇佐氏	
亀井城	7			〃 清水町亀井上屋敷	光照寺	(肥国)(古城)	亀井光総	ウシ堀 外堀

津浦古城	8	津浦城	〃	消水町打越	(肥国)(古城)			
池田城	9		〃	池田町	池田小学校 (古城)			
柿原城	10	城の原	〃	花園	宅地 (肥国)(古城)(鮎田村誌)	鹿子木 鑑 員	堀畑・城下・天神堀・小路の屋敷	
北島城	11		〃	池田	畑地・天満宮の敷地			
中尾丸城	12		〃	花園町(参考地)	垣の内館 (肥国)(古城)	井 芹 氏 (菊池氏の一族)		
井芹城	13		〃	〃(参考地)	花園小学校・井芹山王日枝神社	井 芹 氏		
上代城	14	城 山	〃	上代町城山	上水道貯水槽墓地公園 (国郡一)(肥国)(肥古城)(古城)(肥地志)(陣畷)	鹿子木 寂 心俊親		
上松尾城	15		〃	松尾町上松尾	松尾東小学校 (肥国)(古城)	志 垣 貞友 (王佐守)		
下松尾城	16	高 城	〃	小島下町高城山	(肥国)(古城)(鮎田村誌)	高 城 判 官		
檜崎城	17	虎御前の城	〃	小島下町檜崎	果 樹 園 (肥国)(古城)			
健軍陣内城	18	健軍城・健軍宮陳内城	〃	水源	泉ヶ丘小学校 (国郡一)(肥古城)(古城)(肥地志)(陣畷)(鮎田村誌)	光 永 氏一族		
立田城	19		〃	黒髪	国家公務員の宿舍・市営墓地 (肥国)(古城)	立田重雄・重徳		
小山城	20		〃	小山町	(国郡一)(肥国)(古城)		居屋敷・馬場前陣内・蓮堀	
長嶺城	21		〃	長嶺町下の山	(肥国)(古城)			
楠原城	22	城ヶ下	〃	鮎託郡北部町大字楠野字城ヶ下	楠野神社の社地 (肥国)	鹿子木氏 一族	堀畑・北小路裏門・五郎丸	
城が辻城	23	城ヶ辻	〃	大字四方寄字城ヶ辻	町営住宅地 (肥国)(古城)(鮎田村誌)	西牟田 常陸守 (阿蘇氏家臣)		
妙見城	24	隆福寺城	〃	大字立福寺字城原	(肥国)(古城)(鮎田村誌)	鹿子木 氏		
赤水城	25	大小城	〃	大字和泉字崩の平	民家の敷地舎 (肥国)(古城)(鮎田村誌)	岩 崎 恵 林 (鹿子木親員の家臣)	奥方	
井上城	26	平城	〃	大字改寄字井上	(古城)		どうこん堀高風	
小糸山の館	27	城 丸	〃	大字小糸山字居屋敷	(小名)		出山(出丸)	
荒平城	28		〃	大字万楽寺字神園	菅原神社の社地 (肥国)(古城)	田 尻 氏一族		

益 城 地 区

城 跡 名	地図番号	別 称	呼 称	所 在 地	土地利用	文 献	(伝) 城 主	備 考
道上城	1	下六嘉城	城の屋敷	上益城郡嘉島町大字下六嘉字泉の上	民家の敷地	(肥国)(古城)(上益郡誌)	越前守(阿蘇家臣)加賀守(西氏一族)	中通り・内屋敷
木山城	2	松丸城	城の本	上益城郡益城町大字迫字城の本	老人ホーム 民家の敷地	(国郡一)(肥国)(肥古城)(古城)(肥地志)(陣畷)(上益村誌)(上益郡誌)	木 山 氏一族 竹 崎 築 後	居屋敷
赤井城	3			〃 大字赤井字本丸	畑 地	(肥国)(古城)(上益郡誌)		
砥川城	4		城の尾	〃 砥川城の尾(推定)		(肥国)(古城)	砥 川 丹後守 木 山 紹 宅	大馬場・小屋敷堀端
小高氏の陣跡	5			〃 大字下陣字吉田	畑地(栗)	(小名)		
津森城	6	下陣守城	城 山	〃		(国郡一)(肥国)(肥古城)(古城)(肥地志)(陣畷)(上益村誌)	光光中務惟宗(阿蘇大宮司家老)弟惟純	二の天守 二の天守
飯田城	7	田口平城		〃 大字砥川字樋口・大人足	常 楽 寺	(肥国)(古城)(上益郡誌)	田 口 弾 正	
早川城	8		城 山	上益城郡甲佐町大字早川字下小塚	雑 木 林 地	(肥国)(新撰考)(古城)(肥地志)(上益郡誌)(上益村誌)	早 川 氏一族 (阿蘇氏家臣)	
南早川城	9		城平山	〃 大字早川字城下	公 園	(古城)	渡 辺 吉 久 (阿蘇氏家臣)	
陣内の館	10	阿蘇大宮司館跡	陣ノ内	〃 大字豊内字陣ノ内	畑 地	(肥国)		堀ノ内・東園西園
豊内城	11	松ノ尾城	城	〃 大字豊内字南谷川	畑 地 (一部雑木林地)	(国郡一)(肥国)(肥古城)(新撰考)(古城)(肥地志)(陣畷)(上益村誌)	伊 津 野 秀 勝と その子山城守	堀手
安平城	12	甲佐城		〃 大字小鹿字屋敷野	荒 地	(肥国)(古城)		屋敷野
津志田城				(所在地不明)				
乙女山城				(所在地不明)				
城塚	13			上益城郡御船町大字豊秋字次上	鉄工団地	(小名)		
甘木城	14	南甘木城	城 山	〃 大字甘木字北屋敷	共 同 墓 地	(国郡一)(肥国)(古城)(肥地志)(上益郡誌)	味木義治(安田義治)(味木氏一族)	
御船城	15		城 山	〃 大字御船字下圃	公 園	(肥地志)(国郡一)(肥国)(肥古城)(陣畷)(新撰考)(古城)(上益郡誌)(上益村誌)	御船盛女一族(阿蘇家臣)甲斐宗運	
平瀬城	16			〃 大字瀧川字塘添	集 落	(肥国)(古城)(上益郡誌)(上益村誌)	甲 斐 宗 運	
上野の高城	17	東上野城		〃 大字上野字高城	宅 地	(国郡一)		
戸上城	18	北田代城		〃 大字田代字戸上	畑 地	(国郡一)(肥国)(古城)(肥地志)(陣畷)(上益郡誌)(上益村誌)	田 代 乘 珍 (阿蘇家臣)	本城・倉床
津ヶ峯の高城	19			〃 大字上野字津ヶ峯	荒 地	(小名)		
南田代城	20	尾園城		〃 大字田代字尾園	畑 地	(肥国)(古城)(肥地志)(陣畷)(上益郡誌)(上益村誌)	田代宗伝(田代乗珍一族)甲斐宗親(甲斐宗運一族)	一の城・二の城 三の城
有水城	21		城羽根	〃 大字水越字有水	く り 畑 杉の植林地	(肥国)(古城)(上益郡誌)		
尾坪城	22	御坪城		〃 大字水越字尾坪	杉 林	(肥国)(古城)(上益郡誌)	征 西 将 軍 泰 成	
山内城	23			〃 大字水越字山内	雑 木 林 地 植 林 地	(肥国)(古城)(上益郡誌)		
浜の館	24	陣ノ内浜館		上益城郡矢部町城の平	県 立 校	(肥国)	阿蘇大宮司	
岩尾城	25	亀甲城		〃 大字城原字本丸・二の丸	公 園	(国郡一)(肥国)(肥古城)(古城)(肥地志)(陣畷)	阿 蘇 大 宮 司	

愛藤寺城	26	舞鶴城	〃	白藤字下町口	畑地	(肥国)(肥国)(肥古城)(古城)(肥地志)(陣畧)(大地辞)			
猿渡城	27		〃	猿渡宮の前	雑林地(一部は神社の敷地)	(国郡一)(肥国)(古城)(肥地志)	早川氏一族		
白尾野城	28		〃	白小野橋詰		(国郡一)	白小野堀道小野伊勢守		
入佐城	29		〃	入佐正本田	雑木地	(国郡一)			
笹原城	30		〃	大字小笹前田	雑林地	(国郡一)	笹原丹後守東弾正惟正		
梅木城	31		〃	杉水辻	雑林地	(国郡一)			
小野城	32		〃	万坂屋敷	雑木林地		小野伊勢守成竹一族		
池の城	33		〃	大字荒谷字池代	山林地				
猿ヶ城	34		〃	白藤瀧下		(肥国)(古城)(肥地志)			
鬼ヶ城	35		〃	管鬼ヶ城		(古城)(肥地志)			
囲城	36		〃	管野添	雑木山		渡辺氏一族		
市の原城	37		〃	市原字向平		(肥国)(古城)(上益村誌)	西金吾	勝負が谷	
勝山城	38		〃	川野字城山		(肥国)(古城)(肥地志)(上益村誌)	甲斐信光(阿蘇家臣)野尻惟安		
つづら原城	39		〃	下名連石葛羅原	山林・原野		橋本九郎左衛門	大手見	
寺尾城	40		〃	大字杉水字寺尾	山林地	(肥国)(古城)	西越前守芳方(阿蘇家臣)西小左衛門惟安		
飯蓋城	41	井無田城		上益城郡清和村大字井無田字六地蔵	杉の植林地	(肥国)(古城)	飯蓋光金(阿蘇家臣)		
鶴底城	42		城山	〃	大字鶴ヶ田字下瀬	畑地・杉の植林地	野原権五郎	勝負・勝原	
佛原城	43		城山・城のおぼね	〃	大字佛原字城林			城ヶ崎・城の円南城ヶ崎	
川の口の館	44		陣の内	〃	大字緑川字東受	民家の敷地			
榎津古城	45			(下益城郡富合町)所在地不明		(肥国)(古城)(下益村誌)	紫垣土佐守道高	中屋敷・下屋敷	
木原古城	46		城小山	下益城郡富合町大字木原字城山	木原不動尊の奥の院	(国郡一)(肥国)(肥古城)(新撰考)(古城)(肥地志)(陣畧)(下益村誌)	名和武頭		
阿高城	47	東阿高城	城山	〃	城南町大字東阿高字城山	雑林地	(国郡一)(肥国)(肥古城)(古城)(陣畧)(下益村誌)	三谷刑部左衛門(名和武頭の家臣)	
隈庄城	48	隈莊城		〃	隈庄	公園・役場	(国郡一)(肥国)(肥古城)(古城)(肥地志)(陣畧)(下益村誌)		
陳内城	49			〃	陣内字城尾	畑地	(肥国)(古城)		
大塚城	50			下益城郡松橋町	大塚古墳	(肥国)(古城)	大野天雄(阿蘇家臣)大野民部少輔	法華寺・寺尾寺原	
曲野城	51	法源の城市正殿の城		〃	大字曲野字橋川	畑地	(肥国)(古城)	村山丹後守(阿蘇家臣)	
豊田城	52			〃	大字浦川内字古城	雑木林地	(肥国)(古城)	佐々木高綱の子孫	
丸山の古城	53		古城	〃	大字曲野字丸山	畑地		竹崎季長	
竹崎城	54			〃	竹崎字陣の内	探土・探石のため破壊	(肥国)(古城)(下益村誌)	阿蘇氏	
豊福城	55			〃	豊福字下城・上城	畑地・ゲートボール場	(肥地志)(国郡一)(肥国)(肥古城)(新撰考)(古城)(陣畧)(下益村誌)	名和氏 相良氏	城平・高城・下城・上城
北部田城	56			下益城郡小川町大字北部田・北海東		(肥国)(古城)	男成友竹(阿蘇家臣)		
小野城	57		城山	下益城郡小川町大字北部田字古城(大字北海東高城・丸万城)		(肥国)(古城)	阿蘇惟澄		
小川城	58			下益城郡小川町	公園	(肥国)(古城)(大地辞)	松浦筑後守		
紫尾城	59			〃	大字西海東字井堀	雑木林地			
赤峰城	60	堅田城・堅志田城・勢多尾城		〃	中部字城山	雑木林地	(国郡一)(肥国)(古城)	富永土佐守	
萱野城	61			〃	萱野字陣の上	植林地	(肥地志)(陣畧)(下益村誌)	長野氏	
白石野尾城	62			〃	白石野字古屋敷	畑地	(国郡一)(肥国)(古城)	田上丹後守	
松の原城	63	松野原城		〃	松野原字原	ミカン畑	(肥国)(古城)(下益村誌)	松野原一弥太	
巢林城	64			下益城郡豊野村大字巢林字城迫	植林地	(肥国)			
花山城	65	花野山城		〃	大字上郷字高峯城	植林地	(国郡一)(肥国)(肥古城)(古城)(陣畧)(下益村誌)		
山崎城	66			〃	大字山崎字北芝原	竹林	(肥国)(古城)		
岩尾野城	67		城山	下益城郡砥用町大字三加字城迫	雑木林地		三浦義国		
山下の高城	68		高城	〃	大字甲佐平字山下	桑畑		砥用丹後守(阿蘇家臣)	
傍島馬入城	69	峙原城	城平	〃	大字湧井字城平	公園	(国郡一)(肥国)(肥古城)(古城)(肥地志)(陣畧)(下益村誌)	篠原丹後守(阿蘇家臣)	
桑木野城	70	中城	高城	〃	大字清水字高城・肉伏	植林地	(国郡一)(肥国)	斎藤権守	
権正城	71			〃	大字遠野字権正	畑地	(国郡一)	阿蘇家臣	
早楠城	72			〃	大字早楠字本村(推定)		(国郡一)		

宇土地区

城跡名	地図番号	別称	呼称	所在地	土地利用	文献	(伝)城主	備考
西岡台(宇土古城)	1			宇土市神馬町		(古城)(肥地志)(陣畧)	名和氏	

南山内の高城	2		高城	宇土市大字松山字南山内	宇土・富合滑掃センター		宗右近大夫義勝	
田平城	3	網田城	城	〃 網田町字城	畑地	(国郡一)(肥古城)(古城)(肥国)(新撰考)(肥地志)(陣畧)(宇土郡誌)	杵築越後加悦大和入道素心	高丸・宮丸ほとく丸
大嶽城	4	網田平城		宇土市				
雄岳城	5			〃				
矢崎城	6			宇土郡三角町大字郡浦字矢崎	畑地	(国郡一)(肥国)(肥古城)(古城)(肥地志)(陣畧)(宇土郡誌)	東右衛門・中村惟冬・加悦三浦	高丸・屋敷中園・下園

八代地区

城跡名	地図番号	別称	呼称	所在地	土地利用	文献	(伝)城主	備考
古城原	1		古城原	八代郡東陽村大字南字古城原	平坦地(畑地)			
小浦の城山	2		城山	〃 大字南字城山				
陣内城	3	南種山城	陣内	〃 大字南字陣内		(国郡一)(肥国)(肥古城)(肥地志)(陣畧)(八代郡誌)	菅田善兵衛(五兵衛)(相良氏家臣)又(衛池氏)	城段
小浦城	4			〃 大字小浦字田ノ迫	ミカン畑	(八代郡誌)	葦田善兵衛の弟	搦手
黒淵城	5	種山黒駈城	城の平	〃 大字南字城の平	ミカン畑	(新撰考)(八代郡誌)		
高塚城	6	吉本城		八代郡竜北町	畑地 梅林地	(国郡一)(肥国)(肥古城)(新撰考)(古城)(肥地志)(陣畧)(八代郡誌)	佐々木(宮内左衛門)吉廣(村上(伯耆守)興興家臣)東柳部介(相良家臣)	
東新城	7			〃	柑橋園			
西新城	8		西新城跡	〃	〃			
高城	9		高城	〃	〃			
笹尾城	10			〃	〃		小武頼尚	
大野城	11			〃 大字大野	果樹園	(古城)(八代郡誌)	大野氏(菊池氏家臣)東上野守	長蓮
宮原城	12		浜殿	八代郡宮原町大字宮原村字浜殿	宅地・水田	(肥国)(古城)(肥地志)(八代郡誌)	宮原左兵衛尉橘公忠(相良家臣)	
草場城	13		城の平天の守	〃 大字椿字小越	ミカン畑	(肥国)(古城)(八代郡誌)		
上土城	14	大牟田城	城	八代郡千丁町大字大牟田字城	上土集落	(肥国)(古城)(八代郡誌)	蜂須賀家職(名和氏家臣)岩崎忠久(相良伊勢守(興善寺城)代)の与力)	うて・奥園・洲前
吉王丸	15			〃		(千丁村史)		
岡城	16		岡の古城	八代市岡町(大字岡町中)字古城	ミカン畑 国道3号線	(国郡一)(肥国)(肥古城)(古城)(肥地志)(陣畧)(八代郡誌)	佐々木吉広・吉重(名和氏家臣)佐々木高光	陣の内・大井戸横屋敷・町畑
興善寺城	17	関城・前の城・後の城		八代市興善寺町(大字・川田町東)字関		(肥国)(古城)(肥地志)(八代郡誌)	本郷忠行(名和頼興家臣)相良長敏一族	
竜峰城	18	龍カ峯城		〃 (〃) 国有林地内		(国郡一)(肥国)(古城)(肥地志)(八代郡誌)	鎮西為朝	
平家ヶ城	19	平家城		〃 東町字年の神	山林	(肥国)(古城)(八代郡誌)	平氏一族緒方一族	
古籠城	20	籠城		〃 古籠町		(国郡一)(肥国)(肥古城)(古城)(肥地志)(陣畧)(八代郡誌)	相良氏名和氏	
麦嶋城	21		古城	八代市古城町(大字麦嶋(甲))字古城		(国郡一)(肥国)(肥古城)(古城)(肥地志)(陣畧)(八代郡誌)	小西行重	内堀・外堀
平山城	22	高田城		〃 高田町(大字・平山新町)字平山		(肥国)(新撰考)(古城)(肥地志)(八代郡誌)	松岡長平・東越後守(相良氏家臣)	
田川内城	23	田河内城 日奈久城	城の山	〃 山下町(大字日奈久)字田川内	畑地・竹林 墓	(肥国)(新撰考)(古城)(八代郡誌)	園田宗林(名和家臣)早壁文右衛門(阿蘇家臣)	馬場・往還下
千代永城	24			〃 (〃) 字山下	雑木山	(肥国)(芦北郡誌)	桑原能登守(相良家臣)	馬場・古塘添辻
比丘尼が城	25	櫛山城		〃 野田崎町(大字野田崎)字比丘尼		(古城)	妙珍比丘尼(本郷能登守の母)	
二見城	26	園田城	高城	〃 二見町(大字本町)字園田城	畑地・ミカン畑・雑木林	(国郡一)(肥国)(古城)(芦北郡誌)	村上太郎(小太郎)(名和氏家臣)	馬場・園田城
二見南城	27		城ノ尾	〃 (大字本町)字鉢尾	雑木山	(肥国)(古城)(芦北郡誌)	南下野守(南大和守?)(相良家臣)曾田大和守	
船倉城	28			八代郡坂本村		(古城)(芦北郡誌)	愛甲常吉(相良家臣)	
久多良木城	29	上久多良木城・寺山城		〃 大字久多良木字園		(国郡一)(古城)(肥国)(芦北郡誌)	久多良木氏(名和伯耆守家臣)・深木宗方(相良家臣)	

芦北地区

城跡名	地図番号	別称	呼称	所在地	土地利用	文献	(伝)城主	備考
高尾城	1		城・城のどつべん	芦北郡芦北町大字吉	杉山	(肥国)(古城)(芦北郡誌)	酒井蔵人氏勝(相良家臣)	倉屋敷
才木城	2	天月城	古城	〃 大字天月	墓 民家の敷地	(肥国)(古城)(芦北郡誌)	安永兵部左衛門(相良家臣)	
兼丸城	3			〃 大字八幡	杉山			
佐敷東の城	4	東ノ城	本丸・2の丸・3の丸	〃 大字佐敷字花岡		(肥国)(古城)	東藤左衛門	本丸・二の丸三の丸
佐敷城	5	城山		〃 下町		(国郡一)(肥国)(肥古城)(古城)(肥地志)(陣畧)(大城跡)(芦北郡誌)	同 新左衛門	
大尼田城	6	大泥田城	城下	〃 大字大尼田		(肥国)(古城)(芦北郡誌)	大仁田玄蕃(相良家臣)	
吉尾城	7		園ど	〃 大字吉尾	墓地	(肥国)(古城)(芦北郡誌)	吉尾大 学 塩山浅之助	
野角古城	8	宮崎城		〃 大字宮崎		(国郡一)(肥国)(古城)	犬童丹波守 鬼塚七右衛門守	城の井戸
小野嶽城	9	小篠城 湯浦野嶽城	亀城	〃 大字湯浦		(国郡一)(肥国)	二階堂阿兄弟 山崎宗氏 和宗守(義親)	空堀
市野瀬城	10		高城	〃 大字市野瀬	阿蘇神社 畑	(肥国)(古城)(芦北郡誌)	市野瀬興三左衛門宗氏	

伏木城	11			〃 大字伏木氏		(肥国)(古城)(芦北郡誌)	矢野信濃守 (相良家臣)	
田浦城	12	上ノ城	鶴の城 亀の城	芦北郡田浦町大字田浦字古城	柑橋園	(国郡一)(肥国)(肥古城)(古城) (肥地志)(陣畧)(芦北郡誌)	進寛春(名和家臣)	
猪山城	13	大木山門城跡		〃 大字田浦字小群川内	柑橋園	(古城)	田浦俊国	
口黒城	14	猪山城	倉の前後	〃 大字田浦字山下	柑橋園	(肥国)(古城)	田浦氏(檜前政 磨の子孫)一族	とのん馬場
口黒西の城				(所在地不明)		(古城)		
津奈木城	15			芦北郡津奈木町大字岩城字大手		(国郡一)(肥国)(肥古城)(古城) (肥地志)(陣畧)(芦北郡誌)		
赤崎城				(所在地不明)		(古城)		
水俣城	16	陣内の城	古高城	水俣市陣内字古城	城山公園	(国郡一)(肥国)(肥古城) (新撰考) 城(肥地志)(陣畧)(芦北郡誌)	本郷久(名和家臣)・深木 宗方・大瀧頼安(相良家臣)	
中尾城	17		亀の城	〃 久木野大字古里字城平		(肥国)(古城)(芦北郡誌)	菱刈左兵衛	
久木野城	18	岩群城・岩峰城・鶴 平城・久木野丸尾城		〃 久木野町大字熊平字金迫		(国郡一)(肥国)(古城) (芦北郡誌)	久木野四郎・相良四 郎・相良駿河守頼雄	
宝川内城	19	朴川内城	城平	〃 宝川内町大字市渡瀬字城平	竹林地带	(肥国)(芦北郡誌)	東頼兼(相良家臣)	

球磨地区

城跡名	地図 番号	別称	呼称	所在地	土地利用	文献	(伝)城主	備考
大村平家城	1		平家城	人吉市願成寺町上ノ寺	一部を削除	(城図)		
矢黒城	2	城戸之尾城		〃 矢黒町西ノ園		(外史)(南藤)(詞談)	原隠岐守(一族)	
赤池城	3		城山	〃 赤池町原城山		(南藤)(詞談)	斉藤但馬守	五輪塔 天正11年()
大畑城	4	おこほの 城(ハ)	城山	〃 大畑麓町城山		(八代) (南藤)(古城考)	小原又太郎	八代日誌 永禄5年()
渡利城	5		城山	球磨郡球磨村大字渡字城山		(城図)(伝承)	井口氏(上相 良氏の家臣)	
原田城	6			〃 大字渡字西門		(相良家文書)		相良家文書 興国元年(1340)
高山城	7			球磨郡深田村大字東字高山		(城図)(伝承)	平河盛高(義高の子)	
深田城	8		城	〃 大字西字城他		(城図)(古城考)	平河師高	
万江の城	9		城	球磨郡山江村大字万江字城の内				
山田城	10		城山	〃 大字山田字城山		(球磨郡誌)	平川氏一族 相良氏	
山田の城	11		城	〃 大字山田字城				
今村城	12	須恵城(城)		球磨郡須恵村字今村		(城図)(伝承) (須恵村史跡)		板碑 天文4年()
須恵の城ケ尾	13		城ケ尾	〃 字城ケ尾		(須恵村史跡)		
須恵の古城	14		古城	〃 字古城	民家の敷地 半の飼育場			
四浦の平家城	15		平家城	球磨郡相良村大字四浦字舟渡		(城図)		
川辺の城	16		城ノ上他	〃 大字川辺字城ノ上他				
相瀬の平家城原	17		平家城原	〃 大字柳瀬字冲原				
蔵城(柳瀬の城)	18		蔵城	〃 大字柳瀬字蔵城	圃場整備で 消滅			
柳瀬の城ケ峯	19		城ケ峯	〃 大字柳瀬字城ケ峯	砂利採取場			
上村城	20	蔵城(他)		球磨郡上村字麓		(球磨外史) (球磨郡誌)	上村頼村とその一族	
永里城	21	花车礼城		〃 字永里		岡本家及び菊池氏系図	藤原季高 (合志九郎)	別称は花车礼寺 より
岡本城	22	小鷹城(他)		球磨郡岡原村大字岡本		(古城考)	相良頼春	別称は地形の形 状
左近城	23			〃	協同桑園	(求麻外史)	相良長統	
宮原城	24			〃 大字宮原		(城図)		
岩城	25		岩城	球磨郡錦町大字木上字岩城		(城図)(肥後国誌)	平河義高	(伝承)米蔵が建 てられていた
蔵城	26		蔵城	〃 大字木上字蔵城	青年学級 木上中学校			
土屋城	27	一武城(古)	土屋城	〃 大字一武字城		(球磨郡誌)(古城考)	土屋八市左衛門 加藤氏	
永池城	28			球磨郡免田町大字乙字浜殿	畑地	(古城考)		
鍋城	29			球磨郡多良木町大字黒肥地	畑地	(詞談)(求麻外史) (城図)	上相良氏一族	
里城	30		里の城	〃 大字多良木字里の城他	公園・宅地	(城図)(獨談)	上相良氏一族	
内城	31		内城	〃 大字黒肥地字土屋	畑地	(城図)(御當家聞書)	相良頼景	
久米城	32		久米城	〃 大字久米字今山田他		(城図) (求麻外史)	久米三郎 上相良氏一族	八代日記 永禄2年(1559)
奥野城	33		城山	〃 大字奥野字城山	牧場	(城図)(相良家文書)	奥野氏一族 (上相良氏家臣)	
小多田城	34		城山	球磨郡水上村大字岩野字丸山		(城図)(球磨郡神社記)	東七兵衛尉	
湯山城	35		高城	〃 大字湯山字高城		(城図)	湯山宗豊	
湯前城	36			球磨郡湯前町大字下城字野首		(古城考)(求麻外史)	東直政	

天 草 地 区

城 跡 名	地図 番号	別 称	呼 称	所 在 地	土地利用	文 献	(伝) 城 主	備 考
本 渡 古 城	1	本戸馬場城	城 平	本渡市大字本戸馬場字城平		(肥古城)(古城)(肥地志)(陣畧)(天草島鏡)	天 草 氏一族	
本 渡 の 城 山	2		城 山	◇ 本渡南町(大字本渡字城山他)				
「上の山」 広 瀬 の 城 山	3		上 の 山	◇ 大字広瀬字上の山				
風呂ノ迫の高城	4		高 城	◇ 佐伊津町字風呂ノ迫				
才 津 古 城	5	佐伊津古城	城 廻	◇ 字城廻	市 営 住 宅	(古城)(天草島鏡)		
志 柿 城	6			◇ 志柿町字高垣・船江		(古城)(天草島鏡)		
楠 浦 の 城 ケ 坂	7		城 の 坂	◇ 楠浦町城ヶ坂(参考地)				
林 内 の 陣 ノ 山	8		陣 ノ 平	◇ 宮地岳町字林内				
魚 貫 の 城	9			牛深市魚貫町大字魚貫字城ノ下			久 玉 氏一族	
久 玉 城				◇ 久玉町				
大 矢 野 の 亀 の 迫 城	11			天草郡大矢野町大字中字北亀の迫		(古城)(肥地志)(陣畧)		
大 矢 野 の 柳 城	12			◇ 大字中字城山		(古城)(肥地志)(陣畧)		
大 矢 野 の 中 村 城	13		城 本	◇ 大字中字城本	大 矢 野 中 学 校	(古城)(肥地志)(陣畧)		
◇ 上 村 城	14		城 山	◇ 大字上字浦川	編 照 院	(古城)(肥地志)(陣畧)		
合 浦 の 合 の 丸 城	15			天草郡松島町大字合津字合の丸				
内 野 河 内 の 城	16		城 ノ 平	◇ 大字内野河内字城ノ平				
教 良 木 の 城	17			◇ 大字教良木字野添・城平				
上 津 浦 城	18		城 ケ 嶋	天草郡有明町大字上津浦字城ヶ嶋・戸石川		(古城)(肥地志)(陣畧)(天草島鏡)	上 津 浦 氏 一 族	
赤 崎 の 城	19			天草郡有明町大字赤崎字大丸				
大 嶋 子 の 城	20		城 平	◇ 大字大島子字古城		(古城)(天草島鏡)		
小 嶋 子 の 城	21			◇ 大字小島子字古城				
須 子 の 城	22			◇ 大字須子字猪の尻				
勢 溜 の 城	23			◇ 大字大浦字勢溜				
楠 甫 の 城	24		城 之 首	◇ 大字楠甫字城之首			大 矢 野 氏 一 族	
栖 本 の 馬 場 城	25			天草郡栖本町大字馬場字下松尾・村		(古城)		
湯 舟 原 城	26		城 之 尾 城 山	◇ 大字湯船原字本丸		(天草島鏡)	栖 本 氏 一 族	
栖 本 ・ 古 江 の 城	27		古 城	◇ 大字古江字桂松		(古城)		
河 内 城	28			◇ 大字河内字城ノ平・前田				
二 間 戸 の 城	29			天草郡姫戸町大字二間戸字寺				
浦 の 城	30		城 山	天草郡倉岳町大字浦字城ノ下				
宮 田 の 城	31			◇ 大字宮田字城山				
棚 底 城	32			◇ 大字棚底字尾崎・城ノ平				
御 所 浦 の 元 浦 城	33		城 ノ 上	天草郡御所浦町元浦他				
大 道 城	34			◇ 竜ヶ岳町大字大道字城				
大 島 の 城	35			天草郡五和町大字御領字小浦			小 浦 太 郎	
宮 津 の 城	36			◇ 大字鬼池字城	宅 地 ・ 国 道			
上 野 原 の 城	37	三 川 城		◇ 大字上野原字打越			松 平 内 蔵 助	
城 木 場 の 城	38		城 ノ 尾	◇ 大字城木場字南風之元		(古城)(天草島鏡)		
下 内 野 の 城	39		城 山	◇ 大字下内野字城山		(天草島鏡)		
御 領 の 城	40			◇ 大字御領字馬場				
志 岐 城	41			天草郡苓北町大字志岐		(肥古城)(古城)(肥地志)(陣畧)		
大 江 の 城	42			天草郡天草町大字大江字城の尾・陣の内				
高 浜 の 城 の 岳	43		城 ノ 岳	天草郡天草町大字高浜字森分				
福 連 木 の 城	44		城 山	◇ 福連木字山神				
小 宮 地 の 城	45		城 ノ 平	天草郡新和町大字小宮地字城ノ平		(古城)(天草島鏡)		
大 多 尾 の 城	46		城 ノ 平	◇ 大字大多尾字城ノ平				
下 田 の 城	47			天草郡河浦町大字河浦字城山		(古城)(天草島鏡)		
路 木 の 城	48	小 見 山 城		◇ 大字路木字富田	県 道		小 見 山 庄 源	
宮 野 河 内 の 城	49		城 ノ 時 殿 様 の 時	天草郡河浦町大字宮野河内字蔵ノ浦・船津	県 道			

縄張り図から見た城跡の分類

城跡はその心要性に応じて適宜に築かれており、城跡の縄張りも種々のものがあるが、ここでは踏査した城跡の中で一つの型をなすと推察されるものについて観察してみた。

(A) 竹迫城型 (本文 119 P 参照)

有力豪族の本城等に代表されるもので縄張りが極めて広く複雑で、城跡に関連あると思われるような字名、小名、伝承等もよく残っている。

(B) 関城型 (本文 254 P 参照)

山稜末端部の尾根や丘陵末端部を堀切で断ち切った城跡である。堀切は二重や三重の場合もある。主郭は単郭が多く平坦地部分は狭く、さらにこれを土塁や空堀を伴う曲輪が取り巻いている事が多い。

(C) 豊福城型 (本文 223 P 参照)

独立丘陵や丘陵の末端部に築かれたもので、主郭は比較的広い平坦地をなし、土塁や空堀等の遺構を多く残している。連郭式の縄張りになっている事もある。

(D) 須屋城型 (本文 123 P 参照)

平地、もしくは丘陵に築かれたいわゆる平城的なもので、集落全体が一つの城跡をなす場合が多い。

(E) 山内城型 (本文 204 P 参照)

山稜の峯に築かれた城跡に多く、山頂部分に簡単な縄張りを有する。縄張り的には興善寺城型に類似する。

(F) 焼米城型 (本文 47 P 参照)

山稜末端部もしくは丘陵末端部を二条もしくは三条の堀切で断ち切ったもので、連郭式の城跡となる。

(G) 早川城型 (本文 194 P 参照)

城跡と集落が一体化したもので、いわゆる総構えの城に近いものである。多くの場合、城跡は、小規模な山に築かれており、山頂に小規模の平坦地を持ち、斜面部には階段状地形が重なっているのが特徴である。また集落には空堀、土塁、金石文、城跡関連地名がよく残っている。

(H) 紫尾城型 (本文 226 P 参照)

少なくとも外観的には縄張りをまったくとらえる事の出来ない城跡である。単に戦時の際、立籠るだけの城だったのだろうか。

A	玉7・玉19・玉44・菊5・菊22・鹿18・鹿46・熊5・宇1・益10・益24・益25・益26・益48・益60・八6・八20 芦4・芦15・芦16・球29・天1・天23
B	玉2・玉5・玉12・玉13・玉24・玉67・玉68・阿4・阿46・菊2・菊3・菊6・菊10・菊18・菊30・鹿15・鹿16 ・鹿25・益6・益17・益66・益67・益69・八24・芦3・球1・球10 (天草は、ほとんどこの型に属する。)
C	阿41・阿45・菊1・菊4・菊8・菊23・菊24・菊26・菊28・菊32・菊35・鹿12・鹿22・鹿27・鹿33・熊10・熊18 ・宇3・宇6・益11・益14・益20・益51・益61・八3・八11・八16・八26・八27・芦8・球11
D	玉39・玉48・玉55・玉56・玉57・玉60・阿3・阿32・菊17・鹿4・鹿11・鹿36・熊22・益1・益3・益16・益18 ・益62・八12・八14・球28・球30
E	玉10・玉14・玉15・玉61・玉65・阿5・阿44・菊9・鹿19・鹿20・鹿26・益37・益57・益63・益65・八25
F	玉4・玉37・玉45・玉49・阿6・阿17・菊11・鹿24・鹿45・熊14・熊24・熊26・益22・八13・球20・球21・球32・球33
G	玉16・阿14・阿28・鹿1・鹿34・鹿35・益2・益8・益15・益64・八4・球2・球3・球4
H	玉31・阿7・阿8・阿9・阿10・阿35・菊7・菊14・菊16・菊19・鹿9・鹿2・鹿28・熊28・益4・益71・八1 ・八8・八19・球17・球31

各地区中世文献所載城名一覽

(阿蘇品保夫)

① 中世文書から各地区の城名を抽出した。若干の所在不明の城については省略した。② 出典は熊本県史料中世篇所収文書を優先した。又、史料名は略記したものもある(後記一注を参照) ③ 本文城名との関連や厳密な所在位置については未だ考慮の余地がある。

五名地区			(城村城)	小早川491号	天正16年正月5日
和仁の城	小早川16号・17号〔熊史五〕	天正15年12月10日	岩野城	伊東古文状(日向集成262号)	観応3年7月
迎春の城	小早川16号・17号〔熊史五〕	同上	下野城	上井党井日記	天正12年4月21日
大水山城	八代日記	弘治2年5月8日	内空閑城	相良275号	永正3年10月16日
宇都宮大和太郎の城	詫摩80号〔熊史五〕	建武5年4月11日		朽網親満書状(編大14-165)	
大野要害	小代59号〔熊史一〕	天文19年8月22日	内村要害	齊藤3号〔熊史四〕	
関の城	阿蘇二131P	正平6年10月4日	山本城	[朽網親満書状](編大14-165)	
小代城	吉川(広家年譜之事) ^{962号・964号} 965号(編大28)	天正16年5月他	平尾城	熊谷(編大8-3021)	康暦元年10月
	立花(編大28)			深堀17号・18号・19号〔熊史五〕	康暦元年7月16日
	小早川〔熊史五〕	天正15年	熊飽地区		
	上井党兼日記	天正12年9月24日・26日	城殿の城	上井党兼日記	天正3年2月26日
筒嶽城	大友(鹿子木親員書状写)(編大15-10)	永正16年3月3日	隈本城	相良258号	
関城	内田7号〔熊史二〕	天文20年正月7日		[朽網親満書状](編大14-165)	
	田尻7号・8号〔熊史二〕	天文19年12月25日	(古城)	大友97号・101号〔熊史五〕	永和4年8月
	阿蘇二131P	正平6年10月4日		吉川1105号・1108号(編大8-267)	
	三池8号〔熊史四〕	正平6年10月18日		来島(編大8-267)	
阿蘇地区				八代日記	天文15年7月28日
野尻城	上井党兼日記	天正14年正月28日	(古城)	小早川25号〔熊史五〕	天正15年
	阿蘇122号	延元3年	(千葉城)	詫摩235号〔熊史五〕	
鞍形尾城	阿蘇240号	応永28年8月	河尻城	大友76号〔熊史五〕	
高森城	上井党兼日記	天正13年12月25日	くまもとの城	立花(編大28)	天正16年5月14日
南郷城	阿蘇122号	天正14年2月5日	きおんひら城	八代日記	天文12年10月2日
		延元元年8月18日他	藤崎城	吉川1105号・1108号(編大8-267)	永和4年8月
菊池地区			熊本城	大友101号〔熊史五〕	
隈府城	五条家5巻125号(義鑑書状)		詫摩城	志岐14号〔熊史四〕	正平8年10月
隈部城	五条家5巻122号(義鑑書状)		宇土地地区		
	五条家(編大16-179)		宇土殿の城	家久君上京記	天正3年2月25日
	阿蘇一130号 同二178P	正平4年10月16日(?)	宇土の城	小早川25号〔熊史五〕	天正15年
隈谷村城	利根一族共同保管(編大15-370)			八代日記	天文7年正月7日他
菊池山城	志賀親長氏家藏(編大)			立花(編大28)	天正16年5月14日
	詫摩245号	建武3年正月8日	郡浦の城郭	阿蘇二49P	天正16年10月14日
菊池本城	阿蘇一130号	正平4年10月16日(?)	益城地区		
	上井党兼日記	天正12年9月14日	甲佐城	阿蘇二183P	
菊池城	正慶雜乱志	正慶2年3月11日		阿蘇122号	延元3年10月
	小代13号・14号〔熊史一〕	建武3年8月		上井党兼日記	天正13年8月13日
鹿子木安芸大炊助の城	竜造寺11号〔熊史五〕	貞和6年5月		阿蘇122号	興国4年
竹迫城	小鹿島(編大8-301)	康暦元年10月他	矢部城	上井党兼日記	天正13年8月18日
	利根一族共同保管(編大15-370)		木山城	阿蘇二255P	文龜3年9月27日
合志城 合志館	小代13号・14号〔熊史一〕	建武3年8月		詫摩235号〔熊史五〕	
	阿蘇122号	延元2年7月	(木山松丸城)	阿蘇二196P	康永3年10月19日
	上井党兼日記	天正13年9月2日・3日		深堀17号・18号・19号〔熊史五〕	永徳元年6月29日
合志殿の城	家久君上京記	天正3年2月		大友27号・104号〔熊史五〕	
合志城	都甲3巻10号〔大分県史料〕	建武4年7月2日		相良321号	
赤星殿の城	家久君上京記	正平13年2月26日		八代日記	天文3年3月28日
水島の古城	阿蘇二176P・深堀17号〔熊史五〕	康暦元年9月6日他	津守城	上井党兼日記	天正13年8月18日
木野の城	阿蘇二176P・178P	康暦元年9月6日他		阿蘇122号	延元2年7月
板井城	熊谷 編大8-302	康暦元年10月		八代日記150	永禄5年4月13日
菊池陣城	阿蘇一131号	正平5年3月12日		深堀17号・18号・19号〔熊史五〕	永徳元年6月29日
亀崎城	深堀 19号〔熊史五〕	永徳元年9月	御(三)船城	上井党兼日記	天正13年8月15日
鹿本地区				阿蘇107号	興国6年11月16日
山鹿城	上井党兼日記	天正12年9月15日		阿蘇二169P	永和元年7月13日
	阿蘇二130P	正平6年10月1日		志賀207号〔熊史二〕	延元4年6月27日
	立花(編大28)	天正16年5月14日	岩尾城	八代日記	天文21年3月5日
	[朽網親満書状](編大14-165)		菅城	西蔵殿寺85号〔熊史一〕	文明6年5月21日
宗像の城	深堀17号・18号・19号〔熊史五〕	康暦2年8月25日	田口城	阿蘇122号	興国4年5月
山賀之城	小早川25号〔熊史五〕	天正16年閏5月14日			

勢田尾城	八代日記	大永3年4月3日	高田城	犬童1号〔熊史四〕	
小河城	阿蘇122号	正平元年9月	高津賀城	八代日記	永祿2年6月11日他
安見城	阿蘇122号	同上	たかの峯城	八代日記	天文3年閏正月16日
山崎向城	阿蘇122号	同上	日奈久城	八代日記	天文12年3月4日
小野庄の城	阿蘇113号・122号	正平2年8月25日	丸山の城	八代日記	永祿2年5月22日
小野次郎実武の城	阿蘇107号	興国6年10月28日	荒尾城	阿蘇122号	正平元年
糠塚城	阿蘇122号	正平2年(?)	芦北地区		
隈庄殿の城	家久君上京記	天正3年2月25日	水俣城	入来院210 八代日記 肥後水俣陣立(薩藩日記)	至徳3年2月7日 永祿2年5月21日他 天正8年8月19日
三川城	阿蘇122号	正平2年(?)	湯浦城	牛屎院16号〔熊史五〕 犬童1号〔熊史四〕 八代日記	享祿2年11月19日
布瀬城	阿蘇122号	正平2年(?)	久米野城	八代日記	弘治3年3月27日
笠松城	阿蘇122号	正平2年8月25日	佐敷城	八代日記	享祿2年7月6日
鞍楠城	阿蘇122号	同上	球磨地区		
高城〔竹崎城〕	八代日記	長享元年3月1日	荒狩倉城	相良99号・102号・103号	暦応3年
隈牟田城	相良183 牛屎院8号〔熊史五〕	元中4年7月4日	山田城	相良82号 相良90号・120号・162号 相良87号 相良99号・100~105号・108号	建武3年 暦応3年6月24日他 暦応3年4月25日 暦応3年8月6日他
守山城	八代日記	永正13年9月21日他	木枝城	相良82号 相良91号・99号	建武3年(?) 暦応3年6月25日他
荻之尾城	上井覚兼日記	天正13年8月13日	村山城	相良99・102・103号	暦応3年8月6日他
堅志田城	上井覚兼日記	天正13年8月13日・14日	原田城	相良108号	興国元年6月20日
蓮生寺の上の陣城	上井覚兼日記	天正11年10月17日	小牧城	相良108号	興国元年11月26日
練崎城	島田所蔵1号〔熊史三〕	康永3年7月晦日	深田城	相良162号	文和3年11月1日
小駒野城	阿蘇107号	興国6年11月5日	小山田城	相良83号	元中4年7月4日
松尾城	相良183号	元中4年7月4日	鍋倉城	相良233号	文明17年3月8日
赤山城	相良183号 入来院190号 阿蘇二162P	元中4年7月4日 至徳3年5月13日 永和元年6月7日	人吉城	八代日記	大永4年8月22日
豊福城	相良319号 八代日記	永正8年4月(?) 天文4年3月22日	上村城	犬童1号〔熊史四〕	文安5年5月
隈庄城	鹿子木4号〔熊史一〕 相良295号 上井覚兼日記	天文3年閏正月1日 天正13年8月9日 天正11年10月28日	永里山城	犬童1号〔熊史四〕	文安5年5月
花山城	上井覚兼日記		永里城	八代6	大永6年5月16日他
八代地区			久米城	岡本10号〔熊史三〕 八代日記	永祿2年6月4日 永祿2年9月3日 弘治3年6月9日 永祿5年5月10日 天文14年9月13日 永祿2年9月3日
関城上下	相良319号 八代日記	永正8年4月24日 天文24年4月13日他 建武3年3月23日	岡本城	岡本10号〔熊史三〕	
黒城	詫摩245〔熊史五〕	正平元年	おこぼの城	八代日記	
黒駁城	阿蘇122号		多良木ノ城	八代日記	
二見城	相良194号		湯前城	八代日記	
八代三ヶ所の城	相良230号	文明16年3月1日	天草地区		
八代古麓城	相良319号・498号	永正元年2月7日	棚底城	八代日記	天文13年正月4日他
八代本城	八代日記	永祿4年7月7日他	志岐城	加藤11号・17号〔熊史五〕 下川93号〔熊史五〕 志岐44号〔熊史四〕	天正17年12月5日他 寛永15年11月17日 天正17年12月5日
岡城	阿蘇122号	正平元年	本渡城	加藤18号〔熊史五〕 森本所蔵13号〔熊史四〕	天正17年2月19日 天正17年12月19日
今宮城	阿蘇122号	正平元年	上津浦の城	相良183号 八代日記	元中4年7月4日 天文元年7月9日
久多良木城	武雄神社18号〔熊史五〕	明德2年7月2日			
八町嶽城	武雄神社18号〔熊史五〕	明德2年7月2日			
大牟田城	八代日記	天文12年8月27日			

(注)

大友15号=大友文書録15号文書

阿50号=阿蘇文書一の阿蘇家文書上50号文書

阿二50P=阿蘇文書二の50頁所収文書

〔熊史一〕=熊本県史料中世篇一所収

〔編大15-12〕=改訂増補編年大友史料15卷12号文書

「慶安四年差出」に見る中世城跡

地区	城跡名	種別	規模(間)	備考	地区	城跡名	種別	規模(間)	備考	
玉名郡	関古城	山城	960		芦北郡	南種山古城	山城	508	陣内城	
	関古城	平山城	700			岡古城	平城	136		
山鹿郡	城村古城	平山城	1020			興善寺古城	山城	240		
山本郡	下内田古城	平山城	688			古麓古城	山城	420		
	上永野古城	山城	60			麦嶋古城	平城	432		
	上永野古城	山城	48			田浦古城	山城	450		
	上内田古城	山城	66			佐敷古城	山城	155		
	下野古城	山城	46	霜野城		津奈木古城	山城	600		
	岩野古城	平山城	45	岩野磯道祖古城		水俣古城	平山城	108		
	菊池郡	隈府古城	山城	276		菊池城	球磨郡	赤池城		山城 ^{本丸之内}
合志郡	上庄城	平城	220	竹迫城		大畑古城		山城		202
阿蘇郡	小国下城古城	平山城	1360	下城		一武古城	山城	216		
	小国小里古城	山城	1170			岡本古城	山城	53		
飽田郡	上代古城	山城	486	上代城		湯前古城	山城	330		
宇土郡	宇土古城	平山城	698			深田古城	山城	120		
	矢崎古城	平山城	350			天草郡	志岐古城	山城		900
	綱田古城	平山城	336	田平城			下田古城	山城		270
益城郡	豊内古城	山城	500			久玉古城	山城	300		
	下陳古城	山城	430	津森城		小宮地古城	山城	800		
	木山古城	平山城	248			湯船原古城	山城	420		
	田代古城	山城	350		中村古城	平山城	360			
	御船古城	平山城	254		大浦古城	山城	270			
	愛藤寺古城	山城	2000		上津浦古城	山城	390			
	岩尾古城	平山城	760		大嶋子古城	山城	350			
	峙原古城	山城	243	傍島馬入城	志柿古城	平山城	250			
	堅志田城	山城	650		馬場古城	山城	420			
	小熊町古城	山城	785		佐伊津古城	山城	234			
	豊福古城	平山城	600		同村古城	平山城	300			
	木原古城	山城	1144		下内野古城	山城	360			
	隈庄古城	平山城	470		城木馬古城	山城	250			
	八代郡	高塚古城	平山城	166						

第一章 玉名地区

平安後期全国的に展開する律令制の解体に伴い、各地に私領が形成されるが、当地方においてもそれは例外ではない。『宇佐神領大鏡』によると現玉名市伊倉地区は玉名郡司である日置氏によって私領化されていた。このような私領主層は院政期の荘園整理令等々の国家公権による攻撃に対し、自己の所領をいわゆる権門勢家に寄進し、自らは在地の庄園管理者としての立場をとりつつ、領主化の道を志向するのが一般的な形であった。しかしながら、日置氏の場合はかかる動向に失敗したのか、承保元年（1074）筑前の講師永源に伊倉を売却している。その後同地は康和五年（1103）に至り、宇佐氏の手へ渡り、保安四年（1123）には宇佐大宮司公基の領するところとなった。そしてこのころ半不輪の特権を得て、宇佐宮領伊倉別符として確立することになったのである。

同様に平安後期に成立したと考えられる庄園には、現在の荒尾市・長洲町方面の野原庄、玉名市・岱明町方面の大野別符、玉名市高瀬を中心とする高瀬庄、同じく玉名市石貫方面の玉名庄、そして南関町には臼間野庄があった。このうち、野原庄は宇佐彌勒寺喜多院を領家とし、大野別符は箱崎八幡宮を領家としていたが、両庄とも京都石清水八幡宮を本家と仰いでいた。また、玉名庄は太宰府天満宮安楽寺領であったことが知られている。

この様に庄園をいわゆる権門に寄進した開発領主としては肥後の場合は菊池氏がその代表であるが、玉名郡の場合にはその存在が詳細に知れるものはない。ただ大野別符の大野氏（本姓紀氏）にその一部が認められる。「大野氏由緒書」によれば同氏は建久四年（1193）に関東から下向したことになる。しかしながら、肥後の在庁官人層に紀氏の名が知れ、仁治二年（1241）六月の「肥後国留守所下文」にも玉名郡司の紀氏が見えることから、由緒書そのものが弘治三年（1557）のものであるうえ、他に建久下向説を裏ける確たる証拠がない以上、在庁官人層出身の開発領主と考えてよいであろう。

さて鎌倉幕府の成立により、このような開発領主層のうちには幕府御家人となり、本補地頭に任ぜられるものもいたのであるが、前掲大野氏が、すぐさま地頭に任ぜられたかどうかについては不明である。承久の乱後において知れる当郡の武士団は前掲大野氏の他に、相良氏と大町氏・詫麻氏・小代氏の四氏がある。相良氏は、建久四年（1193）頼景が球磨郡多良木の地に下向したというが、詳細は不明である。そして、その三男頼平が山北五郎左衛門を称し、玉名郡山北郷（現玉東町西安寺）を領したと伝えられており、寛元元年（1244）の関東下知状では、相良頼元・頼重の同地支配が裏づけられ、この地に相良系武士団の存在を知ることができる。一方、大町氏については、『吾妻鏡』仁治二年（1241）、五月廿三日の項に大町庄（現玉名市か）の地頭職をめぐる相論に、肥後国御家人大町次郎通信の名が見える。また、詫麻氏は豊後守護大友氏の庶流であり、肥後国内では託麻郡神蔵庄をはじめとし、飽田郡鹿子木庄の東部などの地頭職を持っていたが当郡大野庄内尾崎村（現岱明町）にも地頭として、関与していた。小代氏は元来武蔵国入西郡小代郷を本拠とする関東武士であったが、宝治元年（1247）小代重俊が子息重康の忠によって、野原庄地頭職を得て、肥後国進出の本格的手懸りをつかんだ。そして文永八年（1271）九月、幕府が蒙古の襲来に備えるために、関東御家人の西国下向を命じたのをうけて、九州に下向、博多湾を警備して文永の役に参加、その後文永十二年（1275）に野原庄現地に入ったと考えられている。そして、惣領制的体制をとりつつ野原庄の支配にあたり、領家との下地中分にも成功し、この地域の最有力武士団として成長していくことになる。

ところで、文永・弘安の両役に際して、肥後武士団は菊池武房を中心に参戦しているが、有名な『蒙古襲来絵詞』の中に「系たの又太郎ひてい系」、「野中太郎なかす系」等の名が見える。工藤敬一氏の説によれば、この両者はいずれも菊池氏の同族であり、系た＝江田氏は現菊水町江田を拠点とする武士であった。この他、この合戦に参加した当郡の武士としては大野国隆がいる。また、菊池氏の一族赤星有隆が弘安の役の勲功により、臼間野庄に所領を賜わり大津山関に築城したとの書伝がある。

さて、建武新政権樹立およびそれに続く南北朝内乱期に当郡武士団はどのような動きを示したであろうか。小代氏は北朝方に与同し、肥後国内のみならず筑後、更には近江西坂本にまで出兵している。そして、応安三年（1370）には岩原村（現鹿本郡鹿央町）・同六年（1373）には伊倉庄や大野庄にまで進出している。これに対し南朝方に与したのは、菊池氏の一族高瀬氏を中心とする勢力である。高瀬氏は菊池武敏の弟武尚を祖とし、彼が大野庄中村を領し、高瀬保多木城に居したことにより、その子武国が高瀬十郎を称したという。この武国は肥後守護代となり、江田次郎五郎へ野原東郷内益永名を宛行っている。恐らく江田氏は南朝方に属していたのであろう。同様に菊池氏に与同したと思われる人に大野伊勢守がいる。つまり、北朝方の小代重政に今川了俊より宛行われた地に大野伊勢守跡があり、推則するに大野氏は高瀬氏との連携

によって小代氏の大野庄進出に対抗したのであろう。

上記で見たような、小代氏と菊池・大野氏の勢力の接点となったのが伊倉・大野の両庄であった。何故にこの両庄が接点となったのであろうか。それはこの両庄が当時の菊池川の河口に位置し、天然の良港としての条件を備えていたからであった。16世紀に成立した明の『図書編』には、肥後の貿易港として高瀬の名が見え、また朝鮮の『海東諸国記』（1471年成立）にも、菊池一族が朝鮮に使者を派遣したとの記事があり、伊倉・高瀬の港としての重要性を示唆しており、この南北朝鮮においても恐らくは重要な交通拠点となっていたと思われる。

さて、この様な南北朝の内乱も弘和元年（1381）菊池本城の落城、明德三年（1392）の南北朝合一により終わりをつけ、菊池氏の反抗も止むことになる。しかし、室町幕府も菊池氏の実力を無視するわけにはいかず、改めて肥後の守護職に任じており、大野庄支配は高瀬氏によって継続されたと思われる。また、小代氏はこの南北朝内乱により獲得した新しい所領も加えて、野原庄・岩原村・伊倉庄南方小原村等を、応永十七年（1410）に幕府より安堵をうけている。

戦国期にはいと、当郡にも今まで歴史上表面に出てこなかった多くの国人層・土豪層がその姿を表わしてくる。このころになると、肥後守護家の菊池氏も衰退に向い、永正三年（1506）阿蘇惟長とその後楯となった大友氏は、菊池家臣団に働きかけを行い、当主政隆を廃絶し、代わりに阿蘇惟長＝菊池武経を擁立させることに成功した。この時菊池氏の重臣として、当郡関係では小森田氏の名が見えるほか、永正元年（1504）の菊池氏家臣交名には、内田氏、小森田氏、内空閑氏、高瀬氏、宇都宮氏、伊倉氏、石貫氏、荒尾氏、大野氏、亀甲氏等が知れる。恐らくは守護菊池氏が各地に蟠踞する在地土豪層の把握に努めた結果であろう。この他、この交名には登場しないが小代、牛島、田尻、南関方面の大津山、赤星、白間野、和仁、迎春、東郷衆らが郡内の有力国人・土豪層であった。しかしながら、その菊池氏も前述の様に、阿蘇惟長による守護職の篡奪をうけ、再起を期した政隆も永正六年（1509）に白間野桜馬場において、大友氏の臣朽網親満に敗れた。この事件に見られるように、豊後大友氏は肥後を支配すべく勢力を伸張したが、それは肥前の龍造寺・薩摩の島津氏も同様で、この三戦国大名の勢力争いにまきこまれる形で、当郡の国人・土豪の動向も決定されていった。

さて、阿蘇惟長＝菊池武経も菊池家臣団を統制できず、菊池氏の庶流詫磨武包が守護職に擁立された。しかし、肥後の征覇を目指す大友氏は武包を追い、永正十五年（1518）一族大友重治を菊池義武として、守護家を継がせた。その後武包は小代筒嶽城に拠り反撃を企てたが、大友・阿蘇連合軍に敗れ肥前島原に去ったという。一方義武も大友宗家に反したため長続きせず天文三年（1534）に隈府を去って、ここに菊池を称する肥後守護職も断絶したのである。そして大友氏の勢力が当郡に本格的に及んでくることになった。その大友系肥後勢力の先鋒となったのが小代氏である。天文二年（1533）小代重忠は、玉名三百五拾町、石貫貳拾五町、白間野内上長田貳拾五町等を大友義鑑より安堵されている。天文十九年（1550）隈本城に拠した有力国人鹿子木寂心が、八代にいた菊池武経を擁し、反大友の兵を挙げた。当郡でもそれに呼応して、大津山美濃守・迎春薩摩守・和仁弾正忠・東郷衆・大野上総介らが行動を起こし、大友与党小代氏の中心拠点筒嶽城を攻撃したことが判明する。恐らくは小代氏の勢力伸張に圧迫されつつあったこれらの各氏が、反撃に出たものと思われる。この反乱は結局大友軍の介入により鎮圧され、義武は、現天水町小天や河内方面にいた山の上三名字（田尻・牛島・内田氏）を頼るが、結局は島原へと逃亡している。翌天文二十年（1551）小代氏は前年の軍忠により、新たに長洲・石貫・社家・中尾等の地域を安堵されたが、これらはいずれも反大友の兵を挙げた各氏の所領を、小代氏が獲得したものであった。同年八月大友宗麟は一族志賀親安を肥後守護代に任じ、小原鑑元を目代として、大津山城に居させ肥後支配を強化している。

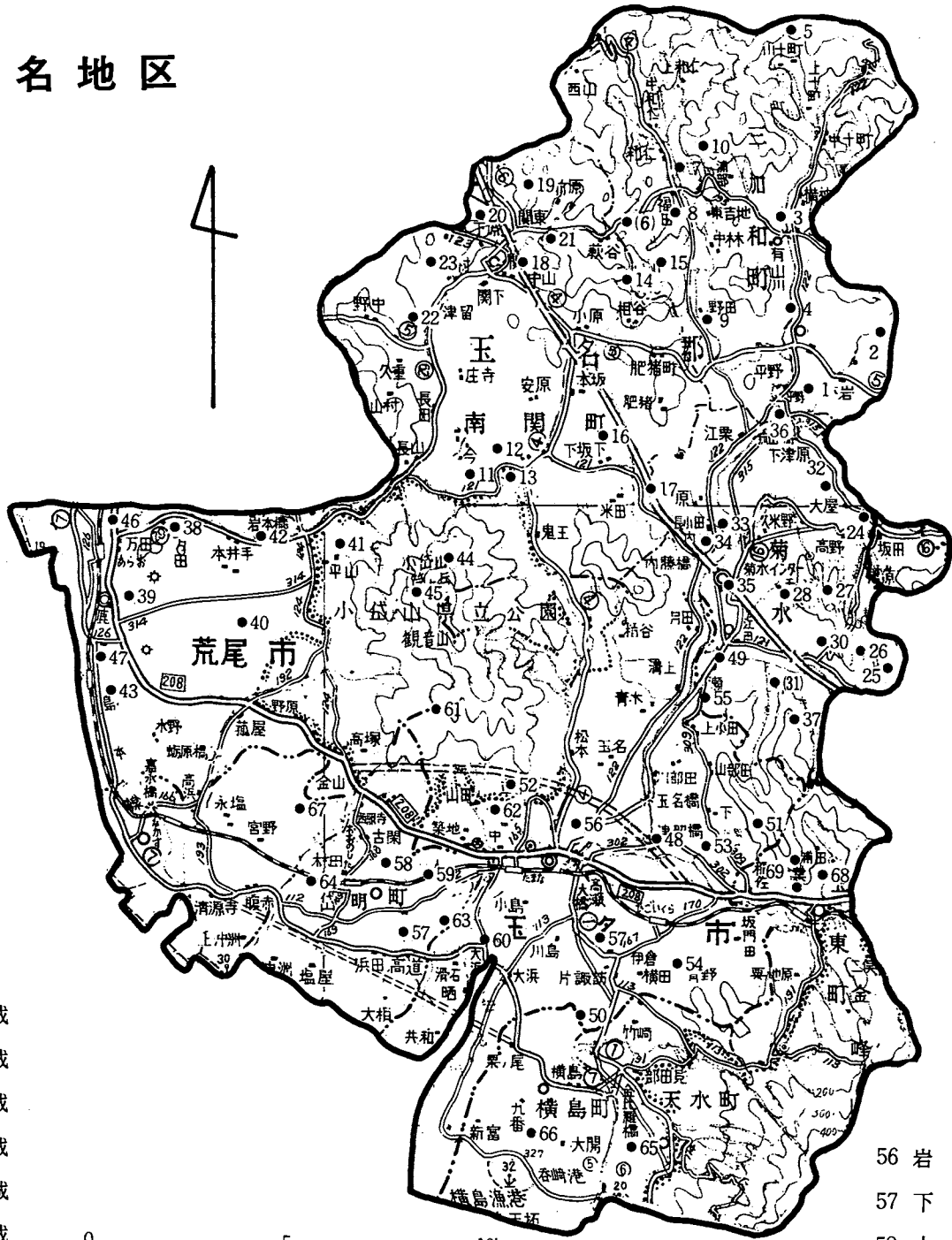
以上の様な大友氏の肥後支配を覆えそうとする勢力として、肥前の龍造寺氏がいた。同氏は永禄年中（1558～1570）ごろより、肥後進出の機会を窺っていたが、天正六年（1578）大友氏が島津氏に敗れると、その行動は本格化することになったと思われる。天正九年（1581）小代親伝は龍造寺久家より、安楽寺十三町、大野別符二百町等を宛行われており、隈部氏・城氏・赤星氏ら肥後中北部の有力国衆も、起請文を提出しているところから見ると、当郡の国衆諸衆も恐らくは龍造寺の軍門に降ったとしてよいであろう。龍造寺氏はその一族家信を藪嶽城に城代として置いたと伝えられている。なお同年小代氏と大野氏が戦闘を交え、大野氏は滅んだと言われており、前述の龍造寺による小代氏への大野別符宛行と考えあわせると、興味深いものの、確たる証拠には乏しい。一方、肥後南部には島津氏勢力が侵入しつつあったが、天正十年（1582）には八代まで進出、県北の龍造寺と共に肥後を二分する形勢にあった。この両者は天正十二年（1584）、肥前において激突したが、結局は島津氏が勝利したので、肥後の国衆は、小代氏、白間野氏をはじめ、たちまちのうちに島津氏に従うことになった。

天正十五年（1587）全国統治を目指す豊臣秀吉は、島津征伐の軍を起こし、四月十一日南関に入り堀尾吉晴を置いて、

十三日高瀬、十六日隈本に到っている。この秀吉の侵功に際し、当郡国衆は何らの抵抗をすることなく、その旗下に属した。そして五月三日には島津義久が降伏し、六月に到り秀吉は九州支配のための大名配置を行なった。それによると肥後には佐々成政を入国させ、小代氏をはじめとする国衆には旧領安堵の朱印を与えた。そして成政に、国衆に与えた朱印地打渡しを行なうこと及び国衆の領地糺明をせぬこと、検地は天正十七年（1589）以後に行なうこと等を命じた。この際国衆に与えられた朱印地とは、それ以前の国衆の領知高そのものではなく、本知のみであり、例えば小代氏は二百町、大津山氏は三百二町から五十町、迎春氏は七カ村から百二町歩へといずれも大幅に減少されたものであった。こうして、彼ら国衆は、大名領主化への道を絶たれたが、その勢力は決して小さくはなく、とくに佐々成政の領国支配のうえでは、いずれは駆逐せねばならない勢力であった。

七月隈本に入城した成政は、前掲秀吉の命を無視した知行宛行を行なっている。つまり小代氏の場合朱印高二百町であったものを、わずか五十町に減じ、百町を成政の新知として給与したものであった。ここに彼ら国衆は大名領主化の道はおろか、秀吉直臣としての立場をも喪失し、成政の家臣としての地位しか与えられない状況においこまれた。その上成政は検地を強行しようとし、直接にはこれが引き金となって肥後の国衆一揆が起った。この一揆には大津山・和仁・迎春らが参加し、一時は隈本城を攻撃するなどの形勢をみせたが、結局は敗れた。一揆による処分により和仁・迎春等は刎首になり、その一族、親類等も処置された。ここに肥後の中世は終わりを告げ、一揆に参加しなかった小代氏も加藤氏支配のもと芦北郡津奈木城代となり、国衆・土豪の生き残りもほとんどが近世家臣団の末席となったり、後の惣庄屋等になっていくのである。
(村上豊喜)

玉名地区



- | | | | | | |
|--------------|------------|----------|-----------|---------|------------|
| 1 年神の城 | | | | | |
| 2 前 城 | | | | | |
| 3 岡原城 | | | | | |
| 4 神尾城 | | | | | |
| 5 坂本城 | | | | | |
| 6 翠簾置城 | | | | | |
| 7 田中城 | | | | | |
| 8 今古閑城 | | | | | |
| 9 石坂城 | | | | | |
| 10 浦部の「城の平」 | | | | | |
| 11 小畑城 | | | | | |
| 12 今村の豊後浦城 | | | | | |
| 13 田原の豊後浦城 | | | | | |
| 14 小原城 | | | | | |
| 15 鯉鮓城 | | | | | |
| 16 坂下城(カブラヤ) | | | | | |
| 17 ッ(トビノヲ) | | | | | |
| 18 色木山城 | 27 乙 城 | | | | |
| 19 轟嶽城 | 28 江田城 | | | | |
| 20 南関新城 | 29 立石の城 | | | | |
| 21 障子嶽城 | 30 牧野城 | | | | |
| 22 中塚城 | 31 鶯原城 | | | | |
| 23 城の尾城 | 32 大屋の城の尾 | | | | |
| 24 焼米城 | 33 内田の今城 | | | | |
| 25 萩原城 | 34 内田宮山の城 | | | | |
| 26 用木城 | 35 和仁石山の城山 | | | | |
| | | 36 江栗の城尾 | 46 田次郎丸館 | 60 高道城 | |
| | | 37 日平城 | 47 大園山館 | 61 日嶽城 | |
| | | 38 万田城 | 48 高瀬城 | 62 築地館 | |
| | | 39 六反城 | 49 溝上城 | 63 中土館 | |
| | | 40 尾形山城 | 50 城ヶ崎城 | 64 扇崎の館 | |
| | | 41 平山城 | 51 下村城 | 65 小天城 | |
| | | 42 井手城 | 52 高岡城 | 66 横島城 | |
| | | 43 蔵満城 | 53 寺田の城ヶ辻 | 67 赤崎城 | |
| | | 44 筒嶽城 | 54 伊倉の中城 | 68 小森田城 | |
| | | 45 梅尾城 | 55 玉名の平城 | 69 稲佐城 | |
| | | | | | 56 岩崎城 |
| | | | | | 57 下村城 |
| | | | | | 58 上村城 |
| | | | | | 59 築地次郎国秀館 |

玉名郡

としのかみ 年神の城 (玉名郡三加和町大字平野字年神)

城主不明。字・年の神の集落に「城ン原」という小名を残す円形の丘陵地（中央部の標高30m・年神集落よりの比高6～7m内外）があり、地元にはここに城が存在したという言い伝えがある。

「城ン原」は東西・南北とも約200mの規模で現在は畑地となっている。

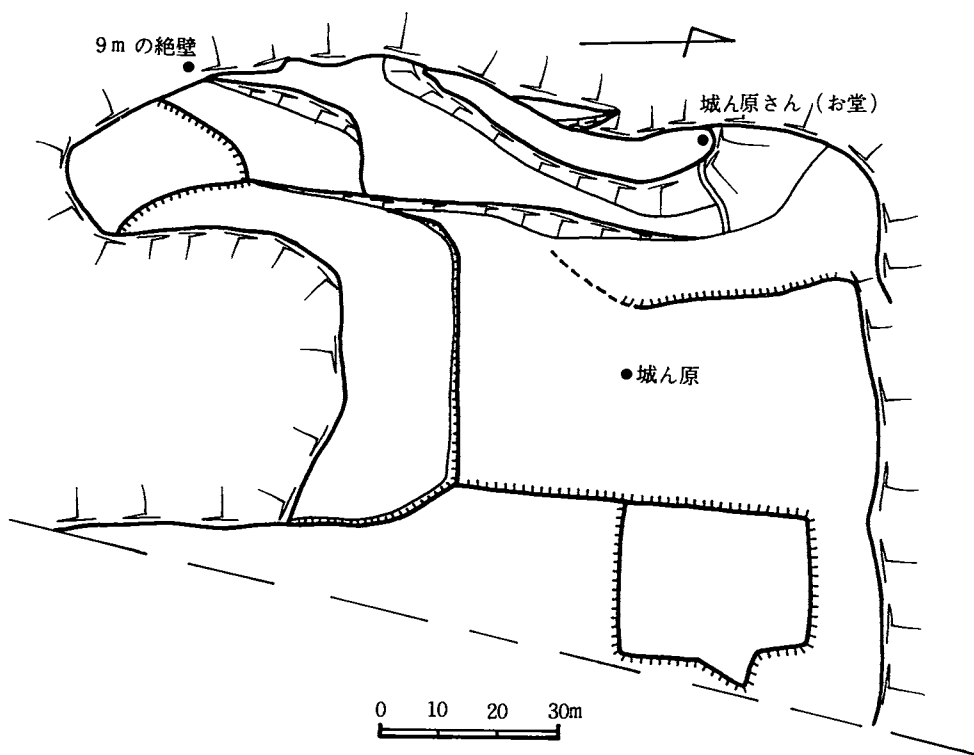
城跡として目立った遺構は観察されないが、「城ン原さん」というお堂が建立されている。

小山の背は南北50m、東西7mの平坦地が観察され、ここが城跡の中心地と考える向きもある。

しかし、昭和39年7月測図の三加和町の地形図によると、「城ン原」の中央部には直径60m程の円形の高台が作図されており、現在これが観察されない所から、近年かなりの現状変更があったものと思われる。^(注1)

丘陵東側下には、南関・山鹿を結ぶ古道が通っている。

(注1) 南北幅は不明であるが、今も東西22～25mの微高地が若干、観察される。



年神の城 略測図

前城 (玉名郡三加和町大字岩字立山)

「立山」の字名を残す山稜末端部(標高80m・西側麓の水田面よりの比高約70m)雑木地に「前城」という所があり、地元では、ここを城跡と称する。

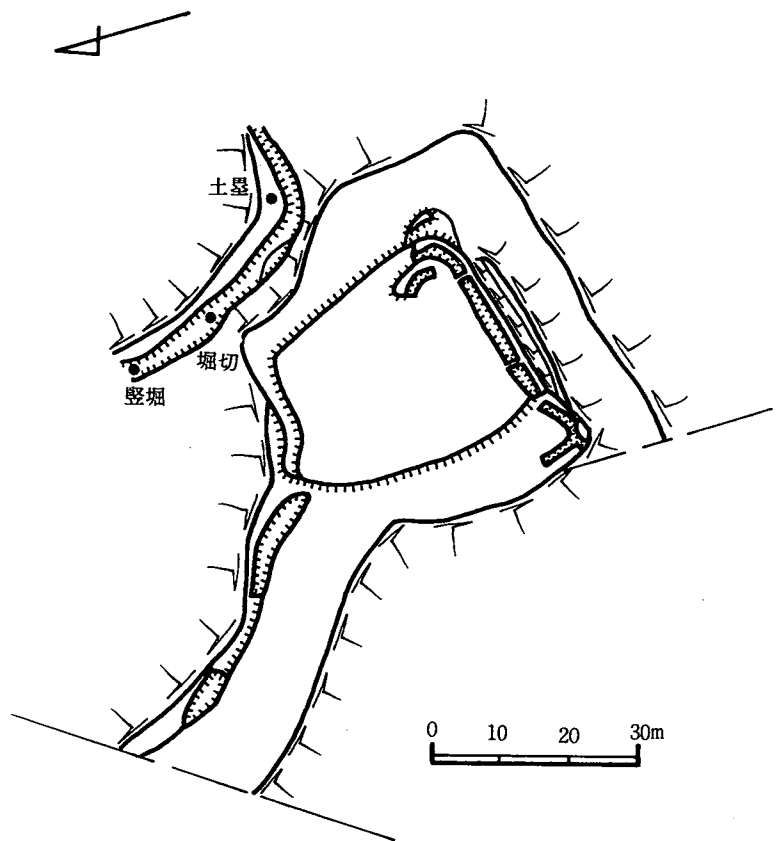
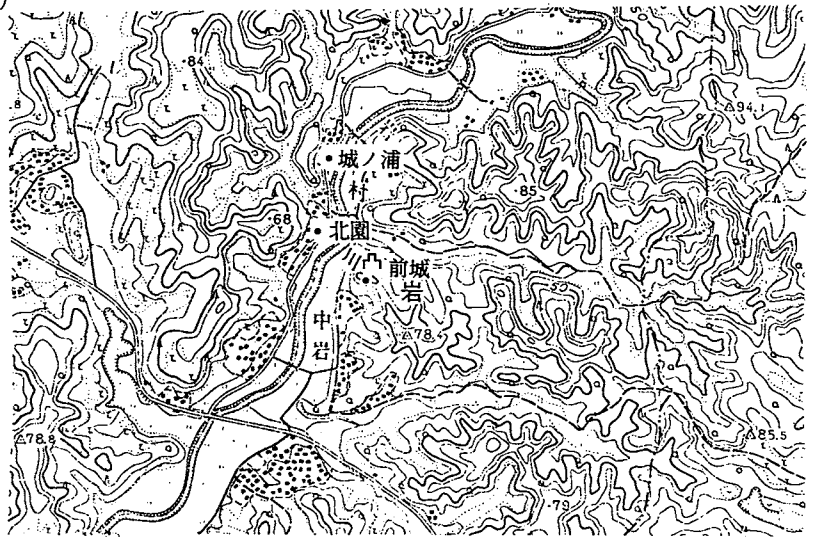
城主不明で文献的な記載もないが、ただ『国郡志』にその名が見えるものの所在不明の下岩城の可能性^(注1)がある。

城跡における顕著な遺構は山頂の北側斜面に設けられた堀切(底幅3m~4.5m)で、東西両端いずれも豎堀につながっている。堀切の存在理由は、北側斜面が比較的ゆるやかなところからきていると思われる。

山頂部の平坦地には溝や土塁が存在しているが、この前城には「西南の役」の際、砲台がおかれた場所と伝わっている所から、その時の遺構ではないかとも思える。^(注2)

豎堀に続く前城の北西側谷間には20人は収容できるという「隠れ穴」がある^(注3)ということで、踏査したが、穴の天井部分が落盤をおこし崩壊していた。

- (注1) 「前城」が位置するのは上岩地区で大字岩の上と下の違いにすぎない。
- (注2) 溝や土塁の規模が小さい割にはその残りが良好するきらいがある。
- (注3) 穴は凝灰岩に穴をあけたドーム状のものであったらしい。



前城 略測図

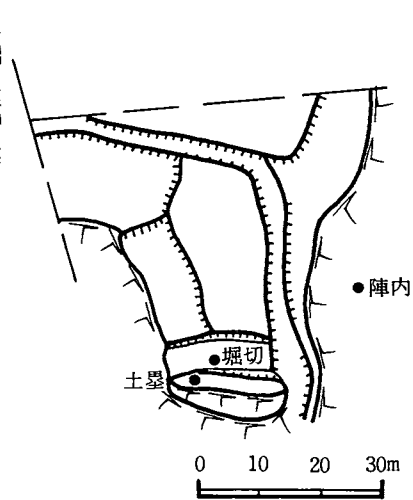
岡原城 (板楠城) (玉名郡三加和町大字上板楠字岡の原)

天文年間(1532年~55年)に板楠景貞と、その嫡子、景次が在城したという。

城跡は上板楠の地内であって、「岡の原(字名)」と称される丘陵地帯(標高約80m・南側麓の水田地帯よりの比高約40m)に位置する。岡の原の背面は広い平坦地(畑地、東西幅300m前後、南西幅150m)となっており、北東側に野首が存在する。

城跡に関連あろうと思われる遺構は、南西側の一部分に土盛りを伴う空堀らしき溝(長さ18m、幅6~7m)が観察されるのみであるが、城跡麓には「陣内(字名)」「門出(小名)」の地名を有する所があり、山鹿へ通じる古道も存在する。「門出からの登城道より、かつて馬の骨が出土した」と古老はいう。

- (注1) 城跡東側麓にあって、城跡裾部と十町川の間を称する。
- (注2) 城跡南側麓の水田地帯を称し、六地藏も残っている。

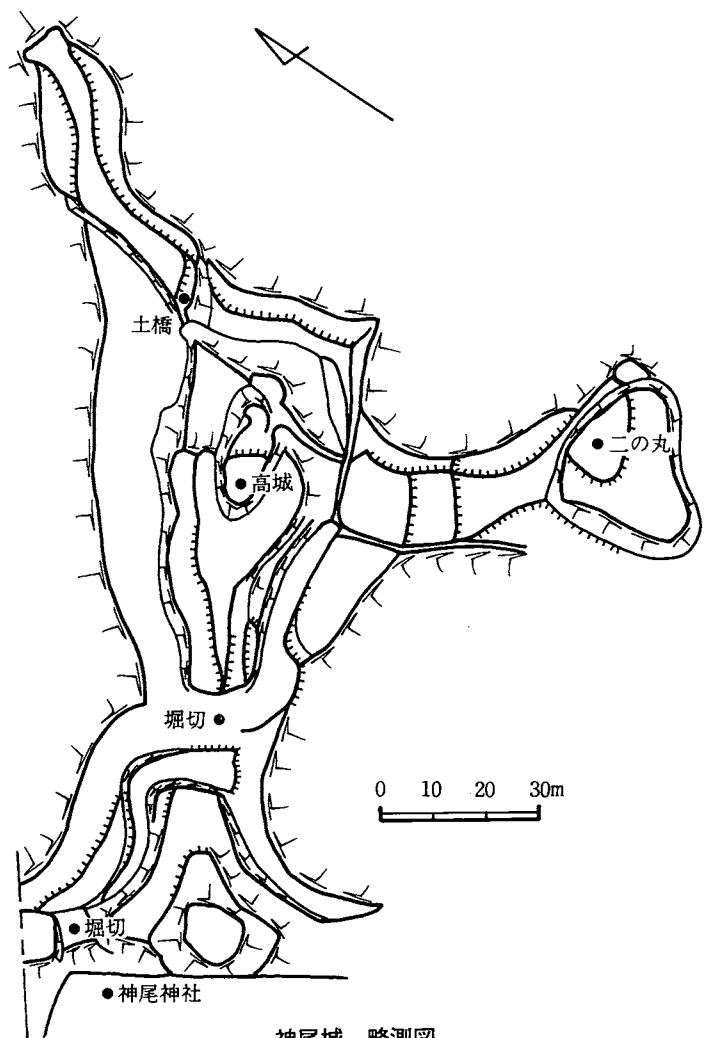


岡原城 略測図

神尾城 (玉名郡三加和町大字大田黒字東川)

城主不明であるが、天正五年（1577年）、肥前の龍造寺氏に攻められた大津山資冬（大津山城主）がこの城を拠点にして戦ったという伝えがある。天正十五年（1587年）には、国衆一揆で佐々成政と意を異にした資冬の子、家稜（家直）がこの城に逃げ込んだらしい。この事から大津山氏系の城であったろうと思われる。

十町川^{じゅうちょうがわ}と和仁川^{わにがわ}の合流点^{あはせ}にあって「城平^{じょうのひら}」の小名を残す逆三角形^{さかさまさんかく}形状^{かたち}の独立山稜^{とちりつさんりやう}（標高50m・東側道路面^{ひがしがわ}よりの比高^{ひがう}約30m）が城跡^{じやうせき}と伝わる。山頂部分^{さんていぶぶん}はY字型^{えいじぎ}の尾根^{おしね}となっており、この地形^{ちけい}を利用して三郭^{さんかく}から成る城^{じやう}が構成^{こうせい}されている。すなわち「高城^{たかじやう}」と称される長円形^{ながえんがた}の高台^{たかだい}（南西^{なんせい}に主軸^{しゅしやく}を呈し、長径^{ながけい}19m・短径^{たんけい}7m・高さ^{たかさ}5～6m）を中心^{ちゆうしん}にして、北東側^{きたうしやう}に「二の丸^{ふたのまる}」と称されるハート型^{はーとがた}の高台^{たかだい}（長径^{ながけい}30m・短径^{たんけい}22m・高さ^{たかさ}3～4m）が築かれており南西側^{なんせい}も上面^{うへめん}に楕円形^{だえんがた}の平坦地^{へいたんち}（長径^{ながけい}13m・短径^{たんけい}10m）を有する小山^{こやま}が存在^{そんざい}する。とくに南西側^{なんせい}の小山^{こやま}の裾部^{すそぶ}については北西側^{きたせい}と北東側^{きたうしやう}の2箇所^{ふたかた}に堀切^{ほりき}が観察^{くわんさつ}される。北西側^{きたせい}の底幅^{そこはく}は6mを計り、北東側^{きたうしやう}は二段構え^{にだんかまえ}となって底幅^{そこはく}16mを示す。



神尾城 略測図

山稜の南側麓には「小屋敷」という字名を残す集落が開けており、山鹿と南関を結ぶ道もある。

なお、集落では道より北側部分をとくに「高畑」と称しており、ここには多くの五輪塔をはじめ、2基の井戸跡が残る。

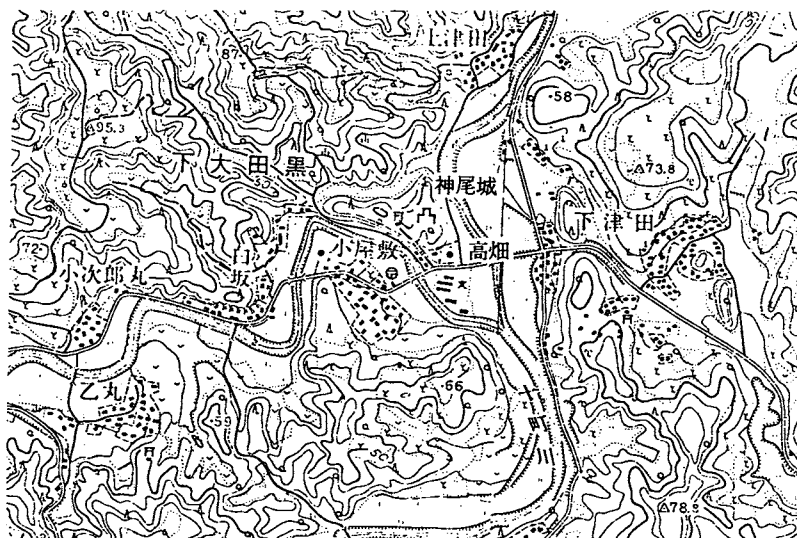
(注3)

なお、高城部分は「高畑」住民の共有地になっている。

(注1) 南西側から北東側へ10mの所に高さ数十cmの段差がある。

(注2) 上面には三角形の高台(高さ1m未満・幅10m・底辺17m)が重複している。

(注3) 1基は埋められているが、残り1基については現存し、「から井戸」と称されている。

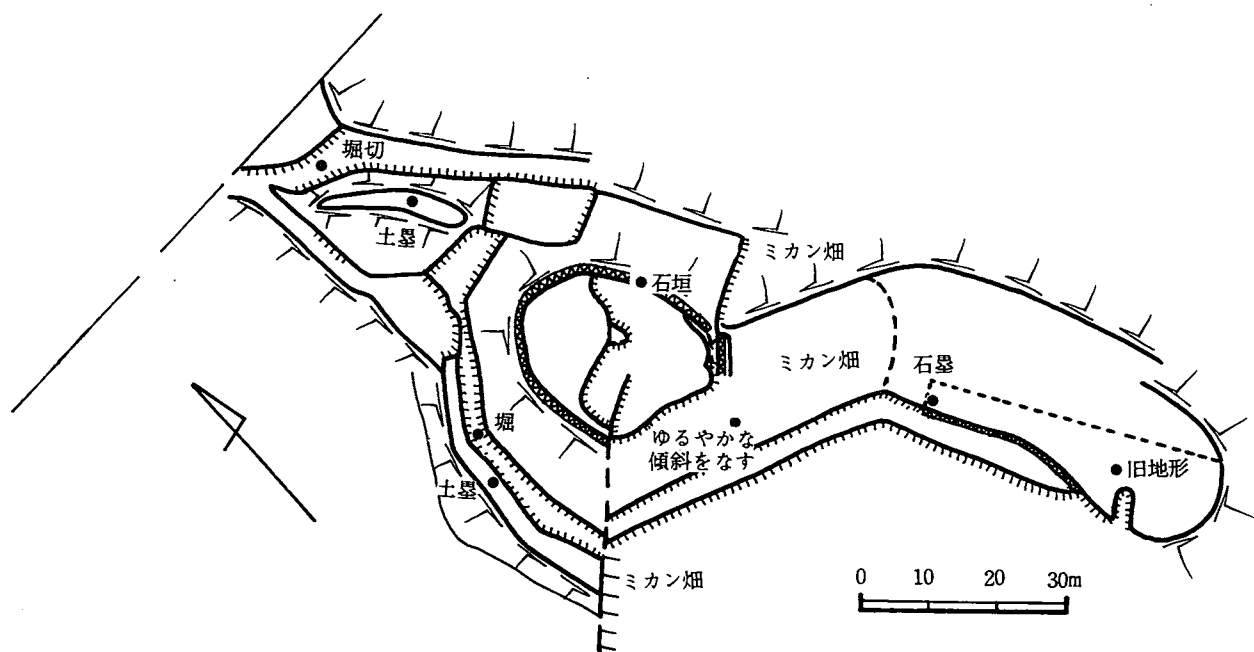


坂本城(迎春城) (玉名郡三加和町大字山十町字坂本)

天正七年(1579年)には、迎春親貞とその子、親行が在城したという。迎春氏は田中城主の和仁氏と婚姻関係にある(事蹟通考)ともいわれており、天正15年(1587年)の肥後国衆一揆で和仁親實と行動をともにしたが、佐々氏に攻め滅された。

城跡は「坂本(字名)」の集落のほぼ真北にあって城山と称される山稜末端部(標高280m・集落よりの比高約190m)に位置する。『古城考』によれば城の規模は「東西20間、南北55間、西の方90間、南180間、筑後国境迄30間、東西尾根続曲輪190間」という。

城山は一部分がミカン畑によって破壊されてはいるものの、山頂部分は楕円形状の平坦地(南東方向に主軸を呈し、長径30m・短径22m)となっており、平坦地周囲(注1)の山稜斜面には高さ1.0~2.2mの石塁が観察される。さらに北側の鞍部に

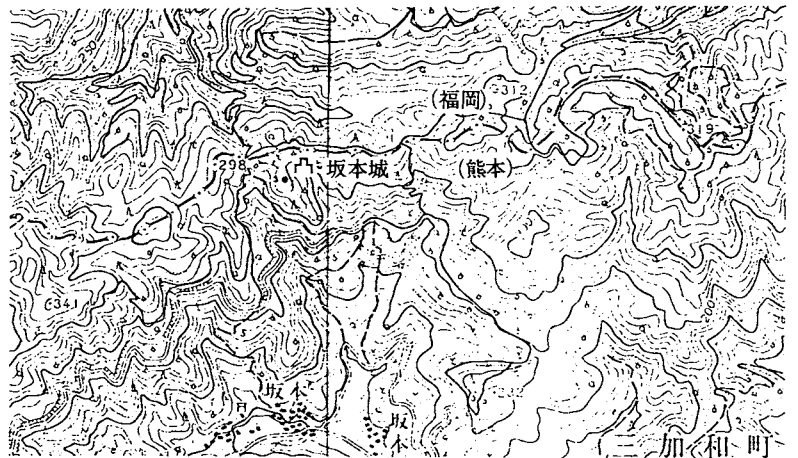


坂本城 略測図

は堀切（幅5～7m・長さ13m）がはいっているが、この堀切は西側に延長されて土塁（幅2～4.5m）を伴う空堀となる。しかしその南端部分はミカン畑によって破壊されており約40mの長さにとどまっている。なお 山頂の南東側は、ゆるやかな傾斜をもつ長さ75mの尾根となっているがその大部分は削平されて平坦地となり、崖面に長さ25m・高さ1mの石塁が存在するが、ここもミカン畑が進出している。

城跡は、県境（熊本・福岡）に位置する特異な城であり、石塁も伴っているだけにミカン畑による破壊がおしまれる。

（注1） 中央部分に高さ数十cmの段差がある。



翠簾置古城（玉名郡三加和町）

『古城考』には「吉地村の内翠置村の上の平にあり、城主不分明」と記されている。

しかし、簾置の地内にある「上の平(字名)」には城跡と称される所はない。古老が「あえて該当地を探すならば、ここしかない」という山稜（標高100m・西側麓の県道よりの比高約18m）も踏査してみたが、山頂部分に楕円形の平坦地（長径10m・短径8m）が観察されるものの、その形状からして人工的なものとは認め難く、全体的に城跡という感じはしない。「その昔、上の平付近で、田中城の武士が戦死したという伝承がある所から、この地に城の話が生まれたのではないかも考えられる」と語る古老もいる。

また、簾直には景行天皇の行幸の伝承がある。地名の由来は、その時天皇が安倍家に宿泊されて、翌朝出発の折、同家に簾を置いていかれた所からきているという。

（注1） 同地に、戦死者を葬った五人塚の石碑が建立されている。
（建立は大正年間）



田中城（玉名郡三加和町大字和仁字古城）

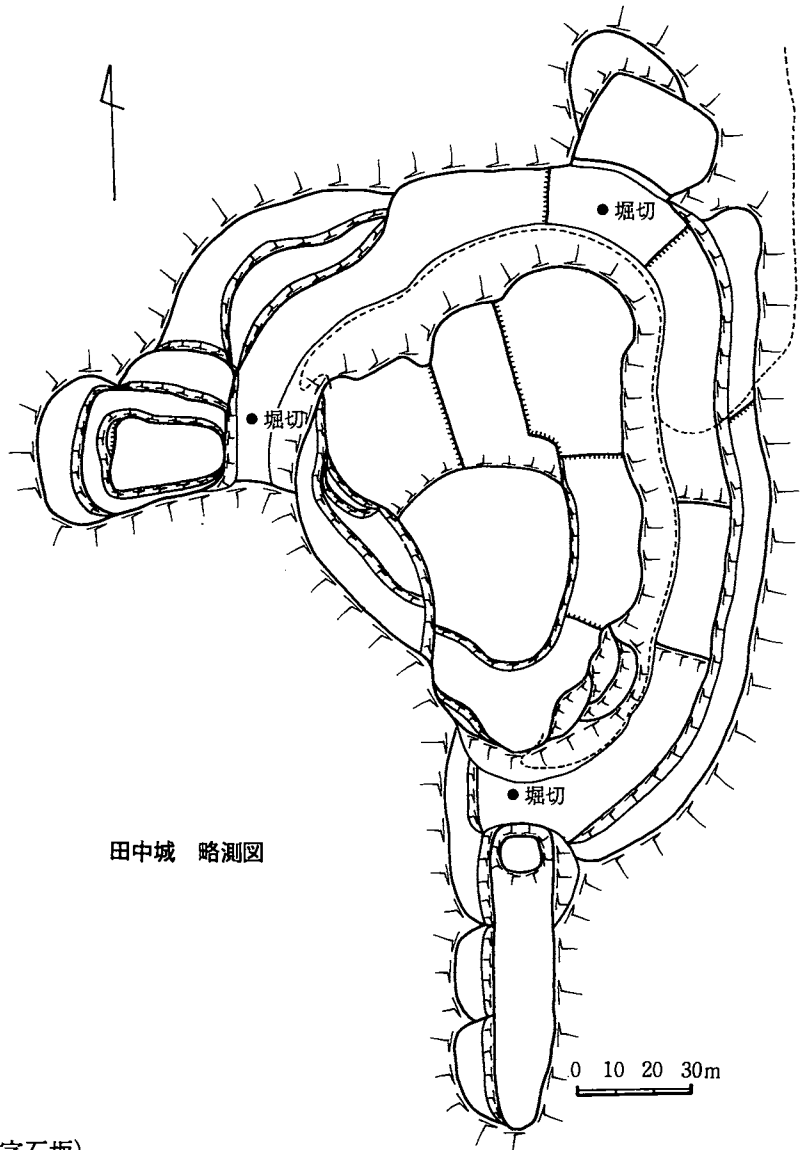
『古城考』によれば、天正七・八年（1579・1580年）の頃の城主は和仁近續という。同書にはまた天正十五年(1587年)の国衆一揆で、当城に和仁親賢、同親宗、辺春親行等が籠城して佐々成政と戦いを交えたが、結局攻め落された事を伝える。

城跡は和仁地区にあり、「古城」の字名を残す丘陵（標高100m・南側麓の水田面よりの比高60m）に位置する。丘陵の背面は広い平坦地となっているが、中心部寄りに楕円形を呈する一区画（長径53m・短径40m）があり、城跡の中心をなすと思われる。さらにこの地より約1～1.5m下つた所には両側を除く三方を円心円状の曲輪が取り巻いているが、曲輪の幅は10mから50mに及び不整形で一定しない。高さも一様でなく、数十cmの段差をもつて大きく5区画に分かれる。当該地には、中世期のものと思われる遺物が散在する。

一方、この曲輪より4～5m下った所にも、同種の曲輪が重複するが、この曲輪は、極めて整形されており、幅もほぼ15mと一定したものになっている。ところで、この曲輪は、北側・南側・西側の3箇所において明確に堀切の形状を呈する事から、城跡をめぐる空堀の埋没が考えられる。この他、北側と西側部分の堀切の対岸には、いわゆる出丸的な高台も付随しており、この事から、城跡はかなり規模の大きなものである事がわかる。なお、南側部分の堀切は、丘陵が南側へゆるやかに下る事からこれを断切る意味でも必要であったろうと思われる。

丘陵の北側斜面部には馬頭観音が祀られている。なお城跡はその形状から「舞鶴城」という別称がある。

(注1)地元では北側の堀切を「きたん迫(北が迫)」・西側の堀切を「きつどん(切り通し)」と称している。(参照・「石人」NO・164号・S48・4・20)



田中城 略測図

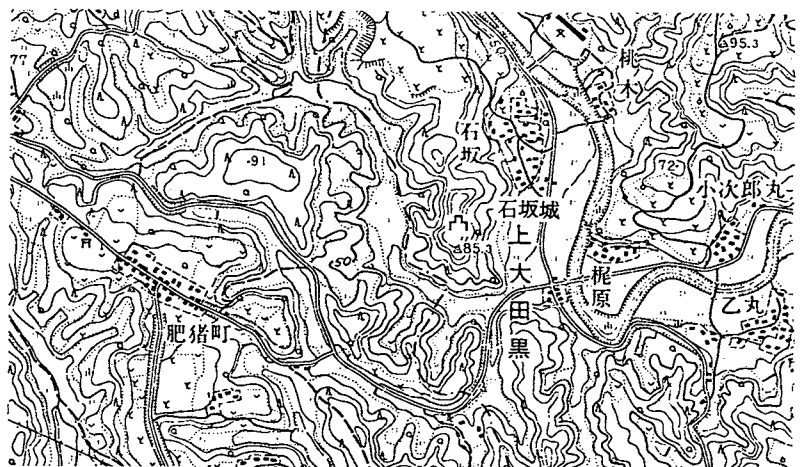
石坂城 (玉名郡三加和町大字大田黒字石坂)

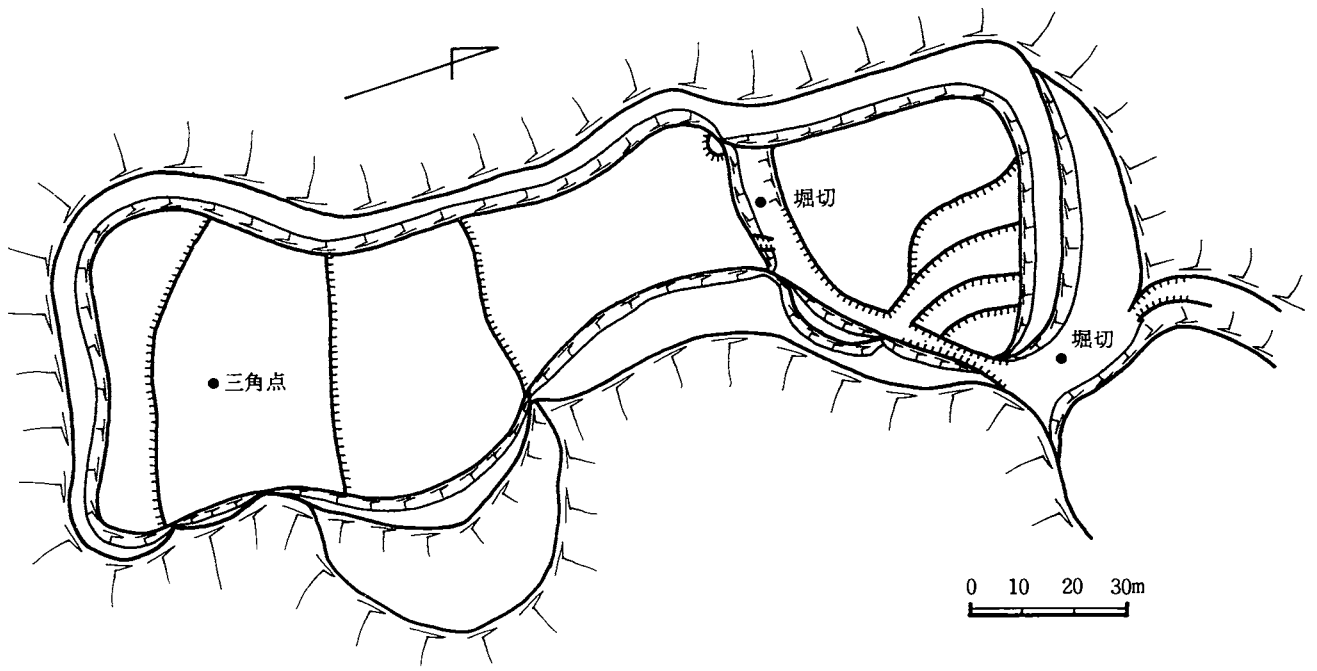
『玉名郡誌』に城跡に関する記述があるが、城主については不分明としている。

城跡は三加和町と南関町の境界線近くに横たわる山稜末端部(標高90m・東側麓の水田面よりの比高70m)に位置しており、「石坂」という字名を残す。

山頂部分は南北方向に主軸を呈する長さ200m程の尾根となっており、北側寄りに幅9m・長さ25mを計る堀切が観察される。また、尾根の北端部は北東方向へ向って比較的緩やかに下るので、これを断切る意味でこの箇所にも堀切(幅10m・30m)がはいる。すなわち、屋根の北側寄りに一つの完全な独立区画が存在する事になる。区画内は顕著な平坦地でなく、とくに北東側部分は数十cmの段差をもつ小規模な階段状地形(4段を数える)

が重なる。地元ではこの小区画よりもむしろ、広い平坦地(幅45～55m)をなす南側部分の一隅を城跡の中心部と見るむきもある。





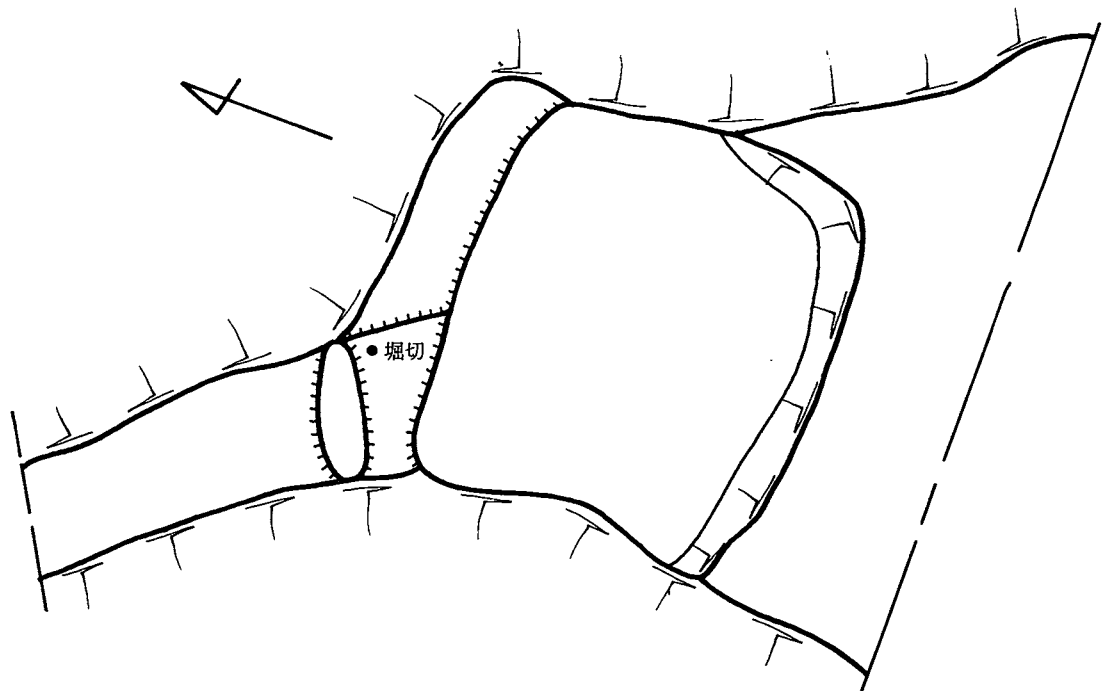
石坂城 略測図

^{いまこが}
今古閑城 (玉名郡三加和町大字西吉地字竹本)

『古城考』に「吉地村にあり、清正記に云、加藤清正肥後入国の時、伯耆左衛家人伊津野某と云者、當城に籠りしを、清正攻落して、伊津野を討つとあり、」という記事が見える。

城跡は、西吉地内にあつて「竹本」という字名を残す丘陵末端部(標高100m・東側麓の水田面よりの比高25m)に位置する。当該地は、城跡の立地としては特異で、ゆるかな丘陵斜面を大きく削平して、階段状地形とも思える平坦部分を形造っている。ほぼ垂直に削り落された丘陵の壁面の高さは5～6mにも及び、大規模工事の跡が窺われる。

丘陵地の東側麓には菊水町に至る道路が通り、また、道路を挟んで、和仁川が流れている。



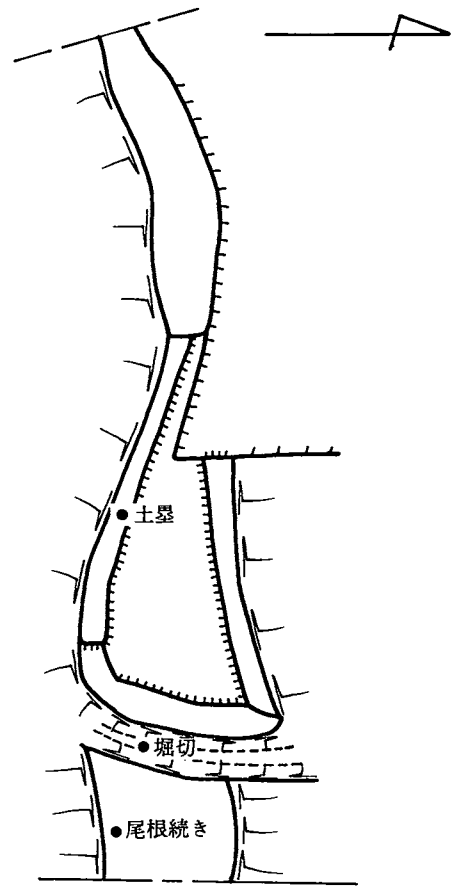
今古閑城 見取図

浦部の城の平

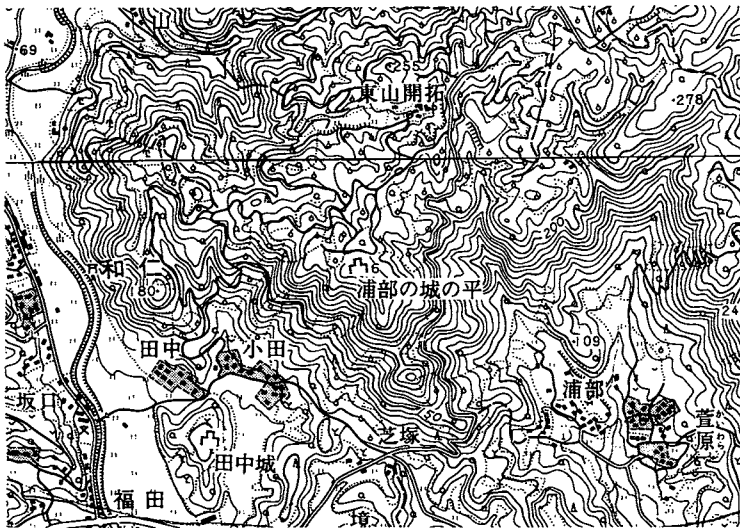
(玉名郡三加和町大字板楠字浦部)

浦部集落の南東側に位置する山(標高286m 集落よりの比高210m)に「城の平」という小名が残っており、地元の古老は「佐々成政が、田中城を攻める時に築いた陣跡」と伝える。

「城の平」の山頂部分は、西方向に主軸を呈する長い尾根となっており、大方は自然地形そのものであるが、西端部にあたる三角点付近に人工的な遺構を認める事が出来る。すなわち、当該地には土塁(幅1~2m、高さ0.5~0.8m)によって囲まれた三角形の窪地(底辺部15m、幅30m)と、堀切状の溝(長さ16m、深さ0.8m、幅2.5m)が存在する。三角形をなす土塁は頂点部分で一本化され三角点方向へ向って延びるようであるが、この土塁は、ミカン畑の開墾によって途中で消滅する。「窪地部分とその周辺からは、時々、鏝が出土する」といわれているが、実物は未見である。南西方向には伝承にいう田中城が遠望される。



0 5 10 15m
浦部の城の平 略測図



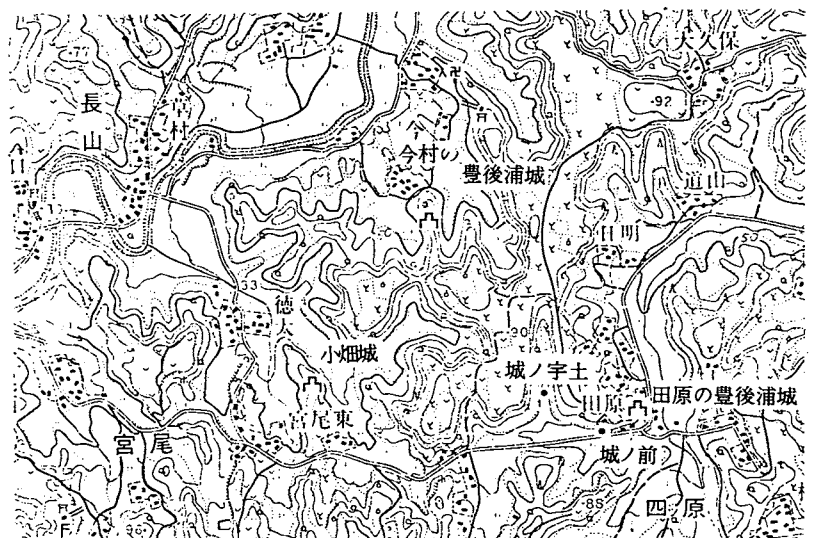
小畑城

(玉名郡南関町大字宮尾字尾ノ久保)

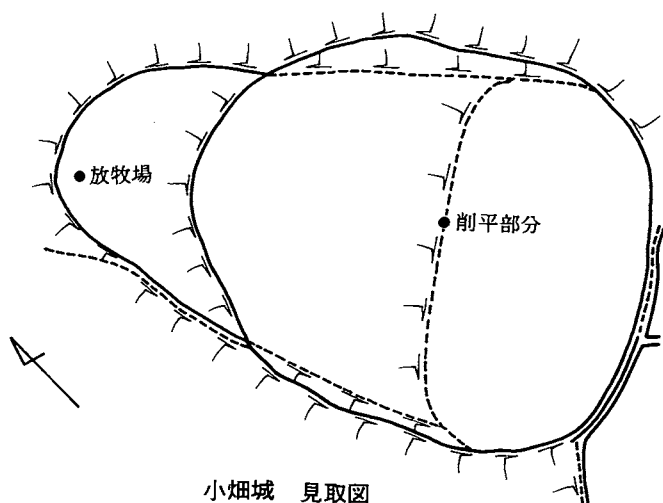
城主不明であるが、『玉名郡誌』によれば、小代氏の家臣が居城していたが天正七年(1579年)、龍造寺氏の兵に攻め落されたという。

県道大牟田植木線から北西側の徳太(字名)の集落に向う丘陵に末端部があり、その先端部近くの小山(北西方向に主軸を呈しており、標高70m・北側水田面よりの比高約40m)が城跡と伝わる。しかし、当該地は昭和49年にブルドーザーによって全面切り開かれ、住宅及び畜舎が建設されたので、ほとんど旧地形を止めない。

なお、土地所有者の畑中勇氏によれば、「小山の上面から北西側の傾斜地に向って、合計三段からなる平坦地があった」という。また、「旧本丸跡は現在の住宅の屋根まで位の高さがあった。それを全



部削り、二の丸も約1m程削って、それらの土を三の丸に落した。そのため三の丸は以前より3分の2程狭くなった。」と開墾状況を語る。なお、同郡誌に「現今概ね畑地となり、本丸跡は周囲の大なるに比し狭小なり然れ共其の周囲の二の丸に至りては面積総計四反余に達すべし西北方にある三の丸又略同面積を有せり東北は竹林となせり二の丸跡は民家なり」という記事が見える。



小畑城 見取図

いまむら おんごうら
今村の豊後浦城

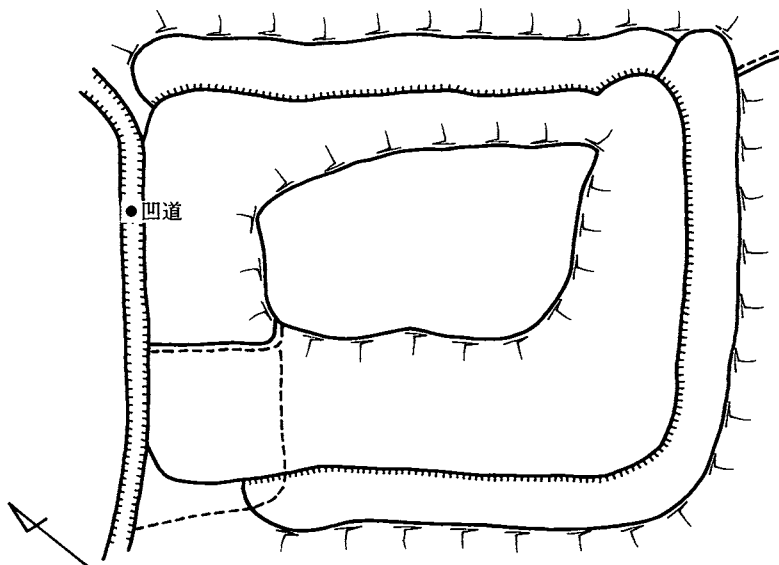
(玉名郡南関町大字米富字豊後浦)

『古城考』によれば、「今村にあり、城主姓名年代不明」と記されているが、地元では小代氏の家臣、今村豊後守の城と伝える。

城跡は丘陵地帯の末梢部(標高70m・南側麓の水田面よりの比高約40m)にあって、帯状形をした荒地(以前は畑地)に位置しており、北側麓に今の集落を望む。丘陵の背面は釣鐘型の平坦地(南北に主軸を呈し、長径39m・短径29m)となっており、南側の野首に二重の堀切(堀幅3m・5.7m)が観察される。さらに北側の丘陵斜面は階段状地形となっており、北東側の裾部には、井戸として利用されたと思われる湧水池も存在する。

城跡からは、かつて馬の轡(ほろ)の出土を見たという。(注1)

(注1) 轡を埋めたと称される墓が、城跡の麓に建っている。



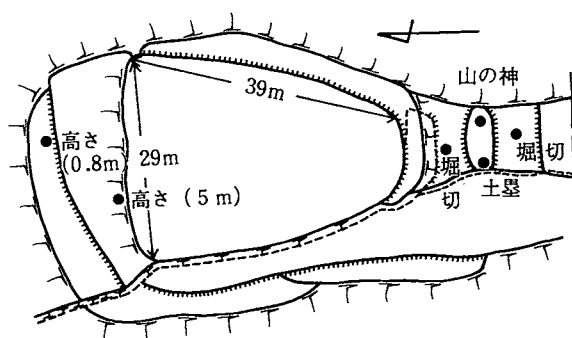
今村の豊後浦城 見取図

たばら おんごうら
田原の豊後浦城

(玉名郡南関町大字米富字田原)

『玉名郡誌』によれば、小代氏の家臣、今村豊後守の居城であったという。

田原の地内にあって、県道大牟田植木線にその南端部がつながる丘陵地末端部の桑畑が城跡と伝わる。城跡は長円形の平坦地(南東方向に主軸を呈し、長径40m・短径16m)となっており、これより2m下った所には、幅5~14mの曲輪が平坦地を四方から取り囲む。さらに北西側の鞍部には、堀切の役目を果たしたと思われる幅3m内外の凹道が田吹(字名)の集落へ伸びており、南東側の迫については古井戸も観察さ



田原の豊後浦城 見取図

れる。

なお城跡の南側麓一帯を「城ノ前（字名）」と称し、鼓堂屋敷という小名を残す一隅も同地内にある。同じく城跡の西側迫には「城の宇土」という字名が残る。

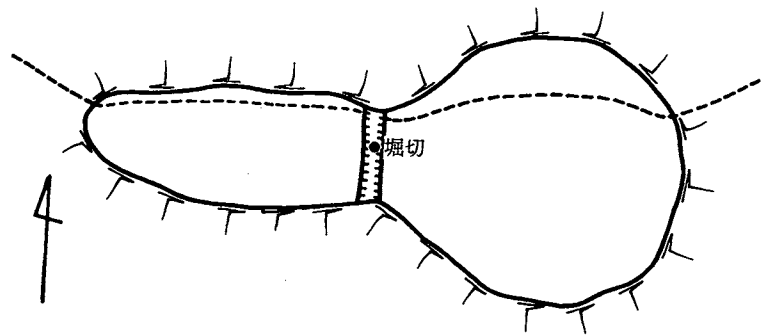
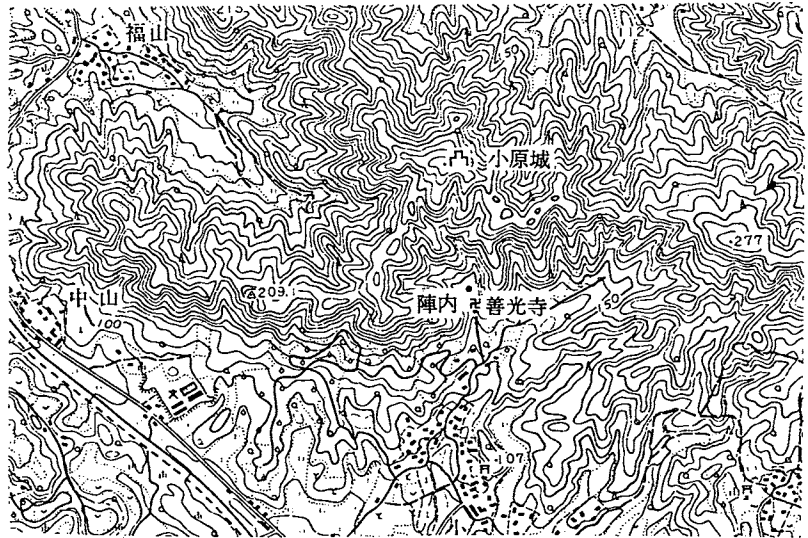
小原城（古城）（玉名郡南関町大字関東字小山）

天文年間（1532～1555年）に大友義鎮の家臣、小原鑑元（宗意）が築城したものと伝わる。鑑元は天文二十三年（1555年）に葦嶽城に移ったので、その頃廃城となったものと思われる。

善光寺の北側に位置する山稜地帯の中で最も高所にあたる峰（標高287m・寺よりの比高約185m）が城跡と伝わる。山頂部分は楕円形状の平坦地（長径25m、短径20m）となっている。また、西側部分には幅4m（長さ18m、深さ1m）の堀切を挟んで帯状の平坦地（幅14m、長さ34m）も観察される。しかし、城跡を軸として北西方向と南東方向に伸びる尾根部分については何ら遺構は存在しない。なお、山稜斜面はいずれも急峻で天然の要害をなす。

善光寺は小原の集落の北端部に位置し（注1）ており、寺地とその周辺は陣内（字名）と称される。周辺の谷には湧水も豊富であり、同地内の墓所には明應六年（1495年）や永享年間（1429～1441年）の年号を有する五輪塔も存在する。集落には「南屋敷」・「内屋敷」・「城下」等の字名が残る。

（注1） 山稜麓の迫に位置しており、南側の開口部にも溝が走っているのので、寺地は完全に一つの独立区画となる。



小原城 見取図

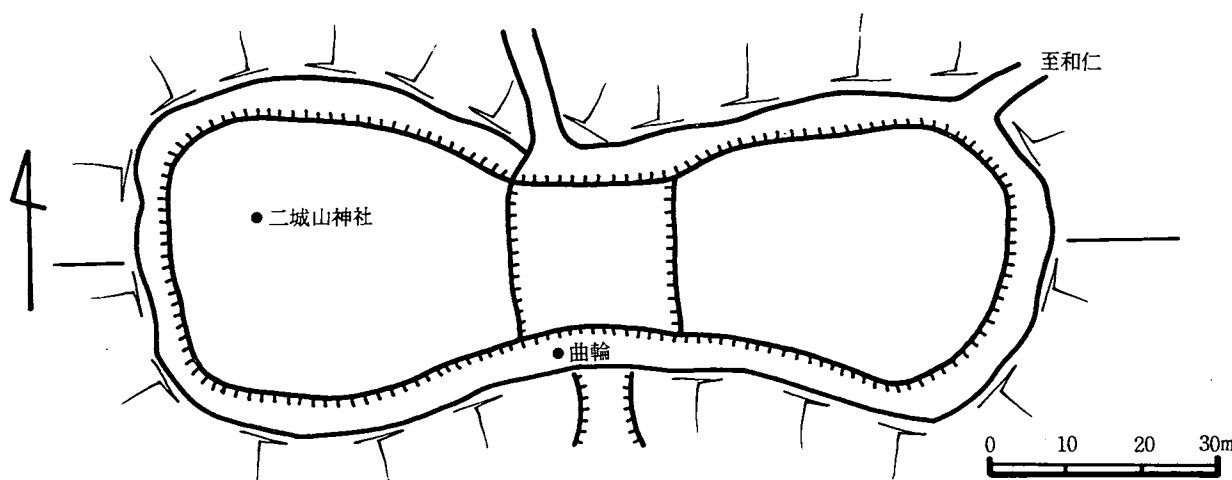
鯉鮒城（五位の巢城）（玉名郡南関町）

『古城考』によれば、この城跡は築城半ばにして放棄されたものという。その原因については、「白間野宗郷が領域問題から天津山資冬の反対にあい、工事を中止した」という説と、「天文年中、大友義鎮の家臣、小森鑑元（宗意）が築城に着手したものの途中で滅んだ為」という二説がある。いずれにしても特異な伝説をもつ城跡である。

城跡は南関町と三加和町の境界線上にあつて、「二城山」と称される山稜（標高318m・南西麓の相谷の集落よりの比高約200m）に位置する。山頂部分は、東西に主軸を呈するひょうたん型の平坦地となっているが、中央部分が一段低くなりくびれて（深さ0.7m、東西幅11m、南北の長さ10～11m）いるために、平坦地は二分される事になる。すなわち、東側部分で東西幅22m、南北幅11～12mを示し、西側部分（注1）は東西幅22.8m、南北幅10～18.2mを計る。また、山頂部分の平坦地を取り巻く幅2m～3mの曲輪（山頂よりの比高約2m）も観察される。なお、山頂中央部より北西方向へ200m程（斜距離）下った所に「ゼゼン谷」と称される湧水池がある。（注2）

概して、築城半ばで放棄された城跡と
いう感じはしない。

- (注1) 二城山神社が祀られている。
- (注2) 周辺に約15mの長さをもつ野面積みの石畳がある。

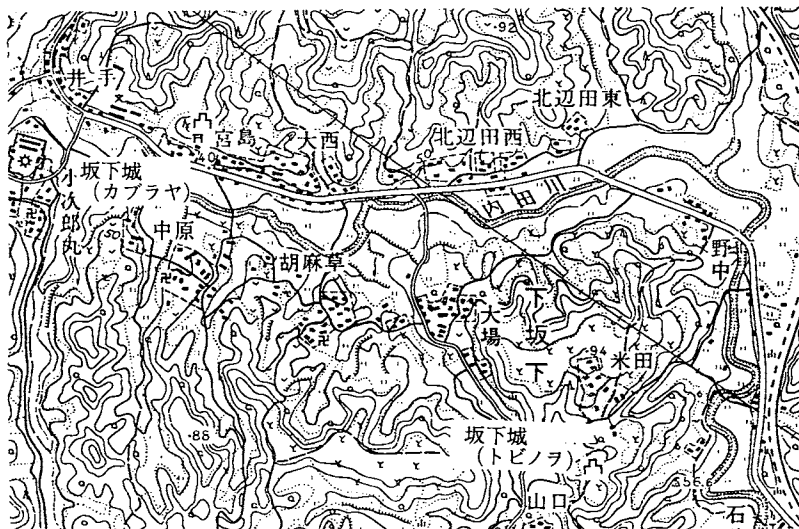


鯉鮒城 略測図

^{さかした}
坂下城(カブラヤノ城) (玉名郡南関町大字坂下字城平)

『古城考』によれば元龜・天正年間頃、玉名郡の坂の上・坂の下170町を領した白間野宗郷の居城であったという。^(注1)一方、『新撰事蹟通考系図』巻十四白間野系図には、宗郷より以前に白間野善郷なる人物が在城していた事が記されている。地元でも宗郷の在城説が伝わる。

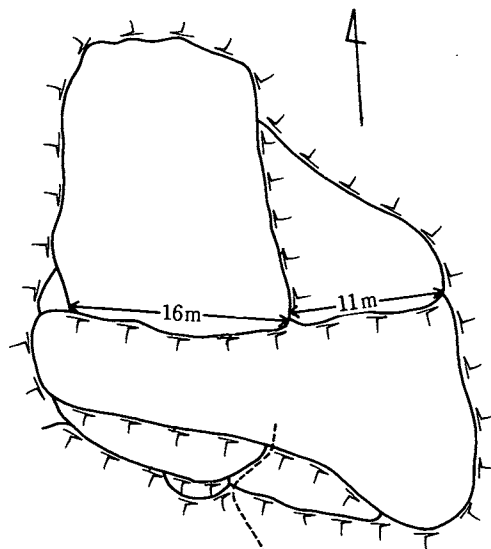
城跡は丘陵地末梢部の杉山に位置しており、「城平」の字名を残す。山頂部分は長方形の平坦地(南北に主軸を呈し、長径21m、短径16m)となっており、東側の段落ち部分にも三角形の平坦地が観察される。また、南側部分の傾斜地には階段状地形が重なり、西側部分については宮山(字名、宮島)と尾根続きとな^(注2)



る。なお、北側の鞍部は幅2mくびれており、ここには印鑰さんと称される小堂に至る小道が通っている。印鑰さんについては、「お城の鍵を保管した所」という伝承がある。

城跡北方の東豊永（城跡よりの距離約1.5km）には、「陣内」「馬場」「馬場園」「出口」の字名を残す所があり、とくに「陣内」には、善郷、宗郷両氏の墓と伝えられるものや、「カブラ矢」の伝承が残っている。

- (注1) いわゆる白間野の荘である。
 (注2) 接点に土地の境界線とも思える幅1mの溝が走っている。
 (注3) 善郷氏の墓は五輪塔である。
 (注4) 善郷はこの城よりカブラ矢を射て、その矢の落ちた所に我が墓を作れといった。その矢の落ちた所が陣内という。



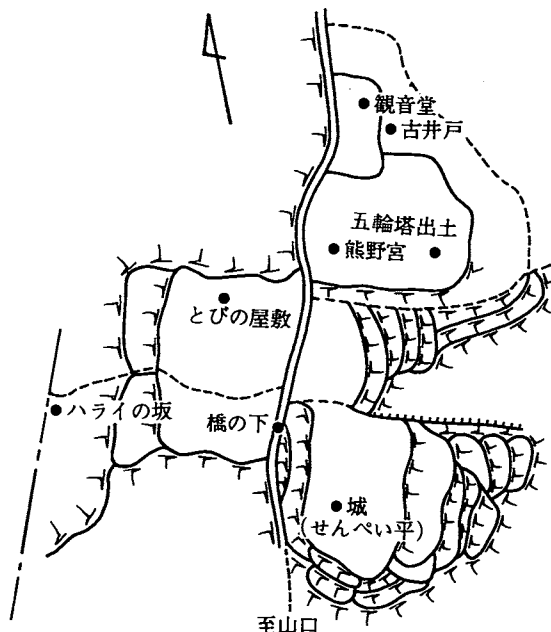
坂下城（カブラヤノ城） 見取図

坂下城（トビノヲノ城） （玉名郡南関町大字坂下字米田）

『古城考』によれば、白間野邦郷（泉郷の子）の居城という。天正年間に大友氏により攻め落されたと伝わる。

城跡は米田原（字名）丘陵地の南端部分（標高78m・西側水田面よりの比高約40m）に位置しており、「せんべい平」の小名を残している。「せんべい平」の背面は舌状形の平坦地（南北に主軸を呈し、長径85m、短径60m）となっており、北側の野首部分は幅5m程の尾根にくびれており、谷間には豎堀らしい溝が下る。また、城跡の周辺には、「トビの屋敷」との呼称を有する桑畑（長方形を呈しており、東西幅57m、南北幅60m）や熊野宮（城の守りと伝わる）、観音堂（善郷の位牌が安置されている）が残っている。この他、米田の集落付近には三郎丸屋敷と称される一隅がある。なお、「トビノ屋敷」の西方の谷には野面積みの石塁（高さ0.6~1.1m、長さ21m）があり、三郎丸屋敷には長さ80mの空堀（深さ1.5m、底幅1.5m）が東西に走っている。

- (注1) 扁額に白間野氏の家紋を刻す。境内に五輪塔の残欠が多く、椎の老樹については、「枯枝を拾って焚けば腹痛を起す」といって拾う人もいなかった。位牌には「当時開基白間野城主慶雲幸公大禅定門」と記されている。
 (注2) 本尊は十一面観音、元はこの地にあったのを築城の際に山口（字名）の集落に移し、竹林寺と称して白間野氏の菩提寺とした。大正時代に区民の手でこの地にかえた。
 (注3) 地元の人「からぼり」と称する。どんなに大雨が降っても水が溜らないという。幅2.5mを計る土塁も付随する。



坂下城（トビノヲノ城） 見取図

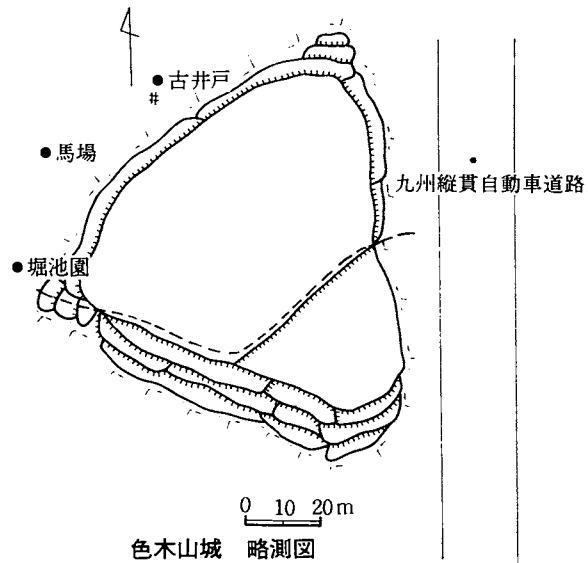
色木山城 （玉名郡南関町大字南関字上城・下城）

『玉名郡誌』によれば、大津山資秋（嵩嶽城主）が資冬に家督を譲った後に築いた館跡を城跡と称するという。

城跡は関町の東側にあつて、「色木山(標高100m・南側水田面よりの比高約40m)」と称される丘陵地末端部に位置しており、「上城」「下城」の字名を残す。色木山の背面は台形状の平坦地(南東側上辺42m、北西側下辺89m、高さ88m)となっており、西側山腹中に「いどのつき」と称される井戸跡が観察される。また城跡西側麓には堀池園(字名)や馬場(小名)の地名を有する所があり、北側麓には「虚空蔵を祀る小祠の周辺は大津山氏が鉄砲隊を置いた所」と古老は語る。

なお、城跡の東側部分は九州縦貫自動車道建設によって削り取られた。

(注1) 畑地に利用されている。



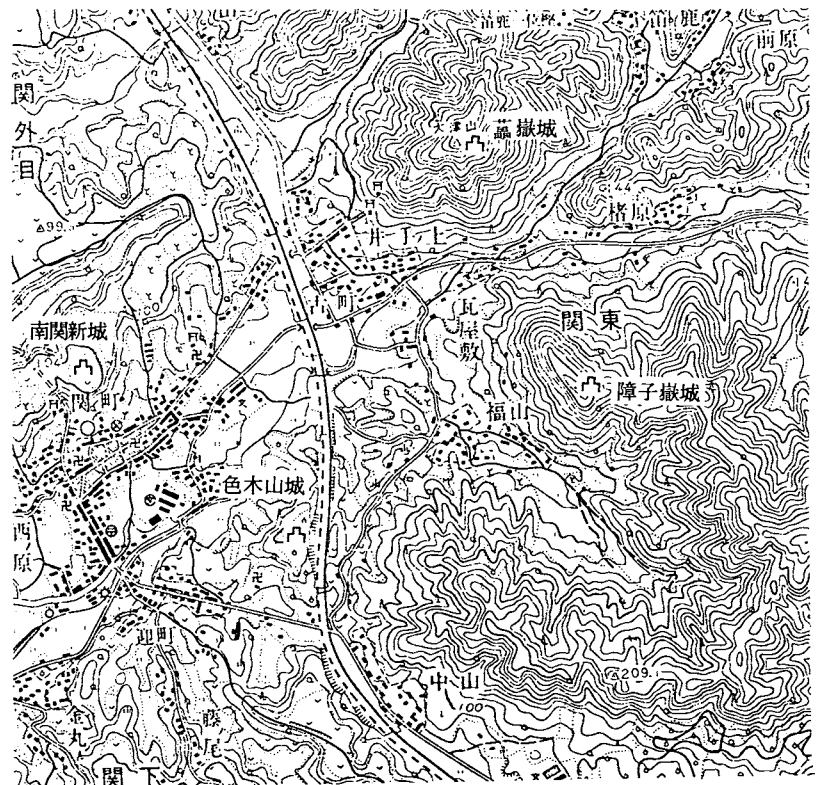
あまつらだけ
轟嶽城 (大津山城・舞鶴城・南関字城・南関古城)

(玉名郡南関町大字関東字城平)

応永三年(1395年)に大津山資基が築城したものと伝わる。その後大津山氏が代々居城したが、天正十五年(1587年)佐々成政に攻められて滅亡。加藤時代には城代がおかれたが、慶長五年(1600年)に至り、鷹野原に新城が築かれて廃城になったという。

城跡は大津山(標高256.1m・西側麓の水田面よりの比高約249m)に位置しており、「城平」の字名を残す。山頂部分は台形状の平坦地(長径24m、短径17~18m)となっており、さらに南西側へ2m下った所に帯状の平坦地(長径32~40m、短径11~20m)が見つかる。なお、北東側の平坦地周辺には幅5mの帯曲輪(山頂との比高2~3m)が東西両側に付随しており、西側と南側の崖面については野面積みの石垣も観察される。さらに、山頂より北東側10mの地点には幅4mの堀切(深さ1m、長さ22m)が存在する。

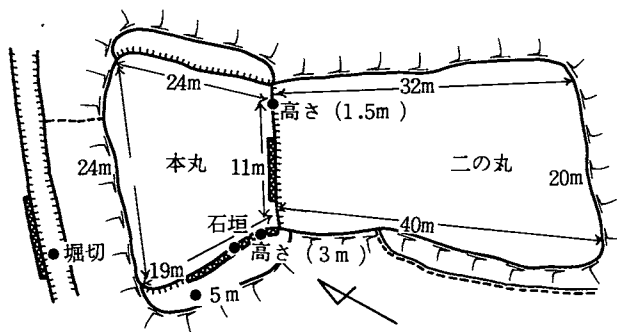
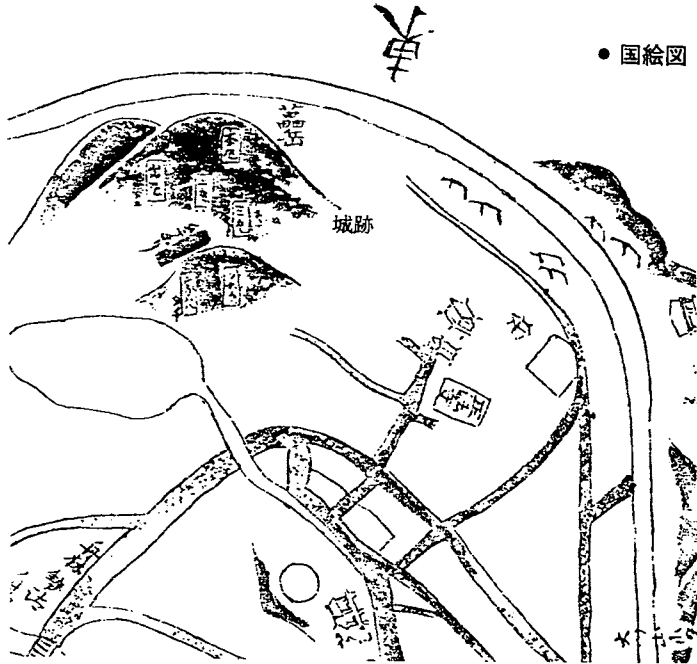
これは山頂続きの尾根が北東側へ延びるために必要であったのだろう。またこの尾根筋には合計3条の堀切が観察される。その他、山頂より西側へ約80m近く下った山腹中にも、城跡に関連すると



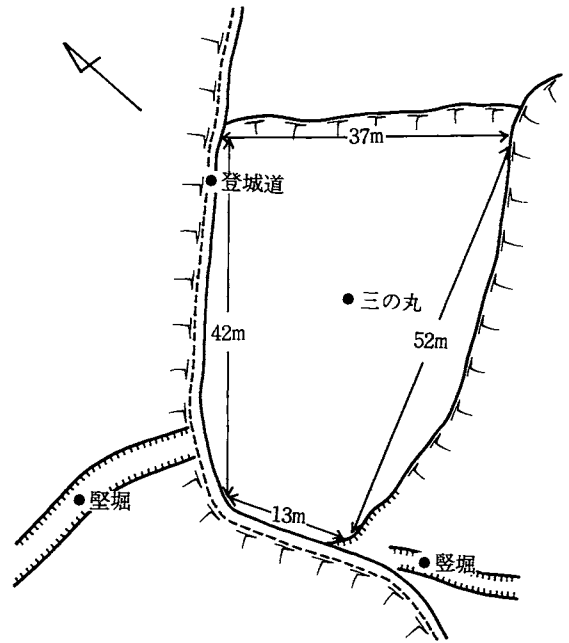
思われる台形状の平坦地（東西に主軸を呈し、長径45m、短径37m）が存在する。平坦地の東西側には山稜斜面に沿って走る二条の堅堀もあり興味深い。とくに西側部分は山稜麓まで続くものである。

昭和47年に南関町では大津山自然公園化の一環として、南西側麓の大津山阿蘇神社周辺を環境整備したが、その際の発掘調査の結果、三棟分の柱穴跡が検出され、燈明皿や火鉢などの中世遺物も出土した。調査地点の近くからは、かつて応永（1394～1428年）銘の五輪塔が出土している。

- (注1) 一時期、小原鑑元が城代を勤めている。
- (注2) 弥陀（梵字）板石塔婆がある。
- (注3) 西側（長さ11m、高さ3m）、南側（長さ6m、高さ2m）
- (注4) 東側（底幅2m、深さ2m）、西側（底幅3m、深さ3～8m）



藪嶽城（本丸・二の丸）



藪嶽城（三の丸） 見取図

おおつやませき
大津山関城 （所在地不明・南関町）

鎌倉時代に赤星有隆が築城したものと伝わる。代々、赤星氏の居城となったとされるが、その所在地については不明である。『玉名郡誌』には、城跡そのものを藪嶽城跡の誤謬と解釈している。

しょうじだけ
障子嶽城 （所在地不明・南関町）

『古城考』には「蟠根四町柴山也、障子嶽との間四町五反、本丸より辰巳方、天神塚と云山へも四町五反あり、城主姓名不明」と記されている。一説に、城主は赤星有隆と伝わる。しかし、城跡の所在地は不明である。そもそも障子嶽城跡としながら、城跡の所在地を障子嶽との間四町五反と記述している所に誤りがある。なお、障子嶽（標高216m）は亀山と称するものの、「城跡という話は聞かないし、頂上は馬の背のように狭くなっていて城を造るような平坦地はない」と古老は語る。

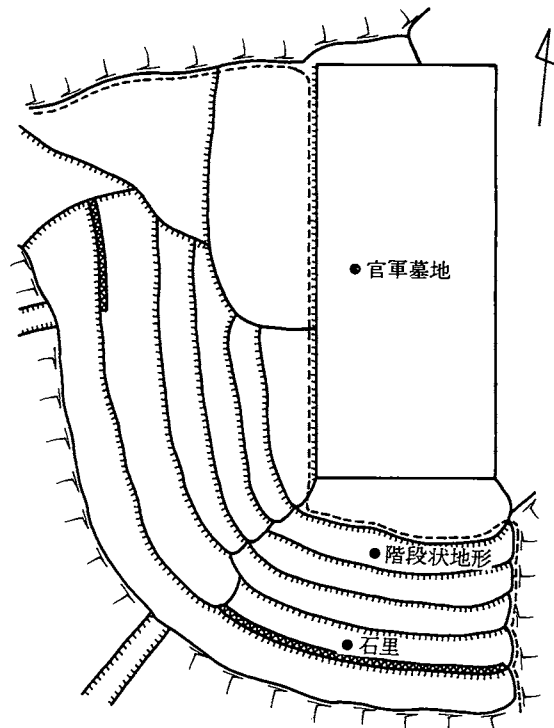
南関新城 (鷹原城・南関城) (玉名郡南関町大字南関字城ノ原)

嵩嶽城の城主を勤めた加藤正次(加藤氏の家臣)が慶長五年(1600年)に築いた城という。元和二年(1616年)の一国一城令で廃城になった。『肥後国誌』に、「今廃跡本丸の跡に大木の松10本あり里俗書院の松と云」という記事が見える。

城跡は、関町の北側一帯に横たわる丘陵地帯の東端部(標高約110m・南側麓の関町よりの比高約40m)に位置しており「城ノ原」の字名を残している。

「城ノ原」の背面は、楕円形状の広い平坦地(畑地、長径120~130m、短径100m)となっており、西側部分に典型的な野首(上面の幅は3~4m)が存在する。また丘陵地の南西側と南側斜面については幾段にも重なる階段状地形が観察され、その一部については石塁らしきもの(高さ1.5m程、長さ28m)が積まれている。

なお、城跡の南端に官軍墓地(西南戦争関連遺跡)があるが、かつてその周辺に南関手永に言う書院の松があったという。周辺の遺跡としては、登城口に細川氏の茶屋跡がある。

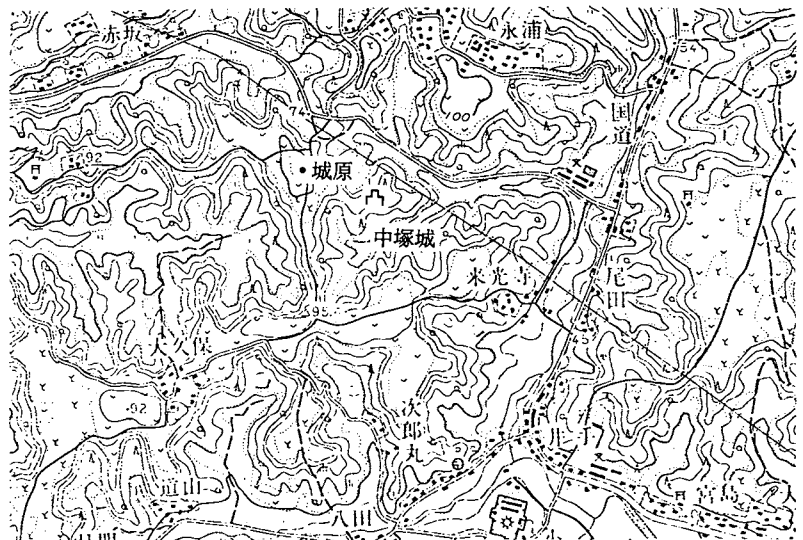


南関新城 見取図

中塚城 (玉名郡南関町大字賢本字塔下)

『玉名郡誌』によれば、城主は大津山氏の家臣、夫婦木新蔵(一説に中塚シンゴノカミ)という。

城跡は城原という字名を残す丘陵地帯の末梢部(標高98m・北側麓の水田面よりの比高約48m)に位置しており、地元の人々は「中塚山」、もしくは「中塚城」と称する。しかし、「中塚山」には、山頂部分と北東側の尾根に平坦部分が観察されるものの、いずれもその形状から人工的なものとは認め難く、全般的に城跡という感じはしない。現在観察出来る城跡としての遺構は、山頂の西側尾根(山頂中心部よりの距離18m)に残る楕円形の窪地(長径3m、短径2m、深さ1m)



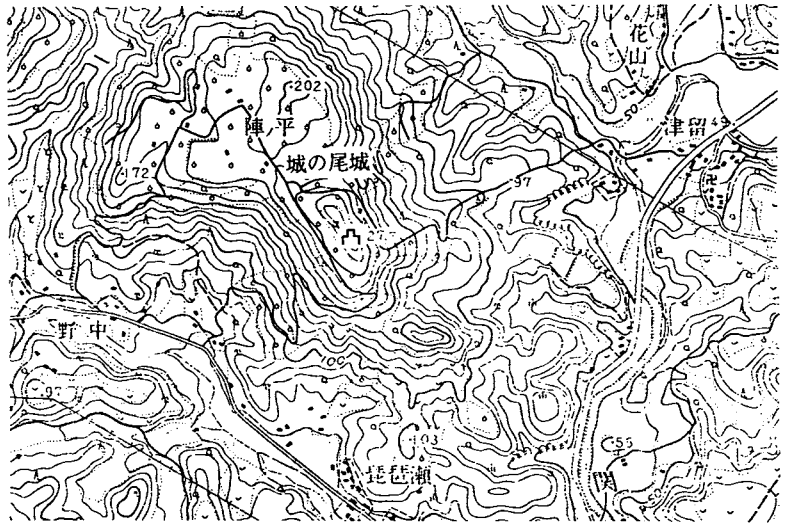
のみで、これについては古井戸との伝承がある。また城原と中塚山の間には、高瀬(玉名)と南関を結ぶかつての街道が通る。なお、中塚山の周辺には「夫婦木」「夫婦坂」と称される所があり、安ノ原と大迫原(字名)には願主に夫婦木氏の銘を有する六地藏が存在する。

- (注1) 『玉名郡誌』原文のまま。
- (注2) 全山杉林である。
- (注3) 中塚山の北東側麓の畑地に残る小名。
- (注4) 安原と大迫原との間にある坂道の呼称。

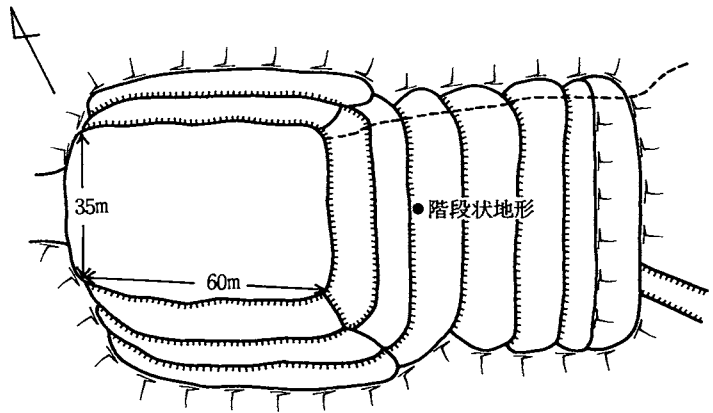
城の尾城 (七尾城) (玉名郡南関町)

城主は小代氏の一族、猿渡直貞という。

城跡は、陣ノ大平山 (標高227.7m)の南東側末端部 (標高164m・南東側麓の坂本 (字名) の集落よりの比高約185m)の畑地に位置しており、「城尾」の字名を残す。
城尾は長方形をした平坦地 (東西に主軸を呈し、長径60m、短径35m)となっており、鞍部の両側を除く三方を階段状地形が取り囲む。この階段状地形は東側の緩傾斜部に著しく、幅6~12mのものが幾重にも重なる。また平坦地の鞍部寄りの所には、楕円形の窪地 (長径3m・短径2m) が観察されるが、かつてはこの他に同規模のものが2箇所認められたという。



城跡麓の集落には猿渡氏の子孫と称する家が10軒あるが、主として坂本の集落に多い。上長田諏訪神社に置かれている竿樹石は城跡から移したものと伝わる。石には、「奉寄進竿樹石 元禄九丙子天長田城尾末子猿渡勝右エ門」の文字が刻んである。



城の尾城 見取図

城跡の東側麓を関川が南北に流れている。

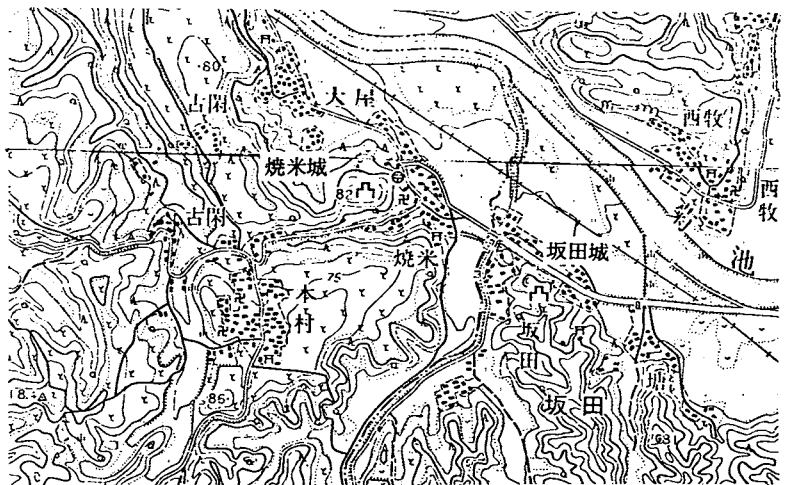
(注1) 三池氏と小代氏の古戦場跡と伝わる。一説には神功皇后の休息所ともいう。

(注2) 落合という字名を残す集落があるが、地名の由来は落城の時、小代軍と猿渡軍とがこの地点で落合った所からきているという (猿渡迫氏談)。

焼米城 (玉名郡菊水町)

城主は、焼米五郎という。

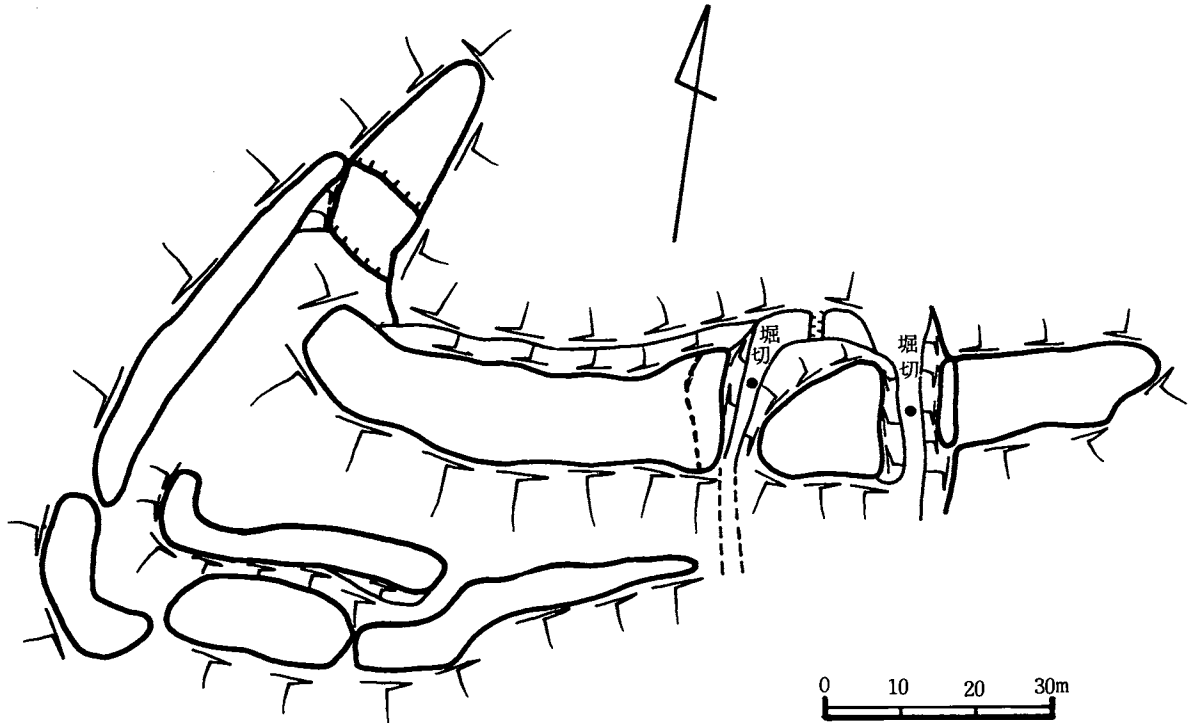
城跡は、高野古閑から延びる山稜の末端部 (標高82.78m・焼米集落よりの比高約60m)の「城山」と称される雑林に位置している。城山の背面は東西に細長い平坦地 (東西57m・南北7~8m)となっており、2条の堀切によって三区画に分れており、主郭と思われる東端部には城主一族を祀った碑と拝殿が建立されている。さらに城山の背面より数メートル下った所には曲輪状の階段状地形も観察される。



城山の東側麓には城主の寺と伝わる西

福寺跡があり、多くの五輪塔が残る。

(注1) 西側鞍部には、深さ20m程の谷がはいつているので城山は外観的に独立山稜の様相を呈する。

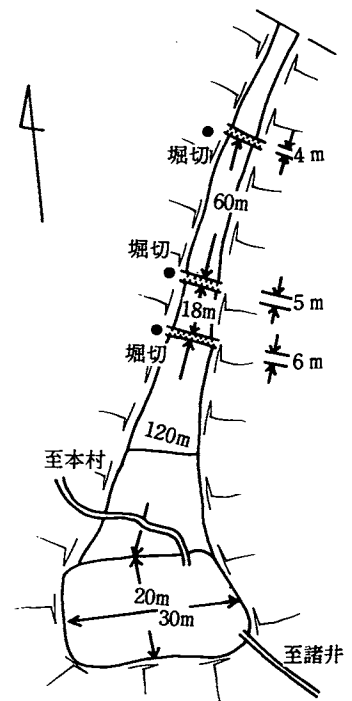
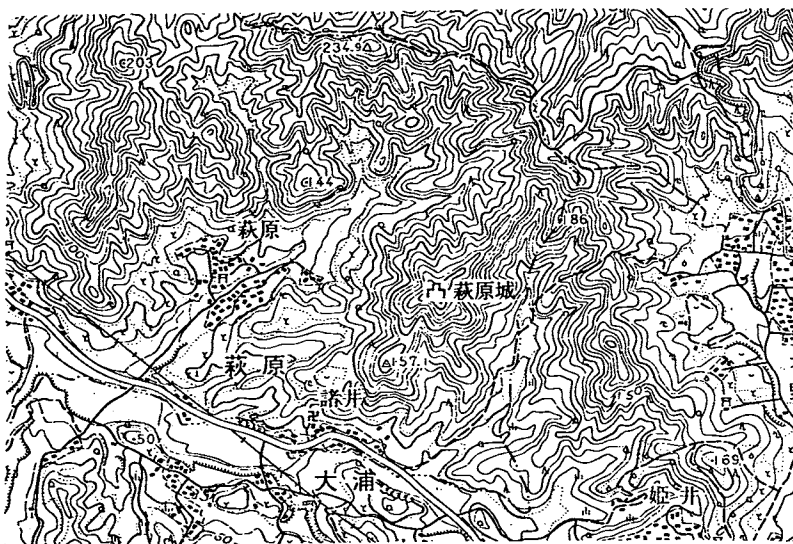


焼米城 略測図

萩原城 (玉名郡菊水町大字萩原字城内)

『国郡一統志』によれば城主は長野氏という。一方、『古城考』は長野重郷・親次の他、内田重貞の居城説もあげている。同書は落城期についても天文・天正七年(1579年)・元亀三年(1572年)の三説を伝えている。

城跡は萩原本村・^{もろい}諸井(菊水町)・寺米野(鹿央町)の3箇所に登城口を持つ萩原山(標高213.4m)に位置する。山頂部分は長方形の平



萩原城 見取図

平坦地（長さ30m・幅20m）となっており、さらに北東方向に下る尾根筋に合計3条の堀切が観察される。これらの堀切の底幅は、山頂側から順次6m・5m・4mを計り、『古城考』にも「一の堀」・「二の堀」・「三の堀」と記されているようである。

ところで、この城跡については、萩原本村と、寺米野の両集落に、城跡に関連ある地名や伝世品が残っている。すなわち萩原には、「城主の持鏡」といわれるものが伝わっており、城主の館跡という所もある。一方寺米野には、登城口の近くに、「お花畑」・「殿畑」という小名を有する所がある。当該地は隣接しており、裾部との比高約15mを計る舌状形の丘陵地に位置する。戦前まで同地の北寄りに居を構えた丸山金次郎氏宅には、萩原と同様な鏡が伝わっており、さらに八木田止富氏宅にも「長野老岐守奥方の持鏡」という鏡がある。住民は萩原城を「城山^{しろやま}」と称する。

なお、寺米野は、米の山城にも付随する集落であり、この事から、両城はなんらかの形でつながりを持つ城であるといえよう。

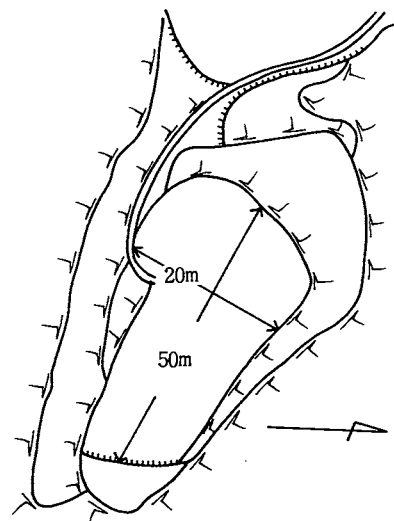
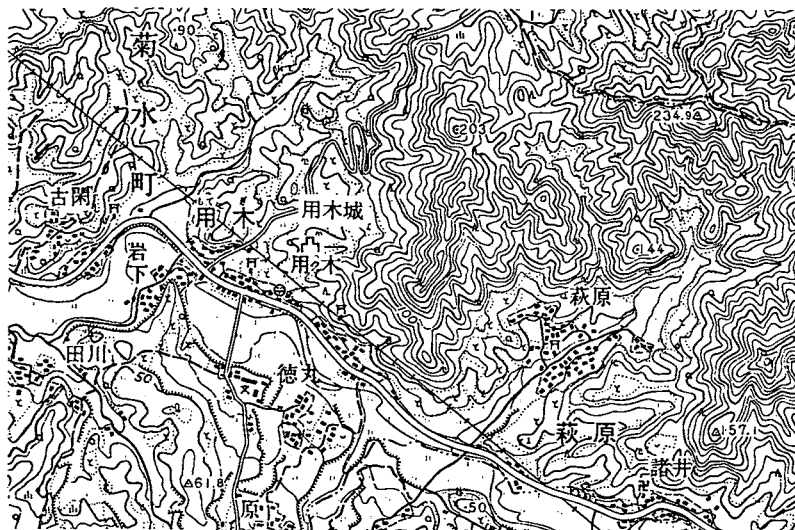
もといぎ 用木城（玉名郡菊水町大字用木字河原毛）

『国郡一統志』によれば城主は用木氏という。

城跡は用木集落の北側にあつて、「城の尾^{じょうのお}」という小名を残す山稜末端部（標高50m・集落よりの比高27m）に位置する。当該地の最高所は、帯状形の平坦地（南東方向に主軸を呈し、長さ50m・幅20m）となっており、さらに南西方向に下る丘陵地の斜面部には、幅広い階段状地形が観察される。また、周辺部はいずれも城跡にふさわしい迫となっている。

しかし、当該地は全面畑地となっている事もあつて、かなりの現状変更を受けているものと思われる。

なお、城跡の東方向に広がる山稜の谷間には、「観音寺跡（北東方向）」と「宝蓮寺跡（北西方向）」がある。



用木城 見取図

えた 江田城（玉名郡菊水町大字江田字江光寺）

城主は江田又太郎秀家という。

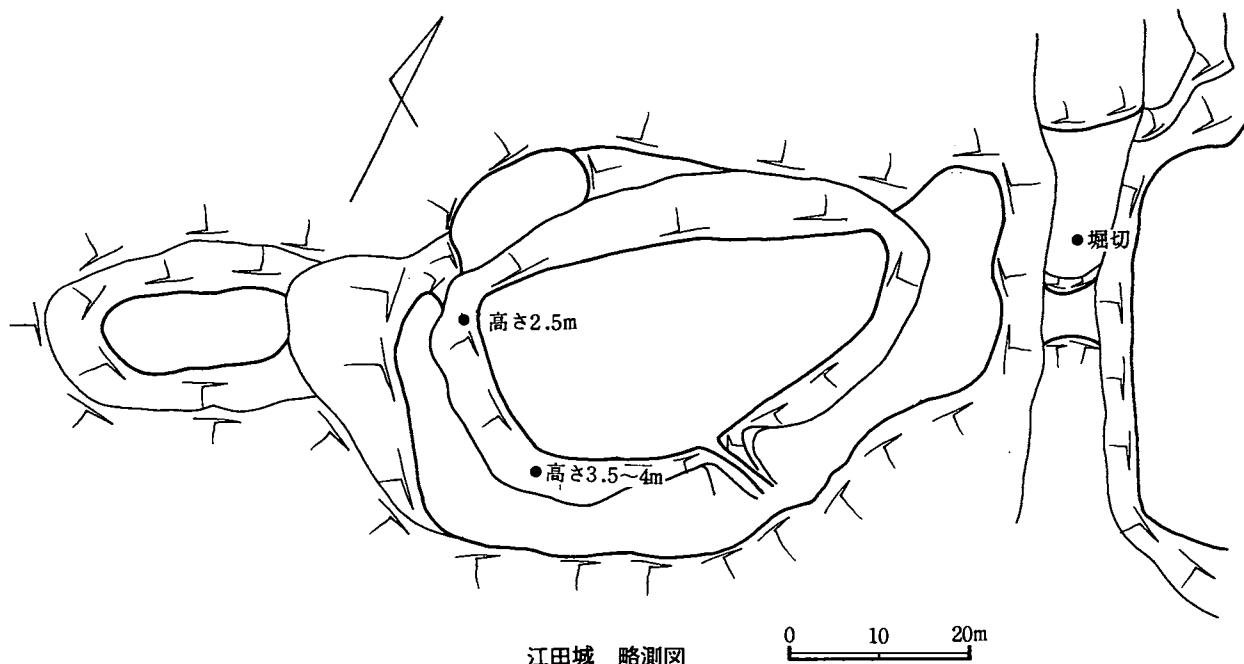
「城山^{しろさん}」と称される山稜末端部（標高40m・江田の集落よりの比高約40m）の雑林に位置している。

山頂は楕円形状の平坦地（東西46m・南北23m）となっており、「城さん」と称される自然石の碑がある。さらに山頂より3～4m下った所には、山頂平坦地を取り囲む（北東隅の一部を除く）曲輪も観察される。

ところで城山の西側はゆるやかな傾斜をもつ尾根になっているが、山頂寄りの所には小規模な平坦地（東西20m・南北8m）があり、城跡の遺構に関連あるものと思われる。

一方、東側の野首部分には、江田から皆行原に至る通路に利用されたという堀切が走る。

(注1)



江田城 略測図

なお、城山の南側の斜面には階段状の地形があり、多くの五輪塔が散在し、その一隅に城主の館跡と伝わる所もあるが、その周辺からは以前石棺が出土している。

(注1) 皆行原の丘陵地には、土塁を残す一隅がある。

(注2) 石人No.113

熊本史談会誌 第10巻2月号参照



おとしょう
乙城

(玉名郡菊水町大字江田字乙城)

城主は城讃岐守という。城氏の墓は三宝寺跡近くにある。

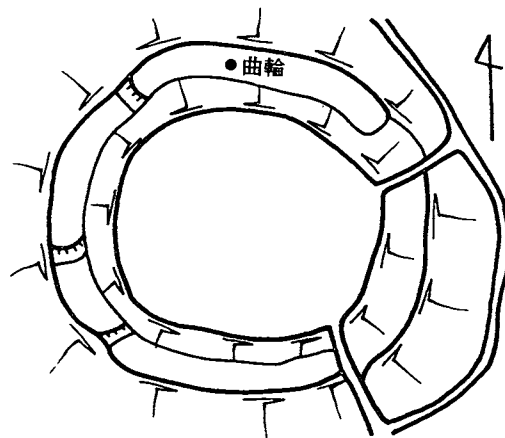
(注1)

城跡は長野集落の北側に位置する山稜末端部(標高80m・長野よりの比高約30m)の乙城と称される雑林に位置する。

山頂は楕円形状の平坦地(東西35m・南北30m)となり、数m下って曲輪が東側を除く三方を取り囲んでいる。

一方、長野の集落内であって「園」という小名を残す一隅は館跡と伝わっており、そこには祠に入れられた五輪塔数基が祀られている。

(注1) 石碑に「香雲院殿城讃岐守入道源八一要大居士、文録元王辰正月十五日」と刻まれている。



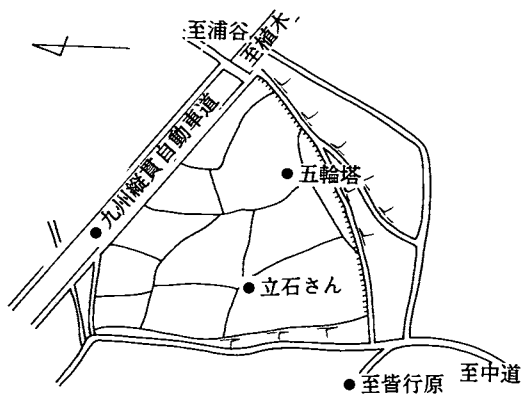
乙城 見取図

^{たていし}
立石の城 (参考地) (玉名郡菊水町大字原口字立石)

菊水町大字下津原の墓地に、「石原家の先祖は立石城の子孫」と刻む石碑があり、この事から原口地区の立石における城跡の存在が考えられる。

立石集落には、城跡に関する伝承は何もないが野次山(標高40m)に、「立石さん」と称される自然石(高さ1.5m・幅0.8m)が祀られており、住民に石原姓が多い事は石碑の銘文と無関係であろうか。

一応、「立石さん」の所在地である野次山を参考地としたい。しかし、当該地は九州縦貫自動車道建設で山の大部分を破壊されている。



立石の城 見取図

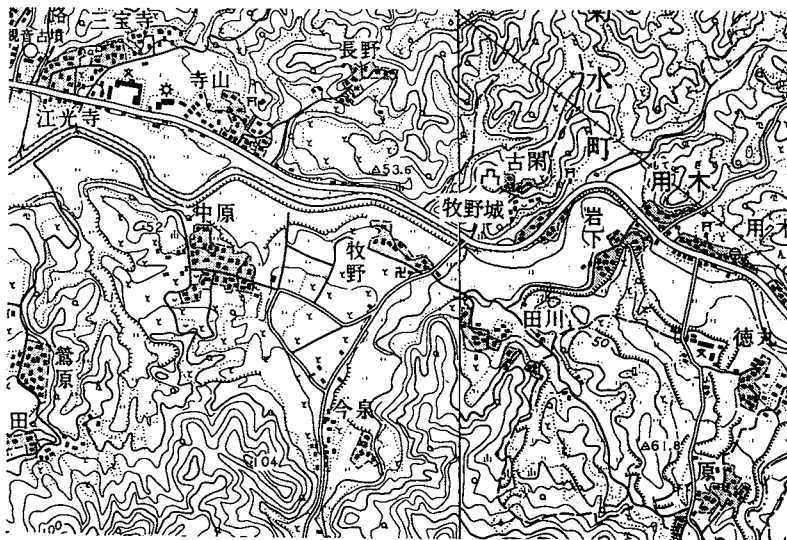
^{まきの}
牧野城 (玉名郡菊水町大字江田字牧野)

城主は内空閑鎮房という。

城は天正16年(1588年)に落城したとされ、「かくれ里」と称される城跡麓の岩陰は、乳母が姫を連れて落ちのびる際、隠れた所と伝わる。

丘陵地末端部(標高60m・丘陵麓の牧野集落よりの比高約10m)の畑地(一部山林)が城跡とされるが、広い平坦地があるだけでくに城跡に関連あると思われるような遺構は観察されない。

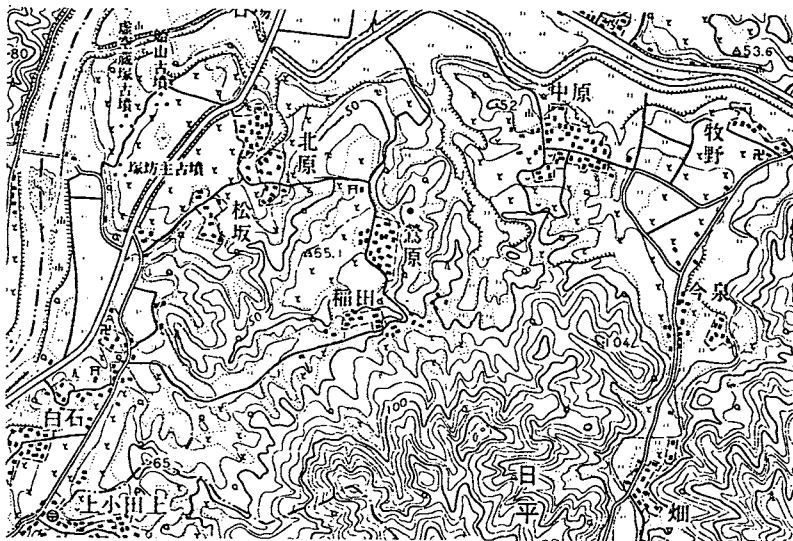
牧野集落には湧水を利用した井戸があり、城跡に至る水汲道という「どんご坂」が残っている。



^{うぐいすばる}
鶯原城 (玉名郡菊水町)

『古城考』によれば「請村にあり、城主年代未考え」となっているが、現在の所在地は不明である。

地元では一応、天神社一帯が城跡ではないかと考えられている。館跡の可能性が強い。

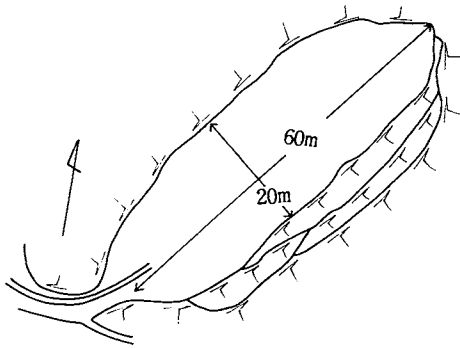


おおや じょう お
大屋の城の尾

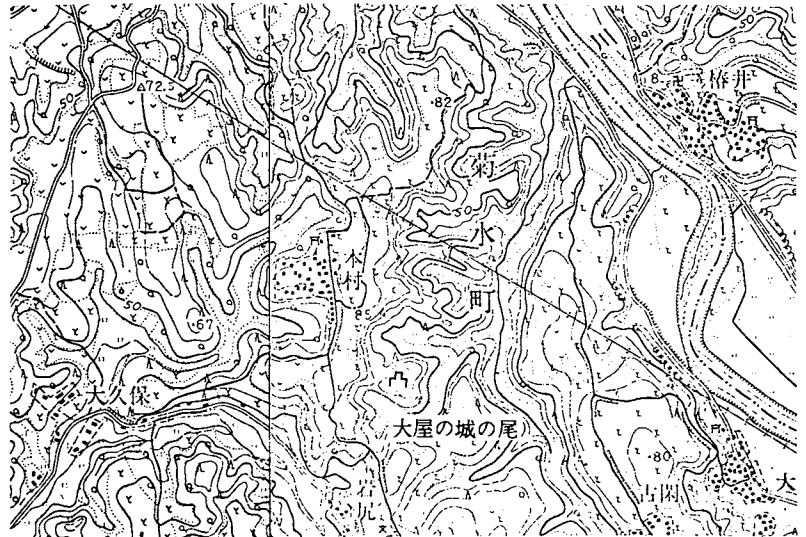
(玉名郡菊水町大字大屋字城尾)

志口永(字・北屋敷)集落の、南東方向300mに位置する丘陵地末端部の小山(裾部よりの比高10m)に、「城尾」とい
う字名が残っており、城跡の存在が考えられる。小山の上面は、北東方向に主軸を呈する長円形状の平坦地(杉の植林地
長径60m・短径20m)となっており、さらに東側の斜面部には階段状地形も観察出来るようである。

しかし、集落内には城跡に関連するような伝承は何も残っていない。



大屋の城の尾 見取図



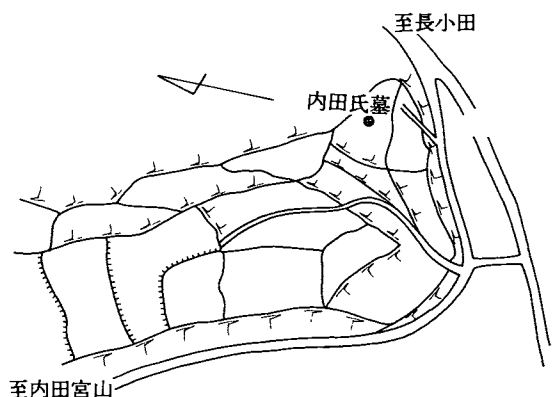
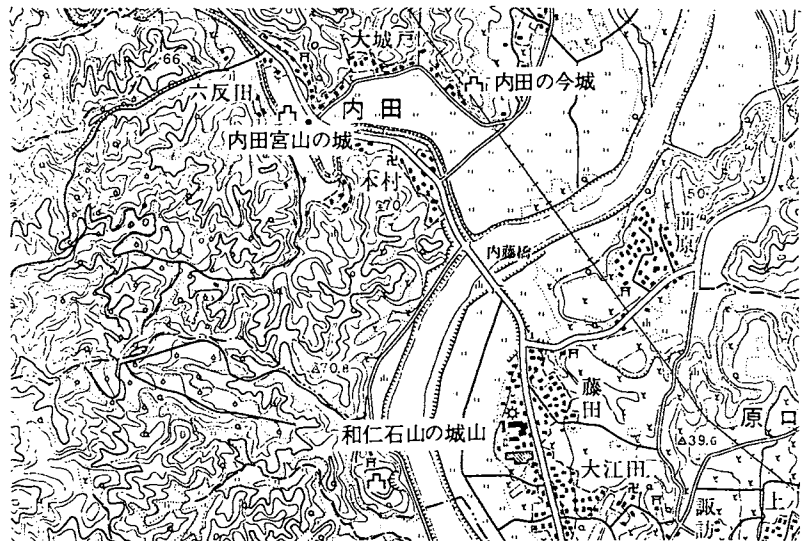
うちだ いま
内田の今城

(玉名郡菊水町大字内田字今城)

内田地区に、「今城」という字名を残す丘陵地末梢部(南西方向に主軸を呈し、標高41.5m・南側麓の水田面よりの比高35m)があり、城跡の存在が考えられる。

丘陵地の背面は北西側の野首寄りから、南東側に向って階段状に下る三区画の平坦地となっており、さらに東側と南側の斜面部にも、帯状形の階段状地形が観察される。

また、野首部分にも掘切状の窪地が存在するようである。なお、東側麓の墓地には「内田源兵衛君以寛文五年(1665年)十二月二十三日没、源兵衛君内田古城主胤也、為内田県正同名二世至三世事沢村家復旧姓豊島後避、豊姫君改正友田墓有法号、無裕称故建表誌之、献燈慶応元年(1865年)県長江藤七弥太、九月口日、下久井原区、深草藤四郎、当村住古城甚五郎」と刻まれた墓がある。



内田の今城 見取図

うちだみやま

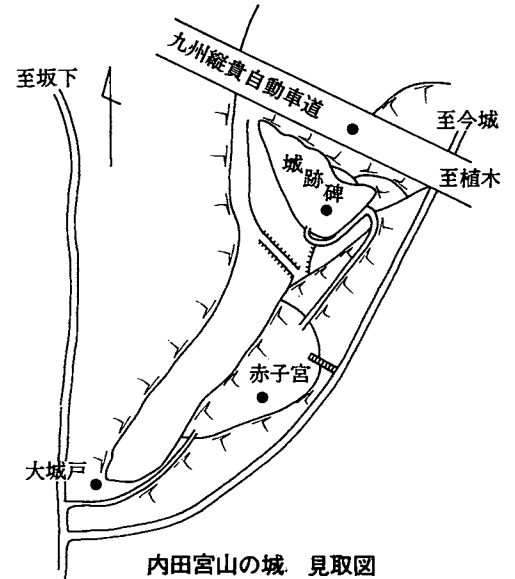
内田宮山の城 (玉名郡菊水町大字内田)

赤子宮の背後に「宮山」と称される山稜末端部(標高約40m・赤子宮よりの比高20m)があり平坦地を有する山頂部を「城床」と称し、周辺に「大城戸」・「陣」等の城跡関連地名を残す所から城跡ではないかと思われる。

しかし内田の北側山稜続きであった宮山は、九州縦貫自動車道開通の際、その大部分を削り取られ、今は城床の一部(南北9m・東西16m)が残るに過ぎず、詳細は不明である。

しかし、城床の数m下には曲輪状の階段状地形(南北4m・東西14m)があり、城床より移転した五輪塔が安置され、赤子宮の北側に沿ってのびる尾根には小規模の堀切らしい溝も観察される。

(注1)大永二年の年号が読めるもの(高さ約2.5m)1基、永正十年などの年号が読めるものなど(高さ約1m)6基



内田宮山の城 見取図

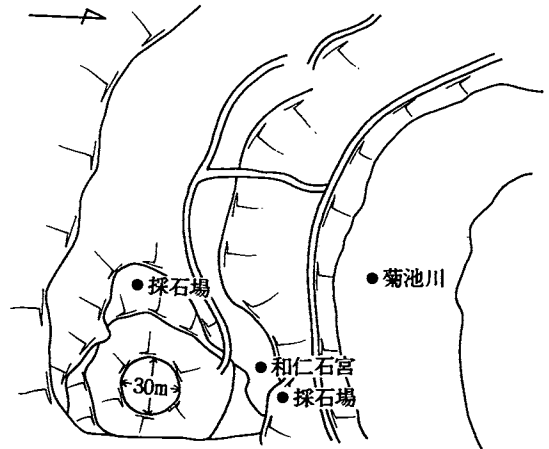
わにしきん しろやま

和仁石山の城山 (玉名市)

菊池川の西岸に連なる山稜の中に和仁石宮^(注1)があり、その背後に「城山」と称される小山(標高70.8m・東側麓の道路よりの比高約54m)がある。

山頂部分は円形状の平坦地(直径30m)となっているが、山腹が石切場となっていることもあって、他には何ら城跡に関連あると思われるような遺構は観察されない。

(注1)田中城の和仁御前を祀ったものである。



和仁石山の城山 見取図

えぐり じょうのお

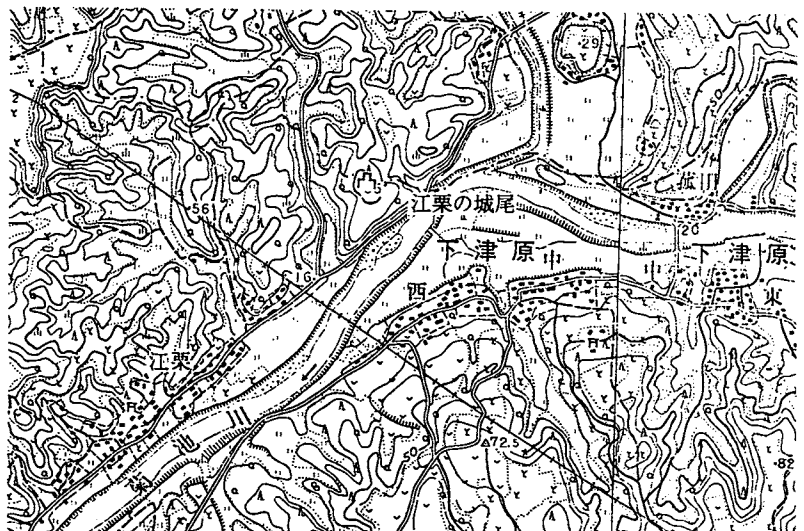
江栗の城尾 (玉名郡菊水町)

三加和町と菊水町の町境に「城尾」という字名を残す帯状の山稜末端部(標高55.0m・南側麓の道路よりの比高約38m)に雑木林があり、地元では城跡と称している。

山頂部分は、小規模な平坦地(南北16m・東西4m)となっており、野首には堀切状の窪地(幅8m)がある。

さらに、山頂南側の山腹に重なる階段状地形の一隅には楕円形の凹地(3m×5m)があり、地元の人は城の井戸跡と伝える。

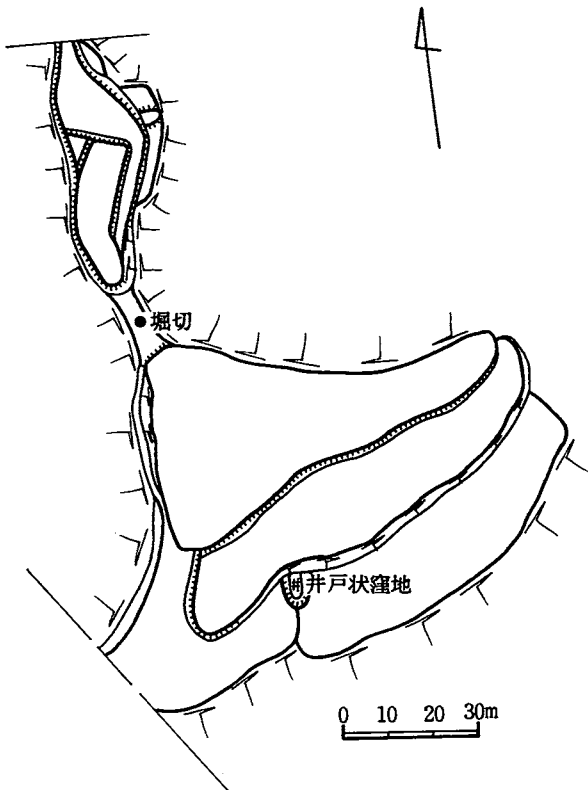
城尾は野首部分の南側を除く三方は急



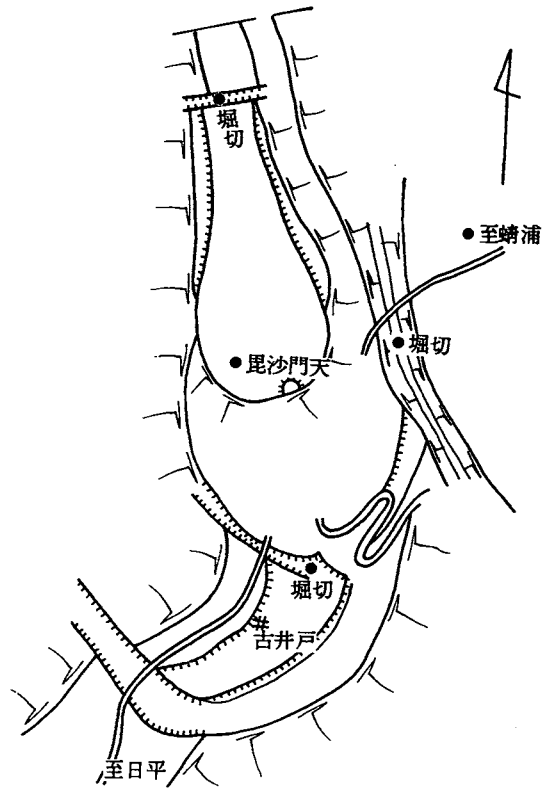
な傾斜をなし、自然の要害となっている。

一方、南側麓には菊池川沿岸にそって走る道があり、城尾への入り口には大城戸の小名が残る。

なお、明治30年頃、城尾からは槍の穂先らしきものが出土したという事である。



江乗の城尾 略測図



日平城 見取図

ひびら
日平城

(注1)

(玉名郡菊水町大字日平字花群)

『古城考』によれば、隈部家臣の小森田氏一族の居城を見たらしいが、落城時については天文二十年(1551年)・天正八年(1580年)・天正十一年(1583年)の三説が伝えられている。

城跡は、日平及び蜻浦両集落に登城口を持つ花簇山(標高338m・日平集落よりの比高300m・蜻浦集落よりの比高280m)に位置する。山頂部分は北西方向に主軸を呈する瓢箪型の平坦地となっており、

(注3)

さらに山頂周辺部には合計4条の堀切が観察される。これらの堀切には、尾根筋が北東・南西・南東の三方向に伸びる事からこれを断切するためにも、必要であったろうと思われる。とくに南西側の尾根筋は、他に比べて緩傾斜をなしている事から、二重の堀切となっている。堀切の間には古井戸も現存するようである。一方、山頂より北東方向の尾根筋に位置する山稜(標高330.5m)にも、「城山」という小名が残る。山頂部分は約50㎡の面積を有する平坦地となっているが、他に遺構の存在はない。

なお、蜻浦には「陣山」・「大城戸」という地名や「霊社さん」と称される碑が残っており、日平にも花簇山吉祥寺跡がある。

(注5)

(注6)

(注1) 花牟礼城・華牟礼城・花群城・花叢城の書き方がある。



(注2) 子孫は歴代総庄屋などを勤めたという。

(注3) 毘沙門天が祀られている。

(注4) 直径4m・深さ3mを計り、どんな旱魃にも水は涸れたことはないという。雨乞祭りには、この井戸の水を供えると雨が降ったと伝えられている。

(注5) 小森田氏と島津氏の戦いの場という。

(注6) 嘉永五年(1852年)に建立されたもの。碑の周辺は小森田又次郎の討死場所という。

^{たかみち}
高道城 (城内城・高満城)

(玉名郡岱明町大字高道字城内)

大野氏の支城であり、大野一族の池松貞胤が居城したが、天正十年(1582年)、貞胤は肥前の龍造寺軍に敗れ去り城も落城したという。

「城内」の字名を残す集落の北東隅の小高い丘(標高18.4m・集落よりの比高5~6m)が城跡とされ、現在、菅原神社とその社地になっている。

丘の上面は平坦地(東西38m・南北62m)となっており、ゲート・ボール場敷設の際に板碑1墓と礎石らしき巨石が3個出土した。

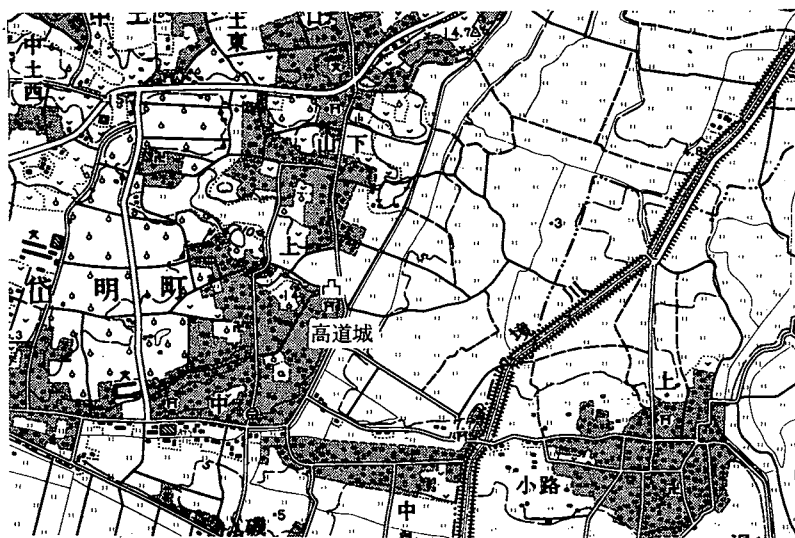
しかし、「城内」の北縁から西縁にかけては水濠がめぐっており、さらにその分流(注1)と思われる小濠(注1)の存在も確かめられる事から、城跡の範囲は集落全体にまで及ぶものと思われる。

なお、「城内」の南限部分と北西隅には、それぞれ「まつば(的場)」と「きつまる(祈禱丸)」の小名が残っている。

(注1) 北縁の水濠、長さ100m・西縁の水濠、長さ130m

(注2) 弓練習の的をおいた所と伝わる。

(注3) 城の祭事、戦勝祈願を行った所という。現在は柑橘園となっている。



^{うえむら}
上村城

(玉名郡岱明町大字上字馬場原)

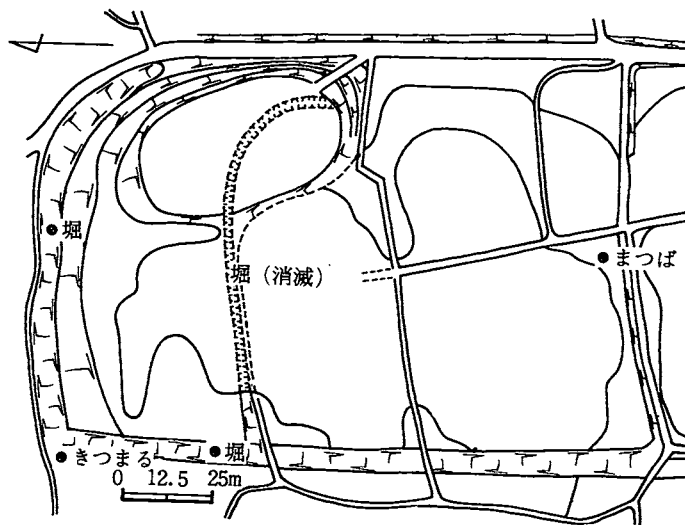
築地国秀が築城し、大野光隆等が居城していたが天正九年(1581年)小代氏に攻められて落城したという。

「馬場原」の字名を残す集落(標高13m・東側水田面よりの比高約7m)の北東一隅が城跡とされる。

現在、民家の敷地となっており、丘陵端となった東側を除き三方を幅2m程の堀道が取り囲んでいる。

北側部分には幅5m・高さ1.5mの土塁が観察されるが、以前は西側と南側にも土塁が存在したという。

なお、城跡北側部分の西側半分には、



高道城 略測図

二重の空堀が堀道に沿って走っているが、堀に伴う土塁はその東端部分で結合して古井戸を囲むように南側へ曲折する。

城跡にはこの他、古井戸付近に小山状になった高さ6m程の土壇（底面の長径11m、短径8m）があり、上面には板碑と石祠が祀られている。

城跡の西北方300mの地点に城主大野光隆の墓がある。

伝世品としては大野氏宅に大野藤が使用した^(注1)という弓が残っている。

(注1) 大野氏菩提寺平等寺跡墓地にあり五輪部分を不規則に積み重ね、最下段の地輪に「文中三年癸丑八月廿三日入滅 伊勢守光隆行年廿九」と銘する。

(注2) 三折し、一部はなくなっている。

なお城跡の東に水田を距てて籐部の集落がありそこには天神が祀られているが、その昔、天神に的を立て城よりのめがけて弓の練習を行っていたという。そこで天神のことを矢止め天神ともいう。

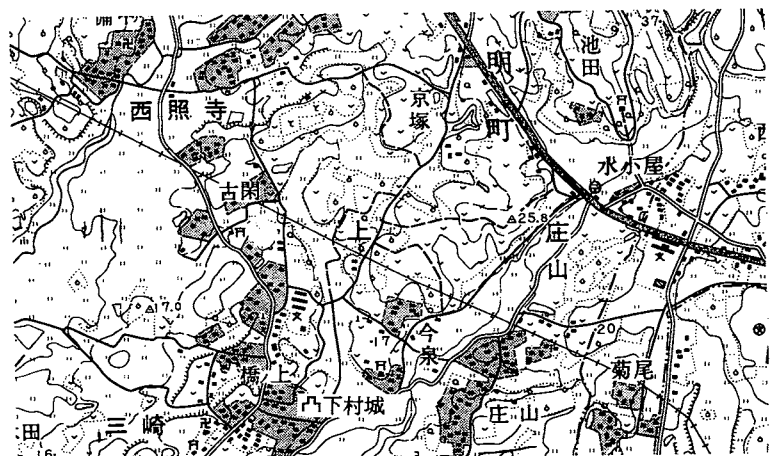
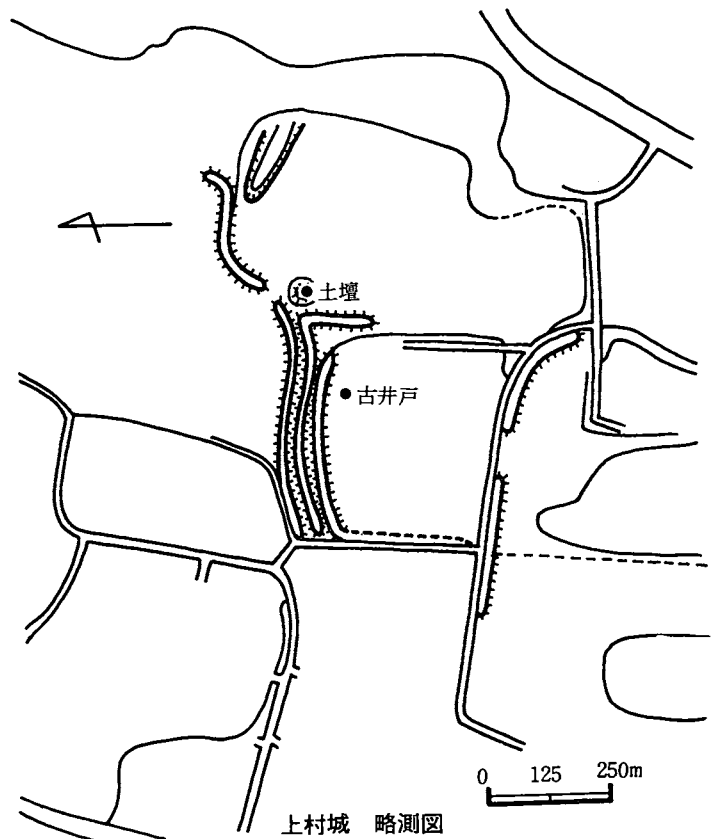
しもむら 下村城（内野城）

（玉名郡岱明町大字大野下字内野）

『新撰事蹟通考』に「齊院次親官能（齊院次官親能の誤り）鎌倉の命により、建久年中當国に下向し當城を築きて居り」という旨の記事が見える。一方、『肥後国誌』によれば、天正年間の始め頃龍造寺隆大野築城したものという。さらに同書は信が氏の居城説も合わせ記している。廃城期については両書とも天正十年（1582年）とある。

大野地区の丘陵地に開けた内野集落が城跡と伝わる。当該地は東西約170m、南北約100mの長方形の一区画であり、宅地や竹林から成っているが、周縁部には城跡としての面影をよく止めている。すなわち、現存する遺構としては、北縁を走る長さ110m・幅2mの土塁をはじめとして、南縁部に長さ30m、幅4m、高さ1.5mの土塁が観察される。とくに南縁部の土塁には、これを二分する幅1.4mの通路が鉤型に通っており、大手口の存在を示唆している。さらに東縁部については、長さ100mに及ぶ水濠が残っており注目される。この水濠は南端付近で大池を思わせるようにふくらみ、さらにこれから分岐して西側へ延びる溝となる。地元の話によれば、かつて集落は東縁部の水濠を除く三方すべてを土塁によって囲まれていたという。

一方、城跡内部は、ほとんど旧地形を止めないが観音堂（城跡南東隅）や古井戸が存在し、全面にわたって土師・瓦器・高麗系青磁の破片が散在する。本丸跡は、城跡北西側の松浦氏宅（城跡の最



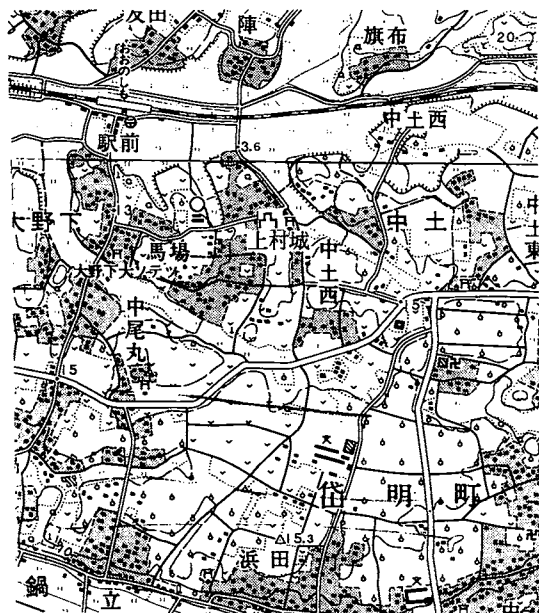
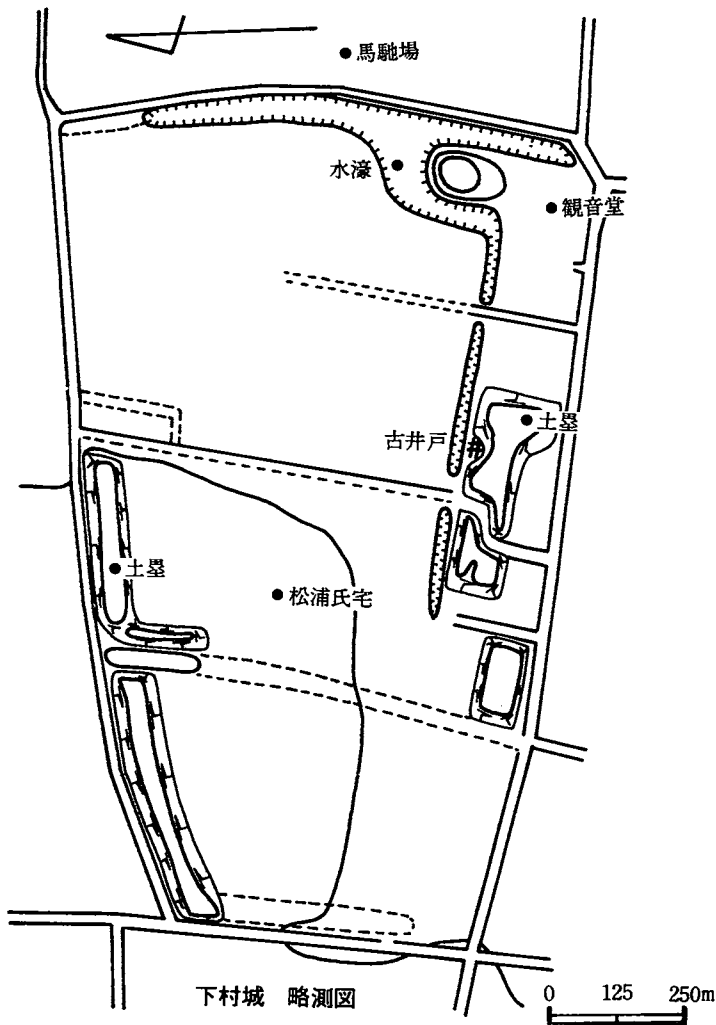
高所)とも言われている。

なお、城跡の東側一帯の畑地や水田は「馬馳場」だったと地元の人は伝えている。

(注1) 聖観音を本尊とする。堂前の一本榎の古木は築城時代のものという説がある。

(注2) 大手口と推察される土塁の内側に残る。素掘り井戸で大半は埋もれている。

(注3) ここで城兵が乗馬のけいこをしていたという。



日嶽城 (開田城)

(玉名郡岱明町大字開田)

大野氏が代々居城していたが、筒ヶ嶽城主の小代氏と不和となり、天正十年(1582年)領地境界線争いでついに交戦、小代氏に滅ぼされたという。

城跡は日岳の頂上部分(標高208m・開田の集落よりの比高約160m)と南麓の小城(こじろ)の小名を残す小山(標高92.4m・開田の集落よりの比高約50m)から成っている。

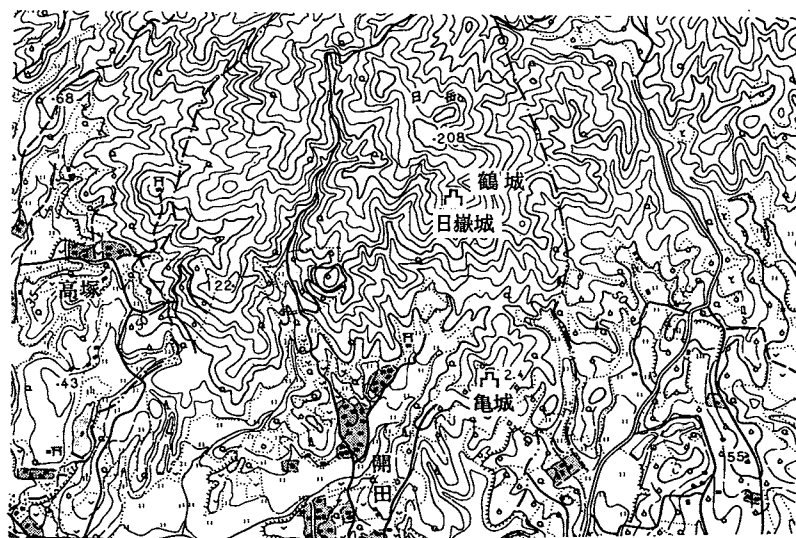
前者を鶴城、後者を亀城と称する。

鶴城 (字小代)

城床の小名を残す山頂部分に楕円形をした平坦地(東西25m・南北40m)があり、中央部に花崗岩の巨岩数個が約2.5mの間隔をもって2群に分かれ堆積する。

さらに城床より北側へ10m下った所には、長さ8m、幅5m程の半円形状の平坦地が観察される。

遺構は山頂とその周辺一部に限られるようである。



亀城（小城・浮城）

山頂部分は数個の巨岩が堆積しており、楕円形状の2段からなる平坦地（長径25m、短径15m）となっているが、北側部分を残し、その大部分はミカン園で開墾されているので遺構の状態は不明である。

しかし、山裾には城跡に関連あると思われるような平坦地や、土塁を伴う竪堀が数多く残っている。

つきじろうくにひで

築地次郎国秀館（陣内屋敷）（玉名郡岱明町下前原中宅地）

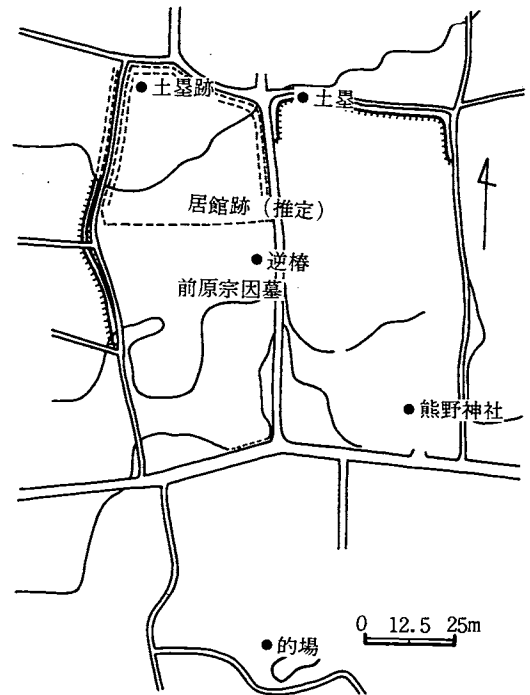
地元では建武四年（1337年）に玉名郡大野へ下向した紀国隆の二男築地次郎国秀が築いたものとされているが、一説には三男の前原蔵人秀親によるという伝えもあり定かでない。

館跡は下前原の集落内にあり、東西60m・南北50mの方形をした中宅地と称される一隅で、以前は南側を除く三方を土塁と堀がめぐっていたというが、現在は大部分が削平され一部が残るのみとなった。ここには陣内姓を名の一族が居住し、その前の道路沿いの土塁に「逆杖の椿」と呼ばれる伝説上の大木がある他、付近に「殿さん墓（前原さんの墓）」とよばれる墓標がある。

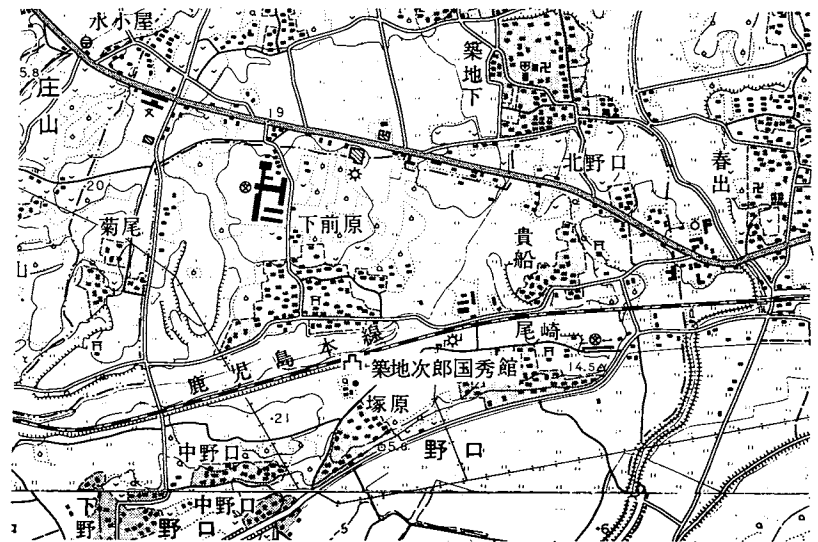
なお、館跡の周辺にも土塁の延長線が見られる所から、最終的に館跡に関連あると思われる遺跡の範囲は、東西140m、南北150mに拡がるものと思われる。

溜池付近に「的場」の小名が残るが、これはその当時、池の中島に的をおき弓を射た所と伝わる。

（注1）領主が外出先から椿の杖について帰館し、土に突きさしたままにしていたらいつの間にか芽をふいて育ったという。花が全部下を向いて咲くのが特徴とされる。



築地次郎国秀館跡 略測図

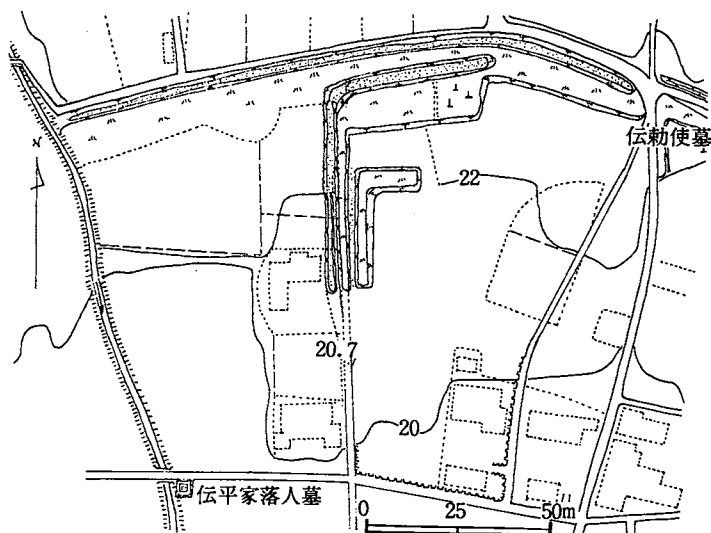


築地館（玉名市築地字陣内）

築地地区の字「陣内」に築地尚直の館跡と伝わる所がある。当該地は、小岱山南麓に開けた丘陵地の末端部にあたり、周囲を市道や小川に囲まれた扇形をなす一隅である。館跡としての顕著な遺構は北辺と西辺に大きな土塁と空堀が遺存する。一部は二重になっているようであるが、とくに西辺部分においては、その内側に鉤型の土塁も重複する。

館跡の内部は、尚直の子孫と語りつがれている築地すみえ氏宅とその敷地(柑橘園)で、当家には五輪塔数基分を含む歴代墓地をはじめ、刀剣類や古記録の類が数多く伝わっている。但し伝世品の多くは江戸時代のものである。

なお、館跡の北東側に「平家落人の墓」と称される五輪塔(1基)が祀られており、また別地点の南西側にも、「勅使墓」という安山岩系の自然石がある。地理的位置から、館跡と何らかの関連性を持つものであろう。表採遺物としては、瓦器・土師器・須恵器の破片があげられる。



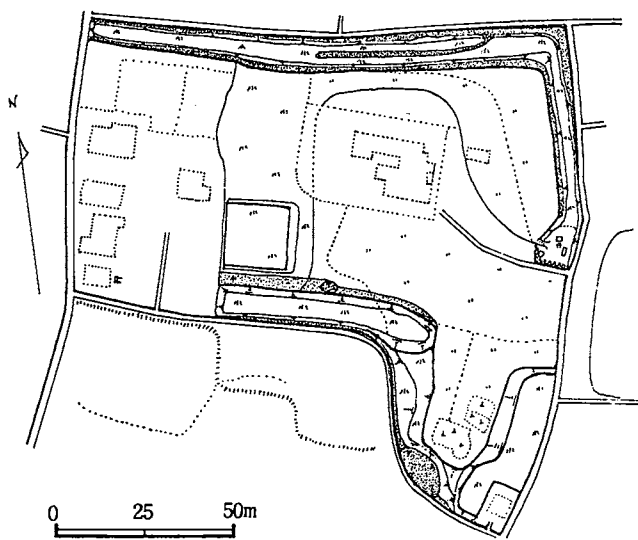
築地館 略測図

おおびさき 扇崎の館

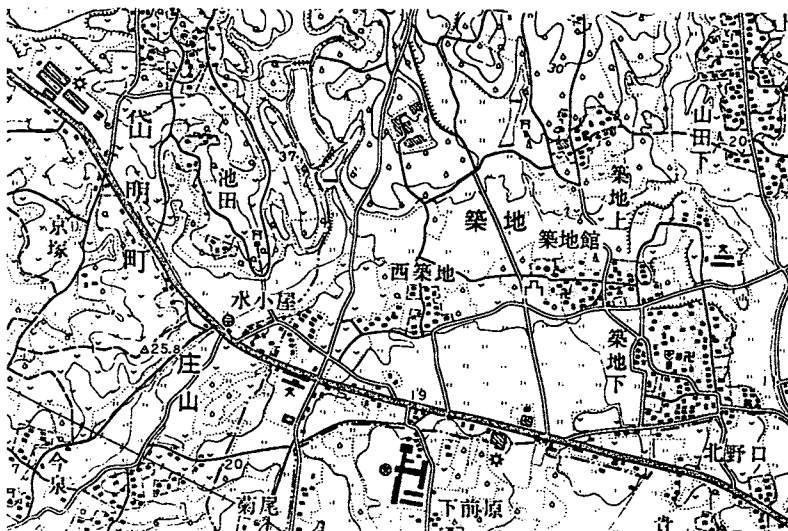
(玉名郡岱明町扇崎字明神尾)

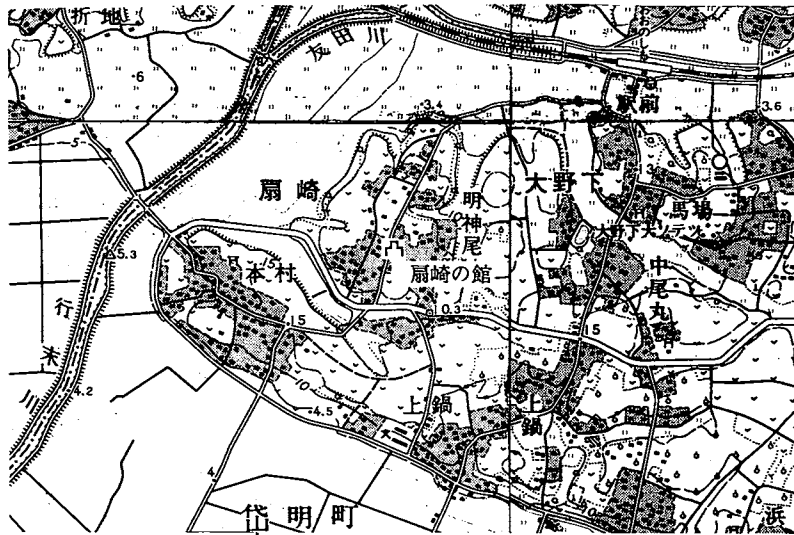
『玉名郡誌』によれば、扇崎北垣右京の居館という。

館跡は大野丘陵地の西端部に開けた明神尾集落に位置する。当該地は、東西方向に主軸を呈する長方形の一区画をなしているが、南東部分には舌状形の膨みを持つ張り出し部分がある。館跡としての顕著な遺構は、北縁を走る長さ130mに及ぶ土塁で、この土塁の内外の裾部には水濠も存在する。(東側寄りから中央部にかけては三重の水濠となっている。)さらに、この土塁は、東端で南側へほぼ直角に折れて、東縁を走る事になり、長さ68mを計る。そしてその先端部は高く広くなり現在、同地内には加藤清正の石祠等が祀られ「清正公、馬継ぎの椋」と称する巨木がそびえている。一方、南東側の張り出し部分は、東縁部が土塁、西縁部が「扇の池」と称される小規模な水溜となっている。なお、南縁にも土塁が観察されるが、その西端部の内側には、長方形の高台(長さ18m・幅15m)がある。館跡の中心地は荒木正憲氏宅と伝えられる。



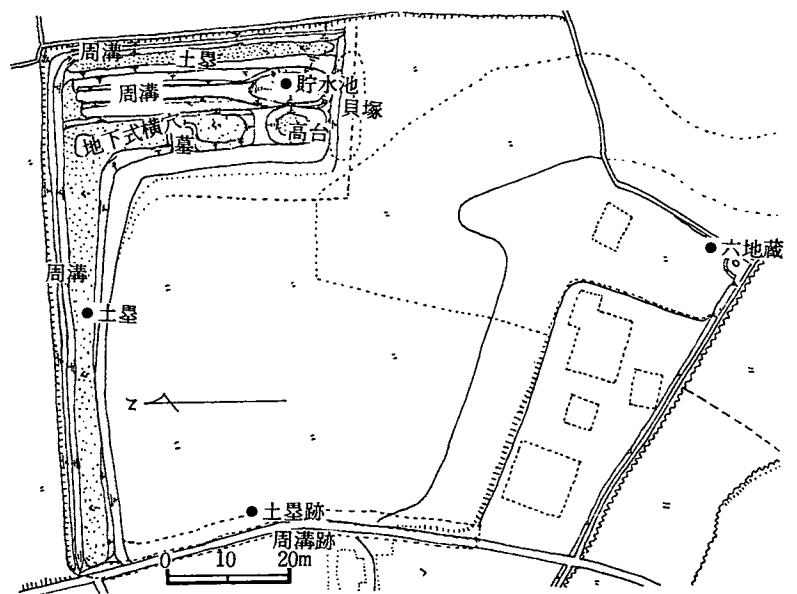
扇崎の館 略測図



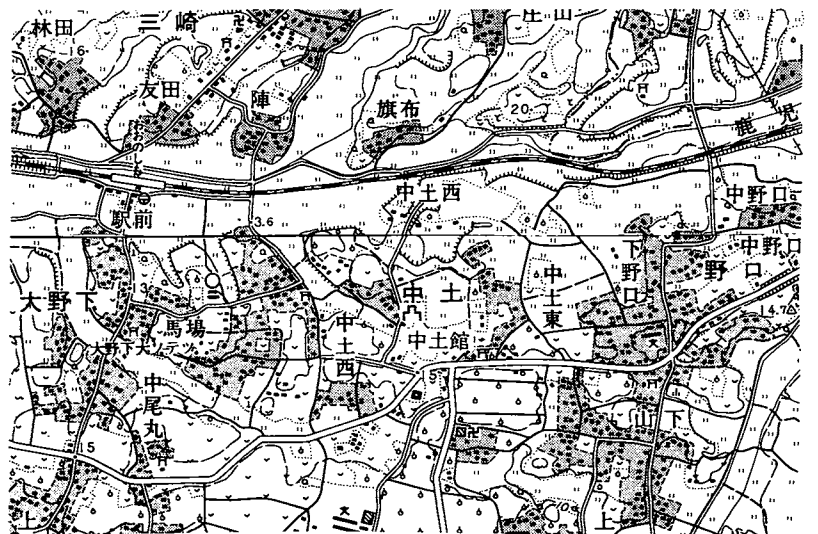


中土館 (玉名郡岱明町中土字寺前)

広汎な大野丘陵の中央北寄りに位置する字「寺前」の地内が館跡と伝わる。当該地は、崖(北側・東側)・民家(南側)・町道(西側)に囲まれた北辺81m・東辺87mのほぼ正方形をなす畑地で、東辺と北辺部分に館跡としての顕著な遺構を見出す事が出来る。すなわち、東辺の中央部より北側半分に、2条の大きな堀と土塁が走るのをはじめ、北辺にも1条の堀と土塁が遺存する。土塁のコーナー部分には地下式横穴(1基)も存在するようである。注目すべき事には東辺土塁の南端部に、約3㎡に及び、貝塚が確認される。貝塚には赤貝・うば貝・はまぐり等の一群と、いな等の一群とがあり、青磁・瓦器(大型)・釉陶・播鉢等の破片を出土する。同地周辺には、水溜とも思える凹地や、見張台状の下底3㎡・高さ2.5mを計る土壇も観察され興味深い。なお、館跡の内部は畑地に開墾されているので、遺構は何も観察されない。



中土館 略測図



小天城

(玉名郡天水町大字下有所字実山)

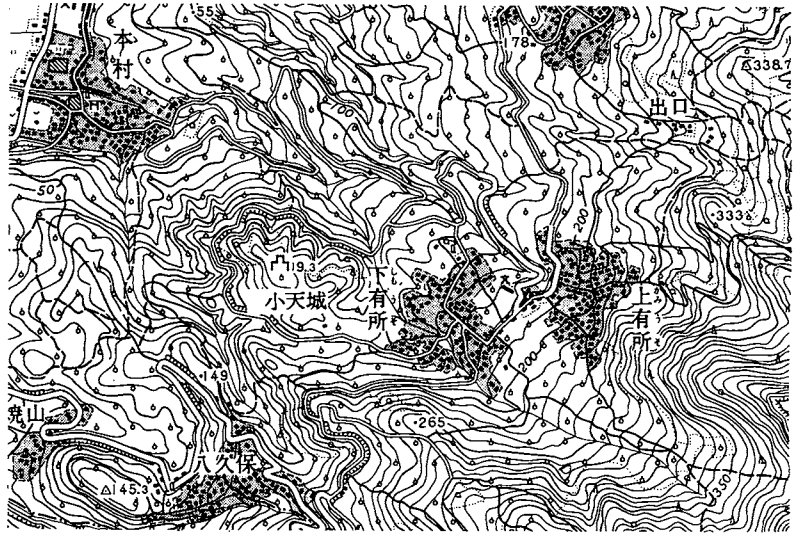
田尻氏が代々居城していたが、佐々成政方についていたため、天正十五年(1587)に成政失政のつがめを受け、一族自刃し廃城となったという。

下有所の西側に位置する実山(標高199m・下有所集落よりの比高約50m)が城跡と伝わる。

山頂部分は現在みかん園となっており遺構は観察されないが、以前は城の水源とも思われる「獅子の鎌砥」と称する常に水を湛えた所があったという。

一方、山頂部分より北西側へ6m程下った所には東西65m、南北40mの平坦地があり、周辺の斜面には豎堀(幅3m、深さ2.5m、長さ70m)をはじめ、削平によって造られた2段からなる平坦地(長さ23m、幅20m)も観察される。

なお、下有所の集落には田尻氏の館跡と伝えられる所(福島茂雄氏宅)があり、さらに実山の北西側麓に開けた小天本村には、田尻家の菩提所という久照禅寺跡も残っている。



(注1) 寺跡の観音堂の境内には6基の板碑と五輪塔の残欠部が見られる。内、3基の板碑については、永禄三年(1560年)・永禄六年(1563年)・弘治三年(1557年)の年号が刻まれている。

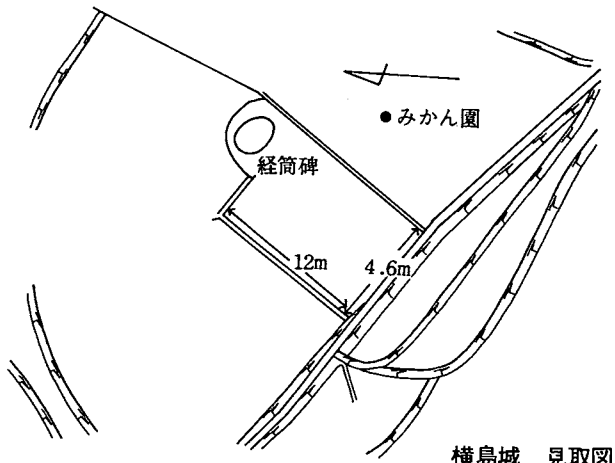
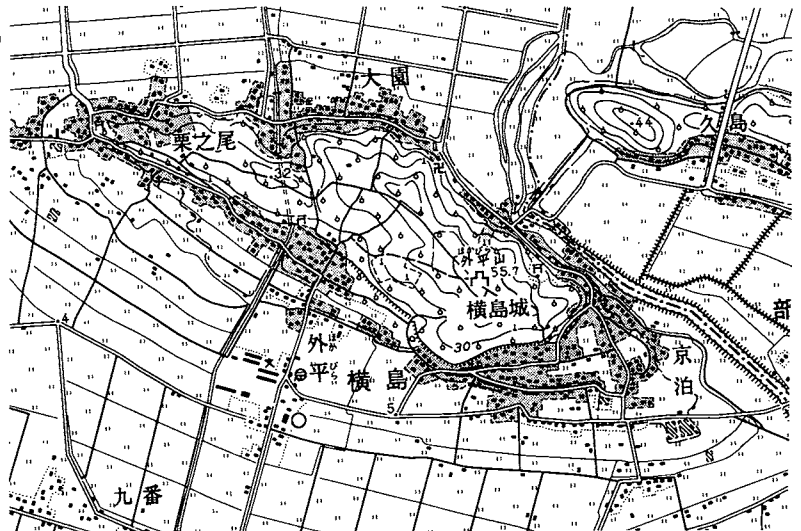
横島城

(玉名郡横島町大字京塚字辻)

『肥後国誌』によれば城主は加藤求馬之助という。一方、地元には加藤清正の築城計画説(加藤清正肥後入国後、地形的に最適地として築城準備に取りかかったが「横島」という地名が「邪」に通ずるとして忌み嫌いこの地を放棄して熊本城を築いたという)が伝えられている。

城跡は横島地区にあって「外平山」と称される独立丘陵地の東側部分(標高55.7m)に位置する。当該地は、現在、周囲を広々とした水田に囲まれているが、天正中期頃までは海中に孤立した島であったという。それが、加藤清正の治水・干拓工事で水田になったと伝えられる。城跡とされる中心地は、現在整備されて公園化されている。面積は約50㎡である。

しかし公園を除いた周辺は全面柑橘園となって地形が大きく変わっている事もあって、城跡に関連した遺構は何も認められない。なお、丘陵地の斜面はいずれも絶壁をなし、北側麓を唐人川が流れている。この川は城の外濠になったとも伝えられる。



横島城 見取図

(注1) 経塚の碑がある。碑そのものは昭和6年に建立されたものであるが、経塚については次の伝承がある。

「唐人川、石塘の汐留工事の際、難工事であった。人柱を立て、山上より僧の読経で工事を進めついに完成させたという。経塚は経巻を埋めた所という。」

赤崎城

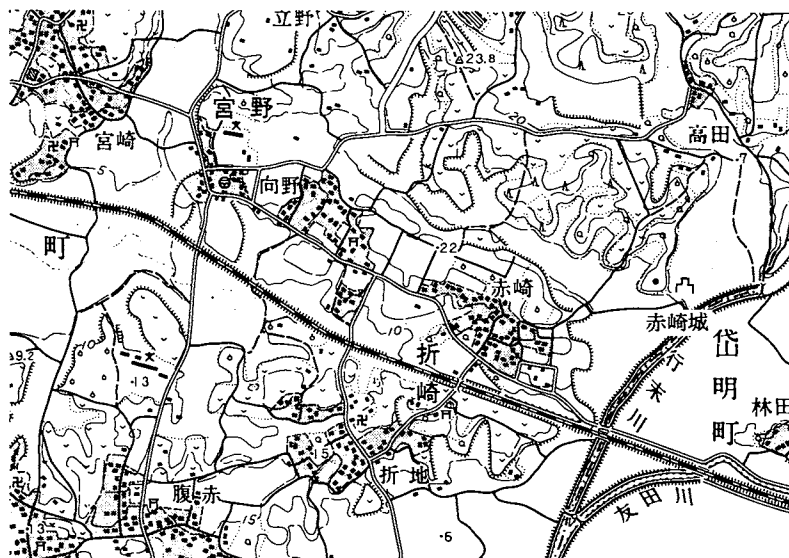
(玉名郡天水町大字部田見字城ノ平)

『古城考』に「齊院次官親能、右大將家の命に依て、當郡下村に下向して、居城を構へ、後又當城を築きて、移り住すと云、元龜天正の比には、龍造寺隆信、丘を率して當城を攻落す。其時は小代か出城也しと云ふ」という記事が見える。

城跡は、部田見地内「城ノ平」という字名を残す舌状形の丘陵地末端部（南西方向に主軸を呈し、標高15.9m）に位置する。丘陵の背面は、最高所に位置する楕円形状の平坦地（長径40m・短径20m）をはじめ、これより、南西側へ5m下った所に幅2～3m・長さ25mを計る曲輪的な階段状地形が存在する。段差面には削り落しも認められる。

丘陵の麓は、野首にあたる北東側を除く三方いずれも、「大野牟田」と称される湿田地帯となっている。なお、この温田をはさんで南西方向300mには、城跡に関連あると思われる赤崎の集落が開けている

(注1) 集落内に「東屋敷」という小名を残す一隅がある。



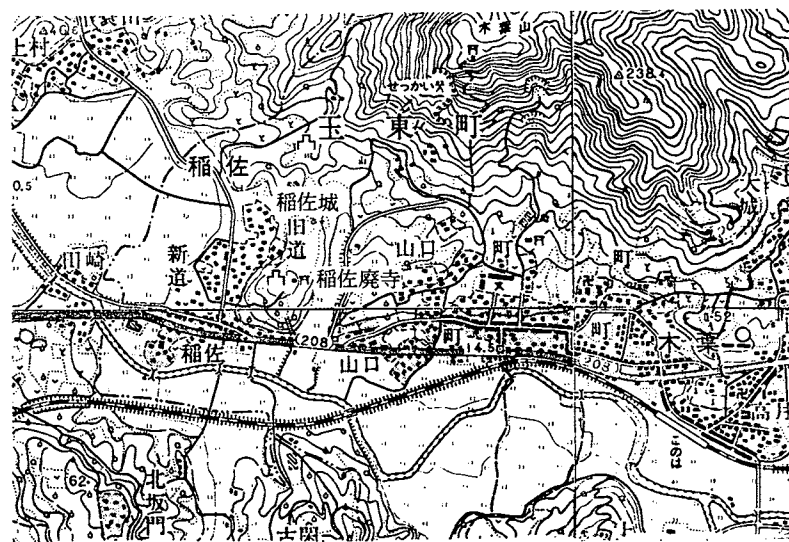
稲佐城 (玉名郡玉東町大字稲佐)

『古城考』に城跡名の記載があるが、「城主年代不分明」という記述がある。また『肥後国誌』には「城跡二か所アレノモ(後略)」という記事が見える。

稲佐地区採石場の南西側麓に位置する山稜末端部（標高40m・南側麓の水田面よりの比高30m）が城跡と伝わる。当該地は、ミカン畑であったが使用されておらず現在荒地となっており、遺構の確認は困難である。全体的に城跡の感じはしないが、西側部分のいわゆる野首部分に幅4～5m、長さ20m程の堀切らしい溝があり、城跡唯一の遺構となっている。

また、南西方向に位置する集落には「陣内」という呼称があり、城跡との関連性が窺われる。また、当該地の南方向400mに位置する「県指定史跡」の丘陵（標高40m・南西側麓の集落よりの比高30m）もその地形から城跡ではないかという。

さらに、人の手が加えられていない北東側の斜面部には、土塁を伴う堀切が存在する。外観的には城跡より、館跡としての色彩が濃い。



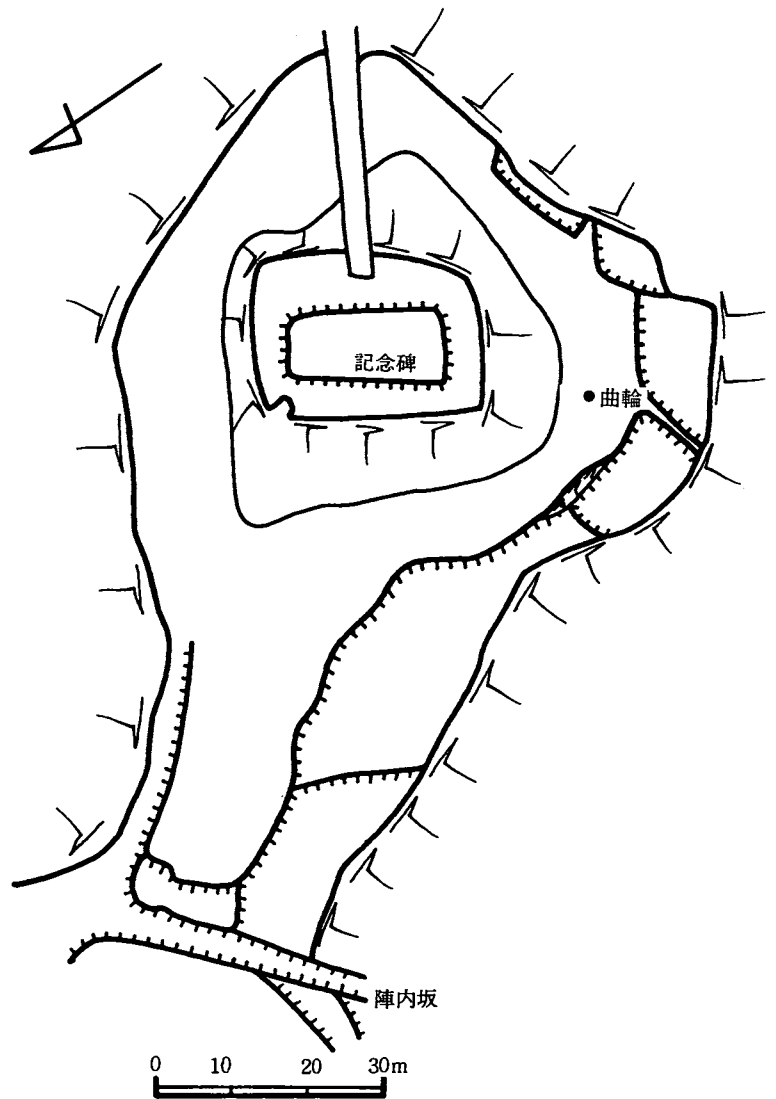
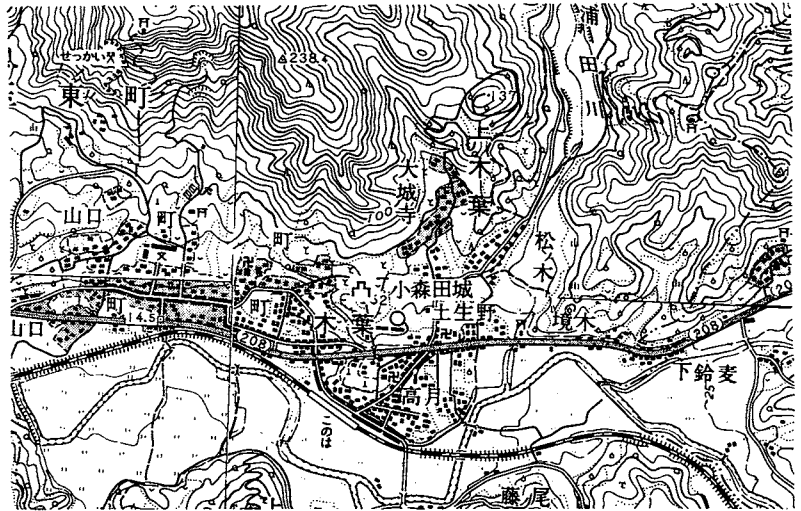
小森田城 (玉名郡玉東町大字木葉字陣内)

城主は宇都宮隆房という。城は戦国末期になって加藤清正に攻め落されたと伝えられるが、その時の城主は伯耆左兵衛の家人、伊津野十郎とも小森田将監ともいう。

城跡は木葉山（標高238.4m）の南東側末端部の丘陵地（標高48m・南側麓の高月の集落よりの比高約28m）に位置しており、公園化（一部・畑地）されている。

丘陵地は南西方向に軸を呈するもので、背面に長方形の高台（長径30m・短径22m・高さ1.5m）があり、周囲には曲輪的なものが巡っている。これはそのまま同一レベルで北東側の鞍部へ延びる。鞍部には陣内坂と称される幅9mの堀切が存在する。城跡より、西側150mの所にあつて「陣内」と称される集落には小さな観音堂があり、真黒に焼けた仏像が安置されている。「この仏像は城が落ちた時に持ち出したもの」と古老は語る。

城跡は西南戦争の戦場跡でもあり、高台には有栖川宮の記念碑が建立されている。



小森田城 略測図

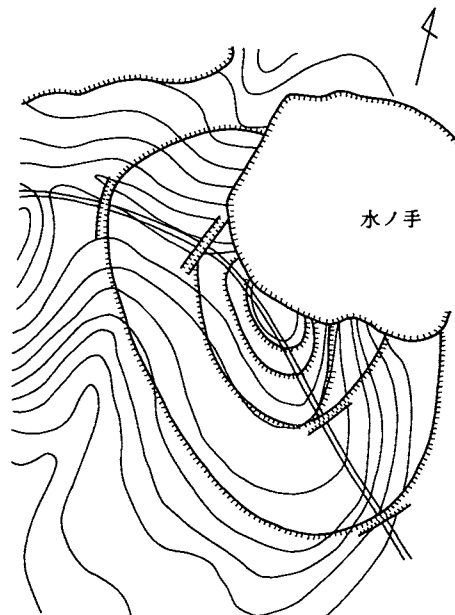
荒尾市

万田城 (袴嶽城)

(荒尾市大字原万田字袴岳他)

『古城考』によれば小代氏の築いた城跡という野原八幡宮歳事簿、応永13年(1406年)の条には、「探題渋川満頼二依召御陣」とある。

袴岳と称される山稜(標高124.4m)が城跡と伝わっているが、当該地は三井鉱山の所有地で昭和15年、万田鉱の石炭採掘によって、山頂部分から北東側一帯の山腹を大きく削り取られ、さらにその残存部についてもその大半が近年、三井グリーンランド・ゴルフ場となった。したがって、現存する城跡関連の遺構としては、山頂周辺部の北西側と南東側の尾根筋に残る2条の堀切(底幅2m)のみである。



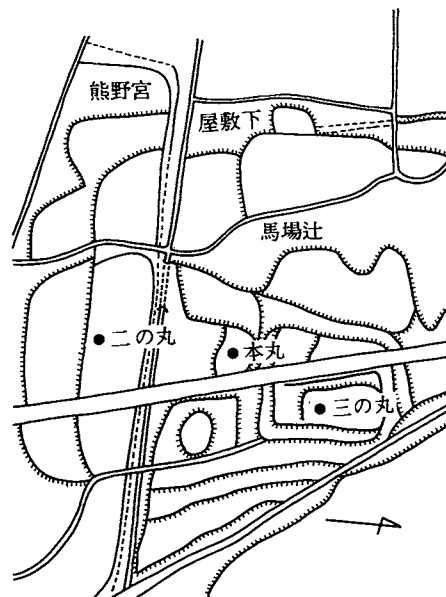
万田城 見取図



六反城

(荒尾市大字宮内出目字大門他)

城主不明。国道208号沿いの浦川・大門・穴町の三地区に「本丸」・「二の丸」・「三の丸」の小名が残っており、これを含めた範囲が『古城考』等という「六反城跡」ではないかと考えられるが、荒尾市街地という条件下にあるため開発が進み、城跡に関連あると思われるような遺構は観察されない。



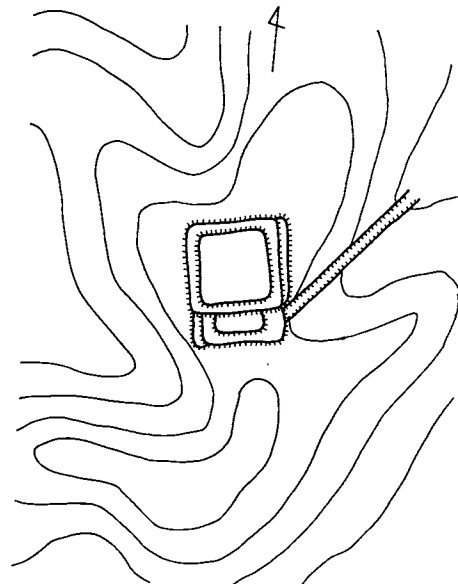
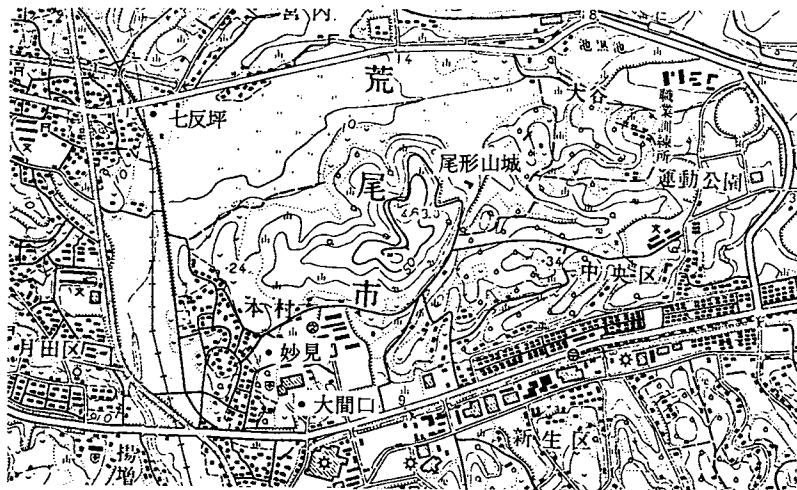
六反城 見取図



おがたやま
尾形山城 (荒尾市荒尾町大字荒尾字南尾形山)

『肥後国誌』によれば小代八郎が築いたものという。後には小代家臣の平山惟久が在城したらしい。

城跡は、尾形山と称される独立山稜（標高63m）に位置しており、山頂周辺に「城床」という小名が残る。当該地は、全面矢竹が密生しており遺構の確認が困難であるが、幅2m・深さ3m程の空堀によって、周辺を取り囲まれた長方形の平坦地（東西56m・南北43m）が観察される。遺構はこの山頂部分のみに限られるようである。しかしながら、南西側麓の本村には「大門口」・「妙見」の字名をはじめとして、「山ノ神屋敷」・「小屋敷」・「大屋敷」と称される一連的の館跡が残っており、城跡との結びつきをうかがわせている。



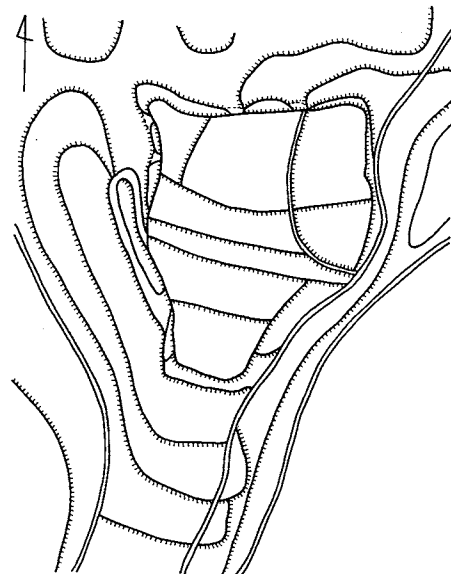
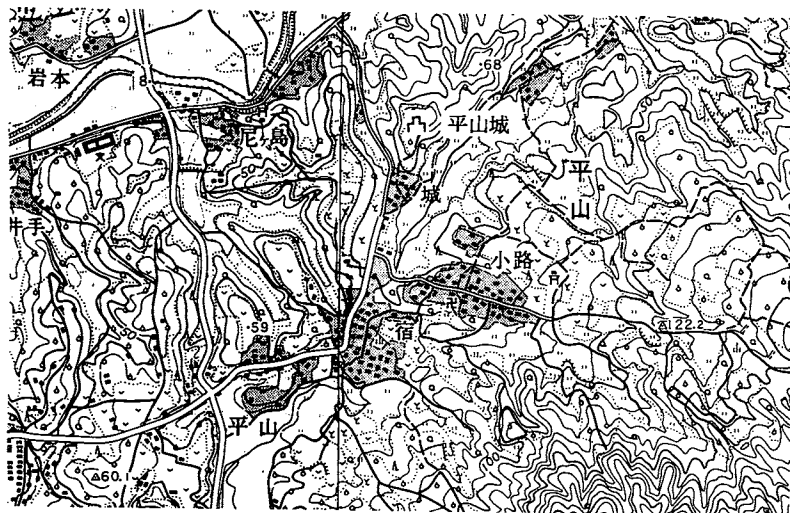
尾形山城 見取図

ひらやま
平山城 (荒尾市平山町大字平山字城)

『古城考』によれば城主は小代家臣、堀切種藤という。

城集落の北側に位置する丘陵地末端部（標高60m・集落よりの比高20m）が城跡と伝わる。当該地における最高所は広い平坦地（東西140~150m・南北200m）となっており遺構は何も認められないが、かつては、同地内の一隅に空堀と土塁に囲まれた長方形の平坦地（6m×50m）が存在したという。この地を均した時に、等間隔に並ぶ根石の配列が現われたとも伝えられる。一方、丘陵地の斜面部は南側へ緩く下が、この部分には、幾段にも重なる階段状地形が観察される。

城跡及び集落には、「城の下」・「市場」・「陣屋敷」・「小路」・「大蔵」という字名が残っている。



平山城 見取図

井手城 (荒尾市本井手・打越)

城主不明。

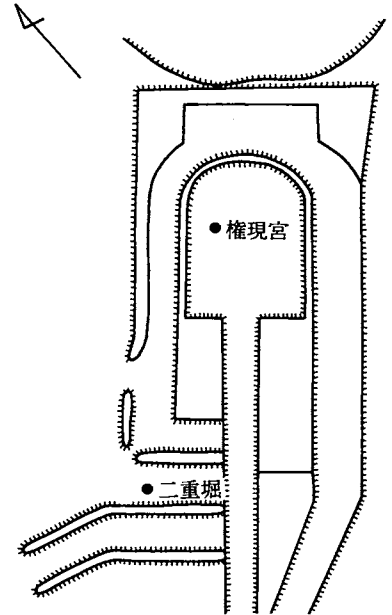
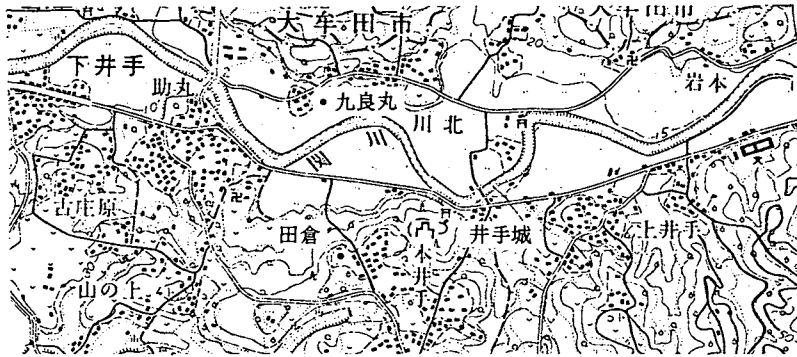
北側麓に関川を望む丘陵地北端が城跡と伝わり、地元では「権現さん山」(標高約40m・関川よりの比高約25m)と称する。現在、「権現宮」の境内になっている。

境内は東西30m、南北40mの広さを持ち、南側を除く三方は高さ0.5m程の土塁がめぐる。

境内の入り口には自然の迫を利用した大きな堀切(幅10m・深さ約5~6m)がはいており、その南側には幅3m、深さ1m程の浅い二重堀が重複する。

なお、二重堀のうち的一条は、丘陵地裾部を北東方向に走る空堀と交わる。

城跡から200m程離れた田倉の集落の入り口には「大門口」の小名が残り、本田正俊氏宅には高さ2mの土塁がめぐっている。



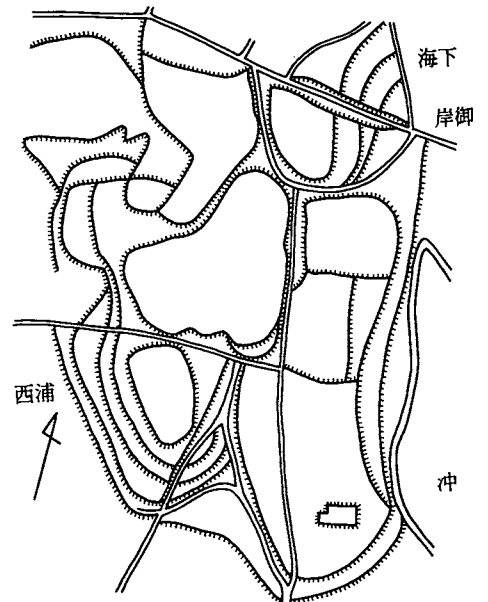
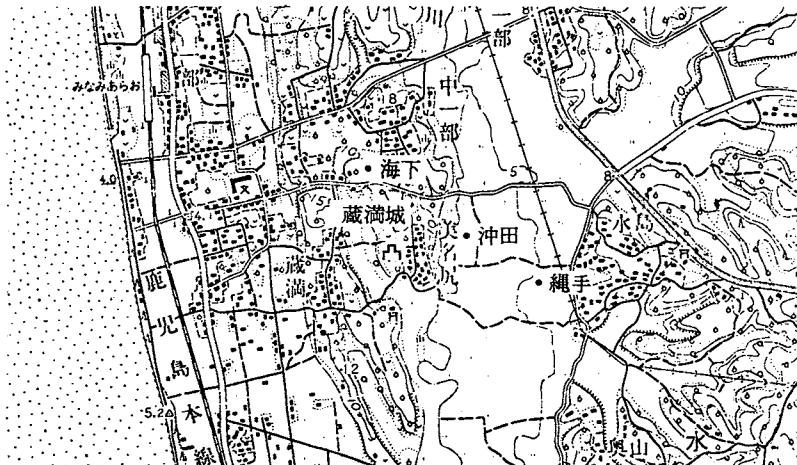
蔵満城 (荒尾市蔵満町大字蔵満字美名尻)

井手城 見取図

『肥後国誌』によれば、蔵満氏(小代氏一族)代々の居城という。

城跡は、美名尻地区の丘陵地末端部(標高13m)に位置する。丘陵地の背面は広い平坦地となっているが、家屋が建てこんでいる為に遺構の確認が困難である。したがって確認出来る遺構は、丘陵地先端部寄りにわずかに残る堀切のみである。なお、城跡の中心地と思われる所は現在、天四柱神社と蔵満公民館の敷地となって旧地形を止めない。

また、城跡周辺には、「じおんどん」、「どくどんさん」という小名を残す所があり、とくに「どくどんさん」については周辺に空堀がめぐっていたという。(今もその一部は現存する)



蔵満城 見取図

つつたけ
筒嶽城

(荒尾市府本字小代)

『古城考』によれば、文治元年(1185年) 將軍頼朝から野原荘を賜り肥後国に下向した武蔵児玉党しょうだいやまひらが築城したものである。その後は、小代氏代々の居城と伝えられる。

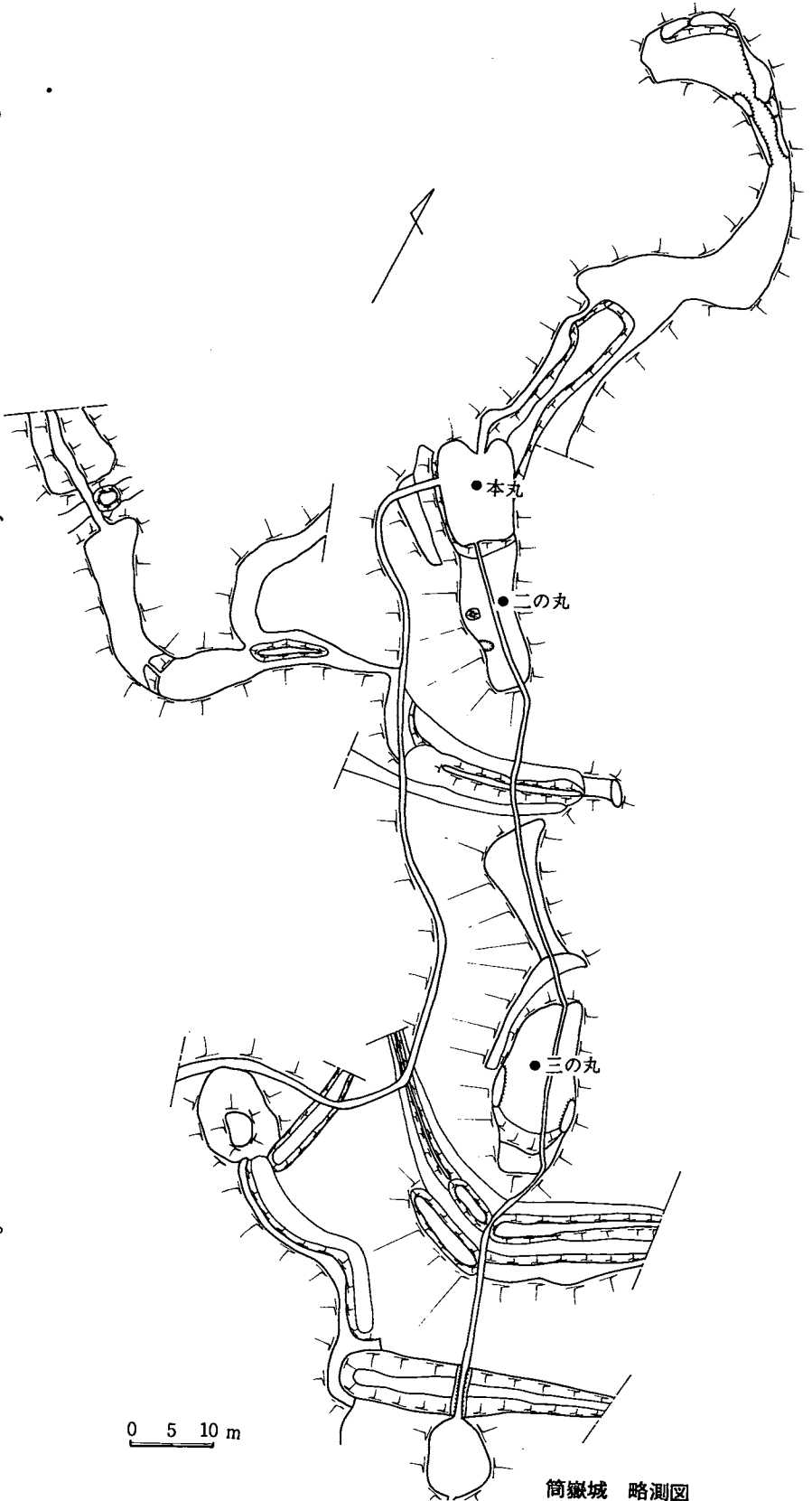
城跡は、荒尾市と玉名市をまたぐ「小岱山」山系にあって、「筒ヶ岳」と称される標高501mの最高峰に位置する。山頂部分は長方形の平坦地(南北方向に主軸を呈し、長径25m・短径17m)で「城床」しろどこ「本丸」という呼称が残っている。現在、この地は城権神社が祀られており、西側斜面には、高さ1.5m、長さ25m程の石塁が観察される。南端部分は、約1mの段差を挟んで、南側へ帯状形の平坦地(長径31m・短径12m)が延びる。ここには、篠芽竹が群生しており、財宝を収めた底なし井戸の蓋石と伝えられる巨岩がある。地元では、この区画を「二の丸」と称する。さらに、城跡に関する遺構は南側へ長く延びる尾根筋に数多く認められる。すなわち、「二の丸」の南端より17m下った所に第一の堀切がある。堀切は二重堀となっており、間には、長さ35mの土塁が観察される。堀の底幅はいずれも3mを計る。

この第一の堀切より南側へ50m進んだ所に、「三の丸」と称される楕円形の平坦地(長径30m・短径17m)が存在する。東西両縁の一部には土塁(長さ10m)も付随しており、南端部分には土壇状の高台がある。

高台の南側には第二の堀切がはいっている。完全な二重堀で、土塁も2条を数える。堀の両端はいずれも豎堀となって山稜斜面を下っている。

第二の堀切より南側へ22mの所に第三の堀切が観察される。造りは最も顕著で、堀底も極めて整形されている。さらにこの堀切は、西端部分で北側に大きく曲り、空堀となって山稜斜面を走る。しかし、再びその北端で今度は北東方向に向きを変えて、豎堀に変化する。注目すべき事は、二箇所二箇所のコーナー部分で、堀は一坦、切れており、連続的に繋がるものではない。何か意味のあるものであろうか。

第三の堀切の南側は楕円形の平坦地(長径17m・短径15m)となっている。これより南側の尾根は、極端にくびれて幅1m足らなくなる。城跡の南限はこの楕円形の平坦地までのようである。城跡周辺の谷間には岩清水が豊富である。



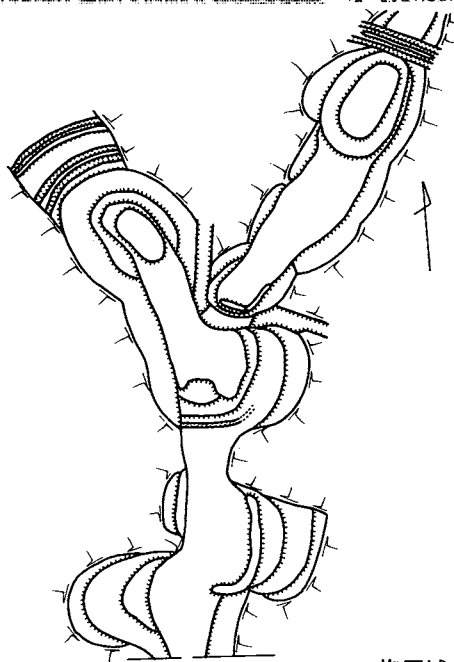
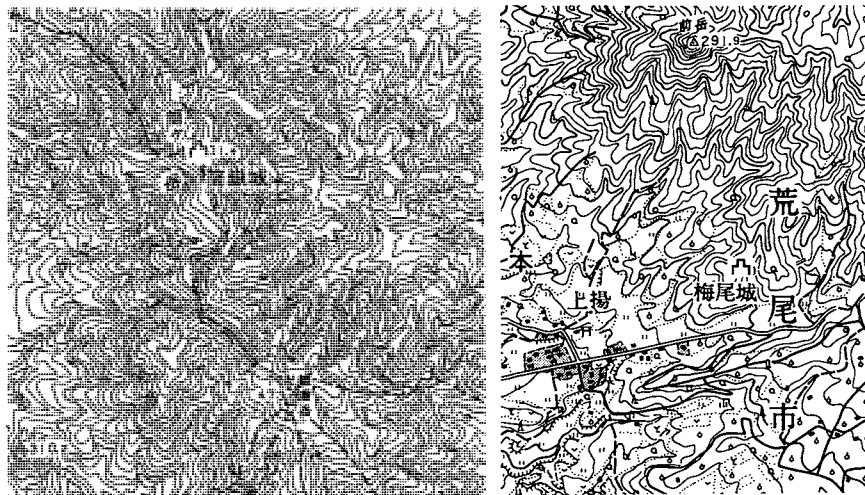
筒嶽城 略測図

梅尾城 (荒尾市府本町山田)

『古城考』によれば、城主は小代行平という。佐賀県史料県成田尻文書等に城跡名が見える。

城跡は、小岱山の西方末端部(標高147.3m・南西側麓の畑地よりの比高70m)に位置する。当該地は、小岱城への登城口を有する府本町に所在する事から、一般的に、小岱城主の平時における居住地と見なされている。

山頂部分は、南北方向に延びる尾根となっているが、その北端部は北西方向と北東方向の二又に分かれており、最終的には、Y字形の形状を呈する事になる。顕著な遺構としては北東方向に曲る尾根の基底部に堀幅7~8mの堀切があり、地元の人はこの堀切で仕切られた帯状形の独立区画(長さ100m・幅20m)を「馬かけ場」と呼んでいる。さらに、北西方向の尾根の先端部は、若干の緩傾斜となり、これを断切る意味で底幅4.5mの堀切がはいっているようである。なお城跡周辺には「殿の屋敷」「土井内」「古屋敷」というような地名を残す所がある。「土井内」からは中世期のものと推定される雑器片が出土する。



梅尾城 略測図

田次郎丸館 (荒尾市原万田浦田)

『肥後国玉名郡村嘉玉名郡原万田村の項の「田二郎丸館」に、「村の中央字浦田にあり。東西三十間、南北十七間にして、二間余高し、四方二重の堀跡あり。中土井藪にて、東南の方宅地、西北の方耕地となる。(北の方田地西の方畑地また東西の方曲輪の堀跡あり) 袴塚の城主常の屋敷という。』という記事が見える。

当該地は荒尾市より大牟田市に通ずる国道208号の大牟田市境近く東側に位置する。同地点は荒尾市街地背後の袴塚の山麓が北へのびた緩かな微高地(裾部との比高5~6m)上で、遺跡の形状は居館跡と伝えられる高地と、二重の周濠の内外濠底は積土されて畑地となり、内濠との間の土塁の内濠底も土がたまり竹な



田次郎丸館 見取図

どの密林となっている。内濠の西側は国道工事のため埋立られ、現認できない。その他の地域は低平な畑地であり、住宅が建築されつつある。(三島格「伝田次郎丸居館址・周濠・東光寺」九州考古学27より引用)

(注2)

(注1) 圭室謙成・田辺哲夫「肥後国玉名郡村誌」昭和33年

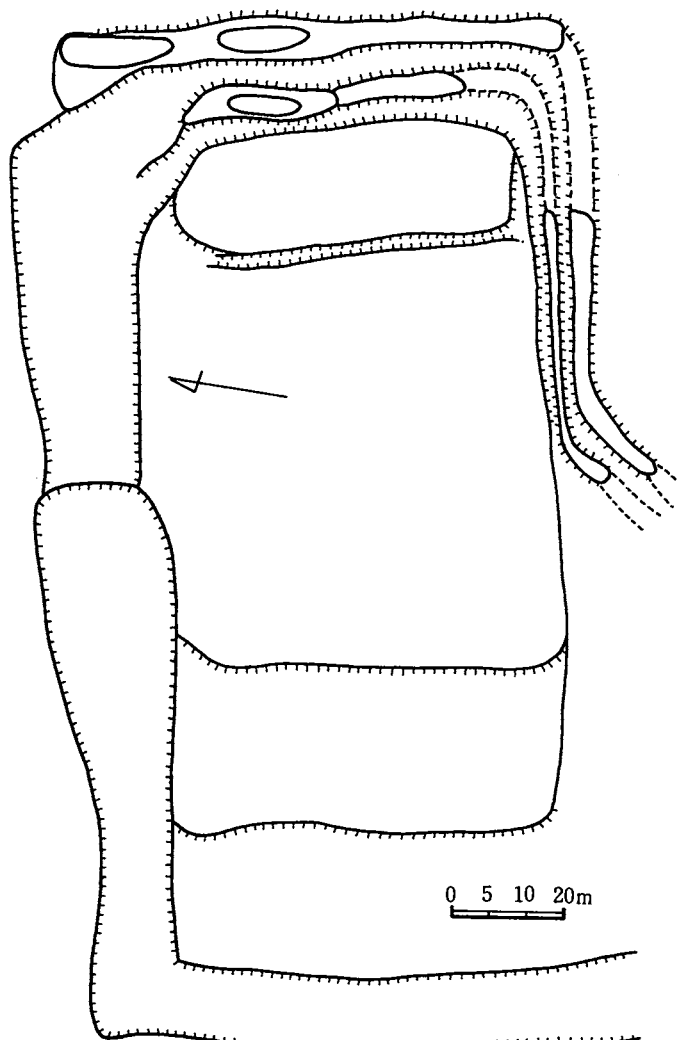
(注2) 荒尾市教育委員会・同市文化財専門委員会の昭和39年度の調査事業の一つとして昭和39年11月20日より同月23日まで調査が実施された。

大園山館 (荒尾市大字一部字大園・杉谷)

一部地区と増永地区をまたぐ丘陵(標高30m・東西400m・南北800m)に「大園山」という呼称があり、地元の人々は、とくに丘陵の南西端部分を「大園さんの屋敷跡」と称している。当該地には、周囲を空堀に囲まれた屋敷跡と考えられる平坦地がある。平坦地は東西110m・南北50mを計るほぼ方形のものであるが、内部は丘陵が全体的に西へ緩傾斜をなす関係で、若干の段差がついて、3区画に大別される。中心をなすと思われる区画は東西70m、南北50mの範囲で、ここは土師質土器片と貝殻の散布地でもある。一方、平坦地の東側と南側を取り囲む空堀は土塁を伴う二重堀となっており、遺跡内における最も顕著な遺構である。さらに平坦地の北側と西側も窪地となり堀状の形態を呈するが、前述の二重堀程には、顕著な造りを示さない。

当該地は、伝承どおり屋敷跡としての様相を呈しており、周囲の住民には大園姓を名のる人が多い。

昭和52年度事業として、大園山に荒尾市立有明小学校が建築される事になり、県文化課と荒尾市教委との間で協議が重ねられ、出来る限り、校舎部分を遺跡からはずす事になった。また、やむを得ず破壊される部分については昭和52年6月から8月までの3カ月間にわたって記録保存の為に発掘調査が行われた。(団長・三島格)。発掘の成果は荒尾市教委から調査報告書を刊行の予定である。



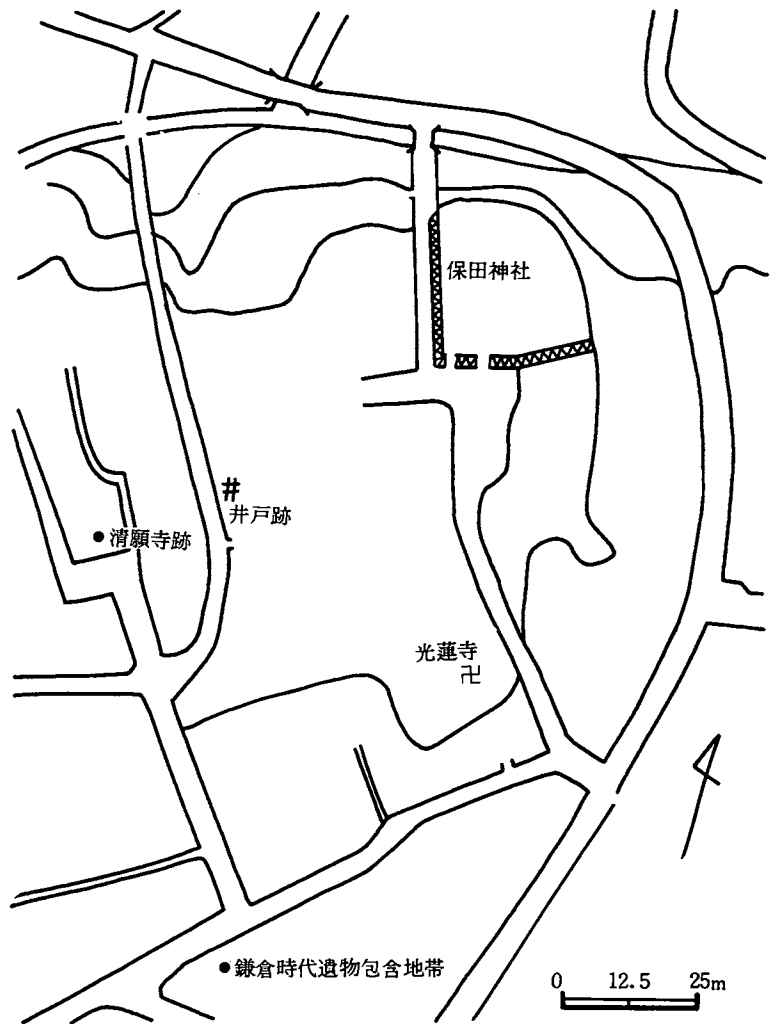
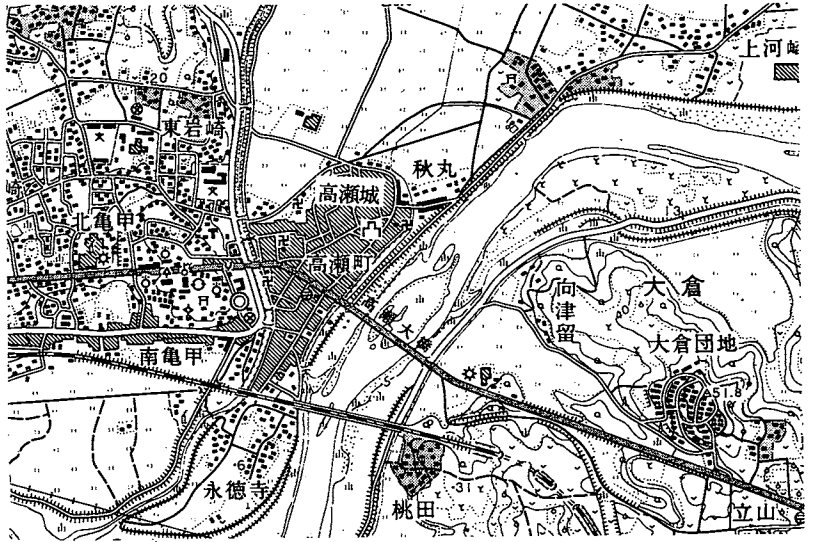
大園山館 略測図

玉名市

高瀬城（保田木城）（玉名市高瀬町保田木）

『古城考』によれば、高瀬氏(菊池一族)代々の居城という。廃城期については、11代目の城主、武基が、文亀三年(1503年)、菊池本家の宇土攻めに参戦して戦死した後と思われる。同書に「武基、於宇土死してより、後の城主を不知」という記事が見える。

高瀬町の最東端にあって、現在、保田木神社の社地となっている独立小丘陵(周辺よりの比高6m・面積約610㎡)とその周辺一帯が城跡と伝わる。当該地は町中という条件下にあるため顕著な遺構は何も観察されないが、ただ、神社の北側崖下を東西方向に走る「十左衛門堀」については、江戸時代に城の堀を改修して用水路にしたという伝承がある。一方、神社の南側周辺からは、昭和48年の水道管敷設工事の際に、「貝殻類(淡海産)・青磁片(多数)・木箸(無数)・材木断片(10数本)・家屋木片(多量)・宋銭(14枚)・大獣骨・鯨骨(10数個)」が出土している。その他、高瀬氏の菩提寺跡には古井戸が残っている。なお、城跡には江戸時代に町奉行の屋敷がおかれたともいう。



高瀬城 略測図

- (注1) 築城主と伝えられる武尚と少彦名神を合祀する。また清源寺の遺物や仏像・孔子十哲像その他を神殿内に蔵する。また神社の社地は貝塚(縄文・阿高・西平・弥生)でもある。
- (注2) 武尚が固山一鞞を開山として招いたという。
- (注3) 清源寺の井戸と称する。現在も使用中、上縁は切石で矩形に囲む。普通の井戸の2倍はある。下の方は楕円形状の素掘りである。

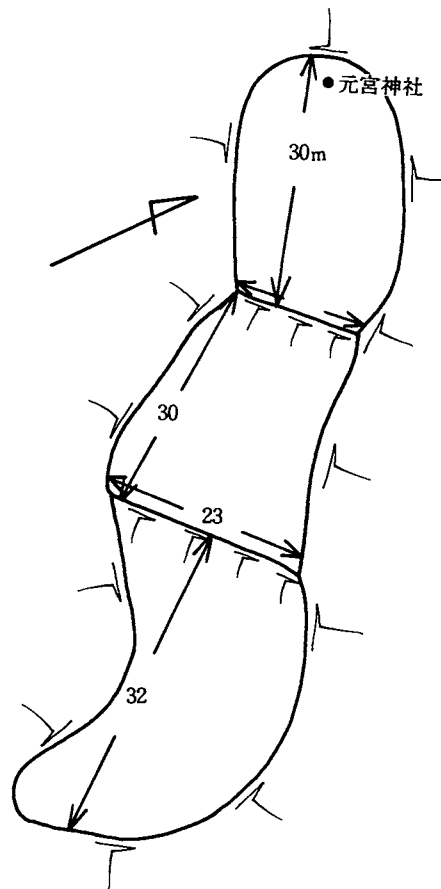
みぞがみ

溝上城

(玉名市溝の上町字城の原)

城跡は、溝上集落の北側にあつて「城の原」という字名を残す丘陵地末梢部(南東方向に主軸を呈し、標高60m・南東側麓の水田面よりの比高45m)に位置する。丘陵の背面は北西側寄りに最高所があり、半楕円形状の平坦地(雑木林・長径30m・短径19m)を中心に、南東方向へ階段状に下る2段の平坦地が観察される。段差は上段から下段へ順次、0.4~0.5mと2mを計り、さらに形状(規模)は、台形状(桑畑・北西側上辺19m・南東側下辺23m・幅30m)と舌状形(桑畑・長径32m・短径23m)を呈する事になる。当該地の周辺はいずれも急傾斜で、天峯の急激な崖となっている。なお、丘陵地の南下谷には、古い凝灰岩切石で囲いがなされた湧水池があり、これは現在も使用されて、溝の上平野をうるおしている。

(注1) 北寄りに若宮神社があるが、これは土地所有者が昭和9年に創建したもので、城と直接の関係はない。



溝上城 見取図

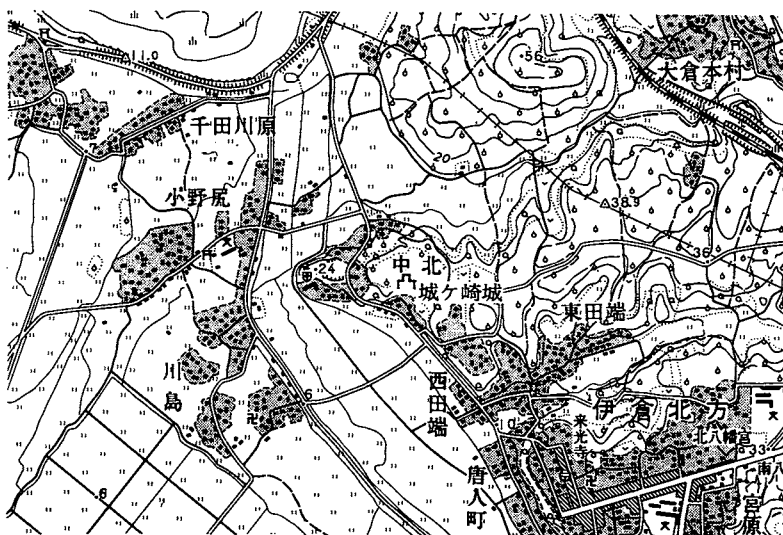


城ヶ崎城

(玉名市北方五社)

『玉名郡誌』によれば、阿蘇家臣、田尻道種の居城という。

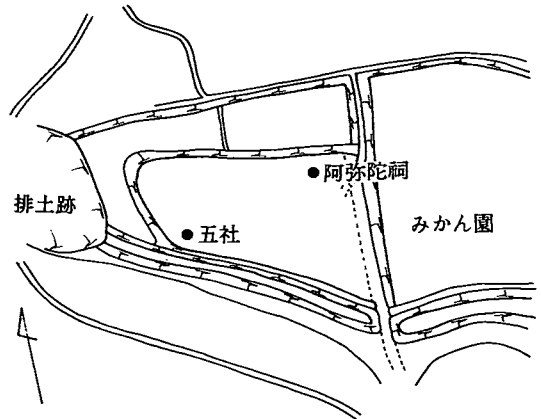
城跡は、「伊倉→中北」集落の北西側にあつて、「城ヶ崎」という字名を残す丘陵地末梢部(標高30.1m・南側麓の水田面よりの比高26m)に位置する。丘陵の背面は舌状形の平坦地(東西方向に主軸を呈し、長径32m・短径18m)となっている。また、南縁部には長さ20m・幅1mの土塁(最高部1m)が走る。一方、東側の野首部分は、若干の段差をもちみかん園となっているが、その南北両端はいずれも凹道となっている事から、かつては、この段差面を横切る堀切が存在したと思われる。野首部分を除く城跡



の周辺は、いずれも開墾されてみかん畑となっているため遺構の確認は難しい。

なお、城跡には三つの石祠が祀られている。当該地は貝塚(注1)でもあり、(注2)

- (注1) 内、一つは「五社さん」と称されており、これは地名の由来にもなっている。
- (注2) 弥生時代前期の一大貝塚、古墳の存在も推定されている。



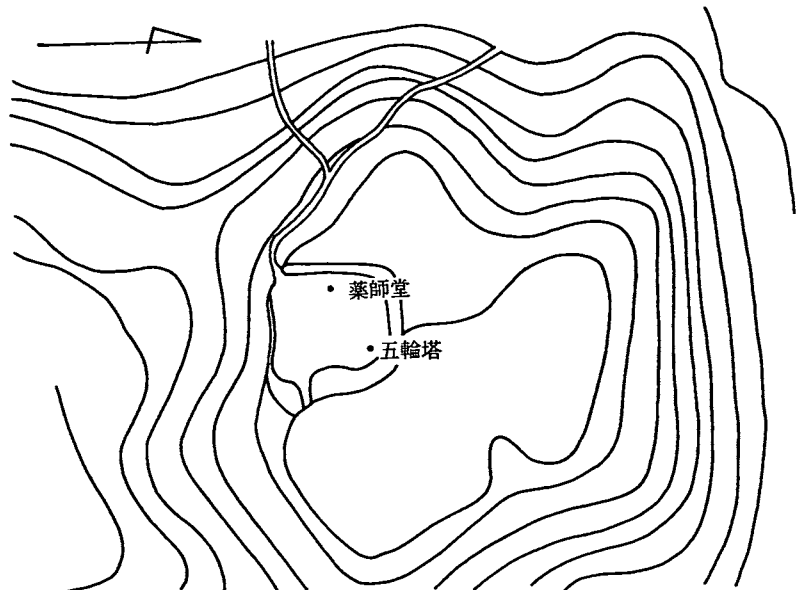
城ヶ崎城 見取図

しもむら 下村城 (玉名市下町字高城)

城主不明。城跡は「城下」集落の東側にあつて、「高城」という字名を残す木葉山の西方末端部(標高47.9m・集落よりの比高40m)に位置する。丘陵の背面は楕円形状の平坦地(柑橘園、東西51m・南北57m)となつており、さらに西端部に祀られた薬師堂周辺には五輪塔の残欠部が見られる。この他、当該地において顕著な遺構は認められないが、丘陵地の斜面部は集落に面する西側部分を除いて、いずれも急傾斜をなしており、城跡にふさわしい要害の地となっている。なお、比較的緩傾斜をなす西側部分には、高さ1~2mを示す階段状地形が幾段にも重なるようである。(注1)

一方、丘陵地の北側麓には土木工事の際に、弥生の土師(主に糸切皿)・瓦器・青磁等の小片が多量に出土したという。

- (注1) 空風輪・火輪・水輪3個を積み重ねた1組と、他に水輪3個、空輪1個がある。

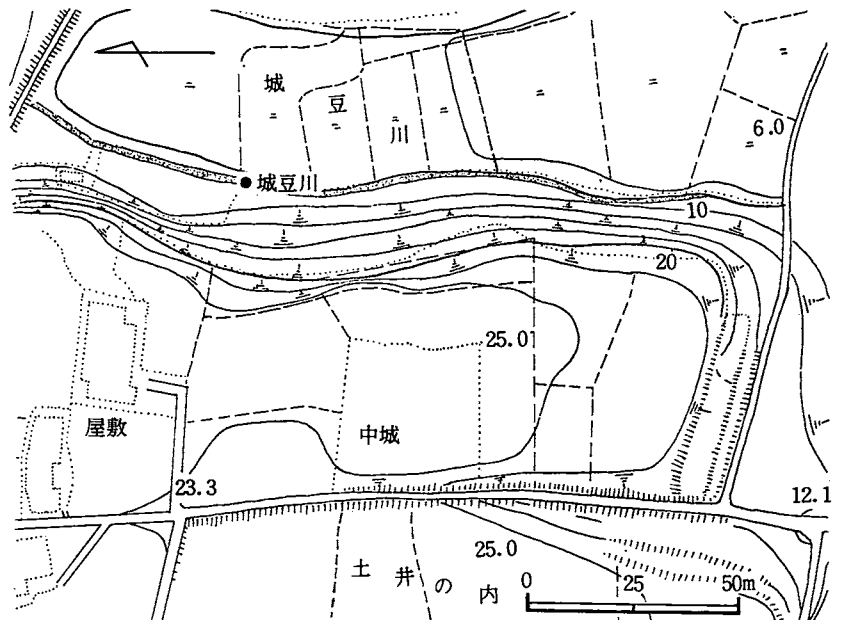
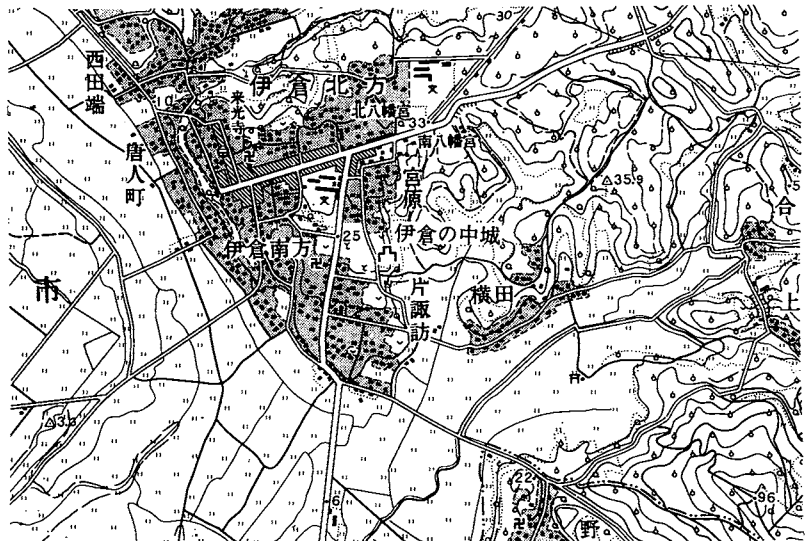


下村城 略測図

いくら なかんじ
伊倉の中城

(玉名市片諏訪字中城)

伊倉丘陵地の東端部に三条に分かれた帯状形の末梢部が突き出しているが、内、中央部の最小規模のもの（南北方向に主軸を呈し、標高25m・東側麓の水田面よりの比高20m）に「中城」という字名が残っており城跡の存在が考えられる。丘陵地の背面は切り開かれて、現在みかん園となっており何の遺構も認められないが、南側麓の低地から、「中城」の丘陵地を突き抜けて北側の野首に至る凹道は深い所で4mもある大規模なもので、何らかの形で城跡に関連した人工的地形と思われる。なお、この凹道は、東面60m、南北130mを計る長方形の一区画を形造丘陵地の斜面は、四段から成る階段状地形が観察されるが、下部には険峻な絶壁となっている。なお、当該地における城となっている。なお、当該地における城跡の存在を確実にしめるものに「土井の内」・「屋敷」という地名が「中城」周辺に残っているさらにこの東側麓を流れる川には「城豆川」という呼称がある。



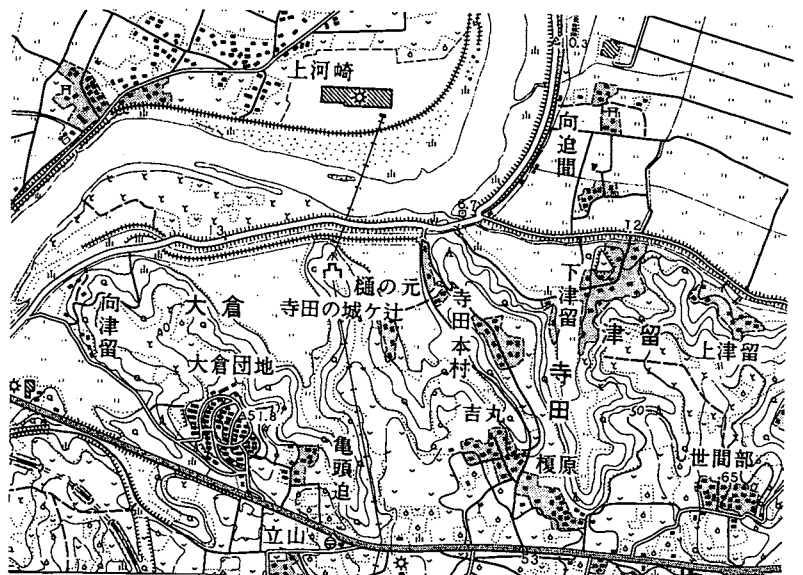
伊倉中の城 略測図

1 : 1250

てらだ
寺田の城ヶ辻

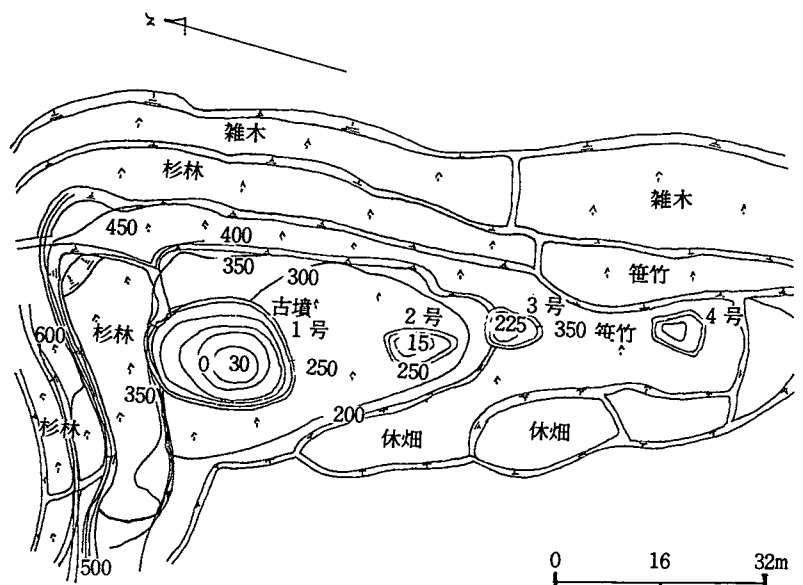
(玉名市寺田字城ヶ辻)

寺田地区に「城ヶ辻」という字名を残す帯状形の丘陵地末端部（北西方向に主軸を呈し、標高35.6m・西側麓の水田面よ西側麓の水田面よりの比高 30 m）があり、城跡の存在が考えられる。当該地は、南東側の鞍部を除く三方を菊池川流域の水田に囲まれており、北端部は断崖絶壁となる。丘陵地の背面は、大きく二段に分かれており、上下両段とも楕円形の平坦地となっているが、名々、その上面には縦に2基ずつ並ぶ古墳が観察される。ところで、この古墳頂はいずれも平坦面を



なし、なんらかの形で改造し利用したことが考えられる。

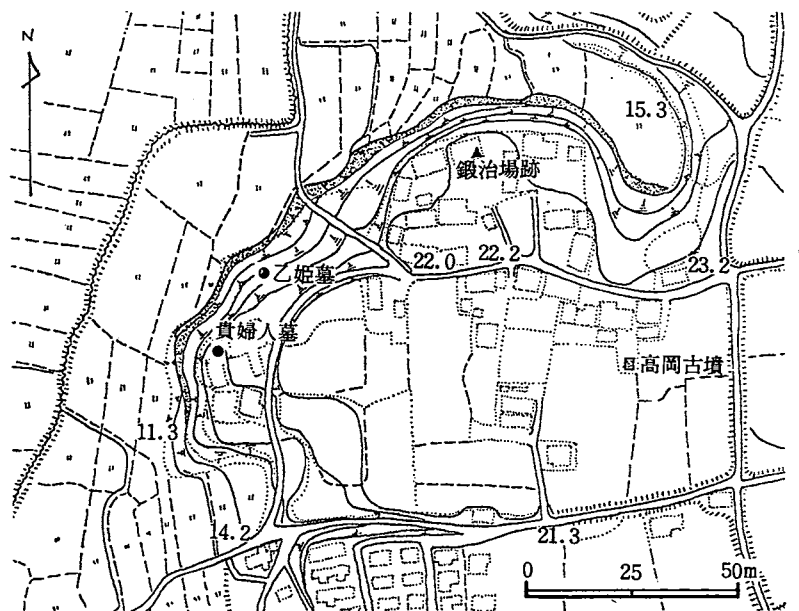
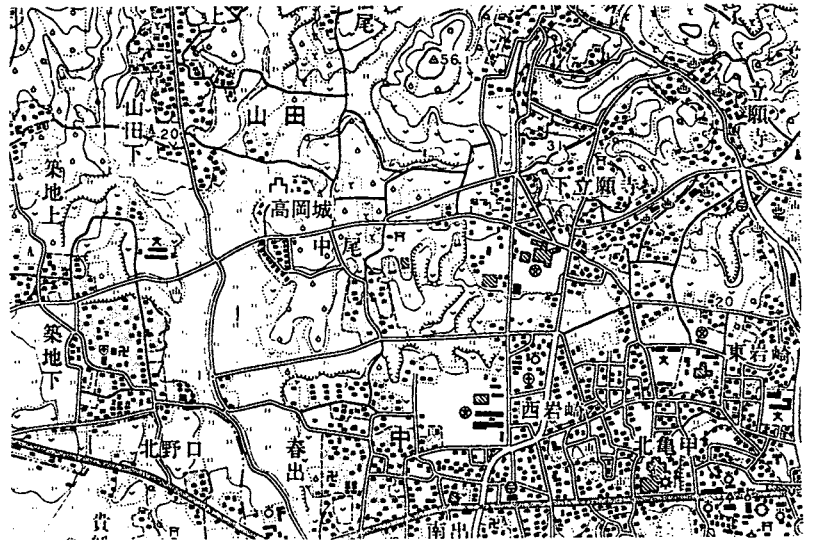
砦等の類が存在した可能性は十分にあるといえよう。ただ、城跡の存在を裏付けるような伝承はない。なお、昭和44年、同地内に高圧電線鉄塔が新設された折の事前調査で、箱式石棺一基が検出されたが、中世期のものと思われるような遺物は出土しなかった。



寺田の城ヶ辻 略測図

たかおか
高岡城 (玉名市山田字高頭)

『玉名郡誌』によれば城跡は、小岱山南麓にあって、境川流域平野に突出する舌状形の丘陵地末端部(標高22m・西側麓の水田面よりの比高10m)に位置する。丘陵地の背面は広い平坦地となっており城跡の範囲確認は困難であるが、丘陵地西端部の4~5段から成る階段状地形の一隅に、「紀氏貴婦人」・「乙姫さん」と称される墳墓が存在する他、北端部寄りの一隅からはスラッグが出土する。城跡に関連すると思われる遺構には丘陵麓の北側から西側にかけて、孤状に走る空堀状の溝がある。地元の人は丘状形丘陵地の北側半分にあたる東西300m、南北200mの範囲を城跡と見なすようであるがその根拠と言えるものはない。なお、当該地は全面的に弥生時代以降の埋蔵文化財包蔵地であり、高岡古墳をはじめ須恵器、土師器等の破片が出土する。

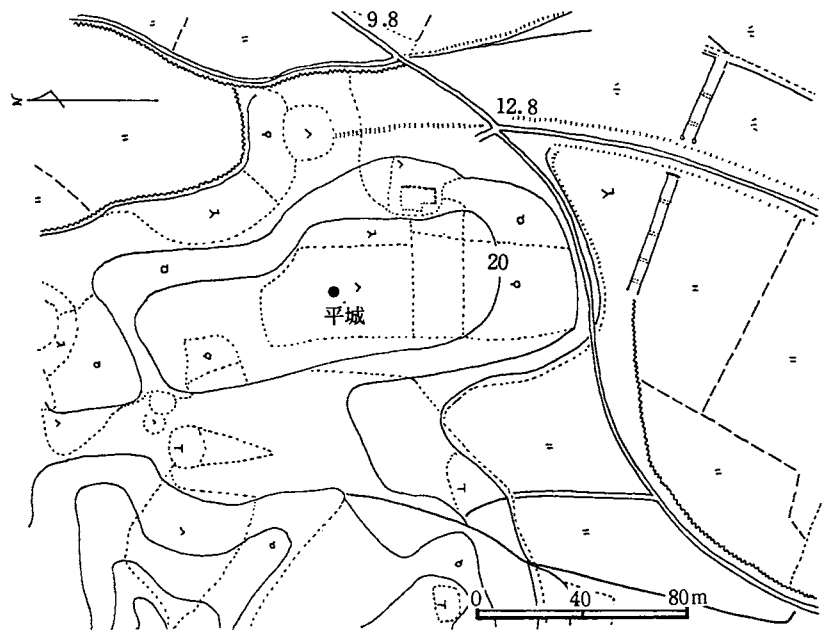


高岡城 略測図

たまき ひらじょう
玉名の平城

(玉名市玉名字平城)

元玉名地区の北東方向に位置する舌状形の丘陵地末端部（標高20m・東側麓の水田面よりの比高10m）に「平城」という字名が残っており城跡の存在が考えられる。当該地は丘陵地続きの西側部分を除く三方を菊池川の水田に囲まれた自然地形の中にあり、丘陵地の背面は一面の平地地となっている。周辺斜面部においては数段に重なる階段状地形も観察されるが、その一部は明らかに畑地造成によるものがあり、全体的に城跡関連遺構としての明確さを欠いている。なお、西側部分の野首には、南北両側から、迫りが食い込んでいるが、この部分は外観的にも人工の手が加わっている事がわかる。しかし、野首を断切るまでにはいたっていない。したがって当該地においては、「平城」という字名の他には城跡の存在を裏付けるような材料は乏しいといえるが、同地内からは歴史時代の土器片が出土するという。砦の類が在存した可能性はある。



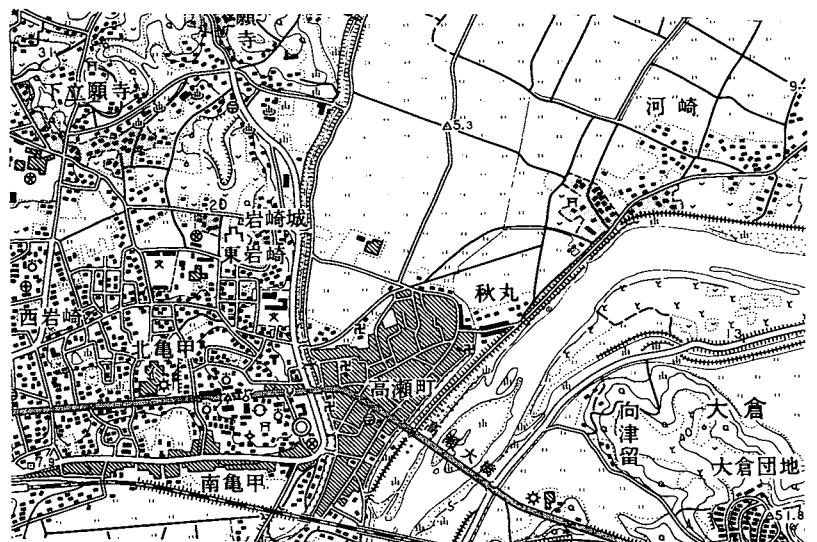
玉名の平城 略測図

いわさき
岩崎城

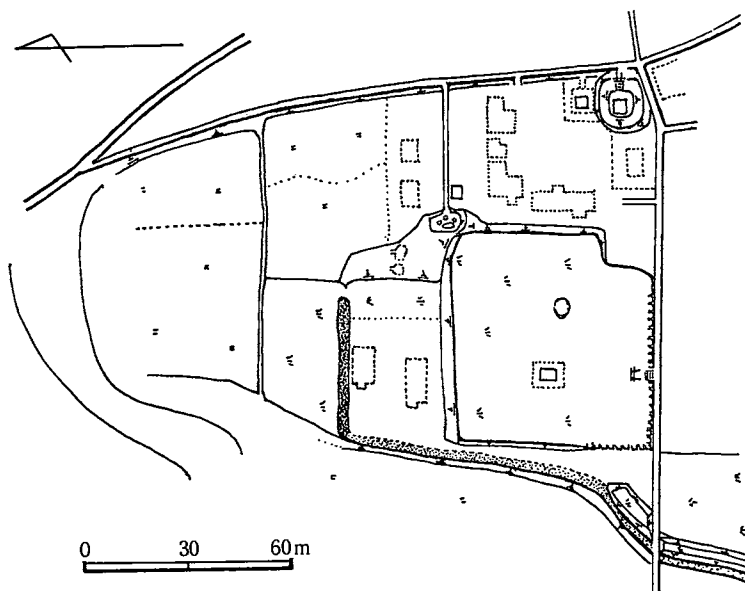
(玉名市岩崎字池田)

『玉名郡誌』によれば、城主は岩崎氏という。

城跡は岩崎丘陵地の北東端部（標高16m・北側麓の湿田地よりの比高8m）に位置する。当該地は町中にあるために開発が進み、城跡としての面影は失なわれているが、菅原神社の社地は、今でも周辺部より若干高く、その形状も方形をなしている。地元では、この地点を城跡の中心地と伝える。かつては、神社の西側部分を南北に走る空堀もあったらしいが、現在は埋められ、道路になっている。ただ、この空堀に付随すると思われる土塁は今でも部分的に神社の南西側に現存する。ところで神社付近に安山岩の平たい巨石が2基あり、他根元に板碑1基と、



数個の五輪塔の残欠部も観察されるが、巨石については地元の人は城主の墓と伝えている。また、地元には、城主の血を引くとされる草村姓の家があり、当家には城跡の事を触れた『草村家文書』がある。



岩崎城 略測図

阿蘇地区

阿蘇郡は、古代大和朝廷支配下での阿蘇国造の支配する阿蘇国としてのまとまりが、その地形的条件から割くずれずに保たれて、肥後国の東部に独自の地域として中世も存続している。この地は、阿蘇国造から評督、郡司となった阿蘇氏が、律令官社化した阿蘇社の神主を兼ね、次いで荘園制の下では、大宮司は一郡を社領化した荘官の地位をも果していたものと見られる。阿蘇郡における中世武家の歴史は、宇治姓を称する阿蘇大宮司家を、その展開のかなめとしているといえることができる。

阿蘇地域は、阿蘇谷・南郷谷・小国の三地域に大別できるが、阿蘇の古代史は、阿蘇谷北東部の手野方面を中心として拡大したとみられることは、中通古墳群からも推測できる。やがて、自然信仰の対象としての火口（上宮）と、祖霊信仰の場としての手野国造社との中間に成立する下宮はその融合を示すものであり、阿蘇における伝統的権威と律令制的中央権威との合体でもあったと評し得るとみられる。

このような権威を背景とした阿蘇氏は、荘園制下において、一族と郡内各地に分出、定着させ、中世における阿蘇系武士団の基盤を作って行ったと考えられる。

『吾妻鏡』の養和元年(1181)（治承五）二月二九日の条に、肥後国住人菊池九郎隆直に与同して平氏に背いた肥後の武士たちの中に、益城郡の木原次郎盛実らと共に、「南郷大宮司惟泰」の名がみられることは、阿蘇大宮司家が阿蘇郡を代表する武力集団の統領として知られるだけの背景、即ち、社領内小領主層の成長とその統制が果されていることを示すものである。大宮司家が平安末以来、南郷谷の開発に力を入れ、本拠を南郷に移していたであろうことは、『吾妻鏡』の惟泰の場合と共に、次の惟次に対して、北条時政が下文で、「右郷、阿蘇太郎惟次依令申往古屋敷之由」と述べていることから推測される。正治二（1200）年、惟泰が惟次に譲与している先祖相伝の私領田畠は、中村・下田・永野・世田・荒木・上久木野・下久木野・大野・柏・草部という南郷谷、及びこれに続く外輪山麓の諸村であったが、一族の分出による分割も行われている。嘉祿二（1226）年、惟次は三男惟盛に健軍社の大宮司職を分与すると共に、瀬田村・横手村・南郷内の田畑屋敷をゆづっている。

横手村は本主罪科により入手したものであったが、嫡家の相伝分には後代追加の村が追加されているので、一方では、私領開発の不断の勢力も続けられていたであろう。

この健軍大宮司津屋惟盛の系統は、六ヶ庄上島にも所領を有し、上島氏として肥後中央部でも活躍していることが知られる。

このように、鎌倉、南北朝期にかけて、大宮司家と同じく、「惟」を名乗りの通字とし、阿蘇谷、南郷谷の地名を苗字とする武士領主層の出現の様子をみることができ、多くは、大宮司家惣庶の分流の結果とみることができ。

一方、鎌倉期の阿蘇社領の地頭職は、北条得宗家の有するところで、時政・義時・泰時・時頼と継承されたとみられるが、その後はこれを一族に預けるようになる。

時政にはじまる阿蘇社領とのがかわり合いは、阿蘇社領社務・所職の補任と共に、大宮司家私領の安堵状を含む公的・私的なものを含み、領内の代官に在地の阿蘇氏を任命すると共に、外部の者を送り込んだ場合もあった。

中でも、小国郷では真言宗満願寺を建立し、政治的・精神的拠点としたとみられ、蒙古襲来後、肥後国守護として下向した北条時定は、執権時宗と共に寺内に頂相が残され、文保以降鎮西探題として下向した随時の家は、以後阿曾氏を称する。又、探題内人、引付衆の一人とみられる饗場氏・田口氏らの所領の存在も阿蘇谷の中に認められる。

一方、小国地方の武家領主の代表とみられる北里氏については、北里文書の中で、鎌倉末にその前身とされる綿貫氏の徴征が示される他、戦国期に到るまでの動向は同地においては明らかでない。

ただし、南北朝期の阿蘇谷の給主・給人には北里、綿貫の苗字が併出しているので後考を待ちたい。

このような北条氏の阿蘇社領進出は、建武新政によって一掃される。元弘の変に催しを受けて、干早城攻めのための道中で、隠岐からの倫旨を受けた大宮司は、備後の鞆津から阿蘇へ引返し、幕府に背いたので、鎮西探題では規矩高政を将として阿蘇を攻撃し、大宮司らは更に鞍岡の山中に籠って戦った。建武新政府は、この戦功に対して阿蘇社領の領域を確認し、大宮司の阿蘇本社と末社である甲佐・健軍・郡浦の管領権を認めると共に、諸国一宮には従来の本家職・領家職をも停止して本社に与えたので、大宮司は阿蘇社領における政教最高の支配者としての地位を獲得したのであった。

この頃になると、弱少庶家と大宮司との間には、次第に主従的統制の傾向がみえはじめるが、続く南北朝内乱期におけ

る中央・地方の外部勢力の働きかけによって、大宮司の統率力は動揺し、対立・抗争をまねくのである。

内乱の初期・前大宮司惟時が後醍醐天皇方として上京中に、多々良浜の戦で尊氏に破れた菊池武敏与力の大宮司兄弟が討死すると、尊氏方の意を受けて、阿蘇氏庶家は坂梨孫熊丸を推戴した。その中心人物は市下道恵であり、一族数十人が北朝方となり、南郷城を本拠として阿蘇郡を抑えたので、惟時・惟澄らは、益城郡の甲佐社領に拠らねばならなかった。

この北朝方大宮司は、隣国からのものでこ入れにもかかわらず、大宮司に復した惟時の権威と惟澄の武力によって滅され、以後は、態度の不明瞭な惟時と、南朝方について活発な軍事活動を行った女婿惟澄の対立となった。

惟時の大宮司としての社領における勢望と惟澄の武力協力の双方を味方につけたい征西府は、この間の対立に苦慮し、惟澄を筑後守に任ずるなどして両者の共存をはかろうとしたが、惟澄は、しばしば恩賞の不履行・軍勢疲労を征西府に訴えた。惟澄に従う一族、他門の武士たちは、戦功によって新たに所領を獲得し、係争の地を確保しようとの目的の故に協力したのであり、惟澄は彼らに社領内の免給用を押領分与するなどの方法をとらねばならなかったので、大宮司としての惟時の立場と対立せざるを得ない面を有していた。

惟時の死後、惟澄が大宮司であった時期は、九州における征西府の勢力が盛んであった時で、阿蘇郡内においても、その後当分南朝年号使用が卓越している。

惟澄は、日頃後継者と考えていた惟武が、父の病中をかえりみず、征西府の出兵に応じたことを怒り、本来北朝方として隠忍して来た惟村にその地位をゆずった。

これが南北朝後期より室町期を通じての阿蘇氏二流の対立の契機となった。

南朝方の惟武・惟政は南郷を本拠に阿蘇郡を抑えて征西府から大宮司に任じられ、惟村は益城郡の矢部・甲佐方面にあったものと推定される。

九州探題の今川了俊の下向によって征西府の九州支配が崩壊すると、阿蘇郡内でも北朝の年号の使用が現われる。

至徳三（1386）年の阿蘇谷社領の郷々知行人の注文によれば、一郷内に本来の社家方の知行に並行して、南郷方の「御料所」や給人（知行人）を定めているが、これらは大宮司方の封建的な主従関係による授封関係とみなされるもので、その昔の惟澄らの社家免給田押領の実績が影響を与えているように思われる。以後、室町期の阿蘇郡では、南郷を根拠地とした惟武系の惟兼が、矢部方面を抑える惟村系の惟郷と大宮司職を争い、幕府の裁定によって、惟郷が大宮司職にほじられたが、南郷の水口城に拠る惟兼の勢力は強く、阿蘇郡内には惟郷の支配は及ばなかった。

このような対立は、宝徳二（1450）年に惟郷の子の惟忠が、惟兼の子の惟歳を養子とすることで一応解決され、寛正五（1464）年、惟忠は惣官、大宮司として阿蘇本社の大祭である御田の祭に臨み、社家・武家双方の支配者としての地位を確認させている。

この時期の郡内の武士達については、応永三十（1423）年「坂梨惟照他二九名連署起請文」、文安五（1448）年「阿蘇社造宮木屋勤仕人数定」、明応七（1498）年「野部御侍御番次第」にくわしい。

戦国期の阿蘇郡は、隣国豊後を中心に、北九州に影響力を及ぼしていた大友氏の領国と境を接していたので、阿蘇氏は常に大友氏との友好を保つことを基本的対外政策としていたようである。

特に、外輪山北麓の小国地方は、その地理的な近さもあって、大友氏の影響力は強く、同地の北里・室原氏などは、阿蘇・大友双方からの感状や宛行状を得ている。

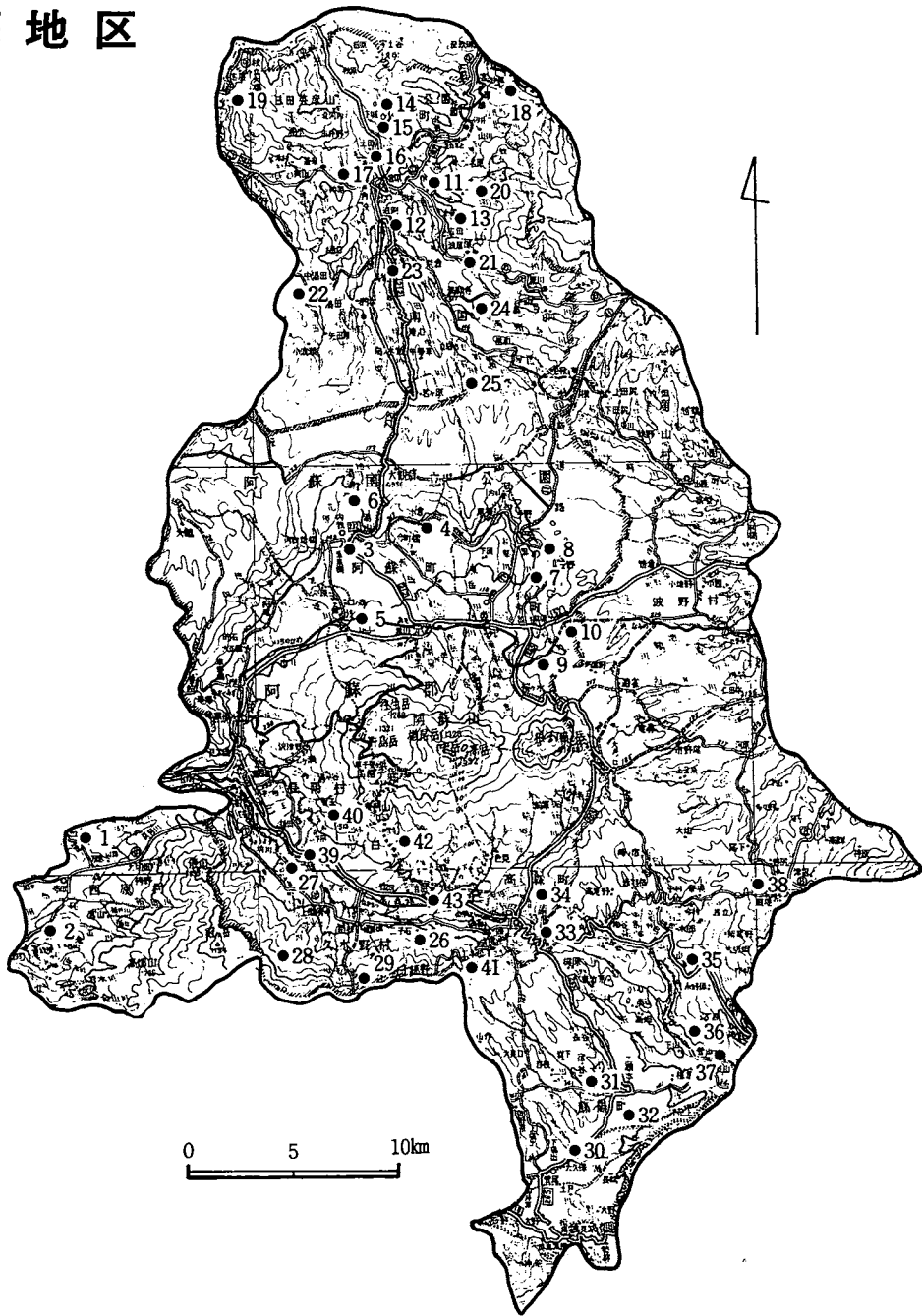
大友氏にとって、肥後を抑えるためには、その通路を確保するために阿蘇氏との協力は欠かせぬところで、北里・室原氏にかぎらず、阿蘇氏支配下の諸侍との結付きを作り、阿蘇氏を味方とするためのくさびともしたと考えられる。

大友氏に続き、肥後に進出した肥前の竜造寺氏は阿蘇郡に何ら影響を与えることはなかったが、島津氏の進出は天正十（1582）～十三年にかけて阿蘇方と対戦と講和をくり返した。この間、阿蘇方で大宮司惟将・惟種の死去、重臣甲斐宗運の死去が続いて攻略戦略をあやまり、益城郡平坦部は島津方に奪われ、天正十四年には大友氏に与力した南郷の高森氏が島津勢の攻撃を受けて落城し、島津氏は豊後への通路を求めて阿蘇谷へも進入している。

しかし、以後の島津勢は、豊後や筑前方面へ出兵し、秀吉の九州出兵を迎えて敗退するのであるが、秀吉入国に際して、阿蘇山上の古坊中の坊舎も廃絶し、阿蘇大宮司も、阿蘇谷にわずか三百余町の地を安堵されたにとどまり、阿蘇郡における中世的諸国関係は、更に天正の国人一揆を含めて終末を迎えるのである。

（阿蘇品保夫）

阿蘇地区



- | | | | |
|----------|------------|-----------|--------|
| 1 鳥子城 | 12 鐘力城 | 23 平城 | 34 村山城 |
| 2 門出城 | 13 西原城 | 24 動馬木城 | 35 社倉城 |
| 3 内牧城 | 14 下城 | 25 満願寺城ヶ鼻 | 36 芹口城 |
| 4 小倉城 | 15 鷲ノ尾城 | 26 南郷城 | 37 中原城 |
| 5 二辺塚城 | 16 木戸城 | 27 鼠土城 | 38 川上城 |
| 6 野中城 | 17 小鶴城 | 28 滋水城 | 39 下田城 |
| 7 高城古城 | 18 守護神城 | 29 駒返城 | 40 長野城 |
| 8 一の宮の城山 | 19 松山城 | 30 今村城 | 41 市下城 |
| 9 北坂梨の高城 | 20 松木城 | 31 高畠城 | 42 峯城 |
| 10 北坂梨城 | 21 亀ヶ城 | 32 柏城 | 43 吉田城 |
| 11 入江城 | 22 湯河内の城の平 | 33 高森城 | 44 岩神城 |

阿蘇郡

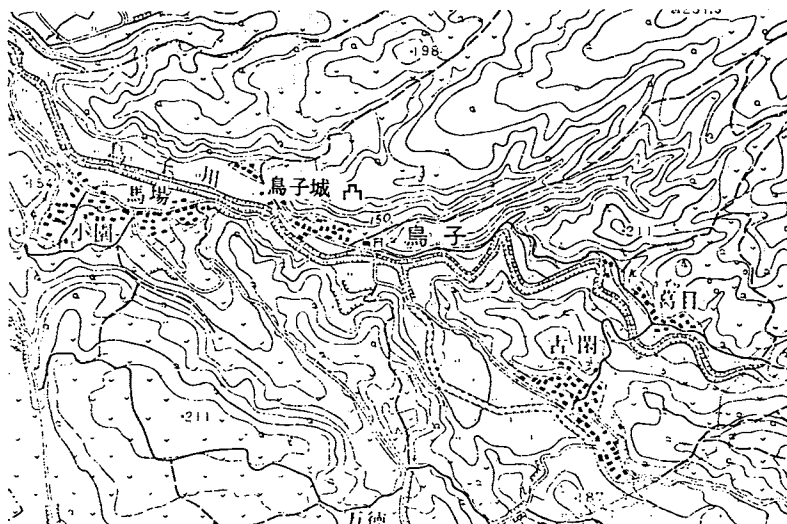
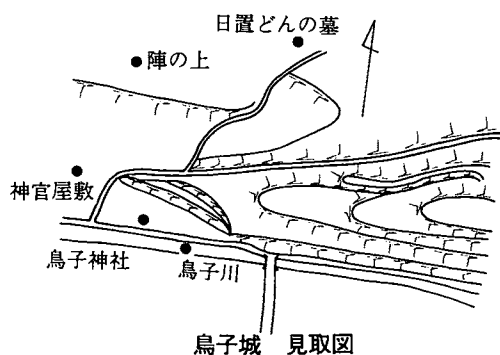
鳥子城 (阿蘇郡西原村大字鳥子字陣上 (上鳥子))

『肥後国誌』によれば、阿蘇家臣、鳥子若狭守の居城であったが、天正年間に落城したという。日置若狭守(落城時の城主)以降、七代は鳥子神社の神職として奉仕したと伝えられる。八代の日置運平、寛政十二年以降については系図(新所・草野義一氏所有)が現存する。

城跡は、上鳥子地区にあり、「城ん山」と称される俵山の西方末端部(標高180m・南側麓の道路面よりの比高60m)に位置する。『肥後国誌』には、「堀ノ跡本丸ノ跡所々要害等アリ」と記されているが、当該地は北東方向に長く延びる尾根の一隅にすぎず、自然地形そのものである。

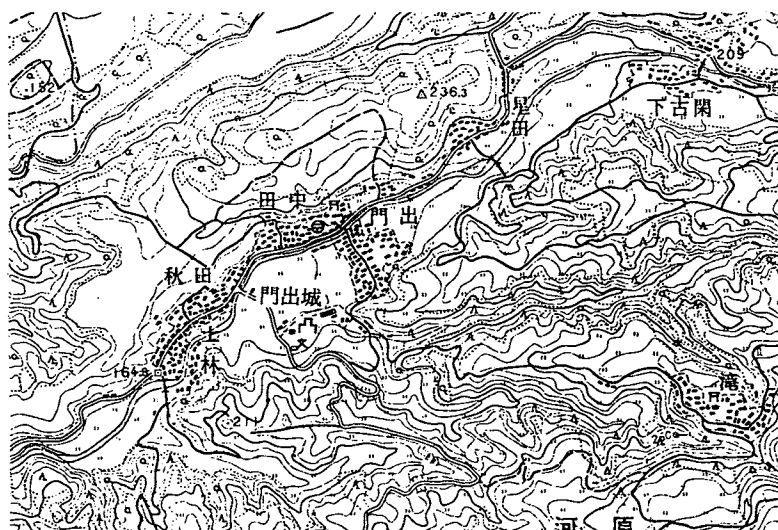
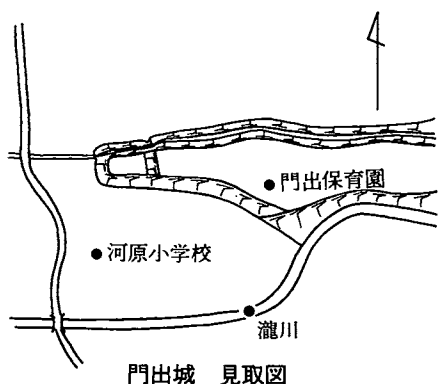
南側麓の上鳥子集落には、日置姓が14戸現存しており、「中園」・「馬場」という字名をはじめ、「神官屋敷」と称される所がある。「城ん山」より北東方向4kmの尾根筋に位置する「飛佛とんぼとけ(小名)」には、鳥子城の控えの城があるといわれている。しかし、この地も遺構は確認できない。

北西方向の尾根にも、「陣の上」・「上陣の上」の字名が残る。「陣の上」には、「日置どんの墓」という先祖碑が建てられており、日置姓の人が集まって盆、正月の二回墓前祭を行っている。



門出城 (阿蘇郡西原村大字河原字門出)

『山西村誌』によれば、城主は津留大炊介という。同書によれば天正十三年(1584年)八月、島津勢の侵入に際し門出城は、津森城からの攻撃を受けて落城したという。



城主とその一族は、いったん高森方面に退いたが、その後、高森町や野尻地区あたりに居を構えたい。同地域に津留姓が多いのは、この伝承に関連すると言われている。

城跡は、門出地内の「城^{しろ}ん尾^{おび}根」と称される丘陵地の末端部に位置していたが、明治43年に河原小学校開校の為に全面的に整地され、昭和40年11月、同小学校改築のためにさらに掘り下げられたので、現在ではまったく旧地形を止めていない。わずかに丘陵地の北側に、曲輪と思われるような階段状地形の一部が残っているにすぎない。

河原地区には、津留姓が8戸現存しており、白山神社の境内に津留大炊介の供養碑を建立して、年1回全員が集まり供養を続けている。

うらのまき
内牧城 (阿蘇郡阿蘇町大字内牧字中町)

『古城考』によれば、天文年間頃の城主は、阿蘇家臣の迎春丹波守という。慶長年間には、加藤(清正)氏一族が居城を見たい。『肥後国誌』に「一国一城の制に依って毀つ」という記事が見える。史料の上では、「中世末期から近世初頭にまたがる城跡である」といえよう。

城跡は、内牧のほぼ中央部にひろがる高さ2~3mの微高地に位置している。当該地は、旧温泉街の中心地でもあり、開発が進んでいる為に、城跡としての面影をほとんど止めていないが、「本丸」・「二の丸」・「三の丸」という小名が現存しており、また、水濠の役目を果たしたと伝えられる古川の残存部があるので、おおまかな城跡の範囲がつかめる。

古川を城跡の北限とする各区画の状態は、下記の通りである。「本丸(長形状の平坦地をなし、東西175m・南北100m)」は現在、町営グラウンドになっている。部分的な発掘によると地下2~3mの所で、石垣の基礎部と思われるものに接するという。昭和19年、校庭開墾の折、「かたばみの紋入^(注1)の瓦」の破片が多量に出土した。

一方、「二の丸(舌状形の平坦地をなし、東西75m・南北250m)」は現在、阿蘇町役場等になっている。江戸時代には、内牧手永の会所であったという。

「三の丸」は、現在、田畑、民家となっている。中央部分に堀切状の溝が走っており、東側区画(東西100m南北150m)と西側区画(東西75m・南北150m)に分かれる。

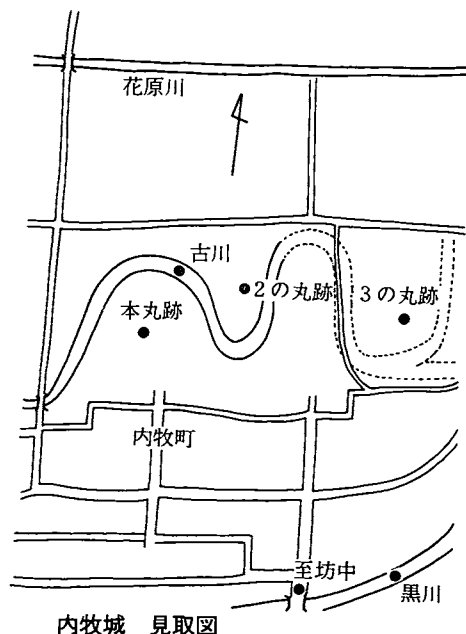
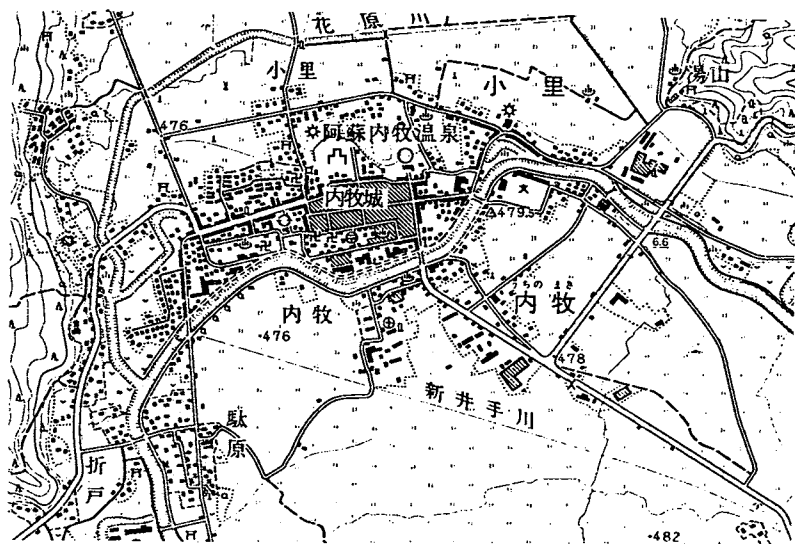
内牧城跡は典型的な平城の類といえよう。民家の石垣の中には、城の石垣を再利用したと伝えられるものもある。

なお、廃城の際に、城門は浄信寺と明行寺の寺門になったと、それぞれの寺で言い伝えられている。

(伝)城主加藤可重の墓は内牧の東方湯山にあり、五輪塔の墓碑の上に堂が建てられており、「右馬允^{うまんじょうさま}様」と称して毎年8月27日に祭典がある。平時の参詣も多い。

なお、『肥後国誌』によれば現在の黒川は、城主加藤忠広の時に城の要害強化の為に、掘り替えたものという。

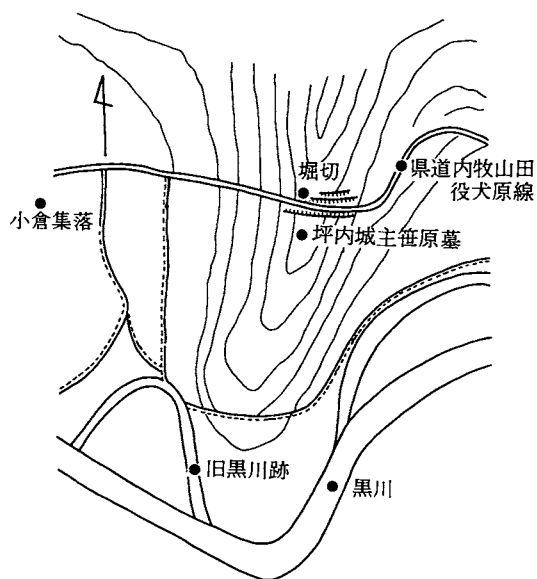
(注1)かたばみは、片岡(加藤可重の旧姓)の紋所である。



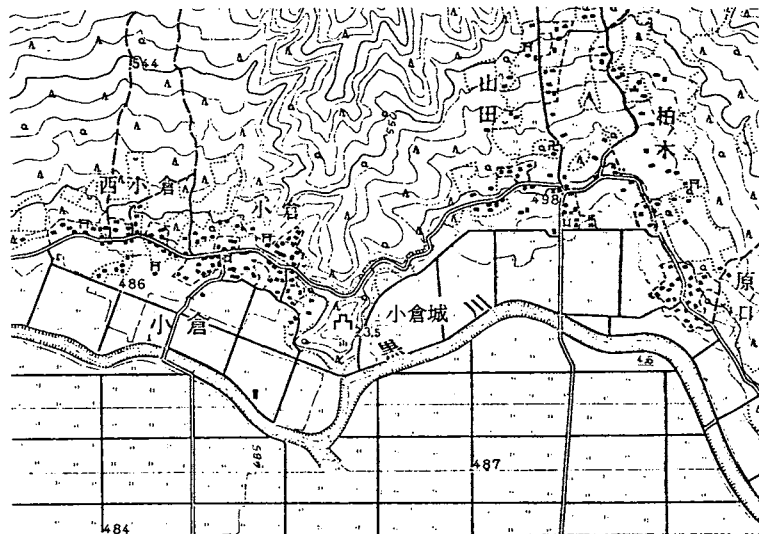
おぐら
小倉城 (坪内城) (阿蘇郡阿蘇町大字小倉字坪内)

『阿蘇郡誌』の小倉神社の項に「伝説によれば本社は笹原美濃守護職となり坪内に築城の際、小倉城鎮護の神として天神を勧請し武運長久を祈り社殿を改修築す。その後、天正年間九州兵乱に落城」と記されている。

城跡は字「坪内」にあって南西方向に主軸を呈する帯状の山稜末端部(標高523.5m・南側麓の水田面よりの比高約40m)に位置する。しかし山頂部分には人工的と思える様な平坦地はなく、北東側の鞍部に築かれた堀切(幅20m・深さ8m・現在、道路に使用されている)が、唯一の城跡関連遺構となっている。



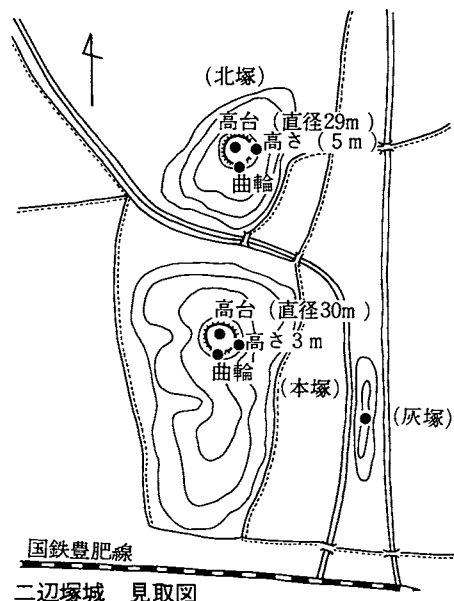
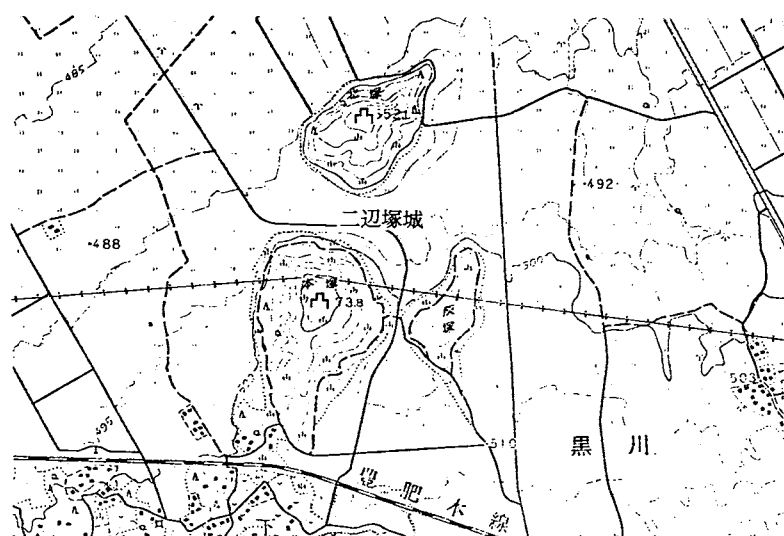
小倉城 見取図



ふたべつか
二辺塚城 (二辺津嘉城) (阿蘇郡阿蘇町大字黒川字本塚)

『古城考』によれば、明応二年(1493年)の頃には蔵原志摩守が在城していたという。『阿蘇家旧記』には、「平安期の初期阿蘇則高(13代大宮司)の頃、大宮司の社領、阿蘇、益城、飽託、宇土、五郡八千町歩に及び二辺塚に城郭を築き浜の館又は浜城と称す」と記されている。

城跡は阿蘇谷の水田地帯にあって「本塚(標高573.8m・南側麓の水田面よりの比高約80m)・北塚(標高552.1m・北側麓の水田面よりの比高約60m)」と称される二つの独立丘陵地に位置している。両者とも現在原野であるが丘陵の背面は



二辺塚城 見取図

円形状の平坦地（本塚の直径30m、北塚の直径24m）となっており、さらに、これより3～4m下った所にも同心円状の曲輪（幅5～15m）が観察される。

丘陵の麓周辺は「大牟田」・「中牟田」・「千町牟田」等の地名が示すように昭和20～30年頃まで、深田の低湿地であった。したがって、牛馬の通行は困難であり、僅かに本塚南側の一部のみが外部との連絡を保っているにすぎなかったという。

^{のなか}
野中城（湯浦城）（阿蘇郡阿蘇町大字湯浦字城）

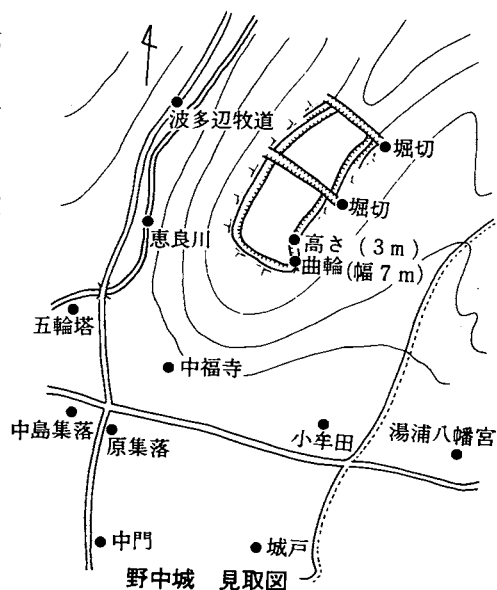
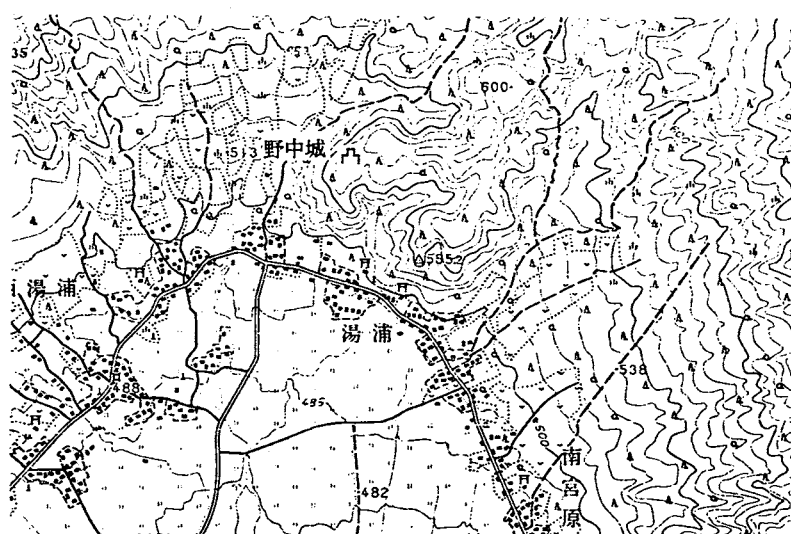
『古城考』によれば、阿蘇家臣の小島三郎とその弟、小島次郎が居城していたという。

城跡は高知川と恵良川の合流点にあって、「城山」と称される山稜末端部（標高560m・南側麓の湯浦（原・中島）の集落よりの比高約70m）に位置する。

山頂部分は、南西方向に主軸を呈する長方形の平坦地となっているが、2条の堀切（幅5m・深さ3m）によって大きく2区画（南西側、長径125m・短径75m・北東側、長径120m・短径64m）に分かれており、これより3～4m下った所にも、平坦地を取り巻く幅6～7mの曲輪が観察される。山谷には岩清水が豊富である。

湯浦の集落には、「城戸」・「陣内」・「中門」の小名を残す所があり、板碑や五輪塔も点在する。

花原川（高知川と恵良川の本流）に架る橋を、「戦場ヶ橋」と称するが、呼称の由来は「かつて、この一帯で小島勢と島津義久勢の戦いがくりひろげられた」という伝承による。



^{うしくじ}
牛の頸城 所在地不明（阿蘇郡阿蘇町）

『古城考』と『肥後国誌』に「はたべ（波多邊）山にあり城主年代等不分明」と記されているが、現在その所在地については不明確である。

^{たかじょうこじょう}
高城古城（坂梨城）（阿蘇郡一の宮町大字坂梨字馬場）

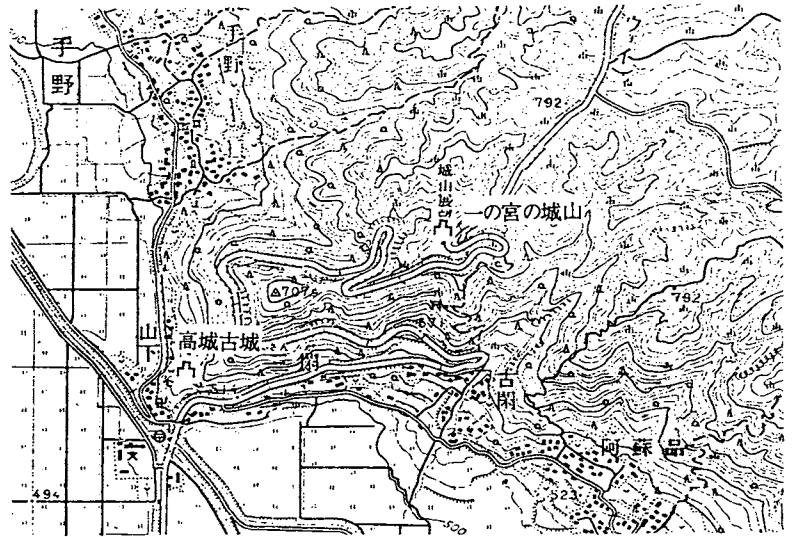
『古城考』によれば、天正年間に阿蘇家臣の坂梨惟右（入道後、紹元）の在城を見たという。

城跡は馬場集落の北側にあって、「高城」と称される山稜末端部（南西方向に主軸を呈し、標高700m・集落よりの比高80m）に位置する。しかし、城跡に関連あろうと思われる遺構は何も観察できない。

^{いちのみや しるやま}
一の宮の城山（阿蘇郡一の宮町大字坂梨字城山）

北坂梨城跡の北東方向、中央外輪山の山腹中に「城山」と称される尾根筋（標高720m）があり、城跡の存在が考えられ

る。当該地は現在、阿蘇登山道路に関連した「城山展望所」となっている事もあるが、城跡に関連あろうと思われる遺構は何も観察できないが、『阿蘇郡誌』にも「阿蘇谷を悉く俯瞰し得た眺望佳なり」と記されているような所で、北坂梨城跡に関連した岩の類が存在した可能性は大きい。

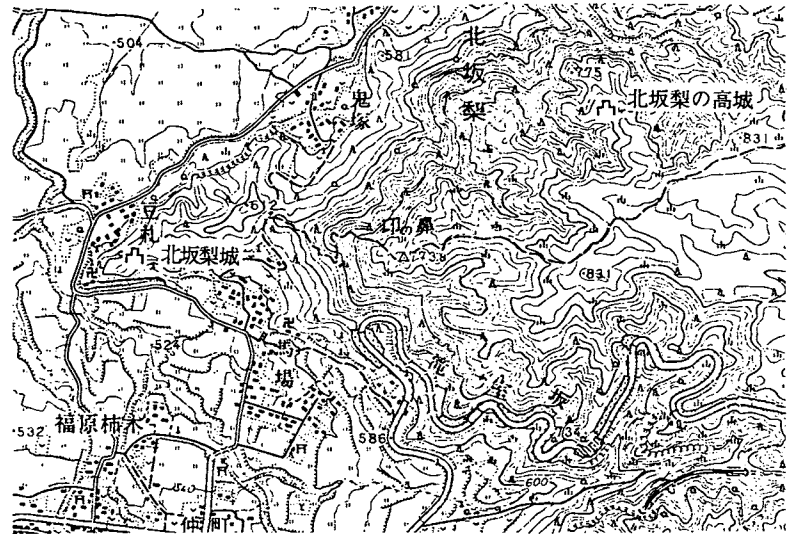


きたきかなし たかじょう
北坂梨の高城

(阿蘇郡一の宮町大字北坂梨)

『阿蘇郡誌』によれば、源為朝が據った城跡という。

城跡は、北坂梨集落の南東方向にあって、「高城」と称される山稜地帯の一隅(標高780m・集落よりの比高260m)に位置する。遺構的には何ら見るべきものはないが、山頂より40m(標高差)下った所の山腹は、高さ30~40mにも及ぶ絶壁(南東側の鞍部を除く)となっている。したがって、集落から城跡を眺めた場合、まさに要害堅固の感がある。



きたきかなし
北坂梨城

(阿蘇郡一の宮町)

『古城考』によれば、城主は阿蘇家臣の北坂隠岐(入道後、了喜)という。

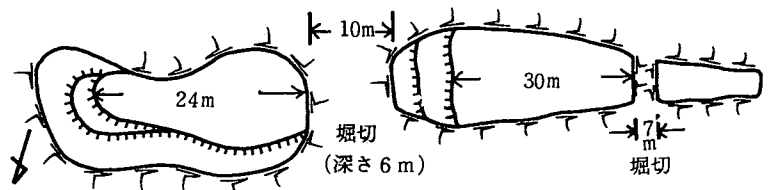
北坂梨地区に城跡の存在はないが、これと隣接する三野地区に「城」という字名を有する山稜末端部(標高520m・北西側麓の道路面よりの比高50m)があり、地元の人も「古城」と称する事から、当該地を北坂梨古城と見なす事も出来よう。城跡において顕著な遺構は認められないが、北側麓の山下集落とその北側一帯に、「外園」「土井平」「土井」「平園」「中園」という一連の字名が残っている。

いりえ
入江城

(阿蘇郡小国町大字宮原字湍玉)

宮原氏一族が250騎の兵力で城を守っていたが、菊池武光によって攻め落されたという。

城跡は筑後川の湾曲に沿って突き出した山稜末端部(標高500m・北側麓の道路面よりの比高約60m・一部、松の植林地)に位置しており、「城ヶ迫」の小名を

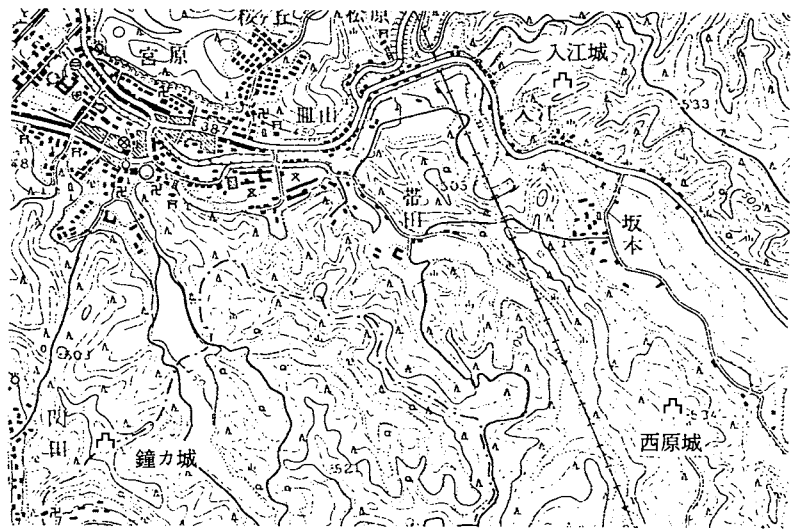


入江城 見取図

残す。

山頂部分は南西方向に主軸を呈する長さ200m程の尾根をなしているが、先端部は堀切（幅10m・深さ6m）によって仕切られた「ひょうたん型」の平坦地（長さ24m・幅8～15m）となっており、さらにこの地より2～4m下がった東側と北側の斜面部には、2段からなる階段状地形（幅4m）も観察される。

さらに北東側の鞍部寄りに幅7mの堀切が築かれており2条の堀切に挟まれた長さ30m程の長方形の平坦地（幅8～15m）も存在するわかる。平坦地の中央部には、いずれも塚らしい小規模のマウンドが残っている。なお、杉山の先端部・麓には、宮原氏の居館跡と伝わる丘陵地（標高470m・城跡との比高30m）があるが、現在は畑地と竹林になっている。



鐘力城 (阿蘇郡小国町大字宮原字城山)

北里大和守が800騎の兵力で城を守っていたが、延文年中(1356～1360年)に菊池武光によって攻め落されたという。

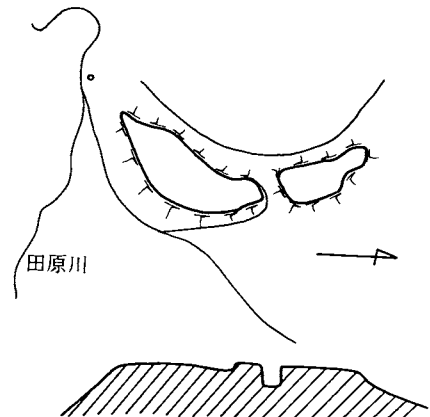
城跡は小国町と南小国町の境界線が走る山稜末端部(標高512.8m・西側麓の集落よりの比高約60m)に位置しており、「城山」の字名を残す。

山頂部分は鉤型をした平坦地（中央部分より北側と北西側に主軸を呈する）となっているが、中央部に存在する堀切（幅4m・深さ10m）によって二区画に分かれる。北側平坦地は長さ20m・幅7mの規模を示し、南側平坦地は長さ27m・幅10～18mとなる。

南側平坦地には堀切に伴うと思われる土塁（幅4m・長さ1m）が、北端に築かれているようである。地元の人々は頂上一帯を「城平」と称する。

登城道沿いには、「的場」や「馬場」の小名を残す微高地（高さ3～4m）があり、さらに井戸跡と伝えられる窪地が残っている。なお、城跡麓の矢津田の集落（字名・関田）には、「内屋敷」と称される一隅（大塚一己氏敷地）がある。蓮台寺の境内には城主の墓と伝わる古墓も残っている。

(注1) 井戸跡下段の平坦地を「つりん下」と称するが、これは「つるべ下」がなまったものという。



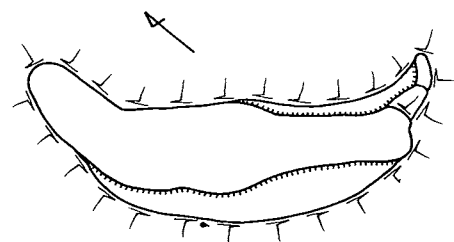
鐘力城 見取図

西原城 (阿蘇郡小国町大字上田字荻鶴)

『古城考』に「北里上田村にあり、葉室氏在城と云」と記されており、『小国郷史』は城主を葉室修理太夫清原美保と伝える。又、『阿蘇郡誌』には「小国村にあり、源為朝居城したりと云ふ」という記事も見える。

上田集落の西側に田原川を挟んで位置する山稜末端部（標高542m・東側麓の水田面よりの比高約70m）が城跡と伝わる。山頂部分は北西方向に主軸を呈する帯状形の平坦地となっており、かつてこの地から小刀が出土したという。

西側山稜斜面には階段状地形が重なり、南側の鞍部は堀切跡とも思え



西原城 見取図

る凹道（山道）が走る。山稜東側はかなりの急傾斜をなし、北側から西側にかけては自然の防備となり得る谷が食い込んでいる。谷間からは縄文土器等の破片が出土する。なお、集落内には「城園」の字名を有する一隅がある。

下城（裏の城） （阿蘇郡小国町大字下城字下城）

『古城考』によれば、阿蘇氏家臣、下城氏一族の居城という。一方、『小国郷史』は築城者を下城経隆と伝えている。

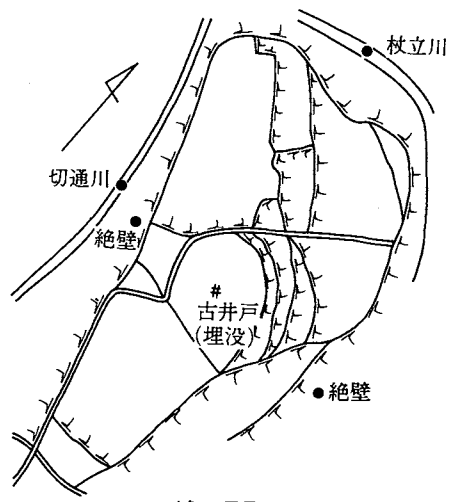
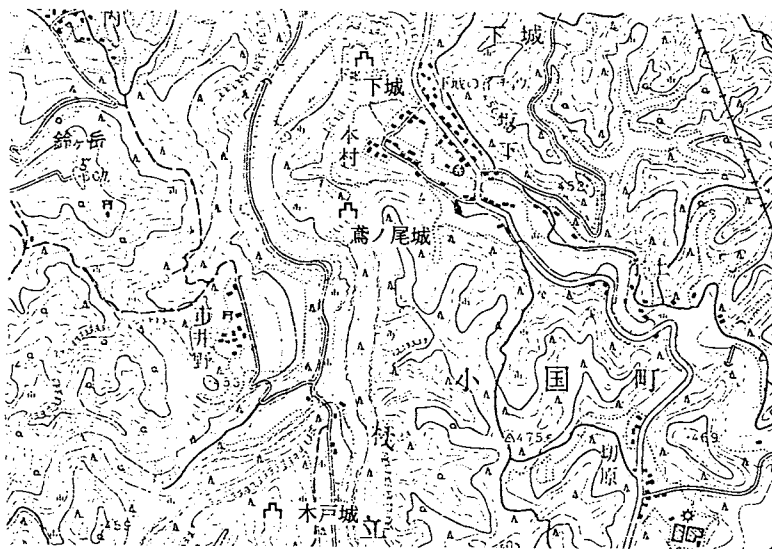
城跡は、杖立川と切通川の合流点にあつて「下城」という字名を残す丘陵末端部（南北方向に主軸を呈し、標高390m・西側麓の川岸よりの比高50m）に位置する。丘陵の背面は、四区画からなっているが、当該地における最高所部分の荒地が城跡の中心地であろうと思われる。この地には現在、大杉が数本、そびえており、かつては古井戸も存在したらしい。さらに、杖立川に面する西側の丘陵斜面にはかなり広い面積を有する曲輪状の階段状地形も認められる。この他野首にあたる南側のくびれ部には、堀切が存在する。北里守氏の御示唆によれば、堀切には「扉石」と称される石があったという。この石は堀切付近に水路を設けた際に山中に運びこんだとのことで、その地点を踏査した結果、門礎と思われる1.5×1mの平石が確認できた。このことから、堀切箇所には、城門の類が存在した可能性は大きいと言えよう。

城跡周辺には、明慶五年（1496年）の銘をもつ逆修碑や元龜三年（1572年）銘の読誦経逆修碑をはじめ、下城経隆とその母妙栄の墓と伝えられる五輪塔がある。また、今なお遠近の信仰を集める「下城不動尊」は廃寺となった護心寺の主尊であったという。

なお、城跡は国道212線改良工事によってその一部が破壊されるために、昭和52年9月から約2カ月にわたって県文化課の手で試掘が実施された。その結果、大杉のある城跡中心地と思われる地点から、青磁、白磁・瓦器片等が出土した。これらの出土品から「下城」の遺構の残存が考えられ、昭和53年度に本調査を実施する予定である。

（注1）同書はまた城跡の規模と構造について「断崖上の総面積はたて百五十間、横百十三間で、五町六反五畝で其中に、北六十一間南二十三間の本丸の城廓が構築され、城の総曲輪千六百六十間、一町四反とある。東に城門があり、其外に堀割を設け、堀の幅三間で深さ一間半でこれが二重にあつた」と記しており、本村の高地に「二の丸」の存在を推定している。

（注2）城跡周辺には「馬場」「馬洗淵」「弓田」という地名が残っている。



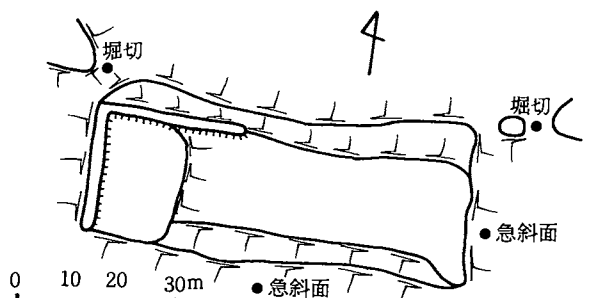
下城 見取図

とびお 鳶ノ尾城（飛尾城） （阿蘇郡小国町大字下城字鳶ノ尾）

『古城考』には「小国下村があり、城主姓名不明」と記されているが、『小国郷史』は城主を下城氏と伝える。

城跡は杖立川の東岸にあつて「鳶ノ尾」という字名を残す山稜末端部（標高390m・川岸よりの比高約50m）に位置する。山頂部分は東西方向に主軸を呈する長方形の平坦地となっており、西側寄りにテラス状の微高地を認める。微高地には北側と西側部分に土塁がめぐる。山稜斜面は四方とも急傾斜をなし天然の要害となっており、北東鞍部と北西側の尾根筋には堀切が観察される。鞍部側については二重堀の形状を呈し、かつてはここから本村集落へ至る城道があったらしい。

城跡麓には（伝）市井野大膳の墓がある。



鳶ノ尾城 見取図

木戸城 (阿蘇郡小国町大字宮原字城戸)

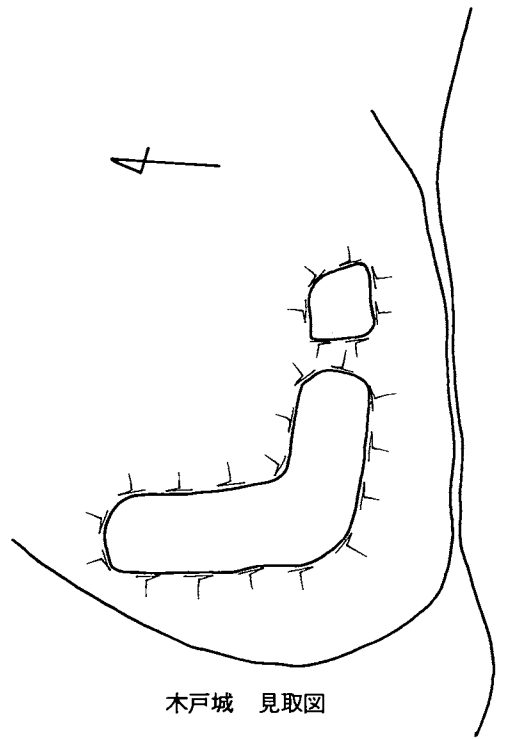
『古城考』によれば城主は下城氏という。一方、『小国郷史』は永禄年間頃(1558~1570年)の城主を石井阿波守と伝える。

城跡は杖立川と中原川の分岐点にあつて、「城戸」という字名を残す山稜末端部の丘陵地(標高440m・北側麓の登城口よりの比高約100m)に位置する。山頂部分は長方形の平坦地(長径50m・短径30m)となつており、これより北西側へ10数m下つた所にも人工的な小山が存在する。

小山の上面は削平されてL字型の平坦地(中央部から北東方向へ15m南東側へ13m・幅3m)となつており、南東端にも堀状の溝を挟んで方形の平坦地(長径5m・短径3m)が観察される。

城跡の西側麓には、石井集落と市井野集落を結ぶ山道が走る。杖立川と中原川の分岐点一帯を「馬洗瀬」(字名)と称している。

(注1) 地藏が祀られている。



木戸城 見取図

小鶴城 (阿蘇郡小国町大字黒淵字向力山)

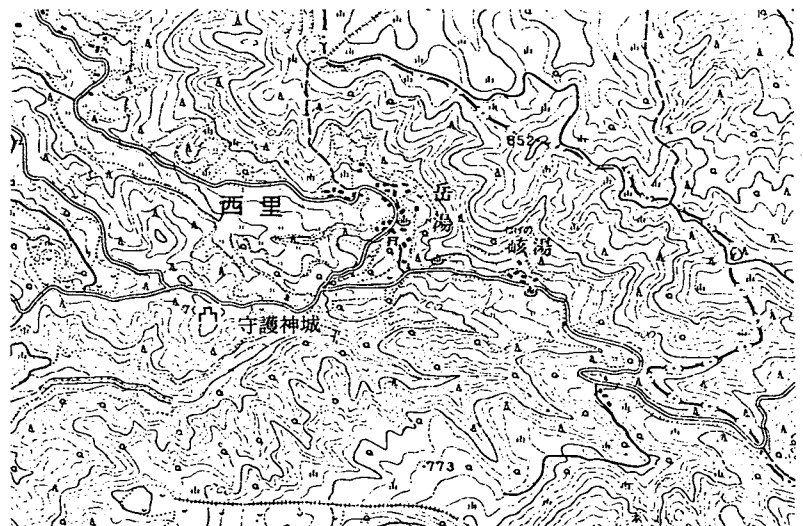
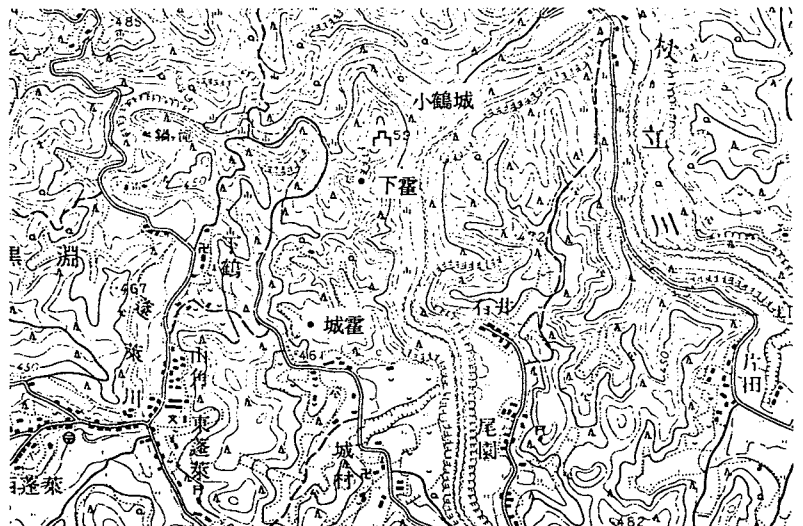
『古城考』には「北の里土田村にあり、阿蘇家臣在番、延文年中(1356~1361年)落城と云」という記事が見えるが、『小国郷史』は城主を北里内記、戸波主馬と伝える。

城村(字名・城村・城鶴)集落の北方向約700mに位置する山稜末端部(標高462.2m・北東側麓の水田面よりの比高約100m)が城跡と伝わる。山頂部分は北東方向に主軸を呈する帯状形の平坦地(長さ94m・幅約12m)となつているが、先端部分より南西側へ33mの地点に高さ0.3~0.5mの段差が観察される。さらに南西側の鞍部寄りには、高さ約2mの小山を認める事が出来る。

小山の上面は、楕円形状の平坦地(長径18m・短径11m)となつている。山頂周辺はいずれも急傾斜をなし、登城は鞍部側からのみに限られるが、これ又岩肌に沿つてよじ登る程度のものである。鞍部(山頂部分の小山よりの比高6~7m)は幅2m程にくびれて土橋的な通路となるが、それ自体は極めて短く、長さ25.5mである。

城跡南側の山稜地帯には「下鶴」の字名が残る。

なお集落には、道路端の大杉の根元に、



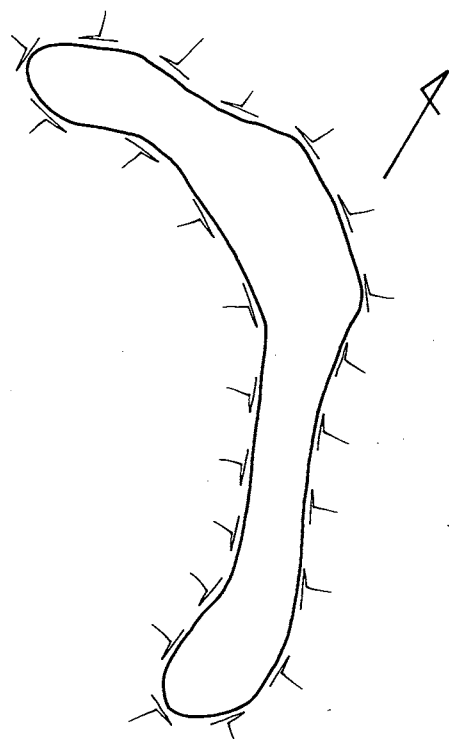
永禄二年（1559年）の年号を有する板碑や、周辺の田畑から集めたという宝篋印塔、五輪塔の残欠部が祀られている。

しゅごじん
守護神城

（阿蘇郡小国町大字西里字守護神）

城主は松岡丹後守という。

熊本と大分の県境に位置する岳湯集落の南西方向約600mに、「守護神」という字名を残す山稜末端部の小山（標高700m・南側水田面よりの比高約80m）が城跡と伝わる。山頂部分は北西方向に主軸を呈する折れ曲った帯状形の平坦地で、ここから小国町城野嶽・下城方面の眺望は極めて良好である。顕著な遺構は観察されないが、北側部分を除く三方の山稜斜面はいずれも急傾斜をなしており、自然地形を利用した感じがよくでている。北側部分に7～8mの落差があり、裾部には岳湯・岐ノ湯・堀田等を結ぶ道が走る。



守護神城 略測図



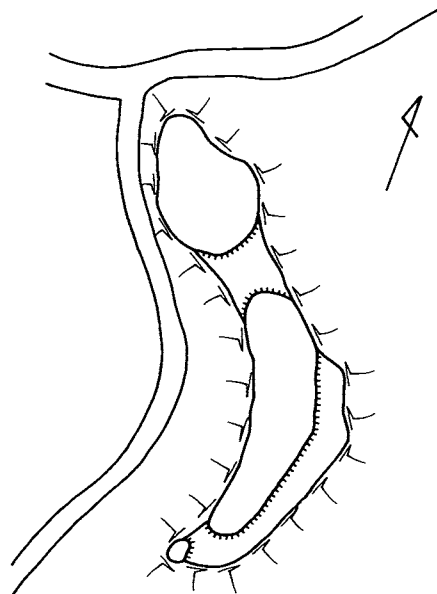
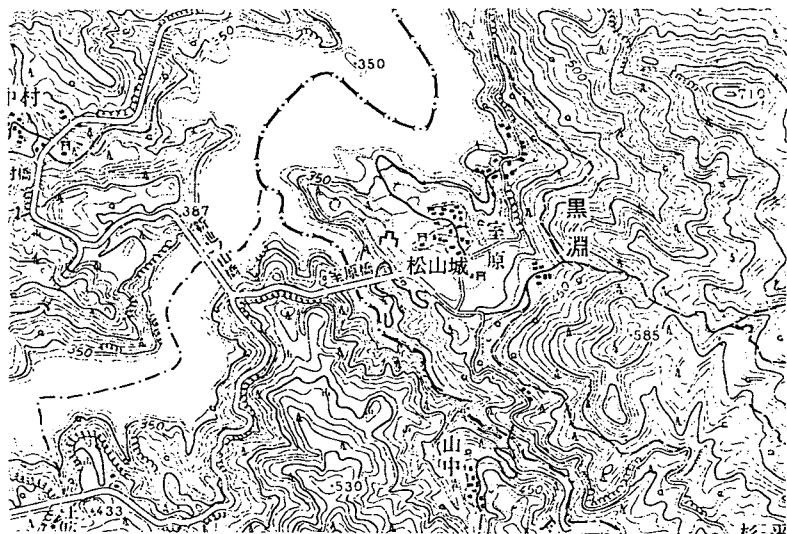
小鶴城 略測図

まつやま
松山城 (阿蘇郡小国町大字黒淵字花ノ木)

『小国郷史』によれば、城主は室原頼頼という。

山稜末端部の丘陵に開けた室原集落の西側に「城野」という小名を有する小山(標高388.3m・南西側麓よりの比高15m弱)があり、地元の人々は城跡と伝える。小山の上面は北西方向に主軸を呈する帯状形の平坦地となっているが、北西側寄りには堀切を挟んで楕円形状の平坦地も観察される。堀切より南東側部分の平坦地は、小山の斜面を曲輪が北側から東側へめぐる。集落と城跡を含めた丘陵地の斜面はいずれも断崖絶壁となるものの、麓は下笠ダムが設けられ水没した。地元の人によれば「かつて丘陵地先端部麓には津江川と杉平川の分岐点があった」という。

なお当該地は熊本と大分の県境でもある。

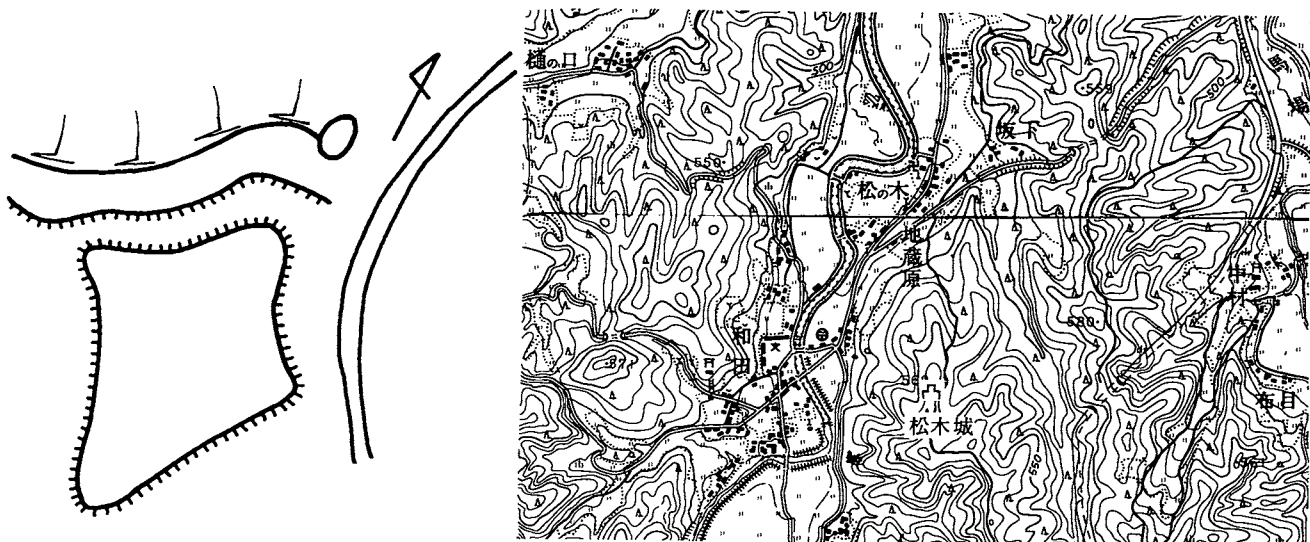


松山城 見取図

まつき
松木城 (阿蘇郡南小国町大字中原字神田他)

『古城考』に「小国松木村にあり、城主姓名不分明」という記事が見える。

原(字・原肥)集落の南西方向に位置する山稜末端部(標高570m・北側麓の水田面よりの比高約180m)が城跡と伝わっている。集落の北方向約400mに「松ノ木」の字名を有する集落がある事から広域的に考えて、当該地が『古城考』にいう松木城であると思われる。山頂部分は北西方向に主軸を呈する台形状の平坦地となっており、これより数m下った北側部分



松木城 見取図

と南西側部分の2箇所に堀切が観察される。これは、城跡の尾根が北側と南西側にゆるやかな傾斜を持って伸びる事から必要であったろうと思われる。東側山稜斜面は急傾斜となり、麓には自然の水濜となる中原川が南北に流れる。一方、西側斜面は比較的ゆるやかであるが、麓には「城の迫」の小名を残す迫が大きく食い込んでいる。

石堰城 (所在地不明)

『古城考』によれば、城跡は北里村とあるが、その所在地については確たるものがない。『小国郷史』にも「簡単な城廓を構えて居たにすぎぬ」と記されている、

『古城考』は城主を阿蘇家臣の北里永義と伝える。また同書には「先祖貫次郎左衛門妙義、壽永年中、鎌倉より下向し、北里村涌蓋山の麓、櫻尾城を築て居住す、爾来代々相續す、天文年中、妙義が末葉北里大藏太輔。宮司惟豊に仕へ、當城を築て在城し、豊後豊前口を藩衛す、(後略)」と記されており、天文年中に築かれた櫻尾城に関連する城という事を示唆している。

所在地が不明な事から、自然地形を利用した単なる物見程度の砦にすぎなかったのか、もしくは櫻尾城の後世における呼称であろうか。

山の城

『古城考』は、城跡の所在地について小国赤谷としており、城主は「北里安芸守や北里宗義の在城とも云、」と記されているが、今回の調査では城跡の所在は確認出来なかった。

なお『小国郷史』には「山野城は北里川の上流、山川部落の奥赤谷にあつて、是は室町時代北里安芸守惟義の築城で、櫻尾城は寒気厳しき故、降つて要地を求めてこゝに移つたという。北里氏七代在城して石堰城に移つた。城址今もありと。」という記事が見える。

桜尾城 (所在地不明)

『古城考』には「北の里湧蓋山の麓にある故、桜山の城と云、壽永年中(1182~1185年)綿貫次郎左衛門妙義、鎌倉より下向し、當所に城を築居せり、綿貫氏は清和源氏頼信の子孫と云、延文年中(1356~1361年)、北里加賀守兼義、千五百騎にて守之、菊池武光攻落す。」と記されているが、城跡の所在地については不明である。しかしその記事からすれば城跡は12世紀末に築城された事になり、この事から館の類であった可能性が強い。又、城跡を考える時に石堰城跡との関連性は無視できない。

籠り石城 (所在地不明)

『古城考』に「肥豊の境也、杖立とも云、大友玖珠士三百餘騎延文(1356~1361年)の比守之」という記事が見えるが、城跡の所在地については不明である。しかも杖立の地は記事にあるように、熊本と大分の県境という地理的環境から関所的な役目を持つ館の類が杖立川流域に築かれていた可能性はある。

湯の岳古城 (所在地不明)

『古城考』に「西里村にあり、原山城とも云、城主年代不分明」と記されているが、城跡の所在地については不明である。しかし西里地区には「岳湯」という字名を有する集落があり、その周辺に守護神城跡が存在する事から、この城跡の誤記ではないかとも考えられる。

(注1) 地理的位置から守護神城を岳湯城と称した可能性も大きく、この事が『古城考』の著者を湯の岳城と誤らせたのではなからうか。

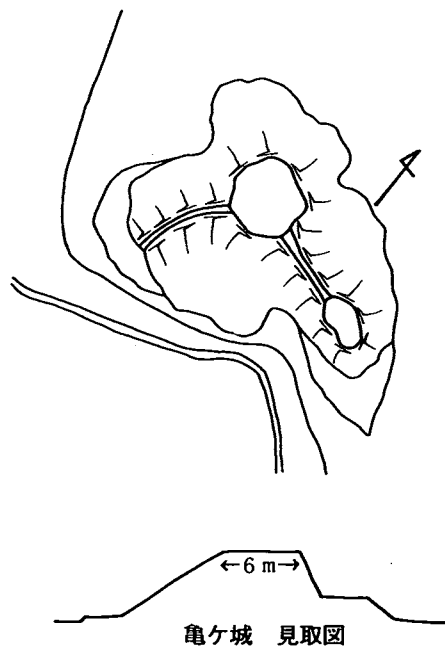
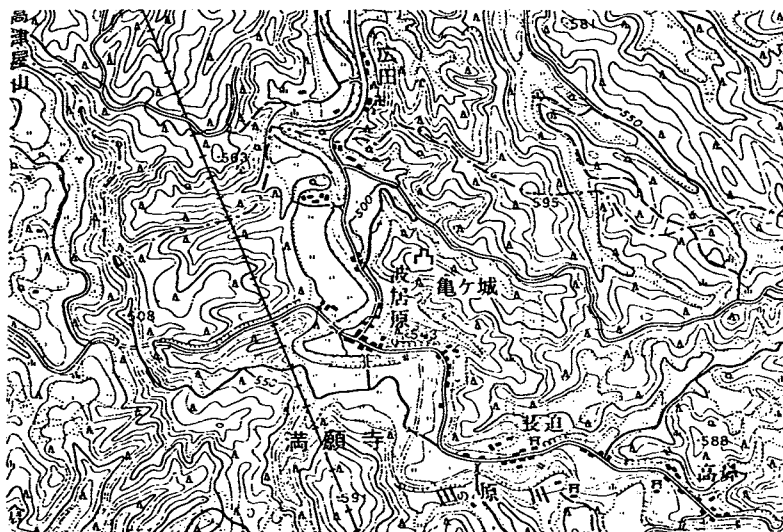
亀ヶ城 (阿蘇郡南小国町大字満願寺字陣内他)

『阿蘇郡誌』によれば、北里義清が築城したものという。

波居原の「陣内」に横たわる山稜末端部(標高548.5m・南側麓の道路面よりの比高約40m)が城跡と伝わる。山頂部分は折れ曲った尾根(中央部より東西方向と南西方向に主軸を呈する)となっており、中央部と東端部の2箇所に小規模な平坦地が存在する。とくに、中央部には直径5mの円形をなし、「愛宕山大権現」の銘を有する石碑が祀られている。山稜自体は、東西に主軸を呈する長さ150m程の小規模な山で東側鞍部が約40m程の落差をもって広く開いている為に外観上

は独立山稜となる。山稜斜面は急傾斜をなしており登るに容易でない。

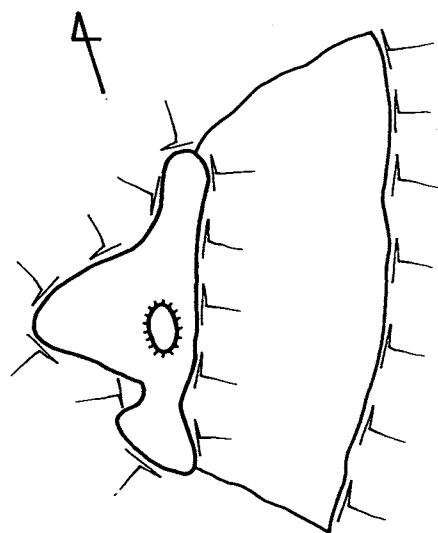
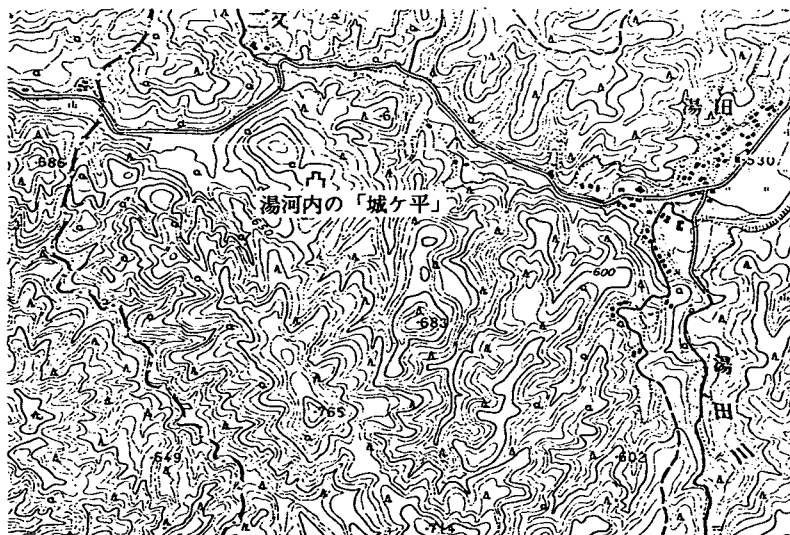
城跡麓には陣内集落をはじめ「倉所」の小名を有する所があり地藏堂周辺に五輪塔の残欠部が数多く散乱する。



湯河内の「城ヶ平」 (阿蘇郡南小国町大字中原字湯河内)

『小国郷史』によれば、河津宮内少輔の築城によるもので北里玄蕃の在城を見たいが、『古城考』には「湯田村にあり、北里将監守之と云」と記述されている。

湯田集落の西方1kmに位置する山稜末端部(標高660m・北西側麓の水田面よりの比高約110m)が城跡と伝わる。山頂部分は100㎡程の平坦地となっており、中央部に城ヶ平神社の石碑(河津宗正氏建立)が祀られている。さらにこれより南側へ数m下った所には台形状の平坦地が観察される。山腹は急傾斜をなし登るに容易でないが、登城道には2箇所「一の城戸」・「二の城戸」という小名が残っており城門的な柵の類の存在が推察される。なお、城跡の西方0.8km程の所に熊本と大分の県境がある。



湯河内の「城ヶ平」 見取図

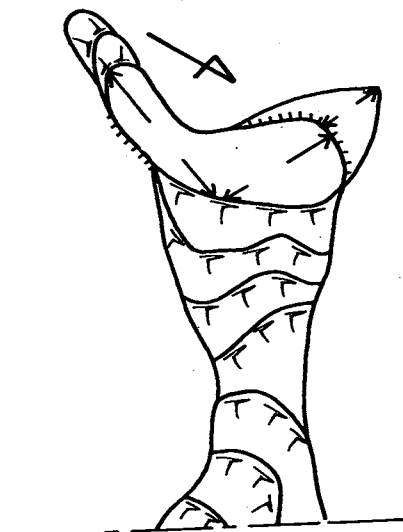
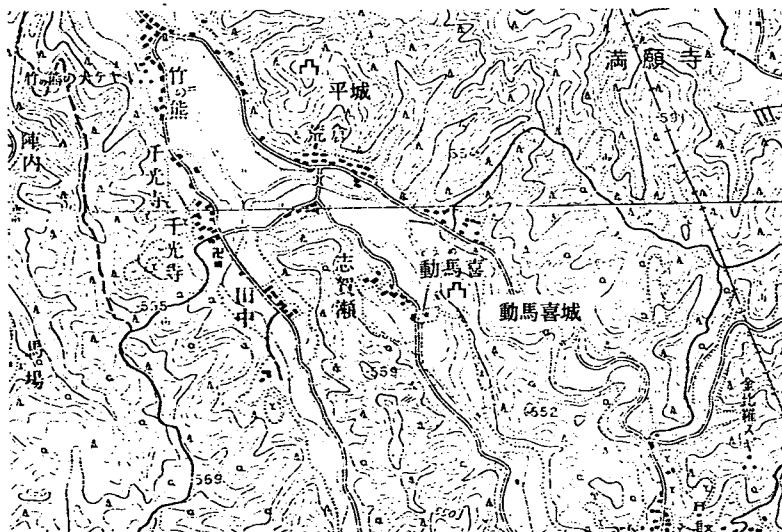
平城 (竹の熊城・比良城) (阿蘇郡南小国町大字満願寺字城ヶ平)

城主は北里氏一族であったという。

城跡は志賀瀬川流域の水田地帯にその裾部をもつ山稜末端部(標高572.2m・西側麓の水田面よりの比高約90m)の杉山

に位置しており、「城ヶ平」の字名を残す。

山頂部分は鉤型をした平坦地（山頂の中央部から北西方向へ25m、南西方向へ24m、幅20m内外）となっており、西側を除く三方に階段状地形が観察されるが、とくに北東側鞍部に著しく弧（幅8～10m）を描く形で幾段にも重なっている。平と荒倉の両集落から登城道があるが、とくに平からの場合、その道沿いの堂の前には薬師如来堂があり、五輪塔も大小、6基を数える。境内には青面金剛の板碑（天保七年）も残っている。この他、民家の先祖墓にも五輪塔を含むものがある。



平城 見取図

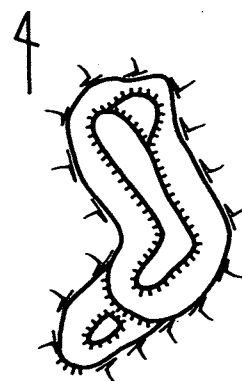
動馬木城 (阿蘇郡南小国町大字満願寺)

北里越前守と紀伊守が居城していたという。

城跡は志賀瀬川と動馬木川の合流点にあつて、「城山」と称される山稜末端部（標高520.4m・西側麓の志賀瀬集落よりの比高約45m）に位置している。山頂部分は鉤型をした平坦地（中央部から北西方向へ18m、南西方向へ10m、幅3～5m）となっており、これより2m下った所には、幅4mの曲輪が平坦地を取り囲んでいる。

さらに、この曲輪の南西側、段落ち部分にある舌状形の平坦地（長さ11m・幅9m）には、長さ4m・幅2mの小規模なマウンドが観察される。

城山の西側、山腹には野面積みの石塁跡とも思えるような自然石が縦につらなっており、麓には、志賀瀬川と「城山」に挟まれた一軒の民家がある。この民家の敷地は、位置から城跡に関連した遺構（館跡）であろう。

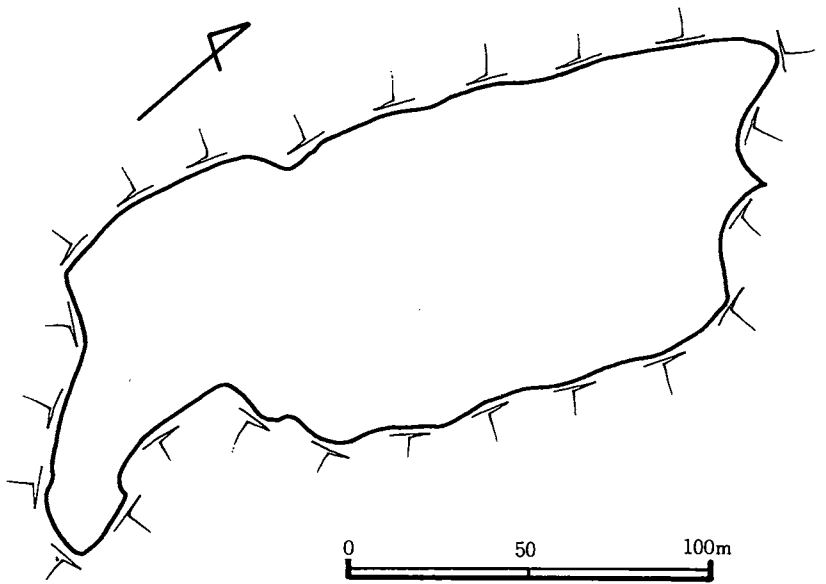


動馬木城 見取図

満願寺城ヶ鼻 (阿蘇郡南小国町大字満願寺字作ヶ倉)

『古城考』によれば、延文年中(1356～1361年)に北里式部少輔が、満願寺僧と共に300騎で城を守ったというが、『小国郷史』は城主は北里妙義と伝える。

城跡は立岩集落の南方向に、徒歩で約1時間程を要する山稜中の草原（標高772.5m・集落よりの比高約200m）に位置する。「陣床」と称される草原は長方形の広い平坦地（東西方向に主軸を呈し、長径200m・短径80m）となっており、東側部分を南小国町から一の宮町へ至る山越道が南北に突き抜ける。城跡に関連した遺構は何も観察されないが、当該地からは縄文土器の破片が多量に出土する。



満願寺城ヶ鼻 略測図

なんごう

南郷城 (久木野城、桜山城)

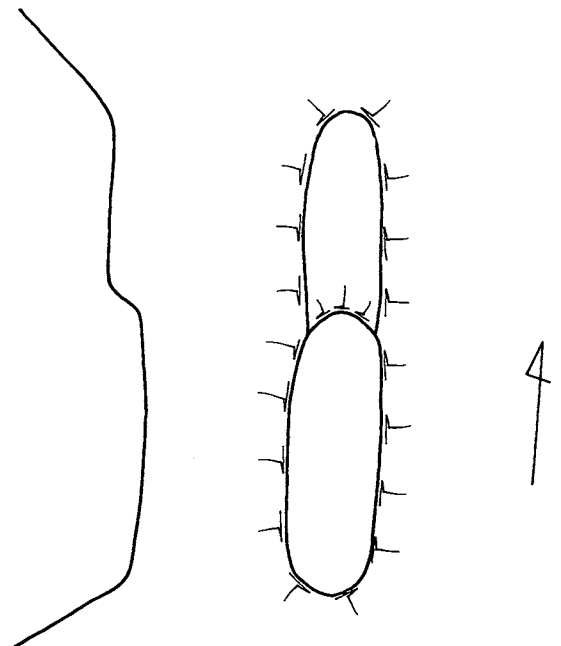
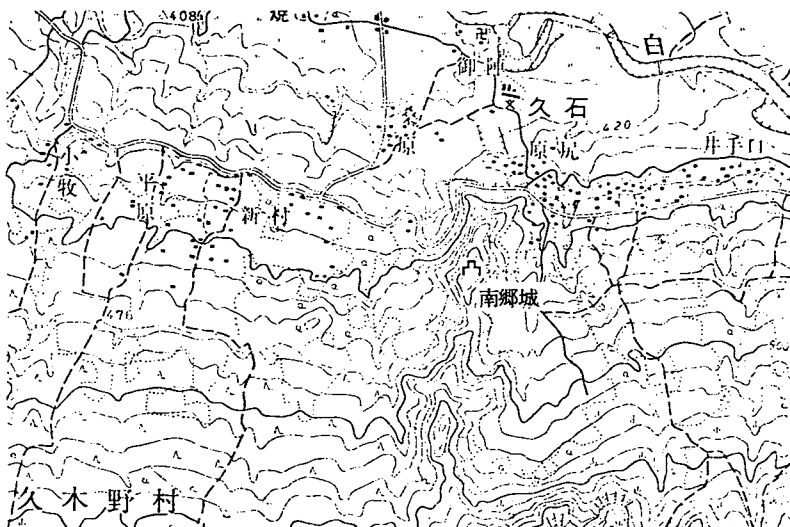
(阿蘇郡久木野村大字久石字上駄原)

天正年間の城主は阿蘇家臣、二子石九郎左衛門というが、天正十二年(1584年)にいたり、島津勢に攻められて落城したという。元来、南郷の地は平安時代末期に阿蘇氏(南郷大宮司)の拠点となった事があり、恵良には館が築かれていた。

建久七年(1196年)に惟次は矢部の地に移ったが、その後も南郷は矢部の北方の押えとして重要な地域であったため、南郷城が据え置かれたらしい。天正年間に至るまで久木野正敏や阿蘇惟時等が居城したという。

城跡は、原尻(字・山下他)集落の南西側にあつて、^(注1)「白禿山」とも「城山」とも称される山稜末端部(標高524.6m・北側麓の道路面よりの比高約98m)に位置する。山頂部分は長円形状の平坦地(北東方向に主軸を呈し、長径21m・短径7m)となつており、これより南側へ1.7m下つた所に舌状形の平坦地(南北方向に主軸を呈し、長径15m・短径6m)が連なる。さらに、これらの二段からなる平坦地を取り巻く同心円状の曲輪(幅3~4m)も観察されるが、上段部には高さ1~2mの土塁が東側と南側の二方をめぐっている。南側鞍部は約26mの堀切となる。

この他、「白禿山」の南側山腹中にも長円形状の平坦地(標高499.6m・南北方向に主軸を呈し、長径15m・短径7m)が存在しており、城跡に関連した遺構かとも思われる。



南郷城 見取図

山腹からは、かつて短穂の鎗先が出土したという。

白禿山の麓には「^(注2)恵良」・「^(注3)御陳」・「^(注4)中園」・「^(注5)塔頭の下」・「^(注6)染谷」という地名を有する所があり、天徳寺跡として多くの寺跡を確める事が出来る。^(注7)

(注1) 文治二年(1186年)に戦死と伝わる。桜山の地に墳墓があって、古霊神社として小祠に祀られている。

(注2) 恵良惟澄が幼少時代住んだ所という。同地内には館跡が現存する。

(注3) 延元三年(1338年)に南郷城は北朝方の立田七郎等の手に落ちたが、翌年、恵良惟澄は再び城を奪い返した。その時、陣屋が置かれた所という。

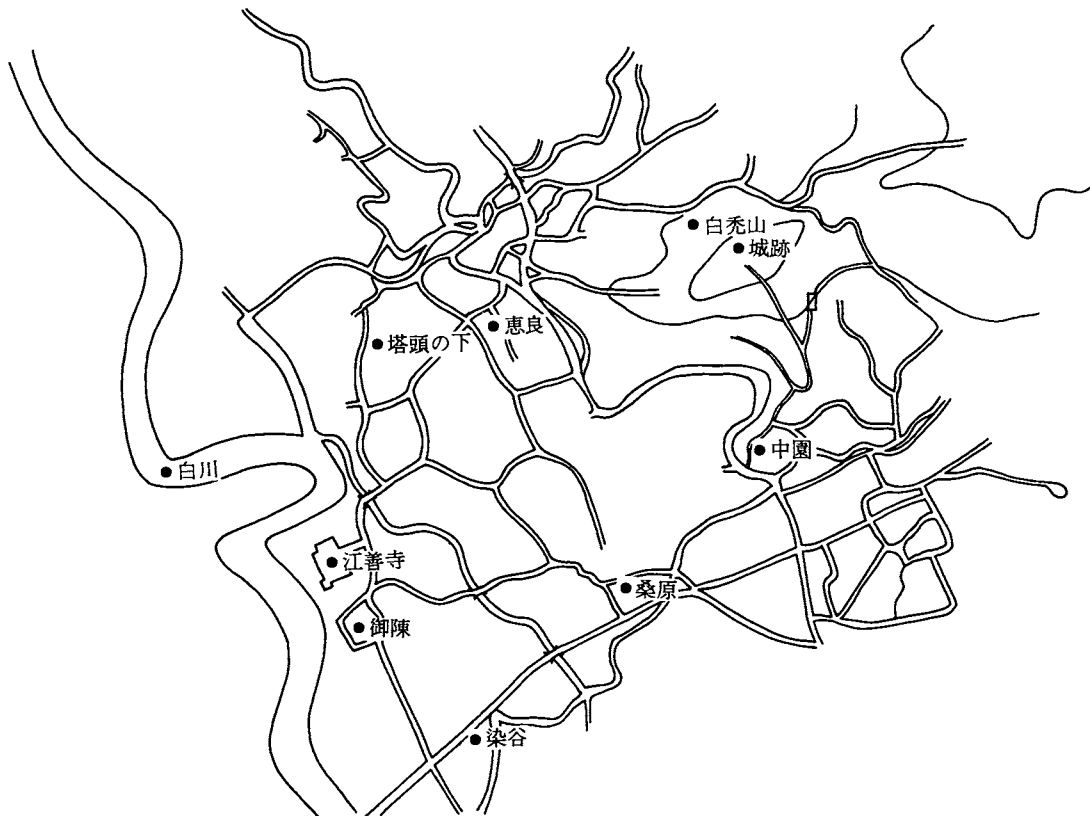
(注4) 開墾時にその周辺から多数の人骨が出土した。

(注5) 同地を流れる迫川を染谷川ともいう。

地名の由来は、かつてこの地で大きな戦があり、血染の川となったという伝承による。

(注6) 『南郷事蹟考』によれば、阿蘇氏の菩提寺という。

(注7) 今山寺跡・善次坊跡・南蔵坊跡・片山寺跡・妙音寺跡。



南郷城 周辺図

^{ねずみど}鼠土城 (下久木野城) (阿蘇郡久木野村大字河陰字^{あづまや}東屋他)

城主は阿蘇家臣久木野隼人という。

城跡は、かつて岸野集落の北西方向を流れる白川の河岸段丘(北岸)の一隅に位置していたが、白川改修工事によって流路が変わった為に、当該地は河川敷や水田地帯となり遺構は何も観察されない。わずかに周辺一帯に残る「東屋」や「西東屋」の字名が城跡の存在を伝えるにすぎない。

「東屋」の地は、その意味から城主の館が所在した所であろうか。
(注1)

(注1) 広辞苑によれば「四方へ櫓のきを葺きおろした家屋」という意味。

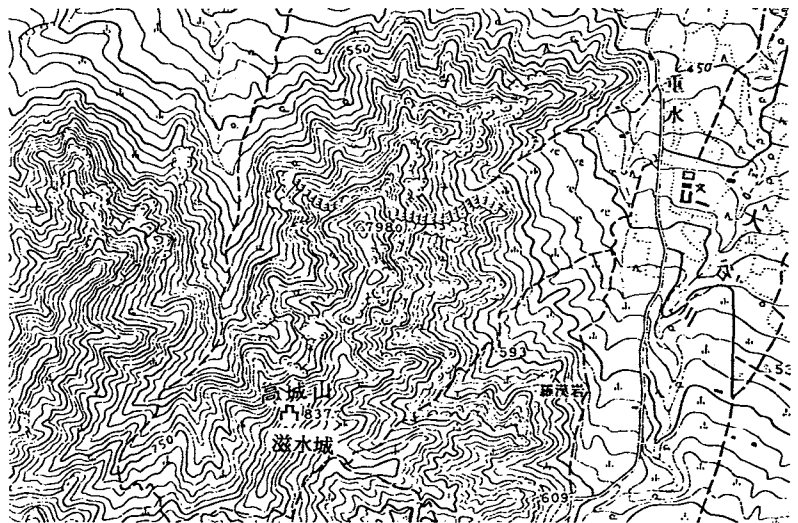
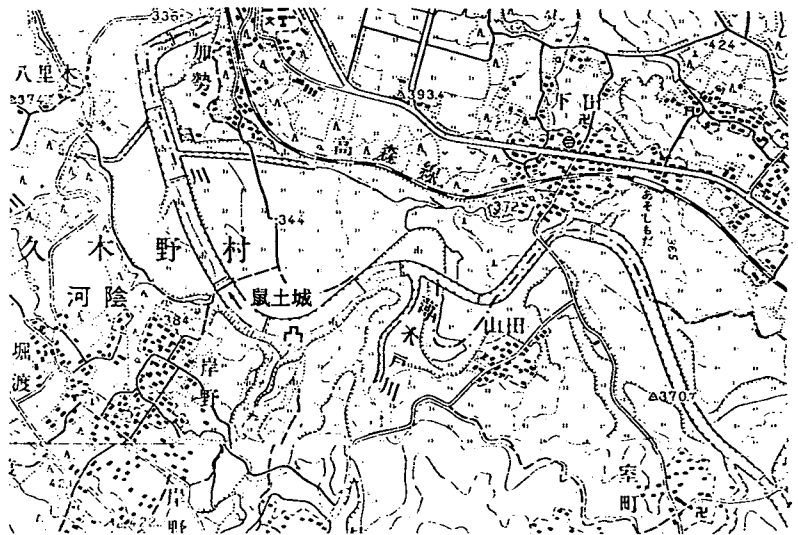
しげみず 滋水城

(阿蘇郡久木野村(国有地))

『国郡一統志』によれば城主は久木野氏というが、地元には、今倉蔵人が城主であったと伝えられている。

城跡は、**しげみず** 重水地内の南西方向にあって、「高城山」と称される山稜(標高689.1m・東側麓の道路面よりの比高200m)に位置する。当該地は険しい山で、岩石も数多く露出しており、城跡に関連あると思われるような遺構は何も観察出来ないが、地理的位置から、「地藏峠(標高1086m)」を越えて矢部にいたる山越道のルートに当たっているのも、何らかの形で、城跡が存在したと思われる。

なお、「高城山」の北方向麓に開けた^摺尾集落には、「城主が逃げる時に金の茶釜を埋めていった」という伝承が残っている。



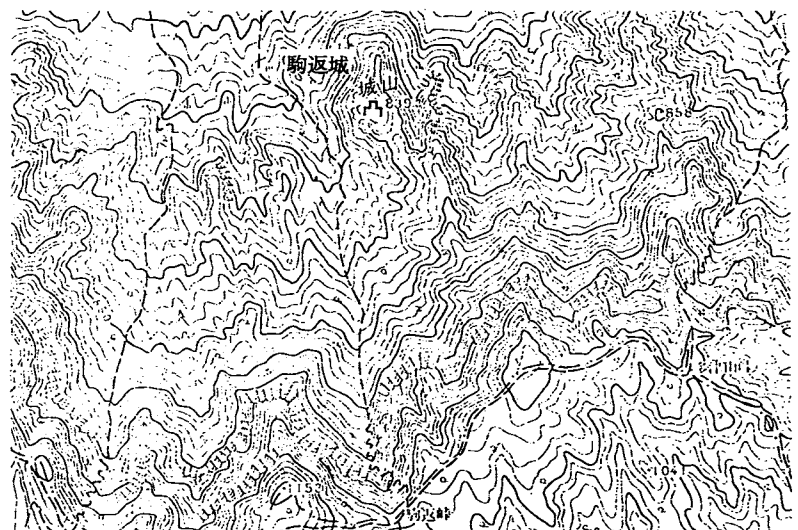
こまかえり 駒返城(駒帰ノ城)

(阿蘇郡久木野村(国有林))

『南郷事蹟考』によれば、「駒帰ノ城」と記されているが、これは駒返城の誤植である。城主は阿蘇家臣、久木野備前守という。天正年間に島津勢に攻められて、落城したと伝わっている。

城跡は、「白城跡」とも称される山稜(標高840m・北方向麓の新村集落よりの比高400m)に位置する。山頂部分は、若干の平坦地が存在しているが、周辺部には何の遺構も認められない。しかし当該地は、同書に「此城ハ矢部浜ノ御所北大手ナリト云」と記されているように、「駒返峠(標高1153m)」を越えて、矢部に至る山越道の主なルートに当たっているのも、何らかの形で城跡が存在した事は確かであろう。山頂からは、北東方向の山稜末端部に築かれた南郷城跡を望む事ができる。

(注1) 『南郷事蹟考』によれば、「峠ニ山見締ノ番所アリ」と記されている(未確認)



^{いま}
今村城 (阿蘇郡蘇陽町大字米迫字後山)

今村氏一族の居城という。

城跡は、米山(字・柳迫他)の地内にあって北東方向に主軸を呈する丘陵地末端部(標高約562~567m)に位置する。丘陵地の背面は広い面積を有しており、古畑(字名)集落とともに杉の植林地や畑地等になっている。顕著な遺構は観察出来ないが、城跡の周辺は南西側鞍部を除く三方を、五ヶ瀬川と上差尾川(U字谷で蘇陽峡の一部をなす)によって取り囲まれており、鞍部にも両側から深谷が食い込んでいる為、城跡への出入り口は、極めて限られる事になる。『阿蘇郡誌』に「谷深く、漸く西部の馬の背の如き一道路通じ之を大手口と云ふ」という記事が見える。まさに地形そのものが一つの城をなすものと言えよう。さらに鞍部周辺の畑地には小塚の如く寸断された土塁の残存部(高さ0.9m・幅2m)が十箇所を観察される。

城跡には今村親貞の墓と伝わる宝篋印塔(注1)があり、今村氏一族は年に一回、先祖祭を行う。なお、役場周辺は「お花畑」という小名をはじめとして「中園」という字名や小塚が残っており、城跡との関連性(注2)がうかがわれる。

(注1) 米山の住民は、「米山の山城の神さん」と称しており信仰心が厚い。

(注2) 手を触れてはならないと言いつたられている。(かつて鎧が出土したともいわれる。)



^{たかばたけ}
高島城 ((推定地)阿蘇郡蘇陽町大字玉目字藏ヶ迫)

『国郡一統志』によれば城主は玉目秀左衛門という。

城跡の所在地については不明であるが、玉目(字・藏ヶ迫他)集落内には、玉目氏の墓所と称される所があり、かつて墓所には数十基の宝篋印塔の相輪部が散在していたという。現在も数基の相輪が残っており、玉目一族を守る祭神とされている。毎年7月7日には玉目辰雄宅で先祖祭が行われる。このことから集落内に館の類が存在した可能性は大きい。(注1)

『阿蘇家文書』には、「玉目丹後守は平田の城主ならんとあるが勢力を玉目にもってくる」という主旨の記事も見える。(注2)

(注1) 玉目鉄雄氏の御示唆による。

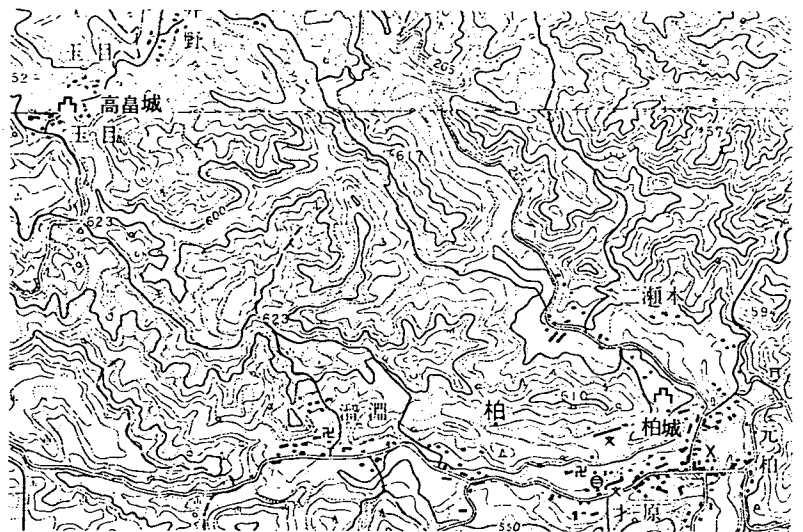
(注2) 玉目より北西方向約4km(直線距離)大字大見口。

^{かしわ}
柏城(二瀬本城)

(阿蘇郡蘇陽町大字二瀬本字北園他)

『阿蘇家文書』や『島津家古録』等によれば、永禄・天正年間頃の城主は阿蘇家臣、柏大輔であったという。

宮の下(字名)集落の北西側に位置する丘陵地末端部(標高550m・集落よりの比高約50m)が城跡と伝わる。丘陵地の背面は楕円形状の平坦地(公園・北東方向に主軸を呈し、長径44.3m・短径24m)となっており、さらに東側斜面部に



も二段からなる平坦地が観察される。南西側の鞍部には堀切（長さ18m・堀幅7～8m）がはいており、北側隅に二瀬本神社が祀られている。^(注1)

二瀬本小学校正門前には血盛塚^{ちもり}があり、小学校グラウンドを最近まで血盛の畑と称していた。この他、千人塚が柏中学校グラウンド^(注2)付近にあったといわれている。

神働川^{もかみ}と宇治川が城跡を包み込むように流れている。^(注3)

(注1) 上段部は台形（駐車場、上辺47m・下辺51m・幅15m）、下段部は長方形（畑地・長径51m・短径43m）の形状を呈する。

(注2) 小石を二個並べたもの。

(注3) グラウンド整備の折、消滅。

23

高森城（^{たかもり}囲城）（阿蘇郡高森町大字高森字城山）

『肥後国誌』によれば、阿蘇家臣、高森惟直の居城という。

同書は高森城が、島津勢から三度に亙る攻撃を受けて、ついに天正十四年（1586年）正月二十三日に、落城するありさまをよく伝えている。

高森有一氏（福井県小浜市在住）所蔵古文書には、大友義統が高森惟直にあてた出陣の督促状と感状や、寛永年間に津留忠左門が高森正因にあてた高森城合戦の覚書がある。

高森地区の東方向に連なる山稜地帯（南北方向に主軸を呈し、標高916m・集落よりの比高180m）に、「城山」という字名が残っており、地元の人々は城跡と伝える。

尾根筋に遺構は何も観察されないが、山頂より南西方向に下った標高840mの地点に、「^{かこい}囿」と称される二つの谷間（字・城山下）が存在する。谷間は南北両側に並列的に並んでおり、いずれも西側に開口する。内、南側部分については、奥行き130m、入り口の幅60m、谷底中央部の幅80mを計り、長方形（5間×4間）に5個の礎石らしきものが並んでいる事から、当該地を城跡の中心地と見なす向きが一般的である。高森城を^{かこい}囿城とも称する由縁はここにある。

しかし、残念なことに当該地は昭和49年7月16日の大水害で地形は一変し、現在は北側部分の谷間上方に「千人がくれ」^(注1)と称される窪地をのこすのみである。城跡に関連あろうと思われる所は、この谷間に限られる。特異な形態の城跡である。

高森地区には、「町園」「上園」「山王園」「宮園」「森園」という字名とともに、合戦にまつわる遺跡が数多く残っており注目される。^(注2)

なお、宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町坂本に、合戦の内容を謡った高森踊りがある。^(注3)

(注1) 『古城考』に詳しい。千人がくれは、落城の際に女・子供が自刃した跡という。

(注2) 高森家の菩提寺と伝わる起雲山含蔵禅寺には、高森惟直の墓や家臣の墓が多い。

(注3) 荒踊りであるが、その一節は下記の通りである。

みいろのむさしの使いとて

ごちん村山にたれや

いなづみ新助大將軍で

高森城とこわれた

高森殿のおしやりごと

しばし三日お待ちやれ

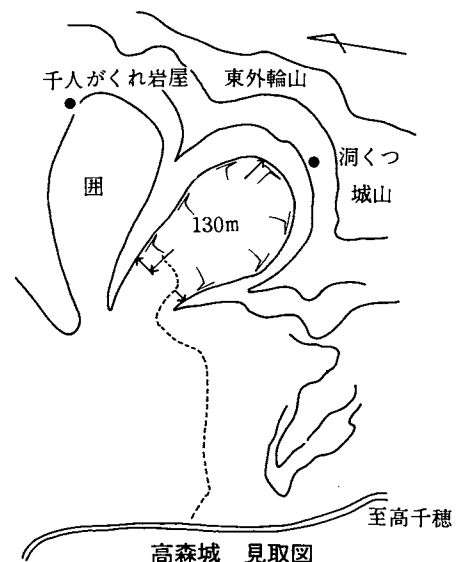
しちおぼしたいまいらしょう

高森は早く使者立てて

ししやしらみやくたみどの

1万余騎の大將軍で

なみのに陣はつけられた



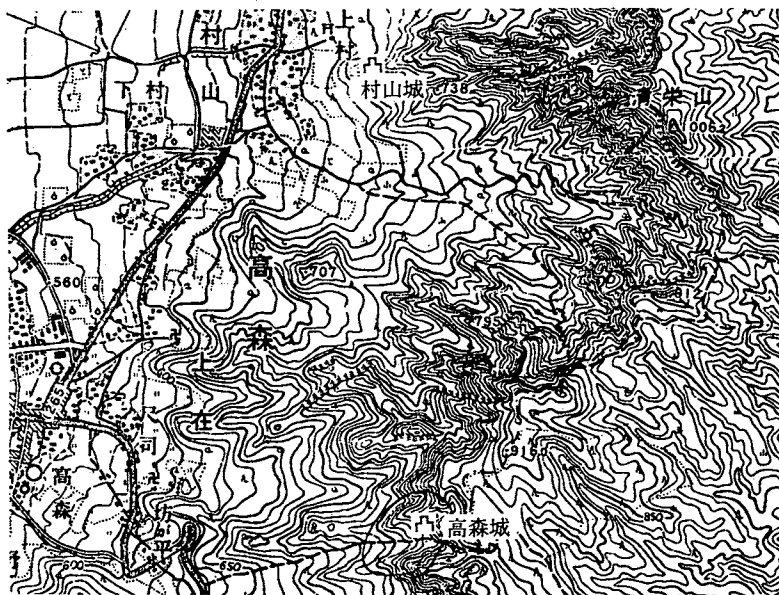
むらやま 村山城 (平の城・比良城)

(阿蘇郡高森町大字高森字城平)

天正年間 (1573~1592年)、阿蘇家臣、村山惟広とその子家久が在城したという。

城跡は村山集落 (字・松平等) の東側にあつて、「城平^{じょうびら} (字名)」と称される山稜末端部 (標高810m・集落よりの比高約100m) に位置する。山頂部分は楕円形状の平坦地 (東西方向に主軸を呈し、面積約70㎡) となつており、北東側の鞍部に自然の堀切をなす迫地が走る。鞍部を除く三方は急峻な崖で登るに容易でない。南側斜面部の原野に「小勢^{こぜ}」・「大勢^{おおぜ}」の小名が残る。

集落内には (伝) 村山丹波守の墓があり、墓碑に「南無阿弥陀仏、釈道園不退位、天正19年8月20日天、俗名、村山筑前氏惟忠、願主五代孫、村山源兵衛惟稔立之」と記されている。



しゃくら 社倉城

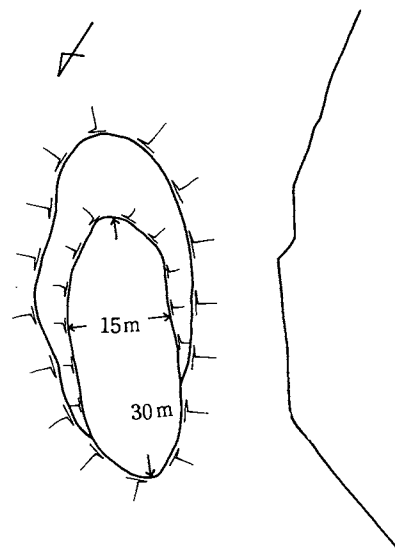
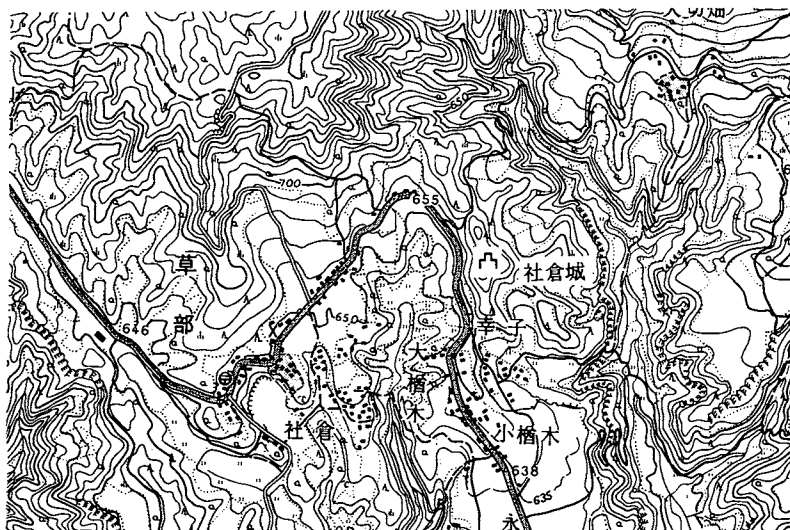
(阿蘇郡高森町大字永野原字上境ノ口)

城主は不明であるが、一説には甲斐親宣ともいわれている。

城主は幸子 (字・平戸他) 集落の北側にあつて、「城山^{じょうやま}」と称される山稜末端部 (標高660m・集落よりの比高30~40m) に位置する。

山頂部分は長円形の平坦地 (南東方向に主軸を呈し、長径30m・短径15m) となつており、これより2m下つた所には北西側の鞍部を除く三方を曲輪がめぐる。鞍部は10m程の落差があり、迫地のため自然の堀切となる。城跡からは宮崎県境、下切方面、高千穂方面が一望される。集落周辺には (伝) 甲斐堅物の墓が残っている。

(注1) 山の神 (神体はさかき) が祀られており、幸子の住民は春秋2回、祭りを行う。



社倉城 見取図

せりぐち 芹口城

((推定地)阿蘇郡高森町大字芹口)

『草部村小史』によれば、城主は芹口是久という。城跡の所在地については不明であるが、芹口集落内に「上園^{かみその}」と称される広い水田地帯 (面積約10,000㎡) があり、同地内には (伝) 惟直 (是久の子) の墓をはじめとして、天正五年(1577年)・

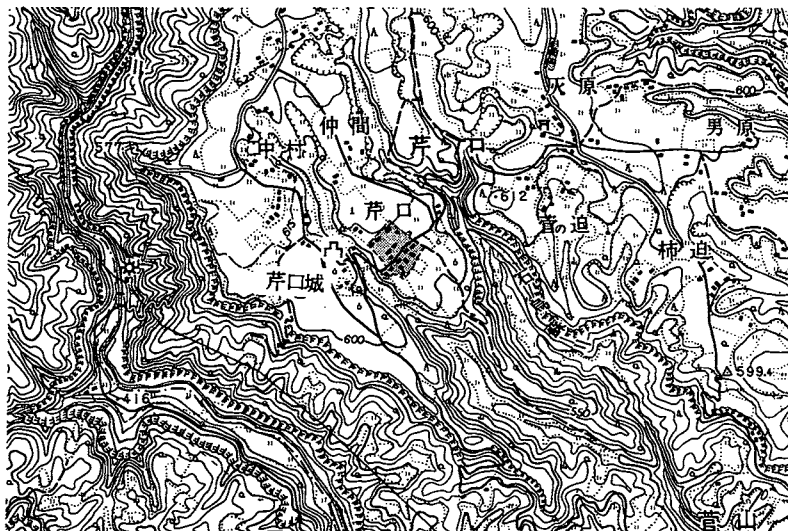
(注1)

の銘を有する自然石の墓も存在する。

集落内には「馬場」・「射場の元」・「仲間(なくま)」・「商(あきない)ばやし」^(注2)という地名が残っており、城主の子孫とされる芹口氏一族も居住しており、館の類が存在した可能性は大きい。

(注1) 高さ1～2mの微高地である。

(注2) 中町の転訛とされる。



なかほら 中原城

(阿蘇郡高森町大字芹口字浦の園)

城主は工藤宗英というが、後には甲斐^(注1)堅物も居城したらしい。

城跡は柿迫丘陵地の南側末端部(標高599m・南側麓の水田面よりの比高約50m)に位置する。丘陵地の背面は南東方向に主軸を呈する広い平坦地(雑木林)となっており、北西側の鞍部に堀切が観察される。なお、『草部村小史』には「天守閣跡「一の木戸」・「二の木戸」等の堀割等あり」という記事が見える。城跡周辺の丘陵地内には(伝)工藤氏夫妻の墓^(注2)や「しをき場」という小名を有する一隅^(注3)も残っている。城跡東側の崖面を「水無滝」と称するが、呼称の由来は「対岸からの敵の攻撃に際して、あたかも瀑布のごとく白米を崖面より落下させて相手方の機先を制した」という伝承による。



なお、柿迫丘陵地からは石器や土器片が出土する。^(注4)

(注1) 幸子集落に子孫と称する一族がいる。

(注2) いずれも自然石で、宗英の墓は碑名「征龍院殿泉山光玉大居士、天正十四年(1586年)2月6日幸子村建」。夫人の墓は碑名「智明院靈位」

(注3) 千人塚がある。

(注4) 柿迫遺跡

かわかみ 川上城(岡山城・野尻城) (阿蘇郡高森町大字野尻字石原)

『野尻惟則翁事蹟』に「足利又太郎、平氏没落後、彦山を経てこの地を領し川上に城を築き、岡山城と呼び、その居を宮園と呼ぶ」という記事が見える。『古城考』によれば、築城者は野尻氏の祖、足利又太郎忠綱であって、その後、野尻氏代々の居城となったという。最後の城主は忠綱と伝わる。

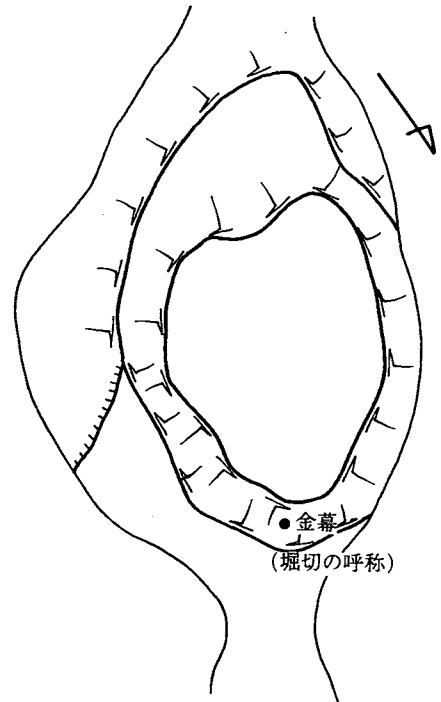
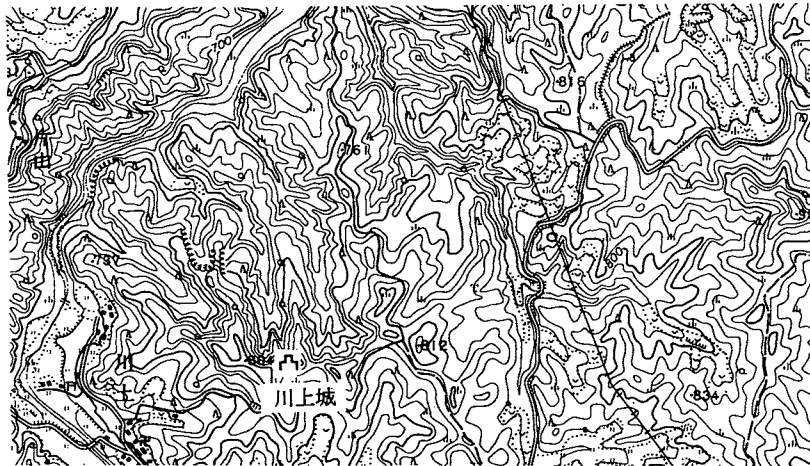
城跡は川上集落の北東側にあつて「城山」と称される山稜末端部の小山(標高800m・集落よりの比高50m)に位置する。山頂部分は長円形の平坦地(北西方向に主軸を呈し、長径23m・短径5m)となっており、同地内には延享三年(1746年)

に建立された足利忠綱と野尻刑部少輔の霊塔2基が祀られている。北東側の鞍部には「金幕^{きんまく}」と称する堀切がはいつているが、「金幕とは、防備が固い事を意味する」と古老はいう。堀切は東側に延び空堀となり、平坦地の三方(北側を除く)を取り囲む。なお、北側斜面のみは断崖絶壁となっている。

川上集落には(伝)城主姫君の墓や常念寺があり、城跡南東側の津留集落にも足利又太郎の墓と伝わる日の丸塚と、善応寺観音堂が残る。
(注1) (注2)

(注1) 立岩319番地。円形の二段重ねの石塔(大・小2基)

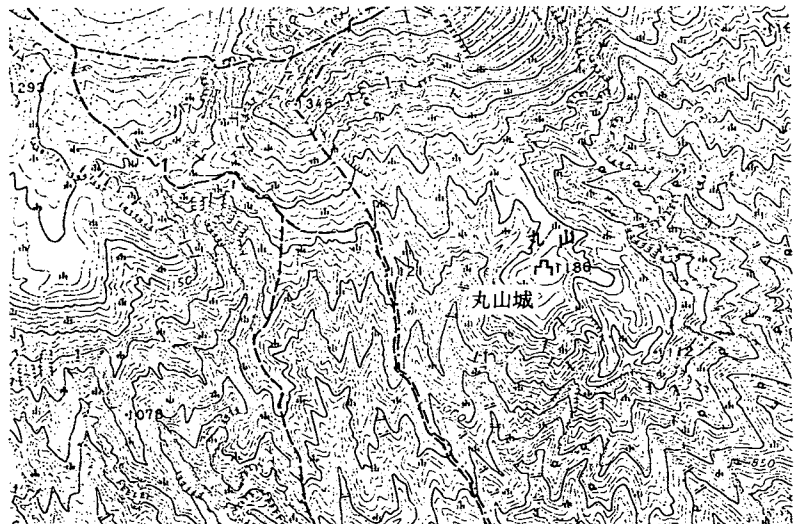
(注2) 大字津留中江、北の園に五輪型の石碑があり、台石の四面に「日の丸」のように朱がぬられている所から日の丸塚とよばれる。塚の後に山林があり助六道という城跡に通じる間道がある。



川上城 見取図

丸山城 (阿蘇郡高森町)

『南郷事蹟考』によれば鎮西為朝の城という。同書は文政十四年(1831年)に、山頂(標高1186m)から釜・茶臼・土器等が出土した事を伝えており、また麓には、「陣屋」という所もあると記している。一方、『草部村小史』にも「頂上の盆地には一見建造物の存せりと思惟する處あり、社倉城の本丸か又は物見をおきし處というも詳ならず」という記事が見える。しかし、今回の踏査では、「丸山」と直接結びつく集落がない事もあって、城跡に関する伝承等の採集は出来なかった。



坂井迫城

『阿蘇郡誌』には城山城跡として取り上げられており、「草部村大字草部字坂井迫にあり。地形一帯の高丘をなし草部の南丘をなし草部の南半及高千穂の連山を展望し得べく、要勝の地位にあり。丸の口等の名称存在し一見城壘の觀をなす、居城主等不詳。」という記事が見える。しかし、今回の調査では城跡の所在は確認出来なかった。

しもだ
下田城 (陣内城) (阿蘇郡長陽村大字河陽字東所原)

『南郷事蹟考』に、「阿蘇殿ノ家臣下田左エ門尉能統在スト云天正年中落城ス」という記事が見える。一方、『下田家系譜』によれば「阿蘇氏から南郷下田の荘を賜った下田維政が築城したもので、その後、代々下田氏が居城したが、七代目の保輔にいたって新たに城が築かれたので、その後、新城を下田東城、本城を西城と呼び分けた」という。

城跡は、渋谷川の湾曲に沿って突き出した低丘陵地(標高370m・南側麓の水田面よりの比高10m内外)に位置しており、「陣内」という小名を残す。丘陵地の背面は楕円形状の平坦地(畑地、山林、宅地、北西方向に主軸を呈し長径160m・短径140m)となっており、野首にあたる北西側に二重の堀切が観察される。内側の堀切は、そのまま延長されて城跡の北側と東側部分をめぐるが、その端は渋谷川と交わっている事から従来は水濠であった可能性がある。

また、城跡の東側と南側麓を流れる渋谷川は自然の水濠となる。城跡内には2箇所古井戸が残っており、野首周辺に「城戸」^(注1)、「岡屋敷」^(注2)、「陣内馬場」^(注3)、「塔頭(塚)」と称される一隅がある^(注4)。

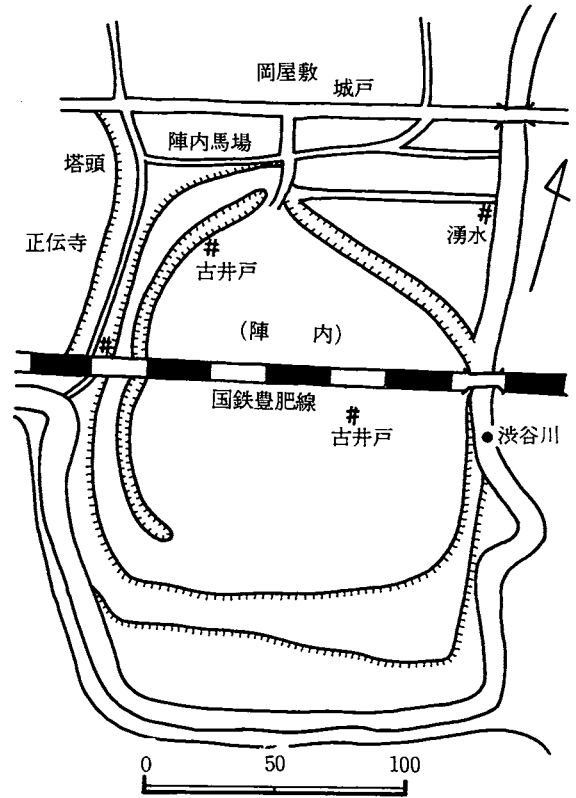
この他、城跡の西側丘陵地に、城主の菩提所であったと伝わる薬師寺(正伝寺)があり、『阿蘇郡誌』には「寺の近傍に下田城主の墳墓あり」と記されている。

(注1) 能統が寄進したという釣鐘が下田西野宮に現存している。関連事項として「鐘鑄のもと」と称される地名が下田地区に残っている。地名の由来は寄進の鐘を鑄造した所という伝承による。

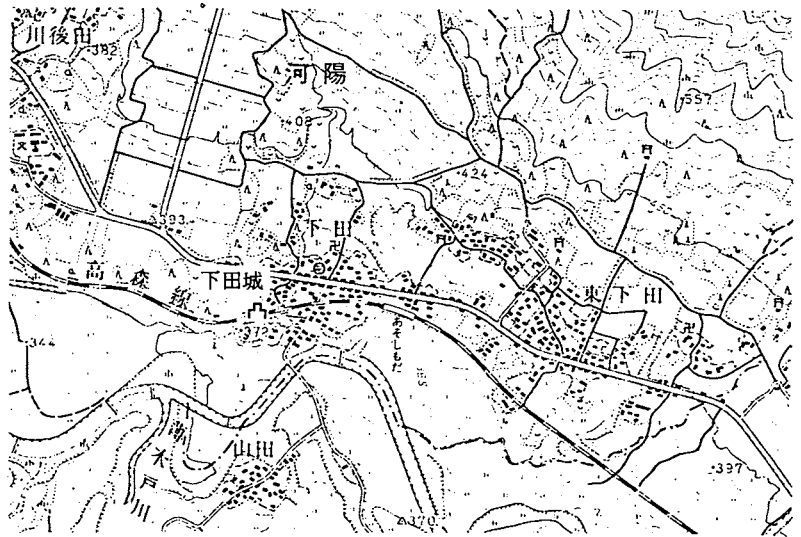
(注2) 城跡の中央部を国鉄豊肥線が東西に横切っている。

(注3) この他、城跡周辺に水量豊富な2箇所の湧水井戸がある。

(注4) 家老岡太郎左衛門の屋敷跡と伝わっている。



下田城 略測図



長野城

(阿蘇郡長陽村長野)

『南郷事蹟考』によれば、城主は阿蘇家臣の長野氏一族という。

長野神社裏手の丘陵地末端部が城跡と伝わる。当該地は現在、畑地や竹林となっており、その一隅には城跡碑も建立されているが城跡に関連あろうと思われるような遺構は何も観察できない。



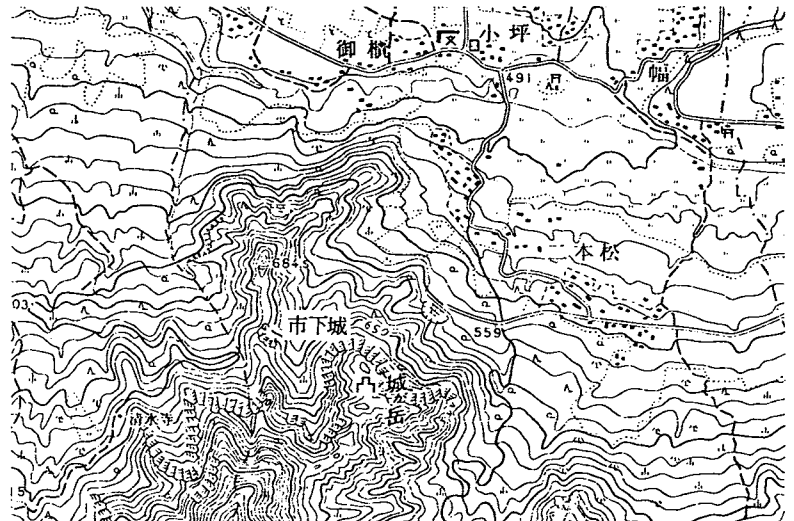
^{いちした}
市下城（城が岳城）（阿蘇郡白水村大字両併字城山）

天正年間の頃には阿蘇家臣、市下大和守が居城したが、天正十四年（1586年）に島津勢の攻撃を受けて高森城とともに落城したという。

城跡は二本松集落の南西側にあつて、「城が岳（字・城山）」と称される山稜末端部（標高750m・集落よりの比高約200m）に位置する。山頂部分は岩山となり見るべきものはないが、山頂より東側へ約20m下つた所に三角形の平坦地（原野、面積約200㎡）が存在する。さらに、城跡の北西側麓には千人塚と称される古戦場（星ヶ峯の上）があり、『阿蘇郡誌』には「東麓にも千人塚二個あり、昔惟澄公此の城を攻め給ふ時大合戦ありて討死せし者の塚なりと云ふ」と記されている。

城跡の北側麓一帯に「古陣」、「陣内」、「宮園」、「御櫃」、「御所園」、「蓬来園」という一連の字名が残る。

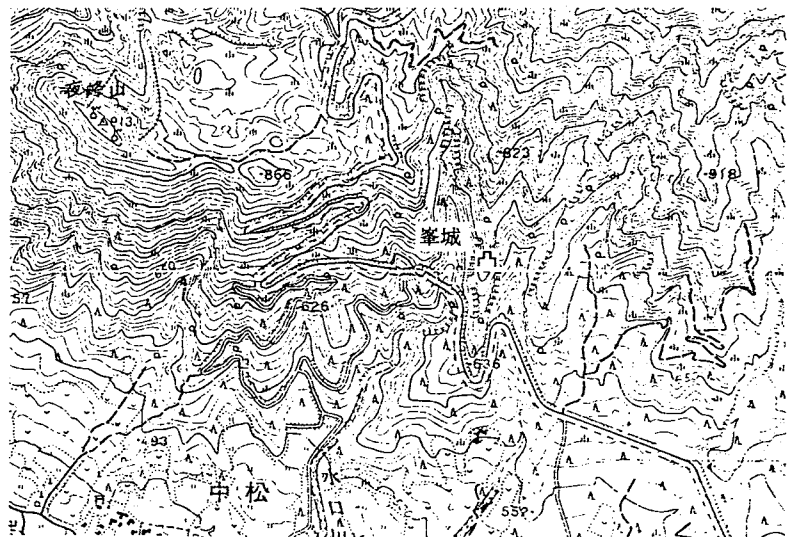
（注1）（伝）市下氏の墓は二本松と称され、これがそのまま集落名となっている。



^{みね}
峯城（鶴翼城・壇城）（阿蘇郡白水村大字中松字壇城）

城主は阿蘇家臣、中村惟冬という。惟冬は天正年間（1573～1592年）に至つて、宇土郡に所在する矢崎城の城代を勤めたと伝えられる。

城跡は御竈門山（標高1153m）の南西側末端部（標高750m・南西側麓の峰集落よりの比高約310m）に位置する。山頂部分は楕円形状の平坦地（雑木林・南北方向に主軸を呈し、面積約90㎡）となつており、これより5～6m下つた所には同心円状の曲輪が存在する。北側鞍部の迫は自然の堀切となる。南側の山腹中には、古老が「お花畑」と称する100㎡程の原野がある。城跡の西方は深さ100m以上の谷となり、集落からの登城には一時間を要する。まさに要塞堅固の城跡といえよう。



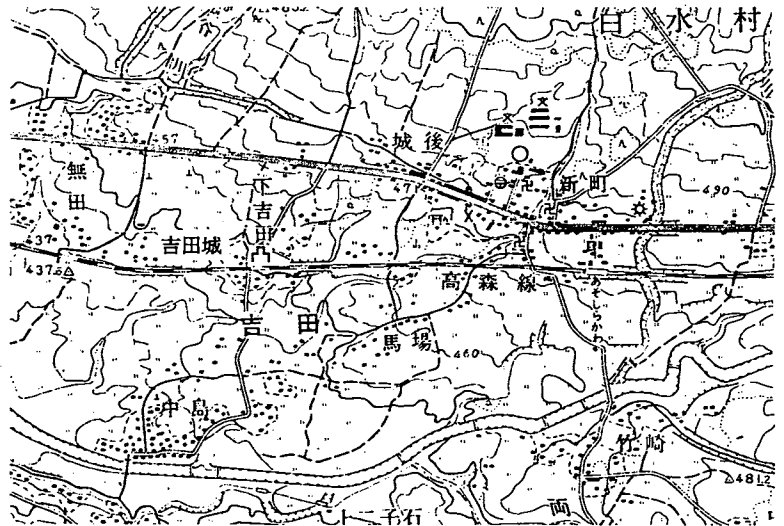
^{よしだ}
吉田城（阿蘇郡白水村大字吉田字城後）

城主は阿蘇家臣、吉田主水頭という。

吉田地区にあつて「城後」という字名を残す集落が城跡と伝わる。現在も集落及びその周辺に「外園」・「馬場」・「城前（^{そと}字名）」・「修復野」等の地名が残つており、「御献上汲場」と称される湧水池も現存する。「修復野」については城に使用する萱を植えた所という。しかし「昭和3年に開通した国鉄高森線の工事で堀が埋まり、水田の開墾等で崖線も（^{注1}いわゆる削り落しを意味するものと思われる）消滅した」と古老が語るように、顕著な遺構はすでにない。城跡は館の類であつたろうと思

われる。

(注1) 『南郷事蹟考』に「馬場現今ハ村ノ名トナル道ノ側ニ石アリ馬乗石ト云フ城主貴馬ノ節ハ此ノ石ノ上ヨリ乗シト云フ」という記事が見えるが、馬石なるものは現存しない。



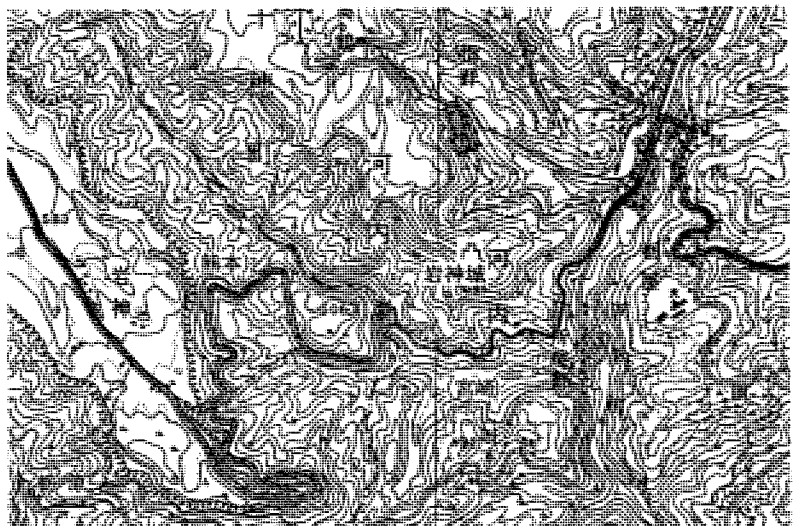
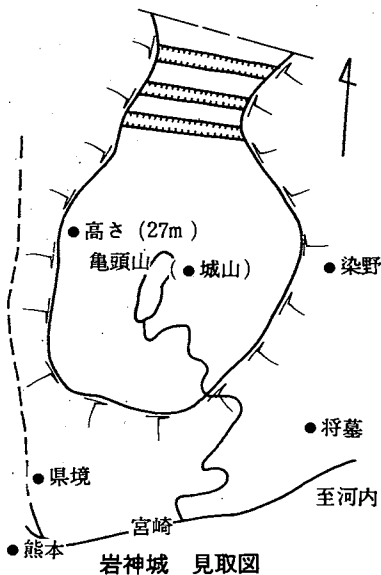
岩神城 (宮崎県西臼杵郡高千穂町大字田原字染田)

城主は阿蘇家臣甲斐親宣という。大永六年(1526年)、親宣の子宗運が益城郡御船に転出後は、野尻刑部少輔が居城したらしい。天正年間に至って、島津氏に追われた甲斐将監親房が、この城に落ちのびたという伝承もある。

城跡は熊本県と宮崎県の県境にあって、亀頭山(標高540m・西側麓の水田面よりの比高約60m)と称される丘陵地末端部に位置する。『古城考』は城跡の所在地を「南郷野尻岩神村にあり、日州堺也」と記しているが、現在、亀頭山は、宮崎県の行政区域に含まれる。

亀頭山の背面は広い平坦地(畑地・原野・山林)となっており、北側鞍部に三重の堀切が観察される。堀切の長さと同幅は南側から北側にかけて順次、(19m・9m)、(9m・5.4m)、(9m・9m)を計り、堀切間の距離は14mと19mである。この堀切については「延岡の高橋元種が文禄三年(1594年)に岩神城を攻めた時に造ったもの」と古老はいう。城跡は又、その形状が亀の形に似ている所から「生き城」とも称されたという。東側麓の河内集落には(伝)朝房の墓や興善寺観音堂が残っている。
(注1)

(注1) 高橋勢が亀の首にあたる鞍部を断ち切った為に、城より血が流れ出し、下方の二、三町程が血に染ったという。城跡周辺の田や原野を各々、染田、染野と呼称するのはこの伝承に由来するという。



菊池地区

菊池郡地方とは現在の菊池市・菊池郡の合志町、泗水町、西合志町、大津町等を含み、かつては合志郡であった地域、及び菊池郡を併せた地域である。この地方における諸豪族に肥後国第一の雄としての勢力を誇った菊池氏、及びその支流である赤星、西郷、木野氏、京下の貴族葉室氏、詫磨、合志、竹迫等の諸豪族が鎌倉時代から戦国時代にかけて活躍している。しかし、肥後国の特色であるが、肥後国の諸豪族を支配する豪族は生まれず、戦国時代では、大友、龍造寺、島津の進入に対して抗しきれなかった。

菊池氏は肥後国最大の豪族であり、国造系の古代豪族阿蘇氏と並び称せられる豪族である。菊池氏の祖は太宰権師藤原隆家の郎等であった菊池政則である。政則は菊池に住む豪族で当時大宰府に出仕していた。以来、大宰府官人として活躍し、肥後国第一の豪族として発展していったようである。如何にして勢力を扶植していったか、具体的な点は不明であるが、平安末期の治承寿永の内乱において菊池隆直は木原・阿蘇氏等を語らって、反平氏の兵を挙げた。しかし、平貞能により征圧され、平家方に属することになった。そして平氏滅亡後、隆直は源頼朝により斬殺された。しかし、菊池氏の所領は次男隆定が継承することが許され、菊池氏の存続がなったのである。そして、その後文永・弘安の役における武房の活躍、南北朝の内乱期における武朝・武重の南朝方の中心としての大活躍などがみられる。この菊池氏が根城としたのは最初深川であった。現在、深川城と称するが、別称、菊ノ城ともいう。このように菊池氏は則隆より歴代深川を根拠地としていたが、正平年間、武政の時に隈府に居を移した。現在の菊池城である。以後菊池氏は滅亡するまで、隈府を居城としたのである。しかし、一時期合志幸隆により菊池が攻められ、深川が占領された。豊田武光は阿蘇惟澄の援助により、幸隆を攻め深川城を回復したのである。

赤星氏は武房の弟有隆を祖とし、代々菊池郡赤星村を本拠としている。有隆は「蒙古襲来絵詞」に画かれている。南北朝から戦国時代にかけて氏族は発展し、重朝の文明13年の万句連歌に赤星重規・有信・有継・有直と四人記載されている。有継・有信は兄弟、有直は有信の子、重規は有継・有信兄弟の兄政継の子である。

菊池武重の弟、武茂より分離したのが、木野氏である。武茂は正平年間、南朝方侍從中院義定に従い筑後竹井に進出している。寄合衆として、また管領として興国3年の「武士起請文」に連署している。そして木野村が木野氏の本拠地であった。その後、親政が弘治2年の大津山合戦で討死した。

隈府の城（菊池城）の南東、菊池川本流を隔てた木庭村には上林城がある。菊池十八外城の一つと云われるが、そこを根城としていたのが城氏である。この城氏はのちにいう城氏でなく、武光の一族の部将として正平16年の筑後宝満山合戦の際謀略をもって少式勢を打ち破った智将といわれる城武顕の居城であった。城林ともいい昔の鞠智城の跡と伝えている。

葉室氏は清原氏の子孫で隈府を中心に活躍する。しかし、その勢力はあまりふるわなかった。

旧合志郡である合志町・泗水町・大津町等に蟠居していたのが、合志氏・詫磨氏・竹迫氏・田島氏等である。詫磨氏は徳治2年詫磨頼頼が合志郡の村吉村田地を蒙古襲来の恩賞として与えられたことにより、合志に土着することになる。詫磨氏の祖は中原親能である。詫磨氏は大友系と菊池系とがあり、正統問題もおこっている。しかし、大友系が本家であり、神蔵・大野・鹿子木の各荘を分領し、飽田、玉名両郡にわたっている。庶子分流は本家と対抗し、菊池一党と関係を持ち、菊池系の詫磨氏となり菊池郡に居住するのである。菊池郡西合志町須屋に須屋城跡がある。ここは須屋氏の根城であった。しかし、この須屋氏は最初菊池氏系の須屋氏、次いで合志系、そして大友系（詫磨系）の須屋氏がいるのである。菊池系須屋氏としては「武士起請文」にある寄合衆としての須屋氏があり、また須屋市蔵がいる。

合志郡の中心であった竹迫には竹迫氏がいた。竹迫氏の祖は中原師員といい、大友氏と同族である。師員は建久年中合志郡の地頭に補せられ、陣内に居住していたという。その後、名を輝種と改め、名も地名の「竹迫」と改めたという。そして現在に至るのであるが、永正・大永年間に大友氏に従って豊後に移住するまでここに住んだという。

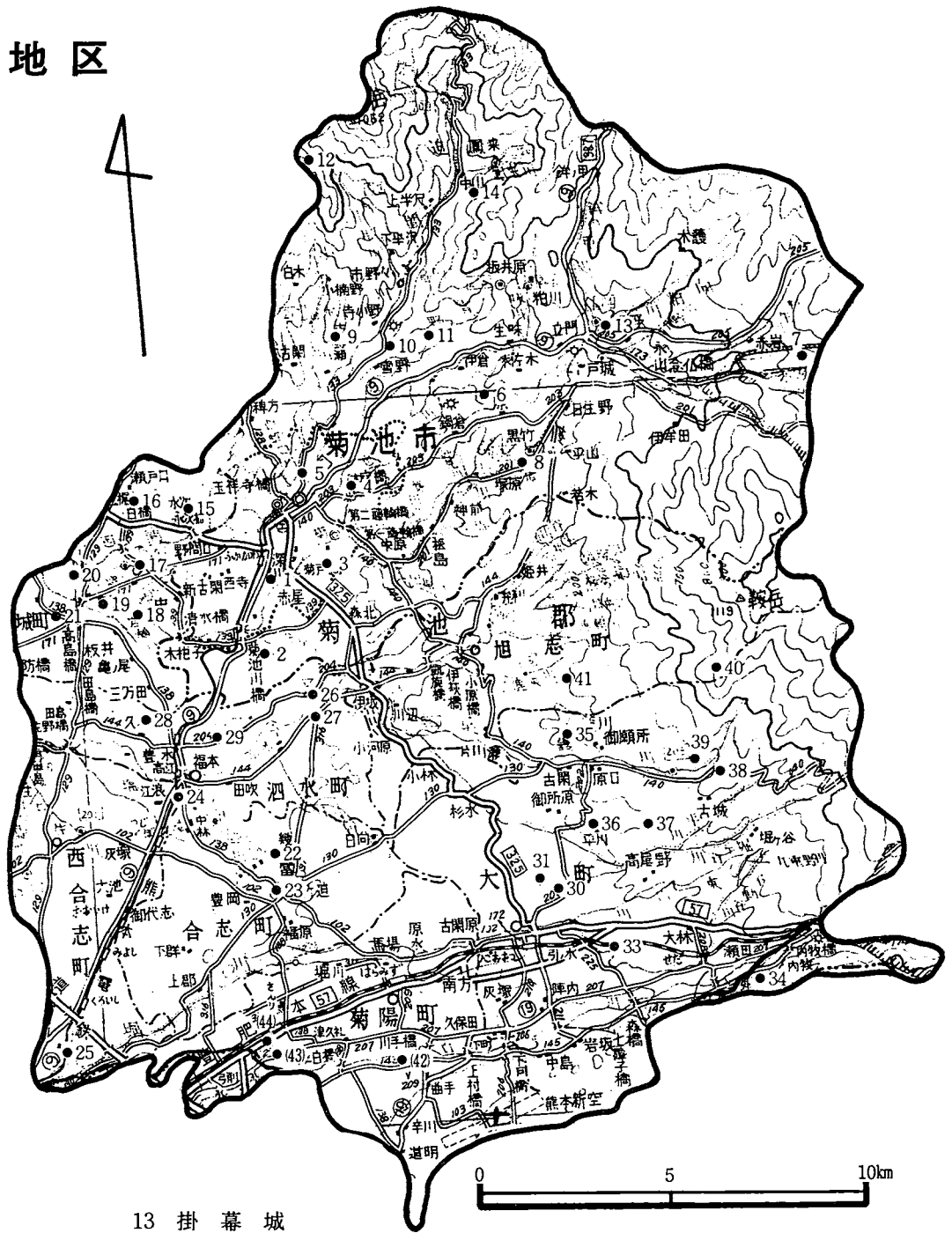
合志氏は近江源氏佐々木高綱の子孫という。高綱の五代の孫、佐々木四郎左エ門尉長綱が延元2年8月大友氏の裁許により、肥後に下向し、合志半郡の地頭職となり、合志郡真木村に居住したという。そして姓を合志姓と改め、その後住吉村に移り、また長綱より12代の孫合志伊勢守隆岑の時、永正年中に竹迫城に移ったという。そして代々竹迫に居住していたが、天正13年閏9月の薩摩島津の肥後進攻により竹迫城は島津氏に奪われ、代りに新納武蔵守が入り、天正16年の豊臣秀吉の九州征伐の時、新納氏は退城した。又、文明13年の重朝万句連歌に合志重隆、合志隆門が詠んでいる。隆門は康正2年住吉村に飛陽館を作り住んだという。重隆は文明16年に古閑池上に城を築きそこに住んだ。城は住吉城という。しか

し、合志氏は天正13年親賢（親為）が島津に補えられ、薩摩に赴く途中、八代郡大野において病死した。また、その子高重も島津氏との戦いにおいて、島津氏の家臣新納忠元、河上忠堅のため破られ、天正14年4月島津義久により殺された。こうして合志氏は滅亡していった。

現泗水町を中心に活躍するのが田島氏である。田島氏は田島を根城として、阿蘇氏、菊池氏との関係において活躍した。

（中村一紀）

菊池地区



- | | | | |
|---------|---------|--------|-------------|
| 1 菊池古城 | 13 掛幕城 | 25 須屋城 | 35 九万石城 |
| 2 古池城 | 14 穴の城 | 26 飛熊城 | 36 陰嶽城 |
| 3 戸崎城 | 15 神尾城 | 27 池上城 | 37 荻野尾城 |
| 4 城林城 | 16 台城 | 28 久米城 | 38 古城村城 |
| 5 菊池城 | 17 増永城 | 29 中林城 | 39 真木城 |
| 6 茂藤里城 | 18 亀尾城 | 30 東嶽城 | 40 山の城(野の城) |
| 7 市成城 | 19 馬渡城 | 31 西嶽城 | 41 亀ヶ城 |
| 8 黄金塚城 | 20 正光寺城 | 32 玉岡城 | 42 久保田城 |
| 9 葛原城 | 21 打越城 | 33 池上城 | 43 今石城 |
| 10 鷹取城 | 22 竹迫城 | 34 葉山城 | 44 石坂城 |
| 11 五社尾城 | 23 原口城 | | |
| 12 虎口城 | 24 千束城 | | |

菊池市

菊池古城 (深川城・菊の池城・雲上の城)

(菊池市大字北宮字城の堀)

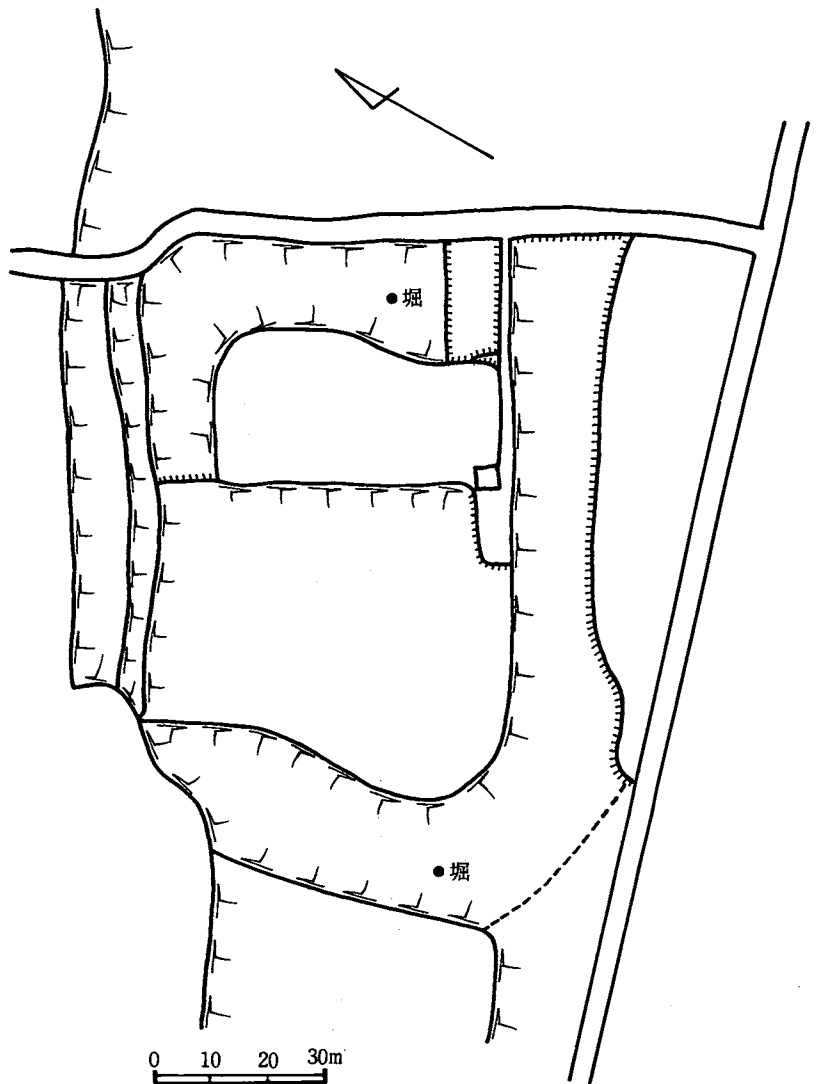
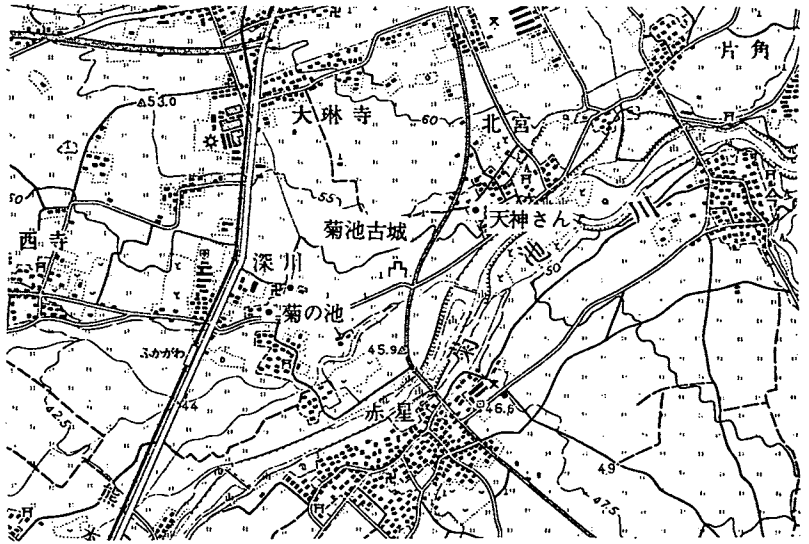
菊池氏の初代則隆が延久二年(1070年)に築城し、応安六年(1373年)に至るまでの約300余年間、菊池十五代が在城したという。

城跡は菊池川西岸の水田中に位置しており、四方を堀に囲まれた2箇所からなる方形をした平地が観察される。縄張的には城跡よりも館跡といった方が、妥当であろう。

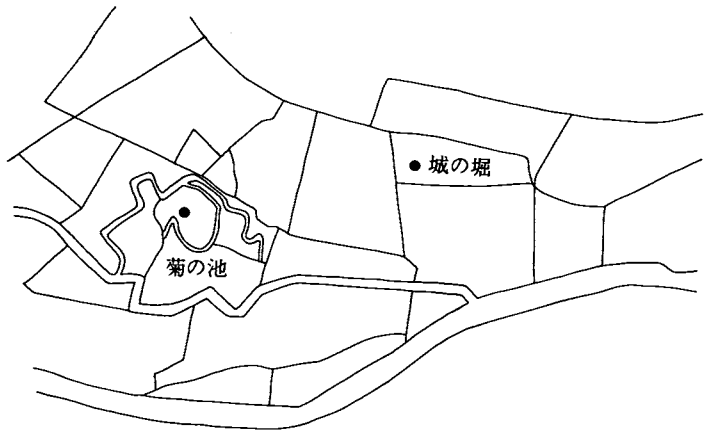
ところで城跡からは戦国末期のものと思われる青磁片が出土し、14世紀末に当城は終焉を迎えたという文献の記録とは若干の食い違いが見られる。

なお、北宮の字図には「菊の池」という字名を残す不整形な一隅があり、菊池古城が菊の池城とも称することを考えあわせると、ここも館跡の可能性が濃い。

城跡周辺には菊池さんが馬をつないだという木が存在し、城跡の鬼門にあたりとされる北宮の一隅には「天神さん」が祀られている。



菊池古城 略測図



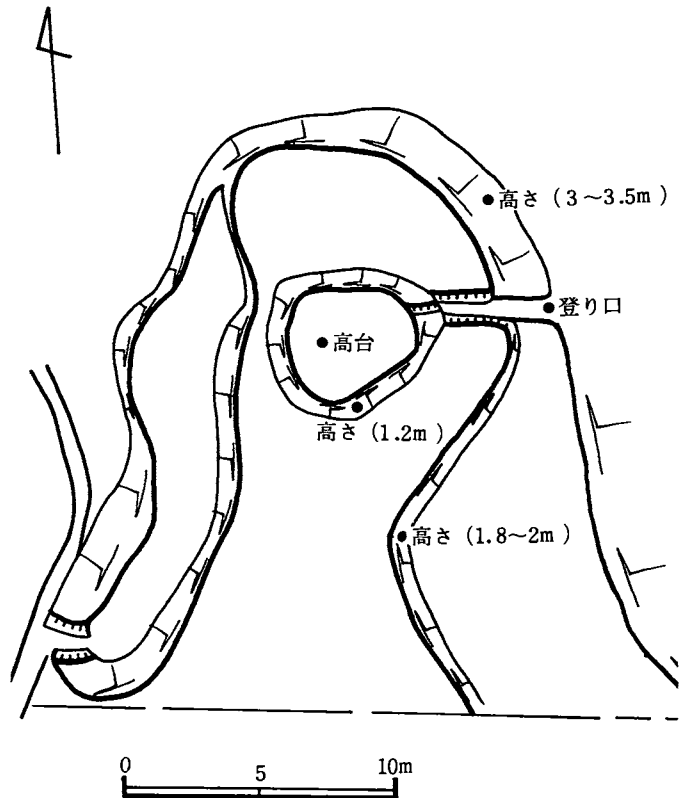
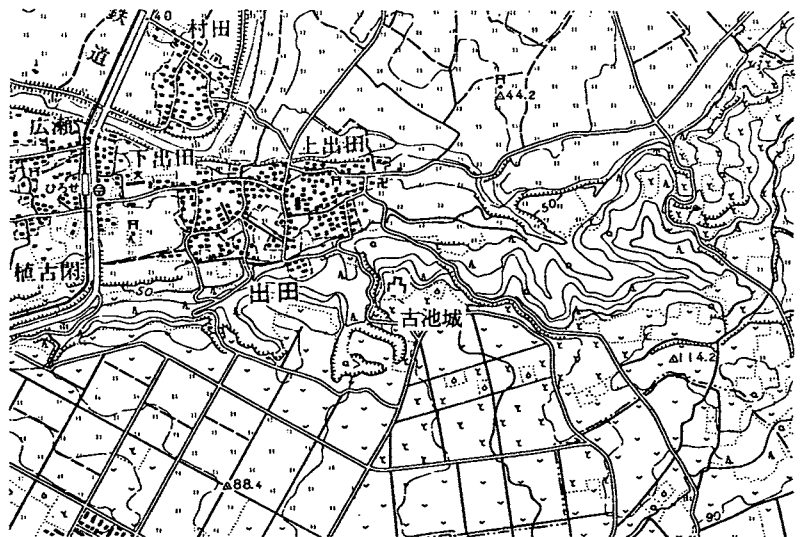
菊池古城周辺字図

古池城 (菊池市出田)

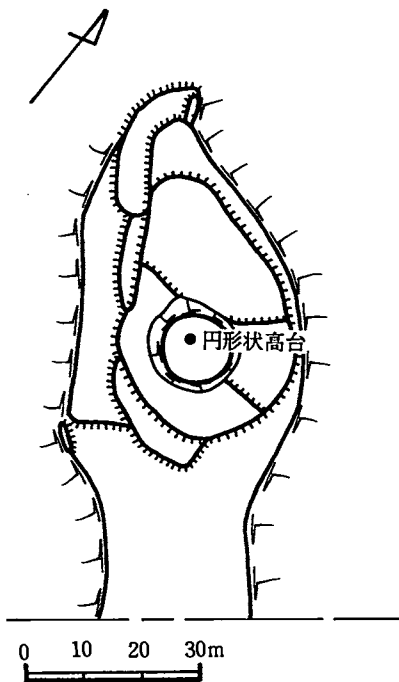
出田氏代々の居城という。

北側麓に出田の集落を望む丘陵地末梢部(標高70m・集落よりの比高約25m)が城跡とされる。当該地は丘陵の斜面部という条件下にあるために城跡の把握は困難であるが、階段状地形に下る丘陵地の先端部に直径10m足らずの円形をした高台(高さ1.2m)を認める事が出来る。しかし、城跡の南限は不明である。

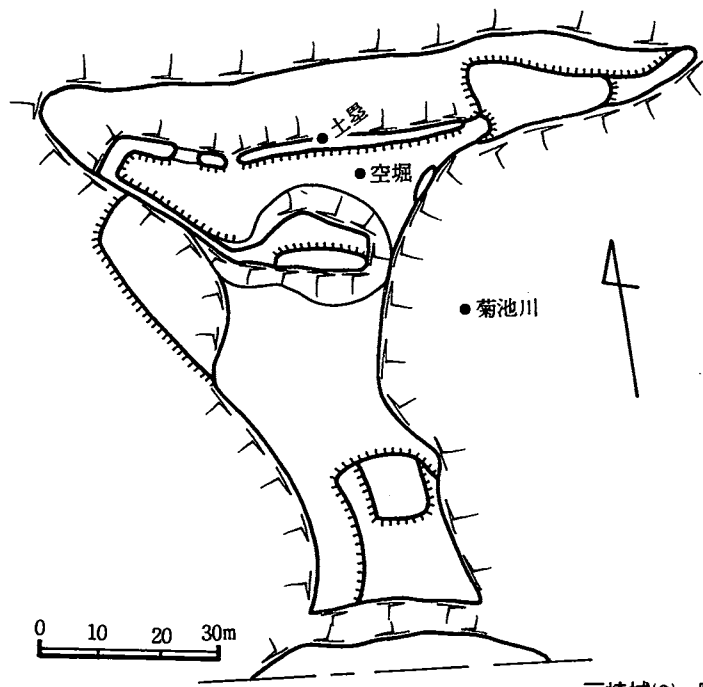
なお、出田地区には「西屋敷」や「東屋敷」の字名が残っている。



古池城 略測図



戸崎城(1) 略測図



戸崎城(2) 略測図

戸崎城 (菊池市大字今字南山ノ上)

鹿島氏代々の居城であったという。

赤星地区の東側を南北に走る山稜地帯の北西隅が城跡(標高101m・居屋敷の集落よりの比高約50m)とされ、西側麓には「居屋敷」の字名を残す集落が存在している。

城跡の中心部には直径12mのほぼ円形をした高台があり、さらにこれより約2m下った所には同心円状の曲輪も存在する。この他、斜面部には小規模な帯曲輪らしいものも見うけられるようである。

さらに城跡裾部から北へ約50mの所に位置する小山(標高90m・周辺裾部よりの比高約7~8m)にも城跡関連遺構が観察される。すなわち、小山の上面は東西15m、南北6~9mを計る帯状形の平坦地となっている。(細部的には、0.2~0.3m程の高低差をもって2段にわかれており、現在、辨財天が祀られている。)さらに、北側裾部には土塁(幅2~3m)を伴う堀跡(東西の長さ50m)が存在する。また斜面は鞍部の南側を除く三方は急斜面(とくに東側は菊池川と絶壁をもって接する)となっている。

この小山について、有田繁乙・前田繁雄両氏をはじめとして、地元の古老は「城の物見に使用されたものではないか」という。

(注1) 周辺は雑木林であるが高台部分のみ清掃されている。

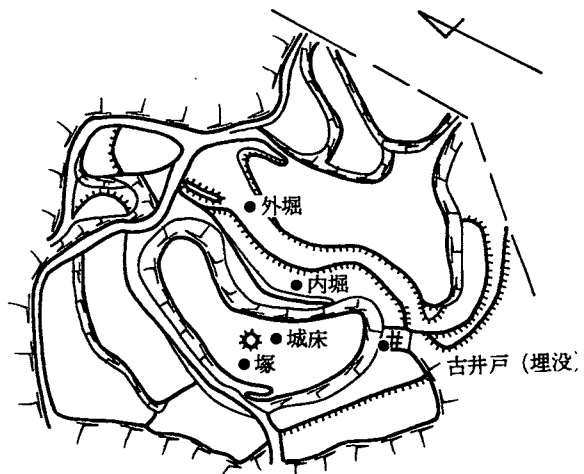
城林城 (城山古城・止林城)

(菊池市大字木庭字古城)

城武顯が築城し、代々、城氏の居城となっていたが、その後、山本郡霜野合戦で功のあった虎歯(甲斐)宗運が城主となったという。

城跡は北側麓に木庭の集落を見おろす丘陵地の西端部(標高140m・木庭の集落よりの比高約70m)に位置しており、周辺一帯に「古城」の字名を残すとともに中心部は「城床」と称されている。

「城床」は「く」の字型をした平坦地(中央部より北東方向へ50m・南東方向



城林城 略測図

へ40m・幅20～30m)となっており、現在は一部、公園化されてはいるものの、その大部分は桑園が放棄されたままの荒地である。中央部に「塚」とよばれる小規模のマウンド(直径5m)が観察される。

城跡に関連した遺構としては、東側鞍部を断切る堀切をはじめ、「城床」を北から西にかけて取り囲む曲輪的な地形があげられる。城清継氏の御示唆によれば古井戸も存在したという。

一方、麓の木庭の集落には、「陣内」「外園」をはじめとして、城跡との境には「からめて」の小名も残っているが、とくに「陣内」には城氏の館跡と伝わる屋敷がある。木庭地区の大多数の家が城姓をもっており4月1日～3日の間に城祭りとして城跡で祭礼をおこなう。

(注1) 堀底は二段構えになっており、地元では「城床」側を「内堀」・片方を「外堀」と称する。

堀切はゆるやかな曲線を描いており鞍部の平坦部分のみならず斜面部分にまで切り込まれ、とくに北端部分は10m程の底幅をもつ堅堀になっている。

(注2) 城床の北端約5m下の幅8m・奥行き10m程の落ち込み部分に存在したというが、現在は埋没している。

菊地城 (菊池市隈府町城山)

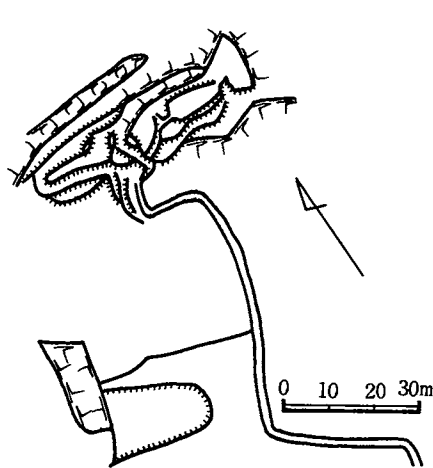
『古城考』によれば築城者は菊池武政(菊池氏16代)という。築城期は正平二十二年(1367年)とも伝わっている。その後25代の義武に至るまで長い間、菊池氏の本城であったという。天文二十三年(1554年)、菊池氏滅亡後は赤星・隈部・佐々・加藤氏等の入城を見たという。

城跡は、隈府町の北端部にあって「城山」という字名を残す丘陵(標高110m・南側麓よりの比高40m)に位置する。城跡の中心地は明治初期以来、「菊池神社」の敷地となり、大幅に地形の変更を受け、丘陵の背面は、ほとんど旧地形を止めない。しかし、丘陵の北西側斜面部は、底幅9mの空堀が存在し、「城山」における唯一の遺構となっている。すなわち空堀は北側部分で長さ60mを示し、その縁には高さ3mを越える土塁の存在が認められる。また、この空堀は、その西端で南側に折れ曲がり、丘陵の西端部をも取り巻いている。その末端は堅堀となり、幾分、西側へ折れ曲がりながら消滅する。上米良利晴氏の御示唆によれば、かつては丘陵地の南側部分にも同様な空堀が存在したらしい。

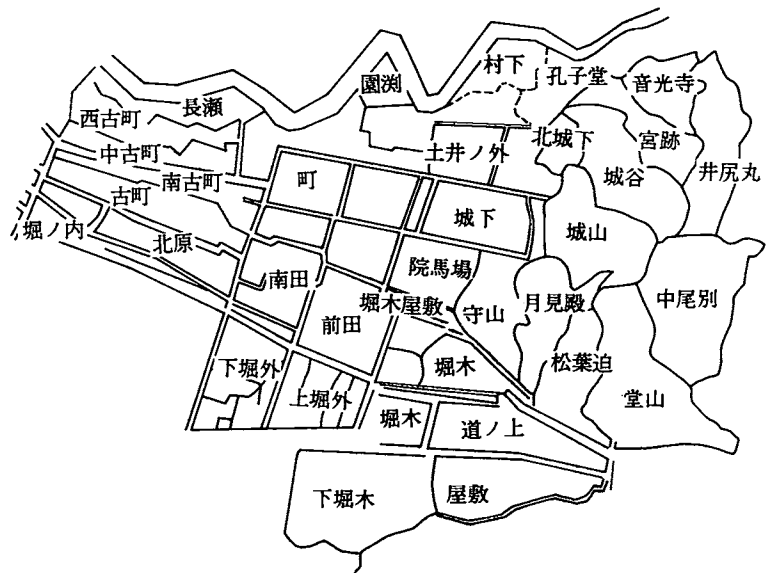
ところで、周辺字図に特色ある事柄が見うけられる。すなわち隈府町は「城山」を中心に「城下」「土井ノ外」「守山」「院馬場」「堀木屋敷」「堀木」「屋敷」「下堀木」「上堀木」「下堀外」「町」「堀ノ内」「古町」「南古町」というような一連の字名が、碁盤の目のような地割りの中に理路整然と並んでいる。このことは、隈府町を菊池との関連で考える場合単なる城に付随する集落と見なすより、いわゆる近世的な「城下町」としての色彩が強いのではないかと考える。

この他、城跡に関連するものとして「城山」の北側にあって「宮跡」という字名を残す小山に小規模な土塁が数条見うけられる。

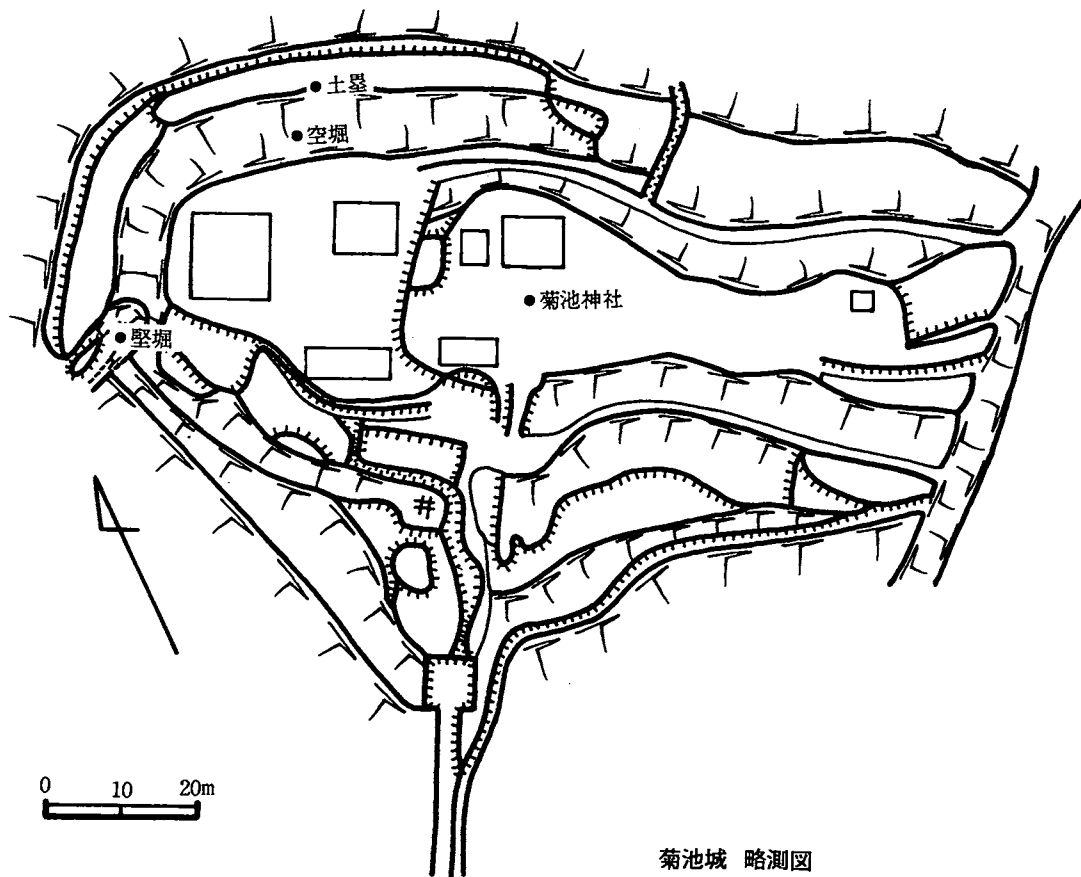
(注1)『古城考』によれば「將軍宮御座館跡」という。



「宮跡」略測図



菊池城周辺字図

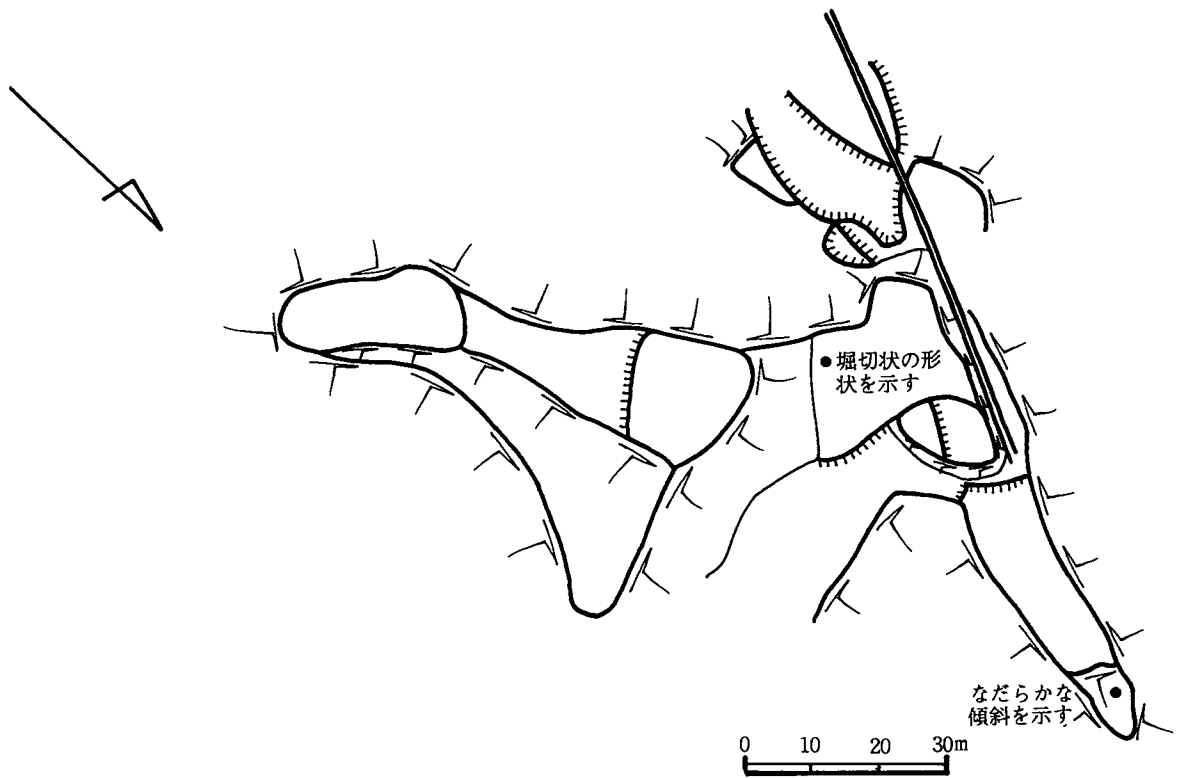


茂藤里城 (元居城) (菊池市大字重味)

茂藤里集落の東側にあつて、菊池川の湾曲部に突き出した丘陵地末梢部が城跡と伝わる。当該地は南東方向に主軸を呈する帯状形の小山で、集落との比高は5～6mにすぎないが、南側麓の川岸とは75m近い落差となる。しかし、小山の上面は先端部寄りに楕円形状の平坦地(長径27m・短径10m)が認められるものの、他には顕著な遺構の存在はない。

『菊池郡誌』に「其の跡の尋ぬべきものなきも、下部に唐濠の趾とも見るべきものあるのみ」と記された堀切についても、幅23m・長さ15mのそれらしき窪地が、認められるにすぎない状態である。





茂藤里城 略測図

いちなり
市成城 (奥山城) (菊池市)

『菊池郡誌』には「城番年々交替し警固を厳にし阿蘇及び豊後方面の防禦に備へたり、菊池氏没落の後、細永藏人と云うもの之に據りしが、其の子又次郎の代に及び、遊獵の留守中豊後勢の為に焼かれ、弟兵十郎討死し、是より又次郎細永に転住し、其の後、據守するものなし」と記されている。

城跡は菊池溪谷の山稜中（標高640m・北側麓の菊池・阿蘇スカイラインの道路面よりの比高約70m）に位置するものとされる。しかし杉の植林地（国有林）となっている当該地は、自然の山で城跡に関連あると思われるような遺構は何も観察されない。それでも桑原憲彰技師の示唆によれば、かつてこの地より大型の水甕が出土したという。なお、城跡の南側追には、菊池と阿蘇を結ぶ山越道へ通じる古道がヤブに被われながらもその痕跡を止める。

一方、同郡誌には城跡に関連するものとして「城門番居住の跡」の存在を記しているが、今回の踏査では確認するに至らなかった。



黄金塚城 (菊池市大字四町分字黄金塚)

総谷と平山の両氏が代々居城したという。

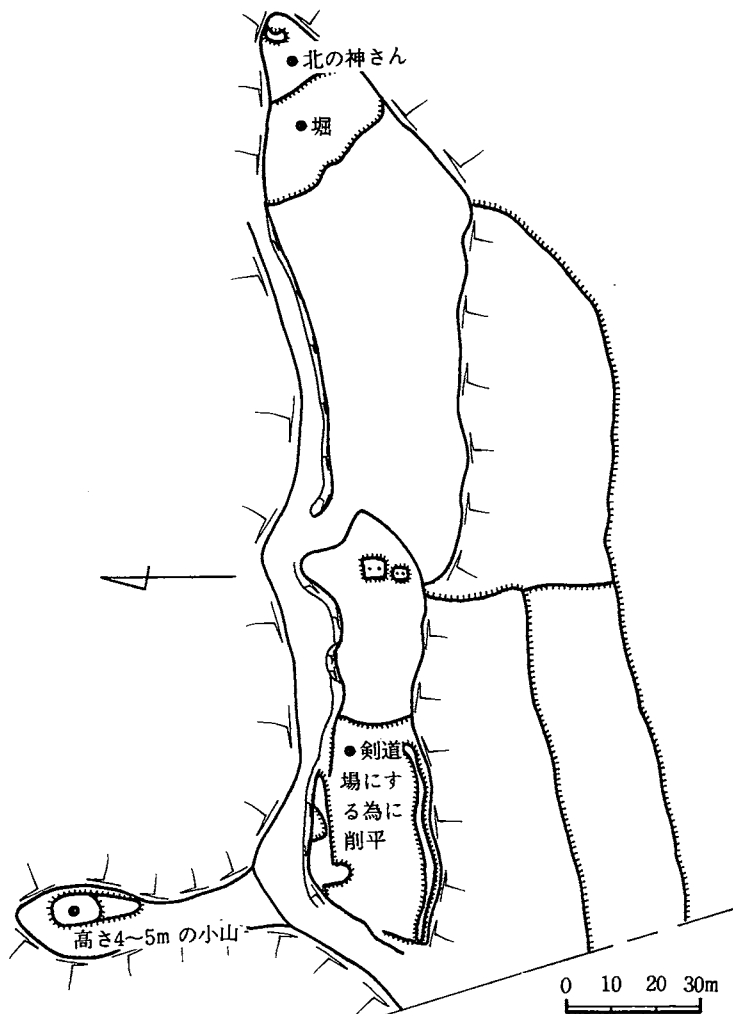
菊池から阿蘇二重峠^{ふたえのとうげ}に至る山越道の西側に丘陵地帯があり、北東側麓に岩下の集落を望む一隅(標高223m・集落よりの比高約80m)が城跡と伝わり四つの石碑が建ち並ぶ。城跡は東西45m、南北7~15mを計る平坦地をなしており、周辺とは約2.2~2.6mの高低差をもつ高台となっている。この他、城跡に関連するものとしては、北側25m先に土塁状をなすマウンド(高さ4~5m、上面は東西3m・南北5mの平坦地をなす。)があり、さらに東側40m先には幅10m、長さ15m程の堀切が観察される。

なお岩下地区の住民は、毎年4月3日に城跡で先祖祭りを行っている。一方岩下から西へ約600m離れた塚原の集落には菊池氏の金倉跡と伝わる民家(元村氏宅)がある。

(注2)

(注1) いずれも明治期に建立されたものである。

(注2) 金倉跡と城跡を結ぶ山道がある。
川上ただお氏の御示唆による。



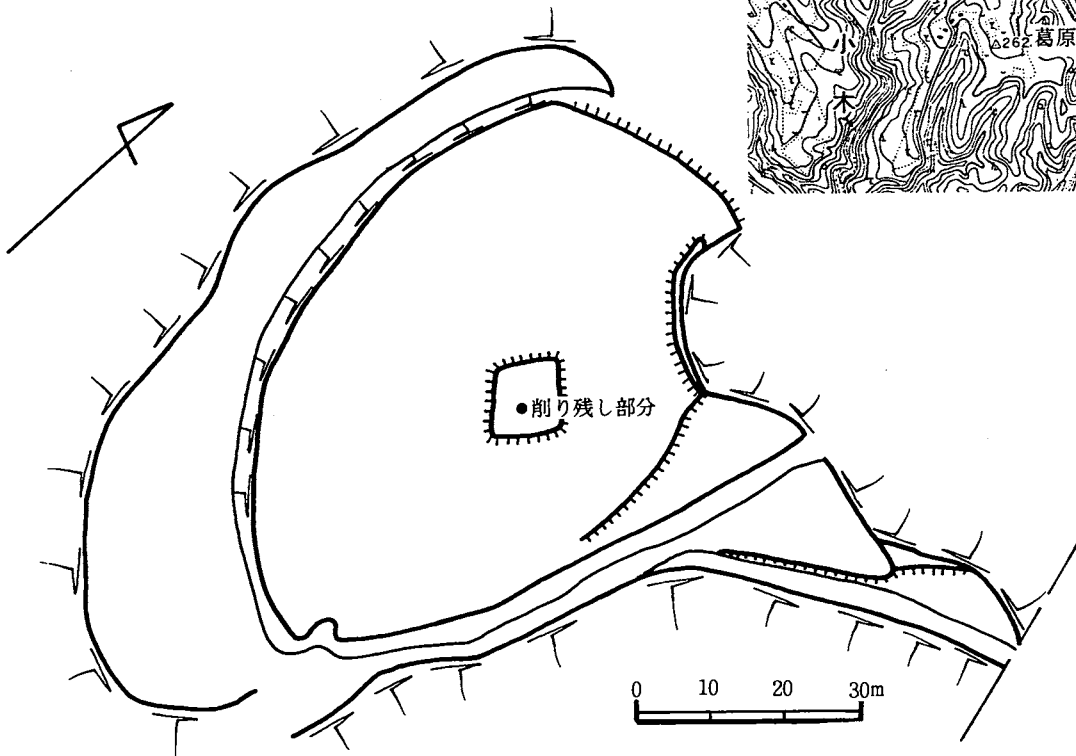
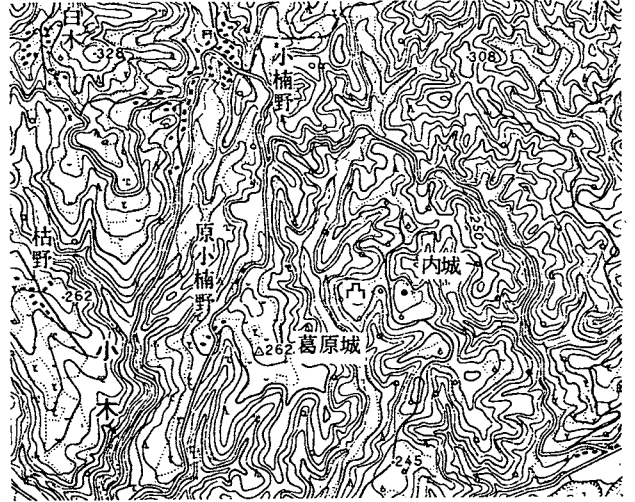
黄金塚城略測図

葛原城 (菊池市大字市野瀬字城山)

市野瀬氏が代々居城したという。

城跡は、迫間川上流部分の川沿いに開けた市野瀬の集落から北へ、山道を2km程登りつめた山稜中にあり、「城山」と称される栗山(標高259m・集落よりの比高約140m)に位置しているが、「城床」と称される頂上わずかに1m残されている他は、全面開墾されて旧地形を止めていない。したがって見るべき遺構は存在しないが、東側の鞍部は極端にくびれており、周囲を深谷に囲まれているのでまさに要塞堅固の城跡という感がある。

一方、城跡の東側対岸には「内城」という小名を残す尾根筋(標高は城山とほぼ同じ)があり、地元では城跡に関連した「馬小屋跡」と語りついでいるが、ここも、現在開墾され、大きく三段からなる栗山になっている。ちなみに松岡ちさと氏の御示唆によれば、「城山」と「内城」からは昭和40年ごろの開墾のうちに城跡に関連するものと思われる遺物が出土したという。量的には内城からが多かったらしい。(このことは内城が城山より開墾の度合いが大きい事によると考えられる。)遺物の主なるものは土師質土器であり、その他、石羽釜等の破片も見うけられ、内城からは川原石も出土したらしい。



葛原城 略測図

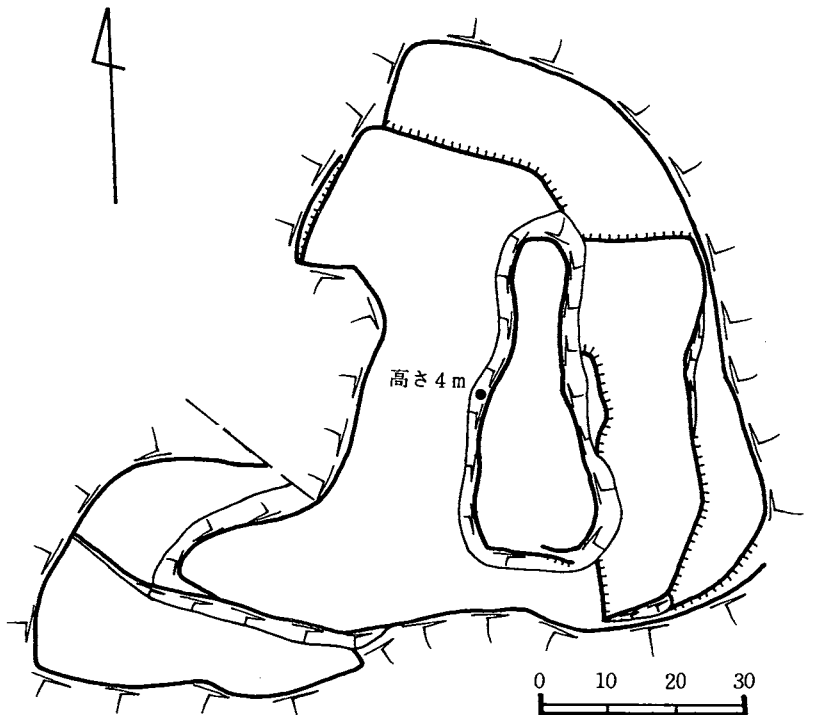
鷹取城 (染土城)

(菊池市大字龍門字鷹取・染土)

『古城考』には菊池則隆が菊の池城を築城するまで居城したとされ、後には隈部親永の城となったという記事が見えるが、『菊池郡誌』は、天授、弘和の頃、後征西将軍が在城し後に原田氏の居城になったと伝える。

県道柿谷菊池線の東側、山稜末端部(標高242m・染土の集落よりの比高約90m)に位置する畑地で、麓には菊池水道の水源となる湧水池がある。城跡への道のりは段々畑をつたってよじ登る外はない。

遺構の特徴としては、山稜末端部分に築かれた平場が「ひょうたん形」をした高さ4mほどの高台(長径45m・短径6~18m)になっていることである。高台周囲は楕円形をした地形が取り巻いてお



鷹取城 略測図

り、これは大きく三つの部分に分かれているが曲輪的要素の濃いものである。

なお、城跡には鎮西為朝の伝説があり、為朝が城から放った矢が「一野々」と「七坪」に落下したという。この「七坪」の地には竹の群生がみられるが、これは為朝伝説に関連したものと古老はいう。

(注1) 山頂部は公園化されている。

ごしゃのお 五社尾城 (菊池市大字雪野字城平)

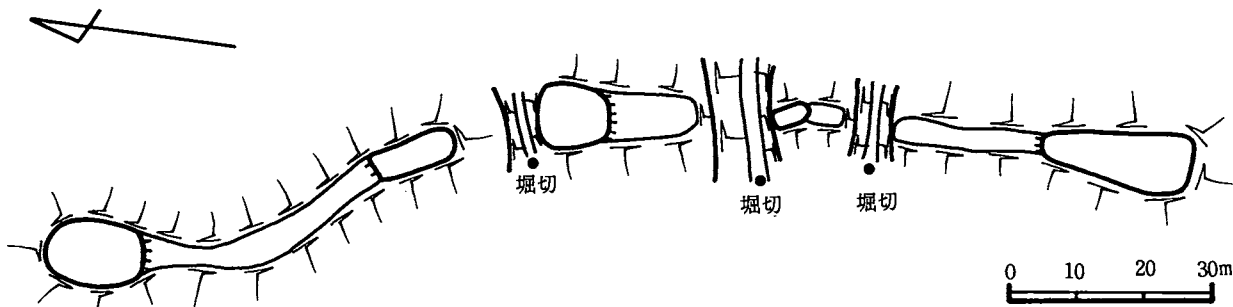
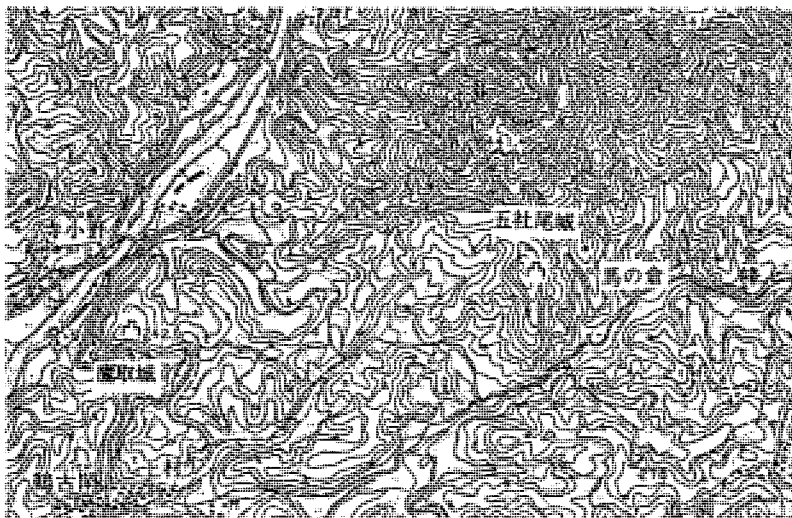
大和守大蔵久家の城跡とされるが、詳細については不明である。

染土と上村からの道が交差し、重味の金峰に至る山道の北側山稜の尾根(標高319.9m・南側麓よりの比高約120m)に位置しており、現在はクヌギと杉の林になっている。

遺構として顕著なものは南北に多少カーブをえがく尾根の背面(直線距離にして170m)を東西に断ち切る3条の堀切で城跡を大きく4区画に分けている。しかし、人工的な平坦地部分は2箇所のみで、その規模も「東西10m・南北15m」、「東西7~10m・南北11m」と小さい。

城跡は完全に山稜の中にあり、水源の所在は不明である。城跡の存在価値としては染土、上村から金峰を通過する山道の押え以外には考えられない。

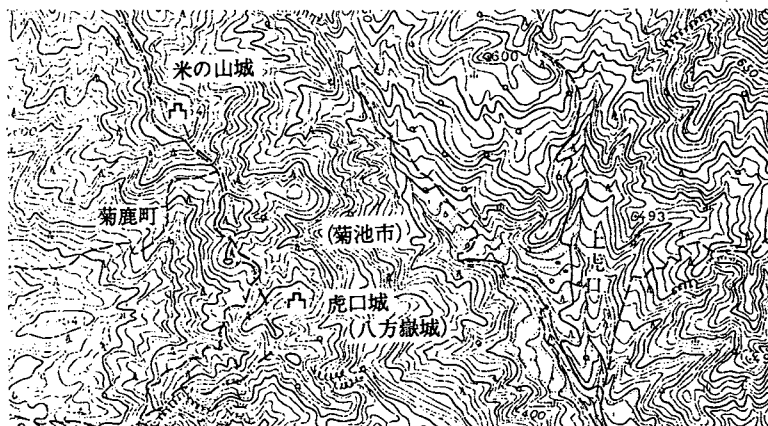
なお、城跡の東側に谷をはさむ尾根筋があり(小名・馬の倉)、その東側麓には、正平二年(1347年)の年号のある五輪塔が存在しており、周辺には真福寺跡もある。



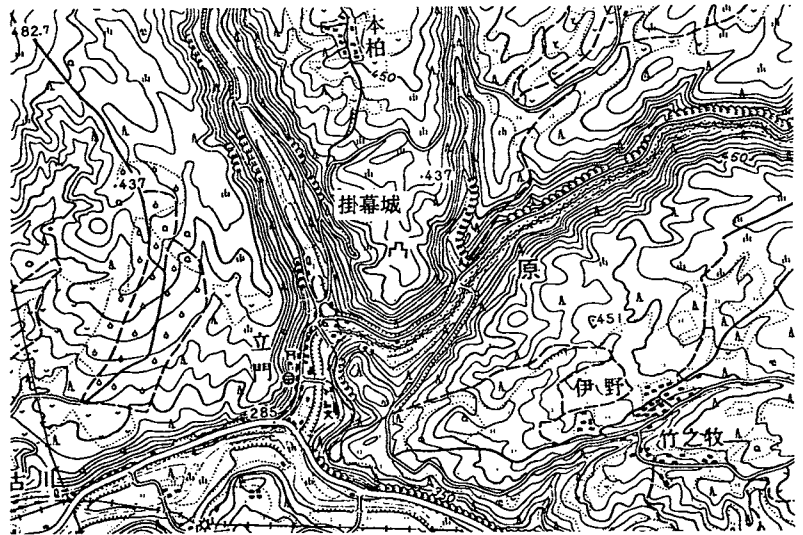
五社尾城 略測図

こく 虎口城 (八方嶽城) (菊池市)

『古城考』に「虎口村にあり、隈部某の城といえども、年代不明」と記されているが、上虎口の集落には虎口城跡に関する伝承は何も残っていない。しかしながら、地元の人々は、集落の西方向に連なる山稜中に「高城」と称される所があるという。当該地は、ちょうど菊池市と菊



鹿町の境界線が走る所で、米山城と峰続きでもあり、山頂部分（標高679.5m）には平坦地も観察される。菊鹿町側でも「新の城」と称している所から、まず城跡の存在は確実であろう。この山と直接に結びつく集落は上虎口しかないので、ここを「虎口城」と見なしても差しつかえないものと思われる。さらにまた虎口城は、『古城考』等に城跡名が見える「八方嶽城」の重複である可能性が大きい。『肥後国誌』は「八方嶽城」について、隈部親次（隈部一族という）の居城であったが、天文二十年（1551年）に至り肥後国に侵入した大友軍によって攻め落されたと伝える。



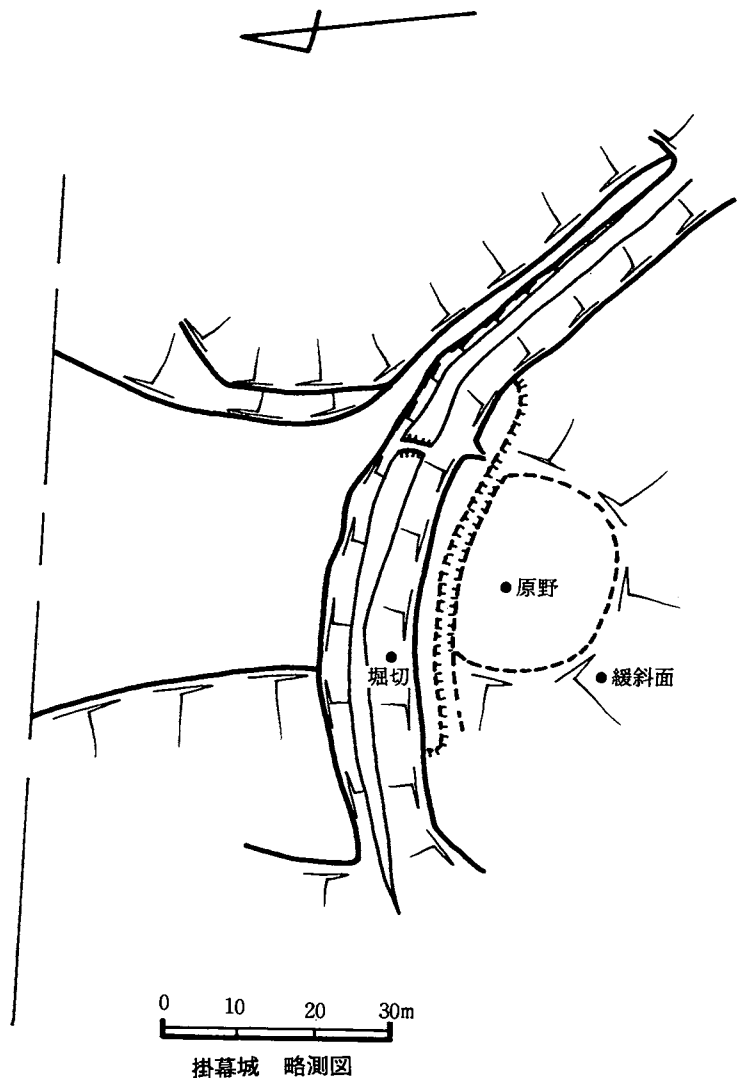
掛幕城 (菊池市大字原野字柏)

柏氏代々の居城という。

南側麓に立門の集落を見おろす山稜中に「城床」の小名を残す原野(標高415m・集落よりの比高約130m)があり、城跡と伝わっている。

しかし、当該地は「城床」の小名が残っていないければ、その存在がうたがわしく思われる様な所である。すなわち、「城床」とその周辺一帯は、頂上から麓に向けてなだらかに傾斜する自然地形以外の何ものでもない。唯一の城跡らしき痕跡は北側野首部分に残る溝である。地元の人はこちらを「城の堀」と呼ぶ。形状からは、堀切の役目を果たことになるが、溝の幅は上場で12m、底幅で4mを示し、その両端はいずれも「城床」の方に吸収される。長さはおよそ120mである。

なお、「城床の西側斜面の一隅には、城の水源となり得たと思われる湧水池があったが、今は埋没してその所在地も不確かなものになった」と古老はいう。



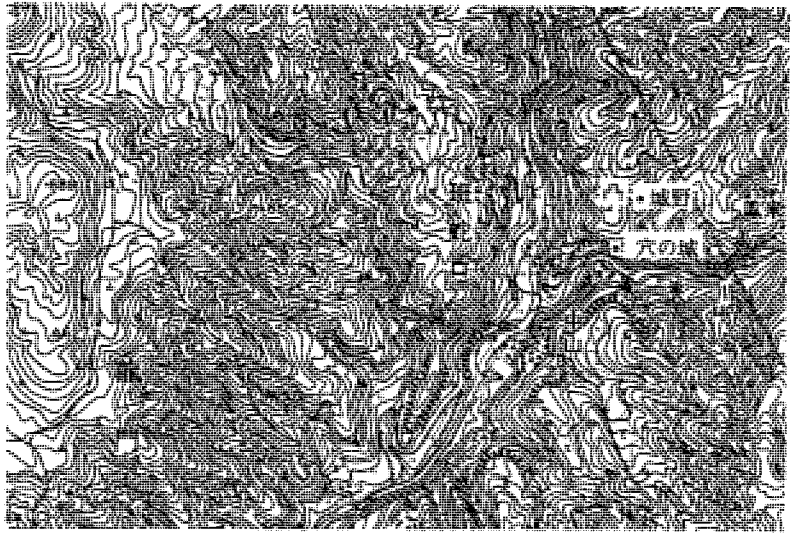
穴の城 (菊池市大字班蛇口)

中山集落の北東方向100m先に位置する滝の懸崖に、「あなんじょう」と称される大きな岩洞（口径の縦横2m）があり、『肥後国誌』は為朝の城跡と伝える。

しかし当該地は、まったくの自然の穴にすぎず、城跡としての形態を有しない。それでも、この穴の上部にあたる広い原野、畑地一帯に「城野」という小名が残っており、畑道沿いには「駒つなぎ石」と呼ばれる集石群が存在する。

地元の人は、この「城野」も為朝の城跡と伝えるようである。中山地区は福岡・大分両県に隣接する地理的要所でもある所から、「あなんじょう」はともかく「城野」に、城跡の類が存在した可能性はある。

(注1) 竜門ダム周辺の文化財等調査報告書(昭和48年3月、菊池市)に、「この穴の口から十米ほどまでは、大人が立ったまま手を挙げて容易に通れる。三十米ぐらい進むと処々に岩石や、くずれ落ちた土塊などがあって、空洞も細くなり腰を曲げて通りにくくなる」という報告がある。



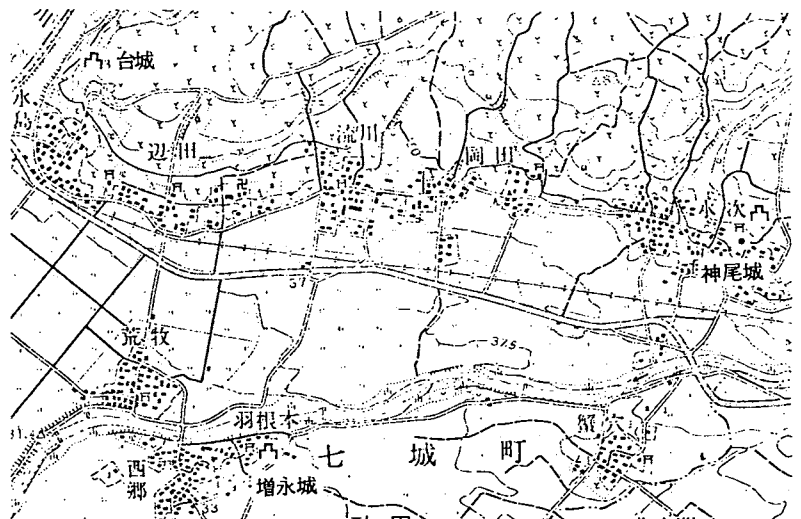
菊池郡

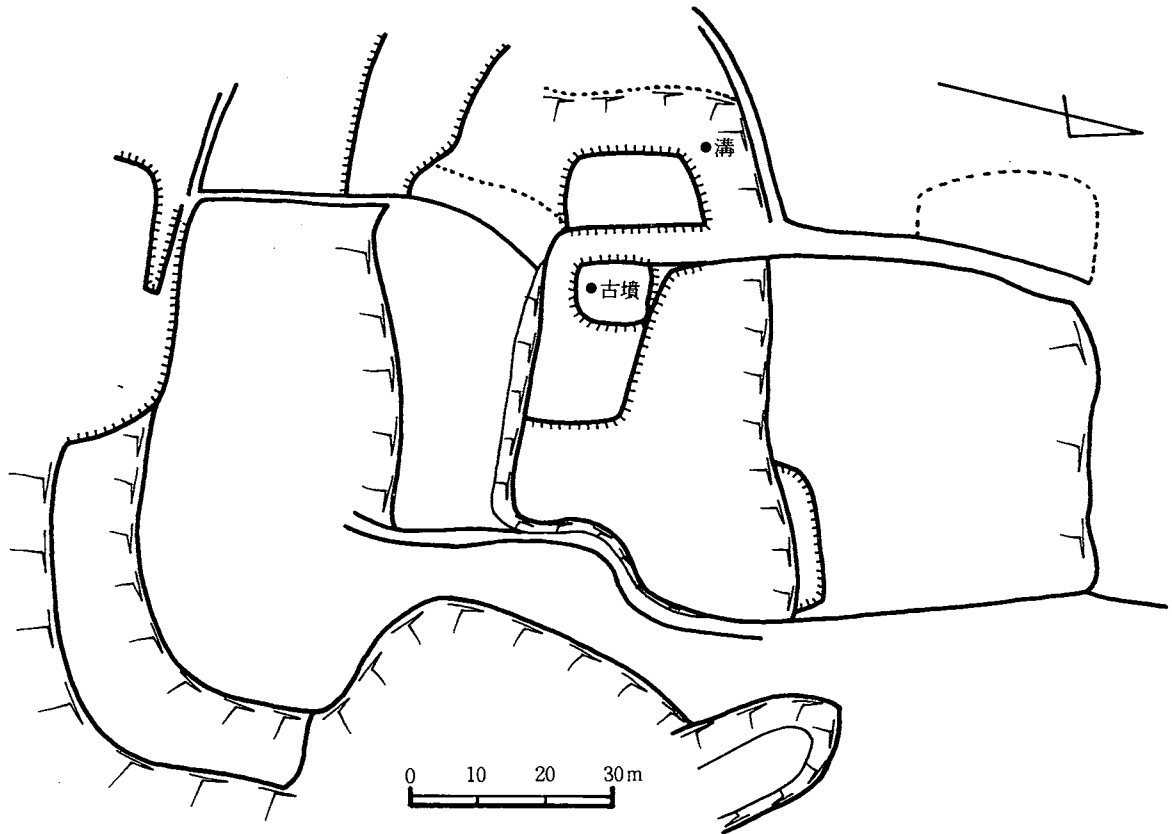
かみお
神尾城 (菊池郡七城町大字水次字屋敷)

水次氏代々の居城という。

城跡と称される所はもともと丘陵末端部に設けられた古墳であるが、比較的、早い時期に古墳は破壊されたようで今は阿蘇神社の敷地となっている。古墳としての面影は参道入り口に残る盛り土と葺石の一部のみである。神社の東側には幅10m前後の堀跡と思えるようなかぎ型の溝が走っている。

水次の集落には土塁を伴う通路も残っており、地形的にも単に古墳を城跡と顕彰した類のものではないと考えられる。





神尾城 略測図

^{うで}台城 (水島城) (菊池郡七城町大字台字城ノ上)

城主不明であるが、台城は南北朝時代の文献に古城と記載されており、少なくとも14世紀頃には実在した城である事は確かである。

現在は、内田川流域の丘陵末端部に築かれた古墳(円墳)を城跡と称するが、古墳は高さ3m前後の小規模なもので砦跡等に加工された痕跡もない所から、古墳を城跡として顕彰した類のものではないと思われる。古墳周辺の畑地は弥生式土器の散布地となっており、城跡に関連あるような遺構は観察できない。

しかし、丘陵の斜面は俗に言う要塞堅固の地形をなしており、城としての要素を十分に兼ね備えたものである。なお『菊池氏三代』によればこの地では、永和元年(1375年)に菊池武朝と今川了俊が大規模な戦い(俗にいう水島の陣)を交えている。

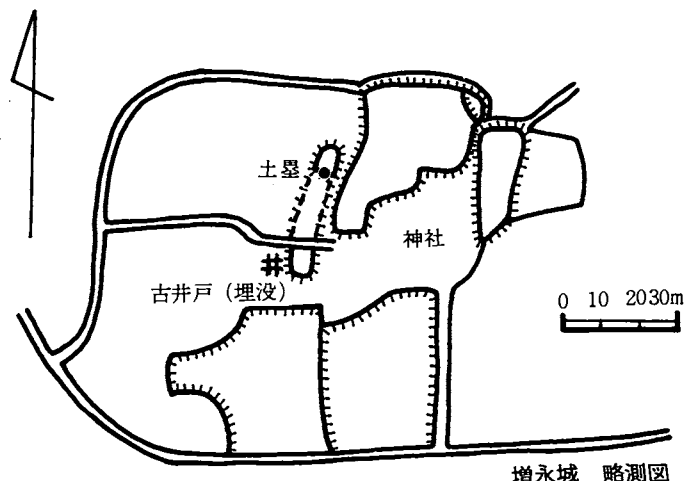
^{ますなが}増永城

(菊池郡七城町大字砂田字宮ノ前)

西郷氏代々の居城という。

西郷地区の南端にある若宮神社が城跡と伝わっている。

周囲は東と南が水田で、北と西に民家が建ち並ぶ。城跡に関連した遺構としては神社の西側に幅6~7m・長さ36mの土塁が観察されるが、保存の度合は余り良くなく両端部分が顕著に残るぐらいである。



増永城 略測図

この他、城跡に関連するものとして、神社隣りの増永国雄氏宅に「城の井戸」と称される古井戸（直径2.5m）があり、隣接する増永公彦氏宅には五輪塔も祀られている。概して当該地は城跡というよりは館跡の感が強い。^(注1)

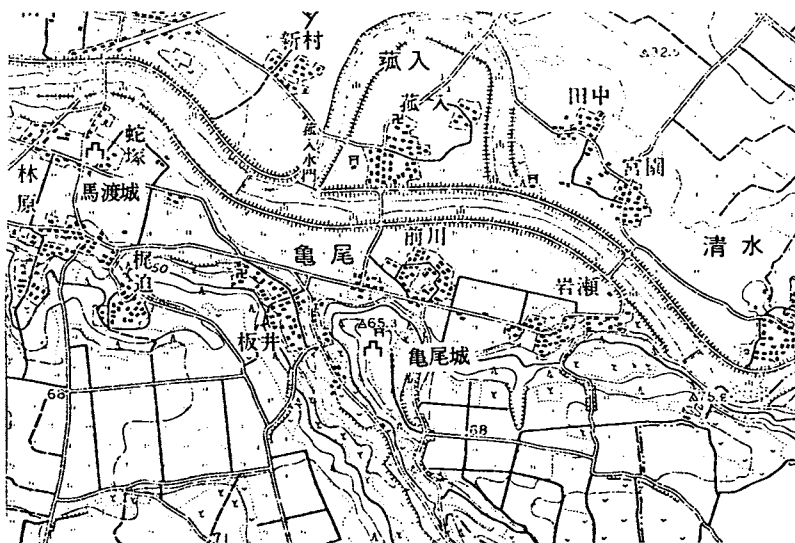
(注1) 素掘りであるが、現在深さ1m程に埋没している。

かめお 亀尾城

(菊池郡七城町大字亀尾字城平)

関部氏代々の居城という。

城跡は菊池川流域にあって、北西方向に主軸を呈する丘陵末端部（標高71m・北側水田面よりの比高39m）に位置しており「城の平」の字名を残す。しかし堀切（幅11m・長さ68m）によって仕切られた城跡の中心部は、坂井熊野座神社の敷地となり地表面は著しく削平されており、城跡に関連あると思われる様な遺構は観察されない。この堀切は「豊前堀」と称されている。



まわたり 馬渡城

(菊池郡七城町大字亀尾字下梶迫鶴)

蛇塚九郎が代々居城していたという。

元山氏宅の庭先にある蛇塚古墳が城跡と伝わる。おそらく、古墳周辺にその当時、豪族の居館の類が存在していて、古墳は物見等に使用されていたのではなかろうか。しかし古墳は周辺部をかなり削り取られており、旧形を余り止めていない。

(注1) 石室の石材が一部露出しており、埴輪の破片が多く散在する。60年程前に馬具の一部と須恵器が出土している。40~50年前までは別に小円墳があったという。

しょうこうじ 正光寺城

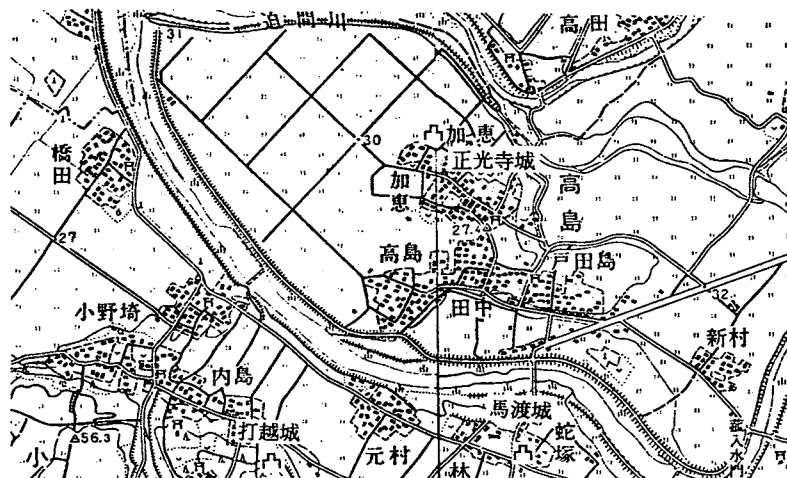
(菊池郡七城町大字加恵)(詳細な所在地は不明)

加恵氏代々の居城という。

かつては、地元の人には加恵の地に残っていた13基の塚のうちの1基を城跡として顕彰していたが、塚は7~8年前の開田によって消滅した。そこで、現在はその際出土したという五輪塔等を一箇所に集めて墓所を設け、新たに城跡と称しているようである。

加恵の地は菊の川・迫間川・菊池川が合流するいわば、水上交通の要地で、「この地の利のために城が築かれたのだろう」と地元の人言う。

しかし、城跡の所在地については墓所を城跡と称するにははだ不明確なもので、地元・郷土史家の早田千町氏からは、「その昔、加恵には三つの寺があったと伝わる所から、正光寺城は寺そのものが城の役目を果たしたものではないか」との御示唆があった。



打越城 (菊池郡七城町大字蘇崎字打越)

『菊池郡誌』によれば林原氏代々の居城という。字「打越」の地内にあって、北方向に主軸を呈する帯状の丘陵地末端部(標高61m・北東側麓の水田面よりの比高約30m)が城跡と伝わる。しかし、丘陵の背面は、塚状の小山(2つ)をはじめとして、極めて起伏に富んだ地形となっており、加えて一面の雑木林地でもあるために、城跡らしき遺構は何も観察出来ない。わずかに当該地の西側を走る幅3～4mの凹道をかっつての堀切と見なす事が可能なぐらいである。

坂井の古城

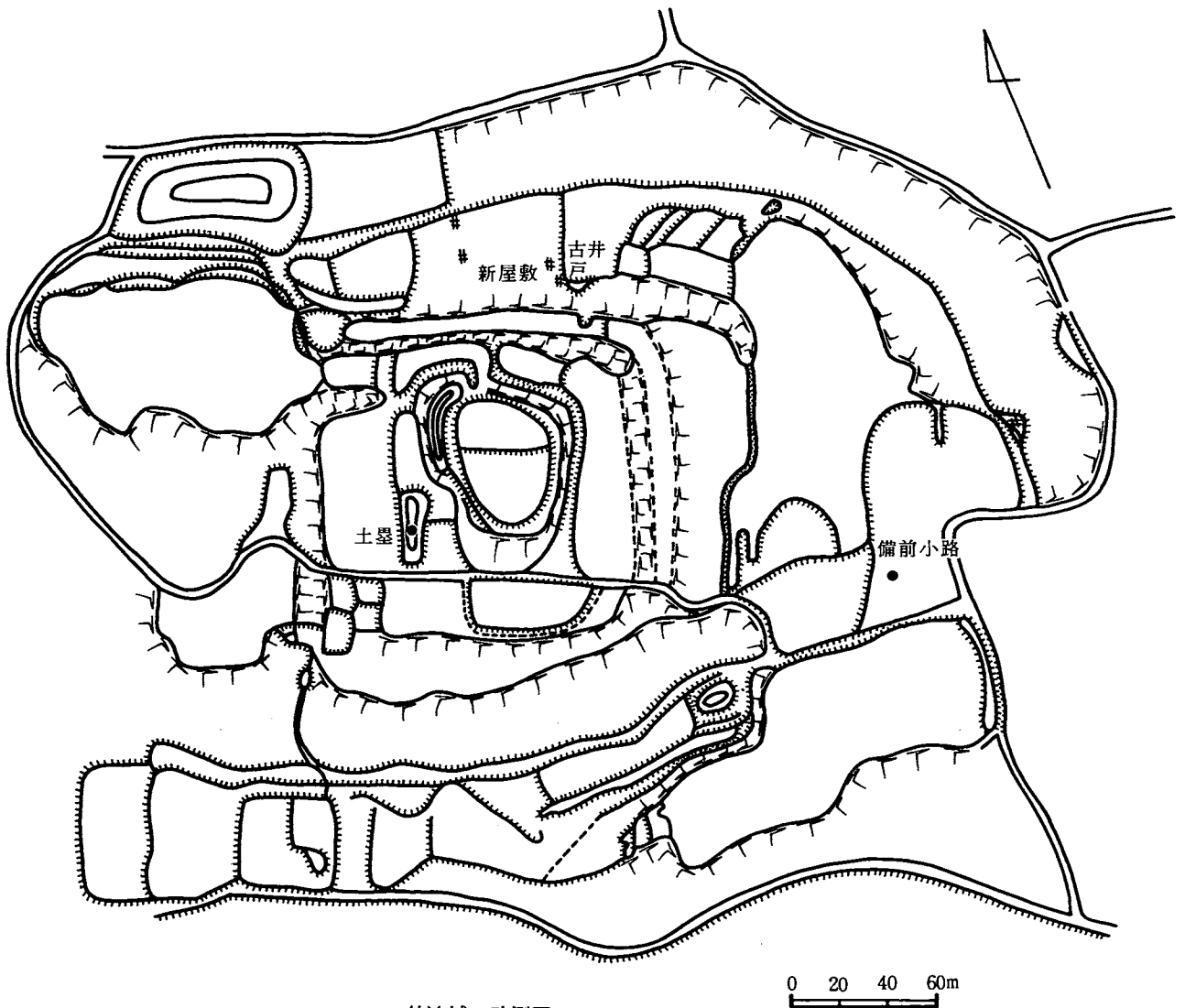
『肥後国誌』に、「丸城ト云又丸城山ト云城山ノ内ニ豊前堀トテアリ城主姓名年序トモ不分明」という記事が見える。亀尾城跡の事を述べたものと思われる。

竹迫城 (合志城・蛇尾城) (菊池郡合志町大字町大字上庄字城山)

『菊池郡誌』によれば、建久年中(1190～1199年)に合志郡の地頭職となった中原師員(竹迫氏の初代)が築城したもので、その後、当城は15代の公種まで竹迫氏の本城であったという。さらに竹迫氏の後は、合志隆岑をはじめとして合志氏一族が居城したらしい。

城跡は、上庄地内にあり、「城山」という字名を残す丘陵に位置する。外観的には、いわゆる平城の類に近いものであるが、東西方向に延びる丘陵の背を巧みに利用して、要塞堅固な城が築かれている。

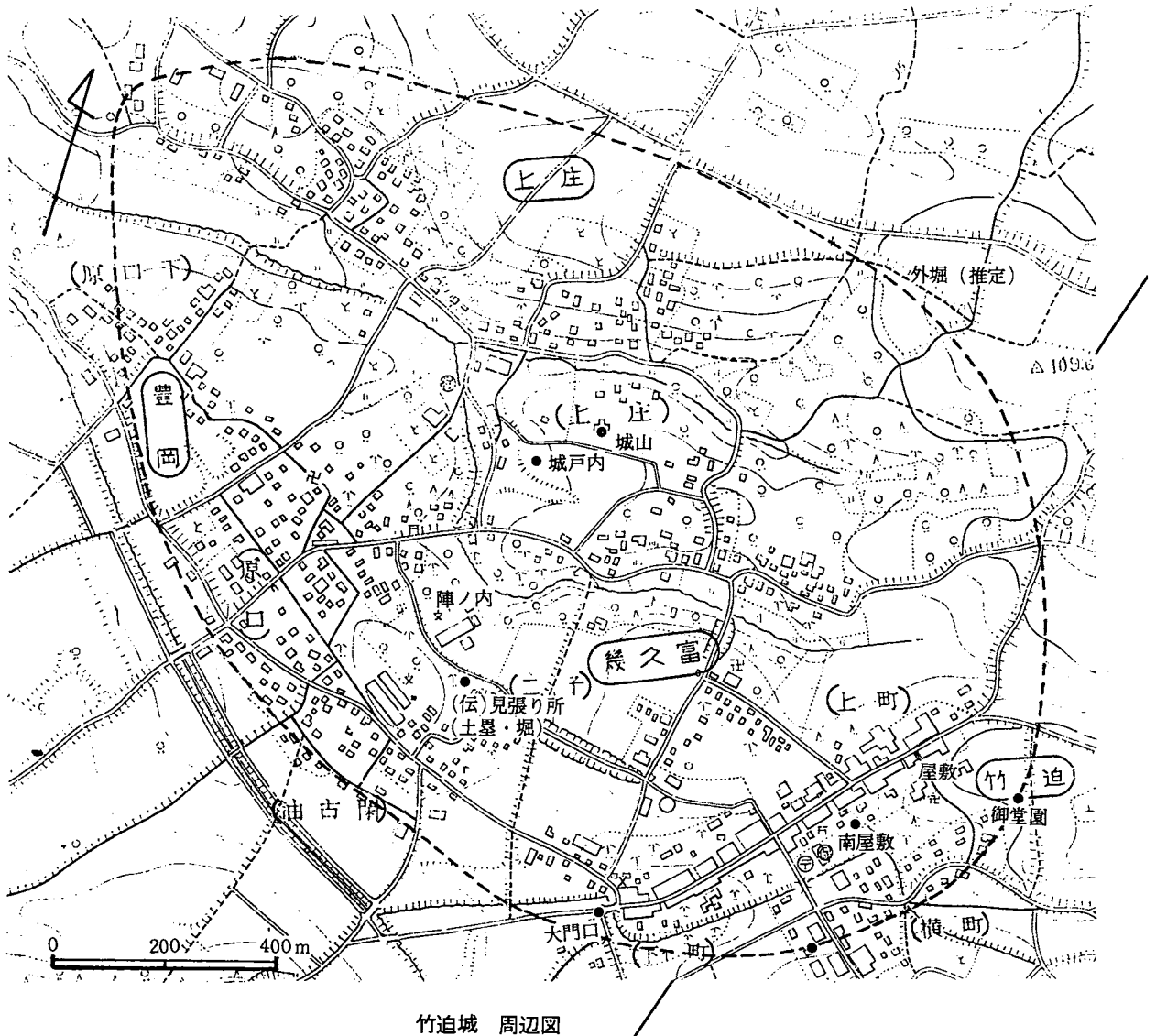
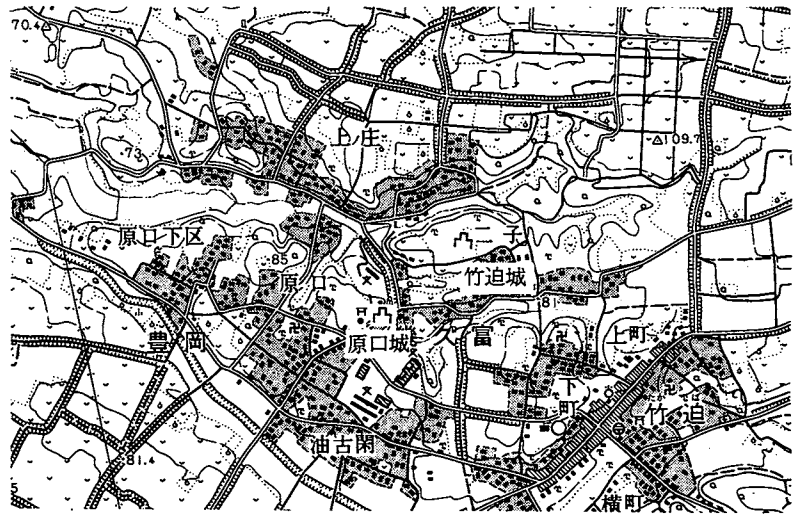
城跡の中心地と伝えられる「城山」の最高所は、楕円形状の平坦地(長径54m・短径28m)と、北西隅には長さ36m・幅6mを計る空堀と土塁が存在する。なお、城跡の遺構として他を圧するのは、丘陵の北側斜面部を東西に走る大規模な空堀と土塁で、現存部分だけでも長さ120m・8mを計る。かつては、その東端部でほぼ直角に南へ折れる形状であったらしいが、昭和40年代初めにブルドーザーによって押しならされた。しかし、堀の部分は今でも若干の凹地となっている。『合志川芥』の挿図によれば、この堀は、城跡中心地を方形に取り囲むものであるらしい。



竹迫城 略測図

この他、『城山』の両側部分には、丘陵の背を断切る堀切（長さ60m・幅12m）が観察される。さらに、『城山』と迫をへだてて向い合う丘陵にも、大規模な土塁（長さ90m・高さ3m）が存在する。

なお、合志町には城跡を中心に楕円形をなす空堀（北西方向に主軸を呈し、長径2km・短径13km）が存在したと伝わっており、現在でも、町内には「新堀」等と称する空堀が数多く残っている。さらにまた、『城山』周辺の「備前小路」「新屋敷」という小名をはじめ、町の字名にも「城戸内」「陣ノ内」「大門口」「南屋敷」「屋敷」「御堂園」という城跡に関連するものがある。この他、「城跡の見張り所」と伝わる場所が2箇所に残っている。



竹迫城 周辺図

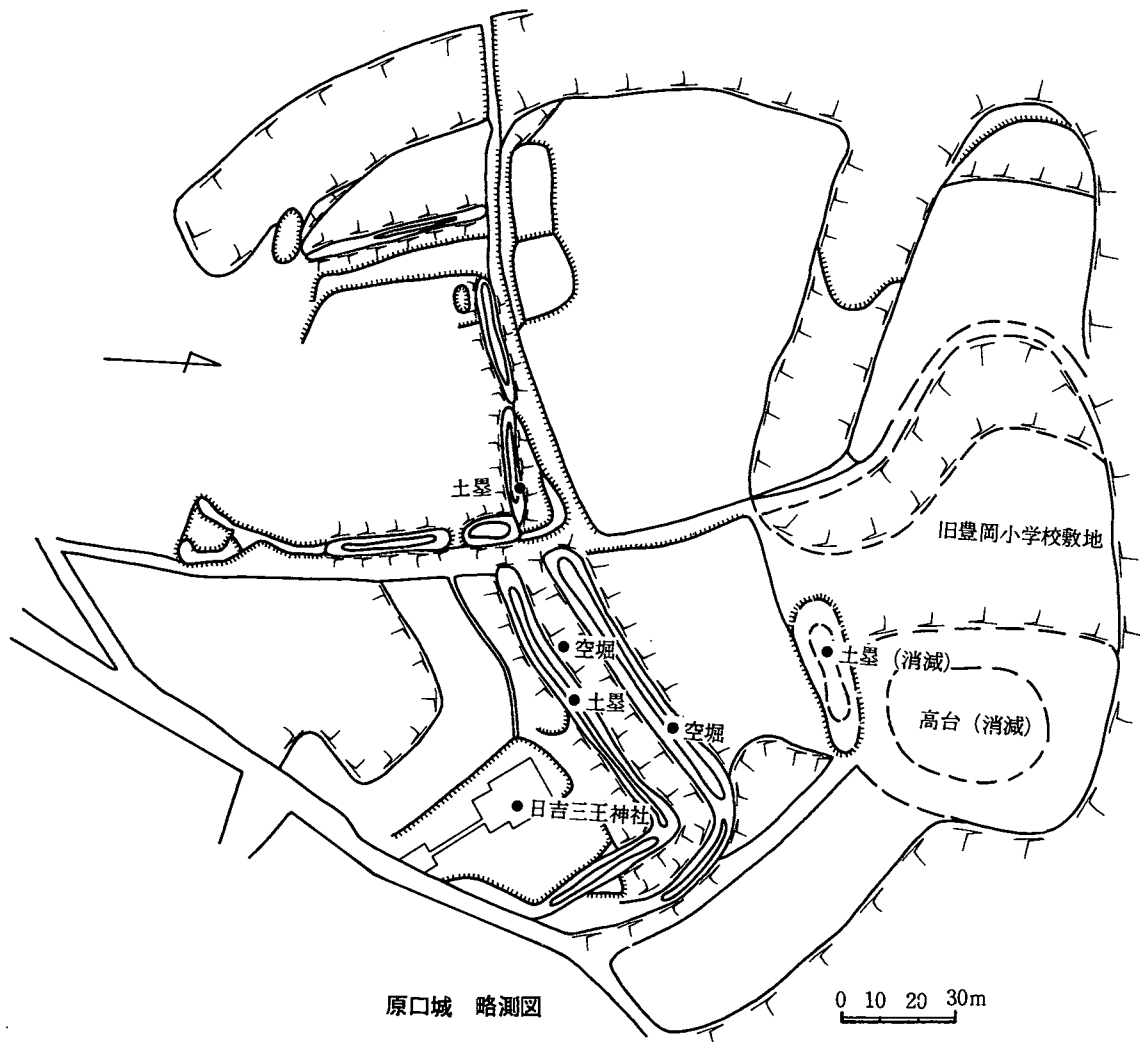
はらぐち
原口城（新城）

（菊池郡合志町大字豊岡字宮の本）

『合志川芥』によれば、建久年中（1190～1199年）に関東から二子村に下向してきた中原師員（竹迫氏の祖という）が上荘に移るまでの館という。

旧豊岡小学校敷地と日吉山王社周辺の微高地を地元の人は新城跡と称する。城跡に関連した遺構は、山王社の背後にあり、ほぼ直角に折れ曲る（南北方向に50m・東西方向に80m）鉤型の空堀（幅10m）が観察される。空堀の内側と外側には幅6～7mの土塁（高さ0.5～1m）も付随する。山王社の北側部分は高さ4～5mの崖となっており、竹藪となった西側部分にも南西方向に走る土塁の残存部がある事から、当該地は一つの独立区画をなす事がわかる。『合志川芥』にいう館跡であろうか。なお小学校敷地はもと山王社続きの微高地であり、「大正10年頃に小学校の敷地となる前は高台や土塁らしき遺構も存在していた」と古老は語る。

なお、坂本行雄氏の御示唆によれば開発時には当該地から瓶片・刀・土師質土器等が出土したという。



せんぞく
千束城

（菊池郡合志町大字栄字城山）

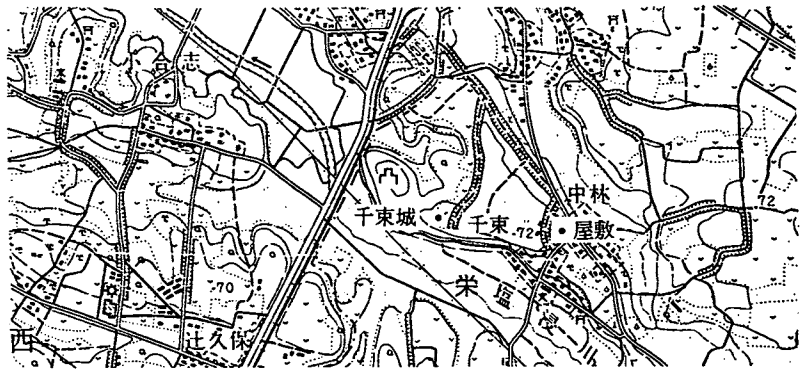
『古城考』によれば、城主は芦刈帯刀という。城跡名の由来は同書に「応安年中、今川了俊菊池攻の時、少貳松浦の軍士、此城を賣潰して通れとて攻むるに、小勢にて防難く、又深泥を帯たれば俄にも攻難く、林藪の竹を剪りて埋れども、詮なかりし故、千束の城と呼ぶとかや」とある。

城跡は中林地区にあって、「城山」という字名を残す低丘陵地の末端部（周辺水田面よりの比高15m）に位置する。丘陵地の背面は、北西方向に主軸を呈する広い平坦地となっており、南東側の野首部分には三重堀が観察される。三重堀は中央部がもっとも顕著で、幅10mを計り両端に長さ48mと40mの土塁が付随する事になる。さらに東縁部には空堀跡とも思

える凹道が、南北方向に走っているが、これは途中で東側へほぼ直角に折れて土塁を伴う完全な空堀となる。

城跡周辺は、『古城考』の記事にあるように今も水田地帯である。なお、城跡から南東方向400mに位置する中林集落には、「屋敷」という字名が残っている^(注1)。

(注) 城跡と集落の間には「千束」という字名が残っている。



和田城 (所在地不明)

『国郡一統志』によれば、合志郡内(現在の菊池郡)に存在した合志氏系の城であったらしい。

『肥後国誌』に「上荘村・高千百三十石余里俗和田村ト云」という記事が見える事から、上庄(荘)に存在する竹迫城の別称ではあるまいか。

牧村城 (所在地不明)

『国郡一統志』によれば、合志郡内(現在の菊池郡)に存在した合志氏系の城であったらしいが、現在、その所在地については『合志川芥』にも記載されておらず、手がかりになるものは何も残っていない。

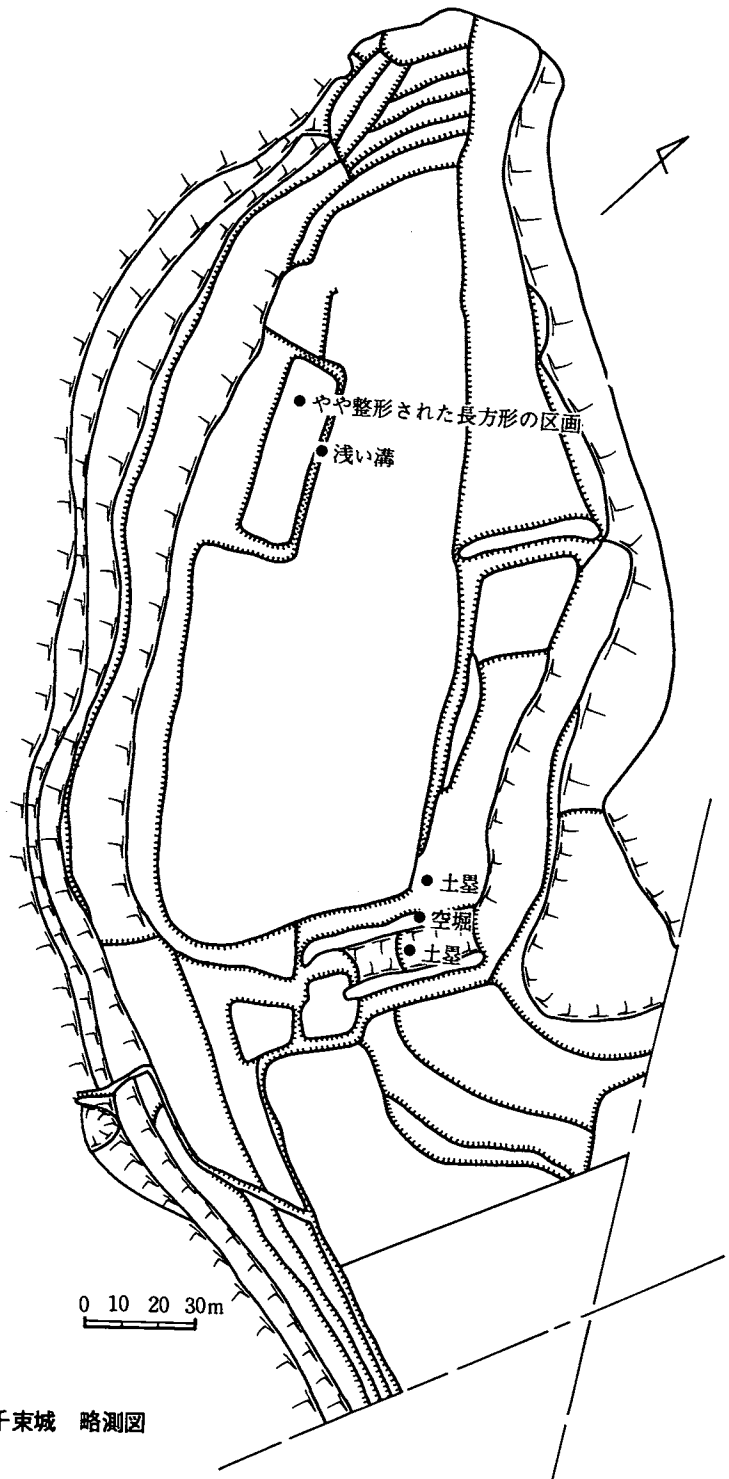
須屋城

(菊池郡西合志町大字須屋字下屋敷)

城主は菊池氏の庶流、須屋市蔵であったという。菊池氏が衰えた後は、合志親重に属したらしい。

城跡は楕円形を呈する低丘陵地(標高37.3m・東側裾部の水田面よりの比高約2m)に位置しており現在は「下屋敷」の字名を残す集落となっている。集落のほぼ中央部を道路が南北に走っており、地元の人達は道を境に東側を「陣ノ山」、西側を「下屋敷」と呼び分ける。

「陣ノ山」の南側寄りの所が城跡の中心地とされ、西側を除く三方を溝(幅1.5~2.5m)で囲まれた長方形の平坦地(東西37^(注1))



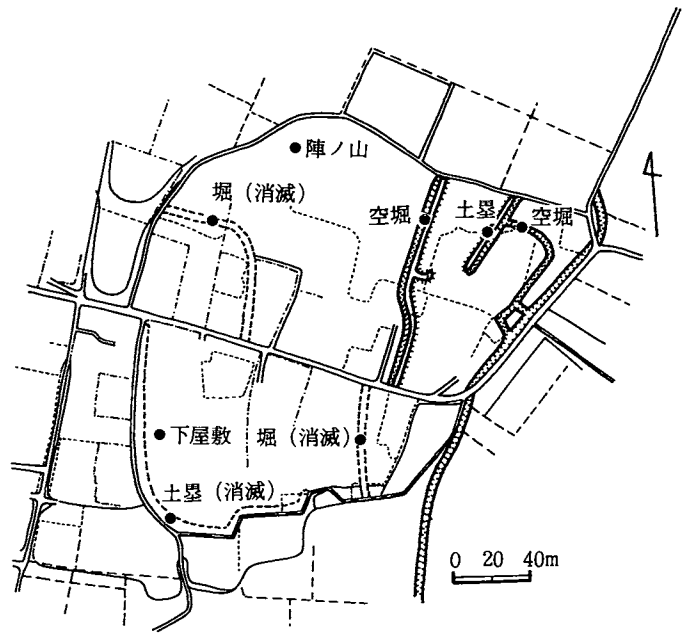
千束城 略測図

m・南北47m)をはじめとし、東西120mに及ぶ土塁(幅5.5m・高さ1.5m)と空堀(幅4.7m)が存在する。

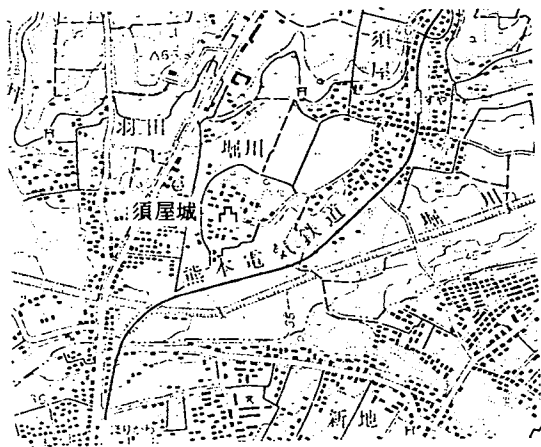
この他、集落内には網の目のごとく掘られていたという溝跡(幅1.5m)が若干観察される。下屋敷の周辺部にはかつて高さ1.5~2m程の土塁もめぐっていたと伝わる。城跡の周辺には、「中園屋敷」・「^(注2)的場」と称される地域がある。「下屋敷」全体が一つの城であったと思われる。

(注1) 同地内に五輪塔が残っており、その周辺部から小刀が出土している。

(注2) 後藤泉氏の御示唆による。



須屋城 略測図

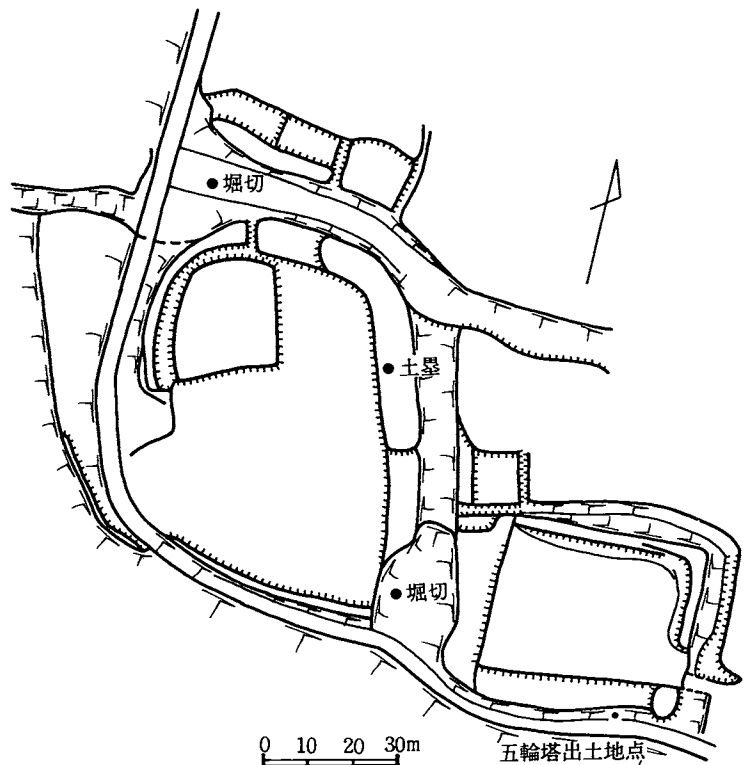


とびくま
飛隈城

(菊池郡泗水町大字住吉字城山)

『合志川芥』によれば、合志氏の居城という。同書に「康正二年(1456年)八月、合志藏人佐隆門真木村により住吉村に移り、飛隈館を建て之に居る。之を隈屋形と云ふ」という記事が見える。

城跡は、南下に合志川の流れを望む飛熊集落の南西方向500mにあって、「城山」という字名を残す丘陵地の南端部に位置する。当該地は、空堀と土塁で囲まれた楕円形状の平坦地(北西方向に主軸を呈し、長径80m・短径60m)と、長方形の平坦地(東西方向に主軸を呈し、長さ40m・幅30m)が東西両側に並んでおり、居館の色彩を濃く残す城跡となっている。ちなみに空堀は、楕円形状の平

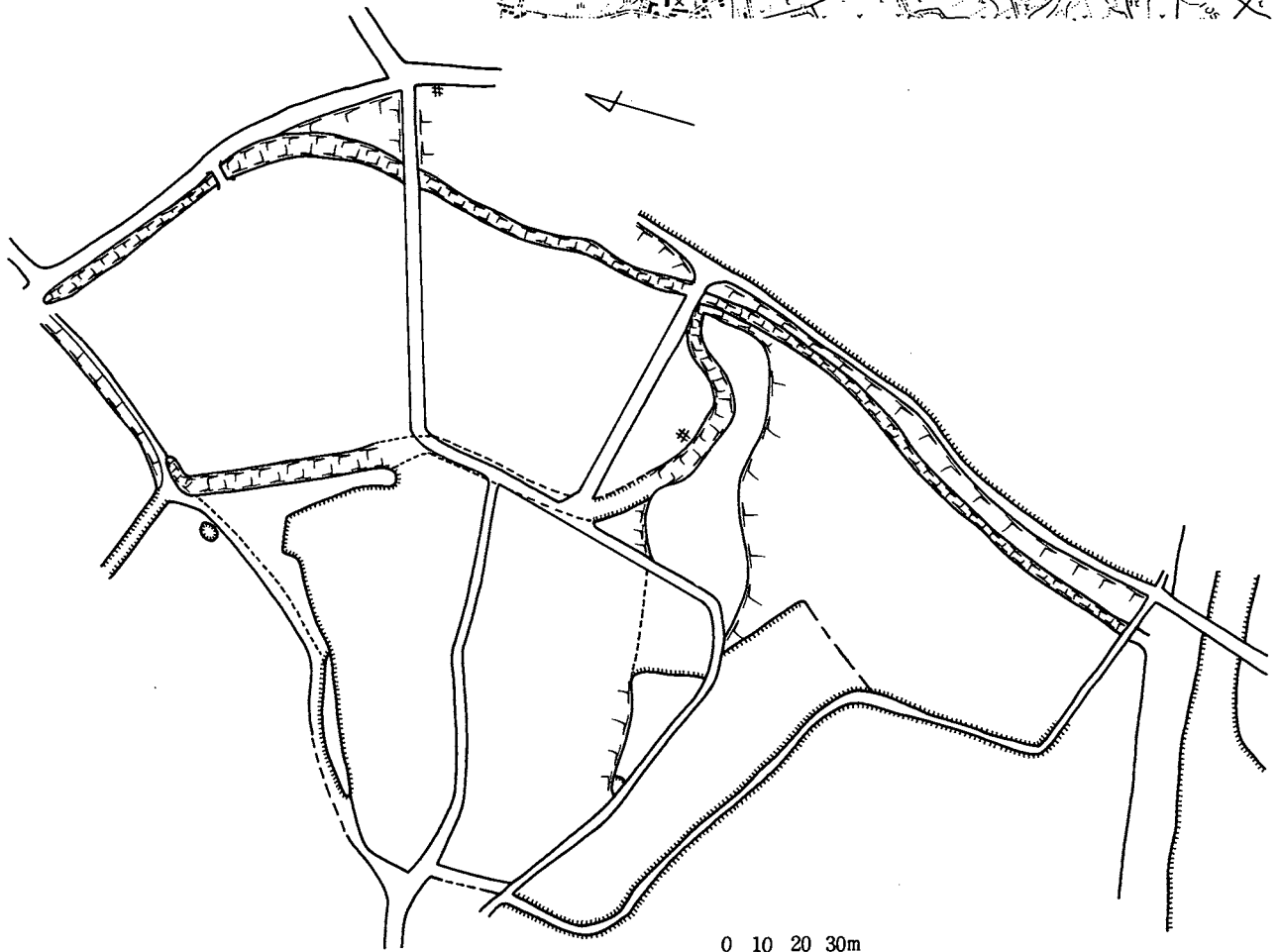
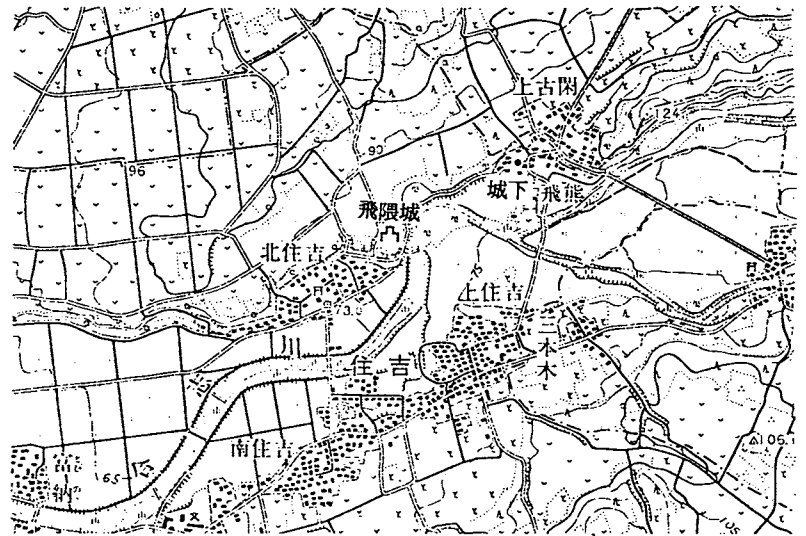


飛隈城(1) 略測図

平地側で底幅8~10mを計り、平坦地の縁に高さ1~2.5m・幅8mの土塁を付随する事になる。

一方、長形状の平坦地部分については、底幅3mを計り土塁は高さ0.5~1m・幅3mを示す。当該地の南側斜面部からは、道路工事の際（大正期）に五輪塔が数基出土している。

なお、集落には「城下」の字名が残っており、かつては城跡と集落を結ぶ空堀的な凹道も通じていたという。



飛隈城(2)城下集落 略測図

^{いけのうえ}
池上城（推定地） （菊池郡泗水町大字住吉字古閑）

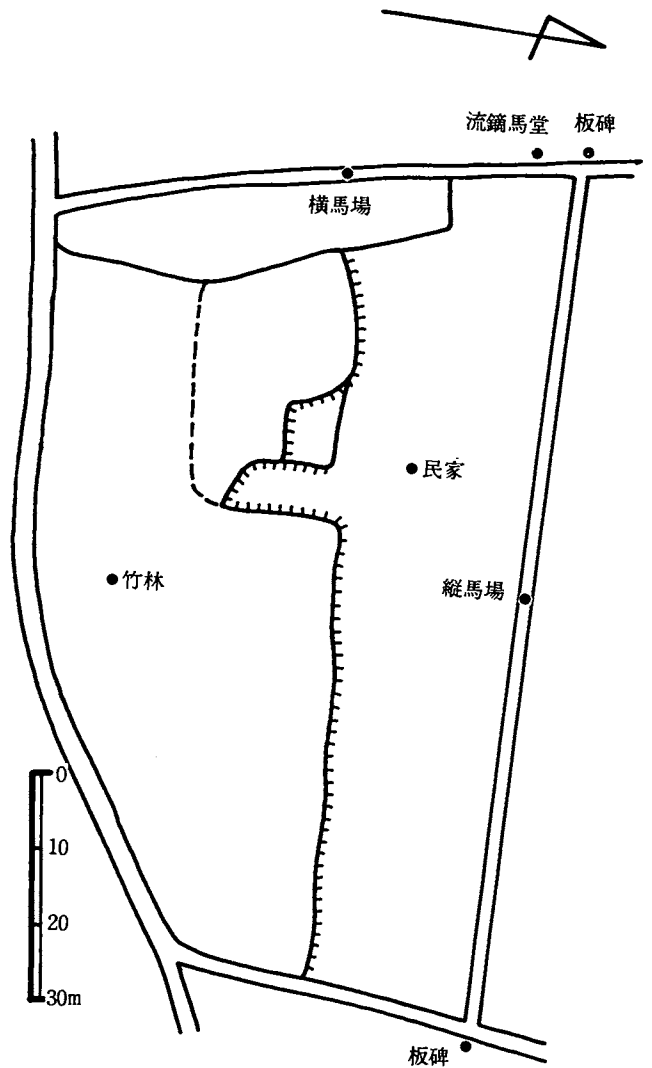
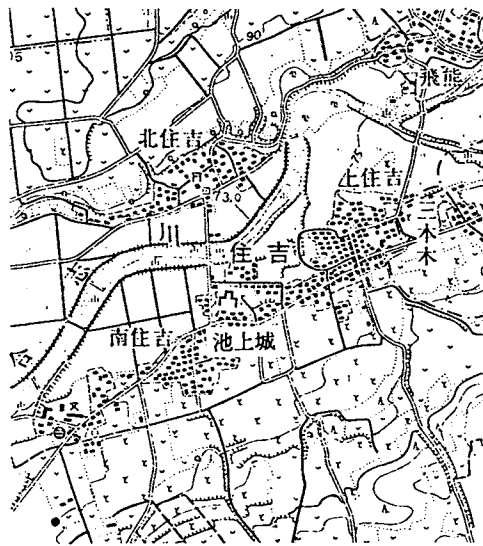
『合志川芥』に「合志四郎左衛門重隆後に引生民部と改め文明十六年(1484年)古閑に池上城を築て之に居子孫相承け天正の没落に至りて廢城す」という記事が見える。

城跡の所在地を示唆するような確たる伝承はないが、地元では一応、『合志川芥』の記事にしたがって「古閑」（字名）地内の一隅を城跡の推定地と見なしている。すなわち、当該地は四方を道路で囲まれた長形状の一区画（南北方向に主軸を呈する）で、北側と東側部分の道路に「横馬場（長さ140m）」「縦馬場（長さ220m）」の小名が残る。『菊池郡誌』は両馬場

を合志氏の馬追場と伝える。

(注1)
城跡推定地については東側半分が平地で西側半分は若干の微高地(竹山)となる。同地内には遺構らしきものは何も観察できないが、「縦馬場」の南北両端に板碑が存在する。

(注1) 縦馬場の北端に流鏑馬矢堂がある。



池上城(泗水)(推定) 略測図

くめ城 (高請城) (菊池郡泗水町大字久米字高請)

地主は里前治部という。『阿蘇文書』
(注1)
の「今川了俊書状写、康暦元、七、十七」
(注2)
には「くまめの城」と記載されているよう
である。

城跡は、昭和46年11月に施工された圃場整備事業のため、すでに消滅したが、古老の話しからある程度の縄張りは復元できる。すなわち城跡は高請の丘陵地内にあって、「城床」と称される東西55m、南北35mの長方形の平坦地を中心に、北側に一段、南側に二段の階段状地形が観察され、さらに城床の四方には、幅3m程の通路を兼ねた空堀(東西長さ195m・南北長さ90m)がめぐっていたという。



ちなみに『菊池郡誌』には次のような縄張りに関する記述が見える。「城床は二町歩許の正方形にして四方に濠を環らし、昔は水を湛え深さ幾何なるを知る可らず、今や東西北の三面を人馬通行の道路となし、西南最深く北面之に次ぐ、南は深く鎖されて耕地となり、僅に其一部のみ昔時の倣を相像し得べし。又城床の中央に南より北に通ずる道あるは、之れ城内に入る道路にして南西は表門北面は搦手なりしならん」

なお、城跡南側の東宅地（久米一区）の集落には安国寺跡や菊池政隆の墓所がある。

(注1) 1379年

(注2) 伝承によれば城主ノ霊は大蛇となり時々村に出没したという。

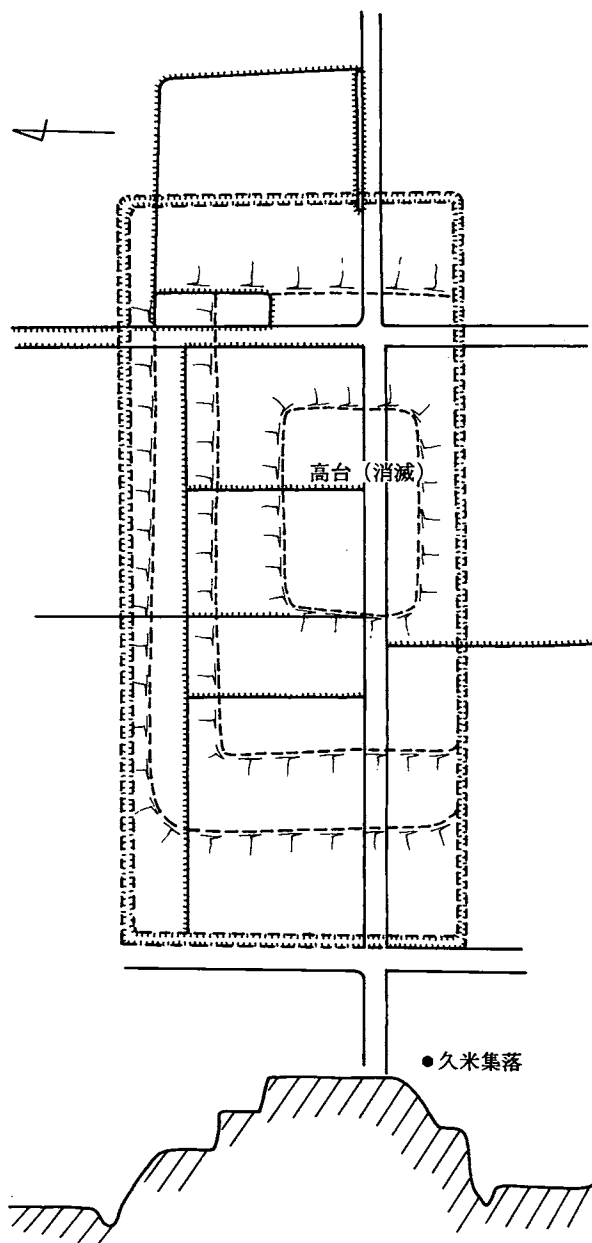
なかばやし

中林城

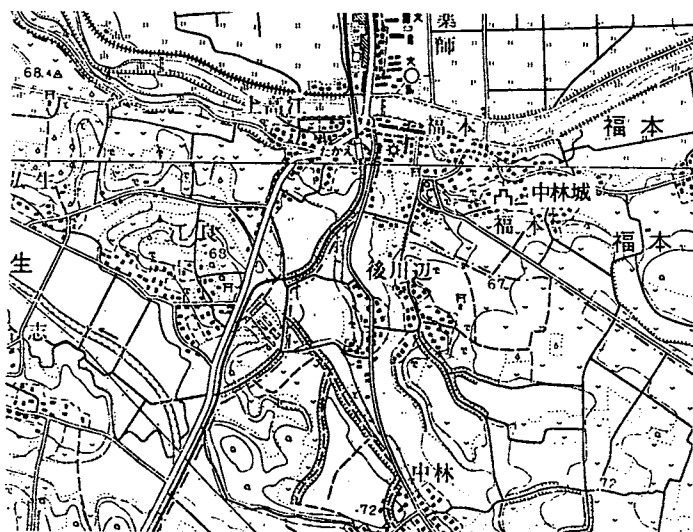
(菊池郡泗水町大字福本字南宅地)

『国郡一統誌』のみに城跡名が見える。城主名については、不明であるが、同書は菊池氏系の城であった事を伝えている。

城跡は、福本地区の南側にひろがる丘陵地末端部（通称・中林原）の小山に位置していたが、昭和40年代の初期に削り取られて消滅し、現在は畑地となっている。さらに、その周辺部についても、昭和49年に町営グランド建設のために大幅な地形変更を受けた。したがって遺構的にはまったく見るべきものはないが、今でも、地元の人々は当該地を「合志さんの城跡」と称している。（菊池氏の城とは伝わっていない。）村上常雄氏の御示唆によれば旧地形は、高さ5～6mの小山で、上面は方形の平坦地となっていたらしく、周辺の斜面部には、数段の階段状地形も観察されたという。なお、城跡に関連するものとしては、丘陵地の北側斜面に「合志さんの墓」と称される古墓がある他、麓の竹林（昭和初期まで宅地）には、「明ちん屋敷」「古屋敷」の小名が残っている。



久米城 復元図



東嶽城

(菊池郡大津町大字大津字町屋敷)

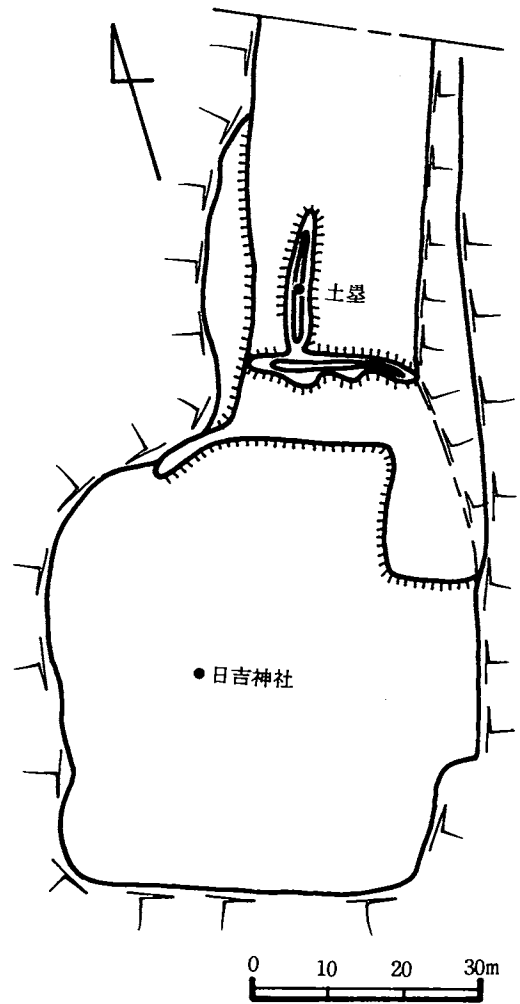
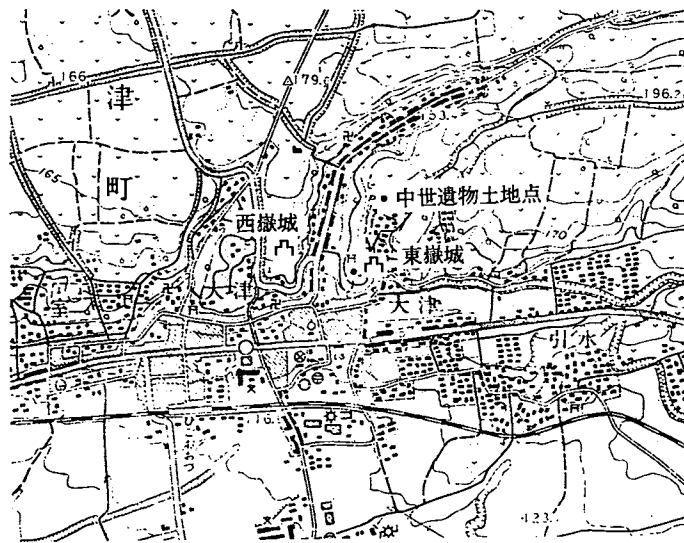
『古城考』によれば大津欠連が居城していたが、水の便が悪い事もあって後に廃城になったという。一方、『合志川芥』には大津義兼の築城によるものとされ、天正十三年、島津勢の攻撃を受けて落城したと記されている。

城跡は大津街道沿いであって南北に主軸を呈する帯状形の丘陵地末梢部（標高155m・街道よりの比高約35m）に位置し

ているが、現在は日吉神社の敷地になっており、ほとんど旧地形は止めていない。古老によれば、旧地形は単なる雑木林の小山で、城跡に関連あるような遺構は観察されず、神社の敷地に切り開く際にも遺物の出土はなかったという。現在は、わずかにT字型（東西22m・南北18m）の土塁が神社北側に残る。

城跡の東側麓に存在する後迫（字名）の集落には中世遺物の出土をみる一隅がある。

なお、城跡周辺の民家の井戸はいずれも水量豊富との事で、『古城考』の記述と食い違いをみせている。



東嶽城 略測図

にしだけ
西嶽城 (菊池郡大津町大字大津字西嶽)

城主は合志氏の家臣、大津義種とされる。

城跡は、現在その大部分が町営と本田技研の住宅地となっている事もあって、遺構は何も観察されない。

たまんおか
玉岡城 (若宮城) (菊池郡大津町大字陣内字順田)

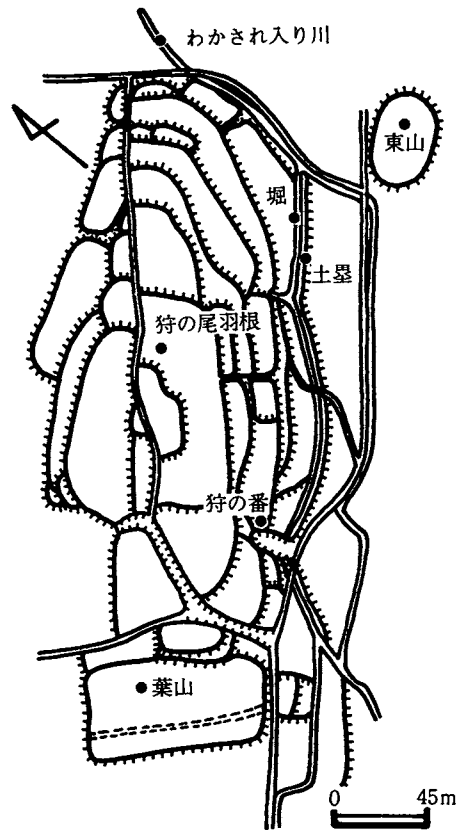
『合志川芥』によれば、元亀、天正(1570年1592年)の頃、合志氏の家臣稲葉安芸守とその一族が居城したという。

城跡は、わかされ入り川と白川の合流点にあって、「狩の尾羽根・狩の番」と称される独立丘陵地(標高120m・北側水田面よりの比高20m)が城跡と伝わる。丘陵地の背面は、長形状の平坦地(北東方向に主軸を呈し、長さ200m・幅80m)となっており、周辺の斜面部には幾段にも重なる階段状地形が観察される。^(注1)

南西側部分については、幾分、緩傾斜となっているためここには、堀切(長さ30m・幅10m)がはいつており、「葉山」と称される長形状の独立区画(西側裾部の水田面よりの比高5~6m・長さ50m・幅27m)も存在する事になる。当該地は最も整形されており、城跡における最も顕著な遺構となっている。

丘陵地の南側麓際には、土塁(幅1~2m・高さ0.5~0.6m)と空堀(底幅1m)らしいものが走っているが、これについては、規模が小さすぎるきらいがある。

城跡の東方向300mに位置する小山についても、城跡の範囲と見なす古老もいる。この地からは石器と縄文土器片の



玉岡城 略測図

出土が多い。

距離的には多少離れてはいるが、西方に上陣内集落があり、「上園」という字名が残っている。

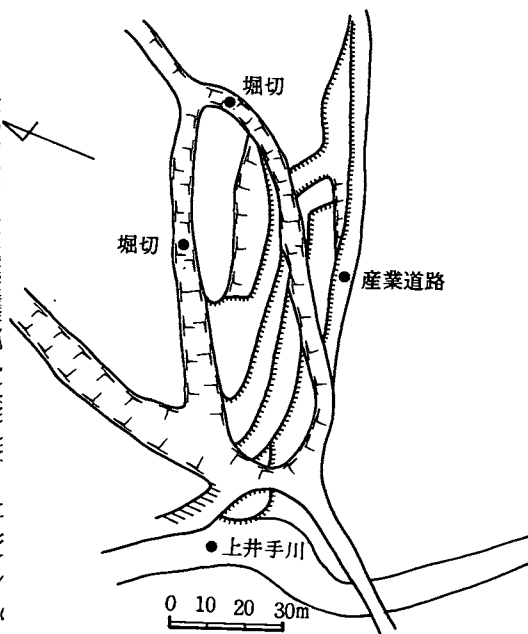
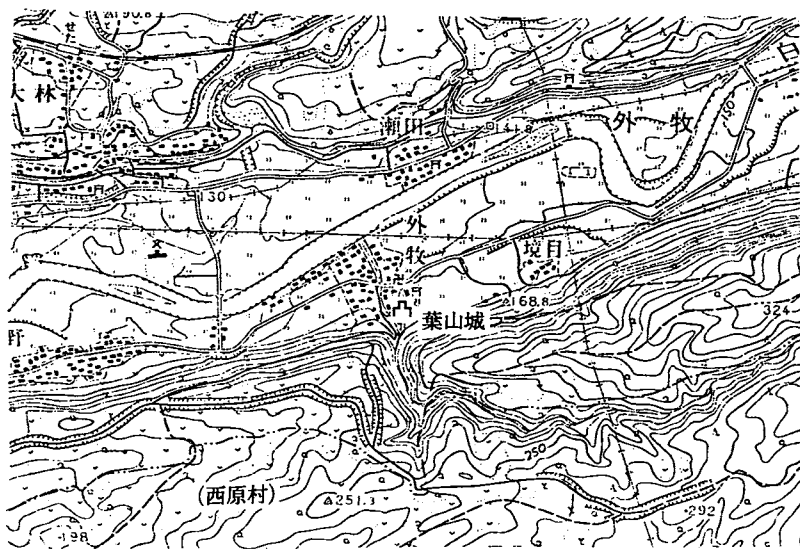
(注1) 周辺一帯から、礎石状の平たい川原石が出土する。

いけがみ
池上城 (菊池郡大津町大字吹田字池鶴)

城主は合志氏の家臣青木勳大夫という。

新田の集落背後にひろがる丘陵地帯に「城の本」の小名を残す一隅があり、『合志川芥』に言う池上城跡ではないかと思われる。

「城の本」は丘陵地の末梢部(標高140m)が堀切(底幅5~9m)で断切られた人工的な独立小丘陵で、上面は長円形の平坦地(南西に主軸を呈し、長径52m・短径10m)を中心に5段からなる階段状地形が観察される。南側裾部を走る道路面との比高は約5~6mを示す。西側に農業用水路の上井手川が流れている。

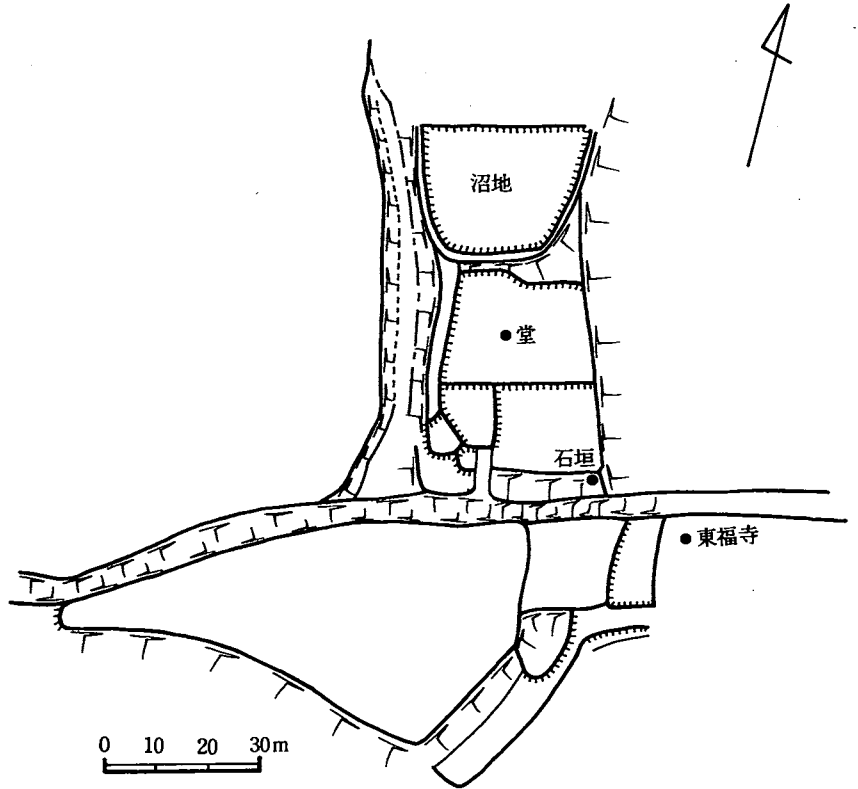


池上城(大津) 略測図

はやし
葉山城

(菊池郡大津町大字外牧字霞鶴)

東福寺の南側に道路をはさんで、「葉山さん」と称される神社の境内があり、「葉山さんは昔の城跡である」と古老はいう。当該地は舌状形の山稜裾部(標高140m・道路面よりの比高約5~6m)であり、長方形の平坦地(北西に主軸を呈し、長径40m・短径30m)に御堂が建立されている。境内の東縁には長さ35m程の土塁らしいものも観察される。さらに道路側の崖面一帯に築かれた石垣については、当時の石積みが転用されたという伝えがある。非常時には南側背後の山稜(標高251.3m)に登り、西原村の鳥子城と連絡をとったともいわれている。



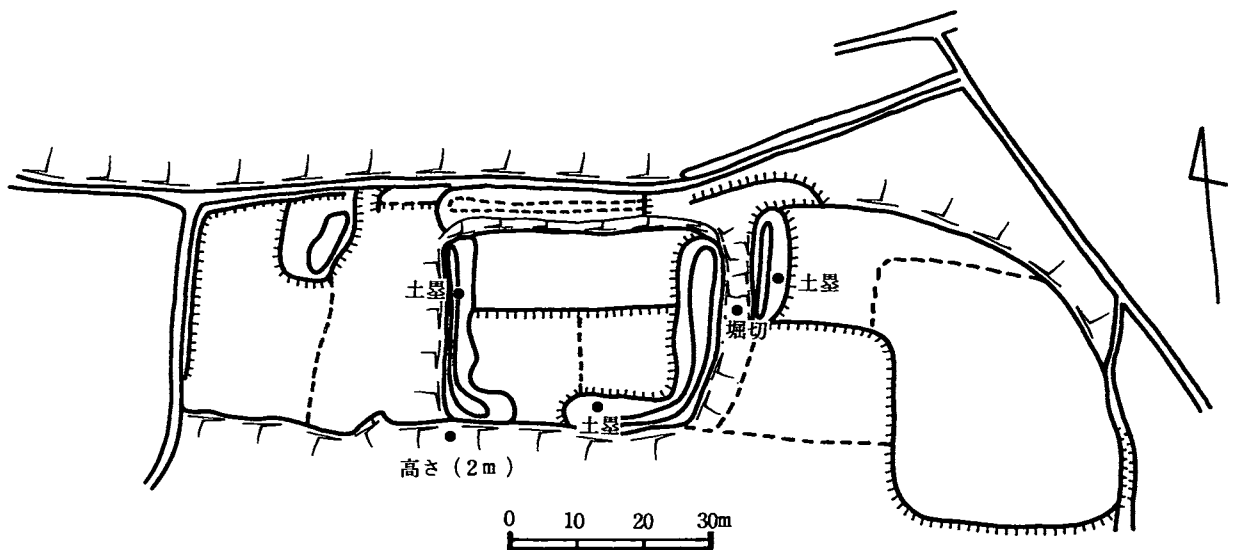
葉山城 略測図

くまごく
九万石城 (菊池郡大津町大字矢護川字中在目)

合志氏(源姓佐々木)の一族が居住していたと伝わる。『肥後国誌』に「少シノ館ヲ構ヘ掘ヲ穿リ大垣ヲ結テ住セシ」という記事が見える。

城跡は中在目の集落で最も北寄りであって城山の小名を残す微高地に位置している。城山の上面は北側を除く三方を土塁に囲まれた長方形の平坦地(東西30m・南北25m)があり、東側部分については幅4mの空堀の存在も確かめられる。しかし空堀部分については近年牛舎が建設されたため、その一部は消滅している。

概して文献にも記されているように、小規模な館跡の感が強い。なお、城山の背後は崖になっており、裾部には矢護川が流れる。



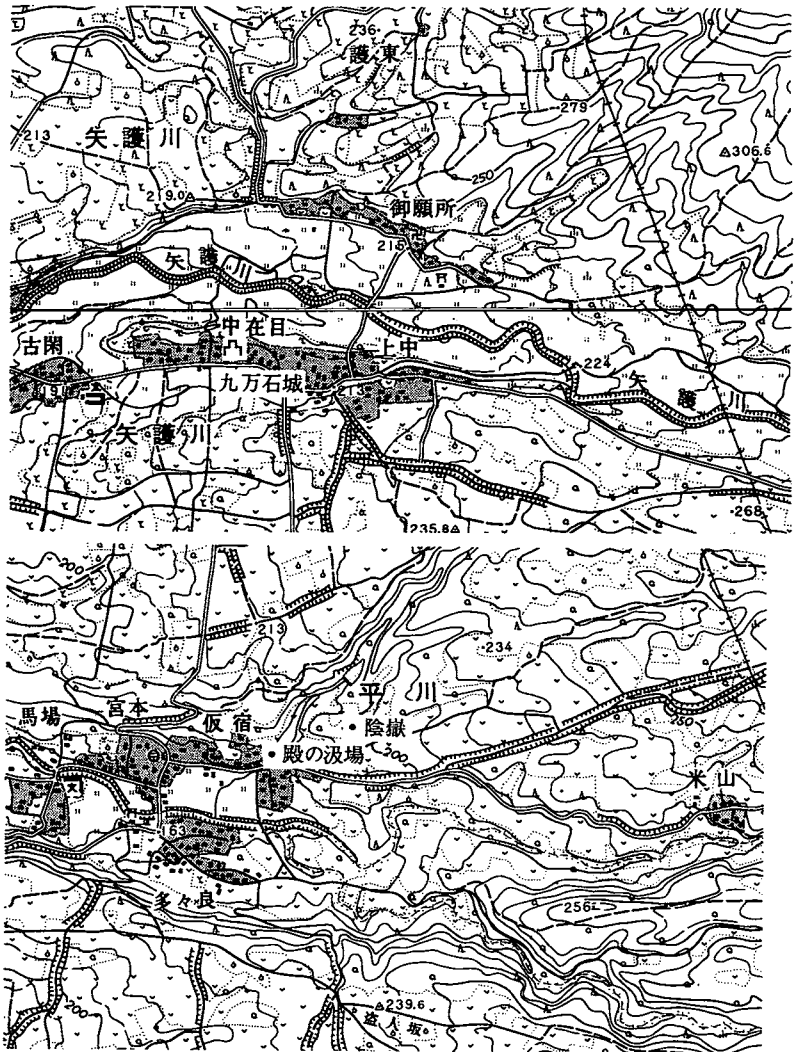
九万石城 略測図

陰嶽城（菊池郡大津町大字古城字下後迫）

文明六年（1474年）の城主は合志氏一族の平川行親（合志隆祐の四男）という。天正十三年（1585年）にいたっては平川高冬が在城したらしい。

古城（大字）地内の西嶽に「陰嶽（字・下後迫）」と称される丘陵地があり城跡の存在が考えられるが、開墾されて広い畑地となった「陰嶽」には城跡に関する伝承はなく、城跡に関連あると思われるような遺構も観察されない。しかし、「陰嶽」の西側に開けた「仮宿」（大字平川字水落）の集落には「殿の汲場」と称される民家の敷地や、「屋敷」という小名を有する畑地も残っている所から、陰嶽もしくは仮宿に館の類が存在した可能性はある。

（注1）古老によれば「かつて陰嶽には4基を数える塚が存在した」という。うち1基についてはその所在地が今でも確認できる。



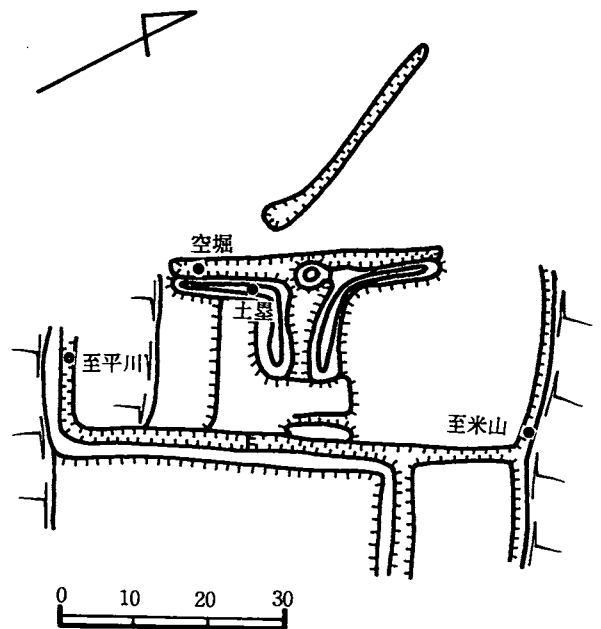
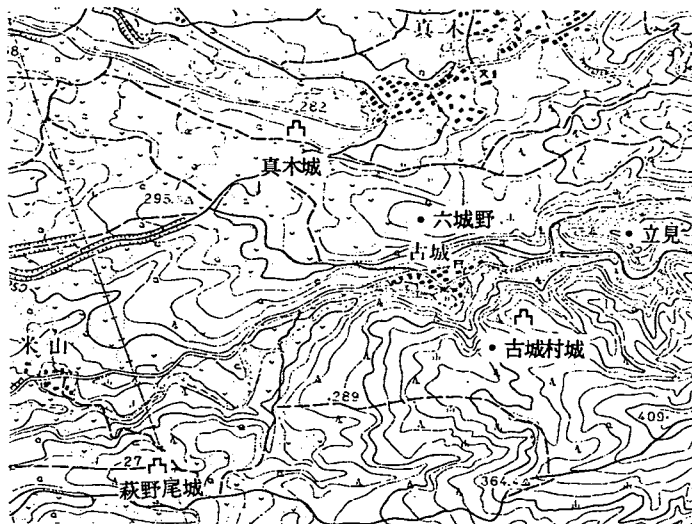
萩野尾城

（菊池郡大津町大字平川字傾城平）

城主は斎藤尾張守という。

地元には城跡に関する伝承は、まったく残っておらず、その所在地についても不明であった。しかし踏査の結果、古城地区と平川地区との間を東西に長く横たわる山稜地帯に「傾城平」の字名を残す所があり、そこには空堀や土塁等の遺構が残っている事が判明した。土師質土器片も数多く出土する。

おそらくこの地が萩野尾城跡であろう。南側麓には、米山の集落を望むことができる。集落との比高は約60mである。



萩野尾城 略測図

ふるじょうむら
古城村城 (亀迫城) (菊池郡大津町大字古城字四番東原)

文治年中(1185~1190年)に齊藤實家が築城したというが、その後の城主については不分明である。

城跡は「古城」(字名・中原)集落の南東側にあつて、「上の城」の小名を残す山稜(標高350m・古城集落よりの比高約70~80m)に位置している。山頂部分は北西に主軸を呈する帯状の細長い平坦地(幅30m・長さ210m)になっており、鞍部には自然の迫を利用したと思われる幅14m程の堀切が観察される。以前は城跡の南側麓に城の井戸として利用されたと伝わる湧水池があったらしいが、「明治30年頃の地震で涸れた」と古老は語る。城跡南縁部の土盛りを伴う溝(幅1.5~2m)は阿蘇の二重峠に至る山越道の跡である。

集落とその周辺山稜地帯には、「六城野(標高362m)」をはじめとして「立見(標高360m)」・「ねこ羽根」・「槍返し」等の小名が残っている。

(注1) この山稜からは六つの城跡を眺望する事が出来たという。

まき
真木城 (今城) (菊池郡大津町大字真木字東津留)

大友家の裁許によって、建長二年(1597年)に合志半郡の地頭職となった佐々木合志氏の数代にわたる居城であったという。

城跡は真木の集落(字・伊勢村等)の入り口にあつて、東西に主軸を呈する帯状の丘陵地(標高304m・南側裾部を走る古道との比高約3~4m)に位置しているが、雑木林が繁げる丘陵には2条の堀切(堀幅8m・13m)によって仕切られた長方形の平坦地(長径25m・短径22m・高さ1.5~2m)が存在しており、加えてその周辺に土塁(長さ8m・幅4m・高さ0.5m)や曲輪らしき階段状地形(長さ42m・幅11~15m)も観察される。平坦地からは土師質系の土器片が出土し、堀切とのカット面には、かつて川原石の野面積みが存在したという。城跡南側裾部には阿蘇二重峠にいたる古道が走っている。

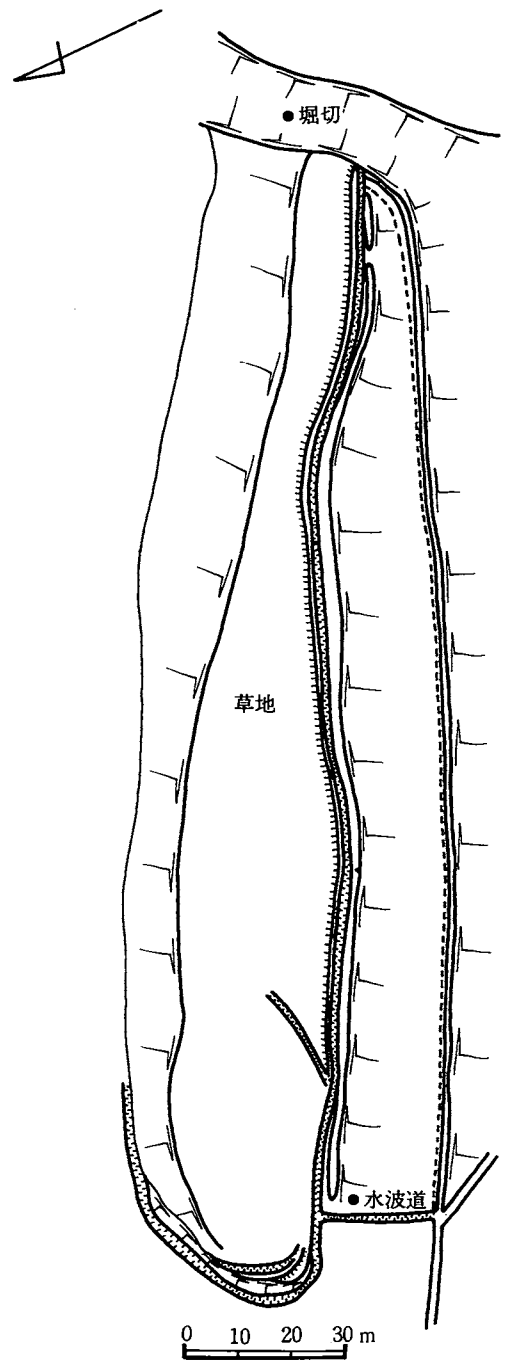
真木の集落に、「上屋敷」・「下屋敷」の小名を有する一隅があり、さらに城主一族の墓と伝えられる2基の五輪塔が残る。集落には城主・合志氏に関する伝承や板碑等が多い。

山の城 (野の城) (菊池郡大津町大字真木字花見ヶ峯)

城主は坂本三郎左衛門という。『合志川芥』には「真木村に在り、當城は別名を野の城と称す。」と記されている。しかし踏査の結果、矢護山(標高940m)の山腹中の原野に、山の城と野の城の小名を残す一隅があることがわかった。

野の城

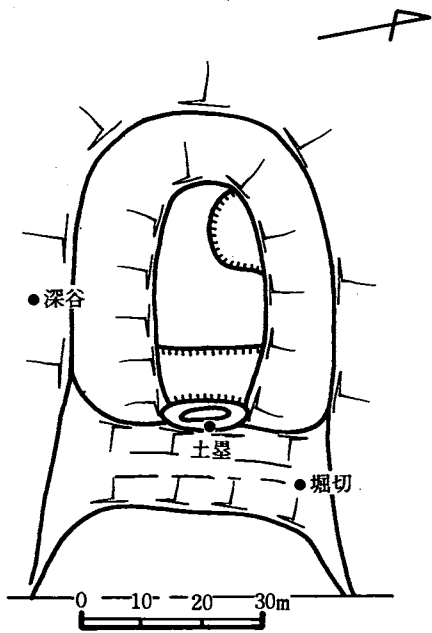
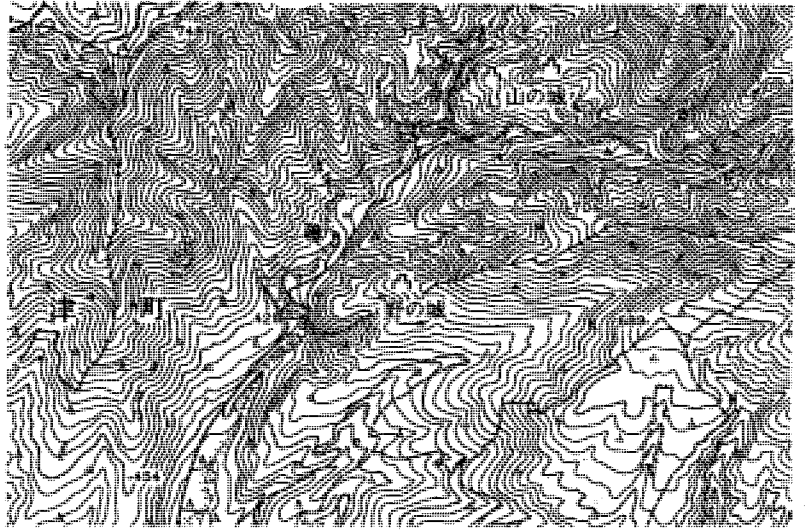
現在、オートバイのモトクロス場になっている原野の一隅(真木1466の13、標高580m)に「野の城」の小名が残っており、堀切にあたると思われる2条の小規模な溝(幅2m)によって仕切られた舌状形の平坦地(東西に主軸を呈し、長径30m・短径20m)が存在する。



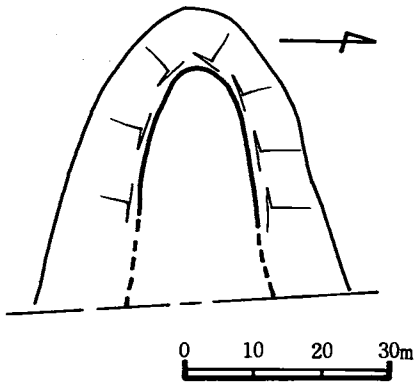
古城村城 略測図

山の城

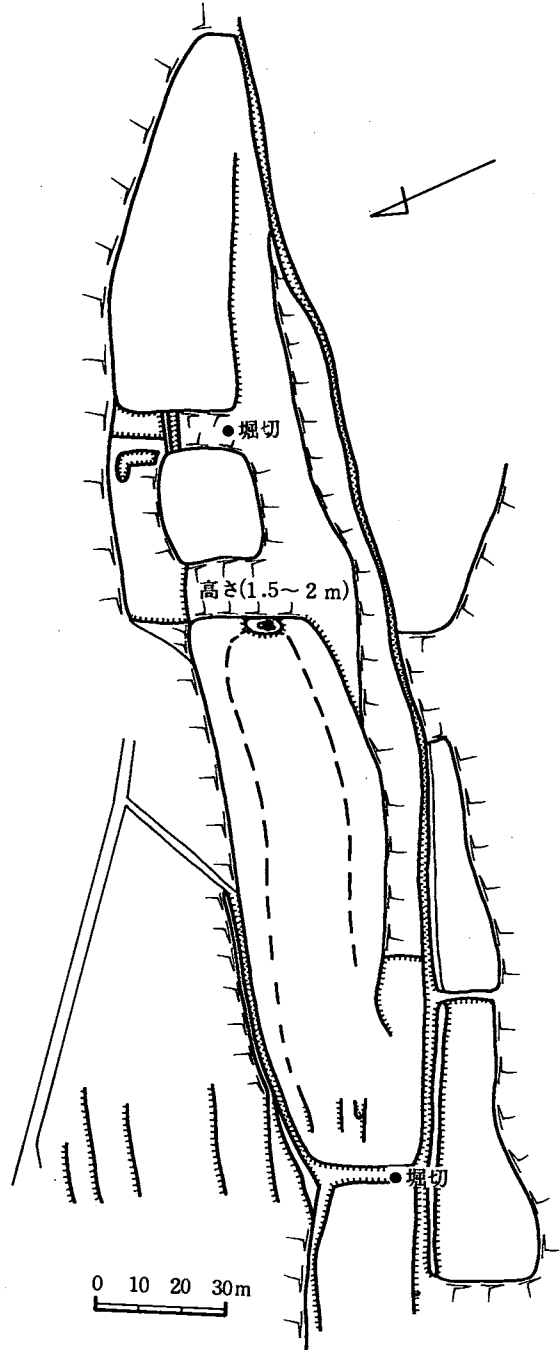
野の城をさらに140m登りつめると、山の城の小名を残す一隅（真木1466の2、標高720m）があるが、この地は単なる尾根の一部で人工の手は加わっていない。むしろこの地より北西へ80m程下った所に、幅13mの溝(深さ2.5m)によって仕切られた舌状形の平坦地（南西に主軸を呈し、長径27m・短径18m）が城跡としては適切である。



(推定) 山の城 略測図

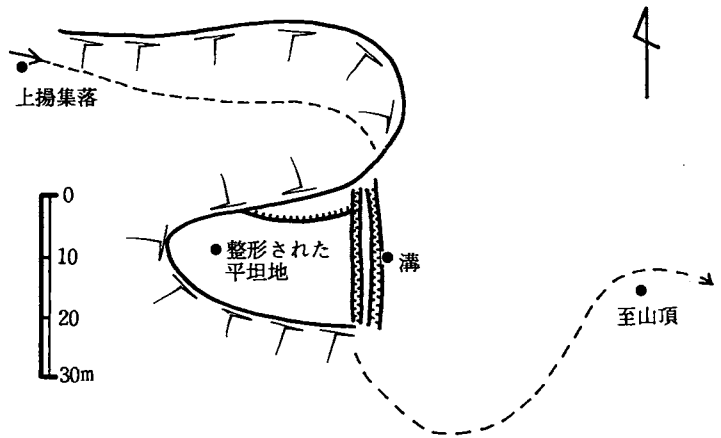


(伝) 山の城 略測図



真木城 略測図

野の城と山の城は真木の上揚^{かみあげ}からの山道が通じてはいるものの、この山道は矢護山頂上付近の造林で行きどまりになっており、山越えのものではない。



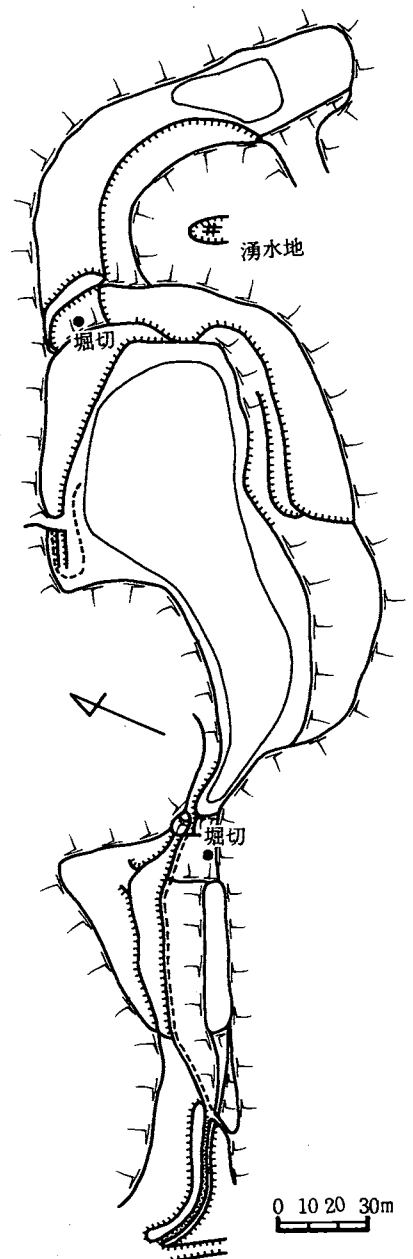
野の城 略測図

龍頭城

城主は真鍋宗矩という。杉水の地内にあるものとされるが、現在の所在地については不明である。

しかし、杉水の地には「あぶみ」「かまくら」「百騎がえ」等の小名が残り興味深いものがある。

(注1) 古老の中には、菅原神社の西岸にあたる丘陵地末端部を城跡と考える人(杉水ひろし氏)もいる。



0 10 20 30m

龍ヶ城 略測図

続野尾城

合志兵部之亮が應仁二年(1468年)に瀬田山の西麓に築いたものとい、天正年間(1573~1592年)にいたっては、瀬田維冬が城主であったという。

城跡の所在地は不明である。

青葉山小城

城主は合志氏の家臣、大林外記であったといい、天正年間(1573~1592年)には大林紹宗が居城していたという。

城跡は大林の地内にあるとされているが、現在の所在地については不明である。

亀ヶ城

(菊池郡旭志村大字麓字湯舟)

『合志川芥』によれば仁平(1151~1154年)・久寿年間(1154~1156年)頃

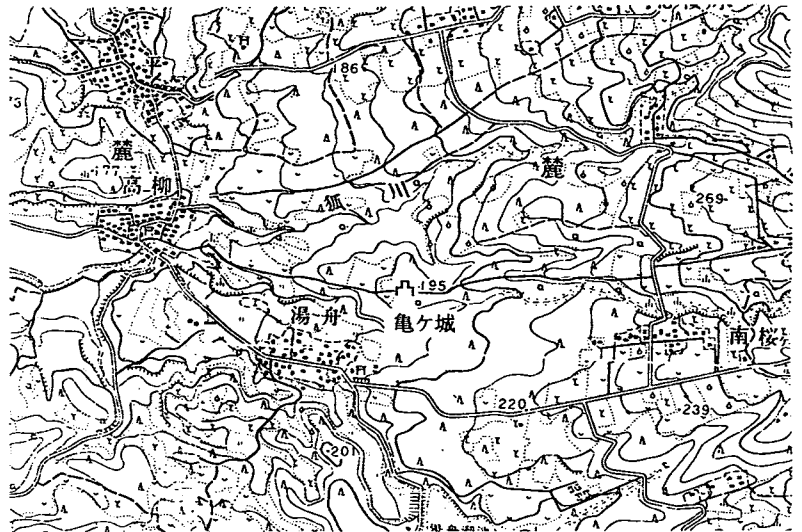
に源為朝が一時期、居城したという。同書には為朝伝説とともに「今も城床より朽ちたる矢の根、逆茂木等、掘り出す事あり」と記されている。

城跡は字・「湯舟」の地内であって東西に主軸を呈する丘陵地(標高230m・南側麓の水田面よりの比高約30m)の雑木林(一部、みかん畑)に位置しており、「城山」の小名を残す。

城山の背面は細長い平坦地(東西幅150m・南北幅20~50m)となっており、東西両端の極端にくびれた鞍部には堀切が観察される。ちなみに、東端・西端の堀切幅は、それぞれ14m・16mを示し、とくに前者については土塁(幅3.5~5m)を伴うものであり、迫には為朝が使用したと伝わる井戸跡(湧水を利用した浅井戸)が残っている。

湯舟の集落には「城下」の字名を残す一隅が存在する。

(注1) 討手の大軍が攻めて来た時、為朝は寄手に弓勢を示す為八町許隔れた柳に止った白鷺を射落したという。この地は現在「高柳」の地名を残している。この他、2~3の伝説が記されている。



くぼた 久保田城

『合志川芥』には「久保田大和守為宗は久保田を分領し城を築て居る」と記されている。

現在、城跡の所在地は不明であるが、字「柳ノ尾」の地内には「山の城」という小名を残す墓が存在する。しかし当該地は現状変更がなされている事もあるため、城跡に関連あると思われる遺構は何も観察できない。

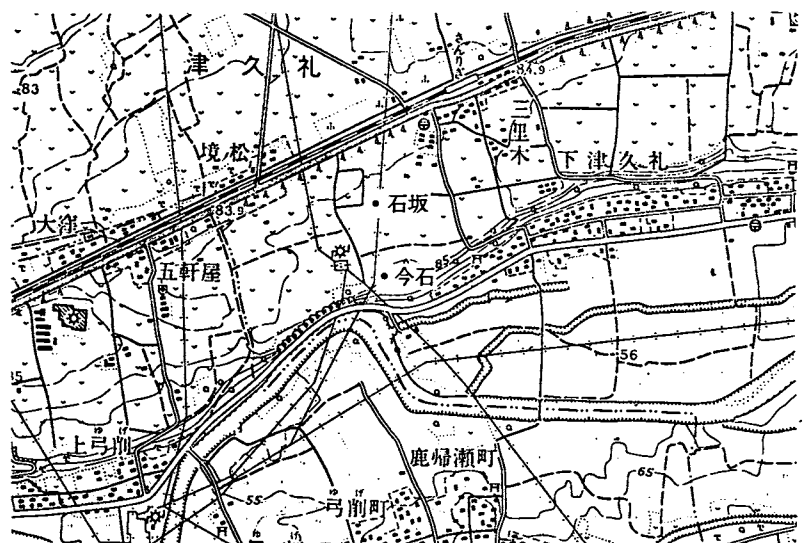
いまいし 今石城(消滅)

(菊池郡菊陽町大字津久礼字今石)

『古城考』に「津久礼村畔、白川の頭にあり、合志家全盛の時其臣石原狩野介吉利居城して、竹迫南手の防たりと云ふ」という記事が見え、『合志川芥』は城跡の周辺地形について「當城の前に白川の流れを控え断崖絶壁削るが如く屈竟の要害なり」と記述している。

城跡の所在地については確たるものはないが、津久礼地区に広がる丘陵地南縁部の一隅に、「今石」という字名を残す所があり、地元では当該地を城跡と見なす向きがある。すなわち、「今石」という地名に加えて『合志川芥』の記述にあるように丘陵地下(約25m下)には白川が流れており、東方向から西方向へ下る川の流れも、今石地区で大きく北側に湾曲してまさに「白川の頭」の形状を呈するからである。

しかし、当該地については昭和49年から昭和50年にかけて全面的に宅地造成が行われたので、今ではまったく旧地形を止めず推論の余地がない。河北憲一氏の御示唆によれば、城跡推定地には空堀らしいものの存在があったという。



いしざか
石坂城

『合志川芥』によれば城主は石坂盛隆という。加えて城跡の所在地については、「上津久礼村の内也下津久礼村を越へ飽田郡の境と云ふ」と記しており、八十三間に及ぶ堀の跡があるとも伝える。しかし、城跡所在地に該当すると思われる石坂(字名)地区は、一面の平坦地で、城跡に関する伝承は何もない。「石坂」地区は「今石」地区の隣り合わせでもあるので、『合志川芥』にいう「石坂城」は「今石城」を重複して述べたものと思われる。

なお、『肥後国誌』には、「弓削城跡 石坂城ト云城主年代不分明城ノ前堀トテ二重ノ堀跡于今残レリ」という記事が見える。

鹿本地区

鹿本郡に含まれる諸地域は、現行政区の山鹿市・鹿北町・鹿本町・鹿央町・植木町である。もと山鹿郡と山本郡と称していた。明治になって山鹿郡と山本郡が合併して鹿本郡となり、山鹿の町は独立して山鹿市となった。故に、ここで称する鹿本郡とは、以上のような諸地域を含んだ地方である。

この地域における中世の豪族は内空閑・大橋・隈部・城等の各氏である。中世後半期戦国期になると、菊池氏との関係が如実にあらわれてくる。

山本郡地方における諸豪族としては、内空閑・大橋・宗・山野・牧野の諸氏がいる。内空閑氏は系図その他の資料によると、基貞の時伊賀国服部荘より下向し、山本郡内空閑村（内村正院）に住むようになり、名も服部姓から地名をとって内空閑姓に改めたという。しかしながら、下向の時期については永仁年間とも、明德年間ともいい、各資料により一致しない。明らかなことは基貞以後山本郡内村（現植木町）に居住していることである。最初、基貞は内村岩照寺に城を築き住していたが、鎮貞の時になり下野村に霜野城を築き移り住んだという。その子為載は文明13年の重朝万句連歌に名を重ねている。それ以外で頼續・誠長と名を連ねているが、系図には名前は記載されていない。故に後の二者は内空閑氏の支流であるのかどうか不明であるが内空閑姓を名乗っていることを考えると一族であるのであろう。為載の子重載は永正2年の菊池家臣84人の連署（阿蘇文書之二）に見え、また、永正4年の内空閑備前守重載の奉書にもみえる。こうして基貞以降のことは明らかであるが、その居住地は内村正院（現植木町内村）であった。ここを中心に活躍するのであるが、内空閑氏は種々の史料より菊池家の老臣としての地位にあったのであり、藤原姓を名乗ることは菊池氏との関係を思わせる。

大橋氏は植木町城村に大橋城の跡があり、そこを居城としていたという。大橋氏は平氏の出で、肥後守貞能の子貞経が、平氏滅亡後源頼朝に降り、本領を得たという。そして代々この大橋の地に居住していたが、享禄年間に善次郎空佐定雄は肥後を去り、近江に行き佐々木氏に仕えたという。その後田中祐実が在城するようになったが、年代は不明である。

宗氏は兼信が永享八年、菊池為邦より山本郡岩野荘151町を賜り、道祖城に居住するようになったという。道祖城は現在の岩野城の事である。重信は菊池重朝の文明13年の万句連歌にみえる。こうして代々岩野の道祖城に住んでいた。

旧山鹿郡地方では隈部氏をはじめ、城・山鹿・平山・方保田の各氏と人吉相良氏の分流である内田・高橋の両相良がいた。

隈部氏は清和源氏の流れをくむといわれ、保元の乱の際に齊院次官であった親治が肥後に流され、その後上永野村に米山城を築き土着することになり、宇野氏を名乗ると系図は伝える。そして、文永元年持直の時、菊池武房より隈部の姓を与えられ、隈部氏をなめることになったという。そして種直の嫡子隆直は白木村陣内に居を移した。南北朝時代には菊池氏と共に南朝方として活躍している。文明13年の重朝万句連歌には隈部姓10名と一門の長野姓のもの2名の計12名の多きにのぼる人々が連なっている。忠助・重治と、その兄弟忠門の子清本、重治の子弘直、忠門・重治の兄朝豊の子忠直、基家・武治の三兄弟、忠直の子元成・重元・朝夏・以上が隈部姓。長野姓は右俊、重郷の親子である。彼等は長野村に住んでいたため長野姓を号したという。戦国時代の末期、天正年間になると親永・親泰らが活躍する。親永は菊池家の老臣として長野に城を構えていたが、大友・龍造寺・島津氏の進攻に際してそれぞれに属し、存命を企るが、豊臣秀吉征伐後佐々木成政の苛政に対して拳兵し、肥後国人一揆を誘発し、遂に秀吉より征せられた。隈部氏の子孫は鹿本郡一帯に広がっている。

親永の家臣に多久宗員がいた。多久氏がはっきりとその存在を示すのは宗員の時からである。山鹿郡多久村に住したことから多久姓を名乗る。その後熊入村の熊入城に移る。

城氏は菊池氏九代の隆泰の弟、隆経が山鹿郡城村に住んだことよりはじまる。越前守を称している人々は多く、蒙古襲来絵詞にある越前殿とはこの隆経のことではないかと考える。菊池家の老臣となり、文明13年の重朝万句連歌には朝成、為冬、重峯の三名が名を連ねている。菊池家衰退の後、天正19年親冬の代になって隈本に移住した。

山鹿氏は山鹿に城を構え住んでいた。菊池氏の庶流で則隆の二男政隆の時より分離したという。阿蘇文書正平6年10月の状、小代文書貞和6年4月の状、高瀬清源寺永正元年3月の状にある。

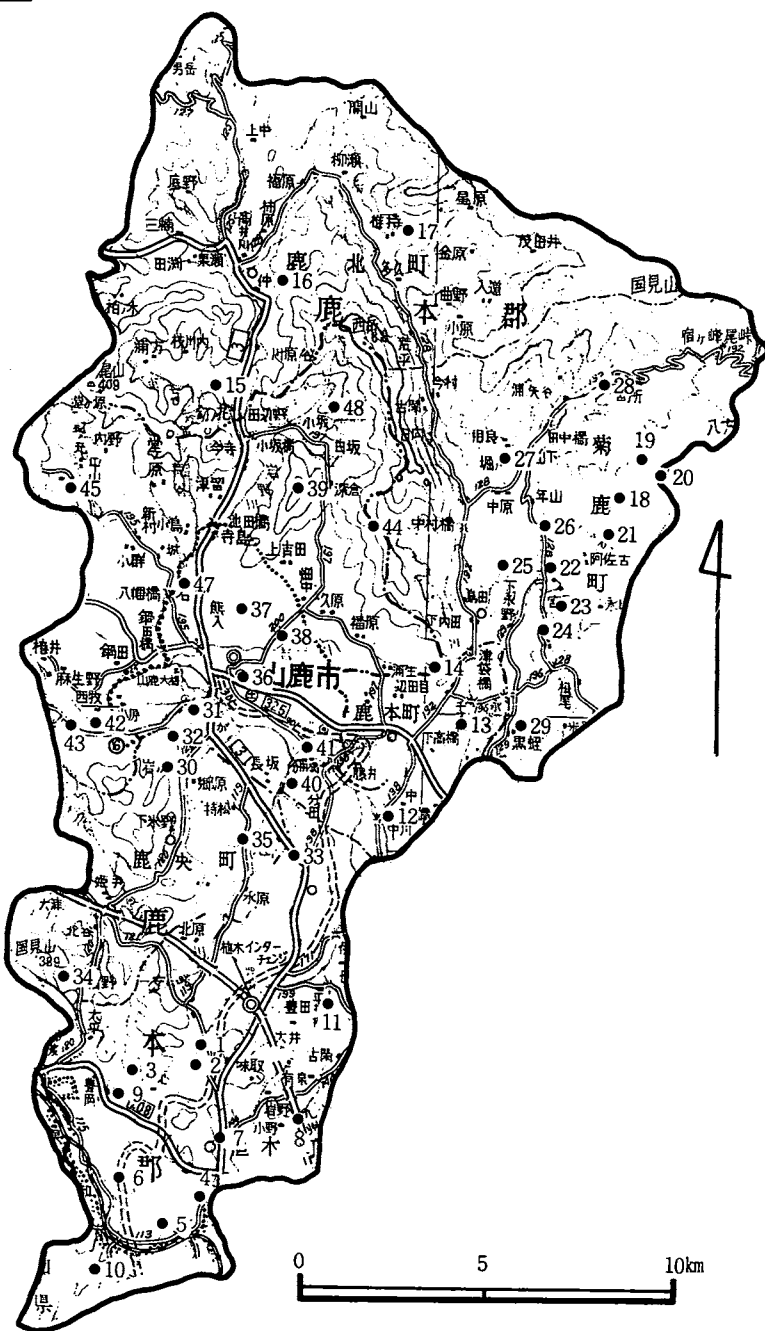
片保田氏も菊池氏の庶流で、林原氏の系統片保田重兼の時より始まる。山鹿の片保田村がその在所という。平山村を在所とするのが平山氏である。平山氏は菊池氏の庶流蛇塚九郎宣氏の三男、秀世の時より始まるという。文明13年の万句連

歌に平山遠江守盛世の歌がある。また、永正元年の菊池政経の侍臣名簿、同2年菊池家老臣八四名連署に、平山中務少輔秀直の名がみえる。

相良氏は人吉球磨の相良氏の一族である。頼景の二男宗頼が山鹿郡山井に來りて住し、山井氏を稱した。文明13年の万句連歌に山井勘解由允重續の名がみえる。また宗頼の子頼元、頼重がそれぞれ高橋・内田相良になっていった。

(中村一紀)

鹿本地区



- 1 内村城
- 2 荒平城
- 3 尾平城
- 4 滴水館
- 5 轟の館
- 6 埋原城
- 7 鞍懸山城
- 8 道租城
- 9 田原の城
- 10 木留城
- 11 賀茂城
- 12 木橋城
- 13 津袋城
- 14 上村城
- 15 芋生城
- 16 岩野城

- 17 多久城
- 18 隈部館
- 19 猿返城
- 20 米山城
- 21 阿佐古城
- 22 日渡城
- 23 下永野城
- 24 山ノ井城

- 25 若宮城
- 26 鷹取城
- 27 山内城
- 28 鵠の巣城
- 29 木山城
- 30 岩原城
- 31 岩原の城が鼻
- 32 岩原の「苦竹の尾」

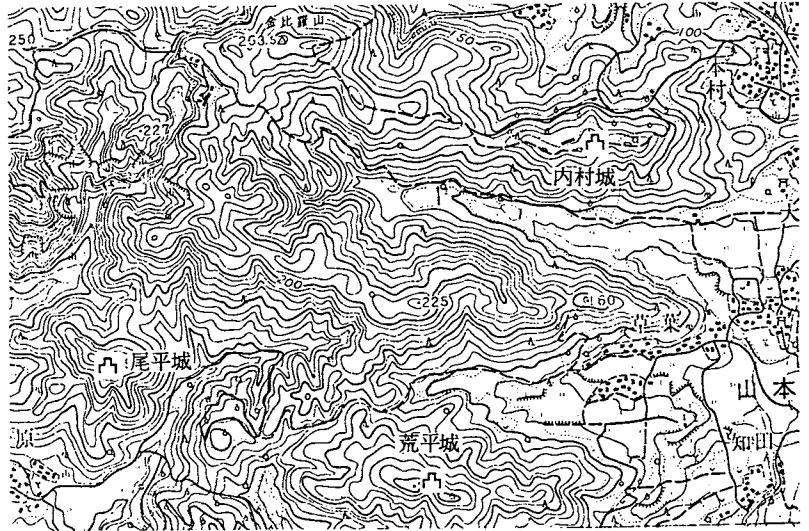
- 33 広城
- 34 霜野城
- 35 米野山城
- 36 湯町城
- 37 熊入城
- 38 下吉田城
- 39 津留山城
- 40 長坂城
- 41 方保田城
- 42 小原城
- 43 坂田城
- 44 久原城
- 45 平山城
- 46 城村城
- 47 東付城・西付城
- 48 小坂城

鹿 本 郡

内村城 (鹿本郡植木町大字内)

『国郡一統志』に城跡名が見える。地元では内空閑氏代々の居城と伝えている。

城跡は内村集落の西方向にあって東西方向に主軸を呈する帯状形の山稜末端部(標高127.5m・北側麓の水田面よりの比高50m)に位置する。山頂部分は「城床」と称される長方形の平坦地(長径90m・短径24m)となっており、さらに鞍部にあたる西側には土塁(高さ1.5m・幅2m)を付随する堀切が観察される。但し、地元の話によれば、当該地には数年前、ブルドーザーがはいり、小規模な開墾が行われている。城跡周辺部は、いずれも急傾斜をなす自然の要害となっ



ているが、北側斜面の上部に井戸跡が確認される。ほとんど埋没の状態であるが、その一部は、岩壁をくり抜いたもので、かなり大規模な工事であった事が窺われる。

城跡の東側麓には、「お花畑」という小名を有する微高地(上面は矩形で、長径68m・短径34m・周辺裾部よりの比高2~3m)があり、この地から登城道が延びている。一方、この地に隣接して、岩照寺跡がある。一面の荒地であるが、今でも泉水跡が残っており、山ぎわには、応永十二年(1405年)の年号が刻まれた宝篋印塔をはじめとして、五輪塔等が数多い。この他、内村集落に、「石丸」「乙丸」「五郎丸」「次郎丸」「徳丸」という小名が残っているが、各「丸」はすべて土壁か石垣で区画されており興味深い。なお、六代目城主、内空閑親貞は天文二年(1533年)の半夏の日に、薩軍勢を迎え打って討死したと伝えられる。そのため、内村の住民は、本来、一般の風習に逆らって半夏の日に「田神祭り」の行事を避けてきた。また、夏に鳴る雷の中でとくに一回だけ大きく響く雷を「内空閑さん」と呼んでいたという。伝世品は、服部利通氏宅に、「親貞が出陣の際に弓の矢を砥いだ」と伝えられる砥石がある。

(注1) 上面は、かつて数十cmの段差によって大きく区画に細分されていたという。

荒平城 (鹿本郡植木町大字山本字南楠原・字京塚)

城主は内空閑家臣の小田部(式部少輔)親尹という。金比羅山の南側末端部(標高206m・東方溜池よりの北高120m)が城跡と推定されるが、地元では単にこの山を「荒平山」と称するだけで城跡という者はいないし、又、城跡に関連するような遺構も観察されない。

ただ、山の麓を尾平城跡に至る山越道が通っており、物見に使用された可能性はある。

尾平城(平原城) (鹿本郡植木町大字平原字城の尾・字大谷・字馬瀬)

内空閑(掇清守)鎮照が天正の頃、在城したという。金比羅山の「城の尾」という字名をもつ西側末端部(標高273m・南西側麓の集落よりの比高210m)に位置しており、山頂周辺は「城の腰」と称される。

以前は、山頂部の平坦地に高さ3~5mの高台(南北20m・東西5m)が観察されたが、昭和46年より始まった採石のために見るも無残に削り取られ、城跡としての面影はまったくない。

城跡の南側麓を山鹿に至る山越道が通っている。

岩野嶽道祖城

(鹿本郡植木町大字岩野字城山)

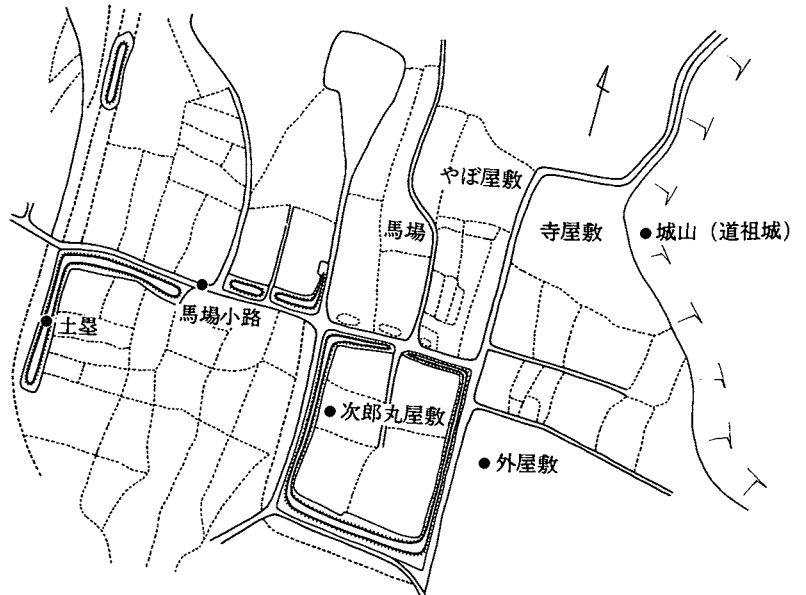
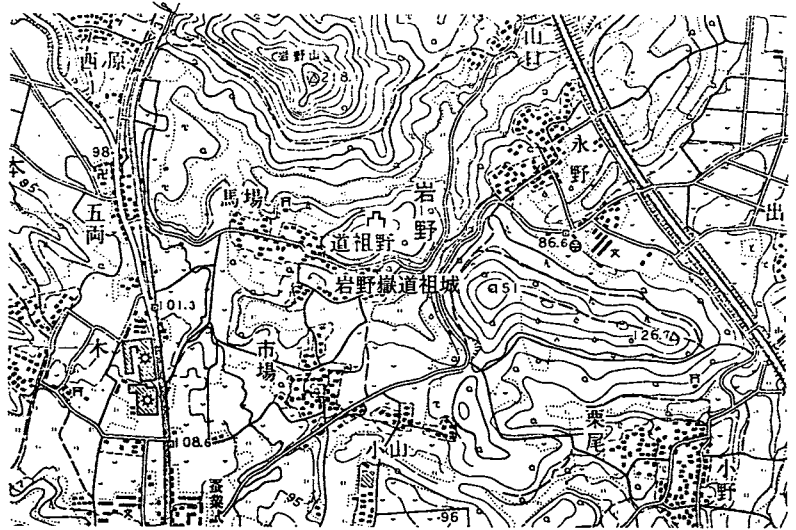
『肥後国誌』によれば、天文年間(1532~1555年)に小野良旨が築城したものである。その後は宗氏代々の居城となっていたらしい。

城跡は岩野山(標高226.9m)の南側麓にあり、「城山」という字名を残す独立山稜(標高135m・北側麓の水田面よりの比高60m)に位置する。山頂部分は楕円形状の平坦地となっており、山稜斜面部には幾段にも重なる同心円状の曲輪が観察される。これらの曲輪の内、上段部には、その縁に土塁を有するものがあり、空堀の存在も考えられる。ところで、この曲輪は北側斜面で最も顕著で、幅2~4mの細長い帯状のものが1.5~2.5mの段差をもって20段近くも重なっている。西端部分には、空堀の存在も確かめられる。一方、東側斜面は比較的ゆるやかな傾斜が長く続き、曲輪の下方部に堀切が存在する。登城道は、南側斜面にあり、土塁を伴う大きな空堀が、そのまま通路となっている。

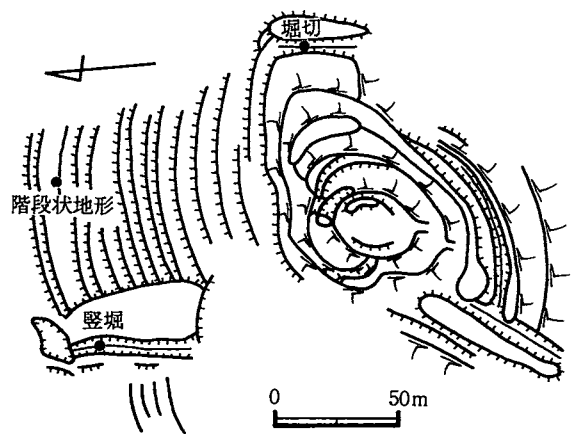
また「城山」の南西側麓に開けた馬場集落の中央部には、高さ2m・幅3mの土塁により正方形に囲まれた箇所があり、地元の人々は「次郎丸屋敷」と称している。ここは現在、民家の屋敷地となっているが、土塁の西側と南側には空堀の一部が残っている。また、馬場の集落を取囲む大規模な土塁と水濠が存在したが、しだいに壊され、今では、ほとんど旧形を止めていない。それでも昭和35年に桑原憲彰技師により作製された集落の見取り図から、城と館と集落が一体になった状態を窺い知る事が出来る。

(注1) 鹿本高校考古学部誌、チブサン21号「岩野豪族屋敷村について」

(注2) 熊本史学42号「中世城郭岩野嶽道祖古城について」大田幸博



岩野嶽道祖城 集落図



岩野嶽道祖城 実測図

たるみす
滴水の館

(鹿本郡植木町大字滴水字東屋敷・字原口・字内山)

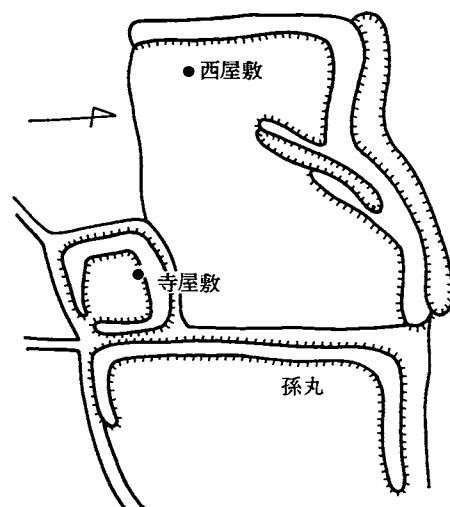
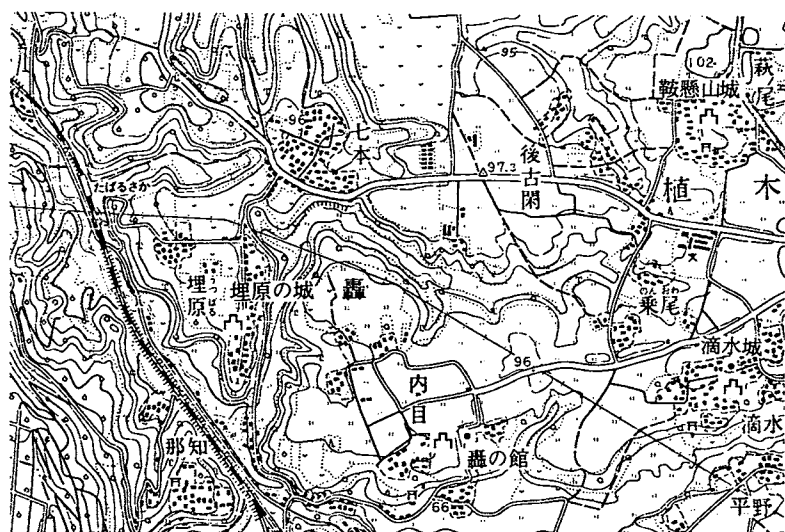
『滴水神社記』や『事蹟通考郷莊沿革』等では、正暦二年(991年)頃、山本荘の南部に滴水荘が一時存在したことが伝えられるが、館跡がこれに関連あるものかどうか定かでない。

丘陵地の一隅に開けた滴水の集落内には「小屋敷」・「孫丸」・「西屋敷」・「寺屋敷」の小名を残す所があり、それぞれに以前は土塁がめぐっていたというが、現在は昭和49年から始まった町道拡張工事のために漸次取り壊されてしまい、現在9箇所にその残欠が見られるにすぎない。^(注1)

なお、「西屋敷」北側の畑地との境には「根返し堀」とも思える溝(幅3m・長さ60m)が走っている。

^(注1) 古財誠也氏の御示唆によれば土塁は明確な版築をなしており、積み土中には、瓦器や石器も混入されていたという。

^(注2) 畑地と民家の境に掘られる溝の俗称である。



滴水の館 見取図

とどろと
轟の館

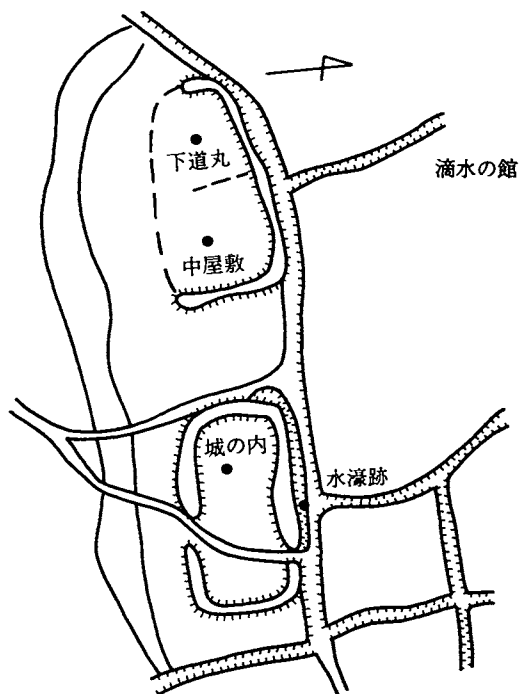
(鹿本郡植木町大字轟字城の内・字・下道丸)^{げどうまる}

『山本郡誌』に「大友義鎮が代官清田里前守之に居子」という記事が見える程度で、文献的にはまったく不詳であるが、「西岸に位置する埋原の城がこの地に移転してきた」という伝承が残っている。

丘陵地の南端部分に開けた内目の集落には、「城の内」・「中屋敷」・「下道丸」の小名が残っているが、それぞれ北側部分の道路沿いに土塁が残っている。

なかでも「城の内」がその中心をなすものと思われ、ここには土塁に伴う水濠跡も一部(幅2.5m・長さ25m)残るとともに、地元民が城跡と称する畑地も観察される。一方、中屋敷の東端には堀道と称される野道(幅3.5m)が南北に走っており、土塁(幅1.5~2m・長さ15m)も残存する。

なお、城跡と称される畑地の北西隅には、板碑が3基建っており、その内の一つは大永二年(1522年)の年号が読める。



轟の館 見取図

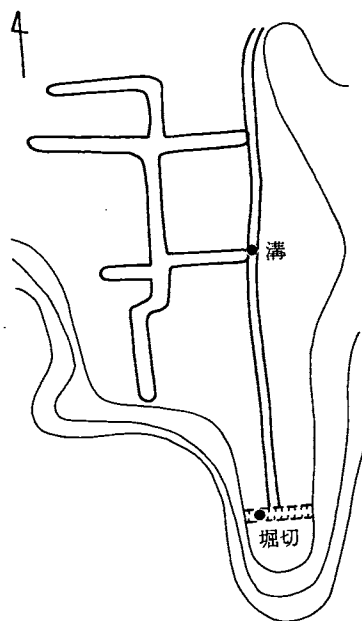
うずぼる

埋原の城 (鹿本郡植木町大字轟字埋原畑・字大松山・字埋原屋敷)

文献的な記録はないが、伝承に城跡の終末期に関する伝承が残っている。

すなわち「火縄銃が伝来し、埋原城の南岸にあたる那知の方からの攻撃が容易になったので、廃城となり、城は轟の地に移った」というものである。

埋原の丘陵地は、北東隅の野首部分を断切る堀切(幅8m長さ42m)をはじめとして畑地を四方に走る堀状の溝が観察され、「殿の屋敷」や「どじん堀」の小名も見られる所から上記の伝承と合わせてこの地が城跡と考えられるのである。



埋原の城 見取図

鞍懸山城 (鹿本郡植木町大字鞍掛字萩尾)

天文二年(1533年)十一月下旬に菊池義武を頼って下向した田原親賢が隈本城主鹿子木親俊と戦い戦況不利になった時、鞍懸山の城に立籠ったという。

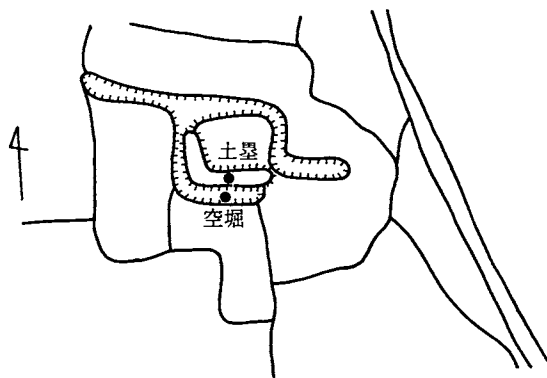
文献では、このように城跡は山稜に存在しているように受けとれるが、実際の所、萩尾の集落内の楕円形状の微高地(周辺よりの比高2m)に位置する館跡である。

ここは、現在後古閑神社と民家の敷地となり、周辺は竹林となっている。

微高地を南側から西側にかけてL字型の空堀(幅3~5.5m長さ19mと33m)が取り巻いており、館跡における唯一の遺構となっている。

[西側の空堀沿いに存在する二つの円形状の大穴(8m・5.8m)は西南の役のざんごう跡ともいう。]

なお、集落内には五輪塔や大永四年(1524年)の年号が読める板碑等が存在するとともに、スラッグが出土する一隅がある。



鞍懸山城 見取図

田原の城

(鹿本郡植木町大字豊岡字上ノ原)

城主不明。城跡に関する文献的記録はない。

田原坂公園より北方に突き出した丘陵地先端部の果樹園(標高98m・田原の集落よりの比高4m)一帯に城山(じょうやま)の小名が残り、城跡と考えられるが地元では寺跡と見る向きもある。

「城山」には2箇所に独立区画がある他、堀切らしき窪地(幅19m・長さ33m)も観察されるが、いずれも踏査のみでは城跡に結びつく遺構とは判断し難い。

結局のところ、「城山」をはじめとして「西



の門」・「高見」・「殿の屋敷」等の小名が城跡の存在をうかがわせているにすぎない。

なお、「城山」南側一隅には五輪塔・板碑が存在している。

(注1) 建治三年(1277年)田原城主のために建立されたという銘がある。

(注2) 天正(元)年の年号が読み、法印堂殿・逆修三月下旬の銘がある。

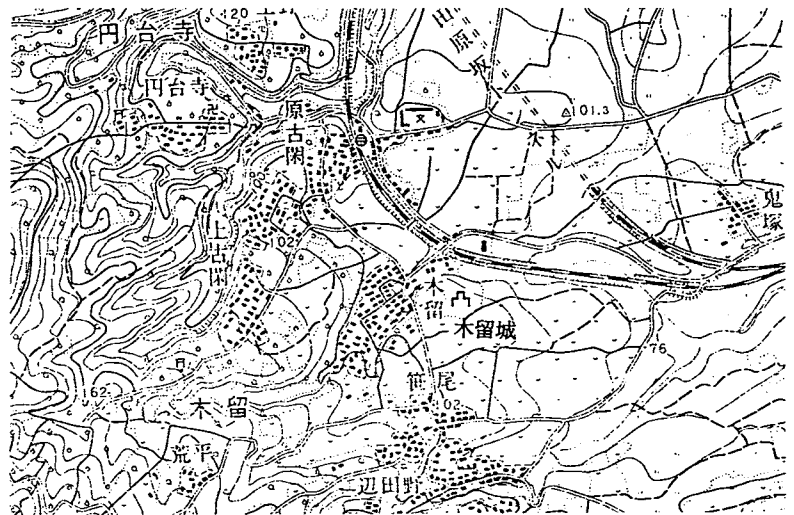
木留城

(鹿本郡植木町大字木留字北中原)

城主不分明。一説に円台寺繁栄の頃、僧徒等が設けた要害というが定かでない。

城跡の所在地は不明であるが、地形的に見て木留の集落東端に位置する竹林を城跡と考える人もいる。

しかし、ここには五輪塔や一字一石の塔が存在するだけで(2条の溝は根返し堀である)城跡に関連あるような遺構は観察されない。



賀茂城(加茂城)

(鹿本郡植木町大字豊田字上の原)

城主は菊池氏家臣の角田(掃部亮藤原)益吉で、その子孫は内空閑氏に属したが天文年間に没落したという。

本村集落の背後にあって西から東方向へ突き出した丘陵末端部(標高68.2m・本村集落よりの比高約18m)に位置しており「城山」と称されるが、現在は団地となり城跡の主なる部分は破壊されている。^(注1)以前は三区画から成る平坦地であったという。

しかし、西側野首部分の北側斜面から集落に至る山道の所々には空堀跡を思わせるような凹地箇所が観察されるとともに、集落内には「門の内」「中屋敷」「馬場の下」などの城跡に関連あろうと思われる小名や、六地藏、五輪塔雪の堂、板碑等が残っており、ある程度城跡のおもかげをしのぶことができる。^(注2)^(注3)

なお、城主の子孫とされる津野田家には、悲話を伝える12枚の「お菊の皿」が保管されている。^(注4)^(注5)

(注1) 昭和50年3月の新聞広告に「城山団地発売」の記事が載り遺跡破壊の事実がわかった。県文化課では緊急に調査員が現地に赴き事後処理にあたった。

(注2) 大永二年(1522年)の仏像と永正十二年(1515年)口子天10年1日の年号が記された板碑が安置されている。

(注3) 集落内の四つ角南西隅にあり永正十一年(1514年)二月吉日栗原冬吉敬日の銘がある(城主の墓ともいう)

(注4) 西門寺記によると加茂城主時代、女中お菊が一枚の皿を不注意から割ってしまった。命より大事な品と聞かされていたので責任を感じて井戸に身を投じたという。

(注5) 有田焼で扇形の皿、模様は個々に異なっている。



おおはし
大橋城

(鹿本郡植木町大字田底字本村・字荒牧)

『古城考』に文治二年(1186年)三月四日に源頼朝が差し向けた梶原景時が、平氏一族とされる大橋氏の城を攻めたという記事が見える。戦国末期には田中祐實が在城したという。

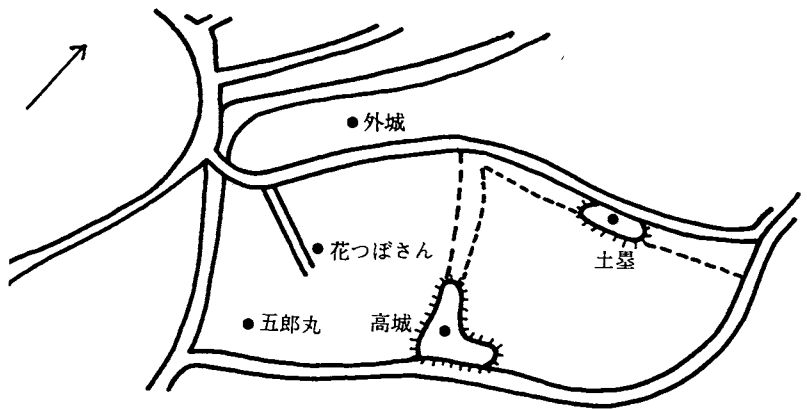
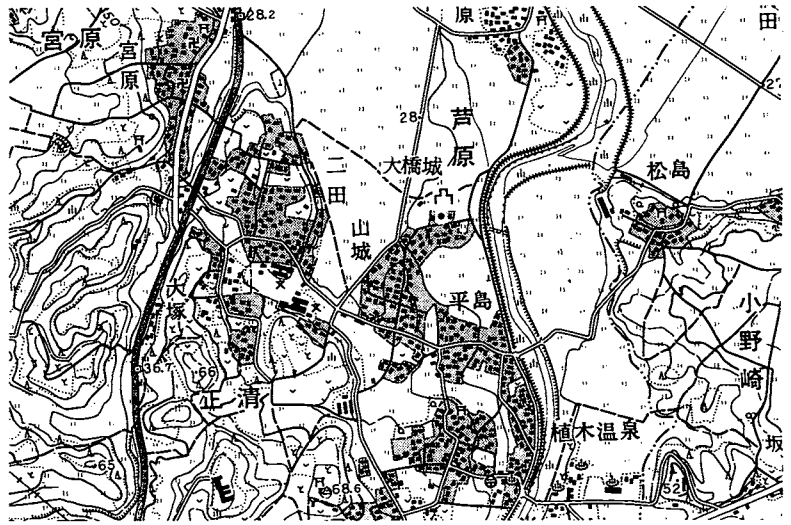
合志川の西岸にあって水田地帯の一隅に位置する本村と荒牧の集落内に「五郎丸」と「外城」のとじょう小名を残す所があり、ここが城跡の中心地とされる。

今も「五郎丸」を中心に集落内には、水濠と土塁の痕跡が観察され、城跡としてのおもかげを伝えている。

なお、「五郎丸」には2基の板碑と、南西隅の土塁上に五輪塔の残欠がある。

(注1) うち1基は天文三年(1534年)十月二十二日の年号が読める。

(注2) 土塁を「高城」、五輪塔を「花つぼさん」と称する。



大橋城 見取図

つぶくろ
津袋城

(鹿本郡鹿本町大字津袋字広江)

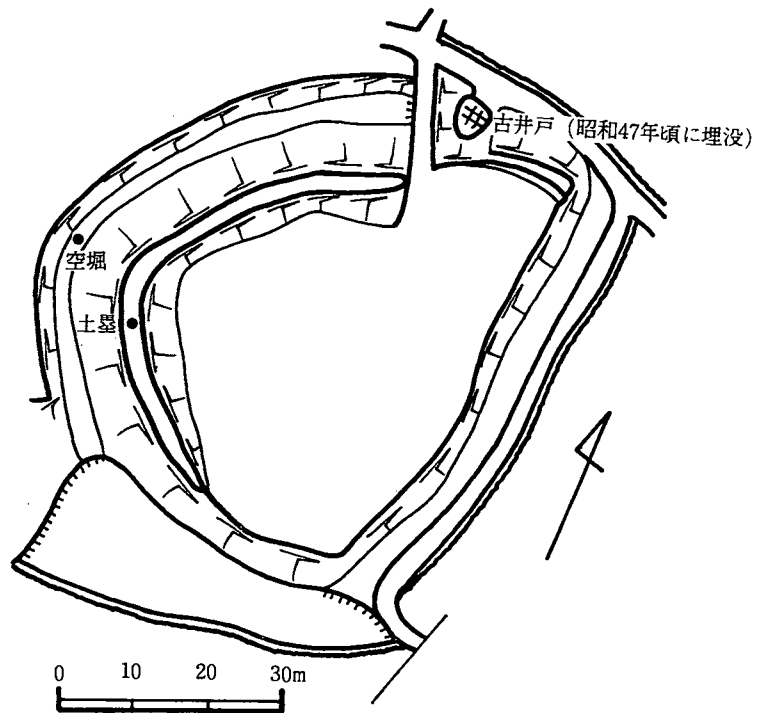
城主は菊池家臣、内田時貞という。

城跡は広江地内の「城山」と称される独立小丘陵(周辺水田面よりの比高約2.5~3m)に位置している。「城山」の上面は東西40m・南北50mの楕円形をなす平坦地となっており、この縁には、北から西にかけて高さ3m前後の土塁が取り巻いている。さらに城山裾部には、この土塁と平行して走る空堀も観察される。空堀には土橋部分も残っており、現在埋没しているが井戸跡も確認できる。

なお城跡周辺の水田地帯には「屋敷田」「城下」等の小名を残す一隅があり、とくに「屋敷田」からは土師質土器片がかなり多く出土するという。

城跡の東側には内田川が流れる。

(注1) 古沢国雄氏の御示唆による。



津袋城 略測図



御宇田・上村の城

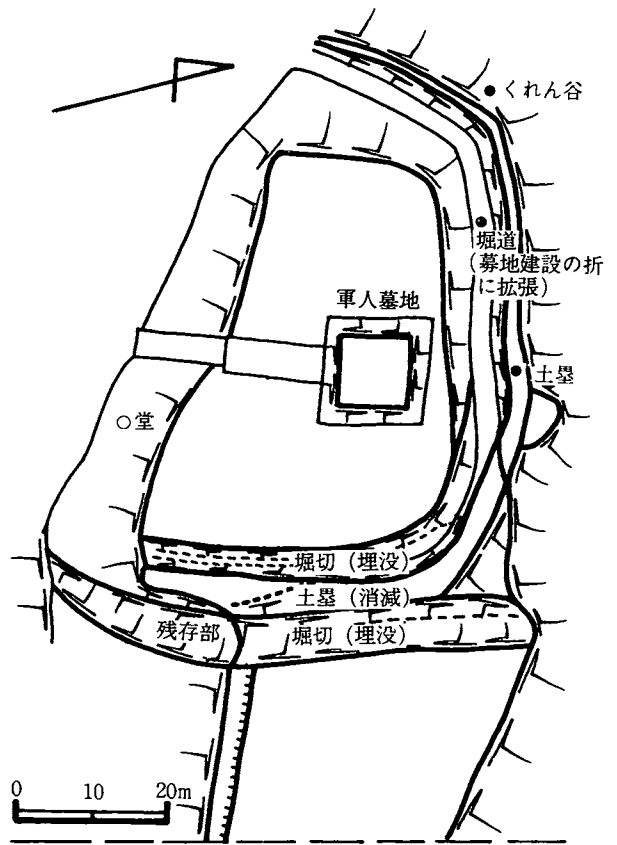
(鹿本郡鹿本町大字御宇田字上村)

舌状形をなす上村地内の丘陵地末端部(標高60m・南側麓の水田面よりの比高20m)を地元の人は城跡と伝える。当該地は、現在、軍人墓地となっており旧地形の大部分は失われているが、南東側の野首部分に堀切の残存部(幅7m・長さ25m)を認める事が出来る。さらに丘陵地の北縁部と東縁部を走る凹道についても、かつての空堀を拡張したものと地元の人はいふ。この空堀は野首部分で折れ曲り、最終的には丘陵地を断切っていたらしい。したがって野首部分には、二重の堀切が存在していた事になる。城跡内部は、若干の段差を持っていくつかの平坦地に分かれていたらしい。

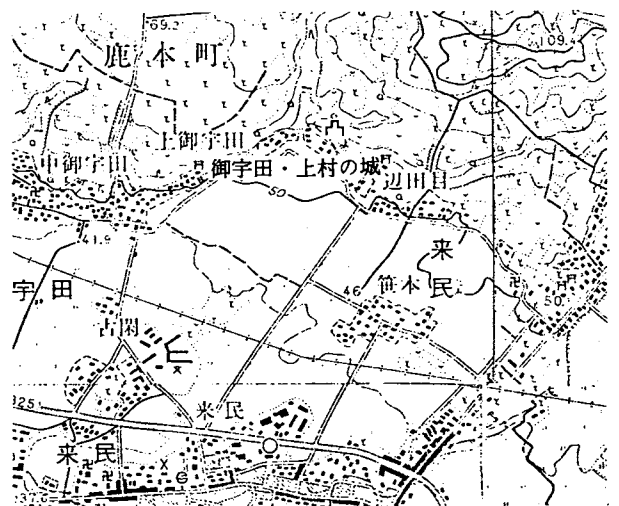
城跡の北西方向に開けた「陣内」の集落には、中正寺跡(御宇田氏の菩提寺という)や、「八郎丸」という小名を称する一隅がある。この他、集落北側の丘陵地には、「陳ノ上」「乙丸」の字名も残っている。

(注1) 同地内には、(伝)御宇田氏の墓(宝篋印塔と五輪塔の組み合わせ)や、宝篋印塔を線刻した凝灰岩の石柱がある。さらに周囲には、寛正七年(1466年)の年号を有する板碑が残っている。

(注2) 御宇田氏の重臣八郎丸の館跡と伝わっている。なお、これに関連して来民字上町には、同じく星丸の館跡があるという。



上村の城(御宇田城)略測図



御宇田城(参考地) (鹿本郡鹿本町大字御宇田字八万田)

『古城考』によれば、菊池家臣の御宇田氏代々の居城という。

城跡の所在地については、同書に「今城跡に廟(早鷹天神・田楽天神)あり」と記されており、その後の文献について

は、総てこれに習っているようである。ちなみに早鷹と田楽の天神廟は水田中に並んで建っている事から、記事を信ずれば御宇田城跡は平城の類に属する事になる。しかし、当該地は圃場整備が終了しているので、遺構の観察等はまったく不可能である。

なお、古老によれば「旧地形には何の遺構も認められなかった」というし、城跡関連地名や伝承等も残っていない所から、これ以上、推論の余地はない。

芋生城 (鹿本郡鹿北町大字芋生字迫浦・松ヶ浦)

迎春親行(坂本城主)の一族という芋生親延が在城していたらしい。『古城考』によれば、親延は芋生12町を領したと記されている。

現在、芋生地区には字・「迫浦」と字・「松ヶ浦」の2箇所にそれぞれ、「城床」と「城の尾」の小名を残す所があり、いずれも城跡の形態を有している。両者は距離的にも隣接しており、鹿北町から三加和町へ至る山越道を北側と南側から挟み込む様な形になっている。

迫浦の城床

迫浦の地内に北から延びてきた尾根があり、その末端部分の多少高くなった箇所(標高90m・南側麓の集落よりの比高約40m)に「城床」の小名が残っている。

城床の上面は、長径50m・短径24mの楕円形をした平坦地(茶畑)になっており、これより3~3.5m下った所には、幅8mの曲輪が同心円状に城床を取り巻いている。

曲輪の南側部分については土塁(長さ25m・底幅5m)を伴う堀切(底幅6m・長さ30m)の形状を示す。なお、曲輪北側部分にも土塁らしき土盛が存在している。

城跡の南側麓には薬師寺堂跡があり、多宝塔や五輪塔の残欠が見られる。

松ヶ浦の城の尾

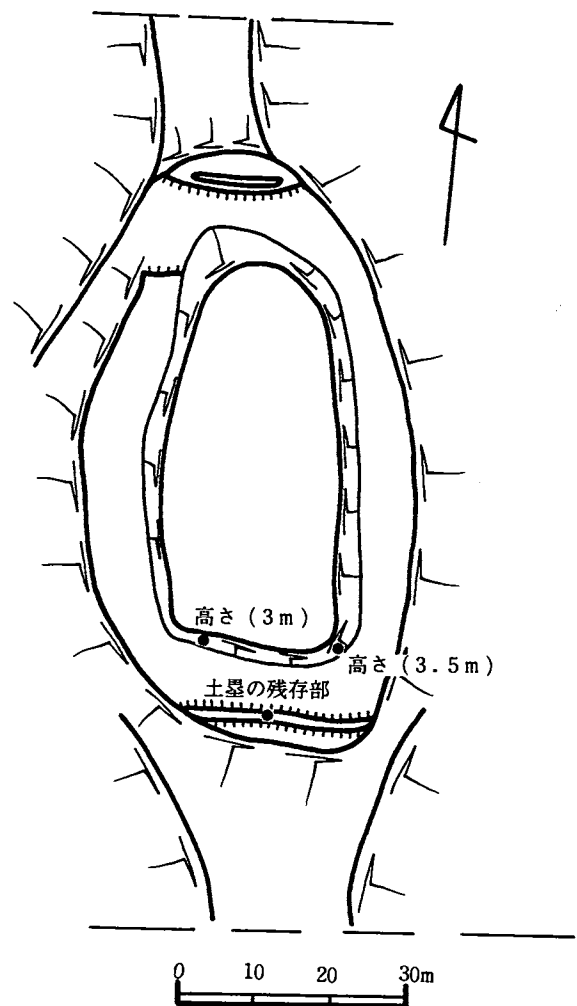
城床の南西岸に、「城の尾」の小名を残す尾根の末端部(標高100m・北側麓の道路面よりの比高約40m)がある。

「城の尾」の上面は長径37m・短径16mの楕円形をした平坦地となっており、これより5.5m下った所には、幅7~9mの曲輪が同心円状に「城の尾」を取り巻いている。

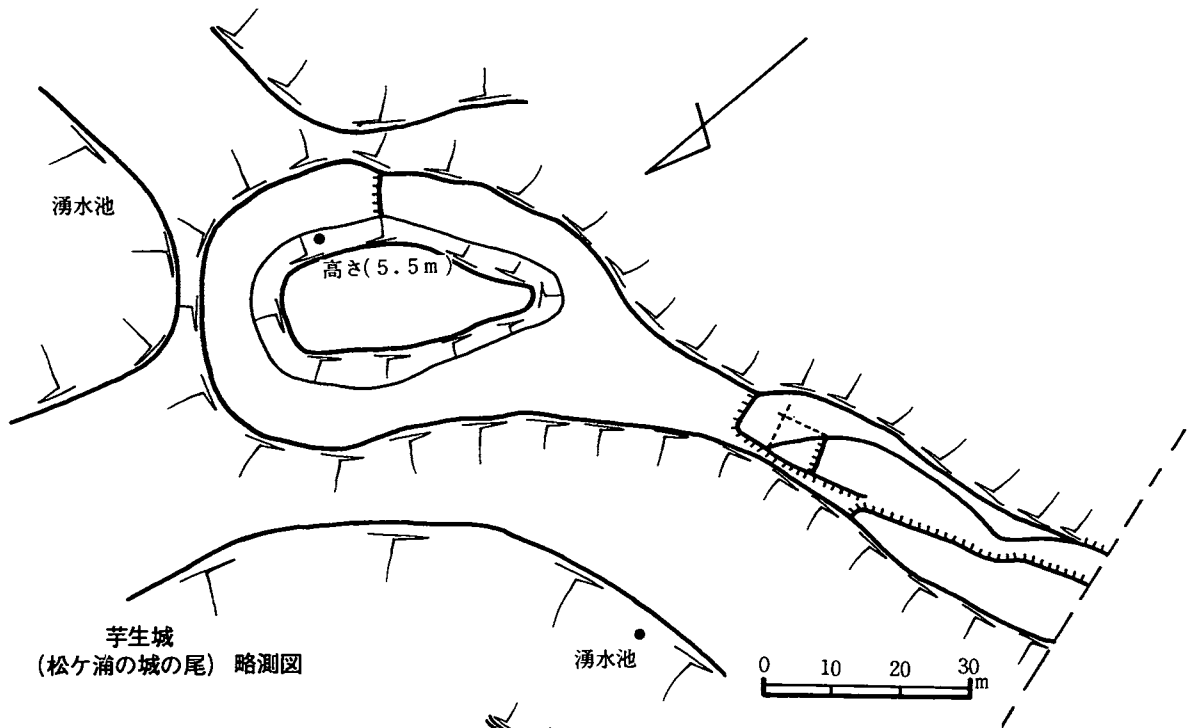
南西側の鞍部には幅35mの堀切状の窪地も観察される。

なお、鞍部背後の山稜には带状の広い平坦地(標高110m)があり「城原」の小名も残っているが、城跡に関連あるような遺構は観察されない。

(注1) 南西側の対岸には深さ1mの切り込みがある。



芋生城(迫浦の城床) 略測図



いわの しろ
岩野城 (四丁の城)

(鹿本郡鹿北町大字四丁字東前)

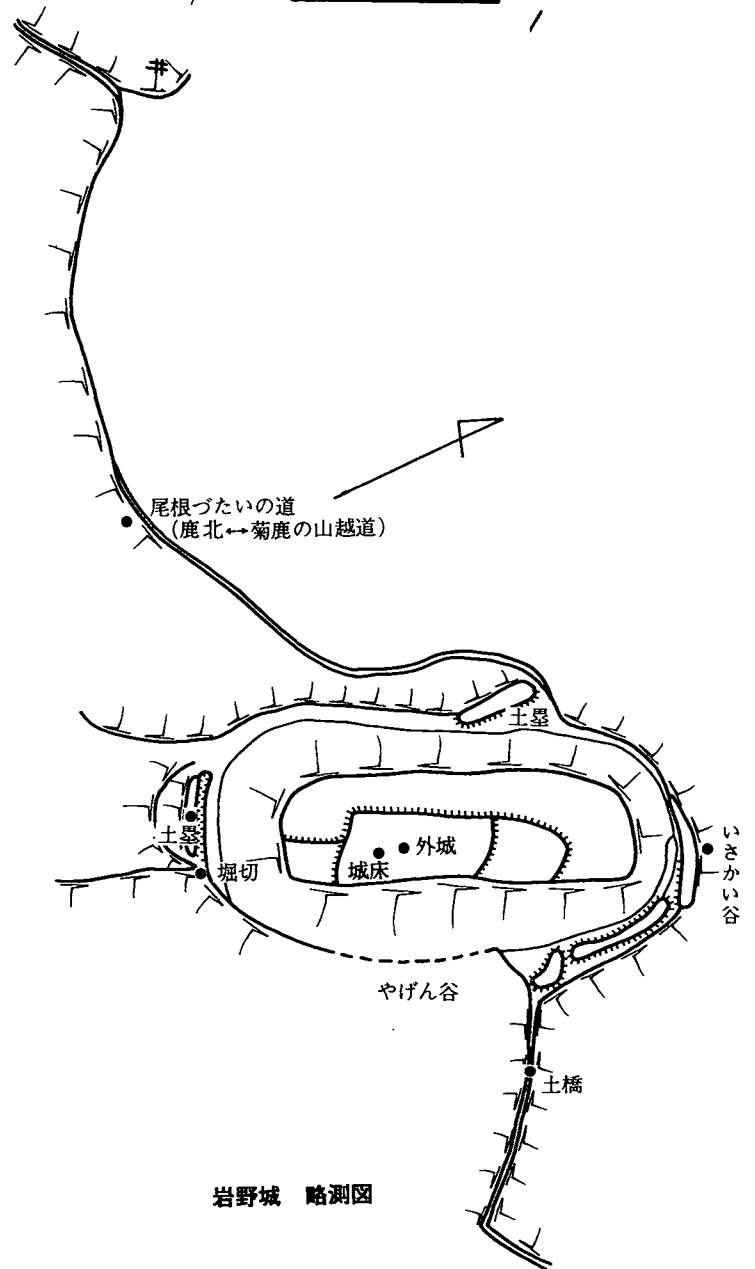
城主不明。四丁地区の東の前に「城床」の小名を残す山稜の一隅(標高187m・西側麓の集落よりの比高約105m)があり、城跡ではないかと考えられる。

「城床」は長方形をした平坦地(北東に主軸を呈し、長径67m・短径20m)となっており、いずれも数十cmの段差をもって大きく四区画に分かれる。また、7~8m下った所には幅1.5~5mの曲輪が東側の一部を除く三方を同心円状に取り巻いているが、この曲輪には4箇所に土塁の残存部がある。

「城床」の南側山腹は比較的ゆるやかな傾斜をもつ所から、ここには堀切(長さ17m・堀幅2m)がはいり、さらに土塁(長さ10m・幅2~3m)も付随する。

ところで、「城床」は鹿北町から菊鹿町へ至る山越道の途中に位置しており、「城床」の曲輪そのものが、山越道の一部をなす。曲輪への出入り口付近の道は、いずれも幅1m足らずの土橋的なものに加工されており興味深い。

城跡の西側麓に位置する「だんと山(高さ5~6mの微高地)」には塔石群が存在する。東願寺関係の墓とされ、宝塔・宝篋印塔・五輪塔が30数基並んでいる。



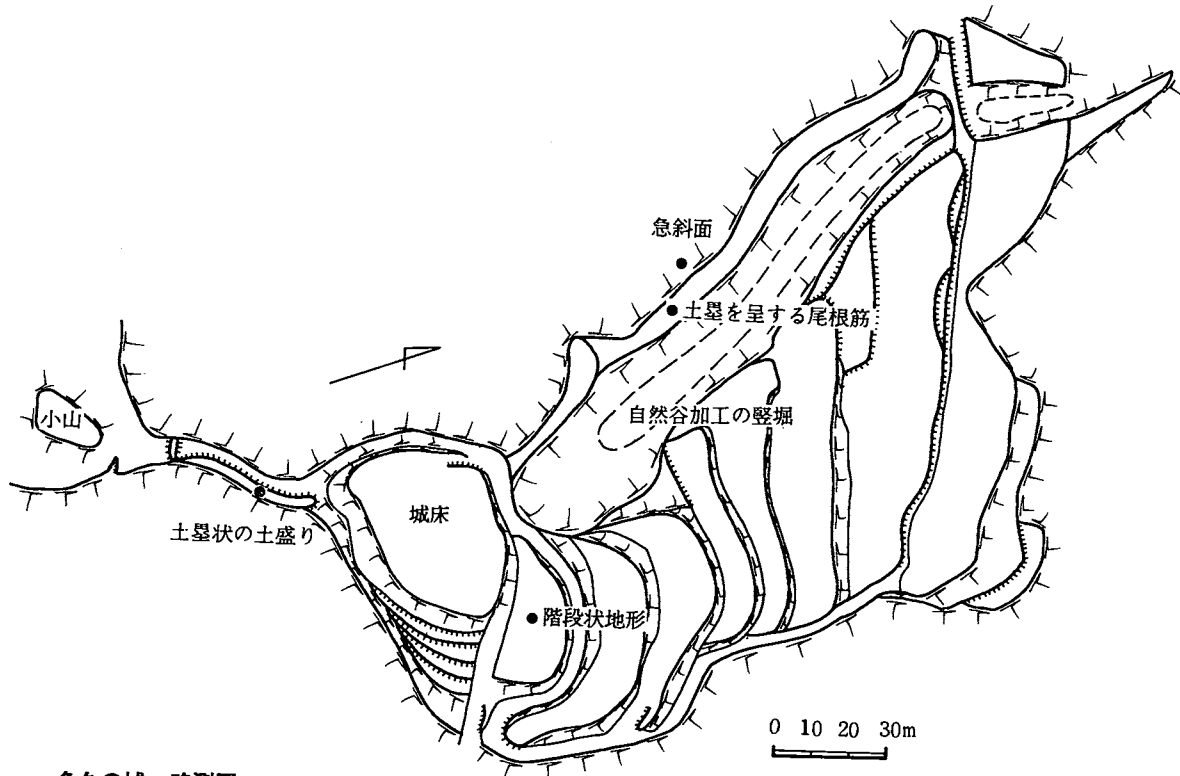
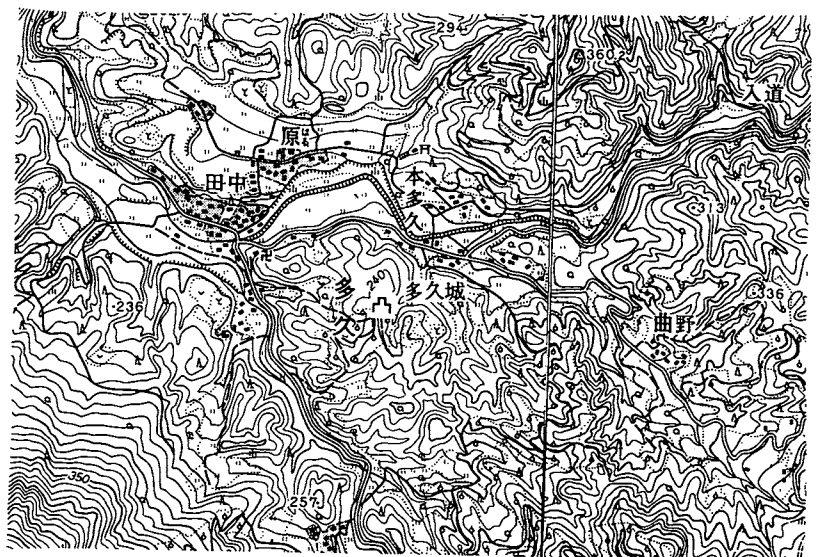
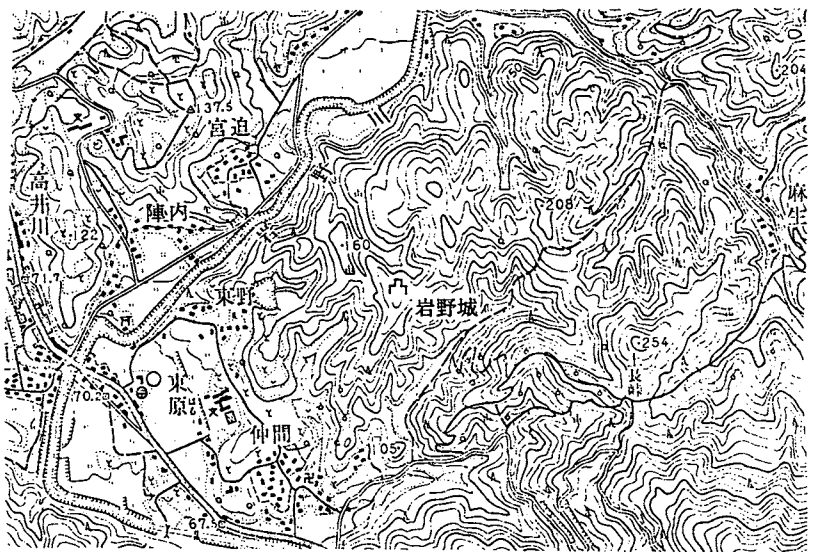
岩野城 略測図

たく
多久の城（参考地）

（鹿本郡鹿北町大字多久字藤木・城尾）

多久地区に、「城尾」という字名を残す山稜末端部があり、城跡の存在が考えられる。しかし、当該地には城跡に関連あると思われるような遺構の存在はなく、地元ではむしろ、「城尾」の北西側に谷一つへだてて位置する、「藤木」地内の山稜末端部（標高234m・北側麓の水田よりの比高60m）を城跡と見なす傾向がある。

すなわち、山頂部分は楕円形状の平坦地（東西方向に主軸を呈し、長径50m・短径32m）となっており、さらに北側に向って下る斜面には、幾段にも重なる階段状地形が観察される。さらに西側の斜面には、まさに自然の竖堀（幅20m）となる迫地が北西方向に走っており、南西側の鞍部についても、土塁状の土盛り（長さ40m・幅3m・高さ0.6～0.8m）を見る事が出来る。以上の地形に加えて山稜の西側麓には荒平峠を越えて、菊鹿町に至る山越道が走る事から、この「藤木」の山に何らかの城跡が存在したのではないかとの推論が生まれてくるのである。



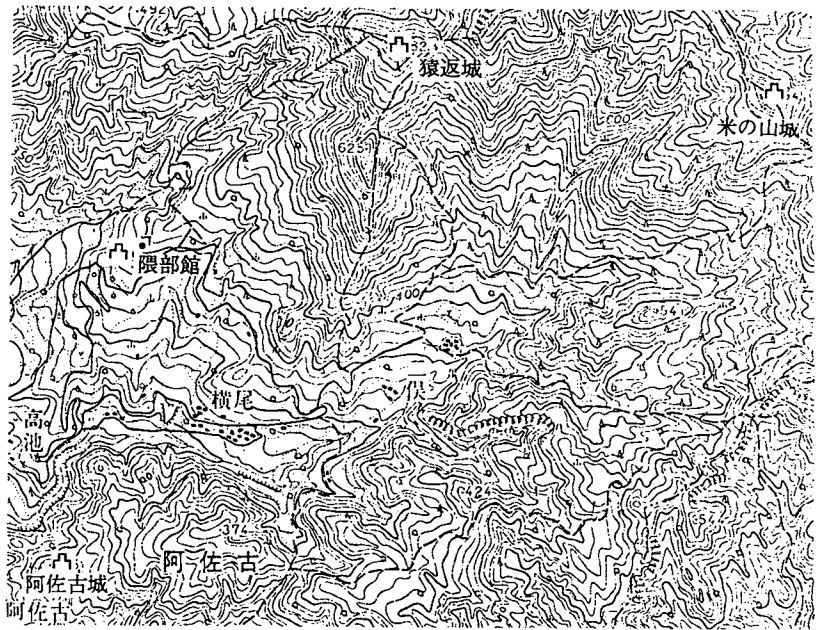
多久の城 略測図

隈部館

(鹿本郡菊鹿町大字上永野)

猿返城主であった隈部氏の館跡と伝わる。『肥後国誌』では、猿返城跡の説明の中に「親永平日ノ所居ハ城外ニアリ館ト云府ヨリ行程八里也」という記述がある。

館跡は、標高340.1mを示す山腹中の平坦部に位置する。当該地は昔から上永野集落の共有地であり、この館跡に登ることを地元の人は「館上り」と称してきた。遺構の保存は良好で、昭和49年3月に県指定史跡となったが、指定を機に菊鹿町では昭和49年度から県費補助を受け、年次計画で館内の環境整備に着手した。町ではこの一環として県の指導を得て過去三回に亘って発掘調査を実施している。



南側の開口部分から館内に足を踏み入ると、二重の土塁に囲まれた方形の平坦地(25m×30m)があり、「馬屋跡」という伝承がある。登城道は、この「馬屋跡」の中央を通り、「内堀」と称される南側部分の堀切を横切る。この箇所は元来、土橋となっており、以前は七段の石段が設けられていたが、道路整備のため消滅した。

土橋を経て館内にはいると、正面に野面積みの石垣が認められる。通路はここで右に折れ、再び石垣によって行手をさえぎられ、北へ折れ曲る。完全なる「柵型」形式である。ここで七段の石段を登りつめると建物が存在した平坦地となる。

館の東西両側斜面は、「削り落し」によって急峻な土手となっている。また山稜続きとなる北側部分は、南側部分と同様に堀切が存在する。

敷地内には、当時の家屋数棟分の礎石群がほぼ完全な姿で残っている。正確な棟数は不明であるが、泉水を持つ庭園を囲んで対面所及び茶室と推定される二棟分の礎石が、現在までに確認されている。内、第一棟家屋礎石群については昭和49年11月に実測が終了している。

この家屋は、桁行七間、梁行五間の、平の部分が南面するやや長方形の家屋である。桁行の全長は両端の礎石の芯から芯まで十三、七二を数える。柱間が七間あるので、桁行の一間の長さは196cmとなる。梁行の全長は9.08cmで五間となっている。一間の長さは、桁行と同様195cmを数えるが両端の間は160cmとなり、やや狭くなっている。共に柱の芯から芯までの長さである。屋根は、瓦破片等の出土が一片も見られないので茅葺と思われる。

昭和50年3月の第二次環境整備の際には、第一棟北側の裏山の斜面から、室町期の作庭と推定される庭園が、ほぼ完全な状態で検出された。

庭園は、北側の山の緩斜面とその裾部の平地を利用して構築されており、簡素で小じんまりとまとまった庭園である。山の斜面に石を配し、深山の溪谷を2箇所形造り、平地部には泉水を掘り、あたかもこの溪谷から流れ出た奔流が平地部に出て淀みをつくった情景をこの泉水で表現している。当初、水の乏しい場所であり、泉水にあたる窪地部分の底が浅く、枯山水ではないかと思われたが、調査が進むにつれて池底部に土砂の沈澱が見られ、また水を導入する水路が発見されるに及び、水を湛えた心字形の泉水であったことがわかった。

出土遺物は極めて少なく、初年度に土師質土器二個体分、二年次に泉水底部より土師質土器破片が二・三片出土した。三次でも影青青白磁、陶器片、鉄製の角釘等が出土したにすぎない。この他に既出土品としては鳥を線刻した石が残っている。この鳥は背丈が13.5cm、横が12.5cmで沈線で描かれている。単純な線刻で、鳥が胸をはり、嘴を上に見あげた姿を写している。

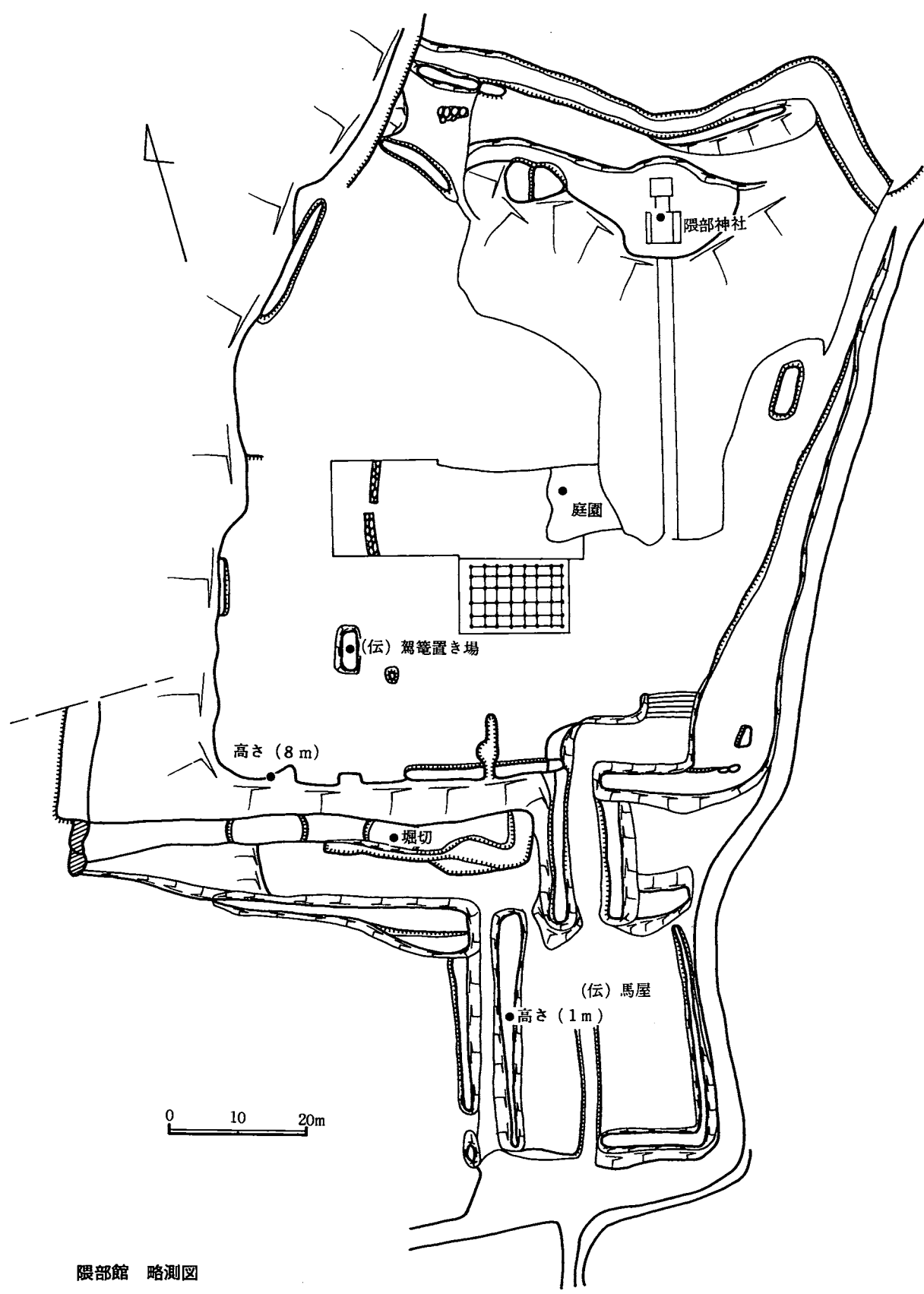
なお、館跡関連遺構として、館裏手に横たわる深い谷の奥に「隈部さんの井戸」と称される湧水池や、館の北東部にも約200m離れて湧水が見られる。館の水源をなしたのものであろう。さらに、通称「冷水谷」には「隈部さんの刀鍛冶跡」と伝えられる鉄滓が多量に散在する所がある。

上永野の集落には「構口」・「造音寺」等の地名の他に、隈部氏の菩提所と伝わる清譚寺がある。

(注1)

(注2)

- (注1) 造音寺は隈部氏の創建と伝えられる寺院跡である。
 (注2) 寺院の裏手墓地には、隈部一族の五輪、宝篋印塔が数多く残っている。



隈部館 略測図

さるがえし

猿返城（永野城）

（鹿本郡菊鹿町大字上永野）

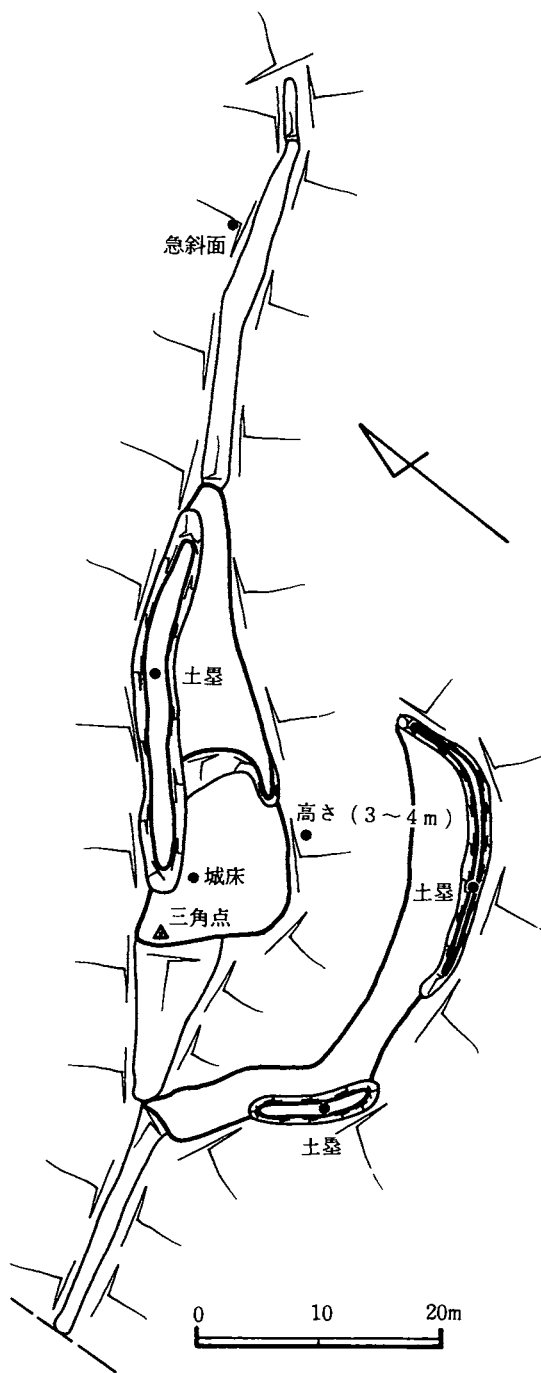
ここでは猿返城の中で、砦部分にあたると思われる通称「城床」について触れてみたい。

「城床」は、「隈部館」の北東方向に連なる山稜の一峰（標高682.44m・館よりの比高342m）に対する呼称である。かなり険しい山で、登城道も藪に被われすでに消滅している。『古城考』にも、城跡は「険阻の地也」という記事が見える。地元の人も「登頂は御免だ。危険である」という程である。

城跡に関連あると思われる遺構は、山頂部分に観察される。すなわち、山頂部分は南北方向に主軸を呈する長さ170m程の尾根となっており、三角点を有する北側部分に方形形状をなす平坦地（長径25m・短径17m）が存在する。平坦地の東縁部には、尾根を走る長さ60m程の土塁（高さ1.4m）が一部食い込んでおり、「城床」における最も顕著な遺構となる。この他、山頂部分より西側へ10数m下った所に幅8m程の曲輪状の遺構が観察される。これは、「城床」の北西部分を取り巻くように巡っており、その縁には土塁（高さ0.5～1m）も付随する事から、同地内に空堀の存在が推察出来る。遺構はこの範囲に限られるようである。

（注1）南端部に、見張り台に格好な巨石が横たわっている。

（注2）完全な平坦地ではなく、尾根の先端部を大まかに削り取った感がある。



猿返城 略測図

こめやま
米山城 (鹿本郡菊鹿町(国有林地内))

宇野親徳(隈部氏の祖)が築城したものという。

後には隈部親廣が米の山鶴巢に館を築いたと伝わる。

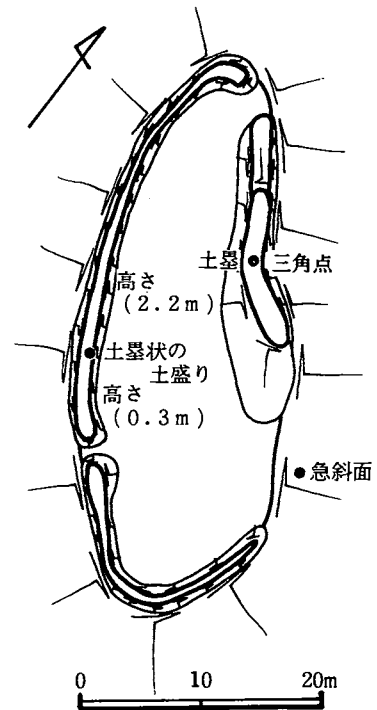
城跡は菊鹿町と菊池市の境界線が走る山稜地帯の峰線上(標高671.6m・二俣の集落よりの比高約340m)に位置する。山頂部分は長円形の平坦地(北西に主軸を呈し、長径45m・短径18m)となっており、杉の植林がなされている。

顕著な遺構としては平坦地の東縁を走る高さ2.2mの土塁で、長さ25m・幅5.5mの規模を示す。この他、平坦地には東側を除く三方を高さ0.3m程の土盛り(幅2m)がめぐっているのがわかる。しかし、これは植林の際の排土を盛った可能性もあり、城跡に結びつくものかどうかの判断は下し難い。

遺構は山頂部のみに限られる。

山頂部からは菊鹿町から福岡県に至る山越道を一望する事ができる。

なお、伝承にいう米の山鶴巢は所在地不明である。



米山城 略測図

あさご
阿佐古城 (鹿本郡菊鹿町大字阿佐古)

阿佐古集落の北東側に横たわる山稜末端部(標高266m・集落よりの比高約80m)を地元では城跡と伝える。城跡名を明記した文献はなく城主についても不明であるが、『事蹟通考系図巻十』隈部系図の「武貞」の項に「領菊池郡阿佐古村因而改家號為阿佐古明應二年(1493年)閏四月修合志郡福本八幡宮^{上梁銘}文明十三年(1481年)八月萬句連歌興行時月浦題」という記事が見える事から文明、明應頃の城主については阿佐古氏の可能性がある。『隈部記』には「弘治二年(1557年)阿佐古氏絶ゆ」と記されている事から廃城期もその頃であろう。

山頂部分は南西方向に主軸を呈する帯状形の平坦地(500㎡)となっており、これより数m下った北東側の鞍部寄りにも800㎡程の平坦地が存在する。城跡周辺は鞍部側を除く三方がいずれも急傾斜をなすので、登城道は集落より北東側へ谷づたいに迂回して、「やかたぐち(館口)」という小名を残す三差路から西側へ伸びる尾根筋を通る事になる。かなりの迂回路である。

集落内には、乙皇神社があり区民の信仰が厚い。社記(永和三年・天授三年)によれば、「やかたぐち」手前の宮本の地には、雄床明神(乙子大明神)という宮があったという。

なお、阿佐古集落より南々西方向約900mには、「土井畑」という字名を残す集落がある。

ひわたし
日渡城 (鹿本郡菊鹿町大字下内田字日渡)

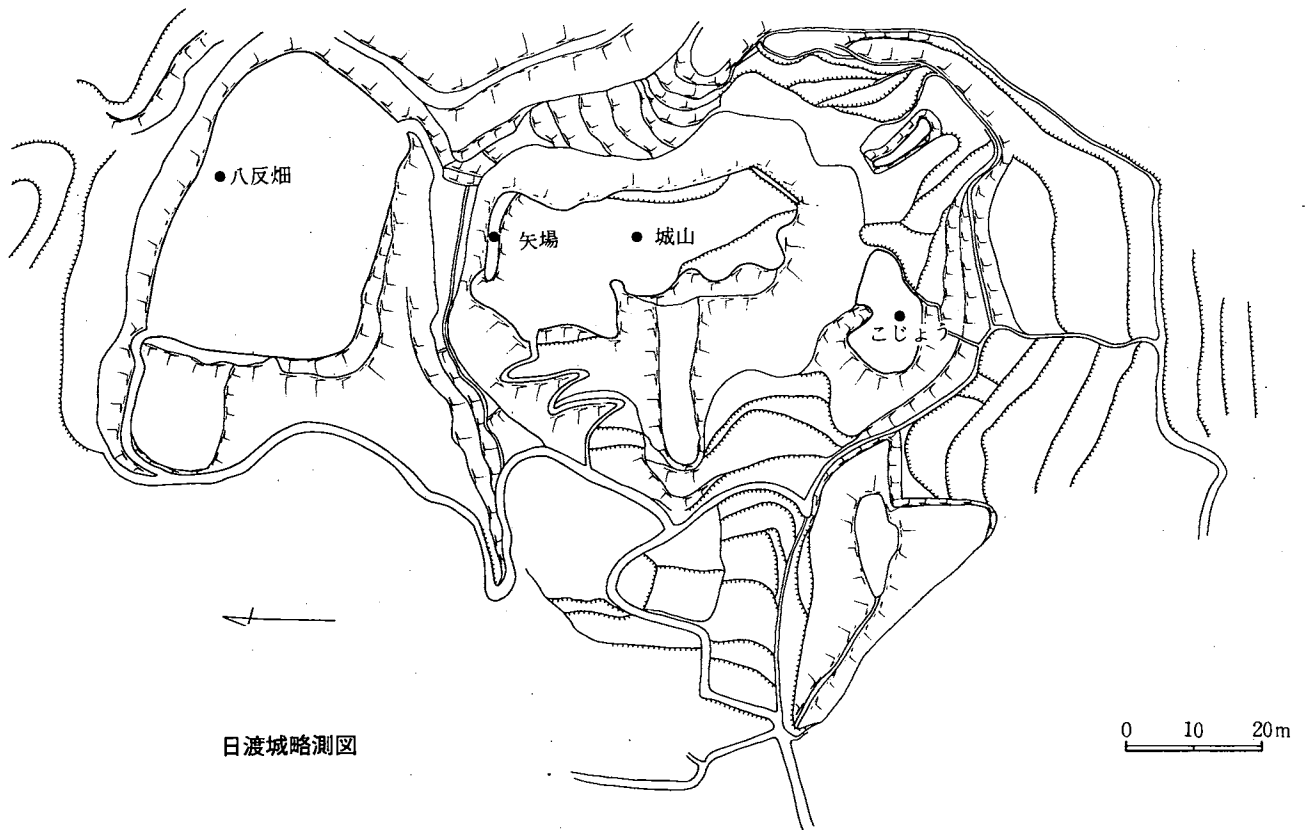
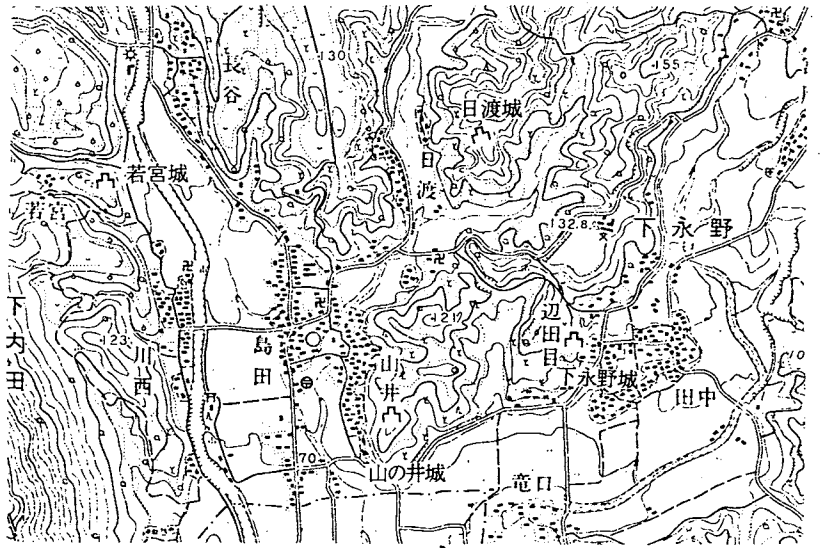
『古城考』によれば隈部親永の家臣、富田氏續が城代を勤めたという。

城跡は、日渡地区にあつて「城山」と呼称される丘陵の末梢部(標高142.8m・南側麓の水田面よりの比高50m)に位置する。丘陵の背面は約4.5a程の平坦地となっているが現在は一面の荒地である。この地からは焼米が出土するという。

城跡としての顕著な遺構は野首にあたる北側部分に「矢場」と称される大きな土塁(長さ25m・高さ5m・幅5m)が存在する他、突端部の南東側にも1条の土塁(長さ20m・高さ1.5m・幅1m)が観察される。周辺の崖面はいずれも急傾斜をなしており、北面に通路を有するのみである。ところで、通路際の崖面に刻まれた階段状地形の一隅には、半壊しながらも井戸跡が確められる。この井戸には「落城の時、投げ込まれた金の茶釜が埋まっている」という伝承がある。

この他、「城山」突端部の土塁下15mの所に約1aの平坦地があり、この地には「こじょう」という名が残っている。「城山」と「こじょう」の境には堀切が走るようである。さらに、野首側には、幅40m・深さ15mの迫地をはさんで、地元の人が「八反畑」と称する7.5a程の畑地が存在するが、ここにも、城跡に関連するものとして、「土手の口」という土塁（長さ25m・高さ5m・幅3m）が観察される。さらにまた、この「八反畑」の北側は迫地をはさんで丘陵続きとなるため、迫地部分には、人為的な堀切（長さ50m・幅15～19m）の重複もある。したがって、城跡の範囲は、「城山」のみならず、「こじょう」、「八反畑」を含む範囲にまで拡大するものと考えられる。城跡の周辺には「大手」「搦」という地名も残っている。

なお、『古城考』に「里谷下長野城と云」と記されているが、下永（長）野城は、城跡より南東方向250mの所に位置する別の城である。



しもながの
下永野城（鹿本郡菊鹿町大字下永野）

『山鹿郡誌』草稿に「下城、北里某小国より落ちて居住せし跡」という記事が見えるが、真偽の程は定かではなく、地元では長野氏（隈部家臣の宇野氏一族という）代々の居城と見る向きもある。

(注1)

城跡は辺田目地区内にあつて「城の畑」という小名を残す丘陵地末梢部（標高90m・東側裾部の集落よりの比高10m内

外)に位置する。丘陵地の背面は南北方向に主軸を呈する帯状形の平坦地(畑地)となっているが、南側寄り部分に堀切で仕切られた長形状の独立区画(500㎡)が存在する。地元の人はこの区画を城跡と伝えるようである。事実、堀切を挟む北側部分の畑地も野首部分が凹道(堀切とも思える)によって断切られており、外観的には城跡としての体裁をなす。城跡周辺は東側と南側が急傾斜であるが西側については比較的緩やかな傾斜となり、裾部を野首に至る坂道が通っている。城跡南東側の田中集落には古井戸の他「陣の内」の小名を残す一隅がある。

(注1) 地元に長野家という旧家がある所からこの伝承が生まれたものと思われる。

やま い
山ノ井城 (鹿本郡菊鹿町大字下内田)

内田八幡宮に残る『内田相良氏系譜』。

『内田氏累代先祖墓』及び徳丸秋因の下書による『内田旧記』等によれば、内田相良氏(山ノ井氏)十一代の居城であったという。後には隈部親安の入城も伝えられる。

城跡は、山ノ井集落の東側にあつて南北に主軸を呈する帯状形の丘陵地末端部(標高118.3m・集落よりの比高約40m)に位置する。

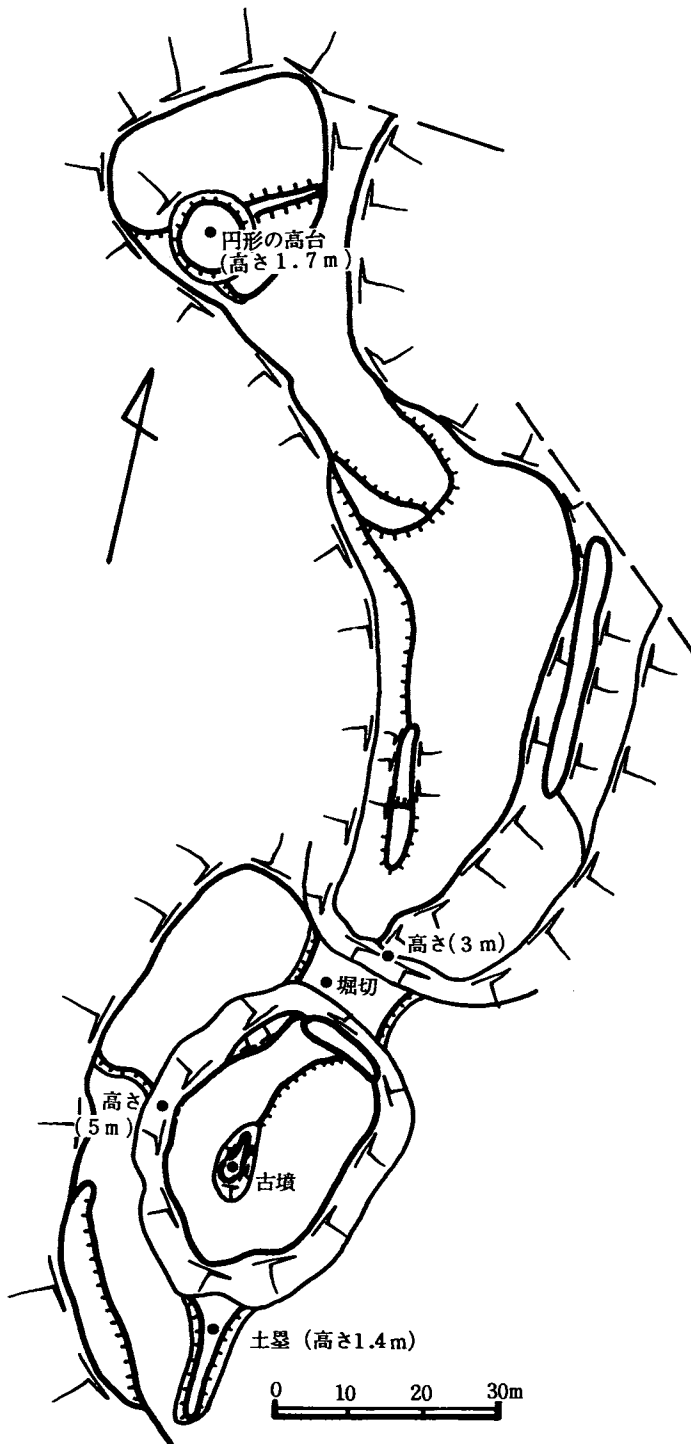
長さ180mに及ぶ丘陵地の背面は一面の雑木林で大部分は自然地形であるが、南側寄りに堀切(長さ15m・底幅6m・深さ3m)によって区切られた舌状形の平坦地(長径33m・短径23m)が存在して(注1)おり、北西側の鞍部近くにも円形状の高台(直径9m・高さ1.7m)が観察される。

堀切は、そのまま曲輪(幅10~15m)となり平坦地を西から南にかけて取り巻く事になる。曲輪の東端には長さ17mの土塁(幅5m・高さ1.4m)が走る。

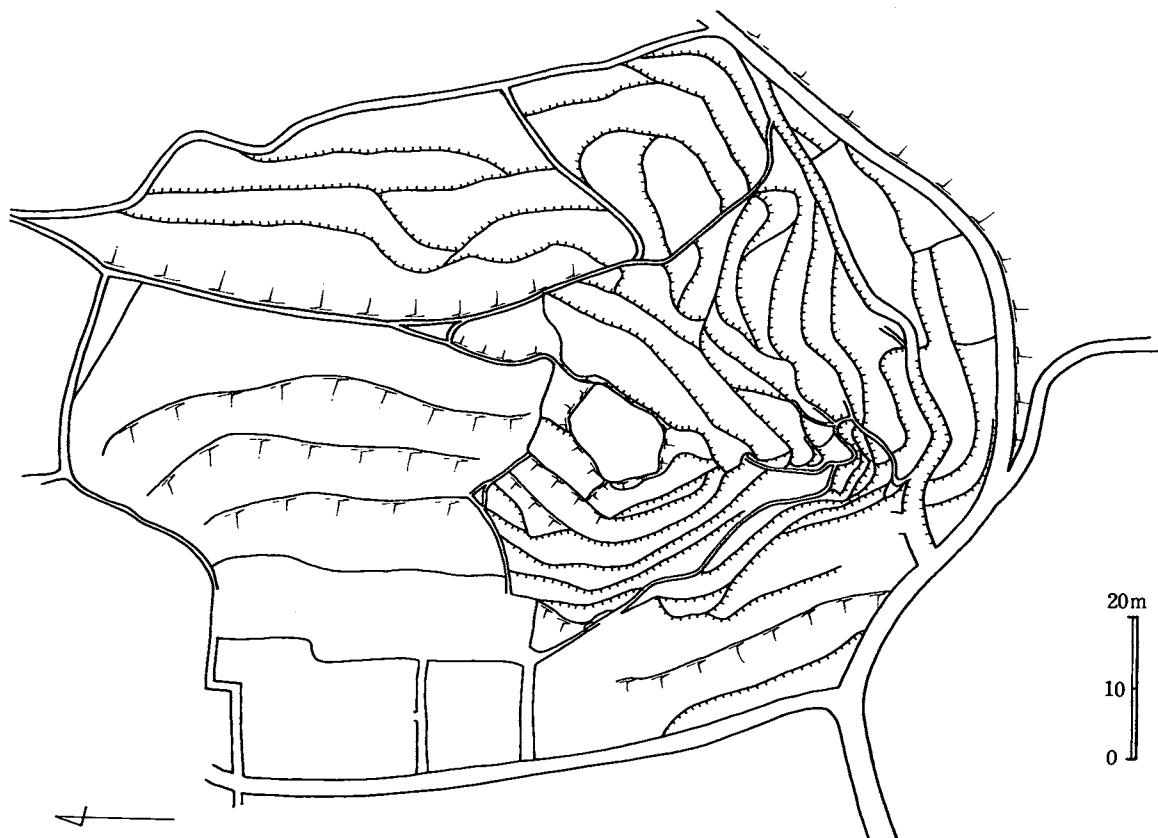
城跡一帯は「隈先くまさき」と称されるが、「誓願寺山」という呼称もある。

集落の中程にある火除地藏堂が誓願寺跡と伝わっており、宝篋印塔の台石や五輪塔の地輪部に正應(1288~1293年)の年号を有するものがある。

(注1) 完全な平坦地ではなく、先端部は高さ0.5~1m程の段差によって二段に分かれている。同地内には石棺を露出した円墳の残欠部がある。



山ノ井城(1)(中心部) 略測図



山ノ井 (2) 略測図 (全体図)

若宮城 (鹿本郡菊鹿町大字下内田)

城主は、内田相良氏一族という。

城跡は、内田川の流域にあって「若宮」の字名を残す丘陵地末端部(標高120m・東側麓の道路面よりの比高約40m)に位置する。丘陵地の背面は舌状形(南東方向に主軸を呈し、長径130m・短径40~65m)の平坦地(杉の植林地)となっており、西側の鞍部に二重の堀切が観察される。堀切は東側部分で長さ60m・幅7mを計り、西側部分も長さ35m・幅7mを示すが、双方に幅3mの土塁が付随するようである。城跡の南側斜面には「馬賣め場」と称される曲輪(長さ120m・幅4~5m)が走っているが、これは西側に延びて、鞍部に開けた民家の敷地につながる。現在、民家は3戸でいずれも真弓姓を有しており、家人は「若宮城、家老の血を引く」と語る。

城跡より西側へ約200m進んだ藪の中に、家老・真弓弾正の墓と称する墓石がある。

城跡の東南方向に内田相良氏の建立と推察される宝篋印塔(注1)が存在する。若宮神社は城の守護神という。

(注1) 正和三年(1314年)の年号を有する空輪を欠くが、復元すれば高さは5mに達するものと思われる。

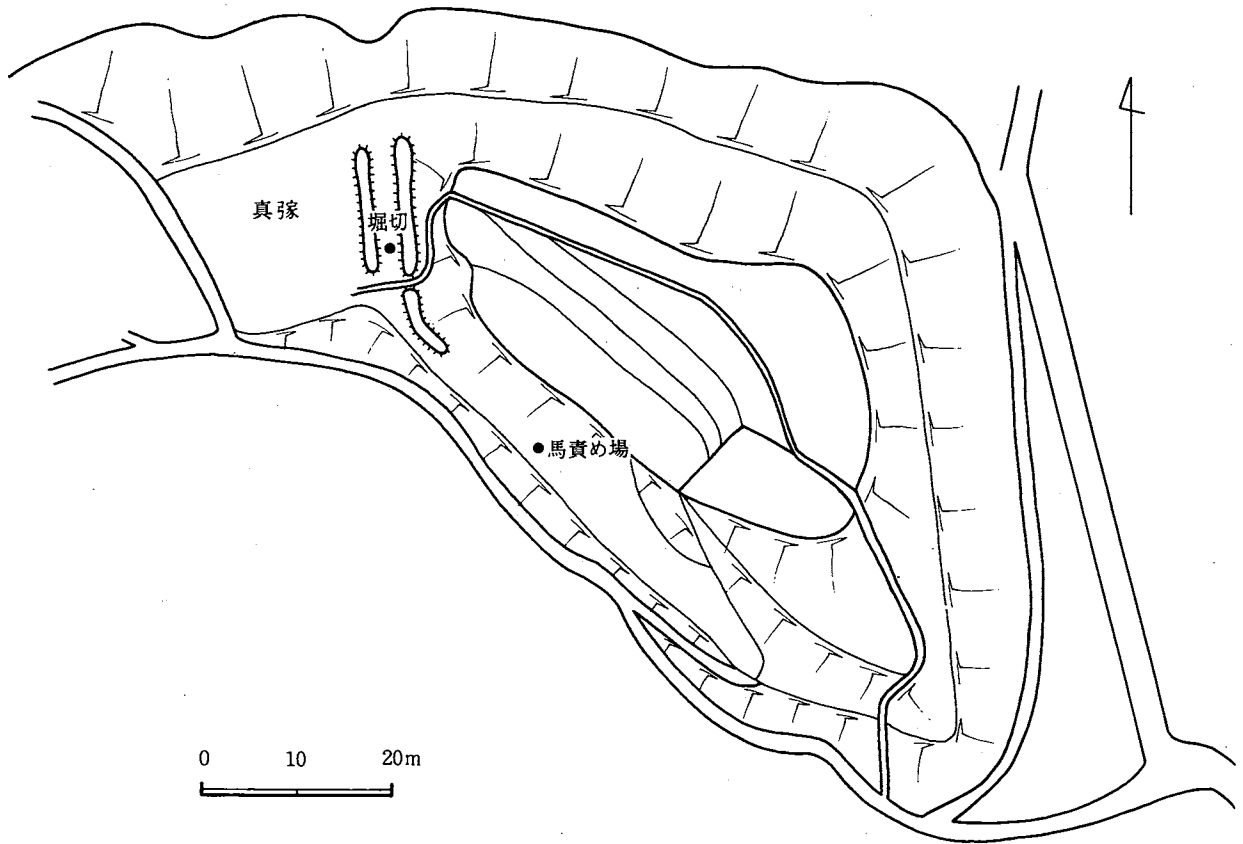
鷹取城 (鹿本郡菊鹿町大字太田字鷹取)

『鹿本郡誌』によれば、東政祐(菊池持朝の季子)の築城によるもので、東氏三代の居城を見たが、元亀元年(1570年)に至り隈部親永によって攻め落されたという。一方、『山鹿郡誌』草稿は内田氏(相良氏の子孫という)九代(重信から重治)の居城であったと伝える。古老によれば、肥後琵琶ひげだいの外題に鷹取城の落城の事を謡った「鷹取崩れ」があるという。

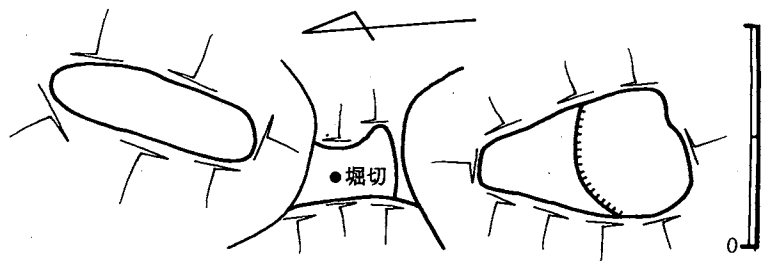
太田集落の西側に横たわる山稜(標高230.9m・集落よりの比高約120m)が城跡と伝わる。山頂部分は壺形の平坦地(南北方向に主軸を呈し、長径18.5m・短径3~11m)となっており、さらに、北側にも堀切(底幅8m・山頂部分よりの比高約4~5m)を挟んで長円形状の平坦地(北東方向に主軸を呈し、長径19m・短径5.5m)が存在する。壺形の平坦地については北側半分が0.3~0.4m程高くなっており、宮地嶽神社の石祠が祀られている。山頂周辺は西側を除く三方が急傾斜と

なる。

西側部分は北西方向と南西方向に伸びる尾根筋で、「椎持往還」という旧道（山頂よりの比高約10m）が通っている。南西方向の尾根には鷹取神社がある。ちなみに『山鹿郡誌』草稿は城跡について「鷹取山上にあり、豊後往還より東に三所の高地あり南北に並べり、皆四方切岸なり、其の北の所（長さ10間・横3間）・中所（同上）・南所（長さ15間・横4間）往還の西にも高所あり（長さ15間・横10間）で切岸堀切の迹あり、一町ばかり西に外堀切の迹あり、其所は山の尾也、餘は総て高岸なり。里俗隈部親永の砦迹という」と記述している。



若宮城略測図



鷹取城 略測図

やまうち
山内城 (鹿本郡菊鹿町大字山内字郷ノ原)

『肥後国誌』によれば隈部親永が築城したものという。

郷の原集落の西側に位置する山稜末端部(標高170m・集落よりの比高約45m)が城跡と云わる。「城山(小名)」と称される山頂部分は長方形の平坦地(竹山・南東方向に主軸を呈し、長経40m・短経28m)となっており、さらにこれより2m下った所に同心円状の曲輪(幅10~14m)がめぐる。曲輪は北側と西側の二箇所に土塁が残存しており、鞍部寄りの北東側は堀切の体裁をなす事から、全面にわたって空堀が埋没している可能性が強い。
(注1)

古老によれば、かつて「城山」には礎石らしい石もあったという。山稜は広い面積を有しながら南西側へ緩やかに傾斜しており、現在はこの地形を利用して墓地や畑地となっている。城跡に関連ある様な遺構は観察されないが、上段部の畑地二枚分には「しろん畑」と「うえん原」の小名が残る。登城道はこの傾斜地の中央部から城跡東側を通り抜けて、馬頭観音を祀る標高210mの尾根筋に至る。

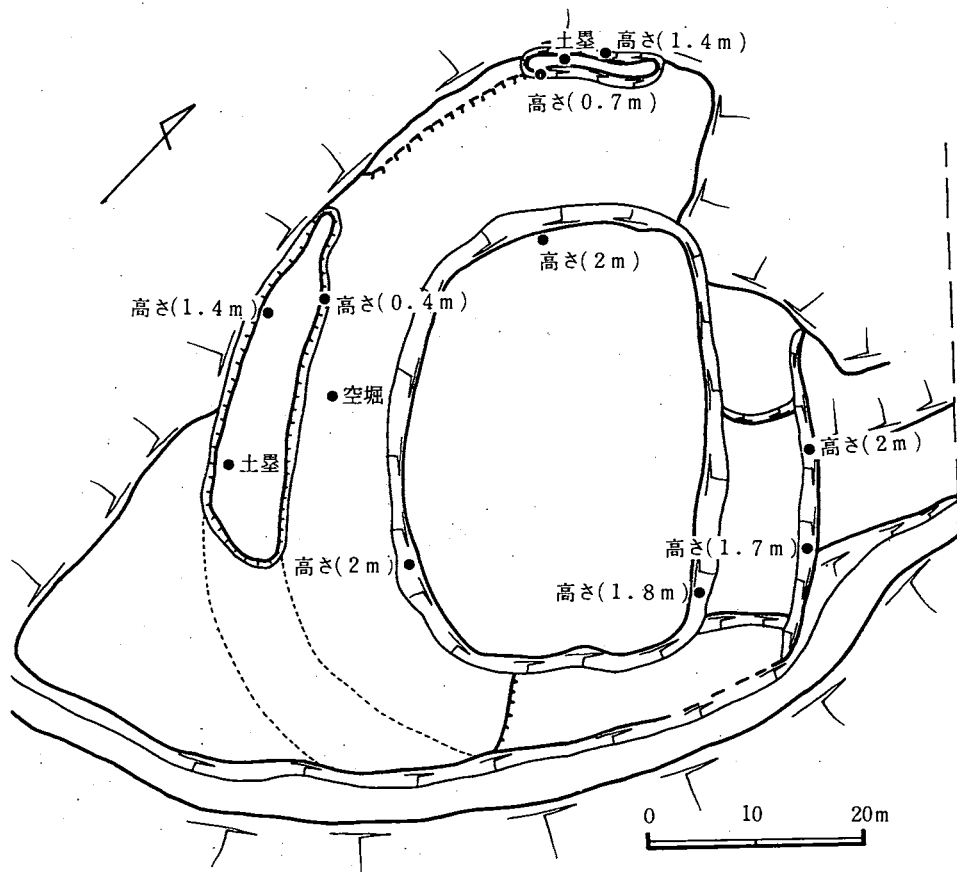
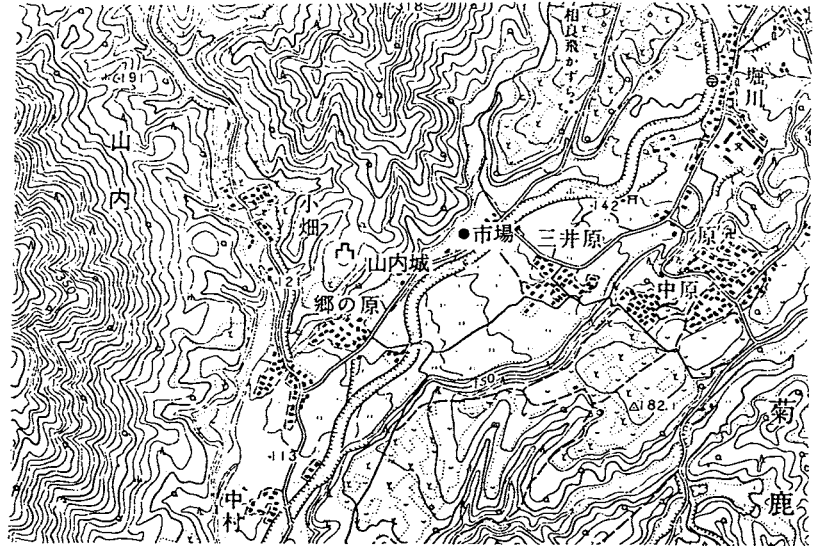
集落には「城戸口」・「がらん」・「市場」
(注2)
・「じゅうぜんじ」・「堀」等の呼称を有する所がある。北東側の谷間に十専寺という大寺があったという。
(注3)

(注1) 北側土塁・長さ13m・幅3~3.5m・曲輪との比高0.7m

西側土塁・長さ34m・幅5~8m・曲輪との比高0.4m

(注2) 現在は切り開かれて区民運動場となっているが、地元ではこの地を城の見張所と考える向きもある。

(注3) 登城口という。



山内城 略測図

こゝろ 鳩の巢城

(鹿本郡菊鹿町大字上内田)

隈部親永が築城したものという。『古城考』に「親永、永禄三年(1560年)より天正五年(1577年)迄十八年、當城并長野城(猿返城)を拵へて、守拒の専要とす云々」という記事が見える。城代は二の家老多久宗員とも伝えられる。「薩摩勢に三カ月間攻められても落城しなかった」という伝承もあり、今も地元の人はこの事を誇りにしている。

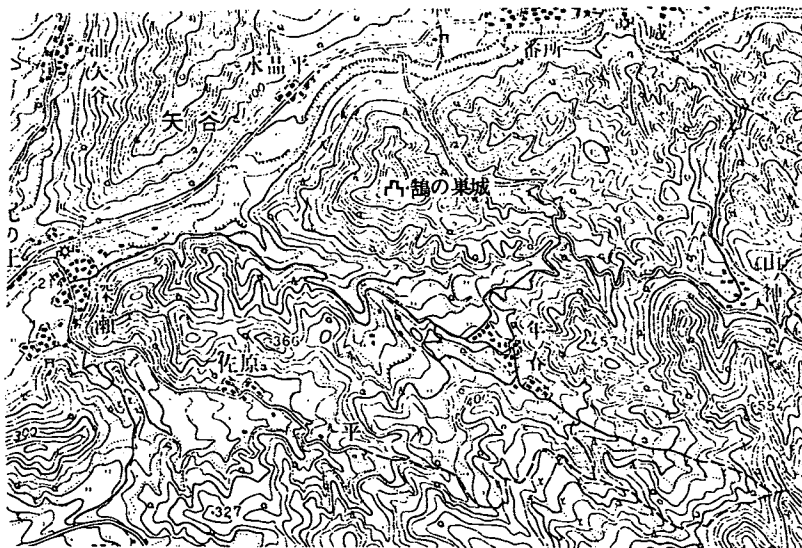
城跡は年ノ春集落の北西側にあつて「クウノスサン(鳩の巢様)」と呼称される山稜末端部(標高447.2m・南西側麓の水田面よりの比高約21.5m)に位置する。山頂部分は楕円形状の平地地(200㎡)となっており、さらにこれより1m下つた北側と南西側にも各々400㎡程の舌状形の平地地が観察される。尾根筋となる東側を除く山稜斜面はいずれも急傾斜となり、とくに頂上近くは岩石が露出した崖となる。東側尾根は長さ500mにも及び集落からの登城道が通じている。

登城口には「木戸内」という小名が残るが、これは「城戸口」の意をなすものであろうか。城跡西側麓の谷間を大分県に至る山越道が通っている。

集落には「クウノストンの投石」と称される庭石があり、南側麓の谷間を流れる小川の川岸に、これ又、「クウノストンの抜穴」と伝わる(注1)隧道が存在する。(注2)

(注1) 城から投げ落された石と伝わる。

(注2) 現在確認できる距離は長さ15m程である。



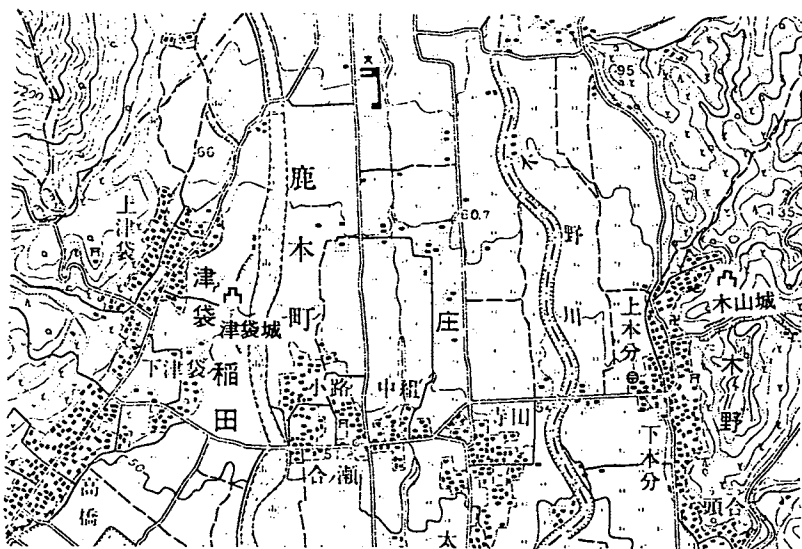
きやま 木山城(木野城)

(鹿本郡菊鹿町大字木野)

『古城考』に「木山村正教寺廢跡山上にあり、木野弥次郎親政城跡と云」という記事が見える。木野氏代々の居城であつたらしい。しかし、城跡名については著者の誤りで、地元では「木野城」と称する。天授三年(1377年)今川了俊の書状に「きのの城にとりかかり申候」とある。廢城期については『肥後国誌』が「永禄年中(1558~1570年)木野弥次郎玉名郡大津山ノ城ニテ討死シ廢城トナル」と伝える。

「上本分」地区の北東端に位置する山稜末端部(標高120m・南西側麓の集落よりの比高約40m)が城跡と伝わる。山頂部分は150㎡の平地地となっており、さらにこれより50m先の北東側鞍部寄りにも200㎡の平地地が存在する。鞍部には堀切の役目を果す凹道が走る。城跡周辺は鞍部を除く三方が急傾斜となる。

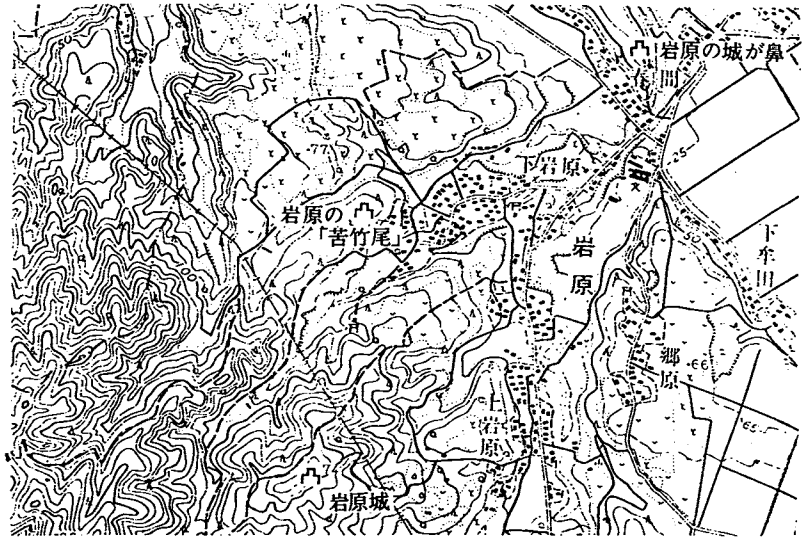
城跡南東側麓の迫については木野氏の菩提寺という正教寺(彰教寺とも正教寺とも記す)跡があり、「雷神の井」と称される井戸跡をはじめとして、板碑4基(天文年間と永禄年間の年号を有する)と五輪塔5基が残っている。なお、城跡より南西方向へ約500mに興掛松と称される尾根の末端部がある。(注1)
(注2)
(注3)



(注1) 由来については『肥後国誌』に詳しい。

(注2) 天文年間3基・永禄年間1基。

(合勢川合戦で討死したという赤星丹波守の碑) これ又『肥後国誌』に詳しい。



岩原城 (鹿本郡鹿央町大字岩原)

『肥後国誌』によれば城主は有働式部少輔というが、有働氏については有働右近ともいう。地元在住の原光太氏(94才)は「立花右近が城主と伝え聞く」と語る。

城跡は上岩原集落の西方向にあって、「古城」^{こじょう}とも「高城」^{たかじょう}とも称される山稜(標高174m・集落よりの比高約135m)に位置する。山頂部分は北東方向に主軸を呈する尾根となっており、北東側寄りに長形状の平坦地(長径40m・短径10~15m)が存在するのをはじめとして、これより南西側へ2m下った所にも長形状の平坦地(長径90m・短径6~10m)が観察される。南西側の平坦地には、先端部より40mの地点に、堀切とも思える深さ0.5m・幅3mの浅い溝が横切る。

山稜斜面は南南西側を除きいずれも急斜面となるが、山頂周辺には数段の階段状地形(幅3~5m)がある。この他、山頂南西端より南東方向へ約35m下った山腹の突端部に堀切(長さ10m・底幅1m・深さ1m)があり、堀切で断切られた舌状形の独立区画が存在する。

城跡周辺には「隠場」・「住吉」・「火の口」・「東古城」・「城下」^{じょうか}の各地名が残っている。

(注1) 住吉寺があった所という。数基の五輪塔が残存する。

(注2) 上岩原集落でも西側の山稜側へ約300m程入り込んだ所で、現在4~5軒の家がある。芋原^{かいわら}とも称する。

岩原の城が鼻 (鹿本郡鹿央町大字岩原字春間)

『肥後国誌』に「城カ鼻ニアリ堀切僅カニ残レリ城主犬塚孫左衛門ト云強チニ城跡トハ見ヘス物ヲ出シタル處カ此城跡ニ犬塚孫左衛門カ古墳アリ」という記事が見える。

春間地区にあって、南東方向に主軸を呈する帯状の丘陵地末端部(標高60m・南側麓の集落よりの比高30m)に「城カ鼻」の小名が残る。しかし当該地には堀切の存在はなく地元でも城跡とは称しない。わずかに地元の古老である吉良政義氏(72才)が「祖父が『岩原城の見張りの城だった』と話していた」と語るのみである。ただ、丘陵地北東端部に高さ7~8m程の小山があり、上面は削平されて楕円形状の平坦地(長径21m・短径18m)^(注1)となっている所から、この地を城跡と見なす事は出来る。

犬塚孫左衛門の古墳については現存しておらず、今は所在地跡と思われる所に犬塚氏の顕彰碑が建立(大正中頃)されている。

(注1) 稲荷神社敷地となっている。

岩原の「苦竹の尾」 (鹿本郡鹿央町大字岩原字下岩原)

『肥後国誌』に「岩原村苦竹ノ尾ニ安芸ト云人アリテ毎日米野城佐伯カ方へ出仕シテ軍事ヲ談ス」という記事が見える。同書では苦竹の尾の所在地は不明としているが、岩原集落の西側に「苦竹」という字名を残す帯状の丘陵地末梢部(標高

78.3m・北側麓の水田面よりの比高約30m)が存在する。おそらくこの地が『肥後国誌』にいう「苦竹ノ尾」であろう。記事から当該地には安芸なる人物の館跡や米野城に関連した遺跡の存在が考えられるが、背面は、全面畑地となっており、何ら遺構は認められない。集落については「居屋敷」や「古屋敷」の字名の他に、「有働さん」とよばれる塚(直径4m・高さ0.5m)が残る。

つかさき
塚崎城

(鹿本郡鹿央町)

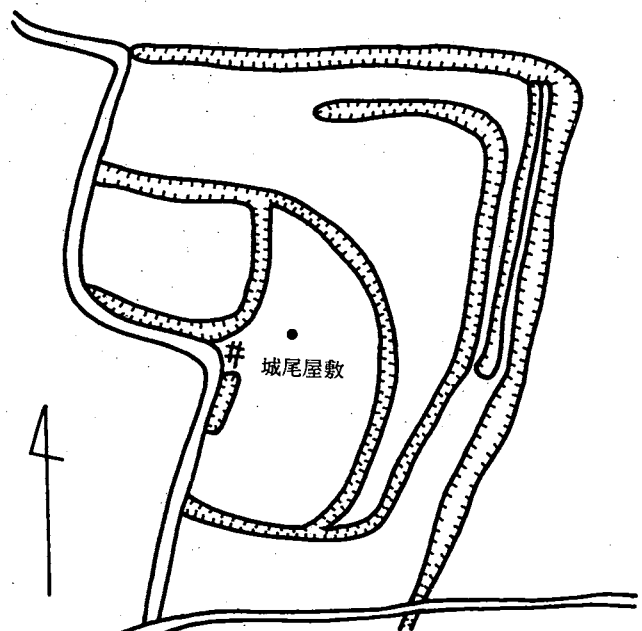
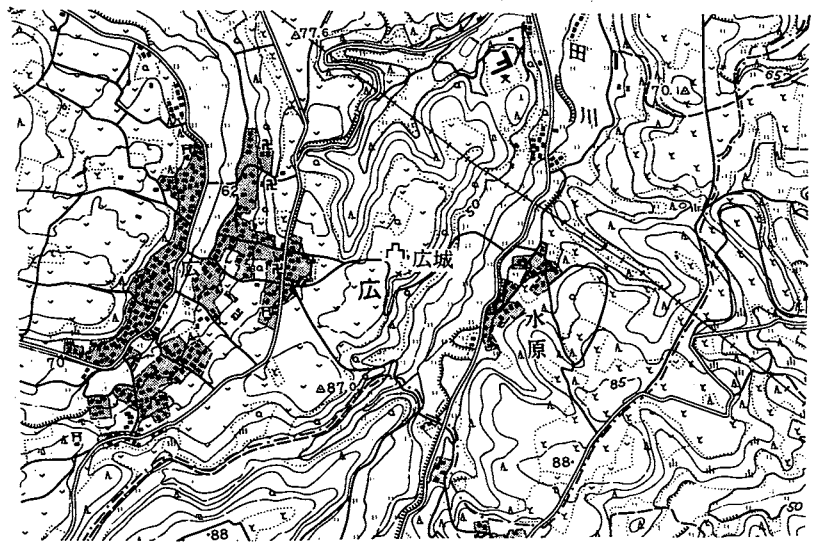
『古城考』に「千田宮村にあり、城主千田伊豫守英朝、應永(1394~1428年)・文安(1444~1449年)之比在城す」という記事が見え、『龍造寺文書』『永池文書』にも城跡名がある。しかし、城跡の所在地と推定される千田の塚崎には、城跡に関する伝承や地名は何も残っていない。また、当該地は広い面積を有する舌状形状の丘陵地末端部で、全面畑地となっている。

ひろ
広城(城の尾城)

(鹿本郡鹿央町大字広字城尾屋敷)

『古城考』によれば、永正・天正年間頃の城主は菊池氏家臣の長田武秀というが、千田英朝の在城説も合わせ記している。

城跡は元広集落の東方向に横たわる丘陵地(標高86.6m・北側麓の水田面よりの比高約40m)に位置する。丘陵地の背面は北東方向に主軸を呈する広い平坦地(畑地と雑木林)となっており、地元の人々は「城の尾」と称するが、字図では「城尾屋敷」・「城尾前」の二地域に分かれることになる。城跡に関連あると思われる遺構は「城尾屋敷」地内の雑木林にあり、ほぼ直角に折れ曲る(北西方向に100m・南西方向に140m)鉤型の空堀をはじめとして、コの字型(北東側60m・西側100m・南西側50m)と弓形状の空堀が間に土塁を挟んで並列的に走る。弓形状の空堀については、北西側に鉤型の空堀(西側・南西側ともに40m程)が重複する。全般的に堀幅は2~5m程である。空堀の走り具合と字名からして当該地は館跡の色彩が濃い。空堀で囲まれる部分は窪地あり微高地ありで極めて複雑である。北東側寄りの畑地は雑木林を開墾したものであるが、その時に土師質土器片が数多く出土した。同畑地には4個の方形の石が3列にならんでいたという。城跡の西側部分を、元広からの登城道が走る。井戸跡も存在しているが、江戸後期においてこのあたり(「城尾前」を含



広城 見取図

めた地域)は城尾集落のあった所と伝わっているので、前述の遺構がすべて城跡に結びつくとは言い難い。なお、城跡の北東方向350mに谷をへだてて位置する丘陵地末端部にも城寺山の小名が残っているが、現在は千田小学校の敷地となっており旧地形を止めない。

(注1) 江藤健造氏(土地所有者)の御示唆による。

(注2) 慶安四年の城尾組名帳がある。

霜野城(権現岳城・下野山城)

(鹿本郡鹿央町大字霜野)

内空閑基貞の築城によるもので、その後、代々内古閑氏一族の居城となったという。『国郡一統志』は築城期を永正十年(1513年)とし、落城を天正十五年(1587年)と伝える。

城跡は国見岳(標高388.8m)の西方末端部(標高260.3m・北東側麓の霜野集落よりの比高約170m)に位置しており、「城峠」という小名を残す。山頂部分は三日月型の平坦地(北東側へ12m・南東側へ34m・幅12m)となり中央部やや北寄りに若干の凹地が観察される。山頂周



辺はいずれも急傾斜をなすが、北西側へ60m下った鞍部に二重の堀切(両方とも深さ4m・底幅3mを計り、10mの間隔をもって並んでいる)が存在する。城跡側の堀切についてはその南端部が縦堀の形状を呈し、周辺に湧水池がある。国見岳の北西側鞍部(標高353.1m)にも堀切の存在を認める事が出来る。

城跡の東側麓には「館」と称される丘陵地(北東方向に主軸を呈し、標高128.7m・南東側麓の道路面よりの比高約43m)があり城跡に関連した遺構の存在が考えられる。

丘陵地は北東方向へゆるやかに傾斜しており、南西側寄りに長形状の平坦地(長径35m・短径22m)が存在する。

これより北東側へ数m下った所にも舌状形の平坦地(長径100m・短径80m)が広がる。古老によれば、舌状形の平坦地からはかつて焼モミ(地表下約60cm)が出土したという。丘陵地周辺は階段状地形が幾段にも重なっており、北西側の野首部分については自然の堀切をなす迫が走る。迫の対岸は北西方向に細長く伸びる尾根筋とり、尾根筋には3条の堀切が観察される。

霜野集落には城跡に関連したものとして、城主を祀った内空閑神社や内空閑鎮房の顕彰碑・牧野弾正の墓・のたさんの墓がある。地名としては「堀田」・「おたちしよ」の小名をあげる事が出来る。日吉山王神社の東隣には、大日如来や六地藏があり、これらについては時代の判別が可能である。

(注1) かつてここには「権現さん」が祀られていたので、「権現平」という別称もある。

(注2) 出土地点は平坦地中央部と伝わる。

(注3) 神社上段部に10基の五輪塔がある。

(注4) 宝暦十一年(1761年)の建立

(注5) 文政二年(1819年)の建立

(注6) 長さ150m・幅5~10mの帯状形の水田に残る小名。かつてこの地より杓が出土した事がある。

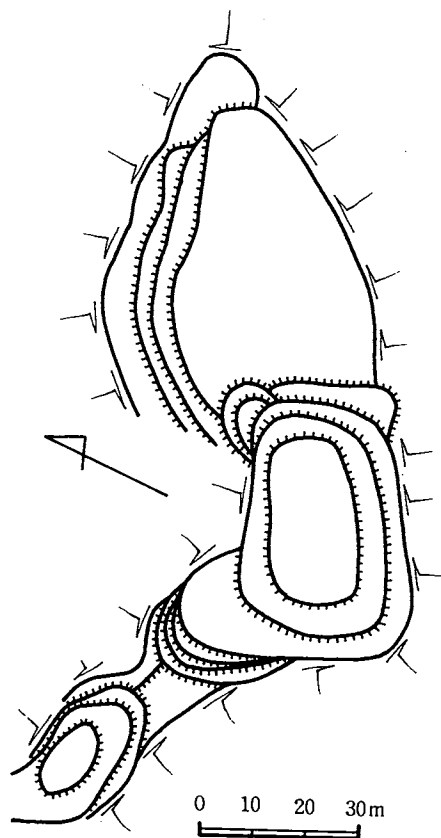
(注7) 「この地より内古閑氏が柳河の地に立たれた」という伝承がある。

(注8) 「天正十四年(1586年)丙戌二月持正作者宇土之住人宮三」という銘がある。

(注9) 室町の形式をなす。



霜野城 見取図



館略測図

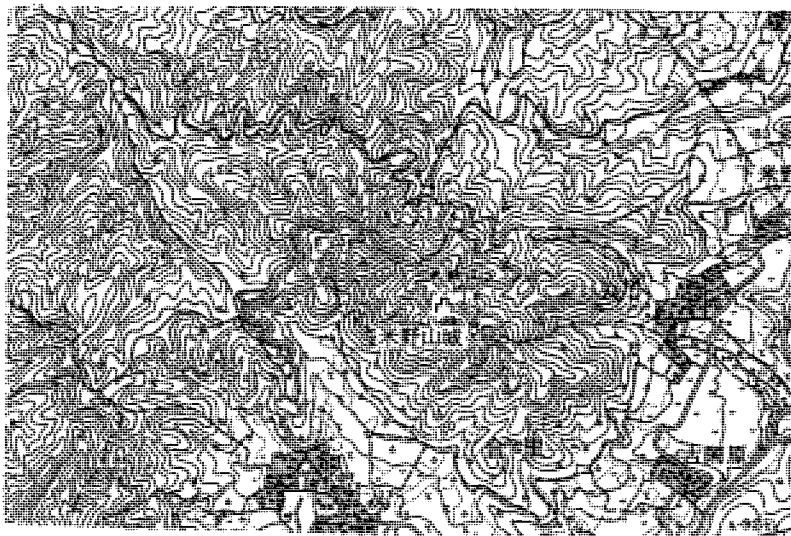
こめのやま
米野山城 (米野嶽城・米野山古城) (鹿本郡鹿央町大字合里字米野山)

『鹿本郡誌』に「城主佐伯氏七年在城すという年代不明」という記事が見える。

城跡は米野集落の北東側にあつて、米野山と称される山稜(標高311.8m・集落よりの比高約220m)に位置する。山頂部分は100mを越える長い尾根(南東方向に主軸を呈する)となっており、北西側の鞍部寄りの小山に三角点を有する楕円形状の平坦地(長径20m・短径10m)が存在する。平坦地周辺は鞍部と南東側の尾根筋とに堀切(底幅・鞍部側3m・南東側1.5m)がはいており、東西両側の山稜斜面に幅4~5mの階段状地形(山頂よりの比高3m)が観察される。

尾根筋の10m先にも1条の堀切(底幅3m)が認められるので、結果的には両側を堀切で挟まれた楕円形状の平坦地(長径10m・短径7m)も存在する事になる。尾根は南東方向に漸次先上りになりその端は小山(標高約310m)をなす。上面は、楕円形状の平坦地(長径36m・短径18m)をなしているので、この箇所にも城跡に関連した遺構の存在が考えられる。地元の人々は、この小山を「米野山」と称し、三角点付近の頂を「茶臼山」と呼び分ける。字図の上でも二分されるようである。山稜斜面はいずれも急傾斜をなし自然の要害となっている。米野集落からの登城口は寺米野にあり、「かみやぐち」や「ぞう門」と称される。

集落とその周辺には「しろのうち」「お花畑」「殿畑」「陣の内」という小名(注1)をはじめとして、「だんとうさん」と呼ばれる古塔群や数多くの寺跡(注2)がある。集落は又北西方向に位置する萩原城についても搦手にあたる登城口を有する。



(注1) ため池の北側200mに位置する舌状形の丘陵地末端部(南北方向に主軸を呈し、標高160m・ため池周辺よりの比高約58m)に残る小名。
 丘陵地背面の野首と中央部に二条の堀

切が観察される。中央部の堀切については長さ20m・幅6mを計る。
 なお当該地の南東約200mにも同様の性格をもつと思われる丘陵地末端部（南東方向に主軸を呈し 標高130m・北側麓の集落よりの比高約20m）が存在する。
 昭和37年の密柑園造成の折りにこの地からは、土師質土器・須恵・滑石製ハガマ・青磁系統の徳利等の出土を見た。

- (注2) 古碑群の中に「応永三年一月二十九日元璋」の銘のある宝塔の台石あり。
- (注3) 主なものに龍福寺跡・建龍寺跡・能万寺跡がある。とくに能万寺跡は、米野山系の東側尾根（標高229.3m）にあり、長円形の尾根に二条の堀切が残っている所から、城跡とのつながりが考えられる。ここには又、五輪塔群がある。

山 鹿 市

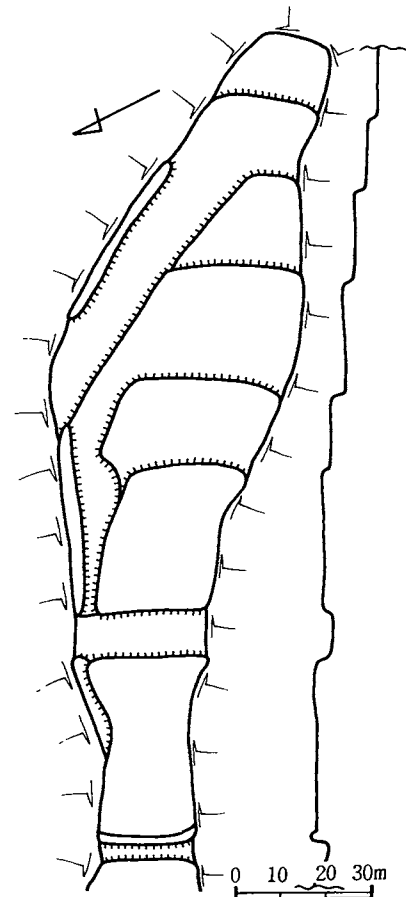
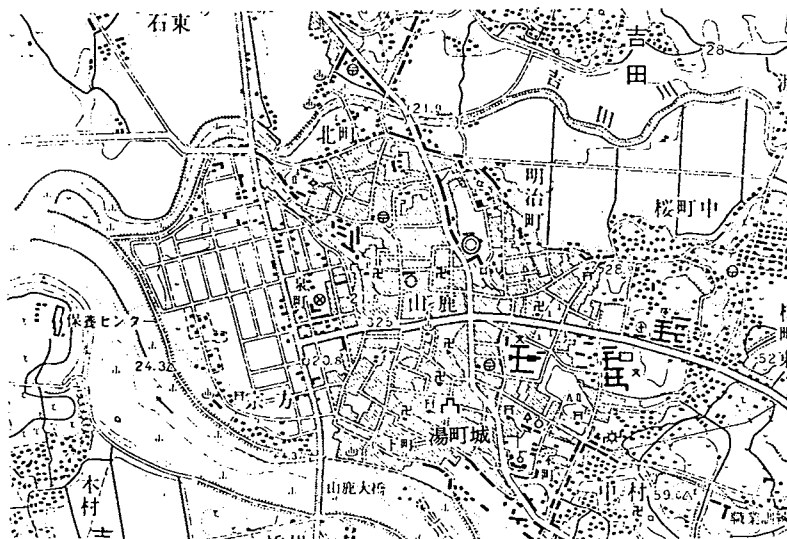
ゆまち
 湯町城（湯浦古城・山鹿古城・上市城・清滝城） （山鹿市大字山鹿字温泉）

『肥後国誌』によれば、城主は隈部氏一族の山鹿重安という。その後、秋重の居城を見たが天正15年頃に廃城となったらしい。同書に「其後同（天正）十五年四月、豊臣秀吉公征西の時、本領を安堵し、同年秋重安當城を捨て」という記述がある。

城跡の所在地は、上市の清滝神社を中心とした一帯と伝わっている。しかし、当該地は山鹿市の中心部の為に、まったく城跡としての面影を止めていない。

現在では、『鹿本郡誌』の「此の城三箇所の口あり、南は清滝に西は像成寺北は菊池口、而て此城地は古の寺地なり」という記事から、城跡の範囲を推定するのみである。

なお、地元では神社周辺の石垣を城時代のものと見なす向きもあるが、石垣自体は新しいようである。周辺に「東惣門」「西惣門」という字名が残っている。



下吉田城 略測図

しもよしだ
下吉田城

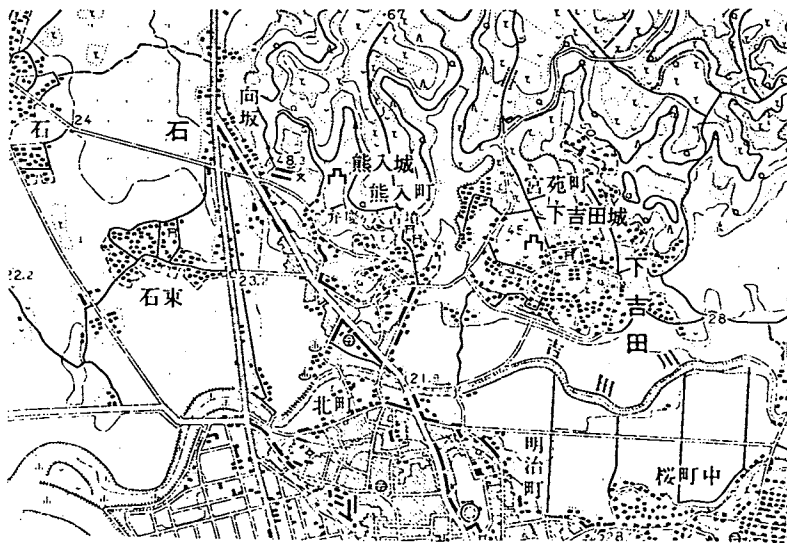
(山鹿市大字下吉田字城内)

『古城考』によれば、城主は吉田高房(御宇田光親の次男)という。

城跡は、下吉田地区にあって、「城内」という字名を残す丘陵地末端部(標高50m・周辺麓よりの比高10~15m)に位置する。丘陵地の背面は、長方形の平坦地(長さ45m・幅22~30m)となっており、さらに南東方向へゆるやかに下る斜面には、幅8.5m・深さ5mの堀切をはさんで、六段から成る階段状地形(段差は0.5~1m)が観察される。

この内、3段目と5段目については、東縁部分を走る土塁が存在する。なお、丘陵地の北西側斜面も比較的ゆるやかな傾斜となり、ここにも堀切(幅3.5m・深さ1.7m)がはいっているようである。この堀切に伴うと思われる土塁が、長方形の平坦地側に見られる。

南西側麓の集落には、「三郎丸」・「本村」・「地園」の字名が残っている。



くまいり

熊入城(隈入城)

(山鹿市大字熊入(熊入町)字三ツ名・竹ノ下)

『古城考』によれば隈部氏の家臣、多久宗貞の居城という。

一方、『楠木合戦註文博多日記』には、八幡宗安を城主とする旨が記されている。ちなみに宗安は熊入温泉の発見者と伝えられる人物である。

城跡は熊入町の北側に横たわる丘陵地の末梢部(南側道路面との比高6~7m)に位置する。しかし、当該地は五盛山観音寺が建立されている上に、墓地となっている為、城跡に関連あると思われるような遺構は、何も観察出来ない。

なお、同地内には五輪塔が多数残存している。

つるやま
津留山城 (山鹿市大字寺島字古城他)

『古城考』によれば、城主は宇野親治という。宇野氏は隈部氏の先祖と伝わる人物である。

寺島地区にあって、「古城」という字名を残す震岳(標高416m)の西方末端部(標高81.5m・南西側麓の水田面よりの比高50m)が城跡と伝わる。当該地において、城跡に関連あらうと思われる遺構は何も観察できないが、「古城」の南側に並ぶ2つの山稜末端部とその周辺に、種々のものを見出す事ができる。すなわち、「古城」寄り部分には、芋生撰津守の菩提寺と伝えられる明星寺があった所で、五輪塔が数多く残っているが、この中には永正(1504~1521年)大永(1521~1528年)・天正(1573~1592年)の年号を刻むものや、撰津守の娘の墓と見られるものがある。字名を「堂の下」といい、西側麓の集落に「大門」という小名が残っている。

一方、南端部分については、畑地ではあるが「古城原」という呼称があり、南側麓の集落に「古城」という小名を残している。ちなみに両者を含めた字名は「山口」である。

さらに、寺島地区の氏神を若宮神社というが、「天正十八年(1590年)山口奥左衛門の勧請による」と伝わっている。また、「天正二十年(文禄元年)に山鹿城城主山口某が、朝鮮征伐に出陣して戦死した」という伝承もある。

したがって上記の事から、『古城考』にいう「津留城跡」なるものの範囲は、「古城」・「堂の下」・「山口」を含めた範囲に広がるのではないかという推察が生まれる。その場合の城主には、芋生氏や山口氏を当てる事が出来よう。

(注1) 撰津守は、ここから芋生(鹿北町・芋生城)に転住したという伝承もある。

(注2) 台座に「天正十四□□ 浄泉信女□□ 三月□日 芋生式部□金□□」の銘がある。

(注3) 昔、大きい門があったという。

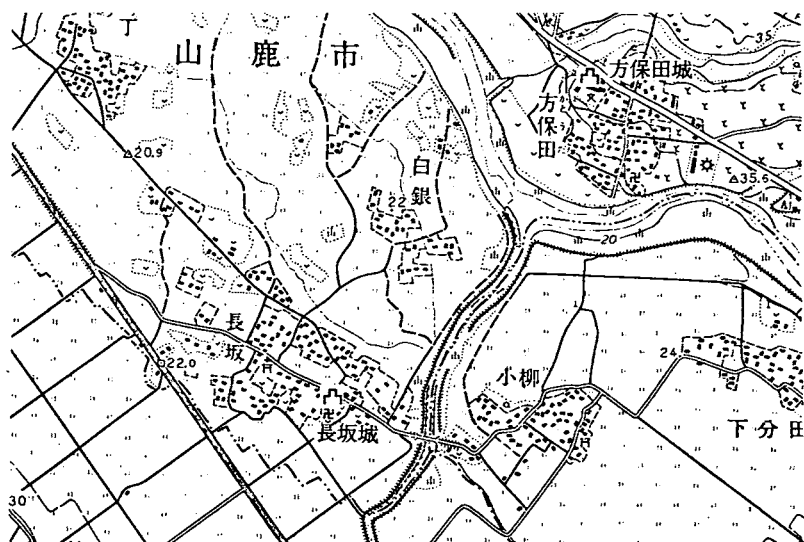


ながさか
長坂城(星子城) (山鹿市大字長坂字土居ノ上)

『古城考』によれば、赤星道半の家臣、星子中務の居城という。その後の城主については、同書に「天正十五年(1587年)有働氏一族當城を捨て、」という記事が見える。

浄正寺の墓地とその周辺(畑地・民家)が城跡と伝わっている。当該地は、平地に開けた長坂集落内に位置している為に古井戸を除き城跡に関連あらうと思われる遺構は何も観察できないが、古老によれば、「集落を横切る用水路は昔の水濠」という。城跡は、館の類であつたらうと思われる。

長坂地区には、「土居ノ上」をはじめとして、「星子」・「沓形」・「院ノ馬場」



「堀田」・「堀田前」・「堀田後」・「鑑」という字名が残っている。

(注1) 浄正寺の開基から六代までは、城跡内に寺があったと伝えられている。

方保田城 (山鹿市大字方保田字六田外)

『古城考』によれば、城主は菊池氏家臣の方保田重兼という。その後、方保田氏数代の居城となつたらしい。専立寺の過去帳系図に方保田氏の名を見る事が出来る。

城跡は、方保田集落の北西側にあつて、「城」と称される丘陵地末梢部に位置する。しかし、当該地は主に大道小学校の敷地となっているので、ほとんど旧地形を止めない。

現在はずかには、土塁の残存部と削り落とし(北側斜面)を認めるのみである。

吉井壯一氏(73才)の御示唆によれば、城跡には処刑場や地下水道の設備があつたらしい。

当該地は、また、古墳の所在地でもあり、開発時に剣・鏡が出土している。

(注1) 城跡の中心地と思われる所は、小山状の高台が存在したという。

小原城 (山鹿市大字小原字浦田)

城主不明。『古城考』によれば、この城は築城の翌日に落城したらしい。そこで、「昨日が城」という別称もあるという。下岩下集落の南西側に横たわる、山稜末端部(標高78m・北側麓の水田面よりの比高58m)が城跡と伝わる。

山頂部分は、広い平坦地となっているものの山稜周辺部や南西側の鞍部に、何の遺構も認められない。さらに、同書に「本丸廢井有り」と記されている古井戸についても同様である。しかしながら、当該地の周辺には「六丁丸」・「陣の内」・「東屋敷」の小名が残っている。



坂田城 (山鹿市大字坂田)

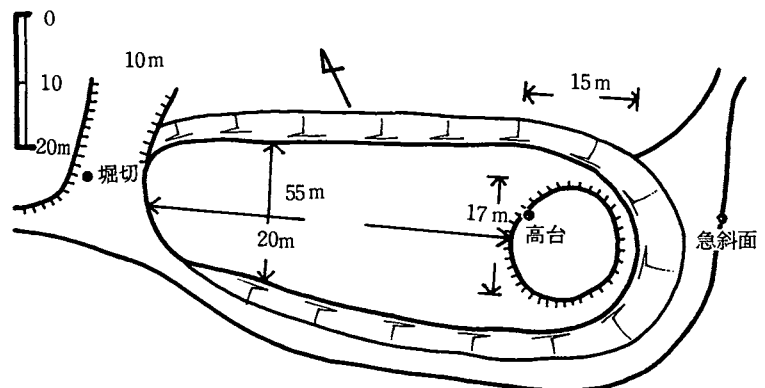
城主不明。菊水町との境界線際に位置する坂田地内に、「城山」と称される山稜末端部(標高60m・北側道路面よりの比高40m)があり、城跡の存在が考えられる。

しかし、中心部をなすと思われる所に、金時神社が建立されている事もあつて、城跡に関連あろうと思われるような遺構は何も観察されない。

久原城 (山鹿市大字久原字首石)

城主不明。城跡は堀ノ内(字名)集落の北東方向にあつて、「首石」という字名を残す山稜末端部(標高120m・南西側麓の四叉路からの比高60m)に位置する。

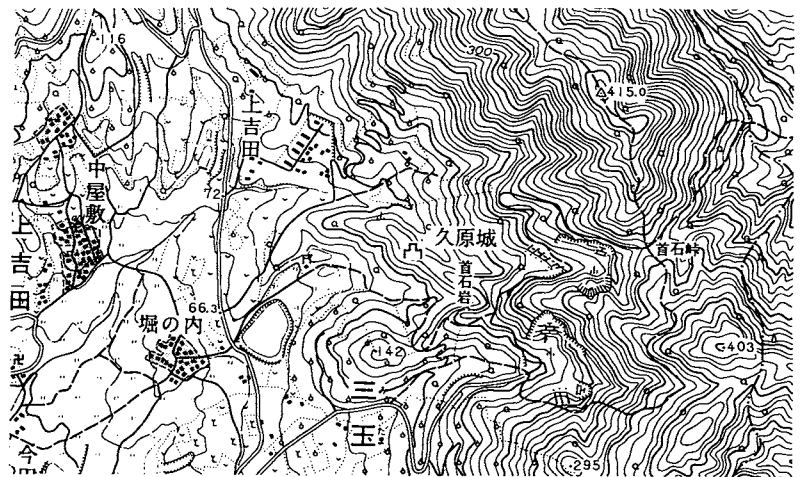
山頂部分は、北西方向に主軸を呈する



久原城 見取図

長円形状の平坦地(長径70m・短径20m)となっており、さらに南東側部分には楕円形状の高台(長径17m・短径15m)も観察される。山頂周辺部は大方、急傾斜をなしているが北西側部分については、東方へ長く伸びる尾根筋となっている為に、堀切(長さ16m・幅10m・深さ4m)が存在する。

城跡には、首石峠を越えて菊鹿町へ至る山越道が走っている。なお、城跡麓には上記の「堀ノ内」以外に、「中屋敷」と「十福寺」の字名が残っている。



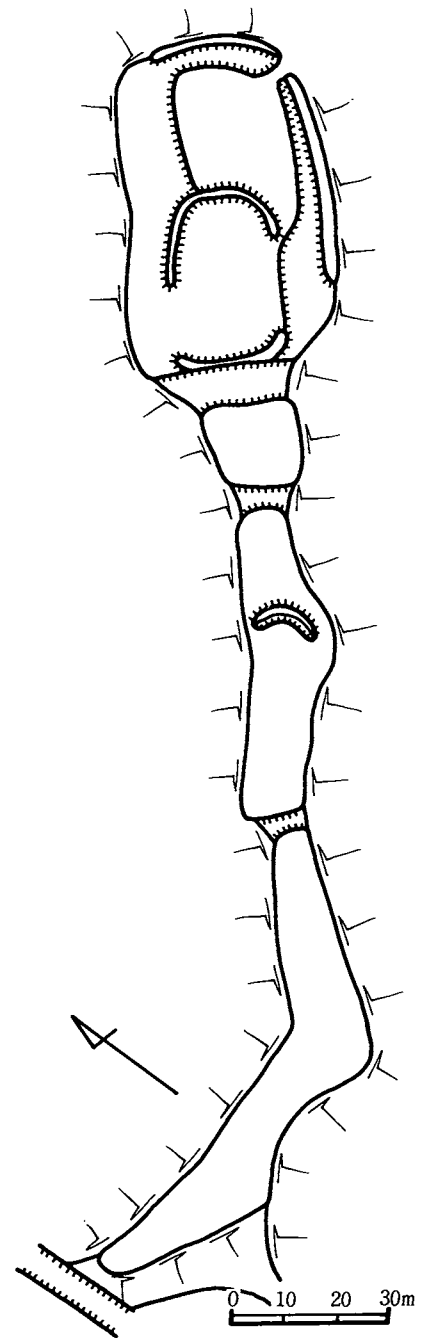
ひらやま
平山城 (山鹿市大字平山陣ノ内)

『古城考』によれば、平山秀世(菊池家臣、蛇塚九郎定氏の三男という)の居城という。

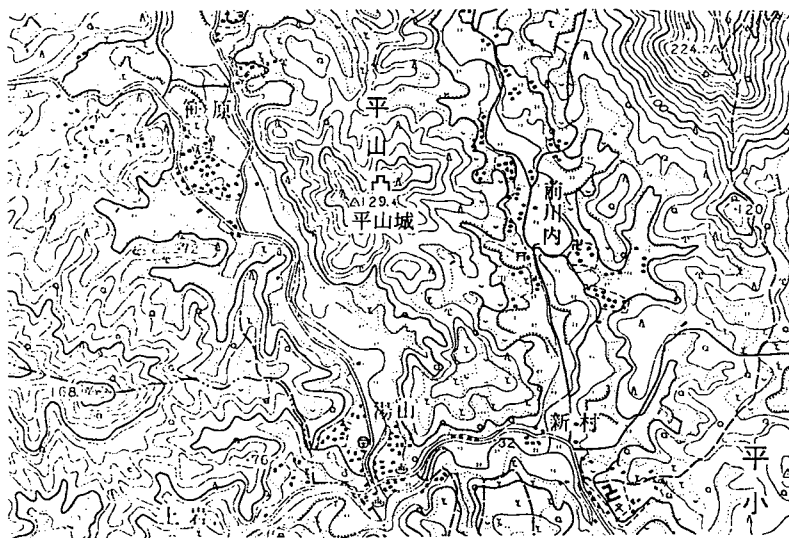
城跡は、平山地区にあって「陣ノ内」という字名を残す山稜末端部(標高129.4m・南西側麓の水田面よりの比高100m)に位置する。山頂部分は、鉤形状(中央部の三角点より、北東方向と北西方向に主軸を呈する)の尾根をなしているが、北東側に伸びる尾根筋に、城跡に関すると思われる遺構を認める事が出来る。尾根は、4条の堀切によって大きく4区画に分けられており、北東端部に城跡の中心をなすと思われる区画が存在する。当該地は、楕円形状の平坦地(長径32m・短径23m)となっており、さらにこれより北東側へ下った所にも、舌状形の平坦地(長径22.8m・短径18.2m)が観察される。また、この二段から成る北東端部の区画には、土塁を伴う曲輪(幅3~6m)がめぐる。

この曲輪はその北東側において、深さ5mの堀切となっているが、これについては尾根が北東方向にゆるやかに傾斜する事から、必要であったろうと思われる。この堀切には土橋も存在する。

一方、尾根筋の堀切については、北東端部が幅9.5m・深さ7.4mを計



平山城 略測図



り、城内における最大のものとなっている。

他の3条については、いずれも幅3～5m・深さ1.3～3.5m程度のものである。なお、3区画目の平坦地（長方形を呈しており、長径57m・短径20m）には、鉤形状の土塁（幅2m）と溝（幅2m・深さ0.8m）が残存しているようである。城跡周辺には、「大門」「丸内」「寿具丸（寿見丸）」という字名が残っている。

じょうむら
城村城（山鹿市大字城字城）

『肥後国誌』によれば、城氏（菊池氏三大家老の一人）代々の居城という。城氏が隈本城に移った後は隈部親安（隈部城主であった親永の子）の入城を見たが、天正十五年（1587年）におきた肥後の国衆一揆では当城がその主な舞台となった。すなわち天正十五年は豊臣秀吉の九州遠征が終了した年で、肥後の国は新たに佐々成政が封じることになった。しかし、秀吉は成政に対し52人の国衆には従来通りの知行を渡し、三年間は検地をしないこと等の指示を行った。このため成政は家来達に知行を与える事も出来ず、ついには検地を決意した。

この事が因となり、国衆の一人であった隈部親永と争いが生じた。親永は隈府城に引籠り、最後には嫡子親安の城村城に籠城したので、城村城を舞台として佐々勢と隈部勢が戦火を交える事になった。これを契機に、阿蘇・隈庄・御船・相良の各国衆も時を同じくして成政に立ち向う事となり、いわゆる国衆一揆へと発展したのである。

結局、翌年に至り、佐々氏・隈部氏その他の国衆も喧嘩両成敗で一挙に処分され、肥後の中世は終りを上げる。

城跡は、「城」という字名を残す集落に位置する。主郭の南側に1条の空堀を残す他は顕著な遺構は認められないが、当該地は丘陵末端部に開けており、地形そのものが一つの城をなしている。丘陵に築かれた平城の類であったろうと思われる。『肥後国誌』は城跡の規模を二町八反九畝九歩と伝える。現在、城跡の中心地と伝えられる所には、城跡碑が建立されている。

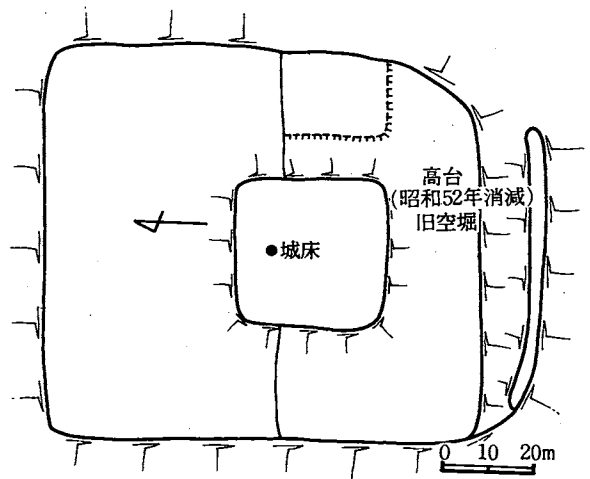
なお、城跡の歴史に関しては、地元在住の郷土史家故田上利彦氏による調査がある。

（注1）城・赤星・隈部の三氏をいう。



ひがしつけじろにしつけじろ
東付城・西付城（山鹿市大字城字付城）

『肥後国誌』によれば、天正十五年（1587年）に佐々成政（隈本城主）が城村の城を攻めた時、その留守を狙った一揆が起ったという。そこで成政は当該地に付城を築き、前野勝瀧以下百七十数名の番兵を持って、一揆の收拾に成功したと伝える。東付城跡は、城集落の南西方向 約 600～700m にあって、「付城」という字名を残す丘陵地末端部（標高65.8m・東側麓水田面よりの比高30m）に位置する。しかし、当該地は圃場整備が行われた為に、旧地形を止めていない。



西付城 略測図

西付城

城跡は、「松ノ木原」の丘陵地内にあつて、「城山」と称される微高地部分に位置する。

城山は、長方形の一区画（東西85.4m・南北96m）をなしており、中央部に「城床」と呼ばれる正方形の高台（東西・南北とも約32m）が存在する。以前は、これより東側にも、同様の形態をなす高台が存在していたというが、昭和52年に削平されてしまった。両者の間には、幅6.5m・長さ22m程の空堀も認められたという。一方、城山については、南側の斜面部に、幅7.6m・深さ3m・長さ45mの空堀が観察される。この他、「松ノ木原」の西側には「院の馬場」という字名が残っている。

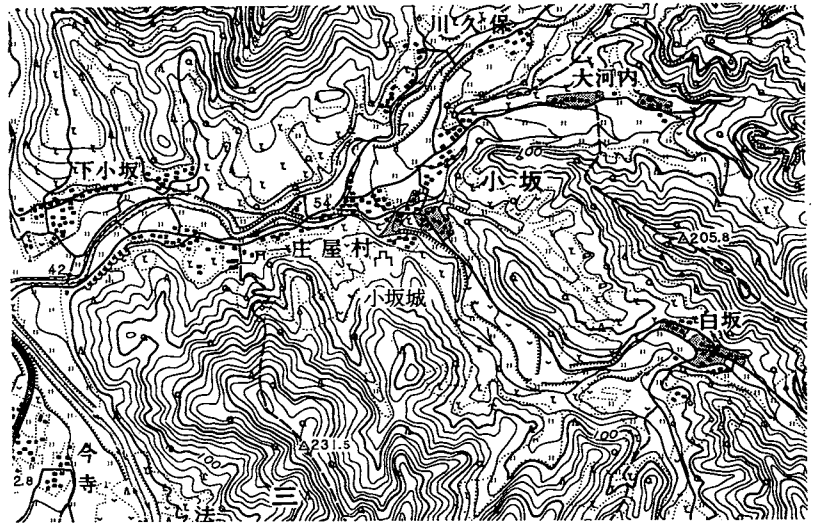
城跡の北東側に、迫地一つへだてて城村集落が存在する。

おさか 小坂城

（山鹿市大字小坂字胡麻野）

「庄屋村」集落の南側に位置する山稜末端部（標高86m・集落よりの比高20m）を、地元の人々は城跡と伝える。

城跡としての顕著な遺構は何も観察できないが、当該地はいわば、荒平峠を越えて菊鹿町へ至る山越道のルートでもあり、これに関連した砦の類の存在が推察される。



熊 飽 地 区

この章で扱うのは現在の熊本市と飽託郡の地域で、ここは近世の熊本府と飽田郡・託磨郡であり、古代以来の飽田託磨両郡であるが、ここでは便宜上現在の呼称で、熊飽地区とよぶことにする。

平安末から鎌倉初期にかけて肥後で勢力をもっていたものに何があったか。建久6年(1195)肥後国庁宣(阿蘇文書)に記された在庁官人は、肥氏3名、佐伯氏2名、中原、紀、清原、真上氏各1名である。このうち肥、佐伯、真上三氏は、平安初期或は中期以来の在地土豪と見られ、他は中央政府や大宰府々官の下向者またはこれと主従関係を結んだものと考えられており、この中には源氏もある。これらのほかに関東御家人の下向者と、宇佐・阿蘇の神官層を挙げねばならない。

これら肥後の諸勢力中、熊飽に関係あるものに、先ず紀氏がある。紀氏は前記国宣の紀朝臣や、玉名寿福寺文書仁治2年(1241)留守所下文に見る郡司紀、南北朝には正平13年(1358)紀政幸の寄進状があり、高瀬の大野氏も紀氏である。しかしこれらの紀氏は熊飽地区に同定できない人物が多い。熊飽での紀氏には、代継神社が紀貫之の旧蹟であるとの社伝は信ぜられないが、紀氏との関係は認められよう。さらに熊本市東阿弥陀寺町善教寺に、建長2年(1250)紀親隆在銘の宝塔身が現存している。これは熊本市横手町四方池方面より移したものである。この塔身は高さ70cmほどのものであるから、他地方から移すこともできるが、横手地方からは長祿4年(1460)の六地藏塔身も発見されており、この地方に紀氏によって建立されたと見ることもできる。

飽田郡島崎郷(現熊本市島崎町)には、豊前より下向した宇佐氏の伝承がある。石神神社近くにある宇佐公之の墓と称する石碑には、文永年中公益が下向し、連綿として今日に至り、公之は天文10年(1541)死去したと刻まれている。文永年中下向のことは疑問もあろうが、川尻船頭町乾角には宇佐道秀の記名をもつ長享元年(1487)の六地藏塔身があり、また藤崎八幡宮文書に天文元年(1532)宇佐公員置文があつて、とくに「島崎」と肩書しているので、宇佐氏は島崎地方に戦国の頃まで勢力をもっていたことが知られる。

阿蘇系の勢力に健軍陣内城(熊本市水源1丁目)の光永氏がある。健軍神社は阿蘇神社の末社であるが、嘉祿3年(1227)健宮大宮司が阿蘇から分れて居住した城跡が、陣内城の初であろう。南北朝の正平11年(1356)阿蘇家の老臣光永惟富が入城し、以後その子孫が居城し、永祿年間に甲斐宗運が陥落させたという。

11世紀に沙弥寿妙が開発し、その後1世紀の間に領家職や本家職が、藤原実政、高陽院内親王、仁和寺と移転し、最後に東寺領となった鹿子木荘は、いまの国道3号線を中心にして、東は坪井川上流(東荘)、西は井芹川上流(西荘)にまたがる大荘園であったが、ここを基盤として消長を繰返した豪族は多い。先ず挙げべきは北山室真阿と長浦氏で、ともに名主出身の地頭と考えられる。真阿とその一族は、建治2年(1276)の異国征伐に関する請書に名を留める以外には記録がない。その居館跡と伝える「尼さん屋敷」が、清水町山室に残っていたが、開発と国道3号線建設によって消滅した。長浦氏は白川学園のある稻荷山北端に、長浦山(なごりやま)の地名を残している。長浦氏の盛時については知るところがないが、長浦遠景が私領59町のうち16町を菊池永富に寄進し、残りの所領と地頭職を豊後大友氏の始祖能直に譲ったのは、早くも建永元年(1206)で、遠景の子遠秀は、代官職を残したにとどまった。のち両氏の間で所領の争論を行いつつも、長浦氏は漸時歴史の上から姿を消してゆく。

鹿子木西荘で早く勢力を得るのは、三池氏と鹿子木氏で、両氏は同族、大友能直の弟師員に始まり、曾孫員時が筑後三池荘南郷を領して三池氏と称し、その弟貞教が鹿子木荘の地頭職を得て、鹿子木氏を称したという。筑後南部に本拠をもつ三池氏が、いつ鹿子木西荘に進出したかは明らかでないが、建治元年には西荘下村の地頭職を所有しており、鎌倉末にはそれを譲与している。南北朝の三池氏は、武家方に属して活躍したが、室町時代には余り振わず、戦国末には大友に属し、加藤家では2700石を領した。鹿子木氏は鹿子木荘内に地頭職を得たとは云うが、その確かな史料は今日残されていない。推定するところ、いまの北部町鹿子木、楠原など3号線沿線と、井芹川上流の北部町庄、硯川などの地域ではなかったか。鎌倉時代の鹿子木氏については何等伝わらず、南北朝には鹿子木大炊助が志竹迫城に拠ったことが知られるだけで、その活躍は戦国期の寂心に至ってからである。

建治2年注進状に窪田荘預所僧定倫がある。預所であるから荘官である。この荘の所在地は判然としないが、『荘園志料』や竹内理三の『荘園分布図』の推定通りその位置を北部町釜尾附近とすれば、これは鹿子木西荘の南限近くになる。また後出の井芹氏の所領を押領した大窪氏も、この時の大窪を今の清水町大窪とするなら、この窪田荘の一部と見ることができよう。

菊池一族で熊飽地区に進出したのは、井芹、立田、島崎三氏と出田氏である。菊池4代経宗の弟経家が、出田氏の祖となるが、これが隈本城を築くのは、後の応仁年間秀信のときという。さらに経宗の弟経益が、井芹、荘、立田の祖であるという。立田氏はその居城の跡が熊本市黒髪7丁目に残っているが、鎌倉時代は全く知られず、南北朝には立田七郎・十郎の名はあるが、居城は武家方に奪われ、戦国時代に立田重雄・重徳の2人が知られるくらいである。

井芹氏は85歳の秀重が送った建治2年(1276)の注進状によって名を残しているが、その所領合せて34町余のうち、一部は闕所となり、一部は押領されて、残る所は16町余にすぎないことを暗に訴えている。しかしその井芹氏は、嫡子越前房永秀が、前年の建治元年には西荘下村地頭安芸木工助(三池定時)から「格別の安堵の御下文を給はると称して、所勤に従はず」とて幕府に訴えられており、この中に井芹氏を「井芹村名主」と記している。これから見ても、井芹氏は菊池氏の出自ではあっても、鎌倉中期には、名主程度の勢力にすぎなかったことが知られる。従っていま本妙寺北方に残る中尾丸城址(花園4丁目垣内)を井芹氏居城跡と伝えているが、ここは城と云うより居館程度にすぎなかったのではあるまいか。いま此地には井芹氏同族によって記念碑が建てられている。

島崎氏については、武房の子武経が島崎左馬助と称しており、島崎に居住したと思われるが、兄隆盛の死後その子時隆と家督を争い、敗れて逃亡したと系図には記されている。だが興国3年(1342)菊池武士起請文には、島崎殿(左馬助武堅)の名があり、内談衆の一人として菊池一族中で重きをなしていたことが知られる。ただ彼が島崎に居住していたか否かは不明であり、島崎氏の居城の跡も伝わっていない。

飽田郡西部の嶽・野出など金峯山群の山中には、山上三名字と呼ばれた三氏がいた。内田相良系の内田、原田党大蔵系の田尻、平氏系と称する牛島の三氏で、鎌倉初期以来の家でありながら、勢力の発展も望めず、山中の小勢力として、南北朝から戦国の争乱に捲込まれながらも、滅びることもなく近世に至っている。

飽田郡南西部の河尻荘地頭として勢力を伸したのが、源高明の子孫と称する河尻氏である。河尻氏については史料も少く、系図も完本がなく、その歴史は不明な点が多い。高明の子孫で河尻氏の始祖となったのは実明で、建久の頃河尻荘の地頭職を受け、今の外城の地に河尻城を築いたというが、明証に乏しい。確実に実在が知られるのは泰明で、荘園のほかに河尻津における貿易によって、経済的にも栄え、弘安元年(1278)寒巖義尹をたすけて大慈寺を創建し、寺領を寄進した護法の功勞者であり、政治的には守護代の押領使をつとめていた。泰明の孫幸俊は、南北朝には北朝に属し、正平2年(1347)には肥後守護職を与えられて、河尻氏の全盛期を迎える。その後菊池氏に与して南朝方となり、今川了俊に反抗して、元中8年(1391)の敗北後衰えた。しかし戦国時代もおお余勢を保ち、豊臣秀吉の西下までは一土豪として残存していた。

鎌倉時代の詫磨郡には安富(詫磨本荘)・神蔵の二荘があり、この地に下向して着実に地歩を固めていったのが詫磨氏である。大友氏の肥後進出は、初代能直が前記長浦遠貞の所領を譲り受け、次いで承元3年(1209)神蔵荘地頭職に補任されたことに始まる。詫磨氏は能直の二男能秀が、父の所領中鹿子木東荘、神蔵荘、大野別符、豊後大野荘の地頭職を分与され、神蔵荘に居住して詫磨別当と称したことから始まる。その本拠と伝える本山城跡は、いま白川左岸に「城のもと」などの地名に僅かにその位置を推定するだけである。詫磨氏の所領は、蒙古合戦前すでに500余町はあったというが、蒙古合戦でさらに拡大し、建武内乱から南北朝争乱期の勲賞により、肥前、筑前、筑後から播磨、遠江などにも地頭職を得、最後には筑後と伊勢の守護職に補任されて、守護大名に上昇する大勢力となり、南北朝から応永頃までの全盛時代を現出することになる。

さて叙上熊飽地区の御家人や非御家人たちが、蒙古合戦や霜月騒動でいかに活躍したか。蒙古合戦に菊池、竹崎、大矢野などととも詫磨が従軍したことは、史料に明らかであるが、建治の注進状に見る17名はどうであったか。このうち少くとも5名は熊飽地区の居住者と見られるが、彼等の従軍は不明である。ただ河尻泰明だけは、建治の兵衛尉から弘安10年頃の左衛門佐への官途の昇進によって、弘安合戦か岩門合戦に参加した可能性が見られる。

鎌倉幕府滅亡——建武内乱期の熊飽地区の勢力分野は、北の鹿子木・三池、西南の河尻、東南の詫磨の4つにしばられよう。このうち三池は南北朝には武家方で大いに活躍しており、鹿子木西荘の所領や地頭職も保持していたと考えられるが、この地方での活動は史料不足で判然としにくい。鹿子木も史料乏しく、この間の十分な事情がわからない。ひとり詫磨は飽田郡鹿子木東荘と詫磨郡全部をほとんど制圧するほどの勢力となっていたであろう。元弘3年(1333)3月菊池武時、阿蘇惟直の九州探題館攻撃には加わらなかった詫磨も、5月の討滅には参加したので、恩賞として幸秀が神蔵荘の所領を安堵され、宗直が大浦・皆代の地頭職に補任されている。この地頭職は鎌倉幕府最後の肥後守護規矩高政の没官領で、大

浦は天草郡、皆代は飽田郡にある。

建武中興破れて南北朝の争乱期になると、小代・合志・河尻・詫磨など肥後北部の諸豪は武家方につき、鹿子木も同様であったと思われる。一方宮方は菊池を中心に阿蘇・宇土などの勢力にすぎない。このうち菊池は肥後と云うよりむしろ九州の宮方勢力の中心であったので、その本拠隈部（隈府）は、九州武家方の攻撃にさらされた。しかし隈本も国府の所在地だけに、やはり争奪の目標となり、建武政府によって肥後守に任ぜられた菊池武重あるいは代官が、国府に居たであろうが、建武3年（1336）には足利の一族今川助時が国府に入り、国府西方の関門「市田口関（後の一駄橋）」は、荒尾の小代宗重によって警固された。その後武重は延元3年（1338）国府の奪還を試みたが成功せず、宮方勢力は余り振わなかった。これに対し武家方は、詫磨が諸所の地頭職を得たうえに、貞和5年（1349）には宗直が筑後国守護職を与えられるにいたり、河尻幸俊も貞和3年（1347）足利尊氏によって肥後国守護職に補任され、肥後守を称するほどの優勢を示した。しかし貞和5年9月尊氏と直義の争に捲込まれた直冬が、九州に下り河尻氏に迎えられると、小式頼尚も直冬に与し、正平3年（1348）征西將軍懐良親王を迎えていた宮方と、三者鼎立の複雑な様相を呈してくる。肥後に於ては河尻幸俊・詫磨宗直・合志幸隆は直冬・小武方に属し、鹿子木は一色に従った。そのため観応元年（1350）4月には鹿子木大炊助（貞基）が拠った合志竹迫城が、河尻・詫磨から攻め落されている。しかし直冬が宮方と一時妥協したため、河尻が宮方に降り、態度のあいまいであった阿蘇惟時も降り、翌年には一色もまた降服し、3年には直冬が長門に出奔し、小武も降って、征西府の黄金時代となる。

これより先征西將軍の入国によって勢力を増強された宮方軍は、正平3年（1348）に守富、隈牟田、河尻、詫磨、鹿子木、須屋など武家方の拠点を焼払う戦果を挙げていたが、直冬の下向によって情勢が混乱した後、正平10年（1355）一色が京都へ去ると、宮方は武家方の小式頼尚と対抗することになり、正平14年（1359）筑後川の戦に、征西將軍・菊池武光の宮方軍は、少武軍に大勝し、16年には征西府を太宰府に移した。

優勢な宮方勢力も、応安4年（1371）今川了俊が九州探題として下向してくると、次第に制圧され、菊池氏も武光・武政が相次で歿し、その勢力は弱体化した。後を嗣いだ武朝は今川に対する方策として、阿蘇大宮司との提携を強化するため、天授2年（1376）2月には近見村半分地頭職を阿蘇社に寄進して祈願した。この下地中分の跡と思われる所が今も伝えられ、熊本市近見町守田悦子氏方屋敷が「阿蘇領」、同家西の境の溝から西を「守護領」と呼んでいる。武朝は同年6月には後征西將軍良成親王とともに、国府に陣して了俊や大内義弘に備え、了俊の弟仲秋と戦っている。越えて4年9月には、將軍宮・武朝軍は、今川・少武・大友の武家方軍と、詫磨原に戦って大敗させ、宮方最後の花を飾ったが、以後宮方勢力は衰えてゆく。この間詫磨氏は終始武家方として勢力を伸ばして、守護大名化してゆく。河尻氏は直冬の九州退去以後、菊池氏と行動を共にし、弘和元年（1381）菊池の本拠が陥落した後は、河尻氏は宇土氏とともに良成親王を守護した。しかし元中7年（1390）河尻・宇土も陥り、良成親王・菊池武朝ともに名和氏の八代へ逃げ、宮方は勢力回復ができぬまま、元中9年（1392）の南北合一を迎えることになる。

南北合一の後も良成親王は南朝回復運動を続けたが、菊池武朝・阿蘇惟武らは、翌明德4年（1393）10月には、幕府の命を奉じ、その地位も確認されて、武朝の子孫は、兼朝・持朝・為邦・重朝と、代々肥後守と肥後守護職を継承してゆく。而して菊池氏の本拠は隈府にあり、応永27年（1420）には河尻実昭が叛き、兼朝自ら討伐する事件が起きた。このため菊池氏は隈本へ進出する必要を感じたのであろう、持朝は応永33年（1426）隈本に成道寺を創建し（熊本市花園7丁目）、菊池正観寺の寰中元志を請じて開山とした。持朝の子為邦、孫重朝——文安から文明の頃は、肥後も菊池氏も平穏な時期であった。とくに重朝は学問を好み、老臣隈部忠直の好學と相俟って、菊池の文運はとみに興り、文明8年（1476）隈本藤崎八幡宮において一千句、13年には隈府において一万句の連歌を興業した。また隈府に聖堂を建て、同9年には中央の大乱を避けて下向した桂庵玄樹を招いて釈奠を行っている。

詫磨氏の全盛期は応永の頃であると考えられるが、ここに菊池系詫磨の問題がある。熊本市本山町から清水町高平に移転した浄国禪寺墓地に、詫磨氏三代の墓がある。近世建立の墓碑であるが、菊池武澄嫡男武照、同二男詫磨別当太郎武元、武元嫡男詫磨別当太郎武吉の名と、嘉慶2年、明德5年、永享12年の忌日が刻まれている。事蹟通考系図では、武元の子守武も詫磨別当太郎と称している。この菊池系詫磨と大友系詫磨とどう結びつか、また菊池氏でありながら「嘉慶」の北朝年号であるなど、疑点が多いが、のちこの系統と称する武包が、菊池氏を嗣ぐことになる。

この時期には隈本城が出現する。熊本市南高江町光顕寺は高江城の跡という。寺伝では城主石浦経成が、仁安3年（1168）に茶臼山に移ったとの甚だ古い伝承がある。文献で隈本城の初見は、永和3年（1377）の来島文書である。その位置は不

明であるが、南北朝の争乱期に茶臼山（今の熊本城地）が一拠点となったであろうことは、容易に肯ける。今の熊本城の始まりは、菊池氏の一族出田秀信が80町を領して、応仁年間（1467～68）茶臼山東端に築城したことによる。現在の千葉城（NHKの場所）である。その後明応5年（1496）鹿子木寂心が楠原城から進出して、茶臼山西南麓（今の古城）に築城した。当時寂心は飽田・託磨・山本・玉名に560町を領していた。

肥後の戦国争乱は文明16年（1484）に始まり、菊池氏のもつ守護職争奪が展開する。この年3月相良為統は八代に進出し、その応援を得た宇土為光が、守護職を要求して挙兵し、重朝に伐たれた。為光は重朝の叔父である。敗れた為光も、文亀元年（1501）重朝の子能運を追って守護職を奪ったが、2年後にはまた奪回され、為光は誅された。能運の死後菊池の重臣たちは、永正元年（1504）一族政朝を迎えたが翌年これを廃し、国衆84人の連判誓紙をもって、大宮司阿蘇惟長を迎え、惟長は菊池武経と改名して、阿蘇系の守護職となる。この84人中に鹿子木・立田・出田など隈本周辺の国衆の名が見える。永正8年（1511）武経は阿蘇へ還り、前記託磨武包が迎えられ、さらに同17年（1520）には豊後の大友義鑑の弟重治（義武）が迎えられて、肥後国守護となる。

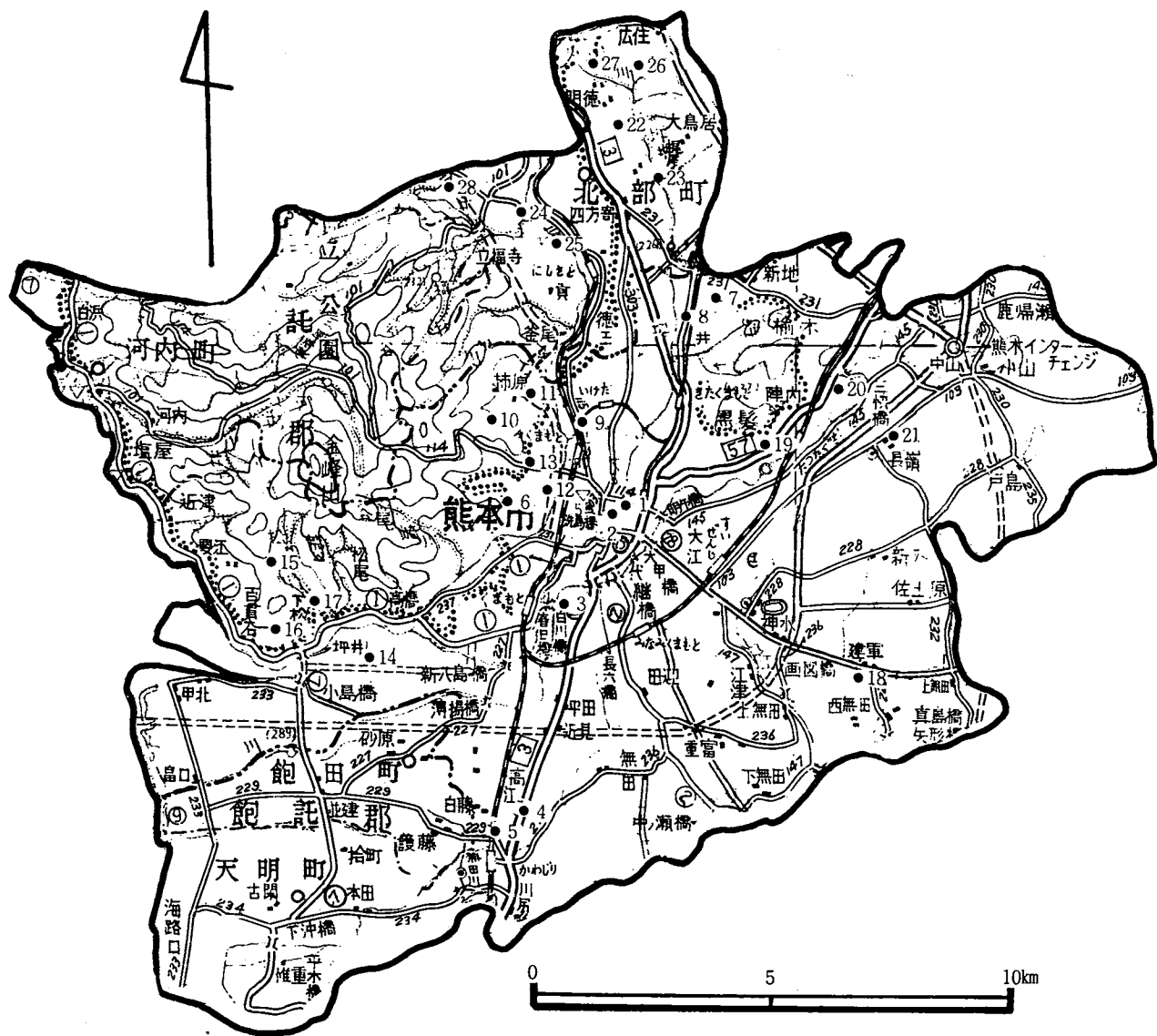
大友氏は義鑑の父義長のとき永正13年（1516）頃から、鹿子木寂心や田島重賢らを通じて肥後に干渉しはじめていたが、天文3年（1534）に菊池を追われ、八代の相良義滋に頼っていた菊池義武が、天文19年（1550）寂心の孫鹿子木鑑員や田島宗意に推されて兵を挙げると、大友宗麟は部将を派遣して隈本城を伐ち、さらに金峯山中の激戦で義武を敗走させた。翌年宗麟は兵2万3千を率い、延征して肥後を平定し、自身が肥後の守護を兼ねた。これによって鹿子木は隈本城を奪われ、城親冬がこれに代り、鹿子木は上代城（熊本市城山上代町）に退いたようである。

大友の肥後支配も永禄になるとゆらぎ始め、菊池の三家老隈部・赤星・城の争いは、肥前龍造寺の勢力を導入することになり、天正5・6年の龍造寺の攻撃により、隈府城は陥落した。とくに天正6年（1578）日向耳川の敗戦によって、大友勢力は肥後から後退し、肥後北部の諸豪は龍造寺に属し、一方島津が南方から肥後に侵入してくることになる。天正7年島津義久は天草氏を降し、城親賢の隈本城に援兵を送ったので、翌年大友方の阿蘇大宮司惟将は、輩下の御船城主甲斐宗運を隈本に侵入させ、島津に通じた城親賢・宇土顯孝の軍を白川の且過瀬や託磨原に破った。このとき鹿子木は大友方に従った。翌年島津は八代の相良義陽に甲斐を討たせ、義陽は下益城の「響の原」で戦死した。天正12年（1584）島原半島の戦で龍造寺が島津に敗れると、肥後北部の国衆も島津に降り、13年から14年にかけて、阿蘇氏の勢力下にある両益城の諸城も陥落して、島津の肥後統一は完成し、翌15年（1587）秀吉の島津征伐となって、肥後の戦国時代は終結する。

最後に小城主や国衆の老臣たちで、戦記や地誌類また『古城考』に名を残し、且つ金石文で確認できる者を挙げよう。鹿子木の家臣に小佐井永人、久布白対馬守、今福民部、大友系には清水町方面の板碑に見る賀来吉信、同正直や緒方正久があり、上南部には弓削城主石坂石見守が見られ、何れも大永から天文頃の人物である。

（森 下 功）

熊飽地区



- | | | |
|--------|----------|----------|
| 1 千葉城 | 11 北島城 | 21 長嶺城 |
| 2 古城 | 12 中尾丸城 | 22 楠原城 |
| 3 本山城 | 13 井芹城 | 23 城が辻城 |
| 4 高江城 | 14 上代城 | 24 妙見城 |
| 5 川尻城 | 15 上松尾城 | 25 赤水城 |
| 6 島崎城 | 16 下松尾城 | 26 井上城 |
| 7 亀井城 | 17 檜崎城 | 27 小糸山の館 |
| 8 打越城 | 18 健軍陣内城 | 28 荒平城 |
| 9 池田城 | 19 立田城 | |
| 10 柿原城 | 20 小山城 | |

熊 本 市

ちばじょう
千葉城

(熊本市千葉城町)

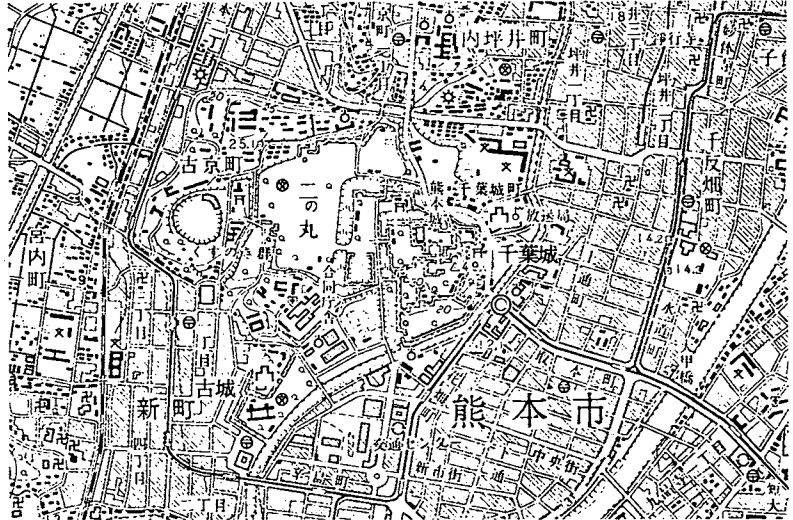
応仁(1467～1469年)・文明(1469～1487年)の頃、出田秀信が築城し、その後鹿子木寂心が居城したが、明応年間(1492～1501年)に寂心が隈本城(古城)へ移転するにおよび廃城になったという。

NHK九州本部の敷地が城跡とされる。

現在、城跡と茶臼山の間には県道が通っているが、これはその昔、現県道を流れていた玉川の跡で、玉川が堀切の役割を果たしたことになる。

一方、城跡の東側を流れる坪井川は、昭和初期まで東へ大きく屈曲していた事から当時の城の範囲は付属幼稚園一帯を含んだものであった事がわかる。

なお、城跡周辺に室町期と推定される六地藏の残欠部がある。



こじょう

古城(隈本城)

(熊本市古城町)

明応年間(1492～1501年)に鹿子木寂心が築城したものとされ、その後城氏・佐々成政・加藤清正の居城となったが、慶長年間(1596～1615年)には熊本本城の二の丸に組み入れられた。

城跡は茶臼山から南西に突き出した丘陵地末梢部(標高16.1m・新町1丁目よりの比高5m)に位置しており、現在は、学校・公園・住宅等に利用されている。

城跡は三郭から成っており、茶臼山丘陵との間には堀切がある。以前は水濠も存在していたが、昭和初期にその一部が、昭和28年には水害の排土で残り部分が埋めたてられ、現在、民家と公園になっている。

もとやま
本山城

(熊本市本山町)

すでに元弘年間(1331～1334年)には詫麻宗直が在城していたと伝わる。大友系詫麻氏をはじめとして、宗氏・菊池系詫麻氏の居城を見たが、永祿四年(1561年)、赤星氏に攻められて落城したという。

城跡は白川が西方向から南方向へカーブを描く屈曲部の東側に堆積した自然堤防上の小丘陵に位置していたと伝わるが、すでに昭和七年の『熊本市史』所収の写真でも面影は見られない。白川改修によって旧地形はまったく失われた。今はわずかに城跡伝承地周辺の住宅に「城の本」の



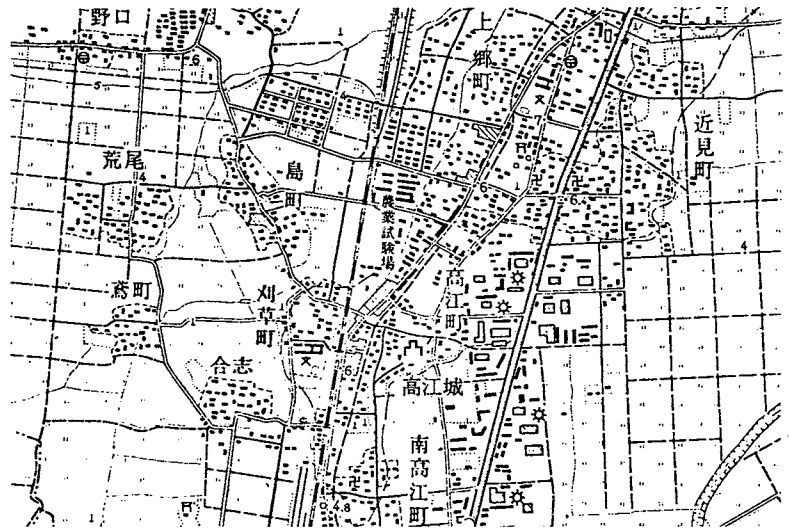
小名が残るだけである。城跡に関連するものとしては、当地より清水町高平打出に移転した浄国寺に菊池系詫麻氏の墓がある。

^{たかえ}
高江城 (熊本市南高江町)

久安六年(1150年)肥後国司として下向した石浦経国が、築城したものと伝えられる。その後、同経成が仁安三年(1168年)に茶臼山へ城を移し、城跡を天台寺院にしたという。

文献によって現在の光顕寺の地が石浦経国築城の高江城の跡であるとの伝承をもつだけで、城跡としての遺構はなんら見られない。ただ現住職の記憶によれば、かつて寺の周囲には濠がめぐられ竹藪があったという。現在寺の南には「陣屋敷」「せんだんばば」の小名が残っている。

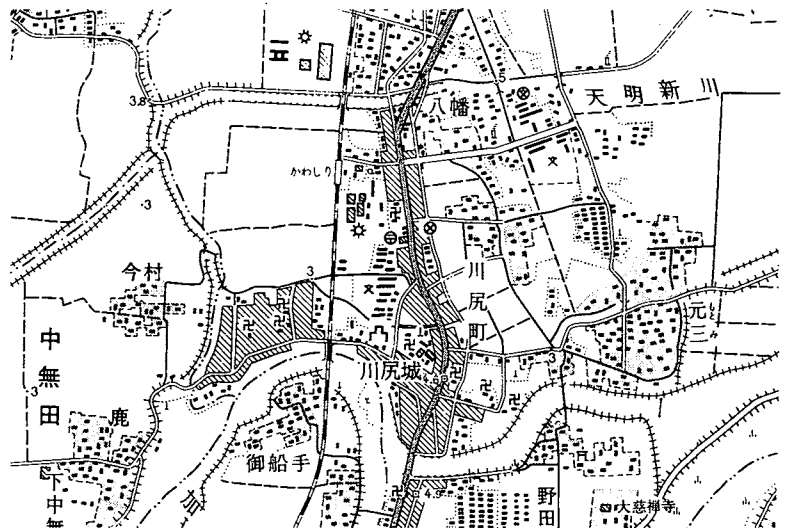
なお、廃城後天台寺院となった頃の塔礎と伝えるものが手水鉢の下にあり、鐘樓の梵鐘は鎌倉時代の作と伝えられている。下り藤の紋は石浦氏の家紋とも言う。



^{かわしり}
川尻城 (熊本市川尻町外城)

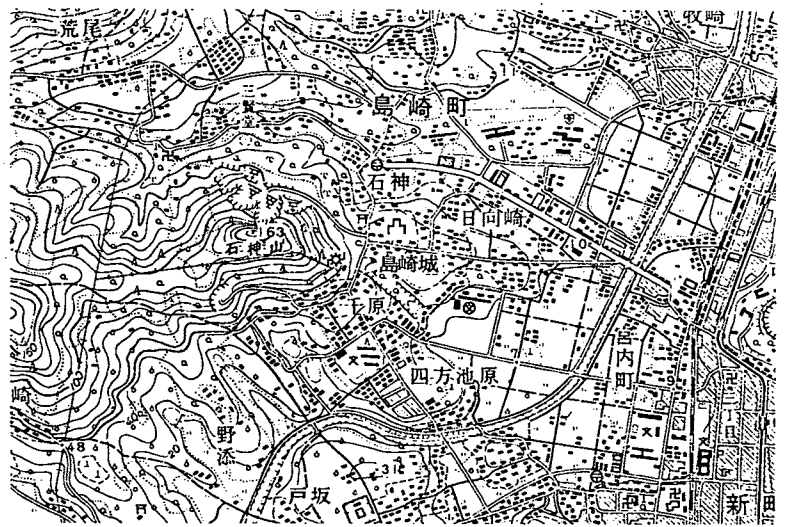
河尻貫明が築城し、その後長く、河尻氏、代々の居城になったが、加藤清正の時代になって加悦飛騨守が川尻城代を勤めたという。元和二年(1616年)の一国一城令によって、廃城になったものと思われる。

城跡は川尻町にあって「^{とじょう}外城」と称される地域で、南は加勢川、東は市公会堂、古城神社、川尻小学校の線、西は天明町の^{いぬずみ}乾角まで、^(注1)鹿兒島本線を越えて、東西500m、南北250m程の範囲であったと推定される。平城で南の加勢川を自然の濠とし、東・西・南の三面には水濠がめぐっていたものと思われる。なお、公会堂裏には、かつて「^{はすぼり}蓮堀」と称される沼沢地が存在していた。



川尻町(853番地)在住の小坂享氏宅には「河尻白鷺城跡全図」の写が残っている。^(注2)

大慈禅寺には「慶長□十月、城用、藤原工作」の銘を有する半鐘が伝わっていたが、昭和48年、盗難にあい紛失した。



(註1) 地名の由来は城の乾(西角)から来たものか。
(註2) 文化三年(1806年)作成。

しまぎ 島崎城 (参考地)

『城郭全集』第15集に熊本県下の城として、この島崎城の名があげられている。ただし、全集の説明では宇佐氏の居城であるとしながら、交通は豊肥線竜田駅で下車すると記し、その実態をつかんでいない。島崎に宇佐氏の居城があったと推定するならば、それは、石神山(標高162.9m)の東側麓の石神神社付近であろう。参道右脇に宇佐氏の碑が江戸初期に建てられており、当時、この地において宇佐氏に関連した伝承があった事を伝えているからである。なお、宇佐氏については藤崎宮に島崎荘の内の土地を寄進した文書があるので、このあたりの領主であった事は明らかであろう。

かめい 亀井城

(熊本市清水町亀井上屋敷)

城主は、亀井(若狭守)光総と伝えられる。

光照寺の建っている所が城跡であるといい、住職は城主の子孫という。

寺の敷地は菊池電車の線路面より数m高くなっており、北側部分には「ウシ堀」と称される凹地があり、さらにその外側に「外堀」と伝えられる深い溝がある。

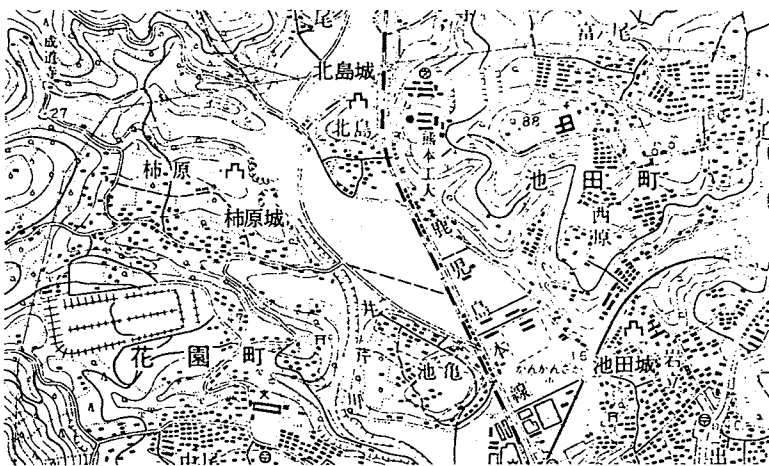
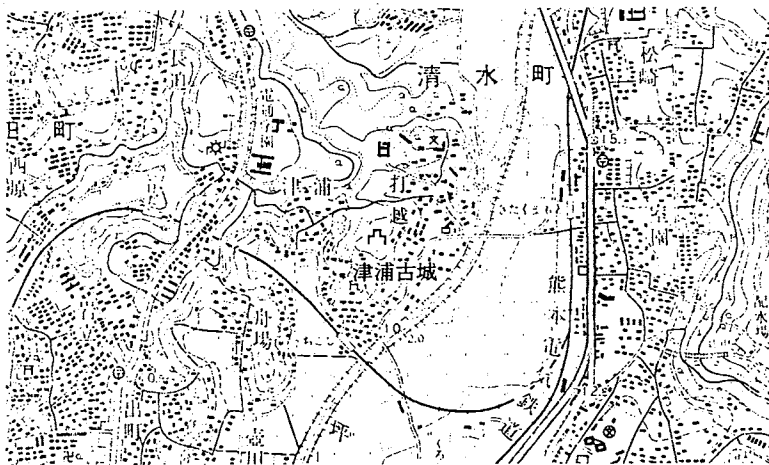
なお、寺の周辺には妙見や湧水池とともに、天文二年(1533年)の年号が読める板碑も存在する。



つうら 津浦古城(打越城)

(熊本市清水町打越)

『古城考』に「津浦に小き要害の跡あり打越天神の後の山なり天福寺住持の木像今宮と號するあり、城主時代未考」という記事が見える。したがって、この記事からすれば、城跡は現在の打越神社あたりに存在する事になるが、当該地には城跡に関連あるような伝承や地名等は何も残っておらず、また外観的にも城跡と思われるような所は存在しない。したがってあえて同地内において城跡の存在を考える場合には、地形的にみて打越の集落の東壁をなすかのように南北方向へ走る帯状形の丘陵地(標高40m・集落よりの比高20m)を参考地としてあげる事ができる。すなわち当該地の背面は削平された平坦地となっており、丘陵斜面には階段状地形が観察される。又、北側の野首にあたる所には堀切を利用したと思われる凹道も走っており、ある程度、城跡としての条件を満たすようである。



いけだ
池田城 (熊本市池田町)

城主不明。『古城考』は所在地について「今や城跡は大木氏の立山の内にあり」と記している。

現在までのところ確定は出来ないが、『古城考』の記事から今日の池田小学校の敷地が、城跡の所在地と推定される。

小学校敷地はもと大木氏の所有地であったし、また当該地は西方へ突き出した方形状の丘陵地末端部でもあり、城跡としての条件は十分といえよう。なお、野首にあたる東側を抜ける道路を堀切跡と見なす向きもある。しかし、校地は全く削平されており、地元には何の伝承もない事からこれ以上、推論の余地はない。

かきばる
柿原城 (熊本市花園町)

『古城考』によれば、天文年間(1532～1555年)の城主は鹿子木鑑員という。

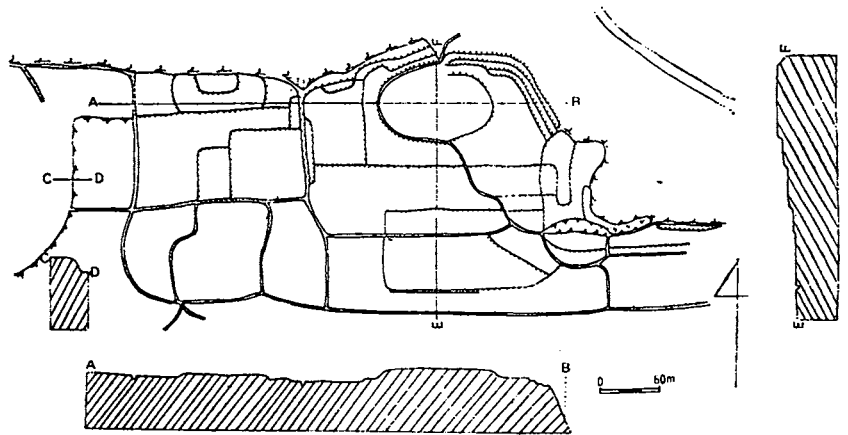
天正年間(1573～1592年)に至って、城氏(隈本城主)が城番を置いたらしい。しかし、地元では一般的に鹿子木寂心(鑑員の祖父)の隠居地として語りつがれてきた。

柿原地区の北側一帯に広がる丘陵地(北側と南側については20m近い比高がある)に、「城の春」という小名が残っており、当該地が柿原城跡と伝えられる。丘陵地における最高所は、楕円形の平地(北東方向に主軸を呈し、長径120m・短径70m)となっており、地元の人はこの地を本丸跡という。顕著な遺構としては、丘陵地東端に「堀畑」と称される空堀(長さ60m・底幅15m)がある。空堀はその端が民家の敷地によって寸断されている(工事の際に空堀からは、鎌倉期のもものとみられる白磁片が多数出土した)ものの、その痕跡をたどれば、丘陵地の東側麓(小名・城下)へ下る道となる。『古城考』は「城下に長町・城の下・平小路等の地名あり」と記している。

空堀は登城道の一部をなすものであったのだろうか。

城跡の南側にひらけた柿原集落に、「天神堀」・「小路の屋敷」と称される所がある。両者の関係は豪族屋敷とこれを囲む堀であったろうと思われる。現在も天神堀の一部が残存している。その他、城跡の西側、山続きの高台に「城さんの屋敷」という呼称が残っており、裾部からの登り道(凹道)も「城さんの坂」と称されている。集落内には、享保・天文などの年号を有する板碑もある。

当該地は、宅地化されつつあるので注意を要する。



柿原城 略測図

きたじま
北島城 (熊本市池田)

城主不明。鹿児島本線をはさんで、東側対岸に熊本工業大学を望む独立小丘陵(標高36m前後・西側水田面よりの比高20m)に位置している。

城跡は東側三方を井芹川流域の水田地帯に囲まれている。

丘陵の背面は平坦地で畑地となりその一隅には天満宮の敷地も見られる。

しかし、丘陵南側の広い緩斜面には人家が数多く建ち並んでおり、城跡の面影は残っていない。

なかおまる
中尾丸城 (熊本市花園町 参考地)

菊池氏の一族であった井芹氏の居城という。

城跡は本妙寺北側の低平な丘陵地に位置するものとされ、垣の内公民館の一角を本丸跡と称している。

大正6年の「託麻北部内に於ける史蹟並ニ天然記念物調査」には城跡を「民有地第一種、一反四畝十三歩」と記す。

城跡に関連あるような遺構は何も観察できない。わずかに「菊池守武重墓 先祖代々諸精霊之塔」の銘文のある文政七年(1824年)の供養碑が残るのみである。

現在地を城跡とする事に疑問をもつ人もいる。

いせり 井芹城 (熊本市花園町 参考地)

井芹の居城は、『肥後国誌』や『古城考』以来、中尾丸城をこれに当ててきた。しかしこの地は地形上、城跡としては不適當であり、『熊本市史』も、これに疑問を持ち「その城郭としての活動の歴史は全然不明である。而して現在の井芹部落の直西に在る恰好の台地などとの関係も全くわからない。なお、実地の踏査と史実の研究とを要する」と述べている。この「井芹部落の直西に在る恰好の台地」が、ここという井芹城参考地である。

この地は、花園小学校より井芹山王日枝神社にいたる丘陵地の末梢部分(標高20m・低地よりの比高15m)で、野首部分に凹道が走っており外観上、一つの独立区画(長さ100m・幅50m)となっている。

恰好の城跡又は居館跡といえる。当該地には、室町期と推定される宝塔、五輪塔の残欠部があり、久野氏宅(土地所有者)庭前にも五輪塔の残欠部を見る事が出来る。

しかし、確たる伝承に欠ける所から、あくまでも参考地にすぎない。

かみだい 上代城 (熊本市上代町城山)

鹿子木寂心築城ともその子親俊築城とも言う。また、寂心・親俊在城とも、今福民部が城代として在城したともいうが定かでない。一方、鑑員、鑑図についても記録はないが、在城の可能性がある。天文十九年(1550年)の落城は、菊池義武の味方をしたことによって大友軍に攻められた結果と推定される。

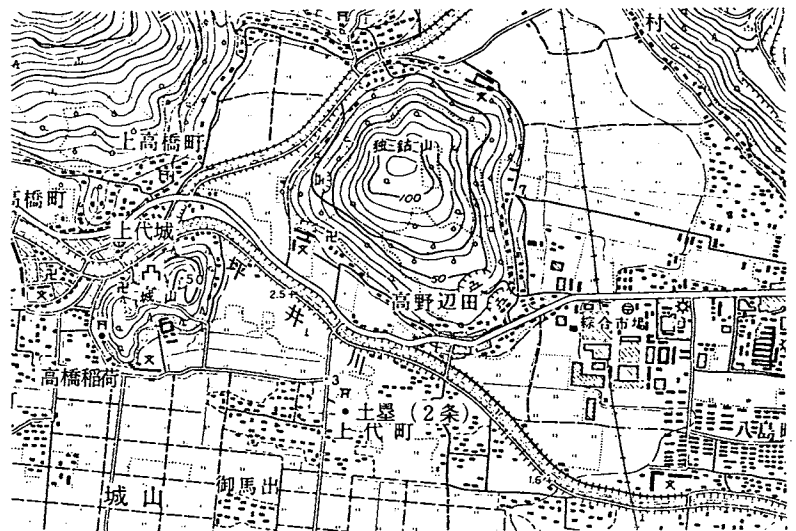
東西350m、南北250m程の「城山」と称される独立丘陵(標高50.3m・西側麓の集落との比高45m)に位置している。

丘陵の背面には東・西2箇所の峰があり、以前は峰を削平した平坦地もあったらしいが、現在は熊本市上水道貯水槽が設置されるとともに、墓地公園造城のため大規模な工事が行われたので、わずかに残る3条の堀切を除いては城跡のおもかげは失なわれている。

かみまつお 上松尾城 (熊本市上松尾町上松尾)

城主は志垣(土佐守)貞友であったが弘治四年(1558年)に病死し、その後の財産配分を契機に一族の勢力も衰退したという。

上松尾町地内の高台(標高86.7m・松



尾東小学校よりの比高約15m)に位置しており、中心部の小高い丘は現在墓地となっている。城跡は小学校敷地を含む範囲と思われるが定かでない。

しもまつお
下松尾城 (高城) (熊本市小島下町高城山)

地元では、城主を高城判官と称し、その墓というのが西山麓に建てられて(明治初期)いる。

判官は志垣土佐守と戦って敗れたと伝わる。

しかし一説には鹿子木寂心が上代城に在城の折、築城したものといひ、二男の鹿子木主膳を居城せしめたという。

権現山(標高273.2m)の南側末梢部(標高63.5m・千金甲の集落よりの比高約60m)に位置しており「高城」と称される雑木林である。山頂部は平坦地となり西縁を空堀が南北に走っている。なお、以前は北側鞍部に堀切も観察されたが、現在は、ミカン園のパイロット計画によってその大部分は埋められ一部に痕跡をとどめるにすぎない。

ならぎき
檜崎城 (虎御前の城) (熊本市小島下町檜崎)

城主不明。権現山(標高273m)の末端部にあたる通称檜崎山(標高79.0m・檜崎の集落よりの比高76m)の先端部に位置する。山は、果樹園に切開かれたために旧地形は失われたが、もとは堀切があり、割に広い平坦地が見られた。

けんぐんじんない たけみや
健軍陣内城 (健軍宮陳内城) (熊本市水源)

鎌倉時代に健軍大宮司の居城として築成されたものと伝わる。南北朝期に至り、阿蘇家臣、光永惟富が入城し、以後、光永氏代々の居城となったが、戦国時代に衰え、甲斐宗運の一族正運が光永氏にとって代った。しかし、島津惟政により正運は一代限りで滅びたという。

城跡は健軍丘陵地の末梢部に位置するものとされるが、第二次大戦中に水源地が設けられ、城跡一帯が三菱航空機工場の社宅となった。また戦後、泉ヶ丘小学校建設の際、敷地が削られたため、ほとんど平坦化し、現在では旧遺構を的確に把握できない。但し、水源地から広木へ下る所には水濠の名残りと考えられる凹地が存在する。また、水辺動物園より見ると水源地の西南端に崖線を認めることができる。

なお、城跡からは方形周溝墓・円形周溝墓、縄文土器等が出土している。



たつだ
立田城 (熊本市黒髪)

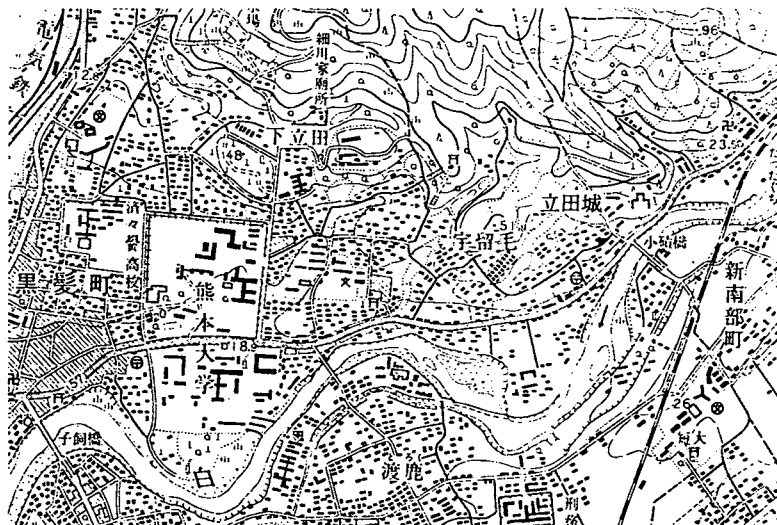
菊池氏家臣の立田重雄とその子、立田重徳(監兼)が在城していたが、天正十五年(1587年)豊臣秀吉の九州征伐の折、逐電したという。

城跡は、南側麓に白川の黄金淵を見下す立田山の丘陵末梢部(標高40m・黄金淵よりの比高約20m)に位置している。しかし、当該地には国家公務員(注1)の宿舎が建ち並び、さらに、その周辺は、市営墓地となっている事もあって何ら城跡に関するような遺構は観察されない。

立田氏の菩提寺という宝積寺の墓地には、重徳の墓と伝わる五輪塔があるが、これは逆修塔であり、重徳の墓としては疑問がある。

なお、昭和51年8月、城跡下を南北に150m程貫く地下道が古閑三博氏によって発見され、一時「城の抜け穴」ではないかと新聞紙上で騒がれた。これについてはまだ結論は出ていない。

(注1) 黄金淵の崖面には横穴が存在する。



**おやま
小山城** (熊本市小山町)

城主不分明。一説には城跡ではなく、天正九年(1581年)に薩軍が、合志郡の今石の城を攻めた時の陣跡ともいう。

小山(おやま)山(標高189.6m・南側麓の集落よりの比高110m)に位置し、山頂には「城床」と称される小規模な平地と、南北に走る幅3m、長さ15mの堀切が観察される。

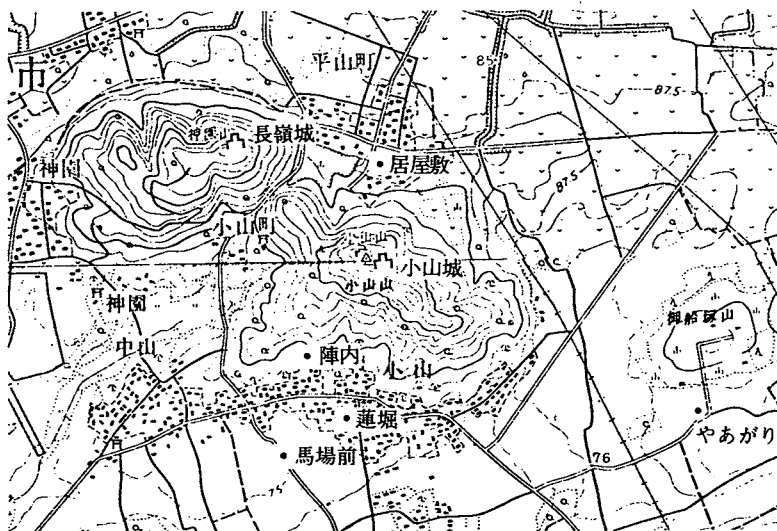
なお、堀切の西下100m余のところには深さ3m、長さ10m、幅5mの空堀があり、堀壁は野面積みの石垣で固めてあり、城跡の大手口と伝えられている。

南側麓の集落には「居屋敷」・「馬場前」という地名が残っており、「陣内」・「蓮堀」という小名を残す一隅もある。

なお馬場三則氏の御示唆によれば、小山山に加藤清正が築城を試みた事があるという。しかし当該地には築城の条件とされた百の谷(九十九の谷を数えるに止まったという)が存在しなかったので計画を断念したという。この他、集落周辺には「ひやあがり」・「百成り」と称される地域がある。

(注1) 水の利を得る必要条件だったという。 (注2) 兵がはって登ったという伝承に由来する。

(注3) 晒首を百個並べた所という。



**ながみね
長嶺城** (熊本市長嶺町下の山)

筑後守城主と伝わるが、家名年代とも不分明である。

神園山(標高186.3m)に位置し、西峰頂に周囲を溝でかこまれた東西26m・南北20m程の楕円形をした、たかまりがある。

この頂上から西へ下ると現在道路になっているところが、空堀跡かと考えられ、その西に神園山荘のある台地から西へ二段からなる小規模な平坦地がある。

飽 託 郡

楠原城 (飽託郡北部町大字楠野字城ケ下)

鹿子木貞教が築城したもので、その後、鹿子木氏代々の居城となったという。明應五年(1496年)に至り、鹿子木氏は隈本城に移転したので、その頃廃城になったものと思われる。

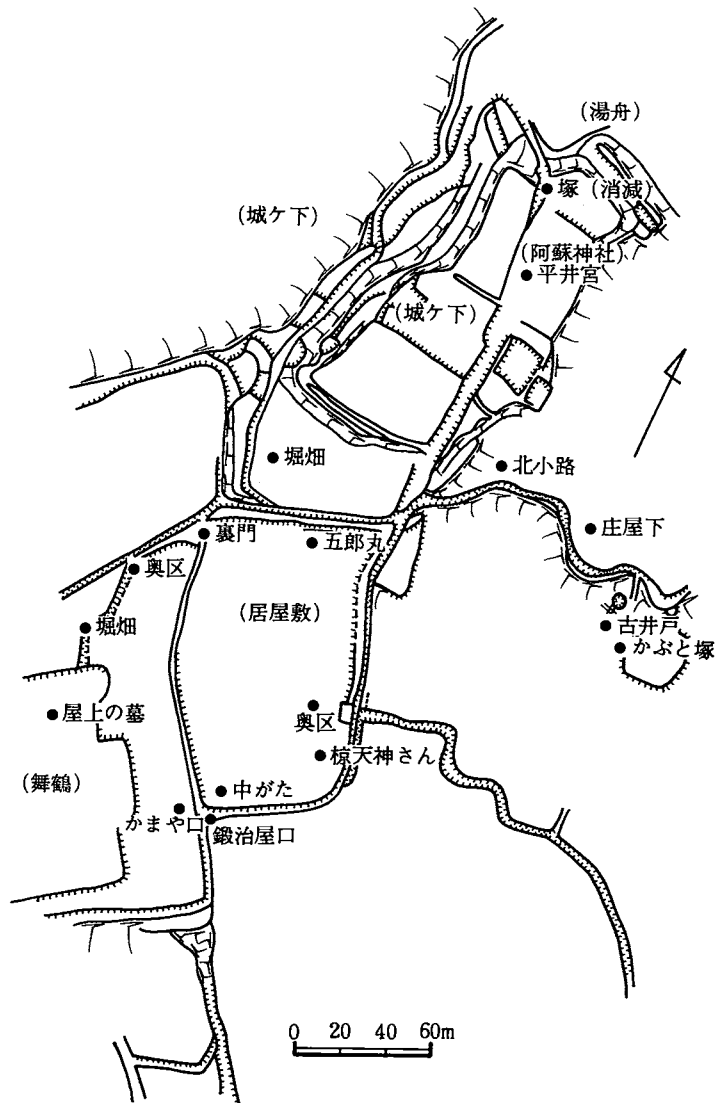
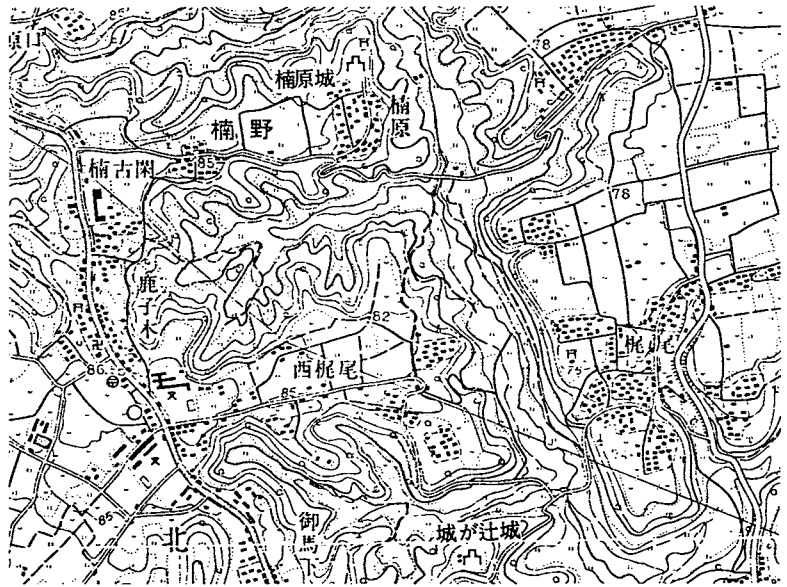
城跡は楠野地区の丘陵地末梢部(北東方向に主軸を呈し、標高75m・北側麓の水田面よりの比高約30m)に位置しており、現在、その中心部は楠野神社の社地(一部、雑木林)となっている。顕著な遺構としては、南西側の鞍部に残る堀切(長さ35m・幅16~30m)で、地元では「堀畑」と称する。また、堀の両岸には土塁が観察されるが、とくに北岸の場合は長さ23m・幅2m~4mを計り、高さはゆうに3mを越える大規模なものである。さらに堀畑の東側麓には井戸跡も認められ、「北小路」と呼称される水汲道も存在する。

一方、社地の北側は10数m先で段落ちとなり、5~6m下った所に土塁を伴う帯状の曲輪(東西17m・幅4~5m)が築かれている。曲輪の東端は高さ10m以上はあろうと思われる絶壁となっており、明らかに戦略的意図を持つものであろう。

なお、城跡の南西側一帯は「居屋敷」の字名を残す集落があるが、その内で最も城跡に近い部分に「裏門」・「五郎丸」・「中がた」等の小名を残す長方形の一隅(長径65m・短径40m)があり、同地の北縁と東縁には土塁もめぐっている所から居館ではないかと考えられる。この他、集落の西側一帯に広がる畑地には五輪塔(2基)と板碑(1基)を有する墓所があり、「尾上の墓」と称されている。

(注1) 現在は竹林と豚舎になっている。

(注2) かつては、井戸わくに大木(楠)の芯をくり抜いたものが使用されていたという。



(楠原城 略測図)

城が辻城 (飽託郡北部町大字四方寄字城ヶ辻)

城主は阿蘇氏家臣の西牟田常陸守という。

城跡は四方寄の地内にある、「城ヶ辻 (字名)」と称される丘陵地末梢部 (標高74.7m・北側麓の水田面よりの比高約40m) に位置しているが、全面町営住宅地となっている。したがって、城跡に関連あると思われるものは、丘陵地の北側斜面に残る田螺の貝塚のみである。

妙見城 (隆福寺城)

(飽託郡北部町大字立福寺城原)

『古城考』によれば、鹿子木氏の出城という。また「城中より水を汲みし道、今にありと云ふ」とも記されている。

西谷川と井芹川の合流点にあって、「城原」の字名を残す丘陵地の東端部 (標高約63m・南西側麓の道路面よりの比高約26m) が城跡と伝わる。城原の背面には、2条の堀切によって仕切られた二区画から成る平坦地が観察され、地元の人ほとんどにこの二区画を「城床」と称する。とくに平坦地は舌状形 (南東方向に主軸を呈し、長径55m・短径35m) と台形 (北東側上辺20m・北西側下辺27m・幅25m) を呈しており、舌状形の平坦地部分には方形 (4m×5m) を呈するマウンドも観察される。堀切は、北側部分^(注1)を走る帯曲輪 (幅5~10m) によって一本につながっており、東側部分の堀切はその南端が縦堀となり丘陵地斜面を下る。

『古城考』に言う水汲道は城跡の南側麓を道路が通った事で消滅した。太郎迫の湧水が城の井戸として利用されたものと思われる。

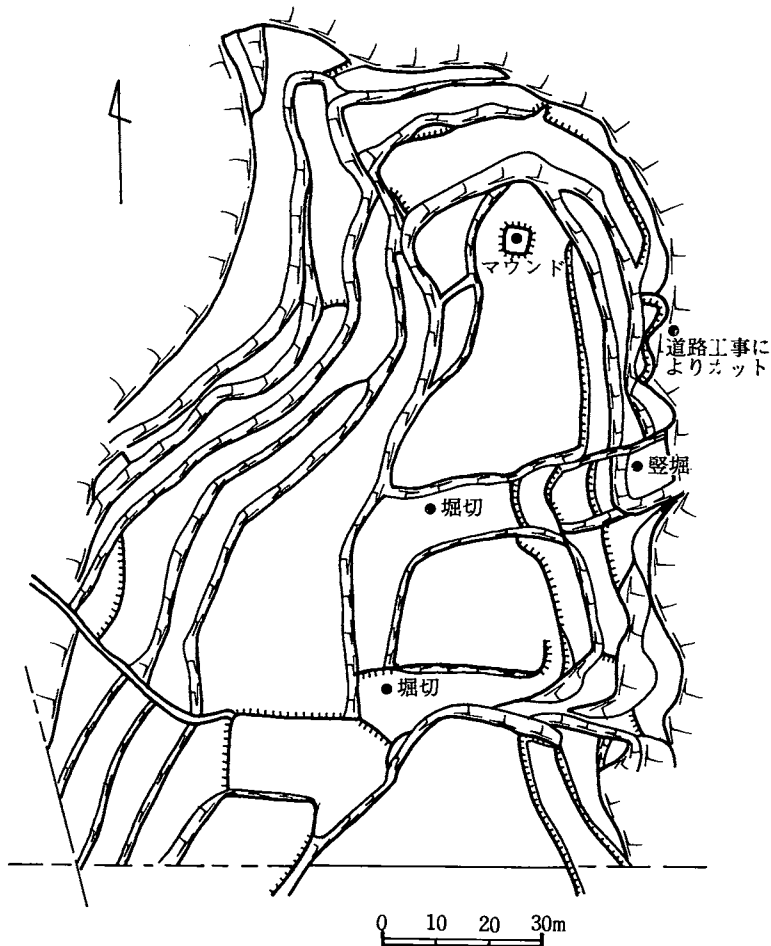
(注1) 高さ0.3~0.4m。

赤水城

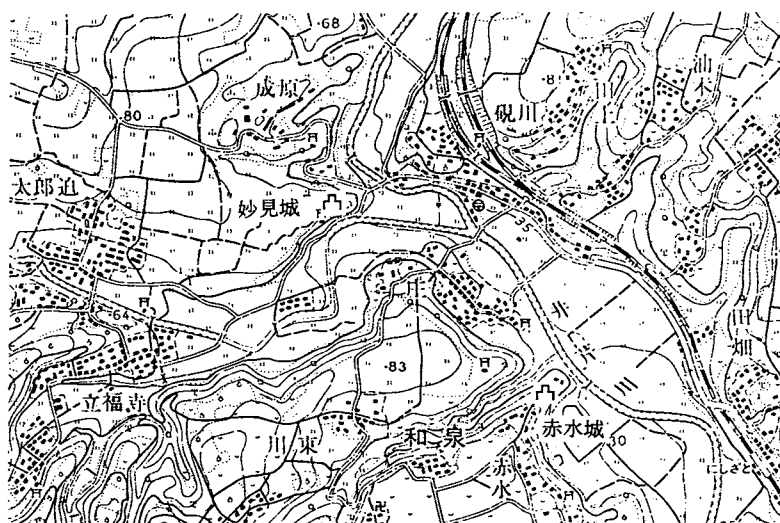
(飽託郡北部町大字和泉字崩の平)

鹿子木親員 (寂心) の家臣、岩崎恵林が在城したという。

城跡は、井芹川の上流にその裾部を覗かせる「崩の平」(字名) の丘陵地末梢部 (東西に主軸を呈し、標高60m・東側麓の水田面よりの比高約30m) に位置しているが、現在は開発されて民家の敷地や牛舎となっており、城跡に関連あると



(妙見城 略測図)

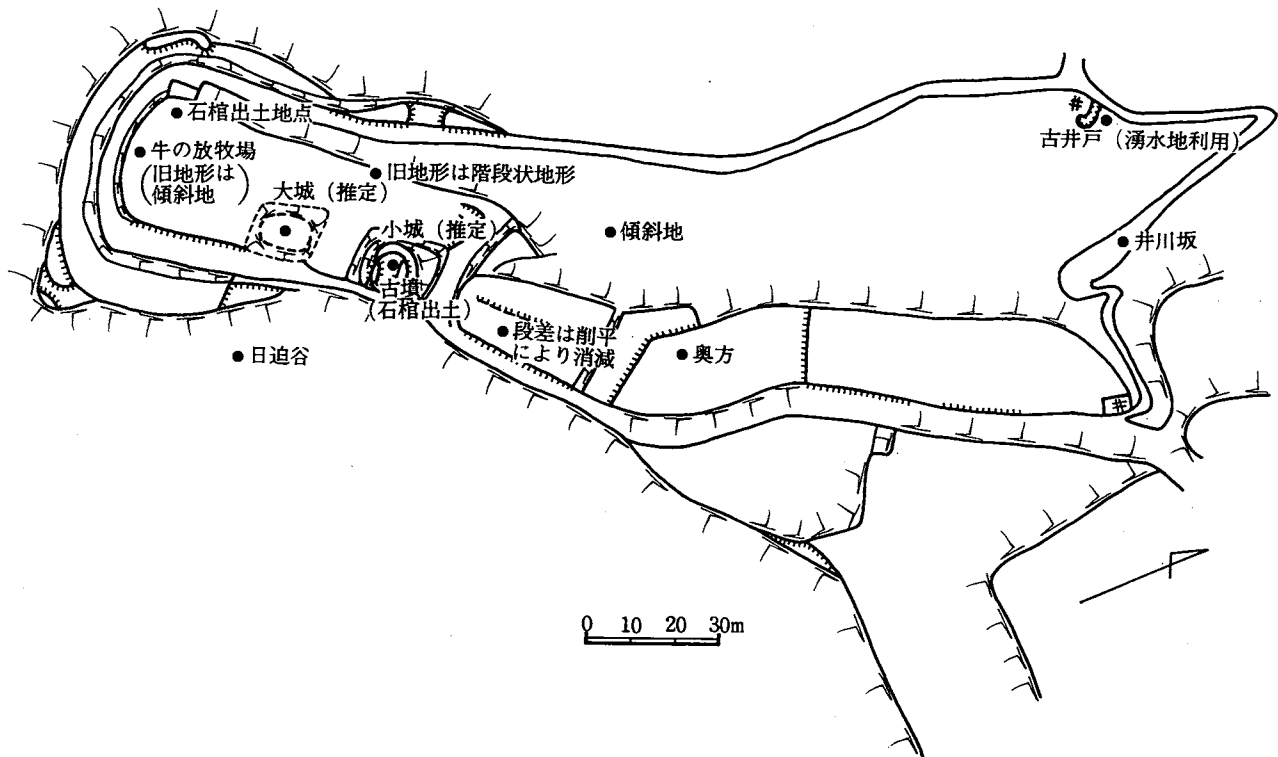


思われる遺構は、「貢楯山さん」と称される古墳西側の堀切の一部のみ（底幅6m・長さ14m）である。

古老によれば、古墳の東側には堀切をはさんで長方形の高台（長径10m・短径71m・高さ約4.5～5m）があったという。^{（注1）}すなわち、城跡は消滅した高台を中心に2条の堀切^{（注1）}と物見代りの古墳が存在していた事になる。なお、城跡には「大城」「小城」が存在したという伝承があり興味深い。

城跡の西側一帯は集落になっているが、とくに城跡寄りの一隅には「奥方」という小名が残り、古井戸も観察される。なお、城跡の南側麓には湧水池があり、「いがわ坂」と称される水汲道が集落から下っている。

（注1）現在は堀切の立ち上り部分が古墳裾部に残るのみで、高台は削り取られて家が建っている。

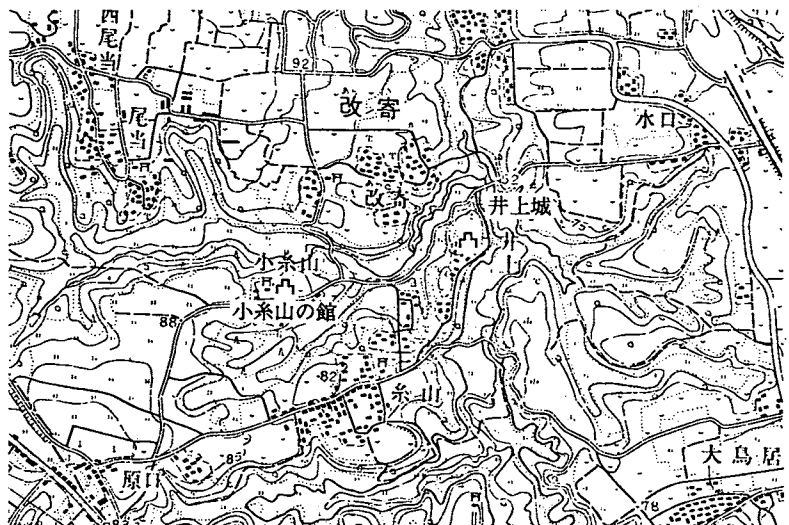


赤水城 略測図

井上城 (飽託郡北部町大字改寄字井上)

城主不明。一説には鹿子木氏が在城したともいうが定かでない。

城跡は丘陵地末梢部（標高77m・北東方向に主軸を呈し、東側麓の水田面よりの比高約30m）に開けた「井上（字名）」の集落に位置しており、地元の人々は集落の北東端の、空堀（長さ17m・幅5m）とL字型の土塁によって囲まれた台形状の微高地（高さ2m前後・北東側上辺10m・南西側下辺20m・幅30m、観音堂が置かれている）を城跡と称し、『古城考』にも「城跡には観音堂あり」と記されている。しかし、集落内には「西の坂・東の坂」^{（注2）}



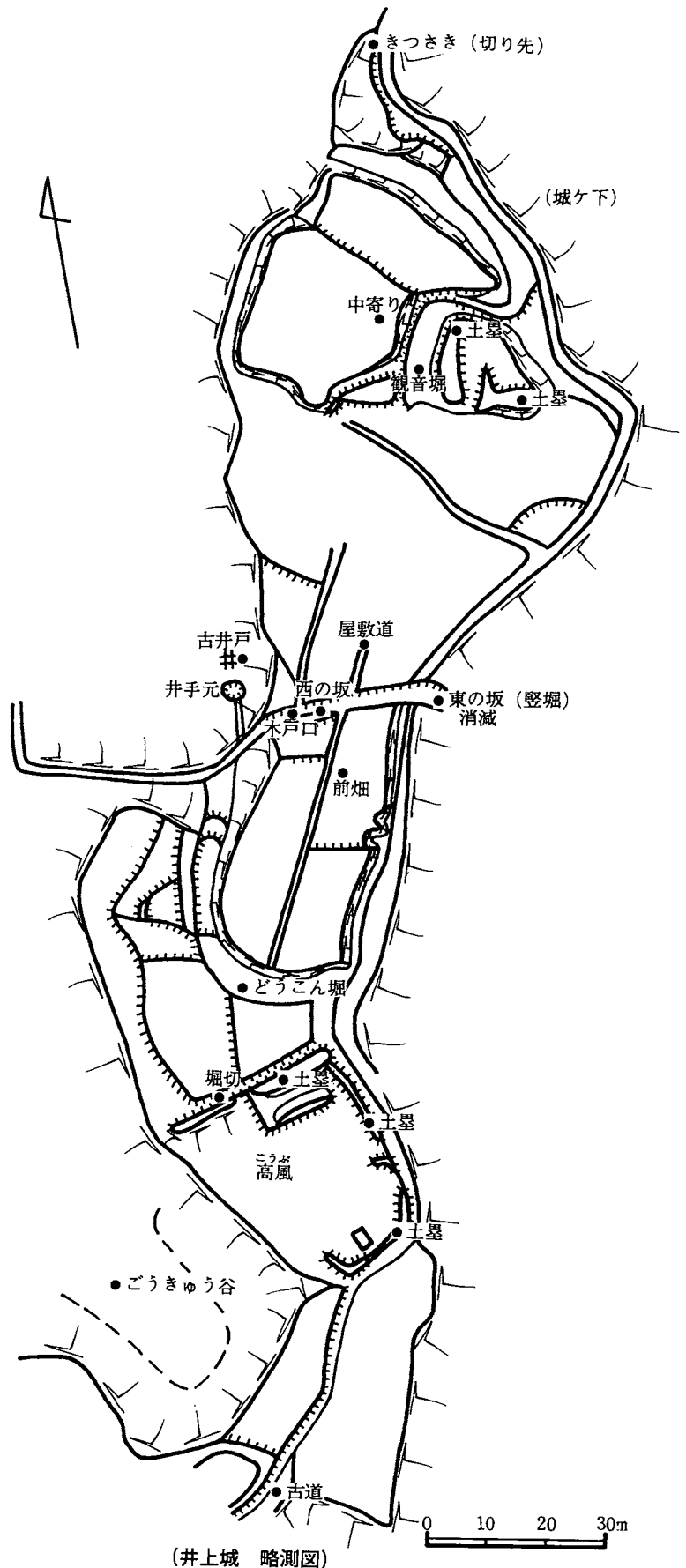
「どうこん堀」と称される空堀や豎堀が走り、「井手尻(注3) (小名)」には井戸跡も観察される。その他「上の段」・「中ン寄り」
「高風」という小名を残す一隅もあり、とくに「高風」にいたっては、土塁が西側(絶壁をなす)を除く三方を取り囲んでおり興味深い。

この事から、城跡は丘陵地に築かれたいわゆる平城の類で、井上の集落全体が一つの城であると思われる。井上には小佐井姓を名乗る人が多い。

(注1) コーナー部分は削り取られている。今は北東側へ14m、南東側へ9m。

(注2) 以前は井上と植木を結ぶ古道でもあった。西の坂は堀切的なもので、東の坂は豎堀となっている。

(注3) L字型をした空堀(コーナーより北東側へ30m・南東側20m)と土塁を伴う堀切(長さ25m)を称する。

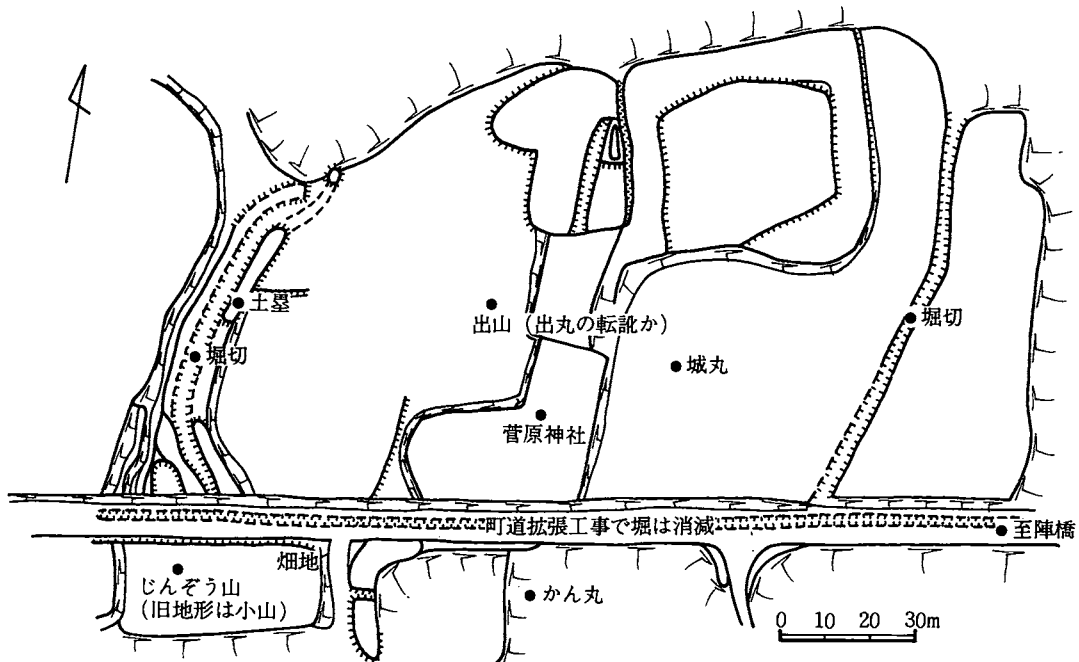


小糸山の館 (仮称)

(飽託郡北部町大字小糸山字居屋敷)

居屋敷(字名)の地内に「城丸」という小名を残す一隅があり、館が存在していたのではないかと考えられる。現在、「城丸」は民家の敷地となっている。また両側の微高地部分(畑地)を「出山(小名)」と称するが、「これは出丸が訛ったもの」と古老はいう。遺構としては、「城丸」と「出山」を三方(北側は絶壁)から取り囲む堀状の溝が挙げられるが、南側部分(注1)は近年の町道拡張工事で消滅した。なお、西側部分の溝には幅4mを計る土塁の残存部が二箇所(長さ23m・18m)に観察出来る。

(注1) 東西150m・南北95mの範囲である。



(小糸山の館 略測図)

荒平城 (飽託郡北部町大字万楽寺字神園)

田尻氏一族の居城と伝わる。『古城考』によれば、最後の城主は田尻主計頭という。同書はまた、廃城について「主計頭が時に当って、四海甚だ穏ならず、故に城を毀ちて其跡に台宗荒平城萬楽寺を建立す」と記している。

上屋敷集落の南東側に位置する山稜末端部（標高126.8m・集落よりの比高約35m）が城跡と伝わる。しかし山頂部分とその周辺は自然地形そのものであり、南西側鞍部にも遺構は存在しない。当該地は自然の山である。したがって城跡について考える時、当該地の山そのものよりも、東側麓に位置する菅原神社の地を注目すべきであろう。背後に山を負う杜地は東側が1m近い段落ちとなり、北側と西側には立福寺川が流れており、1つの独立区画をなす事がわかる。同地からは青磁片が出土した事もある。

なお、城跡について古老は、「荒平城は東古城と西古城の二つから成っていると伝え聞く」という。



益 城 地 区

益城郡には、塚原古墳群の存在や、肥後国国府の所在説などからみても、古代以来の肥後における有力な政治勢力の伝統が考えられる。

現在の上益城・下益城両郡は、中世における益城郡よりも広い範囲を占めている。現在の上益城郡の嘉島町・益城町の地は、本来詫磨郡に属し、六ヶ庄、木山郷(庄)、津森保を含んでいたし、下益城郡の小川町・松橋町は八代郡に属し、甲佐社領の南・北小川郷や海東村・守山庄・小野庄・豊福保を含み、その他、松橋町のうちの曲野は宇土郡に、中央村内の小隈野(勾)の地は八代庄の飛地でもあった。

又、本来の益城郡の地には、甲佐町を中心とする甲佐社領、中央村に豊田庄、御船町に甘木庄、城南町に隈牟田庄、富合町に守富庄、砥用町に砥用保、矢部町に矢部保などが存在していたものと思われる。

これら庄保を背景に、平安末より在地有力者の武士化の徴候が現われる。康治・天養年間より少し後の一二世紀の中頃の肥後国司のものともみられる報告によれば、益城郡の在地有力者らの国衙支配に対する反抗がみられる。木原広実が詫磨西郷木部保と、八代北郷豊福保の稲千束、米一六石を奪い、二男の秀実は郎従十余名を率いて国庁の近所の路頭で国司目代や雑色を射て傷を負わせている。又、田口新大夫は、従兄弟の高三太郎や乗月房らと共に、権介季宗私領の山手村の財物を奪い、在家に放火し、伯父砥川経盛死去に当り、官物弁済のために入部した国使近依に、嫡子盛延をさしおいて、乱暴し、官物稲米を奪い去ったというのである。このような乱暴の背景には統卒された武力があり、「大將軍広実二男秀実、郎従二人弥藤次、内五男、残十余人不知姓名」と示されるのである。又、田口を本拠とする在地領主であると見られ、砥川を名乗る経盛・盛延父子は、益城町砥川の在地領主であろうが、経盛と経延は兄弟であり、郡内各地に一族が住みついて、地域的な武士団が形成されて行ったであろうと思われる。

中でも、木原氏は益城郡内の在地領主としての足跡を比較的長く残している。養和元(1181)年に菊池隆直と共に反平氏の挙兵を行ったのは、南郷大宮司と木原盛実で、肥後国の阿蘇郡の阿蘇氏、益城郡の木原氏と、その郡の代表的な在地武士の統卒者であったとみられる。雁回山の名で知られる木原山の近くに木原氏の本拠があったかどうかは分らないが、木原氏の所領は、緑川上流の砥用方面にも及び、砥用、小北の両山が木原顕実の手によって甲佐社へ奉納されているが、次いで、同実澄は、木原山北端の守富庄を甲佐社領と認め、自分は下司の地位を保っていたようである。河尻氏は木原氏の系譜に属するとも云われるが、南北朝期における甲佐社領守富庄に対する執ような押領格護には、そのような伝統がからんでいるのかも知れない。

一方、益城郡の中で大きな勢力を有していたのは、肥後国二宮である甲佐神社であったが、同社は平安末以来、阿蘇社の末社でもあったので、鎌倉時代には他の末社と共に、北条氏が地頭職を得ていた。建久九(1198)年北条時政は、先に免田を片寄せて設定立庄された甲佐社領について、国衙方の異議についての見解を示しているが、次いで、義時は守富庄の神田違乱について、地頭代とみられる平田氏に注意している。先に木原氏によって寄進された砥用・小北の地頭代も北条氏の代官とみられ、彼らによる近隣地の中山・久木山・佐俣の押領が訴えられている。

或は、建長三(1251)年、甲佐社領の主な部分約三百八十町余の地は、北条氏の地頭請所と定められるなど、地頭の庄園支配権の合法、非合法的進出の傾向がうかがわれる。

一方では、在地武士領主内部での対立も、鎌倉後半期以来深刻な問題となり、南北朝内乱へと尾を引いて行くのである。六ヶ庄上島を苗字の地とした上島氏は、阿蘇氏の一族健軍大宮司職を継承した津屋惟盛の庶流であるとみられるが、父の譲与の当否をめぐる、わずかな庄内得垣名を兄弟で争い、又、後には上島郷惣領職と神崎庄勲功分の地が争われている。

元弘三(1333)年、足利高(尊)氏に着到状を提出している肥後国御家人と称する上島惟頼は、大宮司家とは別に、単独で上洛し、勲功の機会を求めたものと思われるが、このような小さな武士領主たちの置かれた境遇と行動は、蒙古襲来における竹崎季長の事情と同質のものであったと推測される。

蒙古襲来絵詞で名高い竹崎季長も一族との争いで、継承すべき所領を持たぬ無足の身であった故に、文永の役では主従五騎参加せねばならなかった。幸に、強引な訴訟が成功して戦功が認められ、海東郷の地頭の地位を得たが、その後の彼の寄進状の中に、豊福の地名「久具」(現松橋町)がみられるので、失っていた所領を苗字の地竹崎の近くに回復しているものと思われる。その他、六ヶ庄には小山郷地頭の早岐氏があり、隈庄五郎丸名では、地頭相良氏後家と領家の間に下地中分が行われている。

南北朝期の益城郡では、肥後国の中央近くに位置していたので、国外勢力の介入もあって、南北両勢力の対立・抗争がくり返された。特に、その前期において、活発な活動を示したのは、阿蘇大宮司惟時の女婿とされた惟澄である。阿蘇郡を北朝方大宮司坂梨孫熊丸に抑えられた惟時・惟澄は、甲佐宮の勢力を背景に益城郡に拠っていたが、消極的な惟時に対し、惟澄は積極的に南朝方として協力し、益城・八代・阿蘇・詫磨方面に転戦している様子を「恵良惟澄軍忠状」に読み取ることができる。この延元～正平初期の肥後は北朝方優勢のうちに、北の菊池、南の八代以外は南朝方の勢力は零落していたので、中央部の惟澄の挙兵は菊池・八代をつなぐうえでも大きな意味を持ち、北朝方との間に次々に合戦を生じた。益城郡内についてだけでも、延元二（1337）年の甲佐嶽の挙兵以来、豊田庄に打入って、北朝方守護の小式氏代官との山崎原の戦、隈牟田庄では探題の弟の一色頼行代官らとの森崎原の戦、矢部の越前守頼顕代官を追落とし、津森城も落している。翌延元三年には小式勢の甲佐攻撃を防ぎ、四年には矢部城を攻め落とし、田口向城では河尻・詫摩氏と戦い、砥用・味木庄でも戦った。次いで正平元（1346）年には守山関所が小式頼尚によって破られた時は、小川で戦い、翌二年には小野庄で城を構えた大友氏と戦い、三年には六ヶ庄に攻込んでいく。

このように南北朝前期の益城郡は、両勢力のいずれもが抑えたい肥後の中原の地のうちに含まれ、しかも庄園が錯そうして武士が割拠している上、最も有力な大宮司惟時は容易に動かなかったのが、惟澄が諸方の一族、他門の武士達を糾合し、守護小式氏を背景とした北朝方と対抗したのであった。しかし、正平四（1349）年征西將軍官が肥後に入国し、菊池氏に奉ぜられると共に、肥後における政治の焦点は菊池に移り、肥後国も守護菊池氏の下に南朝方安定化の方向をみせるにとどまらず、征西府の影響は九州諸国に及ぶようになるのである。本国伯耆国で打撃を受けた名和氏が、所領八代庄と菊池氏の後援を頼りに肥後に移住したのもこの頃であり、小川の領有をめぐる甲佐社と争っていることが知られる。

南北朝末期は、征西府が九州探題今川了俊の卒いる北朝方に圧迫され、弘和元（1381）年、菊池氏の本拠が落城すると、南朝方にとっては致命的な情勢となった。以後、征西將軍官は宇土、八代と移り、元中八（1391）年、南北朝合一の前年に開城、降伏することになるが、益城地方の阿蘇氏勢力は、惟澄の死後、長子惟村が抑えて北朝に協力していたので、征西府は助力を得ることはできなかった。この内乱を通じて、庄園制的な支配の枠は武家領主にとっては障害の意味を持たぬようになり、一郡乃至は数郡の地域的な武士領主の統卒を前提とした有力国衆の支配領域が形成されて、更に守護大名に統合されるという国内の政治関係が形成されたが、益城郡は、阿蘇郡と共に阿蘇氏の支配するところであった。

阿蘇・益城を抑えた阿蘇氏では惟村系と惟武系の対立が続き、惟村の孫惟忠の時、惟武の曾孫惟歳を養子とすることで一応妥協がはかられたが、両者の対立の解消は、幕の平の戦による惟歳らの敗北と、その直後の惟忠の死去により、惟歳系の惟憲が継いで解決した。

しかし、次の惟長は大宮司を弟に譲って菊池氏を継いで肥後の守護となったが失敗し、再び大宮司の地位を惟豊と争い、その子惟前は堅志田にあって惟豊方と対立した。この惟豊の時代は阿蘇氏の勢力が安定し、この時の浜の館・岩尾城の存在は明らかである。

又、戦国前期・中期を通じて、郡内豊福城は、相良・名和両氏の係争の地であり、宇土郡浦に所領を有する阿蘇氏にとっても関心のあるところであった。八代の相良氏と宇土に本拠を移した名和氏は、自己の領域の安定をかけて、豊福、小野、守山の争奪をくり返し、阿蘇、名和、相良の老者たちは、境を接する沙姿峯でしばしば会談を重ねている。

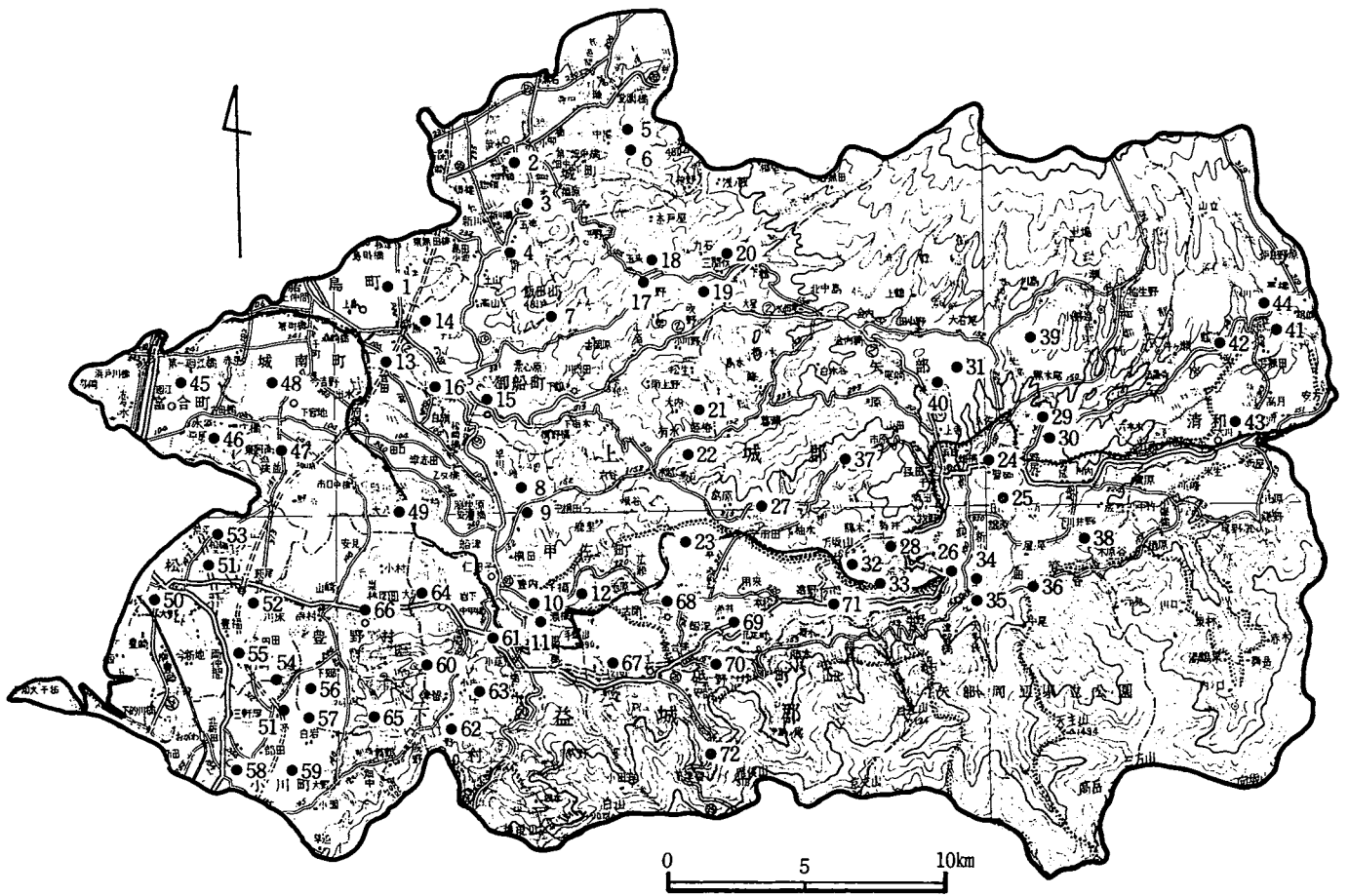
この間、豊後の大友氏の勢力が肥後に大きな影響力を与えていたが、天正八年以来、島津氏の肥後進出にともない、相良氏の降伏、響ヶ原の合戦では相良義陽が甲斐宗運に破れ討死した。阿蘇方では、惟豊を助けた甲斐氏の勢力が大きく、御船・隈庄の城主となり、大友氏の意を受けて惟豊以後の阿蘇勢力を統率していた。名和氏の協力を得て、島津勢は天正十（1582）年以来、甲斐宗運を中心とする阿蘇勢力と戦い、海東、小川を奪った。

更に、天正一三年までに大宮司惟将、惟種、又、甲斐宗運の死去が続き、幼少の大宮司惟光の下で対島津政策をあやまった阿蘇勢力は、堅志田・甲佐・御船・木山・津森・隈庄などの諸城を失い、益城平坦部を島津氏に奪われて屈服することになった。重臣の甲斐親英は八代に連れ去られ、阿蘇支配下の武士達の統制は乱れ、大宮司は一部の家臣に擁せられて目丸山に隠れることとなった。

この島津勢力を追って、天正一五（1587）年、肥後に入国した秀吉に対し、抵抗して滅された者、逃亡した者、降参して安堵を受けた者などさまざまであったが、更に一年を経ずして発生した国人一揆に参加して、益城郡を含めた肥後の中世武士領主たちの地位はほとんど失われるのである。

（阿蘇品 保夫）

益城地区



- | | | | |
|----------|-----------|----------|----------|
| 1 道上城 | 19 津ヶ峯の高城 | 37 市の原城 | 55 豊福城 |
| 2 木山城 | 20 南田代城 | 38 勝山城 | 56 北部田城 |
| 3 赤井城 | 21 有水城 | 39 つづら原城 | 57 小野城 |
| 4 砥川城 | 22 尾坪城 | 40 寺尾城 | 58 小川城 |
| 5 小高氏の陣跡 | 23 山内城 | 41 飯蓋城 | 59 紫尾城 |
| 6 津森城 | 24 濱の館 | 42 鶴底城 | 60 赤蜂尾城 |
| 7 飯田城 | 25 岩尾城 | 43 佛原城 | 61 萱野城 |
| 8 早川城 | 26 愛藤寺城 | 44 川の口の城 | 62 白石野城 |
| 9 南早川城 | 27 猿渡城 | 45 榎津城 | 63 松の原城 |
| 10 陣内の館 | 28 白尾野城 | 46 木原城 | 64 巢林城 |
| 11 豊内城 | 29 入佐城 | 47 阿高城 | 65 花山城 |
| 12 安平城 | 30 笹原城 | 48 隈庄城 | 66 山崎城 |
| 13 城塚 | 31 梅木城 | 49 陳内城 | 67 岩尾野城 |
| 14 甘木城 | 32 小野城 | 50 大塚城 | 68 山下の高城 |
| 15 御船城 | 33 池の城 | 51 曲野城 | 69 傍島馬入城 |
| 16 平瀬城 | 34 猿が城 | 52 豊田城 | 70 桑木野城 |
| 17 上野の高城 | 35 鬼が城 | 53 丸山の古城 | 71 権正城 |
| 18 戸上城 | 36 囲城 | 54 竹崎城 | 72 早楠城 |

上益城郡

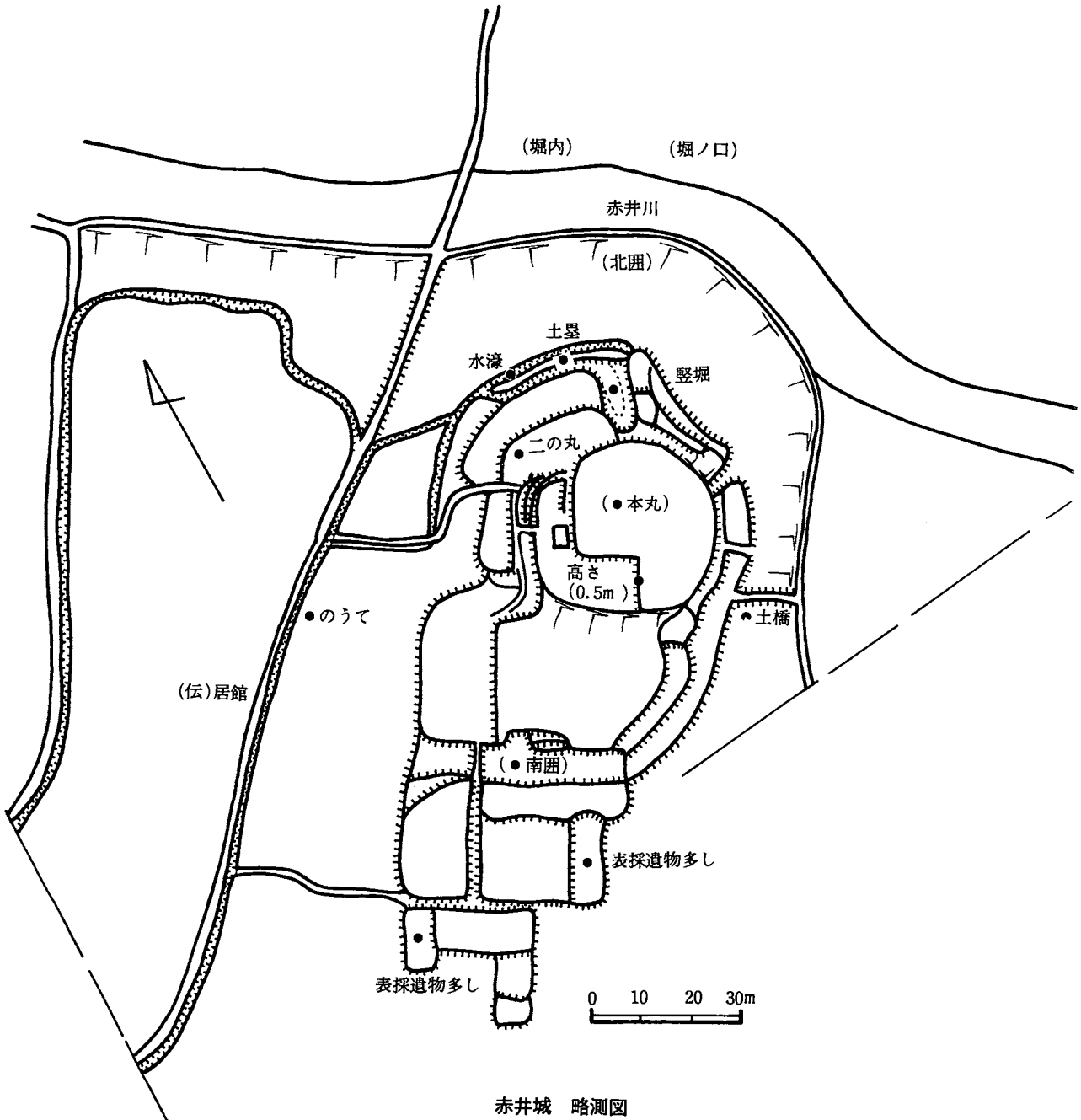
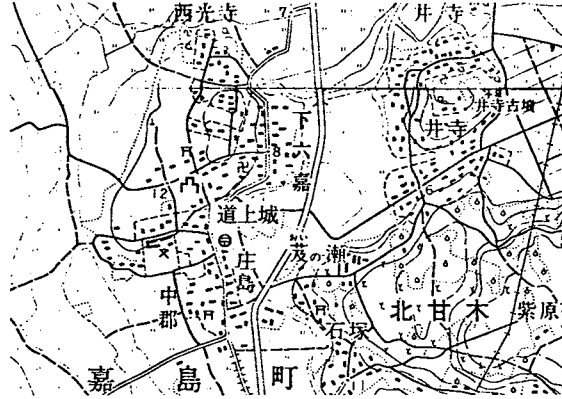
(どうじょうじょう
みらがみじょう)

道上城 (上益城郡嘉島町大字下六嘉字泉の上)

永禄・天正の頃は阿蘇家臣、西氏一族の越前守と加賀守が在城していたという。

城跡は、一般的に低地の下六嘉の中でも海拔10~15mの微高地に開けた集落内に位置しており、現在は民家となっている。

地元の人々は、この地を「城の屋敷」と称する。遺構は何も観察されないが城跡の東側を古道が通り、北側一帯に「中通り」「内屋敷」等の小名が残る。



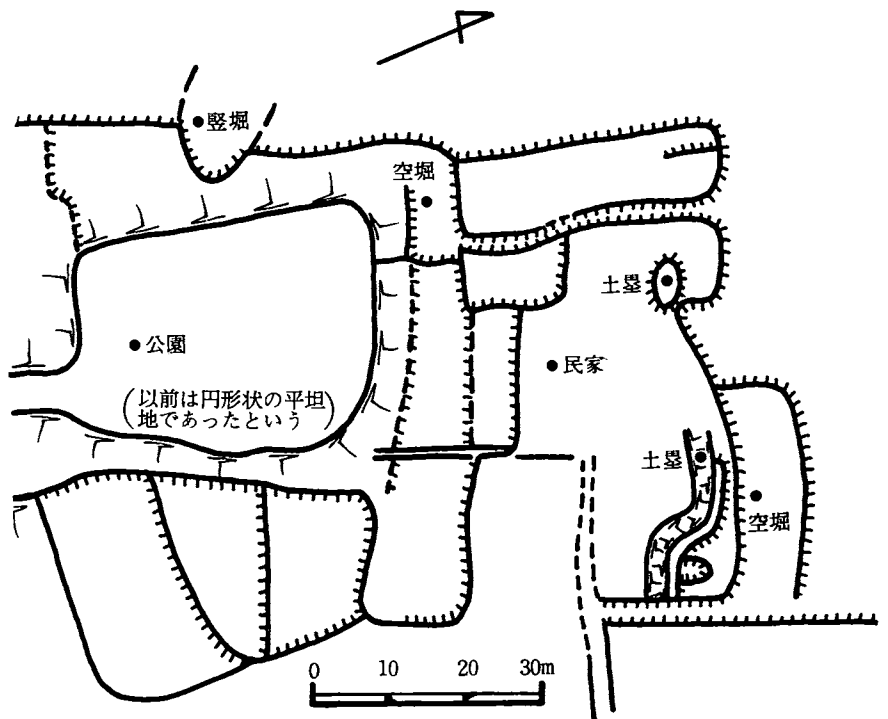
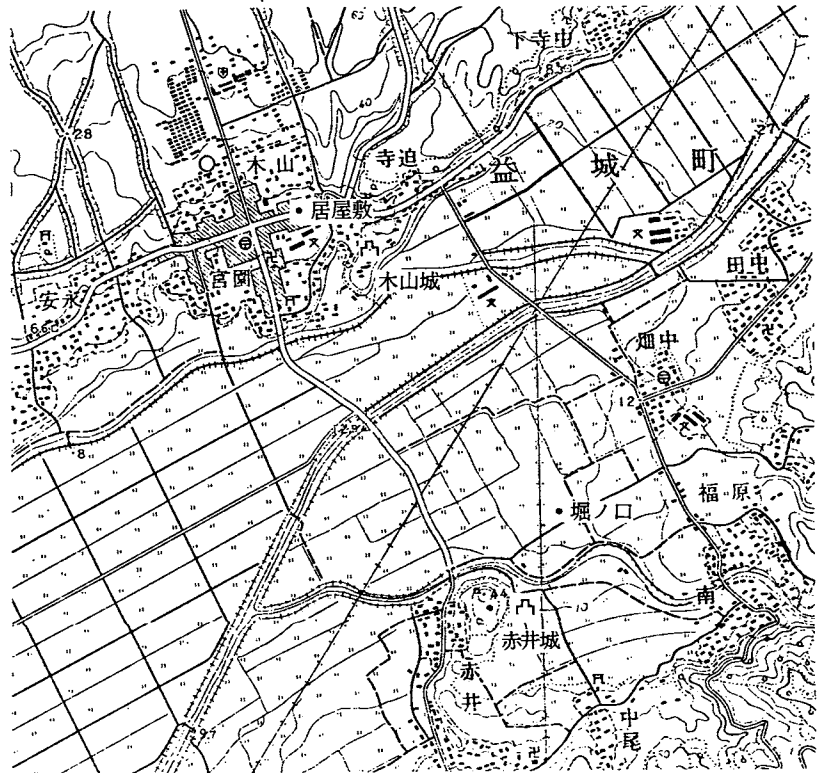
木山城 (上益城郡益城町大字寺迫字城の本)

木山氏代々の居城という。天文十六年(1547年)に木山惟貞は赤井に城を築いて移り、その後は家老の竹崎筑後をはじめとした城代がおかれたという。天文十三年(1585年)、島津氏に攻められて赤井城と同時に落城したと伝えられるが、『新撰事蹟通考』には、小西時代にも伊藤興左衛門が城代として入城した旨が記せられている。なお、『阿蘇文書』康正三年(1457年)10月太宰少式頼尚の書状から、木山城は「松丸城」と称せられた時期があった事がわかる。

城跡は、「城の本」という字名を残す帯状形の丘陵地末端部(南西方向に主軸を呈し、標高55m・南側麓の水田面よりの比高約25m)に位置する。丘陵の背面は大きく3区画に分かれており、中央部分に本丸と称される長方形の高台(公園・長径40m・短径25~32m)が存在する。北東側は1.5~2mの落差をもって民家の敷地となり、南西側の区画は老人ホームとなっている。顕著な遺構としては本丸の西側に豎堀の残存部を有する曲輪(長さ45m・幅7~15m)があり、民家の敷地内にも土塁(幅2m・長さ約20m)と空堀(幅3m)が観察される。本丸と民家の間に堀切がはいっているのは確実である。^(注1)

「戦時には、木山川に堰をして水を堀に流しこんだ」と古老はいう。城跡の西側一帯に開けた木山の町には「居屋敷」の字名を残す広い地域がある。

(注1) 西端の段落部分には幅7m・長さ10mの空堀が存在する。おそらく堀切の一部をなすものであろう。



赤井城 (上益城郡益城町大字赤井字本丸)

『古城考』によれば、木山城主であった木山惟久(紹宅)が新たに築いた城であるという。同書はまた、天正十三年(1585年)の落城は、当城を木山城と誤認した薩兵に攻め落されたためと伝え

木山城 略測図

る。

城跡は赤井川の南岸に横たわる小丘陵地（北東方向に主軸を呈し、標高35m・北側麓の水田面よりの比高30m）に位置しており、「本丸」の字名を残す。丘陵の背面は楕円形状の平坦地（長径35m・短径32m）で、井戸跡と伝わる窪地も観察されるが、西側部分は0.5～0.8m程の段落ちとなる。段落ち部分はL字形をなし、幅7～11mを計る曲輪的なものである。壁面には川原石の野面積みも残存する。同地内には、城本神社が祀られている。神社の参道際に積まれた石垣はもともと城跡に関連ある石垣で、これを近年になって一部手直しただけと地元の人はいふ。丘陵の北側斜面部は階段状地形が重なっているが、その間を豎堀が下っており、最終的には鉤型に折れ曲り西側方向に走る水濠となる。水濠には「浮草堀」の呼称が残る。^(注1)

丘陵周辺の麓は、西側部分を除く三方を水田（幅10～25m）が取り巻いており、北東側部分と南西側部分に「北^{きたがこい}圀」と「南^{みなみがこい}圀」の字名が残っている。この水田はその形状から水濠的な役割を果たしたものである事はまちがいないと思われる。さらに「南圀」は丘陵の野首を断切る堀切の役割をも果たす事がわかる。

一方、丘陵の西側裾部には「赤井」の字名を残す集落が付随しており、園田氏宅は城主の居館跡という伝えもある。城跡周辺は湧水が豊富で、水路が民家の庭先をめぐっている。この他、畑地の中には青磁片や中世雑器が多量に出土する所があり、城跡との関連性がうかがわれる。^(注2)^(注3)

なお、集落内を通る道路には「のうて」の呼称がある。^(注4)

（注1）笠井慶博氏の御示唆によれば、浮草堀なるものは水濠の存在をカモフラージュするために、茅等を浮かせた一種の「落し穴」的なものであり、戦前までは、人が泳げる程大きな濠であったという。

（注2）夏には水量が急増するという。

（注3）石器が出土する。

（注4）木山と御船を結ぶ道路がある。

砥川城 ^{とがわ}（推定地）（上益城郡益城町砥川城の尾）

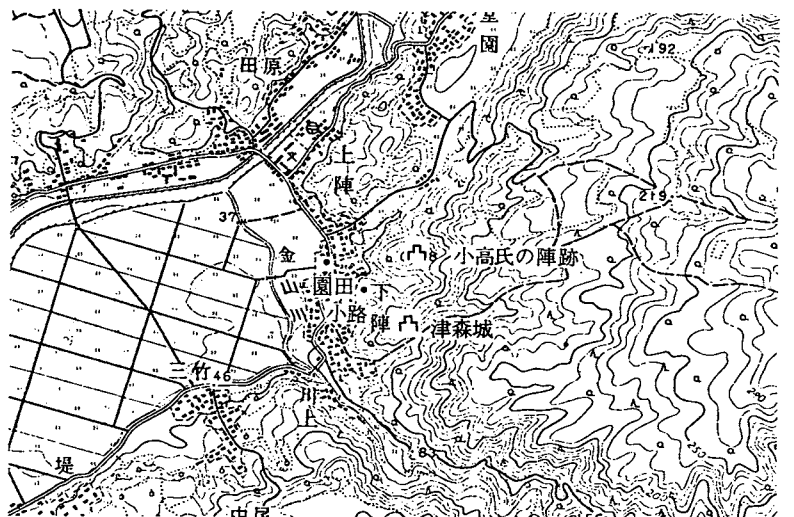
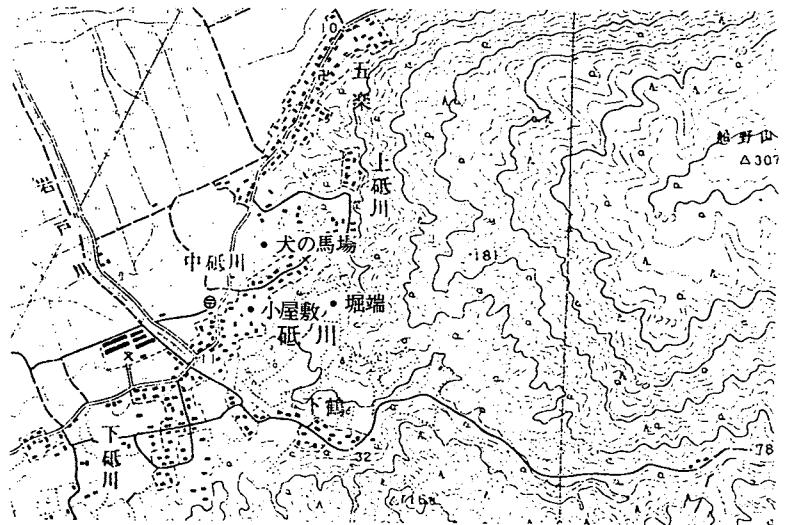
砥川丹後守が居城したというが、木山紹宅が弘治・永禄の頃築いた砦跡とも、木山に在城の際造った糧倉の跡とも言い定かでない。

『肥後国誌』に「砥川城跡は砥川村城ノ尾ノ下田ノ中ニアリ」と記されているものの、城跡の所在地は不明である。

ただし、砥川の地内には「城の尾」以外に「犬馬場」・「小屋敷」・「堀端」等の城跡関連地名が残っており、当時、城に関連した何らかの施設があったことは否定できない。

おそらく「城の尾」あたりに館の類が存在していたのではなかろうか。

砥川の集落には木山と御船を結ぶ道があり、東に「赤井城跡」が隣接している。



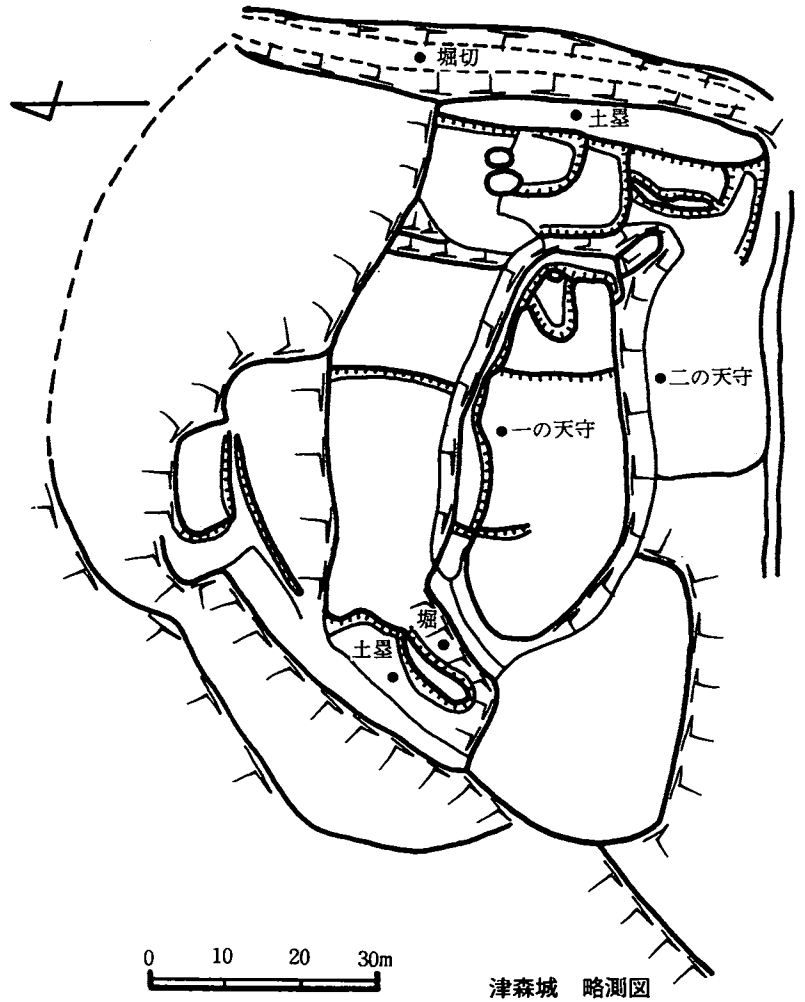
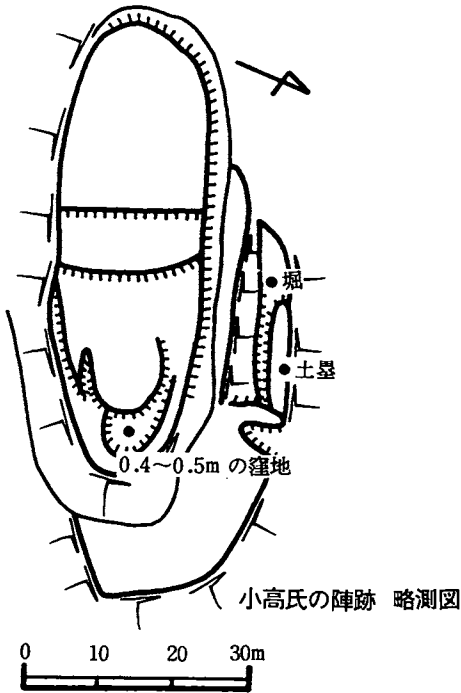
小高氏の陣跡 ^{おだかし}

（上益城郡益城町下陣古田）

津森城跡北側の谷向いに、小高氏の陣跡と伝わる山稜末端部（標高120m・津森城北側谷よりの比高60m）がある。

山頂部分は楕円形状の平坦地（東西方向に主軸を呈し長径60m・短径19m）と

なっており、西端部に半円形の窪地(深さ0.3~0.5m)が観察される。一方、南側斜面は階段状地形が重なっているが、その一部に小規模な土塁と溝を伴うものがある。さらに、山稜北側麓には上陳と下陳の水源をなす「おちょう水(小名)」の地もある。しかし、当該地は、地理的にも津森城の一部と考えた方が適当であろう。



津森城 (上益城郡益城町下陳吉田)

阿蘇大宮司家老の光永中務惟宗が弟惟純とともに居城していたが、天文二十年(1551年)に大友義鎮の手によって攻め落されたという。城跡は山稜末端部(標高116.6m・小路の集落よりの比高約56m)の「城山」と呼ばれる栗山に位置しており、野首部分の東側を除き、北側と南側を谷にはさまれ、西側一帯に赤井川流域の水田地帯と城跡麓の「小路」や「園」の集落を望む。

山頂は「一の天守」と呼ばれる楕円形状の平坦地となっており、7個の岩石が散在する。さらに、「一の天守」の段落ち部分に曲輪状の平坦地が3箇所存在するが、その中には「二の天守」の小名や小規模な土塁・堀を残すものもある。

一方、野首部分は二重の堀切があるが、とくに東側部分は、山稜斜面を谷底付近まで刻む縦堀に連なるものである。

なお、「小路」の集落には木山と御船を結ぶ道があり、城主の墓と伝わる五輪塔も残り、古井戸を残す館跡らしい微高地数箇所も見られる。

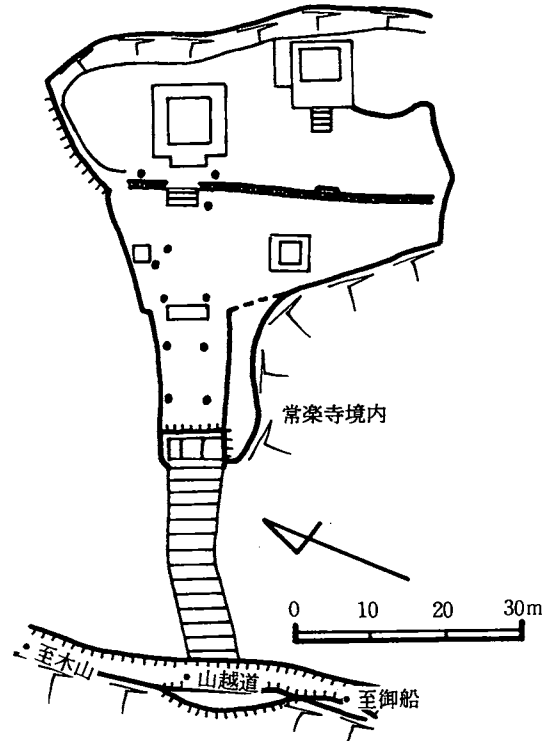
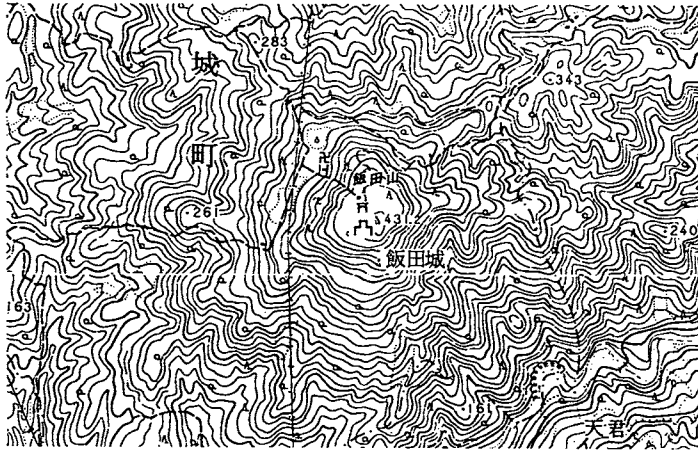
飯田城 (田口平城) (上益城郡益城町大字砥川字樋口・大人足)

『古城考』によれば城主は田口弾正という。さらに同書は城跡の所在地について、「飯田山にあり、田口平と云」と記している。又、『肥後国誌』にも「東ノ方岩壁ニ墓所アリ此山上ニ御池有ト云へ圧今考ルニ城内ノ用ニ堀ヲ穿チ天水ヲ取シ跡ニハアラスヤ」との記事が見える。しかし、飯田山中に点在する集落には、城跡に関する伝承は残っておらず、又田口平と称される山頂東側部分においても城跡らしい遺構は確認できない。むしろ山頂西側部分に開かれた常楽寺が、城跡そのもの(注1)

のではないかとこの考えをいさぐ。参道の下を砥川から御船に至る山越道が通っており、沿道には標高431mという高所にもかかわらず、近年に至るまで集落が存在した。

常楽寺には鎌倉期の層塔が残っており、開山にまつわる伝承も古い。城は常楽寺と無関係に成立し得ないものと思われる。

(注1) 五輪塔が数多く散在している。



飯田城(推定) 略測図

早川城 (上益城郡甲佐町大字早川字下小塚)

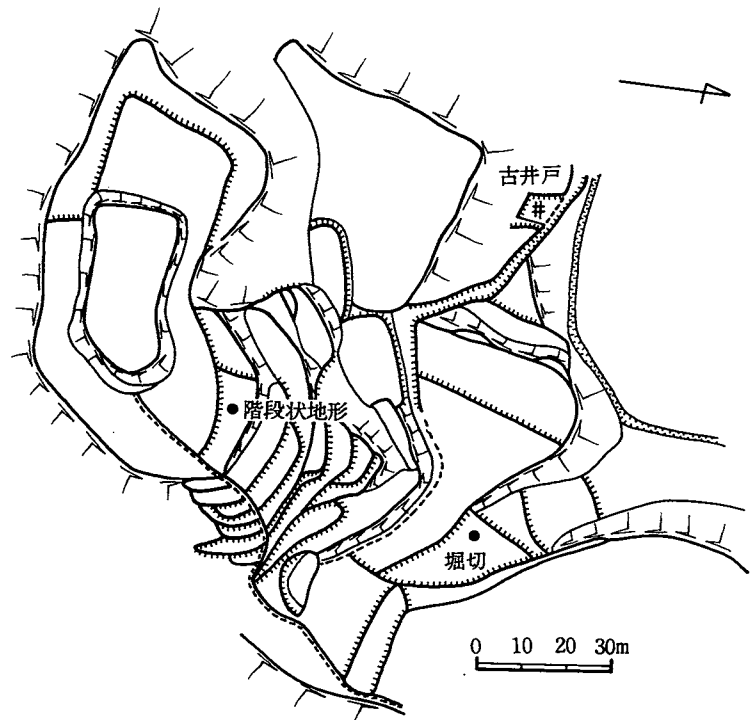
阿蘇氏家臣の早川氏が、代々居城したという。

城跡は早川の地内にあつて、緑川流域の水田地帯に突出する楕円形状の山稜末端部(標高50m・西側麓の水田面よりの比高約35m)に位置しており、「城山」と称されている。山頂部分は長方形の平坦地(北西方向に主軸を呈し、長径35m・短径16~19m)となつており、これより2.5~3m下つた所には曲輪が平坦地を取り囲む。東側の鞍部に向つて階段状地形が幾段にも重なつており、迫には自然地形を利用したと思える堀切が走る。

城跡の北側麓にある西福寺には城の井戸と伝わる古井戸が残り、城にまつわる話も語りつがれている。寺の住職は城主の血を引くものとされ、甲佐岳山腹の門徒は、早川城の落城時に逃げのびた早川氏の一族という。

早川地区では阿蘇参り(阿蘇神社参拜)を続けており、城跡の南側麓の民家には「男の井戸」「女の井戸」と称される古井戸が残っている。

(注1) 深さ2m程の浅井戸で湧水を利用したものである。



早川城 略測図

みなみそうかわ
南早川城

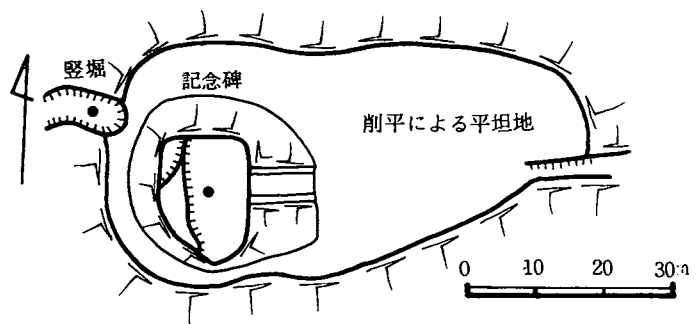
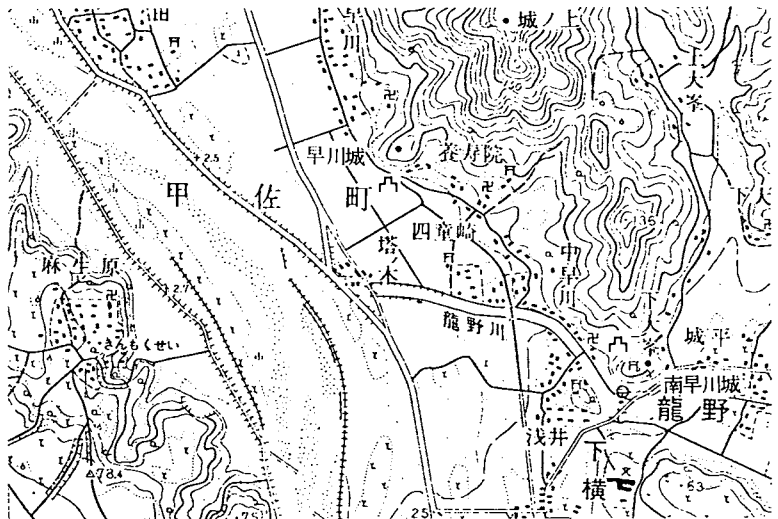
(上益城郡甲佐町大字早川字城下)

天正年間には、阿蘇家臣、渡辺吉久が在城していたという。山稜末端部の「城平山」(標高70m・城平の集落よりの比高約37m)に位置している。

「城平山」は、北西側の野首部分に大きな迫がはっているのので、外観上は独立した小山の様子を呈する。

山頂部は平坦地(南北34m・東西40m)となっており、一段高くなった西側部分には忠魂碑が建立されている。しかし、山は第二次大戦中かなり現状変更されており、旧地形は山頂部分にわずかな平坦地がうかがわれる程度だったらしい。

城跡南側麓には竜野川が流れている。



南早川城 略測図

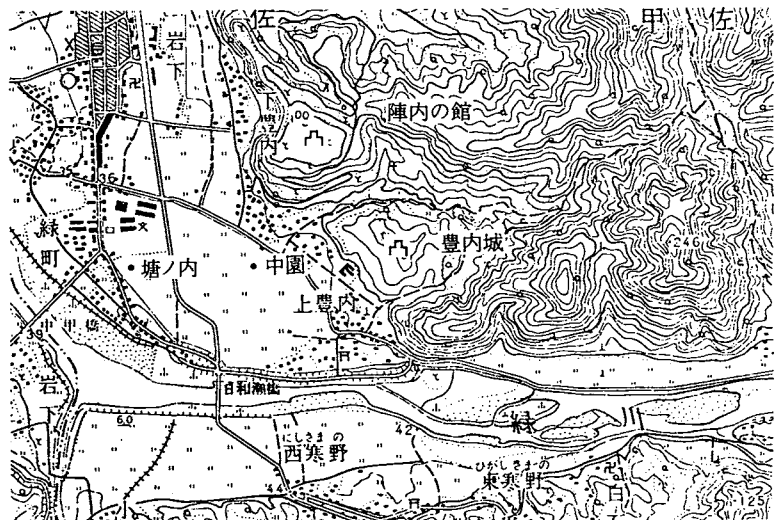
じんない
陣内の館

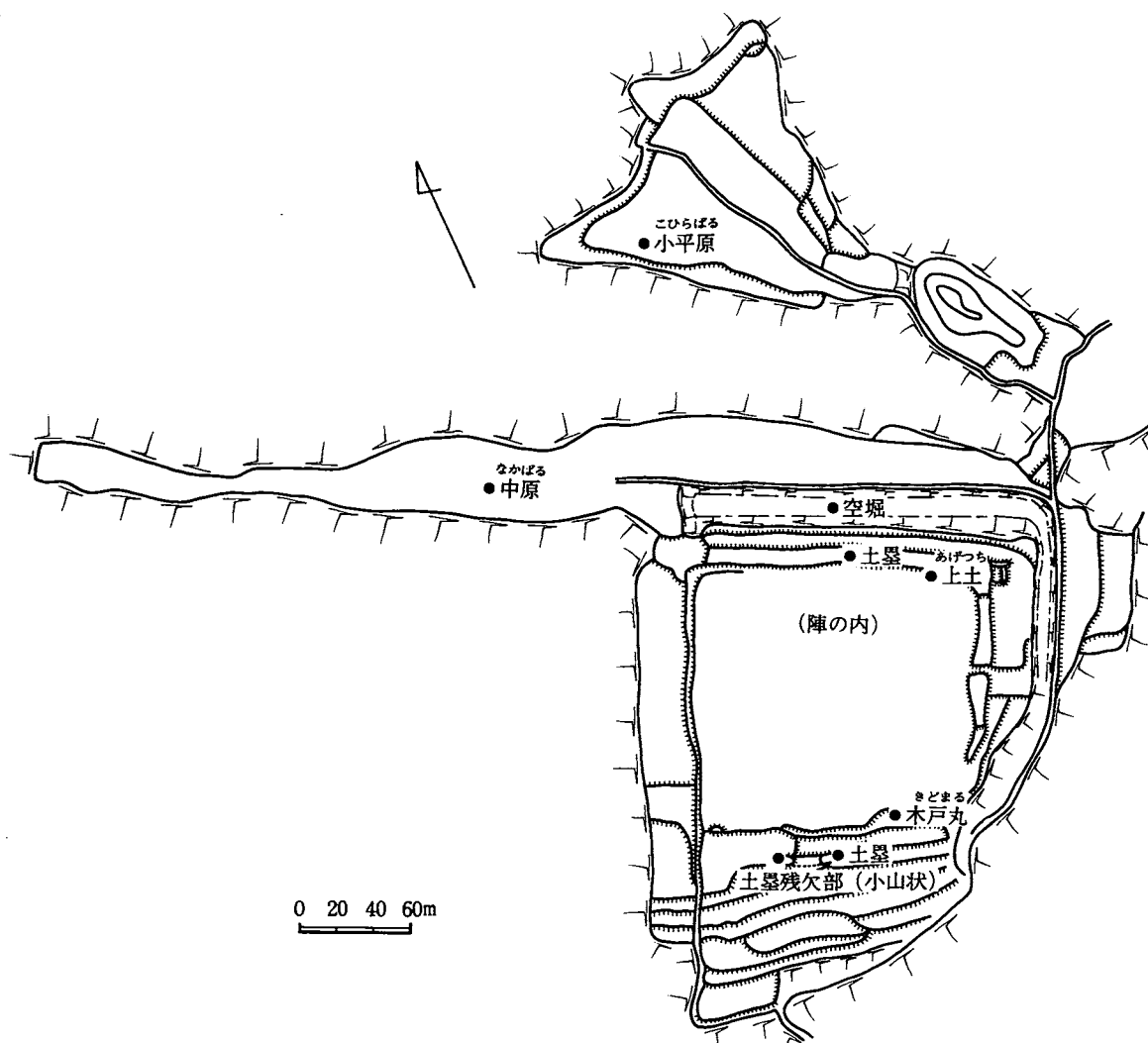
(上益城郡甲佐町大字豊内字陣ノ内)

『肥後国誌』によれば、阿蘇大宮司惟時の館跡という。

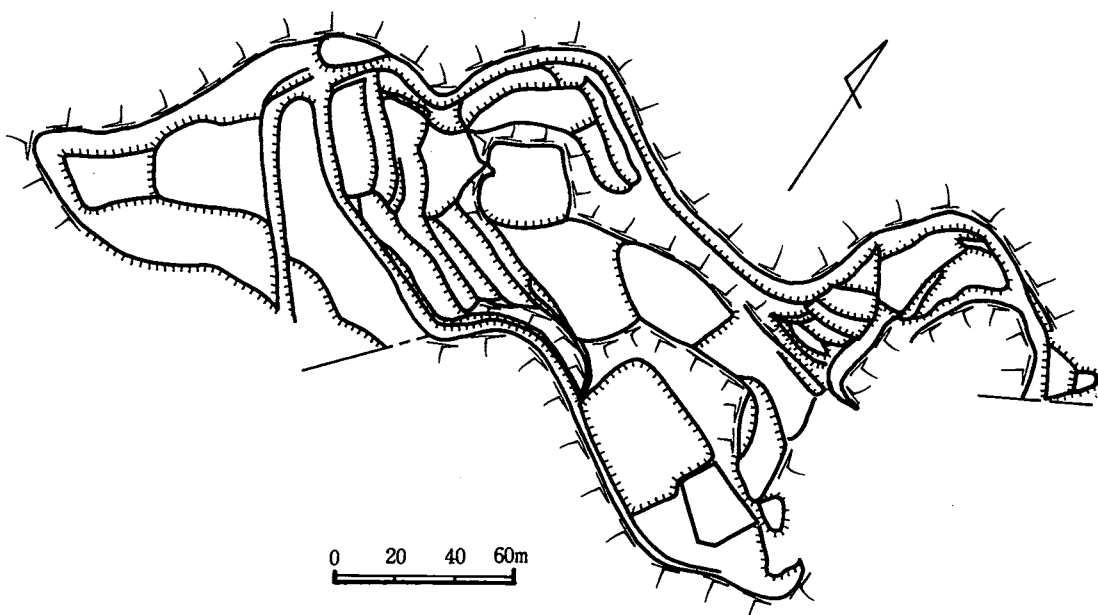
館跡は、下豊内集落の東側にあつて、「陣ノ内」という字名を残す丘陵地(標高100m・集落よりの比高60m)に位置する。丘陵地の背面は広い平坦地となっており、ほぼ直角に折れ曲がる鉤型の空堀(北東隅を中心部にして、北西方向に200m・堀20m・南西方向に100m・堀幅15m)が観察される。また空堀の内側には、幅8mの土塁も付随するようである。一方、丘陵地の南縁部分にも、土塁の残存部が見られる事から、この部分にも空堀の存在が考えられる。すなわち丘陵地の西縁部分は、急斜面となっている事を考慮に入れば、当該地は三方を堀と土塁に囲まれた正方形(140m×140m)の独立区画となる。

館跡の岩下地内には、「塘ノ内」「東園」「西園」の字名が残っている。





陣内の館 略測図



豊内城 略測図

^{どいのうち}
豊内城 (上益城郡甲佐町大字豊内字南谷川)

伊津野秀勝とその子、山城守が在城したという。

城跡は南谷川の地内にあつて、「城」と称される丘陵地末端部(標高90m・南西側麓の水田面よりの比高約50m)の畑地(一部雑木林)に位置している。顕著な遺構は観察されないが、4区画からなる平坦地を中心に、周辺には階段状地形がいくつも重なる。東側の野首は極端にくびれており、「搦手」のからめて小名を残す。土塁や堀等の遺構はまったくないが北側谷向いの「陣の内(字名)」の丘陵地からの眺望は、城跡そのものの感がある。

城跡の南西側麓を「中園」(字名)と称し、同地内に老人ホームが建設された時に多くの五輪塔が出土した。

^{やすひら}
安平城 (上益城郡甲佐町大字小鹿字屋敷野(参考地))

『古城考』には「安平村にあり、土俗古城といへ共、天正の頃甲佐宮の一の社家、赤星一太夫が屋敷跡なるべし」と記されている。

安平地区には城跡に関する伝承はなく、その所在地は不明である。但し、隣接する小鹿地区の山稜中に「屋敷野」の字名を残す一隅(標高260m・小鹿の集落よりの比高約140m)があるので、一応、参考地として挙げておきたい。

「屋敷野」は山稜の斜面が幾分ゆるやかになった荒地一帯を呼称するが、かつてはこの地に北側迫の湧水を利用した棚田形式の水田が開けていたという。地元の人々は、最上段部の廃田をとくに屋敷と称している。その廃田下には安平、小鹿両地区を結んだ廃道が存在する。



^{つしだ}
津志田城 (所在地不明)

永禄・天正年間に、阿蘇家臣の小左衛尉惟致が在城したというが、城跡の所在地は不明である。

^{おとめやま}
乙女山城 (所在地不明)

『古城考』に「田口村にあり、城主田口弾正といい、後に同郡飯田山に城を築いて移るといい伝える。当城は天文の頃也」という記事が見える。

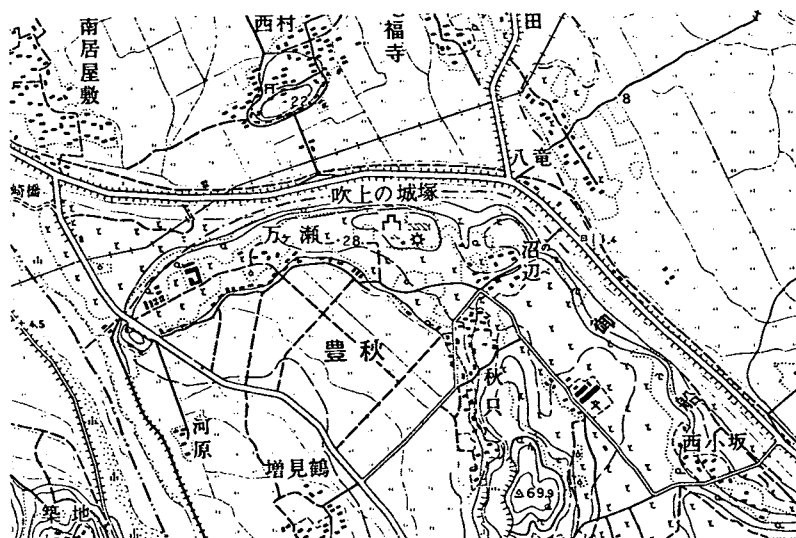
田口地区には城跡に関する伝承は残っていないが、「政所」や「居屋敷」のまんどころ字名を残す所がある。

^{ふきあげ} ^{しろづか}
吹上の城塚 (上益城郡御船町大字豊秋字吹上)

当該地は、現在、鉄工団地となっており、旧地形をまったく止めていないが、団地造成に先がけて昭和43年12月20日から31日まで、記録保存のための地形測量と発掘調査が松本雅明氏を団長として実施された。

調査結果については、「久保遺跡(熊本県教育委員会・熊本県文化財調査報告第18集)」の付論3で調査報告がなされている。

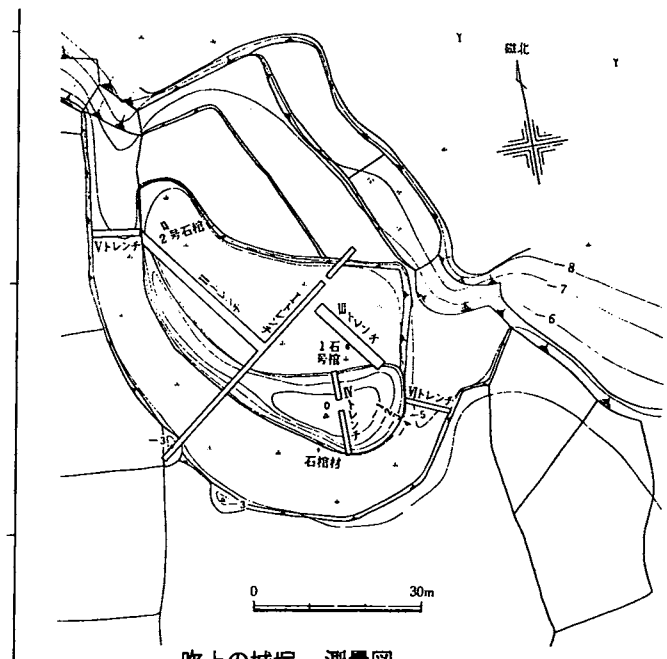
同調査報告書によれば、俗称「城塚」は御船川と緑川に挟まれた豊秋丘陵地の北端部にあり、標高は30m、周辺裾部の



水田面との比高は22mであった。外観上は前方後円墳のような高台で、南辺にめぐる空堀が丘陵地と切離す役目をしており、北辺は河岸段丘を利用・加工して馬蹄形の曲輪が形作られていた。さらにその中に段丘を利用して作ったと思われる4段からなる階段状地形も存在しており、最上段部は、土塁も観察された。

発掘の結果、空堀は現地表下3.3mまで達しており傾斜の急な横断面V字状である事が判明し、合わせて、獣骨や、鎌倉末から南北朝のものと思える土師器、瓦質土器、白磁、青磁等が出土した。

したがって「城塚」は、南北朝から室町期にかけて上島に本拠を置いた上島氏の城跡とする見方が一般的である。

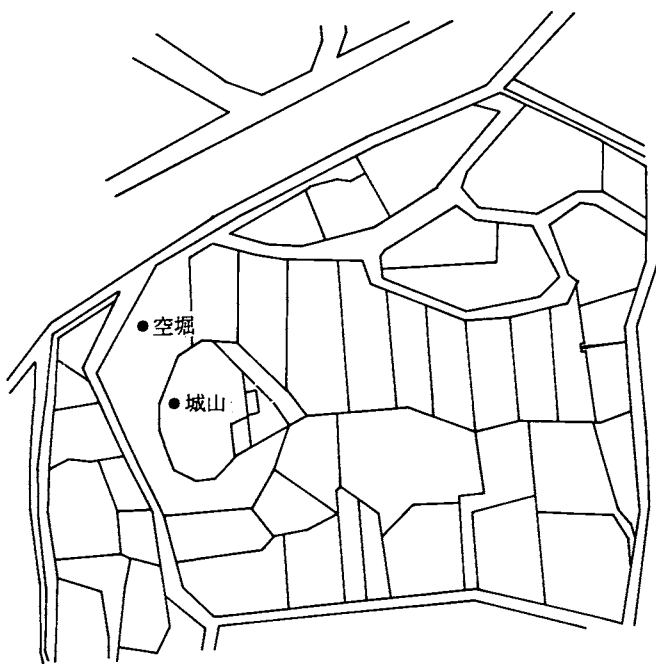


吹上の城塚 測量図

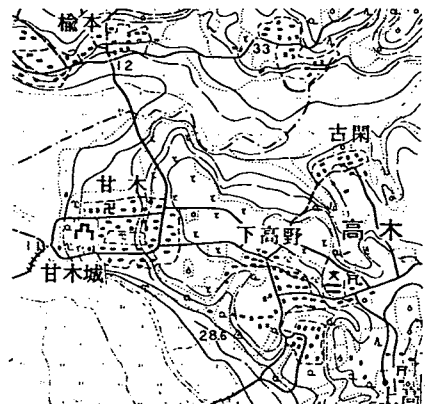
あまぎ 甘木城 (南甘木城・味木城) (上益城郡御船町大字甘木字北屋敷)

城主は、味木義治 (安田義治) をはじめとする味木氏一族であったという。

城跡は「北屋敷」集落の西端部にあって、「城山」と称される丘陵地末端部 (標高約15m・西側麓の水田面よりの比高7~8m) に位置する。丘陵の背面は楕円形状の平坦地となっているが、その大部分は共同墓地となっており、かなりの現状変更があったものと思われる。北東側の鞍部については堀切 (深さ4~5m・底幅約4m・上幅10~12m) がはいっているが、この堀切は北側と東側に延長されて空堀となる。一方東側については、堀に伴う土塁の残存部が城跡側に観察される。この他、城跡の周辺に天文八年(1539年)三月二十九日の銘を有する阿弥陀三尊の板碑がある。「城山」はその形状からして館跡の色彩が濃い。



甘木城 周辺字図



御船城 (上益城郡御船町大字御船字下園)

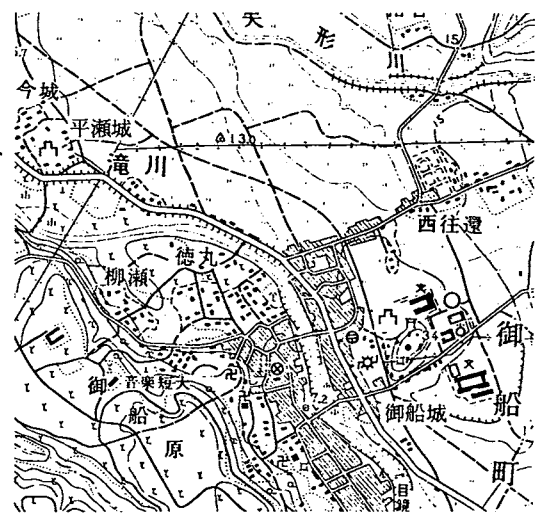
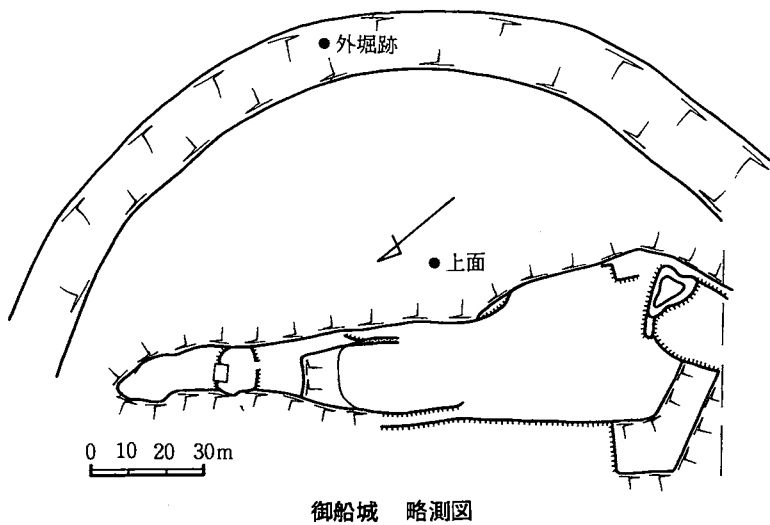
『古城考』によれば応安年間から天文年間にかけて御船盛安(阿蘇家臣)をはじめとして、その一族が居城したらしい。後には阿蘇氏の有力家臣である甲斐宗運が入城して、この城を拠点に勢力を伸ばした事はよく知られている。

城跡は、下園地内にあつて「城山」と称される独立丘陵地(南西方向に主軸を呈し、標高34m・南側麓の水田面よりの比高25m)に位置する。丘陵の背面は、北東側部分が若干微高地であるのを除けば、全体的には南西方向へ伸びる鋭角三角形の平坦地(南西側底辺40m・長さ80m)となる。さらに平坦地の南西端には土塁の残存部とも思えるような土壇(長さ20m・幅10m)も存在する。城跡は全面公園化され環境整備が行われているが、丘陵斜面は、家屋建築等のためにほとんど旧地形を止めていない。

西側麓には「上面」という字名が残っている。また、古老は「城跡の南側にひろがる水田地帯には外堀がめぐっていたが加藤清正時代にすべて埋められたらしい」という。

なお、城跡からは弥生時代の遺物も出土する。

(注1) 甲斐宗運を合祀した天満宮がある。



平瀬城 (上益城郡御船町大字瀧川字塘添)

築城者は甲斐宗運という。

『古城考』によれば、享保年間にそれまで残っていた土塁・堀等の遺構の大部分が壊されたという。字「塘添」の中に「今城」と称される集落があり、ここが城跡の所在地と思われる。

集落は御船川の東岸にあり、周辺は水田に囲まれている。全般的に低地であり、遺構は何も観察できない。平城の類ではなかったかと思われる。

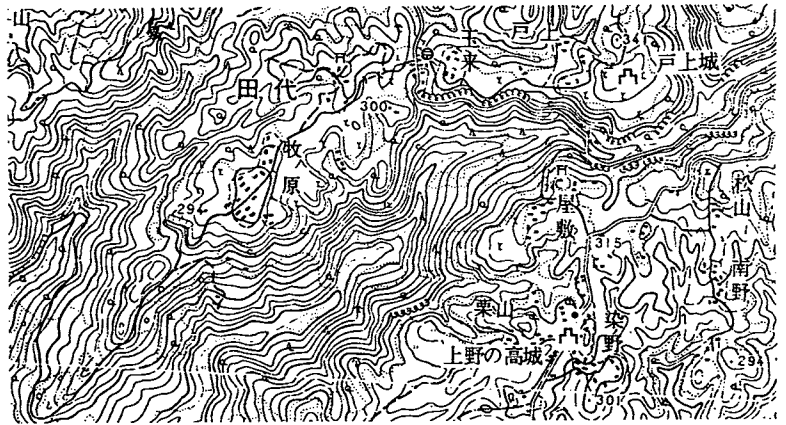
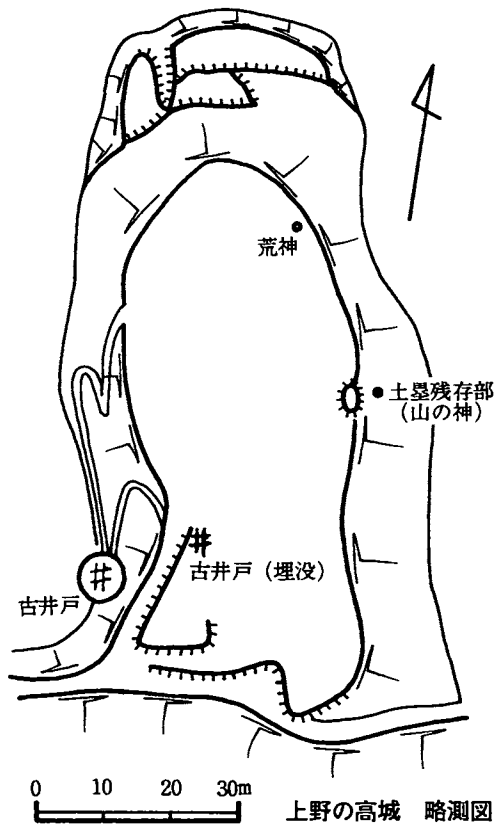
上野の高城 (上益城郡御船町大字上野字高城)

城主不明。

上野地区に「高城」の字名を残す丘陵地の末端部(標高300m・東側裾部の道路面よりの比高約7~8m)があり城跡ではないかと考えられる。「高城」の背面は、南北に主軸を呈する舌状形の平坦地(長径75m・短径26~34m)となっており、現在3軒の民家が建ち並んでいる。「かつて、平坦地の東縁には土塁が走っていた」と古老はいう。現在もその残欠部がわずかにうかがわれる。土塁中には大木が根をはっており、地元の人はこの大木を「山の神」と称するが、以前は「荒神」と称される大木も存在したらしい。

「高城」の鞍部は崖になっており、南西側下には古井戸(湧水を利用した浅井戸)が現存している。

「高城」の北側一帯を「的場」と称する。



とのうえ
戸上城 (北田代城)

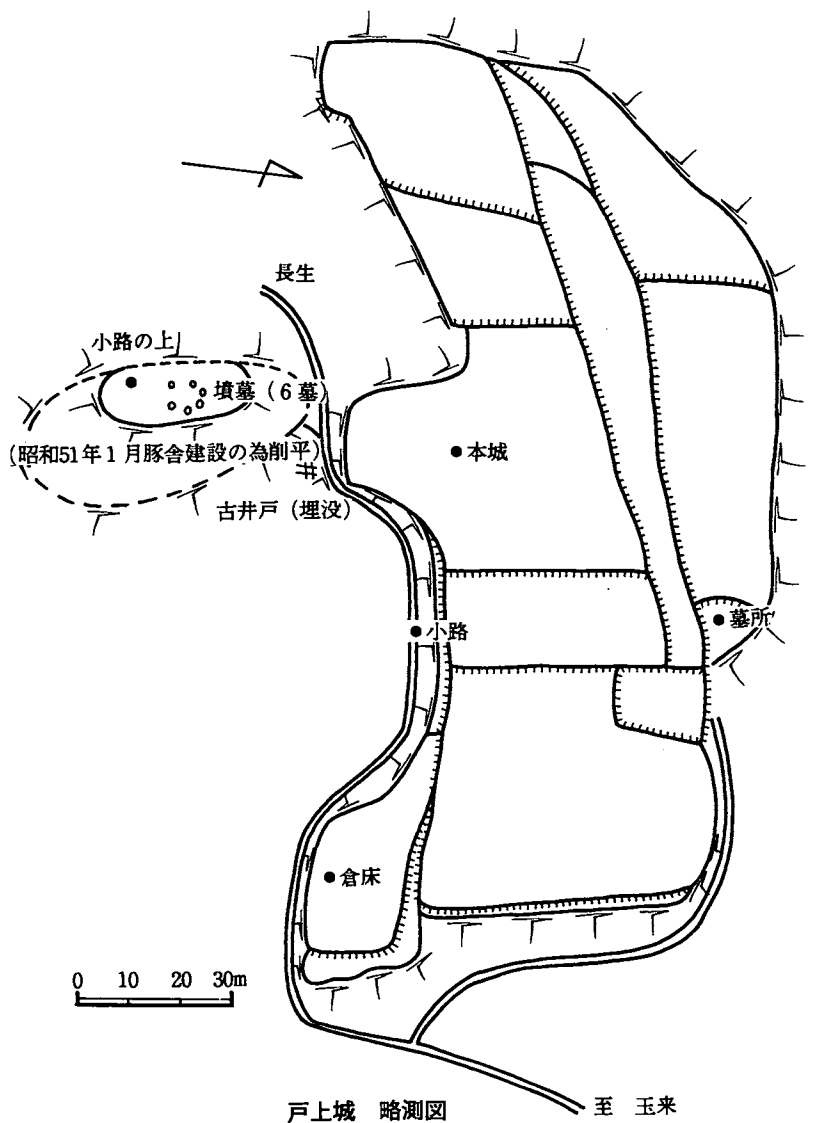
(上益城郡御船町大字田代字戸上)

阿蘇家臣・田代乗珍が天正十四年(1586年)まで在城したという。

城跡は南側に大きな迫を望む戸上の丘陵地(標高340m・戸上の集落よりの比高約20m)に位置しており、畑地となっている。広い平坦地があるだけで、城跡らしい遺構は何も観察されないが、「本城」や「倉床」の小名を残す。城跡の北側には玉来から長生へ向う古道が突き抜けており、とくに城跡周辺は「小路」と称される。古井戸も存在したらしいが現在は埋没している。

なお、城跡北側には以前「小路の上」と称される小山があつて、上面には6基の中世墳墓があつたが、昭和51年1月に豚舎建設のため未調査のまま、消滅した。

(注1) 一説に天文年間には孫左衛門光高が在城していたが、菊池氏によって滅ぼされたともいう。



つみね 津ヶ峯の高城

(上益城郡御船町大字上野字津ヶ峯)

城主不明。

津ヶ峯の地内に「高城」の小名を残す小高い丘陵地(標高330m・裾部よりの比高約5~6m)がある。

現在、「高城」の上面は長円形の平坦地(南北に主軸を呈し、長径16m・短径6m)となっており、さらにこれより1~2m下には、幅2~4mの曲輪らしきものが平坦地を同心円状に取り囲んでいる。しかし、「高城」は南側部分を除く三方を削除されている事が歴然としており、現地形をもって当時の規模を推し計ることはできない。

西側裾部は現在民家となっており、古井戸(湧水を利用した浅井戸)が残っている。

高城の東方1.3kmに、尾園城跡を望む。「高城は、尾園城跡に関連した砦跡だろう」と古老は語る。

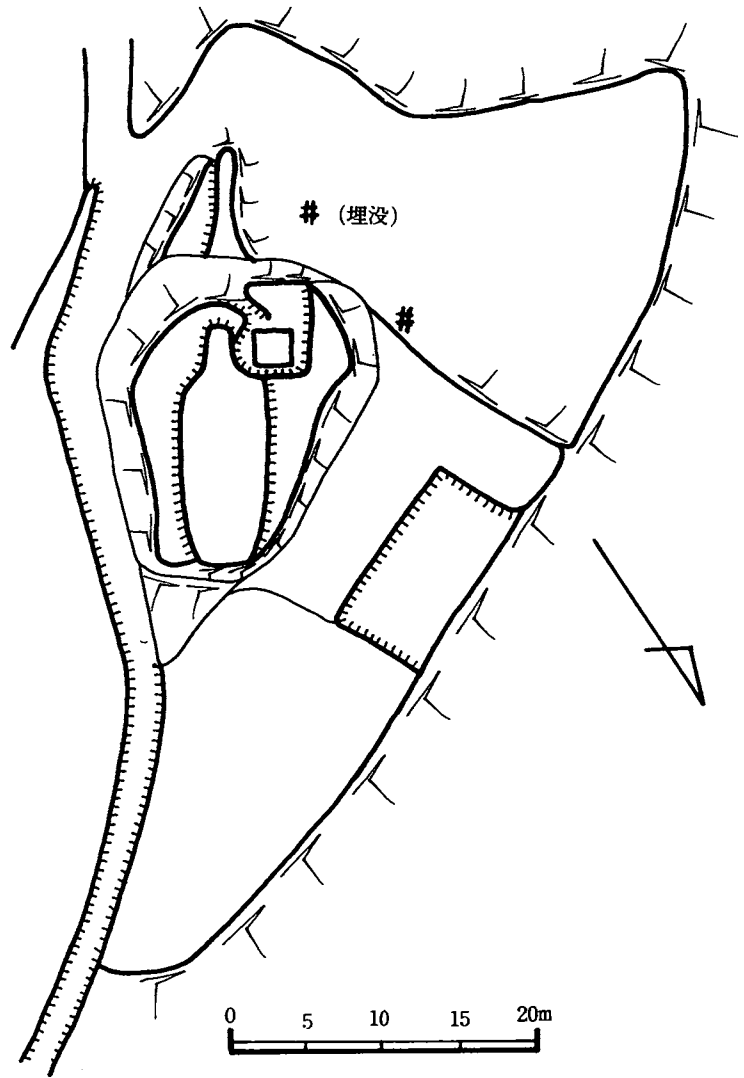
みなみしろ 南田代城(尾園城)

(上益城郡御船町大字田代字尾園)

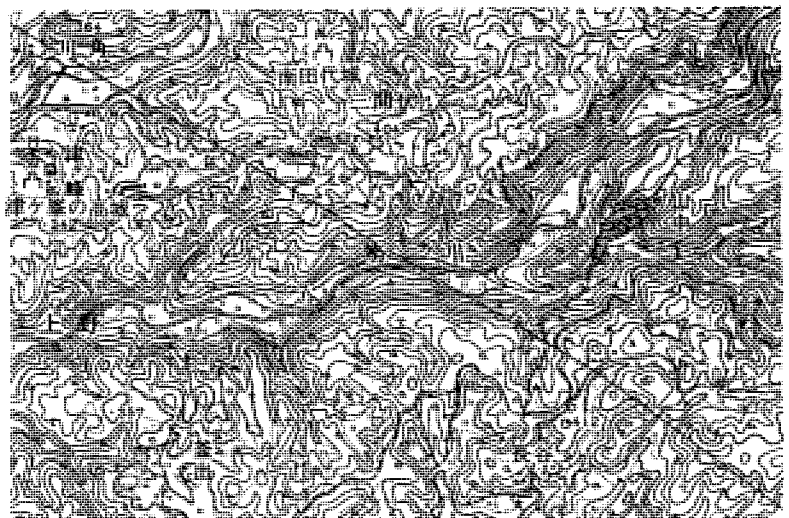
『古城考』によれば田代宗伝(田代乗珍の一族)が天正年間まで在城したというが、『肥後国誌』には、甲斐親房(甲斐宗運の一族)の在城説も合わせ記されている。

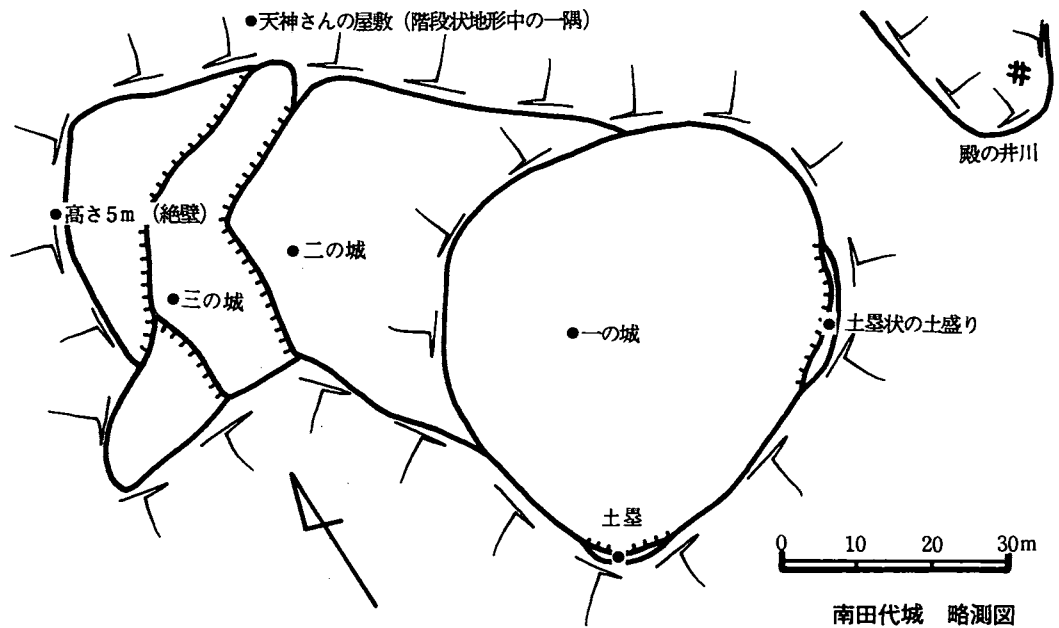
城跡は、複雑に入り組んだ丘陵地帯の末端部(標高400m・西側麓の迫よりの比高約70m)に位置しており畑地となっている。北西方向に主軸を呈する丘陵の背面には、上段部に「一の城」と称される楕円形状の平坦地(長径55m・短径49m)があり、さらに、北西方向の下段に向って重なる階段状地形がある。なお、これらの階段状地形にも「二の城」・「三の城」の小名がある。城跡の周囲は深谷に囲まれた要害の地である。古老によれば、かつて南東側の野首下には「殿の井川」と称される古井戸が存在したという。

城跡の南西側800m程の地点にある田代西部小学校一帯には、「古閑屋敷」という字名が残っている。



津ヶ峯の高城 略測図





南田代城 略測図

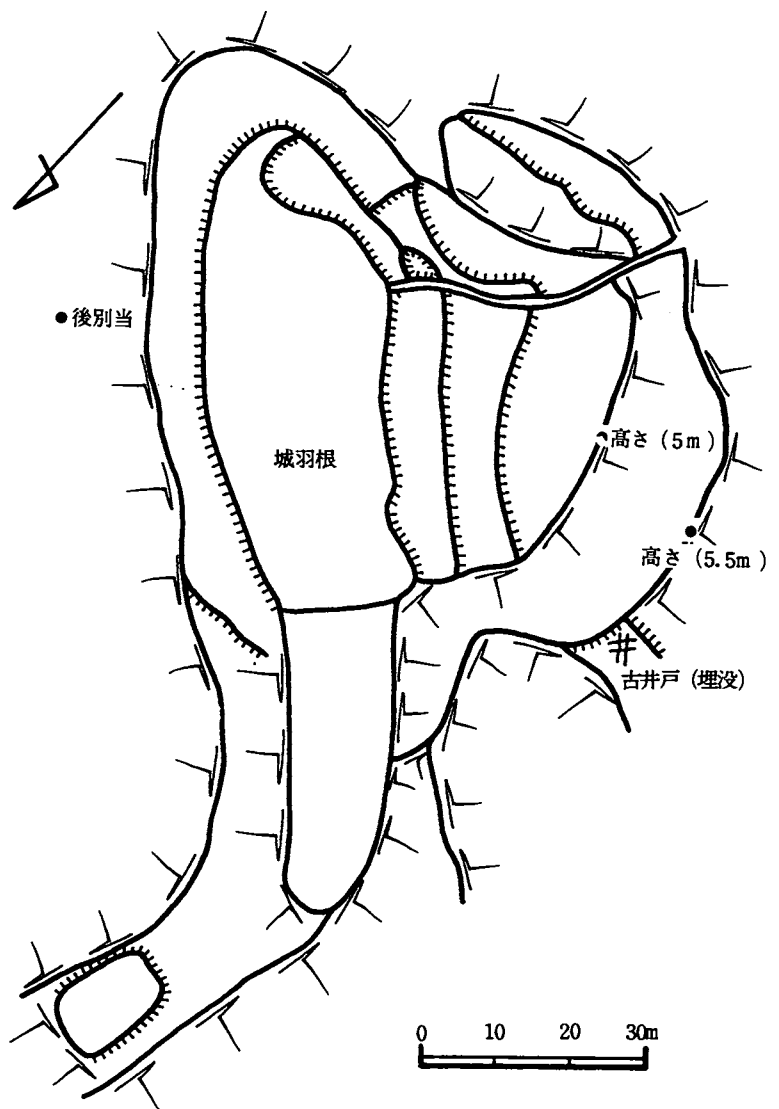
ありみず
有水城

(上益城郡御船町大字水越字有水)

征西將軍泰成親王が尾坪城に在城していた時の番城であったという。

城跡は有水の集落の北東側にあつて「城羽根」の小山(標高380m・有水の集落よりの比高約20m)に位置しており、栗畑と杉の植林地に利用されている。小山の上面は長円形の平坦地(北西に主軸を呈し、長径100m・短径23m)となつており、裾部には、平坦地を東から南にかけて鉤型に取り巻く帯曲輪(幅6~12m)をはじめ、西側部分には3段からなる階段状地形(幅7~13m)も観察される。

城跡の北西側の一隅にはかつて古井戸が存在したというが、現在は埋没して、わずかにその痕跡を止めているにすぎない。なお、帯曲輪下の迫を地元の人は意味不明のまま「後別当」と称している。



有水城 略測図



尾坪城 (上益城郡御船町大字水越字尾坪)

征西將軍泰成親王が在城したという。

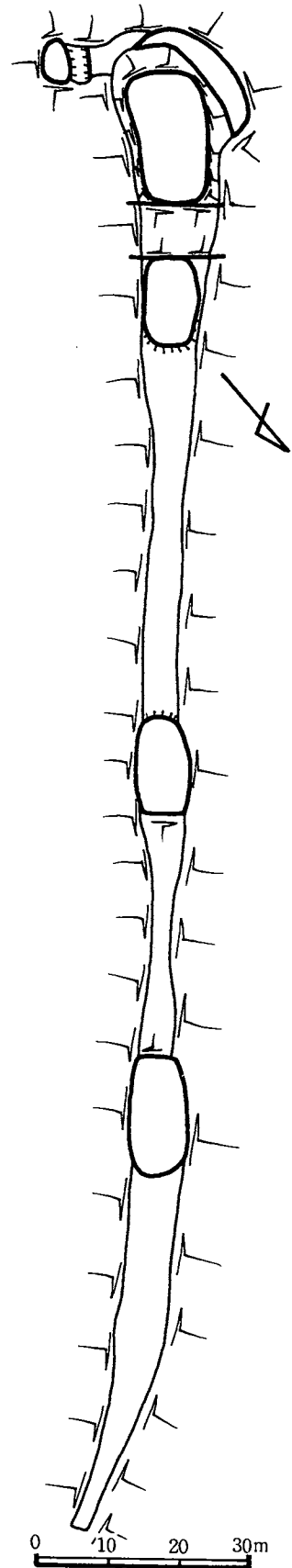
城跡は水越東部山稜地帯の末端尾根（標高433m・西側麓集落との比高約123m）に位置しており、杉林となっている。尾根の背は幅5m内外で極めて狭く、210m程の長さを持つ。

先端部には、堀切（幅8m）によって仕切られた小規模な平坦地（南北8～11m、東西19m）がある。さらに、この地より南側へ数m下った所には土盛り（長さ6m×幅3m）を伴う階段状地形（東西20m×南北4m）が観察される。

一方、堀切より北東側の尾根には平坦面が2箇所かがわれるが、城跡の遺構に結びつくかどうかは不確かである。尾根は北東端で幾分低くなり、そのまま、「殿山」と称される山腹に結合する。

現在、丘陵下に一軒の民家があるが、おそらく、この敷地が館跡であろうと思われる。

なお、城跡の南西側にあたる谷間には「君がくら」という小名が残り、地元では「君がくれ」がなまったものと解釈され、非常時に城主がかくられた所と考えられている。



尾坪城略測図

山内城 (上益城郡御船町大字水越字山内)

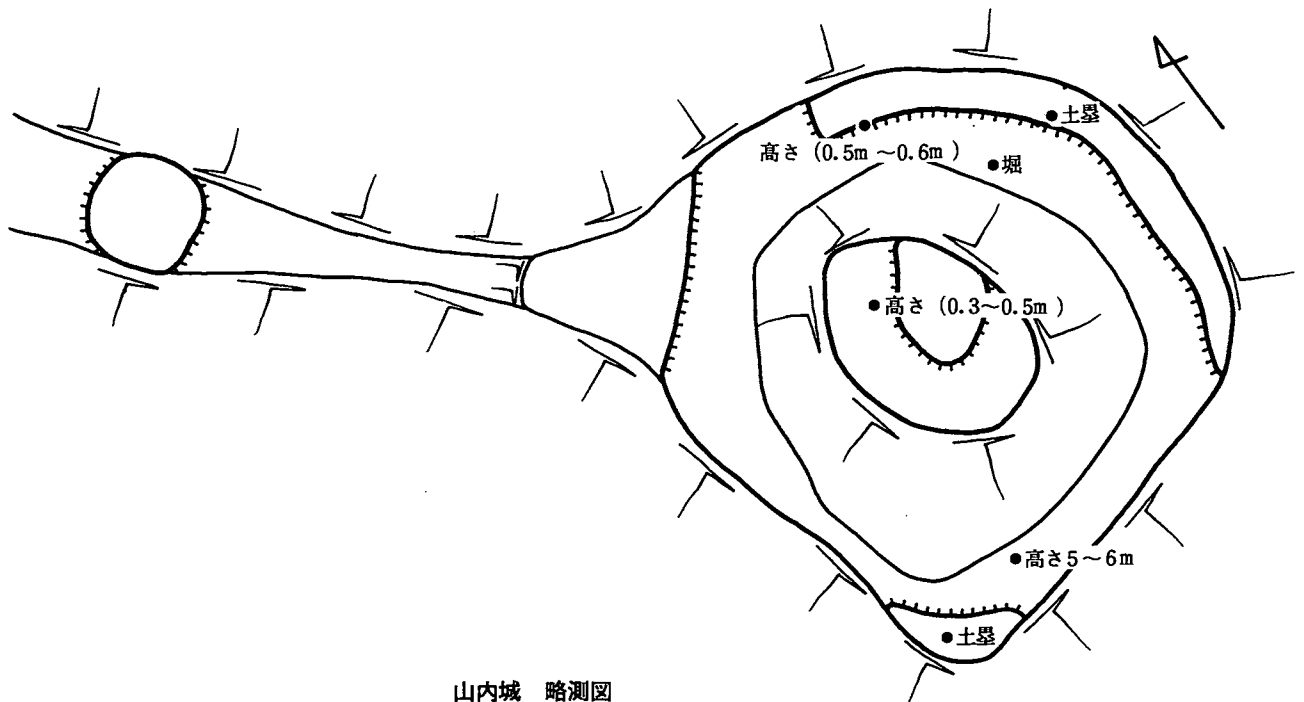
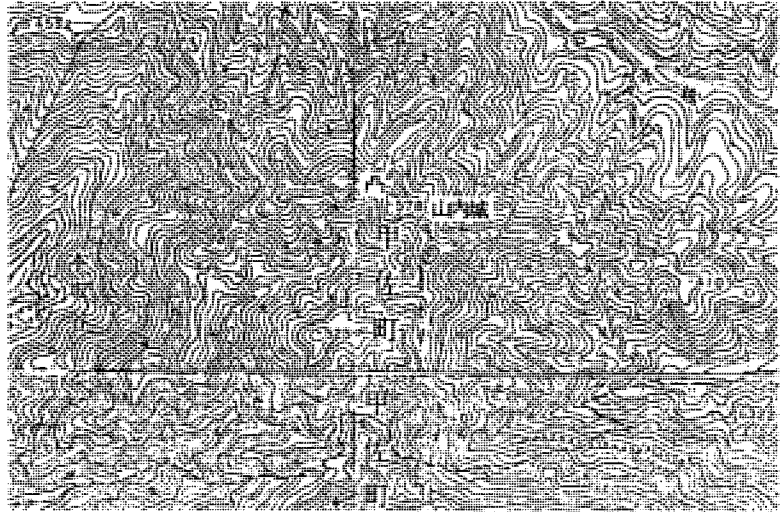
城主不明。一説に征西將軍泰成親王が尾坪城に在城の際に配置した砦跡という。

城跡は御船町と甲佐町の境界線が走る山稜地帯の峰線上(標高578m・山内の集落よりの比高268m)に位置する。山頂は平坦地(南北12m×17m)となっており、さらにこれより2~3m下には幅4~6mの曲輪が山頂を同心円状に取り囲んでいる。曲輪には北側(幅3.5m・長さ44m・高さ0.4m)と南側(幅3m・長さ10m・高さ1.5m)に土塁が残存する。このことから曲輪には溝が埋没している可能性が強い。山頂の西側峰の背は幅3~6mにくびれているが、堀切はない。遺構は山頂周辺に限られる。地元では、城跡を「城のとっぺん」と称する。^(注1)

なお、水越在住の郷土史家、増永氏によれば山内城跡を「高城」とも称し、城跡と峰続きの標高470mの山頂部分には「古城」の小名も残るといふ。^(注2)

(注1) 30年程前には峰の一部には川原石の野面積みが存在していたというが現在では観察できない。

(注2) 古城の小名を残す山は、高圧線の鉄塔が建っている。平坦地はあるが城跡という感じはしない。



山内城 略測図

0 20 30 40m

はま
濱の館 (上益城郡矢部町城の平)

(注1)

昭和48年9月、矢部町浜町の県立矢部高校校舎が老朽化のため全面改築工事が計画された。この敷地一帯は昔から、阿蘇大宮司家の浜の館跡として伝承されてきた場所である。この伝承を裏付けるように、『肥後国誌』には陣の内浜御所跡として次のような記述が見られる。

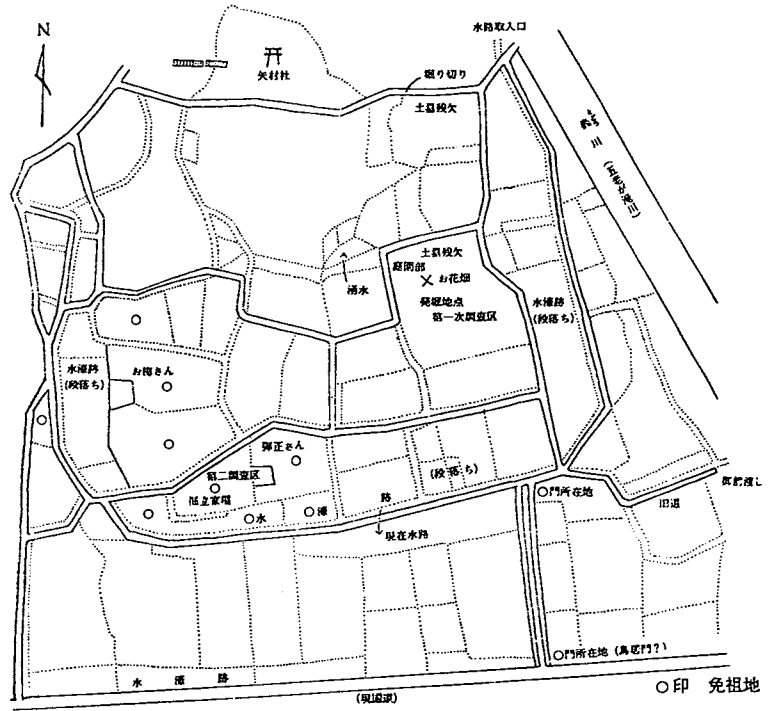
「陣ノ内浜御所迹、浜ノ御殿トモ云長福寺村陣ノ内云所ノ平原北高クシテ上へ平カ也、是ヲ城ノ平ト云、南ハ畑川ヲ隔テ岩尾城迹ナリ、此地阿蘇大宮司五十六代ヨリ後数代在館ス、天正十四・五年ノ此阿蘇家落去スー以下略一」

浜の館は以上のように伝承だけで、いわゆる周知の遺跡ではなかった。しかし遺構の可能性もあるので、文化課では現運動場の一部を予備調査した。この結果、多数の遺物が出土し、遺構が確認されたので、第一次調査(昭和48年11月1日～昭和49年2月22日)と第二次調査(昭和50年9月2日～昭和51年2月26日)を実施した。

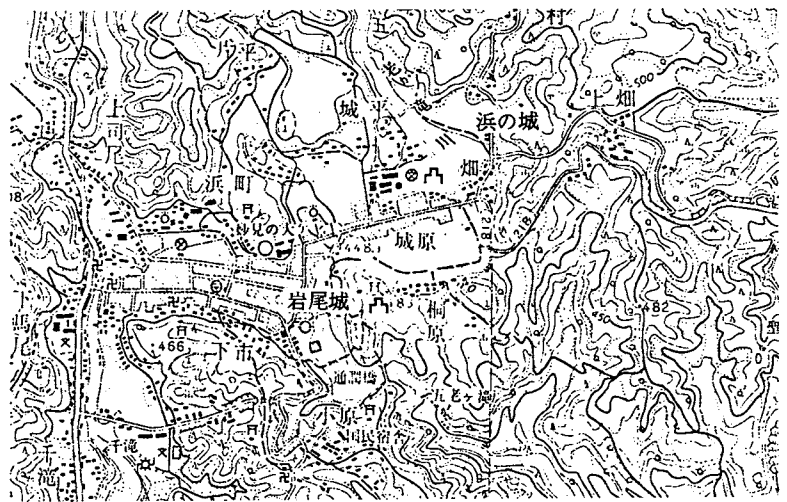
この調査によって、桁行七間、梁行四間の家の他に、数棟分の家屋の土台石や庭園等が火災に遭い、倒壊したままの状態で見出された。また焼土中からは燈明皿、青磁、天目茶碗、水甕等の陶磁器類や、中国の銭貨等が出土した。さらに庭園の池の畔の二つの穴からは阿蘇家の宝物と見られる21点の遺物が出土し、学術的に貴重な資料を提供する事になった。第一穴は直径130cm、深さ60cmのほぼ円形の穴で、人頭大の礫に混って黄金延板一個、玻璃製杯3個、白磁置物2個が出土した。一方、第二穴からは、三彩鳥型水注(二対)、緑釉水注(二対)、緑釉陰刻牡丹文水注(一对)、三彩牡丹文瓶(一对)、染付牡丹唐草文瓶(一对)、青磁盒子(一個)などが出土した。第二穴から出土した交趾三彩は中国の明時代後半(16世紀頃)福建または広東省付近の地方窯で焼かれたものであろう。

(注1) 熊本県文化財調査報告第21集「濱の館」熊本県教育委員会 昭和52年

(注2) 第二次発掘調査で見出された家屋跡の炭化物をカーボン測定した結果、A棟が440±75yで西暦1510年(永正7)前後、B棟520±80で西暦1430年(永享2)前後、C棟が665±60yで西暦1295年(永仁3)であった。



濱の館 見取図



岩尾城

(上益城郡矢部町大字城原字本丸・二の丸)

貞応元年(1222年)に阿蘇大宮司惟次によって愛藤寺城とともに築城され、天正十三年(1585年)に島津氏の手で攻め落されるまで18代にわたる阿蘇大宮司の居城であったという。

「一国一城令」によって慶長十八年(1613年)城内の建物すべてが取り壊された。

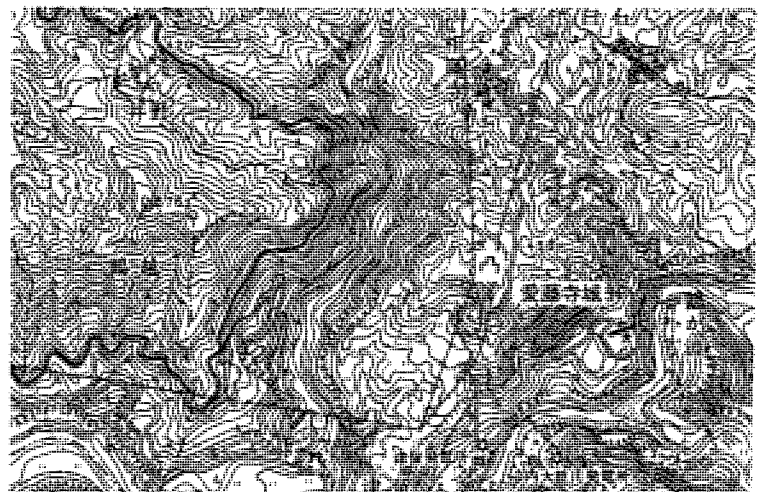
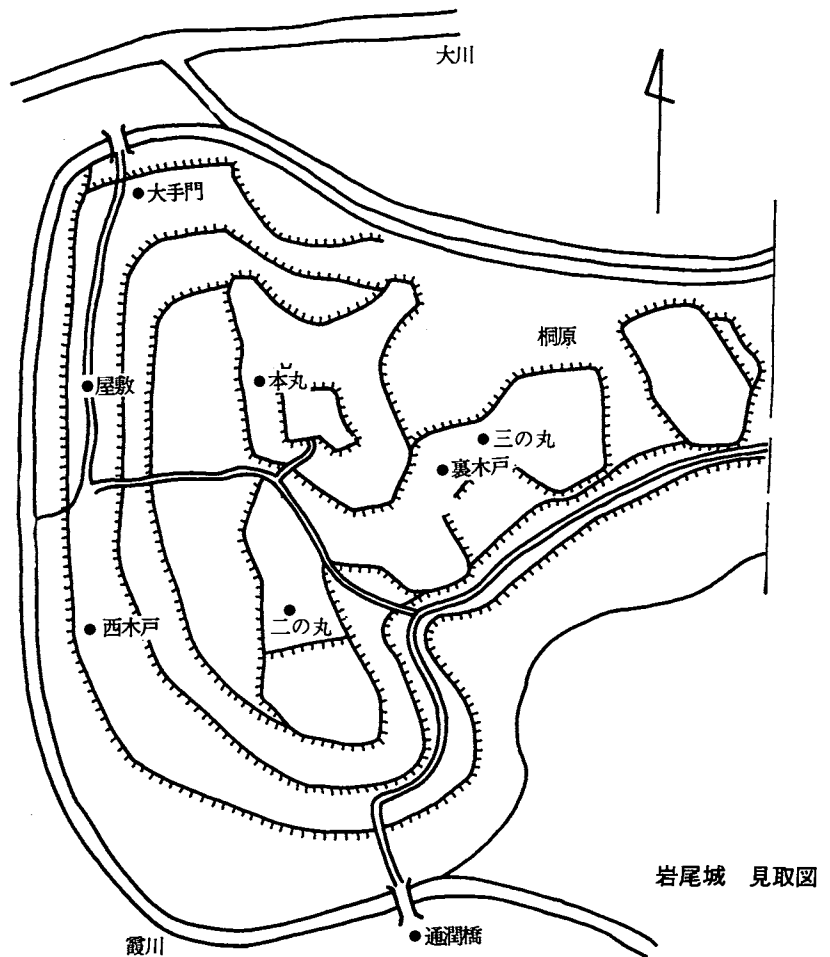
城跡は矢部町浜町東端の山稜末端部(標高482m・地表よりの比高約30m)に位置しており、野首部分の東側を除く三方は轟川とどろきに囲まれている。

公園化された山頂一帯は「本丸(字名)」と呼ばれ、曲輪で囲まれた平坦地があるが、この「本丸」の南側と東側にもそれぞれ、「二の丸(字名)」・「三の丸(小名)」の名称を残す平坦地が見られる。すなわち、城跡はこの三つの平坦地を軸に、山稜斜面の階段状地形と、「三の丸」に接する堀切並びに、その対岸の土塁(長さ20m・高さ1.5m)を有する出丸(小名)の平坦地等が組み合わされた輪郭形式の大規模な山城である。

なお、前述の平坦地内には細部にわたって櫓跡や木戸跡等に関する小名が残っており、興味を引く。中でも、本丸曲輪の兵糧庫跡と伝えられる所からは、焼米が出土した。

一方、山稜裾部の西側と北側は宅地と集落になっており、各々「屋敷」と「桐原」の字名で呼ばれているが、とくに「桐原」には当時、馬屋や兵舎等があったと伝えられている。

なお、岩尾城跡の居館は字・「城の平」内の矢部高校敷地にあったとされ、同地は「浜の館」と呼ばれている。



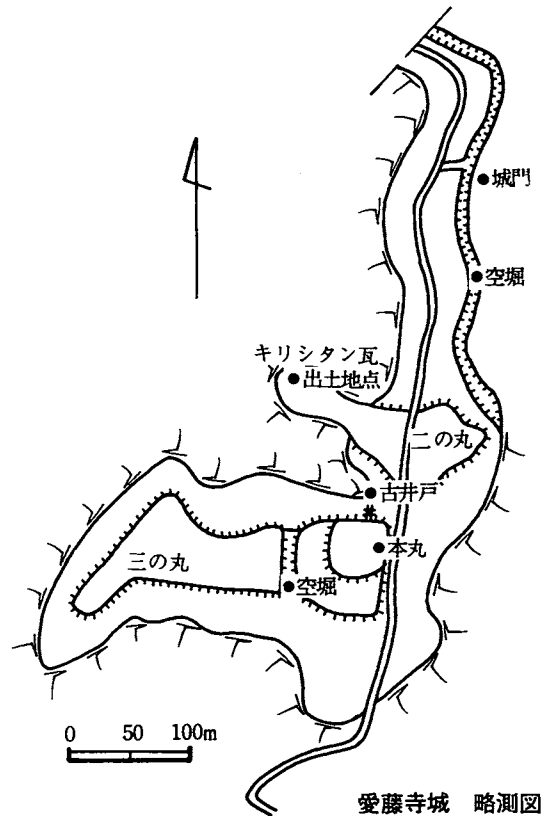
愛藤寺城

(上益城郡矢部町白藤字下町口)

城跡は、相藤寺集落の南方向にひろがる広大な丘陵地(標高445m)に位置する。丘陵の背面は現在、主に畑地となっているが、同地内における最高所を中心に「本丸」「二の丸」「三の丸」「城門」という小名が残っている。当該地の規模については、慶安四年(1651年)に細川家から幕府に提出された「肥後国大絵図」の添付書類に曲輪2000間という数字が見える。城跡に関連する遺構としては、小山状になった「本丸」西側部分に堀切が残存するのをはじめとして、北側裾部に二箇所

の古井戸を認める事が出来る。また周辺には大小の石が散在しており、かつて石垣が存在していたことを示唆している。一方、北側の野首部分には、小名から堀切の代わりに「城門」が存在した事がわかる。現に、周辺土手面に瓦片を包含する木炭層が顔をのぞかせている。同時に、幅3m・深さ0.8mを計る空堀（凹道）が「二の丸」の方向へ延びている事がわかる。ところで野首を除く城跡の周辺は、緑川と千滝川の峡谷に囲まれた希に見る要害の地となっている事を考え合わせれば、「城門」なるものは、城にとってかなり重要な部分であったものと思われる。

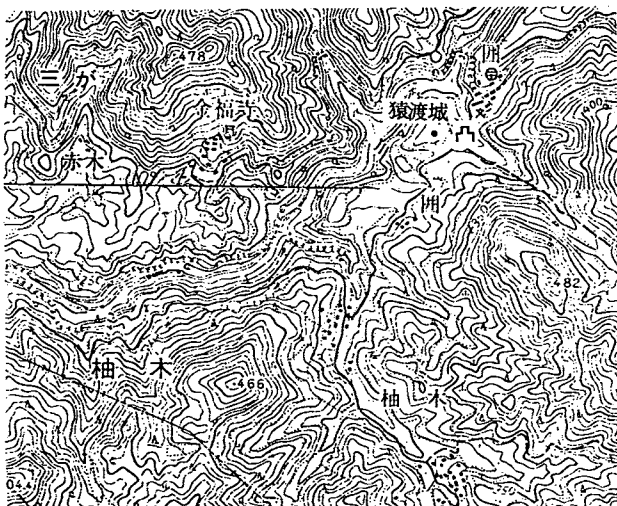
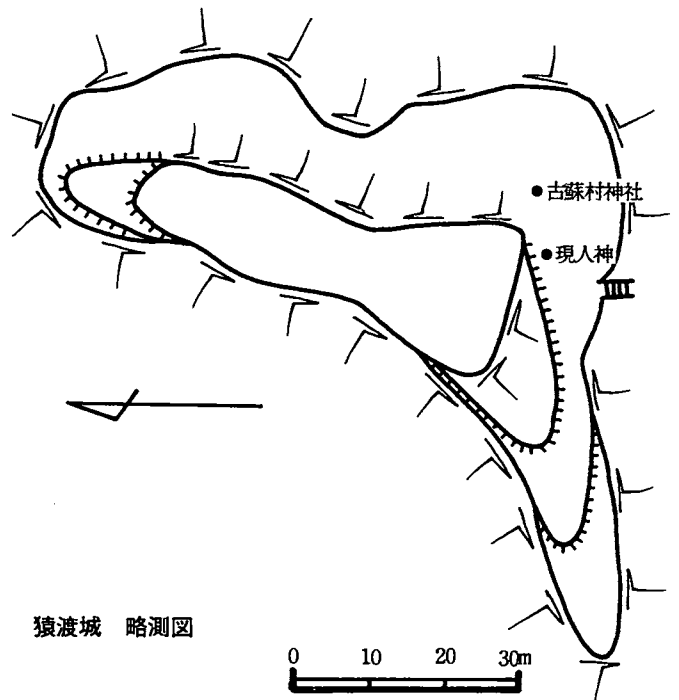
相藤寺の住民は、毎年12月25日に小西時代の城代であった結城弥平次の墓前祭を行っている。結城氏は、城内にキリスト教の傳道所をつくり、布教に努めた人物と伝わっており、このこともあって、当日、住民は、腰に鎌を差したまま詣るといふ。鎌は背の裏に縦に差すので、帯と鎌が十字となる。また、城跡の東側麓に位置する箇所には宝篋印塔があるが、地元の人には城の子供の墓という。



さるわたり
猿渡城 (上益城郡矢部町猿渡宮の前)

永正年中(1504~21年)に早川式部少輔政秀が築城し、その後も早川氏一族の居城となったが、天正十三年(1585年)に島津氏の手で攻め落されたという。城周辺には、兵の移動が見つからない様な隠し道路もつくられていたらしい。

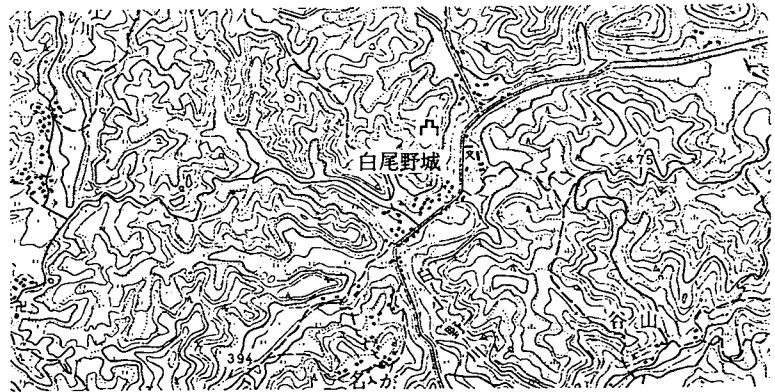
城跡は、南側を除く三方を猿渡川に囲まれた独立丘陵(標高313.2m・北西水田面よりの比高約80m)の雑木林に位置する(一部は神社の敷地)。



丘陵の背面は南北に細長い平坦地となり、周囲には階段状地形も見られる。

なお、丘陵下南側に位置する古蘇村神社には、早川一族が築城者の政秀を奉るために建立したと伝わる「現人神」が残っている。

猿渡川の沿岸を水越（御船町）に至る道が通り、城跡南側の迫に開けた集落を「罫」という。



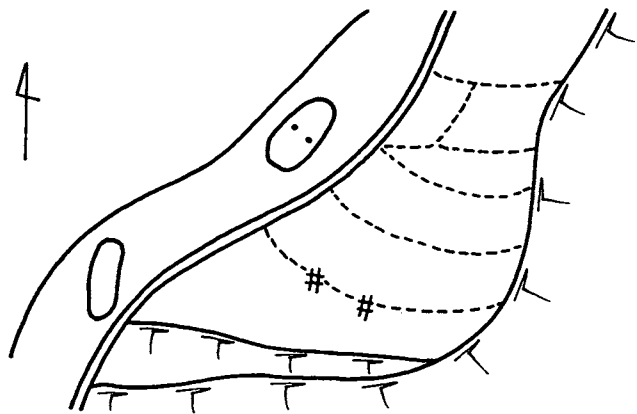
白尾野城

(上益城郡矢部町白小野橋詰)

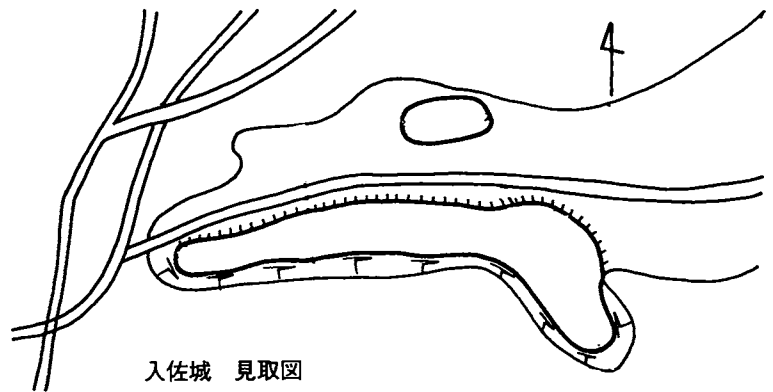
白小野堀道小野伊勢守の居城という。丘陵末端部（標高435.3m・白小野集落よりの比高約50m）の畑地に位置する。北西側が野首で、周辺に白小野の集落を望む。丘陵の背は平坦地となっており、井戸跡が2箇所見られる。

なお、平坦地の西隅には微高地があり2基の石祠が残るが、板碑を納める1基は城主の墓という伝承がある。

一方、城跡の南東方向に隣接する丘陵末端部（標高442.8m・西側水田面からの比高約60m）についても、里人は「城の跡」という。丘陵の背は平坦地で周辺に階段状地形が見られ、東側に野首部分がある。ここも白尾野城跡に関連した城跡の一部をなすものであろう。



白尾野城 見取図



入佐城 見取図

入佐城

(上益城郡矢部町入佐本田)

城主不明。山稜末端部（標高538.5m・西側水田面よりの比高約60m）の雑木林に位置し、東側に野首部分があり、西側麓に轟川が流れている。山稜の背面は広い平坦地（東西200m・南北120～160m）になっているが、城跡に関連あると思われるような遺構は観察できない。

轟川の対岸に入江の集落があり、矢部町浜町に至る道が通っている。



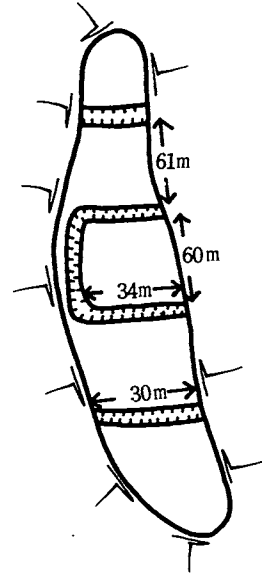
ききはら 笹原城 (上益城郡矢部町大字小笹前田)

当城には、笹原丹後守や東弾正惟正が居住したというが、笹原氏については奥国四年(1343年)大友氏が矢部に侵入してきた時に、兵五百騎を率き連れて「塔ヶ原で戦った」という話が伝わる。

笹原川の東沿岸にあって、南北に横たわる独立丘陵(標高494.0m・地表よりの比高約50m)の雑木林に位置する。

丘陵の背は平坦地になっており、東西に走る4条の堀切(幅4m・深さ3m)で5区画に分かれているが、中央部(東西34m・南北60m)が最も広く、ここには平坦地の西縁にも空堀が走っている。

なお、丘陵の東側下に「古川」という水田地帯が三日月形に残っているが、これは開田前の笹原川の痕跡である。



笹原城 見取図

うめぎ 梅木城 (上益城郡矢部町杉水辻)

城主不明。丘陵末端部(標高561.5m・西側水田面よりの比高約50m)の雑木林に位置する。

城跡は東側が野首部分となり、北側と南側を谷に挟まれ、西側麓からは谷間に開けた梅木の集落を望むことが出来る。

丘陵の背面の中央部には、南側を除く三方を溝で囲まれた平坦地がある。(溝は狭く浅いが、古くからあるものと言われ、空堀の可能性はある。)

地元の古老によると、かつてこの雑木林中の大木を「大久保のもり」「田上のもり」と呼んでいたそうで、『「もり」というのは「守り」という意味ではなかろうか』ともいう。

なお、梅木には大久保・田上の姓があり、とくに田上姓は阿蘇家の流れをくむものといわれる。



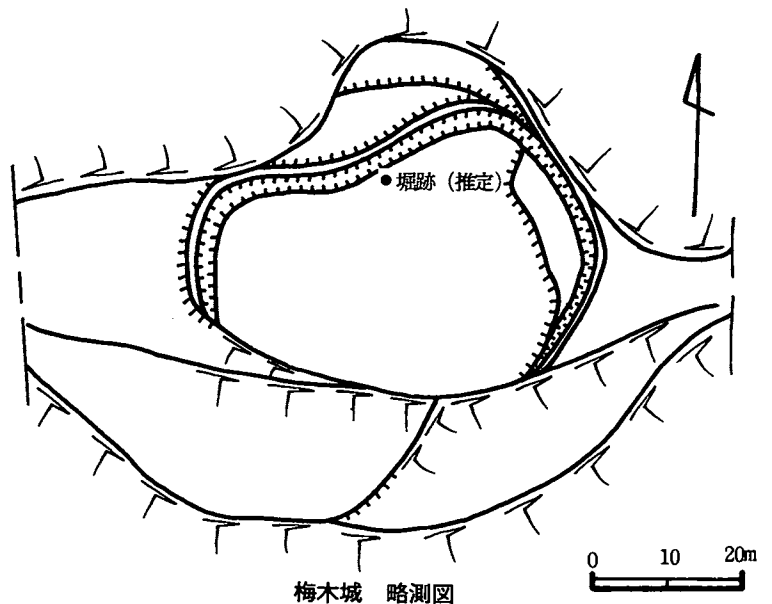
きの 小野城

(上益城郡矢部町万坂屋敷)

小野伊勢守成竹とその一族が居城したという。

万坂の集落から南西方向に突き出た丘陵地末梢部(標高468.4m・万坂の集落からの比高約18m)の雑木林に位置する(中心部の平坦地は墓地となっている)。

丘陵の背面は集落寄りに野首部分があり、小山状になった中央部あたりに平坦

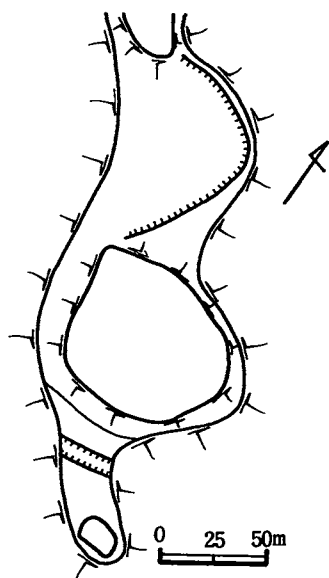


梅木城 略測図

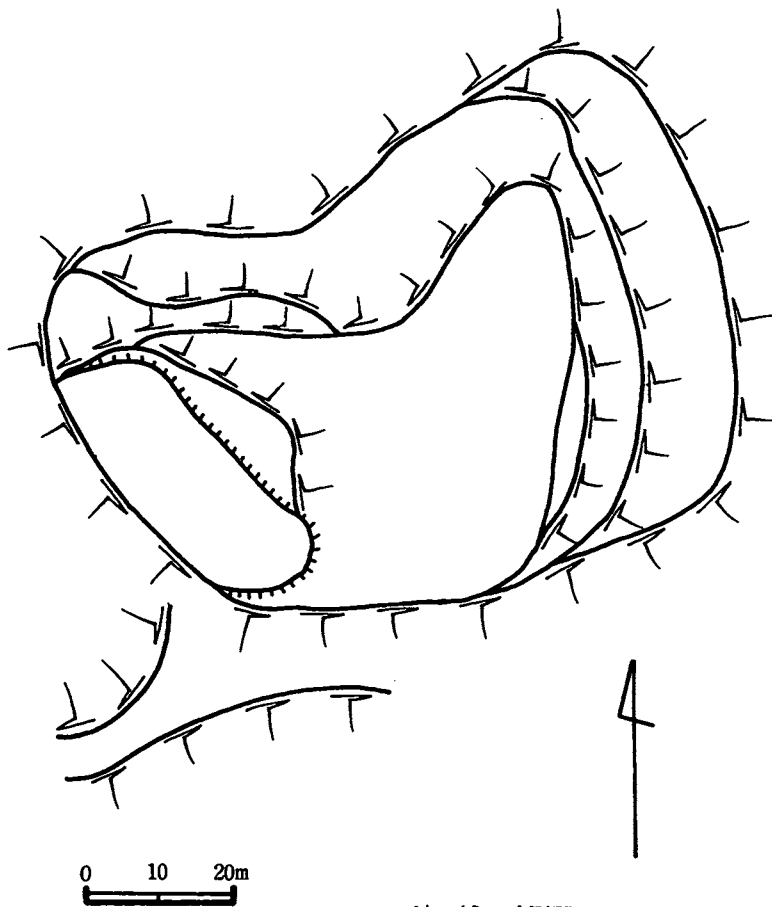
地が見られる。

なお、平坦地の南東側は細長く丘陵が伸びており、これを断切るように堀切がはいっている。

万坂山（標高664m）の麓に位置する万坂の集落には、「万坂峠」を通して砥用町に抜ける山越道がある。



小野城 略測図



池の城 略測図

池の城 (上益城郡矢部町大字荒谷字池代)

城主不明。下益城郡砥用町との境界線近くに位置するに山稜末端部の山林（標高490m・地表よりの比高45~50m）である。

この山林は野首部分の南側を除く三方を谷間に囲まれた要害の地で、山頂は平坦になっており、周囲には階段状地形も見られる。

一方、谷間の水田地帯には「堀」という小名が残り、「妙見」と称される湧水池もある。

なお、かつて城跡には井戸らしき深い穴（所在地不明）があり、埋めるのにかなりの労力を要したという話が残っている。城跡周辺には「牛谷越」と称する砥用町への山越道と、「万坂」・「藤木」の両集落がある。

猿が城 (上益城郡矢部町白藤瀧下)

緑川の北岸に迫る山稜斜面に突き出た峻しく切り立つ岩山（標高340m・岩山の高さ約200m）が、城跡とされる。

しかし、岩山の形状からここは城になり得る様な所ではない。

猿でないと登れない山という景観「猿が城」と言い伝えられたらしい。

なお、緑川をはさむ対岸には同様の性格をもつ「鬼が城」が位置している。

鬼が城 (上益城郡矢部町菅鬼ヶ城)

緑川と内大臣川の合流点に突き出た山稜の末端部（標高390m・地表より比高180m）が城跡とされる。

頂上部は狭く平坦部も存在しない。野首部分でさえ山頂との比高は70mもあり、山の斜面は急で、文字通り峻険な岩山

となっている。

「鬼ヶ城」という名の起りは山の形状からきたもので、城跡ではないと思われる。

かこい 囲城

(上益城郡矢部町菅野添)

阿蘇大宮司成兼から矢部の庄官を賜った渡辺氏一族が居城したという。

菅の囲集落南東隅の小高い雑木林(標高410m・地表からの比高7~8m)が城跡とされる。

さて、菅の地は緑川の上流と矢部町の大山稜地帯によって南北をはさまれ、西側には溪谷を流れる内大臣川と緑川の合流点があり、立地的には袋小路の形状をなしている。

すなわち、この様な菅地区にあって囲の集落は緑川に下る谷があり、清和村からの道は、この谷間を通って緑川の川原へ抜ける事になる。

以上のことから囲城跡は、交通の要所に構えられたものであることを示唆している。

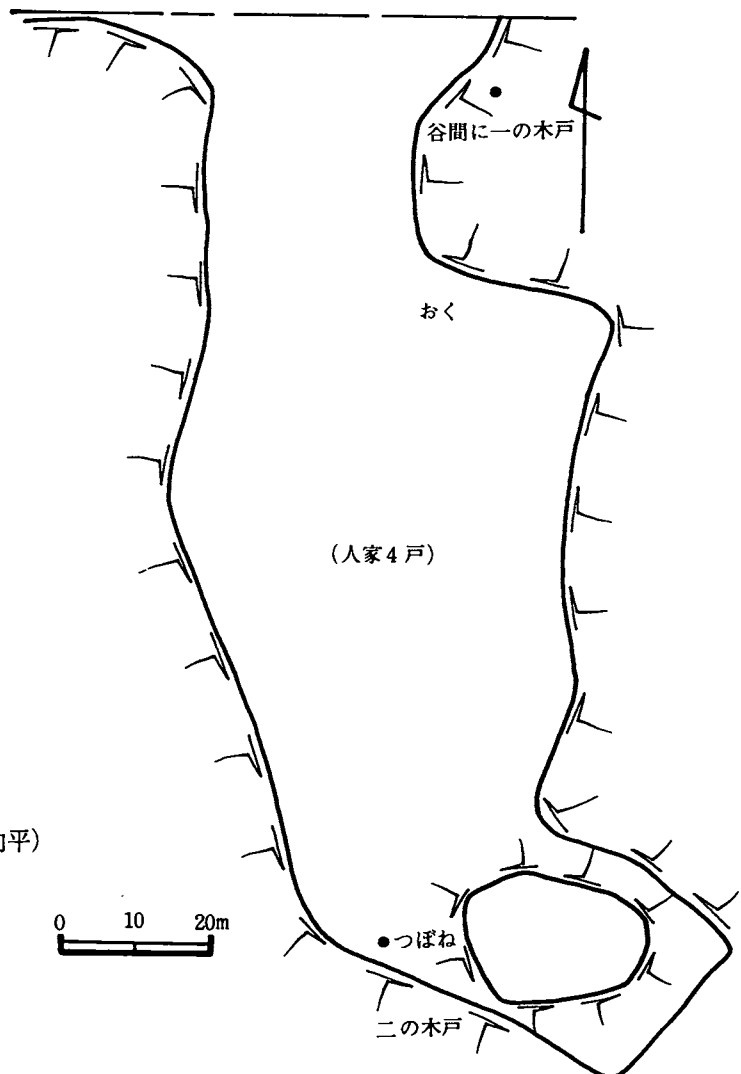
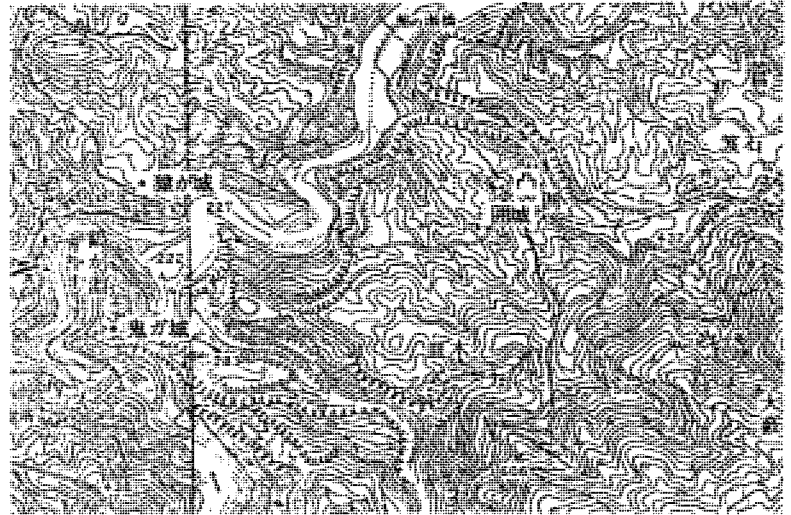
なお、現在囲城跡と言い伝えられる雑木林は総面積92㎡の小規模な地で、城の形態をなしておらず、これだけでは城跡としては不適當である。むしろ、「一のきんど(木戸)」「つぼね」「おく」「二のきんど(水戸)」の小名を残す一定の地域を含めて考えた方が適切であろう。

囲集落には渡辺姓が多く、五輪塔や宝篋印塔の一部をおさめた石造小祠が残っている。

いち はら 市の原城 (上益城郡矢部町大字市原字向平)

『矢部風土記』によれば、城主は西金吾という。

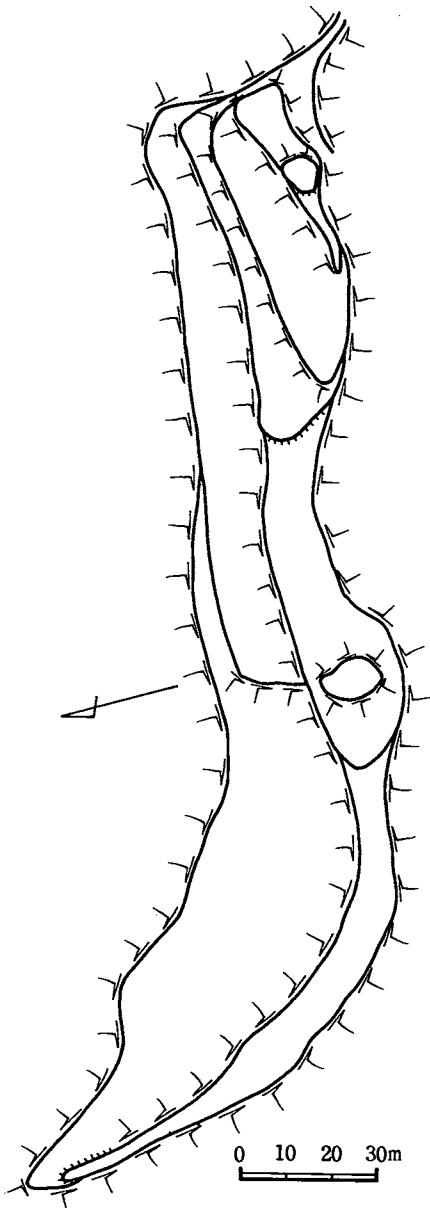
城跡は、市原集落の南西方向にあって「向平」という字名を残す山(標高623.1m・集落よりの比高123m)に位置する。山頂部分は、長さ150mを計る尾根となっているが、地形的に見て大きく3区画に分かれる。中央部分が最も高く、人工的な高台(高さ1.5m・幅4~10m)をはじめとして、小規模な土塁の残存部を見出す事が出来る。地元の人々は、この区画を「天守」と称するようである。すなわちこの「天守」を中心に、北側部分には、幅4m・長さ26mの堀切(深さ1.5m)をはさんで、10アール程の面積を有する方形状の平坦部が存在しており、一方、南



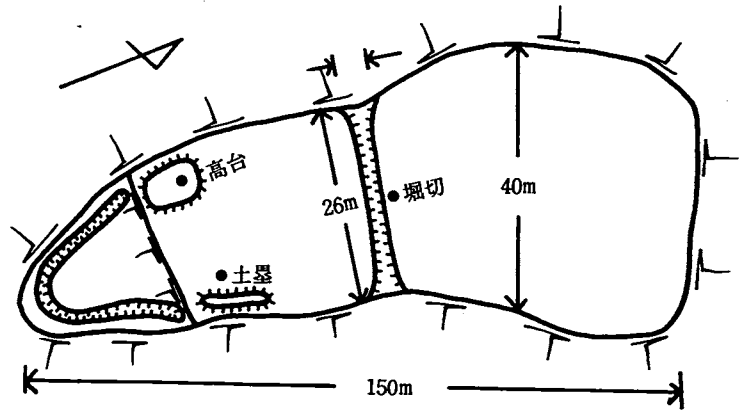
幅4m・長さ26mの堀切(深さ1.5m)をはさんで、10アール程の面積を有する方形状の平坦部が存在しており、一方、南

側部分には、若干の段差を持って舌状形の平坦部がひろがる。当該地は矢部町に所在する城跡の中で最も高所にあり、この城跡から矢部町・清和村を一望出来る。城跡麓には「勝負が谷」という小名も残っている。

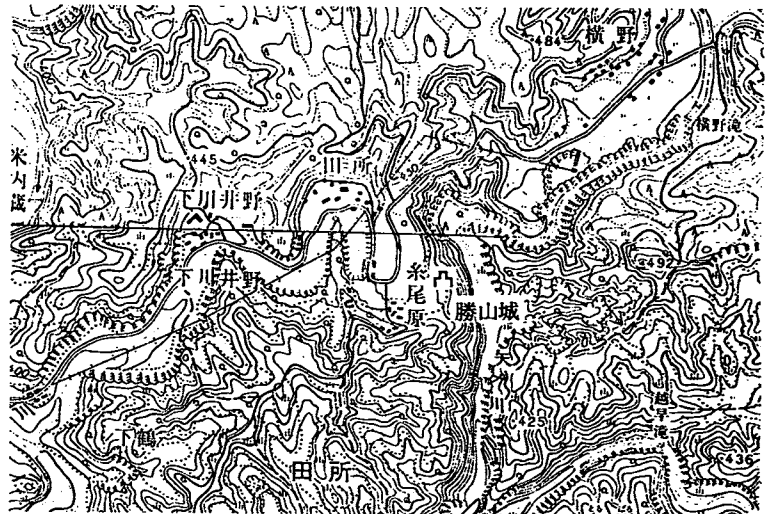
なお、城跡より500m東の小高い丘に寺跡があり、天正十五年(1587年)の年号を刻む板碑や、市原城主の墓ではないかと言われている宝篋印塔(文禄八年の年号があり、林禅定門という銘が見える)がある。この他、集落内には「屋敷」と称される所があり、古墳も数基見られる。



勝山城 略測図



市の原城 見取図

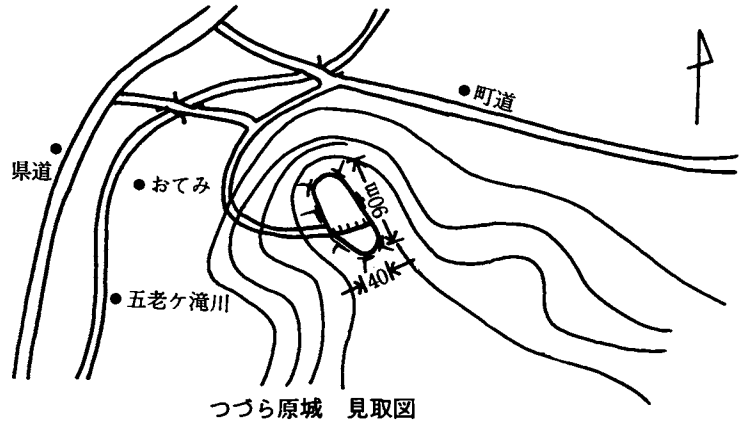
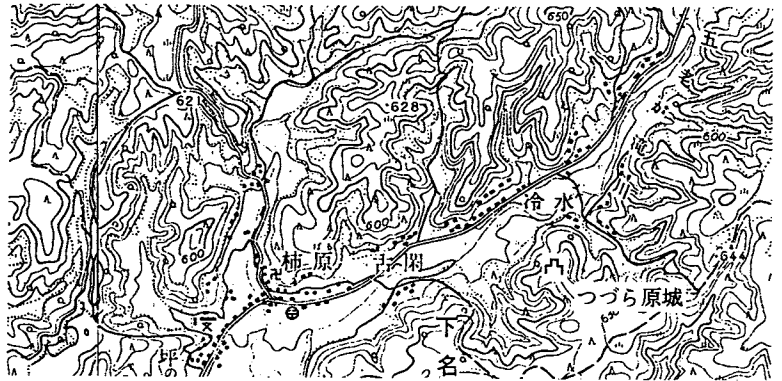


かつやま
勝山城

(上益城郡矢部町大字川野字城山)

『古城考』によれば、天正年間には、阿蘇家臣の甲斐信光が在城したというが、『矢部風土記』は野尻惟唯の在城説も合わせ記している。勝山城は天正十三年(1585年)8月島津勢が攻め入り、阿蘇諸城が次々と落成した際、最後の拠点となった所と伝えられる。

城跡は川野地区にあって「城山」という字名を残す山稜末端部(標高430m・西側麓よりの比高80m)に位置する。山頂部方は円形状の小規模な平坦地となっており、これより西側へ延びる尾根には5段からなる階段状地形が観察される。その内、最下部は、長さ150m・幅30mを計るが、その南縁部は幅8m・高さ5m程の土手になっている。恐らく築城時、削平の折りに、意図的に削り残しておいたものと思われる。当該地の周辺は、大矢川の深谷によって形づくられた絶壁となっており、極めて要害の地である。なお、登城口付近には「うちのくら」という小名が残っている。この他、「新藤(字名)」の地内に「新藤屋敷」という所があり、ここには代々、野尻姓の人が住んでいた。



つづら原城

(上益城郡矢部町下名連石葛羅原^{つづらばる})

城主不明。一説によると橋本九郎左衛門ともいうが確かでない。

阿蘇家の砦跡と伝わる。

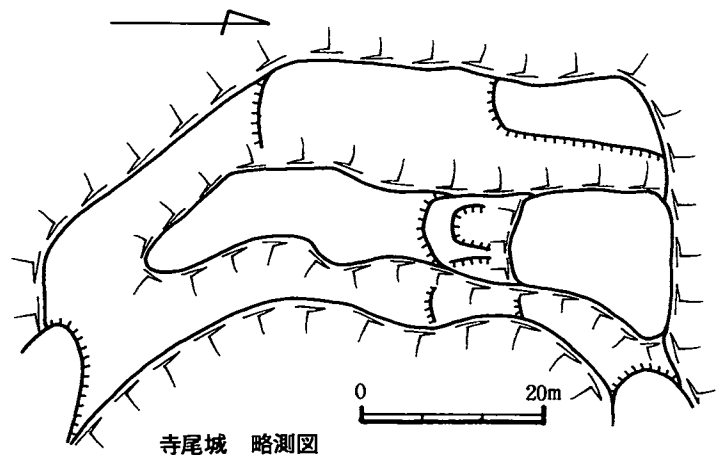
御所葛羅原と呼ばれる高原地帯の末端部(標高620.5m・地表よりの比高約80m)に位置し、山林と原野からなっている。

山頂部分の平坦地(90m×40m)を除き遺構は何も観察できないが、北西下の水田一帯に「^{おてみ}大手見」という小名が残る。

てらこや
寺尾城

(上益城郡矢部町大字杉水字寺尾)

「浜の館」の防衛拠点の一つで、阿蘇



家臣の西越前守芳方や西小左衛門惟安らが居住したという。

野首部分の北側を除く三方を千滝川の上流に囲まれた、山稜末端部の山林（標高540.3m・地表よりの比高約60m）に位置する。

山頂部分は平坦地となっており、周囲3箇所に堀切が見られる。

城跡の西側を御船に至る道が通っている。

つるぞこ 鶴底城

（上益城郡清和村大字鶴ケ田字下瀬）

城主は野原権五郎という。城跡は鶴底（字名・下仮屋鶴）集落の北側にあつて、「城山」の小名を残す山稜末端部（標高630m・鶴底集落よりの比高約20m）に位置する。

山頂部分は、南西方向に主軸を呈する帯状の平坦地（長さ105m・幅20～30m）となっているが、2～5mの削り落しによって大きく四区画に分れており、畑地や杉・桧の植林地に利用されている。東側部分の畑地は、数年前ブルドーザーにより山を切り下げたもので、以前は「城山」で最も高い地形をなしており地元の人は「本城跡」と称していた。

城跡の中心部が失われている事もあるが、西側寄りの平坦地に残る小さな鈎形の溝を除いては城跡に関連あると思われる遺構は存在しない。

なお、城山周辺には、「勝負」や「勝原」の字名が残っている。

いよいよ 飯蓋城

（井無田城・伊無田城）

（上益城郡清和村大字井無田字六地藏）

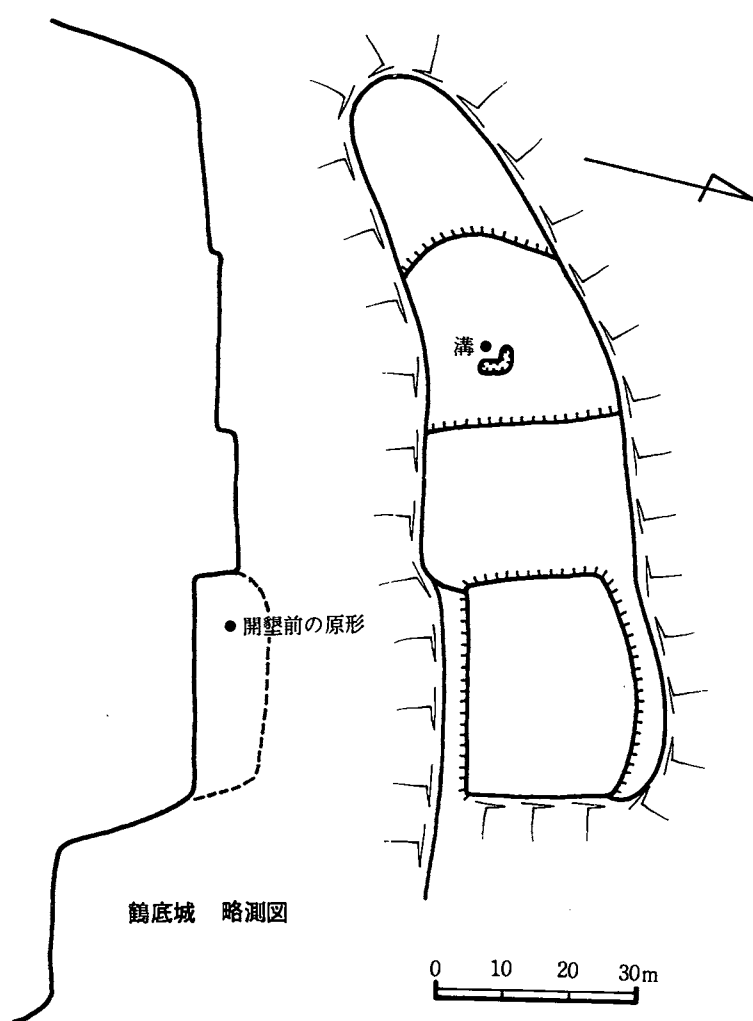
『古城考』によれば、城主は阿蘇家臣、飯蓋光金という。

城跡は、井無田（字・東次）集落の南西方向にあつて、「六地藏団地」と称される丘陵地帯の末端部（標高650m・北側麓の植林地よりの比高10m）に位置する。丘陵の背面は二区画から成る帯状の地（杉の植林地、北東方向に主軸を呈する）で、井戸跡と伝わる窪地も観察される。

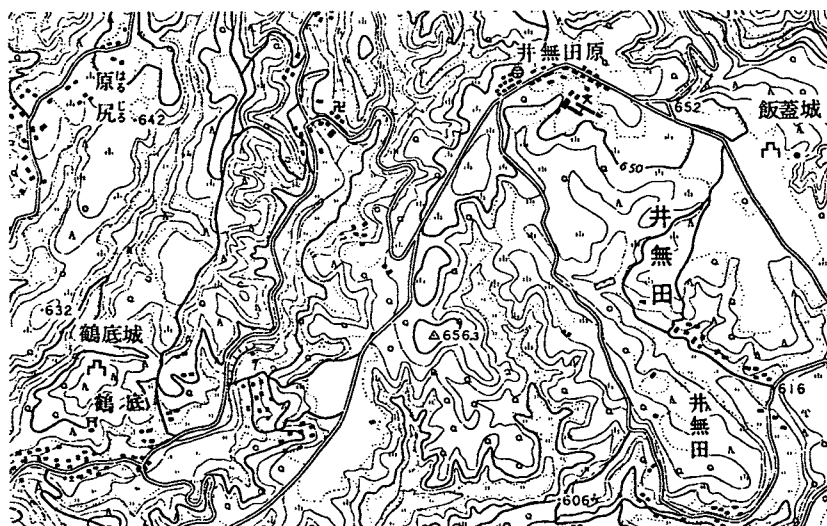
野首部分の西方100mを南北に走る県道（清和・高森線）沿いには六地藏と樹齢数百年といわれる桧の大木2本がある。六地藏には「大永七年（1527年）竜集丁亥二月二十三日大願主飯蓋備中守菅原武宣」の銘文が見える。2本の桧については「城門」と称されており、かつてはここから城にいたる道が畑の中央を横切っていたという。

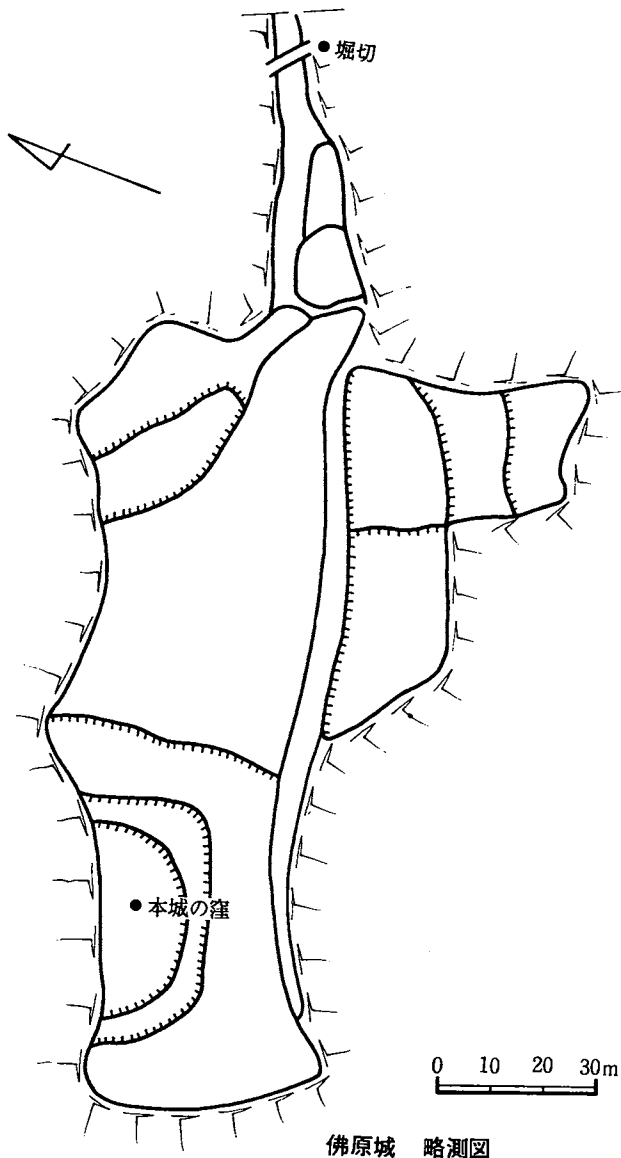
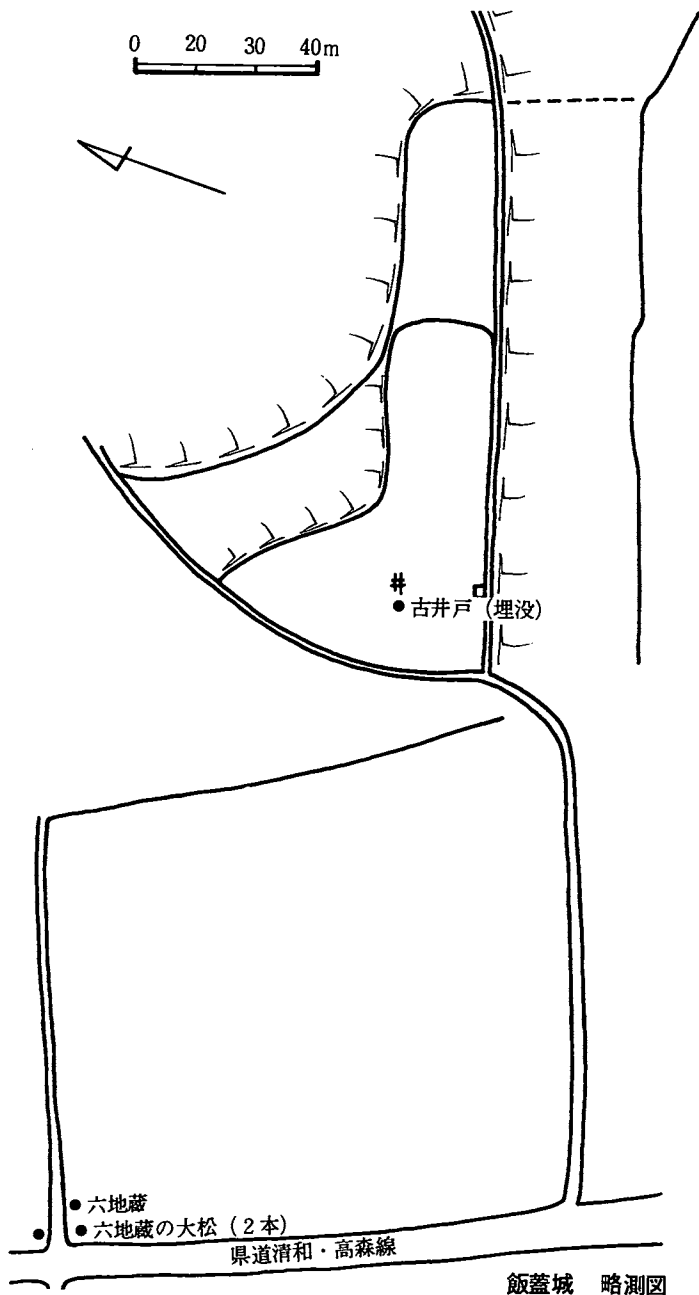
『清和村史』に「阿蘇家時代矢部に12城あり、凡て西を正面として敵の侵入を防いだが、この城だけが東を正面とした」という記事が見える。

教厳寺（熊本市西阿弥陀寺18）の住職飯蓋正道氏は、城主の子孫といわれている。



鶴底城 略測図





ふつはら
佛原城

(上益城郡清和村大字佛原字城林)

『国郡一統志』に城名が見えるが城主等については不明である。

城跡は大川(字・柿平地)集落の北東方向にあって、「城山」とも「城のおぼね(字・城林)」とも称される丘陵地末端部(標高530m・西側麓の水田面よりの比高約40m)に位置する。
(注1)

南西方向に主軸を呈する丘陵の背面はその大部分が広い平坦地(栗園)となっており、先端部に「本城の窪地(小名)」という長方形の窪地(長径46m・短径21m)が存在する。窪地には西方崖面を除く三方に深さ1~2mの切り落としがあり、床面からの立ち上がり部分に一段のステップ(幅4m)が観察される。北東側鞍部に現在、農道が切り開かれているものの、堀切の残存部が確められる。丘陵の周囲は高さ20m以上の絶壁となる。

城跡の北東側一帯には、「城ヶ崎」「城の内」「南城ヶ崎」の字名が残っている。

(注1) この地方では草原の意をなす。



川の口の城 (上益城郡清和村大字緑川字東受)

城主不明。矢筈岳(標高1113m)東麓に開けた川の口(字・東受他)集落のほぼ中央部に、「陣の内」という小名を有する民家(高橋勝久氏宅)があり地元の人々は城跡と伝える。地形的に見ても当該地は南側を除く三方が急傾斜の崖となっており、城としての景観を呈する。北側崖下の窪地には、「泉跡」という呼称がある。同集落内には「番所」の屋号を残す家(菊池智氏宅)もある。

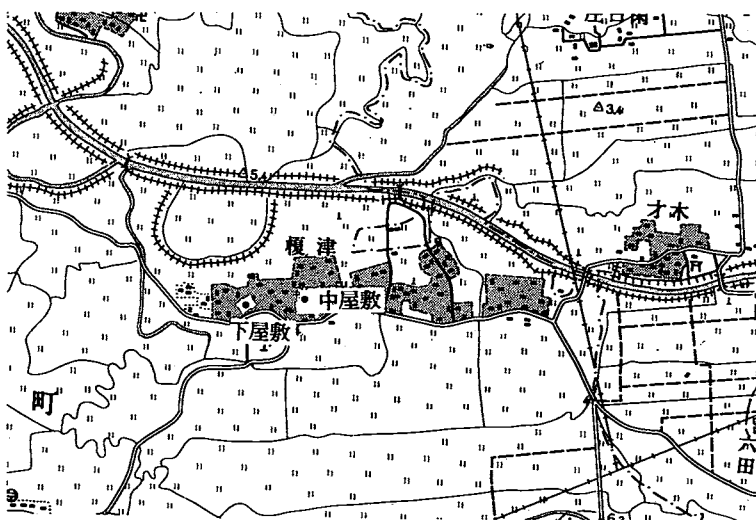
川の口の真北約2km(直線距離)に目射集落がある。地名の由来は「城から射られた矢が、この地に住む人の目に当たった」という伝承による。



下益城郡

榎津城 (所在地不明)

『古城考』によれば城主は紫垣土佐守道高という。城は榎津村にあったと記されているが、現在、浜戸川流域の榎津の地(下益城郡富合町大字榎津)には城跡に関する伝承はない。しかし同地内の集落に「中屋敷」や「下屋敷」の字名があるので、館の類が存在した可能性はある。



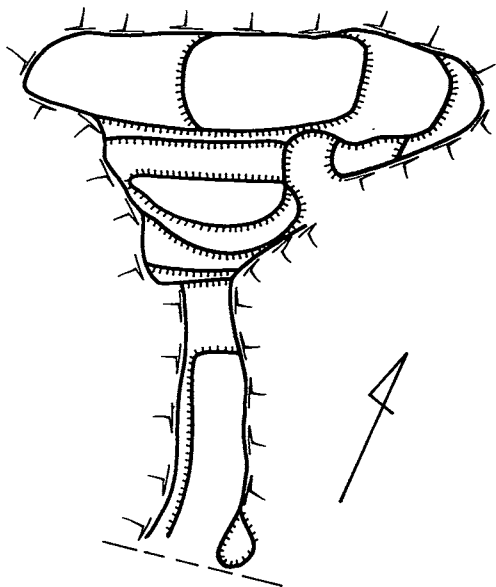
木原城 (下益城郡富合町大字木原字城山)

『肥後地志略』によると、文明年中には名和武頭が居城していたらしいが、『沙弥洞然長状写』『相良家文書』には、文亀4年に名和顕忠が古麓城(八代)より木原城に移り住んだ旨が記されている。この他、城跡には矢橋宗親居城説(「中原雑記」)や木原氏一族の居城説(「甲佐文書」)の諸説と源為朝築城説等が伝えられる。

城跡は木原山の北側末端尾根(標高135m・北側麓の集落よりの比高約120m)に位置しており、「城山」の字名を残すが、現在は木原不動尊の奥の院がおかれている。奥の院の敷地は南側を除く三方が尾根によって囲まれた特殊な地形で、台形状の窪地(東西40m、南北30m)をなし、青磁片や播鉢等の破片が出土する。南側開口部から伸びる溝(幅15m、長さ34m)の南端には古井戸も存在する。さらに、窪地の西側尾根には堀切(幅8m、長さ15m)が観察される。この他、

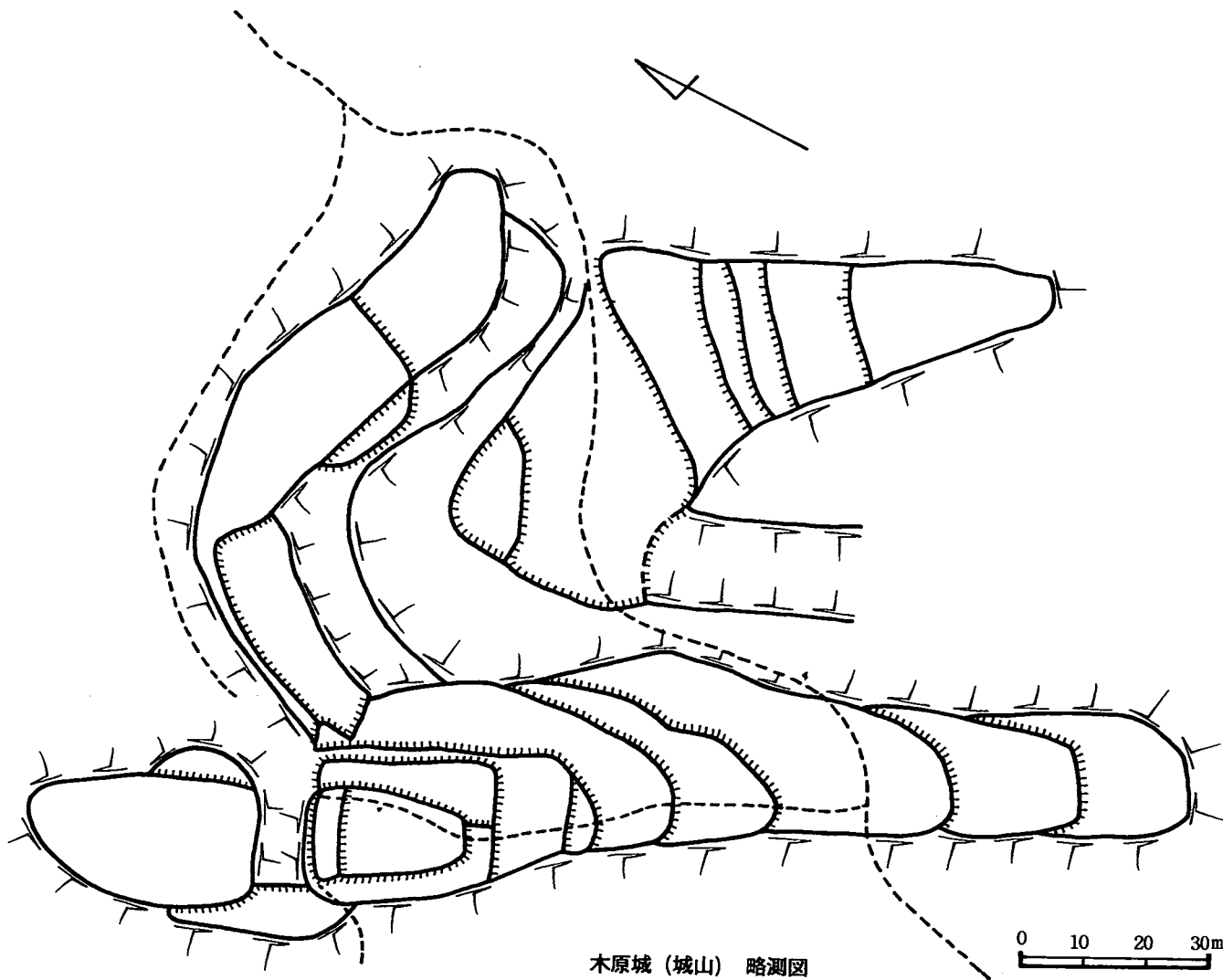
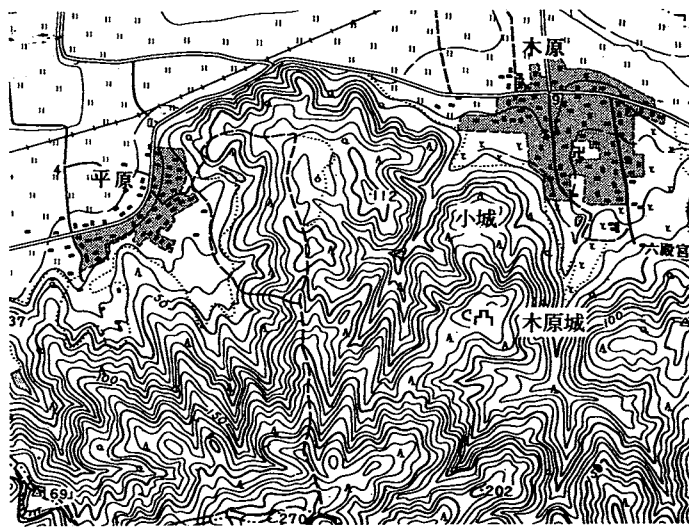
城山裾部には「水汲谷」や「午時水谷」と称される谷間があるが、これらは城の水源に関連あると考えられる。

城山麓には居屋敷と内村の集落が存在しており、いずれも石器(縄文)から中世雑器にいたる幅広い遺物が出土する。なお、「城山」の北側「小城」の字名を残す末端部の尾根にも、堀切(幅13m)等の遺構が観察される。



0 10 20 30m

木原城(小城) 略測図



0 10 20 30m

木原城(城山) 略測図

あだか
阿高城

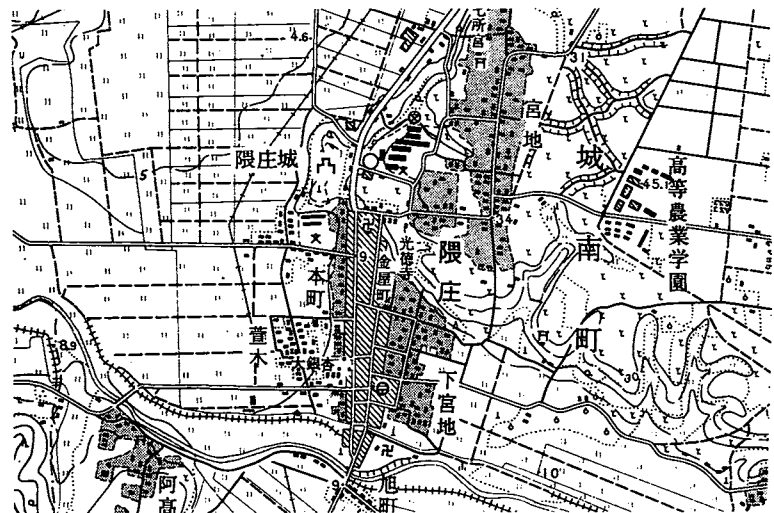
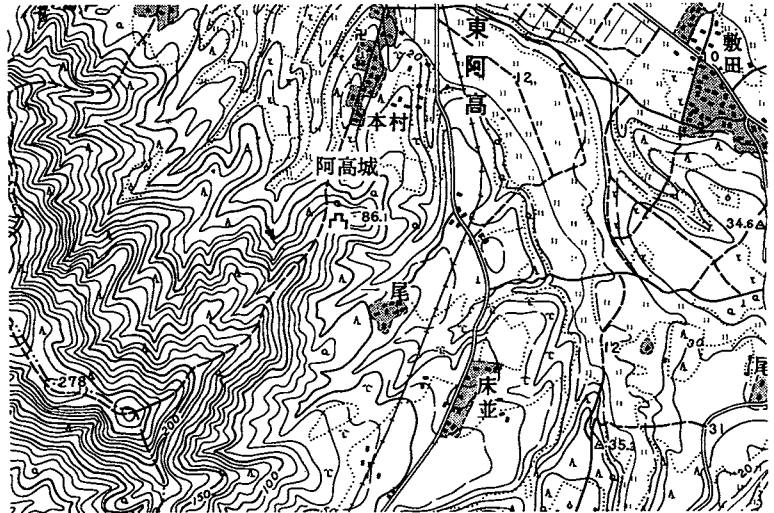
(下益城郡城南町大字東阿高字城山)

城主は名和武頭の家臣三谷刑部左衛門であったという。

城跡は木原山の北東側、末端尾根(標高80m・東側麓の水田面よりの比高約60m)の雑木林に位置しており、「城山」の字名を残しているが、麓から見上げた山の形状から地元の人は一一般的に「一の字山」と称する。

城山は東西に主軸を呈する台形状の細長い尾根をなしており、西側の鞍部には堀切(幅9~10m・深さ約2.5m)が築かれている。堀切によって仕切られた長さ100m前後の尾根の背は不完全ながら幅18~20mの平坦部が観察される。さらに、城山麓には外堀と称される自然谷(幅30m)や、城跡に結びつくものと思われる「本村」・「一尾」などの集落等が存在する。

なお「本村」には阿高城の武士が住んでいたという話が伝わっており、「一尾」には土塁や堀が残る。



くまのしょう
隈庄城

(下益城郡城南町大字隈庄)

『肥後国誌』によれば、はじめ甲斐重村が在城したという。南北朝には今川了俊も、一時、居城したらしい。戦国時代になると、当城は菊池義武の有力な拠点となった。天文年間になると、阿蘇家臣の甲斐氏が入城している。この時期に、本格的な築城がなされたものと思われる。

城跡は、舞原丘陵の西端にあって、「城の鼻」と称される高台(標高25.7m)に位置する。明治初年の絵図によれば、城跡は「本丸」「二の丸」「三の丸」と称される3区画から成り立っている事がわかる。現在、「本丸」は公園となっている。「二の丸」は、この地から5m下った所にあり、両区画を区分する空堀(東西方向に走る)は、道路となっている。野首にあたる東側は堀切の存在があり、堀切の外側に「三の丸」が見られた。しかし、野首部分に県道が通ったために、「三の丸」は、完全に分離してしまっ(注1)た。

城跡からは、瓦が出土するので、「瓦葺の館」の存在が考えられる。さらに、同地には、正平八年(1353年)の銘を有する石塔の台石が残っている。

この他、城跡より東へ300~400mの所に「新堀」「薬研堀」と称される堀跡が観察される。この事から、城跡の範囲は、周囲約850m前後ではないかと考えられる。

なお、『城南町史』によれば、城跡周辺は、古代の坂本郷の中心であり、球磨駅の所在地でもあったという。同書はまた、有力な雑任国司、肥宿禰・佐伯朝臣の根拠地とも推定している。

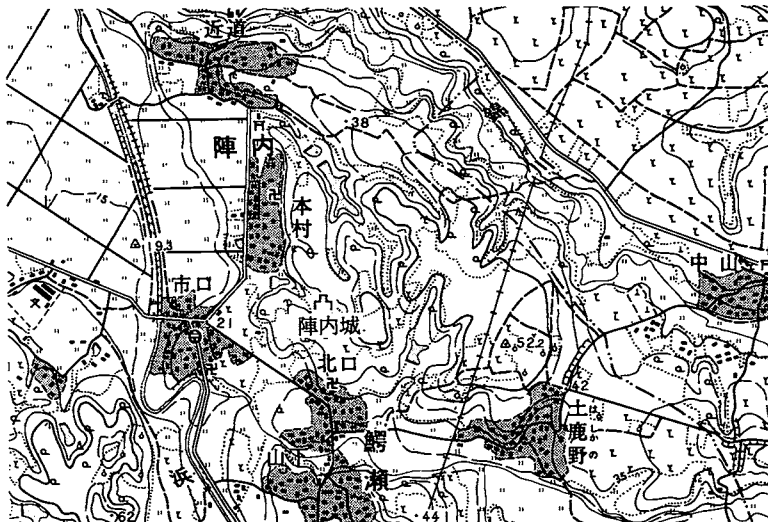
(注1) 体育館・中学校、役場になっている。

じんない
陣内城 (下益城郡城南町大字陣内字城尾)

『古城考』に「陣内村にあり、鎮西八郎為朝の城と云へとも、不分明、」という記事が見える。

城跡の所在地については、『城南町史』に「照山寺より西北200m、陣内廃寺の東南240。高さ30mの台地の西端」という記述がある。同書にはまた、城主について「源為朝にかける伝説は誤で、古代末～中世初における、益城郡司肥宿弥の砦のあとであったと思われる」と推定している。

現在、当該地は「城尾」の字名のみが城跡である事を伝えるにすぎない。



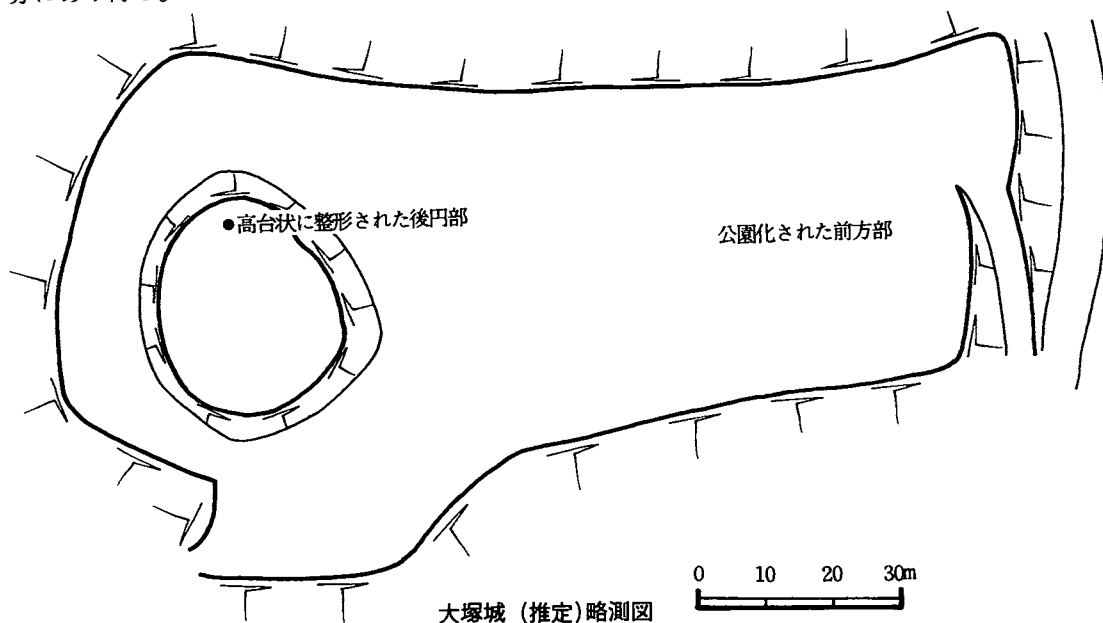
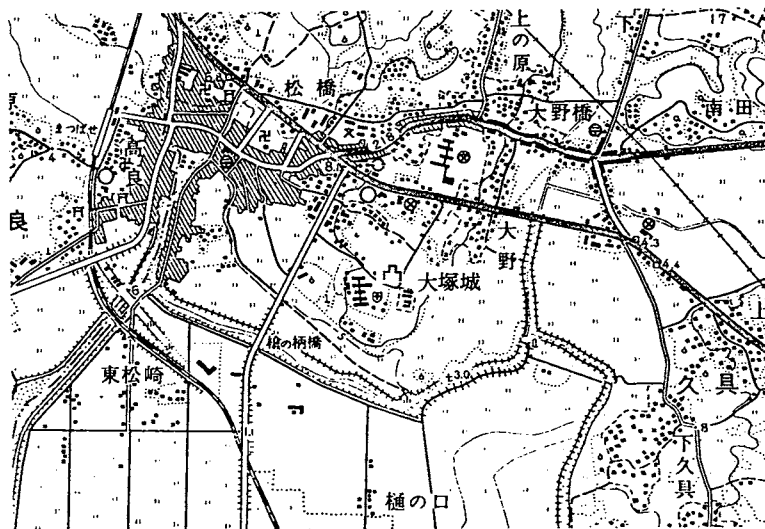
おおつか
大塚城

(所在地不明)

『古城考』は「松橋の西南大野村の西にあり」と記し、城主は不分明としながらも、阿蘇家臣の大野天進と大野民部少輔を充てている。

しかし現在の大野地区には、城跡らしきものは残っていない。『松橋町史』では、松橋町の大塚古墳をその候補地として挙げているようである。

事実、大塚古墳は県内でも最大級の前方後円墳であり、物見等に使用された可能性は十分にあり得る。



**まがの
曲野城** (法源の城・市正殿の城)

(下益城郡松橋町大字曲野字橋川)

阿蘇家臣、鈞野民部少輔が在城したというが、一説には、弓術に秀でた辻姫なる人物が城主であったともいう。

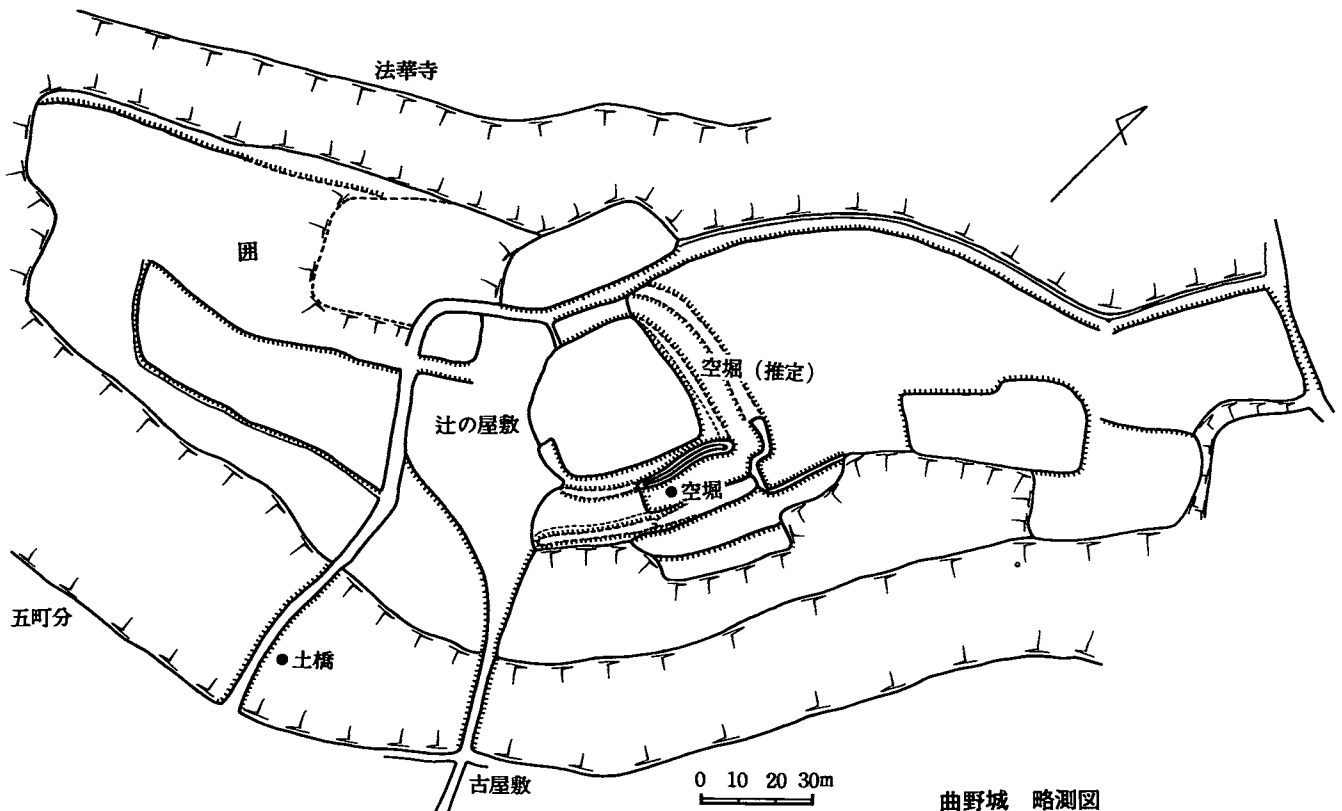
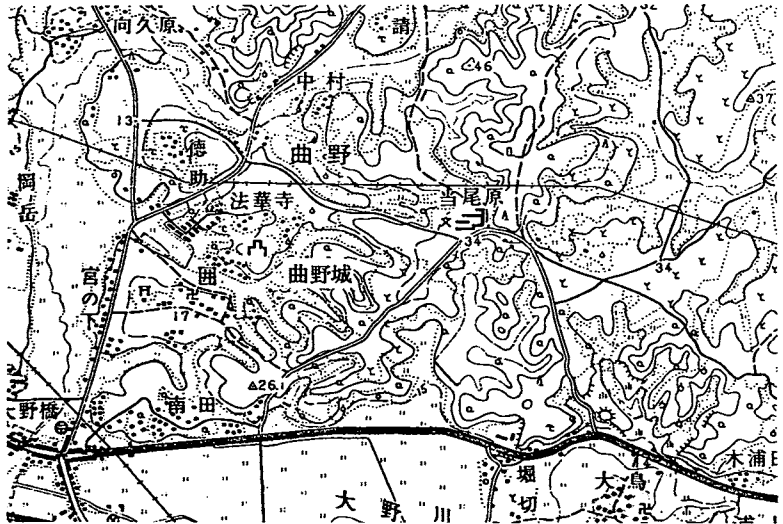
城跡は^{かこい}囲集落の背後に広がる丘陵地(標高20m・囲集落よりの比高約10m)に位置しており、畑地となっている。

丘陵の背面は広い平坦地をなしており、集落寄りの先端部に2条の土塁(幅4~5m、長さ29m)に挟まれた幅7~8mの空堀が観察される。さらに、地表の陥没から丘陵を南北に断切る堀切の存在もうかがわれる。

すなわち、城跡には堀切と空堀に囲まれた東西41m×南北36mの方形をした区画があったことがわかる。さらに、城跡の南西側段落ち部分に「辻の屋敷」という小名を残す一画があり、集落の中では最も高所に位置しており、「城跡の館跡ではないか」と語る古老もいる。

なお、辻の屋敷を除く囲集落は東西120m南北90mで、周辺は湿地帯に囲まれており南側対岸の集落に至るには、幅3m、長さ50mの土橋一本のみである。宮川氏宅には城跡に関連あろうと思われる古井戸が存在していたという。

城跡北西側の対岸には、「法華寺」「寺尾」「寺原」等の小名が残っている。



**とよだ
豊田城**

(下益城郡松橋町大字浦川内字古城)

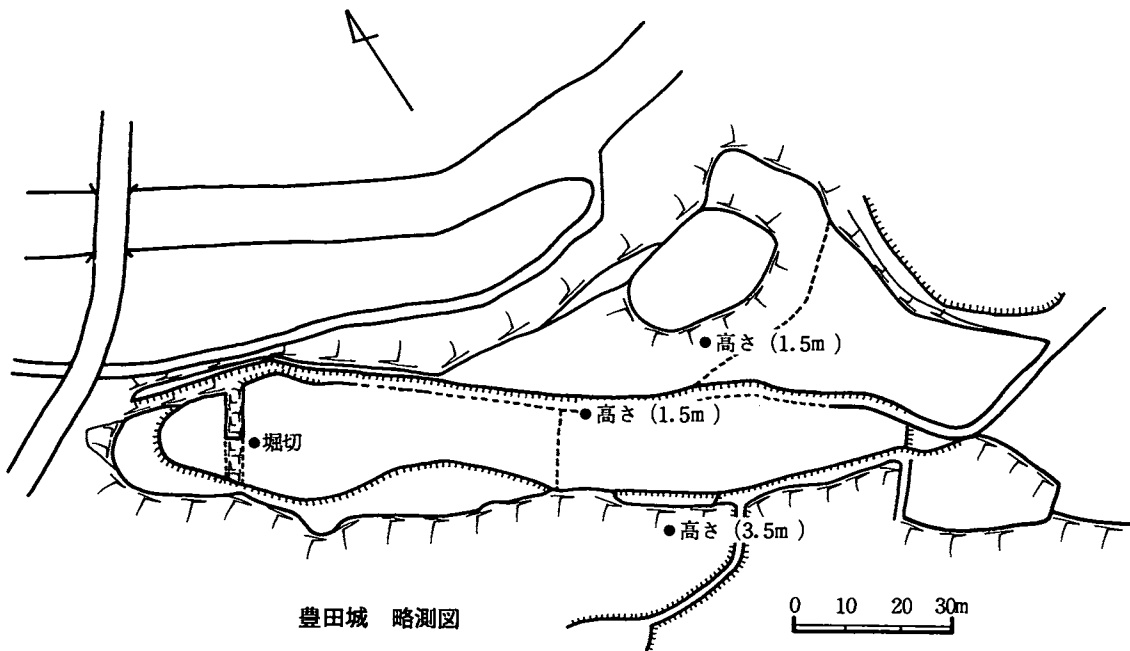
阿蘇家臣の村山丹後守が天正の頃、在城したという。

旧薩摩街道が大野川と交わる地点に突き出した丘陵地の末端部(標高22.7m・北側水田面よりの比高約13m)が、城跡と伝わる。

城跡は北側半分が南側よりも一様に1.5～2m程高くなっており、前者は雑木林、後者は畑地となっているが、雑木林内には高さ1.5m程の楕円形を呈した高台（主軸は北西を示し、長径30m、短径19m）があり、ここには、金のニワトリが埋まっているという伝承がある。

さらに丘陵先端部から南東側へ11mの地点には幅3m・長さ17mの堀切が観察されるが、この堀底はそのまま腰曲輪的平場となり丘陵先端部を西側から北側にかけて取り囲む。

城跡の南東方向には、牛尾という小規模な集落が存在する。



豊田城 略測図

まるやま ぶらじょう
丸山の古城

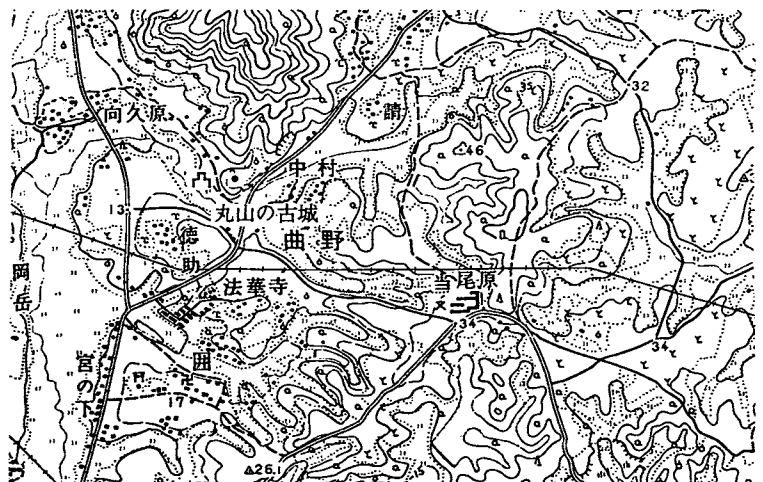
(下益城郡松橋町大字曲野字丸山)

『松橋町史』によれば、佐々木高綱の子孫が城主であったという。

城跡は道德山(標高133m)南側麓の「古城」と称される小山(標高35.1m・道路面よりの比高約25m)に位置していたが、数年前から採土と採石作業が続行され、今ではわずかに岩肌を残すのみになった。

「開発前の小山の上面には平坦部が見られ、幅2m弱の溝(深さ1m)がほぼ方形に廻っていた」と古老は語る。

現存する遺構は、道德山との鞍部に見られる幅16m程の堀切のみである。



竹崎城

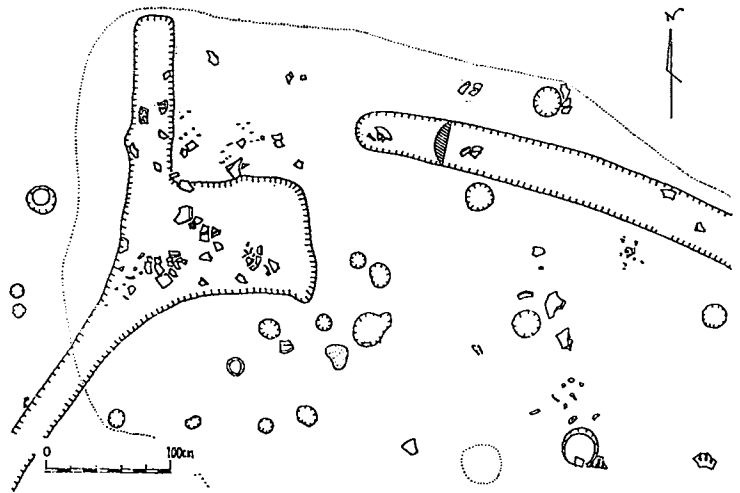
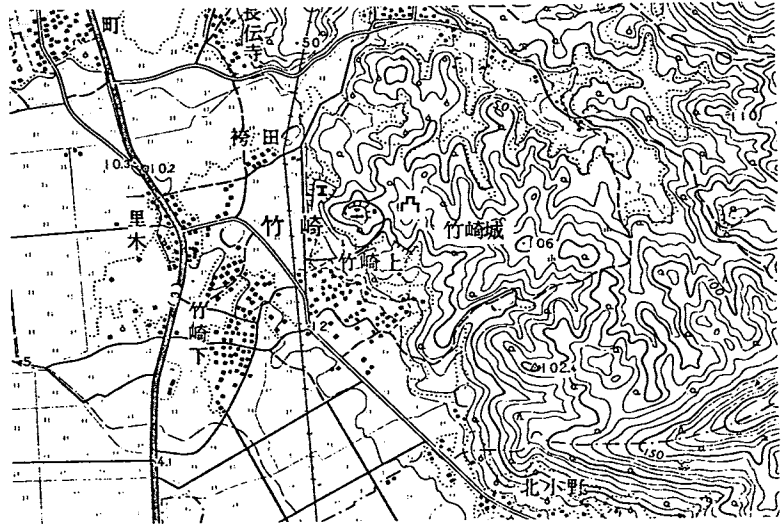
(下益城郡松橋町大字竹崎字陣の内)

『古城考』によれば、蒙古襲来の時、大活躍をした肥後の御家人竹崎季長の居城という。

城跡は「陣の内」という字名を残す山稜末端部(標高74.8m)に位置しており、その中心部は普通「高城」と称されている。

山頂部分は狭い平坦地となっており、城跡碑の建立がある。当該地における顕著な遺構は、頂上の平坦地を囲み込むように重なる階段状地形であり、これはとくに城域西側から興浄寺裏山にいたる「伝兵が迫」にはこの痕跡が著しく、山頂から迫地底部まで大小の階段状地形が約17段にも重なっている。この地形は大小さまざまで、その概形は一口では要約できないが、おおよそ縦の長さは20~30m・横幅が5m前後で、各々の区切りは、3m前後の崖をもって成っている。

ところで、この西側斜面の一部が、新設される九州自動車道の敷地にかかる為、熊本県文化課では昭和49年3月より7月までの5ヶ月を費し、発掘および文献調査を行った。その結果、階段状地形の上部(面積200㎡, 三角形を呈する)からは、多数の柱穴が検出され、またこれに付随すると思われる二つの溝が掘り込まれている事がわかった。とくに溝からは、多量の木炭に混って明時代の青磁の碗や、染付片をはじめとして鉄製品・青銅製の鏝や切羽・飾金具・瓦質の播鉢や備前系の甕片などが出土した。この他、炭化米やかき殻の出土があった。木炭片については、年代測定を行ったところ、B. P. 510年前後という結果がでた。すなわち、西暦1460年頃で戦国初期頃に該当するもので、時代差から季長自身の城という可能性は薄れた。発掘結果と結びつくと思われる文献としては、相良文書内に納められている「沙弥洞然長状」に、明応八年(1497年)に、菊池氏と相良氏が江上寺裏山(現竹崎城付近)で戦った事が記録されている。

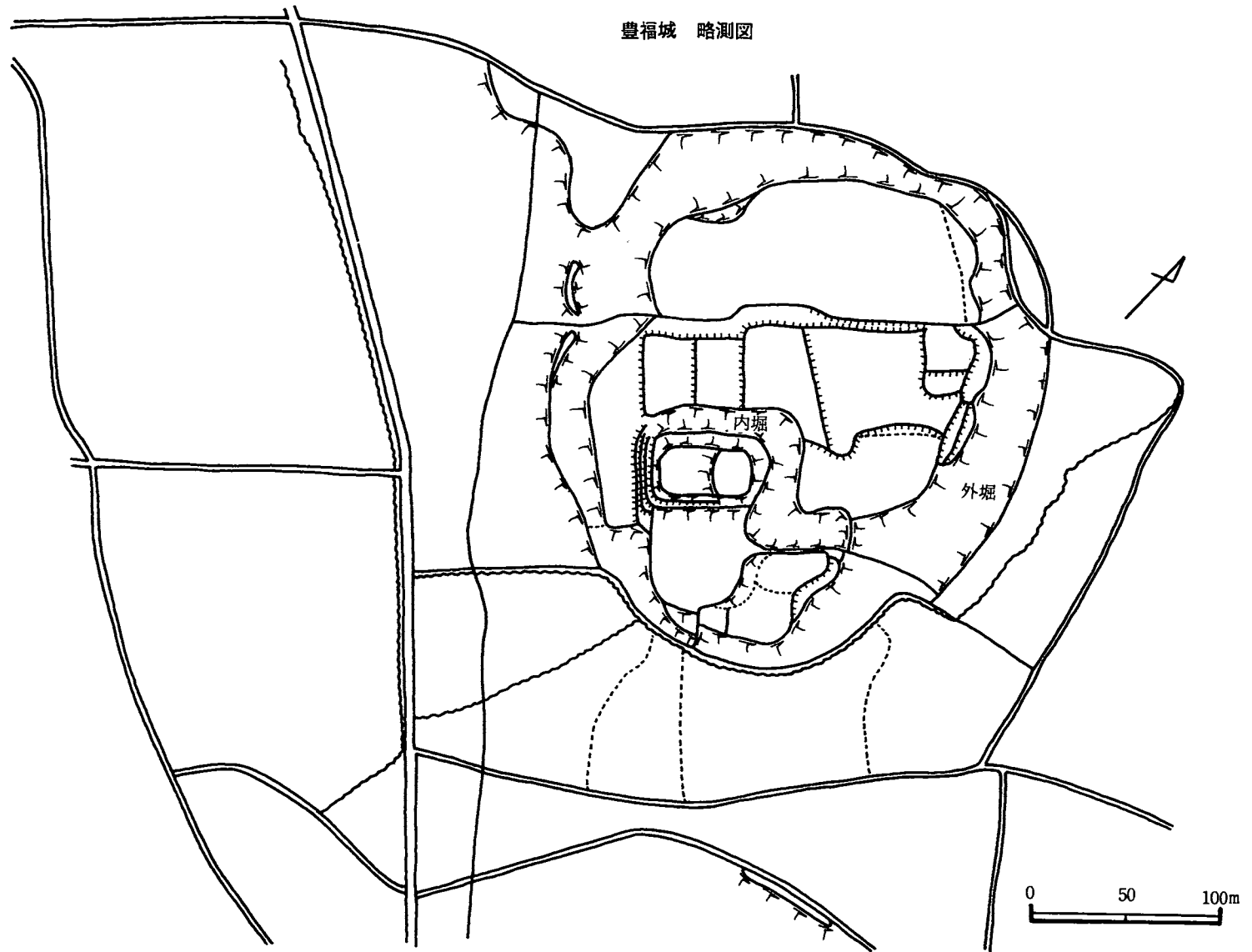


竹崎城階段状地形の上部遺構図



なお、この発掘結果については文献調査結果と合わせて調査報告書「竹崎城（熊本県教育委員会・熊本県文化財調査報告第17集）」で詳細に報告されている。

豊福城 略測図



豊福城 (下益城郡松橋町大字豊福字下城・上城)

豊福城は、相良氏の八代領・阿蘇氏の小川・海東・堅志田・隈庄領・名和氏の宇土領と、三者によって包囲隣接された形をとっており、いずれもこの城を手中にすることによって所領の安定と侵略拡大への最良拠点としていた。しかもこの豊福城の地理的位置が、甲佐から宇土半島へ通ずる街道と、八代から隈本に通ずる薩摩街道の交錯地にあり、また海にも直面しているというような好条件地であった。したがって、戦国時代においては、とくに名和氏と相良氏の間で、当城をめぐる争乱のドラマが繰返された。^(注1) 城の争奪に関しては、まさにシーソーゲームのようなありさまだった事が、『八代日記』等によってわかる。今も地元ではこの史実を裏付けるかのように「かつて、この城は激戦の地であり、多くの戦死者が出た」という旨の伝承がある。

城跡は、^{しものじょう}「下城」・^{かみのじょう}「上城」という字名を残す低丘陵地(畑地・周辺裾部よりの比高5～8m)に位置する。当該地は野首にあたる北西側部分に大きな堀切(現在は水田)がはいっているの、地形的には楕円形状の独立区画となる。城跡における顕著な遺構はこの独立区画をさらに細分する堀切で、これについては「城堀」という呼称がある。堀底は20mを計り、その造りからしても極めて近世的要素の濃いものであり、現在は水田やレンコン畑に利用されている。この土地利用からもわかるように堀は当時、水濠であった可能性が濃い。一方、「城堀」で細分された部分には、堀の採掘時に排土を盛り上げて築いたと思われる東西48m・南北26mの長方形の高台(高さ5～6m)があり、城跡における最高の海拔20.6mを示す地点になっている。ところで、高台の南側部分には舌状形の平坦地(東西・南北とも幅50m)が付随しているの、^(注2) 外観上は、あたかも前方後円墳の墳丘を平らに削り取ったかのような格好となっており、一般的に、この区画一帯が城跡

の中心部と見なされている。

城跡の周囲は、「外堀」とも称される堀切続きの水田地帯が城跡を同心円状に取り囲んでおり、城跡西側部分の水田には外堀に付随すると思われる土塁の残存部も観察される。

なお、村井真輝技師の示唆によれば、当該地からは縄文期の土器も出土するという。

(注1) 竹崎城「熊本県教育委員会・熊本県文化財調査報告第17集」

第七章、(一) 豊福城攻防の概要

(注2) 昭和49年、ゲートボール場付設によって削平された時に多量の中世遺物が出土した。また法の部分にはかつて石垣がめぐらされていたという伝承がある。

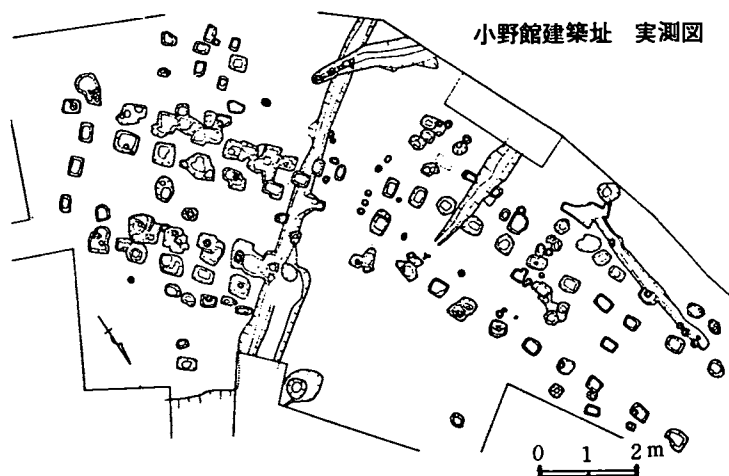
おの 小野館 (下益城郡小川町北小野)

(注1) 館跡は、「陣」という地名を残す丘陵末端部(標高30m)に位置しており、周辺にも「袋丸」・「矢城丸」・「城丸」等の城跡関連地名が残る。

当該地は、標高30mの舌状にのびる丘陵の末端部に築かれており、眼下に小野庄一帯が一瞬に見渡せる眺望の地である。九州自動車道の建設に伴う昭和49年の発掘調査で、5～6棟分の掘立柱建物跡や、望楼跡とも思われる独立した6個の柱穴が検出された。同時に土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・青磁・滑石製品・硯・布目瓦・陶磁器等の出土を見た。青磁破片については、13世紀代に竜泉窯で焼かれたものと思われる。

文献によると、この館中心とする北小野から南小野にかけては小野荘という中世荘園が存在していた。小野荘に関する記『仲田文書』や『阿蘇文書』により鎌倉時代から室町時代に及ぶことが知られる。したがってこの館跡が小野庄となんらかの結びつきを持つ事は明らかであろう。

(注1) 発掘調査の結果は、竹崎城「熊本県教育委員会・熊本県文化財調査報告第17集」第二章で報告されている。



きたべた 北部田城

(下益城郡小川町大字北部・北海東)

『古城考』に「北部田村にあり、城主未考レ之」という記事が見える。

現在、北部地区と北海東地区をまたぐ山稜地帯に、西方向から東方向にかけて、「城平」「高城」「下城」「上城」という字名が連続して残っている所から、当該地が『古城考』にいう北部田城跡と思われる。

城跡に関連あろうと思われる遺構は何も観察できないが、極めて特異な字名の配列であり、注意を要する。

自然地形を巧みに利用した砦の類であったのだろうか。



おの 小野城 (下益城郡小川町大字北部田字古城・(大字北海東高城・九万城))

城主は阿蘇家臣、男成友竹という。

(注1)

城跡は、小川町と豊野村の境界線が走る山稜地帯の峰線上(標高283.2m)の雑木林に位置しており、「城山(じょうやま)」の小名を残している。

山頂部分は、堀切(幅4m・深さ2m弱)をはさんで南北両側に平坦地(南北25m・東西10m)があり、西側の段落ち部分には曲輪らしき階段状地形が観察される。

山頂からの眺望はきわめて良好で、西方の眼下に小野部田の集落(中世の小野荘)を一望に見渡すことができる。

なお、小野部田の集落には、北小野・年の神の中世建物跡、長谷寺などがあるが、とくに長谷寺境内には、鎌倉～江戸の紀年銘を有する五輪塔などの金石をはじめ、鎌倉時代作の十一面観音(県指定)がある。

(注1) 男成氏は後に姓を小野と改めている

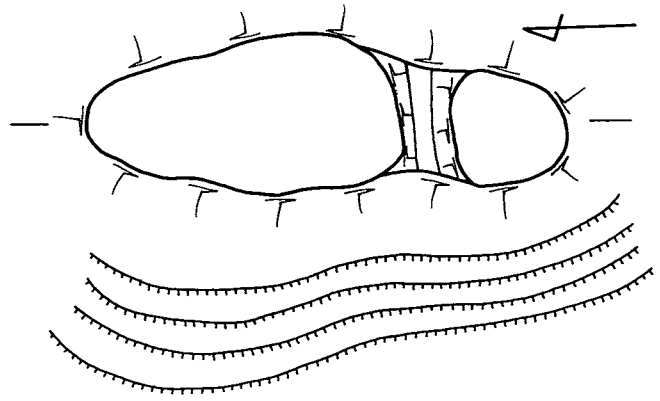
小川城

(下益城郡小川町)

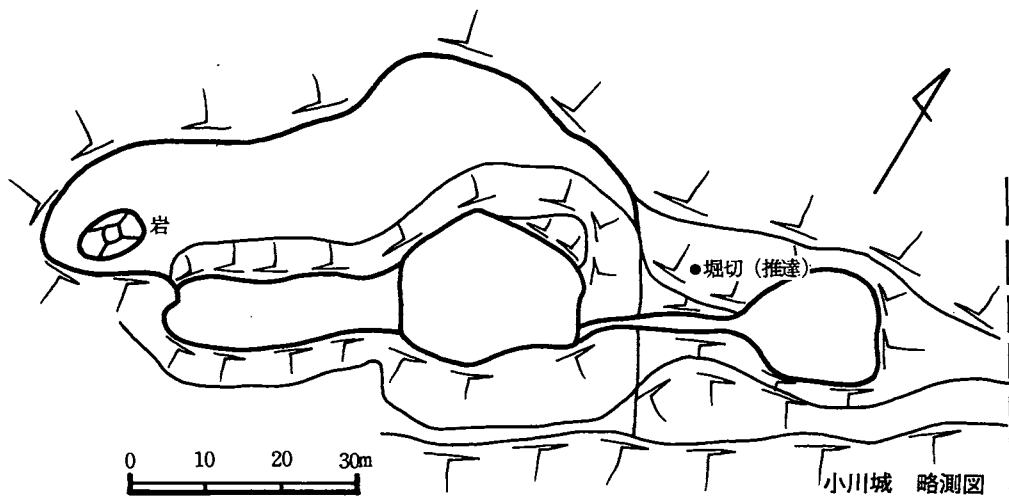
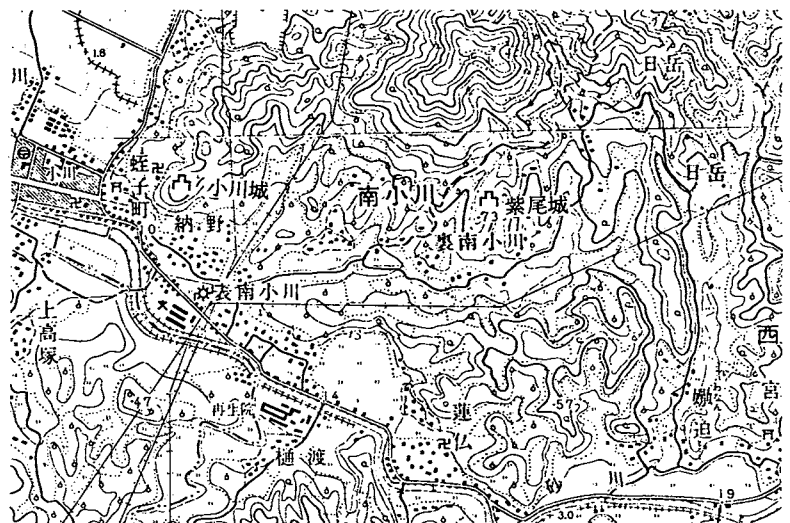
『阿蘇文書』によれば、正平二年(1347年)に南朝方の拠点として阿蘇惟澄が立て籠もった城跡という。

城跡は「観音山」と称される丘陵末端部(標高60m・南側麓の蛭子町よりの比高約50m)に位置しており、城跡とその周辺は公園化されている。

丘陵の背面は堀切状の窪地をはさんで東西両側に楕円形状の平坦部があり、さらに北側の段落ち部分には帯曲輪らしき階段状地形も観察される。



小野城 見取図



小川城 略測図

城跡からは、不知火・松橋・小川・八代郡等が一望に見渡され、南側麓には海東への道が走る。

なお、城跡麓周辺には、境内に多くの塔石（宝篋印塔）を残す観音堂や、長久元年（1040年）の創建と伝えられる小川阿蘇神社等がある。

（注1）鎮西八郎為朝の伝説を有する城跡でもある。

（注2）西側平坦部（南北20m・東西25m）・東側平坦部（南北15m・東西18m）

しお 紫尾城 （下益城郡小川町大字西海東字井堀）

『小川年代記』によれば、城主は松浦筑後守という。

城跡は日岳（標高243.2m）の南麓にあつて舌状にのびる丘陵地末端部（標高70m・南側麓の集落よりの比高約50m）の雑木林に位置しており、地元では「シボ山」と称す。

しかし、丘陵の背面は狭く、野首部分にも堀切等の遺構は観察されない。全体に自然の雑木林という観が濃い。

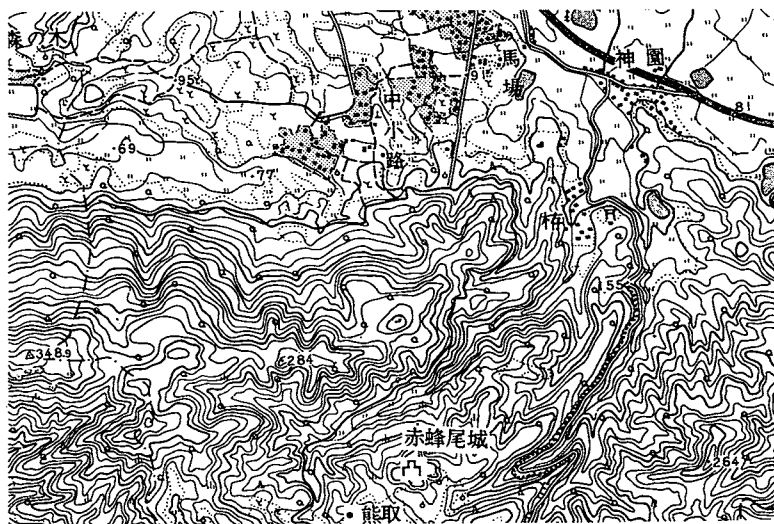
単なる砦跡であろうか。

なお、「シボ山」の南と西側の裾部は傾斜もゆるやかでミカン園に開墾されているが、その一隅には待屋敷跡と称される所がある。

かだおじょう 赤蜂尾城（堅志田城） （下益城郡中央町大字中郡字城山）

『古城考』によれば、阿蘇大宮司惟前や、阿蘇家臣、西惟安が居城したという。

城跡は^{かこい}栲集落と原田地区を結ぶ瀬戸山越えの道路沿いにあつて「城山」という字名を残す山稜地帯（標高256m・集落よりの比高160m）に位置する。山頂部分は壺形の平坦地（東西方向に主軸を呈し、東側で幅30m・西側で幅8m）となっており、西端部寄りに高さ0.6～0.7mを計る土塁状の高台（長さ22m・幅8m）が認められる。この高台は西端部で、幅1～1.5mにくびれており、外観的には土塁状を呈する。当該地からは甲佐町が一望できる。ところで「城山」の尾根は栲側の北東方向と熊取集落側の南西方向に延び



ており、この尾根筋に合計3条の堀切（北東尾根筋に2条、南西尾根筋に1条）が認められる。これらの堀切については「一の堀^{ほり}」・「二の堀^{ほり}」という呼称が残っている。寺田義道氏の御示唆によれば山頂南側斜面部には古井戸も存在したという。

栲集落には、「風呂」「大手」「下古道」「上古道」の字名が残っており、「城山」続きの小高い丘には城跡に関連あると思われる「梅林神社」が祀られている。

城跡の落城に関しては次のような伝承がある（寺田義道氏の御示唆による）。

「敵は、最初、栲集落側から攻撃を加えて来たが、十分な守りの上に、城山の斜面部も急であるため、非常に攻めあぐんだ。そこで一計をめぐらして、城山の背後にまわった所、熊取集落の住民が城山に至る間道（長い尾根筋）がある事を教えたという。したがって、この間道から一気に攻め入る事に成功し城はあえなく落城したと伝えられている。このため間道を教えた人は栲住民の反感を買う事になり、さらにまた子孫は末代まで不幸が続いたと伝えられており、またこの事が原因で、熊取と栲の間では婚姻関係が成立しなくなったという。」

この他、城跡には黄金埋蔵説がある。

（注1）『町誌中央』によれば城山における堀切は十数本を数えるというが、今回の踏査では3条を数えるに止まった。

（注2）50数年以前までは深さ2間（約3.6m）はあろうと思われる堀抜き井戸が存在したという。

（注3）城山の城主は不意に襲われたので、黄金をとある場所に埋めて逃げたといわれる。その場所については「イゲ」が3本自生している所とも伝えられている。

萱野城

(下益城郡中央町大字萱野字陣の上)

『古城考』には「阿蘇家臣城主たりといへども、不分明、」という記事が見えるが、『町誌中央』は阿蘇家臣、富永土佐守を城主としている。

城跡は、^{しょうじょうじ}正乗寺の北方100mにあって、「陣の上」という字名を残す丘陵地（標高75m・北側裾部の道路面よりの比高8m）に位置する。丘陵地の背面は、弓形を呈する平坦地（南北方向に主軸を呈する）となっており、北西隅に小規模な高台（南北方向に主軸を呈し、長径27m・短径6m）^(注1)を認める事が出来る。高台は外観上あたかも前方後円墳のような形状で、上面についても、北側部分で高さ4m、南側部分で高さ2mを計るのように一様に平坦ではない。周辺裾部には棺材の一部とみられる石材も残っている所から、古墳の可能性が強い。しかしながら、上面は削平の痕跡が明確であるので、古墳を転用した城の遺構である事にはまちがいないものであろう。丘陵斜面部については、背面の平坦地と平行するように、弓形の曲輪が、東西両側に付随するが、西側部分の曲輪が遺構としては顕著で、上面も極めて整形されたものになっている。一方、東側部分の曲輪の造りは、比較的粗雑であるが、下方斜面部は、岩肌の露出する絶壁となっており、麓には、緑川の大きな流れがある。これは城跡にとってかなりの地の利であろう。

また北側部分は、道路を挟んで、「男釜」・「女釜」と呼称される迫が東西に横切る事になる。ところで城跡の北西側部分^(注2)は丘陵地続きとなるので、この部分には「大堀」と称される堀がはいっている。

しかしこの堀切は県道によってその一部が消滅しており、現在では、長さ50m・底幅19mを計るにすぎない。

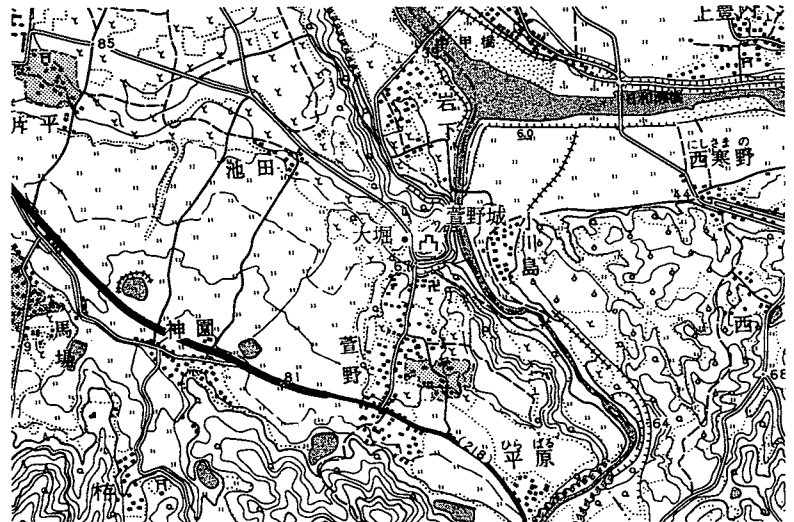
なお、城跡周辺の岩下集落は現在102～103戸を数えるが、その内の15～16戸は富永姓であり、このあたりに城主を富永土佐守とする根源があろう。

富永一夫氏の御示唆によれば、戦いに敗れた城主は、剃髪して正乗寺の住職になったという伝えがあるという。

(注1) 桑畑と荒地

(注2) 迫を流れる岩清水は城跡直下で緑川に流れ込み滝となっている。

(注3) 住職は西永姓である。



白石野の城

(下益城郡中央町大字白石野字古屋敷)

『町誌中央』によれば、城主は阿蘇氏の血を引く長野氏一族という。

白石野集落には、「表の屋敷」と称される舌状形の丘陵末端部（南北方向に主軸を呈し、標高230m・西側道路よりの比高7～8m）があり、地元の人々は長野氏の城跡と伝えている。当該地は現在ミカン畑となっており、丘陵地続きの南側に、堀切跡とも思える^(注1)凹道が存在するのみで、顕著な遺構は何もみられない。しかし、第二次大戦前までは、丘陵の西縁部に長さ約22m・幅約25mを計る（推定）空堀のような溝が走っていたという（上村清喜氏の御示唆による）。また北西斜面部の階段状地形の一隅からは、昭和24～25年頃に素焼きの壺が出土したという。

城跡に関連すると思われるものには、当該地の北東120mに位置する阿弥陀堂周辺に、板碑と五輪塔が数多く残っている。この他南西方向280mにも「とん(殿)の墓」と呼称される古塔碑がある。この2箇所の古塔碑にまつわる^(注4)伝承には、「長野加賀守の遺体は首と胴体の二つに分けられそれぞれ埋葬された」というのがある。

この他、集落には「ヤマセドンの馬かけ場」と称される所や、金の埋蔵説が伝わっており興味深い。

(注1) 凹道付近の民家に「ふるじょうや(古庄屋)」の屋号が残る。

(注2) 2基の板碑の内、1基分については左記の銘文が読める。また、他の1基には「奉逆修一如典」の銘文の他、天文の年号が刻まれている。この他、未見であるが、『町誌中央』には、永正十六年(1519年)の年号をもつ板碑の存在が記されている。

(注3) 20数基を数えるが、中には宝篋印塔の台座を組み合わせたものもある。銘文を有するものはない。

(注4) 現在は、板碑1基と、昭和期に建立された長野氏の供養塔(長野加賀守宇治惟清公神祇)が残るのみであるが、かつては五輪塔や板碑が数多く存在したという。

長野加賀守宇治惟清
 七分金得 源吉禪定門
 讀〇〇字〇
 〇超八畷〇〇王〇〇〇
 逆修善根〇
 永禄五歴壬龍集十月吉日



松の原城(下益城郡中央町大字松野原字原)

『古城考』によれば、阿蘇家臣、松野原一弥太の居城という。一方、『町誌中央』には「天正の頃、阿蘇の家臣田上丹後守の居城が松ノ原に存した」という記事が見える。地元では、松野原一弥太の城跡と伝えるようである。

城跡は、松野原集落の北側に連なる山稜の最高所(注1)(標高292m・集落よりの比高80m)に位置する。城山山頂部分は楕円形状の平坦地(長径8m・短径4m)となっており、南側に下る尾根に合計3段からなる階段状地形(上段部、長さ11.5m・幅8m、中段部、長さ17m・幅8.5m、下段部、長さ10m・幅8m)が観察される。段差については上段部から下段部に向



つて順に、高さ1m・0.8~0.9m・2mを計り、壁面はいずれも垂直に近い。しかし、北東方向に長く伸びる尾根筋には何の遺構も認められない。

松野原集落の端を、矢部から海東に至る道が通っている所からこれに関連した砦跡ではないかと思われる。

山頂部分には、「一弥太さん」と称される石祠が祀られており、松野原の住民は毎年12月1日「城さん祭り」を行(注2)っている。

なお、鋤本あきお氏の御示唆によれば、城主、一弥太は入浴中に謀によって熱湯をあげせられて憤死したという伝(注3)えがあり、この伝承に関連して、地元では、空豆を今日に至るまで、ほとんど栽培しない。その理由は、一弥太の死因とな(注4)った熱湯を空豆の枯枝で沸かしたからという。空豆を栽培すれば災難にあうと伝わっている。

(注1) 現在12戸の民家を数える。

(注2) 石祠に御神酒をあげた後、皆で盃をくみかわすという。

(注3) 『古城考』にも同様な内容の記事が記載されている。

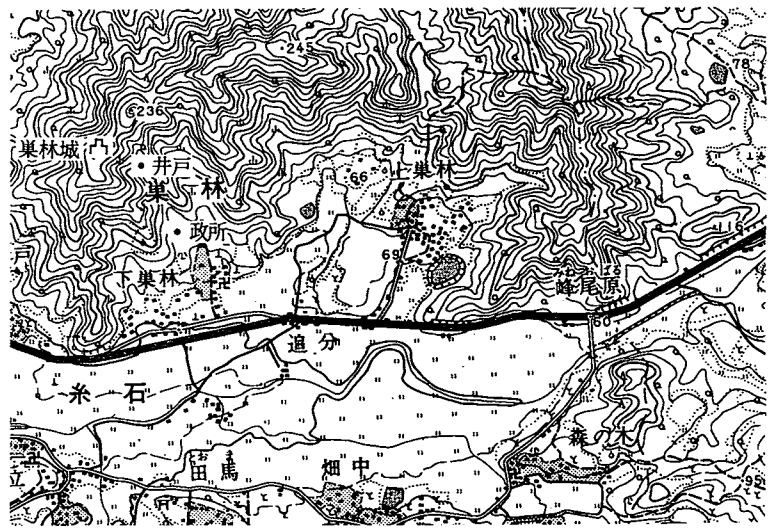
(注4) 一度、この禁を破って空豆を植えた人の家が火事であってからは、一層この伝承が強く信じられるようになったという。

巢林城 (下益城郡豊野村大字巢林字城迫)

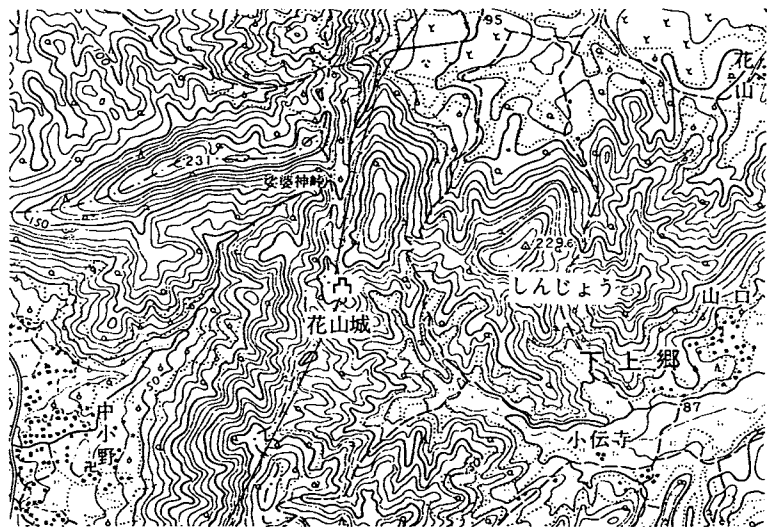
『肥後国誌』に城跡の存在が記されており、「不分明山上ニアリト云」という記事が見える程度で、ほとんど触れられていない。

城跡は下巢林地区の背後にあって、北東方向に連なる山稜地帯の一隅(標高223m・集落よりの比高170m)に位置しており「城迫」の字名を残す(注1)。山頂部分は北東方向に主軸を呈する楕円形状の平坦地(長径16.5m・短径14.5m)があり、さらにこれより、0.3~0.4m下った段落ち部分に同心円状の曲輪(幅4~6.5m)が観察される。曲輪は、急斜面をなす南側を除く三方を取り巻くものであるが、あまり顕著な造りではない。一方、この曲輪に連続する下方斜面部については、明確な階段状地形が重なっており、城跡における最も顕著な遺構として地元の人にも語りつがれている。斜面部に造られた階段状地形は合計3段を数え、上段から下段への段差は、0.7~0.8m・3~4m・4.5~5mを計り、幅も4.5m・4~5

m・3mを示す。段差面はいずれも粘着性の強い粘土状の褐色土で、勾配も急であるので、登城の際の大きな障害となる。滝下正己氏によれば、ここで子供の頃、^{いくさ}戦のまね事をして遊んだという。とくに、2段目の階段状地形の縁には幅1.5m・高さ0.2m~0.3mの土塁の残存部が確認でき、その内側に堀が残る。この堀は、南西側へ伸びる尾根筋を断切る堀切にもなっており、城跡にとってかなり重要な遺構をなす事がわかる。なお、北東方向に長く伸びる尾根筋には城跡の遺構は認められない。



城跡の水源は、集落よりの登城道に接する谷間にあり、大岩の間を岩清水が豊富に流れている。また「政所」という小名を残す山稜直下の畑地にも湧水池が残存する。



下集林地区は矢部と小川を結ぶ道路が通っている。

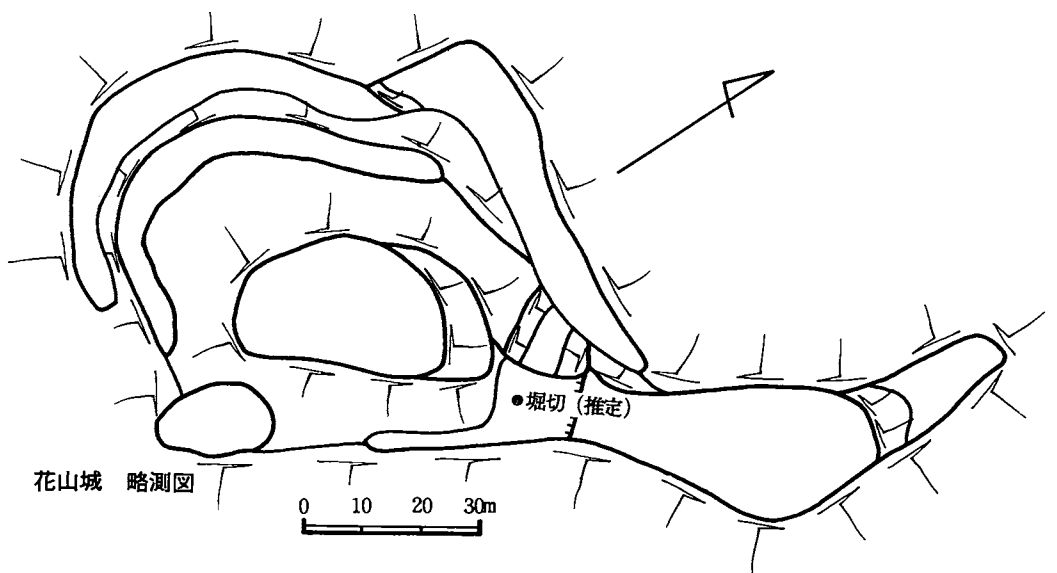
(注1) 集落よりの登城には17~18分を要する。

(注2) 立木伐採前は一年を通じて水が溜れる事はなかったという(前出、滝下氏の御示唆)。なお、今回の踏査で、この水源の周辺に平安期のものと思われる須恵の窯跡の存在が確認された。

はなやま 花山城 (下益城郡豊野村大字上郷字高峯城)

『古城考』によれば、当城は天正九年(1581年)十二月に島津氏によって築かれた城で、三年後の天正十二年(1584年)三月には廃城の運命をたどった城である。阿蘇品保夫氏の御示唆によれば、この伝えは、ある程度、信憑性があるという。したがって当城は、中世城跡としては例外的に築城期と廃城期が推察可能な城跡といえよう。また存在期間が極めて短い事も、城の構造と時代性を考える上で貴重な資料になり得ると思われる。なお同書は城主について、「絹脇刑部左衛門城代として、人数三百餘を籠置いて(後略)」と記している。

城跡は、花山集落の南西方向1kmにあって「高峯城」という字名を残す山稜(標高229m・集落よりの比高150m)に位置する。山頂部分は楕円形^(注1)状の平坦地(長径35m・短径20m)となっており、さらにこれより1.5~2m下った西側と南側の斜面部には幅6mを計る弓形状の曲輪が認められる。また、この曲輪の下方にも、同形状の曲輪が存在する。北東側にする尾根筋には、堀切らしき窪地が残存するが、この部分は不完全なもので遺構としては成立しない。



城跡に関するものとしては、北東方向に谷一つ隔てて存在する舌状形の山稜末端部（標高144m・集落よりの比高65m）に、「しんじょう」という呼称があり、さらに集落の一隅には「中ノ丸」という字名が残っている。

（注1）現在、集落からの登城道は消えており、登るに容易でない。

山崎城（下益城郡豊野村大字山崎字北芝原）

『古城考』に「山崎村山上にあり、城主姓名不分明、」という記事が見える。

城跡は、北芝原（字名）の地内にあつて「城平」という小名を残す卵形の山稜末端部（標高60m・東側麓の道路面よりの比高25m）に位置する。山頂部分は東西方向に主軸を呈する楕円形状の平坦地（長径44m・短径14~18.5m）となっているが、中央部寄りに、高さ0.3~0.5m、長さ24mを計る帯状の微高地（幅5.5m）が認められる。さらに山稜斜面部は、山頂部分と3.5mの比高差をもって同心円状の曲輪が巡っており、北東隅の一部だけは斜面部が比較的急なために曲輪の存在はない。ところで、北東隅以外の曲輪は北側で幅2~3m、南側で4.5~6mを計るが、東西両端は、その縁にいずれも土塁（西側で長さ6.5m・幅2m、東側で長さ13m・幅3.5m）が付随しており、堀切状の形態をなすものもある。すなわち、西側部分は一種の野首となるためにこの箇所は明確なる堀切であり、東側部分も、やや緩傾斜な斜面部を断切る上で必要であろうと思われる。

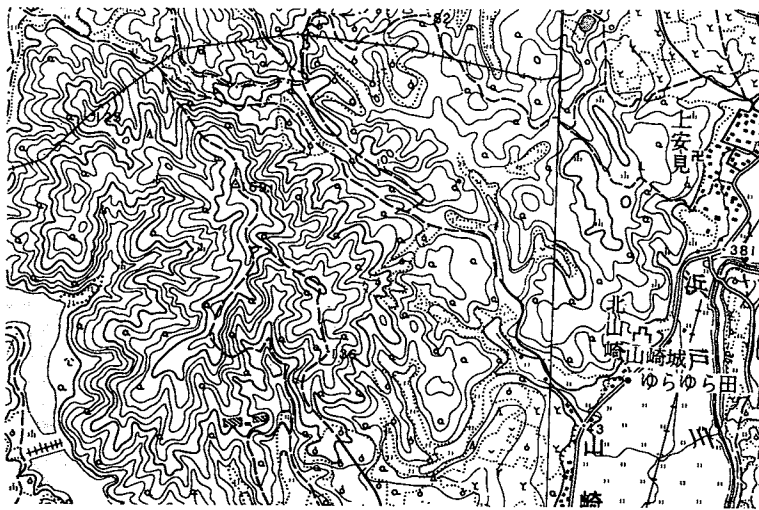
一方、城跡の東側麓には県道弦巻城南線が走っているが、周辺部の水田地帯については、「ゆらゆら田」と称される程の泥田で、地元ではこの泥田を城跡に関連する堀跡と見なす向きが一般的であった（滝下輝貴氏の御示唆による）。しかし、この泥田地帯も、近年の圃場整備で姿を消している。

その他、城跡の北側に位置する山稜地帯に「小城」という字名が残っており、当該地は「古戦場」という伝承がある。

（注1）御観音さん、御大師さん、御不動さんの三体を祀る石祠がある。

（注2）堀切の下方には数段の階段状地形が重なる。

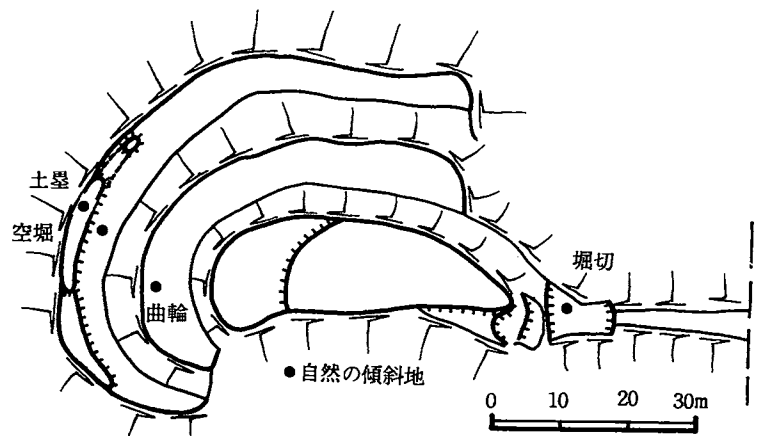
（注3）面積は約8a程と伝わっている。



岩尾野城（下益城郡砥用町大字三加字城迫）

「三浦氏が代々居城していたが御船城主の甲斐氏に攻められ時の城主、三浦義国は11月13日に自害、城も落ちた」と古老は語る。城跡は城山と称される山稜末端部（標高170m・北側麓水田面よりの比高約50m）の雑木林に位置しており、北側麓には水田をはさんで堂元地区を望むことができる。

城山の頂上は、南北に細長い平坦地（北に主軸を呈し、長径42m、短径14m）となり、鞍部には堀切（幅15m）が設けられ



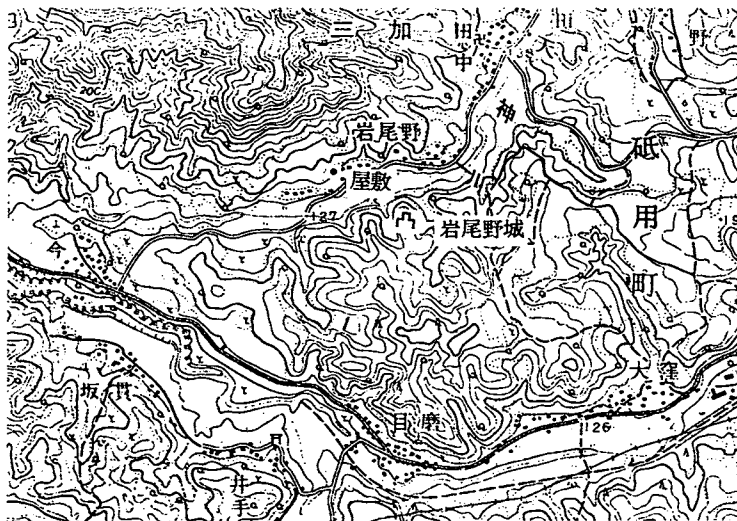
岩尾野城 略測図

ている。北側から東側にかけての裾部には2段からなる帯曲輪的な階段状地形が見うけられ、下段部には、一部破壊されてはいるものの長さ40m程の土塁（幅3m）が観察される。

なお、堂元地区には、「屋敷」という小名(注1)を残す一隅がある。毎年11月13日の命日には三浦氏を顕彰して城主祭りが行われる。なお、同地区には、三浦姓と杉本姓が多数を占める。

(注1) 三浦氏の居館址と伝わる。

(注2) その先祖は、三浦氏の家臣であったという。



やましたたかじょう 山下の高城

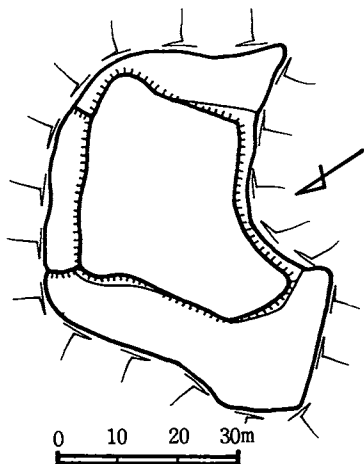
（下益城郡砥用町大字甲佐平字山下）

城主不分明。山下の地内に、緑川の湾曲に沿って南西方向へ突き出した山稜の末端部（標高138.6m・南側麓の県道よりの比高約70m）があり、「高城」の小名を残す所から砦跡の存在が考えられる。

高城の背面は、方形状の平坦地（桑畑、北東方向に主軸を呈し、長径30m・短径25m）となっており、東側部分を除く三方を曲輪状の地形が取りかこむ。しかし平坦部分は、「二区画に分かれていたのを、鍬で1枚畑にならした」と地権者は語る。

なお、南西側の山稜斜面には「城下」と称される民家があり、昭和49年に同地から甕にはいった100枚程の古銭が出土(注1)した。「高城に住む殿様は貧乏だった。」という笑話も地元には伝わっている。

(注1) 大半は消失したが、現存する12枚の古銭は、寛永・文久・永楽・朝鮮通寶である。



山下の高城 略測図



そばじまばにゅう
傍島馬入城

(下益城郡砥用町大字涌井字城平)

阿蘇家臣、砥用丹後守が天正年間まで在城していたというが、篠原丹後守の居城説もあり定かでない。しかし地元では後者の説が支持されているようである。

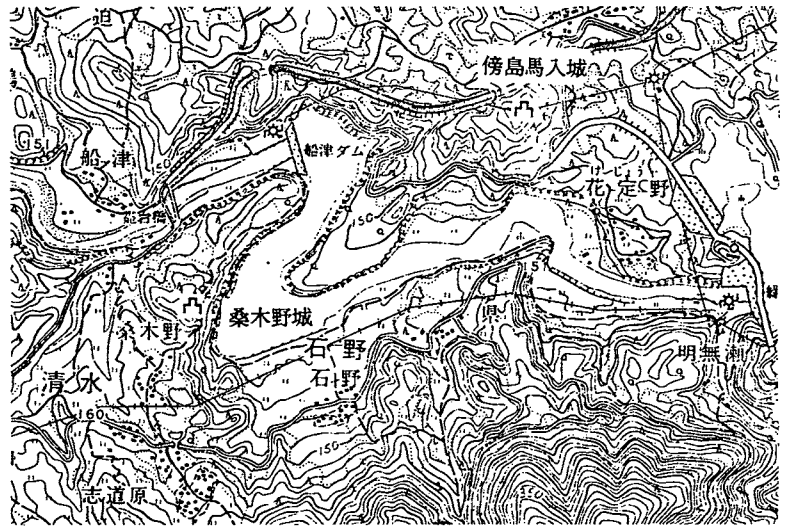
城跡は、城平^{じょうへい}の字名を残す山稜(標高230m・南側麓道路よりの比高約70m)に位置する。山頂部分は北東に主軸を呈するT字形の平坦地となっており、さらに、この上面には高さ2~3mの長方形の高台(長径50m、短径6~11m)が築かれている。西側尾根の一部には、幅9.5mの堀切も観察される、その他、登城口には「ごすい殿」と称する湧水池がある。

城跡麓の集落では内園・庵室・峙原に、城にまつわる伝承や行事が残っている。

すなわち内園の松屋敷は城主の居館跡であり、庵室には城主奥方の居住地があったというものである。さらに、峙原^(注2)の住民は毎年12月15日に城平山頂で権現さん祭りをを行う。

(注1) 古老は城の井戸跡という。

(注2) 松岡壽氏



くわぎの
桑木野城 (中ノ城)

(下益城郡砥用町大字清水字高城・肉伏)

『国郡一統志』に城跡名が記載されているが、『肥後国誌』では「中ノ城」と称するようである。阿蘇家臣篠原丹後守が在城したという。

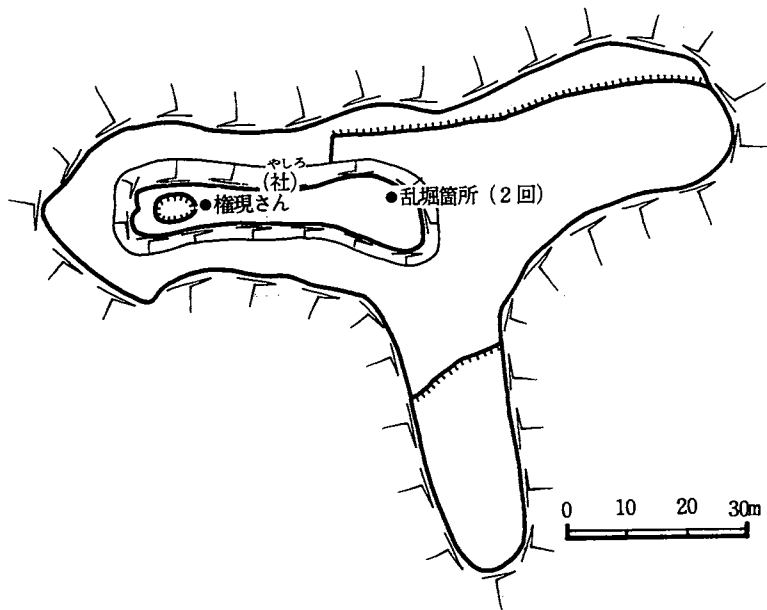
船津ダムに入り込む様に伸びた舌状形の山稜に「高城」という字名を残す小山(標高173.4m)が城跡であり、地元では砦跡と称している。高城と南側鞍部に開けた東迫集落との比高は約13~20mにすぎないが、東側麓の緑川とは比高70mを越える絶壁となる。

高城の頂上は北西に主軸を呈する長さ110m程の尾根になっており、南側部分に二等辺三角形の平坦地(長径38m、短径3~14m)がみられるが、これ以外には城跡に関連あるような遺構は観察されない。

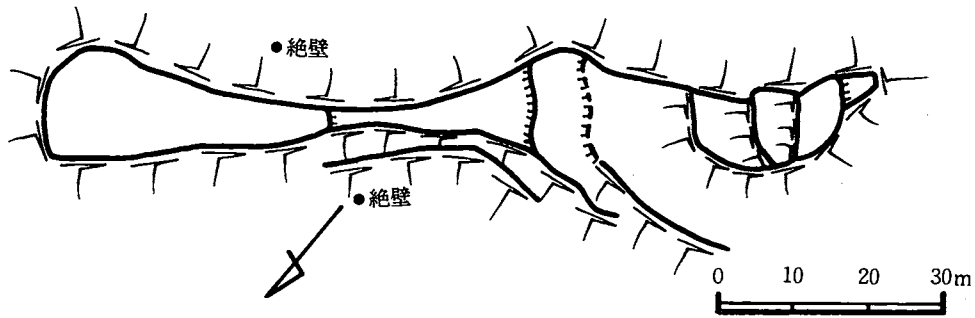
なお、山稜先端部の肉状地内に、「中ノ城」と称される墓所があり、ここには城主の墓と伝わる板碑が残っている。姫君の墓という自然石も、山稜裾部の緑川河岸段丘内に存在する。

集落内には、城主の血を引くという篠原姓の人がいる。

(注1) 地名の由来は、この地で戦いがあり多くの武士が戦死したことからきているという。



傍島馬入城 略測図



桑木野城 略測図

ごんのかみ
権正城

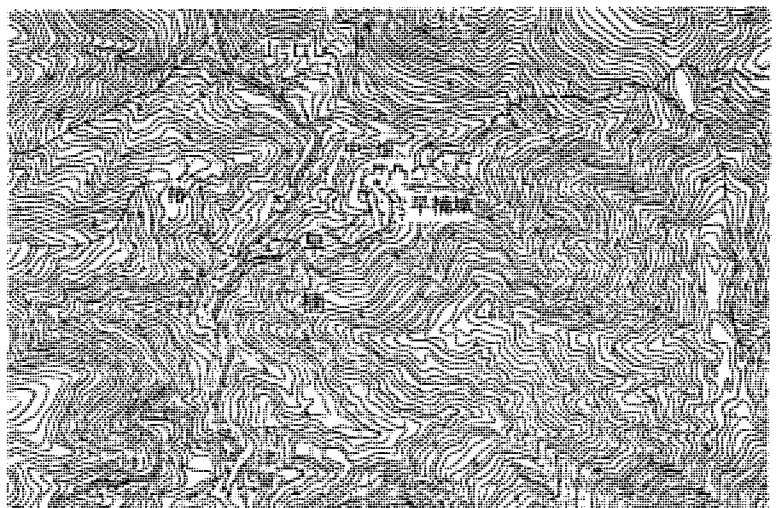
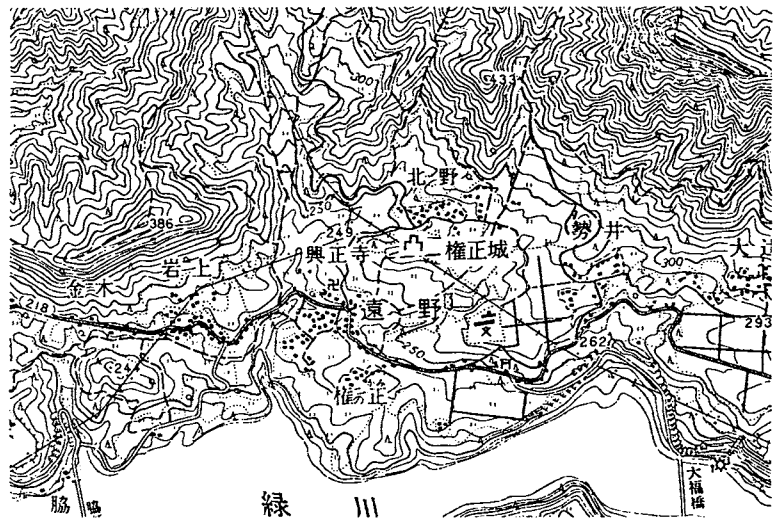
(下益城郡砥用町大字遠野字権正)

『国郡一統志』に城跡名が記載されているが、城主等については不明である。しかし地元の古老は「平家一族の血を引く斉藤権守が城主であった」と語る。事実、権正地区では毎年12月15日に区長の家で「権守祭り」が行われているようである。

しかし、城跡の所在地等については不明確で、古老も「権正地区で最も高所にある丘陵（標高279m・権正よりの比高約60m）がおそらく城跡でしょう」と推察する程度である。

なお、当該地は鞍部の東側を除く三方が急斜面となった要害の地で畑地となっているが、これは権守を祀ったという墓所を除いて全面開墾された結果で、旧地形の面形は残っていないとのことである。

丘陵南側裾部には、横穴も数基残っていたらしい。



はやぐす
早楠城

(下益城郡砥用町大字早楠字本村) (推定)

『国郡一統志』に城跡名が記載されており、阿蘇家臣が在城したことになる。

しかし地元における城跡の伝承は皆無で、その所在地については不明確である。

一方、『肥後国誌』には「本村ニ五輪塔一基アリ阿蘇惟村墓ト云紀年ナシ此墓ノ辺御館中ト云ヘリ本殿ヲ設ケテ……」の一節が見える。すなわち、かつて本村の阿蘇神社一帯には「御館」という小名が残っていたことがわかる。

このことから社地に館の類が存在していた可能性は、十分あり得ると思われる。

宇 土 地 区

建久六（1195）年の「甲佐社領立券解案」は、甲佐社領化した八代北郷の南小河・北小河や、益城上郷堅志田、益東郡津々良と共に、宇土郡勾野の四至が示され、これを確認する各郡司・郷司と共に、「宇土権介記朝臣」の署名を見出すことができるが、これが宇土郡における在地の有力者とみられる人物の初見であろう。

古代律令制下の宇土郡では、現三角町の「古氷」に郡家が推定され、その東には、「古郡里」なる条里の存在も推定されて、半島の西南端部が郡の中心であったと考えられている。しかし、律令制の衰退に伴う地域的豪族の動向は、平安時代を通じて見出せない。中世においては、郡内の中心勢力は、半島南岸中央の郡浦と、半島の頸部に当る東部が、低湿地の安定・拡大と共に発展するとみられる。前者が郡浦社の郡浦庄であり、後者が宇土庄である。

郡浦社は、元慶二（878）年に変異を示したと『三代実録』に記されて中央にも知られ、やがて神領が寄進され、祭会も整ったとみられる。久安六（1150）年の肥後国の留守所へ宛てた国司庁宣によれば、郡浦社領の四至が定められていることが分るが、一方、社領に近隣土民の越境乱入が生じている。やがて、同社は肥後二宮を称する甲佐社の支配下に入り、甲佐社が阿蘇社の支配下に入ることにより、詫摩郡の健軍社と共に、本社を含めて阿蘇四社領と呼ばれるようになった。一方、鎌倉期の阿蘇社領には、北条氏得宗家（惣領）が預所職・地頭職を有し、血縁的に近い一族にその地位が預けられていたようである。郡浦社領も北条高時の弟の泰家が最終的には預所、地頭の地位にあったことが推定され、北条氏代官の入門もあったであろう。郡浦社は、阿蘇社との系列化と、北条氏の現地荘務権の獲得によって、むしろ安定し、近隣の土民らを吸収して社領を拡大したのではなかろうか。

北条氏の滅亡により、後醍醐天皇綸旨は、阿蘇社に対して、甲佐・健軍・郡浦3社の本家職・領家職を廃止し、本社の管領を認めている。これは建武新政府の諸国一宮に対して行われた施策の肥後における具体的例であるが、更に加えて、北条氏の社領に有していた権利の継承も認められ、阿蘇大宮司の三末社支配権はきわめて強大なものとなったといえよう。郡浦庄に対して、前大宮司の阿蘇惟時は、家臣の阿蘇品六郎入道を政所代官として派遣し、庄内最大の名田である得用名を宛行っている。このような過程で、本来、強力な神威と個性的な神事の成長に不充分の観があった郡浦社は、大宮司の武家的支配が領内に強められ、阿蘇本社領の一庄園としての性格を呈する。南北朝内乱期の貞和六（1350）年の年貢注文には、武家被官の給分とみられるものや、「御城料所□丁5段」の計上が見出される。応永十一（1404）年の「肥後郡浦庄地檢帳」は同社領の全貌を明らかにしているが、庄田は宇土半島の山間の各地に広く散在し、見作143丁余のうち、神田分は14町余である。

一方では、宇土半島東部の現宇土市を中心とする宇土庄が成立していた。この庄の本家は蓮華王院領であり、領家職、乃至は預所職は、承久の乱の「京方張本人」と『吾妻鏡』に記されている二位法印尊長の有するところであった。尊長の権利は、乱後没収されて、これも北条得宗家領となったとみられ、嘉元三（1305）年、「肥後宇土庄住人右衛門三郎重教」なる執権北条師時の梶職が運送していた「塩50石、銭40貫、あい物代銭50余貫」が、肥前の五島の青方高家に奪われた事件がある。これは宇土庄から上進されていた年貢済物であったとみられ、同庄の生産力が小さいものではなかったことが推定される。

この宇土庄の根本領主、庄官の地位にあったのが宇土氏とみられる。同氏の系譜は明らかではないが、菊池一族とも伝えられ、後代に属するが、室町期の守護菊池持朝の子の為光が宇土忠豊の養子となっているので、国内で相当の家格を有する武家であろう。宇土氏の初見は、元徳二（1330）年の「鎮西下知状」に、詫摩一族のうちで、「新造御用途」の未済の親基が、召文にも応じないので、「宇土三郎高俊」にその実否をたずねさせている。彼をはじめ、以後南北朝を通じ、宇土氏は南朝方として活動し、征西將軍懷良親王の肥後入国第一歩を迎えたのは、高俊の領宇土津であったし、内乱末期に菊池を追われた征西將軍良成親王や菊池武朝らを収容したのも宇土氏であった。しかし、高俊は、阿蘇惟澄の支配下にある郡浦庄を、近隣の有利さから実力で占拠し、正平十六（1361）年、大宮司惟澄との間に南朝内部での争論を生じている。これをはじめとして、宇土氏の郡浦押領は室町期を通じ再々行われたようで、室町末の宇土為光帰還の条件として、宇土半島の阿蘇社領返還が問題となっている。

肥後の戦国時代の発端に大きな関係を有するものが、宇土為光の守護職奪取である。為光に追われて一時肥前に亡命した菊池能運は、種々画策の上、元亀三（1572）年、国衆の支持を復活して帰国し、為光を殺し、八代の名和顕忠の古麓の本城を開城させた。宇土には城右京亮を在城させたが、能運の急死により、宇土城は本拠を失った名和氏の手に移るのである。

名和顯忠は宇土為光の娘婿に当るとされている。為光の守護職奪取において、八代にあつて為光の後楯となっていた故に本拠を追われることになったが、能運急死後の守護職をめぐる国内の混乱に乗じて、宇土城を本拠とした。断絶した宇土氏に代って、娘婿の顯忠の継承権が抵抗なく承認されたものといえよう。以後、戦国時代を通じて名和氏の宇土支配が存続するが、郡浦における阿蘇勢力も天正八（1580）年、矢崎城が島津勢の攻撃を受けて落城していることから、この時期まで存続していたとみることができよう。

顯忠が宇土に移ってから、名和氏の家賢は、早生したとみられる嫡子重年に続いて、弟の武頭が継ぎ、武頭の嫡子重行も早生したので、弟の行興に継承されたとみられる。行興の没後は幼小の行憲が継いだり、これも早生し、行興の弟とみられる行直に伝わった。行直から、その子顯孝が継いで島津の肥後入国、秀吉の九州出兵を迎えるのである。

名和氏を支える老臣層には、永正十四（1517）年とみられる契状に、皆吉・河田・則元・蜂須賀・布施・内河・河北・三谷・加悦・又、天文四（1535）年のものには、他に南条、本郷の署名がみられる。後年の追筆であろうが肥後国法引用の「翳卷」の末尾の付記には、「一家之別名」と称して加悦ら庶家の名を挙げ、「一家之人、代々之長臣」としては、内河、本郷を、「代々之顯臣」として蜂屋らを挙げているが、これらより推測すれば、他と同様に、名和氏の家臣団には、伯耆・八代以来の一族衆、譜代衆があり、これに加うるに、「代々之顯臣」と称せられるのは外称、新参衆とみられるが、彼らは入部して来た名和氏に従った、宇土郡在来の旧宇土氏の被官層の系譜に属するものと考えられる。

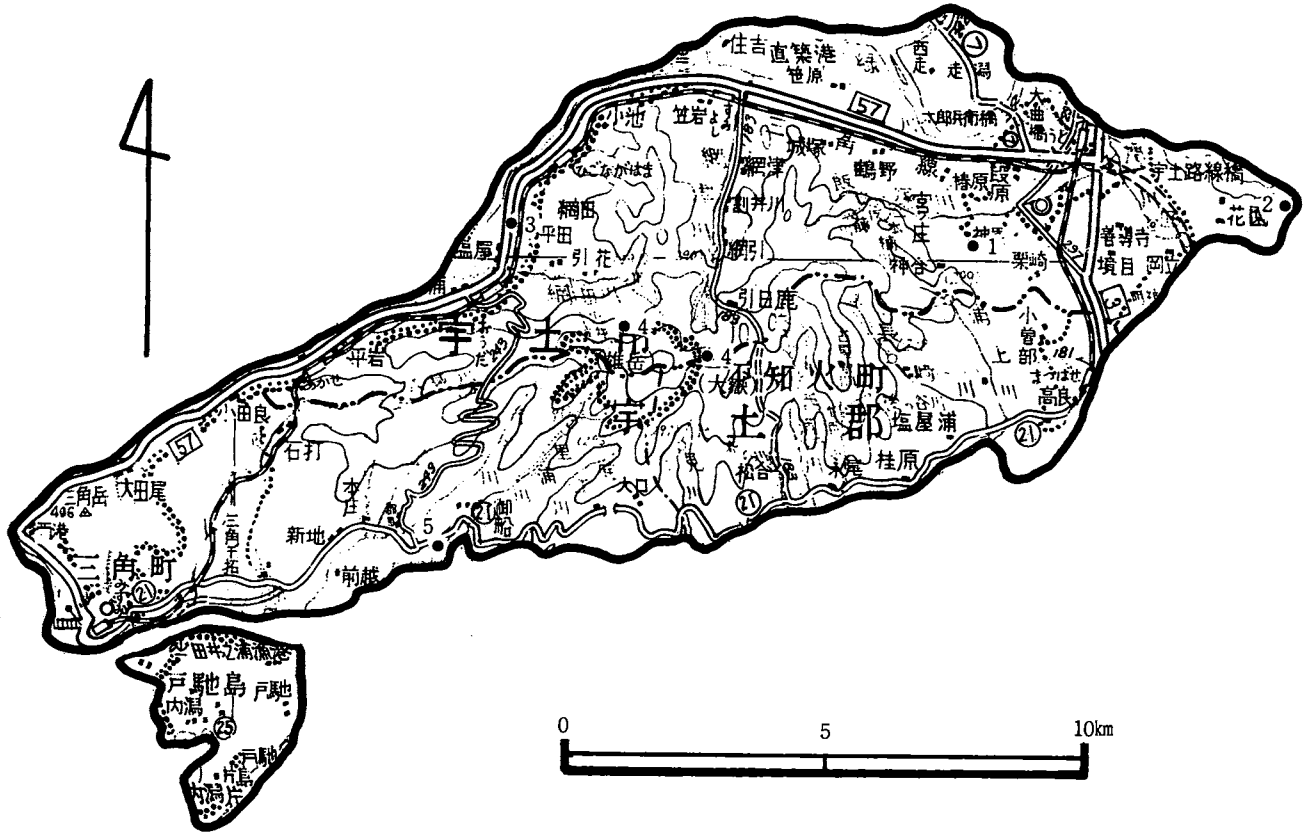
名和氏は彼らの政治勢力のバランスの上にもその支配を保っていたとみられ、当主の交代などにおける政治的不安定の折には、「家風取乱」と、彼らの間の対立が表面化することもあった。たとえば、行興の継嗣の時には皆吉武真に宇土城を占拠されたが、武真が10日とこれを保持できなかったことは、一族や家臣の支持が得られなかったことを示しているし、幼少の行憲の後見の地位が、側近の内河氏と養子行興と争われた事件は、一族と譜代の対立とみることができよう。

対外的には、名和氏は八代に本拠を移した相良との間に、豊福争奪を中心に争いをくり返している。又、天文年間以来、肥後に直接勢力を伸して来た大友氏には必ずしも従わず、天正後半に肥後に進出する島津との間は、阿蘇・相良氏との対抗関係もあつて、一貫して協力する態度をとった。この間、その支配範囲は宇土郡全域に及び、領主を失った川尻を領していた時期も考えられる。

天正十五（1587）年の秀吉の九州出兵で、名和顯孝は開城降伏して安堵を受けたが、他の国衆と異なり、城氏・小代氏と共に上京を命じられている。彼らの本城は、いずれも実質的には城を召上げられ、国内の抑えとして国守佐々成政の管理するところとなり、家臣も成政の与力として編成されることになった故であろう。しかし、同年の国衆一揆発生後、顯孝は滞京の故に一揆加担者とならず、名和氏は滅亡をまぬかれたが、所領は筑前に移され、小早川氏の与力となって宇土郡との縁はなくなり、小西行長が宇土を本拠とする肥後半国の大名となるのである。

（阿蘇品 保夫）

宇土地区



- 1 (宇土古城) 西岡台
- 2 南山内の高城
- 3 田平城
- 4 大嶽城(雄岳城)
- 5 矢崎城

宇土古城（西岡台）

（宇土市神馬町）

鎌倉末期の宇土庄地頭職宇土道光をはじめとして、永正～天正年間に名和氏が在城したという伝えがある。

城跡は、俗に「西岡台」と称される東西に長い丘陵地（標高39.2m・東西約700m・南北400m）に位置する。中央部がくびれ、丘陵の背面は東側と西側の2区画に区別される。すなわち、東側区画は「千畳敷」という字名を残し、標高37.5mを示す。当該地は南北65m、東西50mの広さを有する平坦地となっており、平坦地周辺を取りまく曲輪が存在する。曲輪の幅は南側で30m、東側、北側で15m・西側では10mを計る。平坦部分には鎌倉式多重塔の残基が現存しており、かつて正応三年（1290年）の銘を有する塔もあったという。

一方、西側区画は「三城」という字名を有し、西岡台で最高位（標高39.1m）を占める。頂上平場は東西80m、南北35mの広さを有する。

さらに、野首にあたる西側部分には、地元で「カラホリ」と称される堀切が存在する。幅10～15m・深さ5～7mの逆台形の掘り方が顕著に残り、長さ310mにわたる大規模なものである。しかし、この堀切は聞き込み等から、現状で南端と推定されている部分から、さらに南へ約200m程延びていたと判断される。

西岡台の南側麓には馬場集落が開けており、「陣ノ前」という小名を残す一隅もある。

なお、昭和48年12月、宇土市議会全員協議会で、西岡台に市立鶴城中学校の新校舎建設が決定された。しかし同地が宇土市指定史跡のため、翌昭和49年1月19日、臨時市文化財専門委員会が開催され諮問された結果、遺跡の現状変更も止むを得ないとの結論に達し記録保存のための発掘調査が行われる事になった。調査は昭和49年3月2日から昭和51年3月25日まで行われ、「千畳敷」や「三城」等から重要な遺構が相次いで発見された。そこで、市は校舎建設を断念し、同地を史跡として保存する方向となった。

（注1）「千畳敷」・中世期の濠・溝・建物ピットが検出された。さらに、古墳時代のV字溝も中世期の濠と重複して検出された。

「三城」・掘立柱建物址に伴う多数の柱穴が重複してみられた。これらの柱穴から推定される建物址は4棟ある。

宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集・宇土城跡（西岡台）1977年。熊本県宇土市教育委員会

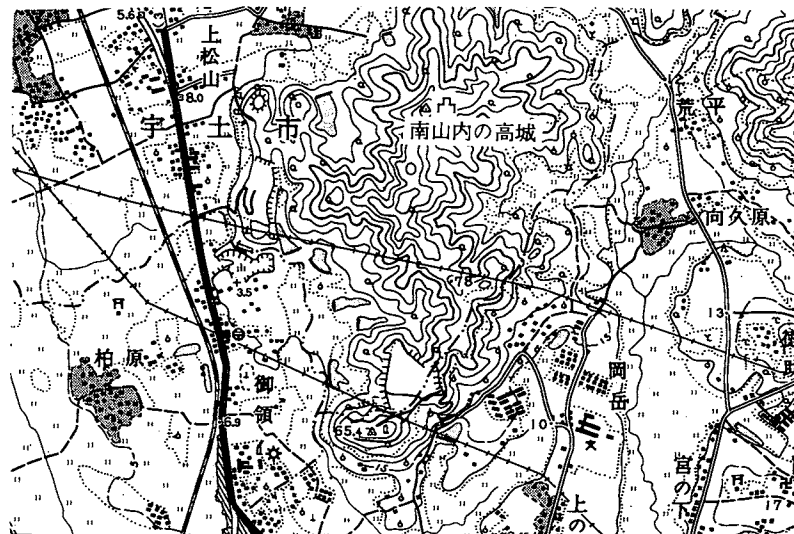


南山内の高城

（宇土市大字松山字南山内）

『曲野両神宮記』には、「文亀年中（1501年～1503年）高城の城主・宗右近太夫義勝、神田若干（或説15町3反）を寄進す、之をもって祭礼の費に充て、云々」と記されている。

城跡は、松山地区の東側一帯に横たわる山稜地帯の一隅（標高約90m・南西側麓の水田面よりの比高約75m）に位置しており、「高城」のたかじょう小名を残す。しかし、当該地は昭和46年に全面削平されて、宇土・富合清掃センターが建設され旧地形



を止めない。さらに、その周辺の尾根も産業廃棄物投棄場になっているので遺構の観察は出来ない。

しかし、城跡に立てば八代海も遠望可能で、南東方向と北西方向にはそれぞれ曲野城跡と宇土古城を眼中に収める事が出来る。「かつて高城で目立ったものは5本の大松のみで、城跡に関連あろうと思われるような遺構は存在しなかった。単なる砦跡ではないか。」と古老は語る。

(注1) 『松橋町史』による。

(注2) 塵芥焼却場。

(注3) 日本合成熊本工場。

たびら 田平城 (網田田平城) (宇土市網田町字城)

『肥州城址旧知考』によると文明年中には名和武顕の家臣、杵築越後が居城していたらしい。一方、『村上名和家系略』には永禄の頃、名和顕孝の家臣、加悦大和入道素心が在城した旨が記されている。

城跡は宇土半島、北側海岸線沿いであって南西方向に主軸を呈する丘陵末梢部(海拔23m)の畑地に位置しており、「城」の字名を残す。

丘陵の背面は全面畑地に開墾されており、先端部から北東側鞍部までの長さはゆうに400mを越える大規模なものである。遺構の判別が困難である。顕著な遺構としては先端部より270mの所に残る堀切(幅10m)のみである。

過去に畑地からは、古米をはじめとして釣鐘・石臼・刀等が出土した。

城跡と結びつくと考えられる田平の集落には、「高丸」・「宮丸」・「ほとく丸」等の小名を残す一隅があり、城主の墓と伝わるものも残っている。

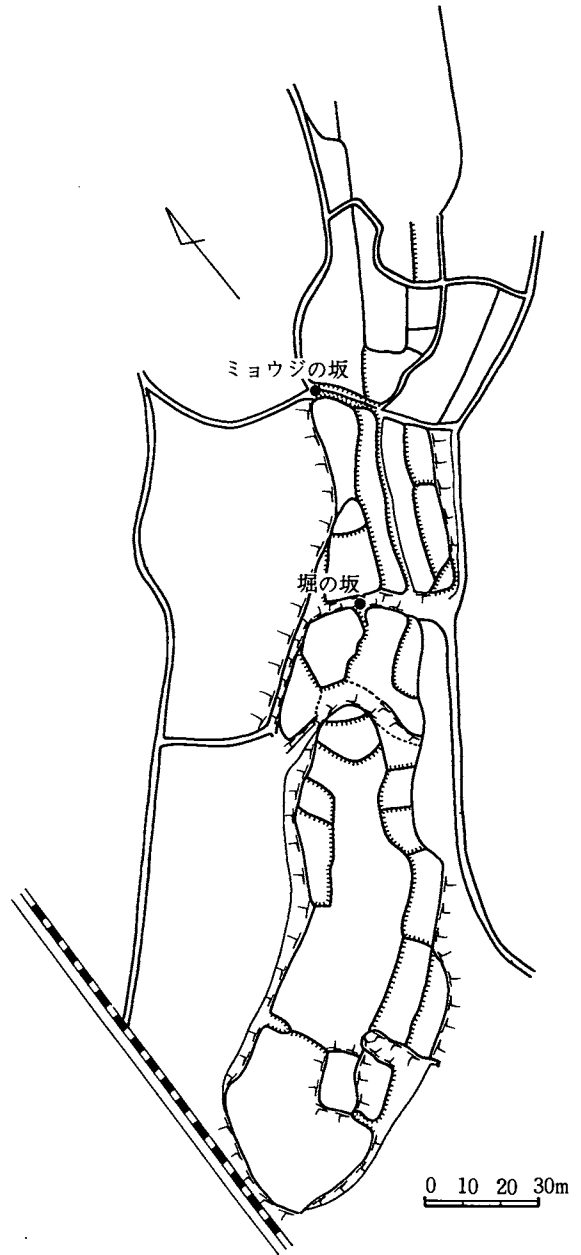
なお、現在、通路として使用されている「堀の坂」や「ミヨウジの坂」の凹道は、城跡の遺構を利用したもので、かつては堀切の機能を果たしたであろうと思われる。

(注1) 古墳が数基存在している

(注2) 7~8年前、地表下1.5mよりモミが出土堆積の厚さは20~30cm。

(参) 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集・宇土城跡

(西岡台) 1977年宇土市教育委員会



田平城 略測図

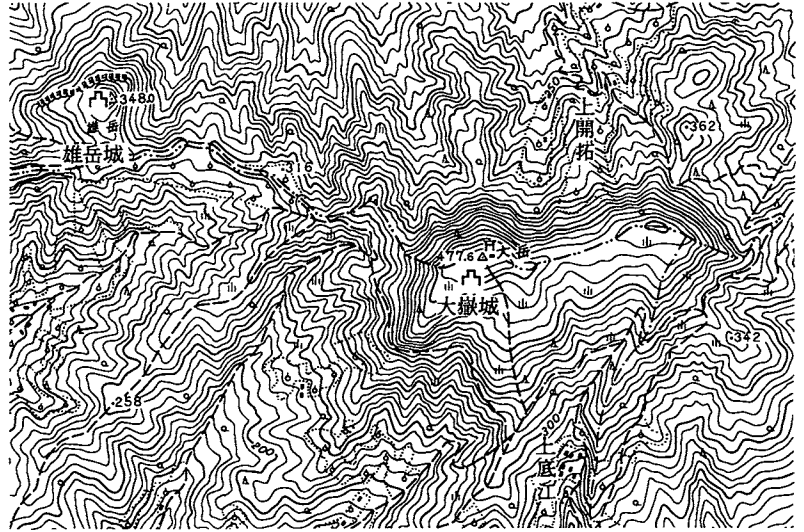


大嶽城

(宇土市)

『古城考』に「網田村にあり。城主姓名年代等不分明」という記事が見える。

当該地は宇土半島の背骨にあたる山稜地帯の一隅に位置する。標高477.6mを示す山頂部分は東西に長い尾根となっており、城跡としてふさわしいような平坦地も存在するが、とくに城跡と直接結びつくような遺構は認められない。しかし、当該地は半島北側の網田から、半島南側の郡浦に至る山越道のルートにもあっており、地元の人も城跡と伝える所から、城跡の存在はまちがいないと思える。さらに、当該地の西北方向に連なる尾根続きの雄岳（標高348m）も、城跡という伝承がある。



やどき 矢崎城

(宇土郡三角町大字郡浦字矢崎)

『肥州城址旧知考』によると、文明・明應年間には名和武顕の家臣、東右衛門が城代であったという。

天文十九年(1550年)から天正八年(1580年)阿蘇家臣、中村惟冬が在城したらしい。天正十年(1582年)矢崎城は宇土城の支城となり、『三宮社記録』には城主・加悦三浦と記されている。

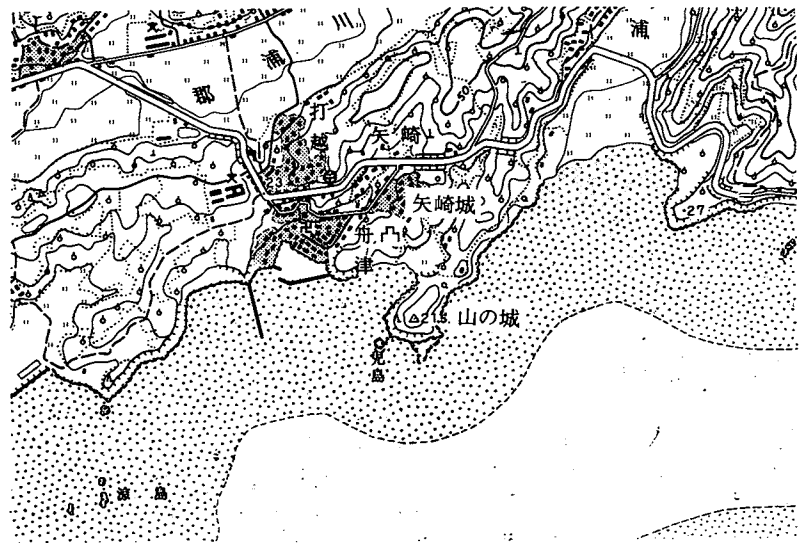
城跡は宇土半島の南側海岸線沿いであって、南西方向に主軸を呈する丘陵末端部(海拔20m)の畑地に位置する。先端部から北東側鞍部までの長さ300mにも及ぶ丘陵の背面は、余す所なく切り開かれ、細分された平坦地が並んでいる。

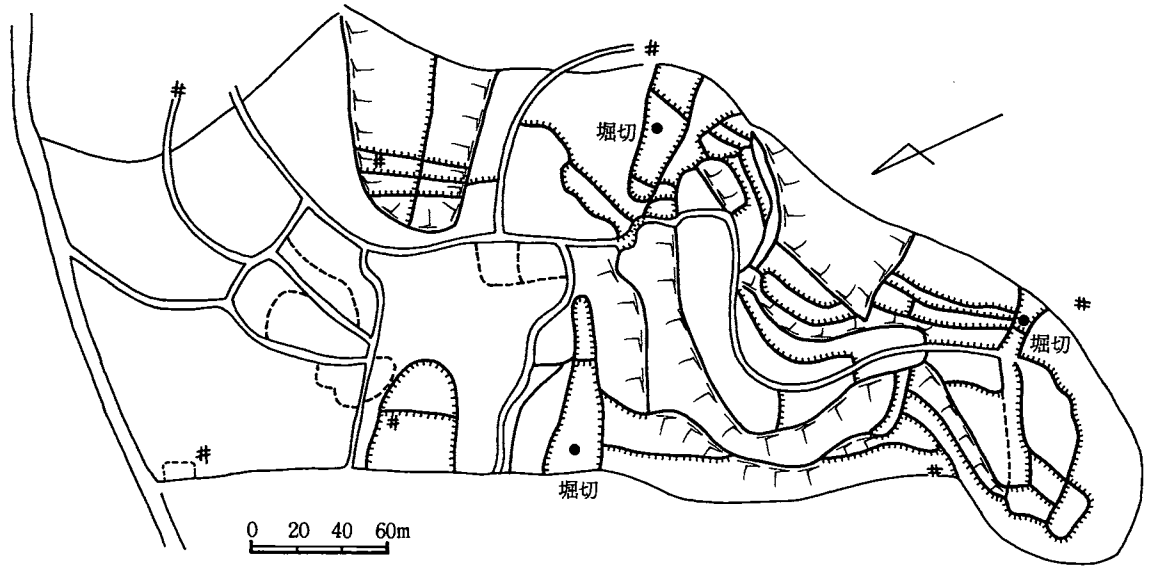
明治期の開墾の際に焼米・陶器片等が多量に出土したという。顕著な遺構として、丘陵の麓まで刻まれた2条の堀切(堀底幅7~8m・30m)があり、「戦時には農民が焼け灰を投げ入れて敵の侵入をふせいだ」と古老は語る。城跡の北東端には高丸の小名を残す一隅があり興味深い。鞍部の背は幅60m足らずにくびれており、東・西両側には大きな迫がはいっている。迫をはさんで矢崎の集落が存在する。集落には屋敷や園(中園・下園)の小名を残す民家がある。

なお、城跡と集落には多くの古井戸が残っており、それぞれに「お姫さん川」や「浜の川」等の呼称を有する。

(注1) いわゆる「灰堀」伝説である。同事例が八代地区・久多良木城に残る。

(参) 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集・宇土城跡(西岡台)1977年宇土市教育委員会





矢崎城 略測図

八代地区

中世の所領と城領主

(一)

中世期の八代郡は、現在の下益城郡の一部を含むもので、北は豊福、東は小隈野（現豊野村中間附近）・海東・小川を含み、南は敷河内（現八代市敷川内）までの広範囲に及び、そのなかに高田郷（8村）、太田郷（28村）、三ヶ郷（10村）、小犬郷（6村）、道後郷（12村）、道前郷（19村）、甲佐郷（6村）、小隈野郷（3村）、守山郷（8村）、豊福郷（6村）があった。庄園関係では、北から豊福保、小野庄、守山庄、八代庄の四庄から成立しているが、八代庄の庄域はほぼ現在の八代郡に相当している（厳密には現在の下益城郡の友知＝砥用、小隈野＝豊野村中間附近が含まれている）。

八代庄の成立期は不明であるが、文献上での初見は『公卿補任』の六条天皇仁安二年（1167）の條に「平清盛肥後国御代郡南郷土比郷等、為大功田傳子孫」という記事である。その後『吾妻鏡』の建久3年（1192）十二月四日条に、一条能保室（源頼朝の実妹）の遺領20ヶ所のうちの1つとして八代庄の名がみえ、平家没官領であること、そして男女子息に譲渡されることが記している。従って鎌倉政権成立期（治承年間）に平氏から一条家に傳領されたもので、それは領家職であるといわれている（村上豊氏「肥後国八代庄についての覚書」、『熊本史学』第50号）。その後の傳領関係を示す史料は、建武二年（1335）五月一五日の名和義高寄進状案（「千家家譜」）と同年五月廿六日の後醍醐天皇論旨（「千家文書」）である。この両書状でみると、名和氏が手中にしていたものは八代荘地頭職である。この地頭職は、名和長年の元弘の乱による勲功賞として宛行われたもので、その宛行われた時期は建武元年正月であろうと推定されている（平泉澄氏『名和世家』）。この点から、名和氏が地頭職を獲得する以前の八代庄は、隣庄の芦北庄と同様に、北条氏の得宗領か有力一門の領地であったと考えられる。しかし北条氏が一条家から何時伝領したかは詳らかにしえないが、承久の乱ではないかと推定され（前掲村上氏論文）、またこの承久の乱で一条家の領家職は退転し、北条氏は地頭職を帯したと推定されている。しかし建治三年（1277）二月の下文（「小早川文書」、『熊本史史料第三』）には「地頭藤原盛繩」の名がみえ、八代庄三ヶ郷八千把村一町九反二丈を源次郎宗守に宛行っている点から、北条時代は得宗領で、元弘の乱で退転し、名和氏へは地頭職が伝領されたのではなかろうか。

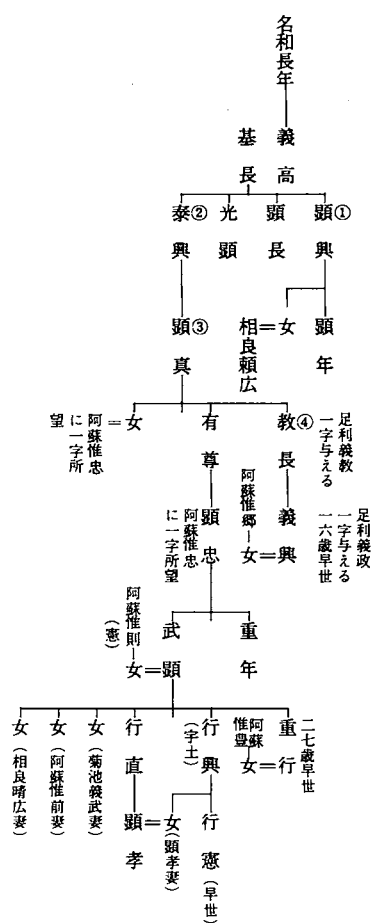
ところで、鎌倉期の有力な国人・土豪については詳細をえない。土豪として八代庄小隈野村（現下益城郡豊野村中間附近）に住居している得王丸入道西佛があげられる。彼は、「所従眷属牛馬」による大経営（＝領主的な名）をすると共に、三ヶ郷の八代把村（現八代市海士江町附近）の田地を買得して農奴主的農業経営を行っていた（「舛田家文書」）。また八千把村には源次郎宗守が荒蕪地を開発しながら約二町歩を経営する名主がみられる（「小早川文書」）にすぎない。これらの地球磨川沿いや有明海沿岸地域であるが早くから開発されたようで、条理制が施行された地域であることを附言しておく。

南北朝期にはいり、前述したように名和義高は建武元年に地頭職を護得し、翌二年にはその地頭代として内河義真を八代に下向させたといわれる。名和氏は菊池氏と共に南朝の有力な支援者であったわけで、のち正平十三年（1358）名和頼高が八代に下向するまで、内河氏が懐良親王を支援しながら領地の経営に当たった。その状況については明確にしえないが、今日伝えられる所によると、本拠を古麓城に構えたが、それは飯盛城・丸山城・鞍掛城・勝尾城・八町嶽城の五城をもって構成し、また領内には、田河内城・平山城・鳥越城・興善寺城・岡城・宮原城・南種山城・吉本城・守山城・豊福城を造築した伝えられている（『八代市史』）。これらの城郭が何時造築されたかについては全く不明であるが、当時の史料で城名をみると、建武三年（1336）三月、足利尊氏が一色・仁木氏を派遣して八代攻略をしたが、その時の攻略の城名として「内河城」（「太平記」）・「黒島城」（「詫摩文書」）がみられる。この両城について『事蹟通考』は八代古麓城のうちの鷹峰城であると比定している。ついで城名がみられるのは、正平元年（1346）閏九月、少式頼尚・対馬義直と恵良惟澄・内河義直が合戦した時の史料（「阿蘇家文書」正平三年「恵良惟澄申状」）である。その合戦状況について、「次山崎向城安見岡二箇所御方相共落之畢、其後御敵忍取種山黒駁城之間、此所御方要害後山也、(中略)、其後頼尚義直、分八代南北以和談義、今宮荒尾二箇所御方城迦之畢」と記している。この時、頼尚は守山関所を攻略したが、それに対して恵良惟澄は小川城から出城し、日奈子氏と高木兄弟を討取り、ついで今宮要害で攻防戦を行ったと述べている。「今宮」は小犬郷早尾村（現宮原町早尾）

にあるといわれている。恐らくその要害は砦・柵の類であろう。史料中の「山崎向城安見・岡二箇所」の城であるが、「岡」は岡城で岡中村（現宮原町岡谷川）にあり、建武年間には佐々木吉広が在城したといわれているが、この時期には少武氏の勢力下にあったと考えられる。更に少武氏が攻略した「種山よち黒駈城」は南種山陣内にあった「種山城」であろうと推定されている（『肥後国誌下』）この戦いの結果、内河義直は敗戦して和議を結び、「今宮」附近を境に八代を南北に二分し、北は小武氏領となったと伝えている。当時小武頼尚は人吉相良氏を拠点に八代を攻略していたもので、この戦乱に先立って建武五年（1338、暦応元年）には野津地域を略取していたようで、建武五年三月七日の詫磨別當太郎宛の書状（「詫磨文書」79号）によると、詫磨宗直に「野津彦太郎」や「谷口一族」（種山か）などの關所地を兵糧料所として預置き、ついで康永二年（1343）四月廿八日には、八代庄道前郷七ヶ村（野津・小隈野・鞍楠・法道寺・種山・鏡・大野）四十七丁五反三丈を北朝の阿蘇惟時が領掌するところとなるというように、宮原を境に北八代は少武氏の支配下に属した。（「阿蘇家文書」）前述の正平元年（1346）の戦乱は、その挽回策であったろうが、結果は北八代地域を北朝方の領地として譲渡・確認させることとなった。当時、北朝小武頼尚の拠地であった人吉相良定頼も八代攻略を繰り返し、建武三年四月には八代城代内河義直と攻戦し、貞和二年（1346、正平元年）九月には前述の北八代地域の攻略に呼応して南の「田河内関」から攻略をし（「相良家文書」）、その結果、翌三年九月十二日に、三ヶ村郷（弥松村四一町四反・大村十三町一反）・太田郷（杭瀬村二九町・福生原村五町五反余・萩原村一五町七反・吉王丸村一町・京泊半分五反）を「萩原」城の城料米地として預け置かれることとなった（「相良家文書」）。名和氏の拠地古麓城の眼前に少武氏の勢力が迫る形となった。しかしその後、幕府軍が観応の変を境に少武氏と鎮西管領一色範氏と対立することとなり、ついに一色党も南軍化するという政治状況となり、更に正平六年（1351）に足利尊氏が南朝に降って「正平一統」となると、今度は小武氏が南朝菊池氏につき一色範氏を除こうとするという様に、転変する政治状況となった。相良定頼も一色氏を支援する状況下で芦北湯浦氏を攻撃したが、南軍の勢力が圧倒的に強大となり、また正平十年（1355）には、一色範氏が長門に逃亡したため、九州は南軍の勢力下に入った。従って前述の相良氏の萩原城の城料米地の支配は、継続的に支配されなかったと推定される。その後、懐良親王を擁する菊池武光は少武頼尚を追って九州各地を転戦したが、その勢力を頼って正平十三年（1358）には名和顯興も八代城主として勢力を周辺に拡張していった。彼は一円領主化を目的に甲佐社領を押領し、社使・神人の入部を拒否し、打擲する行為をする程であった（「阿蘇文書」）。芦北地域の日奈久・二見・田浦周辺地域に勢力を扶植したのも、この時期ではなかろうかと推定される。

南北朝内乱は、菊池武光の死亡（文中元年八月頃、一説は文中二年十一月）及び子武政の死亡（文中三年五月廿六日）を契機に南朝勢力が衰退し、かわって九州探題今川了俊の勢力が次第に強化されていった。今川満範は相良前頼と共同して八代・芦北地域の攻略を開始した。一説によると、芦北地域は文中元年（1372）八月に名和顯孝の領地となったといわれている。菊池武光の死亡がこの時期と推定（川添昭二氏『菊池武光』）されているので、その後継者ということになるであろうが、この点は明確にしえない。しかし田浦・二見城が名和氏の支配下にあったことは確実で、今川満範は永和二年（1376）には「田浦・二見と申所ハ八代堺候」（禰寝文書）と、両城を攻略し、宮内大輔三雄を代官として統治させた。この頃から名和氏の勢力も次第に下火となっていったのであろうか、道前郷は阿蘇氏の知行地となっている。弘和元年（1381）六月には菊池城が陥落し、翌二年六月には良成親王・懐良親王は八代に逃亡し、ついで懐良親王も同三年三月に死亡し、南朝勢力は地におちる状況となった。そのなかであって二見・田浦を手中にしえなかった相良前頼は、弘和三年（1383）四月十四日、征西将軍（良成親王）から「玖麻郡内、同葦北庄事」の知行安堵をうけて北朝から南朝に寝返りし、菊池武朝の排斥にかかると共に、元中二年（1385）には名和氏と共に宮内大輔三雄を二見・佐敷に攻撃し、一時は天草に退去させることに成功し、同年十月十日には本領・新恩地の安堵の繪旨をうけた。しかし元中四年（1387）閏五月に島津氏久が死亡したことで南軍はさらに勢力をなくし、今川了俊・満範は着々と肥後を攻略し、川尻・宇土の南軍も軍門に下り、南九州経営は大きく了俊に好転した。恐らくこの時期から、名和氏の勢力も後退せざるをえなくなったであろう。特に顯興の後継者をめぐむ問題が出てきた。嫡子顯年出家して東寺の僧となり、のち中院義定の養子となっていたため、実弟顯長を予定したが、34才で出家して死亡し、ついで次の弟光顕を顯長の養家先から顯興の養子としたが病弱のため、ついに末弟今若丸を還俗させて顯興の養子とせざるをえないという継嗣状況で、まさに地頭領主権と惣領体制は不安定な状況であった。加うるに元中七年（1390明徳元年）良成親王は菊池武朝とともに八代に逃亡してきた。そのために今川軍は攻撃の手をゆるめず、翌八年四月に八代庄で合戦が行なわれた。その場所は宮地原・八町嶽城（古麓城の一つ）（「武雄神社文書」「武雄社大宮司跡代新兵衛尉軍忠状」）と「宮地鳥越城」（古麓城の北隣地）で、今川軍は九月には八代城を攻略した。この時、城主

名和氏系図（『八代市史』所収）



名和顯興は死亡したのではなかろうかと思われる。（『八代市史』は元中九年頃とする）また良成親王は筑後矢部に逃亡したが、中央では時既に明德三年（1392、元中九年）には、南北両朝合一の講和が結ばれ、57年間の南北朝内乱に終止符をうつこととなった。しかし良成親王はなおも宮方の再興を期し、翌四年（1393、元中十年）二月九日、阿蘇惟政に挙兵を条件に、豊後・日向両国の守護職と共に八代庄の知行権を附与した（『阿蘇家文書』）が、しかし菊池武朝・阿蘇惟武らが幕府の命を奉じている情勢であったため、阿蘇惟政はついに挙兵しえず、今川軍の支配下にあったと思われる。一方、名和氏がその後どのような経過をだどったかという点については、全く不明である。一説では、応永四年（1397）菊池貞頼が八代城を拠点に反乱を起したため、大内義弘が八代城を攻略し、貞頼を自殺させた（『應永記、本朝通記』）というが、その真疑は不明である。

(二)

室町期の所領支配関係については全く不明であるが、今川了俊の更迭もあって、名和氏が古麓城に存続(系図参照)したことを考えると、八代庄、及び二見・日奈久地城、豊福地城まで支配したと推定される。15世紀にはいり、相良氏の動きが活発化するにつれ、名和氏にもその影響が及んできた。永富相良氏の系譜をもつ相良長統は、文安五年(1448)、下相良氏を追放して人吉宗家の地位をとってかわり、上相良氏も打倒して球磨郡内を統一した。そのみならず、長禄四年（1460）には守護菊池為邦から葦北郡の安堵をうけ、ついで寛正元年（1464）には、かねて名和氏の支配下にあつて係争の地であつた葦北郡二見・日奈久（現八代市）

地域を守護菊池氏の才配で確保し、「相良家文書」196号、次第に名和氏の勢力を脅やかした。当時、八代城主名和顯忠は若冠13才で「幸松丸」を呼ばれていた頃で、一族間では城主の地位を目指して内紛が生じ、幸松丸の身に危険が迫る状態であった。そこで、寛正四年には、重臣内河喜定の計策で、一時相良長統のもとに難を避けることとなった。これに対し相良長統は幸松丸の八代復帰を再三にわたり交渉し、ついに寛正六年（1465）復帰に成功し、幸松丸は元服して顯忠と改名し、伯耆守に叙任された。かくして名和顯忠は相良長統の功に対し、高田郷350町を譲与した。その領地範囲は平山城下の奈良木・本野・豊原・高下などの村であったといわれている。その後、文明十二年（1480）には、名和顯忠の室に相良為統の娘を嫁す婚約も成立し、相互協力体勢が成立したかにみえたが、同十四年、名和顯忠は相良為統の薩摩牛屎院出兵の隙をみて、高田平山城を攻略し、さきに譲与した高田350町歩の挽回策をとった。しかし戦いは名和顯忠に利あらず、文明十六年（1484）三月七日に主城古麓城を明け渡し、以後は相良為統が明応八年(1499)までの16年間にわたり八代地域を支配することとなった。相良氏は、長享元年（1487）には菊池重朝を馬門原の戦いで敗って八代・豊福の知行権を安堵され、球磨・葦北・八代三郡と豊福を獲得すると共に、阿蘇惟乗・宇土為光・天草郡諸氏を配下にし、戦国大名への地歩を築いた。しかるに、明応七年（1499）菊池能運は名和氏を始め豊後・筑後衆の連合軍をもって豊福城を攻略し、ついでその勢いで翌八年三月八代城を攻撃したため、相良為統は止むなく八代城を放棄し人吉城に引揚げた。かくして名和顯忠が城主の地位に復活した。

相良為統の後継者となった長毎は、守護菊池能運と提携策をとり、文亀元年（1501）五月から八代城の攻撃を開始し、三方から八代に攻略をかけ、「高田古城」（＝平山城）を修築して拠城とし、ついで翌二年八月第二回の攻略をしたが失敗し、さらに翌三年八月、天草衆・阿蘇惟長の応援をえて攻略した。その結果、永正元年(1504)二月、名和顯忠は宇土郡に替地という条件のもとに開城し、ここに再び相良氏の八代支配時代となった。以後、名和氏との抗争は益城郡豊福をめぐる争奪戦となり、永正十三年（1516）～大永七年(1527)迄は相良氏、その後は名和氏、そして相良氏が豊福城を再び握るのは、天文四年（1535）相良義滋の時である。

一方、相良長毎は八代に居城として「新城」を構築した。『八代市史』によると、その規模は高さ140米の高さの山に、本丸・二丸・三丸の三城で、三段の削手に築いた。本丸は広さ10間に15間・高さ3間・二の丸・三の丸は幅は5～6間であ

るといわれている。さらに春光寺谷口を大手口とすると共に、新に屋敷小路を山下（鹿）地域まで拡張した。その後相良氏は後継者をめぐっての長祇・長定と内紛が続き、それが安定したのは、義滋が後継者として前領主長定を一掃した天文期以降である。天文三年（1534）閏一月十六日から鷹峰城（鞍懸城の址）の構築の歟立てをし、同二六日「取へいので合候」、「二月十日ニ長唯様始たかのミね城ニ御在城候」、「三月廿二日たかのミねニ八代ヨリ一番衆立候」（「八代日記」^{（手）}）と記すように、短時日のうちに造築を完了させた（竣工は『求麻外史』は三月十日とする）。それにもなって人吉城から家臣団を移住させて屋敷小路（7字）に住居させ、陣内・堀内と呼ばれる城下町を形成し、また七日市・九日市・一日市などの市場も開かれ・傘屋・斗屋など町人も住居した。家臣団は相良氏直属の武士団で「八代衆」と呼ばれ、砥崎衆・堀内衆が知行高に応じて鷹の峯城の番役を20日間宛負担した。また軍事行動に対しては、八代一番衆・同二番衆・同三番衆・同四番衆・同五番衆が各々6～7名程度の家臣を中心として構成されて出兵した（芦北郡の家臣は、佐敷衆・田浦衆・湯浦衆・二見一瀬衆・津奈木衆として、求麻郡衆は一番衆・二番衆として鷹の峯城番役をつとむる）。政治組織は領主のもとに最高の行政機関として八代四奉行（例えば弘治三年は桑原常陸介・宮原筑前守・相良尾張守・蓑田筑後守）がいて執行すると共に、家臣らの「衆議」を代表し、行政・裁判・訴訟・軍事・法律などに直接当って家臣らの意見を取まとめる「老者」（＝おとな衆）がいた。そのなかから前述の「奉行」と共同して任務にあたる「年行」が選出され（例えば弘治三年には桑原常州・稲留雲州・東京兆・高橋武庫・上村剣帯の五人、永禄二年には八人）、全家臣団（＝「八代衆」）を統率する組織であった。在郷の支城については、例えば興善寺城（関城）「地頭」に相良為統の第五子西長皎をまた重臣上村頼堅を豊福城地頭に、宮原城には奉行宮原筑前守や宮原（橘）公忠・公光・公吉を代々居住させて統轄させ、平山城（高田城）に桑原和泉守、南種山陣内城に重臣蓑田善内兵衛を任命したが、それは支城「地頭」体制で、在地武士層や農民を支配する体制であった。これらの支城領内の在地武士層は、関衆・高田衆・大牟田衆・高塚（高津賀）衆・種山衆と呼ばれ、各々が「一所衆」として各衆で軍役を負担し、軍事行動をした。例えば大牟田・高田衆は、的場八郎左衛門・佐牟田と三左衛門尉名代万江源五郎の「老者」（＝「おとな」）が指導して行動した。さらに海岸及び陸上の境警備番城体制として、天文十二年（1543）八月廿七月に大牟田城築造の歟立てをし、また名和氏との豊福城攻防が緊張化した弘治二年（1556）七月一七日には高津賀城（高塚城）普請を開始した。それは「ホリ御ほらせ候、口八ひろ」の規模で始め、翌三年五月十二日は「高津賀ニ公領人足ニテ納所候而、城誘ハ御酒吞られ候、夫丸一千百余人」、永禄二年（1559）六月十一日に「蓑田筑州高津賀城こしらへ行候」、同四年七月一日に「高津賀城こしらへ堀五十三尋」と、支城附近に城料米用の公領地＝直轄地を設け、その公領地の農民を徴発総動員して五年間を要して成就した。そしてここに八代衆を始め、多くの家臣団を軍役・番城体制をもって詰めさせて根城にし、名和氏への日夜の攻撃を展開した。

ところで、右の様に三郡支配体制を強固にしていた戦国大名相良氏の軍事力体制は、天正八年（1581）三月から開始された島津軍の薩摩・大隅両国総軍事力の投入にあい、相良氏は止むなく九月には水俣城を明け渡し、島津氏の軍門に降り、八代城からも後退することとなった。加うるに城主相良義陽は十二月朔日に甲斐宗運攻撃に自ら出兵して戦死し、後には若冠10才の忠房が後継せざるをえないという状況で、芦北・八代の各城には島津軍事団が入城した。以下、島津氏の様子について『上井覚兼日記』（『大日本古記録』）でみると、まず、翌天正十年には八代庄一帯の検地が施行されて生産力の把握が行なわれて上井氏の「噓」となった。そして八代は島津義久の「直々御格護」の地、即ち直轄領地となり、その名代として弟島津義弘が入城し、「国家之儀等裁判」と記すように、肥後統治の枢要地とした。さらに島津義弘のもとに「八代噓」（＝奉行役）として伊集院忠棟を命じた。かつての相良氏重臣はそのまま城下に居住したようで、なかには宮原筑前守は佐敷地頭に任命されたし、同越中守も三船隈庄への使僧の供役を命ぜられている。また深水三河守宗方・蓑田紹意・税所新介らは頻りに島津氏近臣と交際をし続け、なかでも深水宗方・田浦氏はのち天正十六年六月島津義久と同道して秀吉御礼に上京し、「島津方」とまでいわれるように、島津氏の八代統治の政治顧問的役割であったろうと思われる。一方在郷武士層も「八代・豊福・世喜・高津賀・高田・比奈古」衆と呼ばれているが、恐らく相良時代の「八代衆」や「高津賀衆」がそのまま移行され、その軍役行使の機能もそのまま継続されたようで、島津氏の重臣に引率されて、八代城から軍事力行使や使者警護役に徴発され、あるいは八代城番役にあたった。一方、在郷の旧八代支城は、例えば興善寺城（関城）が焼却されたと伝えられるように、郡部地域でも従前通り相良氏の重臣が「地頭」として存続した形跡は全くないばかりか、島津氏の重臣が「地頭」として赴任設置した形跡も認められない（芦北地域では湯浦・佐敷・水俣城には地頭を設置している）。従って統治体制は八代城よりの集中直裁方式をもって施政する体制であったわけで、もはや支城を中心とする城領域の統制も城郭の存続も不必要となったようである。かつての国人・小領主層の在地性も否定され、八代城下に集住を強制され、島津氏家臣に位置付けられた。例えば「地下衆奥野越前守」は功者であるとして、堅志田攻撃の「案内者」となり、

天正16年 9月八代十三人・三十人衆知行目録
(加藤清正家蔵文書による)

給 人 名	知 行 高
八代十三人衆	
村山 越前守	30石
奥野 越前守	50
東 四郎左衛門尉	35
藪田 出雲守	45
松木 左馬頭	50
東 織部	30
宮原 内記	20
藪田 紀伊助	50
東 縫殿助	20
東 主馬	20
藪田 信濃入道	120
宮原 縫殿助	200
高橋 駿河守	170
計	890石
八代三十人衆	
山崎 内蔵丞	35石
山北 太郎右衛門尉	35
東 源兵衛	35
小田 左京亮	40
西 越中守	25
東 太郎次郎	25
村山 大舎人	25
高橋 源右衛門尉	25
雑原 彌左衛門尉	45
東 小太郎	20
桑原 作右衛門尉	70
藪田 四郎衛門尉	30
田浦 甚五郎	20
高橋 玄蕃	20
園田 外記亮	30
東 市右衛門尉	20
宮原 喜三	30
東 主計	65
藪田 八郎右衛門尉	40
桑原 縫殿助	25
田浦 早右衛門尉	35
田浦 市之丞	20
計	715
総 計	1,605石

またのちに種山城主といわれる松浦筑前守も三船攻撃の「案内者」として八代に参集されている。かようにみると、八代地域の多くの城郭はこの時期に破却・廃城されなくとも、城郭としての機能は全くなり、城兵の存置も殆んどなくなり、八代城への集住体制となったのではないかと推定される。この島津氏の八代統治期の天正十五年(1587)四月に、豊臣秀吉が島津氏征服で肥後路を南下してきたが、その時の秀吉の肥後軍勢の様子を伝えた書状(「黒田家文書」)は、肥後国三池・小代・南関・山鹿・合志・高瀬津・熊本・宇土の各城の次に、「殿下至熊本被移所座候、八代敵在之由」と記すように、八代地域は八代城のみの存在であることを伝えている。また秀吉の島津征服の道移・戦闘経過を記した『九州御動座記』は「此地はやつしろとして無隠名城也、尾崎舟に八つ城を拵候所也、嶋津方にかいらさる者数千入置」と記している。隈本城が五千人を擁す名城であると記していることを考えると、その規模は隈本城の比ではなかったであろう。また、秀吉の書状は(「毛利家文書」)「奉公人、町人、其外百姓男女にて五萬も可有候」と記している。いまその数は信じ難いとしても数千人は抱える名城で、その領内と城下町は肥後では最大の城下町であったことはほぼ間違いなからう。

ところで、前述したように、天正十五年四月肥後統治に向った豊臣秀吉は、島津氏を追って、隈本・宇土・隈庄城を攻略し南下した。島津軍は、八代城に新納武蔵守・伊集院肥前・町田出羽・島津右馬頭・新納右衛門左・稲富新介・桂神儀介・伊藤右衛門左を籠城させたが、支えることが出来ず、遂に四月十九日に秀吉が入城し、守将福島正則を置いて、さらに南下し、五月八日に島津氏平定を完了し、六月二日に佐々成政を肥後一国(球磨郡を除く)の領主とした。これに先立って、一説(『肥後国誌下』)では松浦筑前守が種山城で島津軍と攻戦し、秀吉軍の南下に功をあげ、その功で八代高田(300町)・小川海東(200町)を宛行われたといわれている。松浦筑前守が種山城(「島津家記」は谷山と記す)で島津軍と攻戦したのは事実であるが、恩給地については不明である。また島津軍が退却する際に「関城(興善寺城)に一時詰め、また豊臣軍が宮原城に一時的に陣構えした形跡がみられるが、(「島津家記」)城領主体制を設くというものではなかった。

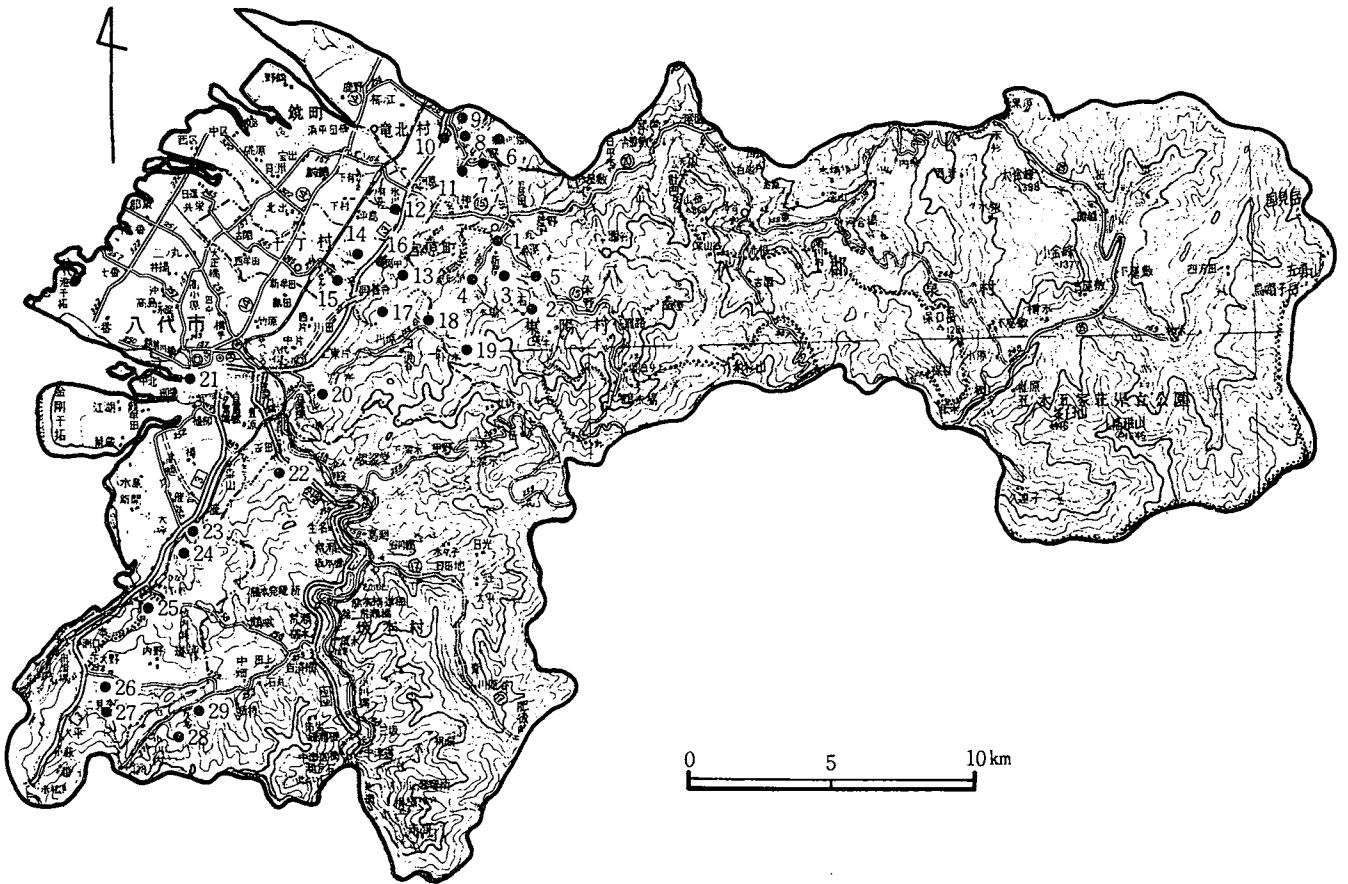
周地のように、佐々成政は就任早々の天正十五年七月末日から国衆一揆をうけるはめとなった。この時相良氏も一揆軍と呼応して行動を開始したようで、八代城と芦北七浦を占拠したようであるが(「薩藩旧記雑録」)、しかし秀吉が派遣した上使衆軍のため、すぐ退却せざるをえなかった。その後、一揆は、秀吉派遣の上使衆軍によって鎮圧され、翌十六年五月に佐々成政は処分され、領内検地が施行されたうえで、同年閏五月一五日に肥後半国領主として、加藤清正と小西行長が就任することとなった。八代郡は小西行長領となり、八代城代に重臣小西美作行重を任命すると共に、彼は従来の八代城(古麓城)を使用しないで、

徳淵入江と球磨川に囲まれた麦島に新しい城郭(本丸・二ノ丸・三ノ丸をもち三層の城樓をもつ)を作った。ここに古麓城の時代は完全に終止符をうった。麦島城下には侍屋敷・町屋敷を作り津口を設けた城下町を形成した。この麦島城の造築の期間については今日不明であるが、文禄元年(1592)六月の梅北の乱の時、梅北・東郷氏が麦島城を攻撃している点を考えると、入国早々から着工し、

天正末年には竣工したと推定される。これに対し、かつて八代城下に居住していた相良家臣は「八代十三人衆」「八代三十人衆」(別表)として、加藤清正への合宿が命ぜられ、小西家臣としての地位もなくなった。その後慶長五年以降は加藤清正領となり、吉村橘左衛門・堤権左衛門、ついで蟹江与惣兵衛・野尻久左衛門が在番し、加藤忠広代の慶長十七年(1612)六月には加藤右馬允正方が城代となった。しかし元和五年(1619)三月の大地震で城樓が崩壊したため、加藤忠広は幕府の許可をえて徳淵城を築き、移転した。

(森山恒雄)

八代地区



- 1 古城原
- 2 小浦の城山
- 3 陣内城
- 4 小浦城
- 5 黒淵城
- 6 高塚城
- 7 東新城
- 8 西新城
- 9 高城
- 10 笹尾城

- 11 大野城
- 12 宮原城
- 13 草場城
- 14 上土城
- 15 北吉王丸
- 16 岡城
- 17 興善寺城
- 18 竜峰城
- 19 平家ヶ城
- 20 古麓城

- 21 麦鳴城
- 22 平山城
- 23 田川内城
- 24 千代永城
- 25 比丘尼が城
- 26 二見城
- 27 二見南城
- 28 船倉城
- 29 久多良木城

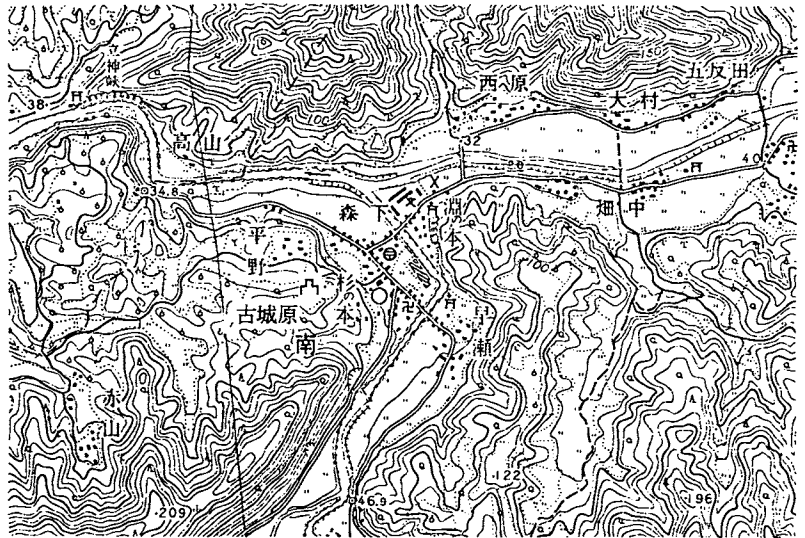
八代郡

こじょうばる 古城原

(八代郡東陽村大字南字古城原)

城主不分明。東陽村役場の東側に「古城原」と称される丘陵地末端部(標高107.5m・西側麓の水田面よりの比高約70m)があり、地元の古老は「城跡ではないか」という。

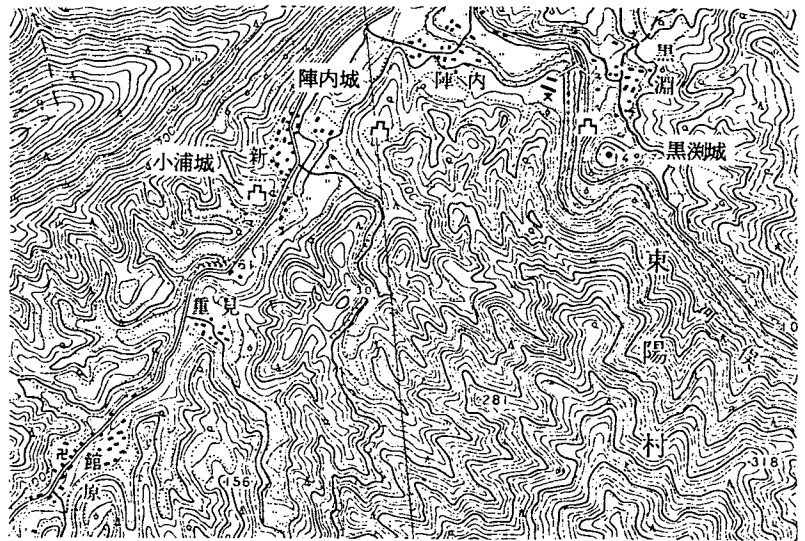
しかし、丘陵の背面は広い平坦地(畑地)となっているだけで、遺構は何も観察できない。しいてあげれば、丘陵斜面に残る湧水池ぐらいである。



こうら しろやま 小浦の城山

(八代郡東陽村大字小浦字城山)

小浦(大字)地内の北東部に「城山」という字名を残す山稜末端部(標高298.1m・西方に位置する新開の集落よりの比高約240m)があり、城跡の存在が考えられるが、南北に主軸を呈する「城山」の尾根は馬の背のように狭くなっており、地元の人も城跡とは伝えていない。ただ西側に谷一つへだてて存在する舌状形の山稜末端部(標高200m)には、陣内城の落城の折、姫君が隠れ住んだという地下穴(深さ約2m、底幅1.5m、地下式土壇の形状を有する)が残っており興味深い。



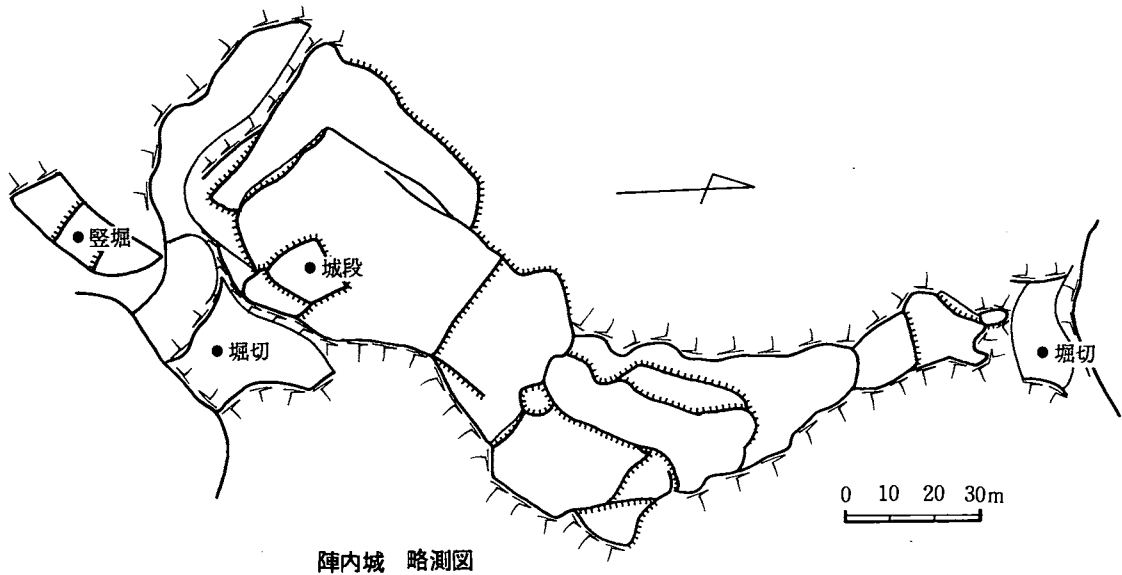
じんない

陣内城(南種山城)

(八代郡東陽村大字南字陣内)

相良氏家臣の蓑田善兵衛(五兵衛)が在城していたが、天正9年(1781年)に島津氏に攻められて滅んだという。蓑田氏については菊池氏に属していたという説もある。

城跡は、南北に主軸を呈する帯状形の山稜末端部(標高105.4m・北西側麓の水田面よりの比高約60m)に位置しており、北東側麓の集落を含めて「陣内」の字名を残す。城跡の背面は平坦地となっており、南端部分に「城段」と称される台形状の高台(南側上辺8m、北側下辺13m・幅12m・高さ2~2.5m)が観察される。さらに南東側鞍部と北側尾根に堀切が存在するが、鞍部については堀幅22~28m・長さ45mを計り、その南端部は^{じょうだん}縦堀(底幅10m)となって山稜斜面を下る。一方、北側部分は底幅10~12m、長さ21~24mを示すが、この堀切は尾根が北側へ細長く伸びる事から必要であったと思われる。西側麓には小浦川が流れており、蓑田氏の菩提所という陣内永安寺跡も残っている。



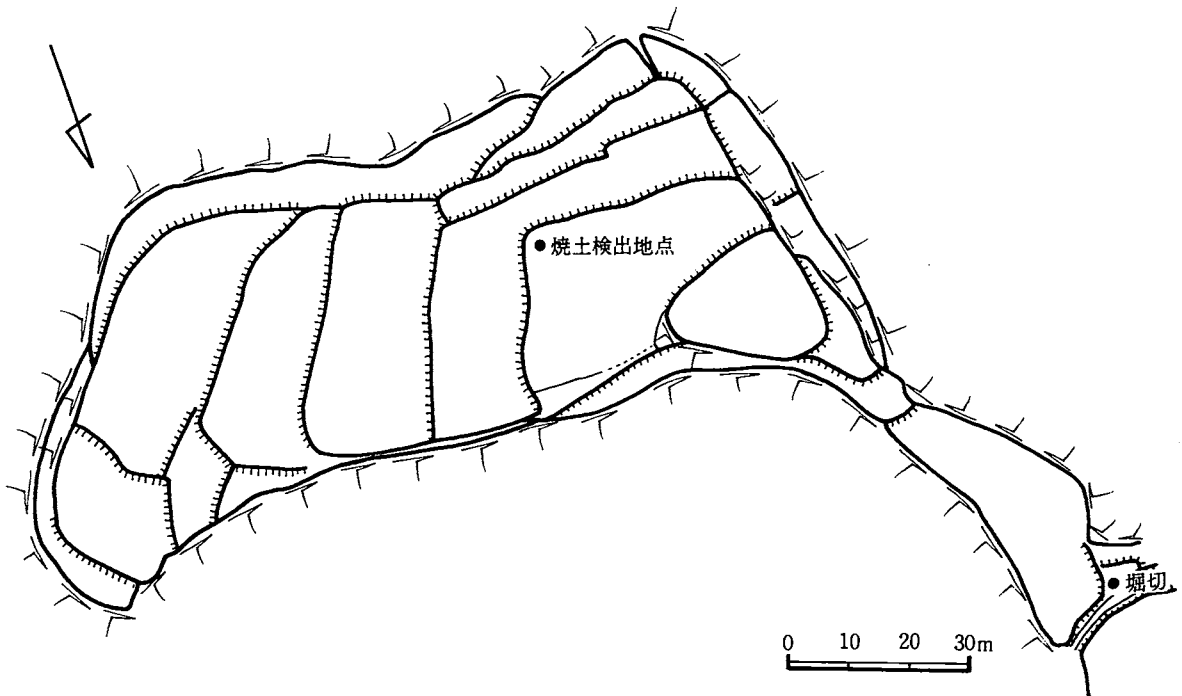
陣内城 略測図

こら
小浦城 (八代郡東陽村大字小浦字田ノ迫)

『八代郡誌』によれば天正の頃、陣内城主の蓑田善兵衛が築いたもので、弟を城主として留め置いたという。

城跡は田ノ迫の地内にあつて東に主軸を呈する山稜末端部（標高100m・東側麓の水田面よりの比高約40m）に位置しており、北東側麓に新開（字・伏）の集落を望む。

山頂部分は、台形状の平坦地（竹林・北に主軸を呈し、北側上辺7m・南側下辺23m・幅21m）となっており、西側部分に細長くくびれた鞍部（長さ45m・長さ6～17m）が観察される。また、東側へゆるやかに傾斜する山稜斜面には幾段もの階段状地形が重なっておりミカン畑等に利用されているが、その一隅からは農作業の折、焦土が検出されたことがある。城跡の東側裾部には「赤山（字名）」の集落に至る山越道跡が残っており、周辺の水田地帯を「搦手（字名）」と称する。



小浦城 略測図

黒淵城（黒駸城）（八代郡東陽村大字南字城の平）

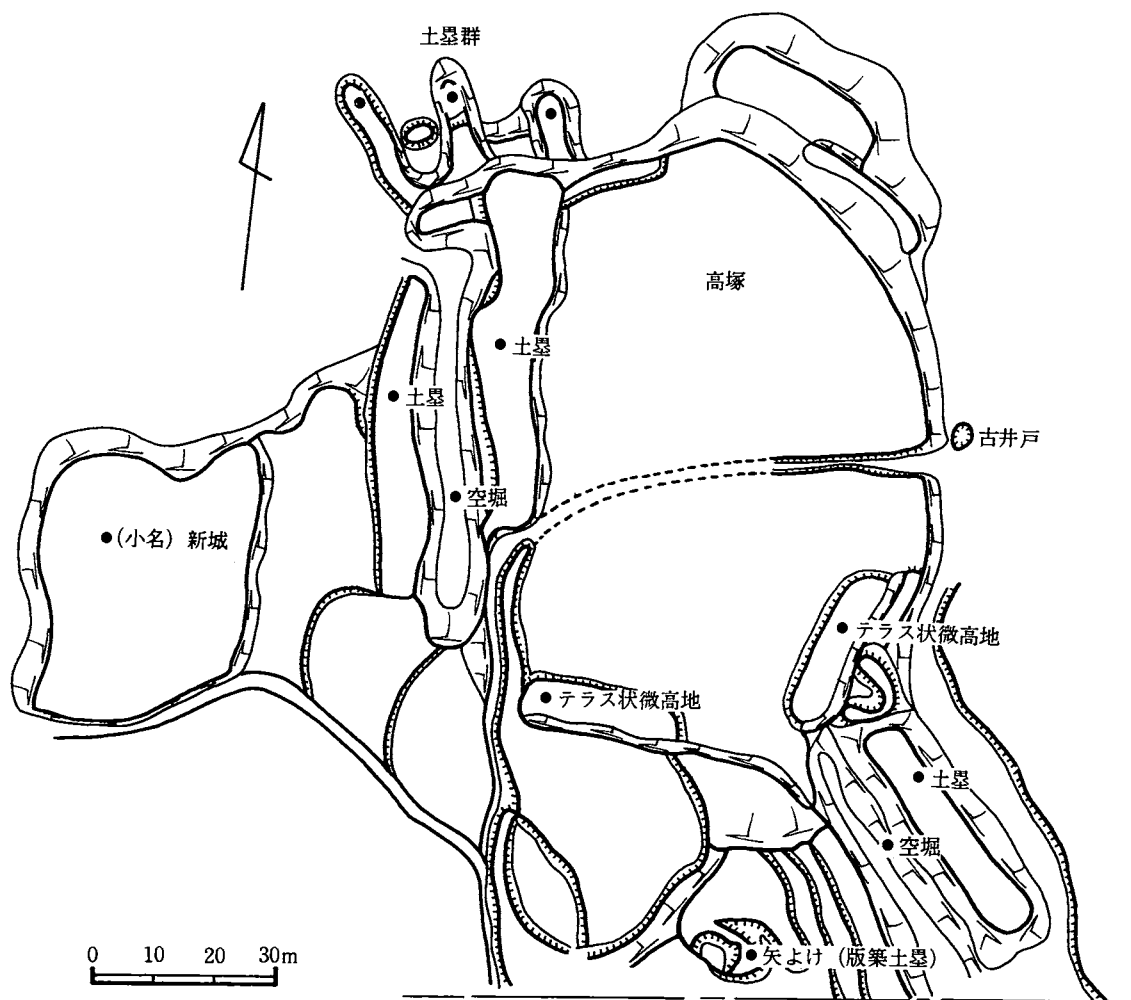
恵良惟澄正平3年（1348年）九月の申状によれば、正平元年（1346年）少弐頼尚が八代を攻撃した時、本城はいったん頼尚の手中となったが、恵良惟澄が向城として米山に陣取って奪い返したいという。城主名については不明である。

城跡は、河俣川の湾曲に沿って南西方向へ突き出した山稜末端部の小山（標高118.5m・東側麓の道路よりの比高約30m）に位置しており、「城の平」の字名を残す。山頂部分はミカン畑となっており、楕円形状の平坦部が観察されるが、削平の度合は荒く、東側部分の鞍部にも掘切は観察されない。顕著な遺構としては山頂周囲の斜面に観察される「削り落し」のみである。北東側麓の「黒淵（字名）」の集落に関連した砦跡の感が濃い。なお、『肥後国誌』には「種山城南朝ノ時ハ黒淵城トモ云シナルヘシ」と記されており、興味深い。

高塚城（吉本城）（八代郡竜北町）

建武年間頃は村上（伯耆守）顕興の家臣である佐々木（宮内左衛門）吉廣が居城していたが、天正年間頃には相良氏の家臣東掃部介が城主であったという。掃部介については、天正9年（1581年）島津氏が八代に侵入した際「油坂」で戦死したとされ、その墓は俗称「高塚どん」として、西新城から高塚に至る山道の片隅に葬られている。

城跡は、丘陵末端部（標高50m・東側の水田面よりの比高40m）の畑地と梅林に位置しており、長径90m、短径65m



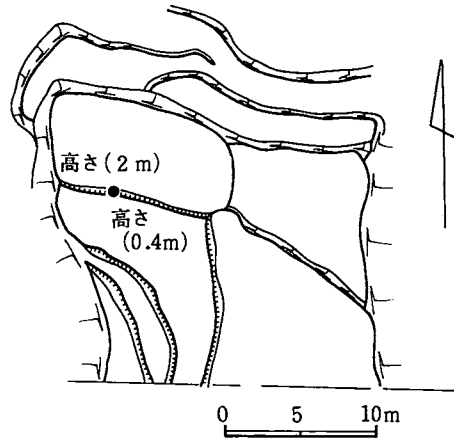
高塚城 略測図

程の平坦地となっている。

平坦地の西縁には北西から南東にかけて、2条の土塁にはさまれた空堀が走るのをはじめとして南東隅にも東西にのびる2条の空堀が観察される。

一方、平坦地南側の高台部分には「矢よけ」とよばれる土盛りの残存部がある。

なお、城跡の南西側には、「新城跡」として町文化財に指定された長径40m、短径35mを計る平坦地があり、裾部よりの比高は2.5mを示す微高地となっているが、これは、距離的に見ても、高塚城跡の一部をなすものであることは明確であろう。



東新城 略測図

ひがしんじょう

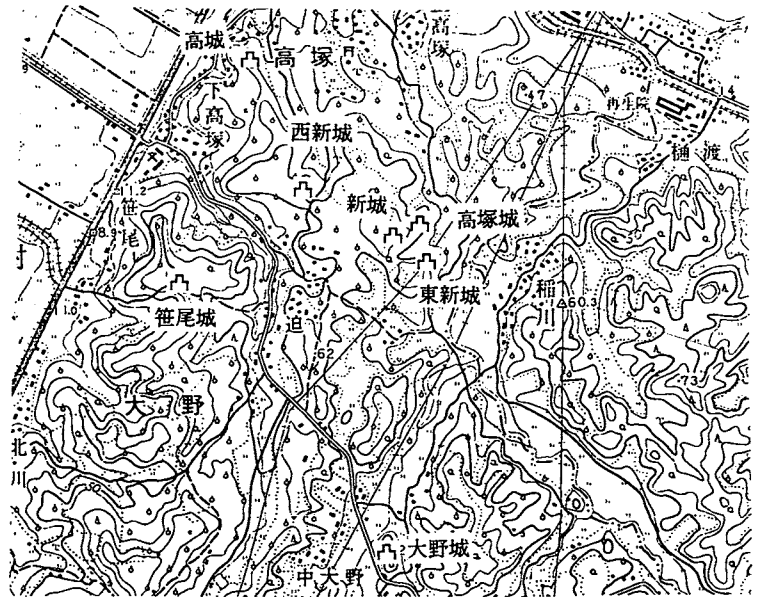
東新城 (八代郡竜北町)

同一丘陵地内の高塚城跡を西側に望む丘陵末端部(標高68m・東側麓の水田面よりの比高約40m)の柑橘園に位置している。

しかし、城跡とされる所には階段状地形が数段重なっているだけで、とくに城跡に関連あると思われるような遺構は観察されない。

高塚城跡に関連した岩跡の類であろうと思われる。

城跡からは東小川町一帯を眺望できる。



にしんじょう

西新城 (八代郡竜北町)

高塚城跡の南西方向に迫をはさんで西新城跡と称される丘陵地(標高40m・西側麓よりの比高約30m)の一隅がある。

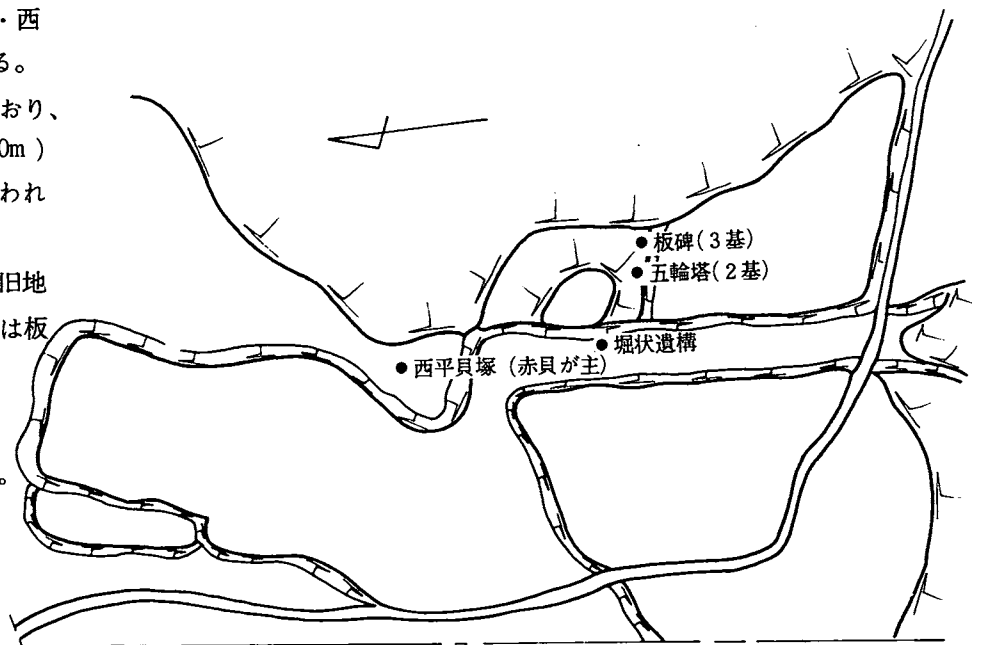
しかし城跡は全面柑橘園となっており、南北に走る堀状の溝(幅12m・長さ70m)を除いては、城跡に関連あると思われるような遺構は観察されない。

なお、柑橘園の片隅には小山状の旧地形がわずかに残されており、ここには板碑や五輪塔等がおかれている。

(注1) 迫には薩摩街道が通っている。

(注2) 西平貝塚でもある。

(注3) 板碑2基、石碑1基、五輪塔2基。



西新城 略測図

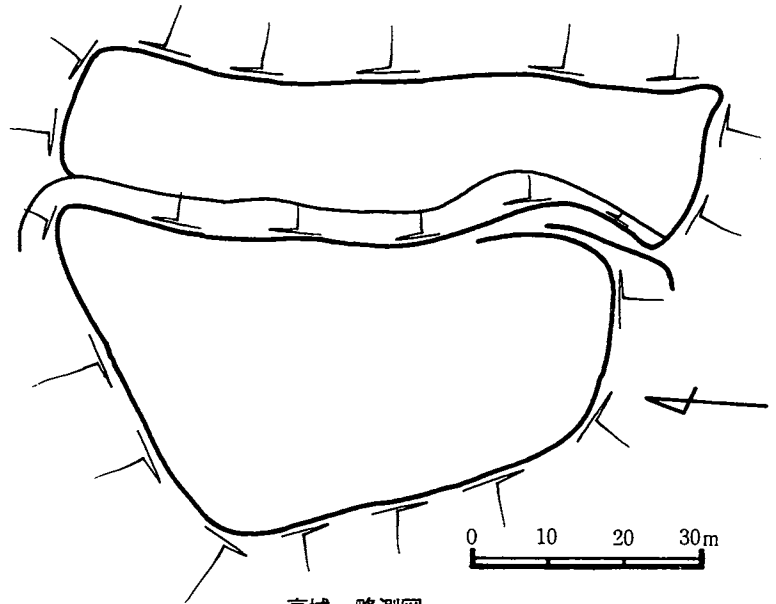
^{たかじょう}
高城 (八代郡竜北町)

西新城跡の西方向に「高城」と称される丘陵地末端部(標高30m・西側麓よりの比高約20m)があり、ここは現在柑橘園となっている。

丘陵の背面は平坦地(南北37m・東西19m)となっており、さらに東側の段落ち部分にも帯曲輪らしき階段状地形が観察される。

一方、丘陵の南東側は極端な野首となっており、「高城」は外観的にも城跡としての様子を呈する。

西新城跡に関連した砦の類であろうと思われる。



高城 略測図

^{まさお}
笹尾城 (八代郡竜北町)

城主は少弐頼尚であったが、文中8年(1379年)に今川貞世の攻撃にあつて落城したという。

城跡は、吉野水田地帯を一望に眺む大野丘陵末端部(標高約60m・北東側麓よりの比高約30m)の柑橘園に位置している。

しかし、当該地はミカン園に関連して造成が進んだ事もあつて、城跡に関連あると思われるような遺構は何も観察されない。

^{おおの}
大野城 (八代郡竜北町大字大野)

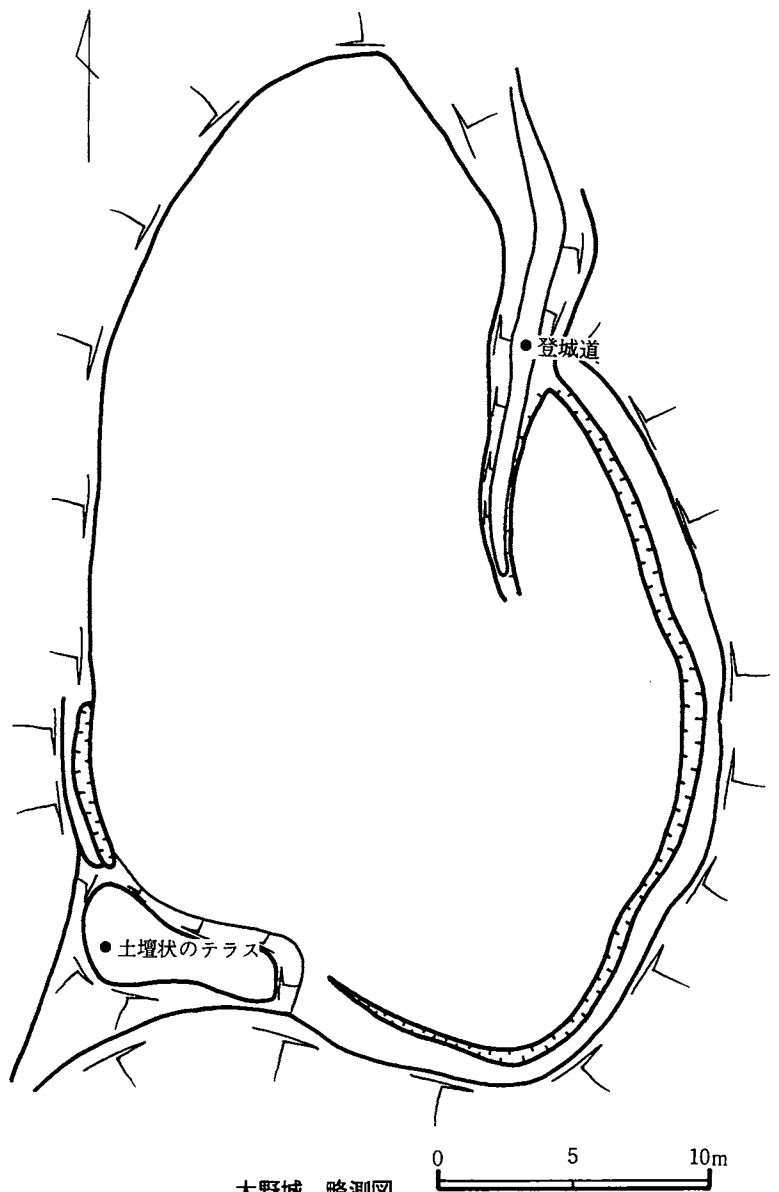
菊池氏の家臣であった大野氏が居城していたが一族は永正2年(1505年)に菊池義家の謀によって滅され、その後は東上野守が城主となったという。

城跡は独立丘陵(標高約45m・東側麓よりの比高約10m)の果樹園に位置する。

丘陵の背面は楕円形状の平坦地となっており、さらに平坦地の北縁と西縁には小規模の溝と土盛りが観察される。

一方、町道から城跡に至る山道は堀状の凹地となっており、外観的にも当時、登城道に使用された可能性が濃い。

なお、丘陵裾部(南側の町道部分を除く)にはその一部に「**長蓮**」という小名を残す帯状の水田地帯が取り囲んでおり、**泥田堀跡**の様子を呈している。



大野城 略測図

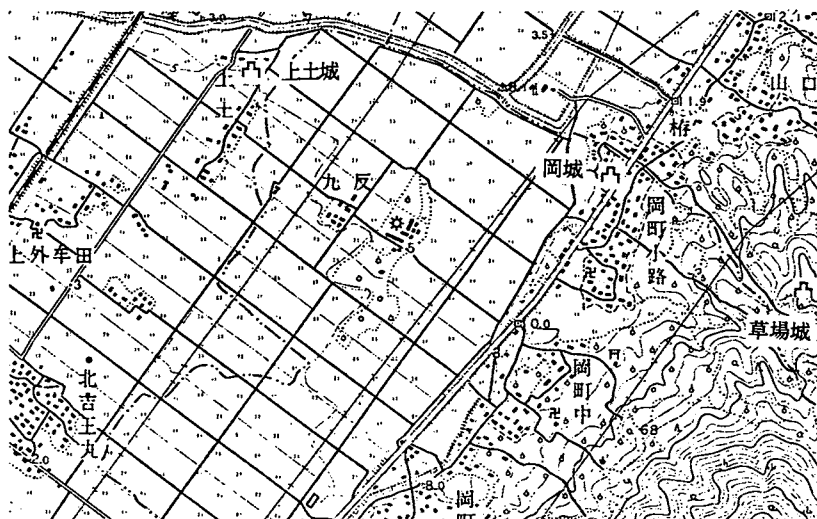
みやのはら 宮原城

(八代郡宮原町大字宮原村字浜殿)

『古城考』に「宮原町三宮社の前田畔にあり、城主相良家臣宮原左兵衛尉橋公忠、天正年中在城也」という記事が見える。

城跡の所在地と推定される三宮社前は、現在、宅地や水田となっており、遺構の観察は不可能である。

わずかに、当該地に残る「浜殿」という字名が城跡の存在を伝えるにすぎない。三宮社については『肥後国誌』に、「應保元年(1161年)八月越中前司平盛俊在国ノ時妙見ヲ勸請シ祠ヲ立三宮妙見ト称ス」という記事がある。城跡と三宮社は、何らかの形で関連していたものと思われる。



くさば 草場城 (八代郡宮原町大字梶字小越)

『古城考』に「早尾村にあり、天正の比、伊賀野次郎、同三郎島津勢に攻られ落城と云、古墳あり」という記事が見える。

城跡は、梶集落の南東方向にあつて、「城平」と称される山稜末端部(標高100m・集落よりの比高88m)に位置する。城跡は、南北方向に主軸を呈する長さ180m程の尾根となっており、さらに2条の堀切によって大きく3区画に分かれるが、この内、北側部分の長円形状の平坦地(長径50m・短径5~9m)に、「天守」という呼称が残る。なお、この「天守」の平坦地には、東側部分を除く三方を曲輪がめぐっているが、南側部分については堀切の形状を示す事になる。一方、他の2区画については、中央部が長方形の平坦地(長さ33m・幅9m)となっており、北端部は小山状になった微高地の上面に、三角形の平坦地(北側下辺10m・南北幅13m)が存在する。しかしこの2区画の平坦地については、いずれも現在ミカン畑となっており、旧地形はかなり変化しているものと思われる。なお、両区画の間の堀切は幅10m・長さ15mを計り、城跡内におけるもっとも顕著な遺構となっている。集落からの登城道は、城跡から北西方向へ延びる尾根筋にあり、その途中に古墳が存在する。

あざつち 上土城 (八代郡千丁町大字大牟田字城)

文亀元年(1501年)に名和氏の家臣、蜂須賀家親が築城し、後に相良伊勢守(興善寺城・城代)の与力、岩崎忠久が居城したと伝わる。ちなみに、岩崎氏は肥後豊表の祖として顕彰されている人物である。

城跡は、四方を藪草地帯に囲まれた上土の集落内に位置するものと考えられる。城跡に関する遺構は何も観察されないが、集落全体を「城(字名)」と称するほか、「うて(地元の人は大手の意をなすものと言う)」、「奥園」・「淵前」の小名を残す一隅も存在する。

観音堂の下には岩崎氏の遺品が埋葬されているという説があり、かつては「岩崎さん」と称するお堂も存在していたという。春(4月15日)と秋(11月15日)には岩崎氏の供養が住民の手で行われる。

なお、圃場整備前は集落を包み込むように江口川と観音川が流れていた(現在消滅)という。「平地に存在する城としては極めて自然条件に恵まれたものであったろう」と古老は語る。

(注1) 岩崎氏が領民の為に淵前に藪草を作付け、豊表を織る仕事を興したという。

(注2) 昭和16年の台風で崩壊した際にお堂下から2つに折れた板碑が出土したという。これは現在、岩崎神社の御神体として祀られている。なお、岩崎神社自体は「岩崎さん」の再興の意味から昭和16年以降に建立されたもので、以前は小さな無名のお堂に過ぎなかったという事である。

(注3) 近年は簡略化され、供養は村が浜田勝男氏に委託している。

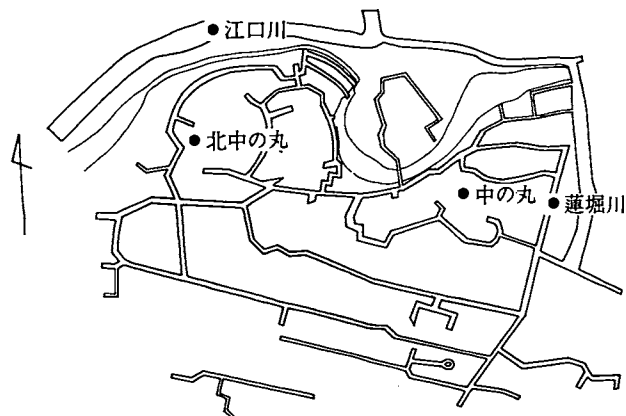
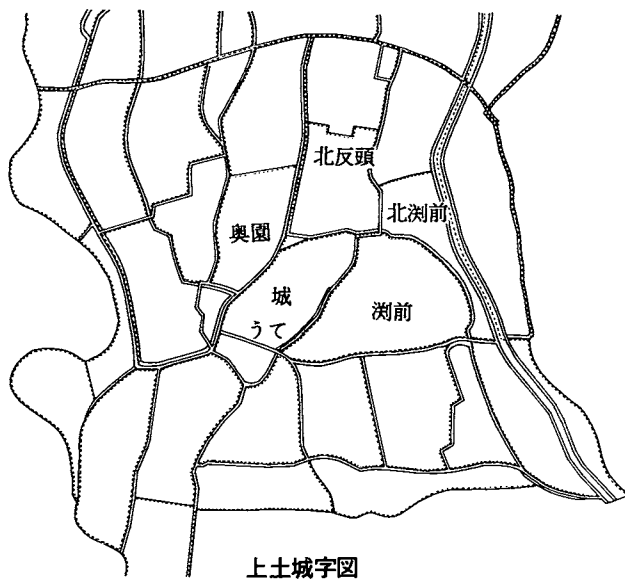
北吉王丸 (八代郡千丁町大字北吉王丸字中の丸他)

北吉王丸集落には、網目のように張りめぐらされていたという用水路の残存部があり、合わせて「北中の丸」「中の丸」「南中の丸」等の字名が残っている。『千丁村史』は、これについて触れ、戦国時代にできた豪族屋敷の曲輪の遺構であり、環濠集落の遺跡であると推論している。

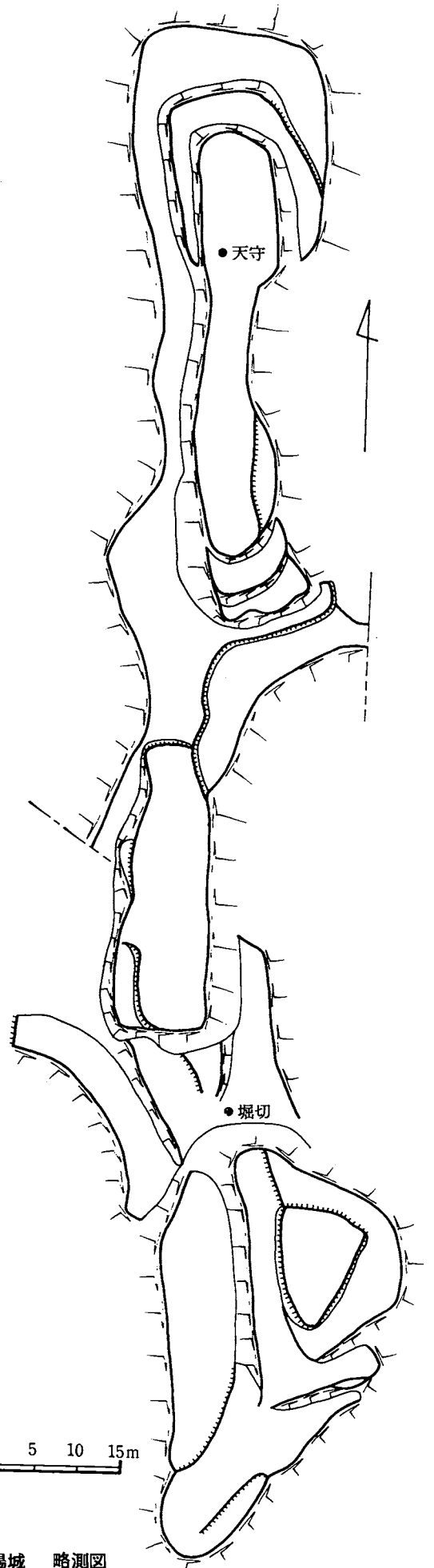
当該地は、東方に位置する竜峰山の一隅から八代海に向けて流れ出した江口川流域に開けた集落であり、用水路についても、「蓮堀」や「源兵衛堀」の呼称を残し、「土族屋敷」と伝わる所もある。周辺には上土城や興善寺城の存在がうかがわれる所から、当地においても、館の類が存在した可能性はある。しかし、江口川をはじめとして用水路の2/3以上は、近年の圃場整備事業で消滅しており、現在では、明治初年頃の農地図が環濠集落の様子を伝えるにすぎない。

(注1) 千丁村役場・昭和43年11月10日

(注2) 周囲の宅地よりも若干高くなったいわゆる高床の敷地となっている。



北吉王丸の水濠走行図 (圃場整備以前)

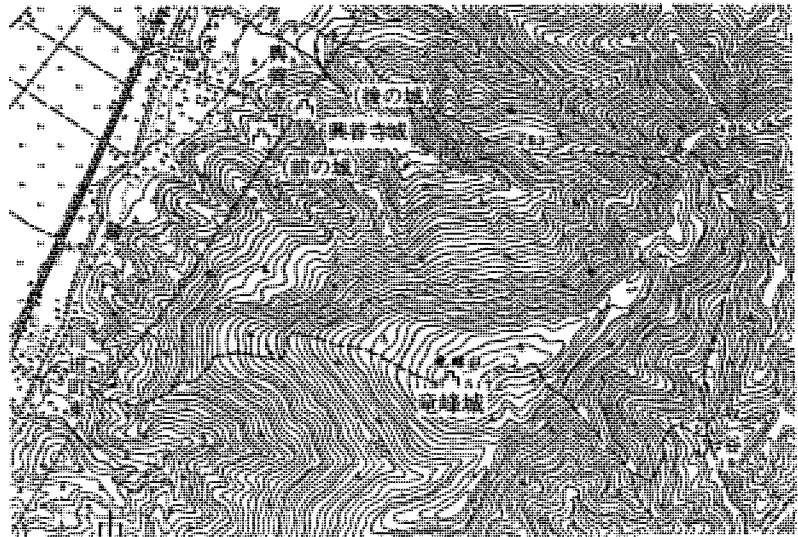


草場城 略測図

岡城 (八代市岡町(大字岡町中)字古城)

名和氏の家臣、佐々木吉広や佐々木吉重が在城したという。相良氏占領後は佐々木高光が続いて城を守ったと伝わる。城跡は「古城(字名)」と称される微高地に位置していたが、国道3号が中心部を突き抜けた事もあるため、地形も大幅に変化し、現在はわずかに旧地形の一部(ミカン畑)が残るに過ぎない。「岡城跡」の標木がなければ、その所在地さえ不確かな程である。『八代郡誌』には「字古城の西側にある高丘にして鹿児島街道の東側なる大なる溜池にそう。此城山面する方は深濠をめぐらし、之に36間の長橋を架し、西方は深田にて、人馬を通せず、頗る要害の地なりと。本丸ニノ丸三ノ丸、御成間等の跡ありて、付近に陣の内、(薩摩勢陣跡)大井戸、構屋敷、町畑等の名を存す。其面積9143坪」と記されている。

岡中神社(七社さん)は佐々木高光の勧請によるものと伝わる。なお、昭和8年頃、国道工事の際に城跡内より舟型石棺が出土した。

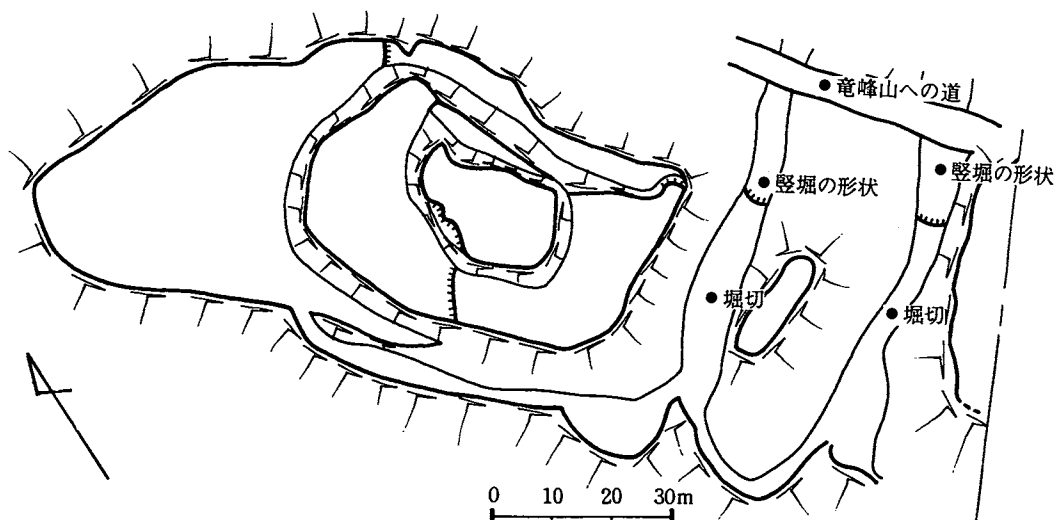


関城(興善寺城) (八代市興善寺町(大字・川田町東)字関)

名和顕興の家臣、本郷忠行が在城していたが、永禄・天正年間は相良長皎とその一族が城主となったという。なお、長皎の弟越中守は谷向いの尾根に城を築いて居城していたという。そこで、この城は「越中が城」と称されたが、寛永年間頃から新城と呼ぶようになったという。現在、地元では普通、関城跡を「前の城」、新城跡を「後の城」と呼び分ける。なお、両城跡とも竜峰山の西側末端部の尾根(雑木山)に位置するものである。

「前の城」

標高140.9mの尾根に位置しており、西側麓の集落よりの比高は約136mである。二重の堀切によって断ち切られた山頂部分には、長方形の高台(北西方向に主軸を呈し、長径12m弱・短径8m)があり、これより0.6~0.8m下には、北側を除く三方を曲輪(注1)がめぐる。また、曲輪の西側には、約1mの段差をもって舌状形(東西方向に主軸を呈し、



興善寺城(後の城)略測図

長径20.5m・短径20m)の平坦地がつらなっている。

なお、堀切はいずれも途中から豎堀となって北東側斜面を下る。

「後の城」

「前の城」の南側谷向いの尾根に位置しており、標高80m。西側麓の集落よりの比高は約70mである。二重の堀切によって断ち切られた山頂部分は、東西に主軸を呈する帯状の平坦地(長径33m・短径10m)となっており、東端部に堀切に伴うと思われる土塁(長さ7m・高さ2.5m)が存在する。一方、西端部には円形の窪地(直径3m)が観察される。また、西端部の斜面部には階段状地形が重なっているが、その最上段部は曲輪的色彩の濃いものである。

竜峰城

(八代市興善寺町(大字・川田町東)国有林地内)

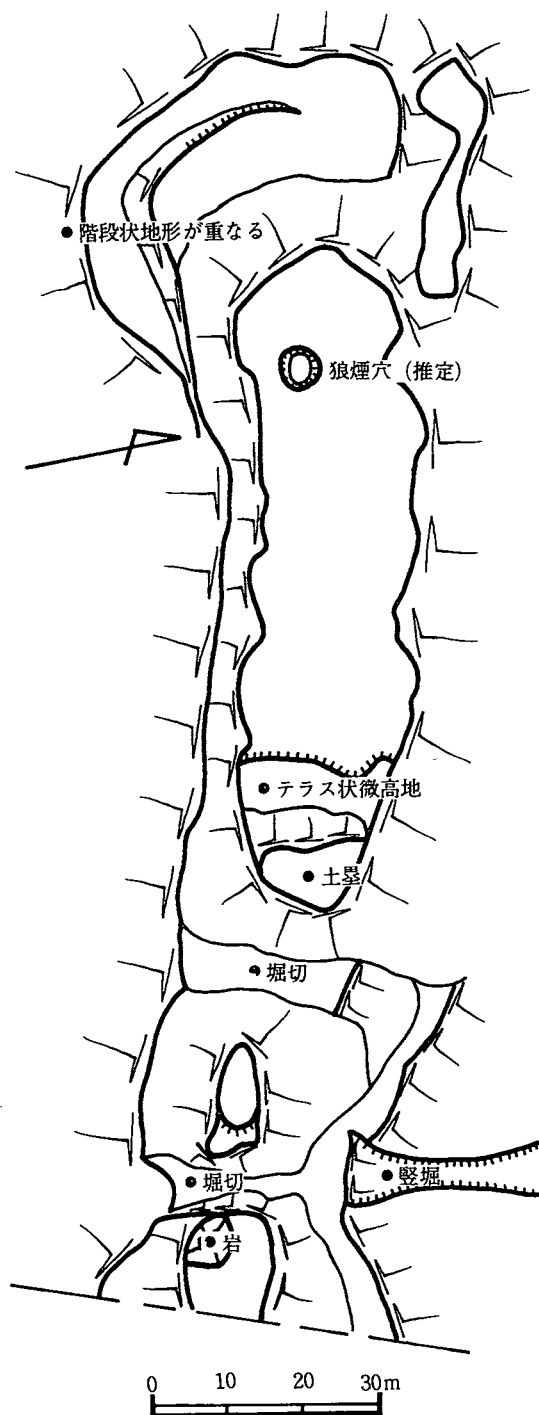
竜峰山(標高51.2m)の山頂部分が城跡と伝わり、鎮西為朝の居城説がある。「鎌倉馬場」と称される山頂部分^(注1)は南西方向に主軸を呈する長い尾根となっており、南西側寄りに若干の平坦地が観察されるものの、岩石等も多く散在しており、城跡に関連あると思われるような遺構は何も観察されない。『古城考』に記載された「為朝の馬蹄石」なるものの所在も不明である。

総じて城跡という感じはしないが、竜峰山の頂上部分には興善寺町から東陽村に至る山越道が通っており、この地からはかなり遠方まで眺望可能な事から、砦の類が存在した可能性は十分にある。地元の人は^(注2)烽火台があった場所という。

なお、竜峰山は「霊峰」とも呼ばれており、かつて熊野権現、修験者の道場として利用された。さらに、7合目付近には石灰岩が累積している所があり、「天狗屋敷」と称される。

(注1) 興善寺町間に登山口があり、頂上までの所要時間は約1時間である。

(注2) 出典は『肥後国誌』、八代郡種山手永による。



興善寺城(前の城)略測図

平家ヶ城

(八代市東町字年の神)

平氏没落の時、平氏一族が隠れ住んだ所という。又、一説に平家方の緒方一族が泉村五箇の荘へ引き移る前に隠れた所でもあるという。

谷間に開けた「年の神」集落の北端に位置する山林(標高341.8m・集落よりの比高約132.8m)が城跡と伝わっており、地元の人は普通、「平家城」と称している。山頂部分は「へちま型」の平坦地(東西に主軸を呈し、東西42m・南北4m~6.5m)となっているが、いたる所に岩石が露出しており、人工的なものとは認めがたい。又、山腹にも城跡に関連あろうと思われるような遺構は存在しない。単なる物見に使用された砦跡なのであろうか。しかし、山頂部分の平坦地には、円形状(直径2m・深さ0.3~0.5m)の窪地が残っており興味深い。

城跡の北側麓には、妙見信仰に関連した猫塚とさかさ椿が祀られている。^(注1)

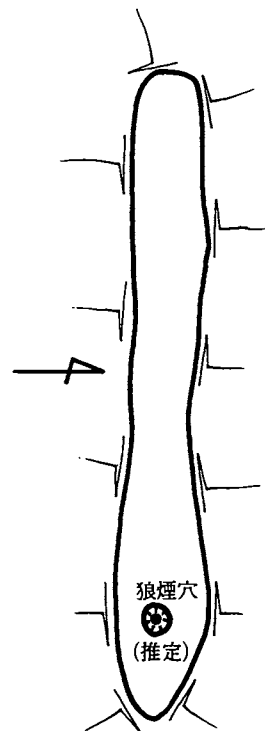
なお、距離的には多少離れてはいるものの集落の周辺には「源平」^{げんだら}・_(注2)
 「緒方屋敷」^(注3)と称される一隅がある。

(注1) 百濟帰化の妙見信仰王族らが光武袈裟松宅訪問中に同伴の白猫が死亡し、
 裏手の小高い丘の上に遺体を埋葬して塚をこしらえたというのが猫塚で、
 杖についてきた椿の枝先を下にしてさし込み墓標とした所、さかさ
 まに芽が出たのが「さかさ椿」という。

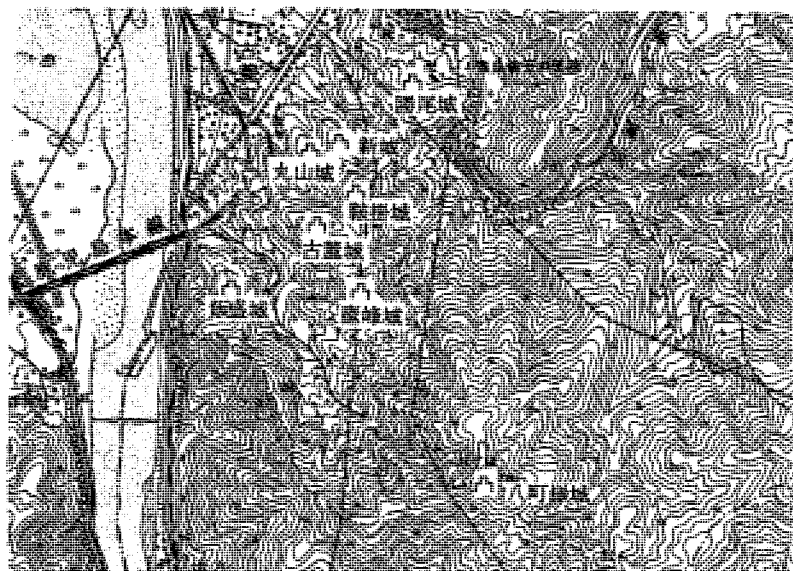
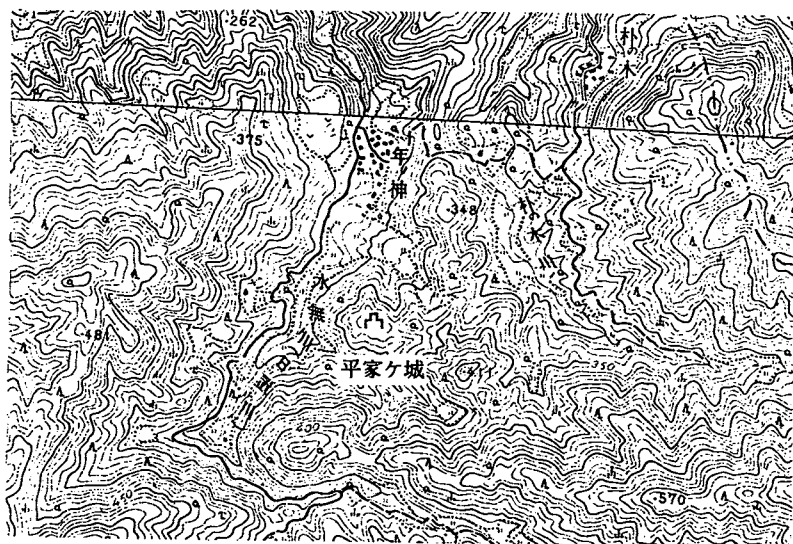
なお、現在の猫塚は小さな社であり、椿は古木から代々枝分けしてき
 たという若木である。この伝承に関連して集落内に猫谷と称する所があ
 る。

(注2) 妙見上宮付近

(注3) 集落からさらに南側の山麓へはいり込んだ所



平家ヶ城 略測図



古麓城 (八代市古麓町)

古麓城の歴史は名和氏と相良氏の二時
 代に大別する事ができる。すなわち、名和
 氏の八代支配は名和義高が建武元年（13
 34年）に肥後八代庄の地頭職に任じられ
 たのがはじまりで、いわゆる「麓山」に
 城を築き、名和氏五代150年間の本拠地と
 なったのである。

名和氏時代の古麓城は、「麓山」の5箇所の峰に城の設備が設けられたという。現在では、これらの峰に「飯盛城」「丸山城」「鞍掛城」「勝尾城」「八町嶽城」という呼称がある。

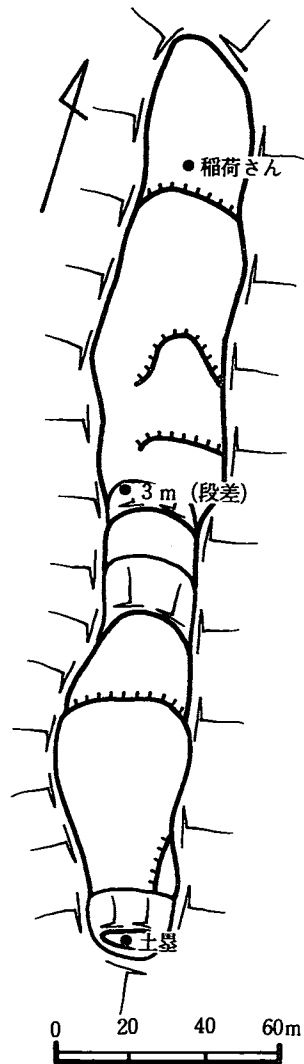
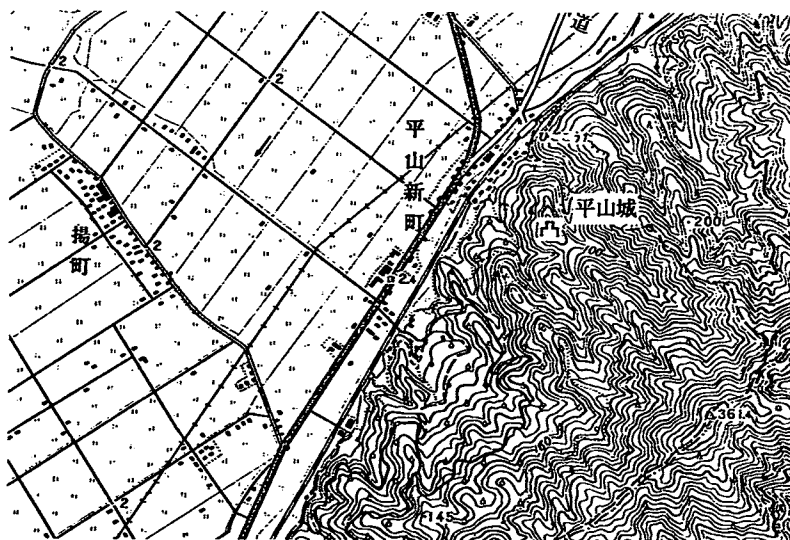
ひらやま
平山城 (八代市高田町(大字・平山新町)字平山)

一説に松岡長平が正平12年に築城したものという。戦国末に至って、相良氏の家臣、東越後守が在城する事になり、天正年間には桑原広政が城代を勤めた。

肥後高田駅(国鉄・鹿児島本線)の南東側に位置する山稜末端部(標高119m・駅よりの比高約115m)の帯状形をした雑木山が城跡と伝わる。長さ120mに及ぶ山頂部分の尾根は北西方向に主軸を呈しているが、高さ3mの削り落しによって大きく二区画の平坦地(幅12~18m)に分かれる。その尾根は北西方向に傾斜しているため、その傾斜に沿って二区画の平坦地にも各々高さ0.5m程の削り落としがはいており、南東側は3区画に、北西側は2区画に細分化される。南東端の平坦地には長さ12mの土塁(幅9m、高さ1.5m)も存在する。山腹はいずれも急傾斜となるが、裾部については幾分緩傾斜となり、その一隅には鎮守稲荷神社が祀られている。

駅の南西方向、約100mの地に万年庵寺があり、城主、松岡、桑原両氏代々の菩提所も残る。「船の河内」と称される所は、かつての港町であったという。

(注1) 現在は宝形造りの草葺き屋根の小堂があり、木造阿弥陀如来立像が安置されている。



平山城 略測図

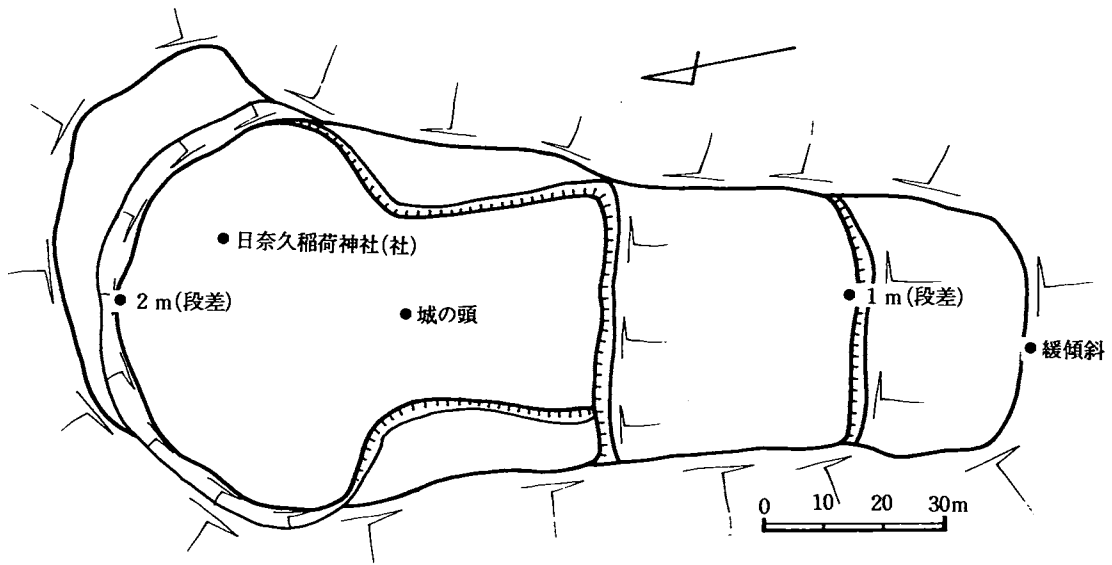
たがわうち
田川内城 (日奈久城) (八代市山下町(大字日奈久)字田川内)

名和家臣、園田宗林が居城していたが、千代永城主、桑原能登守と争い戦死、後に阿蘇家臣、草壁文右衛門が城主となったという。「八代日記」天文12年3月4日条に「同四日、戌時日奈久城焼候」の記事が見える。

城跡は山稜末端部の独立丘陵(標高40m・西側麓の集落よりの比高約37m)に位置しており「城の山」と称されている。しかし、南北に主軸を呈する丘陵の背面には、北側寄りの所に「城頭」というキノコ型の平坦地(東西幅15m・南北幅40m)が存在する他は、南側に向ってゆるやかな傾斜地が続いているに過ぎない。なお周辺裾部には、畑地・竹林・墓地になった階段状地形が観察されるものの、その造りからして城跡の遺構とは認めがたい。

西側麓の集落には「馬場」・「往還下」の字名が残る。

(注1) 日奈久稲荷神社という小さな社がある。



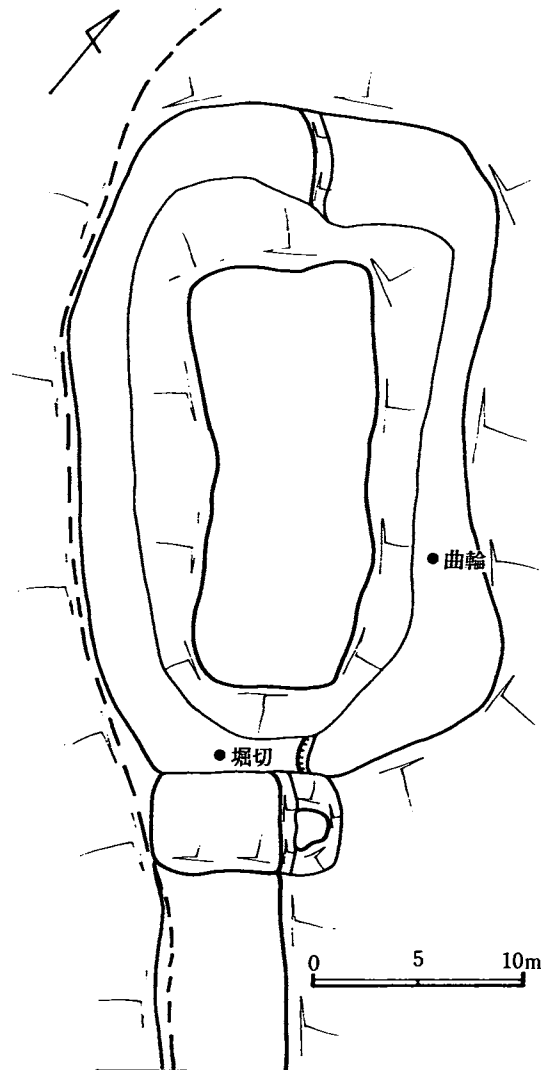
田川内城 略測図

千代永城 (八代市山下町(大字日奈久)字山下)

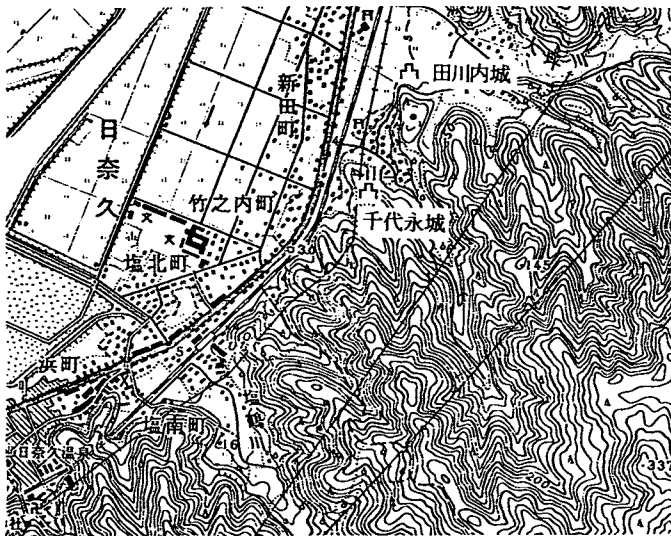
相良家臣、桑原能登守が居城していたが、文明4年(1372年)に平素より不仲の間柄であった田川内城主園田宗林と争い両城主とも戦死、廃城になったという。

(注1)
城跡は字「山下」の地内にあつて北西に主軸を呈する山稜末端部(標高50m・南西麓の集落よりの比高約47m)の雑木山に位置する。山頂部分は長方形(長径38m・短径17m)の平坦地となっており、これより5~6m下には幅3~9mの曲輪が鞍部を除く三方を取り囲む。南東側の鞍部には堀切(幅17m)も観察される。なお、堀切の際の排土と思われるものが堀壁の北側斜面部に無造作に積まれており興味深い。

城跡周辺の森には大小10基余りの五輪塔が残り、その内の1基が城主の墓と伝わる。また、南西麓の集落と水田には、



千代永城 略測図



「馬場(字名)・「古塘添(字名)・「辻(小名)」の地名を有する一隅がある。

(注1) 宗林は二見城主、南大和守と謀って千代永城の桑原を討たんとしたが、南が応じなかったので、単独夜陰に乗じて千代永城を襲った。能登守は豪の者で、大身の鎧をふるって宗林を討ちとった。勝に乗じた能登守は宗林の居城を攻略しようと単騎田川内城へ馳せ向った。宗林の郎党、専左衛門は能登守が単騎で来襲する事を予知して麦畑に潜んで待ち、姿が見えた途端、一矢にして射落した。このため家来たちも能登守に殉死したという。(『古城考』)

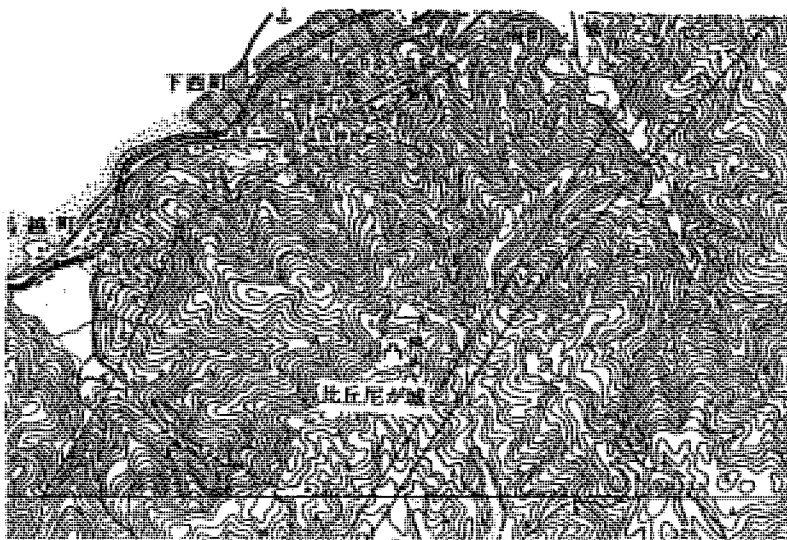
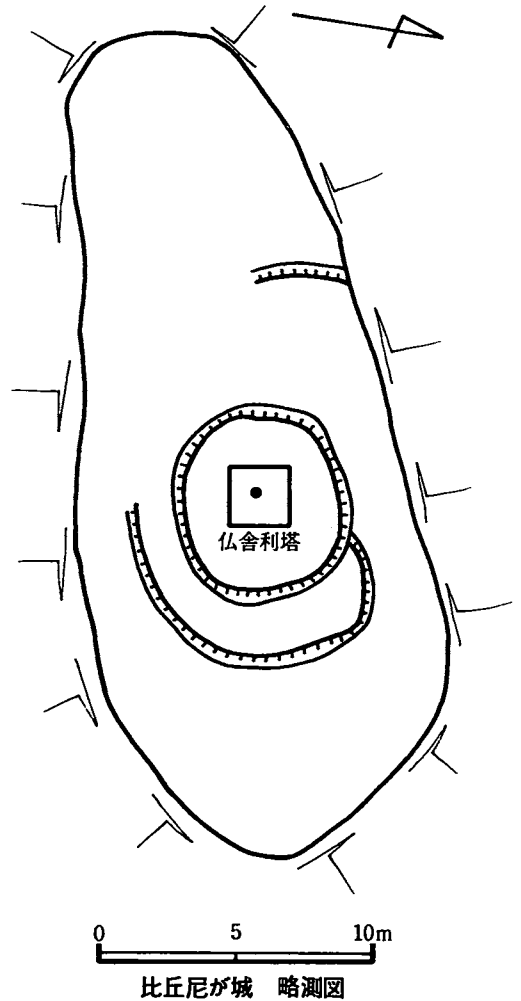
比丘尼が城(櫛山城) (八代市野田崎町(大字野田崎)字比丘尼)

城跡名の由来は天正年間、薩摩の本郷能登守が戦死した後、その母の妙珍比丘尼が3年間、尼僧として本郷能登守亡き後の城を守ったという伝承によるものである。

城跡は日奈久温泉神社に登山口を持つ櫛山(標高293.9m)に位置しており、「比丘尼」の字名を残す。山頂部分は紡錘型の平坦地(南西方向に主軸を呈し、長径90m、短径25m)となっており、北東側寄りの所に楕円形をした高台(長径12.5m、短径11m、高さ1.5m)があり、さらに高台の一部には幅3~4m程の曲輪状のものもめぐっている。かつて、この地から瓦片の出土を見たという。山頂からの眺望は極めてよく、砦としては恰好の場所である。なお、山頂より南西側へ12~13m下った所に一軒の廃家が残る。現代においても、このような高所で生活が営まれた事に興味を覚える。

(注1) 頂上までの登山に要する時間は約40分で途中には岩清水が湧く所もある。櫛山の名の由来は、昭和24~25年頃まで老松が櫛の歯のように茂っていた事による。その後、松は松喰虫の被害をうけ全部枯死した。

(注2) レンガ積みみの仏舍利塔が築かれている。



二見城(園田城) (八代市二見町(大字・本町)字園田城)

名和氏の家臣、村上太郎(小太郎)が在城していたが、その後、勝田大和守が城主となったという。しかし、勝田氏については會田氏とも園田氏とも伝わっており定かでない。『犬童文書』に「□郡之御行迹ト隈部図書助□草ヲ押寄二見被攻彼

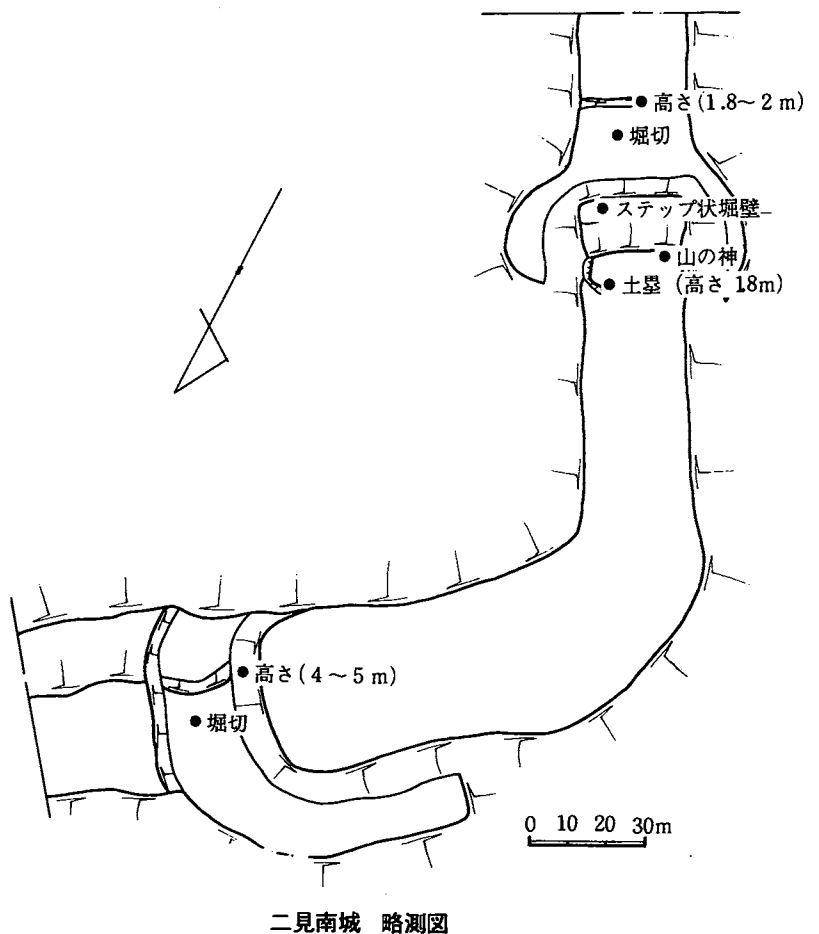
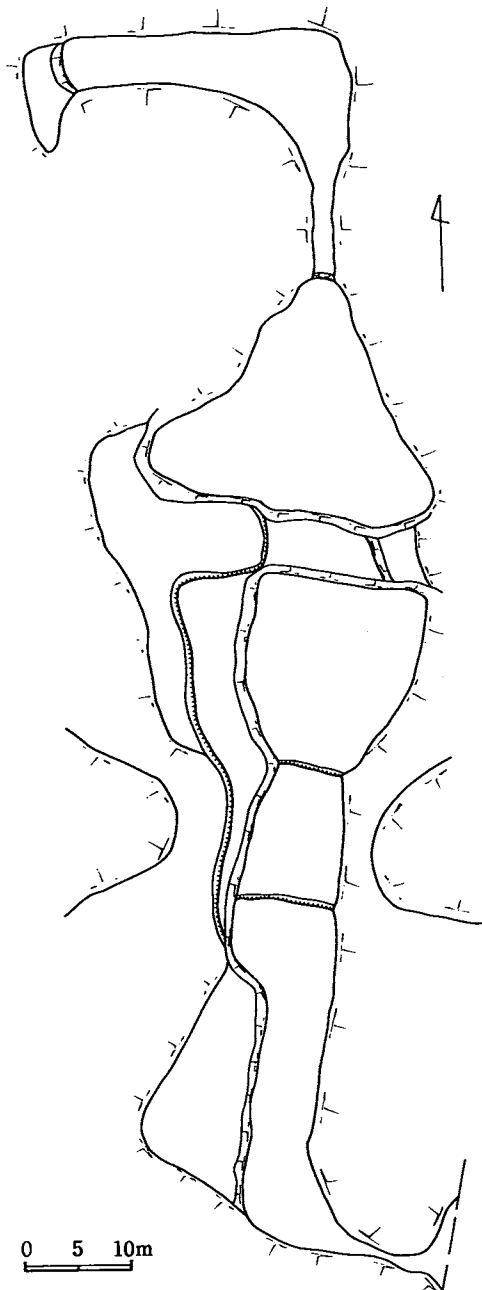
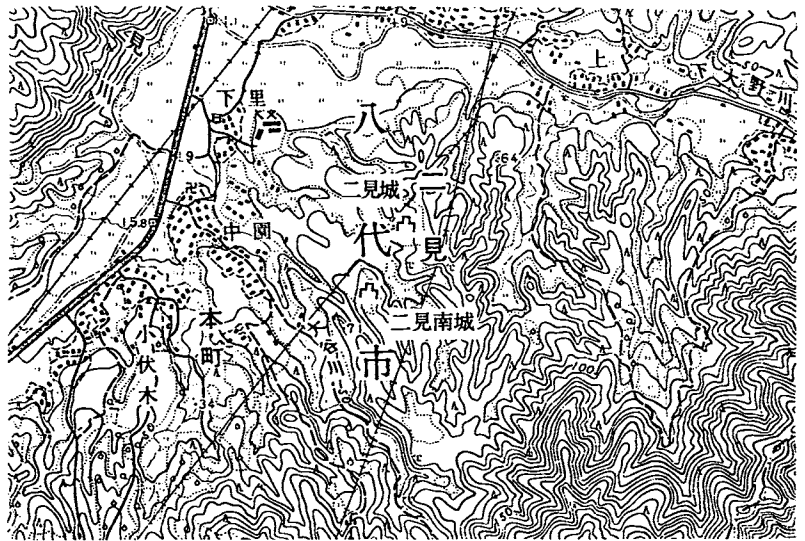
地候之□大敵伝開レ運申候之事」の記事が見える。

二見中学校の裏側に「馬場(字名)・園田城(字名)」と称される丘陵地帯が東側へ伸びており、その最も奥まった所(園田城の地内)に「高城」という小名を残す高台(標高60m・西側麓の集落よりの比高約48m)があり、城跡と伝わる。北西方向に主軸を呈する「高城」の上面は、四区画からの平坦地となっており、顕著な遺構としては長さ50m 近い堀切(幅12m)が観察される。地元の人は、堀切の南側に位置する台形状の平坦地(長径35m、短径31m)を高城の中心地という。さらに、「馬場」という字名を残す一帯については「城主が馬で駆けた所」と古老はいう。なお、中学校より約150m 離れた丘陵地の北側裾部には「宮田池」と称される溜池があるが、これは「血の池」とも称される。

丘陵地一帯からは、鎌・石斧をはじめとして多くの石器が出土する。

(注1) 畑地・ミカン畑・雑木林になっている。

(注2) 伝承は二説ある。すなわち、「昔、宮田某という者がこの池で漸られ、真赤に池を染めた」という説と、いわゆる大蛇伝説である。



二見南城 (八代市二見町(大字・本町)字鉾尾)

永祿年間(1558~1570年)、相良氏の家臣、南下野守(一説に南大和守)が在城したというが、會田大和守の在城説もあって定かでない。

城跡は鉾尾(字名)の地内にあって、城ノ尾と称される帯状形の山稜末端部(標高70m・南西側麓の集落よりの比高約53m)に位置しており雑木山となっている。山頂部分は鉤形を呈する幅13~22mの平坦地(平坦地の中央部から南東側へ90m・北西側へ90m)となっており、南東端に幅5m(高さ1.8m)の土塁が存在する。また北西・南東側の鞍部には堀切が観察される。堀切の底幅は、北西側9m(山頂よりの比高4.5~5m・対岸との比高1.8~2m)、南東側9.5m(山頂よりの比高5~6m・対岸との比高1.5m)を計り、両者はいずれも平坦地西側を巡る曲輪(幅3~4m)につながる。

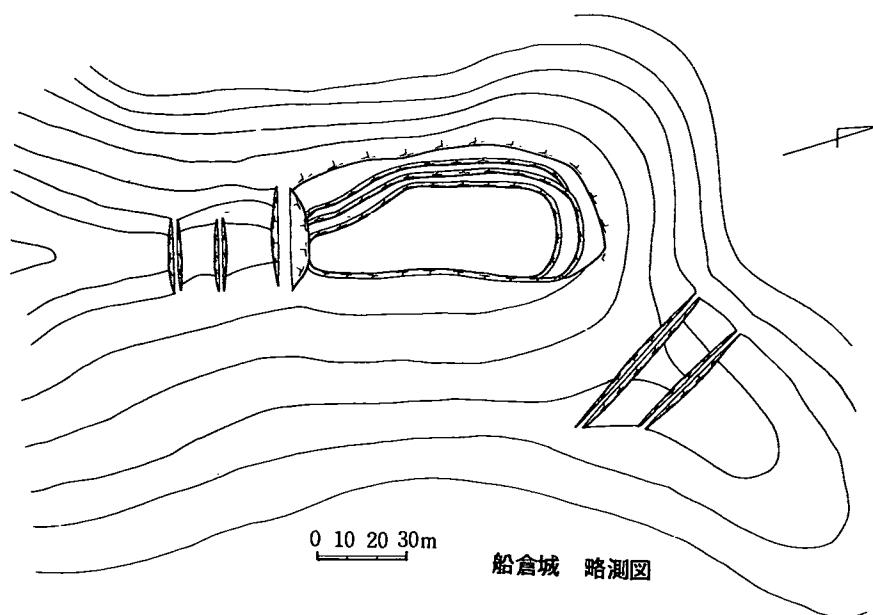
城跡の南西側麓には南(字名)と中園(字名)の集落が存在しているが、とくに南の住民は城跡内の土塁に「山の神」を祀っており、毎年3月15日に祭りを行う。

なお、城跡周辺の畑地から古瓦が出土するという言い伝えがある。

船倉城 (八代郡坂本村)

城主は相良家臣の愛甲常吉であったという。

城跡は、北西側麓に山口の集落を望む山稜末端部(標高約130m・山口の集落よりの比高約30m)に位置する。山頂部分は長円形の平坦地(北西方向に主軸を呈し、長径90m・短径15~23m)となっており、南東側の鞍部に堀切の残存部(大半は埋っており、現在は幅4m・長さ22mを計るにすぎない)が観察される。また堀切の南東側にも、城跡の遺構に関連あろうと思われる楕円形の平坦地(長径25m・短径18m)が存在しており、さらに周辺斜面部には階段状地形が重なっている。



久多良木城(寺山城) (八代郡坂本村大字久多良木字園)

『古城考』によれば、南北朝時代、名和伯耆守家臣・久多良木氏が在城したというが、相良家臣・深水宗方の在城説もある。さらに、芦北国造が置かれた時、警固のために造られた山城跡ともいう。地元では、「寺山さんの城」とも称している。

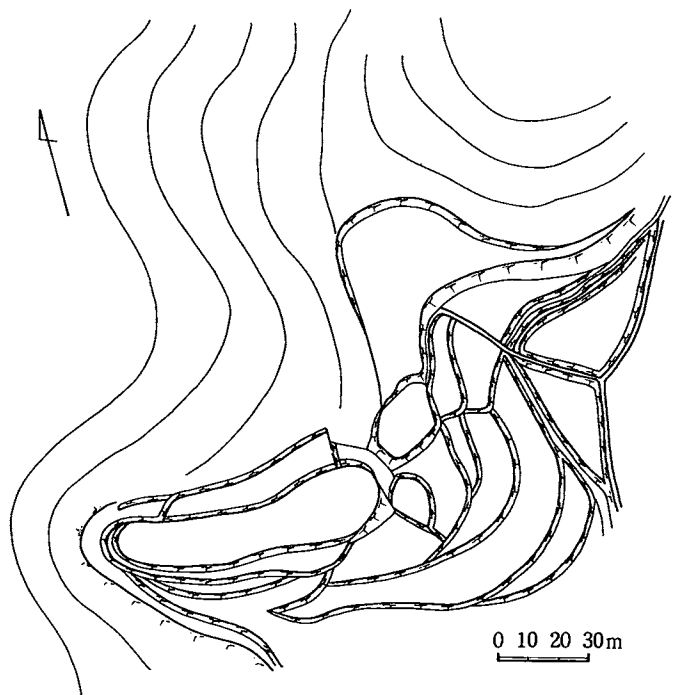
城跡は、北側麓に馬場と陣ノ内の集落を望む山稜末端部(標高254m・馬場の集落よりの比高約170m)に位置する。山頂部分は長円形状の平坦地(南北方向に主軸を呈し、長径82m・短径20m)となっており、かつてはこの地から水甕等の破片が多く出土したという。南側の鞍部については幅12mの堀切(長さ30m)がはいつているが、尾根続き部分にも2条の堀切(幅4m・長さ22m)が観察される。さらに平坦地の段落ち部分には北側から西側にかけて階段状地形(幅3~

7m) がめぐっており、北東側に約20m
下った山稜の張り出し部分には、舌状形
の平坦地(長径37m・短径32m)も存在
する。ここの鞍部も2条の堀切がはいっ
ている所から、城跡における堀切の総数
は5条を数える事になる。「堀は灰堀であ
った」と古老は語る。

(注2)
城跡麓には、蔵屋敷・水くみ迫・陣の
岩と呼称される所があり、集落におい
ては、寺山さんの乗馬が白馬であったと伝
わる所から、白毛の動物を飼う事が避け
られてきた。

(注1) 堀幅はともに5m前後で、長さは40
mと60mを計る。

(注2) 宇土地区・矢崎城の項を参照



久多良木城 略測図

芦北地区

中世期の所領と城領主

(一)

芦北郡の中世期の所領関係及び城領主・在地土豪などについてのまとまった研究は、今日迄皆無といえる程に少ない。我々が手中にする『芦北郡史』や『市町村史』（『水俣市史』『八代市史』『佐敷町史』『津奈木村史』など）は、『肥後国誌』『求麻外史』に典拠を求めて通説としているが、その典拠については相当に信憑性を吟味しなければならない。いま因みに、前述の『肥後国誌』『芦北郡史』をもとにして、所領の傳領関係と城領主を概括すると別表のようになるが、これらの各事項については、いずれも典拠の根本史料を欠くものが多いし、また時期が明確でないものも多いので、再検討の必要がある。ここでは現存の関係史料をもとに、所領の伝領関係、及び城領主層などについて叙述する。

地名	城主	年代	事項
日奈久千代永城	文明年中、相良家臣桑原能登守	建久3年(1192)	檜前政丸、芦北7浦を領す
日奈久田河内城	建武期村上興善、その後勝田宗房、一説には曾田大和守又は園田大和	正応2年(1292)	相良頼俊、芦北地域を兼領す
二見南城	永禄期、相良家臣南安芸守	文中元年(1372)	名和顯興、芦北地域を兼領す
久多良木城	相良家臣深水宗方	弘和3年(1383)	懷良親王の令旨で、相良前頼、球磨郡と兼領す
田浦城	建武期進悉兵衛、慶長5年加藤与左エ門	寛正4年(1460)	相良長頼、先例により領地安堵さる
口黒城	田浦氏代々居住	文明16年(1484)	相良為統、八代地域を領す
吉尾城	永禄期吉尾大学	明応8年(1489)	相良氏、人吉城に退却し、芦北地域は名和領となる
大泥田城	大仁田玄蕃允	永正元年(1504)	相良氏、再び八代・芦北地域を奪回す
佐敷城	建武期上神重光、永禄期佐敷重宗、天正初年西久遠	天正9年(1581)	島津領となる
佐敷東城	東新左衛門	天正15年(1587)	佐々成政領となる
一之瀬城	一之瀬与三右衛門	天正16年(1588)	加藤清正領となり、各城に城代が設置さる
津奈木城	建武期嘉悦泰行、永禄期東右衛門佐、元亀期東尾張守、天正期深水宗方		
久木野鶴平城	相良頼雄		
久木野中尾城	菱刈左兵衛		
湯浦野嶽城	長禄期、名和義親		
水俣城	水俣四郎、建武期本郷家久、永禄期水俣春元、天正期深水宗方		

中世期の芦北地域は、「芦北庄」と呼称されて史料上にみえる。その庄園範囲は明確にしえないが、「相良家文書」（『大日本古文書家わけ第五』、「詫摩文書」（『熊本県史料中世篇第五』）によると、前者に「芦北庄内」田浦・湯浦・田河内の地名がみられ、後者に佐敷・久多良木の地名がみられ、また「禰寝文書」（『九州史料叢書』）「彼所庄内ニ田浦二見と申所、八代堺候」と記している点から、北は「八代庄」に隣接する田河内関所（現八代市日奈久町田川内）を境に、南は水俣までと推定され、芦北郡一郡がほぼ「芦北庄」であると考えられる。

次に「芦北庄」の所領の伝領関係であるが、十四世紀初頭迄は明確にしえない。ただ敢えて推定すると、その地域性からみて、隣庄の八代庄・人吉庄は鎌倉期に平氏所領から源氏による没官領となった、と報告されている点を併考すると、芦北庄も多分にそのコースをとった可能性があると思われる。

芦北庄の所領支配について史料上で確認しうる最初のもは、次の史料（「詫摩文書」41号）である。

花押（北条高時）

肥後國葦北庄佐敷・久多良木両浦事

右、長崎治部左衛門尉宗行法師法名任葛西殿御時例、知行不可有相違之状如件、

(1318)
文保二年七月五日

右史料の花押者が文保元年に執権に就任した北条高時である点より、芦北庄佐敷・久多良木両浦一帯が北条氏の得宗領

であったこと、及び「葛西殿」は北条氏一門の有力者であろうと推定される。そしてその所領が「長崎宗行」に伝領され安堵知行されることとなっている。本史料では何時から得宗領となったか不明であるが、八代庄では承久の乱を転機とするといわれていることを併考すると、多分にこの時期が推定される。またこの文書の宛先が誰であるかが不明であるので、その代官が誰であるかも不明であるが、文書の伝来所蔵者が「詫摩氏」であることを勘案すると、詫摩氏であったかも知れない。以上の点から、『求麻外史』が記す正応二年(1288)以来は相良氏領とする見解は再検討の余地がある。

右の北条得宗領後の伝領関係については、『阿蘇家文書』(115号)の「惠良惟澄注進關所中指合所領注文穿」が次の様に伝える。

注進關所内指合所々事

一、肥後國分

葦北庄

元弘恩賞宛賜、賜人其内干今相續、軍忠輩在、其外故武重令支配新所、仍當時關所分不可及一兩村歟云々

右史料の「元弘恩賞」は、元弘三年(1333)の乱で、菊池氏(武時・武重)が鎮西探題北条英時を攻め滅ぼし、建武中興成立へ大きな功績を示したことへの恩賞で、建武期に菊池氏料所として安堵されたものである。別文書(同114号)によると、この恩賞は芦北庄の地頭職である。従って、芦北庄はこの元弘乱を境に建武期に北条得宗領から菊池氏所領に変わったと思われる。その後、菊池武重が延元三、四年(1339)頃死去(川添昭二氏『菊池武光』は三年十一月から翌四年七月の間とする)したため、本史料が記すように關所地となったもので、興国七年(1243)頃、惠良惟澄がその地頭職を所望したのである。しかし惠良惟澄にその地頭職が移動した形跡は認められない。菊池氏は正平二年(1347)十一月頃、懷良親王から「勅約」の論旨で「肥後守」となり、肥後國守護職を得ているので、地頭職も保持した可能性が強いと思われる。今日現存する南北朝期の芦北庄関係史料をみると、北朝の拠地であった人吉相良氏(北朝側の肥後守護職小武頼尚の有力な地盤)が、「芦北庄田浦凶徒」「芦北庄輩事成御敵候」「肥後國葦北立凶徒」と呼称するように、南朝菊池武光の支持基盤として行動して点も併考すると、菊池氏所領であった可能性が強い。その後、菊池武光が文中二年(1373)十一月に死亡し、つい子武政も翌三年五月に死亡し、若冠の賀々丸(のちの武朝)が継嗣したが、南朝の勢力は相当に失逐した。通説では、この時期の文中中期から八代庄地頭名和顯興が芦北庄地頭職を兼領したと伝えるが、今日その史料はみられず、明確にしない。ただ二見・田浦地域は名和氏の支配下にはいった可能性が推定される。

南北朝中後期になり、今川了俊が九州探題として赴任すると、芦北地域もその様相をやや変えてくる。人吉城主相良前頼を拠点とした幕府軍今川満範が永和七年(1376)六月芦北地域の攻略を開始し、田浦・二見城を、ついで佐敷城を攻略し、津奈木・湯浦・水俣地域をも配下にし、のち宮内大輔三雄を派遣し(「禰寝文書」)、今川氏の軍事力地盤とした。しかるに弘和元年(1381)六月に菊池城が陥落し、懷良親王が八代に逃亡するという状況下で、相良前頼は北朝に叛意して征西將軍のもとに馳参した。その功績により、弘和三年(1383)四月十四日の「征西將軍令旨」(「相良家文書」176号)で、

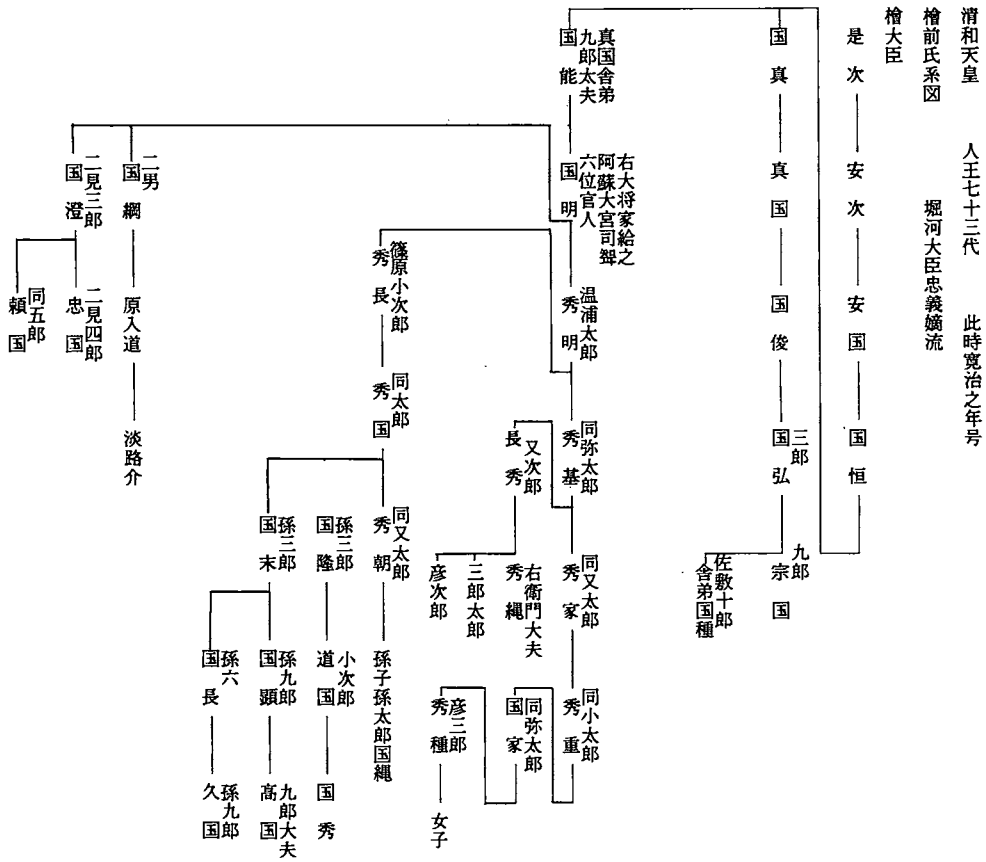
可馳参之由被聞食了、尤以神妙、仍玖麻郡内并葦北庄之事領掌不可有相違者、
依征西將軍寢仰、執達如件

右の令旨は元中二年(1385)十月十日の後龜山天皇論旨(同文書180号)で確認されたもので、相良前頼が初めて新恩地として芦北庄を知行領掌することとなった。その結果、二見・津奈木・湯浦・佐敷・水俣城は、再度南朝地盤として相良氏支配下で行動した(「禰寝文書」)。従って南北朝期の所領支配関係は、菊池氏の地頭職→幕府今川了俊支配→相良前頼知行地と変遷した。但し二見・田浦地域の実際的支配権は八代名和氏に属した可能性が強いといえよう。

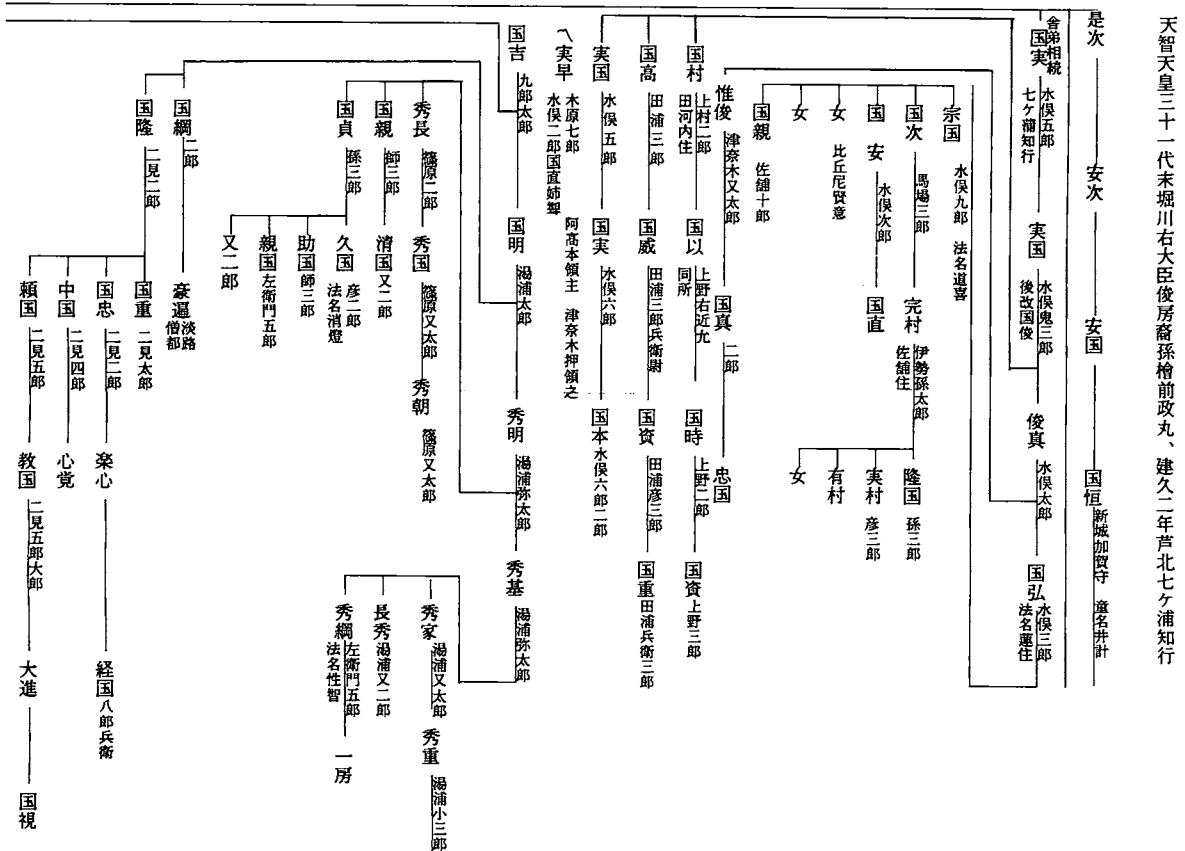
次に、当時の城及び城領主をみると、城名として、湯浦秀基城(「相良家文書」162号)、湯浦城(「牛屎文書」元中四年九月廿六日山内元清軍忠状案)、二見城(「禰寝文書」永和二年七月十六日今川満範書状)、水俣城(「禰寝文書」至徳二年四月廿八日宮内三雄書状)、田浦城、佐敷城(「犬童文書」『熊本県史料中世篇第四卷』所収)、津奈木城(?) (「禰寝文書」至徳二年二月九日宮内三雄書状)、久多良木城(「武雄神社文書」明徳二年九月武雄神社大宮司跡代新兵衛尉軍忠状)の存置が認められるので、その設置時期は不明にしても、いわゆる「芦北七浦」の各浦を拠点にして山城が築かれていたと考えられる。

次にその城領主・在地土豪について検討すると、まず水俣氏について一つの手懸りをうる。薩摩国牛屎院(現鹿児島県大口市)の篠原氏についての研究(五味克夫氏「薩摩国御家人牛屎・篠原氏について」)によると、「篠原文書并系図」所収史料によって、建武四年(1339)二月十日檜前ひのくま(篠原)国尚の「篠原一族交名注文」に、「同(篠原)水俣弥十郎国友」の名前がみえる。即ち水俣氏は薩摩牛屎院篠原氏一族で、檜前氏に出自をもつことを示している。さらに篠原氏系図(別掲)をみると、

篠原氏系圖



田浦系圖



国真流で国弘の次男に佐敷十郎国種、国能流の国明の子に温浦太郎秀明がみられ、佐敷家・湯浦家も篠原一族であることを明白にしている。この系図に非常に類似しているのが「田浦系図」(「藻塩草」所収)(別掲)である。「田浦系図」の「実国」は「篠原系図」の「真国」である。「田浦系図」は水俣家の初代を「国実」とし、国実の二男国村から田河内に住居する上野氏、三男国高から田浦に住居する田浦氏、水俣俊真の次男惟俊から津奈木氏が分出したことを伝えている。いまこの両系図を併考すると、水俣氏から田河内上野氏・田浦氏・佐敷氏・津奈木氏を分出したこと、及び篠原国吉から湯浦氏を分出したことが判明する。さらに南北朝期の永和三年(1377)十月廿八日の今川了俊への「一揆神水契状案」(「禰寝文書」501号)をみると、61名の城主・国人層の連署者中に「水俣藏人太夫武宗」、「佐敷代備前権守國頭」、「田浦因幡守國家」、「湯浦代彈正忠俊宗」、「口黒代兵庫允國家」、「久多羅木左京亮國貞」の6名の芦北の城主・国人層がみられる。この6名のうち4名には別掲の系図にみられたように、各名前前に「国」の字を冠して一族であることを示しているが、それと共に、口黒・久多良木城主層がみられる。口黒城代兵庫允國家は、「篠原系図」にみえる温浦氏の四代目「弥太郎國家」^(湯)とも思われるが、明確でない。久多良木城國貞は、温浦秀明の三子「孫三郎國貞」と同一人物であろうと比定されるので、温浦家から十四世紀中頃に分家分出した城主層ではないかと考えられる。さらに後述する二見城主藺田氏も「篠原藺田孫六國道申軍忠事」(「篠原文書」暦応五年九月)と記すように、篠原氏の一族であるし、また前掲の「田浦系図」にも湯浦国明の三男国隆から二見氏が分家分出したことを伝えている。

このようにみると、芦北七浦に拠地をかまえる各城主は、いずれも薩摩牛屎院の篠原氏一族で、その分家分出の時期は関係史料から推定すると、水俣氏が10世紀初中期頃、湯浦氏が13世紀初中期頃、津奈木氏が13世紀中末期、佐敷氏が14世紀初頃、田浦氏と田河内上野氏が湯浦氏とほぼ同時期頃、口黒氏と久多良木城主(愛甲氏)が14世紀初頃、二見城藺田氏が14世紀初頃に分家分出し、七浦の各城主として土地名を氏姓にして独立したが、しかし彼ら一族は各々の名前に「国」を冠することで同一血族としての同族団意識をもとに「芦北衆」^(久)として一体的一揆的な政治軍事行動をしたといえよう。

以上の城主・国人衆の他に史料上でみられるものに、「日奈子」氏(「阿蘇文書」122号)がみられるが、恐らく日奈久田河内城の園田氏一族ではなかろうか。また佐敷越中守(「志岐文書」)、及び北朝相良氏に味方した「湯浦四郎次郎」(「相良家文書」161号)、今川了俊に味方した「水俣藏人」(「禰寝文書」590号)が挙げられるが、詳細は不明である。

(二)

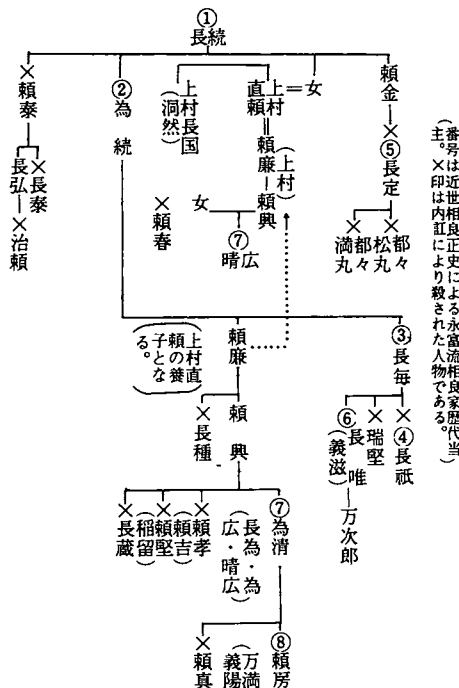
前述したように、南北朝末期の弘和三年(1383)以降、相良前頼が芦北地域の知行権を有したが、その後の室町期は明細をえないが、相良氏が伝領した形跡が強い。但し八代に接する日奈久・二見地域、及び水俣地域はなお服属しえず、前者は八代名和氏の勢力下に、後者は水俣氏の勢力下にあったと思われる。そのためであろうか、長祿四年(1460)十月廿六日、相良長統は守護菊池為邦から

肥後國葦北郡事、守先例之旨、可有領知之状如件 (「相良家文書」195号)

と、葦北部一円の領知安堵を「先例」によってうけ、同年十一月八日にはかねて係争地の日奈久・二見を獲得し(「相良家文書」199号)水俣地域も服属させ(「深水文書」)、芦北郡一円支配を名実共に確立した。その後文明十六年(1484)に名和氏の本拠八代を手中にしたが、明応八年(1499)には奪回されて相良為統は人吉に退却することとなり、芦北地域の所領支配権も放棄し、かわって名和氏が支配することとなったといわれている。その様相については全く不明である。しかしその後、永正元年(1504)に相良氏は再び八代を手中にし、名和氏を宇土に退陣させて芦北地域の支配を奪回し、以後は戦国大名相良氏の枢要なる地盤となった。

しかるに戦国大名の領主権者としての地位確立をめぐる、相良家の内紛が展開された。大永四年(1524)から享祿三年(1530)にわたる第一次内紛、弘治・永祿年間の第二次内紛は、芦北地域でも城領主・国人土豪層の交替を余儀なくした。「八代日記」によってその間の顛末をみると、次の通りである(系図参照)。まず大永五年正月六日、人吉城主相良長祇は、長統の長子頼金の子長定から追放されて水俣で自害するはめとなり、替って長定が人吉城主となった。この様子を見た長祇の庶兄長唯(義滋)と瑞堅は長定の追放を画策した。長定は大永六年五月、止むなく芦北地域の直接統轄者犬童長廣と共に八代に退去し、ついで翌七年八月に津奈木城に退去した。長唯はさらに長定攻略のために兵を派遣し、翌享祿元年(1528)三月に田浦城を攻め、ついで翌二年七月六日に佐敷城、十一月十九日に湯浦城を攻めて地頭犬童又三郎・同美作父子を津奈木城に追い、翌三年正月廿六日に津奈木城を陥落させて津奈木三郎を生害させ、翌廿七日に津奈木左近・犬童又三郎父子を八代中島にて誅殺し、長唯(義滋)自身も水俣城に入城した。ここに犬童氏一族及びその支持者津奈木氏勢力は芦北郡から一掃され、新に長唯の重臣が各城に「地頭」として入城し、旧来の城主・国人土豪層の勢力は淘汰された。

当時における城領主・国人の様態をみると、八代に近接する二見・田浦・久多良木・市之瀬城では、園田・田浦・愛甲・



相良氏系図
(服部氏論文による)

(番号は近世相良正史による永富流相良家歴代当主。×印は内証により殺された人物である)

一之瀬氏の篠原氏一族に系譜をもつ城主・国人が重代相伝し、自立的な軍事行動をとっていた。長祿四年(1460)の相良長統の芦北方面進出では、園田主計允・田浦・愛甲氏及び二見南城の南氏が相良氏と同盟の立場をとり、相良長統も二見城の仕立て方と共に、田浦・愛甲方に堅固な城郭修築を依頼している(「相良家文書」194号)。ついで相良長唯と長定の内紛では、園田刑部少輔・同内匠允は長唯方に、田浦安芸守は長定に加担し、結果的には、田浦氏は大永七年・享祿元年の二回の攻撃を受け、天文三年(1534)には相良長唯(義滋)に服属することとなった。天文四年には園田美作守が宇土への使者となり、永祿三年の相良頼房の御祝儀の御腰寄役には園田右馬助と又九郎がなるように重臣的地位についた。この二見園田・田浦・久多良木愛甲氏は「方角衆」「組中」として一揆的な軍事行動をとるが、また各々が「一手衆」として、園田・田浦・一之瀬・久多良木(愛甲)衆として単独に「衆」行動をとった。これらの「衆」の内部は、例えば園田氏では帯刀允・同右衛佐の両「おとな」衆のもとに「小名字中」を結成し、さらに「小名字中」が一揆して「寄合中」を構成するというように、血縁的同族団の一揆体制をとって軍事行動をし、さらに日奈久南城の南氏、久多良木城愛甲氏と共に行動する体形であった(「相良家文書」496号)。田浦氏では田浦三郎・同弥太六(「同文書」652)、また田浦東市丞がみられるので、このメンバーが中核的小土豪であったろうと思われる。

一方、芦北南部地域は、前述の様に相良長唯(義滋)が旧国人的城領主層を一掃し、各城に相良氏重臣が「地頭」として入城した。弘治三年(1557)四月に久木野鶴平城を造築し、ついで七月には久木野中尾城を攻略して久木野氏を服属させた。また水俣城は永祿二年(1559)に菱刈氏から請取り(「八代日記」)、天正初年には深水宗方を城主(地頭)とした。津奈木城主は永祿期に東霜台(尾張守)、ついで深水宗方、天正期に相良頼貞(人吉城主義陽の弟)、佐敷城主は西肥前守、湯浦城主は犬童丹後守であったと伝えている。これに対し旧城主層及び小土豪層は、各城の「地頭」のもとに統轄されて「佐敷衆」・「湯浦衆」・「津奈木衆」・「水俣衆」と呼ばれて、一揆的な軍事行動をとるとともに、「芦北衆」として地域的に結合させられ、「方角衆」として行動をした。しかしその内部は、かつての城主・国人を中心とする血縁同族団的結合が漸次崩壊しつつあった。例えば、天文期には津奈木右近允・田浦甚三郎・左近允は八代城下に在住して番役をつとめ(「八代日記」)在地性をなくしている。また「津奈木地下衆」は、東右衛門佐・瀬助兵衛尉・塩津留主計丞の被官として鶴田外記丞の他14人が所属しているが、津奈木一族は全く見られないというように、一方では津奈木氏の勢力が淘汰され、八代城集住制と兵農分離策を受け、国人領主的地位や村落支配者の地位から転化し、地侍的地位になりつつあったのではないかと考えられる。

ところで、天正九年八月(1581)の島津氏の水俣城総攻撃は、相良氏の戦国大名に終止符を打つこととなると共に、翌十年には芦北地域及び城領地も島津氏の統治下にはいった。『上井覚兼日記』(『大日本古記録』)によってその統治状況をみると、「地頭」-「衆中」体制をとったようで、湯之浦地頭に二階堂安房介(天正十二年十二月三日項)、佐敷地頭に宮原景種(天正十一年九月二日項)、水俣地頭に古墻大炊大夫(天正十二年十月廿六日項)、日奈古「噯」に鎌田源三郎(天正三年壬八月九日項)が任命され、それぞれに島津軍衆が配置された。また検地が施行されたのち、所領の一部は島津家臣に配分されたようで、例えば本田刑部少輔は湯之浦に十町歩宛行われた。これに対し旧国人士豪層の動向は不明であるが、例えば田浦氏・久多良木愛甲氏にみられるように、島津氏のもとに臣従を希望したようで、その「衆」の構成員も、比奈古・田之浦・久多良木・佐敷・湯之浦・津奈木衆、または「七浦」衆(水俣・津奈木・湯浦・佐敷・田浦・日奈古・久多良木)として軍役に課されて出動した。天正九年十二月の隈庄甲斐氏攻撃のときの着到には、水俣一族からは水俣掃部助・同源太郎同虎松丸の三名と田浦藤兵衛尉と久木野太郎・久木野駿河守が名をつらねていた。また「津奈木より水主六人」と記すように、島津軍の水主衆として動員され兵船をも徴発された。

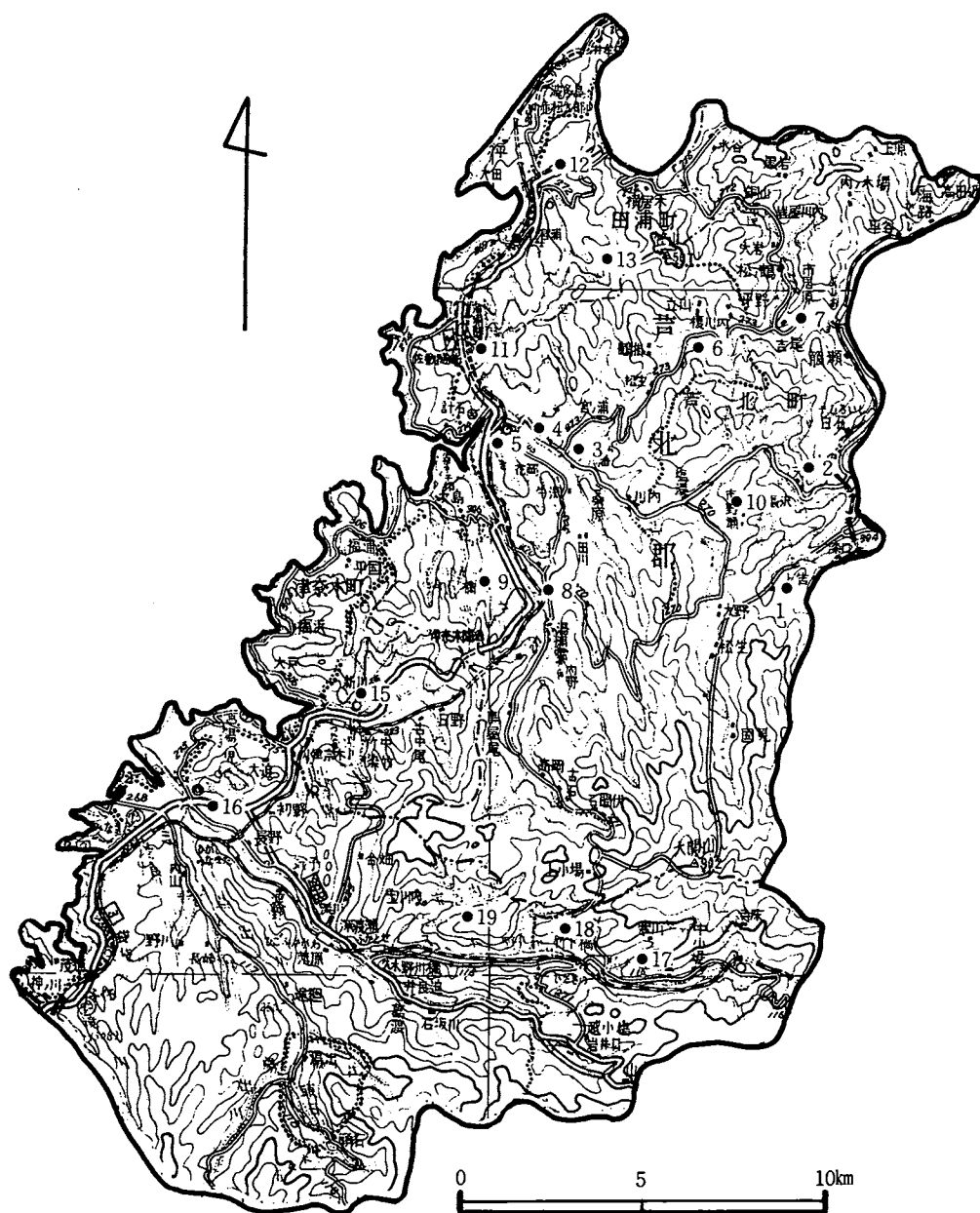
しかるに、この島津氏政策がいまだ確立しない天正十五年(1587)には、豊臣秀吉が九州統一策をすすめて、島津氏を服属させたため、島津氏の芦北支配は僅かで終止符をうつと共に、芦北郡も近世の統一政策下に位置付けられた。秀吉は天正十五年六月二日に肥後一國の領主として佐々成政を任命したが、それに先立つ五月晦日に球磨郡は相良長毎に、また五月廿

五日に水俣・津奈木城とその地域一帯は深水三河守宗方に託し（「水俣深水文書」『新編葦北沼革史』所収）、三河守には求麻郡24町の外に芦北郡水俣に55町、津奈木に18町の所領を新知として宛行つて、佐々成政の領主支配権の範囲から除外した。その後、佐々成政は検地を強行的に施行したために国衆一揆を惹起し、翌十六年閏五月には加藤清正と小西行長が肥後半国宛の新領主として入国した。芦北郡は加藤清正の所領とされ、「肥後国領知方目録」（「加藤清正所蔵文書」）では6960石余の検地所領高とされている。さらに、加藤清正は、統治策として、田浦口黒城・佐敷城・津奈木城・水俣城を存置して、田浦城には田浦氏を（のちに佐敷城に吸収）、佐敷城には長尾善政、のちに加藤重次を、津奈木城には平野長時・小代下総守・竹内吉兵衛・森本儀太夫を、水俣城には中村将監を城代として派遣して統治したと、『肥後国誌』などは主張している。しかしこれらは俗説にすぎないもので、私の研究（「九州の豊臣蔵人地の構造と機能（二）—肥後葦北地域の検討」）によると、次の通りである。まず水俣・津奈木両城であるが、相良領として深水宗方を任命したものではなく、豊臣秀吉の直轄領として、その代官兼城代として深水宗方を任命したものである。従つて水俣郷（七ヶ村）と津奈木郷（四ヶ村）の計4024石余は豊臣蔵入地で、水俣・津奈木城の番城城糧米であった。そして天正十八年八月頃から相良氏が城代となり、ついで文禄二年頃には寺澤志摩守が代官兼城代となり、その後慶長三年には寺澤氏の大名領となり、ついで翌四年三月に小西氏領となったが、慶長五年（1600）の関ヶ原役後は加藤清正領となった。かくして始めて『肥後国誌』がとくように、加藤清正の重臣が津奈木・水俣城に派遣されたのである。次に口黒田浦城であるが、田浦氏が代々居城したとするが、非常に疑問ある。田浦氏は、天正十六年九月四日の秀吉朱印状（「加藤清正家所蔵文書」）によると、「八代三十衆」に田浦甚五郎・田浦早右衛門・田浦市丞三人が含まれ、各々20石・25石・35石の少禄知行で加藤清正に「合宿」（＝与力）することが命ぜられている程で、城代的な家格は認められない。むしろ庄屋的地位に墮したのではなからうか。同様に日奈久千代永城主桑原氏も「八代三十衆」として桑原作右衛門・桑原縫殿助の二名が各々75石・25石の小禄者にされているにすぎない。そして田浦城は佐敷城代加藤与左衛門の管轄におかれ、存置されなかったのではないかと推定される。次に佐敷城であるが、これは従来の説の通りで文禄元年には加藤重次が城代となり、その守番に井上善左衛門・井上弥一郎・安田弥右衛門の三人の武将があたり、慶長五年の関ヶ原役後にも活躍した。当時の佐敷城の統轄範囲は、日奈久・二見・久多良木地方に遡及んだ（「岡部文書」）もので、中世以来の日奈久田河内城・二見城・二見南城・久多良木城・田浦城の存続は不必要となった。加藤重次はなお慶長十六年七月迄佐敷城代をつとめたが、元和元年の一国一城令で佐敷城は破却された。以上の様に、豊臣期の天正十六年から慶長五年迄の所領支配と城主・城代については、『肥後国誌』が説く見解は否定的であつて、むしろ慶長五年以降に適用さるべき説である。しかしそこでも確実な点は、慶長十六年には佐敷城代に加藤与左衛門、水俣城代に中村将監が配置された点である（『加藤清正伝』所収「家来の者共の書立の事」）。天正十五年の秀吉の書状によると、佐敷城は「責難」い程の堅固な普請がされ、「高城」と称しているが、その堅牢な構造がそのまま加藤氏に引継がれていたのであろう。その後、慶長十七年六月廿六日に江戸幕府の命令で水俣城は破却され（「家忠日記僧補」）、家臣は妻子共に熊本城下に集住することとなった。また佐敷城は元和元年の一国一城令で破却されることとなった。かくして芦北地域には城郭も城主も全く存在しないこととなった。

これに対し旧来の城領主・小土豪衆はどうなつたであろうか。例えば水俣城主深水氏は水俣陣内村にて高百石を宛行われて水俣姓を名乗ることを許可され、細川期には150石となり庄屋役、ついで湯浦・津奈木・水俣・久木野の惣庄屋役となった。田浦氏は関ヶ原役後に高10石を田浦村に宛行われ、のち細川期に150石宛行われ、田浦・佐敷の惣庄屋となった。また彼らに従属していた家臣も兵農分離策で帰農、あるいは浪人化することとなったが、細川期には戦国期以来の由緒ある者として、「地侍」に登用された。その数は肥後国中で最も多教で、寛永十六年には411人を数える。なかでも特に御目見が出来る有力な「地侍」が30名を数えるが、その居住地と数は佐敷村7名、水俣村3名（水俣・東・深水氏）、湯浦村4名（平野・村田・井上・長野）、田浦村3名（桑原・大原・田浦）、二見村2名（大原・桑原）、津奈木村1名（井寺）と、旧城主層一族が有力「地侍」層となつて、肥後国境の軍備体制の一つに位置付けられた。

（森山恒雄）

芦北地区



- | | |
|-----------|---------|
| 1 高尾城 | 11 伏木城 |
| 2 才木城 | 12 田浦城 |
| 3 兼丸城 | 13 猪山城 |
| 4 佐敷東の城 | 14 口黒城 |
| 5 佐敷城 | 15 津奈木城 |
| 6 大尼田城 | 16 水俣城 |
| 7 吉尾城 | 17 中尾城 |
| 8 野角(宮崎)城 | 18 久木野城 |
| 9 小野嶽城 | 19 宝川内城 |
| 10 市野瀬城 | |

芦 北 郡

高尾城 (芦北郡芦北町大字^{つげ}告字城平)

『芦北町誌』によれば城主は相良家臣、酒井藏人氏勝という。

城跡は桑沢見地区^{くわぞみ}にあつて「城平」という字名を残す山稜(標高425.6m・北西側麓の才所集落よりの比高約235m)に位置する。

山頂部分は南北方向に主軸を呈する幅15m・長さ100mに及ぶ長円形状の平坦地(杉山)となつており、地元の人はこちらを「城」もしくは「城のとっぺん」と称する。平坦地は全体的にはっきりしないが、北側寄りの長さ26m分についてはある程度人工的な削平を認める事が出来る。山頂部分の周辺は急傾斜となる東側部分を除く三方に階段状地形が重なるが、西側部分の一隅に地元の人「城の水溜めに使用したのではないか」と語る幅2~3m、長さ10m程の溝が存在する。藪龍雄氏によれば、50年程前までは、「城のとっぺん」でも木場打ちを行つていた^{こぼ}という事で、耕作中には陶器や播鉢等の破片が出土したという。また、城跡には「金の茶ガマ」の埋藏伝説や「白米洗馬」伝説もある。登城道もある。登城道は俗に「へさか越」と称される程の急傾斜で登るに容易でない。^(注1)

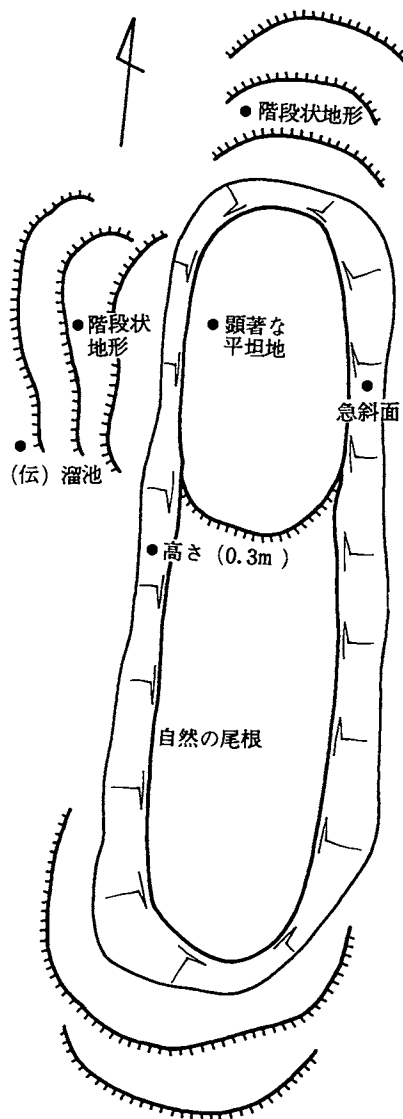
集落の南はずれの谷間に「倉屋敷」という小名を残す所がある。^(注2)

なお、城跡は怪奇伝承の地として地元の人から恐れられている。^(注3)

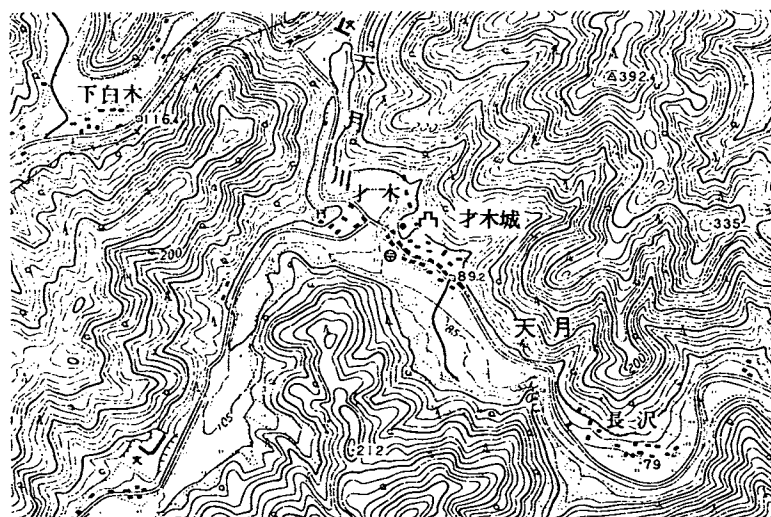
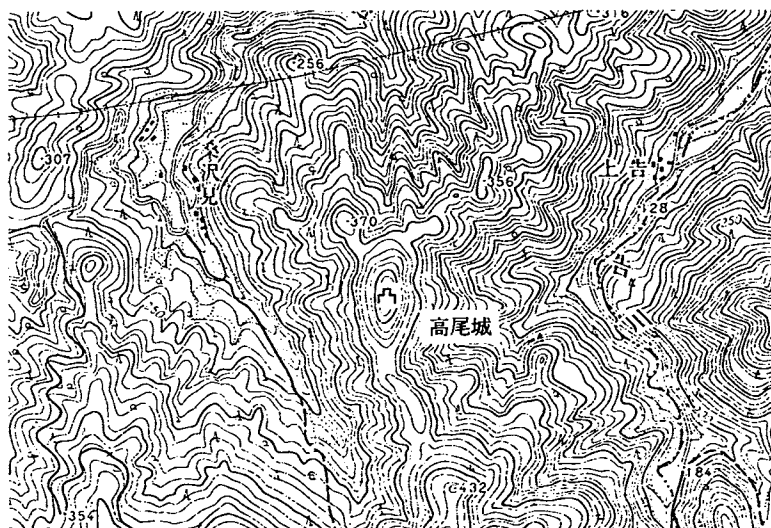
(注1) 埋藏地には目印として篠芽竹が植えてあると伝わる。

(注2) はって登るという意味である。

(注3) 足音がしたり、風もないのに突然、竹が倒れる事があるという。



高尾城 見取図



才木城 (天月城) (芦北郡芦北町大字天月)

『肥後国誌』に「城主不分明一説相良家臣安永兵部左衛門ト伝」という記事が見える。

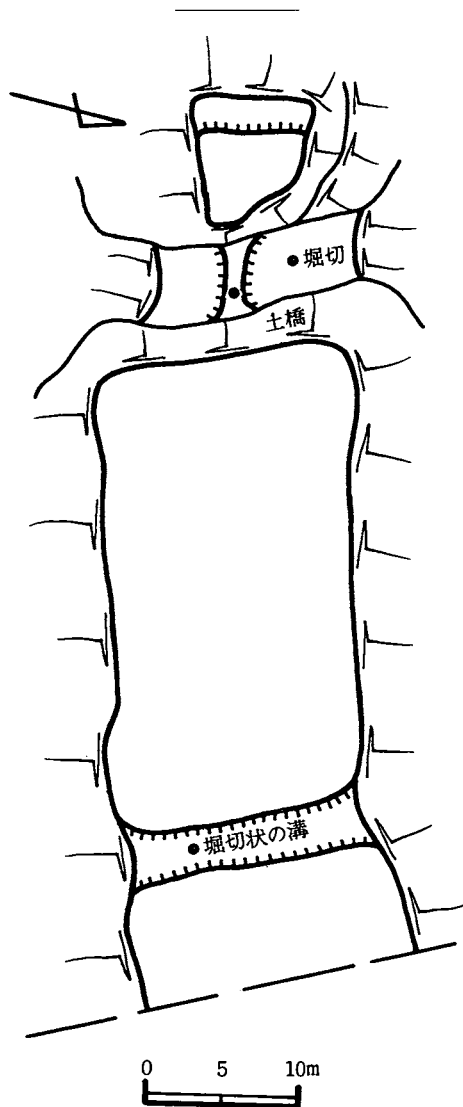
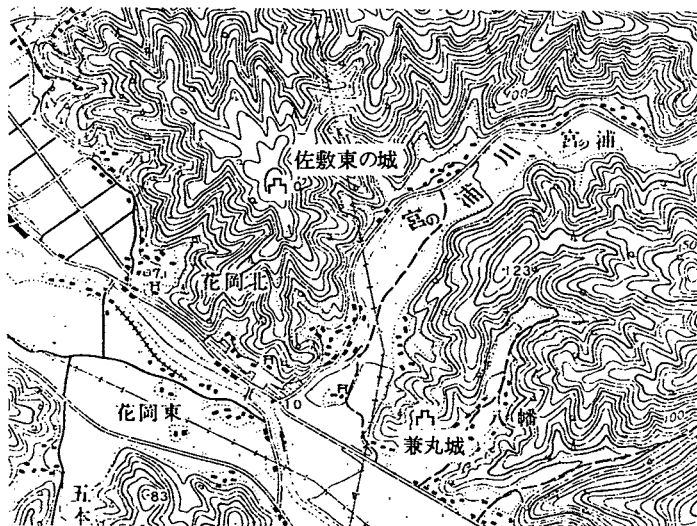
才木集落内に古城という小名を残す丘陵地末端部(標高103.8m・南側裾部よりの比高7~8m)があり城跡ではないかと考えられる。しかし丘陵地の背面は帯状形の平坦地(南北方向に主軸を呈し、長径50m・短径11m)となっているものの全面墓地である上に、北側の鞍部も削平されて民家の敷地となっているため、遺構は何も観察されない。

(注1) 崖面側に「荒神さん」が祀られている。

兼丸城 (芦北郡芦北町大字八幡)

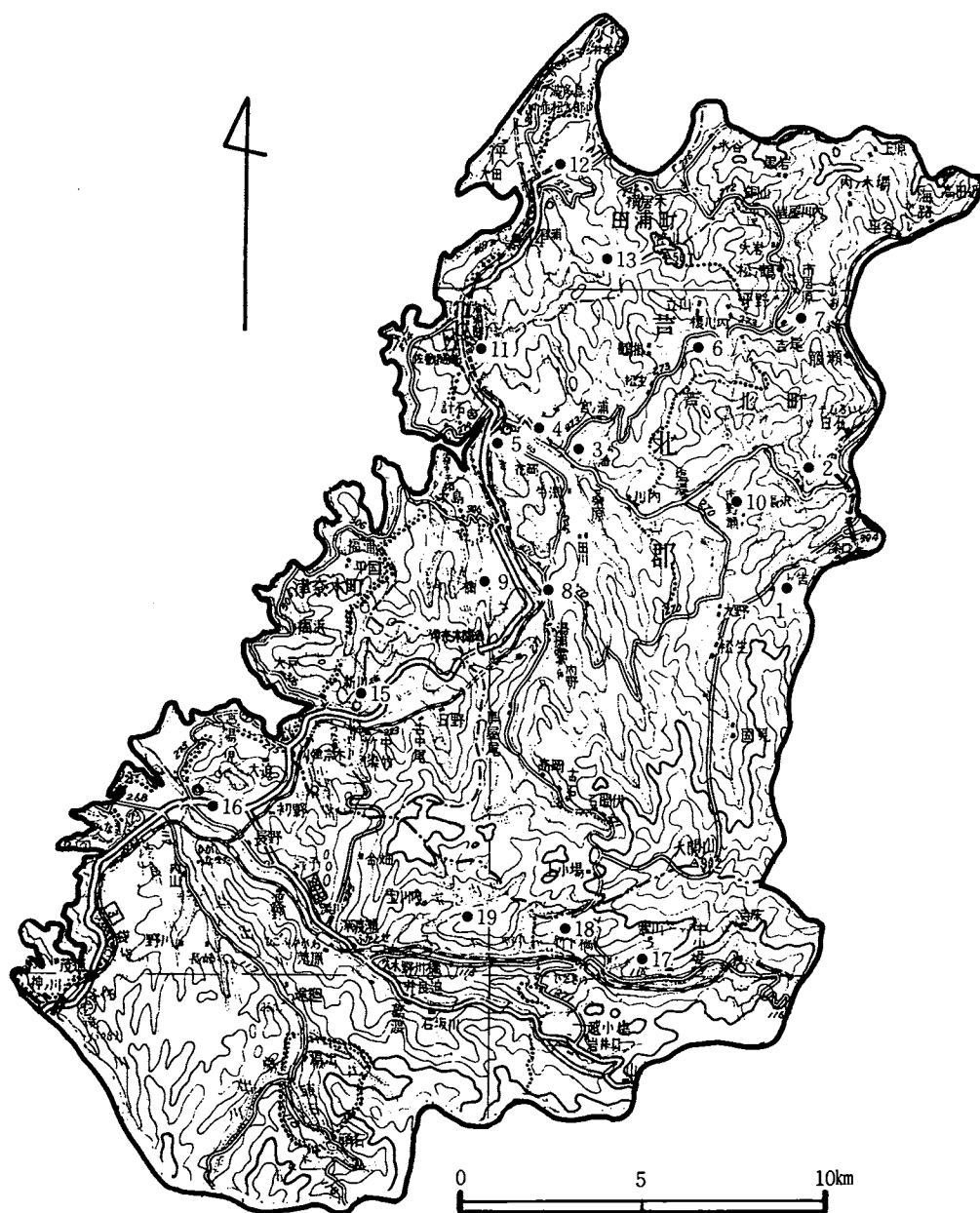
城主不分明。八幡地区の兼丸に「城山」称される山稜末端部(標高70m・西側水田面よりの比高約60m)があり城跡の存在が考えられる。すなわち山頂部分は北西方向と南西方向に主軸を呈する折れ曲った尾根となっており、南西側の主軸部分に堀切(底幅4.5m)によって仕切られた小規模な台形状の平坦地(杉山、北東側上辺2m・南西側下辺8m・幅8.5m)が観察されるがこれは0.2~0.3mの段差によってさらに2区画に細分されており、その用途について考える時・興味深いものがある。堀切には土橋(幅1.1m、長さ3m)が存在する。堀切を挟む北東側部分の尾根は一応帯状の平坦地(長径30m・短径10m)となつてはいるが北東方向へ、ゆるやかに傾斜しているのではっきりしたものとは言い難い。わずかに北東端において幅3m・深さ0.5~0.7mの堀切状の溝を認めるにすぎない。一方北西側の主軸部分については自然地形そのものである。鞍部は20m近い落差を示す。中尾鎌作氏(71才)の御示唆によれば、昭和初期頃の「城山」は甘藷畑であり、耕作中に釉のかかった甕の口縁部や鉄砲玉等が多数出土したという。また、集落の南はずれに位置する兼丸八幡宮境内には、かつて五輪搭の火輪部のみが数多く散在していたが、土留等に使用されて姿を消したらしい。

(注1) 城山の南西方向約450mに位置する通称岩瀬(標高151.3m)から城山に鉄砲が打ち込まれたという伝承も残っているが、芦北は西南戦争の激戦地だった事から、鉄砲玉と城山の結びつきについては疑問が残る。



兼丸城 略測図

芦北地区



- | | |
|-----------|---------|
| 1 高尾城 | 11 伏木城 |
| 2 才木城 | 12 田浦城 |
| 3 兼丸城 | 13 猪山城 |
| 4 佐敷東の城 | 14 口黒城 |
| 5 佐敷城 | 15 津奈木城 |
| 6 大尼田城 | 16 水俣城 |
| 7 吉尾城 | 17 中尾城 |
| 8 野角(宮崎)城 | 18 久木野城 |
| 9 小野嶽城 | 19 宝川内城 |
| 10 市野瀬城 | |

見られるように極めて整形された切り石で、山頂部分に祀られた山王三所大権現の石垣と類似する。山王三所大権現は宝暦十年（1760年）に建立されているので、石垣もその建立前後のものではなかろうか。今後検討の余地を残すものと言えよう。

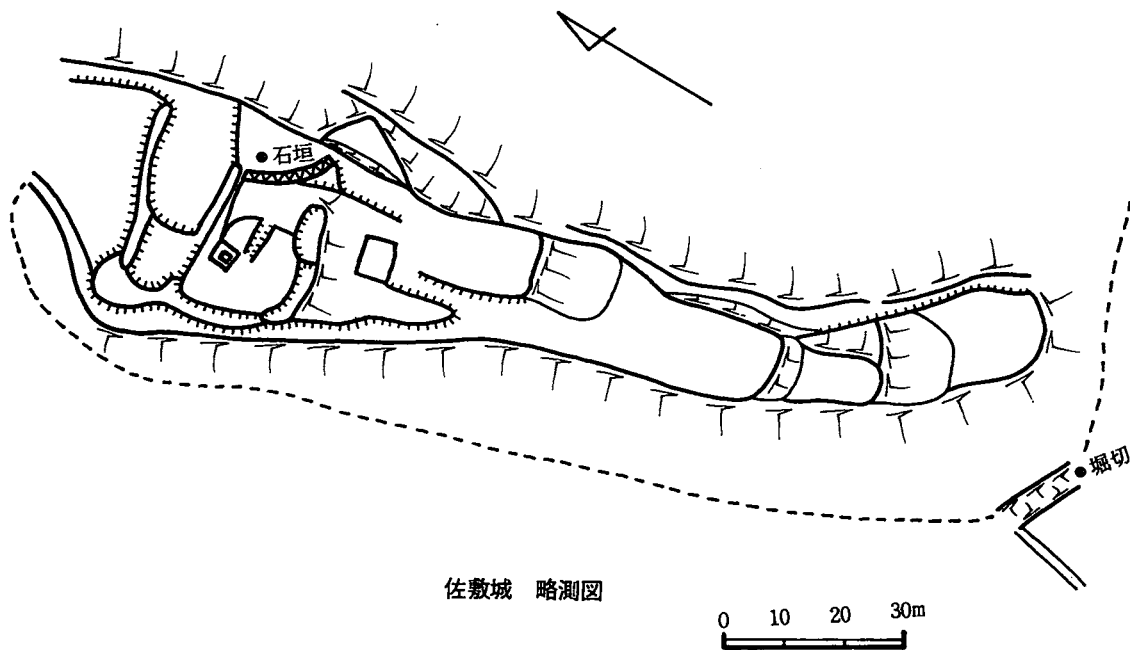
一方、南東側の尾根筋には合計4段の階段状地形とも言うべき平坦部が重なっているが、各平坦部の壁面は、いずれもゆるやかな傾斜となっており、人の手は加わっていない。なお、山頂直下の平坦部からは、かつて布目瓦が出土したという。

(注1) 北西方向に下る尾根筋には、遺構は存在しない。

「城山」の周辺には、「射陽」「城戸口」「構口」という城跡に関連する地名が残っており、自然の水濠の役目を果たす、佐敷川と湯浦川も流れている。

(注1) 参照・『芦北町誌』

(注2) いずれも字図にはその名は見られない。



大尼田城 (大泥田城)

(芦北郡芦北町大字大尼田)

城主は相良家臣、大仁田玄蕃 (肥後玄蕃) という。

大尼田集落の北西方向に聳える山稜 (標高457m・集落よりの比高約330m) が城跡と伝わる。山頂部分は東西方向に主軸を呈する長い尾根となっているものの、全面、足の踏み場もない様に石灰岩が散乱しており、とうてい城跡の存在は考えられないが、南側山腹中を南東方向に走る



谷間の一隅(標高約250m)には城主が居住したと伝わる洞穴をはじめとして、周辺一帯に「城下」のじょうした小名が残っており興味深い。

上畑よしえ氏(78歳)御示唆によれば城下については、今から20~30年前木場打ちの際に、陶器片・スラッグ・播鉢片が多数出土したという。また、同地内には湧水池も存在する事から、この地になんらかの生活が営まれた可能性は大きい。城跡には「白米洗馬」伝説や南関町の坂下城跡に伝わる「カブラヤ伝説」と同様な言い伝えがある。

集落内においても、「坊主墓」と称される6基の五輪塔や、武士と馬を埋葬したという塚が残っている。なお、住民の言葉には俗にいう相良言葉の名残(注1)があり、その昔、大尼田の地と球磨郡との結びつきをうかがわせる。(注2)

(注1) うち一基分については

本為石塔ニ 口外芳永禪定門 天正七年己十二月 敬白

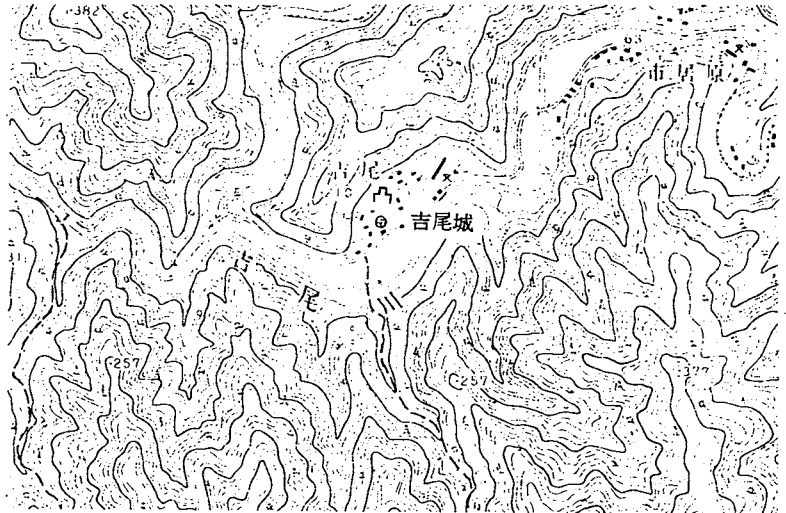
の銘を有する。

(注2) 溝部建一氏の御示唆によるもので語尾のイントネーションが尻上りになる事に特色がある。

吉尾城 (芦北郡芦北町大字吉尾)

永禄年間(1558~70年)頃から相良家臣、吉尾大学とその子塩山浅之助の在城を見たという。

谷間に開けた吉尾集落内には、城跡と伝えられる様なものはないが、集落で最も高い所に位置する吉尾健男氏宅一帯を「園」と称し、またその南側正面にあたる吉川吉水氏宅に「きど」という小名が残る。山稜斜面部に築かれた墓地の最上段には安政六年9月(1859年)に建立された吉尾大学の墓碑(注1)が祀られており、吉尾氏は「吉尾氏の先祖は八代から敗走してきた武将でいったん才木城に居を構えたが、後にその子孫が吉尾にはいり吉尾姓を名乗った」と伝えられる。この事から集落に館の類(注2)が存在した可能性は大きい。



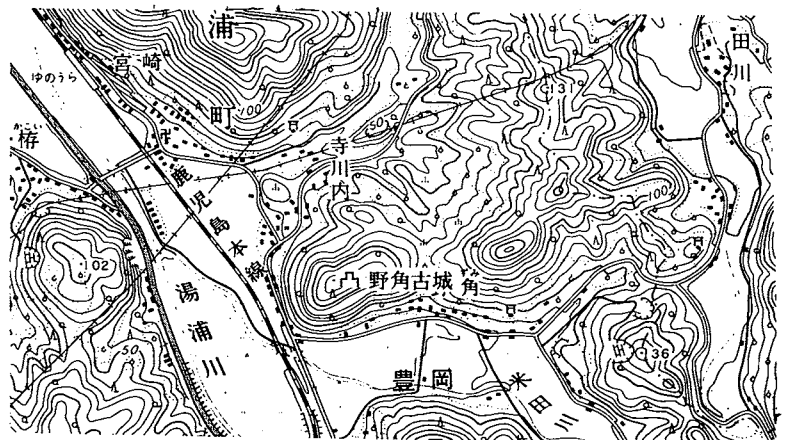
(注1) 永禄六年(1563年)吉尾大学 三月廿五日の銘がある。住民は現在も吉尾大学を顕彰して、この墓より上には墓地を設けない。

(注2) 吉本友次郎氏(82歳)の御示唆による。

野角古城 (宮崎城・野角岳城)

(芦北郡芦北町大字宮崎)

城主は相良家臣、犬童丹波守というが、鬼塚七右衛門守の在城説もある『球磨郡誌』に「享禄二年(1529年)城主犬童又三郎重良父子は相良家臣上村兵庫允長種に攻められて津奈木城にのがれた」という記事が見える。一方、鬼塚氏については『肥後国誌』に「文禄元年(1592年)佐敷一乱ノ時八代城ニ向ヒシ賊ノ部将東郷甚右衛門ヲ田浦ニテ討取シ鬼塚飛弾アリ田浦助



野角古城 略測図

兵衛ニ属シタル者ナレハ芦北郡ノ郷士ナルベシ、然ラバ飛弾ハ鬼塚七右衛門ノ後裔ナルベキカ」と記述されている。

野角集落の北西側に位置する山稜末端部（標高127m・集落よりの比高約110m）が城跡と伝わる。山頂部分は南西方向に主軸を呈する長い尾根（長さ約230m・幅70m）となっているが、全面、歩行に困難な程の荒地で遺構の観察は無理である。しかし、北東側の鞍部については、山稜斜面に地元の人が「空堀」と称する大規模な二重堀が存在する。底幅は内側で4.5m、外側で5.5mを計り、間に幅4mの土塁を付随する。

二重堀の総延長は160mにも及ぶものである。この他、さらにその外側に1条の小規模な空堀（長さ30m・底幅3.5m）を認める事が出来る。丁重太郎氏(80歳)の御示唆によれば、城跡はかつて黄檭山だったそうで、山頂部分から瓦片や播鉢の破片が出土したという。また集落内の宮島政春氏宅裏の井戸には、「城の井戸」という呼称が残る。

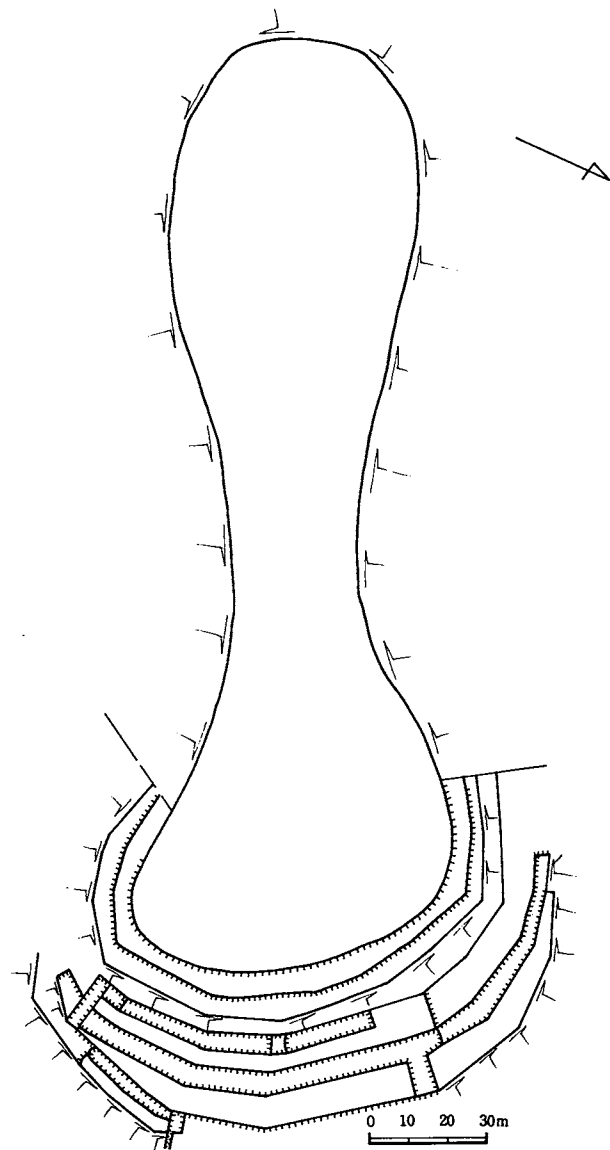
一方、城跡の北東側麓の寺川内の集落には、(伝)犬童丹波守の墓や、(伝)家臣団の墓が残っているが、いずれも五輪塔で、丹波守の墓については天正九年(1581年)の年号が読める。

宮島嘉吉氏(82歳)の御示唆によれば、戦前は、寺川内で毎年10月5日に城主祭りが行われていたという。城は島津氏によって攻略されたと伝わっており、落城の際に逃亡先の豊岡の地で子供とともに淵に身を投げた常陸御前(丹波守の妻)の悲話もある。

(注1) 明治33年に建立された丹波守の供養塔を中心に左右に2基の五輪塔が並ぶ。

(注2) 2基とも丹波守の墓という。それぞれに「寔天正九年^辛四月十一日敬白」「寔天正九」の銘が見える。

(注3) (伝)常陸御前の墓は南ナイロン会社付近にある。



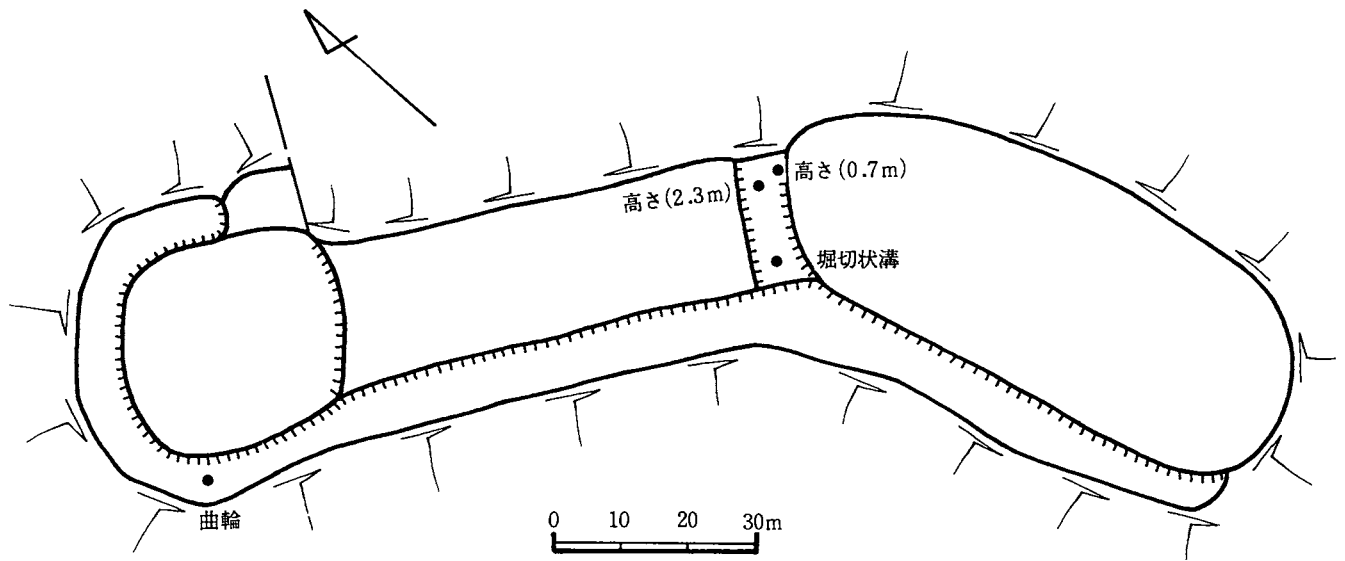
野角(宮崎)城 略測図

小野嶽城(小篠城・湯浦野嶽城) (芦北郡芦北町大字湯浦)

『古城考』によれば城主は島津家臣、二階堂阿波というが、蜂須賀系図は、「永享・長祿の頃(1430~1460年)名和氏家臣の山城守家氏とその弟和泉守義親の兄弟が湯浦城主となった」と伝える。さらに『球磨郡誌』には「正平七年(1352年)武家方の将一色孫三郎範親、相良孫次郎等をひきいて芦北の湯浦太郎秀基の城を攻落す」と記述されている。

梶集落の南東側に位置する山稜末端部(標高101m・集落よりの比高約90m)が城跡と伝わる。山頂部分は北西方向と南北方向に主軸を呈する折れ曲った尾根となっており三区画からなる平坦地が存在する。また、平坦地より約1.5~2.5m下った所には幅7m程の曲輪が平坦地の西側と北側を取り巻く様に走るが、この曲輪は外側に向って一様に傾斜しており平坦面をなすものではない。南側鞍部は50m近い落差となる。一方、『古城考』にも「山上水有り」と記されている様に、現在

も湧水が多い。椿義光氏の御示唆によれば「現在は多少減少したが、以前は城跡からパイプを引いて飲料水にしていた人もいる程豊富な湧水であった」という。地元の人は山の地形から城跡を「亀城」とも称する。



水野嶽城 略測図

市野瀬城

(芦北郡芦北町大字市野瀬)

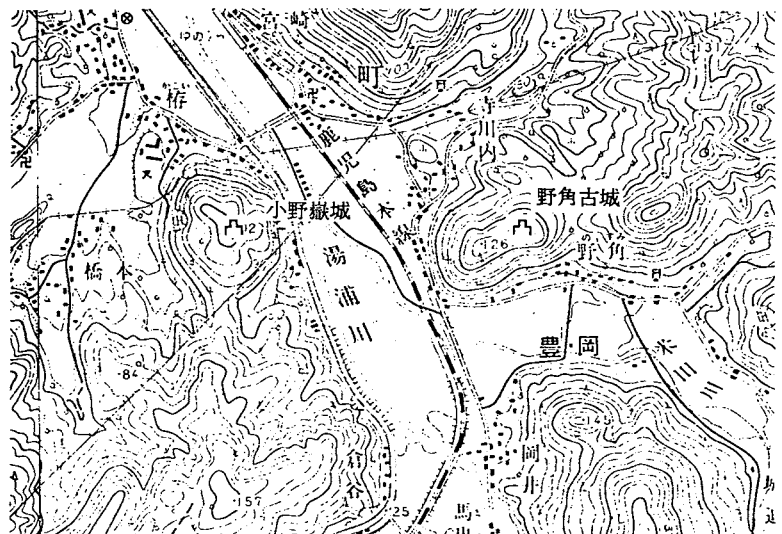
城主は相良家臣、市野瀬與三左衛門宗氏という。

市野瀬集落の南端に阿蘇神社が祀られているが、神社とその周辺の畑地に「城」・「高城」の小名が残っており、地元の人はこの一帯を城跡と伝える。

しかし、近年当該地は採石場に関連した土捨て場となり、地形的変化をかなり受けたという。

したがって城跡に関連ある様な遺構は何も観察出来ない。

(注1) 水上元男氏の御示唆による。

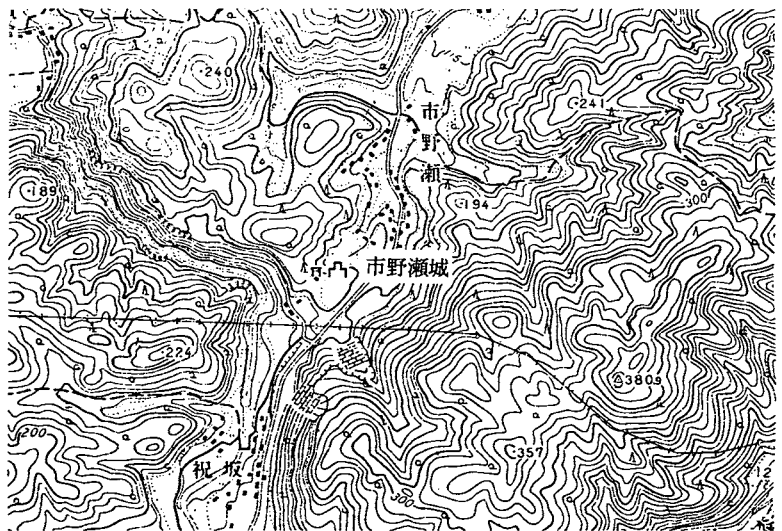


伏木氏城

(芦北郡芦北町大字伏木氏)

『肥後国誌』によれば城主は相良家臣、矢野信濃守という。『芦北町誌』には「元龜年中(1570年頃)には相良の家臣矢野美濃守が在城し、次の天正、文禄の頃には矢野六太夫が在城した」と記述されている。

伏木氏集落内には城跡に関する伝承はない。しかし墓地の一隅には明治15年に矢野義孝氏によって建立された美濃守の



墓や、五輪塔の残欠（空風輪7・火輪4）が観察される。また、伏木氏という地名にあわせて集落の住民には矢野姓が多いことが特色としてあげられる。

館の類が存在した可能性はある。

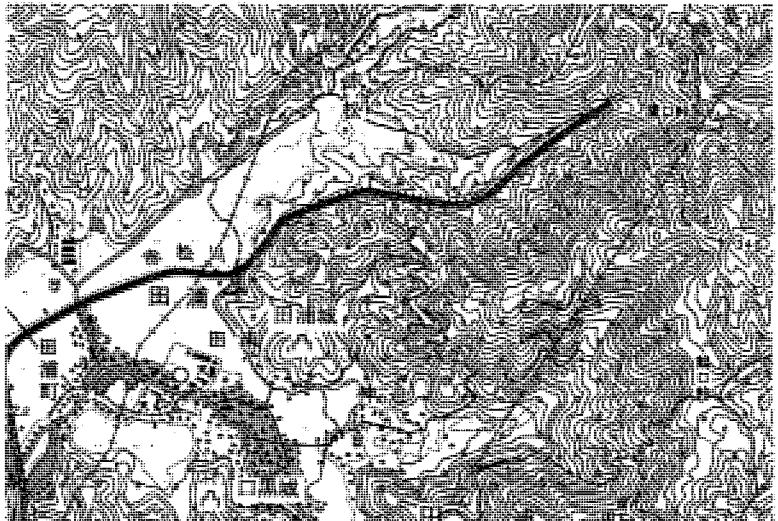
たのうら 田浦城

（芦北郡田浦町大字田浦字古城）

建武年間（1334～36）の城主は、名和家臣、進實春という。

城跡は、赤松峠越の旧街道沿いにおいて、「古城」の字名を残す带状形（山稜末端部（標高227.8m・街道よりの比高約90m））に位置する。南西方向に主軸を呈する尾根には、大小二つの小高い頂が連なっており、地元（の人は、高い方を「鶴の城」、低い方（標高220m）を「亀の城」と称する。呼称の由来は頂の形状によるという。しかし現在は2箇所とも柑橘園となっており城跡としての遺構は確認できない。

城跡の東側麓を伝蔵川と称する小川が流れている。



いのやま 猪山城（大木山門城）

（芦北郡田浦町大字田浦字小群川内）

城主は田浦俊国という。田浦氏、数代の居城であったらしい。田浦町で最古の城といわれている。

城跡は大木場街道沿いにおいて、「猪山城」と称される带状形（山稜末端部（標高90m・北側麓の街道面よりの比高約55m））に位置する。南北に主軸をとる尾根には二連の小高い頂が存在するが全面柑橘園となっているために、遺構の確認は出来ない。南側の鞍部についても同様である。

城跡の西側麓には340㎡程の溜池が存在するが、この池については城の外堀に利用されたともいわれている。なお、大正年間に城跡からは、馬の轡と、硯が出土したという。

くろぐら 黒城（芦北郡田浦町大字田浦字山下）

田浦氏（檜前政磨の子孫）代々の居城という。

城跡は、字・山下の地内において北側一帯に田浦の町並を望む山稜末端部（標高50m）に位置する。南北に主軸を呈する尾根は柑橘園となっており城跡としての遺構は認められないが、麓には城の米倉跡と伝えられる所があり、その前後の集落には「倉の前」・「倉の後」の小名が残っている。米倉跡は檜前氏屋敷跡でもあるという。この他、「とのんばば（殿の馬場）」と称される所もある。

城跡の麓を抜ける旧街道は芦北町伏木氏に通じ、一方は田浦町の中央を横切り、田浦城跡へ至る。

口黒西の城 (芦北郡田浦町) (所在地不明)

『古城考』には「相良氏領分の時、此石城を築き、番勢を入置定れたる城主はなし」と記されている。城跡は『肥後国誌』の「同所西砦ノ迹」という記事から、口黒城に関連した砦跡である事がわかるが、現在、地元には城跡に関する伝承はなく、その所在地については不明である。

(注1) 西黒城という意味をなす

津奈木城 (芦北郡津奈木町大字岩城字大手)

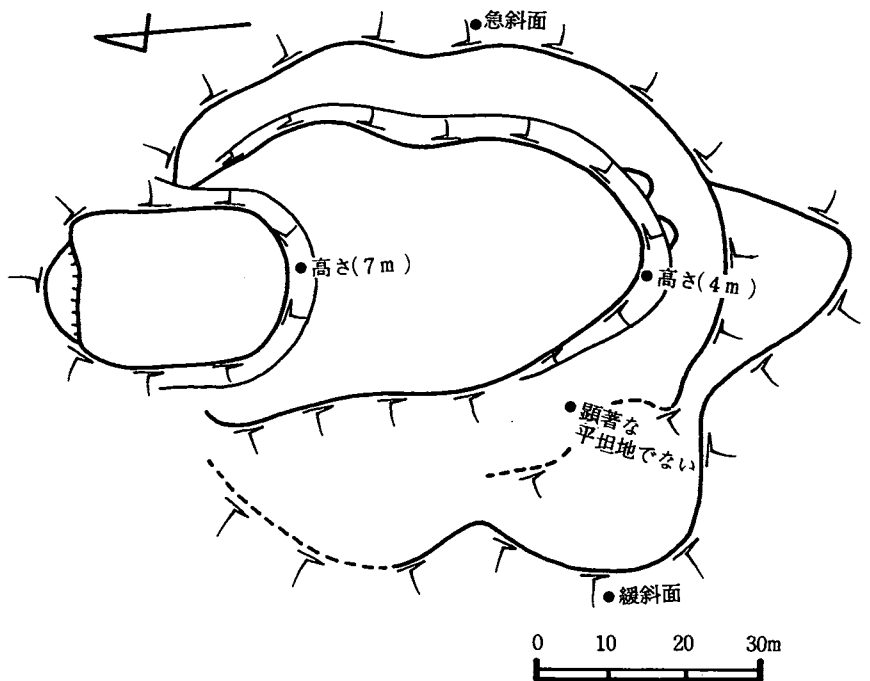
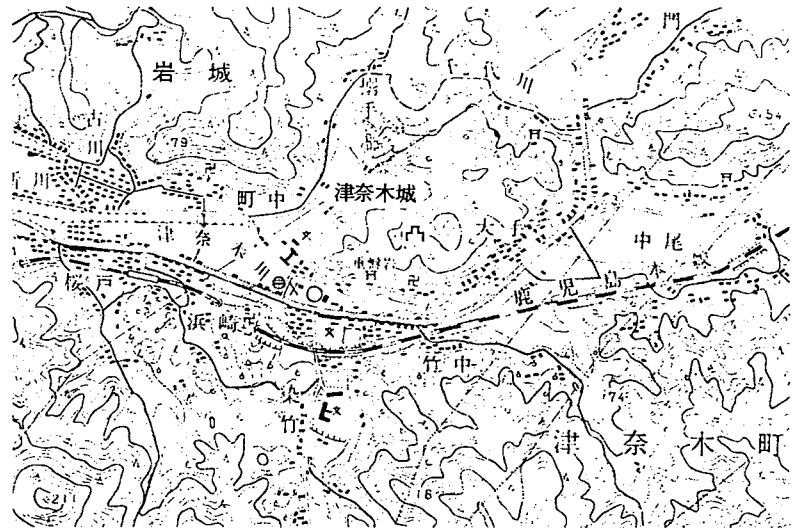
『古城考』によれば、建武年間(1334年)に村上顯興が築城したもので、加悦泰行等の家臣を城主として守らせたという。さらに応仁元年(1467年)以降、芦北の地が相良氏の支配下となり、城主も相良氏一族の深水宗方や相良晴高が在城する事となった。その後、加藤清正の時代になると、城代が派遣されて城を守ったようである。島津氏の侵入に備えたものであろう。城代に平野長時、竹内屋次、森本一友らの名前が見られる。

城跡は津奈木町の中央部にあって、「城山」と称される山稜に位置する。当該地は、いわゆる女山的なもので、いくつもの峰が連なっているが、最高峰(標高131m)とその北東側の峰(標高110m)に、城跡関連遺構を認める事が出来る。

最高峰は、楕円形状の平坦地(長径27m・短径20m)となっており、さらにこれより南側へ7m下った尾根筋にも舌状形の平坦地(長径40m・短径30m)が観察される。この他、奇岩山(標高120m)に続く西側の尾根筋に幅3m・長さ6~7mの堀切が存在する。

一方、北東側の峰も、長形状の平坦地(長径22m・短径18m)を中心に、これより西側へ2m程下った所にも舌状形の平坦地(長径25m・短径14~19m)が認められる。この他、山稜斜面には、幾段にも重なる階段状地形がある。

ところで、この二つの峰を結ぶ尾根筋には幅3~4mの堀切が存在していたが、新道路工事のために完全に埋没した。なお、この尾根筋の北西側と南東側の谷間に「搦手」と「大手」の字名が残っており興味深い。とくに「大手」の谷間には、城門があったと伝えられている。門に付属すると見られる金具を所有する人もいるらしいが、今回の調査では確認出来な



津奈木城 略測図(最高所の峰)

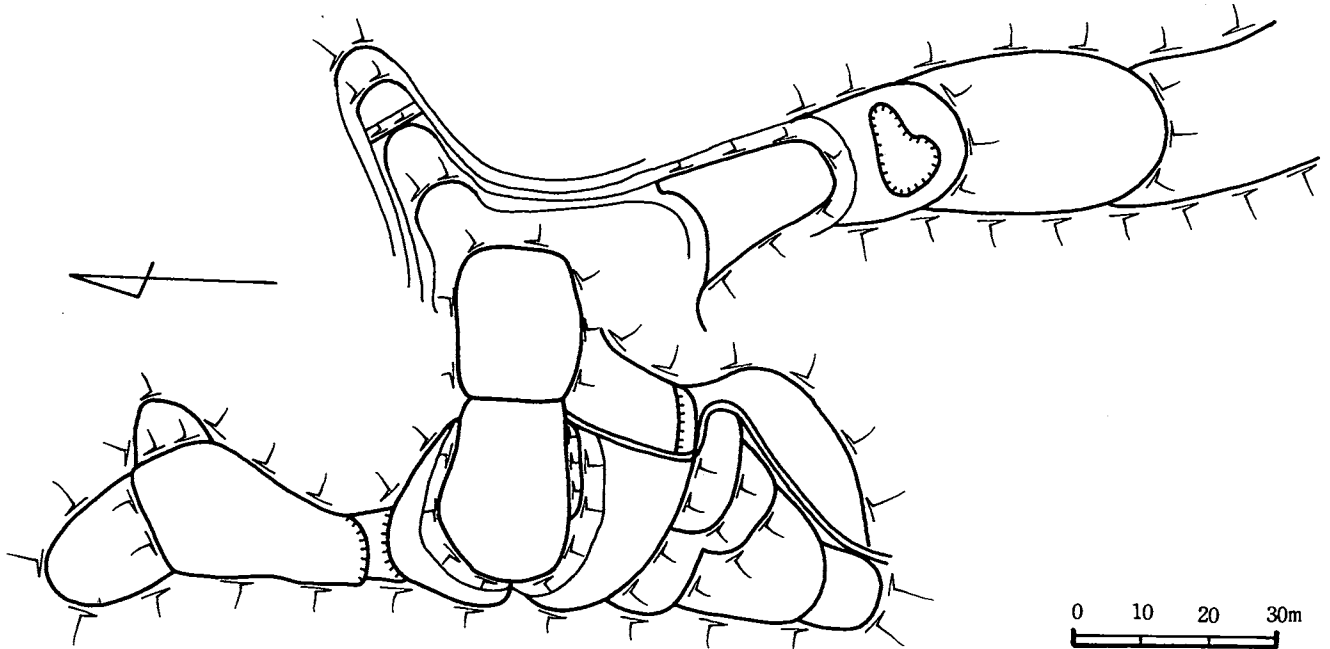
かった。

「城山」の麓には、千代川と津奈木川が流れている。

(注1) 「大手」の谷間に、(伝)深水宗方とその子 宗満の墓(板碑)がある。その他に同地には梵字釈迦三尊を刻んだ板碑1基・刻字不明の板碑2基・五輪塔の残欠部がある。板碑はいずれも南面を向いている。

(注2) テレビ塔と広告塔が建っている。

(注3) 同地には石だたみの道が残っている。



津奈木城 略測図(北東側の峰)

赤崎城

(芦北郡津奈木町)(所在地不明)

『古城考』に、「津奈木赤崎村にあり、城主不分明」という記事が見えるが、現在、不知火海に面した赤崎の地(津奈木町大字浜)には城跡に関する伝承はなく、「出口」という字名を有する程度である。

水俣城

(陣内城・陣の城)

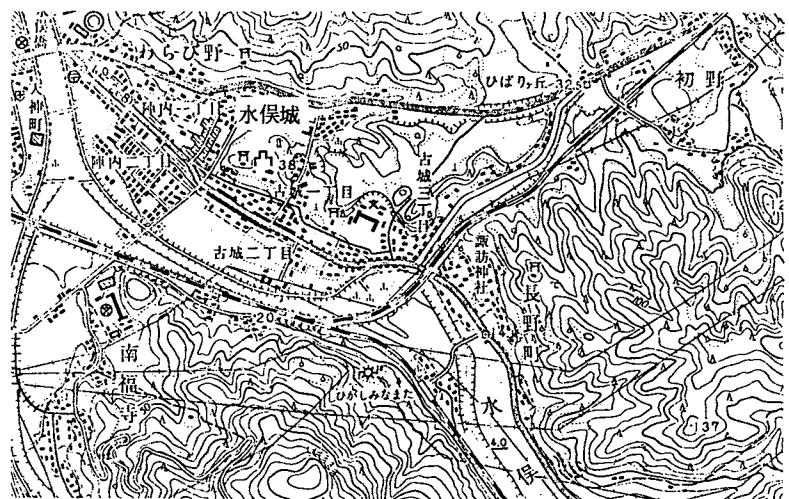
(水俣市陣内字古城)

『古城考』によれば、南北朝の頃には、名和氏家臣の本郷家久が居城したという。その後、当地が相良氏の統治下に入ると、相良家臣の深水宗方や、犬童頼安が城代を勤めたらしい。

なお、廃城期について地元では、慶長十七年(1612年)6月としており、最後の城主を中村将監と伝えている。

城跡は、水俣市のほぼ中心近く、現在、城山公園となっている独立丘陵地(標高30m・北西方向に主軸を呈し、長径350m、短径180m)に位置する。当該地は、大きく「古城」と「高城」に分かれているが、「古城」が本城で、ここからは城壁の石垣や瓦の破片が出土する。さらに東南隅には古井戸も残っているが、その内壁は石材で積み重ねられており深井戸である事は間違いない。現在は埋もれて浅くなっているが、地元の人の話では底に抜け穴が通じているという。一方、「高城」は「古城」の南東側に続く小山であるが、市の梅林となっており、遺構は何も観察されない。

概して、城跡の所在地は、水俣の市街地という条件下にあるために、ほとんど遺構は姿を止めていない。城跡の周囲を



めぐっていた堀も今では埋め立てられ、道路となっており、城の高石垣も明治22～23年頃の国道新設の折にほとんど取り壊されたという。

中尾城

(水俣市久木野大字古里字城平)

城主は、菱刈左兵衛というが、相良・島津の両氏いずれに属していたかは不明である。

城跡は寒川と久木野川の合流点に突き出した山稜末端部（標高349m・南側麓の有木集落よりの比高約140m）に位置しており、麓から見上げた山の形状から地元の人は「亀の城」と称する。

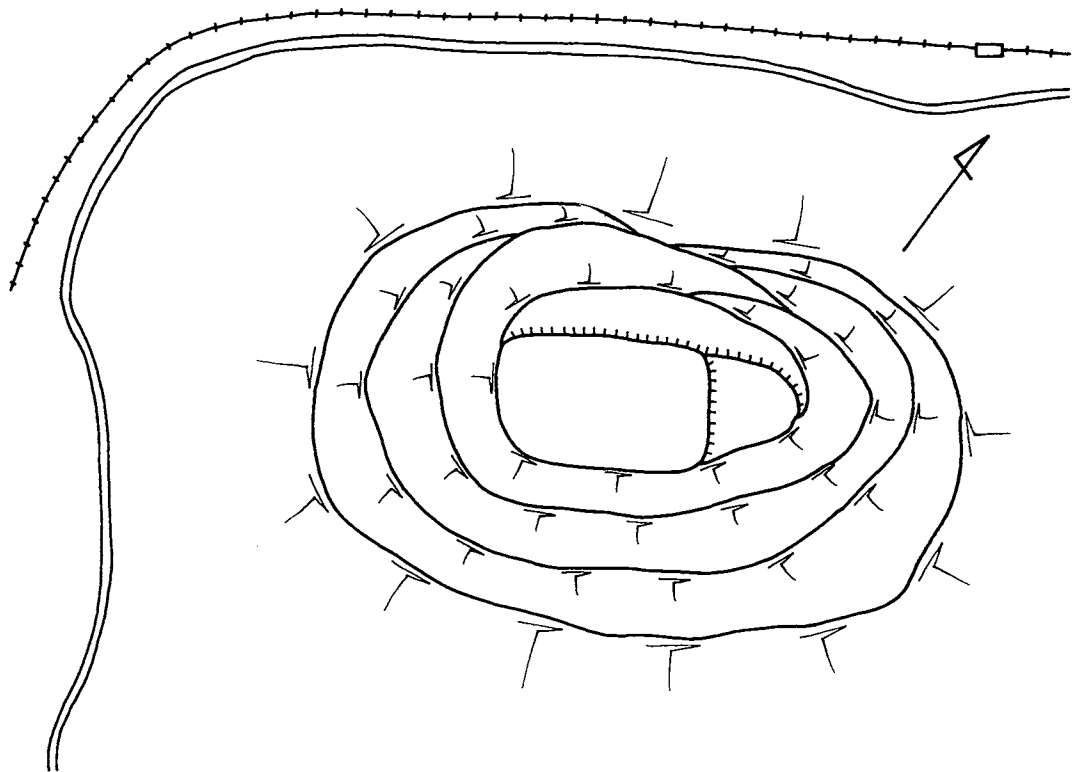
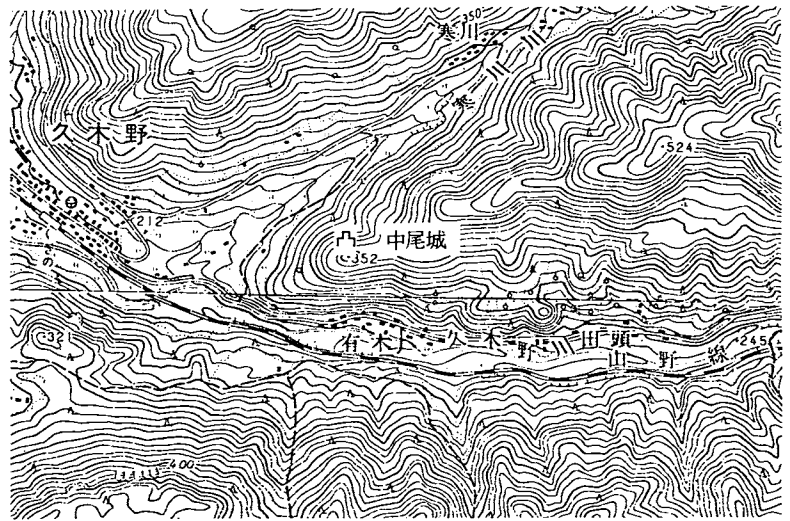
山頂部は長方形の平坦地（南西に主軸を呈し、長さ36m・幅21m）となっており、周辺斜面部には五～六段に及ぶ階段状地形が観察される。

「この階段状地形は当時、馬場として使用されたもの」と古老はいう。城跡からは挽臼と刀のつばが出土したとも伝わっている。

登城道は有水地区から、わずかに農道があるのみである。

久木野川につながるという濠跡に、城に利用したという大きな井戸跡が残っている。

有水地区には「陣屋」や「流れ矢橋」等の小名を残す一隅がある。



中尾城 見取図

久木野城（岩群城・岩峰城・鶴平城）

（水俣市久木野町大字熊平字金迫）

『古城考』に「俗説薩州より城を築き、勢を入置したとも云、また、久木野四郎と云者居城也、或説相良四郎と伝、また、相良駿河守頼雄居城と云、何れか不知是非」という記事が見える。また、『菊池軍記』には「天正七年（1579年）5月中旬、薩州より、新納武藏守忠元三千余騎にて肥後に乱入し、豊河内の城を責抜く、岩群という所に城郭を構えて相守る」とある。

久木野川と桜川の合流点に位置する山稜（標高416m・麓の鶴平集落よりの比高270m）が城跡と伝わる。山頂部分は東西に長い尾根となっているが、城跡に関連した遺構として西端部分の峰に長方形の平坦地（990㎡）があり、さらにその周辺の斜面部については、野面積みの石塁も若干、観察されるようである。当該地には老松が一本そびえて、いかにも往時の山城らしいたたずまいを見せている。遺構はこの範囲に限られるが、山稜斜面はいずれも急傾斜をなしており要害の地となっている。とくに北側部分は、その名も「地獄谷」と称される深谷へ続く断崖である。

城跡は種々の呼び名があるが、地元の人々は普通、「鶴平城」と称している。

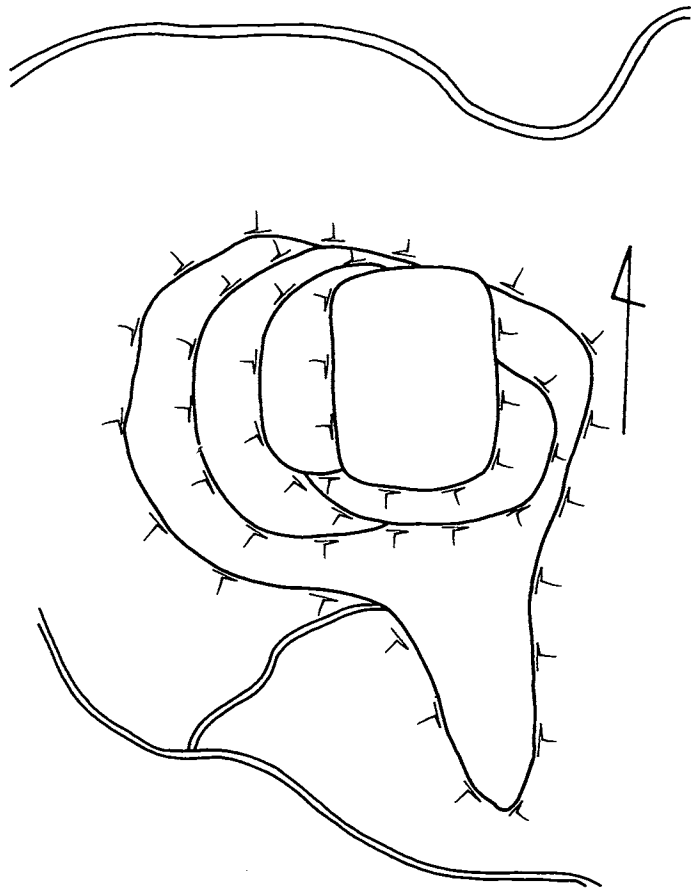
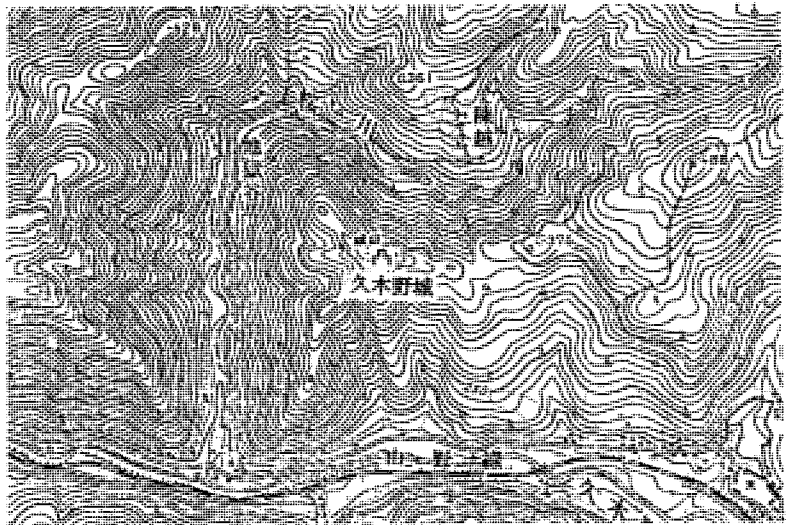
宝河内城（朴川内城）

（水俣市宝川内町大字市渡瀬字城平）

相良氏の砦であったという。天正七年（1579年）から八年にかけては相良家臣、東頼兼が居城していたらしい。

城跡は宝川内川と久木野川の合流地点にあつて「城平」の字名を残す山稜末端部（標高342m・北側麓の水田面よりの比高約250m）に位置している。山頂部分は東西に主軸を呈する160m程の細長い尾根となっており、東側寄りに方形の平坦地（南北20m、東西17m）が観察される。

尾根の西端部には見張台らしい岩場もあり、ここからは、久木野、水俣、湯浦方面へ通じる主要道路を一望する事がで

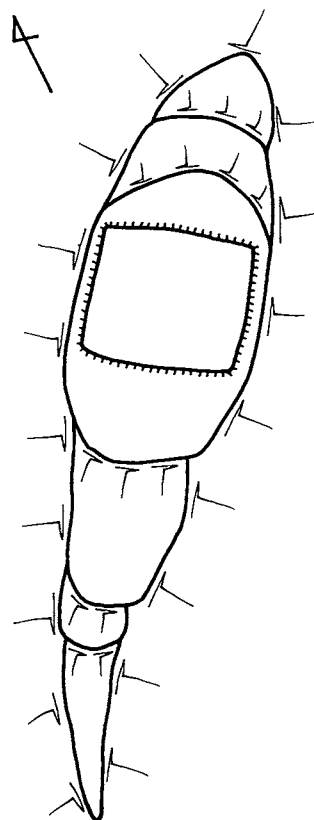
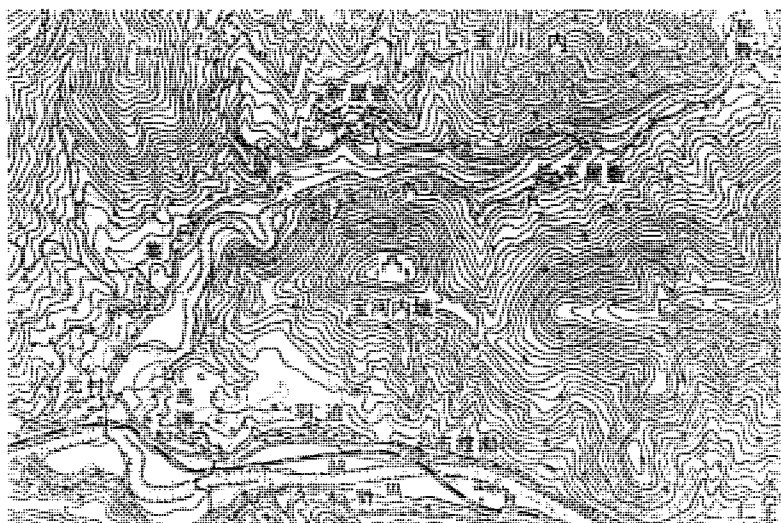


久木野城 見取図

きる。

山稜は東側鞍部に大きな迫がはいっており、全般的に峻険な傾斜面をなす要害の地である。宝川内の集落側は採石場が設けられその頂上部は、ほとんど垂直に近い絶壁となっている。

尾根一面には大小さまざまな岩石が散在しており「一朝有事の際は、これらの岩石を落して攻撃に備えた」と古老はいう。山稜東側斜面には矢竹となる篠芽竹の竹林地帯も見られる。天正年間、薩摩より侵入した新納忠元の軍との間に幾度となく戦が繰返されている事を考え合わせると興味深いものがある。城跡の西方に位置する白金山の「城観（字名）」は、新納氏の本陣跡と伝わっている。



宝河内城 見取図

球磨地区

1、鎌倉時代

源平内乱で九州の在地勢力は、ほとんど平家方についていたが、頼朝は御家人制とならぶその支配の一方の柱である国衙機構等旧来の統治機構の掌握をはたすため、張本の輩を除いてこれを安堵した。球磨でも木枝平河の平河氏が、一旦勘気を蒙りながらも文治三年(1187)には安堵されたのをはじめ、須恵荘の須恵氏、人吉荘の人吉氏・久米氏・合志氏など、いずれも本領を安堵されたものと見られる。そしてその上に多良木荘に相良頼景、人吉荘に同長頼が地頭職を給され、球磨の中世は、この相良氏が在地勢力を次第に従え領主的発展を遂げてゆく過程であった。

遠江の蓮華王院領相良荘を本貫とする東国武士相良氏が、球磨に所領を給され入部する事情については、長頼が元久二年(1205)畠山重忠を討った合戦の功によって、同じく蓮華王院領の人吉荘の地頭職を与えられたこと以外には、確実なことは全くわからない。頼景の入部等については、天文五年(1536)の沙弥洞然長状以下、後代の文献にいろいろな説明があるが、いずれも不確実でしかも作爲が多く、ここでは一切たち入らない。ただ最近松本寿三郎氏が、相良一族の下向の徴象が確認されるのが建治三年(1277)の相良西信(頼員)讓状であること、その頃から相良氏の在地に対する関心の著しい深まりが看取されることなどから、すくなくとも相良氏本宗の球磨下向は、蒙古襲来に伴う東国御家人の西遷であった、と推定した点は傾聴すべきであろう(「相良氏の球磨下向と多良木支配」—熊本県文化財調査報告22集。『蓮花寺跡・相良頼景館跡』)

本宗入部以前は代官派遣による支配であったろうが、それは鎌倉幕府の権威を背景に、平家方であったにもかかわらず安堵されたという負い目をもつ荘官である在地勢力を臣従させ、荘園機構を自らのものに換骨奪胎していった。人吉荘の場合、徳治二年(1307)預所が中央勢力である中原盛遠から在地勢力の平河師種に代ったことは、相良氏が在地勢力をほぼ完全に臣従させると共に、中央の荘園領主権を形骸化し、事実上人吉荘の掌握を果したことを示すものと見てよいであろう。

この間、多良木(上相良)では頼景のあとを長頼の二男頼氏がつぎ、頼宗—経頼と惣領支配が強固に維持されたのに対し、人吉(下相良)では、ほとんど数十町の名毎に一族に所領を分割し、各別に公事を負担する形をとり、ほとんど惣領なきがごとき状態であった。沙弥洞然長状をはじめ、後代の編纂物は、後述のごとく、南北朝期以降惣領となった下相良を継承した長統以後の永留(富)相良氏の支配を正当化するために、鎌倉時代以来下相良を惣領としているが、実はすくなくとも南北朝初期までは、惣領は上相良であったことは、松本寿三郎氏の指摘する通りと考えられる。それゆえにこそ鎌倉期の下相良が、惣領なき相続形態をとったともいえるのではないだろうか。

2、南北朝・室町時代

鎌倉幕府の倒壊によって、討幕に加わった相良氏は寛元二年(1243)から北条氏によって奪われていた人吉荘北方を回復し、下相良は惣領の上相良に匹敵するほどの力をもつにいたった。そして建武二年(1334)下相良の定頼は永吉荘を守護領として得た少貳頼尚に与して北朝方に転じ、南朝方の上相良の経頼と対立した。須恵・橘・永里・岡本・三池・奥野など、多良木周辺の国人は多く経頼に属し、当初は南朝方が優勢であった。しかし建武五年の永吉荘の山田城・木枝城の戦い以来形勢は逆転し、定頼は武家方から多良木の安堵も受けた。その後山田城・木枝城・人吉荘村山城・築地原等で経頼・祐長・伊藤八郎らと定頼・定長それに少貳頼尚の甥経尚らの合戦が続いたが、康永元—興国三年(1342)久米郷木原原の合戦で大敗した経頼は、本領安堵を条件に少貳頼尚の誘いに応じた。

貞和三—正平二年(1347)には、いわゆる「八代和談」が成立し、一旦頼尚は南朝側につき、定頼もこれに従った。しかし同五年には足利直冬が西下し、一色範氏と対立、定頼は一色範親を球磨に迎え直冬方・南朝方と対立した。経頼は須恵・橘氏らと共に南朝方に属し、暦応二—正平六年には、両者は永里村・深田城など球磨郡の所々で合戦した。さらに定頼は文和二—正平八年には、球磨・真幸で日向の伊東勢を敗り(目田河原合戦)、下相良の勢力は上相良を圧倒し、球磨郡の大半に加え、日向北郷・真幸・飢肥郷にもその勢力はおよんだ。この段階で定頼が相良氏本貫の国名を負う遠江守に任じられたことは、彼が事実上、相良氏の惣領となったことを象徴している。

しかし14世紀の後半、征西府の全盛時代を迎えるにおよび、永頼のあとをついだ前頼は、応安元年—正平二十三年(1368)

南朝方に歸し、球磨と芦北を安堵された。ただし多良木は経頼に返却させられた。前頼は明德四年（1393）都城で戦死したが、その跡を継ぐ前統は、定頼の晩年以來の島津氏との結びつきを強化し、薩摩山門郡350町も得て一段と惣領権を強化した。

前統の跡を幼主堯頼がつぐと、その隙に上相良の頼親が叛き、堯頼は薩摩菱刈にのがれ、頼親は人吉城に入った。しかし下相良の一族につながる山田永留（富）城主相良長統が決起し、頼親を追出し、自から人吉城に入った。文安五年（1448）五月のことである。そして八月には多良木鍋城で弟頼仙とともに挙兵した頼親をせん滅した。この内訌で久米・平河・須恵・岡本・永里などの国人が亡びた。いわゆる文安の内訌がこれである。

長統はその後薩摩牛屎院を手に入れ、長祿四年（1460）には、守護菊池爲邦から芦北をふくむ当知行の安堵を受け、さらに寛正六年（1465）には、内紛に苦しむ八代の名和顯忠を助け、その礼として高田郷350町を得た。

その子爲統は大内政弘に通じて幕府とつながり、大いにその権威を高めた。そして遂に文明十六年（1484）には、度々高田郷の回復をめざして反逆した顯忠を、天草の上津浦邦種らの協力を得て八代から追い出し、八代を支配下におくことに成功した。

3、戦国時代

爲統は明応二年（1493）七カ条の法度を定めた。いわゆる相良家法度の最初であり、戦国大名としての相良氏の発足を象徴するものであった。爲統は大内政弘・同義興との連繫を密にし、大いに威をふるい足利義種もしきりに爲統を招撫した。だが明応七年には菊池氏の内紛に乗じて豊福に進出して敗れ、同九年には八代を放棄し、八代には再び顯忠が入った。

しかし爲統の子長毎は、昨日の敵菊池能運と結び、永正元年（1504）二月八代を回復した。第二の相良家法度長毎法度はその後に出されたものである。その頃から肥後中央部では阿蘇氏を助ける形で大友氏の進出が顕著となっていく。

永正九年、長毎は嫡子長祇に家督を譲った。その際長統の嫡孫長定が叛乱を起し、一旦は人吉城に入った。しかし諸臣はこれに服せず、大永六年（1526）五月、長祇の庶兄長唯（義滋）がこれに代った。この内訌は前後六年にわたり（大永～享祿の内訌）、長唯は従兄の上村頼興の援けで勝利を得た。この事件で頼興の弟上村長種、長唯の庶兄相良瑞堅、犬童長広・同重安らが亡んだ。

この内訌を乗り切った長唯は、天文三年（1534）八代に鷹峯城を築き、以後その根拠を人吉から八代に移し、人吉には上村頼興が居城した。この後八代と人吉には、それぞれに相良氏に従う有力国人層による「老者」＝「年行」の組織がおかれ、相良氏の領国支配は二元的構造をとることになった。服部英雄氏は八代の老者が球磨から移されたものであることを明らかにし、相良氏の八代進出が、単に勢力の拡大によるのではなく、しばしば相良氏の家督をめぐる起る内訌が、家督を目指す勢力と、在地の年行層の相良氏による在地性否定の方向に対する不満とが結びついて起っていることから、球磨支配の内部矛盾の解決をそこに求めたものであったことを指摘している（『戦国相良氏の三郡支配』—『史学雑誌』86—9）。頼興の外舅にあたる沙弥洞然（相良長国）が、天文五年長唯の後嗣たることが予定されていた頼興の子晴広に捧げる形で、相良家の旧事を、頼親（親仙公）を下相良初代の長頼の嫡子とするなど、永留（富）相良氏の正当性を主張するものとして作らねばならなかったのもそのような事情から理解されることであろう。

だがその後もなお、この種の内訌はあとを絶たなかった。天文十四年（1545）には相良治頼、同二十一年には岡本頼春（洞然の子）が人吉で殺されている。いずれも危険な国人勢力の除去であった。この間長唯・晴広の領国支配はさらに進展し、天文二十四年には晴広は21カ条の法式を發布している。

ところが晴広の子頼房（義陽）が元服した翌年弘治三年（1557）のはじめ、晴広の時から八代に移っていた上村頼興が没した。これを契機に、晴広の弟たちの上村三兄弟の乱が起る。五月、頼吉（頼孝）らは上村城にたてこもり、三ヶ月の攻防の後、上村方の皆越・岡本（ここは頼春の没後頼興第四子稲留長蔵がついでいた）につづいて上村城も落ち、頼吉は真幸に落ちた。頼堅はすでに八代で殺されていた。この事件は人吉衆の不満から起ったものであったが、人吉でも八代でもしばらく動揺が続いた。とくに人吉では奉行の丸目兵庫頭頼美や湯前・久米も叛する有様で、永祿二年（1559）七月には上村頼吉の再来襲にまでいたった。ようやく九月に湯前・久米も亡ぼされた。

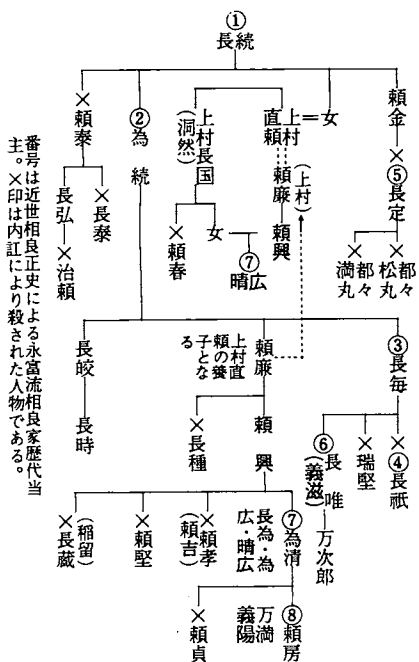
この事件は相良氏の球磨支配の弱さを露呈した。本拠は再び人吉に移された。永祿五年のはじめ真幸は伊東氏の支配が及ぶことになり、頼房は大畑城に出てこれを奪回するなどの動きがあったが、球磨自体にはその後さして大きな動きは確認されない。

一方この頃から島津義久の動が活発化し、天正九年（1581）義陽は結局戦わずしてその軍門に降り、芦北・八代の二郡を放棄し、同年十二月島津軍の先兵として阿蘇氏の将甲斐宗運と響野原に戦って討たれた。忠房があとを継ぐが島津氏の

制圧下に球磨一郡を保つだけであった。そして、やがて秀吉の支配下にはいるのである。

(工藤敬一)

第一図 永留(富)相良氏系図



第二図 球磨郡における国人の推移

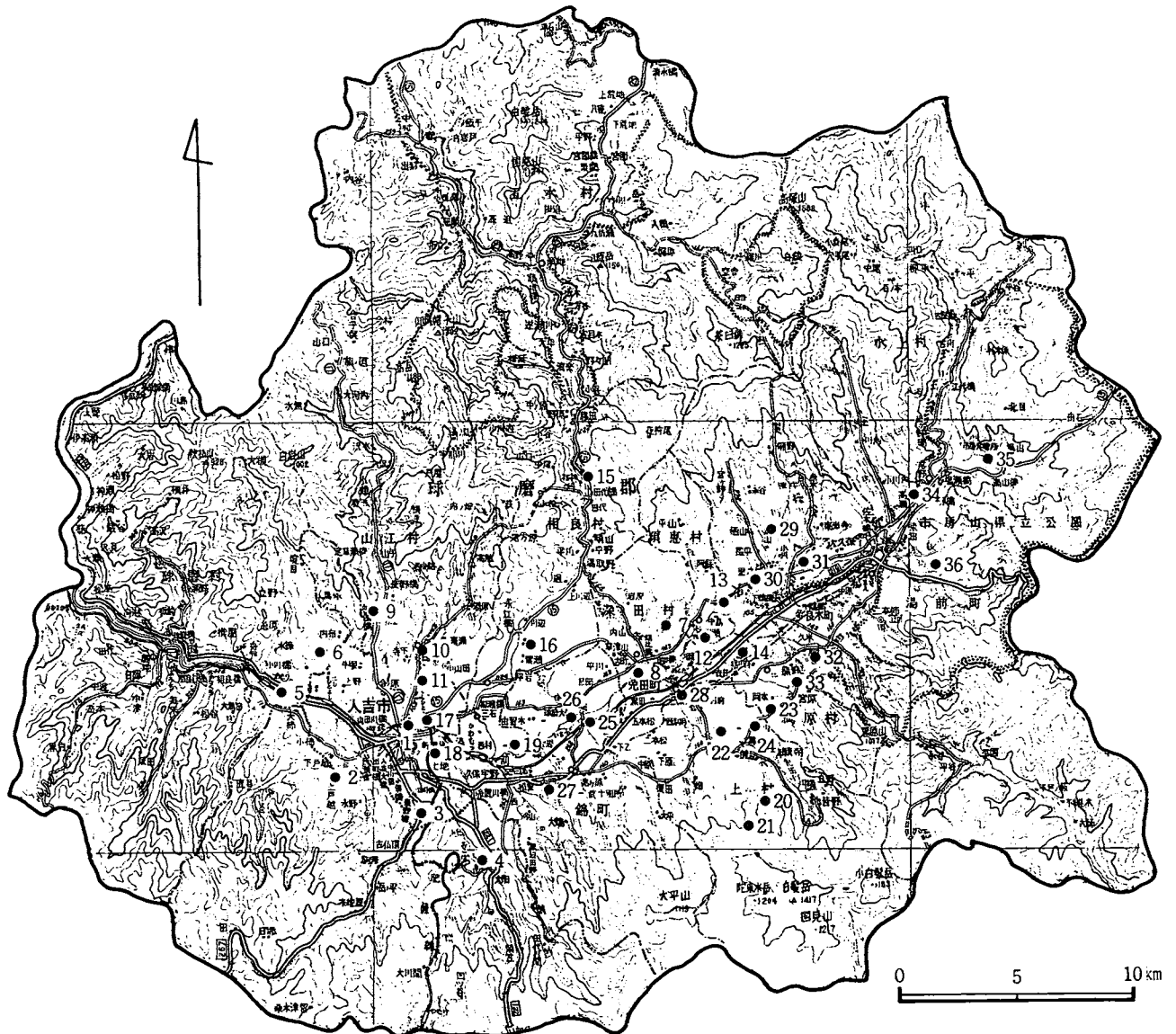
地名(国人名)	国人・地頭の変遷(八代日記他より)	備考(求麻外史・夕陽軒覚書より)
人吉(相良)※1	× 永富相良氏 →	
上村(相良)※2	(永富相良氏が継承) →	
多良木(相良)	× (役人) →	岩崎加賀守長友(永禄2)
久米	→ (×)※4	湯前氏 → ※7
平川	→ (×)※5	税所民部
奥野	→	佐無田城之介
須恵	→ (×)※5	
恒松※3	→	
岡本	→ ×※6 — 上村頼春 → × — 稻留長藏 → ×	犬童休育
永里	→ ×相良瑞堅 → ×	
宮原	→	宮原伊予守
小田※3	→ ×※5	
犬童※3	→ ×※5	
湯前	→ ×※5	※7 東叡河守直政(永禄2)

文安五年の内訌 大永〜享禄の内訌 弘治〜永禄の内訌

※1：人吉から宮原までは永和三三年南九州人一揆参加者 ※2：相良右頼を上村氏と仮定した
 ※3：恒松、小田、犬童の本拠は不詳 ※4：以下()内は推定
 ※5：その後も姓は残っているが庶流であって本宗は滅びたと推測されるもの
 ※6：他家が岡本姓を継承した ※7：永禄2年9月3日条

第一図・第二図とも服部英雄「相良氏の三郡支配」による。

球磨地区



- | | | |
|---------|-------------|---------|
| 1 大村平家城 | 13 須恵の城ヶ尾 | 25 岩 城 |
| 2 矢黒城 | 14 須恵の古城 | 26 蔵 城 |
| 3 赤池城 | 15 四浦平家城 | 27 土屋城 |
| 4 大畑城 | 16 川辺の城 | 28 永池城 |
| 5 渡利城 | 17 相瀬の平家城原 | 29 鍋 城 |
| 6 原田城 | 18 蔵城(柳瀬の城) | 30 里 城 |
| 7 高山城 | 19 柳瀬の城ヶ峯 | 31 内 城 |
| 8 深田城 | 20 上村城 | 32 久米城 |
| 9 万江の城 | 21 永里城 | 33 奥野城 |
| 10 山田城 | 22 岡本城 | 34 小多田城 |
| 11 山田の城 | 23 左近城 | 35 湯山城 |
| 12 今村城 | 24 宮原城 | 36 湯前城 |

人吉市

おおむらへいけ 大村平家城

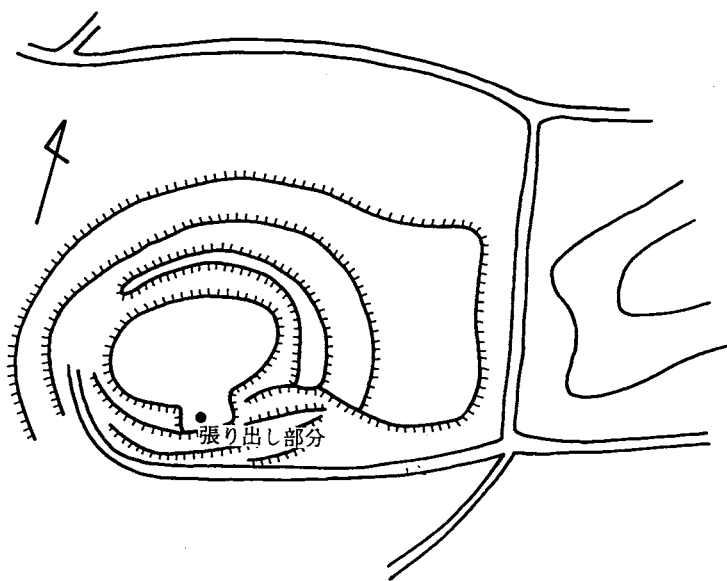
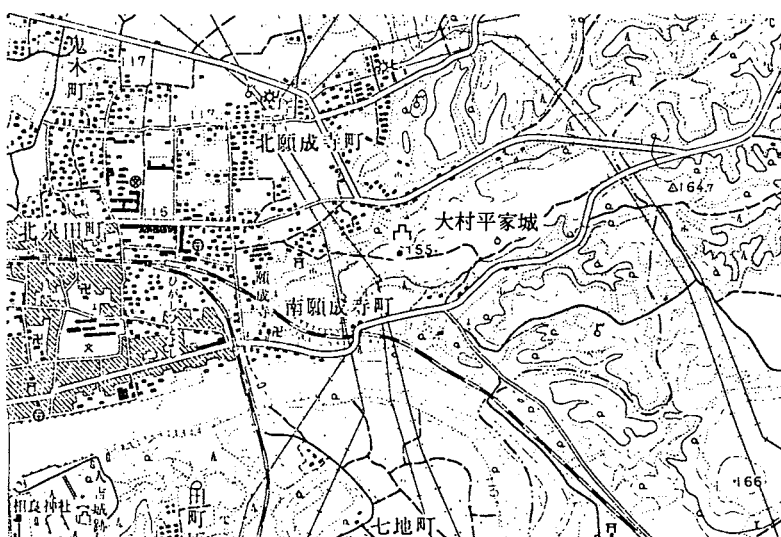
(人吉市願成寺町上ノ寺)

城跡は「願成寺馬場」地内にあって、「平家城」と称される丘陵地末端部（標高145.5m・西側麓よりの比高20m）に位置する。丘陵の背面は、楕円形状の小規模な平坦地（東西方向に主軸を呈し、長径19.5m・短径16m）となっており、南縁の中央部分には幅6mの張り出し部分（長方形の平坦地）も観察される。さらに、これより2m下った北側と東側には土塁を伴った曲輪がめぐっているが、これについては、かつて同心円状の曲輪であった事は容易に察しがつく。現在西側から北側にかけては崩壊し、数段に分かれた墓地群になっている。一方、東側の野首部分は、人為的に削り取られて断崖となり旧地形を止めない。城跡からの展望は極めて良く、また当該地は上球磨地方から人吉に入る要衝の位置を占める交通上重要な地点である。

(注2)

(注1) 更にその下方には、相良家700年の墓地（県指定文化財）がある。

(注2) 東方より人吉庄に入る道路は四つあり、その(一)は田町方面、他の三つは此の地点にある。(二)は川辺川方面より叢原を越えるもの。(三)は木上村（旧平川氏領）より入るもの（旧道は現湯前線のあたり、観音寺北側）。(四)は球磨川左岸の大字土地村から渡舟によるものがある。



大村平家城 見取図

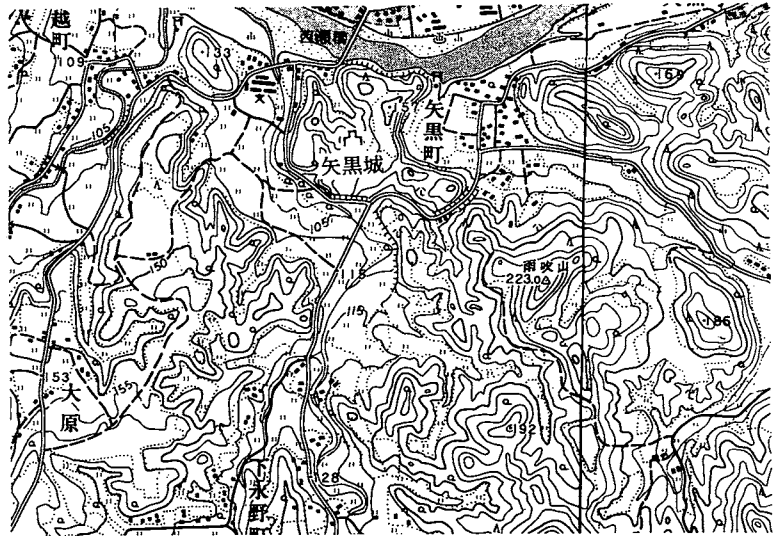
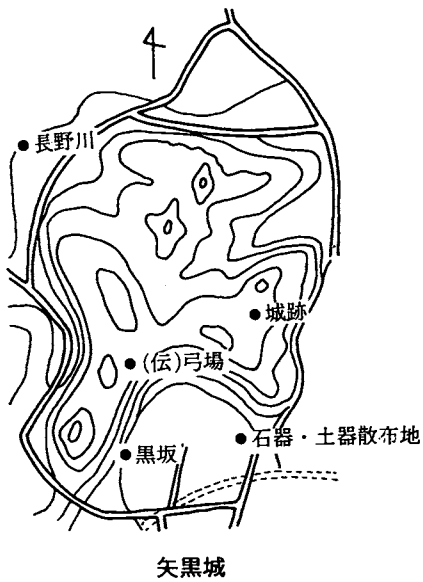
やくろ 矢黒城（城戸之尾城）

(人吉市矢黒町西ノ園)

『南藤綴綿録』及び『嗣誠弼集覧』に「長統公御代西浦地頭桑原隠岐守同子息何某一族其外が文安五年（1447年）春多良木城主頼仙謀叛の節一味したとして追伐の風聞あり、俄に城戸之尾に城を構えて籠城した」という旨の記述が見える。

矢黒町の西側に位置する丘陵地末梢部（標高152m・集落よりの比高48m）が城跡と伝わる。丘陵の背面は広い平坦地となっており、周辺には2～3段（幅2m・高さ2m）の階段状地形も観察される。また、南東側の野首部分には、「黒坂」と称される堀切が走るようである。丘陵地の斜面部はいずれも急傾斜をなし、北側麓には球磨川も流れているので、当該地は外観的にも城跡にふさわしい地形といえよう。城跡からは、縄文から須恵・弥生に至る各種の土器片も出土する。

なお、集落には五輪塔や庚申塔がある。

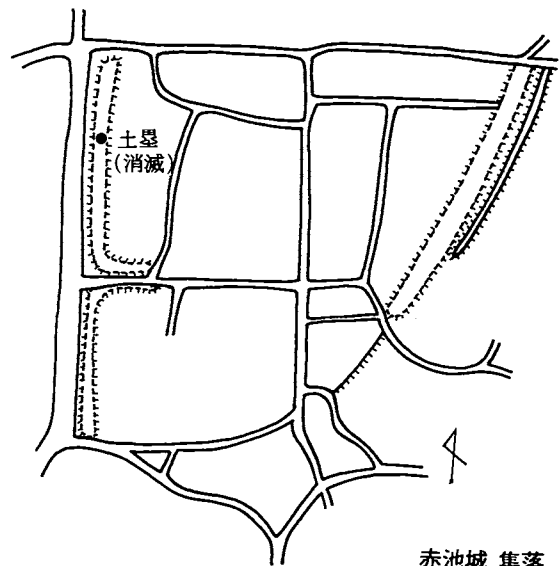
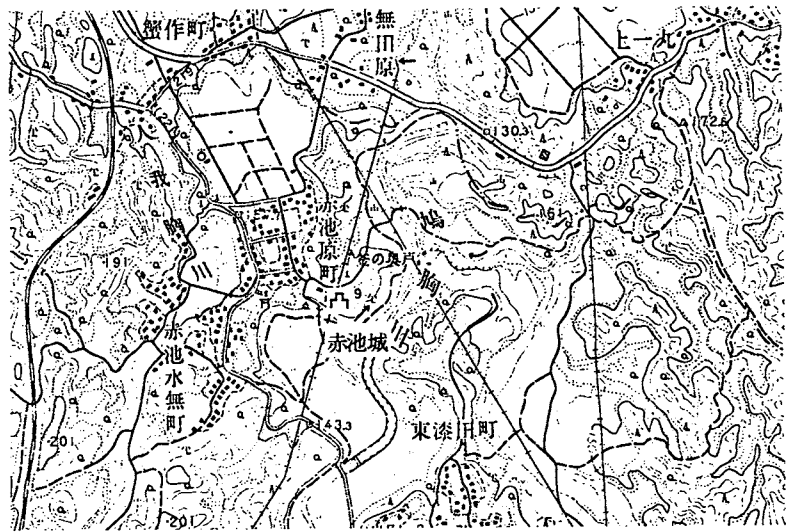


あかいけ
赤池城

(人吉市赤池原町城山)

『南藤縵綿録』及び『詞誠独集覧』によれば、城主は齊木但馬守であったが、宝徳三年(1451年)三月七日、相良氏に叛意ありという事で亡されたという。なお落城の折、郎従約200人が立籠ったが但馬守は逃れて一武村覚井広大寺で自害し、また、逃れた郎従の一部は鳩胸川でおぼれ死んだという伝承がある。

城跡は、「原村(字名)」集落の南東側にあつて、「城山」という字名を残す丘陵地末端部(標高189m・集落よりの比高23m)に位置する。丘陵の背面は広い平坦地となっているが、全面、山林に覆われており他に城跡に関連あろうと思われる遺構は何も認められない。しかし当該地は、東側の野首を除く周辺すべて断崖であり、さらに南側から東側にかけては、城跡を取り囲む様に鳩胸川が流れており、まさに地形そのものが一つの城跡といえよう。一方、扇形を呈する集落には、昭和の初期まで土塁と空堀が周囲をめぐっていたという。とくに北縁を走っていた空堀については、深さ約5mもあつたらしいが現在は埋められて道路になっている。なお城跡内には「天正十一(1583年)季_丑五月十日」の銘を有する五輪塔がある。



赤池城 集落 見取図

おこぼ 大畑城

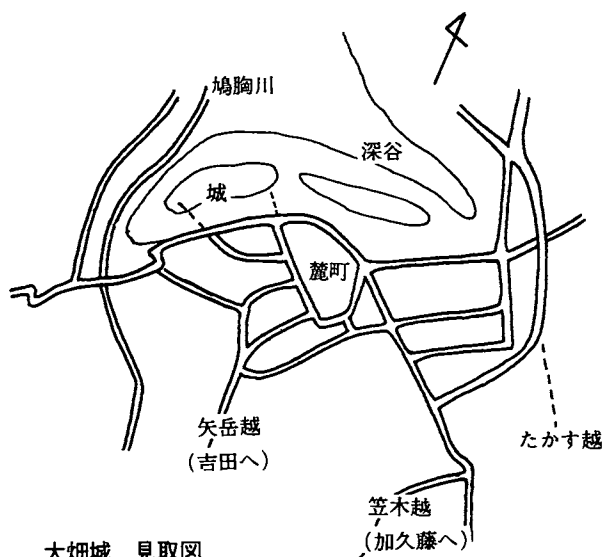
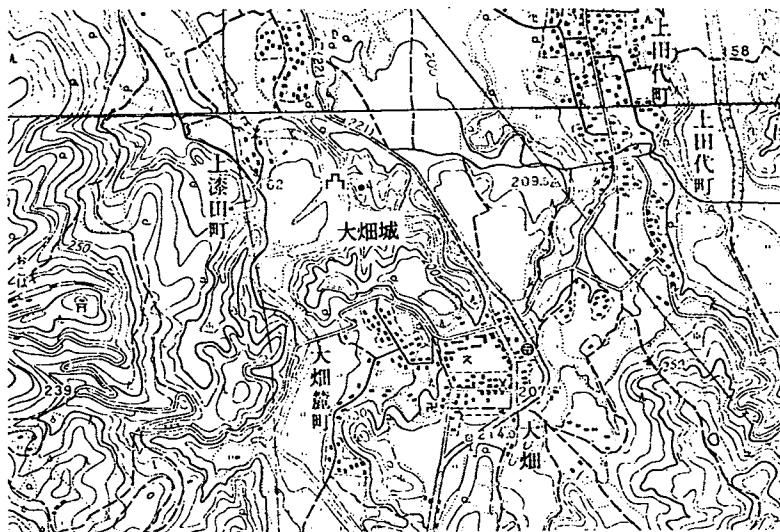
(人吉市大畑麓町城山)

『八代日記』永禄五年の頃に「同五月十日登求麻象其幸二打入小原又太郎とのイ(飯)野ノ城二在城頼房様おこはの城及御出張十日三日イ、野城ヲ始城五ヶ所又太郎殿二被申入口、たいら方まんくわた方ハミツ山の山と云所二被楯籠、五月廿二日北原三家取乱口、五月十一日諸勢おこはのこことく引帰は」という記事が見える。また『南藤縵綿録』に「天正六年(1578年)戊寅十二月廿四日佐牟田城之助長堅、薩州山野深仁田ニテ鉄炮ニ当リテ死ス、三十三壽芳哲」とある。

城跡は、大畑麓町にあつて「城山」という字名を残す丘陵地(南東方向に主軸を呈し、標高220m・南側水田面よりの比高30m)に位置する。丘陵の背面は広い平坦地となつており、周辺には数段の階段状地形も観察されるが、殆どの斜面部分は急峻で、天然の要害を利用した城跡の色彩が濃い。南西側の斜面部分には古井戸らしき直径3mの窪地も観察される。さらに登城口も南西側(注1)にあるとされており、かつては門跡と思われる所に野面積みの石垣が存在していたという。なお、西側麓を流れる鳩胸川に接する所は石切場となつて、漸次、削り取られつつある。

ところで、大畑の地は、球磨郡から日向(宮崎)・薩摩(鹿児島)に入る交通路の拠点(この地から笠置越・矢岳越・またはタカス越等の山越道から両国に入国したのである)で、古代からの駅路に当ると考えられている。この為に、大畑には、相良藩も他の村に比べ多くの武士を駐在させた他、多くの農民を郷土として溜めおいたと伝えられる。当地には、「上屋敷」・「中屋敷」・「下屋敷」の字名が残っている。

(注1) 現在は大部分埋っているが、「かつては石を投げると水の音がした」との古老の話から、井戸である事はまちがいないであろう。



大畑城 見取図

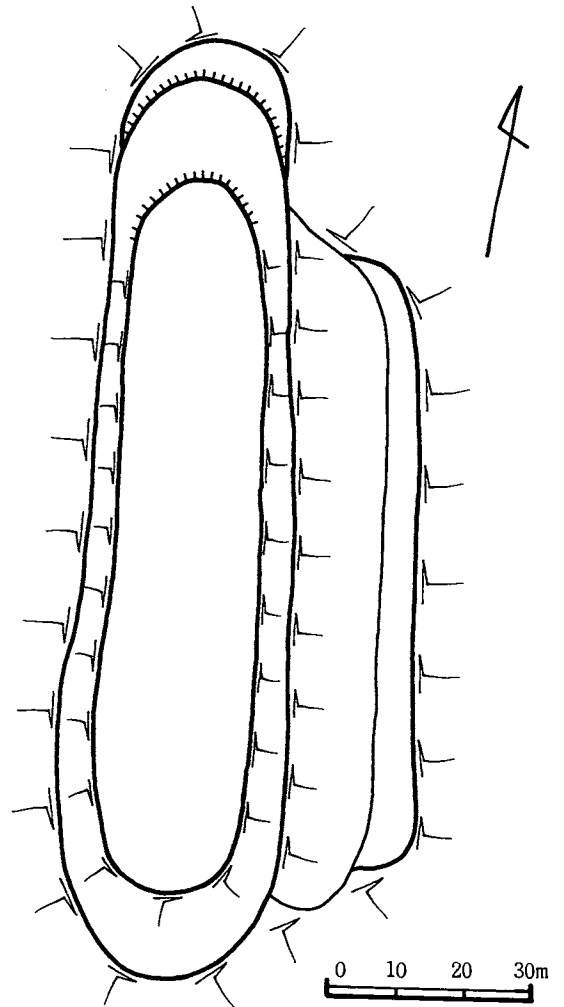
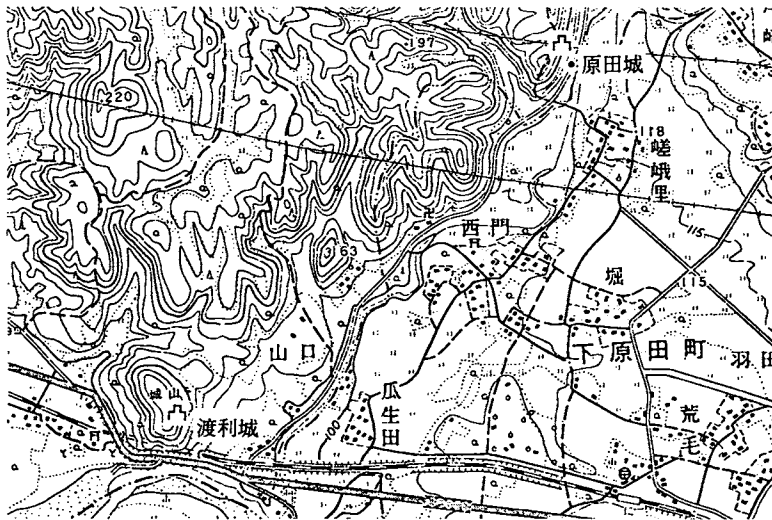
球 磨 郡

渡利城 (球磨郡球磨村大字渡字城山)

上相良氏の家臣、井口氏代々の居城であったという。

城跡は球磨川の流域にあり、「城山(字名)」と称される山稜末端部(標高180m・西側麓の道路面よりの比高約80m)に位置する。山頂部分は北西方向に主軸を呈する長円形状の平坦地(雑木林地・長径154m・短径20m)となっており、これより2m下った所には同心円状の曲輪(幅3m・北西端と南東端のみ幅12~14m)が観察される。さらに、東側斜面には数段の階段状地形が重なり、北東側の鞍部については、40m近い落差となる。

城山の西側麓に城主の菩提寺と伝えられる曹洞宗一王山、雲泉寺跡がある。当該地は人吉盆地の西端部にあたり、『球磨郡誌』には「往時、球磨の関門であり、重鎮であった」と記されている。



渡利城 略測図

原田城 (球磨郡球磨村大字渡字西門)

『相良家文書』の相良祐長軍忠状に「以同廿日、原田城大宰少貳頼尚若黨以下凶徒等楯籠之間、押寄、致合戦、焼拂了」という興国元年(1340年)六月廿日の戦に関する記事が見える。

石水寺(曹洞宗)の背後(北西側)にあって小山をなす山稜末端部(標高180m・南側麓の水田面よりの比高70m)が城跡と伝わる。山頂部分は楕円形状の平坦地となっており、さらに周辺の斜面には削り落しも観察される。一方、北東側の鞍部には、二重の堀切が存在しているが、鞍部の尾根は細長く延びる事から、さらに他に2条の浅い堀切が走るようである。また、城跡の西側には谷一つ挟んで同様な山稜末端部が並んでいるために、これを断切る意味で、城跡との接点に、前記の二重堀と同様に深い堀切が存在する。なお、この堀切には現在木橋が架っている。城跡麓には馬永川が流れており、その前方に上原田と下原田の沃野と集落が展開する。なお、この地域には、「近江原」・「嵯峨里」・「瓜生田」・「菖蒲」・「貴船」・「尾崎」等の京都周辺に多いとされる地名が残っており注目される。

(注1) 応永二十四年(1417年)三月、永国寺開山実底和尚の隠居寺として創立。願主は九代相良長統という。城跡と関連深い寺院とされる。

高山城

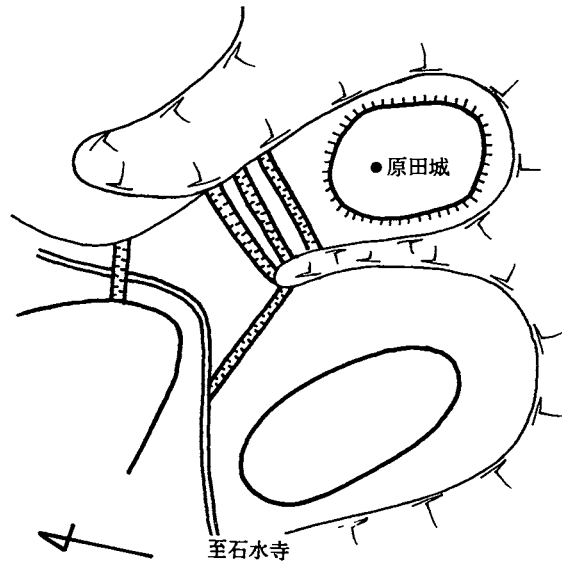
(球磨郡深田村大字東字高山)

城主は平河盛高(深田地頭)という。

盛高については、木上城主、平河義高の長子と伝わる。

城跡は「高山」と称される山稜(標高275.18m・東側麓の水田面よりの比高約140m)に位置する。山頂部分は直径25mの円形状の平坦地となっており、二段から成る同心円状の曲輪も観察される。さらに、山腹中にも3箇所平坦地が存在するが、この地周辺からは木材伐採の折(昭和9年)に布目瓦が出土した。なお、昭和50年には、東側麓から瓦窯跡が発見されている。古老によれば、城跡には古井戸も存在したというが、現在その跡を確認するには至っていない。

多良木町字岩河内に住む平川弘氏は、城主の子孫という。



原田城 見取図

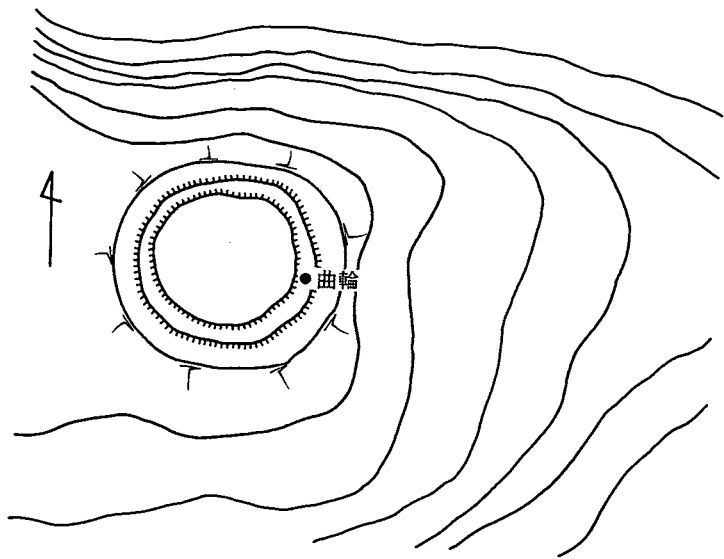
深田城

(球磨郡深田村大字西字城)

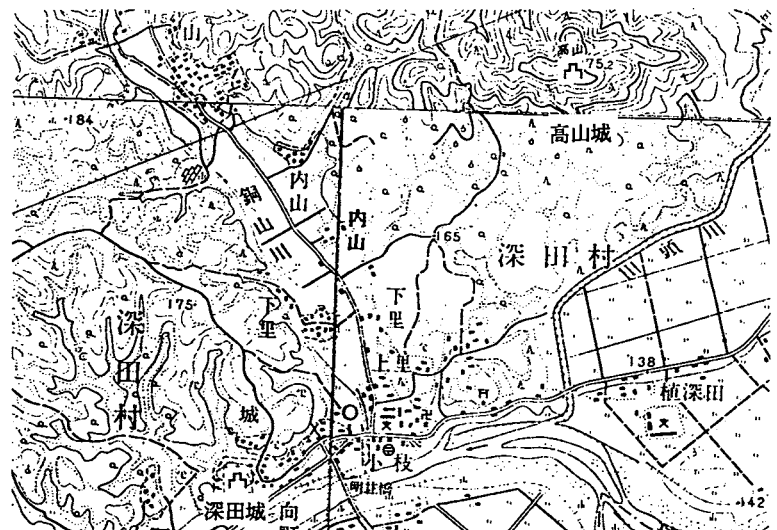
城主は平河師高という。寛喜年中(1229~1231年)に相良長頼が平河義高を攻めた時、三男の師高は妻子を五木村に走らせ、自らは一族三十数名と共に自刃したと伝わる。自刃の地は今も「断頭坂」と称されている。

城跡は球磨川北岸に開けた丘陵末端部(標高約150m・南側麓の水田面よりの比高約15m)に位置しており、「城」という字名を残す。丘陵の背面は広い平坦地となり、民家や畑地等に利用されている。顕著な遺構は観察されないが、丘陵の東側寄りに「古屋敷」・「仮屋敷」・「前屋敷」と称される所があり、興味深い。「古屋敷」は現在、民家となっており、これより一段高くなった南側の畑地が「仮屋敷」(東西36m・南北33m)である。さらに道を挟んだ対岸の畑地が「前屋敷」(東西22m・南北35m)となる。

(注1) 大野よし子氏宅の後方が自刃の地とされる。大野氏の屋敷には城主を祀るという中球磨神社があり、師高の守本尊と伝えられる法華経五段の巻



高山城 見取図



物が収めてある。又、その近くの師高の墓所と伝えられる所には、五輪塔の残欠が数十基積まれている。

まえ 万江の城

(球磨郡山江村大字万江字城内)

万江地内に「城内」の字名を残す集落があり、館跡等の存在が考えられる。踏査の結果、万江農協支所東裏に「万江長衛門の屋敷跡」と称される一隅がある事が判明した。しかし、当該地は西福寺敷地と城内小学校敷地跡(現在、荒地)となっており、屋敷跡に関連した遺構は何も観察されない。長衛門なる人物については、「相良氏の球磨入国の折に、道を切り開き総勢30人を率いて出迎えに行った万江氏の子孫」という。

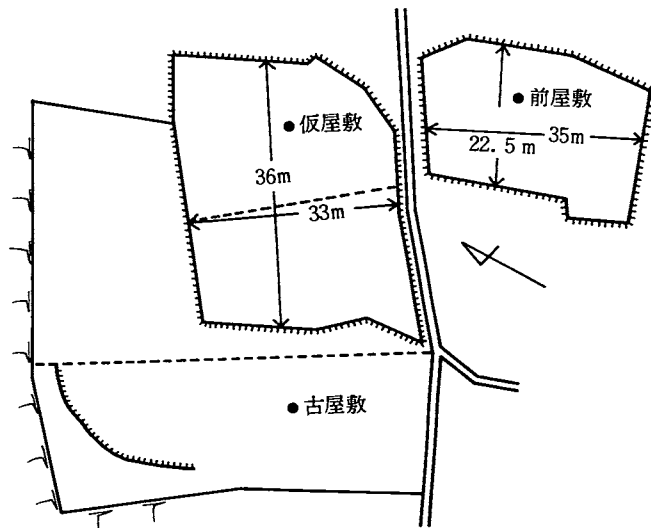
(注1)

また、人吉と八代を結ぶ参勤交代道は万江地区で山越道となる事から、万江地区は参勤交代の際の食糧供給地であったと伝わる。この伝承が示すように、万江地区は山越道の中継地として古くからかなり重要な役割を果たしたものと思われる。なお、城内集落には、道端に「見張り所」という小名を残す所がある。集落内に関する役目を持つ館跡の類が存在した可能性は大きい。前述の万江氏の屋敷跡と合わせ考えると興味深い。

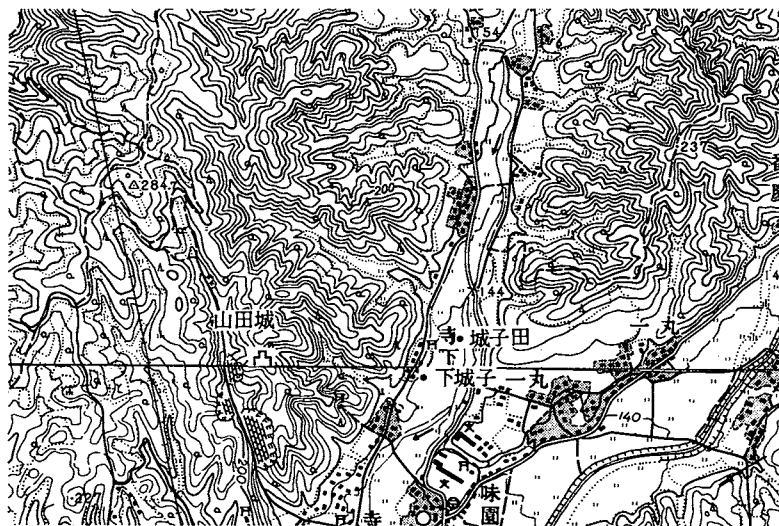
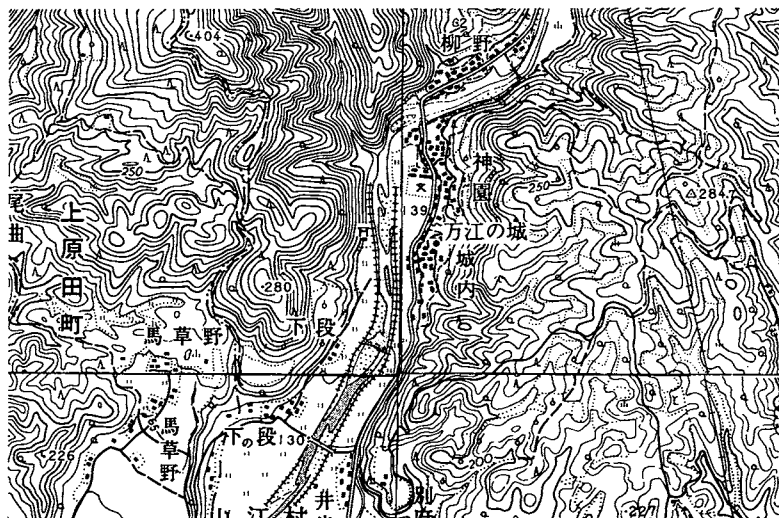
なお、集落には天子行幸説がある。

(注1) 松本猛夫氏(78才)の御示唆による。

(注2) 照岳を通過して神瀬に抜けるルートである。



深田城 見取図



やまだ 山田城

(球磨郡山江村大字山田字城山)

従来は、平川氏一族の砦であったが、相良氏の球磨郡入国後は相良頼明をはじめとして相良氏9代、194年間の居城となったという。

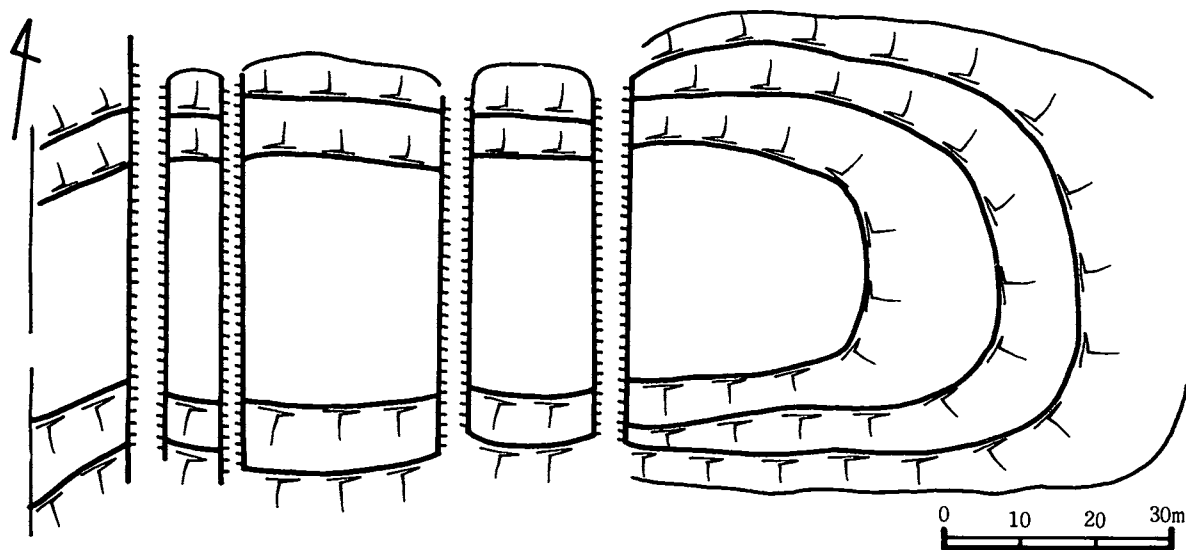
城跡は丸岡丘陵地(標高284.7m)の南東側末端部(標高220m・東側麓の集落よりの比高約140m)に位置しており、「城山」の字名を残す。南東方向に主軸を呈する城山の背面は、二条の空堀(底幅5

m・深さ3m)と、北西側の鞍部に築かれた二重の堀切(底幅3m・5m・深さ5m)によって仕切られた3区画の平坦地が存在する。(鞍部寄りに四区画目の狭い平坦地があるが、これは形状からして土塁の崩壊跡と思われる。)

3区画の平坦地は、南東端が舌状形(長径30m・短径20m)を呈し、残り2区画は方形状となる。中央部は長径30m・短径15mを計り、北南部も長径30m・短径20mを示す。北西部の平坦地には、井戸跡と伝わる直径2.5mの立穴も確められる。さらに、平坦地を取り囲む階段状地形も観察される。これらの遺構とあわせて「城山」の周囲は三方(鞍部側を除く)が切り立った絶壁となっており、登城道も、西側前方の「馬とばし」と称される谷づたいの道に限られる。まさに要塞堅固の城跡といえよう。

なお、「城山」の麓には「下城子」・「城子田」・「園」という字名を有する所があり、下城子の「馬頭観音」前に五輪塔と板碑が祀られている。

(注1) 現在、深さ2m程に埋もれている。



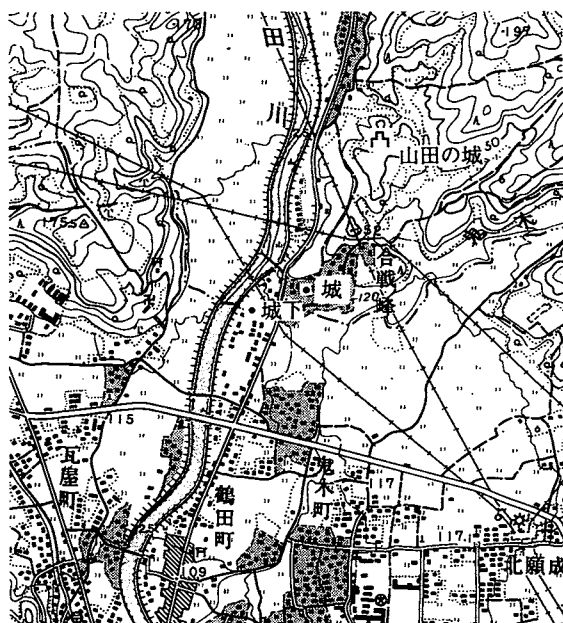
山田城 略測図

やまだ じょう
山田の城

(球磨郡山江村大字山田字本城・城)

合戦峯集落の北側一帯に延びる丘陵地に「城」・「本城」

・「城下」という一連的な字名が残っている所から、城跡の存在が考えられる。とくに丘陵地の北端部にあたる「本城」地内には、楕円形状をなす高さ2~3mの高台が三角形状に3つ並んでおり、地元の人々は、この郭を俗に「高城」と称している。当該地は地形的にも城そのものの形態をなしており、入り口部分には「大手口」と称される堀跡も存在するようである。又、「高城」と集落の間の「城」の一角にはその昔、城に関連した「火葬場」があったという伝承があるが、現在は江戸期の墓碑を含む墓地となっている。さらに集落と「本城」の間をつなぐ野道の西側部分は、「城下」という字名を残す細長い平坦地が、野道と平行に走っているが、地元ではこの地を「馬場」と称する。同地内には「金の鶏が埋蔵されている」という伝承もある。一方、集落内には景行天皇の行幸説があり、「天子」という小名を残す所や、「天子郷」と称される古井戸がある。12月21日には天子祭も行われている。



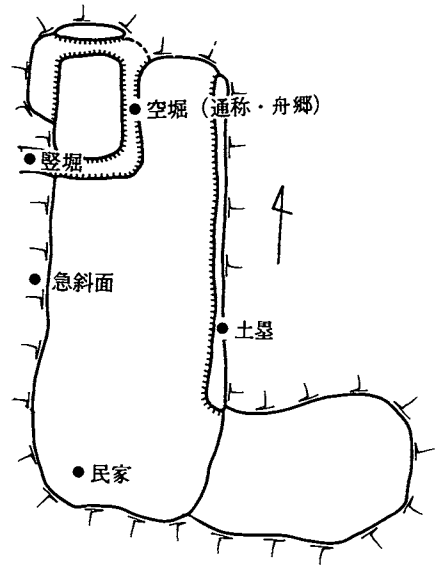
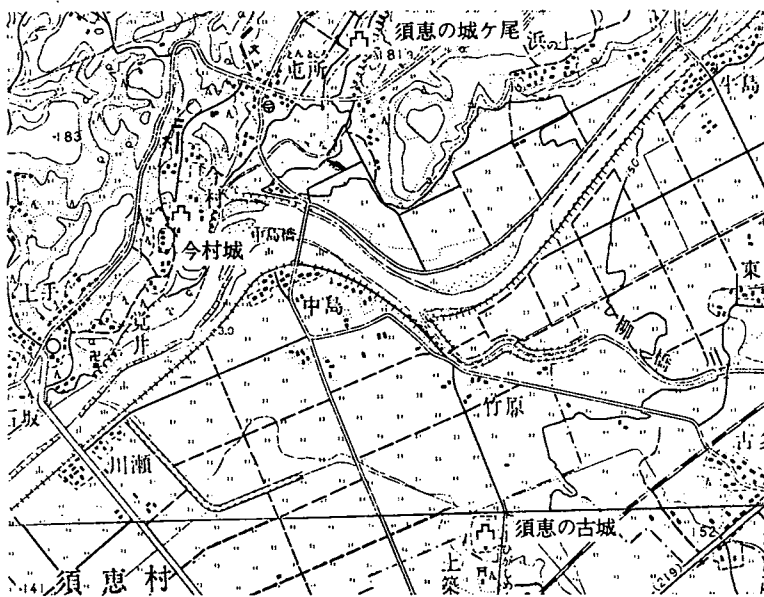
いまむら
今村城 (須恵城) (球磨郡須恵村字今村)

城跡は球磨川沿いであって、「今村」という字名を残す丘陵地末端部(標高170m・西側麓の道路面よりの比高は7~8mにすぎないが、東側部分は球磨川に面する絶壁となる)に位置する。丘陵地の背面は、帯状形の平坦地(主に畑地・南北方向に主軸を呈し、長径150m・短径60~70m)となっており、先端部寄りの南東側に「舟郷」と呼称される空堀(底幅3~4m)をはじめとして、西縁部に長さ100mを越える土塁(幅2~3m・高さ1~2m)が観察される。なお、空堀は方形にめぐっている為に、先端部寄りに一つの独立区画が存在する事になる。当該地の背面は雑木林となっている事もあって、顕著な平坦地をなさないが、五輪塔や板碑が散在しており、墓所とも受け取れる形状である。かつては阿弥陀堂も祀られていたという。

(注2) なお、畑地中には「天文四己未天四月十日」の年号を有する板碑が残っている。北側の野首寄りについては民家の敷地となっている事もあって、遺構は認められない。

(注1) 昭和20年頃までは、かなり多くの五輪塔が存在したらしいが、子供達が球磨川に投げ込んで遊んだために数がへったという。

(注2) 登城口にある薬師堂は、この阿弥陀堂を合祀したものである。



今村城 見取図

すゑ じょうお
須恵の城ヶ尾 (球磨郡須恵村字城ヶ尾)

『須恵村史跡について』という冊子に、「鎌倉時代以前より、今村城と共に当地の地頭が構えた城壁なりと思う。平等寺釈迦堂と共に、この地に一大豪族が住みつき城を築き近傍を支配し、護ったものと思われる。城跡には金塊が埋められていると伝えられ、今も昔日の豪華な夢を見、金塊の行方を探す者絶えず」という記事がみえる。しかし、「城ヶ尾」の字名が残る独立状の山稜(標高181.9m・西側麓の水田面よりの比高30m)は自然地形そのもので、何ら城跡に関連あると思われる様な遺構は存在しない。単なる砦の類であったのだろうか。

(注1) 大正六年八月発行

すゑ じょうお
須恵の古城 (球磨郡須恵村字古城)

須恵村の南端部に、「古城」という字名を残す集落があり地元の人は、「昔、城のあった所と聞いている」と語る。当該地は四方を水田で囲まれた若干の微高地で、その範囲は東西110m・南北160m程である。なお、城跡の中心地と伝えられる所は、恒松好右氏の敷地(集落の北西隅にあたる。)内にあり、現在は牛の飼育場となっている。

かつては、この地に高さ5~6m程の小山が存在していたらしい。現在もその残存部が認められる。

ようらへいけ
四浦平家城

(球磨郡相良村大字四浦字舟渡)

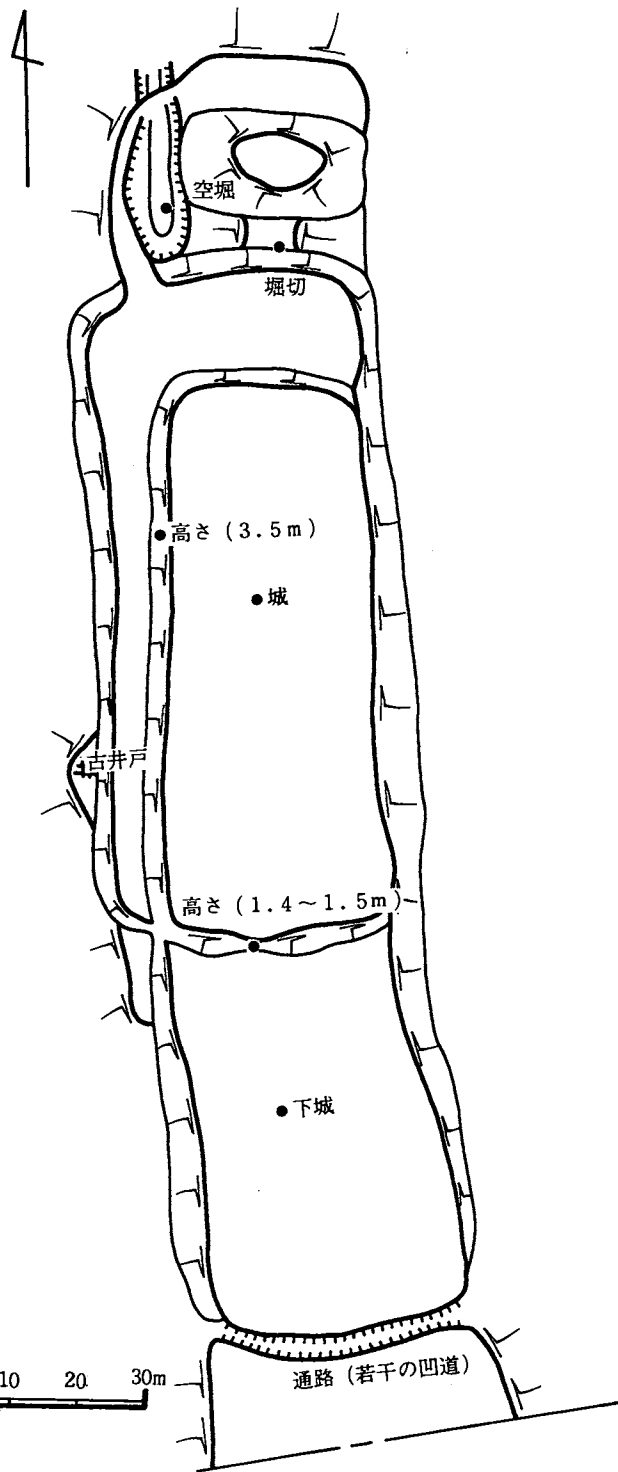
城跡は舟渡地内にある、「平家城」と称される丘陵地末梢部に位置する。丘陵地の背面は南北方向に主軸を呈する帯状形の平坦地となっているが、中央部に南側から北側へ下る段差(高さ1.5m)があるために、大きく2区画に分かれることになる。地元の人は、この2区画について南側を「城(長径80m・短径30m)」・北側を「下城(長径55m・短径35m)」と呼び分ける。

城跡に関連した遺構は、南側の平坦地周辺に見られ、古井戸(湧水利用・深さ2~3m)・曲輪(東側と南側部分をめぐる)・堀切(長さ25m・底幅4m)が存在する。

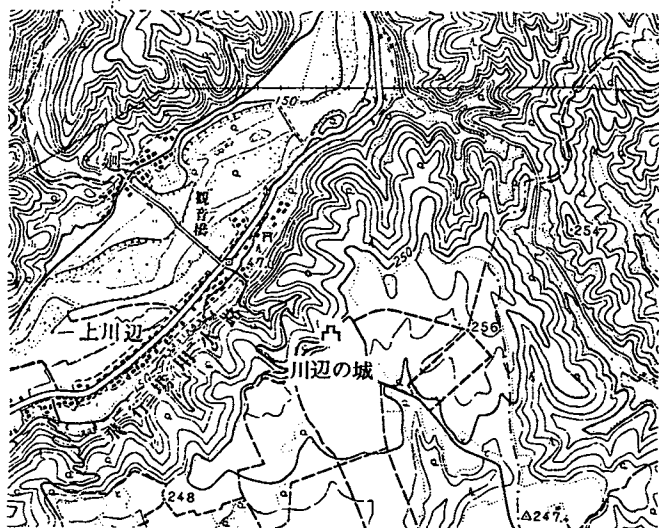
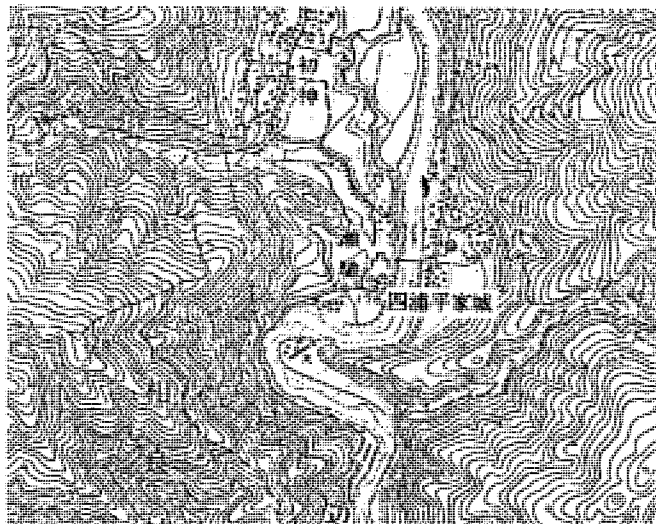
この内、堀切についてはその東端部が南側へカーブしており、最終的には豎堀となって丘陵斜面を下る。

なお、城跡の東側麓は球磨川に面する絶壁となっている。

(注1) 鐵が出土する。



四浦平家城 略測図



川辺の城 (球磨郡相良村大字川辺字城ノ上他)

上川辺集落の東側丘陵地帯に、北から南にかけて「城ノ上」・「城ノ平」・「堀内」という関連性のある字名が残っており、城跡の存在が考えられる。当該地は全面畑地になっているが、城跡に関連あろうと思える様な遺構は何も観察できない。なお、集落内を五木に至る道が走っている。

柳瀬の平家城原

(球磨郡相良村大字柳瀬字冲原)

舟場集落の西方向400mに「平家城原」と称される丘陵地末梢部(標高150m・南側麓の道路面よりの比高20m)があり、城跡の存在が考えられる。丘陵地の背面は広い平坦地(畑地)となっているが、城跡に関連あろうと思える様な遺構は何も観察できない。

柳瀬の蔵城

(球磨郡相良村大字柳瀬字蔵城)

柳瀬地区の南西側寄りに広がる丘陵地の一隅(標高130m・南側麓の水田面よりの比高15~20m)に、「蔵城」という字名が残っており、城跡の存在が考えられる。しかし、当該地は10数年前に、圃場整備が行われた為に旧地形を止めておらず、遺構の観察は不可能である。地元にも確たる伝承はない。したがって現在、城跡の存在を示唆するものは南東側麓に残る「風呂前」と「陣ノ内」の字名のみすぎない。

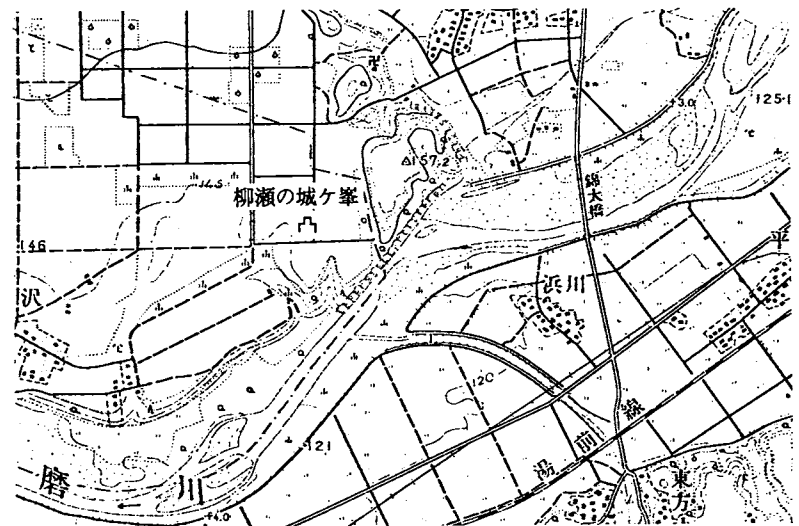
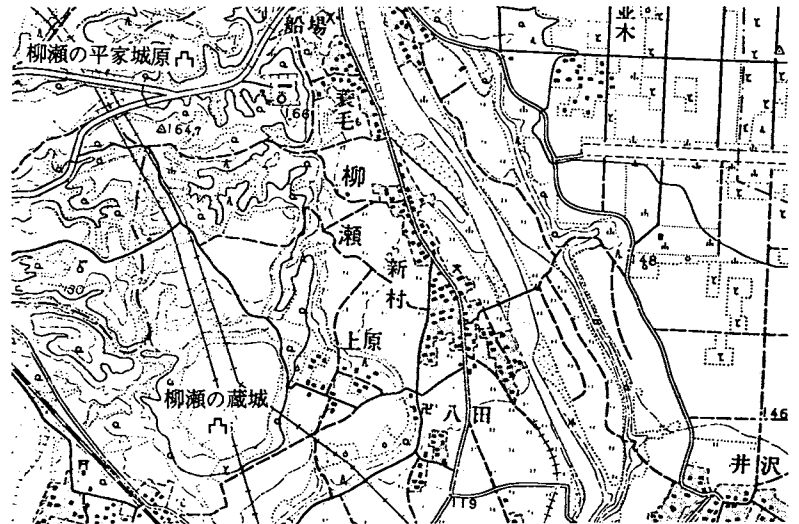
柳瀬の城ヶ峯

(球磨郡相良村大字柳瀬字城ヶ峯)

柳瀬地区に横たわる丘陵地帯の東端部に、「城ヶ峯」の字名を残す一隅があり、城跡の存在が考えられる。当該地は昭和20年の前半まで原野であったが、その後、数回にわたって開墾され、現在は砂利採取場となっている。
(注1)

「城ヶ峯」の旧地形はすでにない。また、この地は民家から離れた所にある為に、伝承の類をまったく採集出来ない。

(注1) 昭和23年頃の開墾の際に、縄文土器片が多数出土したらしい。



うえむら

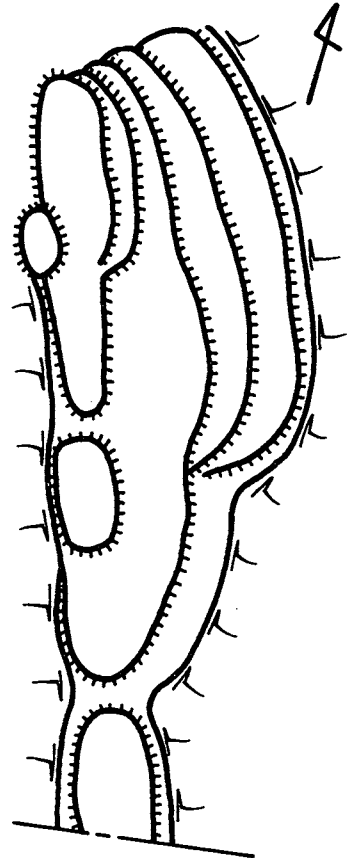
上村城 (麓城・亀城)

(球磨郡上村字麓)

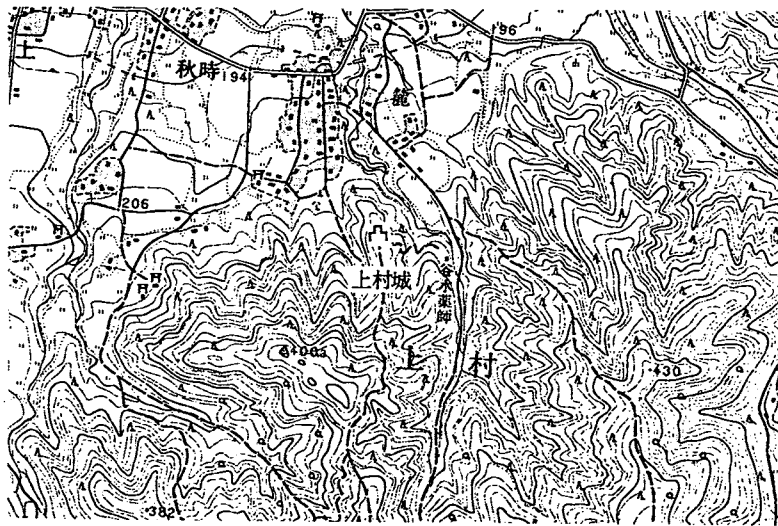
『求麻外史』によれば、相良長頼の四男、頼村が上村を領し、上村姓を称したという(但し、上村氏墓地には頼村の墓は見あたらない)。以来、上村氏は代々上村麓城主として栄えたと伝わる。また、13代 頼興の時、長子は16代相良義滋の養子となって人吉城主(晴広)となり、残る三子も上村城主(頼孝)・豊福城主(頼堅)・岡本城主(長蔵)となって勢力を拡大した。しかし、晴広の没後、三子が人吉城の幼主義陽(18代)に替らんとして隠謀を企て、成らずして弘治三年(1553年)に没落したとされている。

城跡は白髪山(標高593m)の北西側末端部(標高270m・北東側麓の谷水集落よりの比高50m)に位置する。山頂部分は120mに及ぶ長い尾根(北西方向に主軸を呈する)となっており、2箇所の高まりに楕円形状の平坦地が観察される他、西側の斜面部には「馬廻し」と称される階段状地形が重なる。南東側の鞍部については大きな堀切がはいっているようである。さらに山頂より北西方向に下る尾根筋は大きく中段(平坦面は無いが、北側の緩斜面部には階段状地形がある)と下段(舌状形の平坦地がある)に分かれる事から、当該地は外観的には3区画から成る城跡といえよう。

なお、城跡直下の麓には最上段部に「天」という小名を残す所や上村氏の墓地がある。谷水集落は上村氏が歴代居住した所とも言う。



上村城 見取図



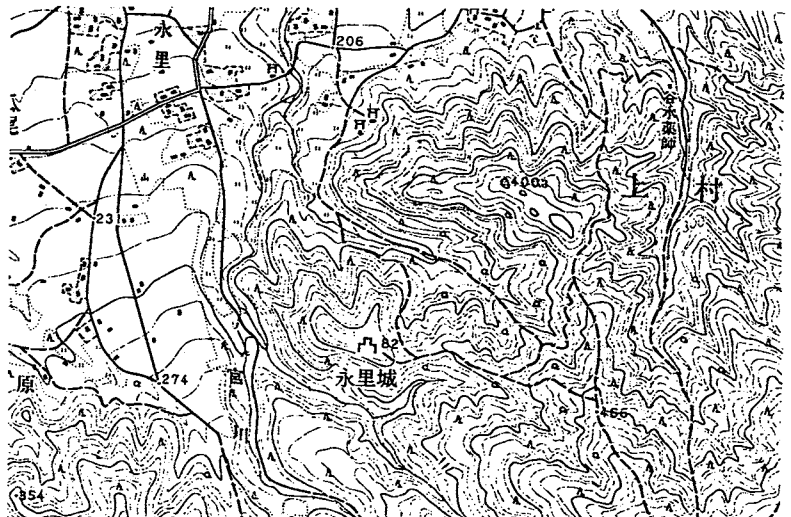
ながさと

永里城 (花牟礼城)

(球磨郡上村永里)

『相良家文書』之一の(二)肥後国球磨郡田数領主等目録写に記載された地頭藤原秀高(合志九郎)が永里及岡本の城主であった。(岡本家及菊池氏系図)。その後、文和三年(1354年)に一族岡本又次郎の所領(『相良家文書』之一の一六一)となり、岡本頼春謀殺後は落合加賀守が城主となったが大永六年(1526年)、相良長堅が籠城の折、焼失。

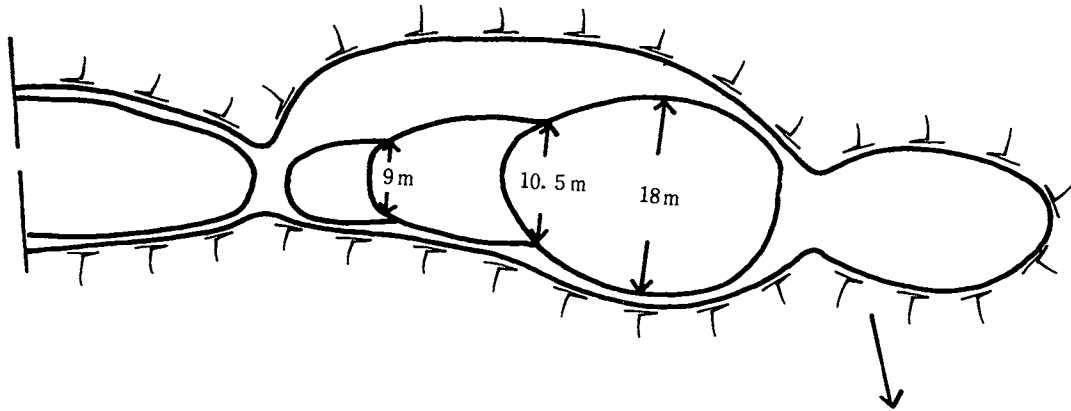
後に、上村家の所領となり廃城と伝えられている。



城跡は、中尾谷と宇土谷に両側をはさまれた「永里山」と称される山稜末端部（標高350m・北側麓の水田面よりの比高140m）に位置する。山頂部分は西北方向に延びる尾根となっており、最高所における楕円形状の平坦地（長径40m・短径18m）を中心に、段落ち部分の西北側と東南側に、2段から成る舌状形の平坦地と長円形状の平坦地とが観察される。一方南東側の鞍部については自然の堀切となる迫が走っており、さらにその先の尾根筋には、花牟礼寺跡と湯龍庵跡が確められる。^(注1)この他、未見であるが古老によれば、宇土谷側の斜面部には「馬廻し」と称される数段の階段状地形があるという。登城道は、前記の両谷づたいの小道のみに限られる。当該地は山頂の一部を除いて杉・桧の植林と雑木林で、遺構の把握は困難である。俗称、花牟礼城は、もと山頂部の尾根筋にあった花牟礼寺よりの後称である。

なお、城跡の北西方向約1.5kmに開けた永里集落には、金蔵院跡・雲羽社・観音堂諏訪社（稻荷社）の他に「岡本殿」^(注2)と称され墓所がある。当地にはまた縄文・弥生時代の遺跡が多い。^(注3)^(注4)^(注5)

- (注1) 五輪塔の墓石群があったが、現在、全部持ち去られている。
- (注2) 相良長堅は、この寺で自害したという。寺もその時に焼失したという。
- (注3) 永里氏の勧請により創建という。永里住民の崇敬が厚い。
- (注4) 古老によれば、もとは城にあったが、廃城後、この地へ移ったともいう。
- (注5) 岡本頼春（岡本城主、洞然の子）が上村頼興に謀殺されたという所で、頼春の墓がある。

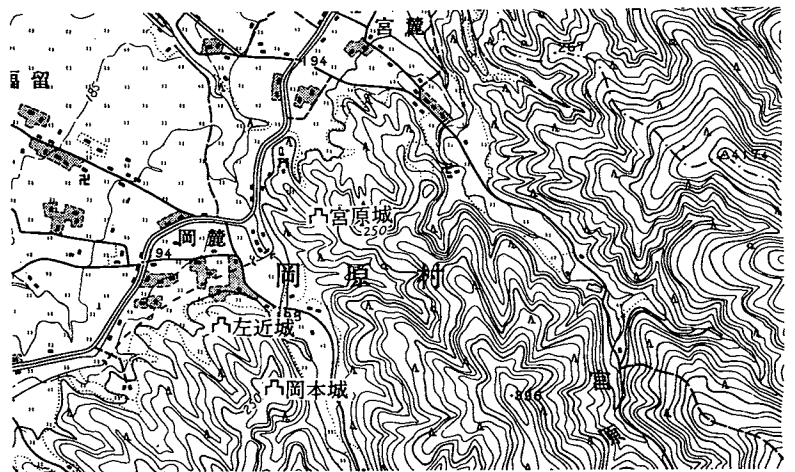


永里城 見取図

おかもと
岡本城（小鷹城）（球磨郡岡原村大字岡本）

天文年間（1532～1555年）の城主は相良頼春という。弘治三年（1557年）、頼春が相良義陽に攻められて滅んだ後は稲留長蔵が居城したらしい。

城跡は岡本谷の西側にあつて、北側麓に古町集落を望む丘陵地末端部（標高260m・集落よりの比高約65m）に位置する。山頂部分は、楕円形状の平坦地（杉山・長径30m・短径20m）となっており、丘陵地斜面部分には十数段に重なる階段状地形が観察されるが、かつて上段部の一隅からは数個の礪臼が出土したという。^(注1)螺旋状に城跡をめぐる山道には、「馬廻し跡」という伝承がある。この他、数箇所に空堀が存在するようである。^(注2)城跡周辺については「殿谷」・「上陣内」・「後陣内」・「城崎」・「城下」・「舟川」等の小名があり、^(注3)頼春の創建と伝えられる諏訪神社や（伝）相良頼兼・頼之の墓（板碑）も残っている。^(注4)城跡を小鷹城とも称する。呼称の由来は地形の形状によるという。



(注1) 昭和20年代の畑地開墾の折という。

(注2) 「熊本の城」参照

(注3) 城跡の南側谷間の呼称・焼畑中に鷹が刻まれた金の指輪が出土したという。

(注4) 舟着き場跡と伝わる。

左近城 (球磨郡岡原村大字岡本)

『求麻外史』によれば、城主は相良長統という。地元では「長統が日向・薩摩勢に備えて築いた城」と伝える。

城跡は、岡本城跡の西側に谷一つへだてて横たわる丘陵末端部(標高210m・北側麓の水田面よりの比高約25m)に位置する。地元の人の話によれば、かつて丘陵地の背面は長方形の平坦地となっており、丘陵地斜面には幾段にも階段状地形が重なっていたらしいが、現在は岡原村の協同桑園となり、ほとんど旧地形を止めない。わずかに階段状地形の一部と城跡東側麓に左近城道と称される古道を残すのみである。古道については、遠く宮崎・鹿児島両県に通じる山越道となっている。

城跡の北西側麓300mの地点には、長統が寛正六年(1465年)に建立したと伝わる藤崎八幡宮が祀られている。

宮原城 (球磨郡岡原村大字宮原大字宮原)

城主不明。城跡は宮原谷の西側にあつて、「城床」という字名を残す丘陵末端部(標高230m・北側麓の水田面よりの比高約40m)に位置する。丘陵の背面は数段からなる広い平坦地(杉の植林)となっているが、東側鞍部や丘陵斜面には何の遺構も認められない。しかし、城跡麓には、「城の表」・「射手馬場」・「門前」・「横馬場」の小名があり、室町時代の作風をとどめるといわれる観音堂も存在する。なお、堂の周辺に残る沼池(円形・直径10m)については元来池であったといわれている。「城主の持ち馬(月毛の馬)が溺死するに及んで埋め戻された池が後に沼化したもの」と古老はいう。

(注1) 城跡直下の集落名

(注2) 以前はここで流鏝の行事がおこなわれていた

(注3) (伝) 城門があった所

(注4) (伝) 城に関連した市場があった所

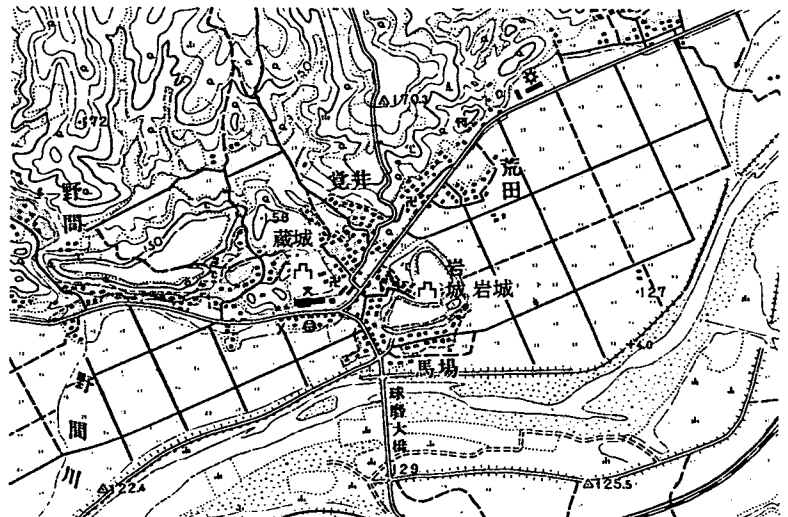
(注5) (伝) 乗馬の練習場

(注6) 昭和37年 県有形文化財指定

岩城 (木上城) (球磨郡錦町大字木上字岩城)

平河義高の築城によるという。その後の城主については、『肥後国誌』に「古城跡・岩城ニ二ヶ所アリ、川ノ久保田大蔵、山ノ方新宮伊豫守居城、双方時代違ト伝」という記事が見える。

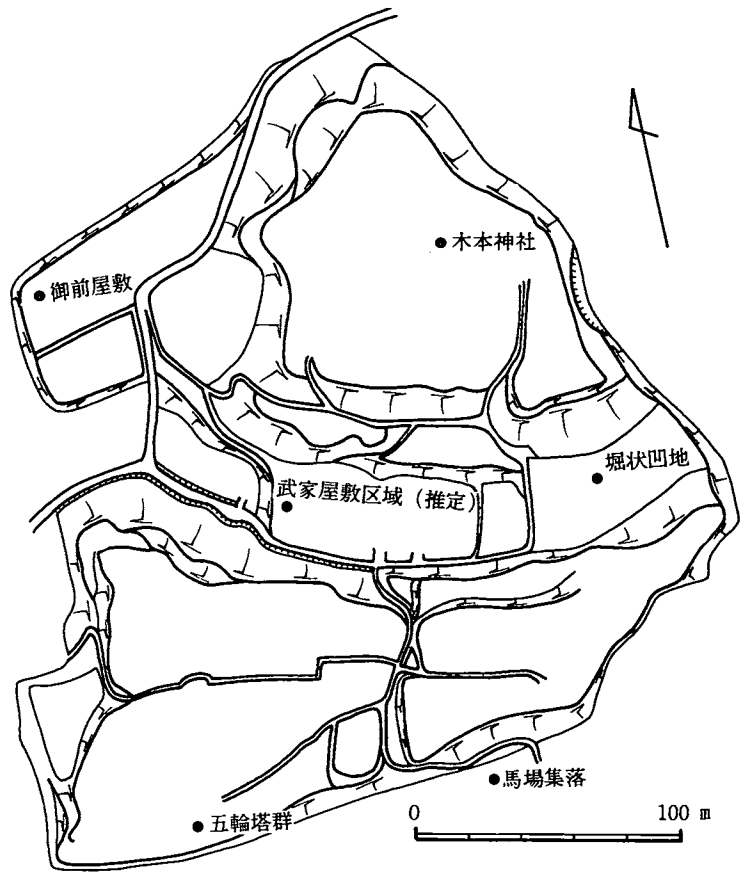
城跡は球磨川流域にあつて、「岩城」という字名を残す独立丘陵地(標高120m・東側麓の水田面よりの比高40m)に位置する。当該地は北西方向(長さ130m)と東西方向(長さ250m)に主軸を呈する二又状の地形をなしており、中央部には、西側に開口する帯状形の迫地(長さ150m・底幅40m)が走る。丘陵地の背面はいずれ



も鋭角三角形の広い平坦地（畑地）となっており、地元の人は、北側区画を「木本城」、南側区画を「前城」と呼ぶ。
このもとじょう 木本城、まえんじょう 前城
(注1)
 事実、コーナー部分は堀切状(底幅30m)の窪地である為に、両区画は外観上分離した形となる。遺構的には何ら見るべきものはないが、中央部を走る迫地は、注目する必要がある。なお、同地内に建ち並ぶ家屋は、開口の限られた方向からしかその存在をうかがい知る事が出来ないのである。

開口の北西側を、「御前屋敷跡(小名)」と称するのをはじめとして、城跡周辺には「馬場」・「大堀」・「大園」・「神倉」・「蔵城」・「横馬場」・「本町」・「犬の馬場」という字名がのこっている。

(注1) 同地内の一隅に祀られている木本神社については、『求麻外史』に「永正年間日向国霧島神社ヲ勧請スト云」という記事が見える。



岩城 略測図

くらんじょう 蔵城 (球磨郡錦町大字木上字蔵城)

木上地区に、「蔵城」という字名を残す丘陵地末端部があり、「岩城」に関連した遺跡の存在が考えられる。地元では、「蔵城には相良氏と新宮氏(平河義高氏後の岩城居住者)に、米を上納するための蔵が建てられていた」という伝承がある。しかし、当該地は昭和の中頃に青年学校の敷地となって、一部が削平されたのを皮切りに、昭和24年に木上中学校が移転してきた為に、大幅な現状変更を受ける事になった。旧地形の半分以上は失なわれたという。現在、残存部は藪地になっているが、遺構的に見るべきものは何もない。



蔵城 略測図

つちや 土屋城

(球磨郡錦町大字一武字城)

城主名を記載した文献はないが、地元には、土屋八市左衛門や加藤氏(相良氏家臣^(注1))の在城説が伝わる。

土屋集落の西側に位置する丘陵地末端部(標高90m・集落よりの比高30m)を地元の人々は、「土屋城」と称する。丘陵地の背面は、帯状形の広い平坦地(畑地、北西方向に主軸を呈し、長径200m・短径100m)となっているが、遺構的には見るべきものはない。しかし、東側麓には「蔵番人の館跡」・「蔵屋敷跡」・「寺跡」と伝えられる所があり、集落内に古くからあるという「倉本」姓は、この伝承と関連をなすものであろうか。

城跡と集落を含めた範囲に、「城」という字名が残っており、観音堂(一城寺跡)とその周辺には、十数基を数える五輪塔が並ぶ。

(注1) 原城から家来二人を付けて移されてきたと伝わる。

永池城

(球磨郡免田町大字乙字浜殿)

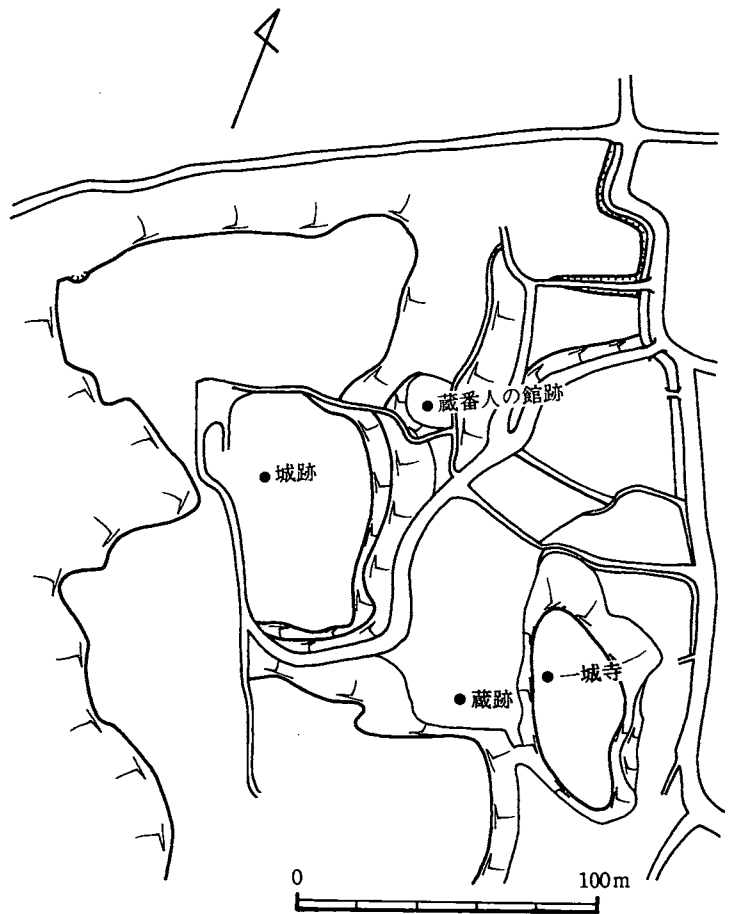
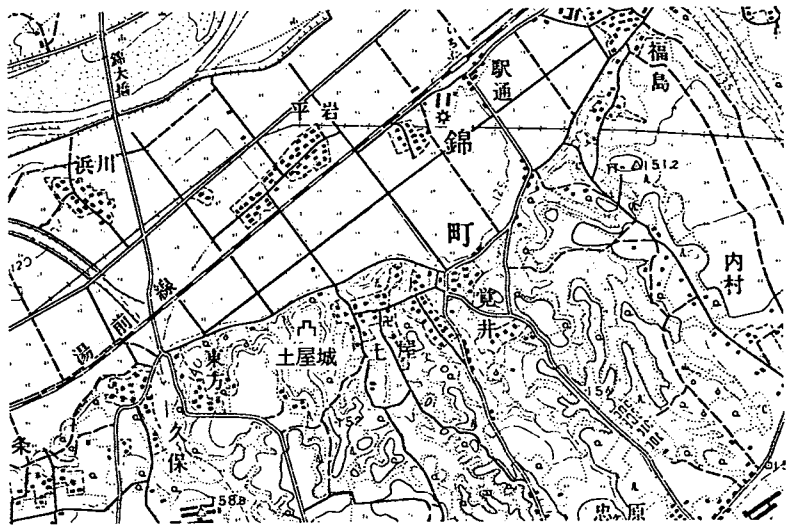
『球磨郡誌』には「相良初代長頼公の晩年に木上城主平川義高が相良家に反して滅んだ時、永池の地頭伯耆覚左衛門は平川義高の臣であった」という旨の記述がある。^(注1)

免田町字浜殿2837番地が永池城跡と伝わっているが、現在、当該地は畑地で遺構は何も観察されない。ただ西方に流れる水路は、「覚左衛門こうじ(使い水)」とか「覚左衛門ゆごう(飲料水)」と呼ばれ、毎年行われる旧8月21日の伯耆覚左衛門の供養にはこの溝から捕れた魚を供える習しがある。^(注2)さらに東北側の永池観音堂の東には、覚左衛門の墓と伝わる板碑がある。

畑地からは、約50年前に高さ6.5mの金銅仏が出土した。尊名不詳。現在、西静己氏(土地所有者)の所有となっている。

(注1) 地元では柏木覚左衛門と称されている。

(注2) 現在、この水路は構造改善事業でコンクリート溝となり、魚も姿を消した。



土屋城 略測図

鍋城

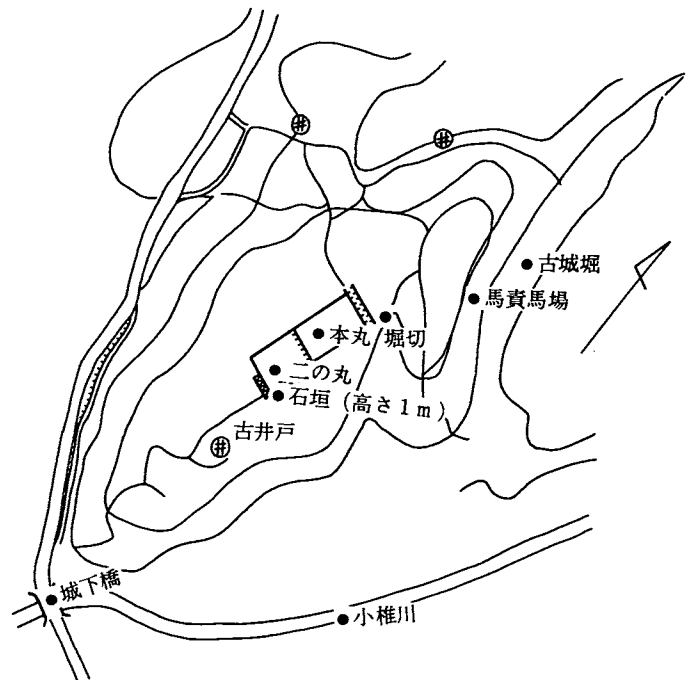
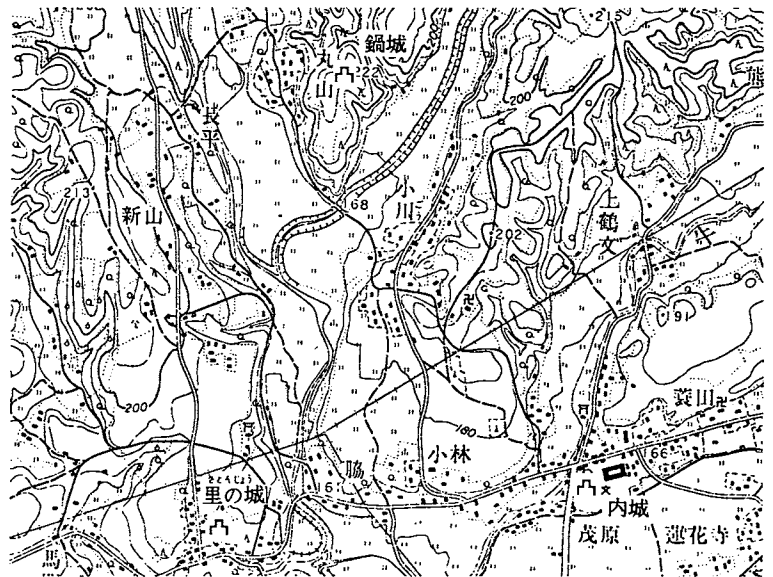
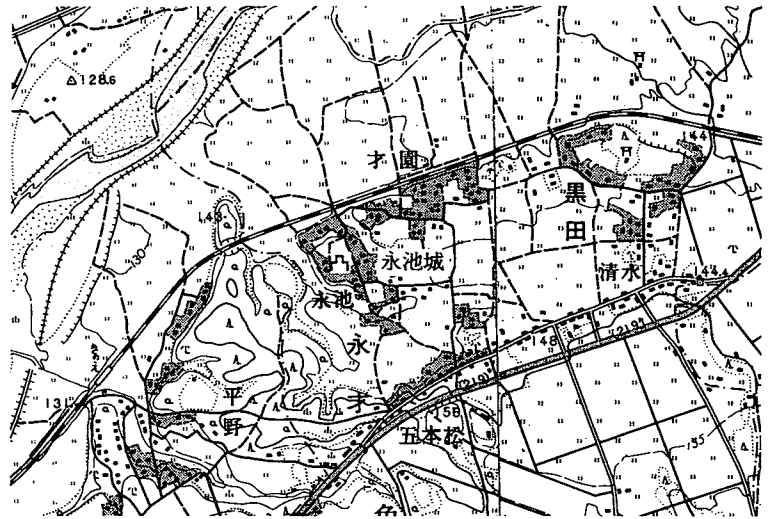
(球磨郡多良木町大字黒肥地字鍋城)

上相良氏代々の居城という。『嗣誠獨集賢卷之一』の中の第二弥五郎頼氏の項に「文應元年庚申(1260年)王宮社修造同二年(弘長二年)辛酉鍋城長運寺再興」の記事が見える。『求麻外史』巻一之二蓮佛公(長頼)第二の項には「弥五郎頼氏、公第二子也、及二蓮寂公薨、公以多良木授頼氏、續其後(中略)頼氏築鍋城而居焉」と記述されている。

城跡は小椎川と栖山川の合流点にあって、「鍋城」という字名を残す独立丘陵(南北方向に主軸を呈し、標高200m・東側麓の水田面よりの比高約40m)に位置する。丘陵の背面は、南北幅400m・東西幅100mを越える大規模な帯状の平坦地(主に畑地)となっており、城跡の範囲確認は困難であるが、南側先端部寄りに長さ43mの堀切(堀幅5.5m)が観察される。また、堀切で仕切られた南側区画には、「本丸」・「二の丸」の小名を有する方形の一隅があり、地元ではこの地を城の中心部と伝えるようである。「本丸」は長径85m・短径30~36mを計り、南側で2mの落差を持って「二の丸」が接する。「二の丸」は長径44m・短径30~39mを示し、東縁一帯と南縁一部に高さ1m程の石垣を残す。周辺の竹藪には古井戸(直径4m)も現存しており、同地内での生活址の存在が推察される。

一方、堀切より北側へ75mの地点には栗林があるが、この一帯が城跡内で最も高く、『多良木町史』編纂に伴う発掘調査の結果、多量の土師質土器とともに柱跡や礎石が検出された。この遺構は、城跡における位置から、地元ではいわゆる望楼跡ではないかとする。また栗林の周辺の畑地には五輪塔の残欠部が点在しており、土師質土器片が出土する。堀切に近い所からは南宋系と見られる青磁片も出土する。

城跡の北端部は「古城堀」という小名を残す自然の迫地となっており、対岸には「赤田(字名)」の丘陵が展開する。迫



鍋城 見取図

地の底幅は長さ約11mで両壁は切り立ち、岩肌が顔をのぞかせている。まさに格好の堀切と言えよう。さらにこの「古城堀」は、コーナー部分で鉤型に大きく湾曲し、城跡の西側麓を南北に走るので、城跡にとってこの上ない地の利となる。注目すべき事に西側麓の迫地には、「岩風呂」と称される横井戸も存在する。入口は高さ2m・横幅4mで内部は奥行きが15m程で3本に別れ、さらに奥の方へ伸びているがこの部分については調査不可能である。また入口には、横井戸の存在を隠すかのように巨石が横たわるのも興味深い。

主たる登城道は、丘陵の南端部にあり、登城口には「大手下」の小名が残る。この他、丸山と古城の両集落からの登城道がある。なお、この両集落は、武家屋敷跡と言われている。^(注3)

^(注4) (注1) 現在は危険防止のために、井戸は60cmの高さの石でふさいである。地元の話では、それでも寒い朝は、石の間から蒸気が立ちのぼるそうである。かなり大規模な井戸らしい。

(注2) 昭和47年12月下旬、多良木町史編纂会、松本雅明

(注3) 東氏宅の庭先の一部分を「的場」と呼んでいる。

(注4) 一部に「馬賣馬場」の呼称を残す。

里の城 (球磨郡多良木町大字多良木字里の城他)

城主は上相良氏一族という。鍋城の外城であったらしい。『嗣誠獨集覧』卷之一上相良連続之次第、第二弥五郎頼氏の項に、「神名伝記二日、建永二年(承元元年)丁卯(1206年)山州北野天神ヲ鍋城ニ御勧請、今ノ里ノ城天神是也、但八月十二日御鎮座、但里ノ城鎮座ハ正保三年丙戌(1646年)二月二十五日、里ノ城鍋倉訪元屋敷ニ遷座、故ニ緒人は是ヲ鍋倉天神ト称ス、但王宮社人緒方長門惟重迂宮ス、云々」という記事が見える。

球磨川流域にあって、「里の城」「九鹿」「馬門」の三地域をまたぐ範囲(東西約500m・南北約150m)が城跡と伝わる。現在は公園・宅地・畑地・雑木林等になっており遺構の確認が困難であるが、「桜馬場」の小名をはじめとして、城跡西側部分の凹道(道幅7m)に「堀」という呼称が残る。^(注1)

この凹道は延長されて城跡の北側部分を走るが、聞き込み等によってその痕跡をたどれば、最終的には長形状の一区画(東西に主軸を呈し、長径200m・短径130m)を取り囲む事になる。

すなわち、この事から四方を空堀で囲まれた館的な遺構の存在が推定される。同地内からは土師質土器の出土が多く、かつてはその一隅に北野天神も祀られていた。城跡はその形状からして館跡の色彩が濃い。^(注2)

^(注3) (注1) いずれも字名である。

(注2) 地元では「桜馬場」の小名が残る所から凹道を馬場道跡と考える向きもある。

(注3) 現在は、多良木町下鶴の黒木宅へ移っている。



里の城 見取図

地の底幅は長さ約11mで両壁は切り立ち、岩肌が顔をのぞかせている。まさに格好の堀切と言えよう。さらにこの「古城堀」は、コーナー部分で鉤型に大きく湾曲し、城跡の西側麓を南北に走るので、城跡にとってこの上ない地の利となる。注目すべき事に西側麓の迫地には、「岩風呂」と称される横井戸も存在する。入口は高さ2m・横幅4mで内部は奥行きが15m程で3本に別れ、さらに奥の方へ伸びているがこの部分については調査不可能である。また入口には、横井戸の存在を隠すかのように巨石が横たわるのも興味深い。

主たる登城道は、丘陵の南端部にあり、登城口には「大手下」の小名が残る。この他、丸山と古城の両集落からの登城道がある。なお、この両集落は、武家屋敷跡と言われている。^(注3)

^(注4) (注1) 現在は危険防止のために、井戸は60cmの高さの石でふさいである。地元の人の話では、それでも寒い朝は、石の間から蒸気が立ちのぼるそうである。かなり大規模な井戸らしい。

(注2) 昭和47年12月下旬、多良木町史編纂会、松本雅明

(注3) 東氏宅の庭先の一部分を「的場」と呼んでいる。

(注4) 一部に「馬賣馬場」の呼称を残す。

里の城 (球磨郡多良木町大字多良木字里の城他)

城主は上相良氏一族という。鍋城の外城であったらしい。『嗣誠獨集覧』卷之一上相良連続之次第、第二弥五郎頼氏の項に、「神名伝記二日、建永二年(承元元年)丁卯(1206年)山州北野天神ヲ鍋城ニ御勧請、今ノ里ノ城天神是也、但八月十二日御鎮座、但里ノ城鎮座ハ正保三年丙戌(1646年)二月二十五日、里ノ城鍋倉訪元屋敷ニ遷座、故ニ緒人は是ヲ鍋倉天神ト称ス、但王宮社人緒方長門惟重迂宮ス、云々」という記事が見える。

球磨川流域にあって、「里の城」「九鹿」「馬門」の三地域をまたぐ範囲(東西約500m・南北約150m)が城跡と伝わる。現在は公園・宅地・畑地・雑木林等になっており遺構の確認が困難であるが、「桜馬場」の小名をはじめとして、城跡西側部分の凹道(道幅7m)に「堀」という呼称が残る。^(注1)

この凹道は延長されて城跡の北側部分を走るが、聞き込み等によってその痕跡をたどれば、最終的には長形状の一区画(東西に主軸を呈し、長径200m・短径130m)を取り囲む事になる。

すなわち、この事から四方を空堀で囲まれた館的な遺構の存在が推定される。同地内からは土師質土器の出土が多く、かつてはその一隅に北野天神も祀られていた。城跡はその形状からして館跡の色彩が濃い。^(注2)

^(注3) (注1) いずれも字名である。

(注2) 地元では「桜馬場」の小名が残る所から凹道を馬場道跡と考える向きもある。

(注3) 現在は、多良木町下鶴の黒木宅へ移っている。



里の城 見取図

部分の3条の堀切については底幅1~2mを計り、いずれも土塁を付随するものである。^(注2)城跡麓の熊野座神社には室町期の作と見られる狛犬や天正年間の銘が入った五輪塔の他、板碑・庚申塔が数多く残っている。^(注3)

(注1) 建久年間(1190~1199年)頃、豊富五百町の地頭であったという。久米三郎は蓮華王院領たる人吉荘の地頭の一人でもある。(相良家文書之一) 浄心寺阿弥陀堂(湯前町字下辻)に久米殿の墓と称される鎌倉期の板碑がある。

(注2) 切り込み部分からの底幅である。

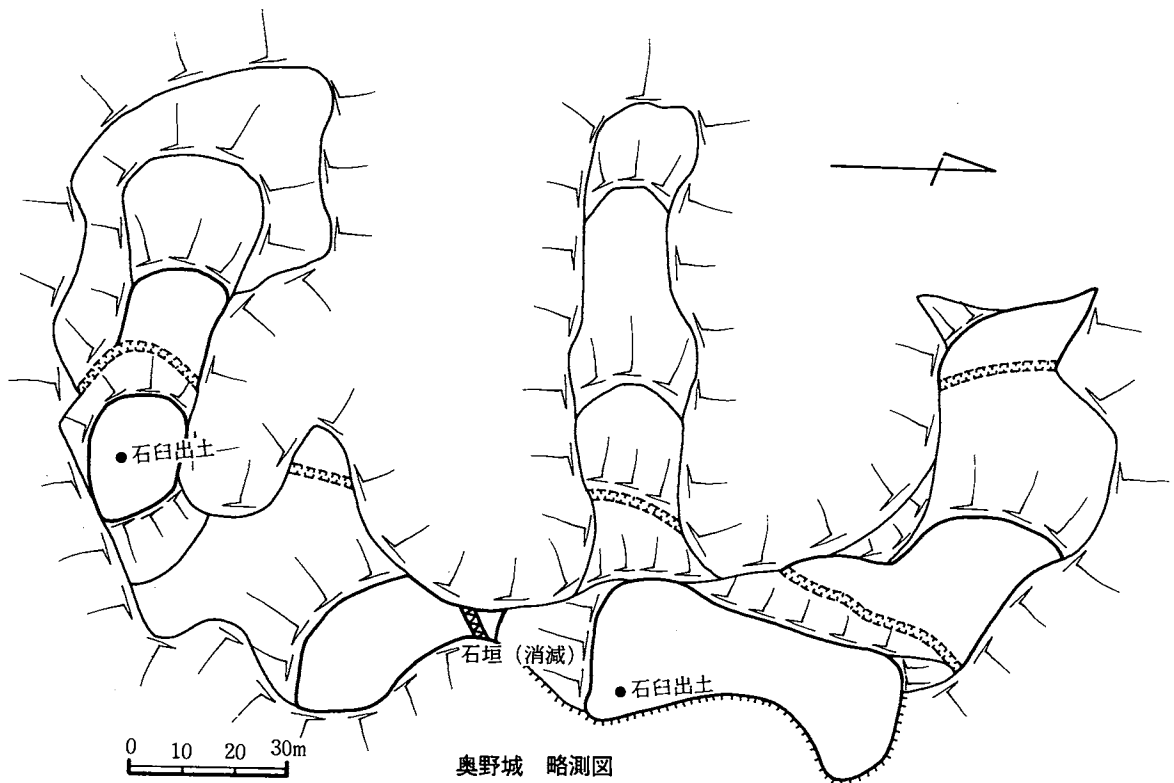
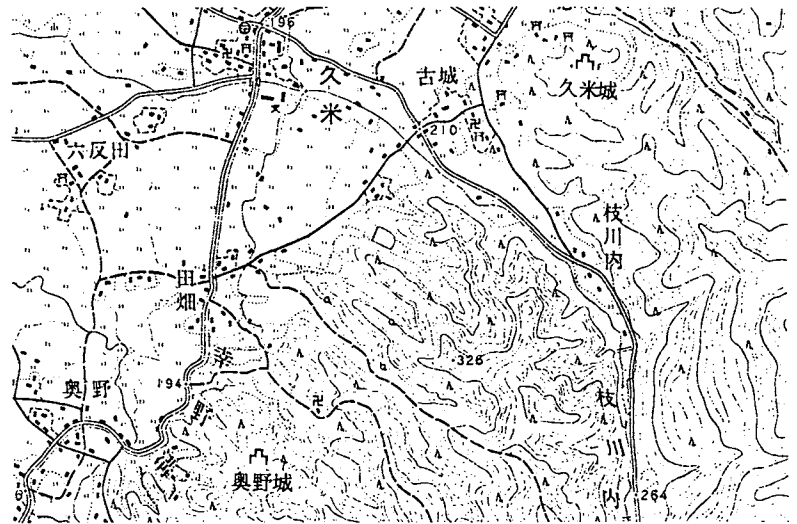
(注3) 石質凝灰岩。総高177cm。地輪の正面

中央に菩提文の梵字を刻み、その下に「^(蜀池)越江蓮芳大居士」左に「天正十三酉三小日 齋吉」という銘が見える。
奥野城 (球磨郡多良木町大字奥野字城山)

城主は上相良氏家臣の奥野氏一族という。

『相良家文書之一』の中の「建武五年(1338年)八月□日相良定頼申状案」に、「良相孫三郎継頼、須恵、永里、岡本、奥野、橘佐渡八郎以下凶従等、令同心千武敏、(肘付)兼重、祐廣、内河等、打取_(蜀池)當郡_(蜀池)構城郭_(蜀池)於郡内_(蜀池)、弘入_(蜀池)鎮西凶徒等、相従_(蜀池)近国_(蜀池)、擬_(蜀池)令蜂起_(蜀池)之間、云々」とある。

城跡は奥野集落の東側にあり、「城山(字名)」と称される山稜末端部(標高240m・北側麓の水田面よりの比高約40m)に位置する。山頂部分は瓢箪形の平坦地(南北方向に主軸を呈し、長径60m・短径14~28m)となっているが、かつてこ



の地より礮臼が出土した。東側鞍部については堀切の役目を果たす迫が走る。さらに山頂より集落に向って下る三本の尾根には、かつて合計6条もの堀切(北西側2条・西側1条・南西側3条)が刻まれていたが、昭和45年に牧場として、開墾された際にすべて埋没した。なお、南西側尾根の最上段部の堀切は底幅1.5m・深さ3mを計り、堀壁の片面に石塁を有するものであったという。^(注1)この他、北西側と南西側尾根には数箇所平坦部が観察されたという。中には開墾の折、礮臼が出土した区画もあったらしい。

奥野集落には「上馬場」「下馬場」の字名が残っている。

(注1) 昭和30年前半の状況という。

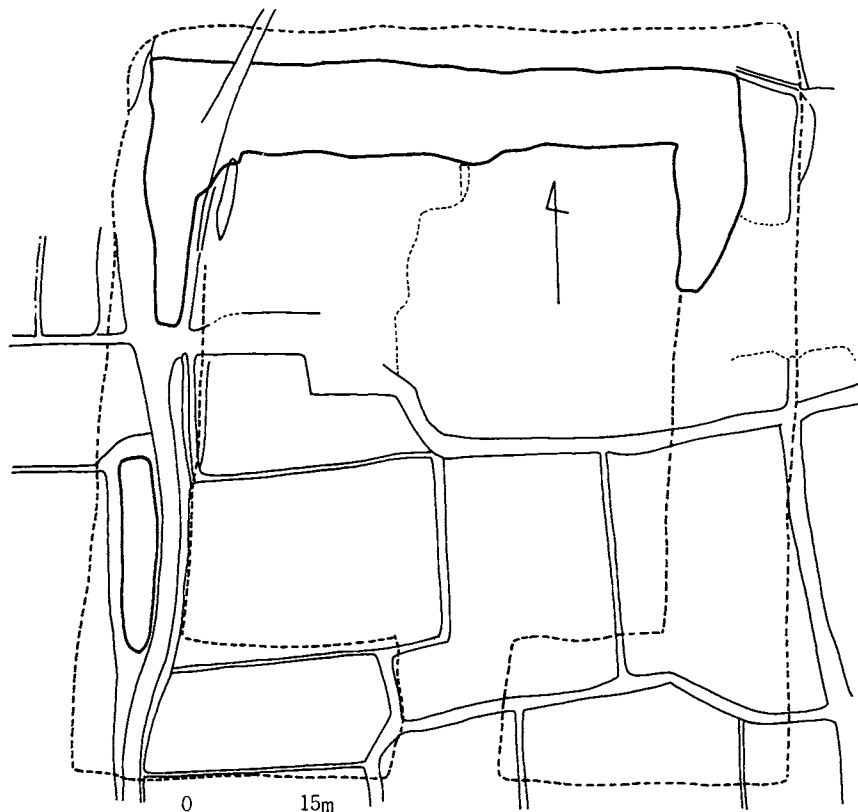
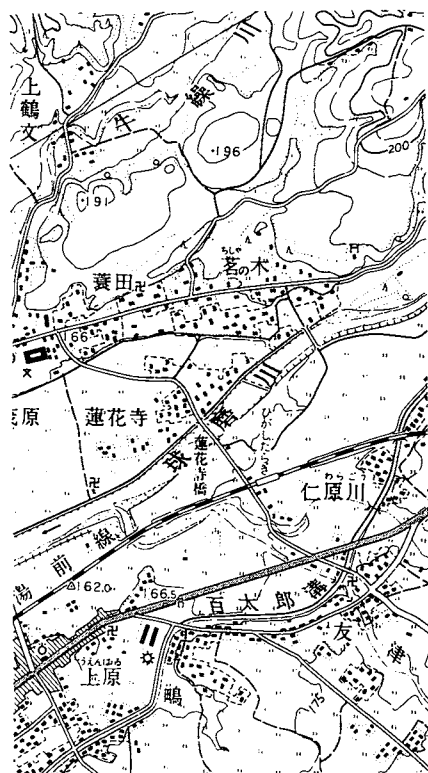
相良頼景館 (球磨郡多良木町大字黒肥地字蓮花寺)

江戸時代の編著である『相良家伝』によると、上相良の始祖相良頼景は、源頼朝が治承四年(1180)伊豆で旗あげしたときこれを拒否したことから、球磨郡多良木の伊勢弥次郎へ預けられた。下向の時期は建久四年(1193)と考えられ、その後頼朝のおぼえもよくなり、頼景は多良木荘の支配を認められた。館跡は人吉盆地を貫流する球磨川の上流、球磨川畔右岸堤防沿いに位置する。球磨川改修工事により館の一部が消滅することになったので、それに先だつ発掘調査によって次のことが判明した。東西北側に幅9m・高さ2.5m前後の土塁を構築し、南側は人工による切落しを造り、南面の球磨川面を正面として、球磨川の舟運を考慮した設計の館である。館の規模は、土塁内側で東西約54m・南北約60mを計る長方形を呈した館である。三方の土塁外側には、幅5m・深さ2mの外濠がめぐっていた。館内には数棟の建造物が構築されていた。土師器、青磁・白磁、瓦質の播鉢、土師質火鉢、須恵器系土器、滑石製石鍋それに鉄滓などが出土し、遺物の年代は13世紀前半に比定される。

考古学的出土遺物・遺構と文献にみえる頼景館とが照応することは興味深い。

注1 「歴代私鑑」「族蹟備考」「御当家聞書」「求麻外史」

注2 熊本県文化財調査報告第22集「蓮花寺跡・相良頼景館跡」熊本県教育委員会昭和52年



相良頼景館 実測図

小多田城 (球磨郡水上村大字岩野字丸山)

城主は東七兵衛尉という。『球磨郡神社記』には「天文年中(1532~1554年)、相良義滋が隅州菱刈に出陣の時、岩野の代官小多田城主東七兵衛尉が従軍、帰陣後、薩州牛山諏訪社を勧請し、岩野鉢久保に草創」と記されている。

城跡は高瀬の集落の北西側にあつて、「城山」の小名を残す山稜末端部(標高254m・高瀬の集落より比高約65m)の山林に位置する。

山頂部分は、楕円形の平坦地(北西に主軸を呈し、長径80m・短径50m)となっており、南西方向の下段に向つて、数段の階段状地形(幅6~7m)が重なる。北東側の鞍部には、「お守り谷」と称される迫がはいつているが、その一部分には、堀切(幅4~5m・深さ2~3m)が築かれている事がわかる。

城山南側の登城口に残る空堀は、長さ5m程で東側へ直角に折れて消滅する。

古井戸も存在したらしいが、現在はその位置を確認できない。

湯山城 (球磨郡水上村大字湯山字高城)

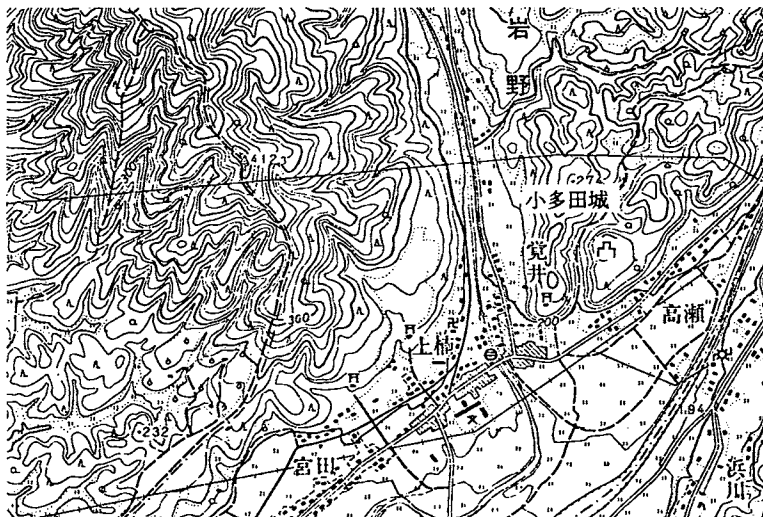
天文年間には平瀬盛の家臣、湯山宗豊が居城していたという。

城跡は湯山川流域にあって、北西に主軸を呈する長さ500m程の独立丘陵地(標高349m・北側麓の水田面よりの比高約40m)に位置しており、「高城」の字名を残す。しかし、南東側部分の長さ200mは、湯山小学校の敷地となっており、旧地形を止めない。

したがって、城跡として残るのは、北西側部分の杉林のみである。

杉林の山頂部分は楕円形状の平坦地(長径100m・短径50m)となっており、裾部には階段状地形が重なる。南東側の野首部分には堀切も観察される。古老によれば、城跡には「堀割」と「門口(もんくち)」の呼称があったという。

城跡の周辺には「上馬場」・「下馬場」の字名を残す集落がある。



ゆのまえ 湯前城

(球磨郡湯前町大字下城字野首)

『求麻外史』によれば、東直政が居城していたが永禄二年(1559年)に没落、翌年に能登が城主になったという。慶長九年(1604年)に至って「普門寺を湯前城内に移す」という記事が『球磨郡神社記』に見える。

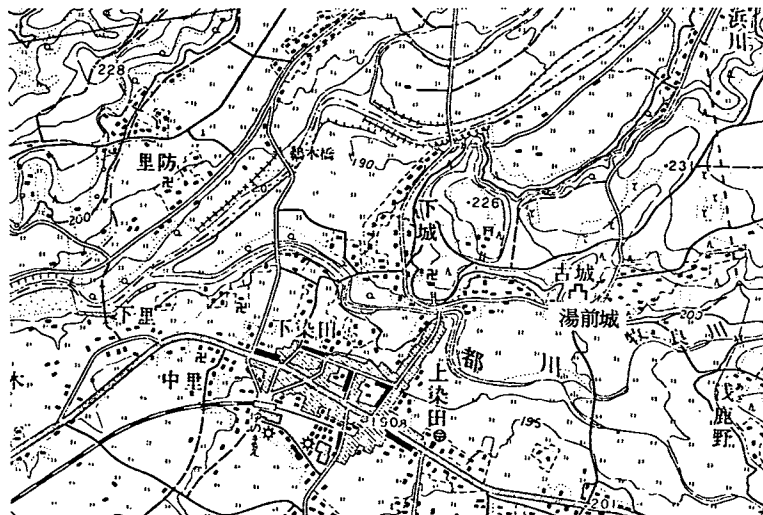
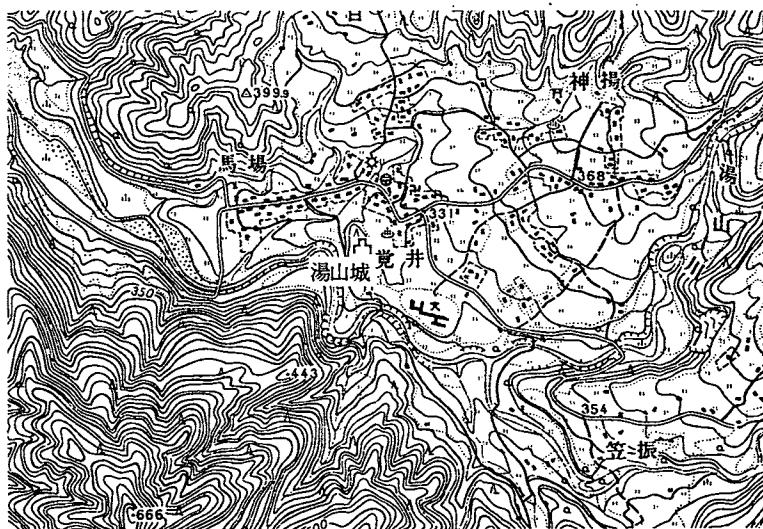
城跡は都川と球磨川の合流点にあって、野首の字名を残す山稜末端部(標高224.7m・北側麓の水田面よりの比高約45m)に位置している。

山頂部分は楕円形の平坦地(東西70m・南北80m)となっており、南側裾部に里宮神社(市房山神社)が存在する。

城跡における最も顕著な遺構は東側鞍部を断切る長さ200mの堀切(深さ3~4m)で、これは最終的に西側に折れ、里宮神社の南側下を走ることになる。西側延長部も同じく200mを計る大規模なものである。堀幅は広い所で30m程に達し堀底は二段構えになっている。

城跡周辺には「下城」・「水ノ手」・「古城」・「上城」の字名をはじめとして、「蔵坂」・「三助手路」等の小名が残っており、興味深い。

南側麓の集落を「加古井」と称するが、これは「囲」の意をなすものであろうか。



天 草 地 区

1 鎌倉時代

天草の動きが確実な文献史料に現われるのは鎌倉時代になってからである。元久二年（1205年七月）志岐光弘が下島北部の六ヶ浦（佐伊津・鬼池・蒲牟田・大浦・須志浦・志木浦）の地頭職と与えられたのが初見史料である。志岐系図によると志岐氏は府官藤原氏で菊池氏と同族であり、山鹿兵藤大夫経政の系統で、光弘の祖父弘家が志岐氏を号したというから、平安末期に志岐を中心とする下島北部の開発領主として出発したと考えられる。そして幕府が成立すると今日の荅北町から本渡市西部にいたるその所領を安堵され国御家人となったのである。

一方、志岐と並んで天草を二分する天草氏は、貞永二年（1233）二月、種有がその所領である本砥島地頭職を播磨局を家督にして譲与したのが初見である。この本砥島のうちには、河内浦（河浦町）・大多尾（新和町）・深海（牛深市）などがふくまれているから、それは海岸部の小平地の集まりとはいえ、下島の南部から東北部にいたる広範な地域がふくまれていたのである。天草氏は平氏の最有力家人であった原田種直と同族の最有力府官家である大蔵一族であるという。志岐氏と天草氏という天草の開発領主が、共に府官系豪族とされることは、平安時代以前における天草の歴史的位を考える上で一つの重要な問題点であろう。

天草氏は所領を一族内で分割し、河内浦氏（河浦町）、宮地氏（新和町）などが分立した。これは反面惣領権の弱体化を招いた。志岐光弘の孫景光は、天草氏の尼妙性と婚姻関係を結び、その縁を利用して天草氏の中心所領本渡に勢力を拡大した。それ以前景光は志岐浦を得宗領に寄付しており、得宗代官としての権威が大きくものをいったのである。そして正和二年（1313）には、景光の子景弘（弘円）は本砥島の地頭職に補任された。といってもすでに河内浦氏・宮地氏など独立していたから、この地頭職の実態は、本渡周辺に限られたものとみられる。

これを不満としたのは宮地を分割されていた仏意である。彼は天草氏本貫の地を回復すべく元徳二年訴訟を起し、好円との間に訴陣を番えたが、得宗権力を背景とする好円の支配をくずすことはできなかった。

その頃大矢野島には天草氏と同族の大矢野氏が躰居していたことは、大矢野種久・種村が弘安の役で活躍していること（「蒙古襲来絵詞」）から知られるが、上島の栖本氏や上津浦氏（いずれも天草氏と同族）も、まだ史料には現われないが、すでにある程度の領主的発展を遂げていたものと思われる。

2、南北朝・室町時代

鎌倉幕府の倒壊＝北条氏の滅亡で志岐氏はうしろだてを失ったが、高弘はすぐ足利方につき、建武四年（1337）二月には、一色道猷から本砥島と亀川の地頭職を安堵された。しかし本砥城には天草氏の本貫地をとり返そうとする河内浦三郎大夫（種国）が一族と共に楯籠り、道猷に派遣された両使も高弘に打渡すことができなかった。もっとも暦応二年（1339）志岐四ヶ浦は再度安堵され、貞和五年（1349）には直冬によって志岐四ヶ浦はじめ、本砥・亀河・佐伊津・鬼池・蒲牟田の地頭職を安堵された。しかしもとより全てが当知行だったのではない。

一方天草氏は本宗が衰退したものの、河内浦氏は鎌倉末期種国が出るにおよび、河内浦・軍ヶ浦・白河内など、下島南部を中心に所領経営の充実を計り、勢力を拡大した。そして幕府倒壊に乗じて本砥を奪回して天草氏を称し、菊池氏（南朝方）とつながって志岐氏と下島を二分した。

上島では北部の上津浦、南部の栖本氏が、大矢野島では大矢野氏がそれぞれに領主的発展を計っていたが、とくに上島西北部の島子地区には天草氏が進出し、それを阻止する北朝側と争奪が続き、至徳三年（1386）には、詫磨親氏が島子の、同貞宗が島子の内の志柿の地頭職を今川了俊から与えられ、天草種世はその領知を妨げている。詫磨氏の知行も決して永続的なものではなかった。

南北朝の合一がなると、肥後守菊池氏は守護職を確保し、応永六年（1339）には志岐高遠が本戸（本渡）の領知権を菊池武朝から安堵されたのをはじめとして、以来天草の所領秩序は守護菊池氏によって維持されることになった。もっとも室町期（15世紀）の確実な文献史料は皆無に近く、わずかに文安五年（1448）上津浦種和が、庄内の妙楽寺に鰐口を寄進していること、長享二年（1489）志岐遠治が菊池重朝によって家督と当知行の安堵を受けていることが確認されるだけ

である。

3、戦国時代

16世紀になると急に天草の動きは活発化する。前世紀以来河内浦天草氏の勢力は本砥から島子に及び、志岐、上津浦氏と激しく対立していた。明応十年（1501）、守護菊池武運（能運）はその調停にあたり、天草氏は退き、本砥は志岐氏が、島子は上津浦氏が回復した。そして「天草一揆中」に八代郡の小野、豊福の両所を宛給した。一揆中を構成したのは、この時志岐領の蒲牟田に集まった上津浦・宮地・天草・長嶋・大矢野・栖本・久玉それに志岐の八氏であり、これが当時の天草の国人達であった。

この時以来、志岐氏は守護菊池氏との連繫を強め、天正十七年（1520）には菊池武包から宇土、託磨、益城三郡にわたり計100町の土地を給せられるなど、一揆中最大の勢力をもった。しかし、天草氏も尚種の代となり、大いに勢力を振り、まず宮地・久玉の両氏を亡ぼし、ついで本砥に向い享禄年間町山口川の激戦の末、ついに本砥を回復した。そして享禄五年＝天文元年（1533）尚種は、志岐・栖本・大矢野・長嶋を味方にした上で上津浦に圧力をかけた。いよいよ天草も本格的に戦国の争乱に突入したのである。

上津浦治種は衰えた菊池に代り15世紀末以来八代に進出していた相良氏に援をもとめ（相良為統が名和顕忠を八代から追出した時上津浦邦種が協力した）相良勢は上津浦城に詰めた。以後相良氏は長島を制圧し、天草への影響を強めるにいたる。宮地・久玉につづいて長島が脱落し、いわゆる天草五人衆の時代を迎えるのである。とはいえ依然志岐・天草の両氏が、それぞれ志岐・鬼池・佐伊津と河内浦・軍ヶ浦・本砥の貿易上の要衝とおさえて有力であったが、以後天正十七年（1589）豊臣政権によって制圧されるまで、大友・相良・島津の本土勢力の消長と連動しつつ、五人衆は複雑な動きを展開する。ただ史料的にはほとんど「八代日記」の継片的記事に頼らざるを得ず、八代の相良氏との関連で多少の事実が確認されるにすぎない。

まず天文七年七月二十日には栖本の使者によって「志岐取乱、山河方滅亡」の報が伝えられた。詳細は不明だが、志岐氏内部の紛争であった。天文十二年～十七年頃には五人衆いずれも八代に使をおくり、相良氏との結びつきによって天草内における夫々の地歩の向上に努めていることが知られる程度である。天文二十年の夏にいたり、以前から継続していた上島の上津浦と栖本の棚底（倉岳町）をめぐる対立が激化し、上津浦勢は天草・大矢野勢と共に栖本を攻めた。この時有馬より合力の大野・安德・南条らか渡海し留守の番をした。この上津浦・栖本の対立は以来ずっと戦国期天草の政治情勢の一つの焦点となった。相良氏はこの頃から天草氏に長島を相良氏に進めるよう働きかけていたが、遂に天文二十三年にいたり、長嶋鎮貞は出水に落ち、長島は相良氏の支配下にはいった。この年の年末には、天草・志岐・上津浦が共同して大矢野を攻める事件もあったらしい。

天文二十四年（弘治元）年の夏になり、がぜん上津浦・栖本の対立が激化し、天草・志岐両氏は上津浦を助けた。相良氏はその調停にあたり番衆を派遣して干渉したが、容易に片付かず、有馬の出兵（永禄元年九月 同三年九月）や、出水の長島知行、志岐と天草の隔意による志岐、栖本、有馬・出水による天草知行の島子、本砥攻撃（永禄八年六～七月）、天草・大矢野・上津浦の志岐攻撃（同七月）、相良氏の仲介による天草、志岐の和融などをはさみながらも、上津浦・栖本の対立は、永禄十年（1566）頃まで、天草の争乱の基調となった。

この頃から島津氏の影響が天草におよぶようになり、宣教師の来航にともなうキリスト教の受容問題とも関連して、新たな情勢が生れて来る。永禄九年（1566）ルイスダルメイダが志岐に来てから、志岐鎮経（麟泉）の保護でトレス・カプラルなどの相次いで志岐に来た。ダルメイダは同十一年河内浦の天草鎮種に迎えられた。鎮種が大友義鎮につながるのに対し、反キリスト教派は島津氏を頼ったが、鎮種はこれを制圧し全盛を迎え、天草氏の本拠河内浦は天草最大の一万の人口をもつにいたったという。

しかし、元亀二年（1571）にのると麟泉は大友氏とたもとを分ち、キリスト教を迫害し、天正二年（1574）には志岐・上津浦・天草・大矢野が島津義久に通じ、大友氏—相良氏の天草への影響力は大きく減退した。さらに同七年には天草尚種は島津義久の家臣となった。そして同九年、島津は遂に肥後に侵入、相良義陽を降し、天草五人衆は島津の支配下に入った。

しかし天正十五年三月、島津制圧をめざし秀吉が大軍をともなって西下すると、義久は薩摩に引きあげ、天草勢は秀吉に伏した。佐々成政の肥後入部そしてその支配への国人層の反乱（国衆一揆）と、その制圧を経て、翌十六年肥後は加藤清正、小西行長に分与され、天草五人衆は小西の下で従来の支配権をみとめられた。しかし翌十七年麟泉はじめ五人衆が行長の

命じた宇土城築城助勢を拒否したことから、行長は秀吉の命を受けて、志岐城を攻略すべく兵三千を袋浦に向けた。しかし麟泉は夜襲でこれをほうむった。行長は清正や有馬勢の助勢を求め兵一万をもって志岐城を囲んだ。志岐城には河内浦の天草主水久種、本戸城から木山弾正（もと木山赤井城主で、島津に攻略されて天草氏を頼っていた）らが助勢したが、河内浦勢は形勢をみて引き揚げ、木山も志岐から本渡に通ずる仏木坂で清正に討たれた。十一月十日志岐城はおちた。小西、加藤軍は本戸城に進み、二十五日本戸城もおち天草種元以下1300余名が討死した。河内浦の久種も大矢野・栖本・上津浦も降伏し、天草五人衆の時代は終わった。

（工藤敬一）

天草地区



- | | | | |
|-------------|------------|------------|-----------|
| 1 本渡古城 | 13 大矢野の中村城 | 25 檜本の馬場城 | 37 上野原城 |
| 2 本渡の城山 | 14 大矢野の上村城 | 26 湯舟原城 | 38 城木場城 |
| 3 広瀬の「上の山」 | 15 合浦の合の丸城 | 27 栖本・古江の城 | 39 下内野城 |
| 4 風呂ノ迫の高城 | 16 内野河内の城 | 28 河内城 | 40 御領の城 |
| 5 才津古城 | 17 教良木の城 | 29 二門戸の城 | 41 志岐城 |
| 6 志柿城 | 18 上津浦城 | 30 浦の城 | 42 大江の城 |
| 7 楠浦の城ヶ坂 | 19 赤崎の城 | 31 宮田の城 | 43 高浜の城ノ丘 |
| 8 林内の陣ノ山 | 20 大島子の城 | 32 棚底城 | 44 福連木の城 |
| 9 魚貫の城 | 21 小島子の城 | 33 御所浦の元浦城 | 45 小宮地城 |
| 10 久玉城 | 22 須子の城 | 34 大道城 | 46 大多尾の城 |
| 11 大矢野の亀の迫城 | 23 勢溜の城 | 35 大島の城 | 47 下田の城 |
| 12 大矢野の柳城 | 24 楠甫城 | 36 宮津の城 | 48 路木の城 |
| | | | 49 宮野河内の城 |

本渡市・牛深市

ほんどこじょう 本渡古城

(本渡市大字本戸馬場字城平)

『古城考』によれば、天草氏代々の居城という。『八代日記』永禄八年(1565年)七月二日の条に、「七月二日丙申志岐・栖本・有馬・和泉同前ニテ本砥動」という記事が見える。なお、本渡は本砥とも本戸とも記される。

本戸馬場町の西側に広がる山稜地一帯に、「城平」という字名が残っており、地元の人々は当該地を「本戸馬場城跡」と伝える。山稜の背面は複雑な地形となっており、3条に分かれた尾根筋に合計7箇所もの平坦地(いずれも、その形状は長方形をなす)が存在する。そして、これらの平坦地の内4箇所には、「一の丸」・「二の丸」・「出丸」・「矢線場」という小名が残っており、城跡との結びつきをうかがわせる。さらに小名を有する平坦地の配列と規模については、城跡内の最高所(標高76m)に、「一の丸」(長径64m・短径20m)があり、南東方向へ「二の丸」(長径87m・短径31m)と、「出丸」(注1) (長径78m・短径46m) (注2)が連なる。また、南西方向の尾根筋に、「矢線り場」(長径24m・短径15m) (注3)が存在する。南々東方向の尾根筋(長さ130m・幅10m)にも、「馬賣場」の呼称が残っており興味深い。

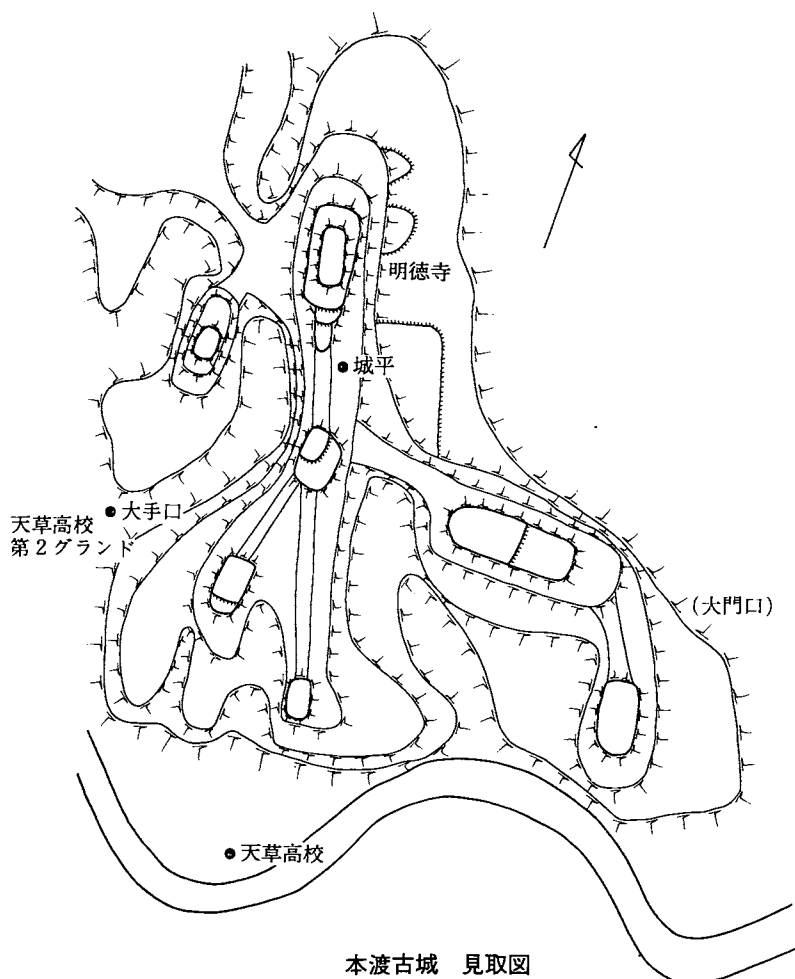
慶安元年(1648年)の『鈴木代官文書』に、本戸馬場城の「一の丸」にあたる所は「惣陣山」と云い、二の丸にあたる所は「高尾山」と記している。『清正記』によれば、現在の天草高校の第二グラウンドあたりが「大手口」という。

城跡麓に現存する地名には、「城下(小名)」・「馬場」(字名)がある。

(注1) 標高48m・城山公園となっており、キリシタン館がある。

(注2) 標高31m・千人塚がある。

(注3) 標高70m



ほんど
本渡の城山 (本渡市本渡南町大字本渡字城山他)

本渡南町に、「城山」という字名を残す小山状の丘陵地末端部(標高36m)がある。小山の上面は若干の平坦地となっており、野首にあたる南西側麓に堀切が走る。堀切には、野首に対して東側から西側に食い込む迫に連続して築かれたもので、この堀切によって「城山」は完全に独立形状の小山となる。さらに、城山の南東方向には迫を挟んで、「城平」や「城面」の小名を残す丘陵地末端部が、連続的に並んでおり、「城山」との関連性がうかがわれる。

(注1) 南公園の地である(字・南の地内)

(注2) 東光寺の南側に位置する(字・浄念の地内)

ひろせ うえ やま
広瀬の「上の山」 (本渡市大字広瀬字上の山)

広瀬地内にあって、「上の山」という字名を残す山稜末端部(標高30m)を地元の人は城跡と伝える。

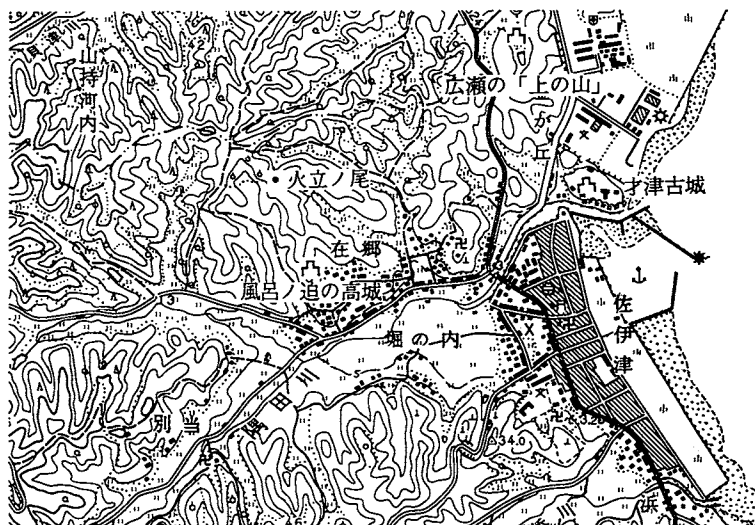
山頂部分は南東方向に主軸を呈する長い尾根となっているが、北西側の鞍部寄りと、下段部の尾根筋に長方形の平坦地が存在する。上段部の平坦地は、長径21m・短径18mを計る。また、南西側麓の広瀬集落と大矢崎に延びる水田地帯には、「屋敷」「中の丸」「代官田」という一連的な字名が残っており興味深い。

ふうろ きこ たかじょう
風呂ノ迫の高城 (本渡市佐伊津町字風呂ノ迫)

風呂ノ迫地内に「高城」と称される帯状形の山稜末端部(標高30m)がある。山頂部分は長方形の平坦地(南東方向に主軸を呈し、畑地・長径32m・短径20m)となっており、さらにこれより、北西方向へ登りつめた尾根筋(標高50m)にも、「火立ノ尾」とよばれる長方形の平坦地(長径22m・短径16m)が存在する。古老によれば「火立ノ尾」は、支岐城と大鳴子城の連絡をなすための烽火台であったらしい。

なお、高城の南側麓に開けた在郷集落には、「堀屋敷」の字名をはじめとして、高城への登り口がある。

(注1) 麻利支天の神が祀られている。

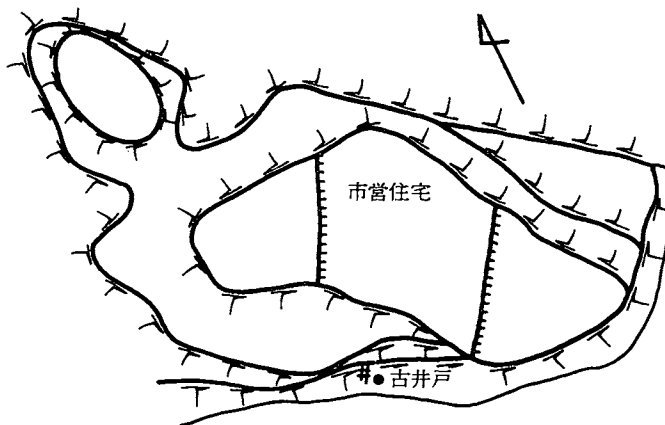


きいつ
才津古城 (佐伊津古城)

(本渡市佐伊津町字城廻)

金が丘(字・金浜)の地内から島原湾に向って、突き出した帯状形の丘陵地末端部(標高10m)に、「城廻」の字名が残っており、地元の人は一般的にこの地を『古城考』にいう才津古城と見なしている。

丘陵地の背面は、楕円形状の広い平坦地(南東方向に主軸を呈し、長径200m・短径100m)をなすが、現在はその中央部一帯が市営住宅地となっているために、遺



才津古城 見取図

構の把握は困難である。しかし、古老からの聞き取りと現地地形から推察すれば、かつては北西側から南東側へ向って、階段状に下る三区画の平坦地が存在したと思われる。北西側の上段部には石垣も存在したらしい。なお、当該地の南側斜面に重なる階段状地形の一隅には、「殿様の井戸」と称される古井戸があり、今も井戸端に居を構える住民が飲料水等に使用している。

野首にあたる北西側は、道路が貫通して旧地形を止めない。

しがき
志柿城

(本渡市志柿町字高垣・船江)

城主不明であるが、『八代日記』永禄八年三月廿三日の条に「同廿三日庚申天草殿ヨリ志かきニ動、長嶋彼留守和泉ヨリ知行」という記事が見える。また同年七月九日の条にも「同九日天草大矢野上津浦三人ニテ志柿ニ動リ…」とある。

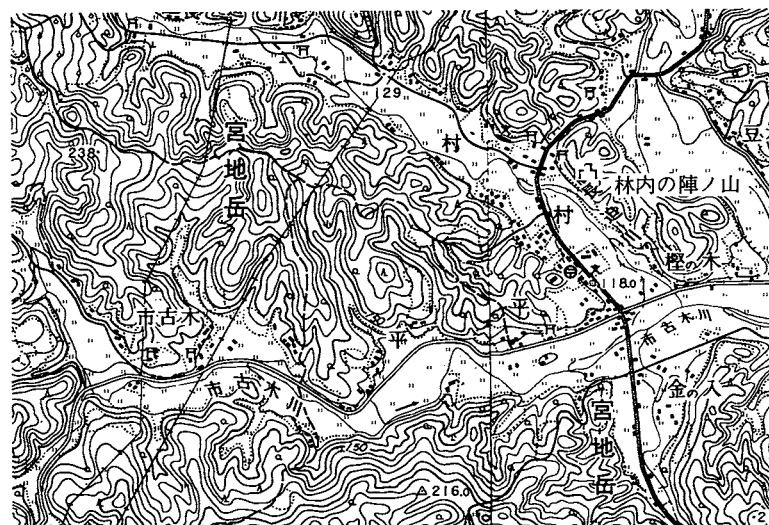
志柿町においては、「江川(字名)」と「高垣(字名)」に城跡と伝えられる所がある。しかし両城跡は、隣接した距離にある事から一つの城と見なす事が出来よう。江川地内の城跡は、北西方向に主軸を呈する山稜末端部(標高54m)に位置する。山頂部分は、長円形状の平坦地(長径51m・短径11m)となっており、さらにこれより10m下った北東側の尾根筋にも、上面に釣鐘状の平坦地(長径24m・短径20m)を有する高さ5m程の小山が存在する。一方、高垣地内における城跡の所在地は、かつて湾内に浮ぶ小島(現標高20m)であった事が歴然としている。

北西方向に主軸を呈する小島の背面には、北西側と南東側にひょうたん型(長径65m・短径22m)と、卵型(長径25m・短径20m)の形状を呈する高台(北西側と南東側の高さは各々4mと2mを計る)が存在する。

くすうら
楠浦の城ヶ坂

(本渡市楠浦町城ヶ坂 参考地)

楠浦地内の北側に、「城ノ坂」(字名)と称される丘陵地があり、城跡の存在が考えられる。しかし地元には城跡に関する伝承は何もない。

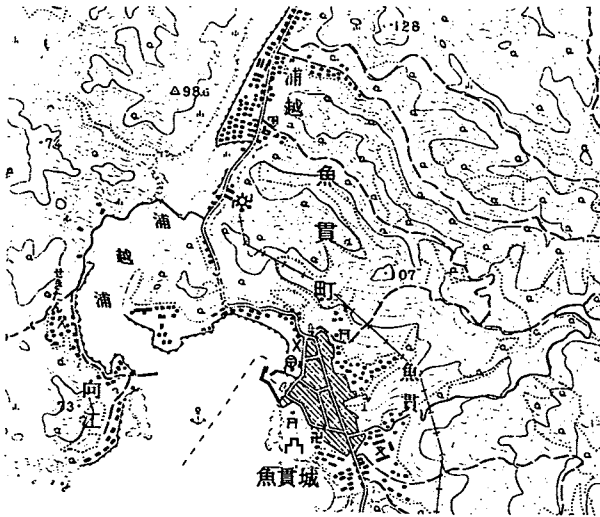


林内の陣ノ山 (本渡市宮地岳町字林内)

林内(字名)の地内に、「陣ノ山」と称される山稜末端部(標高150m・西側麓の水田面よりの比高30m)があり、南側麓の微高地部分についても、「陣の内」の小名が残る事から、地元では城跡と見なす向きがある。しかし確たる伝承に欠け、「陣ノ山」には顕著な遺構を見いだせず、「陣の内」も中学校の敷地となって、旧地形を止めない事から、推論の余地がない。なお、当該地の南東方向約1.5kmに位置する山稜にも、「山城」「門の原」「楽屋敷」という城跡関連地名(字名)が残っている。

魚貫の城 (牛深市魚貫町大字魚貫字城ノ下)

魚貫地内に、「城山」と称される小山(標高40m)があり城跡の存在が考えられる。山頂部分は、小規模の平坦地が存在するものの周辺部は、何ら遺構らしきものは観察されない。しかし、当該地は西側を天草灘に面し、東側麓の宅地を含めた一帯に、「城下」の字名が残っている所から注意を要する。



久玉城 (牛深市久玉町)

城主は久玉氏一族という。城跡は天草下島の最南端にあって、久玉浦の海を一望することのできる山稜末端部(標高47m)に位置する。当該地は規模的にはごく一般的なものであるが、注目すべき事に近世城郭の石垣とも思えるような長さ45m、高さ5mの石垣をはじめとして、数箇所に規模こそ違え、同形式のものが存在する。また、昭和47年9月、国道266号拡張工事に伴う東側麓の発掘調査で、三本の排水溝が検出されたのをはじめとして、瓦質の播鉢片、土師質土器、陶器片等が出土した。また、城跡に関連あるとされる三つの古井戸があるが、そのなかの「刀研ぎ井戸」周辺からは、かつて刀や小柄等が採集されている。鹿児島県境に所在する熊本県最南端の海城であり、昭和48年に、中世城跡としては第一号の県指定史跡となった。

天 草 郡

大矢野の亀ノ迫城 (天草郡大矢野町大字中字北亀ノ迫)

亀之迫地内の北側に、二又状(東西に分かれる)になった山稜地末端部(標高30m)があり、地元の人には城跡と伝えられている。尾根の背面には、いずれも小規模な平坦地が存在するが、それは顕著なものではなく、周辺部にも遺構らしきものは認められない。西側部分の尾根筋は、近年、牧草地にするためブルドーザーがはいった。したがって、当該地は遺構は何ら見るべきものはないが、地元の人には南側麓の一隅に「城の抜け穴」が存在するという。現在入り口部分が埋められているため、真偽の程は定かでないが地形的に見て、「横井戸」の類ではないかと思える。

大矢野柳城

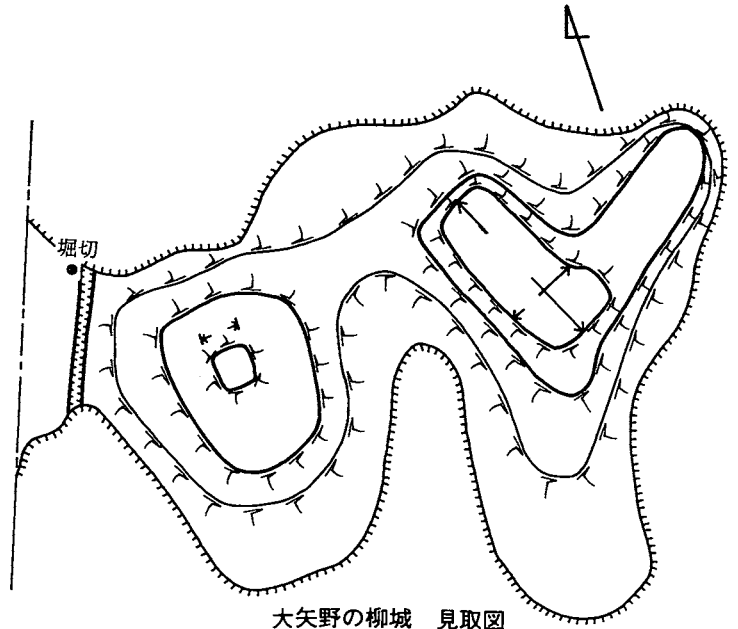
(天草郡大矢野町大字中字城山)

柳地区の南縁部に、3条の丘陵地未梢部(標高20m)が並んでいるが、うち南東端部は「城山」の字名が残っており、城跡の存在が考えられる。当該地の背面は長方形の平坦地(南東方向に主軸を呈し、長径70m・短径20m)となっており、これより北東側へ下った所にも、楕円形状の平坦地(長径43m・短径17m)が存在する。一方、中央部の丘陵地についても、背面に小規模な円形状の平坦地(直径11m)が認められる。城山に関連した遺構であろうか。この他、中央部の丘陵地と北西端の丘陵地の間を通る町道については、堀切と見なす向きもある。

なお、両地に挟まれた迫には、かつて「ひょうたん池」と称される大きな水源があったと伝わる。

(注1)

現在は縮小して井戸になっている。



大矢野の柳城 見取図

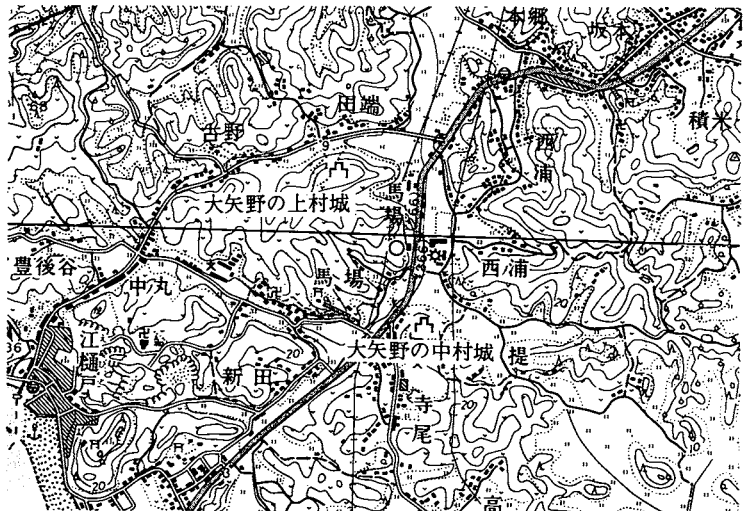
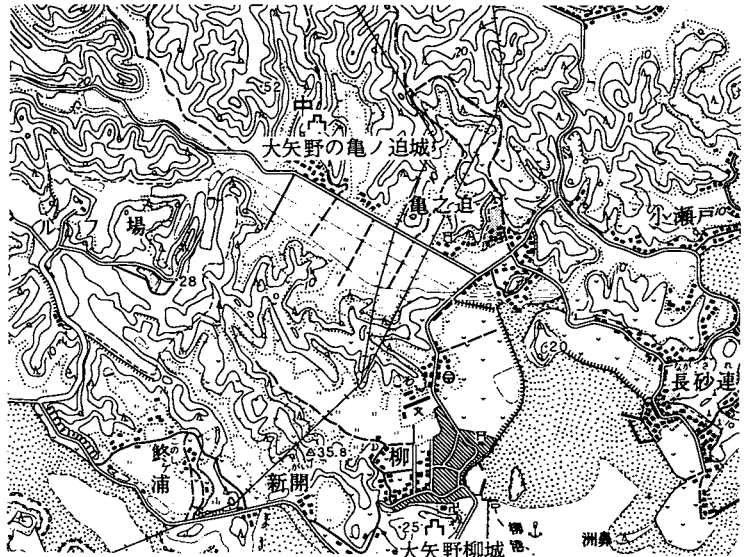
大矢野の中村城

(天草郡大矢野町大字中字城本)

『天草郡古城』に、「中村古城・赤石源石。天正十六年(1588年)没落廃城と成る中村は大矢野の内也」という記事が見える。

城跡は、「城本」という字名を残す低丘陵地の末端部(標高10m)に位置する。当該地は、現在その大部分が大矢野中学校の敷地となっているが、その北東端寄りに存在する小山(高さ7~8m)に、城跡に関連あると思われる遺構を認める事が出来る。すなわち小山の上面は、長円形状の平坦地(南東方向に主軸を呈し、長径38m・短径18m)となっており、周囲には階段状地形が重なる。

しかし、城跡の中心部が学校敷地となって失われているために、これをもって城跡の規模、内容等を推し計る事は出来ない。なお、丘陵地の南西側麓に「大門口」と伝えられる所があり、南東側の野首部分には五輪塔の残欠部が多い。



大矢野の上村城 (天草郡大矢野町大字上字浦川)

浦川地内に広がる丘陵地(標高36m)に、「古城山」や「陣床」の小名が残っており、地元の人々は城跡と伝える。慶安元年(1648年)の『鈴木代言文書』には、「城山」と記されているようである。

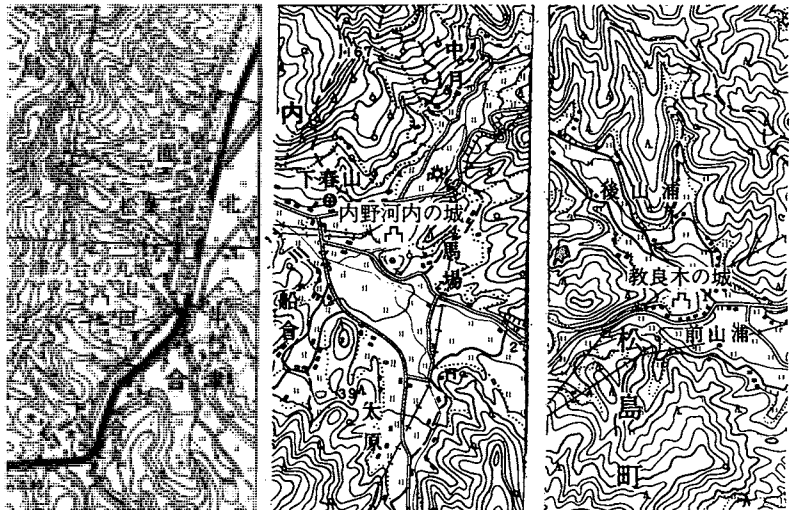
古城山の地は、楕円形状の平坦地(南東方向に主軸を呈し、長径60m・短径50m)となっており、現在はこの地に「編照院」がおかれている。さらにこれより、北西側へ4m下った野首部分には、長さ50m・幅5mの堀切(深さ1m)が観察される。なお、古城山の南側裾野を走る深さ2m程の沼池も、この堀切と関連あるものと思われる。一方、陣床の地は古城山の東方向約150m先にあり、ここにも長方形の平坦地(南西方向に主軸を呈し、長径33m・短径18m)が存在する。数年前、この地の東隅から五輪塔(大型)の残欠部が出土した。

さらに、丘陵地の東側麓一帯には、「馬場」という字名が残り、同地内の住宅には鉄砲町という小名を有する一隅もある。

合津の合の丸城

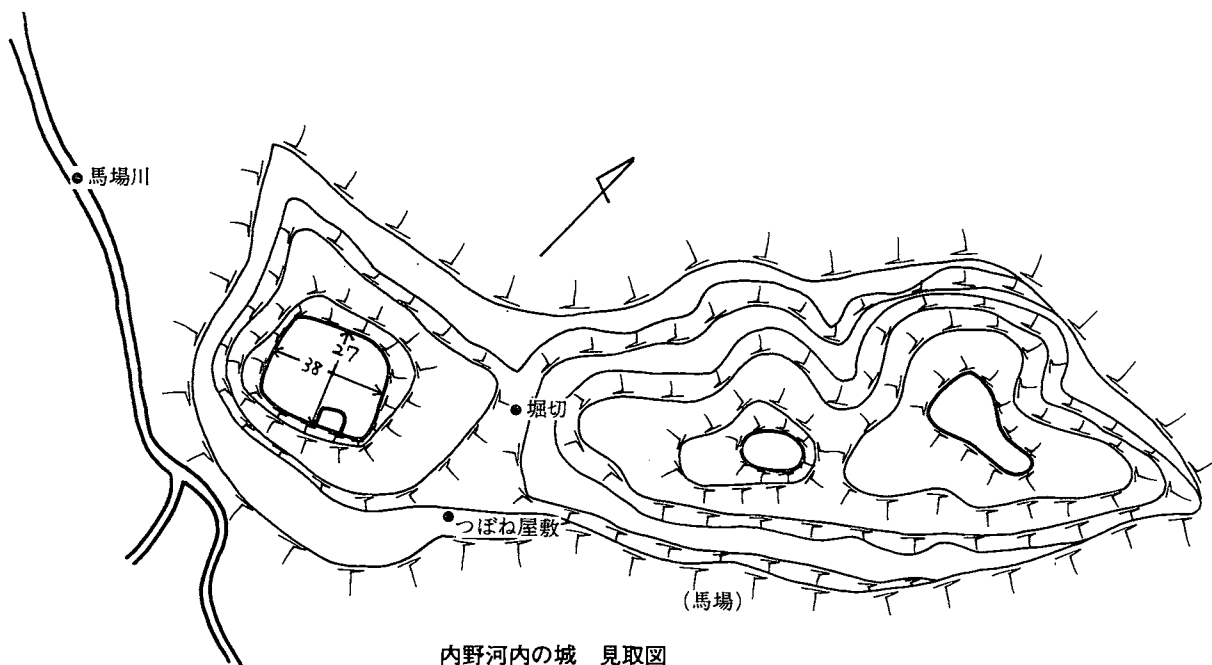
(天草郡松島町大字合津字合の丸)

合の丸地内に、二又状(南北に分かれる)になった山稜地末端部があり、地元の人々は城跡と伝える。尾根の背面にはいずれも平坦地が存在するが、北側部分(標高26m)は、楕円形状(長径40m・短径25m)の顕著なものである。他に遺構として見るべきものはないが、城跡周辺には「中の丸(東側麓の集落)」、「馬場(東方向300m)」、「陣の上(南方向400m)」の各字名が残っている。



内野河内の城 (天草郡松島町大字内野河内字城ノ平)

城跡は馬場川と中月川の合流点にあって、「城ノ平」という字名を残す山稜末端部に位置する。山頂部分(標高38m)は、ひょうたん型の平坦地(東西方向に主軸を呈し、長径38m・短径27m)となっており、地元の人々はこの地を「山ん城」と称する。さらにこれより南西側へ下る尾根筋にも、堀切(城ん坂という呼称がある)を狭んで、楕円形状の平坦地(標高



内野河内の城 見取図

33m・長径33m・短径12m)と、長方形の平地(標高25m・長径38m・短径27m)が存在する。堀切の南端部周辺の一隅に、「つばね屋敷」という小名が残る。また、城跡の南西端にあたる所を「城ん先」とも称し、ここには古井戸が観察される。

教良木の城 (天草郡松島町大字教良木字野添・城平)

教良木地区においては、「野添(字名)」・と「城平(字名)」に「城山」・「城ん原」という小名が残っており、地元の人それぞれを城跡と伝えている。しかし、両城跡間は、約1.3km離れた距離にあるため、別の城と見なす事も出来ようが、確たる文献的な裏付けもない所からここでは一応、一つの城として取り扱いたい。

すなわち、「城山」は教良木小学校の背後(北側)にひろがる山稜末端部(標高108m・南側麓の道路面よりの比高65m)で、山頂部分とその周辺の斜面部に若干の平地と階段状地形が観察される。東側麓の迫地(字・巢の下)には、「かんじゃ道」という呼称も残るようである。一方、「城平」は、小山状になった山稜末端部(標高84.5m・東側麓の道路面よりの比高23m)の所で、山頂部分に楕円形状の平地(東西方向に主軸を呈し、長径40m・短径30m)が観察され、西側の鞍部には自然の迫を利用した堀切が確められる。

上津浦城 (天草郡有明町大字上津浦字城が嶋・戸石川)

『古城考』は、上津浦氏の11代にわたる居城と伝える。重ねて『天草郡古城』に「上津浦古城。上津浦上総介、天正のころ廃城と成」という記事が見える。

谷合集落に、「城ヶ嶋」という字名を残す独立丘陵地(標高30m)があり、谷合川の流れを挟んで西側に並ぶ山稜末端部(標高50m)と合わせて地元の人々は城跡と伝える。

城ヶ嶋…丘陵地の背面は、楕円形状の平地(北西方向に主軸を呈し、長径30m・短径23m)となっており、南東側斜面の一隅に篠芽竹(矢竹)の群生が見られる。県道工事の際に東側麓からは大型の五輪塔が出土した。なお、同地内には「堀」と称される一隅があるが、この地は「上津浦の堀のあと」という伝承を残す。

山稜末端部…山頂部分は、楕円形状の平地(北西方向に主軸を呈し、長径60m・短径23m)となっており、これより北西側へ十数メートル下った所にも、長方形の平地(長径19m・短径9m)が存在する。北東側鞍部から北方向約250m先の尾根筋には、五輪塔の残欠部が見られる。

地元では、この地を城に関連あるとされる妙楽寺の跡と見なす向きもある。

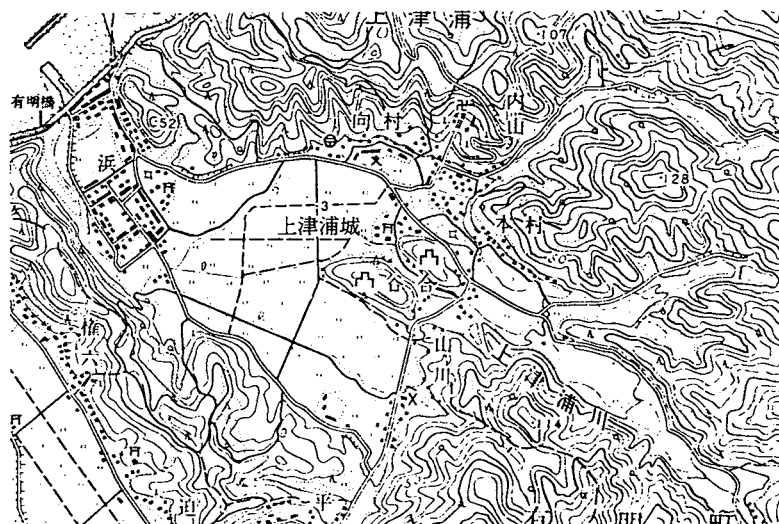
赤崎の城

(天草郡有明町大字赤崎字大丸)

大丸地内に、横たわる山稜末端部の低丘陵地(標高30m)を、地元の人々は城跡と伝える。

しかし、丘陵地の背面に楕円形状の平地(南北方向に主軸を呈し、長径25m・短径13m)が存在する他は、何ら城跡に関連あると思われるような遺構は存在しない。

わずかに当該地の東方向120~130mの集落に、「佐平屋敷」の字名が残る程度である。



おしまご 大島子城

(天草郡有明町大字大島子字古城)

城主不明。『天草郡古城』に「天正のころ城主有事を聞す其以前より古城なるべし」という記事が見える。

城跡は字「古城」の地内にあつて、「城平」と称される帯状形の山稜地末端部(標高30m)に位置する。

山頂部分は長形状の平坦地(南北方向に主軸を呈し、長径50m・短径18m)となっており、さらにこの平坦地の南側寄り部分に長さ10m・幅5mの葺石が観察される。葺石は、高さ0.3m程度のものであり、上面の一隅には、「城様」と呼称される石祠が祀られている。城跡に関連した遺構であろうか。なお城跡の北側一帯には、「馬場」という小名が残っており、これに関連したものとして城跡の東側麓を流れる中津川は、「馬場ん川」という別称がある。『有明町郷土誌』(第4集)に、「かつて島子城時代に馬の調練場があり、馬を洗っていた川であったという話である」との記事が見える。また、城跡東側麓の湧水池についても、同書は「お城の書類を書く時、スズリの水を汲んでいたところだそうであるが、真偽のほどは勿論不明である」と記している。

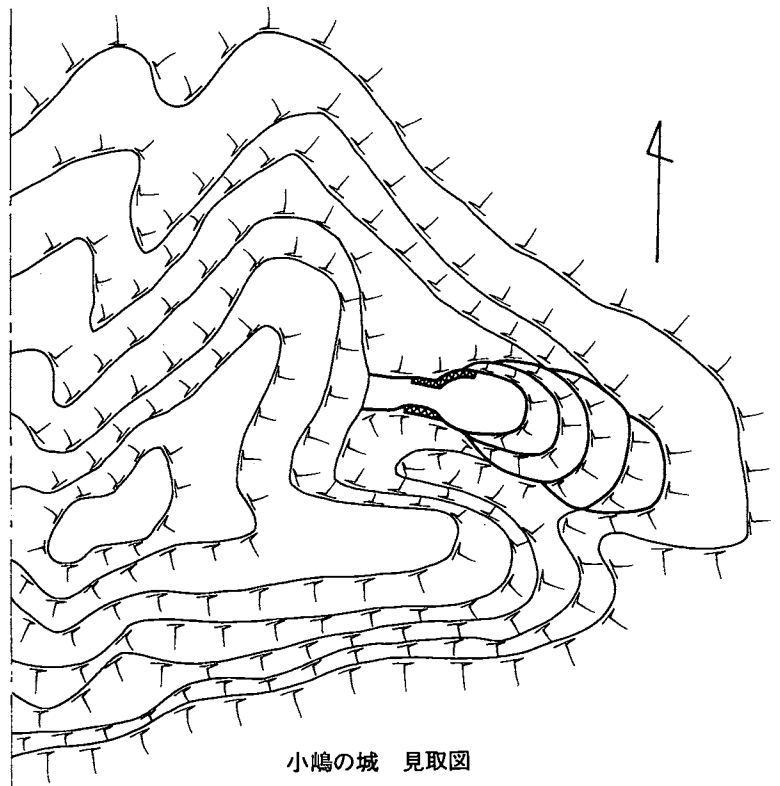
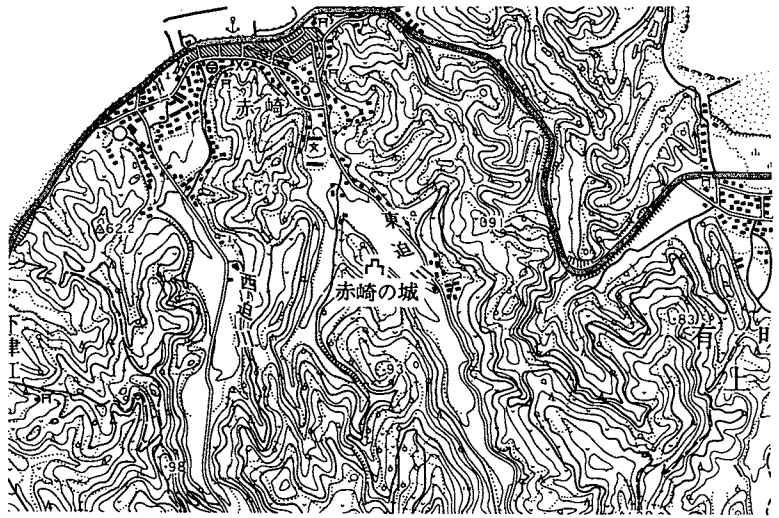
(注1) 有明町教育研究委員会

こしまご 小島子の城

(天草郡有明町大字小島子字古城)

小島子地区の南西側に、「古城」の字名を残す山稜末端部(標高74.8m)があり、北西側へ伸びる尾根筋から分かれて北東側へ下る尾根の末端を、地元では城跡と伝える。

当該地における最高所(標高40m)は、楕円形状の平坦地(長径20m・短径16m)をなしており、これより下方へは4段から成る階段状地形が観察される。さらに野首にあたる南西側のくびれ部分には、斜面に石塁(長さ5m・高さ1m)らしきものが存在しており、興味深い。その他、城跡の麓には3箇所に湧水池を確め



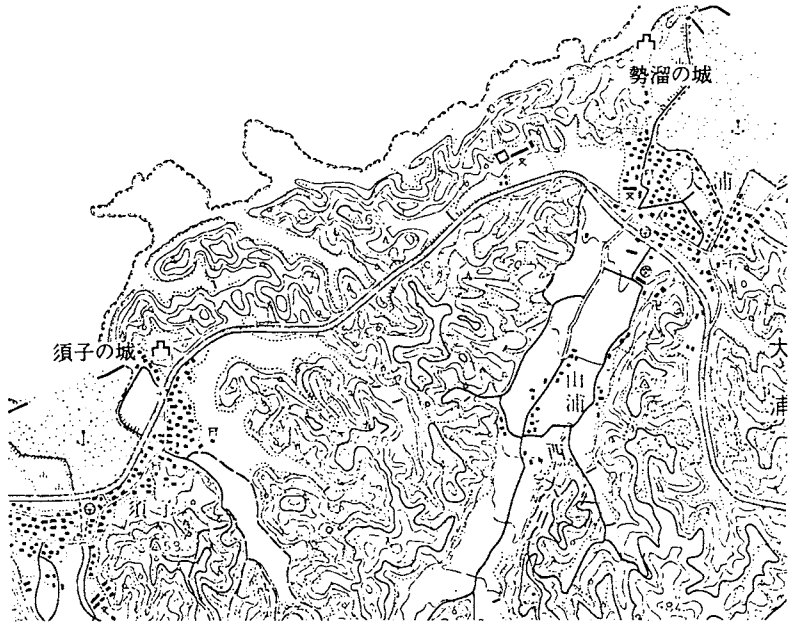
る事が出来る。

(注1) 城山神社が祀られている。

須子の城

(天草郡有明町大字須子字猪の尻)

猪ノ尻堤防の東側に横たわる低丘陵地(標高20m)を、地元では城跡と伝える。しかし、丘陵地の背面に楕円形状の平坦地(北西方向に主軸を呈し、長径30m・短径16m)が存在する他は、何ら城跡に関連あろうと思われる遺構は存在しない。



勢溜の城

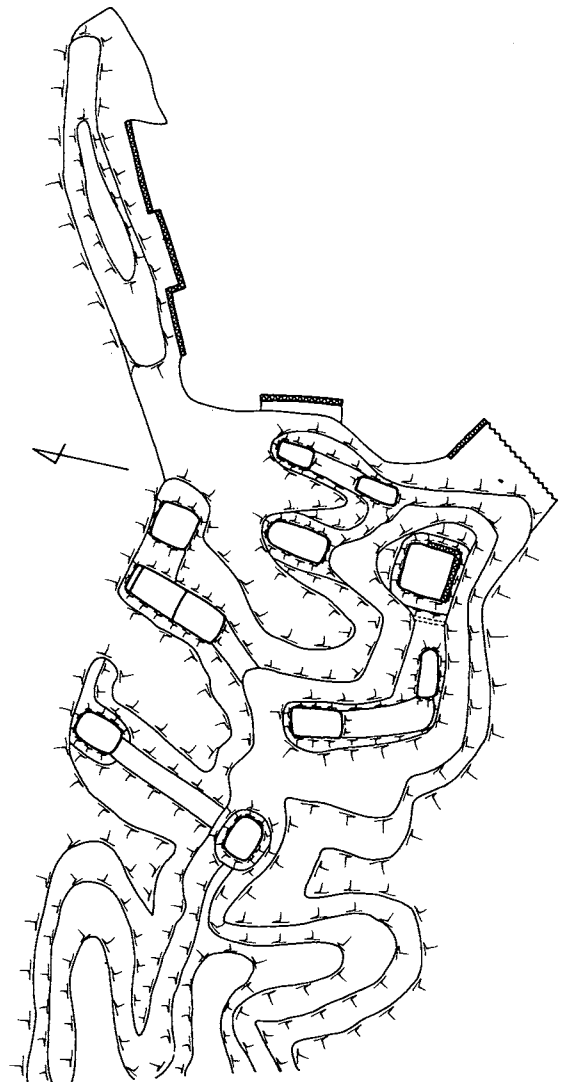
(天草郡有明町大字大浦字勢溜)

かつて大浦の地は、八幡船(倭寇)の基地として活用されていたらしく、当該地もこれに関連した城跡ではないかという見方がある。

「勢溜」^(注1)という字名を残す丘陵地の末端部が城跡と伝わる。東西方向に主軸を呈する丘陵地の背面は、複雑な地形となっているが、東端部の最高所(標高35m)に長方形の平坦地(長径28m・短径20m)が存在する。この平坦地の崖面には、南側から西側にかけて高さ2.5m程の石塁がめぐっており、南東側麓には、「平家井戸」と称される古井戸も残っている。西側部分の野首には、堀切(長さ25m・底幅1m)が走る。なおこの他、丘陵地に観察される9箇所の平坦地には、「おひめじょ」という小名を有する部分もある。

この地は、「城主のお姫様が住んでいた屋敷跡」と伝えられる。さらに城跡の西端部と思われる所には「弓田」の字名が残っている。

(注1) 『有明町郷土誌』



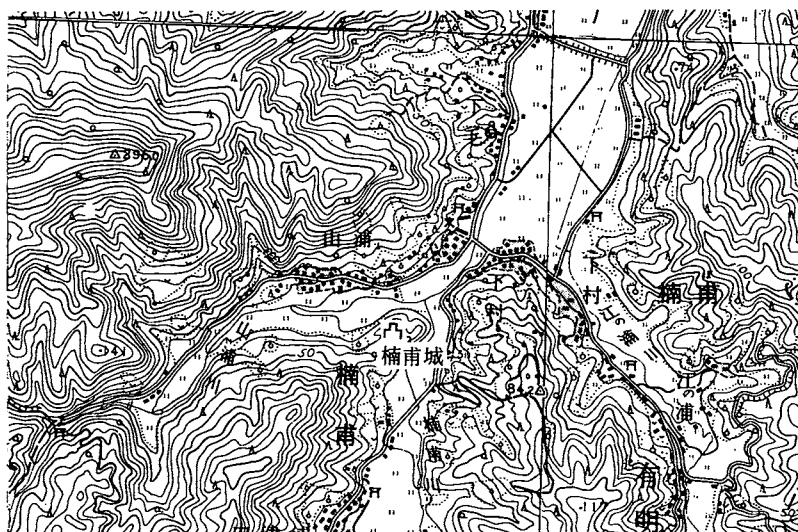
勢溜の城 略測図

くすば
楠甫城

(天草郡有明町大字楠甫字城之首)

『古城考』によれば、大矢野氏代々の居城という。

城跡は山浦川と中津浦川の合流点にあつて「城之首」と称される山稜末端部(標高40m)に位置する。山頂部分は若干の平坦地となつており、さらに西側の鞍部には堀切の存在も確められる。概して小規模な城跡であるが、地元の人の中には、楠甫城と尾根続きの春霧山(標高160m)も楠甫に関連した城跡と見なす向きがある。しかし当該地からは今の所、推論を裏付けるような遺構は確認されていない。なお城跡の周辺には五輪塔が数多く残つており、「中ノ屋敷」という字名を残す所もある。



すもと
栖本の馬場城

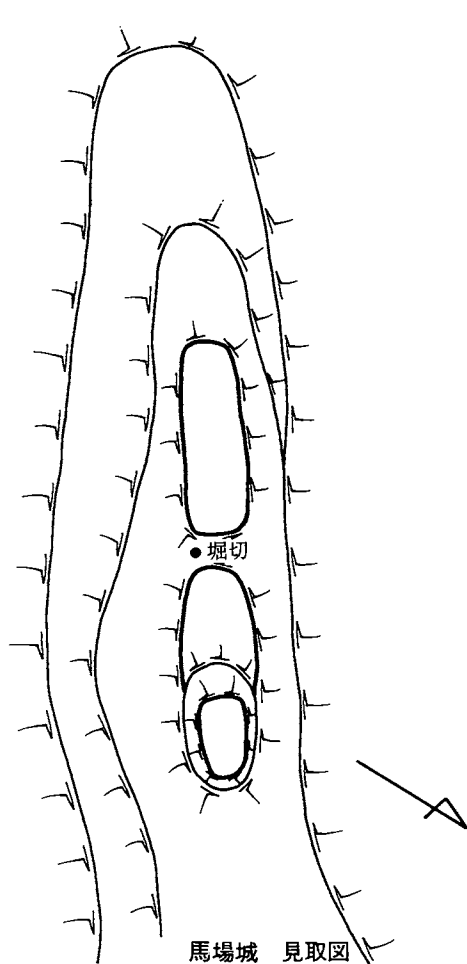
(天草郡栖本町大字馬場字下松尾・村)

『天草郡古城』に「馬場古城。天正のころ城主有事を聞す其以前より古城なるべし」という記事が見える。

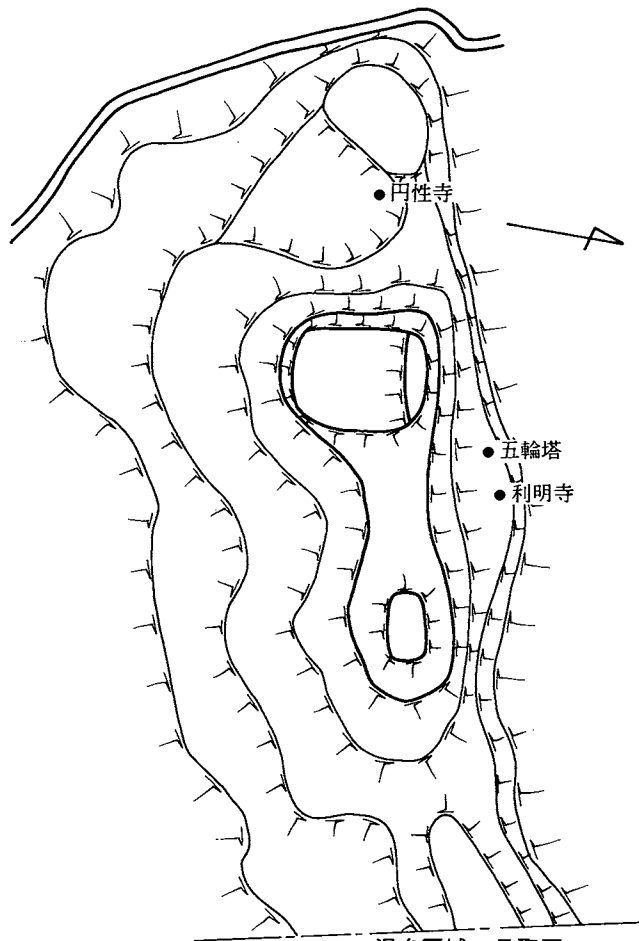
馬場地区の北東側に位置する帯状形の山稜末端部(南西方向に主軸を呈し、標高50m)が城跡と伝わる。山頂部分は楕円形状の平坦地(長径37m・短径14m)となつており、これより南西側へ下つた尾根筋に、幅7mの堀切(深さ4m)で仕切られた2区画から成る長方形の平坦地(山頂部寄り、長径33m・短径17m・先端部側、長径68m・短径15m)が存在する。

なお、城跡の南西側山腹中にある「専称軒」寺の境内には、五輪塔の残欠部が数多い。





馬場城 見取図



湯舟原城 見取図

ゆふねぼる
湯舟原城

(天草郡栖本町大字湯船原字本丸)

『古城考』によれば、栖本氏代々の居城という。『肥後国誌』に「天正十六年（1588年）没落後廢城と成る」という記事が見える。

城跡は栖本漁港の北東側にあつて、「本丸」という字名を残す帯状形の山稜末端部（南西方向に主軸を呈し、標高60m）に位置する。現在は「城之尾」とも称されるが、慶安元年（1648年）の『鈴木代官文書』には、「城山」として記されているようである。

山頂部分は、台形状の平坦地（南北方向に主軸を呈し、北側上辺58m・南側下辺76m・幅45m）となっており、北縁には土塁の残存部とも思えるテラス状の高まり（幅4m）が観察される。さらに北東方向に伸びる尾根筋にも、長円形状の平坦地（長径62m・短径20m）が存在する。

尾根続きの鞍部は、30m近い落差があるものの、背後は山続きとなるために長さ50m・底幅2mの堀切（深さ3m）が新たに設けられている。

なお、城跡の北側山腹中にある利明寺の境内には、五輪塔の残欠部が数多い。

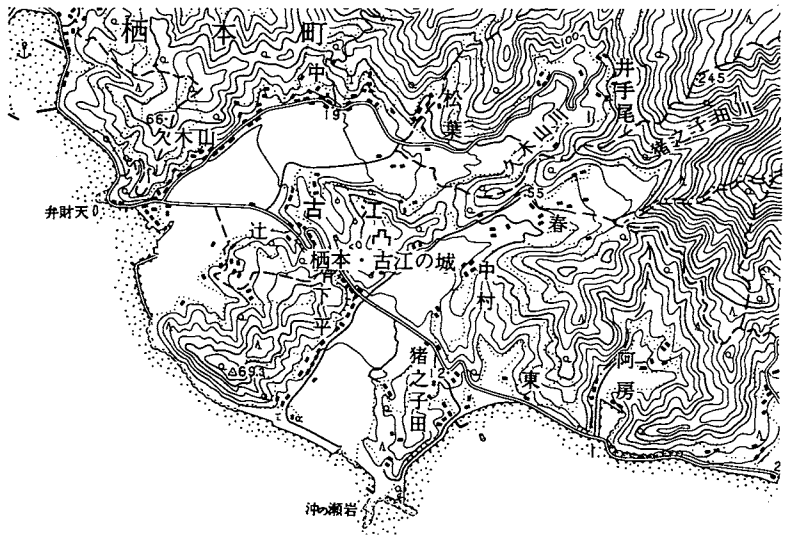
すもと みるえ
栖本・古江の城

(天草郡栖本町大字古江字桂松)

古江地区の桂松に、「古城」と称される三角形の丘陵地（標高70m）が横たわっており、地元の人々は城跡と伝える。丘陵地背面の最高所は、楕円形状の平坦地（長径30m・短径15m）となっており、現在は祇園神社が祀られている。城跡に関連したものとしては、これより北西側へ約150m進んだ所に位置する帯状形の平坦地（北西方向に主軸を呈し、

長さ120m・幅8m)に、「馬場」という小名が残っている。さらに、この「馬場」の南東端周辺は、近年、陥没が始まり現在では、東西40m・幅5m・深さ2.5mを計る窪地となった。この窪地はその形状から、空堀である事にまちがいはない。

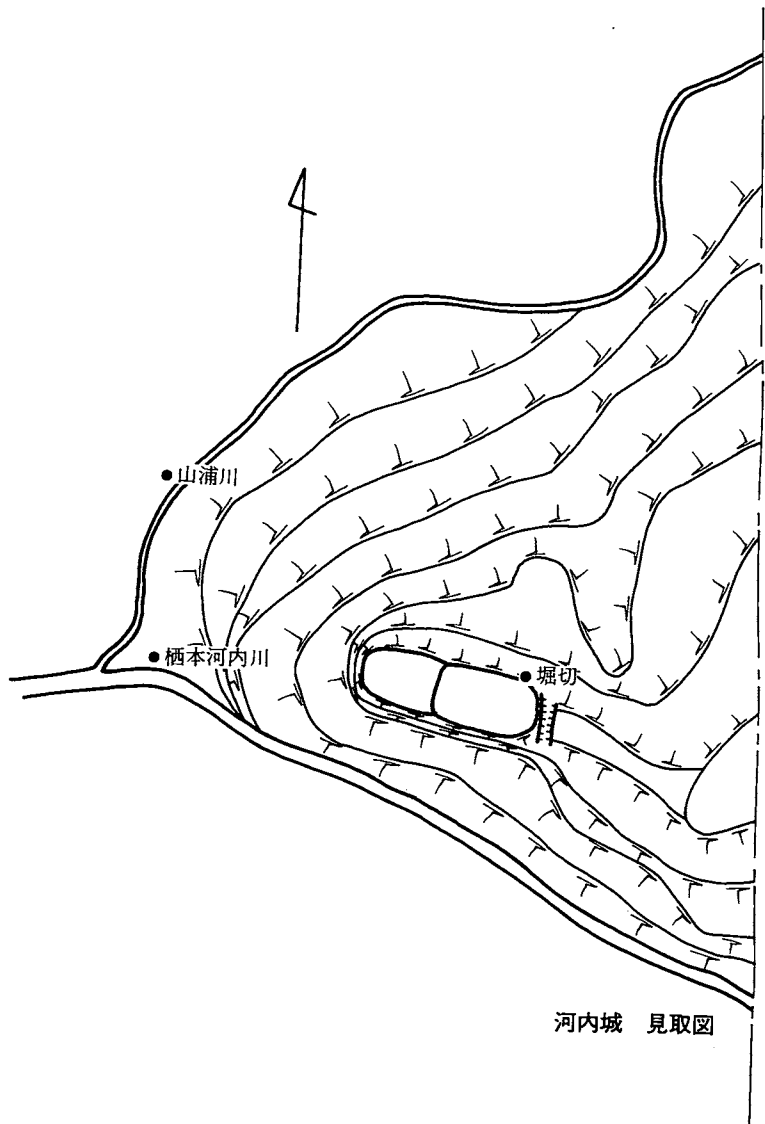
丘陵地東側の野首部分には、五輪塔の残欠部が散在している。



河内城 (天草郡栖本町大字河内字城ノ平・前田)

河内地区には「城ノ平(字名)」と「前田(字名)」に城跡と伝えられる所がある。すなわち「城ノ平」は下河内から下津浦地区に至る山越道の起点に位置する山稜末端部(標高110m・南側麓の道路面よりの比高60m)であり、現在は、その一隅に八坂神社が祀られている。山頂部分は楕円形状の平坦地(南西方向に主軸を呈し長径20m、短径10m)となっており、これより南西側へ5m下った所にも同形状の平坦地(長径18m・短径10m)が存在する。北東側の鞍部には底幅5mを計る堀切も確められるようである。さらに山稜斜面はいずれも急傾斜をなしており、南側麓には自然の水濠となり得る栖本河内川が流れている。地の利にも恵まれた城跡と言えよう。

一方、「前田」の城跡は「城の平」の南東約900mの地点にあつて「矢倉山」と称される山稜末端部(標高120m・北側麓の水田面よりの比高50m)に位置する。当該地における顕著な遺構としては、山頂南側の鞍部に堀切が観察されるが、地元では矢倉山の北西側に位置する菅原神社周辺のゆるやかな丘陵を「本丸」と称する人もいる。

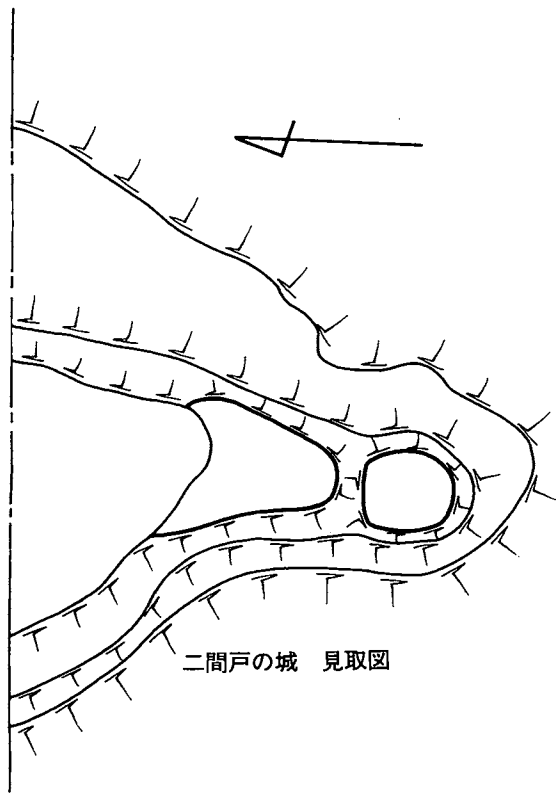
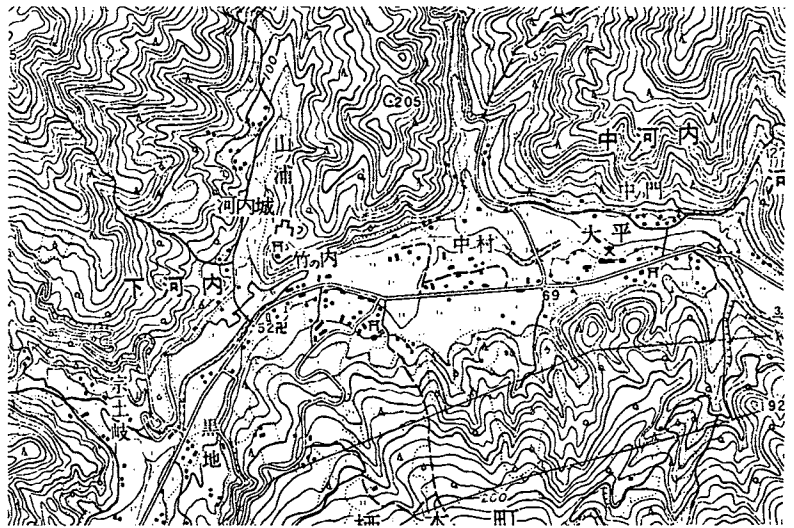


河内城 見取図

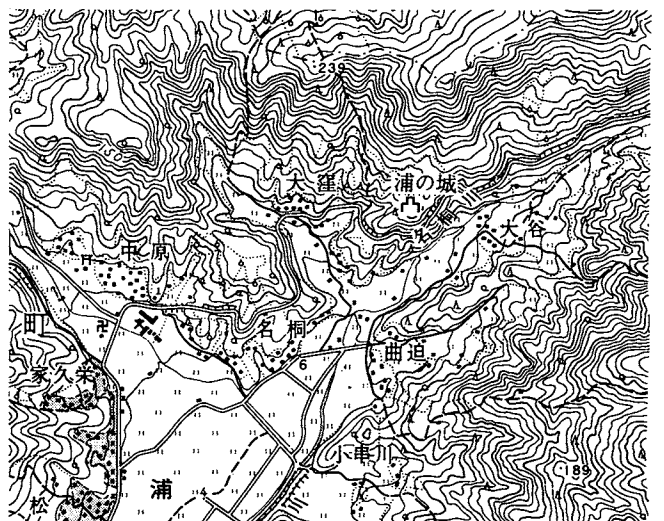
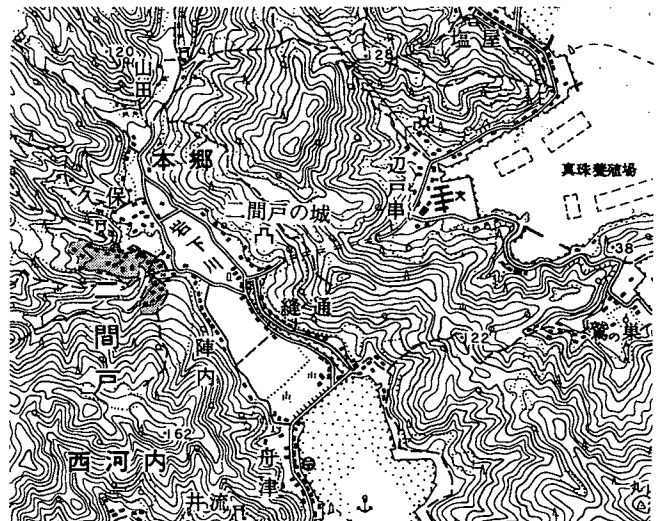
二間戸の城

(天草郡姫戸町大字二間戸字寺)

二間戸地区にあって、「寺」という字名を残す山稜末端部(標高43m)が城跡と伝わる。山頂部分は楕円形状の平坦地(南北方向に主軸を呈し、長径22m・短径18m)となっており、北側の鞍部に堀切を認める事が出来る。しかし、堀切より北側部分にも、ある一定の広さをもつ平坦地が存在する。なお、南西方向に迫るへだてて位置する山稜末端部にも、「陣内」という小名が残っており、城跡との結びつきをうかがわせる。城跡周辺には、五輪塔が点在する。



二間戸の城 見取図



浦の城

(天草郡倉岳町大字浦字城ノ下)

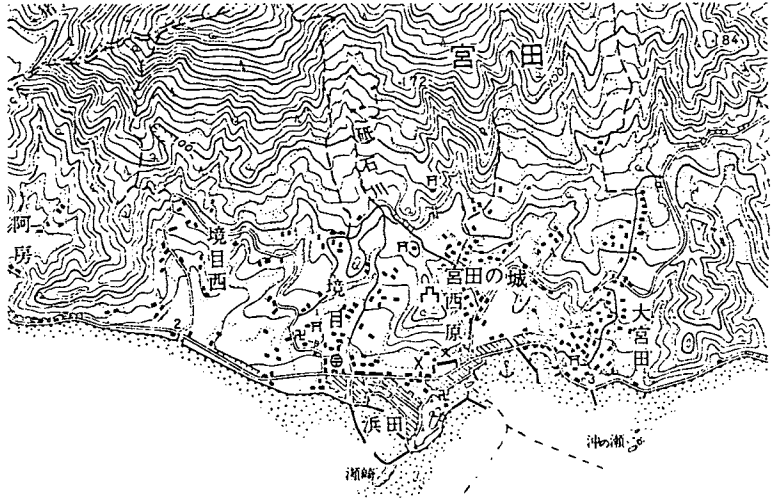
「城の下」地内に、「城山」と称される带状形(じょうやま)の山稜末端部(南西方向に主軸を呈し、標高100m)があり、地元の人は城跡と伝える。

しかし、尾根筋には楕円形状の平坦地(長径20m・短径10m)が観察されるのみで、他に何ら城跡に関連あろうと思われるような遺構は存在しない。

みやた
宮田の城

(天草郡倉岳町大字宮田字城山)

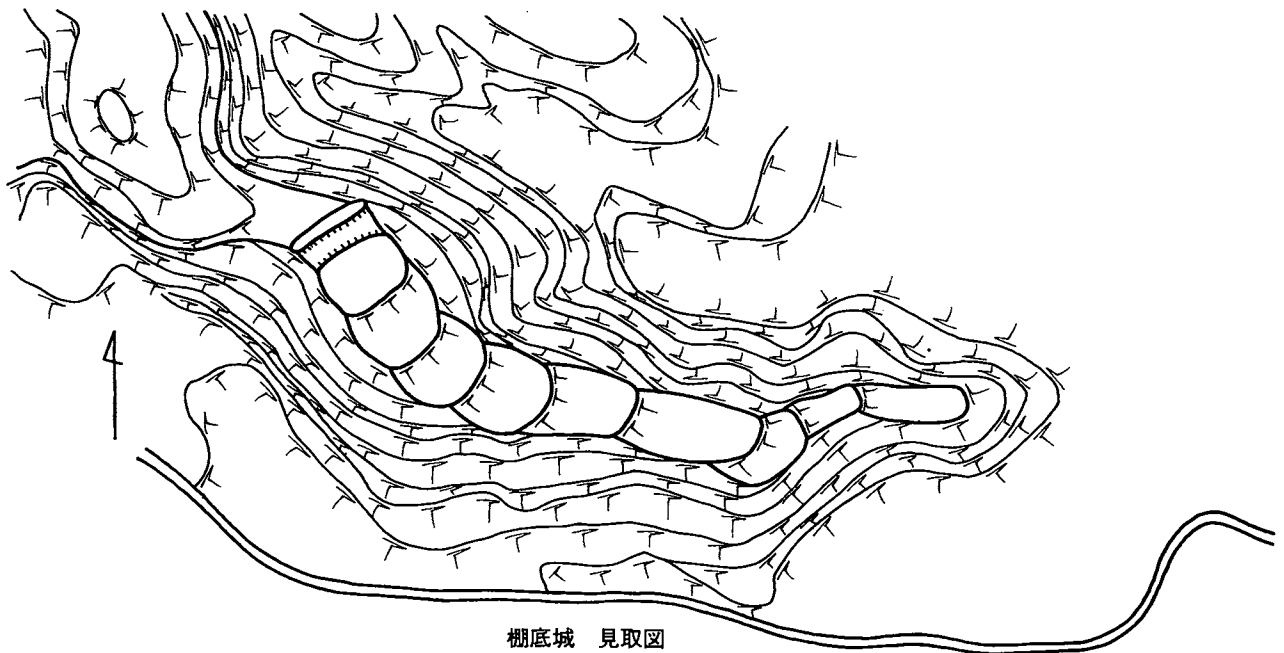
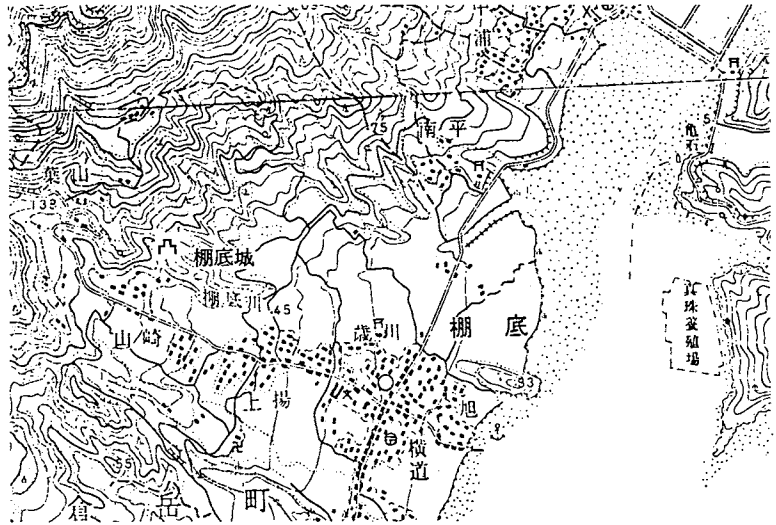
宮田漁港の北西側に、「城山」という字名を残す三角形の山稜末端部(標高70m)があり、城跡の存在が考えられる。山頂部分は楕円形状の平坦地(長径22m・短径20m)となっており、これより南東側へ下る山稜斜面に五段から成る階段状地形が観察される。段差面にはそれぞれ長さ30~50mに及ぶ石塁が観察されるが、城跡の遺構と結びつくかどうかは不明である。



たそこ
棚底城

(天草郡倉岳町大字棚底字尾崎・城ノ平)

棚底地区においては、「尾崎(字名)」と「城ノ平(字名)」に、「高城」、「城山」という小名が残っており、地元の人それぞれを城跡と伝える。なお、両城跡は扇状地となる迫を挟んで相対する格好になっており、その間の距離は約500mを計る。すなわち、「尾崎」は山崎集落の北側に位置する山稜末端部(標高60m・集落よりの比高20m)であり、東西方向に主軸を呈する尾根には、合計9段からなる階段状地形が観察される。さらに西



棚底城 見取図

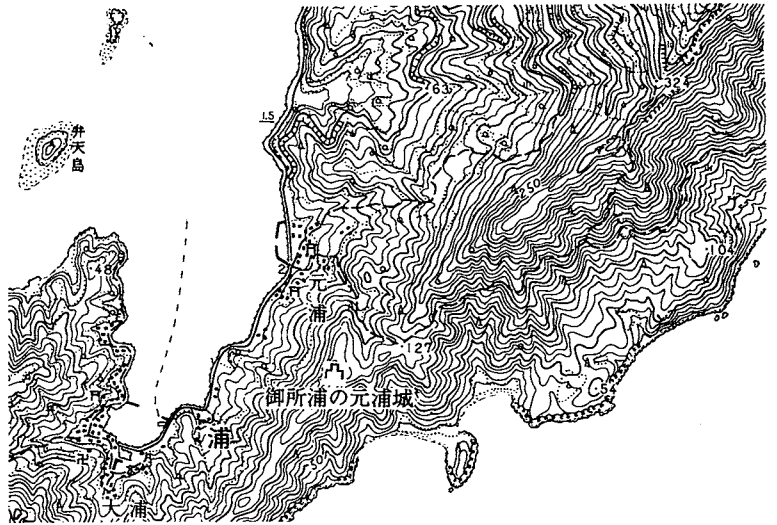
側の鞍部には土塁を伴う堀切もはいつているようである。

一方、「城ノ平」は集落より多少奥まった山稜末端部（標高100m・東側麓の溜池よりの比高20m）に位置しているが、顕著な遺構は何も観察されない。なお、扇状地の扇頂部分には「う〜ごん寺(大権寺)」と称される所があり、同地内には宝篋印塔や五輪塔が数多く残っている。しかも五輪塔の中には南北朝期の年号を刻むものが数基ある。

御所浦の元浦城

(天草郡御所浦町元浦他)

元浦地内に、「城ノ上」と称される山稜（標高150m）があり、城跡の存在が考えられる。山頂部分は平坦地となっているが、的確なものではなく南西方向に長く伸びる尾根筋にも、城跡に関連あろうと思われる遺構は認められない。しかし、北東側一帯の山稜中には、「屋敷（標高130m・緩傾斜）」や「寺床（標高270m）」の字名が残っており、注意を要する。なお、北西側麓のお堂に安置されている阿弥陀如来像は、寺床にあった古寺（名称不明）から移したという伝えがある。



大道城

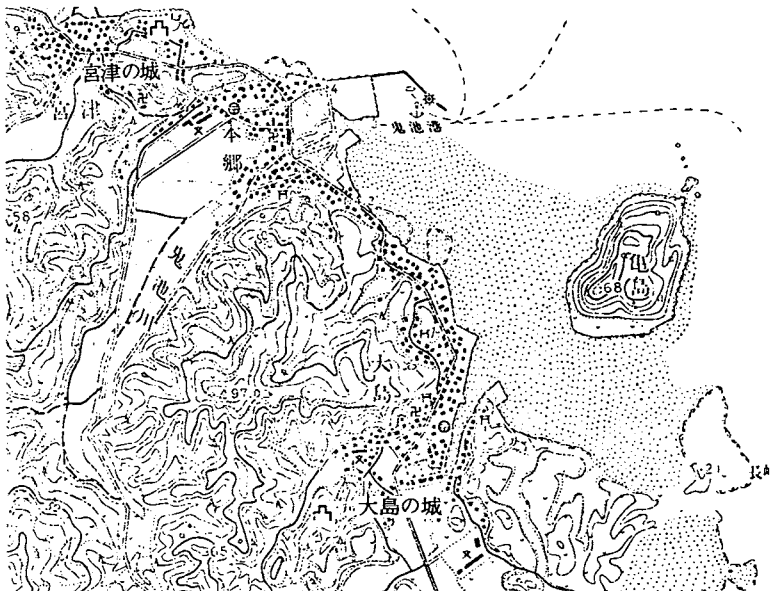
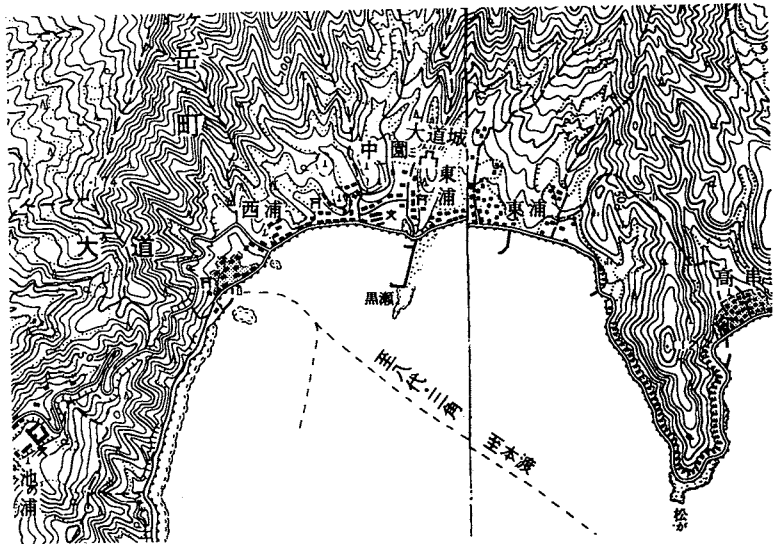
(天草郡竜ヶ岳町大字大道字城)

大道地内に「城」という字名を残す帯状の山稜末端部（南東方向に主軸を呈し、標高40m）があり、地元では城跡と伝える。

当該地は、現在畑地や墓地となっており城跡に関連あろうと思われる遺構は何もないが、南東側に下る山稜斜面は東南と西南方向へ分れており、それぞれ上面には若干の平坦部が観察される。さらに、大道港に面する地理的位置から、いわゆる海城の部類に属する砦的なものが存在した可能性はある。また、同地は、大道の西浦地区から鳴川や大作山の両地区に至る山越道の起点でもある。

「城」周辺には、五輪塔や宝篋印塔がかなり多く存在する。とくに、山稜の東側麓には「うどんあと」という小名を残す所があり、この小名から同地には寺の存在が推察される。

(注1) 南西方向に位置する「寺の内」の地内には五輪塔が8基存在する。



おおしま
大島の城

(天草郡五和町大字御領字小浦)

大島地区の南西側にあつて、二又状に分かれた丘陵地末端部の北側部分(標高30m)を、地元の人は城跡と伝える。また城主については、小浦太郎と見る向きもある。

しかし、当該地は小規模な平坦地が存在するのみで、それ以外には、周辺部に五輪塔の残欠を見るにすぎない。

みやづ
宮津の城

(天草郡五和町大字鬼池字城)

宮津地区の東側に、「城」という字名を残す丘陵地があり、城跡の存在が考えられる。しかし、当該地は人家が建ち並んでいるうえに、最高所(標高21.5m)にあたる「やぶさめ神社」付近も、近年、国道が貫通したため、現在では城跡の範囲すらつかめない状態となった。

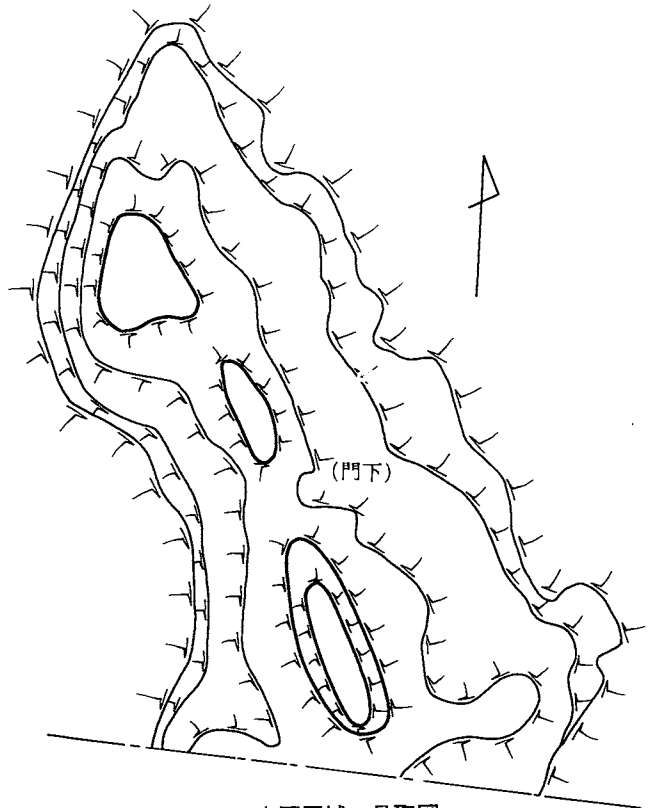
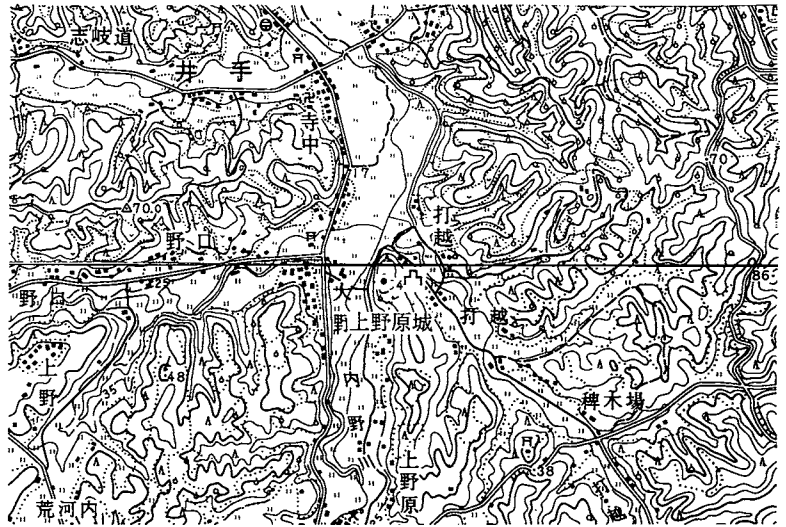
かみのほら
上野原城

(天草郡五和町大字上野原字打越)

『肥後国大絵図』に城跡の記載が見える。地元では城主について松平内蔵助とも伝える。

城跡は内野川と打越川の合流点に、その裾部を覗かせる低丘陵地(北西方向に主軸を呈し、標高50m・西側麓の水田面よりの比高30m)に位置する。丘陵地の背面は三区画から成っており、南東側の野首寄りに存在する長円形状の平坦地(長径70m・短径15m)をはじめとして、北西側に向つてこれまた、長円形状の平坦地(長径60m・短径20m)と釣鐘状の平坦地(長径51m・短径48m)が連なる。野首部分には東側から食い込む迫が、自然の堀切の役目を果たす事になる。迫には湧水池も確められる。なお、城跡の南東側麓一帯に「門下」の字名が残っており、さらに同地内を流れる打越川の橋に、「大木戸橋」という呼称がある。

地元の人は、城跡が川の合流点に位置する所から「三川城」とも称している。



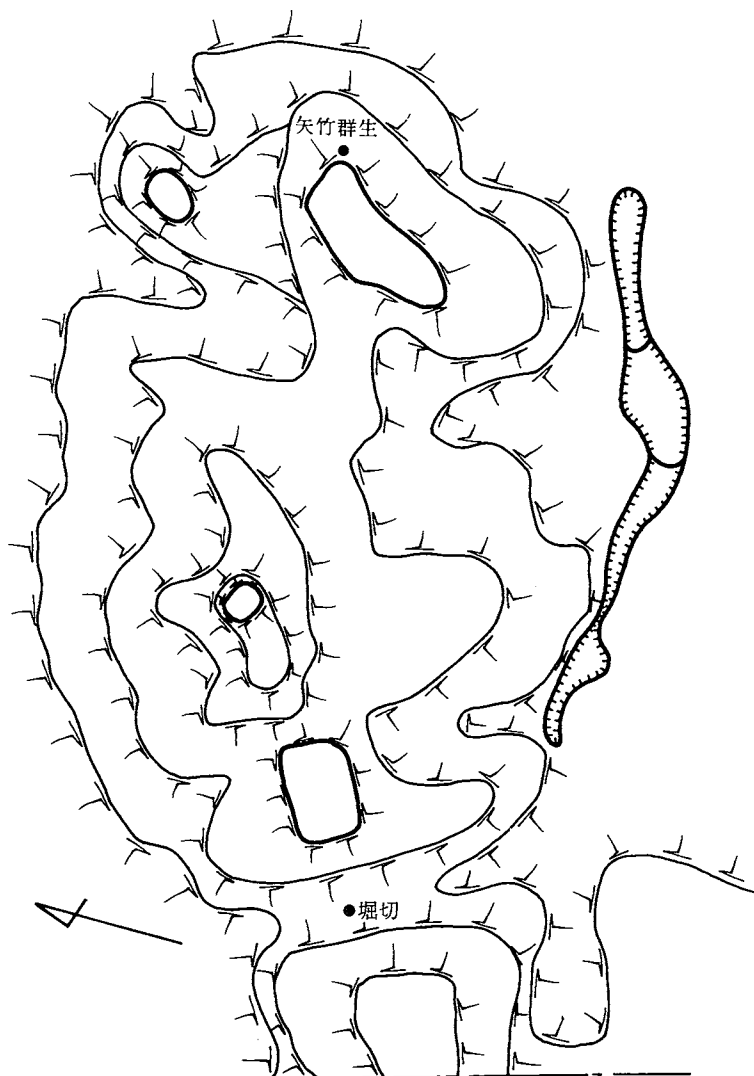
上野原城 見取図

しろこぼ
城木場城

(天草郡五和町大字城木場字南風之元)

『天草郡古城』に、「天正のころ城主有事を聞ず其以前より古城なるべし」という記事が見える。

城跡は、「南風之元」地内にあつて、「城ノ尾」と称される丘陵地（北東方向に主軸を呈し、標高65m・東側麓の県道よりの比高35m）に位置する。丘陵地の背面は、複雑な地形となっているが、最高所の小規模な平坦地（長方形を呈し、長径15m・短径6m）を含めて、4箇所平坦地部分を認める事が出来る。うち、最大の面積を有するものは、先端部の南側寄りにあり、楕円形状の平坦地は長径80m・短径40mを計る。この地には矢竹の群生も見られるようである。南西側の野首部分には、底幅16m・深さ4mの堀切が存在する。この堀切は、背後に山稜末端部が続く所から必要であつたものと思われる。その他、南側麓を走る帯状形の沼池は、付近に内野川が流れている事もあつて水濼跡の可能性もある。



城木場城 見取図

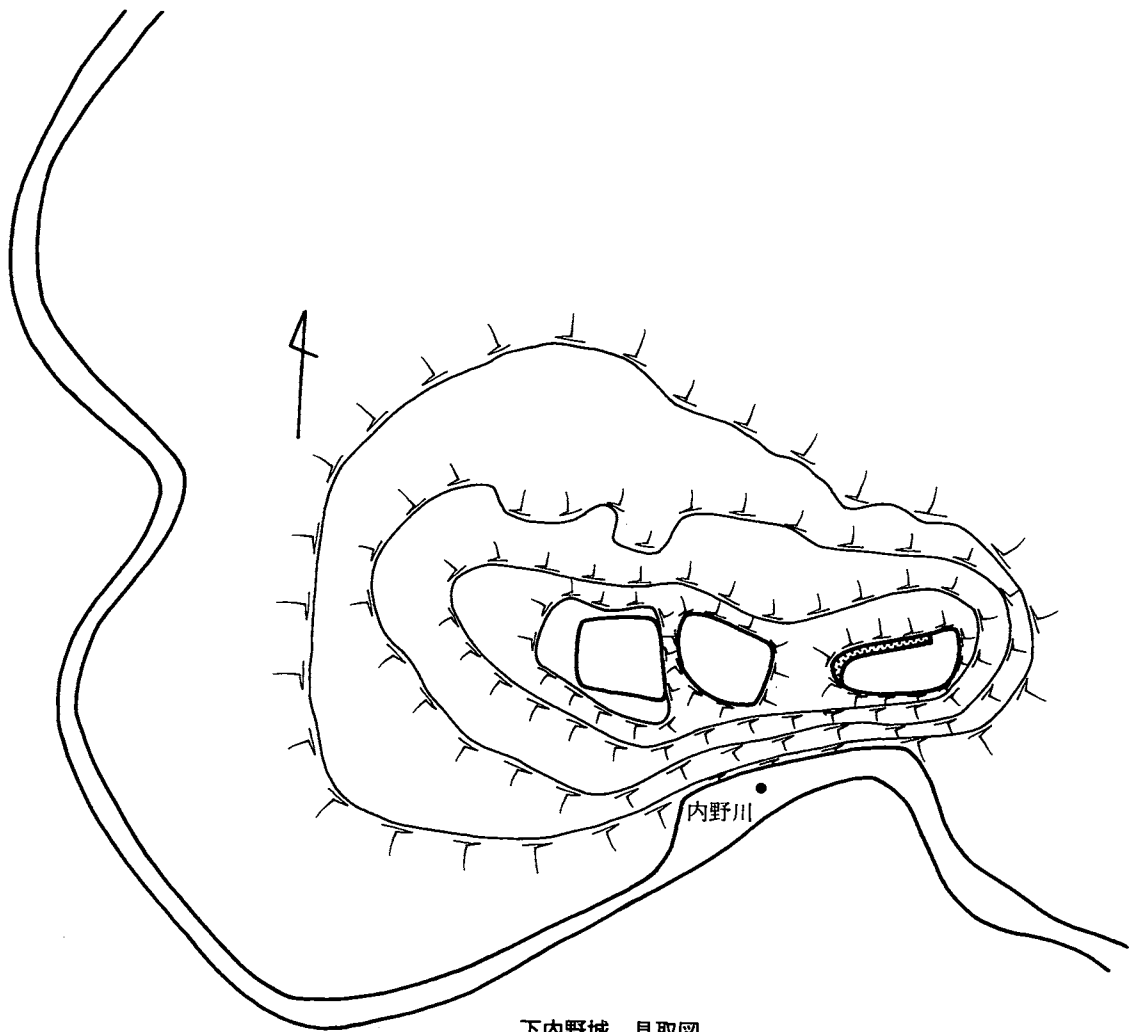
しもうちらの
下内野城

(天草郡五和町大字下内野字城山)

『肥後国誌』に「天正のころ城主有事を聞ず其以前より古城なるべし」という記事が見える。

城跡は内野川の流域にあつて、「城山」という字名を残す独立丘陵地（東西方向に主軸を呈し、標高36.9m・北西側麓の水田面よりの比高30m）に位置する。丘陵地の背面は三区画から成っており、中央部（丘陵地の最高所でもある）に存在する楕円形状の平坦地（長径30m・短径20m）を中心に、東西両側にいずれも長方形を呈する平坦地（東側、長径45m・短径15m。西側、長径41m・短径38m）が並ぶ。東側部分の平坦地には、高さ3m程の土塁が北側から西側にかけてめぐっているのがわかる。なお、丘陵地の南側斜面は断崖絶壁で、その真下には内野川が流れており、この上ない要害の地となっている。



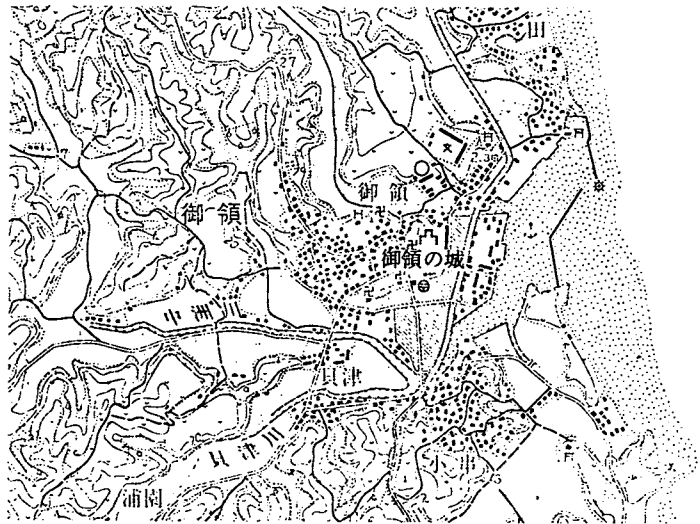


下内野城 見取図

ごりょう
御領の城

(天草郡五和町大字御領字馬場)

御領地区の中央部、北側寄りに位置する丘陵地(標高11.9m)を地元の人は城跡と伝える。丘陵地の背面は東西100m、南北200mに及ぶ広い平坦地(主に宅地)となっているが、南側の先端部近くには、東西両側から、堀切の役目を果たす迫が食い込んでおり、外観的には一つの独立区画(方証禅寺境内)が存在する事になる。地元の人々も、とくにこの区画を「城内」と称するようである。「城内」を含めた丘陵地の南側麓一帯に、「馬場」という字名も残る。



しかし当該地は、近年になって開発が進んだ事もあるため、現在では城跡に関連すると思われる遺構は、何も観察できない。

志岐城 (天草郡苓北町)

天草における代表的土豪の一人である志岐氏代々の居城と伝えられる。『清正記』には「志岐の城と申は、南深山、西北は侍町続きなり、其外は海なり、東は深谷、底は河なり、塀際は岩なり」という記事が見える。^(注1)

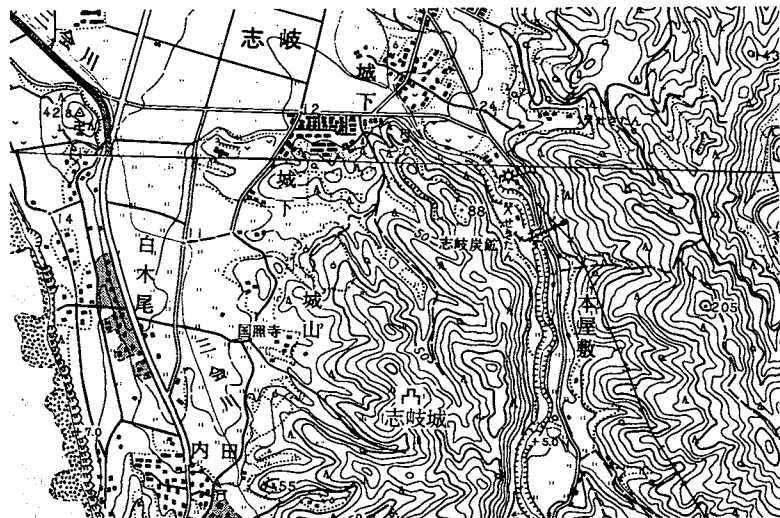
城跡は、志岐地内にあつて「城山」という字名を残す山稜末端部(標高100m)に位置する。山頂部分は長方形の平坦

地（長径42m・短径26m）となっており、現在ここには城主鎮経を祀った小祠がある。さらに水源地の貯水タンクのある長い平坦地（長径110m・短径20m）も城跡に関連する遺構かとも考えられる。『天草城主覚』によれば、当城には、「本丸」「中之城」「中丸」「から堀」「出居丸」「二之丸」「馬賣場」と称される所があるという。

（注1）志岐家に伝えられた古記録は「志岐文書」として知られる。

（注2）天草に初めてキリシタンを導入した人物と伝えられる。

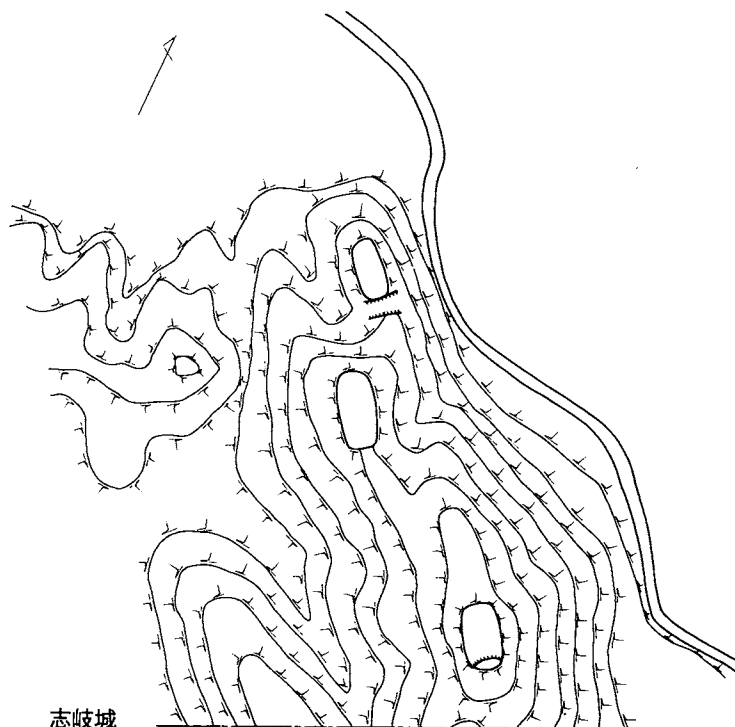
（注3）文政6年（1823年）の記録である。



おおえ 大江の城

（天草郡天草町大字大江字城の尾陣の内）

大江地区には、「城の尾（字名）」と「陣の内（字名）」に城跡と伝えられる所がある。すなわち「城の尾」は江月院の西側に位置する山稜末端部（標高47.5m）にあり、『鈴木代官文書』の「天草寺領覚」には「城山」と記載されているようである。しかし、当該地において顕著な遺構は何も見い出せない。一方、この地より北東方向500m先に位置する「陣の内」の山稜末端部（標高83.5m）も「城の尾」と同様であるが、周辺部に「馬場」「高城」という字名を残している。したがって遺構的には、城跡の存在を裏付ける様なものは何もないが、上記の字名からして城跡の存在はまちがいないものと言えよう。地形的に見て、江月院の敷地あたりに「館」の類があったという推論も出てこよう。



志岐城



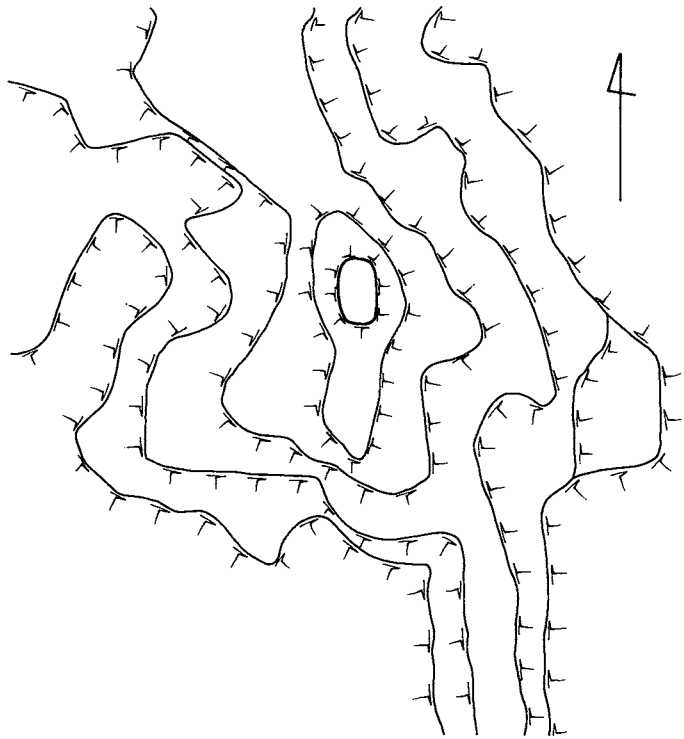
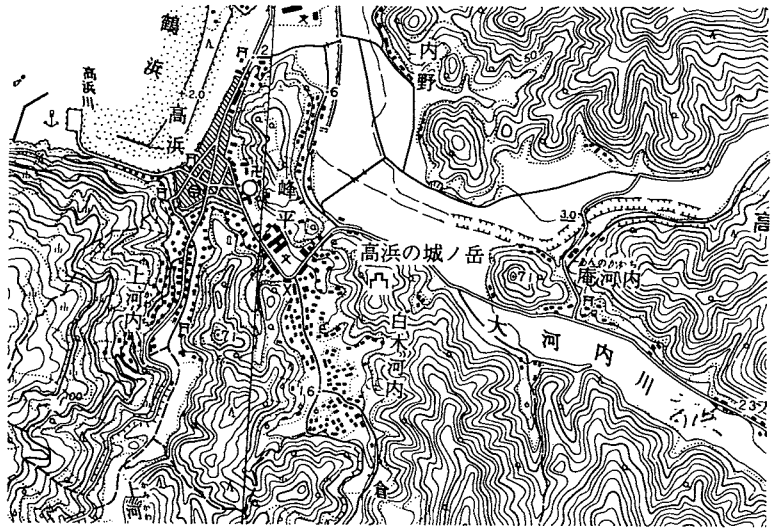
たかはま
高浜の城ノ岳

(天草郡天草町大字高浜字森分)

文政六年(1823年)の『高浜海辺地勢要図』(旧大江組大庄屋松浦家蔵)に、「城ノ岳」と記された所があり城跡の存在が考えられる。

当該地は森分地内の山稜末端部(標高86m)に位置する。山頂部分は、長方形状の平坦地(北西方向に主軸を呈し、長径13m・短径10m)となっており、これより北西方向に下る尾根筋に合計三段から成る階段状地形が観察される。さらにその北西端寄りにも、長方形の窪地(長径26m・短径20m)を挟んで楕円形状の平坦地(長径30m・短径20m)が存在するようである。

しかし、「城ノ岳」以外には城跡に関する伝承は何もない。



大江の城 見取図

ふくれぎ
福連木の城

(天草郡天草町福連木字山神)

山神地内に、「城山」と称される山稜末端部(標高50m)があり、城跡の存在が考えられる。山頂部分は、楕円形状の平坦地(長径14m・短径13m)が存在するが、周辺部には城跡としての遺構を認める事が出来ない。しかし、東側鞍部や「城山麓」に、「城首(鞍部)」・「城口(南東側麓の登り口)」・「釣瓶迫(西側麓)」というような字名が残っている。

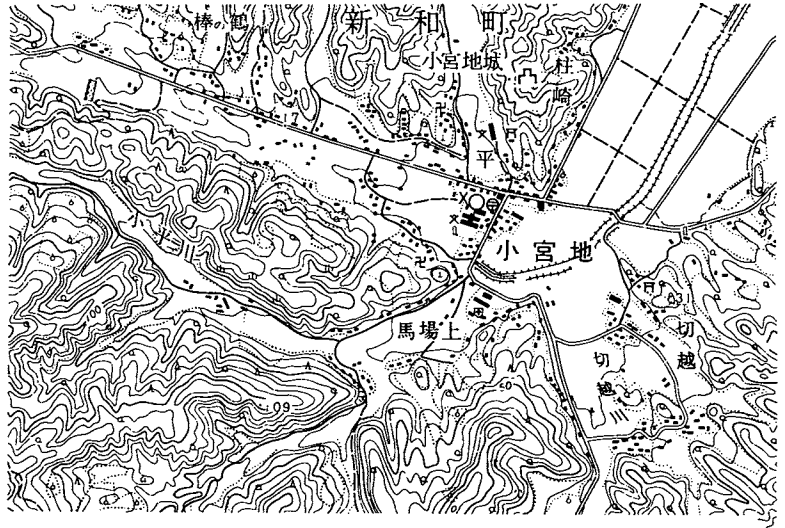


こみやじ 小宮地城

(天草郡新和町大字小宮地字城ノ平)

『天草郡古城』に、「小宮地古城・天正のころ城主有事を聞す其以前より古城なるべし」という記事が見える。

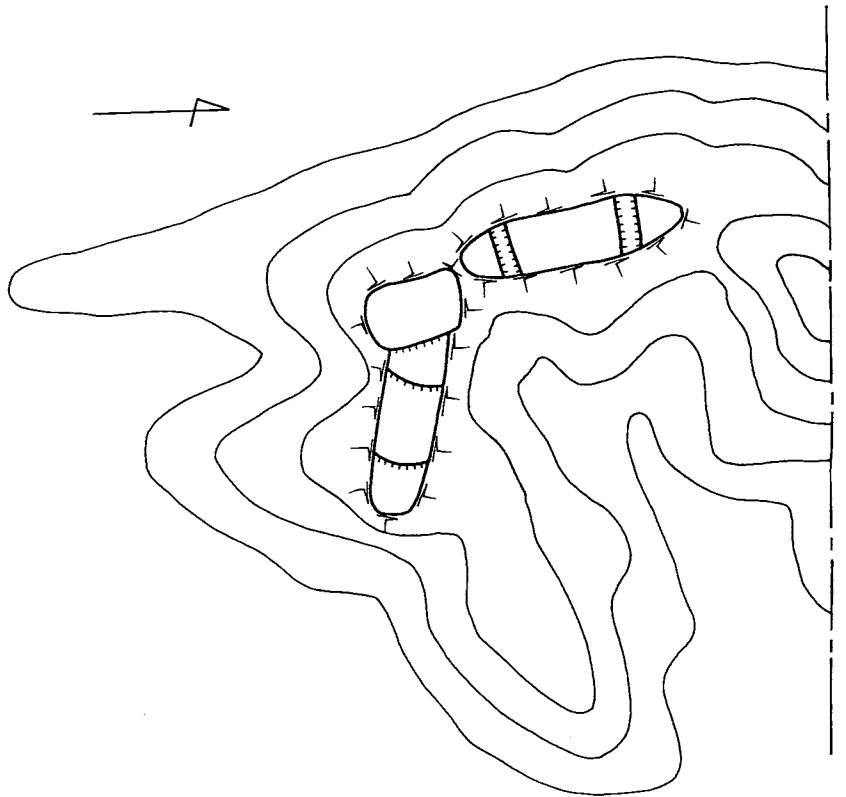
城跡は、「城ノ平」という字名を残す山稜地末端部（標高55m）に位置する。山頂部分は、楕円形状の平坦地（西南西に主軸を呈し、長径24m・短径13m）となっており、これより、東北東側へ3m下った所に堀切（底幅3～5m）を挟んで、長円形状の平坦地（長径100m・短径14m）が存在する。なお、この平坦地は、その両端近くに幅3mの空堀（深さ3m）を伴う。さらに山頂部の南南西側にも尾根筋が伸びているが、ここには三段からなる階段状地形がある。



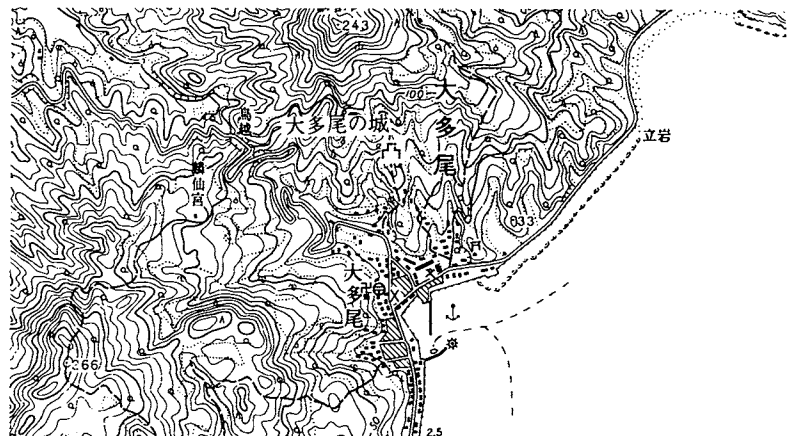
おまたお 大多尾の城

(天草郡新和町大字大多尾字城ノ平)

大多尾地区に、「城ノ平」という字名を残す山稜地末端部（南東方向に主軸を呈し、標高40m）があり、城跡の存在が考えられる。山頂部分は、楕円形状の平坦地（長径23m・短径15m）となっており、北西側の鞍部については四重の堀切（長さ25～40m・底幅2～3m・深さ1.5～2.5m）が観察される。さらに南側の山腹中には、「殿様の屋敷」と称される平坦地が存在するが、かつては、同地内に古井戸もあったらしい。この他、「城ノ平」周辺には「城の迫（北側麓の迫）」や「浜ノ丸（迫を隔てた南側の尾根筋）」の小名が残っている。



小宮地城 見取図



しもだ
下田の城

(天草郡河浦町大字河浦字城山)

河浦地区の下田に「城山」という字名を残す山稜末端部（標高50m・北側水田面よりの比高47m）があり、これが『古城考』にいう「下田城」ではないかと思われる。

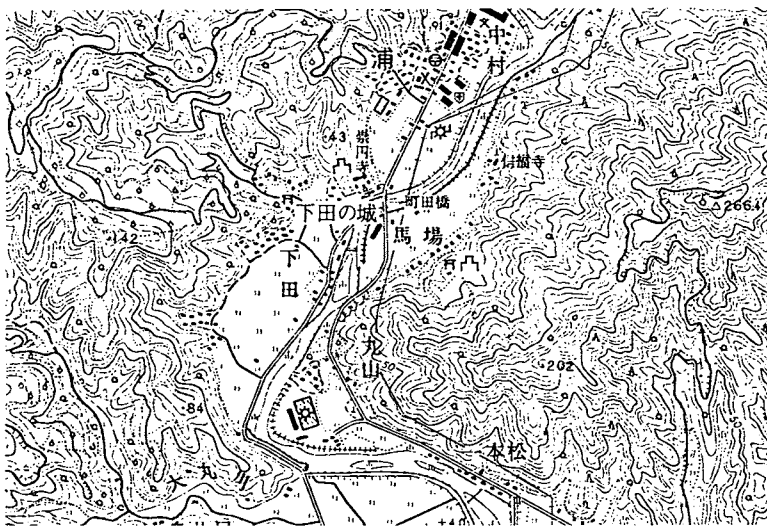
帯状を呈する山頂部分は、切り開かれて神社の敷地となっているが、周辺部に「削り落とし」の遺構が残存する。また同地に散在する切り石状の岩は、城跡の石垣だったという説がある。南東側の鞍部には、窪地状の畑地が走っているが、これはその形状から堀切の遺構が埋没して

いる可能性が強い。ところで北西方向に下る迫地には、数十段に及ぶ階段状地形が重なっており、壁面には各々、高さ1～2.5mの石垣が存在する。地元では、この石垣を城跡に関連する遺構と見る向きもあるが、実際には、地形から棚田形式の水田跡であろうと思われる。
(注1)

なお、「城山」の北西方向300mにも一町田川を挟んで、城跡と伝わる所があるが、現在この地は「崇円寺」の敷地となっている。
(注2)

(注1) 古老の中には「武家屋敷跡」と称する人もいる。

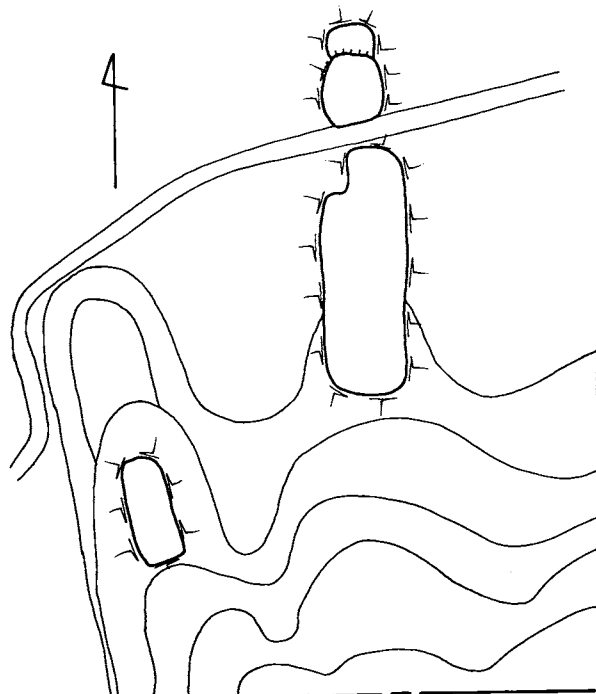
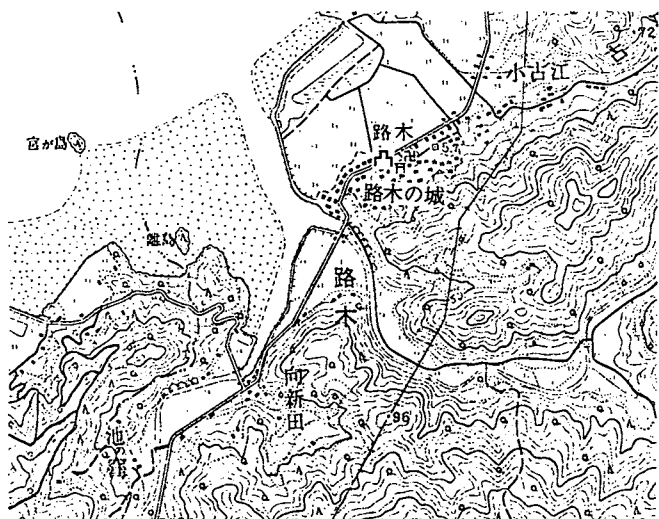
(注2) 城跡としての遺構は何も観察されない。



ろぎ
路木の城 (小見山城)

(天草郡河浦町大字路木字富田)

小見山庄源が天正年間頃在城したという伝承がある。したがって地元の人々は、当該地を「小見山城」とも称する。庄源は、江戸時代に早浦村の庄屋を勤めた小見山氏の元祖らしい。城跡は、富田地内の丘陵地末端部（標高 m）に位置する。丘陵地の背面は、南北100mを越える帯状形の平坦地（東西幅15m）となっているが、県道牛深線が先端部10mの所を断ち切った。一方、南側の野首を走る幅1m足らずの凹道については、元来、もっと幅広い堀切ではなかったかという見方がある。

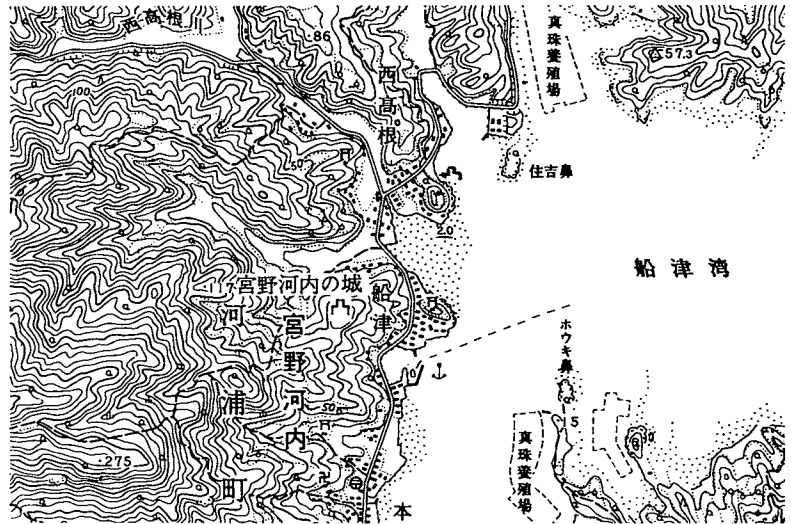


路木の城 見取図

みやのかわち
宮野河内の城

(天草郡河浦町大字宮野河内字
蔵ノ浦・船津)

蔵ノ浦地内に、「城ノ峠・殿様の峠」と称される小山状になった山稜地末端部(標高20m)があり、地元の人々は城跡と伝える。小山の上面は、楕円形の平坦地(南東方向に主軸を呈し、長径47m・短径23m)となっており、これより南側へ下った階段状地形の一隅には、古井戸も存在したらしい。北西側の野首部分は、県道によって断切られているために堀切の有無がわからない。県道の対岸には、五輪塔の残欠部が多く、明照軒跡(寺跡)も確められる。また、城跡は三方を海で囲まれた景勝の地でもある。なお、城跡の南西方向にも「城の峠」と称される山稜地末端部(標高70m)が存在する。山頂部分には楕円形状の平坦地(南西方向に主軸を呈し、長径45m・短径22m)が観察される。



第二章 熊本県中世城跡の文献解題

熊本県の城郭文献として最も広く利用されるのは、肥後国志と古城考である。これらは収載数が多いのと刊本があったからであるが、これに至るまでに、いくつかの文献があった。肥後国志以後も今日までにいくつかの城郭書が刊行されてきた。いまこれらについて略述しよう。ここでは肥後の城郭文献だけに限定し、一般的な城郭書、また全国的な城郭概説書はとりあげないことにする。

全県下の城郭一覧は、大田氏によって作成されているので、筆者はここでとりあげた文献のうち、全県下に亘って記述されたものの、各郡別城郭数を表示する。所載数の少ないもの、また一郡一郷などのものは、この表から省き、解説だけにした。

第1表

郡	書名	慶安 差出	一統 志	古城 主考	古城 主考	地志 略	陳跡 略志	国志 草稿	古城 主記	古城 誌	郡村 考誌	郡誌	城郭 全集	熊本 の城	
玉山	名鹿	2	15	4	5	20	4	18	5	43	44	28	58	51	45
山本	鹿本	5	8	6	5	9	5	10	7	22	19		34	33	46
菊池	池	2	4	1	1	4	1	2	1	8	9	8			
合志	志	1	3	1	2	6	1	4	3	16	10	(6)	15	37	54
阿蘇	蘇	1	4	1	1	1	1	2	2	11	13	8			
飽田	田	2	22	5	5	9	6	14	10	29	33		30	46	67
託摩	摩	1	2	3	3	3	3	3	3	17	19	6	11	20	29
宇土	土	0	3	2	2	2	2	2	2	5	5	3			
益城	城	3	3	3	3	3	3	3	3	4			5	3	6
八代	代	13	41	14	17	19	14	23	14	44	49	22	45	33	68
芦北	北	6	7	6	6	11	5	16	9	12	12		17	7	26
球磨	磨	4	16	4	4	4	4	6	4	22	27		28	5	24
天草	草	6			1	1		1	1	21	6	30	13	13	42
(豊後)		15		4	7	4	4	5	5	9	15		15	5	20
				2	2		2	6	2	4	9				
計		61	128	56	66	96	55	115	68	266	274		271	253	427

注1 正式な書名は各項で記し、表には略称にしてある。

2 菊池郡において古代の鞠智城を収載したもの、八代郡において近世の松江城（八代城）を記載したものは、そのまま集計してある。

3 古城主考は数本あるが、ここでは2本だけにして、他はその項で詳述した。

4 明治以降は山鹿・山本郡が鹿本郡、菊池・合志郡が菊池郡、飽田・託摩郡が飽託郡となるので、城数は合計数である。逆に益城郡は上・下に分れるが、数は合計数にしてある。

5 熊本府（熊本市）は飽田郡（飽託郡）に加え、以下各市はその郡に加えてある。

6 他領であった球磨郡・天草郡は文献によって収録したものと否とあるが、原書の通りにした。豊後直入・大分・海部三郡内の肥後領はまとめて集計した。

7 郡村誌の菊池郡は残欠本であるので、(6)の数は実数ではない。球磨郡の30は同時期の「球磨古城図」による。また郡村誌は全郡は作製されていないので、空欄があり、集計もしていない。

1 国絵図と差出

幕府は各藩の実態把握の一法として、郷帳と城絵図・国絵図の作製提出を命じた。このうち城絵図は城を中心とした城下の絵図で、近世の熊本・八代・人吉の城図があり、熊本については寛永10年幕府へ提出した控が残っている。古城跡の記載されたのは国絵図である。幕府は慶長10年（1605）、正保元年（1644）、元禄10年（1697）、天保6年（1835）の4回国

絵図提出を命じ、慶長図と元禄図は熊本県立図書館に、正保図は熊本大学保管の永青文庫に、各々の控が保存されている。このうち慶長図は稚拙で、元禄図は正保図を修正したものであるから、元禄図が最も整備している。これらのほかにも図書館に5点、熊本大学に7点の肥後国絵図があり、それぞれ古城跡が記入されているが、基準となるのは元禄図である。図の大きさは慶長図が4寸1里、縮尺で32,400分1に、正保図以下は6寸1里、縮尺では、21,600分1に描かれており、縦5m横6mに及ぶものもあり、また何れも唯一点だけの貴重史料であるので、披閱は容易でない。

国絵図では古城の位置を知るだけであるが、古城の実態を知るには「差出」がある。正式な書名は「肥後国一慶安四年江戸江差上候帳之扣」で、即ち正保図の説明書であり、県立図書館に所蔵されている。全92丁を大道・小道・灘路・船路・船着・瀬はへ・川橋・古城の8項に分けて絵図の内容を略述し、古城は16丁分である。収載数は61、天草が最も多く15城であるが、最後の城木場城が丁度1丁の最後で終わっており、奥書も無いので、あと1丁か2丁の落丁があるのかもしれない。記載の方法は

関東城 山城 曲輪九百六拾間 右之古城ヨリ関町迄拾四丁三拾間

のように、山城・平山城・平城の城郭の分類と、城より附近の主要集落までの距離を記している。分類は山城40、平山城は御船城など18、平城は合志郡上庄（竹迫）城、八代郡麦島城・岡城の3で、この分類は今日より見ても大体妥当である。この書は中世古城に関する近世最初の文献で、その後の城郭に関する記録の基礎をなすものである。豊後の細川領内古城については、本書の後尾に附載されていたか否か不明であるが、絵図が別個にあり、本書の表紙にも「肥後国」と記されているので、差出も別冊となっていたのであろう。

2 国郡一統志

寛文9年（1669）北島雪山著、昭和46年熊本、青潮社より自筆原本のまま影印刊行、A5、904ページ、本文は半丁9行、1行18字。寺社総録の部だけは、熊本史学34号、35・6号に掲載されている。雪山は儒医をもって肥後藩に仕え、400石を領したが、陽明学を奉じていたため、寛文9年追放され、以後仕官せず、長崎・江戸に遊び、書をもって立ち、天下第一の人と称せられた。元禄10年62才で歿した。

本書は雪山が藩に願って、肥後内の寺社、古蹟を調査し、寛文7年から9年にかけてまとめたもので、錠前付の箱に納められて藩庫に秘蔵されたため、書名のみは世に知られても、見る者はなく、全くの孤本として伝えられ、昭和38年細川家永青文庫において発見、影印刊行された。本書は肥後最初の地誌であるばかりでなく、中世の様相を十分遺している近世初期の文献として貴重である。

本書は名藍志・名社志・寺社総録・名蹟志の4部から成り、このうち古城址についての記事は後の2部である。寺社総録は、正しくは「国郡寺社総録、名蹟附」の題名で、各郡各村別の神祠仏堂を挙げ、これに附記して少数の名所と古城を記載している。その一二を例示すると

益城郡杉村 若宮 普門寺 十一面観音堂 天神 地藏 石仏 古城

玉名郡南関 西福寺など寺社9か所、墨摺川など名所2か所のほか古城一所大津山河内守 一所加藤美作守

のように、村に古城の存在を示すか、古城主名を記すか、城名を記すだけである。また託麻郡小山村の古壘、山本郡内村の城壘など壘と記載され、菊池郡班蛇口村の穴之城のように、洞穴も記されている。かくて寺社総録中に記載された古城数は122であるが、宇土・八代・芦北の三郡は未完成らしく、寛永郷帳に記された村数三郡合計138か村中51か村の記載があるだけだから、古城数はさらに増加するはずである、

一統志名蹟志は全143項中温泉・川・歌枕など名所15項を除いて、128項は古城である。古城も名所も郡別にするだけで村名を記さず、各項目だけかまたは簡単な説明をつけている。古城については隈本府城は余白を広くとつてあるが、項目だけで説明はない。隈本古城は6行53字の説明をつけ、飽田郡上代城は「山高三十二間東西六十八間南北百八十間」と城の規模を記し、後に2行の城史を記す。最も説明が長いのは菊池城で、系図12頁、城史28頁（1頁は162字）、阿蘇文書所収の文亀年中菊池家臣83名を5頁に亘って記している。阿蘇郡末には阿蘇家臣111名の交名を記す。その中に「健宮鑄銭司」があるのが注目される。八代郡古城は説明は2行にすぎないが、次に響原戦死者95名を挙げている。文中益城郡愛藤寺城が3か所に出るが、2つは登藤寺城と誤記している。

上記のように一統志中、寺社総録の古城122と、名蹟志の古城128はその数も一致しないが、個々の城についても一致しないのが可なり多い。例えば名蹟志の益城郡木原城は「鎮西八郎爲朝」と城主名まで記すが、寺社総録の木原村には古城の記載がない。河江城も名蹟志に城名を挙げるが寺社総録中には見えないし、その後の記録にもこの城は挙げられたもの

がないので、これは誤りではあるまいか。かくして両者を比較して、その実数をとってみると、140城を挙げることができる。肥後国志より以前の文献が芦北郡については4乃至6か城を挙げるにすぎないのに対し、最も早い一統志が、村数に於ては郷帳の30か村中11か村を挙げるにすぎないのに、記載数は18か城もあることは注目すべきことである。

3 肥州古城主考

古城だけに関する最初の著作で、辛島道珠著、道珠は朱子学を奉じた儒医、藩命によって天和元年より本書の著述にかり、程なく完成したというから、本書の成立は天和・貞享頃と考えてよい。書名は元禄2年(1689)国絵図作製に当って、北島雪山の国郡一統志と、辛島道珠の肥後名勝略記及び古城主考を参考にしたことが佐田記録中にあり、また後記の肥後国志草稿の参考文献に「辛島氏古城主考」とあるので、単に「古城主考」であったかもしれないが、現行本の多くが「肥州古城主考」となっているので、それに従っておく。なお後表の女子大本は、内題は「肥州古城主考」であるが、奥題は「古城記」である。かかる書名もあつたのであろうか。本解題を書くに当って、古城主考5本を披閲して、比較検討したが、収載数や古城名にも異同があり、説明にも長短があつて、何れが原本に近いかわからないので、5本を表示し、また比較のため古城主記と陳跡略志を加えた。また各本内容の分量を見るため、大凡の字数を算出し、400字詰原稿用紙の枚数でこれを最下段に掲げた。

第2表

郡	番号	書名 城名	A							代	26	古麓	○	○	○	○	○	○	○	
			A	B	C	D	E	F	G											
飽田	1	隈本	○	○	○	○	○	○	○	八代	27	岡	○	○	○	○	○	○	○	
	2	河尻	○	○	○	○	○	○	○		28	興善寺	○	○	○	○	○	○	○	
	3	上代	○	○	○	○	○	○	○		29	吉本	○	○		○	○	○	○	
託麻	4	本山	○	○	○	○	○	○	○	代	30	大野	○					○		
	5	健軍陳内	○	○	○	○	○	○	○		31	南種山	○	○	○	○	○	○	○	
宇土	6	宇土	○	○	○	○	○	○	○	芦北	32	麦嶋	○	○	○	○	○	○	○	
	7	網田	○	○	○	○	○	○	○		33	上土						○		
	8	矢崎	○	○	○	○	○	○	○		34	松江							○	
益城	9	隈庄	○	○	○	○	○	○	○	山本	35	津奈木	○	○	○	○	○	○	○	
	10	豊福	○	○	○	○	○	○	○		36	田浦	○	○	○	○	○	○	○	
	11	木原	○	○	○	○	○	○	○		37	佐敷	○	○	○	○	○	○	○	
	12	御船	○	○	○	○	○	○	○		38	水俣	○	○	○	○	○	○	○	
	13	花ノ山	○	○	○	○	○	○	○		玉名	39	下野	○	○	○	○	○	○	○
	14	堅志田	○	○	○	○	○	○	○			40	筒獄	○	○	○	○	○	○	○
	15	岩尾	○	○	○	○	○	○	○			41	日嶽	○	○	○	○	○	○	○
	16	愛藤寺	○	○	○	○	○	○	○			42	高道		○	○		○	○	○
城	17	豊内	○	○	○	○	○	○	○	山鹿	43	南関	○	○	○	○	○	○	○	
	18	傍島馬入	○	○	○	○	○	○	○		44	南関新城	○	○	○	○	○	○		
	19	田代	○	○	○	○	○	○	○		45	湯町(今市)	○	○	○	○	○	○	○	
	20	下陣	○	○	○	○	○	○	○		46	城村	○	○	○	○	○	○	○	
	21	木山		○	○	○	○	○	○		47	猿返	○	○	○	○				
	22	阿高	○	○	○	○	○	○	○		48	米山	○	○	○	○	○	○	○	
	23	陣内						○	○		49	鵠巢	○	○	○	○	○	○	○	
	24	曲野						○	○		50	下長野	○	○	○	○	○	○	○	
	25	南海東						○	○		51	芋生							○	

4 古城主記

森本一瑞著、著作年代不詳、森本は150石、肥後藩の軍学師範、天明4年没80才、肥後国誌の著者である。本書は森本の著作ではあるがすべて辛島の古城主考によっている。すなわち隈本城は古城主考の数行を削っただけ、河尻城は前書の初7行をそのままとって、後11行をきり捨て、上代城は前書の記事46字中「今福氏ノ伝未考之」の8字を削って、その前後を結びつけてあるなど、前書の長い記事は一部をとり、短いものに僅かな補説を行なっているにすぎない。ただ網田・御船・古麓・岡・興善寺などには城主についての附記が多い。なお八代郡大野城は、城名を記さず吉本城に続けて記載してあるので、前表では別城として一項を立てた。城数は上妻博之の「肥後文献解題」では59城となっているが、同氏書写の上妻文庫本には、前表のように68城が記されている。

5 肥後国陳跡略志

水足屏山著、著作年代不詳、刊本なし、屏山は学問を以て仕え、禄100石、享保17年(1660)没62才。陳跡略志は3部に分け、第1、2部を古跡、第3部を古城とし、初漢文で書いたのを読む人のために国文に書直したと云う。陳跡の部は郡別、城別に解説したものであるが、隈本城に加藤家改易を加え、八代麦島城に城代加藤正方の広島隠退後を加えたほかは、古城主考と大差がない。収録古城は玉名郡南関新城と山鹿郡猿返城がなく、八代郡岡城には「此城俗ニ興禅寺ノ城ト云」と記して、岡城と興善寺城を同一にしている。一方古城主考にない阿蘇郡坂梨城を収載している。

6 古城考

森本一瑞著、横田厳正増補、明治43年刊肥後文献叢書第一巻所収、昭和46年歴史図書社より復刊、A5判2段組129頁分、森本については前出、横田は肥後藩士、200石、長瀬真幸の門人として国典に通じていた。弘化3年(1846)没57才。文献叢書本には、天明8年(1788)古城考三冊を献納した旨の横田の奥書があるので、著作完成はその前年か前々年と考えてよい。本書は森本の著述を横田が大幅に増補したものと云われるが、現行本では森本の原著の部分と横田増補の部分との区別がつけられない。ただ肥後古記集覧所収古城主記に「嘗森本一瑞翁著于古城考三卷而其所原者此書也」との大石真麻呂の奥書があることから見ると、森本著述の本書の部分は、古城主記の六十数か城にすぎなかったのではあるまいか。

本書は3巻に分け、巻首に目次をつけ、郡別の各城について説明しているが、文献叢書本では目次と本文の間に、次のとおり僅かな齟齬がある。

- | | |
|--------------------|-----------------|
| 1 益城郡道上城は本文に城名がない。 | 2 同郡南田代城は本文にない。 |
| 3 玉名郡赤崎城は目録にない。 | 4 芦北郡伏木城は本文にない。 |
| 5 阿蘇郡城山城は本文にない。 | 6 豊後天面山城は目録にない。 |

かくてこれを整理すると、城数は目録で275、本文で274となる。

阿蘇郡は古城址の多い所で、城数目録で34、本文で33が挙げられているが、このほかに12か所城名だけで城址不明のものを挙げている。また阿蘇家々人在城と云う小国9か城、阿蘇家の説による小国9か城、大宮司全盛期の領内20か所の城名を記している。これらを整理すると、本文以外に14か所の古城名を収載していることになる。勿論これは計数に加えてない。古城考は従前の関係文献の集大成であり、現在にいたるまでの諸文献の古城の記述は、ほとんど全て本書によっていると云ってもよい。

7 肥後地志略

国郡一統志に次ぐ地誌として、辛島道珠の肥後名勝略記がある。元禄2年(1689)の著作で、地誌としては看過できないが、全文400字詰65枚ほどの短かいもので、古城は古代の鞠智城と菊池氏の「菊の城」・隈部古城(隈府城)、八代郡内河彦五郎城跡の4か所を載せるにすぎず、記述も数行であるので、古城文献としては、とりあげる必要はない。

肥後地志略(未刊)は宝永6年(1709)井沢蟠龍著、井沢は肥後藩士、鉄砲二十挺頭、学問武芸に秀で、60余種の著述がある。本書は神社、寺院、古跡、陵墓、器仗、伝説正誤の6部門に分け、各門ごとに郡別に配列して考証を加えている。古城跡は古跡門238項中に第1表のとおり96項あり、ほかに阿蘇郡で20か所城跡と小国9か所城跡の古城名を記している。

8 新編肥後国志草稿

享保13年(1728)成瀬久敬著、未刊、成瀬は郡奉行300石、元文2年(1737)没、79才、本書は成瀬が肥後国誌の原形を創

始したもので、国内を郡別手永別に分け、各手永は総高と小村を記し、次いで各村毎の高と名所旧跡寺社を挙げて説明してある。他領である球磨郡はごく簡単に郡の概略と人吉城のほか、各村高を記しただけにすぎないが、天領天草は一応細川領並に記し、豊後のうら肥後領については肥後と同等に記述してある。古城については第1表のようにとりあげ、古城主考、陳跡略志や各地の口碑などもとって記述している。

9 肥後国誌

明和9年(1772)森本一瑞著、前の国志草稿を森本が増補して編述したもので、刊本に次の3種がある。

①**増補肥後国誌** 明治17年頃水島貫之が佐々豊水の協力を求め、広く関係史料を集めて、森本の国誌を増補し、原著の2倍以上に大きくしたもので、水島の経営した印刷所で刊行したので、水島本肥後国誌とよばれている。和紙和装活版14冊。出版の途中故障があって、阿蘇・天草・球磨・豊後三郡の肥後領は印刷されていない。水島は長崎で印刷術を習い、熊本で最初の印刷業をおこした。明治31年没。佐々は300石の旧藩士、皇典を学んだ。明治40年没71才。

②**肥後国誌** B5、2冊1507頁、大正5年後藤是山氏が水島本を洋本として印刷し、前者に欠けたところを南郷事蹟考、求麻外史、天草島鏡で補った。九州日日新聞社発行、後藤本とよぶ。欠を補った三書は、その性格も体裁も国誌とは異なるので、前後不統一なのは止むを得ない。後藤氏は当時九州日々の記者であった。

③**肥後国誌** 昭和46年青潮社によって後藤本をA5判に縮小刊行した。さらに翌年松本寿三郎氏が、阿蘇・球磨・天草三郡を、国志草稿をもとに、最近の各種の史料によって増補し、地図・索引を付け、国誌の体裁で「肥後国誌補遺索引」として同所より刊行した。A5、613頁。松本氏は熊本大学助教授、この青潮社本によって、肥後国誌は広く普及し、また使い易くなった。古城は第一表のとおり266城で、史料は殆んど古城考、球磨郡は同地の史料によっている。

10 古今肥後見聞雑記

天明4年(1784)寺本直廉著、寺本は肥後藩物頭、800石、文化2年(1805)没、69才、本書は寺本が藩内の寺社名勝旧跡を踏査した記録で、肥後国誌水島本にも多く引用されている。記載は郡別であるが、項目は分けてない。古城は飽田郡7、詫麻郡1、山本郡1、合志郡2、菊池郡2、山鹿郡1、阿蘇郡1、益城郡5、八代郡1、芦北郡1の合計22城で、数は少ないが、実地を踏査見聞しているので、注目すべきことが多い。

11 各郡地誌

前記の地誌類は全藩に亘るものであるが、各郡各郷の地誌にも古城を記載したのものがある。

①**合志川芥** 著者著作年代不詳、全体を名所、合志系図、神社、古城、名石、古寺、古屋敷、古塚、雑の各部に分け、写本96枚中古城部は5枚(400字詰6枚位)の簡単な記述である。収録古城は、上荘、飛隈、亀、千束、九万石、古城、東嶽、今城、今石、原口の10か所である。

②**改訂合志川芥** 原著天台宗僧侶某、増補訂正甲斐齋、改訂合志芳太郎、昭和7年刊、A5判148頁、前の写本には原著者が記されていないが、改訂版にはそれがある。上、中、下の三巻に分け、下巻の第一章を城砦の部とし、13頁分を当てる。収録38城で、古城考より25城も多いが、竹迫城は別名によって1城を2城とし、居館らしいものが数か所あって、実数は30か城くらいである。記事の多くは伝承俗説によっており、正しい資料とはなし難い点もあるが、本書だけによって知られる古城もあり、城名を知るためには重要である。附載として城主名を挙げるが出典を明かにしない。巻首に入れた文政8年筆写の竹迫城絵図の写は、城図として貴重である。

③**矢部風土記** 天保11年(1840)渡辺質著、刊本なし。渡辺は矢部の医師、明治10年没65才、本書は渡辺が矢部の諸記録に俚談を混ぜて書いたもので、山川、神祠など六部に分け、その一部に城壘の項がある。収録11か城と居館「浜の館」があり、上妻文庫本の写本全76枚中12枚(400字詰11枚分)を城壘に当てている。

④**八代郡内略記** 八代略記ともいう。著者著作年代不詳、写本全41丁を名所、古城、陵墓、人品、土産の5部に分け、8丁分(400字約10枚)を古城に当てている。収録16か城のほかに麓五城を挙げている。柿迫城があるが、これは古城考の「平家が城」に当るのであろうか。

⑤**菊池風土記** 寛政6年(1794)渋江公正著、渋江家は代々菊池で門弟を教授した。公正は文化11年(1814)没72才。本書は井沢蟠龍の肥後地志略に倣い、菊池の旧跡、山川、神社など9項188か所を挙げ、巻5に城墟がある。収録は守山城(隈府城)と菊池十八外城だけで、その他の城はとりあげていない。肥後文献叢書第3巻に収められ明治43年刊、昭和46年歴史図書社復刊。

12 郡 村 誌 と 郡 村 図

明治初年の国家的な大編纂事業の一つに地誌の編集がある。明治5年4月陸軍省が各府県に対し郡村誌と郡村図の作製提出を令じ、次いで同年9月太政官が同様なことを下命して、陸軍省の計画は中止され、明治7年太政官の地誌編集が内務省へ移され、16年までの間に全国的に地誌編集の事業が進められ、作製されたものは内務省へ送付され、いま県立図書館にこの稿本または中清書本が次のとおり残されている。記事は郡誌は一郡の総轄であるから古城の記事はない。村誌は一村毎に疆域・幅員・里程・寺社など30数項目に亘って記述し、その古蹟の項中に古城址が含まれている。古城の記事は多くは国誌か古城考によっているが、それに現況を附記し、また実地踏査によって城址の境界、大きさ高さなどを実測したのもあり、古城址文献として重要である。各郡次のとおりで、玉名郡村誌が全文活字化されているほか、熊本区、飽田、球摩、山鹿、宇土の各郡村誌が抄本として活字化されているが、抄は古城など省かれている。また求麻郡は全文印刷されているが、これにはもともと古城址は記されていない。

① **玉名郡村誌** 田辺哲夫氏校訂、昭和33年刊、A5、2段組494頁、各村毎の古城址について、その大きさと沿革を記す。記事の長いものは印刷本で15行、短いものは1行だけである。収録した古城は高瀬城以下27城と館2つである。

② **山本郡村誌** 本留城址など9城で、轟村古城は村図はあるが(後述)村誌には記事がない。岩野城址は著名な古城であるが、これには古城考による説明のほかに「本丸跡山頂東西十八間南北十六間、上段ヨリ二ノ段ハ三間落チニシテ幅六間折廻ラシノ墨地アリ」と踏査の結果を朱書して、貴重な資料を提供してくれている。

③ **菊池郡村誌** 村数にして約半分を逸失した欠損本であるので、古城も葛原城以下5城と米原村の不動倉跡だけである。

④ **合志郡村誌** 上庄城以下8城、記事はほとんど古城考による。

⑤ **熊本区誌** 昭和27年熊本県史料集成第一集として刊行、孔版、A5判本文43頁、解題附載29頁、古城のうちに千葉城城墟、古城城墟、熊本旧城を記載している。

⑥ **飽田郡村誌・託摩郡村誌** 飽田郡では楠原、柿原、赤水、妙見(立福寺)、下松尾、川尻の5城、託摩郡では健軍陳内、本山の2城を挙げる。下松尾城の項には千金甲古墳を烽火台跡としており、本山城には当時の城址の大きさを記しており、市街化された今日参考となる。

⑦ **上益城郡村誌・下益城郡村誌** 上益城郡では御船城・木原城など12城を挙げ、下益城郡は各村の項に8城の記載があり、別紙に下益城郡古城跡として、隈庄・豊福・木原・花山・赤蜂尾・松野原・馬入の7城を挙げて説明している。重複分を差し引けば7城のほかに榎木・竹崎・阿高の3城が加わることになる。なお花山と松野原は村の項に城図が附けられている。

⑧ **郡村図** 上の郡村誌に添付された郡図6葉、村図1119葉が保存されている。郡図は一郡のものであるから古城の記入はない。村図は当時の一村の地図であるから、城址も記入したのがあるが、これは位置を知るだけである。そのほかに古城図が次のとおり付けられている。

山鹿郡 城村

山本郡 下野 内村 鞍掛 轟 岩野 豊田 田底

合志郡 亀 千束 飛隈 上荘

上益城郡 早川

下益城郡 木原 隈庄 花山 松野原

以上17葉で、最後の花山と松野原は村誌の中に添付されている。これらの古城址図は、半紙半枚から4枚大の大きさに描き、毛羽式描図で、鉛筆書の稿本もあり、清書して筆彩を加えたものもあり、間数を記入し、土塁や堀を描いたものもあり、実に得がたい資料である。

⑨ **球磨古城図** 人吉城図と七地村赤池城以下郡内各地の古城図29葉である。人吉城図は広幅の用紙に描かれ、熊本城図同様平面図式の城図である。赤池城以下は28×41cmの用紙に、鳥瞰図風に、あるいは写生画風に描いた真景図で、古城址の当時の景観を見ることが出来る。絵図を納めた袋に「球磨郡村図附属図」と記されているので、古城図の作製は郡村誌同様明治8年から15年の間である。

13 城 史

近世城郭であるが、八代城と熊本城の城史が刊行されている。

① **八代城志** 磯田正敬著、明治17年八代活版舎印刷、和紙和装活版、A 5判23丁、初に八代城歴世系統として建武2年内河彦三郎から天正16年福島正則までの古麓城主、天正16年小西行重より元和5年加藤正方までの麦島城主、元和6年加藤正方より明治3年松井盈之までの松江城主を記し、次に八代城（松江城）だけの歴史を記している。中に元和6年の城図とそれ以後の八代城下絵図が木版色刷で添付されている。

② **熊本城史梗概** 大正6年同編纂会編、A 5、91頁、初に出田氏から佐々成政までの隈本城沿革を10頁、次で加藤家・細川家時代16頁、鎮台時代5頁のあと神風連の変と西南の役で、とくに西南の役守城戦は詳細に叙述してある。口絵に熊本城旧写真と西南役関係文書写真、及び熊本城と城下絵図2折、西南役配備図2折を入れる。本書は大正14年再版、昭和2年に熊本城址保存会によって3版が出されるが、版によって写真に相異がある。

③ **熊本城年表** 鈴木喬監修、熊本市観光課・熊本城管理事務所編、昭和52年刊、19×10cm折本1帖、全122項中隈本古城は10項で、他は近世近代であり、熊本城に関する最も詳細な年表である。監修者は熊本市文化課長。

14 史蹟調査報告など

大正7年熊本県教育会編「**熊本県史蹟調査報告**」と大正11年から昭和6年に亘る「**熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告**」5冊が、昭和49年青潮社より縮刷合併して復刊された。B6、832頁、このうち史蹟調査報告書の中に、2古城がとりあげられている。一は水俣城で、沿革4頁と水俣城写真、実測図1頁がある。他は大矢野城で、元寇における大矢野種保兄弟の活躍を主とし、蒙古襲来絵詞・大矢野氏軍旗、大矢野氏系図など7頁と大矢野城写真1頁で、大矢野城の記事は僅か2行にすぎない。

飽託郡北部内に於る史蹟並に天然記念物調査 熊本県教育会飽託郡北部会編大正6年刊、A 5判163頁、当時の飽託郡北部の竜田・黒髪・清水・川上・西里・花園・池田・芳野の8か村内の史蹟、名勝、天然記念物について、県の指示に従って記録したものである。由来は多く肥後国誌によるが、現況や現地の伝承、また物件の所在地番や坪数など有用な記録がある。古城址は清水村の亀井城、川上村の楠原・城ヶ平・井上3城、西里村の平・妙見・赤水3城、花園村の柿原・中尾丸2城である。記事は国誌のままであるが、井上城の「小佐井某城主タリシトイフ」の伝承は他の文献にない有用な記事である。

15 郡誌

前記調査報告書などが刊行された大正中中期から昭和初期にかけての、郷土研究の時流にのり、県教育会各郡支会の手によって、各郡誌が全郡刊行された。これは昭和47・48年に名著出版から復刊されて、今日容易に披閲できるようになった。判型はA 5、中に古城の記事を納めるが、出典はほとんど肥後国誌と古城考である。

① **玉名郡誌** 大正12年刊1236頁、古城址には107頁を用い、国誌同様「新撰事蹟通考」や系図などを利用し、また手鏡も引用してあるので、南関古城21頁、神屋城6頁、高瀬城5頁など長大なものもある。しかし引用文献ごとに項を改めてあるので、同一城か同名別城か判断に苦しむものがあるが、収載数凡そ58城、また下村・南関・鷹原の3城には見取図を入れてある。

② **鹿本郡誌** 大正12年刊、682頁中古城には8頁をとるだけである。従って収載34城であるが、長いものも10行(150字)でほとんど一行だけの説明である。

③ **菊池郡誌** 大正7年刊573頁、名所旧蹟44頁のうちに古城がある。隈府城2頁(1頁660字)、十八外城7頁の他は1行から6行程度の記述である。全15城中に洞穴の「穴の城」や、「大城小城」の横穴墳らしいものもある。

④ **阿蘇郡誌** 大正15年刊、910頁中城跡は8頁分で、30城が1行(44字)から7行までの記述にすぎない。30城のほかに「阿蘇の二十四城」として、阿蘇大宮司全盛時代の支配下にあった24城と城主名を挙げている。すなわち内牧城など阿蘇の8城、岩尾城など益城14城、託麻の健軍城、宇土の矢崎城である。

⑤ **熊本市・飽託郡誌** 明治39年角田政治編纂、飽託郡私立教育会発行、284頁、編者は地理学者、熊本師範学校教諭、古城は名勝旧蹟中に、熊本城以下11城の記事は在来の文献によるが、「城跡考」として、城趾の地形や現況を附記し、私見を述べている。また附録に県下の名勝を記し、中に古城として菊池城、竹崎城など11城について略述している。

⑥ **宇土郡誌** 大正10年刊504頁、古城は各町村誌中にあり、宇土城、田平城、矢崎城などのほか三角町城山、花園村花園山を挙げている。

⑦ **上益城郡誌** 大正10年刊649頁、古城は一節を設け、村別城址一覧として18か村32城を列挙し、次いで各城について

1行(48字)から22行まで、また御船城は5頁、赤井城は3頁の説明をつけている。口絵に御船・岩尾・木山・赤井4城の写真がある。

⑧ **下益城郡誌** 大正11年刊584頁、古城は各村誌中に古蹟伝説の項において各城迹について述べている。収録13城、記事は隈庄城が6頁、木原城が21行(一行46字)以下数行宛である。豊野村大天井城など文献にあまり見ないものがある。口絵にある堅山南風筆竹崎城の図は、最近までこれとほとんど変わらない景観であった。

⑨ **八代郡誌** 昭和2年刊937頁、古城趾及古戦場に一章29頁をさき、八代城以下17城を述べ、内古麓城に10頁、麦島城、八代城各3頁をとるので、他は10行から1行までである。口絵に八代城と古麓城の写真がある。

⑩ **芦北郡誌** 大正15年刊656頁、古城趾には1章を設け、千代永城趾2頁、佐敷城趾1頁、津奈木城趾2頁半、久木野城趾11行などが長文で、他は数行、収載28か城である。

⑪ **球磨郡誌** 昭和16年刊、2冊1670頁、名勝旧蹟に一章84頁を当て、各村毎に記述している。そのうち古城は1市11か村に13城を挙げ、人吉城8頁、上村城5頁、木上城3頁、山田城2頁のほかは数行宛である。文中城地の地図5、写真4と口絵に元禄5年人吉城絵図の写真を入れてある。

⑫ **天草郡史料** 大正2・3年刊、2冊1523頁、古城は「天草古城考」として5頁をとり、古城考を載せ、口絵に中村・志岐・一町田・本戸・栖本5城の写真を入れてある。一町田城は古城考にない。

16 熊本城とその周辺

昭和30年代は築城ブームの時代であった。戦災焼失のものだけでなく、明治初年に廃城となった城まで天主閣を復興再建し、新しい観光名所をつくりあげた。この時流に乗って、城郭に関する著書も次々に刊行された。「日本の名城」2冊(昭和34・5年刊、人物往来社)、「日本城郭史」(復刊、35年雄山閣)、「名城ものがたり」(1960年日本城郭協会)、「古城をめぐる」2冊(36年人物往来社)、「日本城郭全集」(次項)などはその一部で、筆者の所蔵するものだけでも10種に余る。

「熊本城とそと周辺」も時流にのった一冊である。井上宗和著1961年刊、A5、97頁、この期の城郭書が近世の城を対象とするように、本書も熊本城を主とし、宇土・八代・上代・御船・隈府・人吉の諸城を加えたものである。巻末に主要城郭表を設け、古代の鞠智城と、楠原城以下中世城趾99か所を挙げ城主、所在地、交通関係、遺構を表示している。内容に若干の誤りもあるが、見学の際の一応の手引になる。

17 日本城郭全集

同名の書が2部ある。1は日本城郭協会編、1960・61年刊、B4判10冊、写真を主とした近世城郭解説書で、九州編中に熊本・八代・人吉3城が収められているだけである。第10巻資料編中に、各国別の中世近世城址一覧があり、肥後国として63城を挙げているが、八代興善寺城を与善寺城、鹿本の米野山城を「めいやさん」と訓んだりしている。依拠した原典がそうならしい。

その2は大類伸監修、1967・68年人物往来社刊、A5判全16冊、県別に古代から近代までの城址を五十音順に2段組に配列し、解説したもので、熊本県は第15巻に67頁分とってある。収載253城であるが、記名者の執筆した熊本・宇土・人吉と井芹・柿原・岩尾・木原・隈府城と、菊池十八外城のほかは、編集者が文献だけによって執筆したのであるから、内容にいくらかの誤りが見出される。動馬喜城を「うごまき」翠簾置城を「すいれんき」と訓むなど城名にも怪しいものがあり、本山城・本山村城と託麻城を各一城に数えるなど疑問の点がいくつもある。第一表は本書に出たままの数を郡別に集計したのであるから、その数は絶対的なものではない。

18 熊本県の歴史散歩

熊本県高等学校社会科研究会編、1974年山川出版社刊、A6、223頁、全国歴史散歩シリーズの第43冊、高校日本史担当教師が現地に即して分担執筆した史蹟巡回案内書である。中に県下28城をとり上げて説明している。

19 熊本の城

鈴木喬編、昭和50年熊本日々新聞社刊、A6、223頁、「熊本の風土とところ」シリーズの10、熊本の文化財関係者11名によって執筆された郷土の古城案内書、前書同様携帯に便利な文庫版にしてある。第一表に示したように、本書巻末に県下427の古城一覧を挙げ、その中の82城について、本書の左頁に写真を入れ、右に半頁又は1頁の説明を付け、交通案内を

つけた古城の手引書である。他府県にはまだ古城だけの案内書のあることを知らない。

20 探訪日本の城

昭和52年小学館発行、全10冊。各冊B5、200頁、近代城郭について作家による読物風な城の歴史で、巻末に全国城址一覧として都道府県別に中世城館について、城名・所在地・城主・略解を付けてある。熊本県は第10巻、一覧作製者は桑原憲彰氏、479か所の城館がとりあげられている。

21 調査報告書

昭和30年代に入ると各地で遺跡の破壊が起つてきた。宅地造成、道路建設、農業構造改善などによる遺跡遺構の破壊が列次いだ。破壊を目前にして、記録保存の立場から緊急調査された遺跡も多い。古城址もまたその憂目を見た一つである。昭和30年以降の城館調査は、26事例について、桑原憲彰氏が「竹崎城」(後出)に一覧を掲げられている。ここではそれらのうち調査報告が刊行されているものを紹介する。

① **鞠智城跡** 天智天皇のころ築造された鞠智城の跡と伝える鹿本郡菊鹿町米原の礎石群、菊池市木野字深迫の門礎石、菊鹿町池の尾の門礎石、同堀切の門礎石などの遺跡について、熊本県教育委員会が、昭和42年度43年度に行なった発掘調査の報告書が刊行されている。「埋蔵文化財緊急調査概報(伝鞠智城跡)」42年度分B5判40頁、43年度分15頁、今は鞠智城跡と確定し、「伝」ははずされている。

② **鍋城跡** 熊本県文化財調査報告 第4集所収B5、1頁

③ **竹迫城跡** 同上第5集 B5、3頁

④ **西湯浦豪族屋敷跡** 阿蘇郡阿蘇町西湯浦の伝小島氏館跡調査及び荘園遺跡保存に関するもの。阿蘇品保夫「中世阿蘇社領の豪族屋敷跡について」(熊本史学32号一昭和42年1月)A5、19頁、

同氏「湯浦郷の保存を望む」(熊本日々新聞 昭和49年6月3日)

⑤ **大田幸博氏の調査報告書** 本報告書の担当者である大田氏が、精力的に県下の古城址を調査された報告やメモが、熊本史学と「石人」に発表されている。「原人」は原口長之氏主宰の熊本史談会の機関誌で、以下(a)以外は全て本誌である。

(a)岩野嶽道祖城(植木町岩野)熊本史学42号(S48、6)12頁、なお本城址については昭和35年に桑原憲彰氏の調査がある。

(b)中世城郭について 石人175号(S49、4)A5、1頁半

(c)豊福城(杉橋町)同誌177号(S39、6)4頁

(d)玉岡城(菊池市)178号(S49、7)3頁

(e)柿原城(熊本市)184号(S50、1)3頁

(f)五社尾城(菊池市)214号(S52、7)1頁半

(g)津袋城・御宇田城(鹿本町)216号(S52、9)各1頁

(h)下岩城・上板楠城(玉名郡三加和町)217号(S52、10)1頁

(i)芋生城・四丁城(鹿北町)218号(S52、11)

⑥ **多次郎丸遺跡** 荒尾市原万田の豪族屋敷、昭和39年荒尾市教育委員会の調査、荒尾市文化財解説第一集、三島格「田次郎丸遺跡」九州考古学25号

⑦ **浜の館跡** 上益城郡矢部町矢部高校々地に当る阿蘇大宮司家の居館址発掘調査が、昭和48年49年に県教育委員会によって行なわれ、調査最終日に交趾三彩などのすばらしい出土品があって、一躍有名になった遺跡である。

(a)「浜の館」(熊本県文化財調査報告第21集)S52、B5、128頁、図版18頁

(内容)桑原憲彰：第一次二次調査 86頁

阿蘇品保夫：文献から見た阿蘇大宮司館 15頁

志賀 定光：関連遺跡調査 6頁

(b)桑原 憲彰：「伝承の中に生きた浜の館」日本談義 289号(S49、12) 6頁

(c)同 氏：「浜の館の調査報告」石人193号(S50、10)

⑧ **豊福城跡** 下益城郡松橋町所在、模式的な平山城の遺構で、本丸がゲートボール場設置のため削平されて、保存の

急務が叫ばれた。

大田 幸博：豊福城(「竹崎城」に附載) B 5、6 頁

工藤 敬一：壊された豊福城跡(熊本日々新聞 S 49、2、18)

阿蘇品保夫：破壊進む中世の城(熊本日々新聞 S 49、4、20)

⑨ 小野荘居館跡 下益城郡小川町北小野所在、竹崎城跡(後記)同様縦貫自動車道建設によって破壊されるので、昭和49年県教育委員会によって発掘調査が行なわれた。

田辺哲夫：小野荘居館跡の発掘(B L U E T I D E—青潮社出版ニューズ— 41号 S 49、11、) B 6 4 頁

桑原憲彰：小野荘中世館跡(「竹崎城」附載) B 5、3 頁

松本健郎：小野荘中世館の調査(「ふるさとの自然と歴史」43号) 1974、12、

⑩ 竹崎城跡 下益城郡松橋町所在の竹崎季長居城と伝える城跡が、九州縦貫自動車道建設によって破壊されるため、破壊を最小限度に止める保存運動とともに、城址伝承地の発掘調査、さらに関連調査として小川町の豪族館調査と海東の季長関係遺跡調査、また併せて文献調査を実施するという従来の発掘調査に見なかった画期的な総合調査が行なわれて、学界の注目を浴びることになった。

「竹崎城」(熊本県文化財調査報告第17集 昭和50年熊本県教育委員会刊、B 5、243頁、図版30枚)

(内容) 桑原 憲彰・大田 幸博：城跡発掘調査並関連遺跡調査 99頁

中村 一紀：蒙古襲来絵詞について 47頁

工藤 敬一：竹崎季長・竹崎季長関連文書 20頁

阿蘇品保夫：南北朝期を中心とする竹崎氏 8頁

森山 恒雄：戦国期の竹崎城と竹崎氏 25頁

森下 功：近世以降の竹崎城跡と竹崎季長研究 16頁

⑪ 相良頼景館跡 球磨川河川改修工事により消滅することになった球磨郡多良木町蓮華寺跡とともに、頼景館跡の発掘調査が50年に実施され、相良氏に関する文献調査も行なわれた。

熊本県教育委員会：「蓮花寺跡・相良頼景館跡」(熊本県文化財調査報告第22集) S 52、B 5、160頁、図版60枚

(内容) 杉村 彰一：相良頼景館 48頁

杉本寿三郎：相良氏の下向と多良木支配 32頁

⑫ 宇土城跡(西岡台) 中学校々地建設予定地とされた宇土市西岡台の発掘調査と文献調査が 昭和49年から51年に亘って実施された。

宇土市教育委員会：宇土城跡(西岡台)(宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集) 1977、B 5判、本文編 162頁、史料編 183頁

(内容) 富樫卯三郎：周辺遺跡 20頁

大田 幸博：宇土周辺の中世城跡 28頁

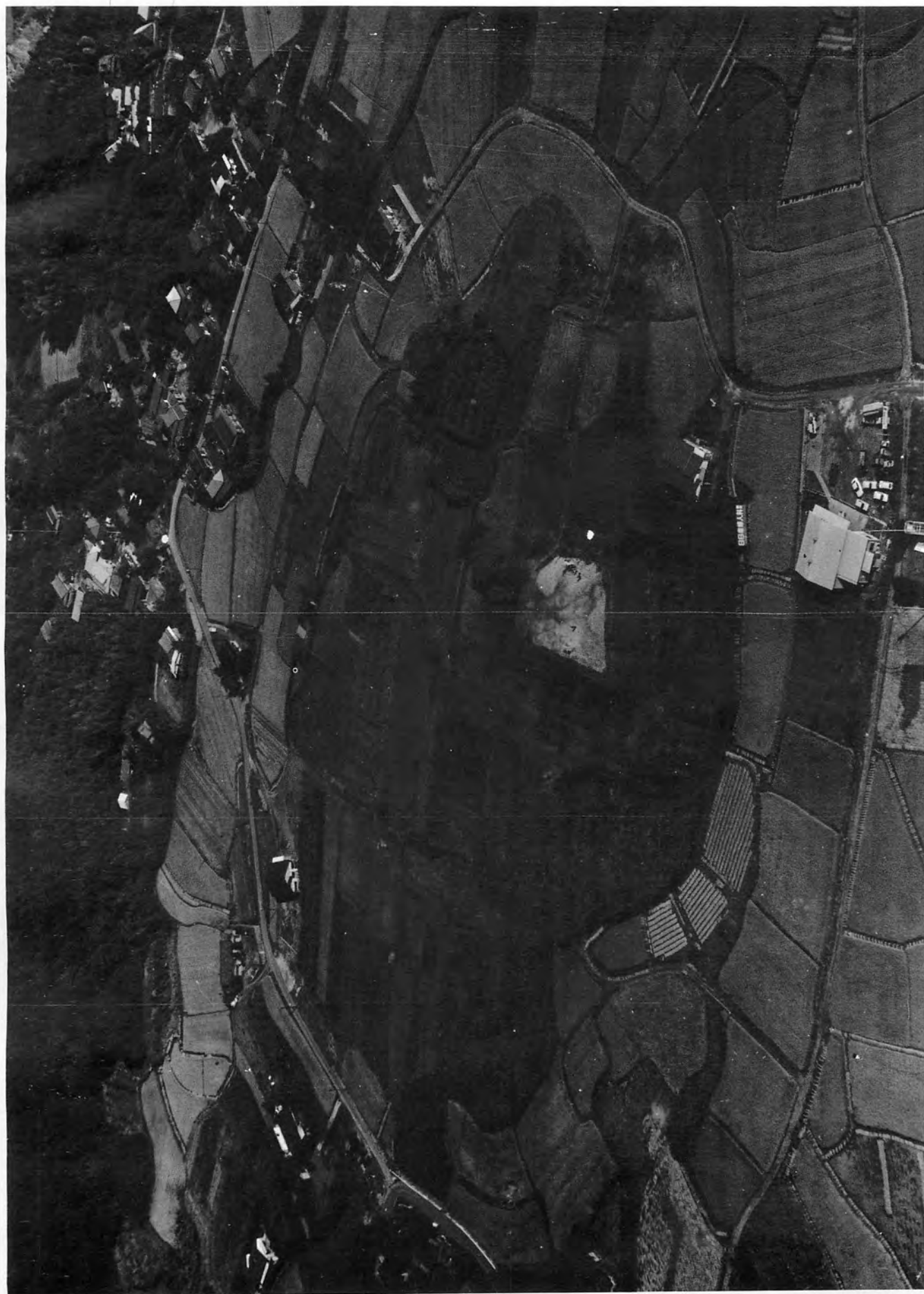
高木 恭二：発掘調査 41頁

井上 正：城址の文献調査 19頁

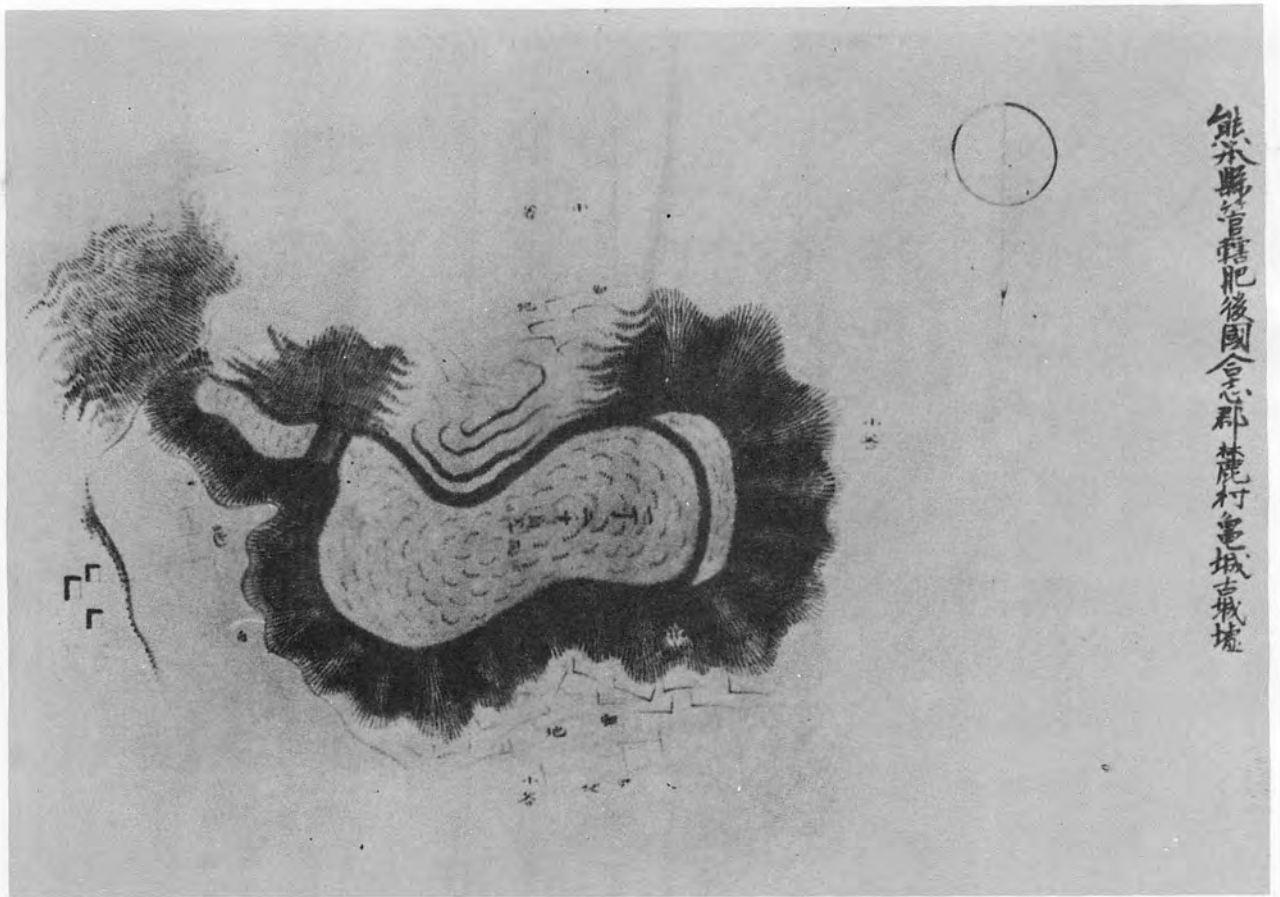
阿蘇品保夫：名和氏と宇土氏 16頁

卯野木盈二：宇土城(小西城) 15頁

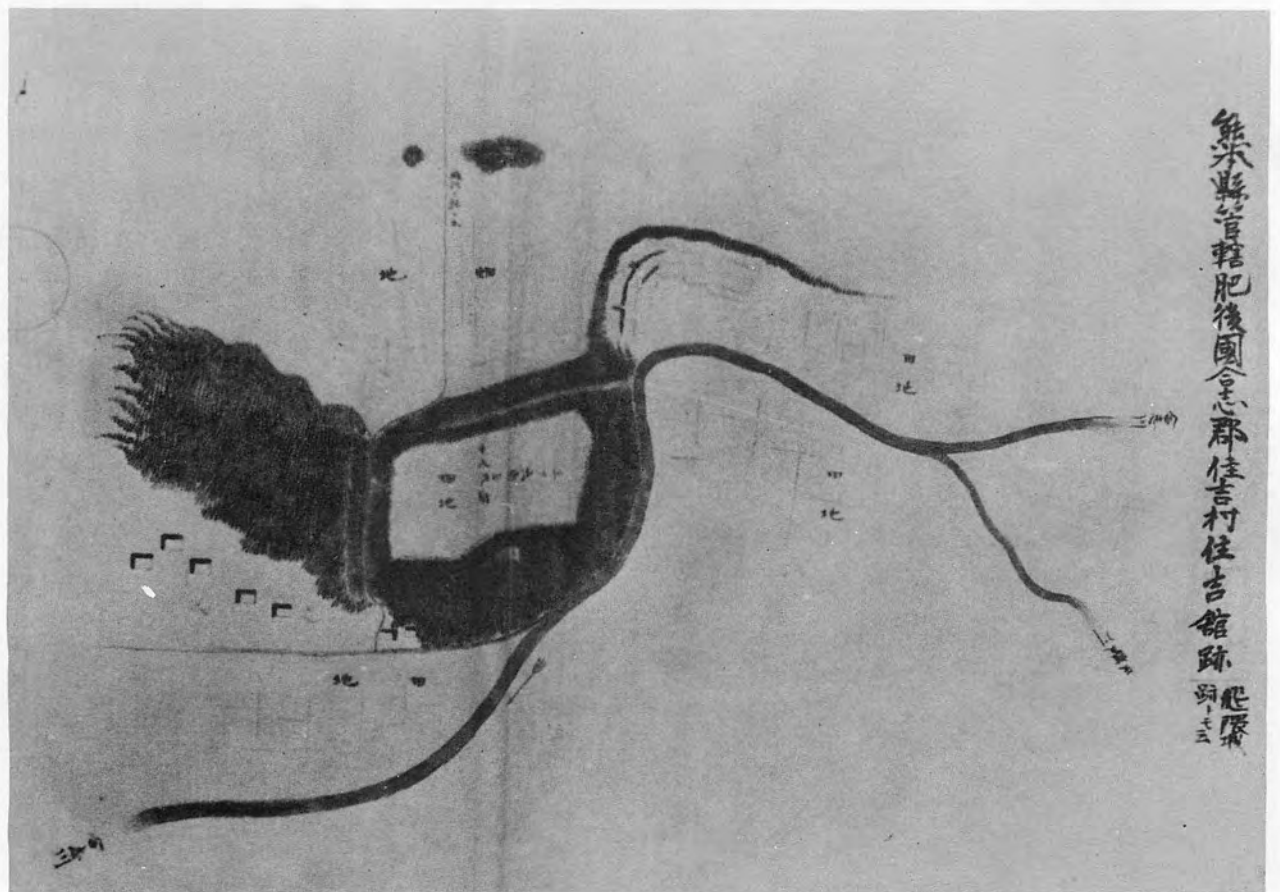
(森下 功)



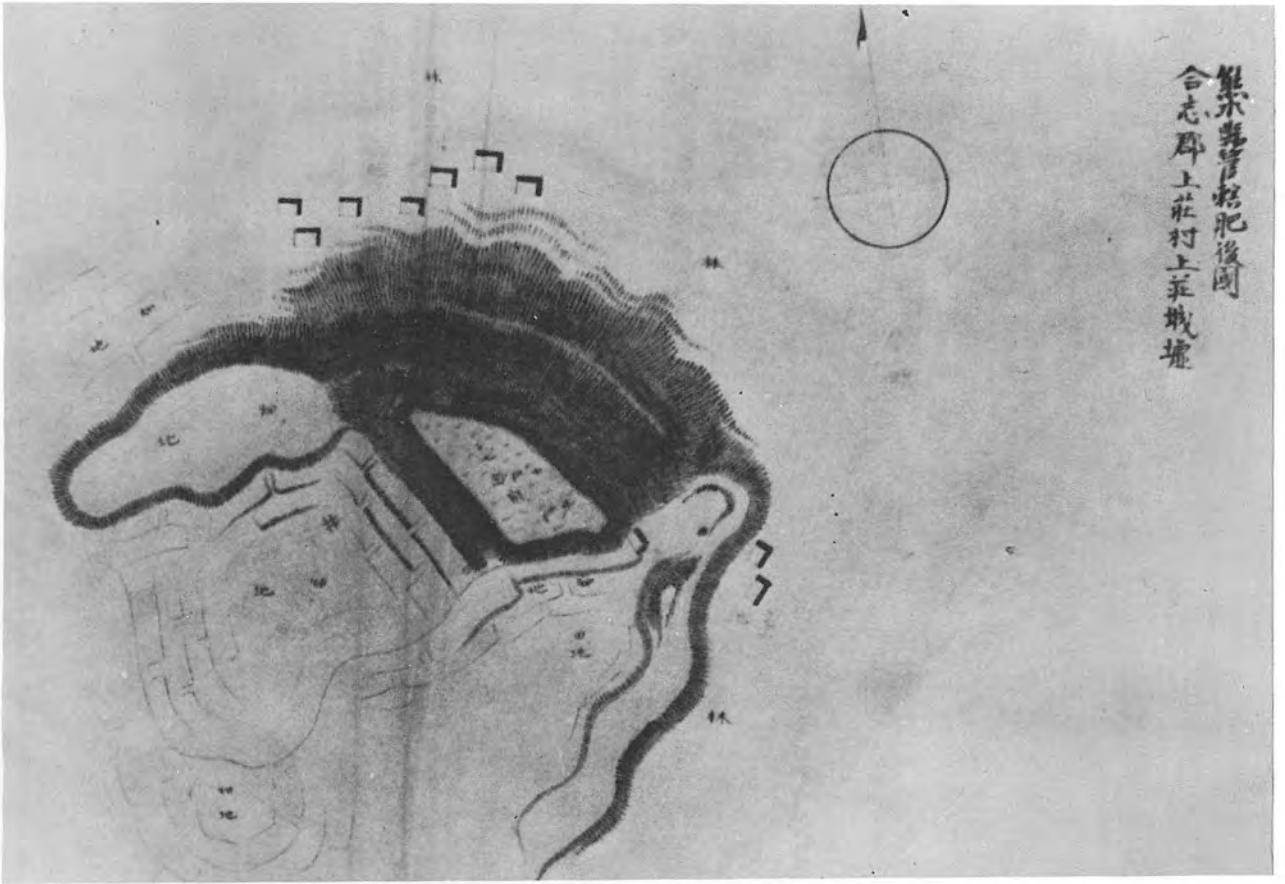
豊福城航空写真 南西方向より



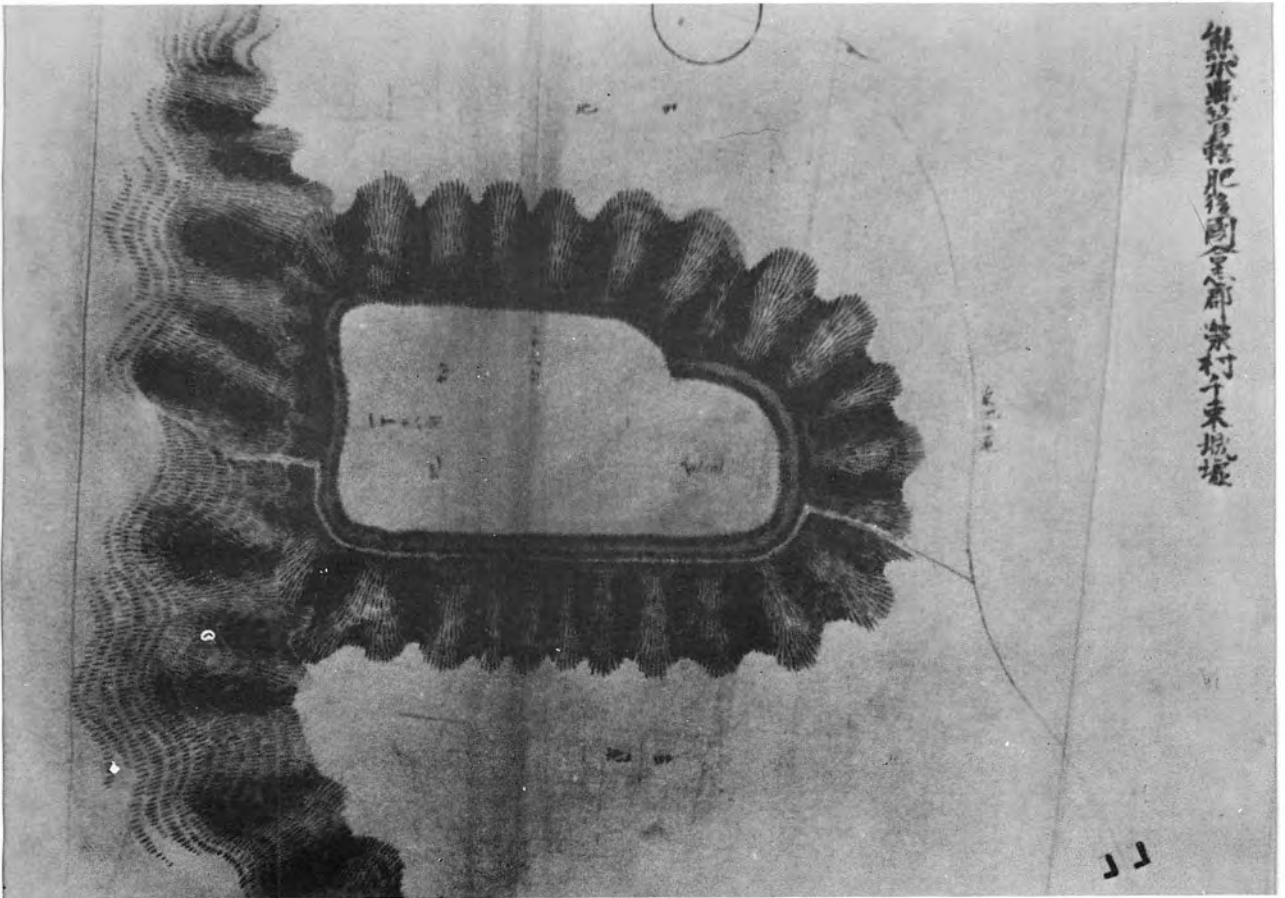
亀ヶ城 (合志郡村岡)



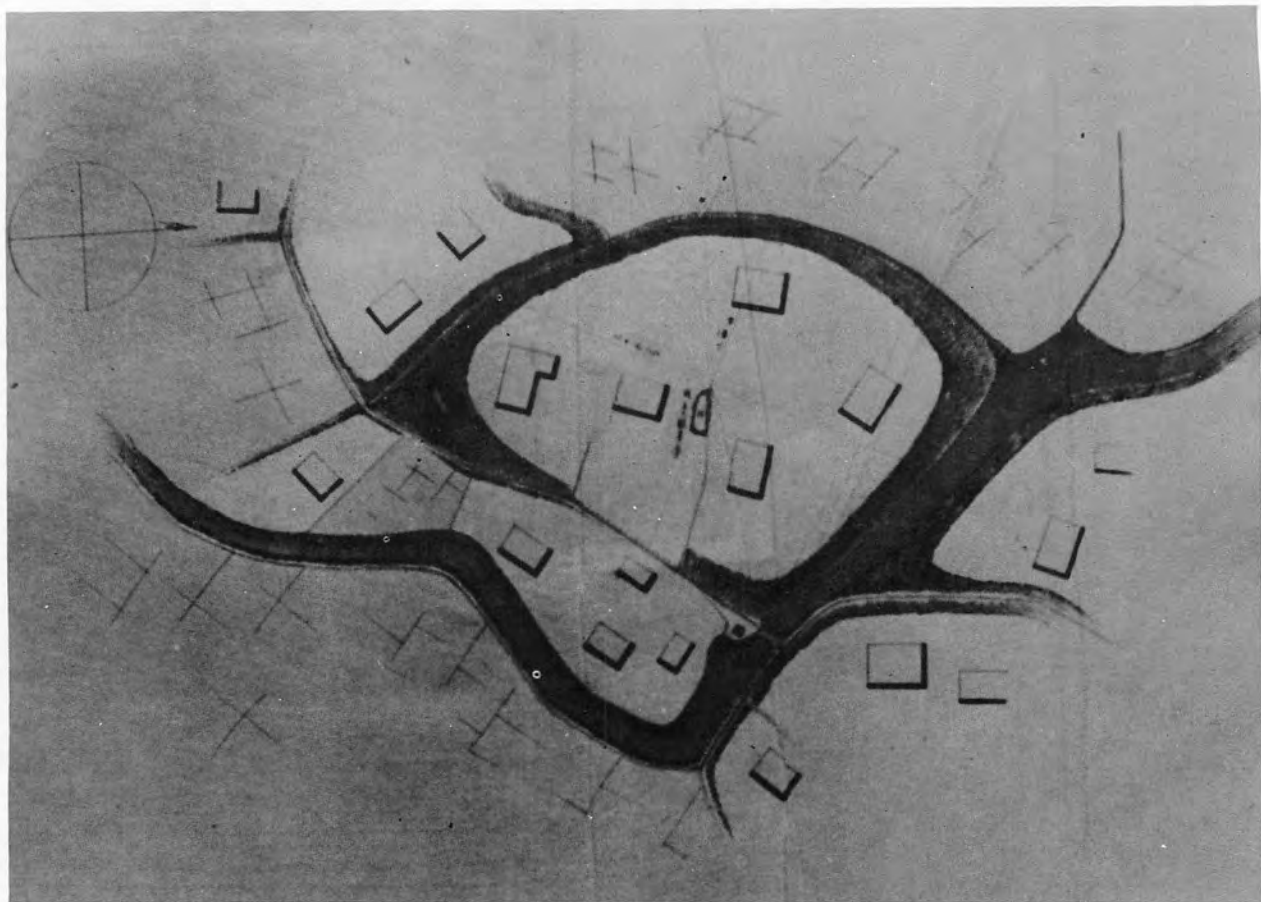
飛隈城 (合志郡村岡)



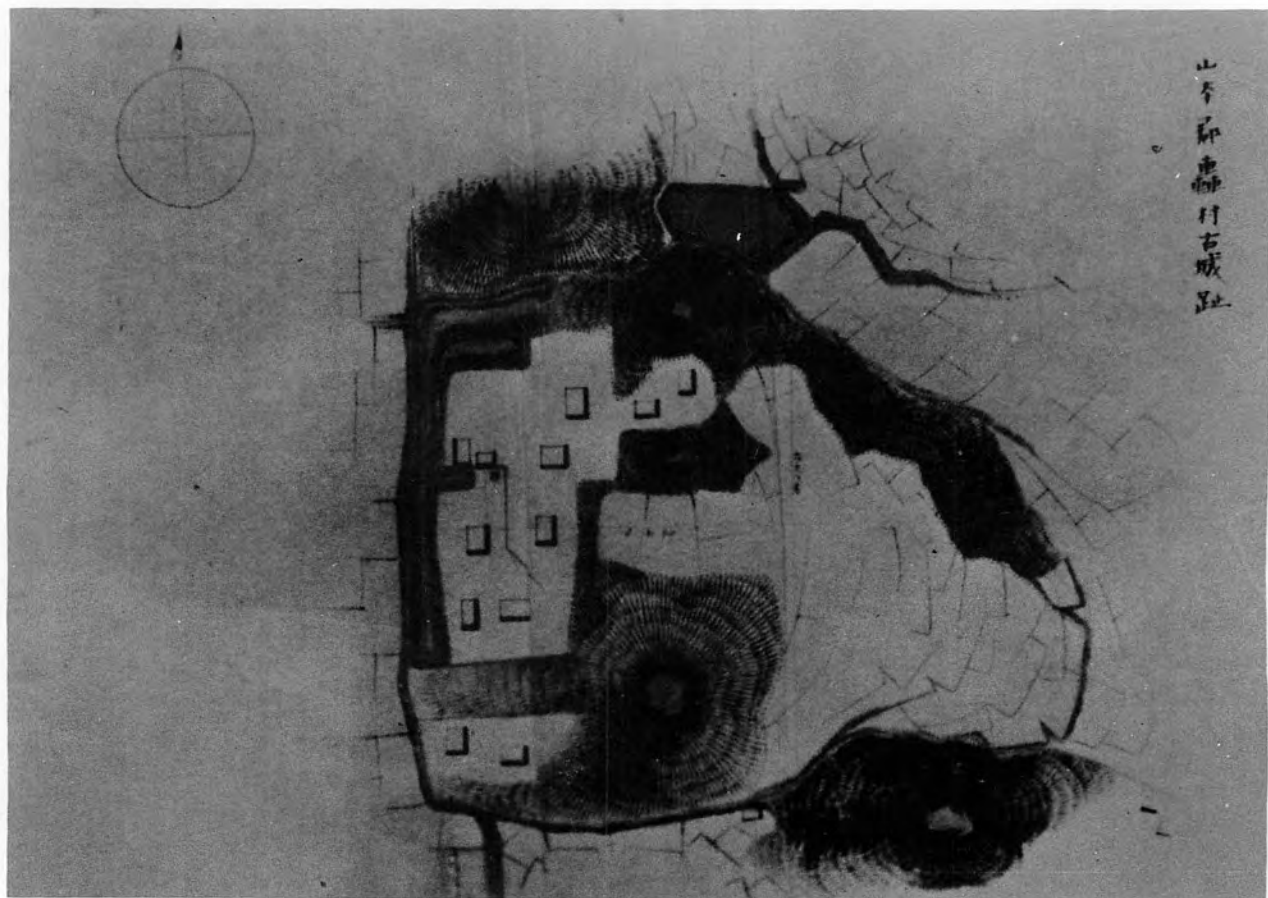
竹迫城（合志郡村図）



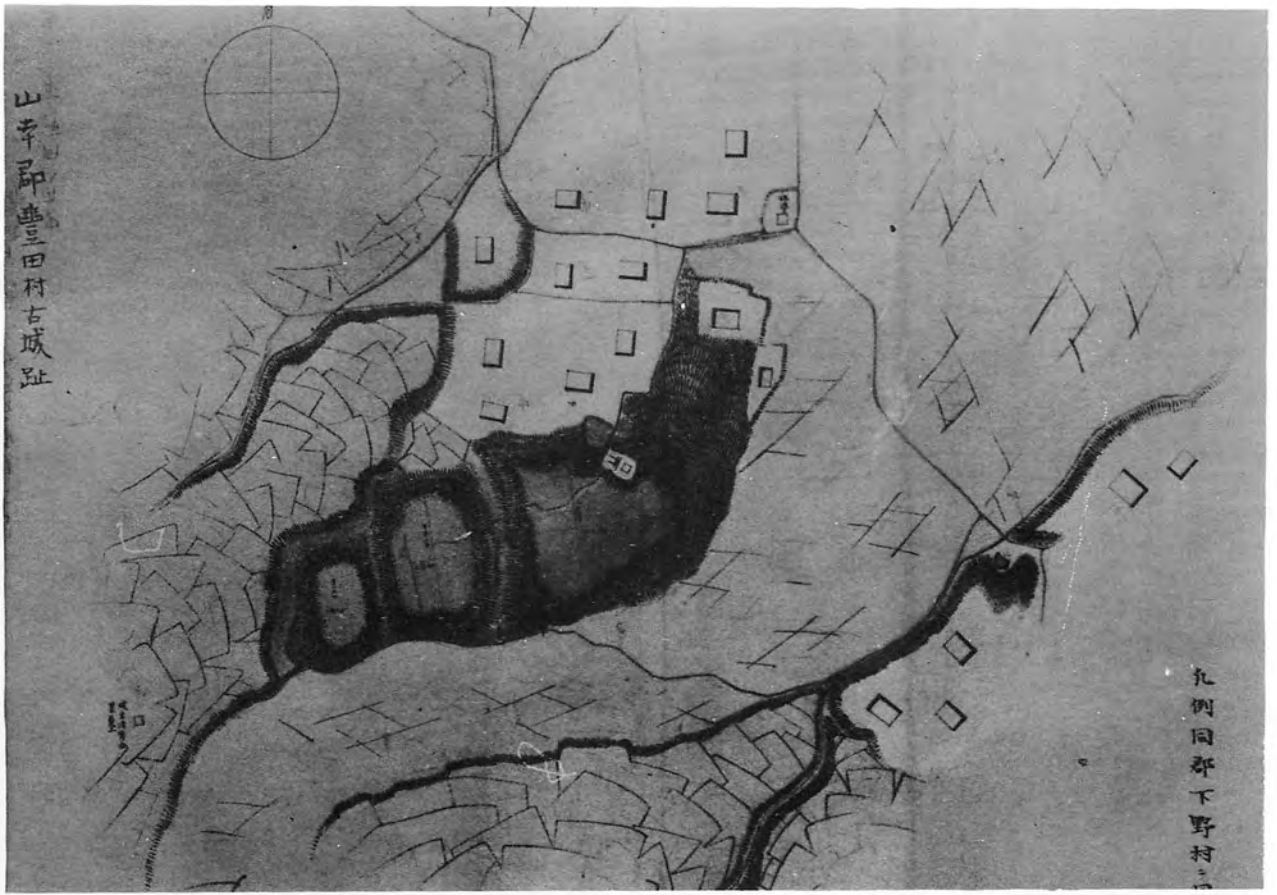
千束城（合志郡村図）



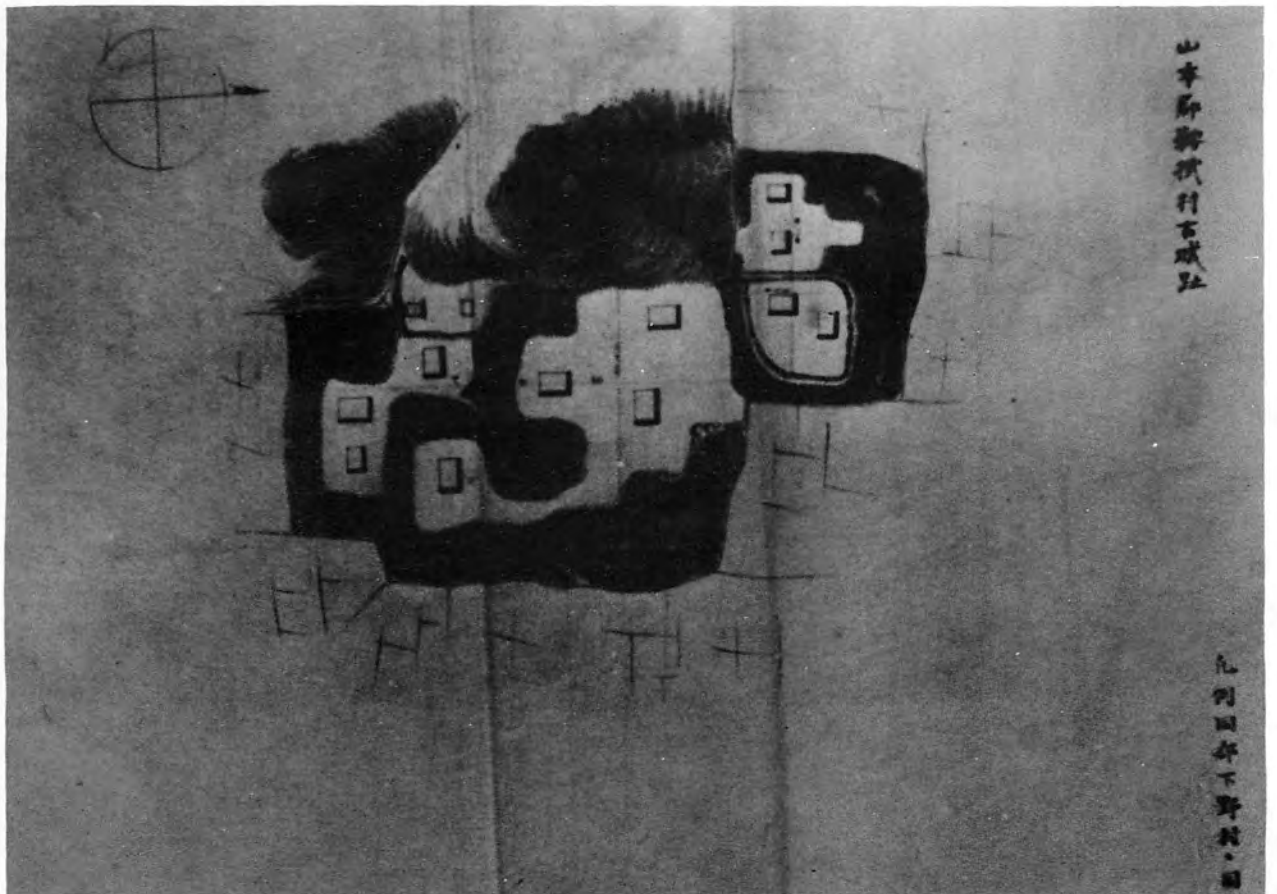
大橋城（山本郡村図）



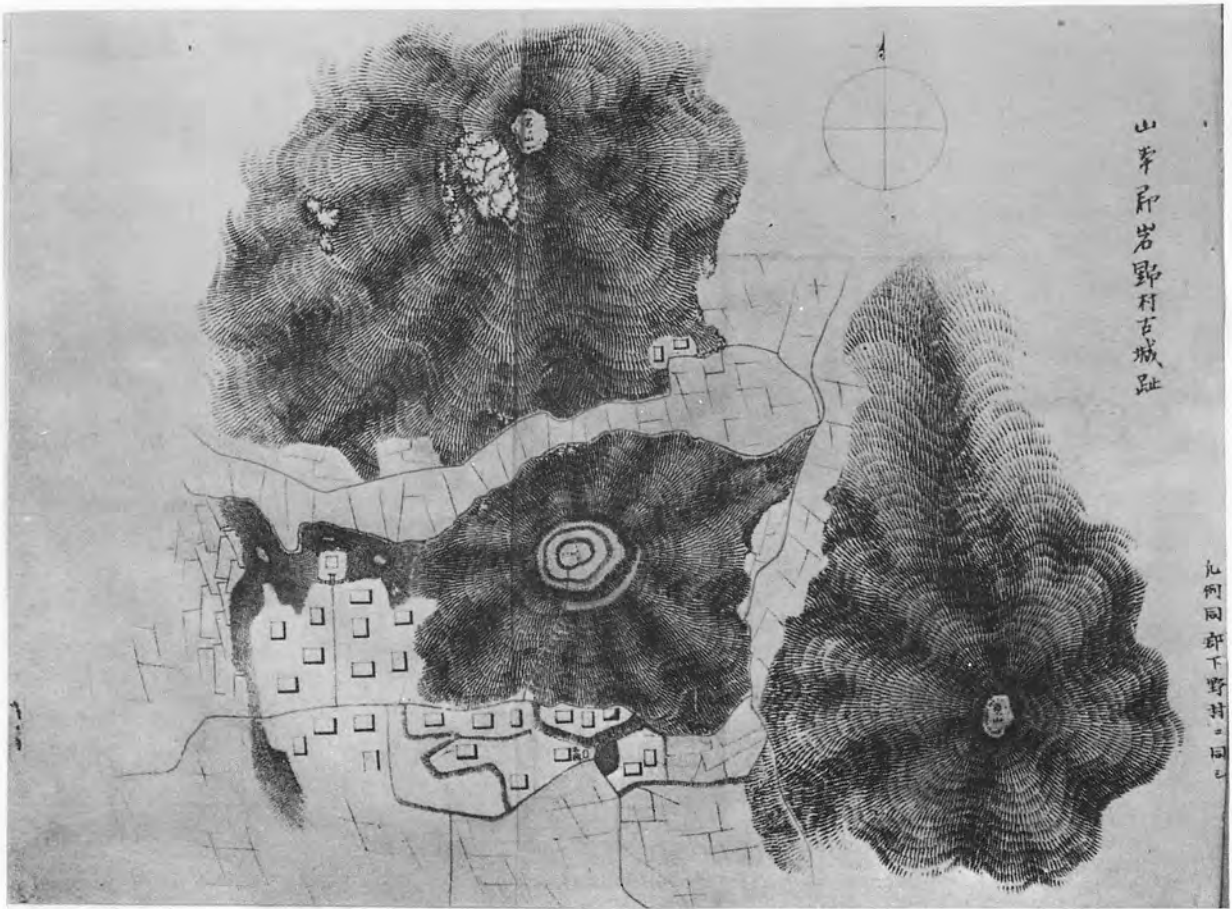
森の館（山本郡村図）



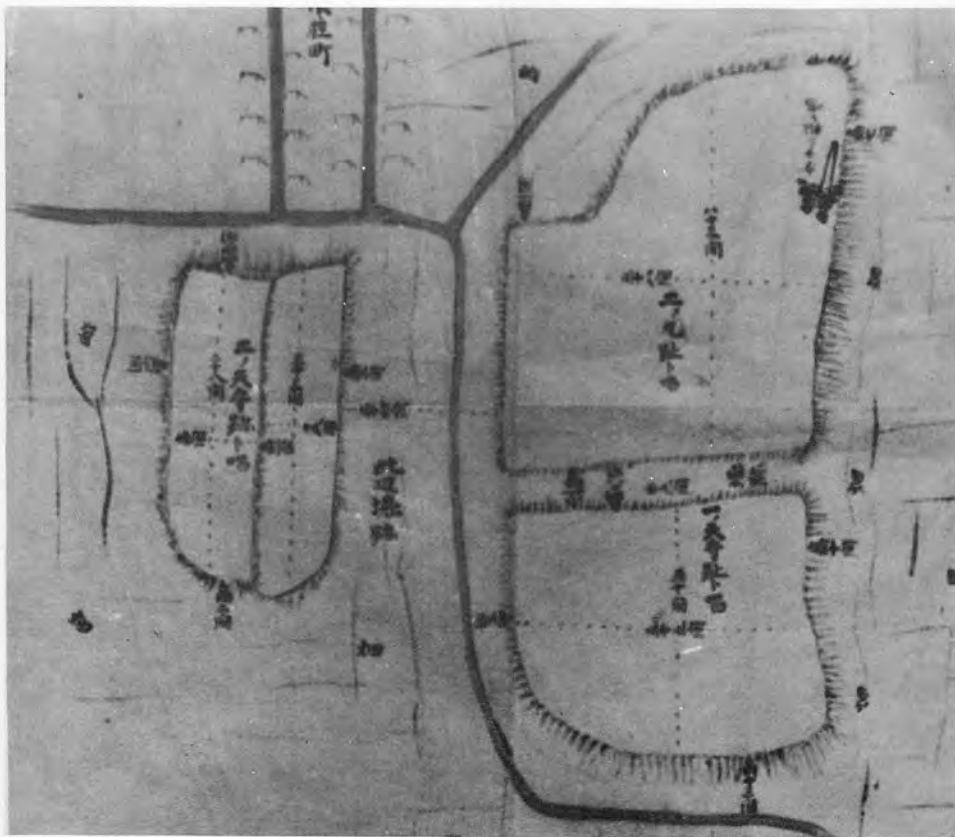
賀茂城 (山本郡村図)



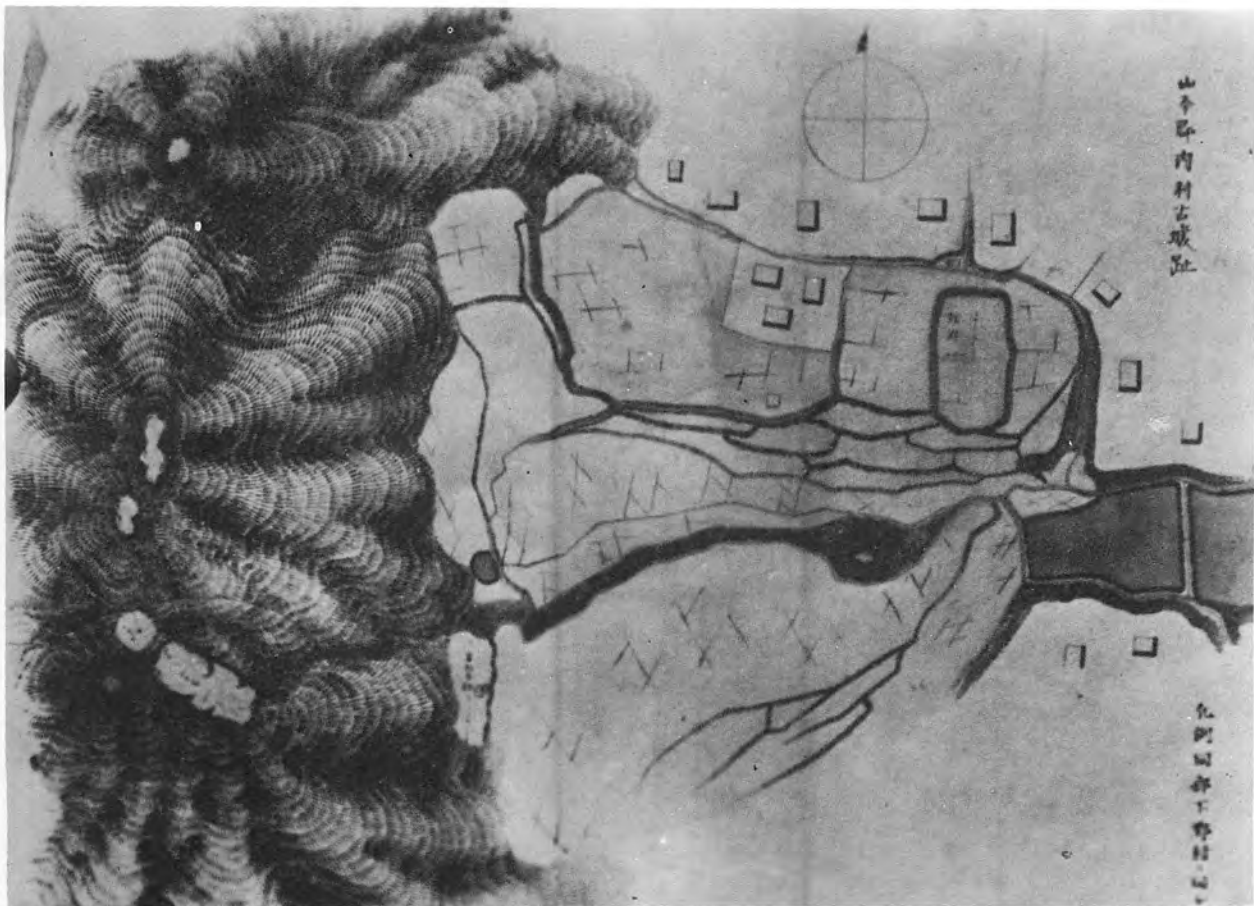
鞍懸山城 (山本郡図)



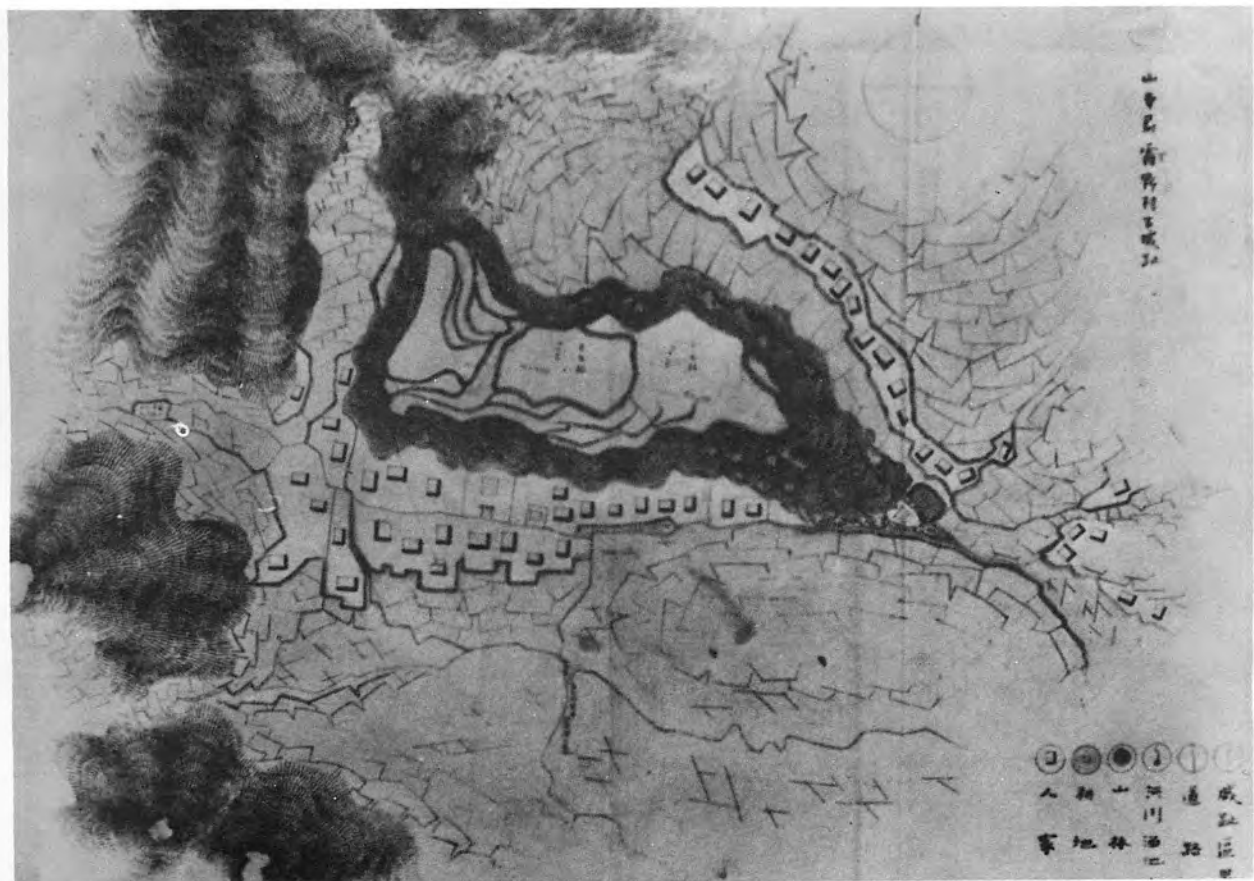
岩野嶽道租城（山本郡村図）



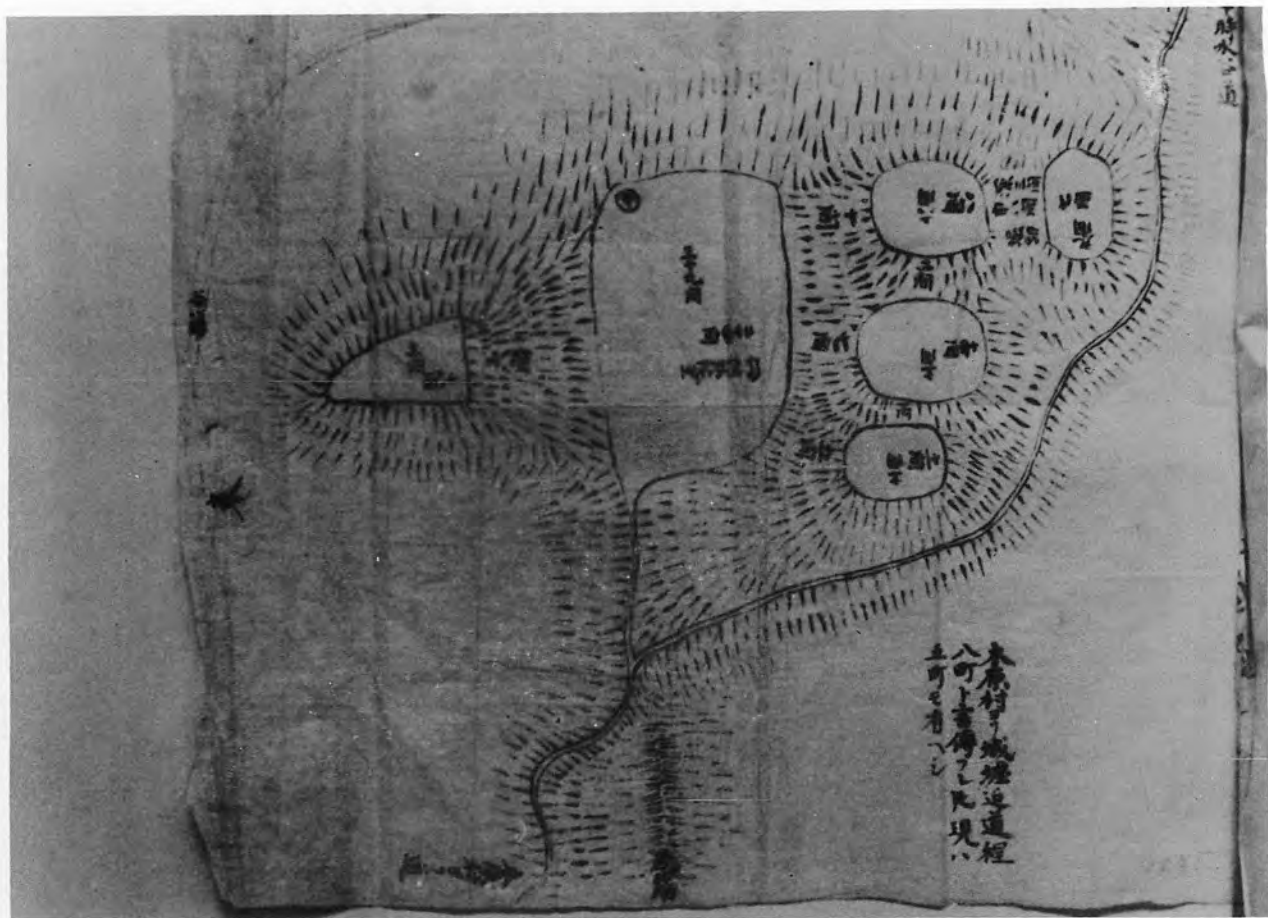
隈庄城（益城郡村図）



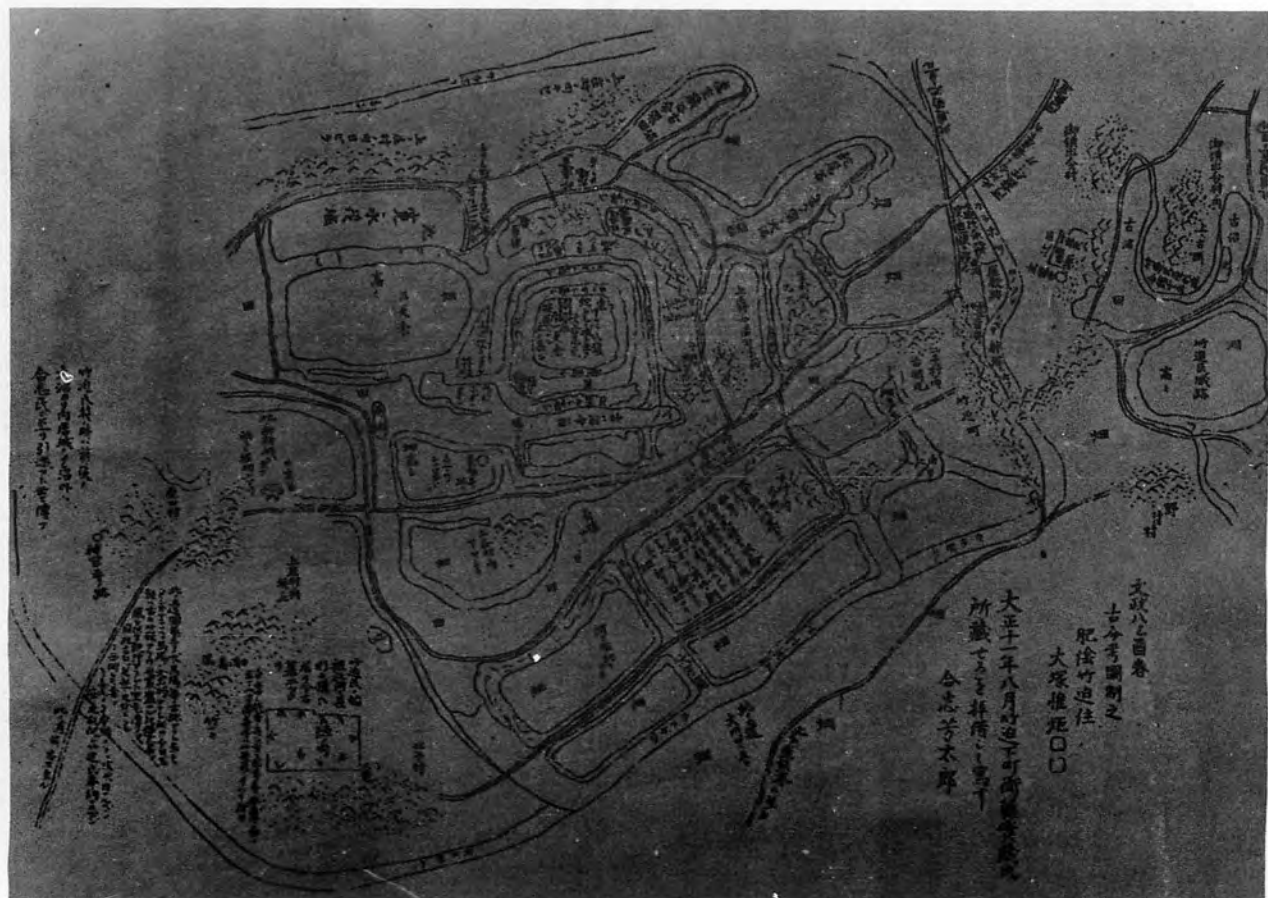
内村城 (山本郡村図)



霜野城 (山本郡村図)



木原城 (益城郡村図)



竹迫城 (合志川芥)

(球磨郡村図)



久米城



宮原城



土屋城 (小屋城)



岡本城



大畑城



永池城



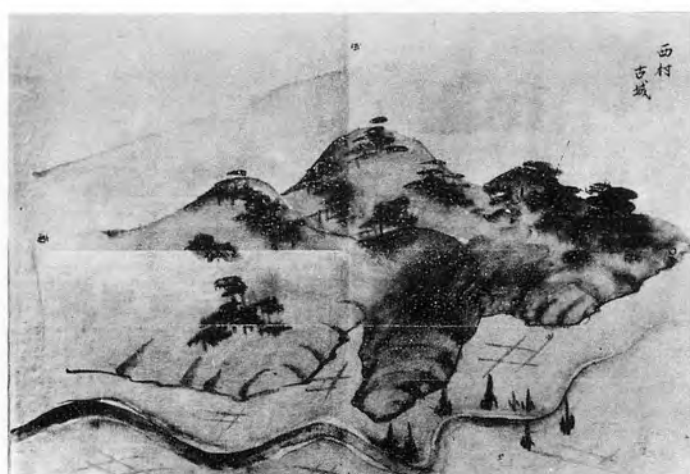
上村古城



西村古城



赤池城



西村古城

付 論

久玉城跡調査略報目次

—はじめに—

- | | | | |
|---|------------------|--|-----------------------------|
| 1、久玉城保存運動の推移
(1)発端と予備調査
(2)二次調査
(3)県指定の「史跡」へ
(4)三次調査と城内の環境整備
(5)城跡の現状保存確定 | (桑原憲彰) | (2)周辺・その他の遺構
久玉氏居館推定地
久玉氏菩提寺跡
舟溜り跡
ジュンデラ跡 | |
| 2、城の立地々形
(1)地形と環境
(2)城の遺構概略
(3)大手口に生育するアコウについて | (桑原憲彰) | 4、出土遺物
(1)発掘個所と表採個所
(2)出土遺物
(3)城内より採集された遺物 | (桑原憲彰) |
| 3、発見された遺構
(1)城内の遺構
ア、防備施設
石垣（A石垣、B石垣、C石垣、D石垣）
土塁（狼火台付属土塁、第三郭南側土塁、
大手口部分土塁残欠）
空堀（堀切り、豎堀）
その他（狼火台）
イ、生活施設
建物礎石
東平場柱穴群
三つの井戸（刀研ぎ井戸、御茶井戸、米とき
井戸）
排水溝（第一、第二、第三） | (矢部清涼)
(桑原憲彰) | 5、文献史料から見た久玉城
(1)史料から見た久玉城
(2)久玉郷土史研究の意義
——キリシタン伝来のころの争乱を中心に—— | (花岡・山本)
(花岡興輝)
(山本正喜) |
| | | 6、城の修復および環境整備
(1)経過
(2)大手門部分のアスファルト充填
(3)第三郭部南側B石垣の解体修復
(4)解体修復によって出土した遺物・遺構 | (桑原憲彰) |
| | | 7、まとめ
(1)城の構造と性格
(2)築城年代とその廃棄時期 | (桑原憲彰) |

— は じ め に —

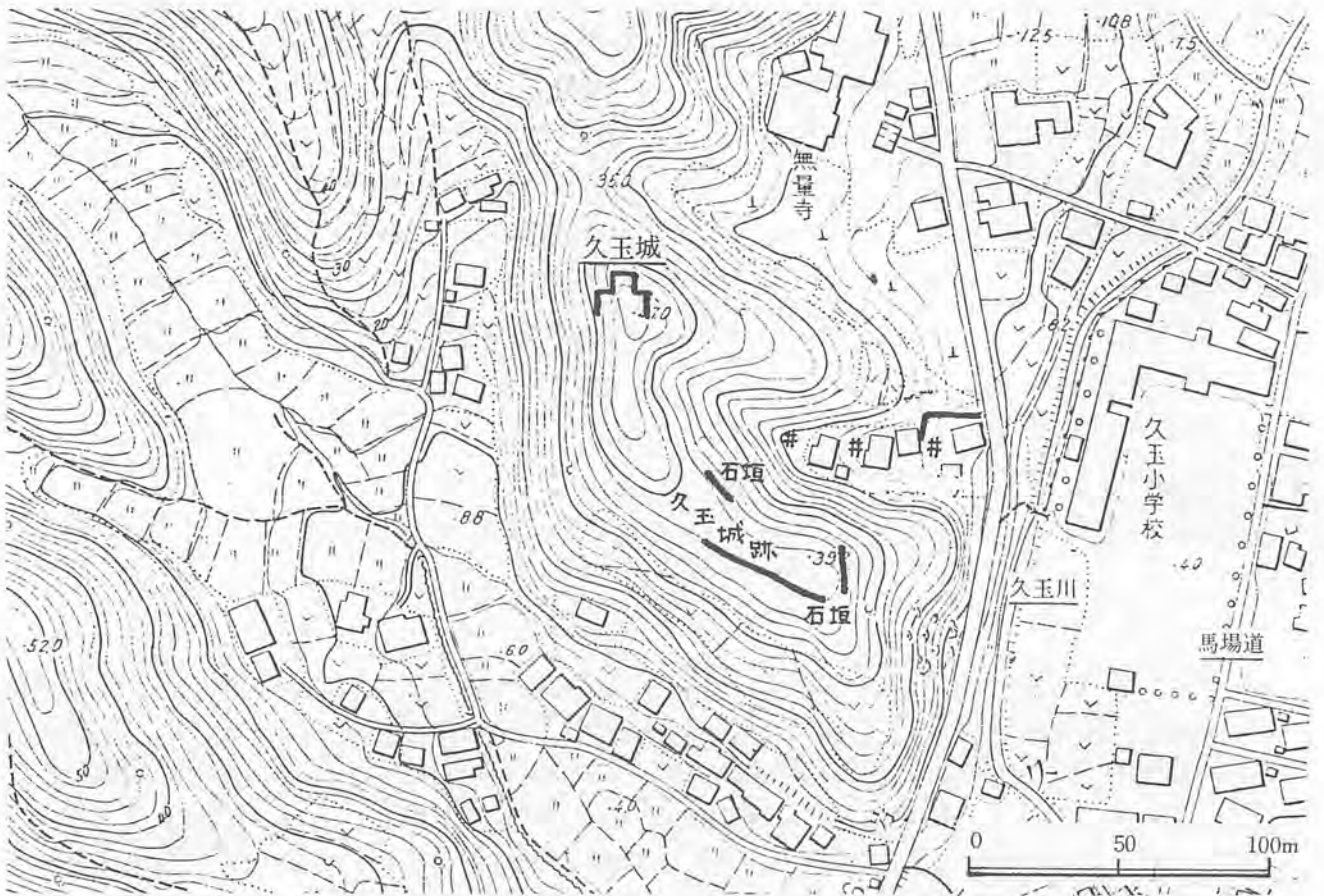
この略報は、国道266号の道路拡幅工事により久玉城跡が破壊予定にあった昭和47年9月に、城跡保存の資料として現地で作成したガリ版刷りの「中世久玉城跡調査概報」—熊本県教育委員会編—とその後一次・二次発掘調査の結果をまとめた「中世久玉城跡関係資料」—同委員会編の二点を、若干改稿し再編集したものである。

また、第5章の文献史料から見た久玉城のうち(2)の「久玉城郷土史研究の意義」は、山本正喜氏が熊本商科大学付属高校校誌「託麻野」（創立15年記念号）に発表された一文を、氏の同意を得て当略報に転載したものである。

第1図 久玉城周辺地形図



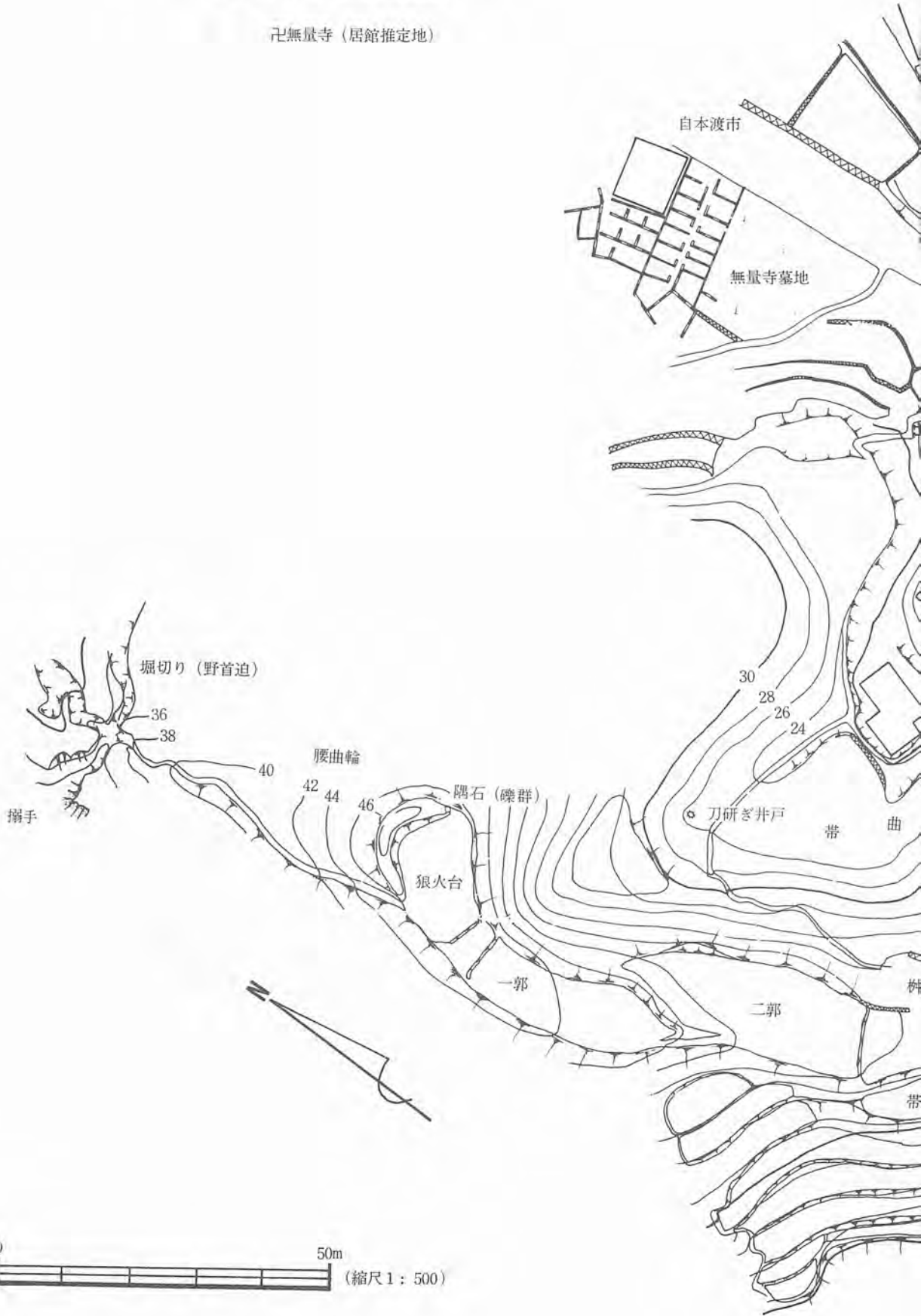
牛深図幅・1 (1:25,000)



牛深図幅・2 (1:2500)

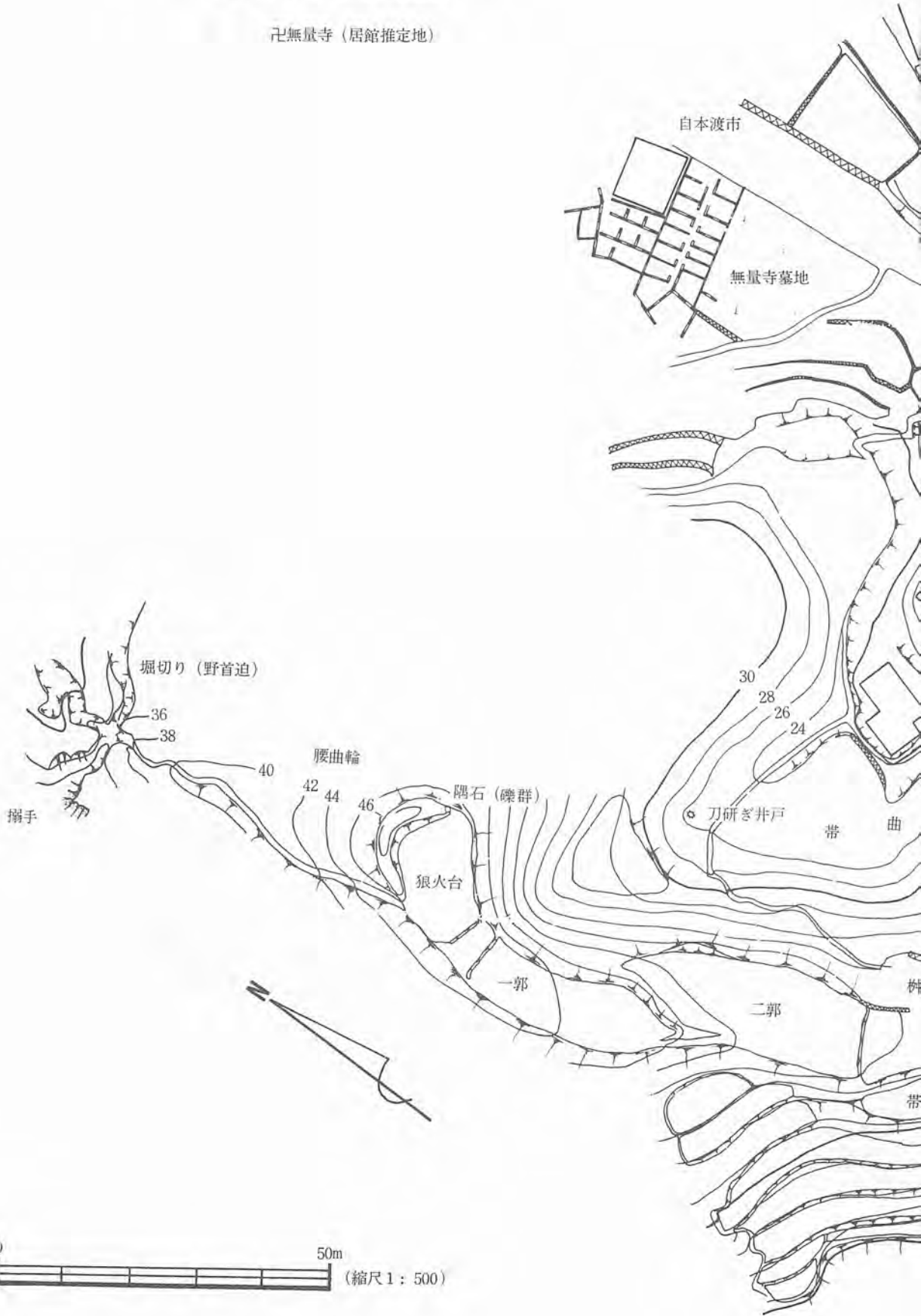
第2図 久玉城跡遺構配置図

己無量寺（居館推定地）



第2図 久玉城跡遺構配置図

己無量寺（居館推定地）

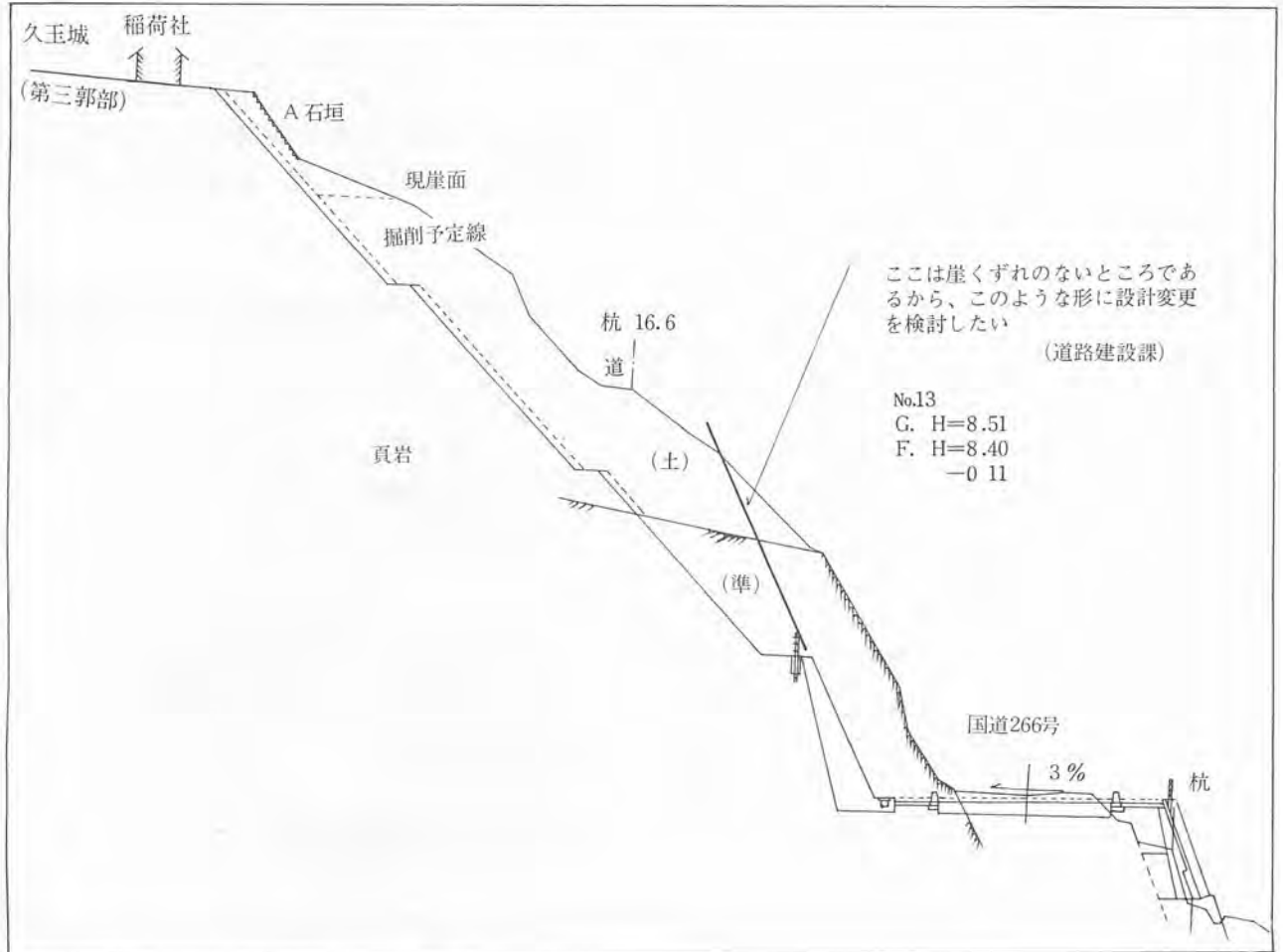


1. 久玉城保存運動の推移

(1) 発端と予備調査

久玉城跡に関する一連の保存事業に、県文化課が着手する発端となったのは、「久玉城跡は消滅か」の見出しを掲げた47年8月23日付の西日本新聞の紙面であった。この記事は、その後の県文化課の業務推進の元ともなり、種々の問題点をも含むものである。以下に掲げることとする。

第3図 久玉城跡部分における国道266号線道路改良工事設計予定図（断面）



『久玉城跡は消滅か—すでに国道用地に買収—牛深市

牛深市教委は、国道266号線の改良工事で由緒ある同市久玉城跡が削り取られると聞き、21日、現地を調査したがすでに買収を終え着工するばかりになっていて手遅れだった。

久玉城は、南天草の豪族久玉氏が鎌倉時代に築城したものといわれて、その城跡に残っているのは本丸跡、大手の井戸、和鉄を製練するたたら、財宝を隠す銭がめなど。しかし城跡は、市に文化財保護委員会もなく、何ら保護の手が加えられないまま荒れるに任せてある。城跡の山すそを通る国道266号線は、現在の幅4mを8mに拡幅することになり、すでに地主から買収、山の立木は切り倒されている。本丸跡の石垣も崩れかかり、山腹の削り取りが始まれば城跡は消滅するものとみられる。地元の有識者の間で、買収を食い止める話も出たが、手の打ちようがなかったという。太田市教育長は「気づいたときは遅かった。文化財保護の予算もないので、現状を写真に撮り、将来復元する方法を考えている」と言っている。(江上泰隆記者)』

さて、文化課ではすぐに牛深市教委に経過報告を求めると共に、工事の担当課である県土木部道路建設課に、事情説明を求め今後の保護対策を協議した。その後予備調査のため8月29日～30日の2日間、桑原憲彰（県文化課主事）、大田幸博

(熊本中央女子高校教諭)が現地に派遣され、久玉城跡の調査を実施した。調査終了後の9月1日には「中世久玉城跡調査概報」と題する報告書を作成し、関係者に城跡保存に関する資料として配布した。この概報を元に本調査が計画され、城跡保存に関する結論は、本調査結果のいかんによだねられることになった。特に予備調査により、久玉城は海に面した連郭式の海城であり、石垣を始めとする各種遺構の保存状況が良好で、典型的な中世城跡であることが判明したため9月8日から6日間、一次調査を計画しこれを実施した。

(2) 二次調査

工期との絡みもあるため、47年10月1日から同10月12日を終了目標にして、現場での調査を開始した。調査目的は、1、航空写真測量・2、石垣実測・3、土塁、堀切等断面実測・4、平坦面の平板測量・5、発掘調査・6、周辺調査・7、文献調査を掲げ発掘調査は、カット予定部分についてのみ実施することにした。この発掘予定地には家屋の廃材が散乱しており、取片づけに多大の労力を要し、また湧水にも悩まされたが、調査目的に掲げた各項目の調査および作業を完遂し10月12日予定どおり終了した。

二次調査の結果については、再び「中世久玉城跡関係資料」としてまとめ、関係者に配布した。

これらの調査を境にして、遺跡の価値が一般にも理解されはじめ、それまで取り沙汰されていた工事の設計変更から、全面保存へと傾いてゆき、久玉城跡を含む区間については工事が一時保留され、消滅への道はやや遠のいたかに見えた。この状況の好転の原因は、関係者の協力もさることながら当時県の文化課長であった田辺哲夫氏の、寝食を忘れた努力に負うところが大きであった。

(3) 県指定の「史跡」へ

一次調査の結果、更に遺構の重要性が確認され、県文化課でも「史跡」指定してはとの声がり、48年3月28日の県文化財専門委員会で審議を受け「史跡」として、県の指定を受けることとなった。

従来、熊本県内における指定状況は、古代では鞠智城(県史跡)、近世では熊本城(国特別史跡)、人吉城(国史跡)、八代城(県史跡)があるのみで、県内に約400以上存在すると思われる中世城の指定は皆無であった。久玉城の「史跡」指定により、中世城指定への門戸が開かれ続いて翌49年には、鹿本郡菊鹿町の隈部館が県の指定を受けた。ともあれ、久玉城の史跡指定は城跡の現状保存への世論の強化に、更に一そうの拍車をかけることになった。

(4) 三次調査と城内の環境整備

県指定を機に地元牛深市では、県の管理費を受け城山全体の樹木の伐採を行った。この清掃は指定後毎年実施されている。また、これとは別に市では県費補助を受け50年1月13日より城内の環境整備に着手した。第一次発掘調査によって出土した大手口部分の排水溝は、石の移動と雑草に覆われるのを防ぐためアスファルト充填を行い、また、第三郭部のB石垣の崩壊寸前のはらみ出し部分10mについては、同年3月14日に解体修復を実施した。この解体前年の49年9月5日と6日の両日には、ステレオカメラを使用し石垣の図面を作成し、同時に裏込の状況もつぶさに調査した。また、50年1月13日から始めた大手口のアスファルト充填工事の際にはカット予定部分外まで発掘調査を進め、大手口としてまとまった区域となしその後に行なった。

翌年地元市教委では、城内の各遺構に木製の説明板を立て、また県でも大手口部分に石製の標柱を設置し、見学者の便を計っている。

(5) 城跡の現状保存確定

長らく保留となっていた国道266号道路改良工事の久玉区間については、国も久玉城山裾部の掘削による拡張を断念、対岸の久玉川流路の方向へ盛土をもって拡張し、5年後の昭和52年度末に完成した。かくして、中世久玉城は現状のまま保存されることになったが、ここに到る道は長く困難であった。

(桑原憲彰)

註1 戦国末の遺構の保存状況が良好であるため久玉城に続いて、昭和49年3月23日県の史跡に指定。
桑原憲彰「戦国期の有力国衆の館」ふるさと自然と歴史 1976年11月 第66号

2. 城の立地地形

(1) 地形と環境

久玉城は、熊本県牛深市久玉町字吉辺川に所在する。国土地理院発行の二万五千分の一「牛深図幅」によれば、地図西端より13.2cm北端より14.3cmの位置にある。久玉町は、八代海が天草下島へ深く入り込んだ久玉浦の最奥部に形成された町で近年その繁栄を牛深に奪われてしまったが、古い時代には久玉氏の根拠地として、栄えた所である。当時、久玉城の南裾部は、入り込んで来た海水によって久玉浦に連なっており、この部分は、舟溜りに利用されていたと思われるが、現在の国道266号に沿って南下する久玉川のはき出す泥土により、往時の海岸線は更に南進した。これらの泥土を基礎に現在、この港であった一帯は埋め立てられ、沖の瀬と呼ばれる造成地を形成し、県立牛深高校を始めとする、各種団体の敷地、また宅地として利用が始まっている。

久玉城が築城された海拔47米の丘陵は、広葉樹に覆われた海拔403米の権現山の南山裾を支える尾根の末端にあたり、久玉浦を一眸の元に見渡すことのできる景勝の地であり、東端を南北に牛深、本渡を結ぶ国道266号が走っている。

また、この久玉城の立地する丘陵を挟み込むように形成される谷の部分には、先へのべた久玉川をはじめとする二本の小河川が久玉浦に向かって南下し、この谷部分に僅かながらも水田地帯を形成し、山地の多い当地方の貴重な食糧生産の場となっている。

この久玉川に平行して旧道が走っており、往時の久玉と本渡を結ぶ重要な交通路となっていた。現国道266号の久玉隧道の南方旧道に残る尻喰坂等の地名もこれらの名残りを留めるものであろう。

このように、久玉は久玉浦に面する奥まった良港として、また、陸路の要衝地、加えて僅かながらも水田を形成する平地とそれをうるおす水資源に恵まれており、この点に着目した天草氏の一族がこの地に、城を築き、本拠地としたものと考えられる。

(2) 城の遺構概略

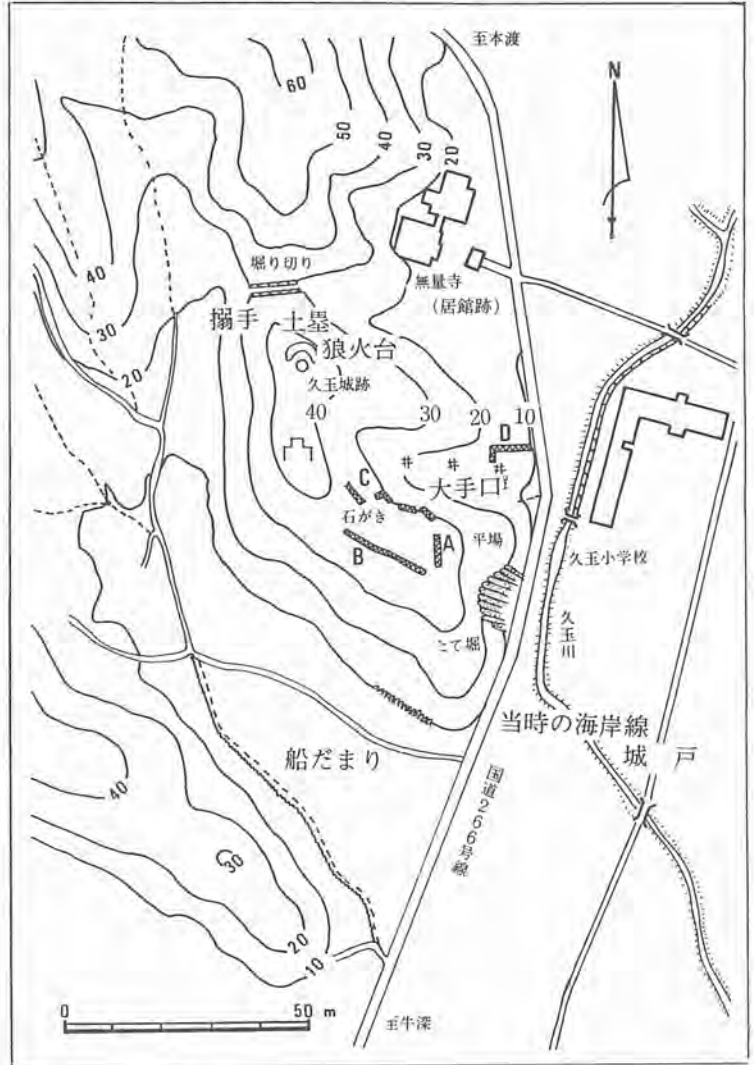
久玉城は、海拔47米の丘陵を基礎にして築城されている。この丘陵は先にも述べたように権現山を支える山裾の小尾根のひとつで、久玉浦に臨んで舌状にはり出す丘陵で地元では城山と呼んでいる。この丘陵は、城郭用語で「女山」と呼ばれる地形をなすもので、このため丘陵の北側の山に連なる野首の部分は一条の堀り切りにより画され城内を独立させている。(第4図参照)

この堀り切りを久玉城の北端としてその規模を考えてみると、南端の裾部から北端の堀り切りまで主軸の長さが235m、主軸に直交する最大短軸部分が150mを数え、中世時における中程度の規模を持つ城である。

この丘陵を城地として選定した際、天然の要害をも城の防備の一部として見立て利用しているため、丘陵の随所に切立つ急傾斜の地形が多く見られる。また、不備の部分にはそれをおぎなうように人工的な防備施設が各所に存在する。

まず、ほぼ南北に延びる丘陵の尾根部分を削平して帯状の四つの部分からなる平地を形成している。一番北側の海拔47

第4図 久玉城遺構所在概略図



mの城内最高所に弓状の土塁に囲まれた狼火台が設けられ、尾根伝いに順次低くなりながら一郭、二郭、三郭と三つの平地が続き、各々は1mないし1.50mの土手によって画され、その境界部分は、上橋状の小路によって連絡される。また第三郭の東側の土手の中腹には相当の面積を持つ三角形をなす東平場が設けられている。この帯状をなす各郭周囲は切立てられて急勾配の土手となっているが、一番面積の広い第三郭部分のみ石垣が鉢巻状に巡らされている。

この狼火台を含めた帯状の各部の周囲は更に曲輪によって堅められる。狼火台北側には若干の平地を持つ腰曲輪、西側は西帯曲輪、南側に堅堀、東側は東帯曲輪が各々その地形に応じて設けられている。これらの施設を経て、腰曲輪北側の丘陵の野首部分に堀り切りが、西側は海が湾入し船溜りを形成し、南は堅堀と天然の急峻な崖を備え、また東側の迫地には、石垣と城門を設け外郭からの侵入をこぼみ、いわゆる、要塞堅固な城を形造っている。これらの防備施設に加えて、城内の迫地三ヶ所に井戸を鑿ち、また数条からなる排水溝を設け非常時に備えている。

また、久玉氏の常時の居館跡は城の北隣りの相当の面積を有する現無量寺境内であった可能性が頗る強い。

この外、城周辺の小丘陵には海に臨んだ所には海の砦、山に臨んだ所には山の砦などの地名が残る。恐らく、城外の防備体制の一環として当時設けられたものと思われる。^(註4)

城の周辺には城戸(きど)、城角・陳地庵・馬場道等城に関係したと思われる地名が残っているので、城外の城に関する防備体制の復元もある程度可能であろう。
(桑原憲彰)

(3) 大手口に生成するアコウ(赤秀)について

城の大手部の国道266号に接する場所に樹令数百年を経たと推定されるアコウの木が存在する。久玉城調査を開始した時点では、道路敷地にかかる為すでに伐採されて切株のみが残っていた。アコウの木は亜熱帯植物であり、海岸に生育するためもしこの木の樹令が判明すれば、当時の海岸線の復元も可能であり、ひいては、大手口部分の地貌の変化を推定する有力資料となる。

このため、当時久玉中学校教諭で理科担当の矢部清涼氏にアコウの木についての調査を依頼した。現地踏査の後、矢部氏がよせられた調査結果は以下のとおりである。(第5図参照)

久玉城跡のアコウについて

1 アコウ (1)クワ科 琉球語でガジュマル……クワ科
でアコウと同じ

2 アコウの性質

- (1)雌雄異株の常緑喬木(亜熱帯植物)、海岸に生育し高さ約20m位になる。
- (2)こぶし、しわがあり、多数の気根をおろす^(註5)
- (3)利用面としては防風林、観葉植物、用材
- (4)天然記念物に指定されている(現在、佐賀、愛媛)

3 アコウの推定樹令

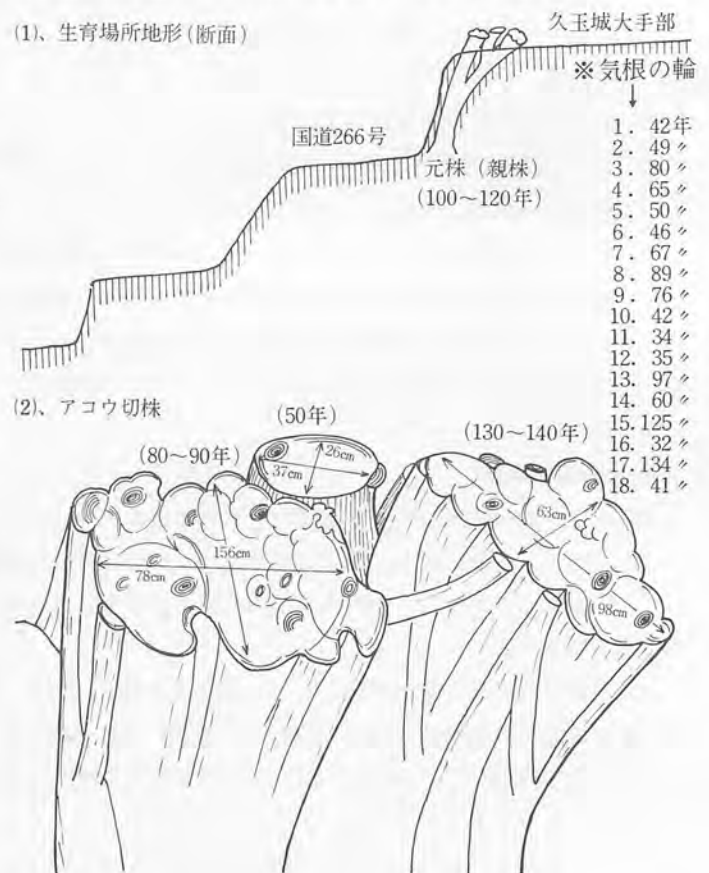
切り株の状態から樹令推定は260~280年位

4 推定理由

上記のアコウの木の性質から考えて次の事項が説明される。

- (1)現在切り株は三面になっているが、元株(親株)は1つで、土手(現在)の相当深いところにあると思われる。
- (2)成長の過程で、気根をおろし、現在の三株に分かれたものと思われる(長年月を要している)
- (3)三面切り株の幹の太さから推定して、最高樹令130~140年位いと思われる(偽年輪の数から推定)

第5図 大手部・アコウ切株見取図 (原図・矢部清涼氏)



(4)大小さまざまなこぶし、しわをつくるのに相当年数がかかるのと、成長条件に環境が非常に適していたものと思われる。水分、日光、病害虫の被害はないようである。塩風の影響ではないだろうか？

(5)無理な成長は考えられない……幹の（切り株）状態から推定される。

(6)気根株の樹令150～160年？（子株）

親株の樹令100～120年？

以上の結果からこのアコウの樹令は260年ないし280年と推定される。（久玉中学校教諭・矢部清涼）

以上の矢部氏の調査の結果からこのアコウの木は、久玉城が城としての生命を終った後、生育したことが判明、直接城との関連はないことが確認された。

- 註1 久玉は昭和29年隣接の牛深町・魚貫村・深海村・二浦町の4か町村が合併され、牛深市として発足した。幕政下・天草天領時代の行政区画10組のうち1組として久玉組を構成し、久玉に庄屋がおかれ、町を形成し天草南部の行政の中心であった。
- 註2 久玉城主が当時久玉氏を呼称していたかどうか明らかでない。中世の文献に久玉という地名は散見されるが「久玉氏」の呼称は見られないからである。従って久玉氏は後世の人々の仮称かも知れないが、まぎらわしいので本文では慣例に従い以後久玉氏として通すことにする。
- 註3 花岡興輝氏の教示による
- 註4 海の砦は現在の明石に地名が残り、山の砦は権現山頂一帯の総称として残る。山本正喜氏は「仮説古代天草久玉城柵」日本談義の昭和45年10月号で、中世よりむしろ古代の地名に属するのではと推定されている。
- 註5 「気根」・根の変形したもの、これは地上の茎・幹からできたもので支柱根という。

3. 発見された遺構

(1) 城内の遺構

この丘陵を城の用地として選定した際、天然の要害をも、城の防備の一部として見立て利用しているため丘陵の随所に切り立つ急傾斜の地形が多い。

しかし、不備の部分には、それを補うように人工的な防備施設が各所に見られる。その各々について概略を以下に述べてたい。

(ア) 防備施設

城内の防備施設としては、土塁・石垣・空堀等が、自然の要害の弱点部を補って存在する。その各々の規模および構築箇所は次のとおりである。（第2図参照）

石垣は城内各所に点在するように見えるが、大別すると城内頂上部の第三郭の周囲を囲む石垣と、城内入口の大手部に残る鉤状の石垣の二か所に分けられる。第三郭部をとり囲む石垣は自然崩壊や江戸時代の採石等により寸断され、あたかも、部分部分に石垣が設けられるように見えるが、築城完成時には第三郭部分の周囲土手面をとりまく鉢巻状の石垣が巡らされていたことは明らかである。

しかし、整理の都合上、残存する各々の石垣にA、B、C、Dの名称を付し説明を進めたい。

A石垣、城の東側の斜面を補強する石垣で、国道266号にほぼ併行して設けられ空堀の直上に位置する。現存するのは長さが22m、高さ2.20mの石垣で、この部分約5mが今回の266号の改修工事で破壊される予定であった。コーナーの部分江戸時代後期頃の河川改修工事に用いた石材として採石され破壊されているのが惜まれる。

B石垣、城の南西部に設けられる長さ約45m、高さ5.10mの壮大な石垣で久玉浦に面する部分をかためている。海上からの攻撃に備えたものと思われ、海に面して偉容を誇っている。この部分からの眺望は良く、遠く八代海まで望むことができる。西方から約3分の2のところには隅石が設けられ、それより先は積み方および傾斜等が異なるので、45mを一気に築いたものでなく、逐次、造り足して完成したことが推定される。この石垣内に19×7cmの挽臼の破片が栗石として使用されている。永年の雨水の流入や樹根により石垣のはらみ出しがひどく崩壊寸前であったため、昭和50年に石垣の一部を約10mに亘って解体修復を行った。（第6図参照）この際、裏面に牡蠣殻が多量に付着している石が発見され、石材は海より運ばれたことが明らかとなった。

C石垣、第三郭の北側にとぎれとぎれに残存する石垣である。迫地にある大手口より城内に入り刀研ぎ井戸の横から南

に折れ、登りつめると第三郭入口部分に到る。この部分は石垣が鉤状に配置されるが近世城郭における柵型の祖型と思われ(註1)れる。この鉤状の部分呈する正面の石垣の長さは6m・高さ0.9mを数える。

D石垣、城の北側部分に、西に向かって入込む水の豊富な小迫地がある。この部分が城の大手口と思われるが、ここにもやはり鉤状に折れ曲った石垣が残っている。西面に立ちふさがる石垣は米とき井戸の前のあたりで角を揃えた隅石で途切れ、後左半分は人頭大の小石の石垣となるが、この部分は後世の宅地造成の際に築かれたものである。本来の石垣は、この隅石から西へ折れこの部分に城内に進む石段等が存在したと思われるが未調査のため確認はできていない。築城当時の石垣の残存が6.30m、後世の分も含めると全長15.50m、高さ2.15mある。北側の石垣の長さは13m、高さが2.2mで破壊された部分を加えると約17mにも及ぶ雄大なものである。恐らく、明治初期の道路改修の際、一部取り壊されたものであろう。(第7図参照)

土塁

狼煙台に付属する土塁

第一郭の北側の最高部の海拔47mの部分に裏の権現山からの視角を遮断するように、直径約15mの半円径を呈する土塁が存在する。土塁末端には土崩れを防ぐための隅石を置き礫群が土塁基礎部を巡っている。この半円状の土塁に囲み込まれるように直径3mの円が約10cmの深さで掘り込まれている。この円の中心部分を発掘した結果、木炭片が確認されたので狼火台の遺構と思われる。(第8図参照)

第三郭南側土塁状遺構

45mの長さを持つB石垣上に小土塁の盛土が一部残存している。当時のものかどうか考慮の余地は残るが、この小土塁状盛土と石垣に沿って走る帯状の溝との差は約0.4mを計る。

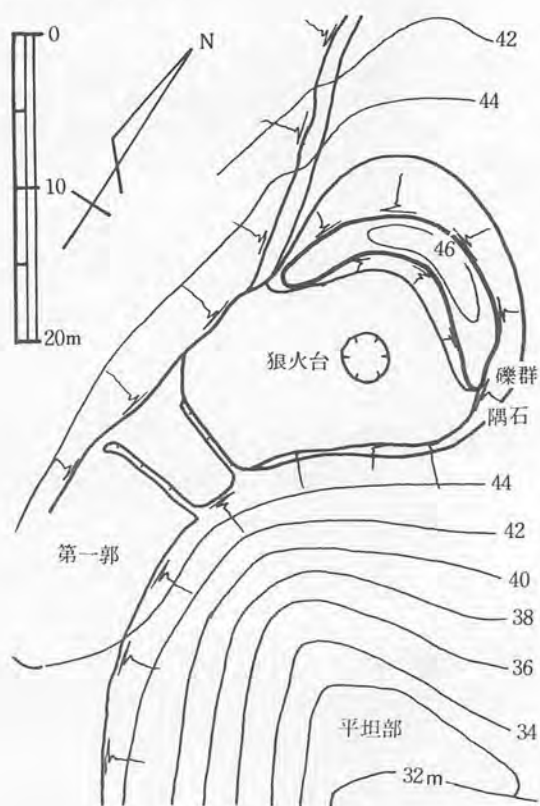
平場に付属する土塁

平場の南側に長さ4m、高さ1mの土塁残欠部と思われる土盛が存在する。弓の形的場であった可能性もある。

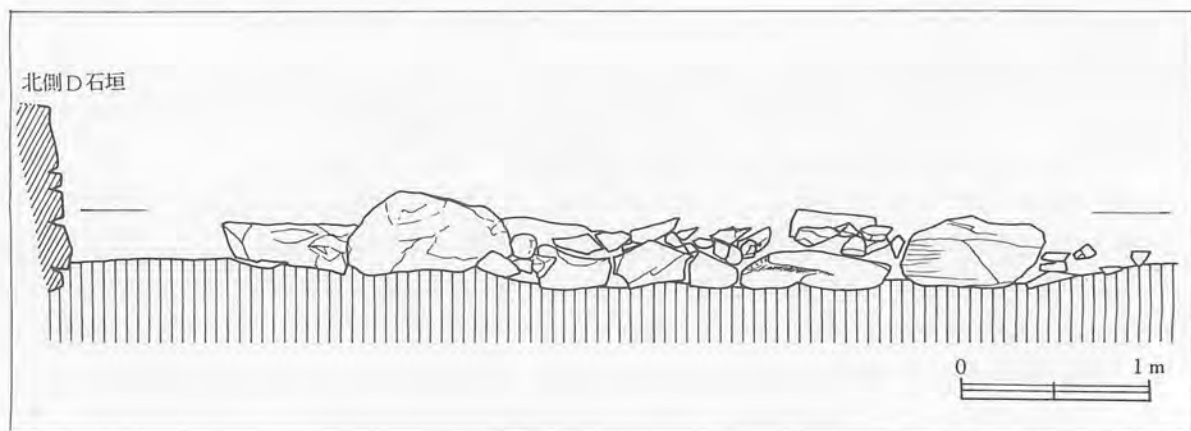
大手口部分土塁残欠

北側D石垣に接続し、やや弧を描きながら、国道に抜ける帯状の礫の一群がある。その基礎部から土留めのための立石列が出土した。大手口の一部を遮断する土塁の基底部の残存と考えられる。築城当時この部分に土塁が存在していたのであろう。(第9図参照)

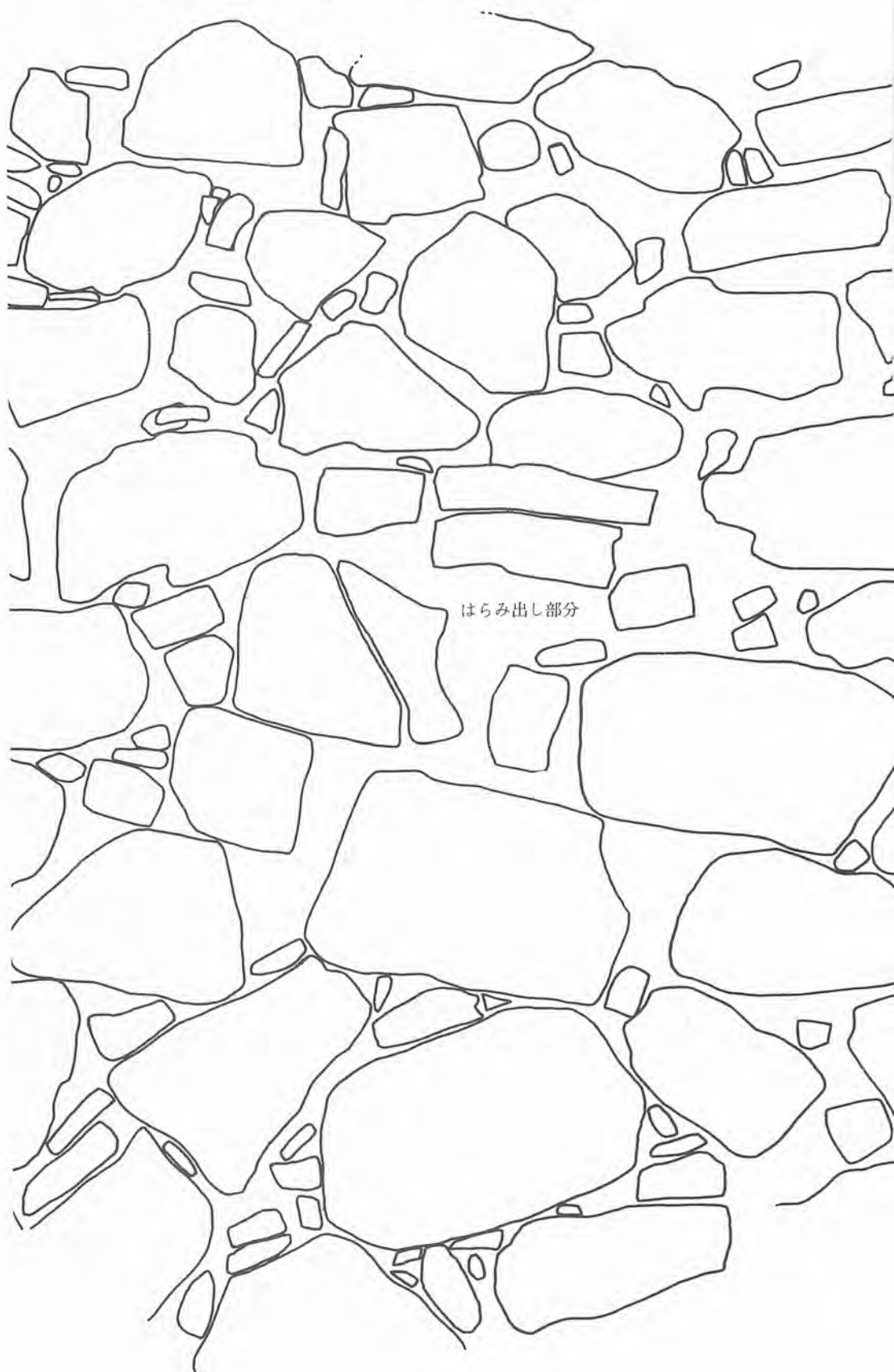
第8図 土塁と狼火台

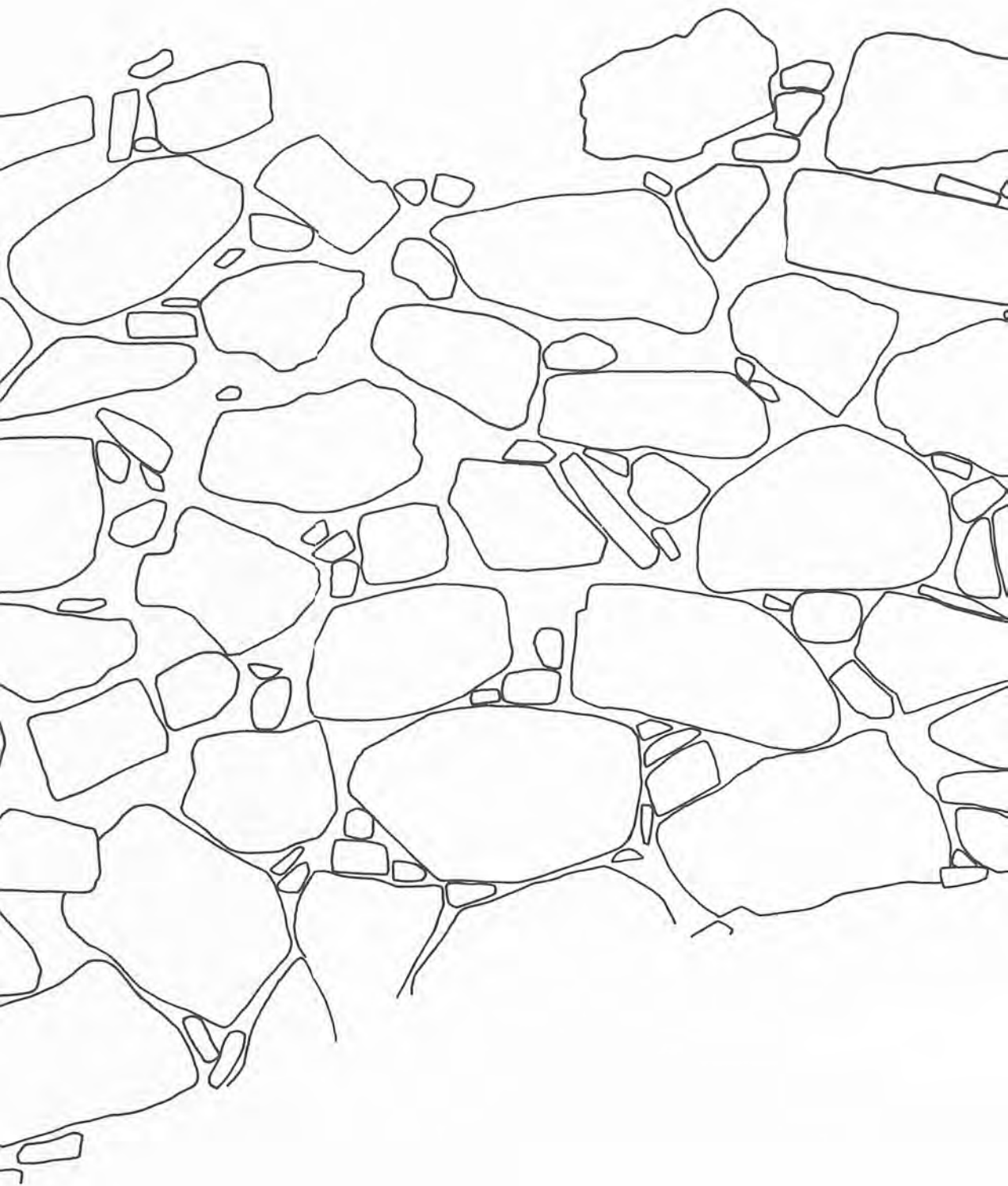


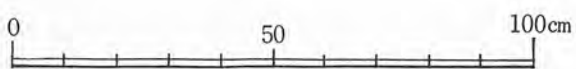
第9図 大手部東側土塁基底部石組



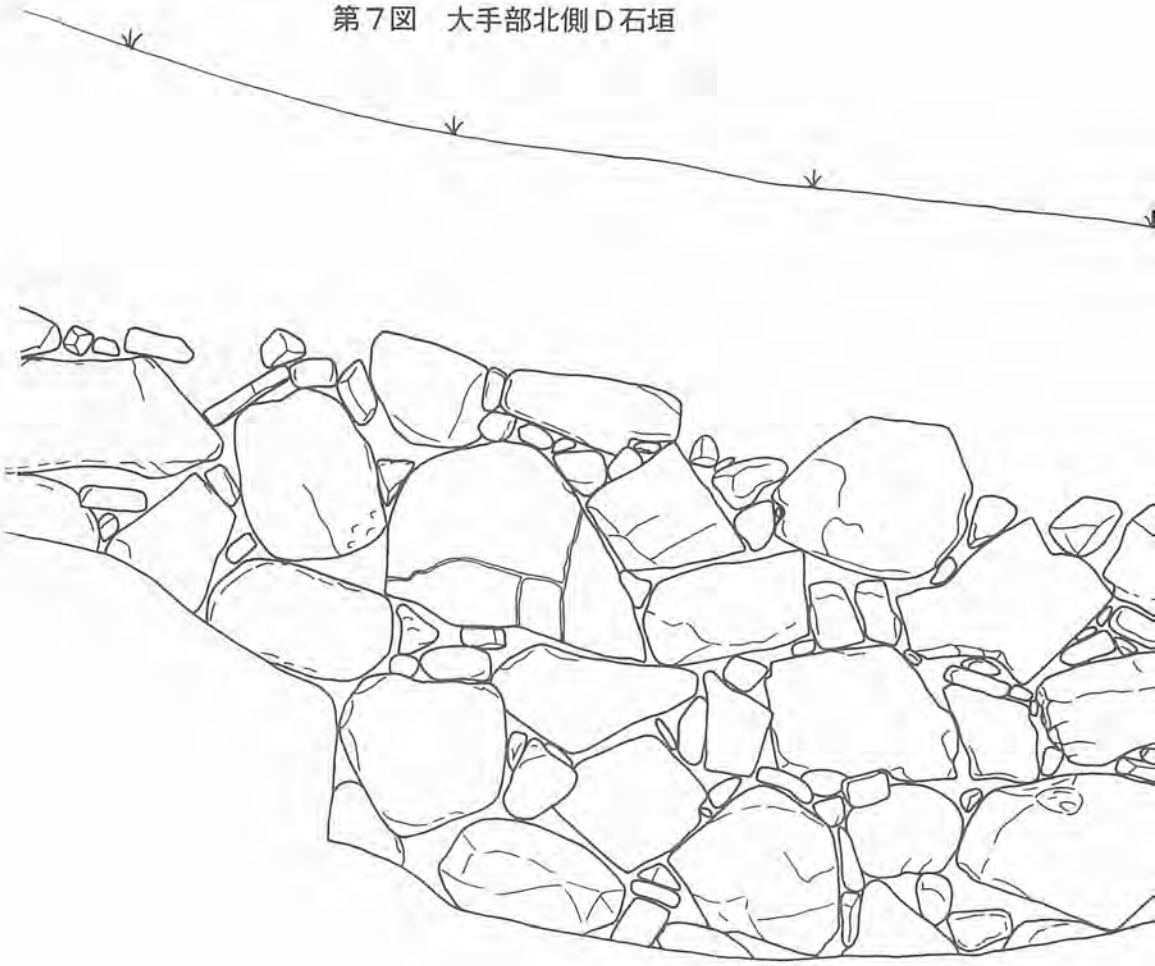
第6図 第三郭B石垣はらみ出し部分
(修復前ステレオカメラにて撮影図化したもの)

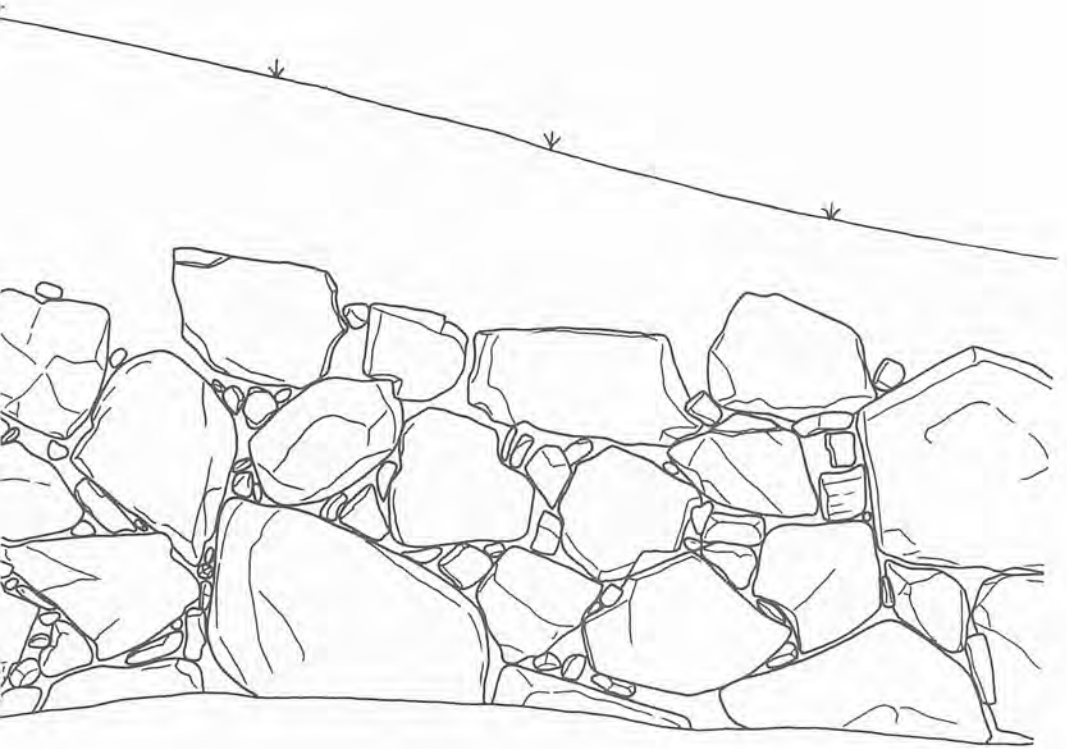






第7図 大手部北側D石垣





0 50 100 cm

A horizontal scale bar with vertical tick marks. The bar is labeled with '0' at the left end, '50' at the midpoint, and '100 cm' at the right end.

空堀

掘り切り

城山と権現山裾と尾根続きとなる最狭隘部を横にたち切って西に一条の掘り切りが存在する。現在この掘り切りの一方末端は、西側急崖に達し、他方は、無量寺境内に到る小道となって残存している。江戸時代の無量寺境内の境界をしめす文書に「南はノクビザコ（野首迫）切之事」という一文が出ている。現在、野首迫という地名は忘れ去られているが、

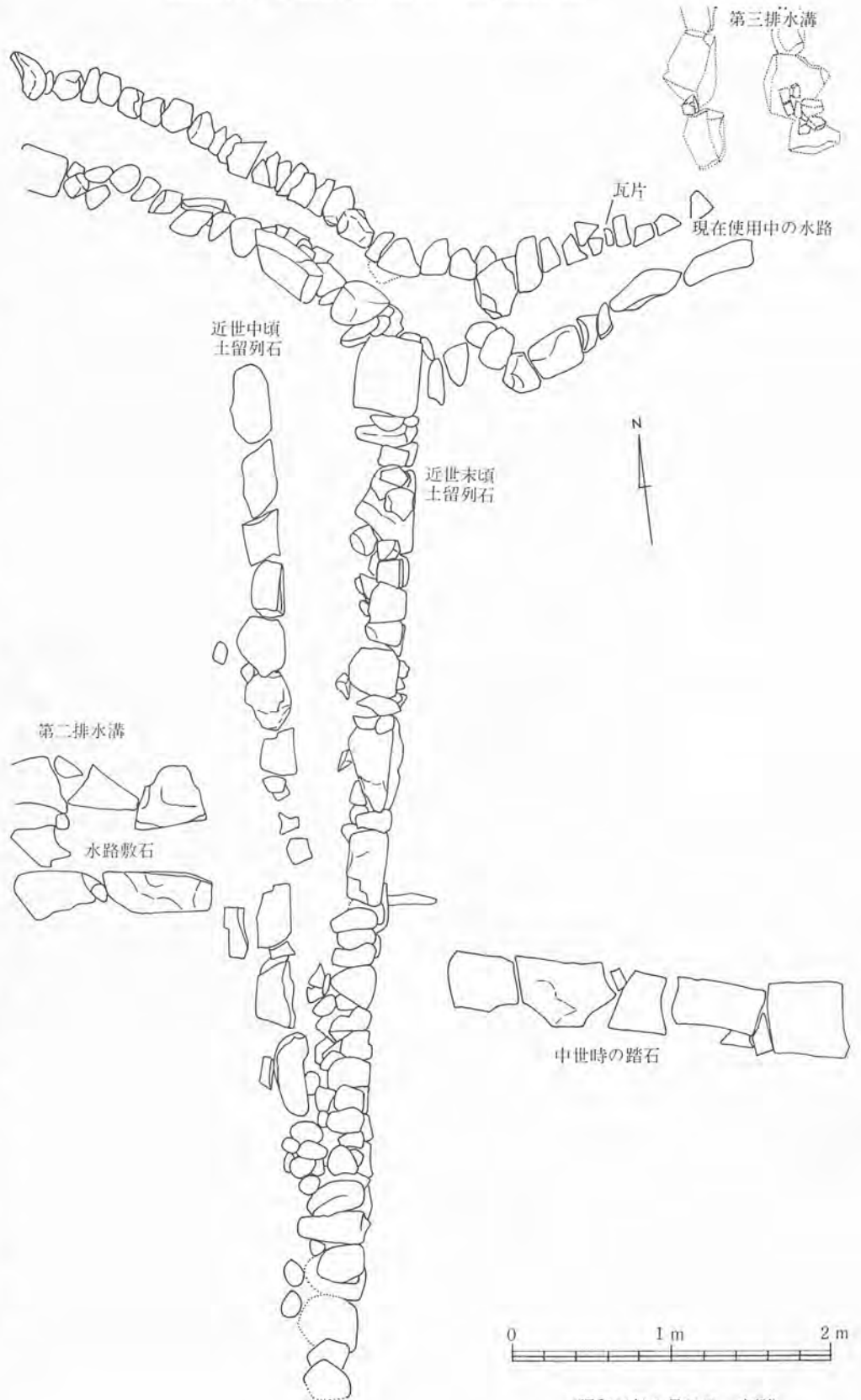
九州地方の女山の場合、城の立地する丘陵の根元の野首部分を掘り切って、丘陵を独立させる場合が多いのでこれが掘り切りであるのは明確である。

豎堀

豎堀は、久玉城東側のA石垣と平場に挟まれた部分に構築され、等高線に直角に国道266号に向ってのびている。自然の地形に若干の加工をしたものであるが、急峻にしてよくその機能を果している。自然の地形をそのまま豎堀に見立て利用しているため、他所の人工的なものに比べ規模が雄大で登りにくい。永年の土砂の流入で、底部がU字形だったのかV字形だったのか確認できない。堀の底の部分には、土神霊と刻んだ明治4年建立の石碑一基が存在する。

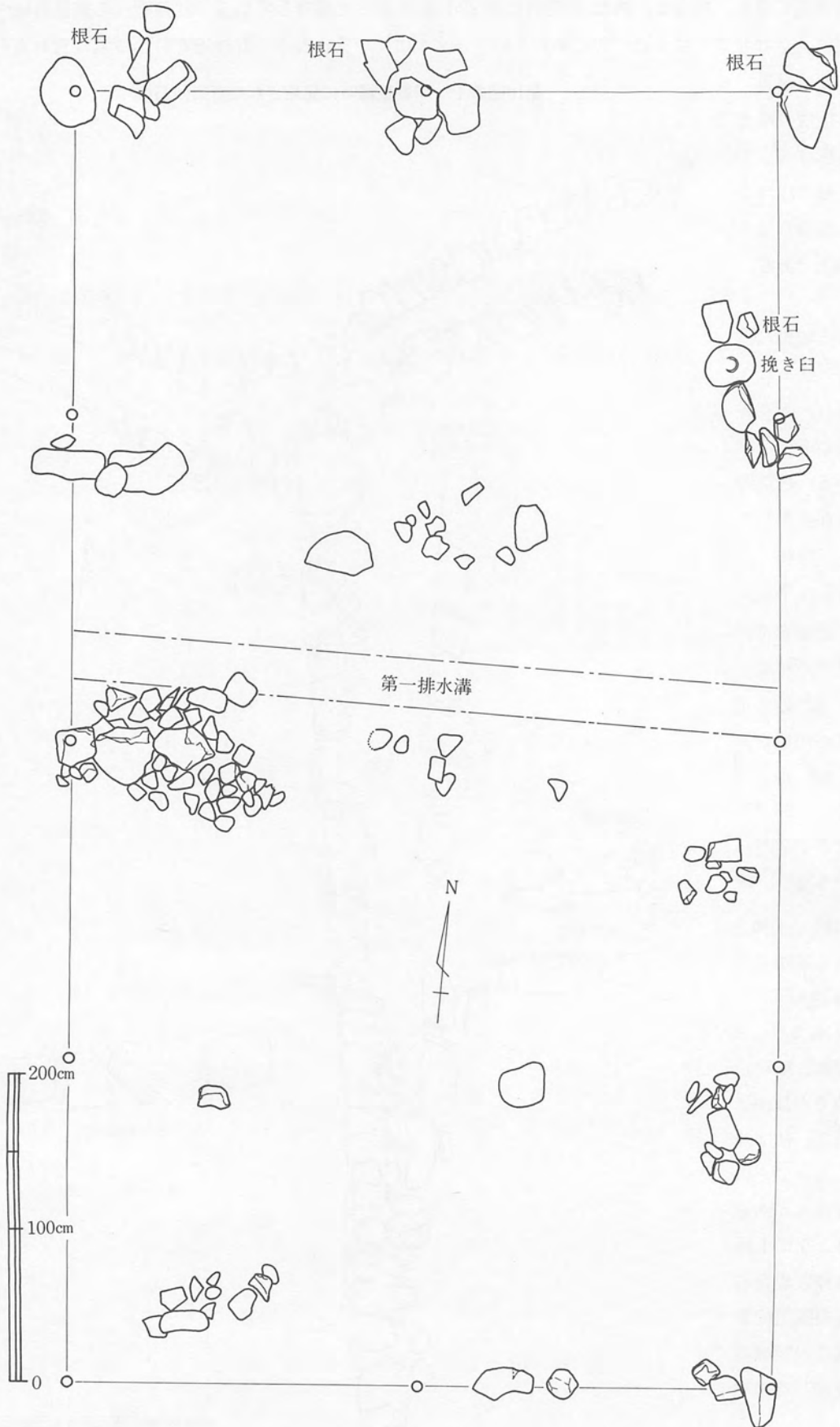
土神は土公神（どくじん）とも呼ばれ、陰陽道で土を掌る神で春はかまどに、夏は門に、秋は井に、冬は庭にあってその場所を動せば祟りがあるという。このように土神は一種の屋敷神と思われるので、現在の国道の新設される以前この豎堀の下に民家が存在したのであろう。

第10図の1 環境整備時に発見された新旧列石群



(昭和50年1月23日・実測)

第10図の2 大手部出土の礎石下部の根石配置状況



その他

狼火台

城内の最高所に、半円形の土塁に囲まれた狼火台と推定される遺構が存在する。遺構は直径3m・深さ10cmの円が地面に掘込まれているのみであるが、この中心部から木炭粒が検出された。未発掘であるため断言はできないが狼火台に間違いなかろうと思われる。この狼火台を囲い込む土塁は、尾根続きの権現山方面からの侵入防止と目隠のため設置されたもので、土塁上には竹等が植えられ竹藪を形成していたことも考えられる。(第8図参照)

(4) 生活施設

生活遺跡としては建物礎石、排水溝、柱穴跡および三基の井戸が城内に残存する。

建物礎石

鉤状をなすD石垣に囲まれた大手口部分から、当時の城門の礎石およびその根石群と思われる遺構が発見された。この部分は城山北側の迫地にあたり、つい先頃まで民家が存在していたが、266号の拡幅工事のため解体撤去された。47年、この部分の発掘調査を実施したが、この結果、城門(註6)と思われる礎石群とそれを取りまく排水溝および暗渠が発見された。

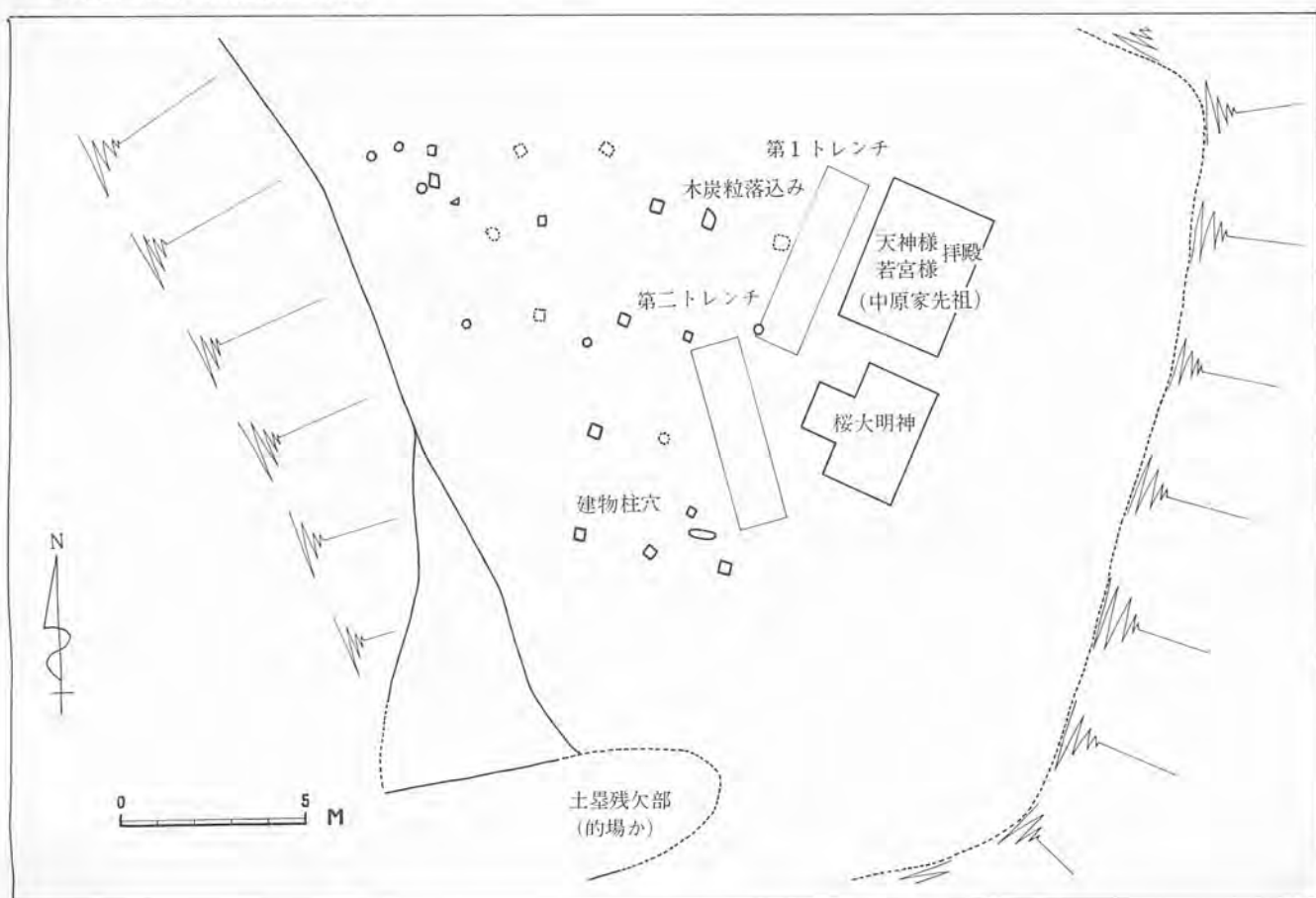
すでに、殆ど礎石は失われ、礎石下の人頭大の栗石が残存しているのみで柱間の正確な数値は把握できないが、桁行3間~4間、梁間2間の長方形をなす建物が棟を南北方向にして存在していたと思われる。長屋門状の建物が城門として存在していたのであろうか。(第10図参照)

時代については、共伴遺物がないので判定できないが、所在場所から考えるとあるいは、廃城後に建てられた家屋である可能性もあり得る。

東平場柱穴群

天神さんおよび桜大明神の拝殿の立つ東平場の表土下20cmから方形16、円形8、その他2の合計26にのぼる柱穴が発見された。方形の柱穴は30×30cmの大ききで県下の中世館・城跡に普遍的に見られるものである。この柱穴から上屋を復元すると棟の方向はほぼ南北を指す桁行が三間、梁間二間の建造物の存在が考えられる。その所在位置から大手部を守る矢倉である可能性が大である。この建造物の桁行の間は約3m、梁間が約2mを計る。この平場より青磁片数片が出土した。(註7)

第11図 東平場の柱穴出土状態



城内に残る三つの井戸

大手口を形成する迫地は、湿気が多くこの部分に三つの井戸が残っている。その各々に名称があり西側上段より「刀研ぎ井戸」、「御茶井戸」、「米とぎ井戸」と呼んでいる。

刀研ぎ井戸は、深さ3.75m、直径0.8mで底部まで石組が施されている。井戸端より小柄数本が付近の小学生により発見された。御茶井戸は、この井戸水を茶の湯に使ったためこの名称を得たという。井桁が組まれているが深さ等は不明である。

米とぎ井戸は、大手口近くにある井戸で深さ約4m、底部まで石組が施されており頁岩の岩盤を底部としている。排水して内部を調査したが、遺物等の発見はなかった。(第12図参照)

元来、牛深市一帯は夏場は水不足に悩まされるところであるが、この城内迫地にある三つの井戸は夏場にも水が枯れたことはないと地元では誇らし気にいう。

排水溝

発掘調査を実施した大手口部分より、H状をなす三条の排水溝が発見された。先にも述べたようにこの部分は、城山に刻まれる東に開いた迫地の末端部にあたるため、現地でも水が湧き排水溝の設置は、不可欠であったと思われる。発見された第一排水溝は、長さ約9.70m、幅約0.30mで割石を敷いて溝底としている。D石垣の西側コーナーの湧水池横より始り東方に向う。この溝の東端は、土塁基底部の土留めのための立石により遮ぎられている。このため溝の傾斜は両端より溝中央部へ向って低くなり、この部分に第三溝が一段低くなって接続し排水される仕組みになっている。(第13図参照)

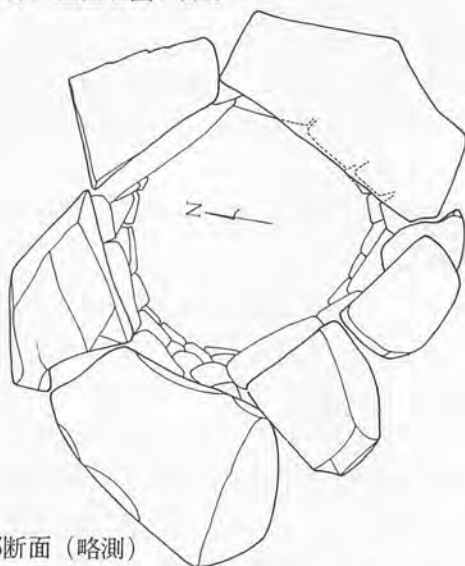
これらの溝は、家屋屋根の雨水の排水用のものではなく、迫地全体に染み出してくる湧水のための排水溝である。第二排水溝は全長約8.60mで幅は約0.30m、第一排水溝と同様西から東へ走っている。西から東へ向って傾斜し土手方向へ向うので、この迫地の水はすべてこの溝に集められ、排水されたものであろう。元来、割石を敷き詰めた底部が存在していたと思われるが現存しない。

第三排水溝は、全長9.18m、幅0.25mで第一、第二の両溝を連結する役目を持つもので、Hの横棒にあたる部分の溝である。ほぼ南北に向って走っているが、その中間部を現在の排水溝が断ち切っている。この第三排水溝は、石蓋で覆われ暗渠となっている。この事実は、この部分の上面を何かに利用していたことを裏付けるものであり、通路もしくは家屋等むき出しの排水溝があっては困る理由が、存在したことが考えられる。(第14図参照)

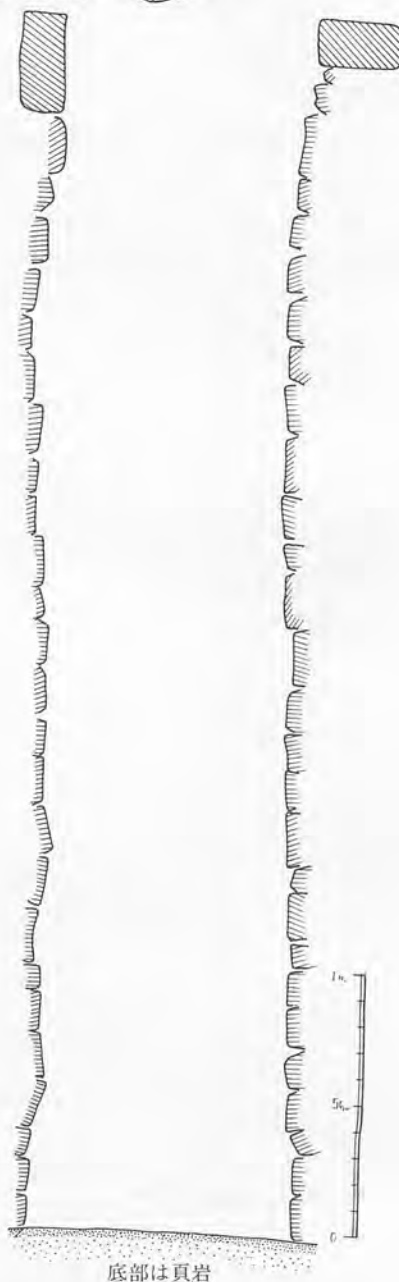
この外、城山頂上部、第三郭にも五輪の火輪等を利用した排水溝が、石垣の修復工事の際発見された。方向は、ほぼ南北方向で南端はB石垣に向って走るが、これは屋根の雨水の排水溝として設けられたものであろう。

第12図 城内・米とぎ井戸

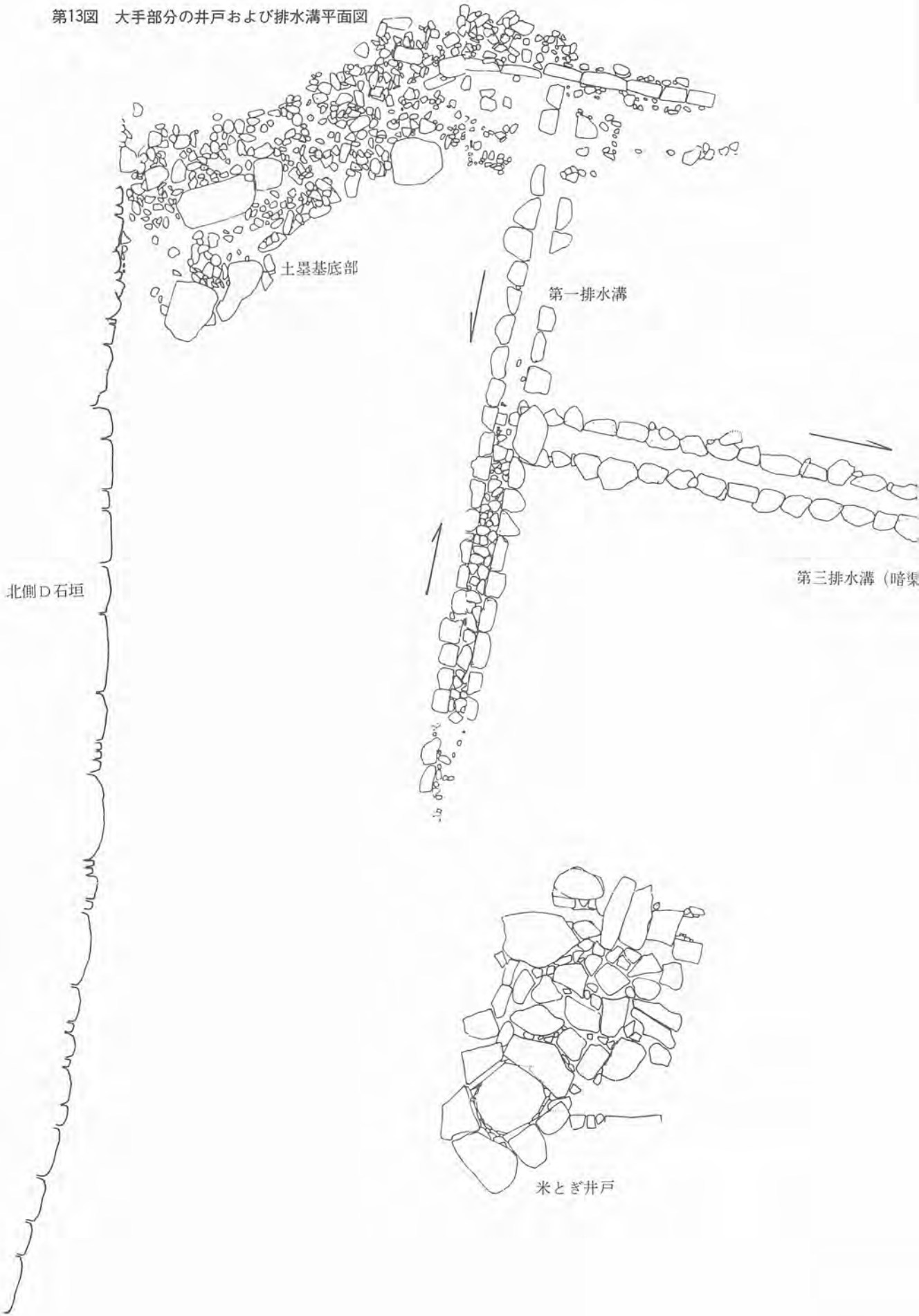
(1)、井戸上面石囲い部分

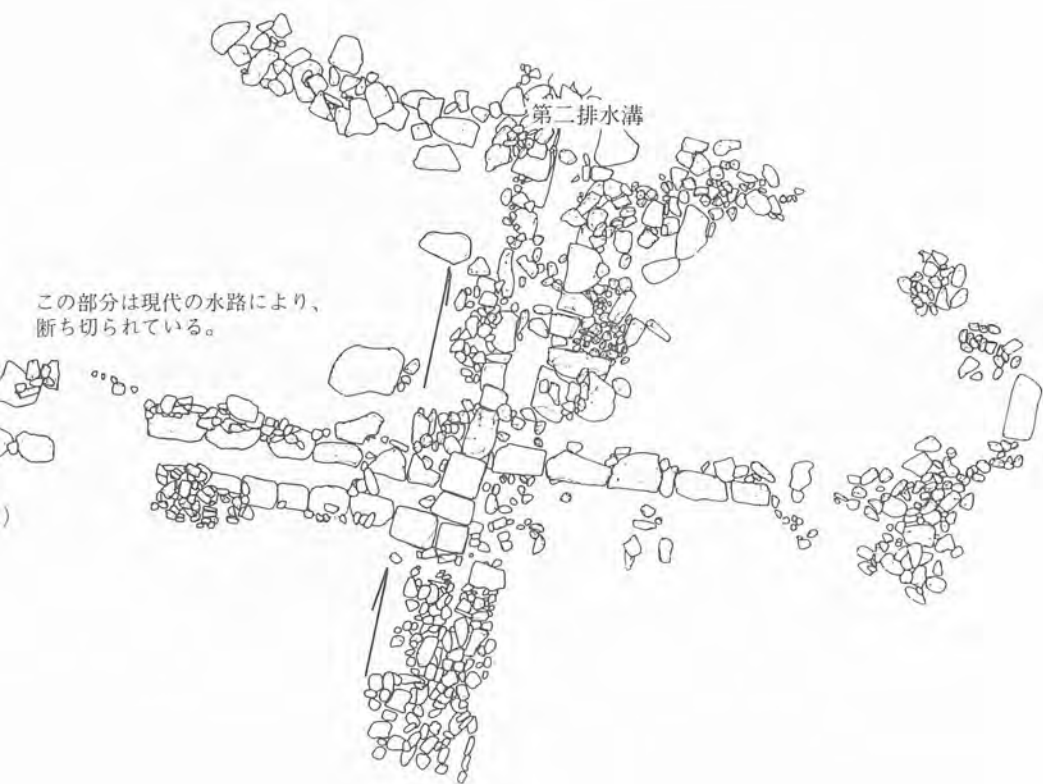


(2)、内部断面 (略測)



第13図 大手部分の井戸および排水溝平面図





(註) 矢印の方向は流水方向



(2) 周辺その他の遺構

久玉氏居館推定地

久玉城の北側の標高20m前後のところに、人工的に形成された平坦地があり、無量寺という浄土宗の寺院が現存する。この寺院の創建は比較的新しく、江戸初期の天草の乱後と伝えられる。この頃の寺の規模は上田宣珍の「鳴鏡」に収められている慶安2年(1649年)付けの天草寺社領御證文之寫によって知ることができる。この寫によれば寺屋輔の長さ15間、横12間とあるから相当の規模の家屋が当時建てられていたことがわかる。

この境内の南側は、城山によって久玉浦からの視界がさまたげられており、東面は水田面から見ると丘の中腹に位置し、現在の宅地の点する平坦地から久玉川を眼鑑橋でまたいで、一本の坂道が無量寺門前まで続いている。境内裏手の西側は標高50~60mの権現山裾によって、背後は堅められている。また、境内から裏手の久玉城堀切りまでは30mの距離しかなく、一本の小路によって連なっており即時城内に入城することができる。このような地形の状況は、中世の豪族の居館の立地条件をすべて満たしており、ここ以外に久玉氏居館跡は考えられない。恐らく無量寺開山以前この地に久玉氏の居館が存在したのであろう。

久玉氏菩提寺跡

久玉城東側の久玉川を隔てた対岸の明石山頂に、久玉氏の菩提寺と伝えられる光雲寺もしくは高乙寺(天台宗)跡がある。現在廃寺となっており、敷地は墓地となっている。墓地内には、当時の石垣や宝篋印塔の一部が残存しており寛永、寛文、天和、貞享など江戸初期から中期にかけての年号を持つ墓石が見られる。地元では、天草が天領となった後の慶安元年(1648年)に、寺内にキリシタンをかくまっていたとの理由で廃棄されたと伝える。戦後畑地として開いた際、この跡地から備前(?)「兼光」の銘のある刀身が発見され話題を呼んだ。

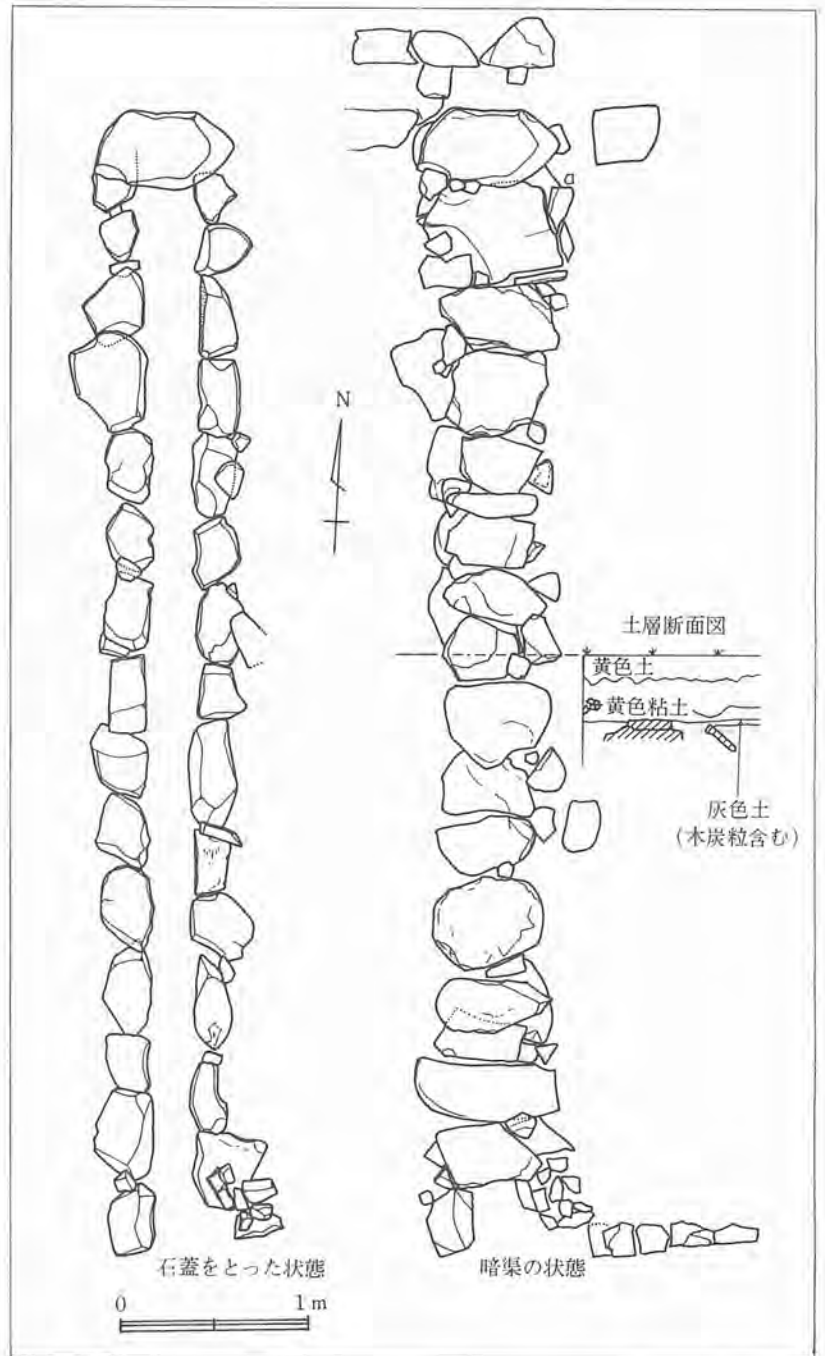
船溜り跡

久玉城の立地する城山南側と対岸丘陵との間に、長さ約90m入口部の幅40m程の迫地が横たわる。現在、水田化され迫地兩岸は石垣で固められているが、当時は海が入りこんでいたと思われる。今でもこの部分を掘ると貝殻が多数出土するという。当時、久玉城の裾部分は波に洗われていたのであろう。対岸の突出した丘陵が波止めと海上からの目隠しになり、恰好の船溜りであったと思われる。

ジュンデラ

久玉城東側の台地裾部一帯に「ジュンデラ」と呼ばれる場所がある。墓跡状のものも残り昔の寺跡と考えられる。江戸

第14図 第三排水溝出土状況



時代には近くに庄屋の隠居所があった。(現中原家)「順寺」なのか「禪寺」が訛ったのかははっきりしないが、山本正喜氏は「仮説・古代天草久玉城柵」のなかで「戌寺」の音転「ジュンデラ」とし古代における「柵の戌の寺」と解釈されている。
(桑原憲彰)

- 註1 16C前半頃の築造と推定される隈部館(鹿本郡菊鹿町所在)にも柵型と思われる石垣構成が見られる。久玉城と同様、主郭入口部分に設けられており、より近世城郭の柵型に近い。
- 註2 鉄砲伝来後の中世城跡には、同様の掩体状の小土塁が見られることがあるので、この遺構が築城時のものとすればこの城の築城年代は鉄砲伝来以後ということになる。石垣修復により遺構の一部が消滅した。
- 註3 上田宣珍「天草島鏡」所載「天草寺社領御證文之寫」
1、久玉村無量寺領平床村之内高拾石之事
1、寺屋鋪長拾五間横拾二間此外門前兩脇之畑壹反壹畝支配之
1、境内山林西は岸切東は川筋北はトイシ川道切南はノクビザコ切之事
慶安二年丑六月日 鈴木三郎九郎印書判
無量寺岳譽
- 註4 山の傾斜に沿って豎に掘った堀、構築時の掘りこみの際左右に傾斜の緩急の差をつけ掘れば、左右が不均衡となり敵が登りにくいという。当城の場合、そのような工夫は見られない。
- 註5 入母屋造りの笠を持つ小祠で、元266号線沿いにあったのを後で上へ移動したと伝える。窟、吹出物に靈験があるという。祠側面には未次郎・西治市松等建立者名が見られる。
- 註6 この大手部分には昔庄屋の隠居屋敷があった所でここに住むと位負けするので移った方がいいと昔から言い伝える。不思議とここに住む人の家は代々養子口ばかりだという。(中原紘一氏談)
- 註7 出土破片は青磁碗口縁部で、色は薄水色をなし釉全面に小貫入が見られる。胴部には筥による退化した連弁が無造作に描かれる。明代末・竜泉窯のものと思われる。
- 註8 米とき井戸に比べ規模が若干小さい。底部の直径は75cmで、頁岩の岩盤をそのまま利用している。井戸さらえをして調査した結果、底より陶磁片2個を採集した。
- 註9 天草の乱後、鈴木重成により建立され、10石が与えられ石寺(こくでら)と呼ばれた。

4. 出土遺物

(1) 発掘個所と表採個所

今回の発掘調査対象個所は、国道266号の拡幅工事により路線敷地となる大手口部分と平場および竪堀部分である。とくに大手口部分は、宅地となっていたため、家屋取り壊しの後発掘調査を実施した。この結果遺物については予想した程の出土はなかったが、若干の陶磁器片の出土を見た。また、平場および第三郭の入口部分のトレンチから、同様の遺物の出土を見た。この外、第三郭南西部のB石垣の補修の際、裏込石に混って若干の遺物が、また刀研ぎ井戸底からも陶磁器片の出土があった。

表採遺物としては、過去に石垣崩壊部下より、筭、小柄、刀等が発見されており、この外にも、城内より折れた刀身を拾ったという話は多い。以下今回の発掘によって得られた出土遺物と表採遺物についてその概略を述べることにする。

(2) 出土遺物

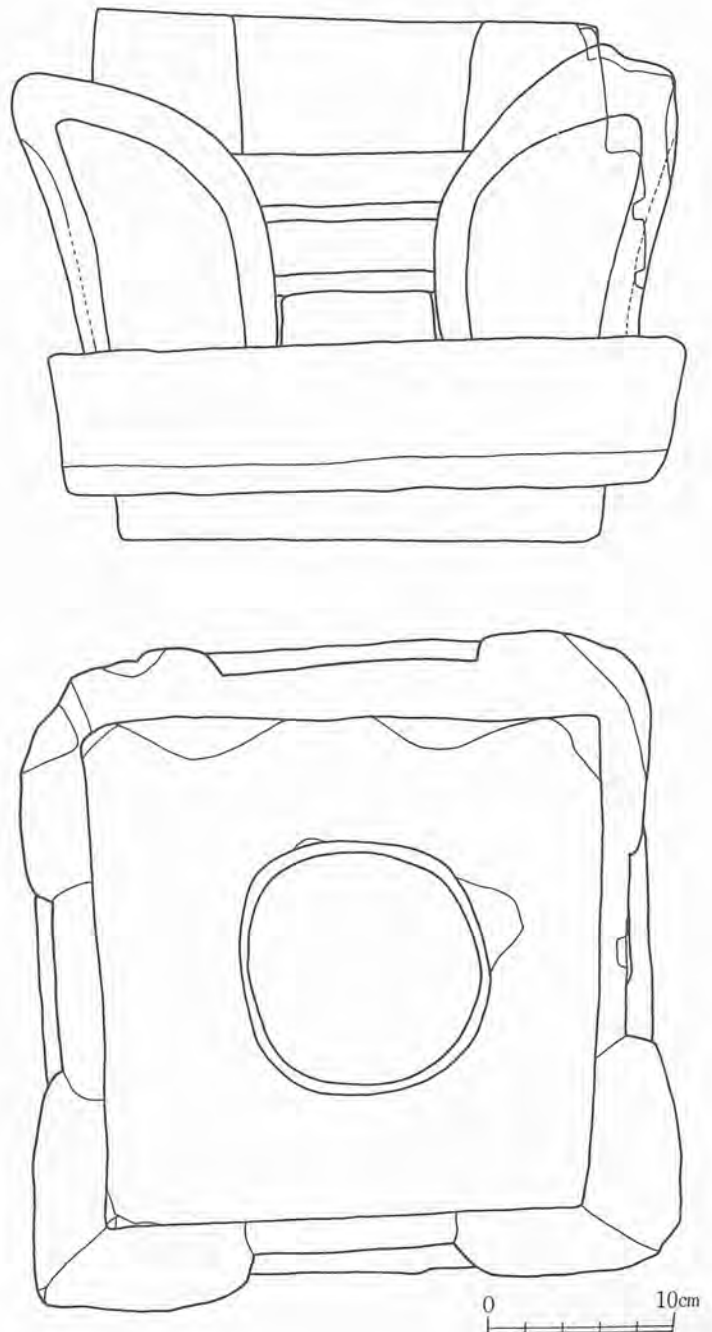
大手口部分についてはその一部が道路敷となるため、国道沿い200m²の範囲の発掘調査を実施した。表土下40cmの深さに設けられた、排水溝およびその周辺より土師質土器片、瓦質土器片、陶磁器片若干が出土した。瓦質土器は摺鉢の口縁部など、また陶磁器は明代の染付を主とし、日本の初期伊万里の染付片も若干見られた。後世のものが混入したものと思われる。

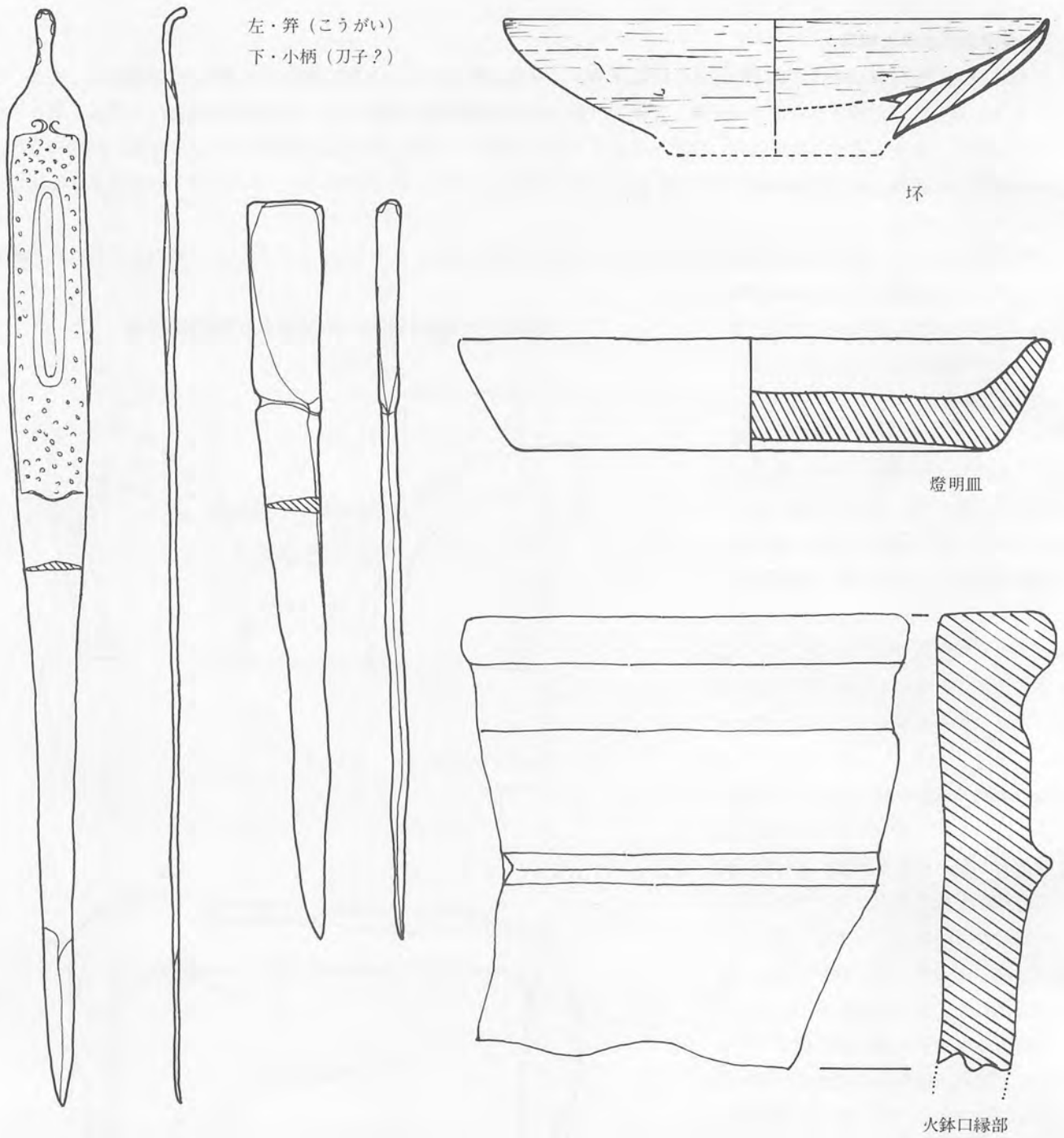
城の南側の城山中腹に所在する平場からは、方形をなす建物の柱穴が発見されたが、そのなかから木炭粒に混って用途不明の鉄片が若干出土した。また同地区に設定した二つのトレンチから青磁碗口縁部2片、陶器片1片、錆びた船釘1本が発見された。また平場の真上の第三郭のB石垣の裏込石に混って口縁がくの字型をなす褐色の備前系の摺鉢片、明代染付片などが出土、この石垣の築造時期を推定する好資料となった。同三郭部入口のC石垣前に設定したトレンチの表土下0.3mのところから、やはり用途不明の鉄片が数片出土した。また、深さ3.75mの刀研ぎ井戸を調査した際、井戸底より明代の陶磁器二片が発見された。

(3) 城内より採集された遺物

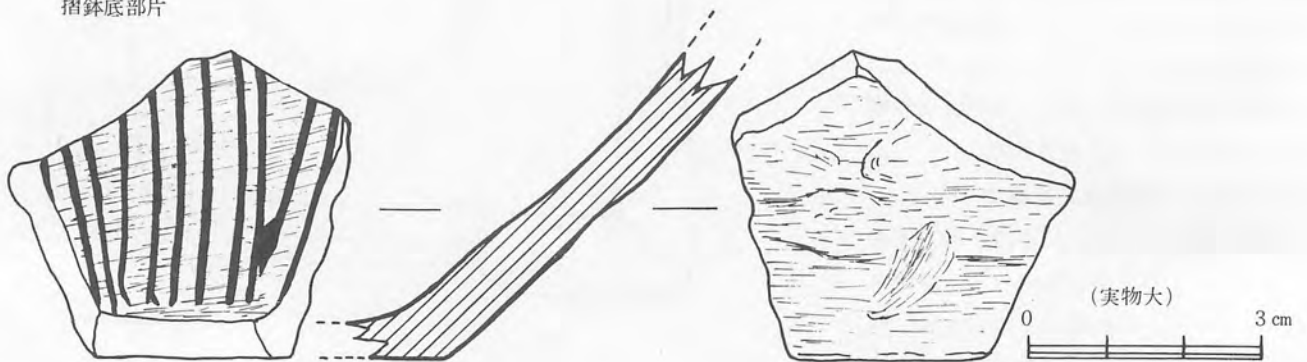
刀研ぎ井戸周辺から数本の小柄が過去に小学生により発見されている。現物を紛失しているため詳細は不明である。井戸の名称とこれらの小柄の発見とは何か

第15図 大手部北側D石垣付近出土の宝篋印塔笠部





摺鉢底部片



関連があるように思われる。またこの刀研ぎ井戸の横の道を左に折れ、城の北斜面を登り詰めた第三郭部のC石垣崩壊部分より、40年頃、筭一個、小柄一個が発見されている。(第16図参照)この筭は、全長18cm、最大幅1.3cmの銅製で柄の部分の梨地上に長椿円を線刻した飾りが施されている。柄の先端は耳搔となっている。筭は、刀の鞘に挿み携行するもので、篋に似た形をしており髪をかき上げたりする整髪用具である。古い型式を残す筭である。

小柄は全長12.1cm、幅1.3cmで片刃、粗末なつくりで飾等は見られない。小柄というよりむしろ刀子に近いものである。また、城内で刀を発見したという場所の多くが、この第三郭入口部分である。この外、平場に連なる北帯曲輪から馬骨が過去に屢々出土したと地元ではいう。中世時のものか近世のものか不明である。以上の外、城内各所より五輪塔の各輪が出土している。大手口に設けられている排水溝の一部にも地輪が石材として転用されているし、第三郭部の排水溝にも火輪が転用されている。大手口部分からは宝篋印塔の笠部がD石垣基礎部より40～50年前に発見されている。D石垣上にあったものが転落したと思われる。この外、生活用具としては、挽臼が大手口部分より一個、また第三郭のB石垣には19×7cm大の挽臼破片が栗石として組み込まれている。

この外、過去に城内より陶磁器類が出土している。^(註2)「終戦も間近かな昭和20年頃、天皇の写真を隠すため久玉城の土手に穴を掘ったところ陶磁器類が多量に出土した。なかには完型の碗類もあった。これらは一括して城内に穴を掘り埋めてしまったが、出土した場所も埋めた場所も覚えているので、調査したらどうか」という話が地元の人からあった。しかし、調査期間不足と当分破壊の恐れがないため、今回は調査を見合わせた。^(註3)

また、49年に城内の雑木林内より高さ37.5cm、腰の幅7cmの仏像一軀が天草農業高校教諭の鶴田八洲成氏によって発見された。風雨に晒されていたためか、顔面は剝落し両腕は落ち、全身虫喰いと腐食で見かけも無いが、楠木を素材とした一本造である。鶴田氏の調査により大手部北側のD石垣付近から戦後間もなく、当所に所在した家屋の修理を行った際、地下より出土したことが判った。地元の話では、出土後もったいないので上の山の墓地へ運び安置しておいたといい、氏が発見されたのはこの木像であろう。反キリシタン派が久玉城を拠点に天草氏と戦った時、持仏としていたものが元龜三年(1572年)頃の久玉城落去の際、遺棄されたものとも推定されるが、確証はない。(桑原憲彰)

註1 昭和40年頃、地元の榎田七五三蔵氏の長男の方が発見されたとのこと。榎田マスさんが持参された。

註2 城・館等の中世の遺跡を調査すると必ずといっていいほど出土を見るのが、摺鉢、こね鉢の類である。須恵質のもの、瓦質のもの、備前風の摺鉢と焼は異なっているが、その出土数は多い。これに類する用途を持つものとして次に多くの出土を見るのが石製の挽臼である。

粗末な普通の挽臼の外、石の肌を丹念に磨きあげ、装飾文様を浮彫にした上等な茶臼なども見られる。出土品以外に山鹿市の鶴山城裏手の谷川には城に関連あると思われる大挽臼等も残っている。これらの遺物は、中世における日常の食生活の基本作業は「挽くこと」であり、挽くことが当時の人々にとっていかに重要な仕事のひとつであったかを我々に如実に教えてくれる。

註3 坂田允氏(牛深市教育委員)の談話

5. 文献史料から見た久玉城

(1) 史料から見た久玉城

肥後国における中世の城跡と伝えられるものは、100カ所を超える。こうした城跡のうち石垣の残るものは、有馬陣の後幕府の命によって破却されたため、旧態をとどめるものは殆んどない。

慶安4年(1651)4月、細川家から幕府に提出された「肥後国大絵図」に添付された書類によると、肥後国の古城は61カ所であって、久玉城については次のように記載されている。

1. 玖玉古城 山城曲輪三百間

右之古城ヨリ玖玉村迄一町、玖玉村者

往還之村ニ而御座候

同書には、この他天草郡内の古城として、志岐、下田、小宮地、湯船原、中村、大浦、上津浦、大嶋子、志柿、馬場、佐伊津、古城、下内野、上原村の14古城を掲げている。また肥後国61古城について曲輪の大きさによって、これを分析すると次表のとおりである。

表によっても解るように、曲輪200間～500間未満の城跡は全体の半数以上を占め、曲輪300間の縄張りをもつ久玉城は、最も典型的な中世城郭といえよう。

第17図 肥後の古城跡の
曲輪の規模

肥 後 の 古 城 跡					
曲	輪	城跡数	曲	輪	城跡数
100間未満		6	600～ 700間未満		5
100～ 200間未満		5	700～ 800間未満		3
200～ 300間未満		13	800～ 900間未満		1
300～ 400間未満		11	900～1000間未満		2
400～ 500間未満		8	1000間以上		4
500～ 600間未満		2	2000間以上		1
城 跡 数 合 計 61					

久玉城は、天草下島の最南端にあつて戦略的にみて、極めて重要な城であつたことがわかる。

久玉氏については、戦国末、天草氏のために攻め滅ぼされたため、殆んど明らかでないが明應10年(1501年)7月、「天草一揆中談合覚書」によると、志岐、上津浦、宮地、天草、長嶋、大矢野、栖本の諸氏とともに、久玉氏も天草一揆中に名を連ね肥後守護菊池武運(能運)は、一揆中に対し八代郡のうち小野、豊福両所を宛行っている。

久玉がいつ天草氏の領有するところとなつたか明らかでないが、永禄12年(1569年)ごろは天草氏が領有している。そののち天草氏の総領夫尚種は、相良、島津氏の援助をうけた弟大和守、刑部大輔に攻められ敗退し本戸に通れ、久玉城も弟らの手に落ちたが尚種は志岐鱗泉の援助によって、河内浦を奪回し大和守らの最後の拠点たる久玉城を陥れ、失地を回復した。かくして大和守らは相良氏を頼み、海路遁がれた。

天草氏ら天草5人衆は、天正15年秀吉により本領を安堵され、のち加藤清正に仕えた。(この項 花岡興輝)

史料： 志岐文書・八代日記・日本史ルイスフロイス・天草文書・大矢野文書・細川文書

(2) 久玉郷土史研究の意義

—— キリシタン伝来のころの争乱を中心に ——

昭和47年夏以来話題となつてきた天草下島南端の中世の海城久玉城は48年3月熊本県指定の史跡になった。思うに久玉城がキリシタンの流入によって騒乱に巻き込まれ、天草氏一族の兄弟によって占拠されるという事件があつてから、ちょうど4百年ぶりに世間の注目をあびることになったのを奇遇なことにも思う。この世のことは偶然といえはいるけれどもそれにしても何らかの縁の糸も無いとはいいきれぬところに不可思議がある。

私は去る5月「日本談義」270号で「中世・久玉氏の興亡」と題し小論を発表したが、不備な点やその後の調査によって新しく気付いた点もあつたのでこれらの点を書き改めつつ表記の意義について記してみたいと思う。

さて中世久玉城の築城はいつごろなのか、このことについての私の推測は14世紀後半ということである。このころの天草下島には天草氏が君臨していた。当時の天草氏の中心居城は現在の河浦町内にあつた河内浦城であり、時の城主は天草資種(1371年ごろ)であつた。今川了俊が九州探題としてやってきたころで世はまさに緊迫の度を加えつつあつた。このような状況下に天草氏は天草南端の要害として久玉城の築城に着手したものと思われる。久玉は確かに要害の地である。天草氏がここに築城するにはそれ相応の条件があつた。というのは私の見解では久玉はすでに古代においても要害の地として城柵が設けられ^{じよ}戊が置かれていたと推測できる点があるからである。この件についての私の見解は別に発表したいと思う。要するに中世久玉城は古代の城柵の遺跡にいわゆる久玉の土豪が住みつきその後中世になって天草氏が築城したものと思われる。それが14世紀後半ということになる。そのころは菊池氏の全盛から末期にかかるころである。久玉の旧家中原家に伝えられている「久玉城は菊池系」だという言い伝えは重要である。「新撰事蹟通考」によると、天草氏は大蔵氏の末、筑前の原田氏の末裔である。一説には菊池氏の末裔とするものもある。他に、その祖はいわゆる土豪であり、後に菊池氏や原田氏と関係づけてその出自を唱えたとする説もある。久玉の対岸の長島氏も「大蔵系図」および「菊池系図」から見れば原田氏の末裔であり、しかも菊池氏の縁者でもある。玉名の「広福寺文書」によると天草氏(種国ら)は14世紀半ばごろ菊池氏とくみ宮方に属して威を振るっていたことが推定可能である。とにかくこのころの天草氏の存在は大きかつた。

「大蔵系図」を見ると天草大夫種増の子に天草資種があり、その子に種氏、種世らがある。種世は天草三郎大夫種世と

いい1387年ごろの本戸城（本渡市）および河内浦城（河浦町）の城主である。一方の種氏が久玉城主になっていたと思われる。種氏の家系はその子天草二郎種文―種治―天草三郎大和守種満と続く。河内浦城主の種世の家系はその子天草次郎三郎種朝へと続き1500年前後は天草尚種が城主となっている。この間1393年より110年間ほどの肥後守護職は菊池氏が継いでいる。従って天草における諸氏ももちろん菊池氏の配下にあったわけである。このころの天草諸氏とは天草氏（尚種）、上津浦氏、宮地氏、長島氏、大矢野氏、栖本氏、久玉氏の7氏である。実は1501年、肥後守護職の菊池能運が天草諸氏間の紛争打開のため諸氏を集めた時このメンバーはその出席者であり、「志岐文書」に明記されている。このあと1504年、菊池能運は病死、菊池における菊池家はその後幾年も経ずして断絶し、数十年後、菊池家臣団はそれぞれ土豪として独立する。肥後のこのような状況下に大友氏らの進出があり、一方南部では島津氏の実力も振るっていた。ザビエルが鹿児島にやってきたのはこのあと天文18年（1549年）のことである。久玉はこの後キリシタンの天草流入によって混乱の渦に巻き込まれていく。

このころ天草下島の北部にあっては志岐氏（菊池氏の庶流と伝えられる）の勢力が回復、一方球磨の相良氏も天草へ進出しつつあった。天文2年（1533年）6月、天草尚種、志岐麟泉、長島但馬守、栖本、大矢野が連合して上津浦治種を攻略したことがある。この時上津浦氏は相良氏に救援を頼んでいる。そのため天草連合軍は相良氏によって降伏させられる。天草へ進出した相良氏は1554年には長島鎮真をも攻略する。鎮真は出水へ落去したが、その一族の一人冷水次左衛門隆継は久玉へ救援を求めてきたと伝えられる。長島と久玉は指呼の間にある。今では長島は鹿児島県だが古くは天草郡の一部であり、特に久玉との往来は頻繁でそれだけに親密であった。だが久玉の力では満足な救援は不可能であったろう。このころ久玉城を守っていたのは天草鎮尚（尚種の弟か）と推測される。

かくて長島は相良氏の手落ちたわけだが、時の河内浦城主天草尚種は弘治元年（1555年）にこの長島について、「……

長島を復し、且つ弟某をして相良氏、若くは長島氏と称せしめんことを請ふ……」（「求麻外史」）との使者を出している。しかし相良氏はこの申出を一蹴してしまっている。ここにいう「弟某」とは久玉の天草鎮尚とも考えられる。ついでに記せば、長島の対岸、出水の城主島津義虎の妻女は相良氏の娘でもある。この義虎と鎮尚との仲はよくない。「姓氏家系大辞典」によると「永禄年中、天草越前長島を領す」とある。しかもこの長島城主天草越前は永禄8年（1565年）に出水の義虎に殺され、義虎は長島を併呑している。この天草越前というのは久玉の鎮尚にきわめて近い縁者であったと思われる。このようなこともあって久玉と出水の間は長期間にわたって険悪な状態が続いている。このことは「薩藩旧記雑録追録巻一」の中にもその記がある。しかも島津家老の「上井覚兼日記」によると鎮尚との仲を気にして仲介の労をとっているのは薩摩の「御屋形様」島津義久である。従って久玉の鎮尚は古くから薩摩の島津義久とも深い関係があったことがわかる。

ところで、天草尚種の後、河内浦城主を継いだ天草鎮種は本戸城主も兼ねていたが1565年ごろすでに大友氏の幕下とな

第18図 久玉周辺略図



っている。これよりさき1551年ごろ大友氏は肥後へ進出していたのである。このころ志岐城主の志岐麟泉もすでに大友氏の幕下となっていた。一方天草南部の久玉城主天草鎮尚は島津義久との関係もあり、大友氏との関係は浅かったと思われる。時に大友氏はいわゆる南蛮貿易のためキリシタンの受入れには特に熱心であった。天草島の大部分がこの大友氏の幕下にあった時である、キリシタンが天草島に進入し拡がったのは。

天草におけるキリシタンの布教も当初は島民の自主性によるものではなかった。貿易のため城主によって強制されたというのが実状である。このことは年代はやや下るが1579年来日したヴァリニャーノという司祭の総長への報告書にも、「……私が日本で自ら見たことは、インドや支那（マカオ）で日本から送付されて来た報告書や日本に関する思惑的思慮から知ったことと違い、その間の相違は白と黒ほど大きい……」と述べ「……日本人は領主たちの命令によって改宗を行なったのである。そして領主たちは、ポルトガル船から期待される収益のために彼らに改宗を命じたのである。」（共に松田毅一「キリシタン史実と美術」）とあることによってもわかる。しかもこうして信じさせておいて種々の理由はあるにせよ都合が悪くなれば禁教令を出す。迷惑するのは民衆であってこのような勝手さが後世の隠れキリシタンにみられる悲劇をも生じさせることになる。以上のような状況のもとにキリシタンは天草にいわゆる「上」から進入したのであり、これに対して反対の意を身をもって示したその行動の拠点がこの久玉城に関係するということである。そこでこのキリシタンの進入当初の久玉における状況を究明し、歴史の真相を明らかにしていく、そうすることによって日本中世史を正しく認識する、この点に、私は日本中世史上における久玉郷土史研究の一つの意義を認めるものである。

さて右のようなキリシタン受入れの意図をもって、永禄9年（1566年）天草の志岐麟泉はアルメイダやヴィレラを招きキリシタンの布教を許している。続いて永禄12年（1569年）——一説には永禄11年——には天草鎮種もアルメイダを招き布教しようとした。もちろんその背後には大友氏の応援があっている。ところが天草氏一族の一部と地元仏教僧団とが結束しキリシタンの受入れに対し強く反対した。この強烈な反対にあつて天草鎮種は大友氏らの応援を要望、居城の河内浦城からひとまず本戸城へ身を避ける。アルメイダはこの緊急事態をトルレスに報告のため肥前の大村へ急ぐ。この時本戸城を預っていたのは天草種元であり、彼は宣教師カブラルによってすでに洗礼を受け、ドン・アンドレアと称していた。一旦身を避けた天草鎮種は永禄13年（1570年）志岐氏らの応援のもとに再び南下、居城の河内浦城へ向う、天草南部は緊迫した情勢となる。一方反キリシタン派はすでに久玉城を占拠、久玉城がキリシタン反対派の拠点となっていた。この時の反キリシタン派のリーダー格はフロイスの「日本史」によれば天草鎮種の兄弟とされ、大和守と刑部大輔の2人となっている。この緊迫した情勢が数年続くがこの間のことについて同書には、久玉城籠城中の反キリシタン派は出水の島津義虎、薩摩の島津義久、球磨の相良義陽の保護を受けていたと述べている。結局この時の久玉はこの三氏の対大友氏に対する接点ともなっていたのである。苦戦を重ねつつも鎮種は居城の河内浦城を奪還する。その後苦境に陥った反キリシタン派はついに力及ばず1572年か1573年（元亀3年か天正元年）久玉城を落去する。「志岐文書」の「麟泉書状」にある「……久玉之事被義候、彼弟共落去申候……」はこの顛末の記述と思われる。しかも「上井覚兼日記」中には天正2年12月15日の項に、2・3年前の久玉に関する記事があり、「……久玉之事内略共候つる哉、天草（ガ久玉ヲ）手に入候……」と記されている。なおフロイスの「日本史」によるとこの時のリーダー2人のうち1人は肥後国へ逃亡、他の戦いで相良氏といっしょに殺され、もう1人は天草の大江の島に渡り数年後にはキリシタンになったと記されている。この事件がちょうど400年前のことである。

同じころ永禄12年、織田信長は京都でのキリシタン布教を許可したが仏教僧団の強い反対にあつたことが史書に記されている。従つてこのような事件は天草だけではなかつたということであり、日本中世史上特筆すべき史実である。

ところで、永禄13年（元亀元年）（1570年）キリシタン反対派が久玉城を占拠した際、久玉城主であつたと思われる天草鎮尚はどうしたのか。この時一旦は久玉城を出たが、後にまた久玉に復していたと思われる。「上井覚兼日記」の天正2年（1574年）9月の条によると、出水の島津氏と天草氏とが又もや領土問題でもめており、鎮尚は薩摩の島津義久に仲介を頼んでいる。翌3年には義虎の軍は久玉湾近くまでおし寄せている。このようなことがあつて後、久玉の鎮尚は「薩藩旧記雑録後編卷八」の天正7年（1579年）春の記事によると、「……当家可_レ為_レ幕下之儀、依_レ懇_レ望_レ受_レ領之事、乍_レ斟酌_レ宜_レ任_レ尾張守_レ者也。」とあり、島津義久の家臣となつていたことがわかる。

このころは島津氏の北進は凄まじく、天正9年には相良氏の幕下であつた水俣も島津義久の幕下となる。続いて天正10年には八代を攻略、1585年には肥後は島津氏の支配下となる。島津氏の勢が肥後本国の方に向つているころ久玉は天草鎮種の支配下となつていたのである。これよりさき久玉の争乱のあと天草鎮種はアルメイダを再び招き布教を強化、自らも当時の日本布教長カブラルによって洗礼を受け、ドン・ミゲルと称していた。このころが天草におけるキリシタンの最盛

期である。あくまでキリシタンを拒否したものは薩摩などへ移住したとフロイスはその書に書いている。

さて、1580年ごろの天草諸氏は世にいう天草五人衆である。天草鎮種（82年に種元に代る）、志岐麟泉、栖本親高、上津浦種直、大矢野種基の5人、この五人衆、天正17年（1587年）かの有名な天草合戦によって小西、加藤の軍勢に下る。この時はすでに久玉は河内浦天草氏に併呑されているのでその名は史書に現われない。これよりさき、天正15年、秀吉は島津義久を降伏させ、続いて全国にヤソ教の布教禁止を発令している。天正17年天草島が小西領となるや小西行長は天草の神社、仏閣などの要所をすべて破壊したという記事が「肥後国誌」に見える。従って久玉城郭およびその菩提寺といわれる光雲寺（一説に甲乙寺とも）もおそらくこのころ破壊されたと思われる。

その後数百年久玉城の遺跡は藪におおわれ、地元以外の人々には忘れられていた。ただ江戸の寛永14年（1637年）の天草・島原の乱の時は、あるいは識者に意識されたかもしれない。だがあまりにも主戦場とは離れていた。

この天草・島原の乱は重税と禁教に対する鬱憤が、虐げられ続けたキリシタン農民によって爆発したものであり、ここに記した中世における久玉を中心とした反キリシタンの争乱とは性格の違いがある。中世久玉でのそれは、キリシタンの支配階級によってなされた強制布教に対しての、反キリシタン派の反抗であり、一方の天草・島原の乱は、逆に、支配階級によるキリシタン禁教への、キリシタン派の反抗がその主流にあったということである。前者はキリシタンをはじめるときのそれであり、後者はやめるときのそれである。しかもこれらの争乱は一地方史の出来事として限定されるべき問題ではなく、広く日本の歴史に関係する問題である。

わが国の歴史を思うとき、以上述べてきた久玉城をめぐる争乱を軽視することはできない。この天草の南と北で、宗教にかかわる二つの争乱があったことを、この二つのことがらには60数年の時間的間隔と規模の大小はあったにしろ、私はここに特記しておきたいのであり、以上のような事柄の究明によって、真の歴史を認識していくことに、日本中世史上における久玉郷土史研究の意義の一つを認めているものである。要するに中世久玉城の争乱も近世の天草・島原の乱と同じく日本史上の象徴的な事件だったといえよう。

（この項 山本正喜）

参考文献： 肥後国誌・熊本県史料・天草郡史料・求麻外史・熊本県の歴史・天草の史跡文化遺産・姓氏家系大辞典・菊池三代・熊本県史上井覚兼日記・キリシタン史実と美術・日本史―フロイス・鹿児島県史料・薩摩島津氏・出水郷土誌・城南町史・中世久玉城跡関係資料―熊本県教育委員会編・天草史談（22号）

6. 城の修復および環境整備

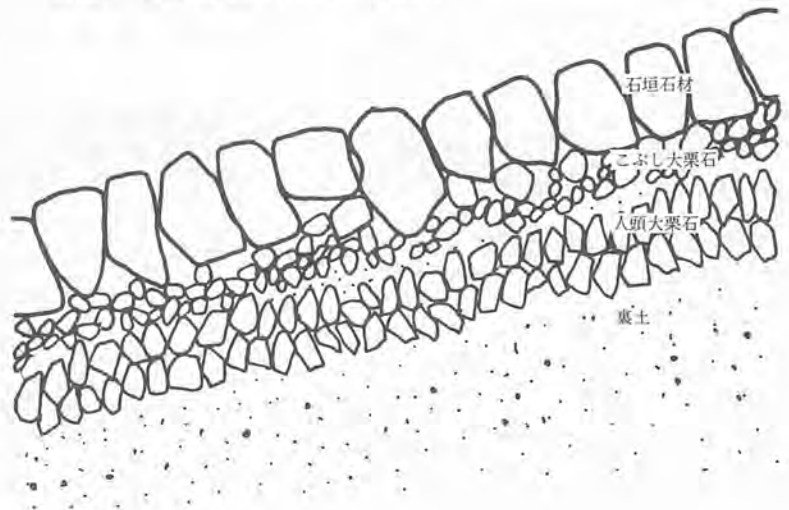
(1) 経過

牛深市教育委員会では49年度に県費補助を受け久玉城内の環境整備を実施するため、その指導助言を県文化課に求められた。とくに今回の整備は、第一次調査で発掘した大手部分の排水溝、その他の出土遺構の固着と第三郭部石垣の一部の解体修復が主目的である。このため49年9月5日6日の両日にかけ、ステレオカメラ使用による石垣実測、翌50年1月22日から1月いっぱい、大手部分の未発掘個所の発掘調査を実施した。大手部のアスファルト充填を3月2日から4日まで、B石垣の解体修復は同14日から16日にかけて文化課立合いの元を実施した。

(2) 大手門部分のアスファルト充填

大手部分の遺構が第一次調査で発掘したままの状態で放置されており、石材の移動の恐れがあるため排水溝、土塁基部部列石等の間隙をアスファルトで充填し固定化する作業である。環境整備に関する

第19図 石垣の裏込めの状態（模式図）



る調査でこの部分より、礎石および根石等が発見された。大手門の礎石か、後世の家屋の礎石か共伴遺物もなく明らかに出来なかったため取敢えずアスファルトで固着した。

施工に際しては床面を水平に削り、クラッシャーを5cmの厚さにならし、その上にアスファルトを3cm程度に充填した。なお、この部分は迫地にあたるため湧水が多くこれらを排水するため、南側に水抜き用の小溝を設け、先端にヒューム管を埋設した。

(3) 第三郭部南側B石垣の解体修復

B石垣の東寄りの部分に約60cmのはらみ出しを生じ崩壊寸前の状況であったため、この部分を中心に約10mに亘って解体修復を行った。まず工事中の崩壊を防ぐためフェンスおよびネットを張り解体箇所裏側より鍬を入れた。

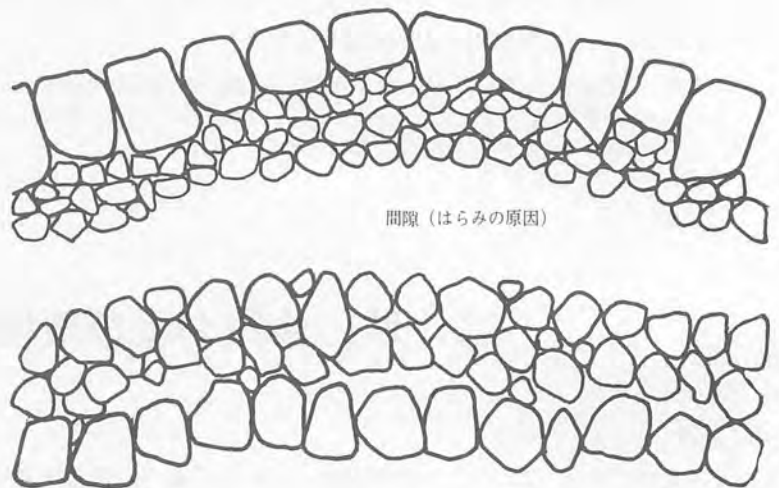
石垣の裏栗石は表土下1mのところまで石垣面より約1m奥まで込められている。下部になるに従って裏栗石量は増え、表土下150cmのところでは石垣面より150cmのところまで及び、石垣基礎部近くでは更に奥まで込められており裏栗石の状況を南北の断面で見ると梯形状を呈している。石垣裏裏には最初こぶし大の石が込められ、その奥は大きさが20×20cm程度の石材調整の際に生じる屑石が込められている。この屑石に混って石組の石材と同様の大きさを持つ石が所々に配置されている。(第19図参照)

石垣の積み方は断面で見ると奥の方を下げて組まれている。奥の方への石の長さは平均30~40cm程度で予想していたより短いものが多い。ただ所々に意識的に65cm程度の奥に長い石が配置されている。正面から見た場合、石材の長軸面を石垣の面にして使用している。つまり石材を横に長く奥に短く使用して横つぎにし、間隙に栗石を詰めている。石材は若干の加工が見られるところもあるが、殆んど自然のまま使用しておりやはり一種の野面積と呼ぶことができよう。しかし、石垣の止めの部分は面取りをした隅石を使

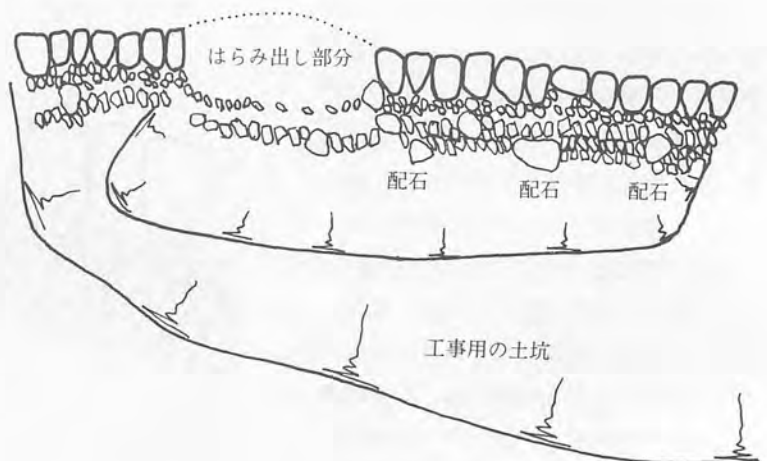
第20図 はらみ出したB石垣



第21図 B石垣裏込部に生じた間隙 (模式図)



第22図 B石垣の裏栗石と配石の状況 (見取図)



用し、面を揃えており加工が著しい。

解体の結果、はらみ出しの直接の原因は石垣裏のこぶし大の裏込と人頭大の裏込の境に相当大きな間隙を生じこれが原因をなしていることが判明した。特にはらみ出しのはげしい部分は、天端の石が石垣面を上にして内側の間隙に落ちこみ、更にはらみ出しを大きくしている。

4.10mの高さを持つこの部分の石垣の傾斜は80°前後であるが、この中央部で約60mのはらみ出しが見られる。

はらみ出しの遠因は、廃城となった後の永年に亘る樹根の作用と雨水の流入であろうと思われる。石垣表面に近くなるほど栗石間に空間が生じ、裏土が石垣の間隙から流出し更に空間を大きくしていき、裏込石の間に大間隙を生じたものであろう。(第21図参照)

なお、この場合はらみ出し部のみの修理だけでは完全な修復とはいえないので、この個所を中心に約10mに亘って解体修理を行った。この修理の範囲は、噛ませてある栗石のゆるみの有無を目安に定めた。

解体の後、実測図面に従って石を組むことになったが、石の老朽化が激しく劈開面に沿ってまっすぐにはげたり割れたりして使用不能となった石も若干あり、類似した石を使用せざるを得ない場合も生じた。解体修復というともまったく聞えは良いが、常に遺構の破壊と裏腹にあることを更に痛感した。石垣の解体から11日を経た3月24日に竣工した。

(4) 解体修復によって出土した遺物・遺構

石垣解体の際、裏込石に混って表土下1mの所から5.3×4.5cmの長さ2～3mmの用途不明の鉄板が出土した。鎧等の残欠であろうか。

この外、備前風の摺鉢口縁部を始め、内部に重ね焼のスタンプのある白磁皿の底部等19点の陶磁器片を得た。主体となるのは染付類である。

雨水の流入による石垣の崩壊を防ぐため台風時期直前の49年8月30・31日の両日第三郭部に市教育委員会の手により、南北に27mの排水溝が掘られたが、その時やはり南北に走る切石を並べた29cm幅の排水溝が発見された。この排水溝の石材には五輪の火輪部等が使用されていた。

また、この排水溝を掘った東断面の五か所に落ち込みが認められた。遺物包含層の厚さは25cmで頁岩質の土壌のためこの落ち込みはかなりはっきりしている。

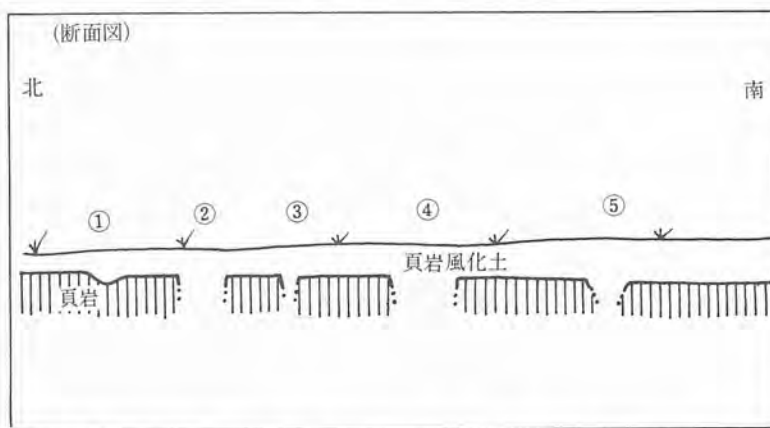
方形をなす柱穴のようであるので、第三郭にたてられた建物の柱穴かと思われる。(第24図参照) この柱穴に伴い、表土下25cmのところから土師質土器、(糸切底の燈明皿)一個が出土した。

註1 近世城郭の石垣の修復は県下では熊本城をはじめとして八代・人吉城とその例が多いが、中世城跡の石垣修理は現時点では当城と隈部館の二例のみである。

第23図 復修工事による裏栗石の状況



第24図 第三郭部に見られる柱穴跡 (見取図)



7. ま と め

(4) 城の構造と性格

久玉城は、海拔403mの権現山の南裾を支える海拔47mの小尾根を利用して、構築されている。この小尾根は権現山に連っているため、一条の堀切を設け城域を独立させている。城の周囲三方向は海や急崖、迫地等の天然の要害を利用し、また、不備の部分については人工的の石垣空堀等により、その部分を補強し要塞堅固な城としている。なお、頂上部分は削平されて四段ほど段違いの郭が尾根に沿って形成されている。

最高所平地には、半円形状の土塁に庇護された狼火台があり、以下、第一郭、第二郭、第三郭と土橋状の小路で連っている。

また、東側の中腹にも平場が形成されている。これらの平地の配列状況からこの城は、連郭式と呼ばれる形式をとる中世時の城郭であることが判明した。^(註2)

これらの各郭のうち第一・二郭は切立てられた急峻な土手、第三郭は鉢巻状の石垣に取囲まれ、その外周は各郭とも腰曲輪や帯曲輪によってかためられている。

なお、この城の大手口は城の北側に東から西へ入りこむ迫地入口部で、搦手は裏山に連なる野首部に設けられた堀切部分である。

久玉氏の常時の館は、現在の無量寺境内に存在したと推定される。ここは東面した山腹部分を削平して作られた平地で、中世土豪が好んで館地として選ぶ立地条件を備えた場所である。また、城内には三か所にも登る井戸が掘られており、この時期にはすでに常時与力といった城内の家屋に詰めていた者の存在も考えられる。^(註3)

久玉城は先にも述べた如く、天草下島の最南端の牛深市久玉町にあり、久玉浦の最奥部に位置する。現在、久玉城周辺は埋め立により陸化し、海はやや遠のいた観があるが当時城の南側は真下まで海が入りこんで来ており、海に接したいわゆる海城であった。城の東平場の家屋跡より舟釘等も出土しており、海に深い関連を持つ城であることを物語っている。

城の石垣の石材も海と海に面した港湾を支配した一族の城郭にふさわしく、海から運ばれていることが石の裏面に付着した多量の牡蠣殻から判明した。^(註4)

さて、中世時の城がその場所に設置されるには、それなりの深い必要性と根拠を持つ。つまり、ある一つの勢力に対する備えとして築城されるものであり、住民支配に好都合な場所に設置されたものではない。

どこの地域の城も同様であるが、中世時の城は単独で存在するようには見えて実はひとつの勢力を中心とした何らかのグループに属しており、本城と支城の関係にある。そしてその城はそのグループ内の一機能を果す目的で、設置されており決して単独で全機能を果すものではない。南北朝期の菊池氏の十八外城制は好例である。したがって、中世城跡と呼ばれるものの中には支城あり、無人の砦ありで中世城跡の模式図に見られるように、常時の館と非常時の山城が常に備っていると考えるのはあやまりである。^(註5)

天草の場合も例にもれず天草氏を中心とする防備体制を形造っているが、この体制に組み込まれず独自の城郭の観をなすのがこの久玉城である。

久玉浦に面した長さ44.6m、高さ5.10mにも及ぶ南石垣は、壮大で久玉浦を睥睨しており威圧さえ感じさせる。このような巨大な石垣はもはや中世的なものではなく、近世城郭の色彩が濃厚である。久玉城が天草下島の最南端に位置し、海城という性格を帯び天草内の他の城に比べて、ずばぬけた規模と施設を持ち、かつ近世城郭の色彩を帯びるのは、出沒する明国を始めとする外国船への対外的な示威意識の反映とも取れるが、それにも増して意図したところは、まさに増大する島津氏（出水城主）相良の勢力に対応する防備を、意識してのことであろうと思われる。従って現在残る城跡は、島津、相良氏が天草を伺い始めるころ完成されたと考えて差支えなからう。しかも先のB石垣が同時に築造されたものでなく、幾度かの継足しによって成っている事実は、高まる両氏に対する危機感を反映しての普請とは考えられないであろうか。^(註6)

(2) 築城年代とその廃棄時期

この久玉を領有する豪族がいつ頃城を築いたのか文献上は明らかでない。ただ、今日の牛深市久玉を本拠地に天草氏の支族であったと思われる久玉氏が實力を蓄え、その子孫が戦国期初め頃、築城したであろうことを推定するのみである。文献上久玉の名が初見されるのは、1501年に菊池能運が天草諸氏の間紛争解決のため召集した7氏のなかに久玉の名代（註8）の名称が見える志岐文書においてである。

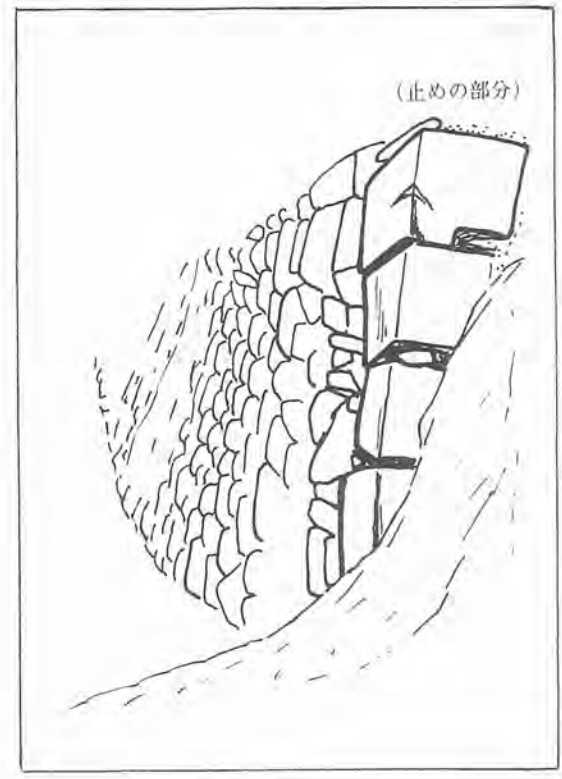
その後、久玉がいつ頃天草氏の領有するところとなったか明らかではないが永禄12年（1569年）頃は天草氏が領有している。翌永禄13年（1570年）天草氏が、大友氏の幕下になると南蛮貿易に関してキリシタン受入に熱心であった大友氏の影響を受けてか、全島にキリスト教が拡っていく。これに対して天草氏一族の一部と地元仏教僧団とが結束しキリシタン受入れに強く反対し、久玉城はキリシタン反対派の拠点となる。しかし、元亀3年（1572年）頃には、天草氏のため久玉城は落去し再び天草氏の手中に戻る。この時期の久玉城主は天草鎮尚(後の島津義久家臣)と山本正喜氏は推定されている。

さて発掘調査による久玉城の起源は明らかではないが、古代に太宰府からの連絡をうける狼火台が存在し、それが中世の久玉城の基礎となったのであろうと説える学者もある。

発掘調査の結果推定される築城年代は、石積その他から祖型となるものは、15世紀後半頃と考えられるが、現在残る城跡として完成されたのは、16世紀後半頃と考えて差支えあるまい。B石垣等に見られる積み方および勾配の異なり等に継ぎ足しながら完成したことがうかがえる。また城跡調査中、城内出土の遺物に折れた刀剣や小柄等の武具類が多く、中世時の遺物としては保存状況が良好であるのに驚いたことがあったが、恐らく久玉城が反キリシタン派の拠点となった時期の遺物であろう。また、近世的要素を持つB石垣等もこの時期に継ぎ足され、城全体が補強された可能性が強い。(第25図)

城の廃棄時期については、発掘調査上からは、明らかにし得ないが、文献上から推測される城の廃棄時期は、天正17年（1587年）天草が小西領となった頃であろうと思われる。慶安4年（1651年）に肥後藩が幕府に差出した「肥後国大絵図」に添付された書類には玖玉古城として登場する。もうこの時点では、城に関する記憶がうすれているのか他に比べて城主名等の詳細な記述もなく、古城として簡単に取り片づけられてしまっている。このことから勿論、久玉城が17世紀にはいつてからの一国一城令等により廃棄されたのではなく、もっと古い時期のつまり、久玉城に拠った反キリシタン派が天草鎮種の攻撃により落去した1572年（元亀3年）頃か、もしくは天草合戦に続いて、小西領となった頃、城としての生命を断つたと考えるのがより自然ではなかろうか。

(止めの部分)



- 註1 緩い傾斜地で細くくびれている所を野首という。中世ではこの部分を堀切って台地を独立させ城をきづくことが多い。当城もこの部分に堀切りが設けられている。
- 註2 狼火台を最高所にそなえた三郭式の山城である。
- 註3 一般に山城では頂上から少し下った山腹に井戸を設けることが多い。当城の場合、三つの井戸共大手部迫地に掘られている。
- 註4 大手部の左上手にある平地、矢倉跡と推定される。つい先頃までここは弓の練習場になっていたという。
- 註5 南北朝頃、菊池氏の本城、守山城を中心に要塞を配した、菊池氏の十八外城制はよく知られている。しかし、中世時の城はすべてこのような形態をとるもので決して特異なものではない。阿蘇二十四城、相良十三外城なども同様の性格をもつものである。
- 註6 一般に中世山城には、石垣使用の例は少ない。また使用しても部分的に土塁等の基底部に近い部分を高さ1m前後に石垣でかためる場合が普通で、久玉城にみられるような大規模な石垣は見られない。
- 註7 相良氏の天草進出、1554年相良氏の長島氏攻略、島津義虎等の長島併呑等の一連の動き。
- 註8 天草氏の支族であろうと推定される外に久玉氏については何ら明らかにし得ないが、この一族が海上の支配権をにぎる豪族としてこの天草下島南端の海城を本拠地に遠く東支那海一帯に雄飛した水軍であった可能性は考えられる。
- 註9 坂本経堯氏の踏査結果の所見による。また、山本正喜氏は「仮説・古代天草久玉城柵」日本談義48年10月号のなかで久玉城の起源として古代の城柵の存在を推定されている。
- 註10 岩崎久太郎氏（一級建築士・城郭建築研究家・当時熊本城管理事務所勤務）の久玉城に関する見解は次のとおりである。
『久玉城を構造上から見ると、近世城郭の色彩が濃厚である。例えば、櫓型にしても慶長以後のものは型がはっきりしているが、それ以前のは明確でないし、久玉城の櫓型もまさにそれと思われる。従って、築城時期は天正以前であろう。しかし第三郭南側B石垣上に残る小土塁は、鉄砲を意識しての築城とも考えられるので、古くても鉄砲伝来以前の築城とは考えられない。またB石垣もひととき近世的色彩が強い。縄張り上から見ると天守閣を備えた城の形式を持つ。恐らく一、二、三郭共に建物が存在したと思う。九州の場合貿易等により外国の影響は多大であり、九州では天守を備えるのは早かったようだ。』

図版1 城の遠景と主郭部



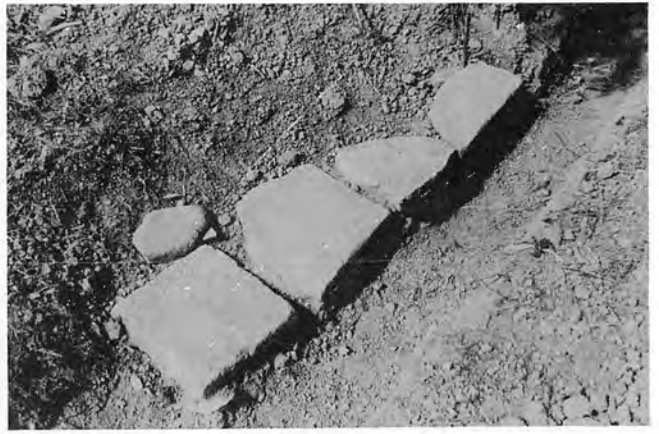
久玉城（城山）全景 南より望む 後の山は権現山



久玉城頂上三郭部平場 笹を払ったところ



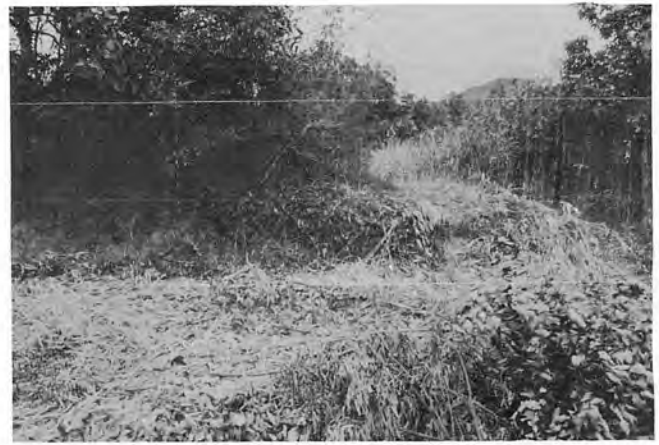
久玉城（城山）より久玉浦を望む。左手の丘には久玉氏の菩提寺といわれる光雲寺跡がある



第三郭部発見の排水溝。手前の石は五輪の火輪



東方丘陵より望む久玉城遠景。中央A石垣、たて堀をこえ、二軒の堂が立っている場所が平場である。現在雑木が伐採されている部分が設計変更前の道路拡幅線。



三郭と二郭の境。段違いの小土手を形成

図版2 大手口部分の遺構



大手部と後は東平場



大手部排水溝と北側D石垣（環境整備後）



第二排水溝（東より）



第二と第三排水溝の接続場所



土塁基礎部 弧の内側から見たところ



第一排水溝末端の状況 中央の立石は土塁の基礎部

図版3 大手口部分の遺構



第一排水溝と第三排水溝（北より）遠方に見えるのは久玉浦



第三排水溝の蓋をとった状態



第三排水溝暗渠の部分



第一排水溝 中央部へ傾斜し、中央部から南へ暗渠となっている



刀研ぎ井戸の石組



東平場 堂前の点線がカット予定線



平場の柱穴の状況。直経約30cmで正方形

図版4 城内各所に残る石垣



久玉城A石垣。江戸時代に河川改修の石材に転用されたためコーナーの部分失っている。



久玉城C石垣 居館推定地から第三郭部に到る入口部石垣、櫓型状の配置をとる。



久玉城 A石垣の一部



久玉城D石垣（北側）石垣右端の小石積は後世のもの



久玉城B石垣 高さ5m、長さ約45mにわたって偉容を誇り、久玉浦に面する部分をかためている。



久玉城D石垣（西側）左端小石積は後世のもので、当時の石垣は西に向って延びているものと推定される。



修復前のB石垣



修復後のB石垣



牡蠣殻の付着した石材



挽白片が組込まれた石垣

熊本県文化財調査報告第30集 昭和53年3月31日

熊本県の中世城跡

編集 熊本県教育委員会

発行 〒862 熊本市水前寺6-18-1

☎0963-83-1111(代)

印刷 新写植出版(株)熊本支店

〒862 熊本市健軍1-6-2

☎0963-67-1606(代)

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第30集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：熊本県の中世城跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<https://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016年9月21日

第2刷制作日：2024年8月29日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL：<http://www.kumamoto-bunho.jp/>